Ｒｕｉｎ　－お試し版－

Croissant

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｒｕｉｎ　－お試し版－

【Ｎコード】
Ｎ０５２１Ｗ

【作者名】
Ｃｒｏｉｓｓａｎｔ

【あらすじ】
　その日。落ち込んでいた担任の教師を見送った長瀬楓は、空間の裂け目から落下してきた一人の男性と出会う。
　その出会いが彼女を魔法という裏と出会わせ、その人生とこれからの世界を本来の時系列から大きく変える事になるとは想像すらしていなかった……

　ＧＳからのネギま介入話です。
　某所での連載ものですが、管理人さまと音信不通な為、こちらで

公開させていただき、途中からＩＦルートへと分岐させました。
元の話より登場人物（？）が増え、イベントも少々変化しておりますのでご注意ください。

前編（前書き）

私を知る方、お久しぶりです。
知らない方は今日は。

このお話はお試し版ですので、何時か消す事になるかもしれません。それはご了承ください。
ネタそのものは魔法界編まで出来ておりますし、今の原作話も想像通りでしたので対応できております。
という訳で始めるといたしましょう。

前編

朝靄が微かに漂う早朝――

深い森の中にある僅かに開けた岩場の上で一人の少年がポツンと佇んでいた。

脇にはちょっとした滝がかなりの水を落としており、周辺の木々からは小鳥のさえずりも聞えてくる。

少年の直ぐ側には少人数用のテント。

案外、この情景を気に入ったからこそこの場に設置したのかもしれない。

少年はその滝の音にも、朝の冷ややかな空気にも動ぜず、両の拳を合わせた不思議な格好で祈るように眼を瞑り続けていた。

と――

ギュン…ッ

ゴォオオオッ!!

そんな少年に向って何かが風を切って飛来。あわやぶつかる！

という所で差し出された少年の左掌にその飛来してきた長いものが収まった。

その少年はそれが何であるか解かっていたのか、来てくれる事が解かっていたのか、微動だにせずその長いもの…彼の身長よりも長い“杖”のようだ…を受け止めると、嬉しげな表情をして口を開いた。

「ありがとう　僕の杖」

受け止めた杖を右手に握り直し、「よしっ」と自分を引き締めるように呟くと、

「ありがとう長瀬さん。
僕……何とか一人でがんばってみます」

テントに振り返って誰に呟くとも分からない礼を言い、その杖に跨ると風を切る音を残しそのまま飛び去っていった。

その姿、モノは違うが箒に跨った魔女のよう。
それもその筈、信じ難い事であるが少年は＜魔法使い＞なのだから。

テントの中で寝たふりを続けていた少女は、そんな彼を見送りつつ、

『行くでござるか…』

と呟き、そっとテントの入り口を元の様に閉じ直した。
その顔はどこか満足そうであり、嬉しげ。
普段から細い眼も笑顔のそれに曲がっている。
残念ながら彼女の性根からの優しさは近しい者で無ければ解かるまいが。

「魔法使いって本当にいるんでござるな――
拙者も人のコトは言えんでござるが」

ニンニンと妙な語尾を着け、再度寝直そうと瞼を閉じてゆく。

まだ早朝。
日曜の朝であるし、“修行”にはならなかったが中々の体験をしたと満足中で二度寝を貪ろうとしていた。

が――

「?!」

その少女の細い眼がいきなり大きく見開かれる。

ざっと姿を消した瞬間、彼女の姿はテントの外にあり、テントに

残ったのは移動後のつむじ風のみ。

正しく風のように移動した彼女は長めの襦袢のような出で立ちのまま、クナイを握り締めて空を睨んでいた。

何時の間にか鳥達の声が止んでいた。

響くのはすぐ近くの滝の水音のみ。

息を潜めた生物らが我先にとこの場を遠ざかってゆくのが解かる。まるで何かを恐れているかのように。

静けさの中での“それ”ではない耳鳴りが、先程から彼女の耳を襲っている。

そしてそれは段々と大きくなってゆき、軋みすら覚えるほどまで上がったその時、

「来る…？」

呟くのが早いか異変が早いか。

唐突に彼女の見つめる地点、丁度彼女の上空十メートル弱。

そこの風景が丸く“ぐにゃり”と捻じ曲がった。

「これは……」

流石に肝が据わっている彼女もこういった異変は初めてだ。

今通っている学園にしても異様な“氣”を持っている人間は多い。

それは強かったり激しかったり、無理に押さえ込まれていたりと様々である。

だが、“そこ”に“発生”した氣…いや、まだ気配ですらないが…はそのどれとも違った全くの異質なものであった。

その空間の乱れは、回る洗濯機を覗き込んだ時のそれに似ている。

かき回され、かき乱され、旋回し、交わり、混ざる。

何が？　と問われれば返答に困るのであるが、説明のし様の無いモノがそこに穿かれ、何かがその向こうに発生しようとしていた。

キン…っ！！

と澄んだ音が辺りに響いた。

澄みすぎた音で少女が耳鳴りを起こした程。

硝子が割れた…というよりは“裂けた”音。称するのであればそれが一番相当する物音だろう。

「……ぁ…ぁ……」

「む？」

直後、音が降って来た。
いや、音の発信源たる何かが“それ”の奥から降って来た。

「………ぁぁぁぁぁぁぁ……っ！！！」

「んん～？」

するすると余裕を持ってその場を移動する。
そのまま居たら不味いからだ。

何故か？

「あああぁぁあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっ！！！」

とんでもない速度で墜落してくるモノに衝突してしまうからだ。

ズドォ――――ンッッ！！！！！

「ござっ？！」

衝撃が辺りに響き、少女も軽く浮いてしまう。
おまけに落下地点は彼女のほぼ真正面。つまりは岩の真上で彼女がついさっきまで立っていた場所だ。

固い岩盤は割れてこそいないが、おもっきり陥没していた。
超高速の何かが墜落してきた事に間違いはない。

「隕石でござろうか？　にしては面妖な……」

面妖…等というやたら古めかしい言葉使いは兎も角、確かに不可思議な現象だ。

空間に穴が開いたのは目にしたのであるが、その穴が出現した高さは目測でおよそ十メートル。
だが、その落下物はこの墜落衝撃度数からしてもっともっと高い位置から降ってきたものである。

最低でも百メートルは軽く超えることであろう。

ふと思い出して空に眼を戻すが、渦を巻いていたあの異様な空間

は既に消え去って元の空の色を取り戻していた。

今は何事も無かったように青の色を見せている。

地上の事等知ったこっちゃないと言いたげに、腹立つほどカラリんと晴れ渡って。

「う――――む」

首を捻ってそのまま落下地点に再度眼を戻したそんな彼女の顔の直正面。

「お、お嬢さん……」

「わぁっ？！」

血まみれの男がそこにいた。

接近の気配ゼロ。

移動の気配もゼロ。

全く何の動きも感じさせず自分の間合いに踏み込まれたのであるからその驚愕も当然であろう。

だが慌ててはいても反射的に距離をとり、クナイを構えるのは流

石。
腰を落とし、如何なる動きでも取れるようにしているその用心深さも見事の一言。
だが、その意味は果てし無く少ない。

「い、医者呼んでくれたら嬉しいな――――
ボクとしては～～……」

そこまでほざいてからバッタリとその男は倒れてしまった。
呆気にとられるとは正にこの事だ。
ウッカリ死体らしきものを発見して歩み寄る一般ピーポォが如く、恐る恐る近寄って足先でツンツンつつく。
ピクリともしないが生きている…ようだ。多分。
溜息に似た深呼吸をし、何とか心を落ち着かせ、しゃがみこんで怪我の確認をする。

骨折部…らしきものは無し。
擦過傷…数知れず。
打撲等…数え切れず。
火傷痕…深度は浅いがほぼ全身。
出血量…甚大。

「……で、この御仁は何で生きてるでござる？」

年の頃は自分らと同じくらいか少し上。
何だか体格に似合っていないスーツ姿。
彼女はスーツの仕立て具合やメーカー等にはさして詳しくは無いが、そこそこに良いものだろう事は……

いや？　かなり良いものかもしれない。何せ手触りで解かるほど丈夫なのだ。
言うならばケブラー繊維の様な丈夫なもので出来ている。防刃加工のスーツ等そこらでお目にかかるものではないのだが。

靴にしても見た目は普通の革靴であるが、全体が何か特殊な加工がされており、しなやかなくせにワークシューズ以上に固そうだ。特に靴先は蹴りに特化しているように硬度が増しており、靴の裏の滑り止めも強い。

ＳＰとかが使っている装備に似ているような気もするが、少女の知識をもってしても生地の材質などが全く解からない。
それでも結構値が張るものだという事だけは何とか理解が出来た。

尤も、全てが焼け焦げたかのようにボロボロであったが。

ぶっちゃけ、生きている事や喋られる事が信じ難い程、全身がズタボロなのである。

チラリと眼を隕石（？）落下地点に向ければ血の痕がここまで続

いている。
やはり落下してきたのは（信じ難いが）この男のようだった。
腕を組み、首を捻ってこの男の正体を想像してみる。
とはいっても判断材料が少ない上、無自覚ではあるが僅かに混乱を残したままの状態。そんな今の彼女の想像力ではとうてい思いつく訳も無い。
であるからして、かなりテキトーな答しか思いつかなかった。

「う～～む……
魔法使いがいるくらいでござるから“宇宙人”がいても不思議ではござらんな」

等と勝手に宇宙人認定してみたり。
無理もない。
宇宙人やＭＩＢ関係者と言われたほうが納得できない事もないのだから。

「だ、誰が宇宙人やねん……」
「おろ？」

何と少女の言葉にちゃんと突っ込みが入った。
半死半生の状態からでもツッコミをいれるド根性と、その見事な

タイミングはまるで関西芸人のようだ。

しかしそれより何より感心してしまうことが一つ。

「この怪我で意識があるのはスゴイでござるなぁ……」

である。

既に人としての範疇を飛び越えている。

「……ほっとけや……」

ギリギリとまるで故障した機械のように首をめぐらせてくる青年。

声の主が女性っぽいので意地になって眼に入れようとでもしているかのよう。つーか、そうなのであるが。

そして首を廻らせた眼の先、

「む……？」

無論、それは単なる偶然の重なり。

男はうつ伏せで倒れており、少女はその具合を確かめようとしゃがんでいる。

尚且つ、少女は実力からの自信があるからか少々無用心なのだ。

「んん?!」

偶然にも彼が向いている先にあったのは白い逆三角形。

ぶっちゃけ、しゃがみこんだ少女の足の付け根がかなり至近距離にあったのだ。

「ぶっはぁっっ!!」

「おろ?」

いきなり鼻血を吹いて失神。
その際、少女から顔を背けたのは見事である。

だが彼から迸る鼻血の出血は凄まじいの一言。
岩清水が如くさらさらと川に流れ込む様を見て、その物凄い出血量には流石の少女も更に驚いてしまった。

何せ控え目な表現でも大動脈が破裂したかのような出血なのだから。

「むぅ……それでもまだ生きてるでござるか…

…って、何故鼻血を吹いた後の方が気が高まっているでござる?!」

『スケベパワーがチャージされ、少しだけ体力が回復したんです』等という戯言の様な真実に気付ける訳もなく、少女はどうしたものかと首を捻るばかり。

だがしかし、

まさかこの青年とこれから長く付き合う事になろうとは、神ならぬ彼女が知る由も無い事であった……

Ｒｕｉｎ　～ぶちこわし～

■一時間目：ミチとの遭遇（前）

「う～む……俄かには信じられないんだけどなぁ……」
「と、仰られても拙者は見たまま正直に申しただけでござるよ」

麻帆良学園中等部生徒指導室。

ここ、超巨大学園都市である麻帆良学園の中等部に通う生徒の内、不良…というか素行不良程度の女生徒が呼び出しを喰らって説教される部屋である。
とはいっても行き届いている教育の賜物か、基本的に素行不良という生徒は殆ど存在せず、たまに説教されるのはこの学園一の超天才少女くらいな物である。
因みに件の少女が説教を喰らうのは、余りに天才過ぎるが故に“裏”の存在に気付いてちょっかいをかけたりしているからだ。まぁ、彼女のその真意は知らないが……

そして今、ここで話をさせられているのは素行や説教とはまるで無関係といえる少女。
3年に上がったばかりの中等部の少女で、成績不振ではあるもののその性根には学園も信頼を置いている長瀬楓である。
この部屋に連れてこられるほどの悪事を働いたことは無いし、校

則違反もした事が無い…という訳では無いが教師に怒られる程の事もしていない。バレて無いだけかもしれないが。

だが現に今、制服に着替えた彼女はこの部屋で話をさせられている。

尤も、相手は（楓からすれば）まるで担当違いの教師であるガンドルフィーニであった。

そんな彼と楓が何でここにいるのかというと……

「ホントでござるよ？
突然、空（くう）が渦を巻き、穴が穿かれそこから降ってきたでござる」

「う～ん……」

ずばり、事情聴取であった。

異様に元気なくせに出血多量で意識を失った件の降って来た青年（？）をどうしたものかと首を捻っていた時、異変に気付いた魔法教師が駆けつけて来たのである。

それがガンドルフィーニだった。

楓に異変を見られた事を気にはしたが、今はこの血をダクダク流している男の命の方が優先である。

学園に連絡を入れ、見つからないよう慎重に学園の医務室まで搬

送したのはついさっきの事。

尤も、しゃれにならないくらいの出血だったというのに只の脳震盪だったというのには呆れ返ってしまったが……

そして事件はその直後に起きてしまう。

話を聞きつけた別の魔法教師が医務室に入った来た瞬間、昏睡ギリギリまで意識を失っていた筈の青年がカッッと眼光鋭く目を見開いて跳ね起き、

「生まれる前から愛してました――っ！！」

と飛び掛ってきたのである。

「んなっ？！」

その魔法教師の名は葛葉刀子。

長い髪をさらりと流すやや切れ長の冷たさを感じる眼差しを持つ美女であり、ある特殊な剣技を使う実戦隊の一人だった。

その彼女が、鯉口を切る事以上の動きが出来なかったのだ。

刃の部分が見えるよりも前に、青年に押し倒されかかればそれは硬直もするだろう。

幸いにも近くにいた別の魔法教師、高畑の拳によって青年は吹っ

飛ばされ、見事に天井に突き刺さって刀子は事無きを得たが…やはり何の反応も出来ずに踏み込まれたショックは強かったのだろう。プライドが刺激されたかブツブツと何やら呟いていたりする。

それだけならまだしも、

「い、痛いやんかぁ――――！！」

と青年は全くの無傷。

その拳の威力で裏で名が知られている高畑・T・タカミチ。その彼が青年の人外の動きに反応して反射的に拳を繰り出していた上、手加減はしたもののうっかり本来の力でもって殴ってしまったというのにピンピンしているのである。

周囲の驚きは凄まじいの一言だった。

尤も、先に不死身さを目の当たりにしていた楓はさほど気にしていなかったが…

どちらかと言うと、『高畑先生はこういう事が出来るでござるか…』という事の方がよっぽど驚いていたりする。

この後、更に様子を見に来た源しずな先生に反応してまた飛び上がった青年であったが、今度も（若干更に力が込められているようだったが）殴り飛ばされて壁に人型を残して昏倒するなど、中々に微笑ましいイベントを起こしたりしていた。

その異様な肉体耐久度に危機感を持った教師らは傷を完全に回復させていたその恐るべき青年を頑強な別室…尋問室の方が正しいかもしれない…に連れて行き、
高畑がその青年を、そして楓をガンドルフィーニが担当して話を聞く事となった。

そして楓から一通り話を聞き終えたガンドルフィーニであったが…

「どうも…頭が痛くなる話だね……」

と、眼鏡を外し、米噛をマッサージしている。

「……」

うーん…と腕を組む楓。

実際に目の当たりにした彼女でさえ信じ難い事であったのだ。話を又聞きにしただけであるガンドルフィーニが早々納得はできまい。
それに、これとてそこらの人間よりずっと冷静に物事を判断できる楓だからこその適応だ。魔法という怪異の中に身を置く魔法教師でさえ尚混乱しているのだから。

『しかし…どうしたものか…』

ガンドルフィーニだけでなく、他の魔法教師らもこの事態には頭を痛めている。

数日後には結界が一時的にではあるが切れるのだ。

只でさえその時に発生するであろう有事の際の対応に追われている忙しい現状だというのに、降って湧いたこの事件。いっそ、あの青年が外部からの間者であってくれた方が気が楽である。

が、未だそれに相応する情報が高畑からは入ってこない。

それだけならまだしも、『間者ではないけど、来訪者ではあるみたいですよ』という不思議な答は念話で伝わってきているのだ。

訳が解からないとはこの事だ。

尤も高畑も混乱しているから話を纏めてから全て話すと言っていたのだから相当の事なのだろう。

魔法に関係する者以外が知る由もない“あの”戦いを知り、その後も世界を飛び回って戦い続けている彼がそこまで言うのだから相当に大変な話なのだろう。

ならば自分が見たまま、そしてあの場を調査した魔法教師や魔法関係者達からの総合的な情報からしてこれ以上の事は解かるまい。

それでも下手をすると学園そのものに大きな災いが起こりかねないだろう。

どうせなら全てを丸投げにしてベッドで休みたい…というのが正直なトコロだった。

そんな関係者達の空気から彼らの危機感を読み取っていた楓は、とりあえず納得をしてくれる話をしようと、持っている情報から魔法に対して素人である自分の意見を差っ引いて、自分の見たままの情報の話を再度構築し始めている。
別に自分が悪い訳ではないのだが、何故だか申し訳無いような気がしたからだ。

そう、彼女の方に落ち度はまるっきり無かった。
何せ　魔法教師らの方が慌てて魔法を見せてしまっただけ　なのだから。それでも気を使ってしまうのは彼女の人柄だろう。

かと言って魔法知識なんぞ持っていない彼女が上手く説明できる筈も無いのだが……

そんな楓にやっと気付いたか、ガンドルフィーニは慌てて手を振ってフォローを入れた。

「ああ、君のいう事が信用できないって言うんじゃないんだ」

「え？　あ、そうでござるか？」

堅物で生真面目な彼であるが、柔らかい面が無い訳ではない。
自分の失態を理解しているからこそ、彼女にこれ以上の負担を与えまいとしているのだ。

「単に、その…彼をどう扱って良いのか…がね。

何と言うか…その、不審人物と言おうか、少々犯罪者チックなものでね」

「あ、成る程」

溜息混じりの彼の言葉に楓も納得し、話の再構築を一旦停止する。

何気に酷い言い方であるし、楓にしても納得しているのだから酷い話である。

尤も、二人がそう思った所でしょうがないと言えよう。

空間に穴を開け出現した。

それだけでも信じられないというのに、固い岩が陥没するほどの高度から墜落したというのに怪我らしい怪我もない。

更にはその場を調査したところ凄まじい出血の跡もあった。確実に青年の容量より多そうだったが…

これで生きてるのだから“裏”に、魔法界に関わっている可能性があったのだが、保有魔力はほぼゼロ。一般人が無意識に自然界のマナからもらっている程度である。

では魔物の類か？　と疑うのも当然の流れ。“あの”生命力からしてトロールの合成魔獣と言われても納得できるのだから。

だが幾ら調べても、完全且つ徹底的に人間だという結果が出てしまう始末。

身体調査を行った担当医師曰く、

「信じられない話ですけど……どうも体質みたいなんですよ」

との事。

「不死身体質?!　何だそりゃ――っ!!」と叫んで頭を抱えても仕方の無い事である。

更に頭の痛い事に、無関係の生徒だった楓が“見てしまった”のだ。

確かに身上調書によると彼女は甲賀流忍者の中忍。
甲賀流では中忍が最高位なので彼女の実力は本物である。
以前、高畑から話を聞いた時にはガンドルフィーニとてスカウトしたいと思っていた程だ。

―彼女が一般生徒でなければ―

確かに実力云々からいえば楓の実力は、下手をすると魔法生徒であり学園長の孫娘のボディーガードをやっている少女より上であろう。
学園公認の狙撃手である少女ですら一目を置いているくらいなのだから。

だが、今述べた二人は初めから“裏”に関わっている状態でここに来た生徒である。

そして楓は裏社会を知るものではあったが、今回の件で初めて魔法界という裏の世界の更に“裏”に関わった。乱暴な称し方をすれば魔法を知らない一般人なのである。

魔法使いの保護と支援、そして無関係な一般人を巻き込まない事を旨としていた彼らであったのだが、例の青年の件でガンドルフィーニらはうっかりと“力”を楓の前で使ってしまったのである。

自分らから秘密を曝け出してどうするのか？

おまけに彼女から秘密に近寄ってきた訳では無く、自分らで見せてしまったのだから明らかに非はこちらにあるのだ。

これから何か大変な事が起こってしまうのではという不安もあり、ガンドルフィーニの頭痛は治まる兆しを見せてくれないでいた。

そんな事でうんうん唸っているガンドルフィーニを前にし、ボ～としている風を装いつつ楓は内心わくわくしていた。

魔法という世界があった。

そしてその魔法使い達が慌てるような事態が起こっている。

魔法使いの存在を知った事もけっこう驚いた事であるが、その魔法使いが徒党を組んでいるのだ。

魔法界という言葉も漏れ聞いた事もあり、楓はまだまだ世界が広さをもっている事を知って楽しくてたまらなくなっていたのである。

『そしてあの御仁……』

天から降ってきた青年。

何故だか楓は彼の事が頭から離れなくなっていた……

殆ど確認程度に一応の話を聞いたガンドルフィーニは、楓を促して指導室を後にした。

問題は積載したままであるが、何にせよこれからの事がある。仕方が無いので楓を伴って学園長の元へと赴き、彼に判断を仰ぐ事にしたのである。

問題の丸投げという説も無い訳ではないが、この時点で彼はまたポカをかましていた。

というのも、学園長が“裏”に関わっており、尚且つ彼らを纏めているという事を楓に言っているのも同じだからである。

楓はその事に気付いてはいたのであるが、あえて指摘したりせず苦笑を漏らしただけで彼の後を付いていった。

「あ、高畑先生」

「……おやガンドルフィーニ先生…って、お疲れのようですね…」

「ははは……まぁね……」

その途中、ばったりと高畑と青年と出会う。

ガンドルフィーニを気遣った高畑であったが、彼自身もどこか疲労しているようだ。

言うまでもなく当の青年の事情聴取をしていた高畑の方がガンドルフィーニより疲労するはずなのであるが、生真面目なガンドルフィーニは楓の話を聞きつつ高畑と一緒に居る青年の事を思い悩み続けていたのである。

全くもって損な性格の教師である。

そんな彼の事を高畑は気遣ったのだ。

まぁ、それでも男だけの状況ならば青年はそれなりに普通の会話を交わす事が出来る。その事に気付けたのは重畳だろう。

しかしその分、彼から齎された情報には頭を痛める事しか出来無かったのであるが……

「お？　さっきの美少女」

「おや、先程の……」

青年は眼が早かった。

着ていた服は余りにボロボロであったので（実際には詳しく調べる為に調査部に送られている）、気を利かした高畑がとりあえずと

ばかりに渡したTシャツにジーンズを着用し、何だかこざっぱりとしている。
何というか奇妙に落ち着いており、横に立っている高畑とガンドルフィーニの方が疲れも酷かった。
だからだろう、彼らの反応が遅れたのは。

『『しまった！』』と高畑、次いでガンドルフィーニが身構える。
今まで見たパターンによれば、この青年は美女美少女を見ると淫獣が如く飛び掛ってゆく。
その多くは見事撃墜されるのであるが、それでも思いっきり叩き落してもムクリとゾンビ宜しく懲りずに起き上がってくるのだ。これは性質が悪すぎる。

楓が美少女である事は誰の眼にも明らか。
だから大切な生徒である彼女の身を守る為に全力で止めようとしたのであるが……

「美少女とは嬉しい評価でござるな」

「いや、正当な評価だぞ？
ぶっちゃけキミが美少女に見えないヤツがいたとしたら、そいつはド近眼が変態だと断言できる」

「あはは…それでは拙者の知っている御仁は皆して変態という事になるでござるよ」

「んじゃ言い換えよっか？　そいつらは趣味が悪いと。普通はキミ程の高レベルの美少女だったら声をかけるぞ」

「それはそれは…結構な褒め言葉でござるな」

意外にも彼の反応は極普通。まるで楓とは昔なじみであるかのように話を弾ませていた。

青年は極普通に接し、楓も極普通に答えている。

まぁ、余りにもストレートに青年が美少女と述べるので楓は若干頬を赤くしてはいたが。

「え～と…キミ…」

当然の様に不思議に思ったのだろう、ガンドルフィーニが口を開いた。

「へ？　オレっスか？」

青年は会話に割り込まれた事が気に障ったのか、若干機嫌が悪い。

それでも返事を律儀に返すのは気性なのだろうか？

「何というか…彼女には飛び掛らんのかね？」

男としてはその質問は間違っていないだろうが、教師として有るまじき質問である。
現に楓は若干冷や汗をかいていたりする。
側にいる高畑も何だか笑いを堪えていたり。

「い、幾らなんでもそこまで淫獣とちゃうわ――っ！！」

と叫んで反論するのだが、先程の青年の奇行を覚えていたのだから当然の疑問である。

「淫獣というよりはケダモノと言った方が正しかった風でござるよ？」

「キ、キミまで……」

がっくりと肩を落とす青年。
一々リアクションが大きく、何というかそんな点も楓好みである。

「しかし、拙者も不思議には感じているでござるよ？
刀子先生やしずな先生には飛び掛ったくせに拙者には何もしようとしない。
これでは先程の褒め言葉の信憑性も霞むというものでござる。

何だか拙者に魅力が無いといわれているようでござる」

「襲い掛かれいうんかいっ？！
ンな事言われても俺かて知らんわいっ！！
無意識にかかっとるブレーキをどー説明せぇっちゅーんじゃ！！」

「「ブレーキぃ？」」とセリフをハモらせる二人の男性教師。

精神のブレーキが本能すら凌駕するというのか？
とてもじゃないが信じられない。尤も、この青年は端から端まで丸々規格外なのであるが。

ギャースっ！！　と涙流してまで反論する大げさなところは真に好ましい。つーか楽し過ぎる。

同年代との男との会話が異様に少ない楓であるが、男性の好みが無い訳ではない。

『案外、拙者はやんちゃな男に弱いのかもしれないでござるなぁ…』

等と苦笑してみたり。

「お、そういえば自己紹介がまだだったでござるな。
拙者、長瀬楓と申す。この学園の生徒でござるよ」

「あ、これはご丁寧に…」

何だか名刺交換をするサラリーマンを彷彿とさせる青年の所作。
その腰の低さには二人の男性教師も苦笑が浮かぶ。

「んじゃ、オレの番ね。

オレは　横　島　忠　夫　っていうんだ」

謎の青年…横島忠夫。

彼と彼女のこの邂逅が……
後に長く付き合う世界の始まりであるとは、想像すらしていなかった――

後編

「俄かには信じられん話じゃのう……」

「いや、そー仰られても……」

何だか前回でも聞いたような言い回しである。

広い広い学園内。

その広い学園にあるやはり広い一室――学園長室。

その一室に二人の若い男女は招かれていた。

一は少年という年齢に程近い青年で、彼は横島忠夫と名乗っている。

二はその青年が“出現”した場に居合わせた長身の少女。名を長瀬楓。

そしてその二人の付き添いとして、アフリカン系なのだろう肌の浅黒いスマートな体付きの教師ガンドルフィーニと、彼と同じ様に眼鏡を掛けている同僚の高畑の二人が彼らの脇に控えている。

この横島という謎の男に対しての警戒は完全に解けてはいないのでこの人数で付き添っているのには何かと問題がありそうなのだが、彼から話を聞いていた高畑が、

「いや、一応彼は危険な存在じゃないよ。少なくとも女性以外にはね…」

と意外に信用しているようなセリフを吐いていた。

取調べの間という短い時間ではあるが、そこは経験の長い高畑の事。横島なる者の人となりを掌握…とまでは行かないが、ほぼ把握したと言って良い。

ぶっちゃければ直情バカで尚且つお人好し。更に涙脆くて正直者。それが彼に抱いた感想であった。

だから（女教師などを伴わなければ）二人だけで充分だと判断したのである。

それに今現在、実戦部隊の大半が学園に居ない上、残っている者達の中にも手が空いている者は少ない。

ゼロではないがぶっちゃけてしまえば女性教師である葛葉刀子くらいなのだ。

高畑が述べたように、彼は男性にとっては（モテる男は別として）危険な存在では無いのだが、女性…特に美女というカテゴリーに入る者にとっては災厄といってよい。

会話以前にマトモに話を聞くことすら出来ないのでは無いだろうか？　そう思わせるほど彼は青い衝動を止められないのである。

よって必要最小限、尚且つ少数精鋭となるとこの二人しかいなかったりするのだ。

そんな事情など横島が知る由も無く、彼は学園長を前にし、『ふ、

福禄寿？　いや、寿老人か？』等と声に出して驚いて楓を『言われてみれば…』と納得させたりなんかした後、再度高畑に語った話を述べさせられていた。

「じゃがのぅ……」

「でござるなぁ…」

学園長の溜息混じりの疑問に、何故かこの場に同席を許されている楓もつられて同意の言葉を漏らした。

横島忠夫――

GSという職業に就き、魔力や氣に似て異なる力“霊力”を駆使し、退魔業（みたいなもの）を生業としている青年。

GSとはゴーストスィーパーの略で、金を貰って妖怪や魔物、魔族の起こす事件を解決する仕事であり、何と上部は法人である。

国家試験の様なものがあり、それに合格する事によって半人前でもGSとして認められ、仕事をこなす事によって報酬を得られる権利が与えてもらえるとの事。

霊的事件の解決がメインである為、退魔業オンリーというわけでは無く、時に人と妖との仲介人の様な事すら行うという……事らしい。

何ともはや…楓は元より、魔法界に身を置く者達ですら信じ難い話であった。

無論、横島の前にいる老人…麻帆良学園の学園長であり、“関東魔法協会”の理事でもある近衛　近右衛門ですら聞いた事もない話なのである。

何せ彼らが知るそういった組織としては、ＮＧＯ団体「悠久の風（Ａｕｓｔｒｏ－Ａｆｒｉｃｕｓ　Ａｅｔｅｒｎａｌｉｓ）」等のように表裏で活動している組織くらいで、その本来の仕事内容は決して人に知られてはならないものなのだ。

だが、横島の言う組織は表立って活動している上、金さえ積めば誰だって…ヤクザですら用心棒として雇う事ができ、尚且つ彼言うところの＜霊力＞を行使し、誰に見られたとして気にもならない。

それだけならまだしも、彼の話では下界のそこらに神々がひょこひょこ現れているとの事。それがまた信憑性を著しく下げてしまっている。

普通に考えてみれば誇大妄想に心を病んでいるカワイソーな男と見るのが正しいのであるし、

『さぁ、キミが入院していた病院は何処かな～？』と探し始めるのが正しい事といえる。しかし困った事に彼に対しての尋問は魔法による“真実看破”がかけられた部屋で行われており、一切の嘘や妄想を吐く事ができないでいた。

それに彼は、『証拠になるような力を見せてくれないか？』という高畑の言葉に対して歴とした力を見せているのだ。

「一応、ワシも確認させてもらいたいのじゃが…その証拠の力と

やらを見せてくれんかの？」

「へ？　あ、あぁ、別にいいっスけど…」

いい加減疲れが出ていた横島であったが、このままでは埒が明かない。

だから学園長の言葉に従って、何時もの様にそれを出現…いや、“具現”させた。

ヴゥワッ！！

「ぬっ？！」

「なっ？！」

「ほぅ…」

学園長とガンドルフィーニが驚きの声を上げ、楓が感嘆の声を漏らした。

無造作に、極無造作に横島が右手に“氣”を集束させたのだから当然であろう。

何気なく曲げた腕は一般人の眼にもはっきりと見えてしまうほど集束された“氣”の塊によって被われており、淡いエメラルドブルーに輝く手甲の様な形状を取っていた。

既に目にしている高畑は兎も角として、ガンドルフィーニや近衛の驚きは大きかったようだ。

しかし、魔法というモノに今日の今日まで触れてもいない世界に目の当たりにしている楓の方には別の驚きがあった。

彼女が使う分身の術は気を集束させて実体を感じさせる事が出来る技であり、変わり身として使用する事も出来る。

確かに横島ほどでは無いがほぼ無造作に出す事も出来るし、其々を戦いに組み込む事も出来る。

だが、彼の出した“それ”はベクトルが全く違う。

だからこそ楓は“それ”の違いに気付いていた。

教師らはその“力”に驚いているようだが、楓はその“力の内容”に驚き、感心していたのだ。

『純粋な“氣”ではござらんな……

どちらかというと彼の意思がカタチを持った…そんな感じでござるな』

その楓の思考を読んだ訳ではなかろうが、丁度良いタイミングで横島は手甲の形を変えた。

ボヒュッ！！

「「？？！！」」

又も無造作に横島が腕を振った。
するとガスバーナーが点火したかのような音がし、瞬間的にその手甲が長く伸び、剣のような形をとったのである。
初めの時と同様、余りに無造作に行った為に二人の驚愕は大きい。
しかし楓はその動作によって確信を深めていた。

『成る程…“戦う”という意思を強めたら剣の様な形となるでござるか……』

ふぅむ…と声を出さずに唸り、教師らが驚いている様に訳が解からず慌てている横島を見つめ直し、

『何れにせよ……』

顎に指をやり、微かに首を傾け、

『やはり面白い御仁でござるなぁ……』

と実に楽しそうに微笑んでいた。

■一時間目：ミチとの遭遇

（後）

横島の話を聞き、証拠を目の当たりにしてからの行動は素早かった。

いや、もっと正確に言えば学園側は横島の事情聴取をしている間中、高畑から念話を受けて話のウラを取っていたのであるが。

楓を別室に移ってもらい、横島に詳しい話を聞くと更に込み入った情報が入り、頭に浮かんでいた絵空事のような仮説が真実味を帯びてくる。

部屋に残っていたガンドルフィーニや近衛も頭痛が増すが、話の信憑性も増している為に薬を飲んで休む訳にもいかない。

何せ彼の話の中に出てきたＧＳという組織やオカルトＧメン…ＩＣＰＯ超常犯罪課等といった組織は耳にした事も無ければ存在もしていないのだ。

尚且つ、彼の話では魔法使いは既に滅びており、それに値する魔法が復活したのは近年で、更にイギリスに留学していた一人の若い女性（美女）が行ったという。

そしてその女性もＧＳの一人で、普段は魔法料理店を経営しているとの事。

彼の戸籍や職場に関しての調査も聴取と同時に進ませていた。

横島の雇い主はミカミレイコ（美女）という世界的に有名なＧＳで、美人でスタイルもよく、能力は異様に高く頭も切れるが凄まじい守銭奴で、その悪どさは魔族ですら感嘆するとか、

同僚は３００年間幽霊をやっていて現在に蘇った女性（美女）で、世界で四人しか居ない高位ネクロマンサーの一人だという。

自分を師匠と慕う自称“弟子”は人狼族の娘。横島が見せた霊気なる力を集束した霊波刀という能力を駆使するサムライで、

職場の居候に至っては、かの有名な九尾の狐の転生体。

同級生“だった”少年はバンパイアハーフで、更には同じクラスに机の妖怪（九十九神）がいたとか、

時々飯をたかりに来るボケ老人は齢千年を超える錬金術師で、人工的な魂の合成に成功した実績（二回のみ）があり、

横島の隣の部屋には元貧乏神憑きの少女が住んでいた等々……

そういった話と、彼が語った職場や住居の確認。それらをひっくるめた最深度調査であったが、魔法の力や“手の長さ”もあって恐ろしく速く進んでいた。

尤も、大阪に住んでいた時の調査は“向こう”との確執の所為でそう進みはしていないのであるが……

どちらにせよ怪しさ大爆発の謎の侵入者、横島忠夫。

彼は、ハッキリ言って頭の具合を疑うような話をてんこ盛りにしてくださったのである。

だが、学園長も馬鹿ではない。

横島には失礼だと理解しつつも彼に黙って記憶を僅かながら覗いて喋っている事の確認も行っていたし、部屋にも真実看破の魔法陣を仕掛けもしていた。尚且つ後催眠等も含めた記憶改竄の可能性の診断も行っている。

それら全ての結果から彼の言っている事が本当の事であると判断したのである。

調査員も無能では無い。

学園長の命を受け、東京近辺の調査を開始し、彼が勤めていたという職場の住所や、話に出てきた六道なる女学校、果ては厄珍堂とかいうマジックアイテムの店すらも探してみたのであるが……当然ながら欠片ほどの痕跡も存在していない。

彼の戸籍…大阪在住時の住所からして…にしても住所込みで存在

しておらず、彼が通っていたらしい高校も存在していない。
答えが出るのに然程の時間も必要としなかった。

つまり……

「異世界っスか……」

という事である。

「思ったよりも冷静じゃの」

「まぁ、こーいった事には慣れてるもんで」

嬉しくない“慣れ”もあったもんだ。

竜宮城から月世界。七百年前や千年の過去、はたまたゲームの中、映画の中にすら引きずり込まれた経験もあり、更には宇宙の卵の中で別の宇宙のアダムとイヴと出会ってすらいる横島だ。
今更別の世界に飛ばされたとしても然程の驚きは無かったりする。

精々、『ま、またこんな目に～～っ！！』と泣く程度だ。

尤もこのように異様に落ち着いているのには別の理由があるからなのだが……その原因は近衛はおろか彼自身もサッパリ解からないので黙っていた。自覚が無いだけかもしれないが。

兎も角、何時までも異世界にいるわけにもいかないのであるが、迎えを待つにしろ帰る方法を探すにしろ、その時までの生活をどうするかという事となる。

しかしその事は横島が悩む前に近衛が案を持ちかけてきた。

「ワシらの世界では魔法やそれに付随する神秘は秘匿となっておる。

下手に目立つ事をやれば忽ち捕らえられてしまい、厳罰を受けてしまうでの。

そーいえばキミは戸籍も何も無いので働く事もできんのぉ…フォフォフォ……

んで、キミのこれからの事なんじゃが

ワシらのところにおってもらった方が生活に困らんよーな気もするんじゃが…どうするかの？」

案と言うより、決定事項に近いのだが。

「それ、決定事項の確認やんか！！　ちゅーかそれしかないやんけっ！！」

無論、ツッコミは入れる。大阪人の血の性だから。

ツッコミを入れつつそれを受け入れている横島に対し、近衛もフォフォフォッと宇宙忍者のように笑って胸を撫で下ろしていた。

横島の事を保護してやりたいという気持ちも確かにあるのだが、当然ながら彼らには別の思惑もあった。

何せ横島忠夫という存在はあらゆる意味でイレギュラーである。

ちょっと前よりかはかなりマシではあるが、今現在も東と西との魔法協会との仲が微妙であり、尚且つ世界の裏側でも微かにきな臭い動きがあると感じていた。

そんな時に異世界人の出現だ。それがどんな火種になるか解かったものではないのだ。

強硬派等であれば横島の始末という短絡的な意見を吐き出すかもしれないが、穏健派で知られている近衛は微塵もそんな意見は浮かんでは来ない。無論、それを画策する奴らはいるじゃろうなぁ…という可能性は思いついてはいるが。

それにもし、彼の世界から救援の手がやって来たとして、その時に彼の身に何かが起こっていたとしたら、その時にはどんな問題に発展するか解かったものではない。

そして、内心これが一番大きな理由ともいえるのであるが…何となくではあるが横島という青年は妙に憎めず、好ましさすら感じているのである。

だから個人的な思惑を脇に置いても、微力ながら彼の力になってやりたいと思ったのも、一番安易で安全な策を取る事にしたのも当然の流れと言えよう。

現に、彼に対しての危機感は既に無くなっており、学園長室にい

るのは近衛を除けばガンドルフィーニのみ。
彼にしても薄々お節介である事を理解しているので、そんな学園長に対して苦笑を浮かべるだけである。

そんな彼の前で学園長は契約書を作り上げて行き、魔法的な力のある契約印を押してから横島の前に提示した。

「ワシらからの仕事を請けてもらう事と、魔法を秘匿する事。ワシら以外の者に異世界からやってきた事を漏らさぬ事。
それを守ってくれるのなら住居や戸籍、当座の生活費を保証しよう。
あ。勿論、仕事を受けてくれた時の仕事料は払うぞい。それでどうかの？」

当座の生活費と住まい。そして“裏”の件で働いてくれただけの仕事料を払うという老人の言葉。
提示してもらった仕事の基本料金と、その内容に見合ったプラスの歩合。そしてそれらが果たされなかった場合の罰則を確認した上で、受けた仕事のよる怪我や入院などの保障を等を確認した横島は、

「犬とお呼びください」

言うまでもなく即答した。

何せ元々の時給が２５０円。

更に上がって２５５円とかいう赤貧状態で餓死させる気に満ち溢れた仕事場で労働基準法を無視したバイト料をもらい、足りない分をスケベ心を満たす事で賄っていたドアホな男だ。
命懸けの仕事の給料として妥当な金額を提示されれば尻尾を振ろうというものである。

余りにも簡単に決めてしまった横島に、ガンドルフィーニと近衛が『早まったかのぉ…』等と不安に駆られた頃、三人がいる学園長室のドアをノックしてから教師と思われる男性が入って来た。
けっこう身体が大きく小太りではあるが、妙に愛嬌のある顔をしている魔法教師の一人である。

「おぉ、弐集院くん。話はついたのかの？」

「ええ…まぁ、一応は…」

彼にしては珍しく眉を顰め、困ったような顔をしながら手にしていた書類を近衛に手渡す。

「ふぅむ……わりとあっさり受けてくれたもんじゃのう…」

「あの娘からすれば修業になるから良い…ってトコですねぇ…
高畑先生も実力だけなら同じＡ組の龍宮君並だってコトですからかなりのもんなんでしょうね」

それでも諸手を挙げて賛同の意を示せないのは彼女が“一応”一

般人だからだ。
幾ら腕が立とうと“裏”に関わっていない生徒を引き込むのは流石に気が引けるのである。

ある意味、転機といえなくもないし、関東魔法協会に属する者としては戦力が増えるので受けてもらって嬉しいのであるが、教師としてはやはりやりきれないものがあるのだ。

「……幾ら事故とはいえ、生徒を巻き込むのは…ね」

と、ガンドルフィーニも肩を竦めている。

訳が解かっていないのは置いてけぼりの横島だ。

「え～と…何の事やら……」

と質問しても黙殺されるように答えてくれない。
弐集院という教師にしても初対面なのだから困惑も大きい。

仕方が無いので、とりあえず最初からいるガンドルフィーニに声をかけようとしたのだが…

「いや何…これから拙者が裏に関われる許可を貰っていただけで

ござるよ」

と、見知った少女の声がそれを遮った。

近衛もガンドルフィーニも、そして弐集院もギョッとしてその声の方に顔を向けた。

そこには相変わらず昔話のキツネのような糸目で微笑んでいる楓の姿が。

彼らとて油断していた訳では無い。

ガンドルフィーニも、ぱっと見はそう見えない弐集院にしても、事が起こった場合の実戦要員である。

その二人ですら気付けなかったのだからその驚きは当然の事であろう。

だが、そんな教師らの驚きなどを他所に、側にいた横島は別段気にした風もなく。

「そうなの？」

と、楓に問い返していた。

「そうでござるよ。

拙者、横島殿と出会ってしまったが故、世界の“裏”…魔法の存在に触れてしまったでござる。
記憶を消すか、
完全に関わるのを止めて口を噤むか、
“裏”に入るか…という三択を提示されれば関わる方を選ぶのは普通の反応でござろう？」

「いや、通りすがりの通行人Ａを貫くという手が普通だと思うぞ？」

「人其々でござるよ」

等と極々フツーに話をしている二人。
何となく苦笑混じりである横島の方が何だか常識ある人間に見えてしまうのだから不思議なものである。彼を良く知るものが聞けば全力否定するであろうが。

「い、何時の間にここに……」

呆れたようなガンドルフィーニに声に対し、謎爺とガンドルフィーニ“だけ”での会談（怪談？）から開放され、心身の消毒と言わんばかりに楓と会話を楽しんでいた横島は『へ？』という顔をし、

「いや、今そこの人と一緒に入ってきたじゃないっスか」

弐集院を指差し、「何言ってんの？」という顔をして平然とそう述べた。

指を指された弐集院の方が慌てたくらいである。

そんな横島の言葉に、内心の感心を隠せない楓は笑みを深めて横島を賛辞した。

「大したものでござるな……
拙者、けっこう隠行には自信がござるに」

そんな楓の言葉であるが、横島からしてみれば眉を顰める程度。
言ってしまえば“かくれんぼ”のレベルである。
というのも、彼らの知覚方法とベクトルが離れているからなのだが。

横島からしてみれば、

「だって楓ちゃん、気配“しか”消してなかったじゃないか」

となるからだ。

この言葉には流石の楓も驚きを隠せなかった。

「と、と申されても、周囲の気配に溶け込んでいた筈でござるが……」

実を言うと、消し過ぎると逆に知覚能力に優れた者相手であれば目立ってしまう。

雑踏の中ならいざ知らず、森の中で気配を消し過ぎればそこに切り取ったような空間が出来るからだ。

何せ森の木々も僅かとはいえ気配を持っているのだから。

だから楓の隠行は、気配を上手く溶け込ませて『そこに居る』という事を自覚すらさせない高度なものなのだ。

はっきり言って実戦でも十二分に使用できるレベルである。

実際、実戦を知っている近衛らが気付けなかったのだから間違いない。

だが、彼には、

横島に気付かれていた。

「気配を消しただけで美神さんの知覚から逃れられると思うなよ？　オレの雇い主はなぁ、気配を消し、存在を限りなくゼロにし、物理的に透明になっても　勘　で殴ってくるんやぞ？！

しかも当たるし！！　本気で殺しに来るし！！　避けたら死ぬまで殴って来るし！！」

“覗き”というスキルを上げ過ぎたお陰で……

とてもじゃないがそう見えないだろうが、元々のスペックが高い上、霊力に目覚めてからは格段に上昇している知覚力は世界最高峰と言われていた美神以上だったのだ。

覗きを見破られる度に切磋琢磨して実力を高めて行った彼は、対横島用に設置されていた即死トラップを掻い潜る為にその能力を磨きに磨きをかけ、七割がたなら見破る事ができるようになっており、覗きも十回に一・二回は成功するようになっていたのである。

覗きなんぞに命を賭けんでも…という話もあるが、横島から言えばそれこそがナンセンス。

そこに着替える美女あらば、はたまた入浴する美女あらば、喩え命を賭してでも覗くのが礼儀ではないだろうか?!　等という馬鹿の見本の様な事をバイブルにしている彼なのだから。

そんな世の男どもが持つスケベ心を具現化したような彼。

その彼がいた世界の概念からすればお互いの勘を磨き上げ続け、横島の行動を全て見破れるようになっている“あの”美神の罠のウラをかき、覗きに及べるという事は神レベルと言って良い。

覗きの亜神等とは自慢にもならないが。

尤も、当の美神は音に聞えたツンデレさをコッソリと発現させ、

『べ、別にこのレベルを超えて来たから呆れてただけなんだからね?!　ボーナス代わりに見せてあげただなんて思わないでよ?!』

とかいう話もあったりするから本当は全敗しているのかもしれない。

「そ、それは何とも…」

兎も角、呆れた方が良いやら感心したら良いやらで楓らは判断に苦しんでいた。

何せそんな向こうの“修業”を語るほど横島も馬鹿では無いので、彼の裏事情を知る訳が無い彼女らからすれば命懸けのトレーニングをずっと積まされていたとしか思えないのだ。

当然ながら横島の耐久力にモノを言わせたセクハラ行動を目にしてはいるのだが、神技と言って良い程高められたセクハラスキルの方には気付きもしていない。

全くの誤解であるが、こうして近衛らは横島への評価を無駄に高めて見ていたのだった。

夕方には全ての話が終わり、楓も帰宅を許され、横島は用意してくれた部屋へと向う事となった。

関わった話はかなり重かったはずなのであるが、

『何時もより遅くなってしまったでござる。念の為に連絡は入れておいたでござるが心配かけてしまっているでござろうなぁ…』

等と楓は同室の少女らの事を考えていたりする。

何せ生死に関わる件は初めてではないのだ。

そして今回からは更に世界の深淵に関わる事が出来る。

それは自分を高めるチャンスでもあるのだ。

確かに責任は重く受け止めてはいるのだが、その事情によって心が弾んでも落ち込む事などありえないのだ。

そこらの少女とかけ離れた武人の心を持つ楓らしい思考と言えよう。陰に潜むのが普通である忍びのクセにおもっきり武闘派というのもナニであるが。

だが話が終わり、軽い緊張から開放されてから二人ともやっと気付いた事もある。

――余りにも自分らの契約がとんとん拍子に進みすぎている――

のだ。

話を進められている間は気にもならなかった事であるが、楓はともかく、横島のような怪しさ大爆発の人間を普通ならば好意は兎も角、そう簡単に仕事をさせる筈が無いのである。

そんな疑問に対し、

「これは拙者の勘でござるが、尋問していた部屋に魔法とやらを

掛けていたのではござらんか？
　そうやって“真実”を自白させ、矛盾や嘘を感じられなかったから受け入れられた…とか」

と、楓は自分の感想を述べた。

無論、その考えは正鵠を射ていたといって良い。

そしてその理由だけでは無い事も何となくではあるが気付いていた。

「それに……」
「それに？」

「ひょっとしたら近日中に有事が起こり、尚且つそれに対する駒が足りないのかもしれないでござる」

そうでなければ横島のような超絶不審人物を引き入れたりする訳が無い。
いや学園長は兎も角、ガンドルフィーニのような堅物が早々簡単に許可を出すわけが無いのだ。

使えるかどうかは別として、異世界人という笑かすプロフィールを持つ横島と、実力は折り紙付きなれど魔法界に属する“裏”とは戦闘を行った事がない楓の二人をいきなり実戦投入するなど正気を疑ってしまう行為なのだから。

それがもし、学園長がガンドルフィーニに“何々の時”の備えとして引き入れるのはどうか？　と持ちかけ、彼がそれならばと納得したとするのならば何となくではあるが筋が通るのである。

まぁ、今さっき魔法界に関わったばかりの楓の仮説なので今一つ信憑性に欠けるのであるが。

関東魔法協会…いや、麻帆良学園の“裏”に対して素人である故に論理飛躍して考えられた楓であるからこその仮説だと言えよう。

だが、その考えはかなり真実に程近いところにあったりする。

成績はバカレンジャーのバカブルーを誇れる程どーしよーもない楓であるが、成績の悪さ＝頭の回転の悪さに直結する訳ではないのだ。

柔らかい思考を持つ頭も手伝って、そういった判断は大人顔負けなのである。

尤も、事実に埋もれた真実はほんの僅かにズレた位置にあるのだが二人はまだそれを知る由もない事であるが……

そんな楓に対し、「成る程なぁ…」と感心と納得をする反面、苦笑も漏らしてしまう横島。

自分もそれに近い事を考えていたし、つい“向こう”の“弟子”と比べてしまったからであろう。

「？　何でござるか？」

「のわぁっ！？」

不思議に思ったのか、楓がひょいと顔を覗き込んでくる。
担任のネギのような子供なら兎も角、男に対してこれだけ接するのは初めての楓であるが、不思議と横島相手なら気にならなかった。
大変なのは横島の方で、彼女のような直球ど真ん中の好みの少女にこれだけ接近されているのだから心臓もドキバクだ。
それでも“何故か”触手…もといっ、食指が動かない。それがまた心を掻き乱して苦しいのである。

「どうかしたでござるか？」

「な、なんでもねーよ。
……ったく、こーゆートコも似てんのになぁ……」

「どなたに？」

何時に無く鋭く問い掛けてしまう楓。

出会ってからまだ大した時間は経ってはいないものの、ある程度打ち解けていた横島であったが、そんな彼女の変化に戸惑いを覚えつつも律儀にその問い掛けに答えてやった。

「オレがいたトコでオレの弟子だったヤツ。
喋り癖や可愛らしいのを無自覚なトコが一緒なんだよなぁ……」

思い出すのは天真爛漫過ぎる少女。
常に付き纏い、じゃれ付き、修業をせがみ、散歩に引きずり出させる。

イヤでイヤでしょうがなかったのに、何時の間にか日課として付いて行っていた自分もナニであるが。

「弟子…でござるか？」

「そ。尤も、楓ちゃんと違って“あっち”はサムライだったけどな。
弟子にした時はホント子供だったってのに……」

霊治療中に育ち、女の子であると知らされ、思いっきり懐かれ、某キツネの小娘のただ食い事件後に職場の居候となって……

「十年もかかってへんのにばぃんばぃん…生命の神秘や……」

あれでは手ぇ出すなって言う方が神への冒涜だろう。
同じく“たゆんたゆん”に育った狐に文字通り化かされ、毎日毎日（中略）毎日、彼のリビドーを攻撃し続けてきやがった。

危うく難を逃れられはしたものの、本丸の倒壊は間近であった事は言うまでも無い。
何せ出会ってからついこの間まで、色んなコトが起こっちゃって

たのだから。

そう、色んな事が……

「…はて？　弟子にした時には子供というのは？」

話を聞き流す事無く聞いていた楓はそれに気付いた。
矛盾…ではないが、疑問に。

十年もかかってないと言っているし、幾らなんでも彼の外見年齢からしてそんなに前の訳が無いはずだ。
何を教えたかは知らないが、侍（？）を弟子にしたというのであるから横島もそれなりの年齢になるはずなのだから。

そんな疑問を向けてくる楓の様子に、やっと教えていない事を思い出した横島はゴメンと一言謝りを入れてから、

「言い忘れてたけど、オレの歳って二十七なんだ。多分…」

「は？」

言われて楓は横島の全身を見つめなおした。

元々着ていた衣服はボロボロになってしまったので用意してもら

ったTシャツとジーンズ、そしてスニーカーを身に着けており、身長は自分よりやや低め。細身で、意外と無駄肉のない絞まった肉体。

カッコイイというカテゴリーでは無いものの、優しげで親しみのある顔立ち。

確かに童顔というカテゴリーが付いているというのであれば、そうなのかもしれない。しかし、

これで成人男性というのは詐欺だろう？

そう悩んでいる楓に対し、苦笑した横島は、

「あのね、楓ちゃん。

オレ、十七歳からこっちの肉体年齢と、こっちに来ちまった理由も含めた大半の記憶ごと無くしてんだよね」

学園長達にすら言い忘れていた事をあっさりと楓に語ったのである。

「は？」

流石の楓も理解の範疇を超えていた。

「いやね……」

そんな顔をさせてしまった事には頭を掻く以外の行動が取れないのが物悲しい。

何せ女っ気が無さ過ぎ……という訳ではなかったのだが、アグレッシヴにアプローチかましてくる女達ばっかだったので全然経験が生かせられない。

「二十七歳だったって記憶の“枠”みたいなモンは残ってんだけどさ、“経験”の方は大半が切り取られたみたいに無いんだ」

都合が良過ぎる記憶喪失。

だが彼の眼差しには嘘の色は皆無だった。

つまり彼は、どうして“ここ”に来てしまったのか、何があったのか全く解からない状態で馬鹿みたいに落ち着いて会話を楽しんで（？）いたのである。

教師らにはここに来た時の記憶が曖昧でサッパリ思い出せないと語っていた。

違いない。間違いない。それは正しい。

が、その理由が彼の記憶が消失…“喪失”では無いらしい…していたというのは完璧な初耳である。

そんな大それた秘密を彼はアッサリと楓に“だけ”語ったのだ。

彼女を知る誰もが見た事も無い表情、

楓に一呆気にとられている顔一というレアな顔をさせている事など知る由もない横島は、どう説明したら良いか必死に考え続けていた。

夕暮れの道を歩きつつそんな微笑ましいイベントをかまし続けていた二人。

傍目には高校生カップルがじゃれあっている様である。

まぁ、この学園のものならば少女の制服から彼女の年齢に見当がつくだろう。コスプレと思われるかもしれないが…

それでも道を歩く寂しい男共から横島に対し嫉妬の眼差しを送られてくる事はどうしようもない。

何せ楓は掛け値なしに美少女であるし、スタイルも良いときている。そんな彼女と仲睦まじく歩いている横島に対して嫉妬は大きいのだ。

嫉妬ビームがぷすぷす刺さるのを感じて居た堪れなくなるが訳が解からず周囲を見回してしまう。

無自覚ではあるが、向こうでもそんな眼差しを受け続けていた横

島は当然として、楓の方も横島に殺気を向けてくる男共の事がよく解かっていなかったりする。

呆然とする楓に対し、なにやら必死に言い続けている横島の姿は、いちゃつきの一環に見られたとしたってしょうがない事であろう。

「これは……」

そう、

何とか再起動を果たし、混乱を残しつつも横島を学園長が指定した宿へと案内する楓を『それじゃあお礼に…』と横島が食事に誘い、学園内で一番有名な＜超包子＞で仲良く食事をする二人を見れば誰だってそーゆー仲だと思うだろう。

特にパパラッチを自称する少女ならば……

「スクープだっ！！」

こうして横島は否応も無く表と裏で目立つ事となってしまったのだった。

後編（後書き）

改めまして、
三日月→クレッセント（含む“くれっせんと”）→クロワッサンとＨＮを使っている名を持つ者でございます。

前のところでも書きましたが、タイトルのＲｕｉｎは、“破滅”を意味する単語で、同時に“台無し”と意味も含んでいます。
ですから、両方の意味を混ぜ、『台無しネギま』としております。

さて、
楓は原作二十一時間目を読む限り魔法使いという存在を知らなかったようですので、
＝裏の世界は知っていても、魔法がらみの方にはまだ関わってはいなかった。と解釈し、その仮説を決定しました。
後で原作設定が変わったとしても貫く所存です。原作で設定が変わってもお許しください。

横島は実際には二十七歳で、何故か記憶の一部ごと若返っております。
なので、異世界に移動してしまった理由すら理解しておりません。
“何故か”落ち着いてますけどね……。

設定はシリアス、通常はラブコメ、ちょっとエッチに、そしてハーレム気味。
だけど過程はキッチリしましょうと言うのがスタンスです。

あんまり文珠に頼らず、霊力と変態的な体力がメインの彼と、それを取り巻く女の子とのお伽話。

更新は時間掛かりましょうが、力尽きるまでやっていくつもりです。

てな訳で、続きは見てのお帰りです。

ではでは～

前編（前書き）

あまり非難されていないようで幸いです。
調子こいて連続投稿。
まだ変化はありません。

前編

――“向こう”の世界にパイパーと名の悪魔がいた――

ハーメルンの笛吹き悪魔パイパーといえば、プロのＧＳでも恐怖するという恐るべき存在であり、一個が数億円もする精霊石を二三個纏めて使用したとしても退散させるのがやっとで、如何なる手錬れであろうと餌食になる他なしと恐怖されていたという。

一体、その悪魔の何がプロＧＳらを恐れさせていたのかというと、それはそいつが持つ笛の音にあったそうだ。

全く持って気が抜けるチャルメラによく似た音色のそれは、喩えどんな人間であろうと最後まで曲を聞き終えると経験ごと年齢を吸い取られてしまうというとの事。

つまり、何も知らない単なる子供となってしまうらしいのだ。

失われていた全盛期の力を取り戻したとしたら、関東一円の人間を一瞬で子供にしてしまうことすら可能というのだから、それはそれは恐るべきものであったのだろう。

尤も、過去形で語っている事から解かるように、件の悪魔は既に退治されているらしい。

詳しい過程は知らないが、横島忠夫の雇い主その人がガチで殴り

倒してしまったそうだ。

で、

何故そんな話を楓が思い出したのかというと……

『いや、記憶喪失には一回なった事あるんだけどさ、そん時はすっぱり記憶がすっ飛んでたんだけど、
今回のはあの悪魔ン時みたいにピンポイントで記憶が消えてるから関係あるのかなって思っただけだよ。
でも関係ないだろーなぁ……あいつ死んでるし。
つーか異世界にまで飛ばせる訳ないし』

という話を当の横島と昨日したからである。

ピンポイントで…というのは、その悪魔は件の能力で大人までの記憶を経験ごと持って行って子供にしてしまうからだそうだ。
今その話を思い出しても怖気がする。
何とも恐ろしい能力を持っていたものだ。

妹分たちよりも早く寮を出、わりと空いている通学路をゆっくりと歩いてゆく。
早起きは苦手という訳ではないが、久しぶりに妹分たちと分かれて一人でいる所為か人通りの少なさを強く感じているのかもしれない。

尤も、“一人”であって“独り”ではない。何時も一緒にいる連中と偶々離れているだけ。

それでも土日の修業時と同様に、騒がしさや気の置けなさがないと妙に寂しさが浮いてくるのが面白い。

偶に皆と離れ、空いた通学路を一人歩くのも良いかもしれないでござるなぁ…等と思いつつ学校へと向っていた楓であったが、ふと世界樹が目に入って昨日の事を思い出していたのである。

「しかし…＜悪魔＞、でござるか。
そんなものまで実在していたとは……」

いやはや、世界は広いでござるなぁ…と笑みが浮かんだ。

別に世間知らずと言い切るほど世間を知らないわけではないが、それでも知らない世界の何と広い事か。

日本とは別の国があるとかいう話では無く、別の“裏”の世界というモノがあり、魔法使いが存在していて実際に魔法戦争等の過去もあったと言う。

尚且つそれとは別のワールドがあり、そこでは魔法では無く霊力が普通に存在していて、霊能者がそこらにいて妖怪や悪魔と戦っているのだという。

“裏”というものに接した事が無いとは言わない。自分とて忍な

のだし。

だが、そういったものと壁を隔てた“裏”。

＜魔法界＞という存在は十余年ほどしか生きていない上に山奥で暮らしていた楓が知る由も無かった事であり、異世界に至っては論外だ。

それだけならまだしも、何と横島のいた異世界ではそこらに神様だとか悪魔がいるのだという。どんなファンタジーワールドであろうか。

そしてそれらの存在を知ったのは、何と昨日の事である。

頭の柔らかい楓であるからこそ、それらの“事実”をアッサリと受け止められているのであり、普通なら夢と現実の狭間で悩み苦しむ事であろう（特に横島がいたという異世界）。

更に付け足すならば、楓は平和主義者であるのだが武闘派の側面も持っていたりする。

新たなる“裏”は新たなる戦いへの道でもある。

その事に僅かな怯えにも似た感情が全く無いという訳では無いが、それより何より期待感の方が強い。

だから、今までとは全く違うであろう相手との戦い…それを待ち望んでいる子供じみた胸の高鳴りも手伝ってか、機密保持という理由での勧誘も快く受けたのである。

尤も、戦いと離れている時の楓は何時もの彼女だ。

類稀なる運動能力を有しているというのに、中等部の超弱小クラブである散歩部に入って、毎日のように無駄に広い麻帆良内をてくてく歩き回って散策を続ける日々。
それに対して不満を全く持っていない穏やかな彼女のまま。

正に　一鞘に収められている銘刀一
…いや、彼女は忍なので忍刀か？　それが彼女を称するに値する言葉なのかもしれない。

「ふむ…」

何時もの通学路。
何時もの学校。
何時もの空気。

だが、こうして新しい環境に入ったという気持ちを持って見れば別のもののようにも見える。

気が付けば色んな角度から校舎を眺めている自分がいた。

いつ何時、ここを戦場にせねばならないかも解からないので、今まで以上に入念な下見を…という建て前を持って、今まで以上に親しさを感じている校舎のぐるりを眺めて楽しんでいる自分が――

「あはは…やはり拙者は子供でござるなぁ…」

こんな事くらいで舞い上がってるでござるよ…と、風に靡いた髪をかき上げつつ教室へと向ってゆく。

今日からやる事が増える。

手間が増すというのに、何故か彼女の心は弾んでいた。

今日の放課後からしてまずやる事がある。

“彼”とこれからの仕事の打ち合わせをする事、そしてその為にこの街を案内するという任務があるのだ。

何となく弾む胸は、サラシで押さえた胸が物理的に…というのではないだろう。

異世界からの来訪者、横島忠夫。

彼に会い、また広い世界の話を、

御伽噺のような異世界の話を聞く……その事が楽しくて堪らないという自分も知ってしまったのだから。

ふと気が付くと時間はチャイムが鳴るギリギリ手前。何となく放課後に思いを馳せていた所為だろう。

計算していた以上に時間をとってしまい、その事に軽く反省。

というか、何時もの登校時間より遅くなってどーするでござる？

とちょっと自己嫌悪していたり。

流石にＨＲに間に合わないという程でもないが、それでも自然と足は速くなる。

微風のようにしなやかに廊下を進み、
涼風が如くゆるやかに教室へと向う。

気配を消してはいないが、目立つ事も無く歩いてゆけるのは流石と言えよう。

が、

「オハヨーでござる」

機嫌の良さは余り隠し切れていない楓が教室のドアを開け、中に一歩入ると…

ざわ……

教室の空気が、撓んだ。

「え…？」

流石の楓も硬直してしまう。

決して目立たない方ではないが、ここまで視線が集中した事はそうないからだ。

「楓姉…」

「ぬ？」

下方からの声に眼を向けてみれば、寮の同室の双子で妹分である鳴滝姉妹の妹の方、左右に髪をシニョンで纏めている鳴滝史伽が自分を見つめていた。

それもヘンな目で。

「昨日は何だか遅かったし、妙に浮れてたけど…こういう事だったんだ…」

「は？」

何やら頬を赤くしたミョーな上目遣いでチラリチラリと自分を見つめてくる一見幼女の言葉。楓は訳が解からない。

「いや〜…長瀬さんにも春が来てたってコトだよねぇ〜……
で？　馴れ初めは？　ドコまでいってんの？　ホレホレ、オネーさんに言ってみんさい」

「へ？」

妙にテンションを上げ、メガネ怪人と謳われ（？）ている早乙女ハルナが実に嬉しそーに話しかけてくる。
無論、楓はサッパリサッパリだ。

「あ、あの〜〜……
一体、何の話でござるか？」

首を傾げつつどこかニヤ付く級友らに問い掛けると、自分と同じく成績がズンドコに悪いバカレンジャーの一人である佐々木まき絵がやはりニヤ付きながら黒板を指差した。

と…

「な…っ？！！」

―オトナな彼女は彼氏のお陰？！―

そんな見出しの付いた報道部の号外が黒板の隅に貼り付けられているではないか。

件の号外には写真週刊誌宜しく望遠気味にフォーカスされている写真が掲載されており、申し訳程度のプライバシー保護の黒線が顔にかかってはいるのであるが、一目で中等部と解かる制服と、その長身と特徴的な髪型によってこの少女が何者であろうかは一目瞭然だ。

「いやぁ～…びっくりしたよ～…
あんなに仲睦まじく歩いてるもんだからさぁ」

等とデジカメとレコーダーを手にニヤリとする少女、報道部の朝倉和美が何時の間にやら後に立っていた。

説明する訳にもいかず、かと言って否定材料も少なすぎる。

何せ単なる道案内…の筈なのであるが、どういうわけか写真に映っている自分の顔は見た事も無いような笑顔を醸し出しているのだから。

おまけにその顔は、僅かではあるが赤いときている。

これでは否定すればする程泥沼になってしまうではないか。

油断も隙も無いテンションが異様に高いクラス…その事をスッパリと忘れていた楓は、この場を誤魔化す言葉を思いつけず、ここ麻帆良学園に来て初めて内心で慌てふためくのだった。

■二時間目：キセキの価値は？（前）

「あはははは……災難だったな」

「そう思うなら少しは助けて欲しかったでござるよ…」

恐ろしい質問攻撃に耐えに耐え、担任であるネギが何故かＨＲ前に出て行ってしまったしまったのを良い事に、彼女もインタビュー

攻撃を回避する為に一時間目の授業開始まで教室から逃亡していた。

が、そこは思春期のじょしちゅーがくせー。

異性関係に対しての好奇心に満ち満ち溢れた年頃だ。

授業中だろうが関係ないらしく、小さく折りたたまれた質問の手紙が飛礫宜しくあちらこちらから飛んで来る。そして案の定、一時間目終了と同時に和美を先頭に皆が駆け寄って来るではないか。

こりゃ堪らんと煙玉を使用してまたも逃亡し、二時間目と共に帰還するもやはり一時間目同様に質問飛礫が飛来する。

叩き落しても良いし無視しても良いと思われるだろうが、その場合は教師に見つかって理不尽な説教を喰らう可能性だってあるのだ。魔法教師ばかりが教科担当をしている訳ではないので味方をしてくれるとは限らないし、何よりこの学校にいる魔法教師の数も知らないし。

けっこーな精神疲労でぐったりさんな楓であったが、言わずもがな二時間目終了のチャイムと共にまた和美らは攻めて来た。

このままでは埒が明かないし、言って良い事と悪い事の境界線をまだ理解し切れていない事もあって、仕方なくまたしても逃亡し、屋上に撤退して三時間目のチャイムを待つ事となってしまったのだ。

昨日からペースが乱れっぱなしの彼女は、和美らから逃げるのに珍しく（というかこの地に来て初めて）気疲れを起こしていた。

ネギ少年をからかっていた時等は気にもならなかったが、いざ追いかけられる側となるとこうまで疲労するものかと今更ながら件の

コドモ先生に同情してたりする。

言うまでもない事であるが素人の少女らから逃げ切る事は楓の能力からすれば難しくも何ともない事だ。しかし、彼女らはこーいった事にはやたらしつっこい上、無駄に高い能力を発揮するとキている。

そこに来て自分の妹分二人が混ざっていた。

あの二人はこっちの行動範囲をほぼ全て知っている為、下手に逃げまわっても先回りされてしまうのである。

幸いにも屋上は捜索範囲から外れていたのか、途中で出会った龍宮真名からおやつのサンドイッチ（因みに甘いフルーツサンド）を分けてもらって何とか落ち着きを取り戻していた。

場所は校舎の屋上。
人気が少なく、人心地つけるには最適である。

……まぁ、時折吸血鬼の少女が昼寝してたりなんかするが楓はそんな事を知る由も無い。

ペタンと座り込んでいる楓の直横で、面白そうに笑いつつカフェラテが入った紙コップを傾けている真名。
彼女は相変わらずギターケースを肩に掛けており、何気なく腰を下している風に見えてはいるがその仕種には隙がない。

お互い、内に秘めている年齢度外視の実力を感じ取っているからか、逆に気が置けない関係を続けられている。

これは信頼し切った関係という意味合いが強く、決して二人が実力者同士なので隙を窺って攻撃する…という事ではない。ではないのだが…面と向かって勝負するほうが楽しいというニュアンスも見え隠れするのは仕方のない事なのだろうか。

とは言っても、完全に気を緩ませているわけではないし、そうかと思えば警戒を解いていない訳でもない。ただ単に脱力しているのみ。

いつでも緊急行動に移れるのは修業の賜物だろうが、それでも緊張感は無く穏やかな空気が漂うのみ。

ややこしいがこれが二人の間というものが上手くいっている証なのだろう。

そんな大人っぽい外見と空気を持っている二人であるが、それとは裏腹にこの二人はかなり甘党で特に和風デザートには眼が無かったりする。

その辺も気が合うのかもしれない。

「そういえば…お前も“裏”に関わってきたらしいな」

カフェラテを少しだけ口に含んでから、本当に何気なく問い掛け

る真名。
午後の天気を問い掛ける様な何気なさだ。
内心、楓は僅かに緊張したもののやはり肝が太いのか笑顔は変わらない。

「“裏”…とは何の話でござる？」

首を僅かに傾け、不思議そうな顔をするのも流石だ。
そんな彼女の肝の太さ…いや演技の上手さが面白かったのだろう。
くくく…と含んだ笑いを零し、真名は面白そうに楓の顔を真っ直ぐに見つめ、

「学園長から話は通ってるよ。
私も“そっち側”さ。信じていい」

と肩を竦め、初めてギターケースを肩から外して壁に立てかけた。

―信じていい―とは真名の言葉を信じろという事であり、友として信じろという事。
ギターケースを身から離したのはその証拠だ。
尤も、証拠を見せるまでも無く真名が友として信じろとというのだから、楓はそのまま信じているが。

ぱっと見は何の変化も無い楓の笑顔であるが、真名の言葉でやっ

と“本物の笑顔”に戻し、緊張を完全に解いてから了承の意を見せる。

「成る程…そちらも裏の裏に関わっていたでござるか。気付かなかったでござるよ」

こうなると日本茶で団子といきたいところであるが、ここにあるのはフルーツサンドと予備のサンドイッチであるハムサンド、そして砂糖が多めの激甘なカフェラテのみ。

嫌ではないが興が足りないというもの。

まぁ、甘味同好の士としても知られている真名の選んだ逸品であるから文句は無いが。

「裏の裏ねぇ…それはまた言いえて妙というか…」

確かに二人とも裏に関わっているが、魔法界が絡むと更に“別の裏”という世界がもれなく付いてくる。

真名は以前から身を置いていたのであるが、楓は今回から。それでも楓の実力は今直ぐにでも実戦に耐えられるほど。

気を凝縮して分身し、同時攻撃に入れる少女など魔法界でも相当珍しいのだ。少なくとも真名とて本気にならないと勝てる気はしない。よくもまぁ今まで裏に関わらず生きていたものである。

『ま、関わってきたら関わってきたで面白いのだがな…』

と内心、奇妙な笑みも浮かべている。
楓はそんな真名の心中に気付いているのかいないのか何時もの笑顔のまま。
笑顔でもって表情を読ませない少女に、真名は苦笑して紙コップを傾ける。

「それで？　あの男は何者なんだ？」

「はて、あの男？」

今日は何回彼の事を聞かれただろう。
またその話かとゲンナリしつつ何処までも惚ける楓。
無論、真名を相手に誤魔化し切れる訳も無く、微笑んだままじっと見つめている彼女に数秒と待たず降参し肩を竦ませる。
それでも学園長らとの“約定”もあるので異世界人という事だけを伏せて説明をした。

「まぁ一応、拙者のパートナーでござるよ」

と、極簡素に。

「ほぉ…」

感心するかのように眼を見張る真名。

真意は兎も角、納得はしてもらえた…と思う。

何せ嘘は言っていないのだし。

本当でもないが…

彼の実力はサッパリ解からないのであるし、“仕事”の打ち合わせ等は今日行うのだ。

楓の眼から見ても彼のその実力は推し量れない。

どーしよーもなく素人のようで、圧倒的に実力者のよう。事実相反する気配が彼の実力を覆い隠しているのだ。

普通は能力を補い合える者同志を組ませるものなのであるが、彼はその性癖により他の者と組ませる事は色んな意味で危険である。

彼が唯一食指を動かさなかったのは今現在解かっている中では男性教諭と楓のみ。

女性教諭（特に美形）を前にすれば脊髄反射で行動し、静止の言葉を述べる前に性犯罪ギリギリの行為（つーかズバリ犯罪）をかましてしまう。

では男性教師と組ませるのが良いのでは？　という話になるのだが、それだと彼のモチベーションが上がらない上、教師らの方も余

りに突飛な行動をかます彼に勝手が解からなくてヘマをする可能性だってあるのだし。

となると今のところ何故か息が合っている自分が組まされる可能性が一番高いのでは？　と、楓はそう思っている。

まぁ、実際に学園長はその気ビンビンだったのだが…

そんな楓の横で、顎に指をやって何やら考えていた真名は頭を上げて口を開いた。

「という事は、その男は魔法使いなのか？」

「は？　いや彼は魔法使いではござらんよ？」

真名の質問に唐突に何を言い出すのかという顔をするが、彼女の方も楓の返答に『はて？』と首を傾げている。

「じゃあ普通に仕事のパートナーという事か？」

「普通に…とは、どういう意味でござる？」

ああ、それは聞いていないのかと納得をし、真名は掻い摘んだ説明をしてやった。

彼女ら＜魔法界＞に関わる者から言えばパートナーとは魔法使いとその従者の事で、契約を交わした相手…魔法使いから魔力を与えられて身体機能を強化し、魔法使いを守って呪文行使を助ける存在である。

楓は突拍子も無い体術の使い手であり、氣の密度を操って戦える実力者ではあるが何の魔力も無い少女である。

だからパートナーと聞けば彼女の方が従者だと思うだろう。

「そーいえば…横島殿の戦闘スタイルは一体どんなものなのでござろう……」

気配を消していた楓に気付き、一種異様なまでの不死身さを持っている彼。

“氣”によく似て全く質が異なる霊力の使い手であり、それを用いて戦う…らしい。

今解かっているのはそれだけしかない。

前衛要員にしては動きに切れが無いし、後衛にしては頑丈過ぎる。となると考えられるのは諜報要員か？　しかし、昨日見ていたのであるがその足運びは一般人のそれ。

“向こう”ではこれが普通といわれれば納得するしかないのであるが、楓には彼の戦い方は全く想像もできなかった。

「何だ？　お前も知らないのか？」

「仕方ないでござるよ。会ったのは昨日が初めて故…」

呆れたような真名の声であるが、楓に出来る事は苦笑のみ。

しかし、改めて考えてみれば初めて会った相手をなんでこんなに自分は信じているのだろう？

実質、会ってまだ二日と経っていないのに彼に背中を任せる気でいるのだ。それは彼女でなくとも苦笑する。

そんな楓の様に肩を竦めてもう一度カップに唇を当てた真名であったが、

カチャ…ギィ…

と唐突に屋上のドアが開いた時に驚いて紙コップを投げ捨ててギターケースに手を掛けた。

これは楓も同様で、やや焦りつつ袂…というかブレザーの中…に手を入れ、クナイを引き抜いて身構える。

何せ幾ら和んでいたとはいえ、押し隠さねばならない程実力のある二人だ。飽く迄も気を抜いているだけで気を配る事を忘れていた訳ではないのだ。

だから周囲の気配を探る事を止めるような真似もしていなかった。
にも拘らず、ここまで接近に気付かなかったのだ。
それは確かに焦りもするだろう。

隠れる場所も見当たらない位置であるから楓は投擲の準備をし、
真名はいつでも抜き撃ちができるように身構え、その人物の次の動きを待っていると…

やがてドアが完全に開かれ、そこに見知らぬ男が姿を現した。

「あれ？　楓ちゃん」
「へ？　よ、横島…殿？」

……主に真名には、だが。

「な、に…？」

真名がよく見れば号外に映っていた男そっくり。
つーか、その本人だ。

彼女達の目の前には、今さっきまで話をしていた当人の、
この二人にすら全く気配を気取られずに屋上までやって来ていた、
何故か青い作業着に身を包んだ件の横島忠夫の姿があった。

話をしていた当の本人がやってきた事に焦っている楓は兎も角、

屋上に上がってきていた足音も無く、自分にすら気配を全く察知させなかった事に真名は驚きを隠せないでいた。

例え――

横島という青年が屋上に行く理由の大半が覗きであった為、ウッカリ気配を消す癖が付いていたり、

“勘”だけで覗きに気付ける雇い主の眼を掻い潜る内に神技に昇華していた隠行だとしても……

＊＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊

「用務員?!」

学園長から言われた仕事を聞き、何故か小豆色の小汚いジャージの上下を着、『臭』とかかれたタオルを首から掛けて見せた横島。

用務員とくれば“この姿”はデフォだろうと言わんばかりに。

下ひた笑みを浮かべつつ『この加藤(よこっち)めにお任せを……』とか言い出しそうだ。間違いなく極悪性犯罪者であるが。

「タイーホしてほしいのかの？」

「じ、冗談っスよ」

一瞬で衣装を元のTシャツとジーンズに戻す。言うまでも無くタネは解からない。

早変わりの妙と褒めてやれば良いのだろうか判断に困るところだ。

尤も、近衛としてみればこんなジョークをかましてくれる彼は好ましくて堪らなかったりする。頭の固い人間はちょっと苦手なのだから。

ここで帰る日まで雇われる事にした横島であったが、流石に無職では生きていけない。

学校に入学してもいいぞい…という申し出もあったのだが、何が悲しゅうて今更高校に通わねばないらないのかと言う理由で却下。

尚且つ入学するとしても教師ら全員一致の意見で男子校なのだ。

横島にとっては死刑宣告も同じだったし。

まぁ、学校生活と魔法（彼から言えば全てオカルトという括りであるが）関係とを両立できるほど自分は器用では無いし、オカルト全般がオープンの世界から来たので何時集団の中でボロを出してしまうか解からないというもっともらしい理由も一応は付け足してはいるが。

更に言えば、そんな地獄に通わせれば余計にフラストレーションが溜まってしまい、暴走した挙句に性犯罪に走りかねない。
悲しいほど自分を良く知っている横島は正確にそんな未来を予見していた（その事を学園長に告げると『確かにのう…』と即行で納得されて落ち込んでたりする）。

かと言ってヒモとして自堕落に住まわしてくれるほど学園長らも甘くは無いし、横島も期待はしていない。

となると仕事をせねばならない訳であるが、土地勘がゼロなので職の幅も狭くなってしまう。
どうしたものかと学園長に相談すると、

「用務員はどうかの？」

と言ってくれたのである。
それが初めに横島がウッカリ仮装してしまった理由だ。

無論、あの仮装通りの行動をとれば完璧且つ徹底的に性犯罪者だ。
痴漢行為で初の死刑が執行されかねない程に。

とは言っても、そんな画期的な死刑の例になる必要もないくらい、この男はチキンである。
何だかんだで女の子をそういった行為で泣かす事は論外中の論外の話なので、素でンな事できる訳ゃないのだ。

相手の年齢がストライクゾーン内であり、且つ相思相愛に加え同

意の上でのイメージプレイというのならまだしも……

それは兎も角として、再度同じ質問。

ついでに言葉の前に女子校のという単語を付け足して投げかけた学園長に対し、

「女子高の用務員?!　超ＯＫです！　天地が南北になっても拒否する理由はありませぬ!!」

と、横島は洗剤のＣＭ宜しく、輝く笑顔でその申し出を了承した。

コトが女関係の話である所為だろう。無声であるなら第三者が目にしてもイロんな意味で感動してしまいかねない素晴らしい脊髄反射である。

神の領域速度で頭を下げて契約書にサインし、母印まで押してしまう始末。

女に誑かされて　ものごっつ痛い目を見る典型的な男の姿だと言えよう。

だが、横島のその気色も即行で拭い去られてしまう事となる。

横島は何度も確認を取られ、更にその書類のコピーをもとられ、そのコピーの注意項目を読まされてからようやく事の重さに気が付

いた。

用務員として働く先は、女子“高”ではなく女子“校”で、尚且つ“女子中等部”だったのだから。

電話販売等の口頭詐欺の手口に引っかかったに等しいのだが、自分から進んで間違えたのだからどーしよーもない。

更にこれを拒否した時の罰則は、なんと男子校の用務員就任だ。

地獄の二者択一であった――

何せ女子中学生という微妙すぎる時期は横島にとってはストライクゾーンに入ってきたクセに顔面を直撃する殺人魔球（バッティング・インフェルノ）の様なもの。

受けるには痛すぎるし、見送るには惜し過ぎる。

そんな年齢の少女らの身近にいれば甘ったるい地獄で悶え苦しむ未来があ～ん♪と口を開けて待っている。

それでも甘酸っぱさから甘みを抜いた男子校（それもド汗臭い男子高校生）用務員生活は御免である。

二者択一の地獄。どっちをとっても地獄には変わりが無い。

だから彼は、“酸っぱいだけの地獄”よりも僅かでも潤い（女教師）のあるであろう“甘酸っぱい地獄”を選んだのだ。

“漢”らしいといえば“漢”らしいのだが……

こんな選択をさせるオニのような学園長は、同じ助平ぃ魂を持つ者同士のシンパシーを敏感に察知して彼の本質に気付いたのかもし

れない。

兎も角、横島は（表向き）用務員としてここ麻帆良学園中等部に就職できたのであった。

――その横島は今、両膝を付いて蹲るように打ちひしがれていた。

前にいるのは楓と真名の二人。

彼の心から溢れ出るのは嘆きの声。

はらはらと零れる涙は心の痛み。

彼のオーラからは絶望に程近い挫折が色濃く滲み出していた。

精神的に図太過ぎるこの男をここまで嘆かせるとは一体如何なる悲劇が襲い掛かったというのだろうか？

その悲しみの大元は彼の前にいる二人の少女――

今の横島より身長があり、“向こう”にいた同僚の巫女の女子高時代よりスタイルが良いときている。

彼の目測によれば８９．９ｃｍ。２０ｃｍもの差があるウエストから比較しても正に“ふぁんたすちっく”で“ぐ～れいとぉ”だ。ハーフである事も解かるし、黒髪ストレートロングのクールビューティーさも相俟って美少女ポイント（？）も高い。

これだけなら『眼福っ！！』と手を合わせて拝むのだろうが、世の中そう良い事ばかりでは無い。

「何でや……
何で二人ともそんなカラダしとって中学生なんじゃ～～～っっっ！！」

そんな血涙モノの悲劇が彼を苛んでいたのである。

――何の事は無い。

前日に楓に対して食指が動かなかったのは、彼の本能が楓の実年齢を敏感に察知しストッパーを掛けていただけだったのだ。

確かに楓は中学生っぽいデザインのブレザー姿ではあったが、ここに来て早々の横島は（楓のスタイルの良さも手伝って）それを中等部の制服としては見られなかったのである。

まぁ、初見で彼女らを中学生だと見破る事は難しいのだが。

ぶっちゃければ、昨日話をしている時とか、楓が醸し出すちよっとした仕種の中に可愛らしさを見出して萌えたりしたのだが、その事もダメージ拡大に拍車を掛けていたりする。

女子中学生に萌えてしまった…というのは、彼のジャスティス（ロリ否定）にはかなりの痛手なのだろう。

そんな横島の苦悶を見、

「あは、あはははははは……」

真名は珍しく大笑いし、

「あはは…」

楓も面白そうに笑っている。

二人してこんな笑いをするのは珍しい事だったりする。

「くくく……楓よ」

「ふふ…なんでござる？」

真名はチラリと楽しげな眼差しを横島に送り、異様に似合ったウインクを楓に見せた。

「実に面白そうな男と組んだみたいだな」

「少なくとも、退屈だけはしないみたいでござるよ」

楓もそれを受け、一層眼を細めて微笑みを見せている。

そんな二人の女っぽい仕種が余計に横島を追い込んでゆくのであるが…そんな事は知る由もなかった。

＊＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊

「ははぁ…それで用務員に」

「そーなんだよな……ああ、ここだここ。パイプの接続部が腐食しちまってる」

横島は楓と話をしつつ、排水管の修繕を行っていた。

普通、こういった事は専門の業者が行うものであり、横島のようなド素人が行うものではない。

だが悲しいかな丁稚としてこき使われていた頃の記憶は身に染み付いているのだろう、『やって』と言われば“出来てしまう”のだ。それもプロレベルで。

屋上から下まで溜まった水を流す排水パイプ。

その程度の修理等、彼からしてみれば食玩のプラモより簡単な作業なのである。

「それでさっきの女の子…真名ちゃんだっけ？　彼女も同じ…」

「そうでござるよ。

元々“裏”でそれなりに実力をもっていたようでござったが…

…まさか魔法の世界にまで絡んでいたとは…」

「物騒な話だなぁ……」

会話しつつも手は止まらない。

楓も手伝うでござると横島に申し出たのであるが、スカート穿いてるんだからと泣きながら土下座して懇願し、どうにかこうにか止めてもらっていた。

手伝ってくれるのは嬉しいのであるが、やたら短いスカートの中が見えてしまう可能性が高いし、横島の習性上、覗いてしまったり

する可能性も激高い。それでは即行でテンパってしまうからである。

尤もその直後、『中が気になるのならスカートを脱いで手伝うでござるよ？』と冗談をかまされ、コンクリートの壁にヘッドバットかまし続けて平静さを無理矢理保った所為で彼の仕事が増えてしまったのは甚だ余談である。

ドスケベな癖に妙に純情で変なモラルが高く、正直者である横島。

そんな横島にあたたかい眼差しを送っている事に楓自身も気付いていない。

何がそうさせているのかも。

真名はそんな楓の様子に気付いたからこそ、野暮な真似はよしておくとするよ…と転がっている紙コップを拾ってこの場を後にしたというのに。

中に詰まりそうな木の葉等のゴミを溝から掻き出し、ブラシで擦ってから腐食した吸い口を引き抜いて溝の水分を丁寧に拭き取って乾かし、これまた丁寧に防水パテを塗りこんでゆく。

まるで専門業者のように手早く丁寧だ。慣れとは恐ろしい。本人は嬉しくもないだろうが。

横島は真面目な顔をすれば実はけっこう良い顔をする。

そんな彼の横顔を何だか無言で見つめていた事に気付いた楓は少し焦ってしまった。

彼は別に気にもしていないようである…というか、春風の舞う屋上でミニスカートな制服を着た楓がしゃがんでいるので己のジャスティス（ロリ否定心）を守る為に必死こいて集中しているだけだったりするのだが。

「それで…記憶は戻ったでござるか？」

お互いを僅かにでも意識してしまった気まずさからか少し間を置いてしまい、その沈黙を誤魔化すかのように楓が問い掛けた。

言ってしまってから『しまった！』と思ったのであるが、

「いんや全然。

二十七歳だったっちゅー記憶というか、経験の“枠”みたいなモンはやっぱあるんだけど、その間の記憶がサッパリサッパリ……」

当の本人はあっけらかんとしていた。

二十七の彼がどんな生き方をしていたのか不明であるが、記憶喪失である事を気にもしていないのは謎のままである。

慣れている…といえばそれまでであるが、横島自身がそれ以外の要因を感じてもいた。

―思い出してもしょうがない―

何故かそんな気がしてならないのだ。

「帰る事を……その…諦めたでござるか？」

追い討ち掛けてどーするでござる？！　と心の中で自分をサンドバックにして憤るが、言ってしまったものはしょうがない。

記憶を失っているという苦痛がどんなモノか理解できる筈もないが、本人は苦痛を感じている筈。

いくら焦っているとはいえ、そんな事を平気で問い掛けてしまう自分の迂闊さに腹が立ってしまう。

けれどもそんな楓の葛藤など知る由も無い横島は、速乾性の防水パテのはみ出した部分を熟練の技で削ぎ取りつつ、

「いんや」

と全く気にもしていない軽い口調でそう返してきた。

「そう…で、ござるか…」

一安堵した一という想いが湧いた事には気付いたのであるが、そこに又も妙な焦りが浮かんでいる。それが自分でも理解しがたく何故だか歯痒くて堪らない。

楓は無意識にブレザーの裾をいじっていた。

「諦めてはいないけど、なんちゅーか…帰る事が出来ても帰れないよーな……」

「は？」

煮え切らない言葉を吐く横島に、楓は頭を上げて彼の顔を見る。
そして、その行動によって自分が俯いていた事を知ってまた焦る。

「いや、その、上手く言えないんだけど……
帰る方法を見つけられても、それは“向こう”に帰るっちゅーか…行く？　そんな感覚なんだよなぁ」

「？？？」

楓には横島が何を言わんとしているのか全く解からない。

尤も、横島にしても何が言いたいのかよく解からないのだが。

ただ解かっている事は、自分という“存在”が“ここ”に、この世界に定着しかかっているという事。

本来、異世界の存在である自分がこの世界の存在として再構成されているような気がしているのだ。

気がしている…とはいっても、それは心の奥から沸いてくる奇怪な確信だ。その事はまだ誰にも言っていないのであるが。

どう説明したものかと首を捻りつつも黙々と作業をこなしてゆく横島。

そしてその背を見つめ続けている楓――

三時間目の授業開始の鐘が鳴っても楓はその音色に耳を貸さず、横島が作業を終えるまでずっとそばに居続け、

意外にも最後まで真面目に仕事を続けている彼の背中から、何故だか眼を離す事ができなかった。

中編

「吸血鬼？」

「……でござるよ」

とてとてと連れだって歩く二人。

片方が女子中等部の制服、もう片方がやや汚れた青いツナギである事を除けば、デートの様に見えなくも無い。

年下である筈の中等部の少女の方が大人っぽいのが笑いを誘うが。

少女は片手に白い紙袋を抱き、そこから串団子を取り出しては口に運んでいる。よほど好きなのだろうか？　量としてはかなり多く、運動部の男子生徒の様。因みに奢ったのは横を歩いている男だ。

彼の方は時たま分けてくれる二三本を口にするだけ。それでも気にする風も無くそんな少女の様子を見、僅かに苦笑する。

けっこうな量があったのであるが、それをキレイに消費してゆく様は普段の少女の大人っぽさとのギャップが大きい。

それを目の当たりにし、やっぱりまだ子供っぽいトコもあるんだなぁと笑みが漏れたのだろう。

「む…？　何でござる？」

「イヤ別に」

少女から眼を背け、また少し微笑む。
そんなヘンな所だけ大人っぽい仕種を見せる彼に少女の頬が僅かに染まった。

桜の花が舞う小道を歩いている二人。

風に舞う花弁の間に見える男の横顔は、普段のおちゃらけた空気を感じにくくて妙に大人の男の顔をしている。
過去の一部を無くしており、尚且つ実年齢すら無くして十歳も若返ってしまったという信じ難い話を聞いてはいるのだが、何故だか少女はそんな戯言をあっさりと信じていた。

確かに普段の彼は異様に子供っぽく、やたら目敏く美女を発見しては熱過ぎる視線を送ったりしているのだが、時たま見せる所作や仕種には中高生の少年らには無い大人っぽさが窺えている。
少女はそれに目を引かれているのだ。

だから第三者的にはデートに見えているのだろう。時折、男に対して嫉妬の眼差しを送ってきているくらいなのだから。

尤も、大人の目からすれば学校を中途退学した青年に気を使っているデキの良い後輩の少女というシチュにしか見えないのであるが

……

さて、そんな二人であるが、早くも今日から“裏”の仕事……の様な物を任されている。

学園長からこの男を経由して少女が受け取った仕事は、今日の放課後に世界樹前に来て欲しいとの事。

元々、放課後にはこれからの仕事の事で打ち合わせをしようとしていたのだから丁度良いと言える。

その内容も、どこが仕事なのかと問われれば返答に困るのであるが、少女には凡その見当はついていた。

『恐らく、拙者らの力を図るつもりなのでござろうなぁ……』

自分にしても彼にしても、その持っている実力を学校側は知らないだろう。

元担任教師の男性は、彼女の大体の力量を見量っているかもしれないが、この男の方は全くの皆無である。

尚且つ元担任の性格からして、少女の力量を見て取っていたとしても一々“上”に報告すまい。良くも悪くも生徒の事を信用しているのだから。

となると、学園側としては一緒に仕事をするに当たってその力量を知っておく必要があるだろう。

呼び出された場所の広さからしてそれが一番可能性が高かろう…
そう少女は踏んでいたのである。

「ところで…いいの？　学校サボってオレに付いて来て……」

「横島殿がサボらせたような物でござるよ」

「な、何故に?!」

「はてさて」

結局、少女は仕事を終えた青年と共に学校を後にしてしまったのだ。事実上のサボりである。

用務員とは言っても、彼一人だけがそうという訳ではない。
この広い学園の事、たかが一人や二人の用務員で賄える筈もないのだ。
だから青年は十人からなる用務員の一人で、実は唯一の男。後はおばちゃんズで構成されてたりする。
この職場環境が彼にここを任せた理由の一つでもある（彼は後でものごっつ学園長を恨んだという）。

それは兎も角、本日の仕事の割り振りからして青年の仕事は午前中で終わってしまった。今回の件に関してはちゃんと『学園長に頼まれた仕事』という理由があるのだが、少女の方はばっちりサボリなのでバリバリに校則違反である。

表向きの理由として『身に覚えの無い男女交際の噂が授業中でも飛び交っている上、当の本人といるところを発見されてしまい本日は学び舎で勉学は不可能な状況となってしまったので撤退…もとい、早退する』との事らしい。学年の最下位ラインを競り合っているバカブルーが何を言うか…という話もあるが。

命を預けるパートナーとなる可能性が高い相手に、土地勘を叩き込む方が重要なのでござるよ…というのが楓の弁であるが何だか理由としては薄い。

まぁ、成績は悪いが出席率は良かった楓が何で簡単にサボりをしてしまったのかは彼女自身も良く解からないのであるが。

「それは良しとするでござる。
で、話は戻すでござるが、ここ桜通りには最近吸血鬼が出るとの噂が出ているでござる。
にも拘らず、学園側は拙者らに……」

「この件は担当者がいるから近寄らないように……か」

何だか少女に誤魔化されたよーな気がしないでもないが、その口から出た疑問は当然の事。

それはこの男が学園長から直接言われた“お願い事”である。
少女とこの男だけでは無く、それなりの実力者であろう魔法教師や魔法生徒らも近寄らせないよう言い含めているらしい。

「やっぱ変な話だよなぁ……」

「でござるなぁ……」

妙に意見がハモる二人。こんな事でシンクロしてしまうのもその仲を疑われる一因となろうのに……

それは兎も角、少女の方は“勘”から出た違和感であったが、男の方には明確な疑問があった。

「なぁ、ここってそんなに頻繁に吸血鬼が出るの？」

「え？　いや、拙者は桜通りの噂しか聞き及んでおらぬし、それ以外の話は……」

その少女の答えに男は首を傾げた。

無自覚であるが、真面目モードの彼は妙に魅力が上がる。だから少女も見直すかのような視線でもって見つめていた。

「う～ん…」

「どうかしたでござるか？」

「いやね…『プロを雇った』とか言ったんじゃなくて、あの爺さんは『担当がいる』って言ったんだよなぁ」

「それが何か？」

少女の疑問に男は「うん」と頷き、

「もし吸血鬼専門の人がいるんだったら、それなり以上に吸血鬼が出没しているって事になるだろ？
　でも噂が無いって事は今回の件に“だけ”吸血鬼が絡んでるって事になる。だったら微々たる戦力でも集めておくのが普通だろ？
　なのに…」

「その担当者“だけ”が事に当たる…」

「うん」

そう聞くと確かに疑問が湧いてくる。
初めて裏にかかわった事から得られる真実も多いのだが、寮内で噂の桜通りの吸血鬼は“実在する”というのには流石に驚いたが。

それでも青年の方はさして驚いていない。実際に闘った事があるという話を聞いた時には閉口したが。

「可能性としては他の吸血事件を揉み消しているとか、
　件の人物が相当の実力者だから足手まといとなっては困るから人払いを頼んでいる…でござるが」

「そう。だけど……」

「で、ござるなぁ…」

でもそれは納得できるよう組み立てた話というだけである。
男からそんな話を聞き、少女も何だか納得できなくなっていた。

いや――

少女の方には微かにとある仮説が浮かんでいたりする。

浮かんではいるのだが、直様『まさか』と否定しているのだ。

『流石にネギ坊主一人に任せる…なんて事はありえないでござろうなぁ……』と、実に常識的な事で。

う～ん…と二人仲良く首を傾げて歩く。

そんな二人だから交際疑惑も強まり、勘違いも進んでゆくのだが。

「ま、よく解かんねーけど、当面は近寄らない方がいっか。あの爺さんのコトだから何か企んでるだろーし」

だが、やはり彼はこーゆーイヤな企みを、“向こう”で『イヤっ!!』て程押し付けられていた男。
即行で思考をキャンセルし、見てみぬフリを決め込む事にした。

「……左様でござるな。君子危うきに近寄らずでござる」

「そーそー」

そんなチキン気味な意見に即行で賛同する少女。
臆病風に吹かれた…というのではなく、話に出てきた爺さん事、学園長に何かしらの企みがあるという部分で意見が合ったのだ。

そんなに面識がある訳ではないが、契約時に改めて裏の代表として会話を交わした折、相当に喰えない人物である事を感じ取っていたのである。

「ま、魔法に関わっているよーな都市だから監視の眼はそれなりにある筈だし、
楓ちゃんの友達の皆も寮なりそれなり以上のトコに住んでるんだろ？
だったら少なくとも未来の美女達は無事だってコトだしな」

「ま、そーでござるが…」

＜桜通り＞というところはここで生活をしている者達がそう称しているだけの桜小道だそうだが、学校からその寮への帰り道がそれにあたる。

わざわざ寮に侵入するとは思えないし、学園長の話に寄ればその寮には孫娘もいるという。
今までの認識なら兎も角、“裏”を知った今の楓もそんな寮に吸血鬼が易々と侵入できるとは思えなかった。

寮以外で生活をする者もいるが、そういった人間の家族は大体がここの教員だったりする。ここの教員ならば魔法教師である可能性が大きいので、闇に潜むのを常としている吸血鬼がそういった娘を狙って事を大きくするとは考え難い。アホタレな吸血鬼が居ないという訳では無いが…

まぁ、痺れを切らしたり飢えに耐え切れずに暴走しないとも限らないから、そこらだけは気をつけていれば良いだろう。

横島は軽くそう言って吸血鬼に対する興味を終了させる事にした。

それは彼女もそう思った事であるが、寮の近くでそんな事件が起こっていたとは思いも寄らなかった。

自分の知覚能力にそれなりの自信は持ってはいたのであるが、それに全くと言って良い程引っかかっていない。

という事は、相手は魔法とやらを利用した隠行の術を行使していたか、或いは途轍もない実力者という事。

相手に対する興味がわいた事もあり、ちょいと会ってみたいという想いも無きにしも非ずであるが、興味本位で動いて万が一寮の友人達…例えば同室の妹分らに被害が及んでは本末転倒である。

そんな事もあって青年の言葉に賛同しているのだ。

まぁ、何だかんだ言って彼が適切な判断を持っていた事に感心もしていたからであるが。

でなければ友人らの安全を守る為に見回りくらいやっていた事であろう。

「楓ちゃんもそのでっかい寮で暮らしてんだろ？　何か異変があったら気付いてる筈だしな」

「それを言われると耳が痛いでござるが……ま、そうでござるな。
でも一応はこの一件の片がつくまではもっと気を配るでござるよ。
幸いにも寮には中々の剣士と中々の拳士と中々の狙撃手もいるでござるし」

「………ナニソレ？」

思ってた以上に彼女はとんでもないトコに住んでいたよーである。
兎も角、そっちは気にしない事にして、サボりかました少女と共に指定された時間までブラつくという事を再開させた二人は、歩きながらどこに行こうかと話し合っていたのであるが、
その笑い合う会話からして、やっぱり傍目にもデートにしか見えなかったりするのだが、やはり二人は気付いていなかった。
そしてその構図が某パパラッチ少女を奮起させちゃったりする事も……

――

（中）

＜超包子＞

麻帆良に住む者でこの店の名を知らない者は居ない。

路面電車を改造したイギリス風＋中華の小奇麗でオシャレな店で、この都市内で一番の有名店であり、支店を出して欲しいとせがまれもしている部活動店だ。

無論、加入したいと申し出る料理人も多かろうが、まだ中学生だというのにこの店のオーナーである超　鈴音のお眼鏡に適う必要がある上、料理研究会であり、ここのメインの料理人でもある四葉五月に認められなければならない。

もしそれが適えば学園外でも其々が其々の持ち味を出した一級のレストランとして名を馳せる事ができるであろうが、今だにこの麻帆良学園都市内にしか店がない。というより、学園外に出たものはこの店の事はぼんやりとしか思い出せないらしい。

それでも、学園都市内だけ－という閉鎖空間内で午前中に店を任せられるスタッフを見つけられただけでも奇跡と言えよう。

そのお陰かどうかは不明であるが、店の周囲は治外法権的に平和である。

他の場所ならいざ知らず、ならず者一歩手前の気の短い大学の格闘団体の連中もここで騒ぎを起こしたりしない。つーか、やって可愛い料理長を怒らせる気もさらさらないし。

そんな事も知らない迷惑な行動をかます馬鹿共は常連客らの手によって叩き出されてしまう事すらあったりする。

それほど親しまれ愛されている店なのだ。この店は。

まぁ、オーナーもシェフも女子中学生というのがちょっち問題かもしれないが……

「昨日も感心したけど…ホントに美味いなぁ……
ちょっと中華に偏り気味だったけど美味いから気にならんかったし」

青いツナギを着た青年、横島忠夫もご満悦のようだった。

“向こう”での高校時代は赤貧に喘いでおり、職場で飯をたかり、学校では級友（注：イケメン）の弁当を奪っていた男だ。

おかずなし、飯のみという生きている時代を間違えていたよーな貧乏学生だった彼にとって、安くて美味い飯が食えるのは神からの施しに等しい。

成人してからの記憶は未だに曖昧すぎて思い出せないのであるが、染み付いた貧乏性は抜け切らないものなのだろう。

「それは重畳でござる。
なれど、完全に中華に纏まっている訳では無くメニューも豊富でござるから、別の日に行けば別の料理が楽しめるでござるよ？」

「お、それはいいなぁ」

何とも仲睦まじく見えるものだ。

楓は一人で食事をするのは味気ないと思っているし、横島の方はややストライクゾーンから外れたボール球の年齢とはいえ美少女と一緒なので料理の味も尚更だ。
それに何故だかベクトルが違う者同士の筈なのに微妙に空気が合っている。これで食事が楽しいと思わねば嘘だろう。

幸いにも彼は今朝は学園が用意してくれた朝食をおもっきり食っていたので、さして下品な仕種を曝け出す事もなく＜超包子＞で食事をし終え、店を後にする事が出来ていた。

「しかし……良いのでござるか？　拙者の分もまた奢っていただいて」

一緒に昼食を食べた後になって言う言葉ではないが、それでも一応この少女…楓も気にはしていた。

確かに横島は前金を貰ってはいるのだが、それは当座の生活費である。

尚且つ、確かに住居と仕事を与えてくれてはいるが“裏”の仕事が入らねば大した額にはならないのだ。

さっきは団子を奢ってもらい、今度は昼食である。流石の楓もちょっとは気にするだろう。

「ああ、気にするなって。ここを案内してもらったから、それのお礼だよ。

……それでも広過ぎてサッパリだったけどな……」

あれだけ歩き回って学園の端に辿り着けなかったのってどーよ…？　と、横島の顔に縦線が入った。

学園都市という名は伊達では無かったのだから。

こんなクソド広い学園内のあちこちを丁寧に説明してもらったのだから、彼の大原則『女の子の恩には恩で返す』を発動させるのは至極当然の事である。

彼が高校生だったあの時、学費だけは海外にいる親に出してもらってはいたのであるが、それ以外の生活費などは自力で稼がされて

いた。

もとより貧乏でケチ気味であった彼だが、それは生きる為には仕方のなかった事と言えよう。

単に彼が選んだ仕事場が余りに理不尽で労働基準法違反がフツーだっただけなのだ……その時点でダメダメであるが。

それでも熱過ぎるリビドーの指令のまま、時給僅か２５５円でバイトを続けて生きていた彼のド根性は昨今の青年など足元にも及ばない。

その苦学生さは、月一回の牛丼に卵を付けて食べるというのがご馳走だったという事からも見て取る事が出来る。

彼はそんな涙なくして語れない苦労生活者だったのである。……まぁ、そのド苦労も僅かな給金の大半をＡＶとかに消費していた為であるが……言わぬが華だろう。

その事からも解かるように、今の生活レベルは学生時分より遥かに水準が高い為、宵越しの銭は持たない主義の横島はストライクゾーンを微妙に外している年齢とはいっても相手は高レベルの美少女であったから反射的に奢ってしまったのである。

何せ彼は煩悩を力の源とする怪奇生物といえる霊能力者だ。

先行投資だと思えば毎日の食事を１００円ショップのカップ麺で賄うハメに陥ったとしても痛くも痒くもないのである。流石は命とリビドーを天秤にかけられる“漢”だといえよう。

懐が（彼からすれば）スゲく温かいので、あはは……と軽く笑える余裕すら見せている。

そんな横島の顔を見、楓も安心して奢りを受け入れて彼と並んで通りを歩き出した。

桜の花びらが何処からか舞い降り、楓の髪にかかる。
年齢相応の童顔さを持ってはいるが、醸し出している雰囲気が妙に大人っぽい。
甘い物を食べている時などは本当に中学生なんだなぁと改めて感心させられたりもするが、こうして並んで歩いていると高校時代の同級生よか大人っぽく感じたりもする。

しかし向こうの生活を“懐かしい”と思ってしまうのはどういう事なのか？

物理的に言えば“向こう”から来てしまって二日と経っていないのに、彼の心が感じている別離時間は十年どころではなかった。
それに、記憶が抜けてしまっている部分が肉体時間すら蝕んでいる。その事はここに来て直に気付いてはいたが。
何せ時間にして十年分、記憶どころか経験すら横島の身体から抜け落ちてしまっていたのだから。

理由としては彼の最大の隠し技である“珠”。

それを制御する記憶すらごっそりと失っている事が挙げられる。
僅かに残った記憶が本当ならば、自分は最大十数個の“珠”を同時制御できていた…筈だ。

だが、今の自分は最大三個。
確かに漢字というキーワードを込めれば良いのだから、三つの組み合わせでも凄まじく多様だ。

だが、3と15の差は凄まじく大きい。

これでは高校卒業手前くらいの時の能力しか出せやしないでは無いか。

彼とてこの二日ボ～っとしていた訳ではない。

件の“珠”まで使用して卒業してから成人までの記憶を引きずり出そうとまでしていたのである。

だが、何度やってもどうやっても、本当に切り取られているかのように記憶が浮き出てこないのだ。存在していないものは返ってこないとでも言わんばかりに……

流石の裏技師の横島でもこれではどうしようもない。

だがしかし、それより何より問題なのは、元の世界を“向こう”だと認識してしまっている事。

つまり、自分の居場所を何故だか“こっち”だと認識してしまっている事なのだ。

これでは例え元の様な能力で“珠”を多重連結させて使用した所で“帰る”という強い想いが持てないし、無理に“向こう”の世界へ“行く”という気になれないので成功する率は酷く下がってしまう。

―ひょっとして、“こっち”にオレという存在が固定されてしまっているのか？―

そう悩まざるを得ないのが現状である。

簡単な距離…とは言ってもキロメートル単位…ならば『転』『移』できるし、拠点設定をしていれば『帰』『還』も可能だろう。

だが、全くの異世界である上、“向こう”に対する望郷の念が異様に薄い以上、『帰』『還』は叶うまい。

「…一体、どーすりゃいいんだろうな…」

決して暗さは持っていないのだが、そう溜息混じりに呟いてしまう横島。

そんな彼の横顔を、楓は無言のまま見つめ続けていた。

麻帆良という地にいれば否が応でも目に入るものがある。

それが一世界樹一

その世界樹の真ん前、

正式な名前は知られていないが、都市の中央部にはその名でもって親しまれている世界樹前広場があった。

遠目で見てもデカイ樹であるが、ここまで近寄ってみると理不尽にクソでかい樹である事を思い知らされてしまう。

麻帆良学園の屋上からこの樹を眺めた時には、『ふぇ～…“こっち”じゃあ、あんなにでっかい樹も生えてんだ…』等と感心した程度であったが、ここまで間近に寄れば、

「なんじゃこりゃあ……」

と呆れてしまうのも無理は無い。

世界樹だと言われている事からも解かるように、その樹はそこらの大木なんぞ足元にも及ばない高さと大きさを持っているのだから。

何せ大きさ高さ、太さは縄文杉すら追従も叶わず、その樹齢も測定不能である。

この学園が創立する以前から生えているとの事であるが想像も出ない。

それどころか何の樹であるのか植物の特定すら難しいのだ。

その樹高、実に２７０ｍ。ギネス間違いなしである。

セコイアもびっくりの樹高を持つ広葉樹。

ナメとんか？！　と言いたい横島の気持ちも解かるというものだ。

「……コレ、何？」

呆れつつも眼が離せない横島は、後にいるであろう楓にそう問い掛けた。

初めてこの樹を見るものは感心する事は多いがここまで呆れる者を見たのは楓も初めてである。

尤も、その彼女も改めて疑問を投げかけられて初めてこの樹の異質さに気が付いていた。

ここに住んでいるものは誰もこの樹の異様さを気にもしていないのだから。

これも魔法の力なのでござろうか？　と都市そのものにすっかり誑かされていた自分に苦笑しつつ、時には案内係も勤める散歩部の部活宜しく彼に説明をしてやった。

「これがこの学園に住まう者なら誰もが知っている世界樹でござる。

一見すると解からんでござろうが、話によれば薔薇科の落葉小高木と同じ形状の葉…

要するに“桃”と同じ葉の形をしてるでござるよ。

拙者も実が生っていたところを見た事はござらんが、噂では二十二年に一度しか生らないとの事でござる」

勉強はスカであるのに、こういったことには詳しい楓。

未だに楓がバカレンジャーである事を知らない横島は、ガイドさん宜しく解説してくれる彼女の言葉に素直に感心するのみだ。

「正式名称は『神木・蟠桃』というらしいよ？　尤も、もしそうなら九千年に一度しか実が付かない筈だけどね」

そんな二人の後から声がかけられた。
え？　と振り返るとそこには見知った顔。

「えーと…高畑さん？」

「タカミチでいいよ。横島君」

ほんの昨日、横島の事情聴取を行っている穏やかな雰囲気の高畑・T・タカミチが何時の間にか後に立っていた。

「蟠桃…でござるか？　なにやら聞いた事があるような……」

そんな彼の気配を既に気付いていたのか、楓は然程気にもせず彼の言った名前の方に気をやっている。
相変わらず成績は悪いのに知識だけは豊富なんだなぁ…と元担任は口元を緩め、

「ホラ、西遊記に出てくる孫悟空がいるだろう？　彼が天界で食い荒らしたっていう果実さ」

「……ああ、確か中国の神話でござったな。
九千年に一度その木に実る桃を食えば不老不死になるという…
…」

「そうそう。それだよ」

楓が樹の事を思い出して口にすると、高畑はこの知識が成績に出ればなぁ…等と苦笑していた。

と――

「そーか……あの猿ジジィ…この樹の実を食いやがったのか」

等ととんでもないセリフがすぐ近くから聞こえてきたではないか。

二人がギョッとしてその方向を向くと、相変わらず樹を見上げている横島の姿。

そう言えば彼のいた世界には神々や悪魔がそこらで見えたという。

となるとまさか…

冷や汗を流しつつ二人が横島に問いかけようとした時、

「おお、もう来ておったのか」

という老人の声がそのヤな重さの空気を拭い去った。

「あ、福禄じ……じゃなかった、学園長」

「フォフォフォ…どーでもよいが、なんでそーそう気安く七福神と間違えるんじゃ？」

「あ、いや、その…以前、宝船ジャックしかけた時にあのじーさん達と会ってるモンで…」

「「「……」」」

折角拭い去れた空気がまた重くなった。

特に高畑と楓の冷や汗は余計に冷たくなり、さっき感じた疑問を無理矢理心の奥に鍵を掛けて閉じ込めたほど。

何にせよ横島忠夫は只者では無い。

その事を再確認させられた一幕であった。

世界樹前広場という場所はけっこう開けている。

まぁ、これだけドでかい樹が生えている広場も珍しいのだが、樹に比例して広場が開けてゆくのは当然の事であり、その広さを利用した様々な催しも執り行われるほど麻帆良では慣れ親しまれた場所である。

尤も、

「拙者ら以外に人影が無いというのは結構不気味なものでござるな」

人っ子一人いない状況は流石に珍しいが。

「あぁ、人払いの結界を張ってるからね。
無意識にここに来たくないように認識させているんだ」

「…なんでもアリだなぁ」

横島の世界からすれば結界で人払いをかけるのは結構珍しい。
“こちら”は魔法等の所謂“オカルト”が秘匿なので然程珍しい方法でもないのだが、彼のいた世界ではかなりオープンなのだから。
無論、『無い』という訳ではないが彼自身は知らない。

「で、ここで何の話をするんスか？」

ぐるりを見渡して人目が無い事を確認しつつ、横島が近衛にそう問い掛けた。
楓は気付いてはいなかったが、自分ら以外の気配は全くないのに視線を感じているからだ。

「うむ…実はの、キミの実力の程を知りたいと思うてな…
いや何、難しい事では無いぞえ？　そこの長瀬楓君と組み手を
「大　却　下　！！！」」

近衛の言葉は途中でイキナリ横島の声に瞬殺されていた。
最後まで言わさぬ横島も大した者である。

とは言っても単なる手合わせであり、これからの仕事には必要なもの。
だがそれでも、楓からすれば『やはり…』といったところなのであるが、横島から言えば論外であった。

「如何な理由があろうと美少女に手ぇあげられるかーっっ！！！」

これが横島いう所の＜正論＞なのだから。

その叫びに高畑は苦笑し、近衛もフォフォと笑っている。
横島の人となりはある程度理解していた二人であるが、真顔でそう叫ぶ彼には前より好意を持ってしまう。
隠し様も無い彼の本音であり、想像していたよりお人好しさに満ち溢れていたからである。

だが、この答にむっとした人物もいた。
確かに彼女の好感も高まってはいたのだが、

「…それは聞き捨てならないでござるな…」

それとこれとは話が別だったりする。

「へ？」

見慣れた穏やかな顔。穏やかな表情。
だが、明らかに彼女が纏う空気が凝固している。

「拙者、確かに拙い技しか使えぬとはいえ、それなりに修業してきたつもりでござる」

「は、はぁ…そーみたいだけど…」

すぅ…と細められた目元から針のような光が見えた気がした。

（マ、マジに怒っていらっしゃる？）

と訳が解かっていない横島はかなりビビッていたし、近衛は今更ながら押し隠していた楓の実力を垣間見た気がして感心していた。

「その拙者に対してそういう態度を取られると…拙者は見下された気がするでござるよ……」

『ま、そうだろうね』

高畑もその気持ちは理解できる。

確かに横島の気も解からないでもない。でもないのだが……

自分の実力にそれなりの自信を持っている相手にああいった事を言うとそれはプライドをかなり傷つける事となる。そしてそういった相手はほぼ間違いなく不快になる。

それは自分もよく思い知っている事だ。

ふと、今もログハウスに住んでいる旧知の少女を思い出し、苦笑が浮かんだ。

彼女もこういった場合には途轍もなく激怒するだろうから。

睨みつけると言うよりは刺す様な視線。

熱さより冷たさが強い怒気。

確かに楓の言わんとする事は解かる。

解かるのだが、

「あんなぁ、楓ちゃん……」

横島には横島なりのジャスティスがあった。

「自分より百倍近く強い女の子にすら手ぇ上げても九割九部九厘＋α殺しの特別折檻セールを喰らってたオレにそれを言う？」

……訂正……

トラウマだったようだ。

「「「は？」」」

横島の口から切実な…

本当に切実な声が噴き出ていた。

気の所為か、その眼からも心の汗もはらはらと流れて出ているような……

その理由を語る為にも、ここはあえて例え話をしよう。

例えば――そう、仮に“蝶の化身の魔族の幼女”がいたとしよう。

その娘の事は嫌いじゃないし、どちらかと言うと妹の様に可愛いと思っていたとしよう。
が、あんまりじゃれ付いて邪魔をしたりするもんだから、ちょいと……本当にちょっとだけ。例えるなら『ダメじゃないか。メッ』という程度に手を上げてしまったとしよう。

すると、

「こんな小さな娘に暴力をふるう気ですかー?!」

と、姉を失った寂しさからしょんぼりしていた彼女に保護欲を刺激され、禍根も何も忘れて大切に教育している竜神族の剣士に理不尽な折檻を喰らっちゃうのだ。

ぶっちゃけて言えばその幼女の力は丼勘定せずとも自分の霊力はおろかその保護者&師匠をやっている竜神族の剣士よか高い。
天界側の霊山預かりとなって力を押さえられてなお、その力は横島を凌駕しまくっているのだ。

全力パワーで殴っても痛みこそ与えられるだろうが傷どころか痣もできないだろう。それでいて軽い教育的指導でも全殺しにされてしまうのだから理不尽極まりない。
尚且つ、自分が絶対に勝てないと胸を張って言える超存在……己のかーちゃんの教育と、無駄にスゴイ父の教育が隅々まで行き渡っている上に、女の子に暴力を振るえないのである（注：セクハラは別らしい）。

まぁ、そんな目に合わさずとも彼自身が優しいので女子供に対して意味も無く手を上げられないのであるが…それは兎も角、

そういった理由もあって、喩え自分より実力があるであろう楓にすら組み手すら行えないのである。

実際、弟子である人狼少女にすら霊波刀で斬り結ぶ事すらできなかったのだし。

……尤も、ある事情によって前以上に嫌いでない女にも手を上げられなくなっているのだが……

兎も角、そういった説明を終えると流石に楓も、

「それは…難儀でござるなぁ…」

怒りの矛を僅かに下げてくれた。

確かに彼の力量は解からないのだが、ＤＮＡに性質を刷り込まれているような物。これでは楓が敵でない限り試合もできまい。

「完全に敵だった場合は何とか戦えるんスけど、敵だと思って…はムリっスね……」

女の子が憎っくき野郎に化けていた場合等であれば反射的に攻撃できたりするが、残念（？）ながらこっちの世界にはキザなロンゲ男はいないし、近衛らも彼奴めの外見も存在も知らない。
最初から楓が男に化けて横島に攻撃でもしていたとすればまだどうにかなったかもしれないが、今となっては……

かと言って、これからの為にも二人の力量を自分らを含めた“皆に”見せておく事は必要である。

う～む…どうしたものかのぉ…と近衛が首を捻っていると、ポンっと楓が手を打った。

「そうでござる。組み手が無理ならば、ゲームはどうでござろうか？」

「は？　ゲーム？」

横島が怪訝な顔をして問い返すと、楓はそうでござると頷いた。

「ルールは簡単でござる。
横島殿が十分以内に拙者にタッチすれば横島殿の勝ち。拙者が十分以内に横島殿を倒せば拙者の勝ち。
どうでござる？」

「どうでござる？　…って、マテや！！　可愛い顔しても誤魔化せへんぞ！！」

可愛いと言われてちょっと照れる楓であるが、横島は半泣きだ。

「それって、つまり楓ちゃんはボコスカ攻撃してくるけど、オレは只ひたすら避けまくるだけやん！！
　日本語で圧倒的不利っちゅーんじゃ！！」

「気の所為でござるよ」

泣きながら反論する横島であるが、かなり中身は薄い。
どこかでそれが一番だと解かっているのかもしれない。

近衛や高畑なども、それはいい案だと納得しているし。

確かに美少女を殴る事はできずとも、美少女に殴られる事には慣れている横島には一番楽な方法であろう。
そんな事を悦ぶ新しい自分に目覚めたくは無いだろうが

相変わらずギャーギャー言っている横島にも楓は慌てず騒がず、

「まぁ、待つでござるよ横島氏（うじ）」

「誰が横島氏だ！！　お前はハッ○リくんか！！」

はっはっはっ…と笑いつつ右手の指をぴんと立て、

「拙者はゲームだと言ったでござるよ？」

「む？」

「横島殿が勝てば、拙者は知り合いの…そうでござるな同級生のお姉さんを紹介するでござる」

「何と？！」

「無論、デートの約束込みで」

「ぬっ？？！！！」

「その際、どこまで行くか……それは横島殿のご自由でござる……」

近衛と高畑の目には何だか楓の腰の辺りから悪魔チックな尻尾が生えてピコピコ動いているように見えて冷や汗を流していた。

正に悪魔の取引である。

だがしかし！！

彼は、痩せても枯れてもＧＳ横島忠夫だ。

異世界に来、仕事を失ってしまったとは言え、彼は簡単にそういった悪魔の取引に、

「良し！！　受けた！！　掛かって来い楓ちゃん！！！！！」

……逆らえる筈もなかった。

その男としての性の発露に、同性である高畑も近衛も涙を禁じ得なかった。

羊皮紙にサインをさせた事を満足する悪魔宜しく、あいあい♪と嬉しげに頷く楓。正に悪魔。

何だかよく解からない気炎を上げる横島の背を見つめながら、近衛と高畑は只々冷や汗の量を増やしてゆく。

「……のぅ、タカミチ君…」

「…はい？」

「楓君は…自分が勝った時の横島君のペナルティを口にしておら

んのぅ？」

「ですね…」

横島の気性を読み、先に彼が飛びつく報酬をチラつかせて自分のペースに引き入れた楓。

まだ少女であるはずの彼女の中に、男では計り知れない女という生き物の一端を垣間見せられた大人二人は冷たい汗を拭う事もできずにいた。

気合を入れ、煩悩パワーでもって霊力を上げてゆく横島に感心しつつも、自身は身体から力を抜いて戦いに備えてゆく楓。

何にせよ、

この場には居ない魔法教師らも見守る中、横島と楓の戦いが幕を開けたのだった。

後編

中身は二十代後半、外見年齢は十代後半。
十年も肉体が若返った理由は全くの不明で、その間の記憶の大半も失われているので便宜上“青年”とされている彼。

昔っから脊髄反射で行動しており、特に中高生の時のリビドー反応は人外すら驚かせていた。

尤も、そのオカルトという世界に関わったのも能力の覚醒も、その始まりはセクハラ行為が一番酷かった高校生の時で、そのセクハラ…つーか痴漢行為…のお陰でオカルトに足を踏み入れ、その世界でも名が知られるようになったのだから世の中ナニが幸い（？）するか解かったモンじゃない。
結果としてそれで世界が救われたのだし……

当然ながらそんなワイセツ少年の犯罪がそのまま捨て置かれる訳もなく、喰らわされるお仕置きもかなりエスカレートし、日常的にバイト先の上司に撲殺されかかり、とある猿神にも『ワシの修業よりキツい』と称される目に遭っていた。酷評もいいトコで嬉しくも何ともないが。

流石に二十代の後半ともなると僅かにラインを見極める能力を身

につけており、やや生臭い言い方をすれば、“女”を知ったお陰で青臭い十代の時よりはがっつかなくなっていた。
まぁ、スケベレベルと煩悩レベルが下がった訳では無いが。

そして今の彼――

確かに記憶（経験？）消失ではあるが、人間的な本質が消えているわけでは無いので性格はそのまま。
メリットとして、十代の頃の柔軟さと真っ直ぐさ、二十代の大人の落ち着きと判断力を持ち合わせている為、外見年齢度外視の駆け引きに長けた能力が備わり奇妙な魅力を漂わせている。

元々から人外堕としとか、人外ハンターとか言われていたくらい人間以外の女達を無意識に篭絡しまくっていたし、人間の女性にしても彼の本質に気付けばメロメロになってしまう。
それのパワーが少し上がったようなものである……ハッキリ言って厄介な事この上もないのだが。その自己評価の低さから本人は信じてくれないだろーけど。

しかし、その魅力の素となる記憶消失によるデメリットは無茶苦茶大きかった。

二十代の頃の霊能力の使い方をすぽーんと忘れている上、記憶“消失”なので思い出す事は不可能。

何かの能力が使えた――という記憶だけは残っているから歯痒い事この上もない。

だが一番の問題は……

十代の頃の煩悩と妄想力、二十代の頃の欲望とみょーなテクニックが混じり合った状態でしっかりと根付いているという事である。

現に彼は交渉術に長けており、海千山千の猛者どもと対等に会話し、自分らに有利になるように会話を進ませられていた……筈だった。

しかし、何とも稚拙な少女の申し出――女の子を紹介するといったアホタレな材料に一も二も無く飛び乗ってしまっている。

言うまでも無く交渉材料が不十分であり、例えれば場の捨て札も見ず、相手のカード枚数も手札も想像する前の状態でウッカリ勝負に出たようなもの。

アホの見本である。

まぁ、何時もの大失態に比べれば、ルール“だけ”でも聞けていたのでナンボかマシであろうが……

世界樹と呼ばれている巨大な樹の前の広場。

人払いの結界が張られているその広場の前に二人は対峙していた。

少女はさも嬉しそうに。
青年は自分のスカタン具合に落ち込みつつ。
ただ少女の出で立ちは中学の制服。
青年は青い作業服。戦いに不似合いなのも甚だしい。

「ちょ、ちょっとタンマ！！　せ、せめて制服はやめてくれんか？」

「ほぉ…脱げと仰られるでござるか？」

「ちゃうわーっ！！！
ンな格好で動き回ったらスカートめくれるやろがっ！！
女の子なんやから慎みっちゅーモンもちなさーいっ！！！」

萌えたらどーしてくれるっ？！　という心の声は内緒だ。

「まぁまぁ…模擬戦とはいえ戦いの場でござる。
本格的に裏の戦いに関わった折、羞恥に拘っていては怪我をしてしまうでござるよ」

「い、いや、そりゃまぁ、そーだけど……」

結構、正論だ。
こうなると反論が難しい。
二人の試合を見守っている魔法教師らも、何だかんだでモラルが

あるんだなぁ…と変に見直してた。

尤も、青年はミニスカートの少女が動き回る事態にやや喜んでたりする自分の本音を理性を総動員してフクロにしていたりするが。

「ま、それで納得できなければ、こーいった衣装も術の内と思ってくだされ」

これも策でござるよ？

そう後を続けてニンニンと微笑む少女。

「ぬぅ……」

そんなコドモの魅了に引っかかるもんかっ！！　と強く言い返せない自分がイヤ過ぎる。

かと言ってせめて戦闘装束に着替えろとか言うと、この少女の事だ。何だか露出が多いのをわざと着てくるに違いない。

「解かっているでござるな。ニンニン」

「心読むな――っ！！　泣くぞ――っ？！！」

何とも気が抜けるやり取りであるが、こんな会話を続けつつ少女

は氣を練り続けていた。

元担任の教師は、相手とやり取りをしつつ隙を窺って氣を高めてゆく少女の狡猾さに舌を巻いていた。それも掛け合いとか間の取り方で相手の気勢を削いでいるのだから始末が悪い。

『やれやれ……彼女が言っていた通り、厄介な子だなぁ……』

こちらの仕事を手伝ってもらっている狙撃手の少女。その彼女から予め聞いていたとはいえ、思っていたより戦いというものを解かっている少女には只呆れるばかり。

『さて…キミはどうするのかな？　横島君』

期待を感じる。
そして好奇心も。

彼がどう出るか、そしてどう戦うのか。
異世界で培った技を見せてくれるのか。

対峙している少女同様、彼もまた青年の実力を楽しみにしているのだ。

「もういいかな？」

ス…と手を上にやり、そう口に出す。

「あい♪」

「ううう…し、しゃーないなぁ……」

二人の返事も対照的。

ノリノリな少女と、何だか肩を落とした青年。

それでも期待感は下がらない。

何故なら、あれだけの気が抜けるやり取りをした後なのに青年に隙が無かったからだ。

「それじゃあ…始め！！！」

手を振り下ろすと同時に放たれた元担任教師の言葉に少女が動いた。

同時に青年も。

だが、青年が動きを行動に転ずるその直前、

「忍…っ」

少女の中で組み上げていた術が開放され、実体を持った分身が出現すると、

「は、反則じゃ――っ！！」

流石に彼は泣いて大後悔したという。

――Ｗｈａｔ'ｓ ｄｏｎｅ ｃａｎｎｏｔ ｂｅ ｕｎｄｏｎｅ…。

後悔先に立たず。

やっぱ昔の人は偉かったんや…。

デートというエサに喰らい付いて死線に飛び込んだおバカさんは、意味も無く英語で諺を思い浮かべ、その意味を噛み締めさせられていた。

■二時間目：キセキの価値は？

（後）

直線的な攻撃と、しなやかな攻撃。どちらが有利かというとこれは実は難しかったりする。

確かに勝負事となれば直線的な攻撃はしなやかさに負ける事は多い。

格闘戦ともなればそれは如実に現れてくる。

如何に破壊力があろうとも、踏み込まれて避けられたり、関節技の様なものを喰らう事すらあるのだから、巻き取られれば一巻の終わりなのだ。

尤も、

「あんぎゃーっ！！」

存外の速さを持っていれば直線的な攻撃は破壊力がある分、何の問題もなかったりする。

ごっつしょーもない理由で何度も死線を渡り、その果てに会得した勘だけでの超絶回避。

その神技は二十代どころか十代の後半にはほぼ完成形を迎えている。

それが無ければ一秒も待たずに意識は刈り取られていたであろう。

まぁ、見た目は異様に見苦しいが……

風を切る音すらなく無音で迫り来る氣弾。

その軌道に背骨をへし折るように身を伏せて避ける様は正に妖怪変化。幾分控え目な言い方をしてもゴキブリだ。

だけどそれでも完全回避ができるのは感嘆の溜息が零れそう。

尤も、息を吐く間もないのだけど。

「うわっ?!」

一撃を避けた地点。
避けられる事を前提として放たれた訳でもないのに、恐るべき直進速度でその避けた地点に、ドドドッと三方向から同時に放たれた氣の塊が集中する。

「のわーっ!!」

だが、信じ難い事にそれでも彼は回避していた。
直前の氣の塊をゴキブリの様に這いつくばって避けたまでは良かったが、避けた場所に襲い掛かってくる三つの氣には涙がチョチョ切れる。
とはいえ、この程度を避けられねば彼の名が廃るというもの。
バネ仕掛けの人形のように跳ね起きて一発目を避け、そのまま海老反って二発目を回避。芋虫ゴーロゴロと転がって三発目すら完璧に避け切って見せた。

「おおっ♪」

語尾の音符をハートマークに変えても良い程嬉しそうな声で、四体に分身した楓が追撃に入る。

「おお…ぢゃねー！！　ちったぁ手ぇ抜いてくれーっ！！」

はっきり言って、見るに耐えない程の無様さであるが、彼の回避技能は正に神の領域。本物であった。

「はっはっはっ…そんな失礼な事は出来ないでござるよ」
「貴殿の実力…かなり見誤っていたようでござる」
「まさか掠りもしないとは思わなかったでござるよ」

それぞれが適当に喋る様は滑稽であるが、それ故に恐ろしい。

「ニンニン♪」

ビンッ…と弦を弾く様な音を立て、楓女の右手の指の間に挟んでいたクナイが青年の顔面に襲い掛かってくる。

「ちょ、まっ！！」

完殺の気すら感じられる投擲であるが、実はこれフェイント。
本命はそれより僅かに遅れて分身らが投げた黒い釘にも似た棒手裏剣だ。三方から同時に投擲されたそれは、クナイを回避すると思

われた位置を予測して投げられている。ぶっちゃけて言うまでもないが“やりすぎ”だ。

避ければ死んじゃうし、避けないと死んじゃう。

どっちにしたって死ぬやんけ！！　と叫ぶより先にどちらか…いやクナイが先か…が突き刺さるだろう。

ただ楓は横島が黙ってそれを受けるとは微塵も思っていない。

ある意味究極に近い信頼である。

無論、彼女の高い信頼を受けている横島もウケを狙って当たってやる義理もない。

しかし、只黙って回避しないところが彼の良いところ（？）だ。

まずクナイを後ろに飛んで避ける。

だがそうすると頭部目掛けて真横から飛んで来る棒手裏剣に対応できない。ハズだ。普通なら。

何せこの男、元より生き汚い事では元上司に匹敵する。

つまり、助かる為にはどのような理不尽な事だってして見せるのだ。

つまり……

がちんっ！！　と響く金属音。

何と彼、棒手裏剣を歯で噛んで止めたのである。

無論、毒なんかが塗られていたら堪らないので直に顔を振って飛

ばし、ついでに唾もまとめて吐いておく。
もし付いていたとしても即効性のものでない限りはマシだろう。
まぁ、万が一の場合でも解毒が出来ないわけでもないし。

「お～♪」

思わず拍手でもって感心する楓。いや、楓の一体。
無論、それで攻撃の手も止まる訳がない。幸い少女は数が揃っているのだし。

その横島の顔面と腹部に少女二体の拳と膝が迫る。

「ふがーっ！！」

頚椎の仕組みを医師が本気で悩んでしまうであろうほど彼は首を真横に倒して一撃目を避け、まるで器械体操の選手のように腰を跳ね上げ前転しつつ腹部を狙う膝を避けた。

と、それだけでは終わらない。

何を思ったか、着地した瞬間にはロケット花火宜しく跳ね飛んで一気に距離を開けた。
直後、彼が居た地点に氣の塊が直撃し、固い敷石が粉々となる。

「し、死んでまうわーっ！！」

涙眼…というより、完全に泣き顔でそう喚きつつも、着地した瞬間にはコンニャクの様に身を捩った。
丁度彼の腰があった辺りを拳がすり抜け、何時の間に距離を詰めていたのか、楓の一体が感心した顔を彼に向けているではないか。

「何と何と…これでも掠りもしないでござるか」
「ちょっと悔しいでござるが」
「実戦経験の差でござろうか？」
「拙者より実戦を知る者と手合わせをするのは思っていた以上に楽しいものでござるな」

悩んでいたり、何か悔しがっていたり、首を捻っていたり、喜んでいたり……
何ともバラエティに富んだ分身もあったものである。

彼の知る分身の術ではなく、実体を持った分身のようで、踏み込まれると確かな存在感すら伝わってくる。
まぁ、感心するより前にどないかして欲しいというのが正直なトコロで、軽い手合わせというよりは殺し合いじみてきた事は勘弁して欲しい。

「ちょ、ちょっ、まっ！！　幾らなんでも当たったら死んでまうわぁっ！！！！
オマエも“アイツ”と同類かぁーっ？？！！」

“前の世界”にはバトルジャンキーというか、バトルモンガーな自称ライバルがいた。
流石にあんなキ（ピ――ッッ）はいないだろうと思っていたのに、何とこっちでは女の子方がアレと同じモンを持ってやがる。
しかし、彼がおもっきり泣き叫んで嫌がっても、

「アイツとやらがどなたかは存ぜぬが…」
「当たらなければどうという事は無い…でござるよ？」

「オレはどっかのＮＴか？！　それとも『見えるっ！！』とかほざいて全部避けぇとでも言うんか？！」

「実際、拙者の攻撃の全てを見切っているでござる」

と言い返されてしまう。

彼女の喋り方というか、口調は彼が良く知る自称弟子の人狼少女であるが、頭の回転や速度やら口の廻り様やらはあの少女など問題にならない。
頭の回りが良いバトルモンガーなぞ性質が悪いにも程がある。
その喋り方に騙くらかされてしまって実力を見誤っていた横島のダメージは大きい。自業自得ではあるが。

「それに……」

尤も、彼女からしてみれば彼に本気を出してもらいたいという想いの意味があるのだ。

「何故先程から拙者に…」

キラリと少女の細い眼が、針の様に光った。

「拙者の“本体”にだけ話し掛けてるでござる？」

そう…

横島は、この殺合を嫌がるのも否定するのも、そして文句を言うのも、全て分身の術を行使した本体…四体の分身に紛れている“五人目”である“本体”にのみ行っていたのである。

「へ？　あ、いや、その…分身は所詮分身だし……」

うわ、ヤッベ！！　何かマズい事した？！　と焦ってももう遅い。

元より“向こう”では口は災いの元という言葉を体現していた彼である。気付いていないのは彼らしいという気がしないでもないが、それ故に罪深い。

いや、ウツケ者と言った方が良いのか？

兎も角、今のその言動がこれから起こる事への道を決定付ける“トドメ”となっていたりする。

「ほぅ…拙者の分身の密度は本体並にしていたはずでござるが…？」

「え、え～と…い、いくら密度を上げても、存在感持ってても楓ちゃんの“霊気”は本体しか無い訳で……」

要するに、分身は“存在”しているというだけで“生きている”訳ではない。

彼は生きている波動を持つ本体にだけ話掛けていた…という事なのだ。

「ほほぅ……つまり、拙者はまだまだ見誤っていたという事でござるな……」

楓の気配が、変わった。

いや、更に氣が高まった。

「あ、あっれぇ～～？？」

冷や汗垂らして焦ってももう遅い。

確かに少女は彼の力が見たくて何時の間にか熱くなり過ぎていたのだろう、ほんの少しだけ本気を出していた。

これは手合わせであり、お互いの力量をお互いで戦って量るという学園長らの目論見を理解していたからこそ、そのついでにと話に乗ったのである。

確かにこの青年に好意の様なものを持ってしまったのも事実であるし、異世界の技とやらも実際に体験してしまいたいという好奇心の方が強かった事も事実だ。

だが、楓は横島の戦闘レベル…その実力の程にはかなり疑問をもっていたのである。

まぁ確かに、隙だらけであるし、ナンパというか性犯罪レベルで美女に飛び掛って行っては撃墜されてゆく様を見て実力者とは思うまい。

良くても人外の生命力と耐久力を持つ“盾役”くらいだろう。

正直に言えば、楓もそんなものだと思っていたいた節がある。

が、いざ蓋を開けてみればどうだろう。

横島は意外に…いや、想像していたより遥かに高い能力を有している。

防御されるのなら解からないでもない。

迎撃されるのならまだ納得できよう。

彼は何とひたすら避けに避けて避け続けているのだ。

少し本気になり、瞬動まで使って攻撃を仕掛けても避けられ、分身の術まで織り交ぜて攻撃しても避けまくられて掠りもしないのだ。これには驚く他なかろう。

それだけならまだしも、彼は本体にずっと文句を言い続けている。分身を行使し、位置や気配まで入れ替え続けている彼女の本体に対してだ。

「……間違いは改めるべきでござるな……
お詫びと言っては何でござるが……拙者、本気でいかせてもらうでござるよ」

楓の声音の――重量が増した

「い、いや、いやいやいやいやいや！！　それ！！　ちょっとタンマ！！」

ぶわっと風圧すら感じられるほど波動が広がり、少女の気配が膨らみ、ぶれ、

その身が何と十六体に分かれた。

「ぶふぅうう――っっっ？？！！！」

あまりの現象に横島は噴霧してしまう。

確かに同じ顔であり、微妙にストライクゾーンを外している年齢とはいえ、美少女が十六人もいれば彼からいえばラッキー現象だ。

だが、それが全員襲い掛かって来るとしたら話は別だったりする。

「いーやーっ！！
どーせやったら、二，三年後のベッドの上でやってぇーっ！！」

テンパった所為だろう、途轍もない問題ゼリフをぶちかまして身を捩って嫌がる横島。何だかカマっぽくてちょっとキモい。

対する少女“ら”はそんな彼を目にしても、『ずいぶんと余裕があるでござるな』と気にもしていないが。

「「「「「「「「「「「「「行くでござるよ」」」」」」」」」」」」」

「らめぇっ！！　別のトコ逝っちゃうっ！！！」

アホゼリフをぶちかますもやはり不発。
十六人の楓が地を蹴り、彼を中心にして同時に攻撃し始めた。

確かに十六人…本体を外せば十五人…に分身すればその密度はかなり下がる。

だが、それは密度が下がったというだけで統合攻撃力が下がった訳ではないのだ。

本体が彼に触れればルール上彼女の負けが決定する。よってメインに攻撃を仕掛けられるのは分身体のみ。

しかし彼女はそんなルールすら忘れているかのよう。

それに、四分身の場合でも本体がばれていた以上、分身の密度を計算に入れるのは間違いだ。

だから少女は統合攻撃力のみに重点を置き、青年を攻撃する事にしたのだ。

「こ、これは…」

「拙いっ！！」

流石に見物を決め込んでいた近衛と、少女の元担任だった高畑も彼女の本気には焦りを見せた。

いや、異常なまでの回避能力と、彼らすら見破れなかった分身の術をあっさり見破った横島に呆気にとられていた事が隙を生んでいたのだろう、待ったを掛けるタイミングを完全に外してしまっていたのである。

下手をすると手加減の見誤りをしている可能性だってある。

このままでは青年の命が危ないと感じたか、その高畑が少女と同

じ体捌きである瞬動術を行使し、間に入ろうとした正にその瞬間、

「サイキック猫だましっ（強）！！」

横島が自分の頭の上で拍掌した瞬間、パァアアアンっ！！！と、甲高い音が響き渡り光と音の衝撃波が周囲を襲った。

「？！」

「「「「「「「「「「「「「「「「！！」」」」」」」」」」」」」」」」

高畑の足と、楓“ら”の動きが一瞬停止する。

無論、攻撃を仕掛けていた途中の手が完全に停止する訳も無いし、横島もそんな事に期待など殆どしていない。

単に隙が生まれれば良いだけ。

攻撃が当たる前に僅かに移動できれば良いだけなのだ。

「「「く…っ」」」

「「「ぬ…」」」

それだけで、同時という瞬間に“ズレ”が生じるのだから。

「こ」

迫り来る氣の塊。頭部を襲う氣が乗った拳を右手に出した六角形の壁によって連続で受け止め、

「ろ」

死角から襲い掛かる少女らの蹴りを、何時の間にか左手にも出していた壁でやはり順に受け、

「す」

背後より迫っていた氣の塊を、身体が向くより先に手が動いて霊気の盾で跳ね飛ばし、

「気…」

ビュッ…と、上半身を三方向から貫かんと襲い来る氣が篭ったクナイを融け崩れるように身を伏せて回避し、

「かぁああ――――っ??!!!」

涙を振り撒きつつ、分身の背後から襲い掛かってくる楓の本体に対し、地を這うように間合いを詰めて氣弾ごとその腕を掴み止めた。

「な……っ??!!」

驚きの声を出したのは少女か元担任の教師か。

えっぐえっぐと泣いて抗議している横島の顔は間抜けさ全開であるが、その技術というか技には感嘆の声しか漏らせない。

それほどまでに見事なものだったのである。

呆然とする楓は兎も角、少なくと彼女よりかは理不尽な人生経験を積んでいる元担任は当然の如く先に再起動を果たし、腕時計に眼をやった。

勝負を始めた時より八分弱。
自分が呆れ返っていた間がどれくらいか解からないが、どちらにしても制限時間内である。
暴走した彼女に対するものか、これから先の事に対する不安なのかは定かでは無いが、彼は深く溜息を吐いて、
「それまで…横島君の勝ちだよ」
と、終了を告げた。
一応…というか、文句無くというか、横島の腕試しは合格点だった。
逆に楓の方が減点されていたりする。
言うまでもなく熱くなり過ぎた事に対するお小言であるが、彼女

自身やり過ぎた事を自覚していた為、かなりしゅんとして落ち込んでいたのだが、

「ま、まぁまぁ…」

と殺されかかったハズの横島の方が近衛と高畑をあやすものだからそのお小言も長続きしない。

尤も彼にしてみれば、

『どーせ死なないからと高括って盾に使われたり、
オレが隠れ潜んでいるボストンバッグに鎖を巻き付けて崖から海に蹴り落したり、
錨に掴まらせて水深８０ｍくらいのトコに素潜りさせられたワケじゃないからいいっス』

である。

流石にそれを口にしたら呆れ返られてしまったが。

ほぼ毎回が死ぬかくたばるかの仕事であったし、何より弟子に無理矢理連れて行かされる散歩で死にかけてしまえるほどデンジャラスなトコに住んでいたのだ。

今さっきの楓の攻撃なんぞ、彼からしてみれば一，二分も文句を言えばスッキリしてしまう程度だ。その程度の憤りを一日以上持っていては“あの”職場に二日と勤められなかったであろう。

死に掛けた事より楓が落ち込んでいる方を見るのが辛いのだから呆れたフェミニストっぷりである。

「ま、これを教訓にしてくれたらいいよ。それよりオレとしては約束守ってくれる方が嬉しいナー」

何ともお優しい事だ。

三人はその懐の大きさに感心していたりする。

まぁ、嘘偽り無い彼の本音である事に間違いは無いのだが。

ともあれ、楓の実力も理解してもらえた事であるし、明晩から二人は“仮免”ではあるが“裏”の仕事に関わる事となった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「どう見る？　タカミチ君」

「そうですね……」

二人の手合わせ見物の帰り道、
ゆっくりと斜めになってゆく陽光に眼を細めつつ学校へと戻って行く近衛と高畑。

落ち込んでいる楓と、必死になって慰める横島という取り合わせをもうちょっと見ていたかったよーな気がしないでもないが、明日という日に備えなければならない二人は暇人では無い為、二人に明日の仕事場を伝え、横島に連絡用の携帯電話を渡してから別れを告げて学校の仕事へと戻って行く。

男二人というのも華は無いが、今の心境からいえば乙なものである。

何というか…期待を外さず良いものが見れた…という想いを分かち合っているといったところだろう。

感嘆と満足の間のような表情を見せつつ、何となく近衛は横を歩く男につい今し方の意見を求めてみた。

「本気…というか、実力は見せてもらってないという気がしますね。

楓君の実力は聞き及んでおりますが、実際に見て驚きました。
それでも……」

「……彼の本気には届いておらなんだ…か……」

「飽く迄も自分の“勘”ですけどね……」

確かに見苦しいほど喚きまくってはいたのであるが、横島は理不尽レベルの攻撃自体には驚愕してはいなかった。

攻撃される事に対する慌てっぷりを披露しただけ。攻撃方法にはそれほどは慌てふためいていたりしていないように見えた。そしてそれは、彼がああいった摩訶不思議な攻撃を見知っている証拠でもある。

「いやはや……確かに楓君の体術は聞いていた以上のものじゃったが、横島君のは……」

「確か、サイキックソーサー…でしたか？

楓君のあの巨大な氣を受けてなおそれを弾き飛ばし、揺るぎもしていないとは…」

「ふぅむ…」

二人とも、既に楓を保証する人物…というか、よく仕事を頼んでいる少女から彼女の実力を聞かせてもらっている。

まぁ、ぶっちゃけて言えば、楓の同級生である龍宮真名であるが。

一普通に行動しているのに隙らしい隙を見つけられないし、本気

で戦ってもどちらが勝つか解からない―

幼い時から世界中の戦地を飛び回っていた真名が誇張無しに楓の事をそう述べていたのだ。これは贔屓無しに本物だろう。

だが、そう評価されていた彼女の攻撃が横島には完全にいなされていたのだ。

彼女が不甲斐無い訳では無く、横島が更に非常識である事は口に出すまでもない。

あの場に来ておらず、魔法の眼で持ってずっと“対決”を見つめていた学園の魔法関係者らも、横島の馬鹿げた回避能力とサイキックソーサーという霊能力の事を論じ合っている。

異世界の技…

それだけでは納得し難いような能力だったのである。

“だからこそ”の仮免。

人となりを知らねば保安の一端を託せない。

無論、あんな目にあっても楓に対して手を上げなかった事もあって、殆ど信頼してはいるが確証を掴んでいる訳ではない。

だからこそ、誰よりも彼の為に確証を掴む為、本格的な争いではない明晩の守りの一つを任せる事にしてみたのである。

「フォフォ…しかし…」

「え…？」

高畑から視線を戻し、通りの向こうに見える学び舎を見つめている近衛の顔は、自分と同様、喜劇を見た後のように笑み崩れていた。

「あの時の横島君の焦り具合…そこらの喜劇よか笑えたぞい」

「ははは…人が悪いですよ？　まぁ、否定はできませんがね」

苦笑しつつも同意する高畑の笑みを肩で受けて更に笑う近衛。

二人とも実際には既に彼を信じている。

信じているからこそ、これからの事を任せる気になっているのだから、確証を掴んでやりたくなっているのだ。

だが、別の想いも確かにあった。

近衛にとって大切な孫娘、

高畑にとって大切な思い出の知人の息子、そして師より託された“姫”……

子供達の未来の為にも、何故かは解からないが彼の力が必要でもあると感じていたのもまた事実なのである。

＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊

楓を良く知るもの…例えば同級生、強いて言えば龍宮真名などが今の彼女を目にすればどう思ったであろう？

それほどまでに彼女は落ち込んでいた。

「いやー　このチョコバナナおいしいなー　タラコが付いてるトコが何とも言えないなー」

ヤケクソな行動でテンションを上げようとしている横の青年…ぶっちゃけ、横島が必死こいているのだが、それでも殆ど回復してくれていない。

「スゲーぞぉ、シュークリームの中から明太子がぁー」

「アイスに黒蜜が掛かってるのかと思ったら正露丸の汁だぁー」

「ぎゃっふーんっ！！　普通のコーヒーかと思ったら、イモリの

煮汁だったー」

内心かなり涙を噴き噴きしつつ、一人でウケを狙って大騒ぎ。
自分の恥なんかより、美少女の落ち込みを消す方が大事である彼らしい事と言えよう。

まぁ、ここがオープンカェでなければもっと良かったのだけど……

タラコトッピングのネタ辺りで他の客の眉が顰められ、
明太子シューの辺りでロコツに嫌な顔をされ、
正露丸汁のところで食器から手を離し、
煮汁ネタで席を立つ者が出た。

はっきり言って、完璧且つ徹底的に営業妨害だ。

それでも彼は必死に少女の機嫌をとろうと頑張っている。

その行為、涙ぐましい上に漢らしい。
ある意味素晴らしい自己犠牲と言えなくもない。デリカシーに欠けるどころか、デリカシーが“無い”という点に気付ければ…の話であるが。

何故にそんなにも楓が落ち込んでいるのかというと、先に行われた手合わせの件である。

確かに横島の底を知る事はできなかったものの、自分と彼の力量を関係者に見せる事が出来ていたので大成功と言えなくもない。

だがあの時、楓は間違いなく冷静さを欠いてしまっていた。

それはあってはならぬ事。
普段の彼女であれば絶対に犯さない愚行。

奥義…とまでいかないものの、必殺の大技ではあった十六分身の一斉攻撃。一歩間違えていれば横島の命を刈り取っていたのだから。

如何なる強敵を相手にしようと、如何なる手傷を負おうと、例え自分の命が失われてしまう直前であろうと、冷静さを欠く事等あってはならない愚挙であり愚行なのだ。

自分の未熟さ、愚かさ、そして殺意に似た闘気を横島に向けてしまった事。
その事実が楓の心を責めていたのである。

まぁ、横島からしてみれば美女美少女から殺気を向けられる事等慣れ切った事象であり、何時もの事。
楓が気にするレベルでは決してない。
つーか、その程度の殺気で殺せるならば十代であの世に行って蛍の化身とヨロシクやっている事だろう。

だから今、彼は必死こいて道化になっているのだから。

横島にオープンカフェに連れ込まれ、下ネタ寸前のさぶいギャグまでしてもらって機嫌をとられている楓であったが、横島の滑りまくっているギャグよりも心の中が冷えていた。

「くぁえどぇちょわぁあああん！！」

彼の泣き声も良く聞えない程に。

三十分もそんな行動をとっていれば流石にキレたのだろう。

とってもマッスルな店長が額に＃な形の血管を浮かべて登場し、おもいっきり叩き出してくださった。

その際、横島のケツだけにケリが入ったのも何時もの事だ。

周囲に（乾いた）笑いは取れたものの、肝心の少女の機嫌が直っていない。

ならここは一発、楓ちゃんのカラダで責任とってもらおーかなー！！　等とぶちかましても良いのだが、自分のジャスティスが揺らいでしまう上、

―もし、仮に、なんかの間違いで、楓ちゃんに『それで許してもらえるならば…』なんて言われちゃったら……―

十代の頃なら兎も角、煩悩霊力のエロ魔人ではあってもラヴでなければ虚しいだけである事を理解している今の横島だ。責任を取る為だけの身体を提供されたって嬉しくも何ともない。

手を出したら出したで大問題であるが、それより何より後で後悔の渦の中身悶えして苦しむ事は目に見えているのだから。

まぁ、ぶっちゃけて言えば単なる取り越し苦労である。

楓がそんな事は言わない……と思うし、
何よりもあれだけ沈み込んでいた楓の機嫌は、店を出る頃にはとっくに直っていたのだ。

『完敗…でござるなぁ……』

何しろ彼女は“プロ”である真名から強敵と目されている少女である。
そんな少女が何時までもウジウジと落ち込んでいる筈もないのだ。
悔しくない…と言えば嘘になるが、それでもかなりスッキリとした気分で道を歩いていた。

言うまでもなくも今落ち込んでいる表情は単なる演技だ。
何だかテンパって色々と言って来る横島の行動が面白く、楽しく、深夜ラジオでも聞いているかのように、ややハイとなっている彼女にはとても笑えるので聞き続けているだけである。

必死こいて機嫌を取ろうとしてくれている彼――横島忠夫。

なんとも気が抜ける悲鳴を上げつつも全ての攻撃を紙一重で回避し、攻撃の合間合間に“本体”の間合いに潜り込んで来る。
それはなんと言うか、本能から来る動きらしく天衣無縫で全く読

めず、それでいてちゃんとフェイントが入っているのだから始末が悪い。
彼自身は無自覚であろうが、こちらの攻撃の間もかなり狂わされていた。

相手を自分のペースに引き込み、調子を狂わせて体力と気力を削いでゆく。
それが彼の戦い方なのかもしれないが、どーも今一つシャッキリと理解できていない。

何も攻撃に入っていないのだから。

今回見る事ができた彼の“力”――
ハンズ・オブ・グローリー…彼が“栄光の手”と呼んでいるあの攻撃（？）手段ではなく、今回使ったのはサイキックソーサーとかいう氣の盾と、サイキック猫だましというスタングレネードの様な技だけである。

このサイキックソーサーとかいう氣の盾。
これがまた異様に頑丈で、自分が凝縮して放った氣の塊を弾き返したばかりか、衝撃すら与えられていないときている。

『いや、ものごっつ強かったけど、如意棒に比べたら…』

という彼のセリフは全力でスルー。
高畑や近衛と共に聞こえてないフリをしていた。

そしてサイキック猫だまし…

両の掌に“霊気”を集め、拍掌によって衝撃波を放つというシャレにならない技である。

何せ閃光と衝撃によって一時的に相手の動きを止められる上、手を叩くだけなので動作も速い。

いや、真名の様な魔眼持ちならば、下手をするとその霊的な閃光をまともに視てしまって無力化しかねない。

ひょっとすると彼は気付いていないのかもしれないが、氣を視る能力が高ければ高いほど光を強く見てしまうだろうし、初見で至近距離から喰らったらまず防ぎ様はあるまい。

厄介極まりない能力であるのだが、今回の彼は隙を窺う手段にしか用いていない。

だが、その所為で（いや、その“お陰”か？）彼女は横島の中に存在するモノに気付いてしまった。

―強迫観念にも似た女性に対する非暴力―

彼の言っていたように、周囲から力づくで学ばされたという理由以外の“何か”。

何せ彼は楓の分身だと解かっているのに、その分身にすら攻撃を仕掛けていないのである。

だからこそ楓はそれに気付いた。

それは彼自身が持つ単なる優しさとは別の何か。

どれだけ間近を美女が歩いていようとそれに気付きもせず、落ち込んでいる自分を慰める事に必死になっている彼の優しさ。

その奥に隠れている……いや？　“隠してある”だろう。それに気付いてしまったのだ。

大抵の者が“甘過ぎる”と判断を下してしまうだろうが、間近で彼の眼を見た時、その瞳色の中には甘さより影の意味合いを感じられたのである。

楓は演技をしたまま顔を上げ、自分の周りで何だか奇怪なパフォーマンスをかまして機嫌をとろうとしている横島を見た。

自分を見てくれた事に心底ホッとした彼の顔には打算の気配は微塵もない。

しかし、やはり自分より痛みを感じている様に見えてしまうのは何故だろう？

「あ、あの……楓ちゃん？」

恐る恐るといった態で話しかけてくる横島。

二十代の心を持つ彼なのに、接し方はヘタクソな十代の若僧のそれだ。

だが、だからこそ、

だからこそ楓は信頼もしているのだ。

『この御仁は……本当に人が良いのでござるなぁ……』

人生二十七年。人にモテた経験は無いと涙しつつ豪語してしまう彼。

だが、これだけ好ましい人間がモテない筈がない。

もしそうじゃないとすれば、周囲に居たのは人を見る目の無い人間ばかりなのだろう。

実際、友人の名を上げさせてみればかなりの数が出てくるのだ。

これは人間的に好かれている事を示している。

……何だか負けた拙者の方が勝者の横島殿を弁護してばかりでござるなぁ……

そう思うと演技の顔を突き破って笑顔が浮かんできた。

嘘偽り無い、好意的な笑顔が。

「うぐぅ…」

そのきれいな笑顔に胸を押さえる横島。

恐らく胸にズギュゥウウンとキたのだろう。

自分の中のジャスティス（ロリ否定）を奮い立たせて何とか萌えから逃げようと努力を続けるが上手くいかない。

『Ｎｏ！！　Ｉ＇ｍ　Ｎｏｍａｌ！！』

等と必死に神に訴える様はアホの見本。

まぁ、本人には切実であるが。

そんな彼の内面の葛藤を知ってか知らずか、楓は笑みを浮かべて蹲って論理防御を固めてゆく横島に手を差し延べた。

「さ、何をしているでござる？　時間が勿体無いでござるよ。横島殿はゲームの勝者故、賞品があるでござる」

「！！」

正に天の声だった。

彼女から贈られた救いの手に、聖女の御手とばかりにしがみ付い

て必死こいて感謝する。

「そーだった！！　それがあった！！
ありがとう楓ちゃん！！　さー行こう！！　直行こう！！」

「あはは…現金でござるなぁ…」

「そーじゃないとオレのジャスティスが崩壊してまうんじゃ！！
楓ちゃんもあんまオレに隙を見せんといてや？　でないとオレ……」

何だか尻すぼみになって行く横島の言葉。
どうやら相当追い詰められていたようである。

まぁ、幾ら年齢的には女子中学生でも、外見は超高校生クラス。
自己保全のブレーキが狂いかかってもしょうがないかもしれない。

「ほほぅ…拙者の魅力に参ってしまうと？」

「あ、うん……って、違うんや――っ！！！」

又も上がった横島の自己保全の叫び。

楓は今度こそ本当の笑顔でもって、『違うんやぁ…違うんやぁ…』
と呟いている横島を引き摺って歩いていった。

自分の機嫌が良い理由が、横島に見惚れられたと言う事に無自覚のまま……

―おまけ―

夕食…つまりディナーの席をレストランに設け、楓は横島の為に女性を招いていた。

元より楓は約束を破る事が大嫌いであるし、横島との約束はよほどの事が無い限り守りたいと思っている。

話をつけてくるから後で…と楓は一旦寮に戻り黒が基調のシックな物に。横島もその間にカジュアルな物を買い揃え着替えを済ませており、傍目にはこの二人が夜のデートを始める様にも見えてしまう。やや不釣合いなのは否めないが。

「ところでその女の子って可愛いの？」

「無論でござるよ。少なくとも拙者よりはずっと可愛いでござる」

「……それ、人類？　楓ちゃんより可愛い子って想像できんのだが……」

「……」

こ、この御仁はどうしてこうもストレートに……

真顔で褒めてくるものだから楓とて反応しきれない。

精々、顔が火照るのを誤魔化す事くらいだ。

彼の褒め言葉には世辞を感じられないのだから始末が悪い。

つまり彼は楓の事を本気で可愛いと思っているのだろう。

それに気付いてしまい、尚更必死になって顔色が変わるのを誤魔化しだす。

夕暮れの雰囲気と、今日の見せってもらった彼の実力の一端との相乗効果だ。うんそうに違いない。

そんな誤魔化しが浮かぶ時点でアウトっぽいのだが。

「と、兎に角、もう来るでござるよ」

「え？　あ、あぁ……」

何で声が裏返ってるんだ？　と首を傾げつつやはり紹介してくれ

る女の子の事を考えてそわそわと貧乏ゆすりなどしてしまう横島。
まぁ、仕方あるまい。彼なのだし。

何だか黙ってしまった楓に気不味くなったのか、何気なく窓の外に眼をやると、流石は超巨大学園都市、こんな時間でも子供が出歩いている。
小学生くらいだろうか。何だか可愛い二人連れの女の子だ。
ロリでは無いというジャスティスはあるものの、子供嫌いでは無い横島は犯罪に巻き込まれたりしないだろうかとちょっとだけ心配してたりする。

と……

カランコロンとドアベルを鳴らし、その二人がこのレストランに入ってきたではないか。
ここに用があんのか？　と何気なく目で追ってゆくと、

「あぁ、いたいた」
「楓姉～♪」

その二人が楓を見つけて駆け寄って来た。

「お、来たでござるな」

嫌な予感がする横島を他所に、何故だかホッとした顔で二人を呼んで自分らの席…横島と自分の席の左右の椅子に分けて座らせる楓。

その二人が鼻歌を歌いつつメニューを広げ始めた時、楓は悪戯が成功した時の子供の笑顔で、

「約束通り、拙者の“同級生のお姉ちゃん”を紹介するでござるよ。

ルームメイトの鳴滝姉妹の姉、鳴滝風香でござる」

と、髪を左右に纏めているだけの少女を横島に紹介した。

「風香です。今日はボクらにご飯奢ってくれるんだって？　ありがと――♪」

無論、姉だけを呼び出す訳にもいかないので、妹の史伽も呼んでいる。

彼が彼女だけを返すとは塵程も思っていないからだ。

きゃいきゃいとメニューを見て楽しげに料理を選び始めている姉妹を前にし、何時もの読めない顔でニンニンと呟いている楓。

そんな三人の少女らを見渡してから横島は、フ…と男臭い笑みを浮かべてからヤレヤレとアメリカンジェスチャーで肩を竦め、

直後にぶわっと男泣きをした。

「それは同級生“且つ”姉っちゅーんじゃあっ！！

どーせこんなこったろーと思ったよっ！！　チクショ――っ！！！」

それでもまぁ、一応は三人に夕食を奢ったのは、やっぱり横島は横島だという事であろう。

後編（後書き）

という訳で、これにて二時間目終了です。

この辺りは改訂前と変化ありません。実力も見ずに雇わないでしょうし、どーせなら一石二鳥と楓と戦わせたのも同じ。

メドーサとか邪悪なのが相手なら兎も角、それ以外の女に横島君が手を上げるトコを想像できなかったので、こんな展開になっちゃいました。

過去のイタリアに行かされる話とかで彼が走ってるシーンがあるんですが実に足が長いｗ

本人が気付いていないだけで、足長いし貧乏で無駄肉ないし。

それなりかっこいいのに、その時は誰も見てくれていない彼でしたしね……

で、こんな風に二人がドタバタしてる裏ではネギがエヴァの夢の中に入ってたり、決闘の準備を整えていたり大忙しｗ

だけど元々のＲｕｉｎと変わるのはもうちょっと後です。

流石にまんまでしたら双方を読んでくださってる方に失礼ですしね。

という訳で、今回はこの辺で。

続きは見てのお帰りです。

ではでは～

前編（前書き）

なんつーか……本読んで力を無くしましたけど修正頑張りました。

では……

前編

大体の学校に存在する購買部であるが、ここ麻帆良のは規模が違う。

何せそこら大手の量販店より品数が豊富であり、学園オリジナル商品なる物だってあるのだ。

その販売方式にしても如何なる状況だろうと臨機応変に販売活動をし、多様な移動手段を用いた機動部隊的な部署もあって出前も迅速。

移動購買部として極普通に名が通っていたりする程で大型量販店顔負けだ。

これからもこの街の無茶さ加減も知れるというもの。

そんな普段から突飛な物も販売している購買部であるが、その日にはこれまた妙なものを大売出ししていた。

停電セールと銘打たれた幟が出ており、ローソクや懐中電灯や電池式のカンテラ等が売り出されているのだ。

尤もこれは当日の最終セールであり、この日の為であろうここ数日の間は防災グッズが抱き合わせのように売られていた。

ここ麻帆良学園は年に二回、セキュリティを含む電源系統のメンテナンスが行われる。

その為、都市部全体が停電になってしまうのだ。

当然ながら犯罪とかも起きそうであるが、そこはそれ、普段以上に防犯隊が出張っているので今まで大した問題は起きていない。

学校から何やら楽しげに帰宅してゆく少女達。

慣れているのかイベントとして受け入れて停電を楽しんでいるのか、きゃいきゃいと最終日ギリギリの安値で買った防災グッズを持って珍しく真っ直ぐ寮や家に帰って行く。

まぁ、八時からは全ての電源が停止し、病院施設のような場所以外は稼動不可になるのだから直帰は当然かもしれない。

そんな停電をどこか楽しんでいる少女らとは裏腹に、一部の教師らはどこか気を張っているように見える。

少女らの下校の挨拶を受けて何時もの様に返事を返すもどこか固い。そしてそそくさと職員室へと向かって行く。

表向きには一般教師と同様にメンテ中に生徒が問題を起こした場合の生徒指導要項の会議であり、それも当然行われるのであるが実際には“今夜”の打ち合わせの意味合いが強い。

何せ停電中は結界の力が著しく低下する。

消える訳ではないが下がるのだから“外部”から入ってくる輩もいるだろう。

それらが起こすかもしれない問題に彼らも出払うのだ。

さて――

先にバラしてしまうのも何であるが、実はこの晩、学園都市部である事件が発生する。

決してあってはならない事件であり、問題視して然るべき内容であるにも拘らず、後日もその事に付いて然程の疑問を持つ者は少なかった。

真祖の吸血鬼の魔力封印の一部が解け、一般生徒を下僕化させて魔法教師と戦う…正に大事件である。

にも拘らず殆ど記録にも残っておらず、その吸血鬼も特にお咎めも無いという謎の結果に終わるのだ。

この学校には大量の電力を消費して件の吸血鬼の魔力を押さえ込んでいるのだが、その封印の電力がストップしたりすれば当然ながら学校側にもその情報は伝わるはず。

その情報が伝われば当然の様に彼女の行動を止めるような動きがあって然るべきだ。

だが、現実に封印の電力がストップし、真祖の吸血鬼等という厄介極まりない存在がその力を取り戻して結構暴れたにも拘らずお咎めらしいお咎めを受ける気配が無い。

考えられる可能性は幾つかあり、当然ながら『学校側の完全な不手際』という可能性も否めない。

が、仮にも関東魔術協会の理事がいるこの都市でそんな不手際があるとはとてもじゃないが考え難い。

ここまで徹底して何も行っていないというのなら、件の吸血鬼の行動に全く気が付かなかったか、数人程度の生徒の犠牲ならどうだって良いという事となってしまう。幾らなんでもそれはおかしい。

となると一つの仮説として“既に学校側がその吸血鬼の計画を完全に察知していた”というのが浮かんでくる。

だが、現実的に見て堅物でクソ真面目な教師らだって多々いるこの都市で、一般人に危害が及びかねないふざけた行動を見過ごす事等できやすまい。

特にガンドルフィーニや神職であるシスター・シャークティの二人がそんな危険行為を放っておく訳も無いのだから。

では次にどういう仮説が成り立つだろうか？

学校関係者の上層部、

例えば学園長がその情報を得、真祖の吸血鬼の目的と“本質”を理解した上で邪魔が入らないように教師達を出払わせたとしたら？

６００万ドルの賞金首――

一部地域では御伽噺の怖い存在として伝えられてすらいるそんな存在が全力とまでは行かないが力を取り戻し、一魔法教師を襲う事等あってはならない事。
封印されているからこその黙認を続ける訳には行かない筈。

だが、現実的にはお咎めらしいものは無い。
＜桜通りの事件＞を知っており、釘をさしているにも関わらずだ。
だからこそ成り立ってくる仮説。

ー力を取り戻した真祖と戦うー
そんな試練を学園長がその魔法教師に課した――と……

尤も、今となっては闇の中。

魔法教師の大半も学園都市の外側で予想外の騒動の対応に追われており、都市内部で巻き起こった魔力の奔流の謎も完全には明かされぬまま。

納得できずとも、近衛や高畑らから『内部での騒動を鎮圧する為、一時的にエヴァの封印を弱めた』という些か眉唾的な説明を受けたとしても、その言葉を信じる他無い。

ただその時、
質問を投げかけてくる魔法教師らに対して、顔色一つ変えずしれっとして説明し続けていた学園長に高畑は苦笑を禁じえなかったという。

それが全てを物語っているのかもしれない――

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

■三時間目：ナニかがミチをやって来る（前）

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

魔法都市である麻帆良の教師らは、大体数人の魔法生徒を連れて行動している。

担当官がおり、その直属の部下を連れて…チームを組んで行動すると思えば解かり易いだろう。

それは弟子と師匠の関係に近く、実際にそんな上下関係で行動している者達だっている。

だが中央区は女子校で固められている為、必然的に魔法生徒らは全員が女生徒となってしまう。

で、

仮免ではあったが魔法関係者の端くれとなった横島と楓の二人は誰が担当する事になったのかというと、

「という事で、僕がキミ達を担当する事になったんだ。よろしく」

「よろしくお願いするでござる」

「ういっス」

二人に面識があり、尚且つ魔法教師らの中で楓に接する時間の長かったタカミチ＝T＝高畑であった。

横島としては女で無いのならどーだっていい話で、暑っ苦しくなくて口煩くなければ誰だっていいのだから今一つ真剣みに欠けていた。

真面目なガンドルフィーニが担当した方が良いと言う説もあったが、あそこには担当者であるガンドルフィーニより更にクソ真面目な女子高生の魔法生徒がいる。

真面目云々は良いとしても、一番の問題は現役女子高生（更に美少女）がいる……それだけでチームワーク崩壊の危機は目に見えていた。

同様の理由で大半の魔法教師も担当できないし、刀子やシスター・シャークティ等であれば教師そのものが危険だ（彼女らの理性と、過剰防衛をさせてしまう…という意味で）。

よって白羽の矢は高畑に立ったのである。

無論、そんなお馬鹿な理由だけでは無く、彼が選ばれる一因となった理屈の通る理由だってちゃんとある。

横島と楓の二人は魔法を使う事はできないが氣の使い手である。前述の通り、師匠と弟子の様な意味合いも含んでいるので、当然ながら担当者は同様に氣の使い手である事が望ましい。

となると氣の剣技を使う刀子や、氣も魔力もある高畑がこれに相当し、刀子が駄目である以上は高畑が受け持つ他無かった……という訳である。

時間にして夕暮れ。

この日は年二回行われるメンテナンスによって都市全体が停電する日だった。

無論、医療設備のある病院や消防隊本部、警邏部等の電力までカ

ットしたらお話にならないのだが、そちらは自家発電で賄えるようにしているのだから問題はない。

しかしやはり優先順位からして一般施設等はカットされるので、当然の如く人通りはかなり少なくなっている。

普段が普段なので、間違って過疎地に迷い込んでしまった気にすらなってくる程に。

「ところで楓君。あの二人は大丈夫かい？」

「大丈夫でござる。春華の香を嗅がせて眠らせて来た故、朝までグッスリでござるよ」

「なるほどね」

あの二人…というのは、彼女のルームメイトである鳴滝姉妹の事だ。

停電というイベントがあり、尚且つやんわりとストッパーをしてくれる楓がいなければ人通りの無い街に出てしまう可能性は高い。アルバイトがある…等と言っても納得する二人ではないし（特に姉の風香）。

となると強制的に眠ってもらう方が安全だったのである。

「あの二人って……あの二人か……」

風香らの事を思い出し、ゲンナリとする横島。
まぁまぁと楓が執り成すも、早々復帰は出来まい。

何せ奢らされた挙句、子ども扱いするなーと暴れられ、それだけならまだしも楓との仲をやたら揶揄されてしまったのである。

好奇心旺盛なお年頃。特に風香は下ネタとまでは行かないがHネタをどばどば飛ばしてきやがる。

よせばいいのに、横島も一々言われる度に、

『違うんじゃ――っ！！　気の迷いじゃ――――！！』

とガンガン電柱にヘッドバットかまして湧いて来る妄想を振り払っていた。

そのリアクションが余りに面白く、更にからかいまくって横島をどんどん追い詰めていったのである。
あれだけコンクリートにヘッドバットして額を割って大流血をしたのに今日という日には傷一つ残っていないのには呆れるが。

そんな彼であるから彼女らに苦手意識が生まれても仕方無いだろう。嫌うほどではないにしろ。

「何があったかは知らないし、聞いたりしないけど、ほどほどに

ね」

「ううう……生温かい心遣いが逆に心に沁みて痛いのぉ……」

高畑としては苦笑する他無い。

「ところで横島殿」

「なんだい？　楓ちゃん」

その高畑の格好は何時もの通りにスーツ姿。これで戦闘に差し障りが無いのだからその強さも解かるというもの。

横島はジージャンとジーンズ。足元はバッシュだ。兎に角、丈夫なのをくれといってもらった物。まぁ、トレードマークだったバンダナが無いだけで昔の…GS見習い時と同じ姿である。

「どうして拙者の方を向いてくれないでござるか？」

「それ、解かって言ってんのか？　ひょっとして虐めか？」

「はてさて」

半泣きで言葉をつけてまくる横島の横に立つ楓の衣装。
それは実に彼女のクラスを一番解かり易い格好で示していた。

ぶっちゃけ、忍者装束である。

「ぜってー虐めだろ?!　そーなんだろ?!
このオレを萌え殺そーという悪魔の作戦なんだろ?!」

「はっはっはっ　言い掛かりでござるよ」

「その笑いがイヤ――っ!!」

確かに忍者装束は忍者装束なのだが、普通のとはちょっと違っている。
流石に時代劇のくの一のような『ちったぁ忍べ!』と文句を言いたくなるほどのカラフルさは無いし、ゲーム出てくるくの一の衣装のような露出狂の心配をしてしまうようなキケンなシロモノでもない。

だが、ほどほどのレベルで露出しているからこそ性質が悪いと言えよう。

足は脚絆で固め、戦草鞋にも似たものを履いているし、その素材も今の技術が使用されているだろうからそれも良い。
彼女の背後にある身長程もある巨大な十字手裏剣も…冷や汗が出たが、まぁ良しとしよう。

だがその他が彼的にダメなのである。

まず上の着物は夏襦袢のように袖が無い。
デザイン的にはノースリーブと言っても差し支えが無いし、脇の部分も動かしやすいように切込みが深い。お陰で脇から胸チラしそーで怖い。

戦闘用に袴を穿くのは良いとして、サイドから腰から上太股のラインが覗いているのは如何な物か？

ノースリーブの脇から胸チラしそうな着物。
腰から上太股がサイドから見えてしまう袴。

もー横島にとってはシャレにならない程のダメージを齎すカッコではないか。

只でさえ年齢度外視に色っぽい楓である。それを強調してどーするのか？！　と小一時間問い詰めたくなる。イヤ、くの一的には間違ってはおるまいが。

「と、申されても拙者の戦装束はこれでござるよ？
それにもう着替えに戻る時間も無い事でござる故」

横島がやや頬を染めて焦りまくる様を見、何故かしてやったりといった顔をする楓。
ニヤリとした笑みが混ざったのは彼女にしては珍しい事。

どうも彼を相手にしている時は表情が零れ易くなってしまう。不思議と悪い気はしないのだが。

「ちょ…っ、ナニその笑顔?!　ひょっとして確信犯?!」

「まさかまさか。
ナニを勘違いしているか存ぜぬが、間違いなく拙者の勝負服…もとい、戦装束でござるよ。
それともなんでござるか?　拙者のこの姿に魅了されているとでもおっしゃる?
そんな眼で見るという事は、横島殿の心の中にそういった想いがあるからでは?」

「ぬぉ〜っ!!　正論だけに言い返せない〜〜〜っっ!!」

横島はテンパっている所為であろうか気付いていないようだが、彼女は横島が苦しんで原因を口にしていないのに、自分の出で立ちの事としてすんなりと答えている。
つまり、彼が何によって精神ダメージを受けているのか理解して…というか解かってこういった格好をしているのだろう。

長瀬　楓…何だかんだでイジワルのようだ。

そんな二人の若いやり取りを笑って眺めていた高畑であったが、時間が迫っている事に気付いて二人に声を掛けた。

「ああ、お二人さん。そろそろ時間だから話を聞いてくれないか？」

「了解でござる。ほら、横島殿」

頭を抱えて悶えている横島に手を差し伸べると、彼は大人しくその手を取って立ち上がる。

何だか涙眼なのは、中身だけとはいえ大人としてはどうだろう？

楓としてはちょっと萌えたりしているが。

二人に課せられたのはゲートの門番である。

この麻帆良と外部とを結ぶラインの一つに巨大な橋があるのだが、保安の為にメンテ中はその橋の向こう側を閉じるというのだ。

無論、結界が完全に消える筈も無いので騒ぎ立てる程の問題はなかろうが、如何に魔法界とて“絶対”は無い。

どんな問題が発生し、都市で生活をする一般人に危害が及ぶか解からないのである。

その橋のゲートの向こう側をメンテナンスが終わるまで守って欲しいとの事だった。

ある意味重要拠点であるが、メンテ中は外輪部の補助結界がサブとして働くので然程の問題は起きない筈である。

だから新人の任務としては妥当といえるだろう。

「僕は中の監視…いや、任務があるから行く事はできないけど、

メンテナンスが終了したらに迎えに行くよ。
だからそれまでは……」

「了解したでござる」

またも先に返事をしたのは楓だ。
横島は何だか首を傾げていて今回は黙っていた。

高畑はそんな横島を不思議に思いつつ、仕事を了承して歩いてゆく二人を境界線から見送った。

何だか胸騒ぎがしているのだが自分にも仕事があるのだ。

そう――
魔法先生ネギ＝スプリングフィールドとエヴァンジェリン＝アタナシア＝キティ＝マクダウェルの勝負の監視という重要な任務が……

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊

「な～んか、高畑さんヘンじゃなかったか？」

「そうでござるか？」

うん…と自分でも何が言いたいのかよく解からないが、楓の問い返しには頷く。

「なんつーか…監視とか言ってただろ？
直に“任務”って言い直してたけど、言い直すって事は隠さなきゃならない監視って事なんじゃないかなぁって……」

「あ、ああ、そういう事でござるか」

そういった事に気付くのは彼の専売特許である。
だからと言って、自分らに言い渡された任務に関わるのかどうかは解からないのであるが。

しかし、そうなってくると昨日二人が言っていた事柄も絡んでくる。

吸血鬼事件に関わりがあり、尚且つその担当者を監視しなければならないのでは？　という仮説だって浮かんでくるのだ。

「まぁ、それでも今のところは拙者らの任務とは直接の関係は無いと思うでござるよ。
それに受けた任務以外の事を考えるのは少々危険でござるし」

「ん？　あぁ、それはオレも解かってるんだけどな……ま、いっ

か……」

楓の言う事も尤もだ。

命懸けの任務とは限らないが、ボ～っとしてて怪我をしたらシャレにならない。

“向こう”でも油断をするなと散々怒鳴られていた訳であるし。

とっとと気持ちを入れ替えて任務に集中せねば。

幸い、集中力を削ぐような“大人の美女”は側にいないのだし。

「……コドモで悪かったでござるな」

「ぬぉっ?!　ひょっとして口に出してた?!」

「言葉にせんでも大体解かるでござるよ」

何故かむくれてしまった楓の機嫌をとりつつ、横島は一度だけ後を振り返って都市部を視界に入れた。

『……何だろ?　な～んか胸騒ぎがするんだよなぁ……』

腐っても、記憶と経験を失っていようとそこは上級の霊能者。

その勘は正鵠を射ていた。

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊　　＊

海峡に掛かる橋の様に、無闇やたらとデカイ橋に向ってトテトテと連れ立って歩く二人。

人通りも無いに等しく、今や車のライトすら殆ど見えなくなってきている。

考えてみればゲートが閉じてしまうのに悠長に車で行き来するわけも無い。

八時には停電するので最終定時の七時半までに戻って来れなければ十二時まで締め出されてしまうのだから。

そんな殆ど人通りの無い道を何故だか無言で歩いている。

いや、話のネタも色々あったのだけど、高畑と別れて二人きりとなると妙に緊張してしまって何だか上手く話を繋ぐタイミングが掴めないでいた。

こういう時には主に横島の方がアクションをとってくれるのだけど、人通りが殆ど無いという事は、当然ながら女性の姿も無い訳で、そういったネタから入る事もままならない。

オンナのネタしかないんかいっ?!　と言われてもしょうがないのであるが、道化をどこか演じている部分もある横島はツッコミを受ける事によって話を切り出すのが定石だった。

イキナリ思い出しエロネタなんぞをかます勇気（というか暴挙?）はないらしく、顔には出していないが横島も気不味かったりする。

後は楓がネタを振ってくれる事に期待するのみ。その望みも薄いのだけど……

何だかこの三日間、ひたすら一緒に歩いているような気がしてくる。いや、実にそう通りなのだが。

今の楓の姿がコスプレ忍者気味である事を除けば、毎日デートを繰り返しているという噂を立てられたって仕方が無いと言えよう。

実際、

―ヒミツの課外授業でお疲れさん?!―

等という見出しの張り付いた今朝の麻帆良タイムズ（３－Ａ版）を目にした時には流石の楓も眩暈がした。

何時の間に撮られた物か、妙に肩を落とした楓を謎の青年（笑）

が優しげに慰めている写真が掲載されている。
言うまでも無く昨日のアレだ。

確かに見ようによってはタイトル通りに見えなくも無いし、その説得力を増すように前回の写真よか楓の顔は嬉しげだった。

鳴滝姉妹には、アルバイト先の先輩だから皆の思っている様な関係では無いと説明しておいたが、コレでは誤解を再燃させられてしまうではないか。

流石に二日連続で授業をボイコットする訳にはいかなかったので、昨日のパターンで逃げまくってちゃんと授業は受けておいたのだが、理由を知ってはいても全然助け舟を出してくれず、ニヤついているだけの真名をちょっとだけ恨んだのはしょうがない話であろう。

楓はこの事を横島には話していない。無論、彼のアイデンティティーを守る為にだ。

「ん？　どうかしたの？」

「いやいや。何でもないでござるよ」

気が付けば彼の横顔を見つめていたようだ。
少しだけ頬を染めつつ手を振って誤魔化す。

流石にそんな顔をしている楓にヘンなネタを回す訳にも行かず、横島は折角のチャンスを活かせられない。

どないしょ～～…と女絡みでヒジョーに珍しい悩みを持った彼であったが、その表情にはチラッとも出ていないのは見事である。

その分、何だか真面目に仕事の事を考えているように見えているのだから実は結構得してたりする。

少なくとも楓には大人の男として映っていたのだし。

そんな彼の横顔にまたチラリと視線を送り、楓は内心溜息をついていた。

『横島殿の彼女…でござるか……』

その溜息の意味は自分でも解かっていないのだけど。

考えてみれば彼は本当なら二十七歳。

ロリちゃうんやーっ！！　等とバカなセリフをほざくのも解かる。

横島から見れば自分は半分ほどしか生きていない“子供”なのだから。

近衛や高畑、そしてガンドルフィーニらが特に気にせず二人きりにさせているのも、セクハラ大帝であるくせにそんなモラルだけは異様な程きちんと保っている為。

でなければ今だって監視の一人くらい付く事だろう。

その学園側の対応もそうであるのだが、自分に対する横島の接し方も楓はかなり気にしていた。

同級生らが囃し立てる様な関係では決して無い。何せ女として相手にしてもらっていないのだから。

何を気にしているのかと問われれば返答に困るのであるが、『横島忠夫の彼女』という単語にはかなり引っかかってしまう。

彼女が気にしている事の一因として挙げられるのに、彼の無くしてしまった過去の事がある。

ちゃんと仕事に付いているし、スケベではあるが憎めない性格なので恋人の一人もいるだろう。

いや、帰りたいという観念を全然持っているように見えないから、“今は”いないのかもしれないが。

彼の自分に対する気の使い方から察するに、女と付き合った事が無い…等という事はあるまい。

何せ側にいるだけでこれだけ安心していられる存在はいないのだ。肩に力を入れる必要も感じず、気を使ってくれるし退屈もしない。煩悩全開の救い様の無いドスケベでお馬鹿でデリカシーが無くて根性も無くてギャグ体質で無節操である事を除けば人間的にも好ましいのだから。

尤も、彼女という立場となった女は大変だろう。
これだけリビドーが凄まじい人間だ。デートの度にヘトヘトになってしまいかねない。

『まぁ、拙者が中学生だから無事なだけかもしれないでござるが……』

と、そこまで考えてから楓はある事に気が付いた。

――もし、自分が高校生だとしたら？

――元の世界に彼は帰るつもりは無いとの事なので、このままここで過ごし、自分が高校生になったとしたら？

という事に。

無論、単なる　Ｉｆ　話だ。
今の状況下だからこそ思いつく仮定であり、希望的観測も混ざっているかもしれない。
それでも、何故だかその“もしも”が気になってしまった。

当然ながらそのＩｆの世界にも成長した自分がいる。

女子高生なら黙っていられない横島のパートナーとなって一緒に歩いている自分がいる。

彼の行動パターン…というか、思考パターンはこの僅か三日で凡その事は掴めている。だから自分に対する行動を読む事等、手札をめくる事より簡単だった。

『……となると……そんな拙者に横島殿は……？』

…ボッ！！

何を考えたのか、いきなり楓の顔が真っ赤に染まった。

照れるどころではない。強い酒でも呷った様に真っ赤っ赤になっている。

この三日間、横島の煩悩具合を目にしている楓は、その全てが自分に向いた場合の事を想像してしまったのだ。

「うおっ？！　か、楓ちゃん、大丈夫か？！」

「へ、平気でござじゃるよ」

「なんか語尾がヘンだし…」

「なっ、何でもないでおじゃる！！」

「いや、それキャラ違うし……
それに顔も真っ赤じゃないか。熱が……」

本当にこういったことには矢鱈と気が付く横島。
体調を気遣った彼は、慌てて真っ赤になっている楓の額に自分の手を当てた。

そう、ピトリ…と。

本心からの労わりの想いを持って……

「～～～～～～～～！！！」

瞬間、楓の思考が弾け飛んだ。

「えっ？！　な、何？！」

声無き叫びに泡を喰った横島に構わず、楓は顔から蒸気を噴いたまま腰を落とし、

ドズムッ！！！

「ぐはぁっ！！！」

おもいっきり体重の乗ったボディブローを彼の腹にお見舞いし、

「しゃ、しゃきにいくでごじゃる！！」

と、全力でその場を後にして駆けて行ってしまった。

後に残されたのは大の字でのびている横島のみ。

返事は出来るが屍のようだ。

それでも彼はしなくてはならない。

こういった場合には、是が非でも言わねばならない言葉があったのだから。

横島は最後の力を振り絞り、己が使命だと言わんばかりにその言葉を口にした。

「な、なんでやねん……」

ばたり…と力尽きて手が落ち、それでも言えた事に満足した横島は意識を手放したのであった。

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊　　＊
＊＊＊＊＊＊

彼女がその話を耳にしたのは、昼休みに入った直後だった――

ナルタキ姉妹に頼まれ、カエデ調査隊の一人に抜擢されて彼女の足取りを追っていた時、ふと目に入った元担任の姿。

そして彼と話をしている青いツナギを着た若い男……

そう、一昨日カエデと共に写真に写っていたあの男だった。

タカハタ先生と知り合いなのか、妙に親しげに話をしている彼は、何だか話し易そうな雰囲気をもっている。

話に割り込むのは良くない事だと思いつつ、彼ならカエデの居場

所を知っているかもしれないと近寄ってゆくと……

「じゃあ、遅れないように七時には頼むよ。それで、場所は解かるかい？」

「ええ～と…あのでっかい橋ンとこでしたっけ？　でも、行き方は流石に…」

「僕が車で近くまで送ってあげるよ。
楓君と歩いて行ってもらっても良いんだけどね。彼女は散歩部だから地理に詳しいし、君も道を教えてもらえるだろうしね」

「は？　散歩…部？」

等という話をしているではないか。

散歩部というのは、ナルタキ姉妹とカエデが入っている弱小部で、兎に角学園内をてくてく散策しまくるクラブの事。
部活動からして文化部では無いし、ましてや運動部でも無い謎クラブだ。

自分が近寄って来た事に気付いたのか、直に二人は話をやめて、若い男は掃除用具（？）を持ってその場を離れ、タカミチは自分の元に歩み寄って何気なく挨拶をしてから成績の事に話を移行して足止めを掛けてきた。

この時点で怪しさ大爆発なのだけど、素直に話を合わせて二人の会話を忘れたフリをし、自然な挨拶をして五時限目の開始の鐘が鳴

る前に教室へと戻っていった。

何時もと変わらない授業前の風景。

だがそこにカエデの姿は無い。

暫くしてガラリとドアを開ける音がして担当教師が入ってきた時にはカエデは何時の間にか席についていたが……

さっきの二人の会話に出ていた大きな橋。

それは麻帆良と外とを繋ぐアレの事だろう。タカミチが車で送ると言ってたから多分そうだろうし。

とゆーか、自分はそれ以外の大きな橋に心当たりが無いのだけど。

七時という時間は停電の直前だ。そんな時間に何を…それにカエデまで……

そしてそれにはタカミチも関わっているらしい。

「ウ～ム……」

授業そっちのけで悩んでしまう自分。

自分のいるクラスは麻帆良でも変わり者の集団として知られている。だからこんな奇行も然程目立ったりしない。あまり嬉しくない

が。

他のクラスメイトのビミョーな視線もそっちのけで悩み続ける少女。

湧いてしまった疑念はそう簡単に振り払えず、時間が経つごとにどんどん膨らみ続けてゆく。

イライラする…という程ではないにせよ、気になって仕方が無いのもまた事実。

だったら自分のするべき事は一つである――

都市内が闇に包まれる事を怯えているかのように、街には奇妙な緊張感があった。

だから市電も運行が止まっており、橋の近くまで行く事は結構難しい。

それでも適当な駅で下り、目的地まで走って行ったてとしても長距離ランニングだと思えば楽なもの。

何時ものペースでたったか走っていれば直に目的の橋が見えてくる。

「ム…？」

が、見えてはきたのだけど、それに比例するかのように何だか足が重くなってきた。

疲れた…という訳ではない。

行きたくないのだ。

やがてペースが乱れ、歩く程度にまでスピードも落ちてしまう。

“帰りたい”“この場から離れたい”

そんな奇妙な気持ちがどんどん高まってゆく。

不思議な事に、闇が迫ってくる事に対する恐怖感等でもなく、単純に“行きたくない”という気持ちだけが高まり続けているのだ。

「？」

それがまた不思議さに対する好奇心を増長させ、足を進ませる結果になろうとは誰も思うまい。

いや、“人払い”を仕掛けた者達は、まさかその人払いの結界の所為で人が近寄ってくる事になろうとは想像もできなかったであろう。

人払いの結界は、無意識に『そこに行きたく無い』と思わせる術なので、“故意に行きたくなくなされている”と意識されれば効果が下がってしまうのだ。

だけど流石に強化された人払いの結界は、関係者以外立ち入りを禁じている事もあって彼女の意思の力をもってしても弾き出そうとしていた。

だが……

「…！」

「……？」

道の向こうから伝わってくる声に反応し、何時の間にか俯いていた少女が頭を上げた。

予想していた通りの二人……カエデと、あの若い男が歩きながら何か言い合っているではないか。

「？」

外灯が点き始めた歩道のど真ん中、その上から差す明かりでもカエデが顔を赤くしているのが解かる。

「これは……」

初めて見る彼女のハッキリとした羞恥に思わず声が漏れてしまった。

だが、距離がある所為か会話に気をとられている所為か、二人はこちらに気付いていない。

青年が顔を覗きこみ、カエデが顔を赤くしたまま避け、また覗き込まれる。

彼氏彼女の関係がじゃれあっている光景そのままだ。

いや、それは良い。

それだけなら（ツッコミを入れたい気もするが）然程気にする事もあるまい。

問題とすれば、

カエデが忍者装束であり、尚且つでっかい十字手裏剣を背負っている事だろうか？

胸の奥がむずむずしてくる。

心が疼くのだ。

好奇心も強く感じるが、それとは別に湧いて来る欲求があり、高鳴ってゆく物が胸を弾ませてゆく。

何かを起こそうというのだろう。
カエデの衣装……出で立ちからもそれが強く感じられる。
最早混ぜてもらいたいという欲求は止められない。
だが、近寄って一声掛け様としたその矢先に、

「……？」
「～～～っ！！」

顔を真っ赤に染め上げて蒸気を噴いていたカエデがドズムと見事な掌底を青年のどてっぱらにぶち込み、

「しゃ、しゃきに行くでごじゃる！！」

と舌を縺らせた言葉を残し、一目散に駆けて行ったのである。

「え、え～～と……」

ひゅ～～～～……

春先なのに足元に木枯らしを感じた。

遠くから烏の鳴き声が聞えたもんだから情景にピッタリである。

とはいえ、カエデにのされてうつ伏せの大の字にのびている青年をほったらかしにするのも何だ。

とてとてと近寄り、助け起こそうとしたのだが……

「な、なんでやねん……」

と一言呟いて男は意識を失ってしまった。

何だか一仕事やり遂げた男の顔をして。

青年を見、カエデが走り去った方向を見、腕を組んで悩む。

この人物が痴漢行為を働いたというのなら、服をひん剥いて転がしておいても良いのだけど、どーもそーいうのとは違う気がする。

カエデだって嫌がっていた風にはぜんぜん見えなかったのだし。

ここは一つ起こしてあげるのも人情なのだろうが、今青年が喰らったのは水月にキレイに入ったモノで、充分に腰が入った素晴らしい一撃である。そう簡単に意識は戻るまい。

仕方ない…と、人情半分好奇心半分に彼を起こしてやり、自分にできる範囲の事をやる事にした。

それが、自分が生きていた“日常”を踏み越えてしまう事になると知らず……

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊

見た目よりは軽い十字型の風車手裏剣を立てかけ、ゲートに背を預けて息を整える。

たったこれだけの距離を走破しただけだというのに何故か息が乱れているのは修業不足か。

心が乱れた時には調子も狂う。

そういったものを初めて体験したのだから元に戻すのも一苦労だ。

手負いの熊に出会った時でもここまで心を乱した事は無いというのに、掌で熱を測られただけてこうなってしまうとは何たることか。

「はぁ……横島殿には悪い事したでござるな…」

とは思うのだが、今更戻るのも気恥ずかしい。
いや、このまま待っていても向こうからやってくるだろうから待っている事にした。流石にまだ顔を合わせ辛いし。

自分では修業不足だと嘆いてはいても、そこらの修行者より遥かに鍛えている楓の呼吸の方は既に戻っていた。
それでも軽い自己嫌悪の方はふるい落とせないのか、コツンと固い橋柱に後頭部を当てて溜息を吐いている。

「な～にやってるでござるか…拙者は……」

思わず脱力。

実は楓自身も今さっきまで気付いていなかったのであるが、この衣装は別の“勝負服”宜しく気合を入れて着替えていたのである。

確かに初めての任務であるし、上役となる者の前に出るのだから“一張羅”を着るのは当然の事。
新社会人がパリっとしたスーツを着て挨拶をするようなものだ。

だが、ルームメイトの姉妹を眠らせてから姿見を前にして着替えている間も、

『これでは横島殿が耐えられないかもしれないでござるなぁ』

とか、

『あの御仁ならばスリットに眼が奪われるかもしれないでござるし…』

とか言って、何だかにやけていた気もする。

何だかんだで彼女は横島を悪い意味では無く気にしているのようなのだ。

楓は色恋沙汰の事など考えた事も無い。

特に自分に関してのそれはゼロと言って良いかもしれない。

だが、だからこそ未だにその事に気付いていないのだろう。

写真にははっきりと写っているというのに――

はぁ…とまた溜息一つ。

落ち着かない気分と気不味さが入り混じり、何とも言えない居心地の悪さが纏わり付く。

もじもじと、

そわそわと、

うずうずと身を捩るのも初めての事。

それが何を示しているのか未だ理解できない楓も、やはり乙女だ

ったという事なのだろう。

自分で意識を刈り取っておきながら、居ないと妙に落ち着かない…彼女の理解力ではその程度であろうか。

「……ん？　やっと来たでござるか……」

気を失わせておいて、『来た』はないだろう？　という説もあるが、それは兎も角。

ゲートに近寄ってきている気配に気付き、頭を振って表情を何とか取り戻す。

既にゲートは閉じられているのだが、非常用の出入り口は開いているのでそこから入ってくる筈だ。

楓は両の手でパチンと顔を叩き、気持ちを入れ替えて彼に接しようとする。

何時までも照れていても話にならない。

何だか奇怪なしこりが胸に残っているよーな気がしないでもないが、それは後回し。

問題を先送りにしただけという説もあるが。

だが、振り返るより前にある事に楓は気付いた。

『……？　気配が……二つ？』

いや、確かに知っている気配であるし、一つは間違いなく横島のものだ。
という事は、もう一つの気配は自分の知り合いという事となる。

「え……？　まさか……？！」

と慌てるより先に非常ドアがギギギ…と軋む音を立てて開いた。

「ああ、開いた開いた。けっこう重いな」

「そりゃそーアルよ。何時もは使って無いアルから」

流石の楓も眼を大きく開いて驚いた。

確かに実力者。
真名ですら一般人最強クラスと認めてはいるが、気を練れる“だけ”の少女である事に間違いは無い、本当に“一般人”である同級生が来たのだから当然であろう。

「あ、楓ちゃん。お待たせ」

「待たせたアルね」

そんな彼女の焦りなど全く気付かず、のほほんとした表情で彼は、

「く…古……」

「や、カエデ。晩上好（ワンサンハオォー）♪」

楓の同級生にして中武研部長である古菲を伴って任地に姿を現したのだった。

前編（後書き）

晩上好（ワンサンハオォー）は『こんばんわ』です。念の為。

中編

中国武術研究会――略して中武研。

時たま『中等部武術研究会』の略と勘違いされたりもするが、本物の中国武術を日々鍛錬している真面目なクラブである（だったら研究“部”だろ？　というツッコミは無しの方向で…）。

当然ながら麻帆良学園都市でも最強クラスの格闘能力を持つ者が部長を務めており、その本人も驕る事無く日々鍛錬に勤しんでいる。是非弟子に！　と申し出る者は多いのだが、件の部長は誰一人弟子入りを認めておらず、部員規模は多いのに部としては弱小という訳の解らないクラブと化していた。本人は全く気にしていないのだが。

その“一般人”最強クラスの部長なのだが……実はまだ中学生だったりする。

更に、女の子だったりするものだから世の中解からない。

麻帆良学園中等部３－Ａ　出席番号１２番　古　菲

八卦掌、形意拳、八極拳、心意六合拳などの中国拳法の使い手。

「ウルティマホラ」という学園格闘大会の優勝者でもある。

彼女を含めた武道四天王といわれる少女らがいるのだが、その内の二人。

件の古　菲と散歩部の長瀬　楓は今現在、どういう訳か一人の男を挟んでゲートの前で対峙していた。

尤も、その内容は三角関係の縺れなどのような色っぽい恋話でないのだが――

「ど、どうしてここに……？」

横島と共に唐突に現れた級友に、珍しく楓は驚きを隠せなかった。

そんな彼女の表情に『アイヤ　珍しいアル』と感心しつつ、

「今日、カエデらここで仕事すると聞いたヨ。こんな停電の晩にネ。それで様子を見に来たアル」

と古は軽く答えた。

「誰に…？」

等と言いつつチロリと横島に視線を送る。

言葉にせずとも彼女が『横島殿でござるか？』と言っているのが

解かった。
彼はぶんぶか首を振って否定。流石に吹聴する気は無いのだし。
そんな彼を弁護するかのように古が、

「タカミチがこのヒトに言てたヨ」

と横島を指差しつつアッサリそう言った。

「……」

『あのオッサンは～～…』と呆れている横島は兎も角、楓は内心溜息を吐いていた。

その古の言葉で凡その見当が付いたのだ。

ここの連中は、魔法使いであるから魔法の力というものの大きさをよく見知っていた。
だからこそ、無意識に日常でも魔法に頼っているのだ。

要するに一見守りは固そうであるが、認識阻害の術に信頼を置きすぎて世間一般の秘匿の方を所々疎かにしている節があるという事である。
だからこういった“脇”の事が非常に弱い。

「まぁ、私もサンポついでに見物に来たアルが……ホントはもう帰ろうと思てたヨ。
急に行く気が失せたというコトもあたし」

二人はそれが人払いの結界であろうと思った。

「そしたら、この人がカエデに殴られて倒れたのを目にしたアル。だから連れてきてあげたヨ」

「「……」」

ぶっちゃけ楓の失敗である。

「それで、カエデはどんなバイト始めたアルか？　そんな物騒な姿デ」

「「……」」

こんな格好をしていれば、バカイエローで知られている古でなくともバトルの匂いに気付かれるであろう。

ここで着替えるようにし、普段着で来れば良いものを横島をからかうつもりでフル武装したのは流石に拙かった。

楓自身も認識阻害に頼ってしまっていたのだろう。

楓の失敗ニ連発である。

「横島殿…」

「え？　な、何……うぉっ？！」

横島に歩み寄り、ビュンッと風を舞わせて柱の影に引っ張ってゆく。

責任転換という訳ではないが、古をここに連れて来た事を問い詰めようとしたのである。

だが、

「せ、せやかて、オレ、この橋の非常口が何処にあるや知らへんし」

「……」

バカデカい橋であるし、目立たないよう設置されていて年に数回しか点検をしない扉の位置を、麻帆良に来て数日の横島が知る訳が無かった。

どーせ彼の事だ。『教えてあげるヨ』とか言われてそのまま一緒に連れて来てしまったのだろう。

楓の失敗三連発だ。

それにしたって一般人の彼女をここに連れて来たのは流石に見過ごせない。

「へ？　クーちゃんって一般人なんか？」

「は？」

楓は以前、中々の剣士と中々の拳士と中々の狙撃手の話を横島に語っていた。

その中の狙撃手は真名であり、“こちら側”だ。

話によると、古は自分と楓と真名ともう一人の剣道部員からなる武道四天王の事を横島に語っているらしい。

細かく説明していた訳では無いので、武道四天王の半数まで…件の剣道部員も一応、こちら側だと思うが…もが“こちら側”であるから古もそれに属すると考えるのも自然の流れであろう。

困った事に彼女は横島の“氣”に気付ける程の達人なのだ。だからその所為で横島が勘違いをしたって仕方が無いと言える。

楓の失敗、四連チャンだ。

「あう～……」

「か、楓ちゃん？」

楓は頭を抱えてしまった。

考えてみれば全部自分の失態である。

秘匿を了承しておいて引っ張り込んでどうするというのだ？

確かに古はできる。

実戦経験云々を横に置いても、その腕は感嘆する程だ。

だか、真名が言っているようにそれは飽く迄も“一般人”としての事で、裏で戦い切れるかどうかには疑問符を付けざるを得ないのである。

その程度…というのは些か言葉が悪く言い過ぎであるが、少なくともその言葉に近いレベルなのだから。

「こうなったら……」

気持ちを切り替え、すくっと立ち上がる楓。

勝手に落ち込み、イキナリ自己完結されたら流石に付いて行けないのだろう。そんな楓に横島はただ呆然とするばかり。

しかし彼女は横島に強い決意の篭った眼差しを向け、

「横島殿、協力してくだされ」

「え？　な、何？」

「古を…我が級友を危険に巻き込まぬよう、方便で持って帰すでござる」

「方便？」

横島に了承を求めていた。

つまり、嘘をついて寮に帰すから口裏を合わせてくれというのだ。

横島とて無関係な女の子を勘違いで危険に引っ張り込んでしまった負い目もあるから、そんな事は了承を求められずとも賛成するつもりだ。

「うん…そーだな。関係ない子を危ない目に遭わせて怪我でもさせたら寝覚めも悪いしな。
いいぞ。口裏合わせたらいいんだろ？」

「忝い」

横島の良いところは女子供に底なしに優しいところである。

その事を既に知っている楓は、彼の了解を受けて嬉しげな表情を浮かべ、ほったらかしの古の元へと二人揃って戻ってゆく。

「何話してたアル？」

「いや、かなり大事な話をしていたでござる」

問い掛けてくる古を見つめ、バレないように小さく深呼吸。
チラリと横島にアイコンタクトを求めると、彼も目立たないよう小さく頷いてくれた。

それが何だか嬉しく、楓はさっきまでの動揺はどこへやら、勇気を持って元気に力強く、不思議そうな顔をして自分らを見つめている古の対してこう言った。

「拙者らはこれから恋人同士の熱い逢瀬の夜を過ごす故、お帰り願いたいでござる」

「まてやコラ――っ！！！」

花の十四歳、長瀬　楓。

横島の優しさに触れて舞い上がっていた……等と言った事実はおそらく無い……と思う。多分。

■三時間目：ナニかがミチをやって来る　（中）

『（ちょっと待てや！！　オレはロリちゃうゆーたやんっ！！！）』

『（ま、まぁ…話を聞いて欲しいでござるよ）』

アイヤ、ホントアルか?!　と驚愕の表情を浮かべている古を他所に、今度は横島が楓を物陰に引っ張り込んで涙ながらに異議を申し立てていた。

彼のジャスティス（ロリ否定）から言えば当然の事で、只でさえここんトコ追い詰められている横島の倫理観を窮地に追い詰めかねない暴言なのだから当然であろう。

楓は楓で、何故あんな事を言ってしまったかよく解からなかったのであるが、表向き…というかタテマエでの言い訳もちゃんとあった。

『（実は拙者、殿方と付き合っているという……そ、その…ね、根も葉もない噂を立てられているでござる）』

『（？　そーなん？　特定の彼氏とかいねーの？）』

『（当たり前でござる！！　失礼でござろう?!）』

ミョーに強く交際を否定する楓に、横島は軽く質問したのである

が物凄く強く言い返されてしまう。
フツーは男いねーだろ？　とか言われる方が失礼な気がしないでも無いが、その彼女の余りの剣幕と迫力に尻尾を巻く。
朴念仁と言うか何と言うか、横島的には彼女が不機嫌にそう言い返してくる理由が解からないのだけど。

まぁ、彼には自分が楓と付き合っているというナゾの噂が全く耳に入っていない訳であるから罪は無いと言えなくもないのであるが、全く気にされていないのは如何なものか？
オンナとして見られていないのでは？　と癇に障ってたりする。

それだけ彼を気にしているという感もあるのだが、本人が無自覚なのでどーしよーもない。

兎に角、ちょっとビビっている横島を見、自分がかなり理不尽に不快を口にしてしまった事に気付き、深呼吸をして何とか気を静めさせる。

『（と、兎も角、その様な噂が出ている以上、使わない手は無いでござるよ）』

『（あ～…大体の事は解かった。オレにその彼氏の役をしろって事なんだろ？）』

『（そうでござる。流石の古も二人っきりでいるところを見物しようとなど思わないはずでござるし）』

『（そぉかぁ～？）』

横島なら覗くだろう。

尤も、相手の男に対して恨み辛みをぶつけつつ…となろうが。

『（それしか手は無いでござるよ？　それでも彼女を巻き込んでも良いと……？）』

そう言われると辛い。

流石に横島は横島であるから、美少女（↑ココ、重要）を危険に引っ張り込むような行為はできないのである。

時間にして数秒の熟考の後、暴動を起こしている自分のジャスティスを必死に宥めつつ、心の中で血涙を流して楓の案に乗ってやる事にした。

大げさと思うなかれ。

演技とはいえ『女子中学生とＬｏｖｅ♪』等という状況を受け入れる事は横島にとってアイデンティティーの崩壊すら含んでいるのだ。

幾ら中身は大人とはいえ、肉体は性少年。この時代の彼は煩悩大帝ごっとΣだった。そんな身体に心が引っ張られない筈が無いのである。

よってそれを切欠に覚醒してしまう事を恐れているのだ。

流石はこの男と世に知られた煩悩者　横島忠夫。煩悩関係では世界一自分を信用していないだけはある。

だからこそ彼は、何だか足取り軽く古の場所に戻って行く楓とは裏腹に、市中引き回しの上銃殺刑に処される敗残兵の心境でその彼女の背を追った。

見た目はアレだが、これでも美少女の身を守る為とはいえ、血涙を飲んで『ロリ肯定』を一時限定解除したのである。

何だかなぁ～ではあるが、中々な漢と言えよう。

尤も、

「カエデはそのヒトと付き合っているアルか？」

「無論。もう何度もこの身を蹂躙されたでござるよ」

という戯言には流石の横っちもぶっ倒れたが。

「ア、アイヤ～……人でなしアルね」

「そう！　横島殿は煩悩の化身！　拙者、ありとあらゆる恥辱を与えられたでござる」

『マテやゴルァアアア！！！！』

心の中で５０００光年の虎が吠えたが、口からセリフとして吐いていないのは大感心だ。
女の子を危険に近づけさせない為ならどのような泥もかぶるという点は誇って良いと思う。

下唇を噛み締めて血を流し、だばだばと滂沱の涙を零してはいるのは凄まじく見苦しいが。

「その着物の意味は？」

「横島殿は着物脱衣プレイが大好物でござる故」

「その風車手裏剣は何アルか？」

「彼謹製の拘束具でござるよ。コレで拙者は自由を奪われてイロイロな事を……」

次々と明かされて（？）ゆくトンデモ設定。

言われる度に『へ～』とか、『何と?!』とか感心されるが、それに比例して横島の人格と人権をざっくざっくと削ぎ落とされていっているよーな気がしてならない。

ゴロゴロ転がったり、胸を掻き毟ったり、ガンガン地面にヘッドバットかましたりして言葉を耐えているのは苦行者を連想させられる。

それでも横島は耐えている。正に勇者だ。

考えてみればそんな１８～２１禁な事をされていると口にしているのだから、当然ながら楓だってそーゆー娘だと思われる訳で、自分をそこまで貶めてまで級友を守らんとしているという事でもあるのだ。

だから横島は口を挟まず、臓物をトットに喰らわれるプロメテウスのような苦痛に必死に耐えているのである。

尤も、単に楓は勢いで喋り捲っているだけなので何をほざいているのか全く気付いていないし、意味も考えていない。

話している間にテンションが上がり切ってしまい、横島に抱き締められている自分を想像して暴走してしまい、自制心やら何やらを大切なモノをふっ飛ばしてしまっているのだ。

これが他の少女であれば目がぐるぐる回ってナルトになっている事だろう。

まぁ、ぶっちゃければ嘘はモロバレだったりする。

真の意味で男を知らない少女の戯言など、大げさ過ぎて未通女でも嘘だと解かるもの。

ましてや楓の表情からしても丸解かりだ。

最初の方は『本当に?!』と騙されかかった古であったが、一分も経たない内に嘘だと気付いてしまった程に。

単に古は面白がってフィクションを楽しんでいるのだ。

楓にしては初めてであろう大暴走。

バイト三昧のツインテール元気娘が如く勢いで喋りまくっている様は中々に面白いものがある。

が、古にすら気付かれてしまう程のヘッポコ状況となっている事に横島が気付ける訳も無く、只ひたすら心の中で自分のジャスティスと死闘を演じ続けていた。

だが、悲しいかな彼のその苦難は全く持って無意味だったりする。

『――こちらは放送部です……

これより学園内は停電となります。

学園生徒の皆さんは極力外出を控えるようにしてくだ…ザザッ…』

「アイヤ　もう八時アルか――」

時が満ちてしまったのだ。

「ぬぅ、不覚！！

つい話にエキサイトして時を忘れてしまっていたでござる！！」

「あ、アホかぁ――――っ！！！」

横島の叫びが轟くのを待っていたかのように辺りの電灯が点滅し始める。

そして一斉に灯りが消え、橋の向こう側…麻帆良の全てが闇に包まれていった。

――そうメンテナンスの為の停電の時が訪れたのである。

「うぉおおお……オレの戦いは何だったんだ……」

戦いの虚しさを噛み締め、ガックリと膝を付いて嘆く横島。

心の中ではジャスティスと道理が同士討ちを果たし、無様な骸を曝して戦の凄惨さを物語っている事だろう。

その戦いとやらの内容さえ知らなければちょっとカッコイイかもしれない。

「いやいや。面目ない」

全くである。

頬をポリポリとかいて申し訳なさげにする楓であるが、横島には何の慰めにもなっていない。

古も何だか『からかい過ぎたアルか？』と苦笑いをしているのだが、今更言う訳にもいかないのでそろりそろりと非常口へと寄って行った。

これだけ状況証拠はあるのだから明日にまたからかえば……もとい、問いただせば良い訳で、このままここで野暮ぶっこくつもりはなかったりする。

だから二人をほっといてさっさと帰ろうとしたのであるが――

八時までに古を帰せなかっただけで何故にそこまで横島が苦しみ悶えていたのかと言うと、

「およ？　ドアが動かなくなてるアル」

非常口のドアに手を掛けた古が動かそうとするもピクリともしない。

いくら非常口のドアとはいえ、遊びの隙間がゼロという訳では無い。少なくともガチガチと動かす事くらいはできそうなのであるが、壁に描かれた絵を動かそうとしているが如く全く動かなくなるのは不自然だ。

それに、何やら扉にうっすらと奇妙な紋様が浮かび上がっていた。

「あぁ～……やっぱ補助結界が働いてるかぁ」

「なるほど。あれが……」

と横島は肩を落とし、楓は初めて見る西洋呪印に眼を見張っているが、古は流石にサッパリだ。

――そう、電源が落ちたという事は、補助結界が働き出すという事で、そうなるとメンテ終了まで入る事はできなくなってしまうのである。

だからこそ横島は八時までに古をゲートから帰したかったのだ。

力尽く…は無理だったとしても、級友と言うのなら他に色んな誤魔化しかたがあっただろう。

そういった意味合いを込めた恨めしげな視線をちろりと楓に送ると、彼女はわざとらしく視線を逸らして口笛を吹いていた。

『こ、このチチ忍者めぇ～……』

と怒りが湧かんでもなかったが、こーなってしまったものはしょうがない。

何時までも愚痴ってたって何も解決はしないのだ。

古にはテキトーな話をして十二時まで時間を潰させて送って帰ろう。というか、それしか手は無いのだし。

女子寮の管理人とかに古が怒られたりするかもしれないが、それは自業自得という事で我慢してもらう。

後は……自分にドエライ汚名がついたよーな気がしないでもないが、どーせ人の噂なんだから七十五日も我慢すれば忘れてくれるだろう。チクショウめ。

何だか溜息をよく吐くよーになっちまったなぁ…等と思いつつ、未だにガチガチとドアを開けようと悪戦苦闘している古に視線を向けた。

で、当の古はというと……

「ふしっ！！」

ドズムッ！！

開かないなら力づくで…と古は全身での円運動を捻り込んだ一撃を不動状態の扉にぶち込んでいた。

かなり重い音が響き渡り、細かくゲートにまで振動が伝わっているのは彼女の内に秘められた力を思い知らされるもの。

凄いとも思えるし、感心も出来よう。

現に横島は呆気に取られていた。

「あは…ダメだたアル」

テへっと可愛く舌を出して照れる古であったが、

「な、何さらすんじゃ――っ!!!」

この状況下では是が非でもしないでほしい行為であった。

流石にこんな事くらいで施設を破壊されてはたまらない。

実用している結界なので流石に女子中学生の寸勁で破壊できるとは思わないが、世の中には万が一とか『まさか?!』という事がある。

そーゆー非常識をしてきた横島だからこその焦りであると言えよう。

「アイヤ…非常時に非常ドアが開かないのはマズイ思たネ」

「拙かったらオレに言うたらええやん!!!」

「ワタシ、恋人同士の語らいを邪魔するヤボと違うアルよ?」

「誰が恋人同士じゃ!!」

「おろ？　違うアルか？」

「ち…う…っ？！」

早速バラしかけた横島であったが、口を挟まず様子を窺っていた楓が口を塞ぐ前に驚きの声を出してしまって否定せずに済んでいた。

唐突――

正に唐突に、ゲートのこちら側以外の電気の灯りが消えてから湧き上がってきた気配。

それを敏感に察知した横島は言葉を続けられなかったのである。

壁を通して都市を見据えているかのような横島の強い眼差し。

“向こう”でも滅多に見られない横島のシリアス顔。

何だかんだで数多の女性を見惚れさせる横島の真剣な顔であるが、残念ながら二人がそれを堪能する時間は全くなかった。

「な、何アルか、この異様な気配は？」

「氣…いや？　只の氣ではないでござるな……これはもしや……」

流石に気の使い手である楓と古も、僅かに横島に遅れてそれに気付く。

学園の中央の方から強く感じる異様な気配。

激しく吹き上がる様な物では無く、どちらかと言うと零れ滴るような重い気配。

霧か何かが迫って来ている時のそれに似た、湿って纏わり付いてくるような氣。

感覚的に慣れてはいないのでそれが何なのか見当も付かなかったのであるが。

「こりゃ…魔力だな」

当然ながら横島には理解できていた。

「魔力…でござるか？」

「ああ。それもかなり強い……
魔族かと思ったけど違うみたいだし、多分あれが噂の吸血鬼なんだろうな」

「この氣が…吸血鬼の魔力でござるか…」

初めて触れた氣の感触。

学園の魔法教師らも当然ながら魔法を使える事もあって魔力はあるし、一昨日には彼らの魔力に触れる機会もあった。

だが、流石に人外の魔力は初めてであるから戸惑っていたのであ

る。

しかし…

妙に見知った気配であるような気がしないでも無かったのであるが――

「マリョク…？　何の話アルか？」

楓はそれどころではなかった。

「どーすんだ…？」

「どーしたら良いでござろう…？」

幸いにもゲートからこちら側の方は道路の外灯があって何とか明るさを保っていた。

その外灯の下で二人は額をつき合わせるようにして唸っている。

そしてそんな二人を不機嫌そうな顔をして睨んでいる少女が一人……

言うまでも無い。古である。

流石に魔力の話と吸血鬼の話を聞かれてしまった以上、誤魔化しは効かなかった。

尚且つ楓が危惧していたのと同じように、古も寮の皆の心配をして、無理にでも中に入ろうとする。

こうなってしまうと吸血鬼担当者がいる話をせねばならなくなってしまい、結局は関東魔法協会等の事を省いた話をせねばならなくなってしまった。

だがそうなると二人のバイトの意味も知られてしまう事となり、

「ずるいアルよ！　こんな事黙てたなんて！！」

とプンスカ怒られてしまった。

危機や苦境も鍛錬の範疇に入れてしまう古なのだから、楓らの仕事にも興味を持たれてしまうのも当然であろう。

横島が秘匿の件を言わねばもっと詰め寄られていた事は間違い無い。

「まぁまぁ…楓ちゃんが悪いわけじゃないし。秘密にしておかないと危ないしね」

そう言う横島とて、霊力等の話がオープンの世界から来た存在なのでナニが危ないか今一つだったりする。

それでも美少女が危ない世界に巻き込まれるのは絶対にイヤである。

楓の場合とて本心では納得し切っていないくらいなのだから。

「でも、何だか友達として信じてもらえてないみたいで悔しいアル……」

しょぼんとしてそう言う古に楓の胸がちくりと痛んだ。

彼女とて好きで黙っていた訳ではないが、そういう風に言われると何だか非情に悪い事をしたように感じてしまう。

「あんなぁ…楓ちゃんが好きで黙ってたと思うか？」

だが、こういう時に妙に気が付く男がココにいた。

はぁ…と彼女に見えるように溜息を吐いて、古に歩み寄って行く。

「でも…」

「女の子が怪我すんのはオレだって嫌だぞ？　それが知り合いや

友達だったら当然だろ？」

「でも、ワタシは腕にそれなりの自信があるヨ」

「自信と心配は別だろ？　まして最悪の場合は一般の格闘術が通用しない奴を相手にしなきゃなんねー事だってあんだぞ？

それとも何だ？

楓ちゃんは『古だったら全然平気でござるよ～♪』って会った事も無い敵をザコだと高をくくるよーな安っぽい娘だとでも？」

「う……」

そう言われると古も何もいえない。

彼の言う事も理解できるし、楓の気遣いも解かる。

彼の強さは知らないが、楓の実力は相対した事がなくともかなり上にいる事が理解できるのだし、横島が言うように戦いに油断しまくる楓は真っ平である。

納得していないのは自分の好奇心とプライドぐらいだ。

友として心配されるのも解かっているのだが、プライドがそれを許してくれていなかっただけなのだから。

横島はそんな古の頭に上にポンと手を置き、子猫の背の様に優しく撫でた。

びくんっと一瞬躊躇したものの、後は彼のなすがまま。

顔を赤くして表を上げられないのに気付いていない横島はやっぱり何処でも罪作りだ。

後ろで何だか楓が不機嫌そうであるし。

「ま、勘弁してくれ。
イロイロ事情があってな、おいそれとは喋らんなかったんだ。
楓ちゃんに悪気は無いのは解かんだろ？」

「アイ……」

何というか…意外なほど古は横島の言葉を受け入れていた。

そんな素直な古の言葉を聞き、「そっか…」と全く邪気の無い笑みを零す横島。

こーゆーのを普段見せられればナンパ率は激増するだろうに。

現に、自分より強い男が好みだと口にしている古でさえ、その笑顔を見て朱に染まっているのだから。

“向こう”でもそうであったからしょうがない事と言えるのだが。

尤も、彼の周囲にいた女性らから言えばそれでも出し過ぎだったらしい。

彼の上っ面しか見られないバカ女の事等どーだって良いのだが、内面を知られたら離れようとしなくなるのだから。

「ところで横島殿……何時まで婦女子の頭に手を置いてるでござるか？」

「ひ…っ？！　あ、あれ？　楓…ちゃん？」

「……何でござる？」

「ナ、ナンデモゴザイマセン！　マム！！」

何だか楓から闘気を感じた横島は、負け犬宜しくさっちょこばって古の頭から手を引いた。

睨まれている訳でもないのだが何だか視線で刺されているよーな気がしないでもないのだ。

もう、プスプスと……

手を離された古の方はというと、おやつをとり上げられた幼児の様な目をして横島の手を追っていた。

その目に気付いた楓から発せられる氣がまた重くなり、横島は更にビビる。

何だかなぁ…な空気が、辺りに充満していた。

楓と古が異変に気付けたのは麻帆良から外に出ていた事が挙げられる。

というのも、この二人ほどの感覚の持ち主ならば＜桜通りの吸血鬼＞とやらの気配に気付けない訳が無いのだ。

にも拘らず今日までその存在に気付いていないのは、この二人にも認識阻害がかかっていた線が濃厚なのである。

魔法という存在に一般人が気付かないよう、魔法を魔法と認識しにくくされている結界。

その“外”に出ているのだから気付いて当然と言えよう。

だが、一歩外に出た以上は古も既に魔法を認識した存在となってしまっているだろう。

こうなってしまうと最早“一般社会の住人”ではないのかもしれない。

魔法の気配を間近にしておきながら気付かなかった“日常”。そこから離れた場にいるのだから。

「……？！」

かちんっと横島の動きが凍りつくように止まった。

そんな彼に対して訝しげな表情をする前に、楓らはハッとして道路の方に振り返る。

気配だ。

未だ姿は見えないのに、気配が凝り固まりつつある。

「チ…ッ
拙いな……」

何時の間にかその空間を凝視していた横島が小さくそう呟いた。

今の彼の顔は見惚れるに値するものであったが、目の前の怪異から眼を離せない楓らはそれに気付けていない。
だから楓は言葉の意味だけを問い掛ける。

「あれは……“何”でござるか？」

楓の質問に、横島は左手に霊気を集めつつ極簡素に答えた。

「……多分、式神だな」

彼らの前には、

全身を鎧に包んだ巨体が十数体立ち塞がっていた。

＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊

学園側も実は結構慌てていたりする。

当然ながら外周部で待ち構えていた魔法教師&魔法生徒らも電源が落ちると同時に発生した魔力に気付いてはいた。

だが、時を同じくして襲い掛かってきた“敵”に対してかなり梃子摺って都市に戻れないでいたのである。

百戦錬磨とは行かずとも、それなり以上のトラブルに対応してきた者達なので普通ならココまで苦労する事は無い。

彼らの魔法攻撃も万能とまではいかずとも、魔物や式神、使い魔とも同等以上の戦いを演じられるレベルなのだから。

だが、相手が拙かった。

決して強い訳でもないし、ランクで言えば弱いという部類だろう。

攻撃力も高が知れているし、彼らとて気を張っていれば然程の怪我もする事も無い。

しかし、問題は異様なまでの数の多さと、その性質だ。

その数の多さと性質故に彼らは手古摺り、都市内、園内に戻れなかったのだから。

襲撃してきた敵。
その集団は只の式神などでは無かったのである。

＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊

『くそ…っ！！　最悪じゃねーか！！』

姿を現した瞬間は流石に動きは鈍かったのであるが、三人の姿を確認した途端に式神達は行動を開始した。

太刀を抜き、槍を構え、棍を振り上げ、一斉に襲い掛かってきたのである。

正確な数にして十五体。
横島達が散開すると、きれいに五体づつ、それもご丁寧に太刀，槍，棍の使い手を割り振っている。
太刀1、棍2、槍使い2の構成で襲い掛かってくるのは戦いなれているのかもしれない。

「アイヤ～　コレ、本物アルか？　私、本物のオバケ見るの初めてアルよ」

「式神…でござるか。見た目は魍魎の類のようでござるな」

救いは二人の少女の精神の太さ。そして……

びゅん…っと風を切って棍と太刀が振り下ろされる。

軌道は三つ。そしてその間を縫って槍が来る。

妙に各個撃破に慣れた攻撃の仕方であったが、相手が悪かった。

「よっ」

小柄な中華娘は引かない。

あえて踏み込む事で三つの攻撃を避け、

「哈っ！」

踏み込みで体重を増し、勢いをプラスして太刀使いの腹部に掌底を入れた。

ドズンっと鈍い音がして鎧が陥没し、衝撃で後方に吹っ飛び背後

の槍使いにぶつかる。
式神だからかどうかは知らないが、呻き声は発していない。苦しそうではあるのだけど。

槍は太刀使いと棍使いの間を縫って襲い来るので式神の身体を盾にしたままなら多少は安心だ。仲間ごと貫かれねば…の話であるが。
直突きが来なかったのを幸いに、そのまま押し込んで槍を掴みつつ腰を捻り、そのまま肘を叩き込む。

武装取りを兼ねた一撃にその武者の身体が跳ね、声は無くとも痛覚があるのか槍を握る指が緩んでしまい、あっさりと槍をもぎ取られてしまう。

編成は兎も角、武器の使い方は然程でも無かったのか、古はもぎ取った槍を棍の様に使い、周囲の敵の足を打ち払ってひっくり返してゆく。

それでも力を振り絞って立ち上がろうとするも、古は相手の上体が前に倒れたところに崩拳を入れるというエゲツなさも見せてくれた。

「さぁ　次は誰アルか？」

古　菲はいっそ無邪気さを感じられる笑みを浮かべ、脱力柔軟の自然体の構えで鎧武者を誘っている。

練氣の技はまだ一般人ではあるが、それでも硬氣功と内氣功を使いこなせる彼女の望みは只一つ。

―我只要　和強者闘―

ただ強者と戦う事のみなのだから――

楓の方はもっと楽である。

何せ襲い掛かるのは五体“しか”いないのだ。

更に前述の通り、其々は然程強くは無い。となると最早敵ではなかった。

「忍…」

現れたるは四体の分身。

本体込みで五人組みだ。其々が攻撃を避けつつ踏み込み、練り上げた氣を叩きつけるだけで勝負が決まる。

「数で来るのは正しいとは思うでござるが」

「其々がこれでは話にならないでござるな」

「折角の得物が泣いてるでござるよ」

等と言いたい放題だ。

だが、それでも彼女は一応は戦いを知るものである。

真っ先に気付いた横島は兎も角、彼女も直に厄介さを理解していた。

「ふむ…」

分身か本体かは知らないが、楓の一人が顎に手をやって首を傾げる。

その間にも電灯の陰やら壁の影の部分からじわりと影が立ち上がり、今倒したばかりの鎧武者を形作ってゆく。

「何と何と…これはきりが無いでござるな」

そう――

倒しても倒しても、端から倒した数の分だけ湧いて来るのである。

幾らこちらの方が強かろうと向こうの頭数が減らねば全く意味が無い。

式神だというのであるから、当然操っている奴もいるはずであるが、楓の知覚をもってしてもその術者は網に引っかからない。

尚且つ、術者がいる以上は、ここのゲートを抜ける方法を知っている可能性があるので退く事もままならないときている。

『まいったでござるなぁ…』

と内心苦い顔をする事しか出来ないのが現状である。

頼みの綱は横島であるが……

「のわ――っ！！　来るな――っ！！」

ゴキブリかハエの様に逃げ惑うだけで全然手伝ってくれないのだ。

確かに鎧武者の攻撃を、ウナギが木々の間を泳ぐようにぬるりぬるりと回避し続けるのは見事だといえる。

掠りもしていないのだから事回避に至っては天才だと言えるだろう。

だが、だからと言って戦わないでも良い訳ではない。

多少なりとも好意を持っている男の蝶の様に舞ってゴキブリの様に逃げ惑う様を見れば脱力もするだろう。

『拙者、男を見る目が悪いのでござろうか？』

等と溜息をつきつつ、四周目の部隊との立ち回りを再開する楓であった。

泣きながら、喚きながら、ひぃひぃ言いつつ走り回る横島。

ベンジョコオロギのように跳ね、

ヘイケガニのように横走りし、

ダックスフントのようにチョコマカと足を動かし、

尻尾を切ったトカゲのようにカっ飛んで逃げ惑う。

人外の体捌きで攻撃を避けまくれている技量は兎も角、見た目は最悪で全く持って見苦しい事この上もない。

しかし、だからと言って彼はこの場から逃げ去っている訳では無く、常に二人の少女から一定の距離を保ち続け、

その鋭い眼差しでもって闇夜の梟が如く何かを探し続けていた――

後編

「ＮＩＶＩＳ　ＣＡＳＵＳ！！」

呪文が紡がれた瞬間、ドッと空中に突然大量の氷が出現し、一方向に向って爆発する。

その衝撃波は凄まじいものがあるが、意外にも“的”は健闘してそれを防ぎ切った。

凍気を伴った爆風が襲い掛かるも、杖に跨ったまま器用に右手に出した障壁でレジストしたのである。

それでも完全には防げていないのだろう。

身体の所々が凍り付いており、動く度に氷片が舞い飛ぶ。

杖に跨り空を飛んでいるのは少年。

まだ歳若く…いや、幼いと言っても良い程の。

それでも追撃してくる相手を見据えながら、杖に跨り空を飛ぶ。

追撃者はというと、そんな彼の背を追いつつ、自分の術が抵抗された事に苛立ちも持たず、どちらかと言うと防がれた事を悦んでい

るかのように口元に笑みすら浮かべていた。

「ハハハ　どうした逃げるだけか。
尤も、呪文を唱える隙も無いだろうがな！」

楽しげにその“小さき者”を追うは二体の影。

その一つは闇。
いや、闇の福音と呼ぶのが正しいだろう。
漆黒のマントに金色の髪をなびかせる少女のような異形の者。

それに付き従い空を飛ぶ第二の影は黄緑色の髪の黒い侍女服の少女。
ただし、こちらは両の足でバーニアを噴かせているのだが。

「一…マスター」

加速中にも拘らず普段通りにその侍女が主に…主である金色の髪の少女に話掛けた。

「ん？　何だ？」

狩りを楽しんでいるのか少年の力を楽しんでいるのか解からないが、その少女は鼻歌でも歌いそうなほど機嫌が良い。

「一都市外部でキルリアン反応多数。
魔力の該当波形から式神の類かと思われます」

「ほぉ……？　では餌に喰らい付いた馬鹿がいたか」

「一……おそらく」

かなり児戯のような勝負ではあるが、自分の前方を杖に跨って飛んでいる少年は“奴”の息子だ。

だからこそ“目的”以外に純粋に楽しみたいという欲求が生まれるのもしょうがないだろう。

事実、自分は楽しんでいるのだし。

だからこそ、“自分との繋がり”以外の無関係な魔法教師どもに邪魔に入られたくなかった。

だからこそ、侍女にある一つの命令を出していた。あるネタを外部にまけと…

――この日、何者かがシステムクラックを行い、麻帆良の結界が緩む――というネタを……

案の定、馬鹿が引っかかって周囲を調べ、その信憑性の高さから計画を組んで襲撃を掛けてきている。

魔法教師らと魔法生徒らはその対応に追われており、こちらには手が届くまい。

言うまでもなくかなり危ない行為ではあるが、そいつらが狙っているという情報もこっちに撒いているからそれなり以上の警戒を行っていたのも確認済みだ。

『まぁ……結界内に入られるほど危なくなれば私も動くがな……』

等と思ってはいるが口には出さなかった。

「一…マスター？」

「あ…いや、何でも無い」

怪訝そうな顔をする従者の声に苦笑し、彼女は獲物の少年に意識を戻した。

楽しい。

楽しいなぁ……

何年ぶりだろうこんな気分は……

昂揚する気持ちの裏に、ひっそりとした寂しさを感じなくもないが、少女はその気持ちに鍵を掛け、少年の背に意識を戻し、

「Ｌｉｃ　ｌａｃ　ｌａ　ｌａｃ　ｌｉｌａｃ
来たれ氷精　大気に満ちよ　白夜の国の凍土と氷河を…
ＣＲＹＳＴＡＬＬＩＺＡＴＩＯ　ＴＥＬＬＵＳＴＲＩＳ（凍れる大地）！！」

魔法を紡いで攻撃を再開するのだった。

さて――

学園都市内でそんな魔法合戦が行われている事等露知らず、ゲートの外では三対多数の肉弾戦が続いていた。

「シ…ッ！！」

下腹から練り上げられた氣が外に向って突き進み、“踏み込み”と“突き入れ”の同時動作と共に相手に突き刺さる。

無論、正確に言えば掌底なので抜き手の様に貫通はしない。
それでも対象は貫かれたと感じている事だろう。それほどの鋭さ

があるのだから。

煙と共にそれを喰らった敵が消滅して視界が奪われるも、その攻撃を行った少女は舞でも行っているかのように、華麗に身を回して煙りの向こうから突き入れられた槍の穂先をかわしている。

しかも避けると同時に柄を掴み、“引き”と踏み込みを同時に行ってまたも相手の腹部に掌底を叩き込んで打ち倒す。

攻撃そのものが単調なので避けるのも撃つのも難しくはなかった。

「手応えが無いアル～　数だけアルね」

しかも彼女の体力が無茶苦茶あって、数十体も屠ったというのに息を荒げてもいない。

「折角オバケと戦てるいうのに、手ごたえ無さ過ぎるヨ」

また出現した相手に肘を入れ、そのまま裏拳も入れつつそう愚痴る。

鎧武者はその二撃の音を同時に聞いた事だろう。

つまらなさそうに級友に眼を向ければ、分身に飽きたのか疲れたのか、楓は攻撃をかわすだけにとどまり、攻撃を中止していた。

「アイヤ　相変わらずアルネ」

相変わらず…というのはその動きの無駄の無さだ。
必要最小限の動きで紙一重に避けているのだから。

う～む…私もまだまだ頑張らねば……と、一人でウンウン頷き、はたともう一人いた事を思い出して楓と反対側の場所を走り回っているモノに眼を向ける。

「おが――――んっ！！」

脱力の余り肩が落ちてしまいそうになるほど情けない悲鳴をあげ、襲い掛かってくる鎧武者の攻撃から逃げ惑っている青年の姿……

涙を振り撒きつつ喚いては避け、避けては喚くを繰り返している。

体捌きもクソも無いその動きは何とも無駄だらけで動きも大げさ過ぎるが、迫り来る全ての攻撃を紙一重でかわしていたりするのだからとんでもない。

無様過ぎる言動と回避する格好がナニ過ぎて理解出来様もないが、実は楓や古以上に相手の攻撃を捌き切っているのである。

楓ですら前日の回避行動を見忘れているようで呆れているのだから、接触を果たして間もないはずの古が気付けずともしょうがないだろう。

だが楓は気付いていない、自分が攻撃した時に出していた氣の盾すら出現させていない事に。

強い男が好みだと豪語する中華娘にとって、その青年…横島は面白そうな男であって惚れる対象とは別の存在なのかもしれない。

「あ、でも優しいトコロはポイント高いアルネ」

等と呟いてみたりもするが、何処まで本気なのだろうか。

ともあれ、こんなおバカなイベントを起こしつつも、ゲートを挟んでの内と外との戦いはいよいよ終盤に差し掛かっていた。

■三時間目：ナニかがミチをやって来る（後）

古にしても楓にしても、“氣”を察知できる程の実力者である。
後、この場にはいないが学園公認の狙撃手である龍宮真名は更にその上に“魔眼”を持っている。

その知覚力を持っているからこそ、この三人の隙を突くのは至難の業なのだが……
この横島という青年は知覚系の才能（性能？）“だけ”なら、そんな三人すら凌駕する。

更に彼の本質は天性のトリックスターであり、イカサマ師だ。

その点だけは“向こう”でも信頼されていたのだろう、彼の雇い主すらここ一番で何かを起こし、状況をひっくり返してしまう点を強く買っていた。

だから泣きながら、喚きながら走り回っていたとしても油断をしてはならない。

天界で指名手配を受けていた某邪竜の女性も、それによって何時も飲みたくもない煮え湯をグビグビと飲まされ続けていたのだから。

『敵を欺くなら味方から…』とはよく言うが、彼の場合は『敵を欺くなら味方すら…』なのだ。

時折後を振り返り、追いついてくる鎧武者を目に入れて悲鳴を上げた…ように見える――

前をよく見ず逃げ回り、別の鎧武者と衝突して腰を抜かさんばかりに驚いて四つ足で逃げている…ように見える――

だが騙されてはいけない。
その眼は全然死んでいないのだから。

上級の魔族すら騙くらかして実力を発揮させずに終わらせるのが彼の真骨頂なのだ。

数日とはいえずっと共に居た楓ですらそんな彼の行動に呆れているのだから、“それ”が気付く訳も無い。

この場にいる三人の中では、はっきり言って単なるオミソ。何の為にいるのか解からない。
確かに実力はあるのだが、残る二人も子供である。
これから考えるに研修中の魔法協会関係者…といったところだろ

う。

喚きながら逃げている男は兎も角、残る二人は“氣”を使っているので退魔業関係なのだろう。式神にも然程驚いていないようであるし。

だが、その戦闘方法は大体見て取れた。

実力者には違いは無いが、万全の態勢では無さそうだ。

時間を消費する戦い方からして、ここに援軍が到着するまでの場繋ぎ程度の実力しかないのだろう。

こちらとしても何時までも遊んでいられないし、他の場での時間稼ぎも早々長く続くまい。ここは一つ一気に片を付けるとしよう。

そして“それ”は使う＜式＞を組み替えた。

疲労は溜まっていないが、いい加減飽きてきた。

強い者と戦う事を良しとしている古であるから、露払いにしかならない数散らしの作業は暴れられるから良いというだけの事。

当然、飽きも早い。

体重移動だけで相手の懐に肩から飛び込み、その衝撃で動きを止めてから身体を巻き込んで、掌底をぶちかます。

ズドンッ！！　という重い音を立てて吹き飛び、背後に居た別の武者を巻き込んで消えてしまった。

弱いし、隙が多いし、脆い。

だから数だけを取り揃えているのか、直にまた影から湧いてきていた。

「ヤレヤレ…」

それでも止める訳にはいかない古は、めんどーアルな…等とゆるりと構えを取ろうとしていた。

正にその時、タイミングが良いというか、最悪というか、

「来たれ雷精、風の精。雷を纏いて吹けよ南洋の風。『ＪＯＶＩＳ　ＴＥＭＰＥＳＴＡＳ　ＦＵＬＧＵＲＩＥＮＳ』！！！」

「来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹けよ常夜の氷雪。『ＮＩＶＩＳ　ＴＥＭＰＥＳＴＡＳ　ＯＢＳＣＵＲＡＮＳ』！！！」

唐突に、途方も無い衝撃が後方から伝わってきた。

「な、何アル？！」

古や楓が知る由もないが、強力な魔法同士がぶつかり合った衝撃波である。

麻帆良内ならばこんな衝撃波でもそれほど認識できず、伝わったとしても落雷程度にしか思わずにいたかもしれないが、ここは結界外。

尚且つ結界が弛んでいる大停電の最中であり、今も淡く掛かっている認識阻害の“外側”なのだ。

だからこそそれを、魔法衝撃を“異質”と認識してしまったのだろう。

そしてそれは致命的に隙となる。

「古！！」

「ほえ？」

何やら焦った友の声に慌てて振り返ったその目前に迫ってくる拳。

微塵も気配を感じられていなかった所為でギョッとするが、かわ

せられない事も無い。
僅かに首を振って回避するだけで事足りた。

普通なら――

「ぐっ？！」

無意識に使った硬氣功。それができていなければ腹に受けた一撃で意識を刈り取られていたかもしれない。
それでも相当な威力であったが。

「く…」

しかし流石はウルティマホラ優勝者。次の打撃は受けず、腹に喰らった打撃の威力に任せて背後に飛び、その間合いから完全に離れていた。
浮身は出来なかったが、距離だけはとる事ができたのだから重畳であろう。

意外と言う無かれ。古は完全に相手の拳を完全に見切っていたのに当てられたのである。その理由が解からず踏み込むほど彼女は愚かでは無いのだ。

だが、一旦離れてみれば理由は簡単だ。単に当てる手数を増やしていただけなのだったのだから。

「ア、アイヤ…そんな手があったアルか」

正しくその言葉通り。

そんな手があった…つまり、物理的に手の数が多かったのである。

その鎧武者には“脇”からもう二本、手が生えていたのだ。

「油断したアル……」

同じパターンで再登場を繰り返していた事と、背後に発生した魔法衝撃波に驚いた隙を突かれた為、相手の技量を完全に見誤ってしまっていた。

責められはすまいが油断は油断だ。今の一撃が武器であれば、下手をすると命を奪われていたかもしれないのだから。

「く…」

楓は風車手裏剣を旋回させ、古の正面にいる鎧武者に向って投擲する。

唸りを上げて飛んで来た大型手裏剣。

目標の鎧武者はそれに反応できなかったのだが、

もう一体現れた別の鎧武者が何と両の手で挟み込むようにそれを受け止めていた。

「？！」

倒すというつもりで、本気で投げたものを苦も無く受け止めた。という事は、その実力は桁違いといって良い。

だが楓がそう驚く隙すら与えるつもりは無いのか、その鎧武者は彼女から奪い取った手裏剣を楓の投擲の勢いを殺す事無く、何と古に向ってそのまま投げつけた。

「……っ？！」

流石に予想外だったが、古も慌てて回避しようとする。

しかし、膝から力が抜けてガクンと体が傾いた。

『まさか…痺れ薬アルか？！』

正確には“効果”。

この式神の隠し腕の攻撃が命中すると、仕込んであった＜式＞が発動し、対象の運動中枢を弛緩させるのである。

氣を練っていたのが幸いしてか倒れはしなかったものの、それでも動きが鈍くなっているのだから防げたとは言えまい。

とはいっても余り意味の無い解説だろう。

この攻撃が当たれば最低でも致命傷になる事は間違い無いのだから……

尤も――

「あ…」

「ああ…」

「……痛ぅ～～…」

彼がいなければ、の話である。

「な……っ?!　だ、大丈夫アルカ?!」

「な、何とか～……」

痛てて…と表情を歪めたものの、意外に元気そうだ。

横島は式神が何を行おうとしていたかは理解していなかったのだが、天性の勘が警鐘を打ち鳴らしたのだからそれに従ったまで。結果オーライであるが相変わらず規格外だ。

尚且つ、楓すら一歩が限界だったその隙間を物凄い速度で駆け抜け、古を抱き締めて飛んだのだから恐れ入る。

「怪我…は無ぇーか?」

「え?　あ……平気アルヨ!!」

「そっか…」

ご丁寧にアスファルトで身体を擦ったりしないよう、腕を背中に回して密着させていたりする。無論、横島の腕の方には擦り傷ができていたが彼は気にもしていない。

抱き締められているという現象を頭で理解できた古が何故か唐突に抱き上げられた子犬のようにジタバタし始めた事に首を傾げつつ、

腕から開放して彼女を庇うように前に立ちはだかる。

幸いと言うか何と言うか、その間の追撃は無く、二体の強い式神はこちらの様子を窺うだけに留めていた。

――いや？

「「？？！！」」

二体は動かなかったのではない。既に動けなくなっていたのだ。

唐突に式神二体の脇腹がバックリと裂け、そこから式を形作っていた魔力が漏れて塵になった。

その位置は二体の左右対称の位置。丁度二体の隙間を刃が抜けたらこのような感じになるのでは無いだろうか？

『ま、まさか……？！』

愕然として楓は横島に眼を向ける。

考えられるのはあの彼の刃。

氣を凝縮した霊波刀とやらの仕業としか考えられない。

だが彼は何も変わらず痛そうに腕の傷を確認しているだけ。

如何に強くなろうと、如何に凄まじい力を持とうと今一つ自覚が無い……

それこそが彼、横島忠夫という男なのだ。

楓は今こそ昨日の驚愕を思い出し、さっきまでとは違う目で横島を見つめていた。

突き刺さったりはしていないし、霊気でもって防御をしていたのか致命傷は免れている。

それでもじくんじくんと痛むのはどうしようもない事で、目の幅の涙が零れて痛ぇ痛ぇと声には出さない泣きが入る横島であるが、身体に不調の出ている女の子を前に出すほど落ちぶれてはいない。

それに、大体解かったので気を引き締めねばならないだろう。

『やだなぁ…』

そうと嘆くのも何時もの事。

どのように強くなっても、妙に平和主義というかヘタレなのは変わっていない。

それでも横島の気配は変わって行く。

気を抜けば女の子が怪我をする事を理解したのだから。

「……？！」

そんな彼の背後で、古は別の事に息を呑んでいた。

『何アルか…この背中……』

自分の前に立ち、凄まじい勢いで駆けて来た男の背中。

その勢いによって地面との摩擦で破れたジージャンとシャツ。

そこから覗く彼の背には、大小様々な傷痕があり尚且つ確実に致命傷ともいえる大きな怪我の痕まであった。

逃げ惑うその背に受けた傷痕の可能性もある。

だが何故だろう？　古にはその怪我の一つ一つが、何故か他者を庇った事によって刻まれていった傷だと奇妙な確信が宿っていた。

『闘士……いや、戦士だたアルか？』

武の気配はチリ程も感じられない。

その鍛錬の匂いがまるで無い。

にも拘らず、古は横島に対してそんな印象を持ってしまった。

――と、その程度の事にばかり驚いてはいられない。

「わっ?!」

二体の鎧武者に向って翳された左手に六角形の盾が出現した。
鈍く光っているそれは、明らかに氣を凝縮したモノ。古の目からすれば硬氣功の超最上級版といったところか?

つい今し方までのボンクラ具合が嘘のようである。

「え…○Tフィールド?!」

「メタなセリフ禁止――っ!!」

それでもボケかますのは流石はバカイエローだ。

ちゃんとツッコミを入れる横島も称賛に値する。

しかし、そんなツッコミを入れつつ彼はちゃんと仕事もしていた。

サイキックソーサーは手の前に出現する盾なので、どちらかと言うと野球のモーションではなくフリスビーのモーションに近い形で投げる事となる。

ビュ…と腕を鳴らして投擲したそれは、霊気の固まりなので風の抵抗やらを受けたりせず真っ直ぐ飛んでゆく。

霊気の盾（古達から見れば氣の盾）を出現させるという時点で既に論外だというのに彼はそれを投擲するのだ。初見でそれに反応するのはかなり難しい。

何せ自称ライバルの格闘馬鹿とて回避できずに直撃を受けたのだから――

当然の如く狙ったものに命中するそれ。

そう、高が道路脇の街路樹が避けられる訳が……

「…って、イキナリ外したでござる?!!」

「ノーコン?!!」

カッコ良く割り込んでイキナリ攻撃を外せば彼女らとて文句も言うだろう。

しかし彼はちゃんと狙ってたりする。

「ぐぉっ！！」

「へ？」
「え？」

サイキックソーサーが命中した街路樹が花弁のようにボロリと解け崩れ、黒いコートの男が転がり出てきた。

歳の頃は三十後半くらいか。
短めに髪を刈り込んだ、この時期には不似合いなロングコート姿の細身の中年男性である。

そして街路樹があった場所には札が一枚落ちており、火の気も無いのにしゅうしゅうと白い煙を放っていた。

「街路樹を模した式の中に潜み、気配を押し隠してたんだ。
楓ちゃんにも気付かせてなかったから、コイツの木遁も相当だなぁ…オレも中々見つけられなんだし……」

「え……？」

意外なセリフに楓が驚いた。
と言うか、まさか彼がそんな事をしていたとは思いもよらなかった。

「ゴキブリの様に逃げていただけでなかったでござるか?!」

「単なるボンクラとは違てたアルか?!」

「誰がボンンクラじゃ――っ!!　失礼やど――っ!!」

こういった信用の無さとお笑い担当をさせられるのは運命なのだろうか?

「最初に見た時に式神から霊糸が見えてたんだ。
だったらその糸を辿れば術者の居場所が解かると思ってたんだが……こんな近くに隠れてやがったのか…」

術者と思わしき男は両の足をガクガクと震わせ、それでも何とか立ち上がる事に成功する。
プライド云々より、そのまま転がっていない方が得策と判断したからだ。

言うまでもなく横島は油断なんぞしておらず、その男から眼を離さずに自分の名誉を回復すべく少女らに今の話を語っていた。

尤もそのまま転がっているだけなら、横島も余裕を持ってエゲツなく追い撃ちを掛けていたであろうからけど。

まぁ、そのお陰でエゲツない追い討ちがなかった事によって少女らからの印象が悪くならなかったのだから、双方にとって最良だったのかもしれないが。

それは兎も角として、その男はその言葉を聞き、二人の少女らと共に驚きを見せていた。

何せこの三人は横島が単に逃げ回っているとしか考えておらず、謀られていた事を今初めて思い知らされたのである。

まぁ、横島の…というか、彼の居た職場のオーナーが騙してかわして頭を使って戦うのが王道だったのだ。

何せ相手をする輩は怨霊や妖怪や、魔族等だ。元々のスペックからして人間なんかよりぐぐっと強い存在である。

そういった存在を相手にするのに力尽くばかりでは話にもならないのだ。

無論、力押しもしない訳では無いが、それはそれだけで片が付く時くらいである。

そんな職場で働き続けていた横島だからこそ行えた演技だと言えよう。

「キ、キサマ……俺と式との“繋がり”が……」

「ああ、見えるぞ」

思わず問い掛けてしまった術者の男は、横島の軽い返事に愕然とした。

式神に命じて街路樹の一本を引き抜き、その木を触媒にして式を組み、元の様な木に化けさせて人の眼を謀っていたというのに、目の前の若い男は式神と自分との“繋がり”を辿って発見したというのである。

そんな見つけ方など聞いた事が無い。

「ま、とにかく大人しくしろ。もう勝ち目は無ぇぞ」

そう言って無用心に近寄って行く横島。

繋がりを見つけられはしても断たれた訳ではない。その事にこのガキは気付いていないのか？

術者は、そんな無防備な彼の行動を嘲り、“糸”を通じて自分の式に命を送った。

命令は単純。

―この男を殺せ―

単純だからこそ素早く動ける。

繋がりを持たせ、最低限のレベルでしか自分の意思を持たせず己で操っているからこそ失敗も無い。

それで男は今まで生きてきたのだから。

横島の近くの影から鎧武者…おそらくは古に一撃を入れる事ができたのと同格以上のヤツ…が現れ、横島に襲い掛かる。

その腕の数は四本。

其々に形の違う剣を持ち、兜の面当ては髑髏にも似てその強さも伝わってくる。

しかし世には規格外という言葉があり、それに該当するのは彼…横島だ。

右腕を盾と同様に光らせ、稲妻の様な速度で四方向から同時に迫り来る剣先に向け、無造作に腕を振った。

バギン…という金属音が一つ。

折れたのは四本。

そして断ち切られたのは一体。

「ゴァ……」

吐血するような声を漏らし、出現した時と同様に唐突にその身を霧散させた。

「な……？！」

術者の驚きは如何なるものか。

「な、何アルか……
ハっ？！　まさかライト〇ーバー？！　理力使いだたアルカ？！」

「ネタも禁止――っ！！」

古のノリは相変わらずだった。
というより、戦いの中で力を見出す事を良しとしている古なのだからテンションを上げているのは当然なのかもしれない。

楓はというと、初めて目にした訳でもないのに、横島の霊力であるエメラルドブルーの輝きに心を奪われていた。

彼に使う言葉としては不適当であり、尚且つ不釣合いで不似合いの言葉であるが、
自分の風車手裏剣すら軽がると受け止めた鎧武者を、手にしていた刀ごと斬り伏せたその霊気の刃を、

『何と美しい輝きでござろうか……』

と見惚れていたのである。

古も似たようなものだった。

彼女が知る強き者は大体がその強さを発してくる。
それは気配であったり、仕種であったりと様々だ。

しかしこの横島には“それ”は全く無い。

確かに異様に高い氣は最初から感じているのだが、使い手である事や強者の気配は微塵も感じさせられなかった。

エラいこき下ろしていたが、古が言っていた通りのボンクラ。
それが相当する印象だったのである。

しかし、その本質は全く違う。

それはその右手の凝縮された氣の色を見れば……とてもよく解かった。

彼は――強いのである。

術者の方はプロだった。

だからこそ油断もしていないし、逃げる算段もずっと練り続けている。

“この仕事”を受けた時は、その内容の容易さから楽なものだと思った。

確かにターゲットには厄介な流派の剣士が張り付いているようだが、その実力はひよっこ。西のバケモノ女に比べれば猫にも等しかろう。

調書から鑑みても、正面衝突を避ければ実に大した事が無いレベルだ。

如何に結界があろうと、補助結界程度なら通り抜ける事も然程難しいものではない。

あちこちで陽動するだけで、警備がバラけるような拠点防衛用の連携がとれていない烏合の衆に何ができようか。

堂々と正面から入るとは流石に思わないだろうし、ゲートにいたのは小娘二人とボンクラそうな男が一人。チョロイものである。

だから一時間程で全ての仕事は片が付く。その筈だった。

だが、蓋を開けてみればどうだ？

ゲートを守っていた少女らは意外なほど強く、わざと手を抜いて造ったとはいえ“式”である雑兵の生き鎧達が手も足も出なかった。

予想通りボンクラは逃げ回っていたのは良しとしても、全然戦力を削れないのは大問題である。

それに時間だけが刻一刻と過ぎて行き、下手をすると情報にあった結界が修復される時間が来てしまう。

そうなると自分の信用も失墜してしまうでは無いか。

だから――

だから自分の本当の手持ちの式神を使用したというのに……恐ろしく容易く葬られてしまった。

男は、今まで感じた事も無い不安を拭いきれず、じりじりと近寄ってくる横島に呑まれ続けていた。

三人の驚きはさておき、横島は今の鎧武者らの事等気にもしていなかったりする。

実のところ伝わってくるプレッシャーにしても、修業場である霊山の門を守っている二馬鹿程度であるし、剣の速度もその修業場の四肢が刃の奴と同程度。管理人の竜神娘の剣速からすれば欠伸が出る。

そんな剣を見切る事は難しくもなんとも無いのである。

近寄ってゆく横島を遮るように間に割り込む新たなる三体の式神。デザインは今までと同じだが、霊圧そのものがまるで違う。恐らくは強者の部類だろう。

突き出される十字槍、

振り下ろされる鉄棍棒、

横薙ぎに迫る白刃、

今までの鎧武者の速度では無い。
様子見ではないのだから完殺意思が強いのは当然だ。

だが、横島は別段慌てたりしない。

その攻撃の全てが……遅く、尚且つ軽いのだから。

某邪竜の女の三叉槍すら避けている彼はその厄介な“箸”の十字の槍先を切り飛ばし、

白猿神の神珍鉄に比べれば飴細工にも劣る鉄棍棒をあっさりと霊気の盾で受け止め、

霊刀、妖刀でなければ傷つける事も適わぬ霊波の掌によって白刃は止められ、

その“栄光の手”の横薙ぎでその三体は消し飛んでしまった。

「…！！」

楓と古は更に息を呑んだ。

横島の攻撃は荒く、技と言うものがまるで存在しない反射的なものである。
誰かに学んだものであればそういった癖が見え、流れというものが戦いに混ざっているはずだ。

だから何流や何々派というものが見て取れるし、対応も出来るのだが……横島には“それ”が無い。
にも拘らず無駄がまるで無いのだ。

無拍子…という訳でもなく、無意識の一撃でもない。
それでも狙って出したのも間違いは無いだろう。

だが、その一連の流れは思い付いて出したとは考えられない行動であり、それでいて無駄を感じさせない見事なものであった。

言うなれば風か水。

形に囚われず千変万化な状況に対応する恐るべきものである。

まぁ――

「脅かすなボケ！！　死ぬ思たわっ！！」

関西弁で泣いて抗議する彼を見て使い手だと思う変わり者は居るまいが。

しかし、こうなると楓も古も気を取り直し、術者に意識を向けられる。

確かにほぼ無限に湧いて来る鎧武者は難敵であるが、この男がその要である事は魔法を知らずとも何となく理解が出来ていた。

まぁＲＰＧの敵の倒し方のノリで…ではあったが。

二人の技量を観察していた所為で余計に自分の不利を悟る術者。

最早逃げ道はなく、ターゲットの元へ向う術も残されていない。

そしてその微かなチャンスも――

「え？」

「あ…点いたアル」

追い撃ちをかけるように夜の闇を切り裂くように光が灯り、僅かな勝機も消え失せた。

タイムリミットである。

仮に都市内に侵入できたとしても、逃げ出す事は適うまい。

男は、術者として…プロとしてあってはならない失態を演じてしまったのだ。

「く……っ」

こうなるとこのまま撤退する他無い。

恥辱極まりないが、勝負に拘って余計な怪我を負うほど彼は愚かではないのである。

残った式を壁として前に出現させ、懐に手を入れて逃走用の式を引き抜――

「させるかアホ」

――こうとして、首に手刀を喰らい意識を刈り取られてしまった。

術者が意識を無くすと結界外の全ての鎧武者が消失し、

数多くの魔法関係者が何が起こり、何で決着が付いたのか理解が出来ぬまま、その夜の防衛戦は電灯の回復と共に静かな終わりを告げたのだった。

「あ～……やっぱコレか」

気絶させた術者のコートを剥ぎ取り、一応用心の為に他の装備品を漁ってからロープでなんだか手際よく拘束してゆく横島。

「何で男なんぞ……」

とぶつぶつ文句を言う横島に苦笑しつつ、楓は自分らの担当者である高畑に連絡を入れた。

幸いに携帯は直に繋がり、捕縛者の話を聞いて驚いていた。ちょいと時間が掛かるかもしれないが高畑本人が後で迎えに来てくれるとの事。

後で…というのは、今は“何故か”橋が使えなくなっており、横島らも橋を渡って帰ってはいけないらしい。

だからここで高畑を待たねばならなくなっていた。

別にここで野宿しろと言われた訳でも無いし、魔法合戦もあったようだから揉み消しでもしてんだろ？　と解釈した横島の言葉に一応の納得をした楓は、すまなそうに言う高畑に『別に良いでござるよ。でも、なるべく早くお願いしたいでござる』と言って携帯を閉

じる。

その間、横島は術者の装備品をチェックしていたのであるが……

“それ”は案外早く見つけ出す事が出来た。

「このコートが何アルか？

……うわっ？！　裏地が御札だらけアル」

男が着ていたロングコート。

この季節。夜はまだ多少は気温が低くなる事もあるが、都市周辺は何故かそこそこ暖かい。

そんな暖かくなっている時期にロングコートはやはり異質に映っていたのであるが……

コートの裏側は、びっしりと符が張り巡らされていた。

「これが多分カラクリだなぁ……

式神を呼び出すのに足りない霊力…っと、魔力か。魔力は符に込められている分を使用してたんだな」

「え～と…電池みたいなものアルか？」

「ああ」

完全にスタンドアローンの式神の大半は、一枚の式神符からは一体しか出せない。

その代わりに同じ格好をしているので見分けがつき難い。尚且つ装備まで揃えているのだから始末が悪く、戦っている相手からすると倒しても倒しても復活する錯覚に見舞われていた事であろう。

召喚に使用する魔力は電池式に符を使用する事でまかない、己の魔力を残さないよう最善の注意が払われていた。

式としての強度も然程でも無い為、そんなに疲れはしないし、楓や古の様な一撃で複数を薙ぎ倒す攻撃方法が限られる者にとっては、数で押してくる最悪の相手である。

横島はその符の中から妙に分厚い紙を一枚引き剥がし、霊気を送って何か調べていた。

「その符が如何したでござる？」

携帯電話を懐に（…胸の隙間か？）にしまいつつ、横島の元に歩み寄る。

側によって来る前に調べが終わっていた横島は、何となくゲンナリとした表情で彼女の問い掛けに答えた。

「……思った通りだよ……“これ”が身代わり符だ」

ほら…と楓の前に翳した大きな符。

郵便封筒より二回りくらい大きな白い紙で出来ており、中に何か入ってる。
大きめの封筒に手紙を入れて封を掛けているのを想像すればお解りになられるだろう。

「身代わり符て、何アルか？」

きょとんとした目で古が聞いてくる。
つぶらな瞳が素直な好奇心を映しているのだが、横島は返答に困った。

説明する＝こちらに引き入れるという事なので躊躇は当たり前である。
困った彼は楓に助けてという視線を送るが、楓はニコリとしたまま首を横に振った。

言うな…ではなく、諦めるでござる…の意である事はすんなりと理解できてしまう。

そんな楓の仕種に溜息を吐き、古に視線を戻してまた溜息。
その息はあくまで苦い。

「まぁ、なんだ……名前の通りに身代わりなんだな」

「ほえ？」

＜呪＞や＜式＞は術を破られると術者に跳ね返る事がある。それを“返り（かやり）の風”という。

強力な術者であればその反動すらねじ伏せられるのだが、念の為に身代わりを用意する事は普通なのである。

まぁ言ってしまえば、

『オ、オレやないぞ?!　コイツや！　コイツがやったんや！!』

と責任を擦り付ける訳だ。

しっかし……と再度溜息を吐き、横島はその符を両手で持った。

それは丁度引き裂こうする仕種であり、楓は驚いて横島のその手を止めさせた。

「何をしているでござる？　それは証拠品でござるよ」

「ああ、そーなんだけどな……」

腕を掴まれた事に不快な顔を見せず、どちらかと言うとやや悲しげな顔で曖昧な苦笑を見せる横島。

「この符……何か膨れてるだろ?」

「え?　ま、まぁ、そうみたいでござるが……それが…?」

突然の質問に戸惑いを見せたが、中身を見たいと言う理由で証拠物件を破っては拙いのではござらぬか？　楓はそう口にしようとした。

「中にさ、どうも子供の遺骨が入ってるみたいなんだよね……」

「は？」

楓が言う前に横島が中身をばらしてくる。

ぽかんとする楓であったが、今の言葉が横島から齎されたが故に彼のややこしい表情の意味を悟る事ができた。

彼は無理に笑顔を作っていたのだろう。それが曖昧な苦笑になっていたのだろうと……

「し、しかし、それを破ったりしたらこの男が式神を操っていたという証拠が……」

―確実に減る―

何せあれだけの数を召喚していたのであるし、陽動にも使われている。

無論、スタンドアローンの式神ならばよほどの事が無い限り＜返りの風＞は発生しないだろう。だからといって“身代わり”を用意してあった事には変わりは無い訳で、楓ら素人目に見ても力を感じられる筆文字で書かれている符はかなり決定的な証拠となろう。

いや横島の言葉通りに子供の遺骨が入っているというのであれば尚更だ。

言うまでもなく、楓の本心から言えば彼がしようとしている事の方を推す。

人道的にも生理的にも外法は受け入れ難い術なのだから。

だがこの件は仕事として受けたものである。

彼の一存で如何こうして良い訳では無い……と思う……

「オレさ……ここに来てこんな生活させてもらってるけどGSなんだよな」

「……え？」

突然、何を言い出すのか。

葛藤を忘れ、彼の顔を見入ってしまう。

立ち位置を変えただけで外灯の明かりで前髪に影が出来て表情が見えなくなっていた。

不思議だが、灯りの無い時の方が表情が見えていた気がする。

「ＧＳってさ、退魔だけが仕事じゃないんだ……
妖怪とか悪霊とかが起こす揉め事を解決すんのが仕事でさ、倒してばっかって訳じゃないんだ」

無論、金をもらっている以上は依頼人に従いもするが、幸いにして自分の雇い主はものごっつい守銭奴ではあるがまっとーなＧＳであり、所謂“人外”らと共闘する事も当たり前のように行っていた。

そんな彼が懸念しているのは、無理矢理符に閉じ込められて＜身代わり＞とされている霊が壊れかかっているという事である。

「確かに雇われはしたけどさ、これはオレの…オレらのやり方なんだ」

ビィ…と軽い音を立て、符が引き裂かれた。
今度は楓は止められない。
否、止めなかった。

楓も忍者であるから任務を全うする事がどれほど大事か理解している。
任務として受けた以上は、命をとして完遂せねばならないと。

だが――

ふわ……と、破られた符から淡い光が漏れ、横島の回りを舞う。
数にして三つ。三人も閉じ込められていたというのだろうか？
横島の霊気をもらい、楓はおろか古の目にもそれが“それ”として認識できている。
それでもその光はまるで蛍火のように弱々しい。
だがその弱々しい仄かな明かり故に儚く美しくもあった。

一瞬――

その蛍火が彼の顔を通り過ぎた僅かな瞬きの間に横島の顔が見えた気がした。
悲しいような、懐かしむような、それでいて愛おしむような……

「悪ぃなぁ……オレ、笛持ってねーし、あったとしてもおキヌちゃんみたいに吹けねぇから、一つしか方法無いんだ。
紛い物だけど、勘弁な？」

そう蛍火に語りかけつつポケットから出された彼の両の手の中に何かの明かりが灯っていた。
不思議な色彩で、真珠色とも青色とも見える。

やがてその輝きが増すと、辺りに笛の音が響き渡った。

甲高く、それでいて鈴の音色にも似て優しく、切なく、暖かい笛の音が――

「ああ…いいって。そう気にすんなって。
ほれほれ、母ちゃんが向こうで待ってるぞ」

そう優しげに語り掛けている彼の両の手の中、
『成』『仏』という文字が浮かんでいる。

“珠”に込めるのは飽く迄もイメージ。
彼の中にある成仏のイメージが件の少女の音色だとすると、それはそこで笛の音で持って再現する事もできよう。

霧が霞んでゆくように光が瞬き、速度を上げて天へ登ってゆく。

天に昇ると言う言葉を体現するかのように、三つの…いや、三人の魂はこの世から去って逝った。

どれだけの時間、見上げていた解からないが、三人は走りよってくる車の音に気付いて頭を下ろした。

車種に詳しいわけではないが、何度か聞き覚えのあるエンジン音にそれが高畑の車である事だけは何とか予想がついた。

ああ、迎えに来てくれたのかとボンヤリと考えていたその時、横島はある事を思い出し、この場に居る少女の名を呼んだ。

「あ、古ちゃん」

「な、何アル？」

唐突に名を呼ばれ、夢から目覚めたばかりの様に戸惑いを見せる古。

そんな彼女に横島は、

「悪りぃけど、オレと楓ちゃんの事、皆には内緒にしてくんない？バレたらひっじょーにマズいのよね。主に給金とかの罰則で…」

と手を合わせて拝んできた。

呆気にとられ、楓に眼を向けると彼女は自分と同じ様な顔をして呆れているではないか。

妖怪変化のような回避能力と、計測しようが無い力量と、死者にすら優しい心を持つ謎の男。

未知なる力を振るう横島忠夫と古との出会いはこうして幕を閉じる。

あの時踏み出した一歩。
その一歩が彼女の居た一般的な道から大きくずれる第一歩だとは……流石に思いもよらなかったが……

「勿論ね。それにアナタに興味が湧いたアルから迷惑はかけないヨ」

「ちょ、まっ?!　ナニその笑い?!　なんかものごっつ不穏なんですけど――?!」

「気にしないアルよ。フッフッフッ……」

「ここにはこんな娘っ子しかおらんのか――っ?!」

古は後悔はしない。

別の強さが存在する新しい世界を知ったのだから。

だから笑う。
楽しげに。

このビックリ箱の様な青年に会えたのだから。

「という訳で、これから宜しくアルよ」

古が関わってくる事は間違い無さそうである。

楓は横島よりも先に諦めの溜息を吐き、まぁいいか…とあっさり受け入れていた。

間接的とはいえ、彼女の…古のお陰で横島忠夫という人となりをまた知る事ができたのだから。

アスファルトに突き刺さっていた自分の風車手裏剣を引き抜き、楓も横島をからかいに走る。

“二人”で横島をからかう事が日課…楓はそんな確信めいた事を考えていた。

後編（後書き）

お読みいただき感謝の極み。

手直しでも難産でした……

あの時も横っちを活躍させず活躍させる…それをモットーにしたくて削っちゃ直し、直しちゃ削りの繰り返し。

中身は大人なのに十七歳時の霊力と霊能力しか使えないという設定なので、ごっつタイヘンなのです。

じゃあ、そんな設定にすんなよ！！　と言われればそれまでですが……イヤハヤ。

次回は修学旅行前の話です。

長くはありませんが、短くも無いでしょう。多分。

という訳で、続きは見てのお帰りです。ではでは～

前編

「ご苦労じゃったのぉ」

「いや……そうでもなかったよ」

朝も早い学園長室。

騒動の後始末と、確保された侵入者の尋問等を終わらせたとはいえ仕事が終わる訳ではない。

廻ってくる始末書の整理やら施設の修繕。何処ぞの吸血鬼が起こした騒動の後始末も別件で行わなければならないのだから。

幸いにも仮免の警備員が式神使いを取り押さえてくれたので責任を押し付けることも出来るのだからマシとも言える。

案の定、その術者への依頼人の氏素性は不明であったが。

それは兎も角、学園長に報告書を提示したのは褐色の肌に長い黒髪を後ろに流す長身の少女。

女子中学生という世間一般で言うところの若輩なれど、年齢度外視の落ち着いた色気と実力を持ち、“裏”でもその名は知られている。

無論、“通り名”の方であるが、この学園にいる以上は今使っている名で呼ぶ事にしよう。

即ち――

「それで、あの二人はどうじゃったかの？　龍宮君」

龍宮　真名という名前で。

「楓の方は今更言うまでも無いよ。そのまま“本気の私”と闘える程の実力があるからな」

問われた真名は腕を組んだまま、学園長の問いを慇懃さが見えない口調で返す。

普段は目上に丁寧語を使用する彼女であるが、今はビジネス中。よって口調もこうなってしまう。

プロである以上はプライベートとビジネスは完全に別件としているのも当然か。

学園長――近衛はこの少女に夕べの仕事時の二人の見定めを依頼しておいたのだ。

突発的に湧いたハプニングによって図らずも実力を見る機会が与えられたのは幸いといえるかもしれない。

「で、横島君の方はどうじゃったかの？」

彼からしてみればこちらの方が重要である。
何せ楓の方は真名からある程度話を聞いていたのだから。
仙人のような長い顎鬚を撫でつつ真名の返答を待つ。

真名の方はというと、やや眉を顰めるという珍しい表情を見せていた。
言い難い…というか表現し辛い…といった塩梅か？
数秒の熟考の後、真名は口を開き、

「……甘過ぎるな」

と端的に言った。

「ほぉ？」

近衛は片眉を跳ね、その意味合いを判断しかねた。

無論、真名もそれだけで説明できたとは思っていないし、仕事ができたとも思っていない。
だから補足を行う事も忘れない。

「相手を倒す…という事に関しては楓以上…いや、下手をすると私以上かもしれない。
ちょっと考えられないくらい道化を演じ切り、相手の油断を誘い機を見るに敏で動く。
実際、式を倒した時は私の“魔眼”でも彼の行動を完全に見切ることは出来なかったからな」

「何と…」

自分を卑下するでもなく、純然たる事実。
初対面で敵として戦っていたとしたら数秒と待たずに地に伏しているのではとも思う。

では何が甘いというのか？

「以前何をしていたのかは知らないが、彼は霊や女に対して甘すぎる。
特に彼は女に対して絶対に手を上げられない」

強迫観念と言ってもいいだろうな…そう真名が後を続けると、興味深そうに近衛は聞き入っていた。

「霊体に対してもそうだ。理由は解からんが何やら想いを持っているようだったぞ？」

そう言えば同僚の女性が３００年ほど幽霊をやってたとか言っておったのう…と近衛は青年の話を思い出して一人納得している。

更に近衛らには語ってはいないが、職場の近所の公園では陽気な浮遊霊達が宴会を開いていたりするのだ。

だから青年にとってはかなり身近な存在なのである。

「女の為に傷付いて、霊の為に骨を折る……その甘さが命取りになる可能性は高い…いや、高過ぎる」

「ふぅむ……」

その報告は既に高畑経由で耳にしており、始末書も書かせて既に眼を通していた。

証拠物件として残っていた身代わり符。

その依り代として遺骨で括られていた三人の子供の霊を横島は独断で鎮魂したというのだ。

横島の話によると、五歳の男の子と四歳の女の子、そして七歳の女の子だという。

＜返りの風＞の影響を僅かながら受け続けていたので自我が崩壊しかかっており、下手をすると“よくないもの”へと転じてしまうかもしれない。
だから彼はそうなる前に成仏させたというのである。

実のところ証拠物件を破棄する事になったのは別に気にもしていない。
真実看破の部屋で尋問すれば良いのであるし、事が学園都市襲撃というテロ事件なのだから心を読んだっていいのだ。
確かに証拠は多いにこした事はないのであるが、自分らの立場は所謂“一般”とは異なっているのでそういった裏技が“利く”のである。だから楓が気にする程ではなかったのだ。
まぁ、注意はしっかりと与えておいてもらったが…

『……にしても、浄霊を一瞬で出来るとはのぉ……』

青年の実力を聞いた時には流石の近衛も瞠目していた。

彼らの常識からすれば、浄霊や鎮魂は結構大掛かりな儀式を講ぜねばならないものだ。

何せ相手は死んだ者。成仏する方法など本人（？）が知る由も無く、如何に説得しようとどうこうできる代物ではないのだから。

となると力尽くで“祓う”他手段は無い。
剣や術を行使して、その存在を祓うのである。

だが、彼は＜成仏＞させた。

霊達をあやし、慰め、天へと導いてやったのだ。

実力もさる事ながら、霊達に対しても優しさを見せる彼の行為は好感こそ持っても怒るには及ばない。

まぁ、霊にすらそういった想いを持てるからこそ『甘い』と称されるのだろうが。

「では、採点すると何点ぐらいかの？」

とは言っても、これからの事と人格は別問題だ。

その長所が短所になりかねないのなら、仕事を変えるまでである。

だからプロから見た点数を問うてみる。

そうだな…と真名は首を傾げ、

「……六十点……くらいか？」

と意外に高い点数を述べた。

「ほほぉ…？　赤点は免れたといったところかの？」

「私も甘いのかもな」

そう苦笑し、机の上に置かれた茶封筒を手にとって懐に入れ、近衛に背を向ける。

仕事は終わったのだからとっとと自室に帰り学生の身に戻るのだ。

「一緒に組むのは勘弁だが、彼の実力は貴方達の…いや私の想像を超えていた。

甘さは目立つが隙まで目立つ訳じゃないようだしな。

それに……」

「……それに？」

ドアを開けつつ近衛の問い掛けに対し、

「あの男……何だか面白い……」

珍しく微笑を見せつつそう言った。

返答が気に入ったのか、近衛はふぉふぉふぉと宇宙忍者宜しく笑い出し、真名はそんな依頼人に頭を下げ、

「では、失礼します」

と慇懃さを表わし、関東魔術協会理事長室という“裏”から、明るい陽が射す“外”へと戻って行った。

パタンと閉じられた学園長室で近衛は一人笑いながら引き出しを開け、判子を取り出してテーブルの上に置いてある書類にポンっと捺印する。

何が面白いのかククク…と笑いを残しつつ、

「優しいが故に甘く…そして面白い…か……
ワシもそう思っておるよ……」

近衛の顔は、本当に楽しげであり、嬉しげであった。

横島　忠夫

長瀬　楓

両名、学園警備班　一本採用ー

■四時間目：ハダカの銃を持つオトコ　（前）

風の中を駆ける――

風となって駆ける――

忍者さながら、人外そのものの動きで駆け回り、姿を消す。

茂みの枝葉を揺らす事無く木々の間を抜け、ヤモリより素早く木

に登り気配を閉ざす。

するとその後から何人もの男達が詰めかけ、周囲を探り怒声を上げる。

「くそっ!!　どっち行った?!」

「ゴキブリの様な奴め……」

「なら同じ様に始末してやる」

「逃がすな。八つ裂きにしろ!!」

「応!!」

ドカドカと地響きを立てるように男達は別々の方向に駆けて行く。

殺す気と書いて殺気。

その殺気を満々と溢れさせている男らがいなくなってもその場に動きは無い。

小鳥が鳴き、風に木々がさざめく音が聞えるのみ。

そして彼らがいた気配すら感じられなくなった頃になり、ようやく一人の少女が姿を現した。

長身であり、素晴らしいプロポーションを中等部の制服で包んだその少女は、この近くの和菓子屋の紙袋を抱えており、男達の去った方向を暫く見つめてからゆっくりと足を踏み出してゆく。

さわさわとやわらかな風を頬に受けつつ、少女はのんびりとした歩調で歩いてくる。

やがて男達が言い合いをしていた一本の木の下に歩み寄るとその上を見上げ、

「もう行ったでござるよ」

と声をかけた。

途端に枝葉の間に気配が湧いて出、何者かがずるりずるりと幹に沿って降りてきたではないか。

恰も百日紅の幹から猿が滑り落ちてくるように。いや、木自体は桜であるが。

「…にしても、凄まじい隠行でござるなぁ……
拙者ですらこの木に登って行ったところを見ておらねば気付かないでござるよ」

「……」

手放しの楓の賛辞も精神疲労で肩を落とした青年を立ち直らせるのには程遠い。

彼女が後からがばっと抱きつきでもすればかなり高確率で回復するだろうし、彼女もこの青年にそんな事をやってみたいという誘惑に耐えていたりする。

尤も、成功したらしたで彼は別の意味で精神が追い詰められてしまうだろう。

恐らくは心の奥から『リーチ！』とかいう声が聞こえたりして。

だから楓は武士の（忍びの？）情けで抱きつくという妙案を却下していた。

「何で…」

「ん？」

「何でオレがこんな目に遭わなあかんのや……？」

搾り出される悲痛なる声。

イロイロ追い詰められている鬱積はかなり危なく臨界点に達していた。

「ん――」

楓はそんな青年に持っていた袋からペットボトルのお茶を取り出して手渡し、口元に指をやって考えを廻らせて行く。

とは言っても、思いつく理由は一つしかないのだが。

「それは、横島殿が拙者らに手を付けたからでござろう？」

「完璧且つ徹底的に濡れ衣じゃねーかっ！！」

あの夜から既に数日。

横島と楓は正式に魔法関係者としての警備員として認められていた。

まだ学生の身分である楓は兎も角、横島はこの学園に就職している。

だから新たに組まれたローテーションでは、始業から放課後まで用務員として過ごし、放課後からは基本的に自由行動となった。

何だか高待遇のようであるが、有事の際に魔法教師や魔法生徒らよりフレキシブルに動けるようにされているだけで、用務員としての掃除やら雑務に追われつつ生徒らを見守るという非常に広範囲に働かねばならない大変なものだったりする。

尤も、冷遇されているわけでもなく、本採用となったお陰でちゃんとした部屋を与えてもらっているし、一通り以上の雑務は“向こう”でやらされて（涙）おり、工務店レベルの補修すら出来る彼はその実大変重宝されてたりする。

何せ手早くて正確で丁寧なのだ。用務員レベルはかなり高いと言えよう。そんな物があるかどうかは知らないが。

自室には非常回線用の端末すら与えられているのでネットサーフもできる。

生活必需品としてテレビとエアコンと冷蔵庫と電話もある為、文句など出よう筈も無いのだ。

まぁ……女子中等部の女子寮近くの部屋なので、端末にはちゃっかりペアレンタルロックがかけられているからエロサイトとかには行けないのはしょうがないが……

それでも高待遇である事に間違いは無い。

十代のころの赤貧状態からすれば夢の様な生活状況である。潤いは無いが。

そんな彼に二人の少女が弟子入りを果たしていた。

その少女の名を長瀬楓。

そして……古菲という。

弟子入り…というのは語弊があろう。

武術の技術であれば横島を凌駕しているのだし、ぶっちゃけ物理攻撃力でも勝てる点は皆無だ。

彼女が弟子入りを申し込んだのは、彼女が至らない点…氣の使い方と戦闘そのものである。

内氣功と外氣功、硬氣功まで使いこなす彼女であるが、流石に楓や横島ほどの強さには届かない。
特に楓は氣を練りこんで分身を作り、尚且つ其々に氣の攻撃を行わせる事が出来る達人だ。

武人として“そこ”に至ろうとするのは当然といえる。

だったら楓に頼み込めばいいだろう？　という説もあるが、実は楓は楓で横島に氣を習いたいと思っていたのだ。

何せ横島の言う所の“栄光の手”そして“サイキックソーサー”は楓らの知る氣とは少し違う。

彼自身もＰＳＹＣＨＩＣと言っているのだから、ぶっちゃけ“意思”を形状化させたものと認識した方が良い。
その出し方…というか力の練り方を彼に教授して欲しいと思っていたのである。

だから二人して彼に願い出た…とまぁ、そういった経緯があった。
それだけが理由なのかどうかは彼女らしか知らない事であるし。

言うまでもなく彼は渋った。そりゃあもう、愚図愚図と。

美少女（↑ココ重要）を戦いの場に引っ張り出すのも反対であるし、何より可により面倒くさいのだ。

しかし、既に彼の性格の一部はバレている。

特に楓には。

だから彼に絶対に拒めないよう強請…もとい、交渉にでたのだ。

曰く――

「もし聞き入れてもらえぬのならば、
拙者らは許可してもらえるまで毎日半裸でにじり寄って説得するでござるよ？」

――――彼に退路は無かった……

「くそぉ……ジャスティス（ロリ否定）がオレを責め苛んだりさえしなければどうにかなったのに……」

「その代わり、拙者らは横島殿に“どうにか”されているでござろうな」

「……」

正論だ。

ジャスティスが責めないというのであれば肯定しているという事なのだから。

所詮は横島も男である。女に口では適う訳が無い。

「ささ。今日も修業の続きを　スル　でござるよ♪」

楓は喜色を浮かべつつ手を差し出し、彼を連れて行こうとする。

あれから毎日行っているが、それがなんともいえない体験なのだから。

「ちょ、まっ！！　せめてその不穏当なセリフは勘弁して！！」

「だったら自発的に拙者らをイロイロ教えて欲しいものでござるよ」

「イロイロって……」

「ナニを想像してるでござる？」

「うっさいっ！！　泣くぞ？！」

「はっはっはっ　既に泣き顔でござるよ」

横島はすっかりペースを握られている。

“あの夜”からこっち、何だか楓は前以上に横島のすぐ側にいた。

物理的な距離では無く、こうやって彼をからかえる精神的な意味合いでの位置で。

「うう……もう勘弁して欲しいんやけどなぁ……」

「約束を…違えるでござるか…？」

一転してくしゅ～んとした表情を見せ、眼差しで持って横島を責めた。

寒い冬の夜に出会ってしまった捨て犬というか、雨の中でウッカリ見つけてしまった子猫というか、そんなオーラが横島を襲う。

無論、言うまでもなく彼が、

「わーった！！
わーったから、そんな目で見んといてーっ！！」

そんな眼差しに勝てる訳がなかった。

「そうでござるか♪　さて、行くでござるよ。いい場所があるでござるに」

コロリと機嫌を直し、横島を引き摺るように連れてゆく楓。

その足取りは楽しげで軽いが、連れられて行く横島の後には心の汗の跡が延々と続いていたという……

切っ掛けは、ゲートでの戦いの後に起こった――

前述の通り、古は横島の氣の使い方の弟子（っポイ何か）となったのであるが、“向こう”の弟子である人狼族の少女と違って、古は氣を練る事は出来ても“出す事”は出来ないのだ。

この歳で浸透勁すらできる古であるが、流石に氣を具現化は無茶過ぎる。当たり前といわれればそれまでであるが。

だから横島はある特殊な方法で持って氣の流れに慣れさせる事にしたのである。

――したのであるが……それが彼の危機を呼び込んでしまったのだ。

「アイヤ…アレはホントに凄かたアルよ。
あんなのがワタシの中に入るとは思わなかたアル。
最初は少し怖かたけど、慣れたらちょと気持ちいいネ。
何事も慣れが肝心いう訳アルな。
お陰でお腹の奥が温かいアルよ」

最初に断っておこう……

単に氣の鍛練の感想である。

モノが氣であるから普通に口で教えるのは無理があるし、かといって彼女は氣を練れても“出す”事が出来ない。

体内で練り上げた氣を全身を回らせて力を増す…そんな事は彼女だって出来る。

だが、どうやって経絡を辿らせて外氣功が如く発露させれば良いかという事となると話は別なのだ。

困った事に、その方法にしても横島には思いもつかなかったりするのだ。

というのも、彼の場合は“向こう”の人狼族同様に無造作に“出来てしまう”ので、修練によって編み出す方法が解からないのである。

だが、約束は約束。それも“美少女”との約束なのだ。

幾らストライクゾーンから外れているとはいえ、古は間違いなく美少女。

美少女との約束を違える様な罰当たりではない横島は、無い知恵

絞って必死に考えた。

そして思いついたのが…

自分の霊気を古に伝え、体内を回らせる感覚を身体に直接教えるという方法であった。

言ってしまえば古の身体を使って周天法を行うのである。

こちらの世界では氣を操るのだろうが、“向こう”では霊力を操って体の中を回らせたり、中から外へ、外から中へと繰り返す。

尤も、その記憶も例の記憶消失によってかなりうろ覚えとなっており、何でそんな事を知っているかも不明だったりする。それでも表情に出す事はなく、任せておけいとばかりに古と手を繋いで自分の霊力を流し込んで彼女の氣を誘導する形で導いて身体に使い方を教えてゆく。

言うまでもなく他人の霊力が身体を廻るという感触なんぞ完璧な未体験であり、尚且つ横島自身も全く気付いていない事であったのだが、言ってしまえば内外から身体を弄っている様なものだったりする。

それが先の古の感想に繋がったのである。

無論、楓も同様の体験を――古の様子を見て、余計に語尾を強めて申し出ていた――したのであるが、やはり同じ感触を堪能…もとい、味わされていた。

問題は……この問題アリアリなぶっとびセリフを古が＜超包子＞

でのバイト中にぶちかました事である。

麻帆良学園中等部3年A組　古菲。

中国武術研究会部長という肩書きを持っている彼女は、毎朝のように腕に憶えのある男共に勝負を挑まれている。

その強さは誰もが眼を見張り、攻撃の鋭さや豹の様なしなやかさには眼を奪われているほど。

実際のところ、殴られる為に勝負を挑んでゆく輩だっているのだ。

ぶっちゃけて言うと、病的なファンが多いのである。

そのファン層は厚く、中等部は言うに及ばず高等部や大学部にも及び、自分を是非にも弟子に…と詰め寄る者も後を絶たないのだ。

弟子を取らない理由は自分も修行中だから…との事であるが、そんなモテモテである彼女がイキナリ艶っぽいセリフをぶちかましたのだから大変である。

やれ殺すだの、魂とったらぁ！！　だの、

相手は誰じゃ――っ！！　何処の馬の骨じゃ――っ！！

ボ、ボクの菲ちゃんが穢されたんだな。ゆ、許さないんだなっ！！

部長に甘い声で『らめぇ』と言われたい！！　だの、とんでもない大騒ぎとなってしまった（後半はなんか違う気がするが…）。

更に運の悪い事に古と親しげに話をしていた横島の姿を発見されてしまったりする。

不幸中の幸いに面だけは割れておらず、まだ最重要容疑者レベルであるが、それでも横島は古と一緒にいるところを発見されると男子格闘系クラブの関係者に今のように親の仇が如く追い回されてしまうのだ。

「オレ、何もしてへんのに……」

「まぁまぁ…」

一応、楓は噂が広がるのを逆利用し、横島像を曲げて伝え広げているので、単に歩いているだけでは横島だとばれたりしないから大丈夫だ。

今追いかけられていたのは古が今日（無理矢理）行われる鍛練の事をまた公道のド真ん中で横島にぶっちゃけ、それを聞かれたからである。

だが、服を着替えて楓と一緒にいるだけでばれたりしないのはこの学園の生徒に認識阻害がよく効いているから…かもしれない。

「お♪　待てたアルよ♪」

学園の外れにある朽ち掛けた教会の跡地。その裏手。
崩れた壁の上に腰を掛け、＜超包子＞の袋に入った肉饅を食べながら古は横島らを待っていた。

青いツナギから普段着のTシャツとジーンズを身につけた彼の姿が見えると、横島の苦労も知らず嬉しそうに手を振っている。

「機嫌いいな。オイ……」

横島としてはゲンナリとしたものであるが、こんな笑顔を彼女に向けられてはそうそう文句も言えなくなる。
まぁ、実際に古が口火を切った事に間違いは無いが、彼女自身が悪い事をしている訳ではないのだし。

そう思いつくと肩を落とす事しか出来なくなる。甘すぎると真名に称されている点がそこなのだろう。

「当たり前ネ♪
　届かなかたトコロに手が届きそうになてるアルよ？　ココロも弾むの仕方ないアル」

「さいでっか……」

そんな風に機嫌のいい古は、授業を終えるとさっさと自室に戻ったのだろう。

バカイエローの呼び名を表わすかのような黄色いミニチャイナに着替えている。

ジャケットのような上着を脱ぐと肩は剥きだし。色気と躍動感が感じられるデザインのノースリーブである。

何となく胸がドキドキしないでもないが、それは＜むくつけき野郎ども＞に見つかった時の事を想像した所為だ……という事にして、横島は古の背後からそっとその肩に手を置いた。

「あ……」

ぴくんと反応してか細い声が漏れたりしたもんだから横島の萌えゲージは一気に飛び跳ねてカーンという鐘の音を響かせる。

何とか気を取り繕い、左手から霊気を送り込んで古の体内をめぐらせてゆく。

フツーなら異物として反発されるであろうそれであるが、横島は霊治療…ヒーリングができない代わりに霊気を送る事だけは一人前だったりする。

以前、人狼族の少女を保護した時、結構重い怪我を負っていた少女に対し、所長と一緒に霊気を送り続けて人狼族独特の超回復能力

を促した事があるのだが、そのとき以来、霊気を送る事“だけ”は得意となっていた。

肩から胸、そして腹、
丹田を廻って氣に反応させ、今度は古自身に霊気を追わせる。

その繰り返しで古に氣を回らせる方法を身体と霊体に教え込んでいっているのだ。

ただ、霊気で持って全身をくまなく撫で回されているようなものである為、古は顔を赤くし、ぴくんぴくんと可愛い反応を見せていたりする。

その間、横島は必死で『平常心…平常心だ』と自分に言い聞かせて般若心経を唱え続けていた。もう経本何ぞ見ずとも観音経だって唱えられるぞ！　等と言っているくらいなのだから相当だろう。どこの修行者かと問いたい。

しかし言うまでもなく、古が終われば次は楓の番。
彼女は制服なので肩をはだける必要があるという事に……更なる苦行が始まるという事に、横島はまだ気付いていなかった――

「ふ～…いい汗掻いたアル～～♪」

「いやはや…古の動き、見違えるようでござるな」

真っ白に燃え尽きている横島を他所に、古と楓は異種格闘に興じていた。

攻撃をかわして一撃を入れるのが楓の戦闘スタイルであるが、古はカウンターで技に持ち込むのも得意とするファイターだ。

まぁ、楓は古より氣の使い方では二歩も三歩も前を行っているのだから手加減をする必要はあるのだが、分身の術を封じてガチでやり合うだけでかなり面白いバトルとなる。

楓としても体捌きの鍛練となるし、古にとっては達人との戦いだ。面白くない訳が無い。

今まで土日や休日しか修業を…それも自己鍛練しか行えていなかった楓であるが、古が（自分から）巻き込まれたお陰で実に充実した日々を送れていたりする。

「でも、まだまだネ。硬氣功は以前より格段に強くなたアルが、攻氣は全然アル」

「それでも僅かの間に一センチ程も攻の氣が出せるようになったのは凄まじいでござるよ。

拙者も気が抜けないでござるな」

「アイヤ〜　照れるアルね」

実のところ、横島のようなやたらと巧みに周天法を行える達人は数えるほどしか居ない。
彼自身が全く自覚が無いのだから始末が悪いのだが、その巧みさ故に古の技術は格段の進歩を遂げていたのである。

大体、どこの誰が他人の中に霊気を送り込んで相手の意識と追いかけっこができるというのだ？
それも霊力中枢を順番通りに駆け抜けながら。

お陰で楓も古も一足飛びに氣の使い方を会得する事が出来ているのであるが…やはり彼はメチャクチャである。
この世界のヨガ導師とかが聞いたら自分の力の無さに泣いてしまいそうだ。

まぁそれは兎も角、

古はそのお陰で間合いが一センチ程のびていた。
まだまだ楓の様に氣を叩き出す事はできないのであるが、練り上げた氣を拳の直前で破裂させられるようになったのである。
その衝撃があるので実質的にはもっと距離があるが、インパクトの瞬間のダメージから鑑みれば最も効果的な距離はやはり一センチなのだ。

僅か一センチと言うなかれ。
達人同士のバトルにおいての一センチとは、永劫の距離にも匹敵するのだから。

正拳と平拳との打ち合いで、その握り込みの僅かな長さだけで勝敗が決まってしまう場合だってあるのだ。

彼女くらいの達人ともなると、この一センチという距離は物凄く大きな意味をもつのである。
それに氣を練る速度も僅かに上がっており、総じて身体能力も上がっているのだから機嫌がよくなるのも当然だろう。
まぁ、それでも楓に掠りもしていないのであるが。

「横島老師もワタシと手合わせしてくれたらいいアルのに……」

楓の話によると、横島の回避力はその彼女すら凌駕すると言う。
となると一度は手合わせして欲しいという欲が出てくるのも当然だ。

「だ、誰が老師やねん……」

「おぉ、正気に返ったでござるか」

ツッコミを入れるべく復帰するとは相変わらず芸人魂を裏切らない男だ。

彼としては老師と言われる事はサルと呼ばれる事と同意なので余り嬉しくないのだ。
言うまでもなく古の言う老師は、師父とかを意味する言葉なので他意は無いのだが。

兎も角、横島はツッコミを入れた勢いで立ち直ったのか、ずるずるとゾンビが如く身を起こしてゆく。
その様は不気味そのものなのであるが、楓はさして気にもせず嬉しげに駆け寄って行った。

「ささ、手合わせするでござるよ。手合わせ」

「あ〜〜!!　ずるいアルよ!!　何で楓は良いあるか?!」

腕を引いて横島に肩を貸しつつ、当然の様に手合わせを願い出る楓にやはり古から文句が出た。

そんな古に対して軽い笑顔を見せる楓は、

「いや、拙者は横島殿のパートナーである故、お互いの実力を見知っておく必要があるでござる」

「だたら、ワタシもパートナーになるアルよ!!」

「はっはっはっ　駄目でござる」

横島の意見を無視し、ギャーギャーと騒ぐ少女達。

何だか“向こう”の生活を思い出すなぁ…等とぼんやりと眺めながら、

『じゃあナニか？　向こうと同じよーに騒動に巻き込まれるっつー事なんか？』

という仮説にぶち当たり、頭を抱えて悶えてしまう。

それがキミの運命なのだよ。少年――

等と、どこかで聞いた様なムカツク声が聞こえた気がした。

＜栄光の手＞

切り落とした罪人の手を使って生み出す呪術道具……ではなく、とある事件の折に追い詰められた横島が土壇場で霊格を上げ、霊気を集束させる事によって誕生した万能の武器である。

普通に出せば手甲となり、闘おうとすれば霊波刀となる。

聖光すら効き難い強化ゾンビすら数体まとめて貫いて倒し、まるでダメージを与えない不殺の道具としても使用する事も出来るという理不尽さを持つ、横島忠夫のオリジナル霊能力だ。

だったら殺傷能力を無くした剣のモードを使えばいいだろう？

という説もない訳では無いのだが、それでも横島は“使えない”。
女に対し……敵でもない女性に対して自分の武器を向けられないのである。

楓も古も何度となく問うてはいたのであるが、どうやっても口を割らないし、ヘタクソな嘘を吐かれてしまう。
ただ、時折苦い表情を見せる事があったので聞く事を止めていた。

そんな彼と手合わせをする……それは必要以上に難しい事なのでは無いだろうか？

だが、楓は武器を持たせるという事でそれをクリアしている。

言うまでもなく普通の武器では彼は応じまい。何がイヤなのか甚だ不明であるが、やはりダメージになるような武器を自分らに向けられないのだから。

それでも楓はメゲずに彼のそのクセに抜け道を見つけ出し、彼と手合わせができるような場を生み出す事に成功していた。

その武器とは――

すぱ――ん！！

「あ痛っ」

古の見ている前で、驚くべき光景が展開されていた。

全部で五人になって同時攻撃を掛けている楓の全ての攻撃を見事得物で捌ききり、

背後から迫る氣が乗った拳を左手に出したソーサーで持って受け止めつつ、それを踏み台にして背後に飛び、

三身一体の攻撃を踏み込む事で避け切って、真ん中の分身の背後から真の攻撃を入れようとしていた楓の額に一撃を加えている。

回避の見栄えは最悪で、あの夜の無様さを彷彿とさせるものであるが、その技術そのものは達人クラスだ。

楓の仕掛けるフェイントからの関節技も、時折混ぜて放つ古のに似た打撃も全てギリギリで見切られ、

腕を取り、肘を決めて投げようとする楓より先にその身を飛ばせ、着地と同時に足払いを掛けて反対に楓の身を巻き込んで倒している。

どんな達人だこれは？

一体がひっくり返されると四体が同時に攻撃を仕掛けたのであるが手に持った得物の一閃で全員が額に一撃を入れられ、彼の背後から迫った“六人目”の手刀も手で掴み取られていた。

「うう～……参ったでござる」

と、流石の楓も降参した。

武術の心得が無いくせに動きが存外に早く、尚且つ回避能力が人外である彼を捉える事は尋常では無い。

思わぬ方向にかわされるし、想像すら適わぬ動きで翻弄されるしで不必要なまでに疲れさせられるのである。

彼はそんな楓を見つめながら『ふむ…』と頷き、右手に持ったままの得物に眼を落とした。

「うん。楓ちゃんの考えは正しい。

確かにオレはバトルは嫌いだし、嫌いでも憎んでもない女の子に手を上げるのは論外だ。

だけど……」

ぐっと柄に力を入れ、空に掲げる。

なんと言うか…土産物の木刀より安っぽいそれは、傾きつつある陽光を受けてまるで聖剣の様に輝いて見えた。

「オレはドツキ漫才は　大　好　き　だ！！」

それは、厚紙にアルミホイルを貼り付けて折りたたんで作った、楓作のハリセンであった。

自分の武器…霊気で女性を攻撃できない。

つまり、女性を攻撃する“氣”を持っていない彼であるが、ツッコミは別物なのか、それを手にすると昔から握っている相棒のようにしっかりと手に馴染んだ。

こうして楓は横島と手合わせをする事が出来るようになったのである。

「な、何でやねん……」

等と古がヘタクソなイントネーションの関西弁でツッコミを入れてしまうのも当然の事であろう。

その後、ギャーギャー喚いて手合わせを強請る古に根負けして何度かやりあい、呼吸を整えた楓がまた参戦し、二体一でやりあうハメとなったのであるが……

「く……

ふ、二人がかりで掠らせるのが限界アル……」

「何ともかんとも…無茶苦茶な回避能力でござるな……」

結局、横島に一撃を入れられず幕を閉じた。

その横島はと言うと、二人以上に疲労していたのであるが回復力も人外なので既に立ち直って、未だへたり込んでいる古から分けてもらった肉饅をぱくついている。

些か冷めてはいるが、その程度で不味くなる味でも無いし、そのくらいで文句を言う横島ではない為、美味しくいただいていた。

何も喋らず黙って肉饅を食べているのは、傍目より疲労が大きいからだ。

肉体ではない。ココロの疲労が…である。

何せ古はミニチャイナであるし、楓は制服のままだ。

両方ともミニスカートなのでパンチラどころかモロパンを彼に曝しまくっていたのだから、そりゃあダメージも大きかろう。

今も心の中では、銀髪に赤いメッシュの入った女性が、少女の時の姿で彼の肩に手を置き、

『先生……もう、良いではござらぬか。もっと正直になると楽になるでござるよ?』

とか言って優しく諭す…いや堕落を促してきやがる。

『ヨコシマ。
人間は本能の命令に生きる生物なの。だから本能に身を任せるのが正しいのよ？』

ナインテールの金髪美女も、少女の時の姿でそうほざいてきやがるし。
そんな少女らと闘うのは只一人、彼のジャスティスのみ。何と分の悪い戦いであろうか。

「ど、どうでもええけど、何で今日はこんなに激しいんだ？
慣れるまでは慎重にするって言ってたじゃねーか」

精神の誘惑に耐えかね…もとい、肉饅を食べ終えた横島は、頭に湧き上がる誘惑の声を誤魔化すかのように二人にそう問い掛けた。

実際、昨日はここまで酷くなかったのだし、二人とも慣れを感じたからといって性急に次の段階を求めるような素人でもないのだから。

二人はまだ座り込んだ格好のまま、楓が持参したスポーツドリン

クで喉を潤わせている。

やはり横島の奇妙奇天烈な動きに相当翻弄されたのだろう。

水着を脱がせる天才である某オコジョ妖精の動きにも軽く対応できる二人であったが、あのオコジョより動きがつかめない横島という存在は人として如何なものであろうか？

まぁ、横島から言えばあのようなオコジョの動きなど、

『フ…ッ　ぬるいわ』

であろうが。

それは兎も角として、二人は横島の問い掛けに対して僅かに首を傾げ、そう言えば言ってなかったっけと思い立った。

「拙者らは来週から京都・奈良への修学旅行に行くでござるよ」

「期間は五日ネ。その間は老師と修業ができないアル」

「だからその間の分をまとめてやっておこうと思ったでござるよ」

「纏めてって……ナニ考えてんだ……それと老師はよせっつーに」

ぶっちゃければ慕われているという事であるのだが、こーゆーの

は勘弁である。

しかし、話の中に修学旅行という単語が出て、何だか懐かしく感じてしまった。

「そっか……学生だから修学旅行なんつーイベントがあるんだったな。忘れてた」

実質、彼の年齢は二十七なのだから、修学旅行などは十年も前の話なのだ。

麻帆良学園というのは言うまでもなく超巨大な学園都市である。

当然ながら生徒数も膨大なものであり、エスカレーター式。

修学旅行も一つの区切りとなる三年の時に行われていた。

尤も、彼女らの学年だけで七百人を超すという大人数で、移動するだけで混乱する事は必死。

よって修学旅行の目的地はハワイ等の数ヶ所からの選択式となっていた。

楓らのクラスは留学生が多く、教師も含めて日本は初めて。

という事で日本文化を学ぶという意味も含めてクラスの総意……というこじつけの理由で委員長が独断と偏見によって担任教師が熱望している京都・奈良へと目的地を決めてしまったらしい。

「……ナニその委員長？　その教師にホレとんのか？
チューガクセイと淫行とは何たるハレンチな教師だ。訴えてやる！」

自分の事は棚の上に隠し置いて、横島はまだ見ぬ担任教師に憤慨して見せていた。
言うまでもなく、彼の想像上での件の委員長は三つ編みのスタンダード委員長であるし、担任教師はハゲたオッサンである。

「あ、いや…そーゆーのとは違うアルよ」

「まぁ、そうでござるな……
それにセンセーは女心はまだ理解できんと思うでござるよ？」

流石に子供が先生をしているとは言い難いし、証拠となる本人もおらず、尚且つ子供ならば結局は生徒より歳下なので彼は騒ぐに決まっている。
だからそこらへんを暈して説明していた。

「ナヌ？　女心を理解せぬとは罰当たりな奴め。いずれこのオレが成敗してやらねば……」

“向こう”の女性達が聞けば撲殺されかねないような“罰当たりな事を”ほざきながら、白とかブルーと白のストライプとかが見えているのもかまわず座り込んでいる二人から全力で眼を逸らして、

暇になりそうな来週の事を考えていた。

『そーか……三年が出払うのか……じゃあ、午後くらいはちょっと暇になるかな？』

どうせ三年のいる上の階に人がいなくなると用務員達は床磨きや清掃作業に追われるだろう。

そーゆーパターンは嫌というほど味わっている横島は、自分がやらされるであろう仕事を思い、溜息を吐いていた。

だが夜間警備は兎も角、数日とはいえ放課後に修業修業と言われなくなるのはありがたい。

久々に羽を伸ばせそうだ。

『フッフッフッフッ……見た目は子供、頭脳は大人であるこのオレだ。

女達をヒィヒィいわして英気を養ってやろうではないか』

根本からして間違っている気がしないでもないが、それ以前にナンパが成功するか否かが計算に含まれていない。

強く想われる事に関しては横島は既に父親を越えているのだが、女で遊ぶという事に関しては父の足元にも及ばないのも何だか物悲しい話である。

その事は何度も味わっていると言うのに、何度も繰り返してしま

うのは魂に根付いた病巣なのか呪いなのか。全く持って懲りない男である。

そんなフトドキな思いを回らせている事を何となく読んでしまった楓と古にジト目で見られている横島であったが、

何であろうか？　修学旅行の話をしている間にも言い様の無い不安感もじわじわと広がってきていた……

尤も――

『そっか……ウッカリと美人局をナンパする訳にゃいかんしな……』

彼自身はちょっとばかり的を外しているようだった。

前編（後書き）

丹田…まぁよく言う下腹にあるチャクラですね。実は女性の場合は丹田と言わなかったりします。
位置も微妙（お臍から指一本分下の奥）に違ってたりします。
ただ、ウチのマシンでは字が出ませんでしたので丹田で一括りにしてますからご注意を。

後編

その空間は南向きのワンルームだった。

白い壁紙が真新しく、木目調のフローリングが目にも美しい。
トイレバス付き、二つの電磁調理器のある簡易キッチン付き。
押入れに使える収納棚と、壁に収納できるセミダブルのベッド……

「なんつー贅沢な……」

等という声が漏れてしまうのも仕方あるまい。

簡易キッチンの下に備え付けられている冷蔵庫ですら、学生時分に使っていた冷蔵庫より容積が大きいときているのだから。

それよりなにより重要なのが……何と風呂付きという点であろう。

そう、風呂付きなのである！

それも結構広いのだ！

クソ寒い中、銭湯に向かわずとも良いのである！！

手で顔を覆い隠し、思わず天井を見上げる青年。
その指の隙間からはハラハラと熱いものが零れ落ちた。

何だろう？
本当ならＧＳという仕事上、何億という高給取りでとんでもない額の税金を支払わねばならない身分だった記憶が微かにあるというのに、

何故だろう？
今の自分の方が勝ち組だと思ってしまうのは。

瞼の下から溢れ出るのは心の汗か？　滔滔と流れ出る涙が意味するものは……

十七歳からの記憶と経験の大半が消失している彼が解かる筈も無かった――

本採用が決定し、正式な住処としてワンルームを与えてもらった横島。
彼は、その部屋の中を見て感動しまくっていた。

ここは、暦からすれば彼が実際に居た年代より二，三年過去の世界に当たるだろう。
実際、彼の記憶に残っているカレンダーから照らし合わせてもそ

うなのだから。

が、時間軸が過去というだけで、マクロで言えば全くの異世界である。

その証拠に、青年が知る携帯電話より、そこらの学生の使っている携帯電話の方が薄くて軽くて多機能だ。

連絡用にと支給してもらった携帯ですら彼の想像を超えている。

何せテレビすら見られるのだから。

ファッション等は元々朴念仁だった事もあってよく解からないが左程の差は無さそうである。

だが、そういった機械的な技術レベルは彼の想像より上にある事はハッキリと理解できていた。

ゲーム機も想像を絶する程高度な機能が満載で、画面もとんでもなく美しい。

携帯ゲーム機にしてもそうだ。

小さくて超多機能。何とソフトによって声だって出る。

某修業場の猿がみたら是が非でも欲しがりそうだと苦笑すら浮かんでしまう。

尤も、機能は充実して画面も音楽キレイであるが、シナリオに自由度は殆ど無いのが矢鱈と目に付く。

青年の知るカクカクしたポリゴン格闘ゲームの方が何だか楽しそうにも感じられた。

ま、それは兎も角として……

元々そんなにテレビゲームが好きという訳では無いからそれはスルー。いやぁ、別世界の技術ってスゲェなぁ…ってなもんで、その件は既に終了している。
ゲーマーではないので別にそんなモンに現を抜かさずとも生きて行けるのだし。

それよりも普通の生活品を手に入れるほうが大事である。
物価はやや“向こう”より高く、消費税も何だか高い気もするが、代わりに量販店等の値引きはこっちの方が上だったりする。
だから横島も思ったより色々と購入する事ができていた。

前述の通り、この世界は時間軸的には過去に相当するがテックレベルで言えば未来に当たる。
よって彼の知る１００円ショップよりこちらの１００円ショップの方が品数が充実しており、生活必需品の大半を揃える事ができていたのである。

支度金ももらえているし、ゲート事件のお陰で臨時収入もあったのだが、あえて１００円ショップで買い物をする男……
身についた貧乏性はどうしようもないのだろう。

それでも見た目は学生、中身は大人…である彼は、マンガ等の娯楽品よりも生活必需品を取り揃える事に重点を置いていた。
煩悩だけしか自慢できるものが無いと豪語していた彼がよくここ

まで生長したものである。

どーしても麻帆良では手に入らないブツもあったので、二人の自称弟子が来られないというのを幸いに、都市の外に出て重要な生活必需品を取り揃えてきた青年は、ラックや収納棚に其々を手際よく納めてゆく。

一人暮らしが長いからやたらと手馴れているのが物悲しい。

それでもテレビや冷蔵庫、エアコンに電話は備え付けられていたので別に高いものは買わずとも良い。それは大助かりだった。

その備え付けらしい２０インチの薄型液晶テレビと、安物とはいえＤＶＤプレイヤーという発明品を見た時には流石にカルチャーショックを受けてたまげたが、モノがモノだけに超高画質のテレビと超便利な映像再生機だと理解するのはとても早かった。

何せ――

「うむ、生活必需品。生活必需品♪」

と大事そうに紙袋から出してきたのはきわどい水着を着用している女性の写真が張り付いたパッケージ。

赤いビキニであるが、フロントの部分のホックがきれいに外れている事からナニなＤＶＤである事が窺い知れる。

そーいったブツを見られるとなれば僅か数秒でＤＶＤの使い方を把握してしまうのは流石だ。

それに“そんな物”を生活必需品と言っているくらいなのだから、如何に見た事も無い技術だとしても、エロスに使用する道具の使用

法を理解するのは難しくもなんとも無い。
驚くよりも先にコレで見たい！という欲求の方が天よりも高いのだから。
何処へ行っても彼は彼という事か。
まぁ、霊力起動の源が煩悩というふざけるのも大概にしてほしい存在なのだから間違っていないのだが。

鼻歌を漏らすほど機嫌が良く、飯より何よりも先にＤＶＤをセットする彼に『本当にそんな生活で良いのか？』と問いただしてみたくなってしまう。

いや、哀れにもそれが彼にとっては正しいのだろう。多分。

だが、彼は知らない。
まだ気付いていない……

パッケージにエッチっぽい女性が映えるエロＤＶＤらしきそれ。

その裏には、

一舞ちゃん十五歳　少し大胆にお兄ちゃん達にせまります一

等と書かれたロリ系である事を……

■四時間目：ハダカの銃を持つオトコ　（後）

「謀ったな市屋亜（しゃあ）。父さんと同じで僕を裏切ったんだ」

等とどこかで聞いたような、それでいてどこか間違っているよーな事をほざきつつ、朝っぱらから萌えない…もとい、燃えないゴミ

として昨夜のＤＶＤを破棄している横島の姿。
いや、萌えた後でパッケージ裏に気付いてしまったからこそ廃棄物にしたというのが正解だろう。
何だか背中が煤けているのが物悲しい。

横島の実年齢は兎も角として、外見年齢はどー見ても高校生くらい。
身分証明書はおろか保険証すらまだ持っていない彼は、当然ながらレンタルビデオ店の会員にすらなれない。その為、そーゆービデオソフトは購入せねばならないのである。

元いた世界での経験から、未成年にでもそーゆーモノを売ってくれるそーゆー店がどーいった場所に隠れているか等も必要以上に詳しくなっている横島は、持ち前の勘で秘密の店を探し出して好みの女性のＤＶＤを発見して悦び勇んで購入した訳であるが……

まさかあんなにチチもでかくて色っぽい姉ちゃんがおもっきり少女だったとは塵ほども思っていなかった。

おまけに楓や古とほぼ同じ年齢である。

「ちくしょう…どうしちまったんだオレのジャスティスは……」

等と唇を噛み締めて悔しがる横島。

内容を知らねばそれなりにシリアスに見えない事も無いが、モノがモノだけに情けなさ全開。尚且つゴミ捨て場でロリＤＶＤを前にしてのセリフなのでバリバリに不審者である。

だが、本人にとっては深刻だ。

スーパー見鬼くんと並び称される己の年齢測定センサーに狂いが生じている可能性がある事が余計に彼へのダメージを深めていたのだ。

幸いにしてこの日も二人はクラブに顔を出す為不在。

『惜しいけど今日も修業ができないでござる（アル）』との事。

昨日の今日でジャスティス（ロリ否定）も重体なので立ち直れておらず、横島は顔を合わせずホッとしてたりする。

まぁ、そんな事くらいで動揺している時点で終わりだという気がしないでもないが。

「さて…と、気を取り直して仕事に行こうかな～～」

そんな事を声に出して言うところに傷の深さが伺い知れる。

わざと声にして自分を鼓舞しているのが見え見えだ。

横島はポケットの中に“珠”を出現させ、麻帆良の屋上へと転移して行った。

元の世界でも現代の宝貝と名高いその“珠”。

今の精神状態で女子中学生が満載の電車に乗って自分を見失ってしまう危険性を避ける為に使用するとは……数多の神魔が聞けば嘆きの涙を零してしまいそうな話であった。

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊

「案外しつこいでござるなぁ…秘密でござるよ」

「ほほう…黙秘権？　よっぽど理由があるみたいだね～　そこんトコがもうちょっと知りたいんだけど？」

何時もの様に楓に朝倉が突撃リポートを敢行し、楓が逃げる。
ここ数日、見慣れた光景だ。

楓が年上の男性と深い仲となり、色気が増したという噂が流れているのだから、麻帆良のパパラッチを誇る（パパラッチを誇ってどーするという気もするが）朝倉　和美としては是が非でも真相を掴みたいところ。
和美の目からしても楓の雰囲気は如実に変わっている。こうなると単なる噂では済まなくなっているのだ。

それに鎌をかけるつもりで楓に、

「そーいやさ、噂のその人って優しい？」

と何気なく問い掛けたところ、

「とても思いやりがあって優しいでござるよ」

等とナチュラルに即答されてしまったのである。

楓はハっとして直に自分の口を塞いだのであるが、その行為が意味するところは実に重い。

何せ楓ほどのポーカーフェイスの少女が微笑みすら浮かべて言ってしまったセリフであり、口を紡ぐという事はそういったイベントがあったという事実を表わしている。

となると、どーいったイベントが発生していたのか知りたくなるのも人情だ。

だから懲りもせず今日も突撃しているのである。

「今日も飽きずにがんばるアルな～」

そんな和美を眺めつつ苦笑している古。

何せ楓の席は和美の真後ろなのだから和美はやり易く、楓は防御し難い。楓とてこれ以上担任に迷惑をかけられないから早々授業をサボるつもりは無いのだし。

左斜め前を見れば器用にも上半身だけを動かして和美のマイクから逃げ回る楓の姿。

前を見ればこのクラスの担任であるネギ少年がミョーにテンションを高めて修学旅行の説明をしている。

「うわ――

楽しみだな修学旅行！！！

早く来週が来ないかな――」

まるっきりお子様である……

そのノリに引き寄せられたか鳴滝姉妹が先生にじゃれ付いてバシバシ叩いている程。
彼の放つテンションの高さが伝播したのか、クラスもどこか浮ついているのだ。
まぁ、呆れ果てている人間もいないでもないが。

楓の逃げ足は師事している彼の影響からか以前よりも切れがある。
対して和美にあるのは異様な執念深さだ。
以前の楓であればのらりくらりと会話ではぐらかしていたであろうが、何故だか老師の事となると変な所でムキになってしまう。
だからこそ和美もそれを気にして執念で芸能リポーターばりの粘着質で追いかけ、楓は誤魔化して風の様に逃げ…と悪循環が続いていた。

写真は既に撮ってあるので、件の彼のところに取材に行けばいいのに…という説もあるが、そちらの方は意外にも真名が手を打っていた。

曰く――

『楓が付き合っている彼は、家族も友人も住んでいた家も全て一度に無くしているんだ。
ある事で彼と知り合いとなっていた学園長がそれを知り、居場所を与えた…という訳さ。
だから彼はしばらくはそっとしておいてやった方が良いと思う

ぞ』

……別に嘘は言っていない。
語っていない部分がやたら多いだけである。

真名にしては大盤振る舞いであるし、これ以上のフォローをするつもりもない。
後は自力でどーにかしろという事だろう。

実際、和美が楓ばかりを追いかけているのはそのフォローが効いているのだし。

和美とて実はお人好しであるから好き好んで居場所を無くした青年をいたぶる気は無い。
そんな彼の支えとなっている内に気持ちが芽生え、そして…といった段階を踏んでいると思われる楓の方が記事になるだろうし。
だから第一報以降の記事には横島の写真は無いのだ。

代わりに楓が割りを食っている訳だが……まぁ、それはさておき。

そんな二人を眺めながら、古は親友である超からもらった新作の肉饅をモソモソと齧っていた。

美味いのは美味いし、文句の付けようも無い。
自国でもこれほどの味に出会えるとは思えない程の逸品である。

にも拘らず、それを食べているのに古の反応は薄かった。

来週より五日間、修業時間が無い――

何だか気分的には“おあずけ”だ。

『ワタシは子供アルか？』

古自身、そう愚痴を零しそうになる程その事を気にしている。

いや、修業ができない…という事は無い。

今教室にいる時でも修業は出来る。

氣を練り、意識的に動かして腕に走らせ、肩に戻し、反対の肩に流してまた腕に走らせる。

たったこれだけの事でも相当の修練になるのだ。

氣の練り方と呼吸法と使い方を同時に学べる訳であるから実に効率的なのである。

打ち合いにしても、楓や親友の超に頼めば相手をしてくれるだろう。

体術的に言えば氣を教えてくれている彼より上なのだから。

――ただ、彼に会えない。

彼に教えを請えないのである。

その事がなんだかよく解からない胸の燻りを古に与えていた。

古自身でも理解…いや、“自覚”できていない気持ちの表れはそれだけではない。

彼の事を“老師”と呼んでいる事だってそうだ。

単に彼に指導してもらうだけならば師父だって良いし、先生や師という端的な呼び方でも良い。

にも拘らず彼女は最初から老師という呼び方で持って彼と接していた。

実際、彼は強い――

古も上手く説明できないのであるが、彼から表現し難い確かな“強さ”を感じ取っている。

今までの古の認識で強い男というのは腕っ節やしっかりとした気構えを持った人間の事であった。

彼女からしてみれば、母国の伝記や本山に伝わる勇者達のような人物……

敗北を含む経験を持ち、培った知識や体験を糧にして前へ進み続ける者。それが彼女が認識していた“強い男”の像である。

楓との関係を疑われている青年……横島忠夫。

古もつい数日前に出会ったばかり。

その出会いの時の戦いからずっと感心ばかりさせられ続けていたその戦闘スタイル。

楓のように氣でもって分身を作ったりできる訳でもなく、剣道部員である桜咲刹那のように武器に氣を通して闘える訳でもなく、

自分のように内氣を練り上げて闘う訳でもない。

何と彼は無造作に氣を…楓の話によれば意思を具現化しているとの事…無造作に束ね、盾を生み出したり手甲にしたり剣にしたり出来る。

氣を練って開放する事より束ねる事の方が簡単だというふざけた能力。

それでいて氣を他人の身体の中に浸透させて活性化させる事もできる。

実際、自分や楓の調子が上がってきているのも、彼が自分の氣を導いてくれているからだ。

その事は楓はもとより古自身が感じている。

女に手を上げる事が出来ず、逃げ回り避けまわるだけのヘタレな根性なしで、お馬鹿でド助平でデリカシーが無くて不死身のギャグ体質で無節操……

ざっと思い浮かべただけでもこれだけ文句が湧いて出てしまう。

だが、今思いついた文句を塗りつぶすほど、他者と接する時にこだわりが無くて優しいのだ。

尚且つ持っている能力は達人クラス。

暴力は嫌いだとか言いながらドツキ漫才は大好きなようで、ハリセンを持たせて戦わせてもらったら楓と二人がかりで攻撃しても掠らせるのが精一杯だったのだから。

強いのか何だかサッパリであるが、彼の目に時折浮かんで見えるひっそりとした光。

それが彼女に踏み入れない強さの片鱗を感じさせていた。

「う〜〜〜……何だか解からないアルよ〜〜〜〜……」

口に肉饅を咥えながら、机の上で頭を転がす。

何時の間にか彼の事が頭いっぱいになり、文句と長所と短所と尊敬と感謝をぐるぐる回らせてい自分がいる。

楓と恋人同士だと騒がれているのを聞くと、何だか面白くなくなってくる自分がいる。

『ワタシだって弟子アルよ』

と口に出してしまいそうになる。

「ワケ解かんないアル……」

同じ事ばっか考え続けていた古は、煮詰まって知恵熱が出て来そうになっていた。

机の上でだらりと垂れ、どこぞのでろんとしたパンダキャラのよう。

口はもごもごと動かして肉饅を頬張っているのだが、閉じられた瞼の奥では横島の事を考え続けている。

瞼に浮かぶのはあの夜の事。

成仏させた子供の霊達を優しげに見送るその眼差し。

そして――

『……あの光を見ていた時の老師の顔……』

何であんな表情をしていたのだろうか……

そしてまた、古は彼の事を悩み続けていた。

子供先生に問い掛けられても気付けないほど――

「んん～～……？」

「どうしました？　ハルナ」

「んん～…何かさぁ、のどかのとは別のラヴ臭をほのかに感じるよーな……」

「……アホですか」

＊＊＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊

きゃあきゃあ騒ぐ女子中学生達の声を遠くに聞きながら、青年は一人体育館をモップで擦っていた。

まだ全校清掃日ではないから滑り止めワックス等で拭かずとも良いのであるが、乾拭きは必要である。

部活後に体育部の一年らが一応は清掃してるのだが、やはり一晩経てばうっすらと埃も積もる。そんなに気にせずとも良いのではと思いつつも仕事であるし少女らの為だと思って、大きなモップでひたすら擦っている。

まぁ、ここは女子高生らも使用する事があるというので力も入るというもの。

どーせなら更衣室も徹底的に掃除してさしあげたいのであるが、中等部も使ったりするので逆にダメージになりそうだ。

それ以前にさせてはくれないのであるが。

「横島くーん。終わったら水も捨てといてねー」

「ういっス」

彼にそう声をかけ、一緒に掃除しているオバちゃんはゴミ袋を持って集積場へ。

お菓子の袋とかのゴミがしっかり残っていたりするのはいつもの事らしい。

この男、横島忠夫。

世界の半分はオバちゃんで出来ている――という理論を展開し、

何気にオバちゃんズとは仲良くしていた。

何せオバちゃんは独自の情報網を持っているから伝達速度が尋常では無いし、結束力も半端では無い。

流して欲しい情報をポロリと流せば夕方には麻帆良の端まで届く事請け合いであるし、逆に知りたい情報をさり気無く問えば次の日までには大抵の情報を握り締めている。

横島の父、大樹曰く――

『女を…特にオバちゃんの集団を舐めるなよ。
敵にすればの世間の半分は敵になるぞ？
そのねちっこさは尋常じゃないんだ』

そう語った父の真剣な眼差しにビビリつつ、横島は顔を青くしながらその事を心に刻んだものである。

だから横島と他の用務員らの仲はかなり良かったりするのだ。

それはさて置き、

「すー……はー……よし、もうドキドキせんぞ。オレはノーマルだ。うん」

大きく息を吸い込んで吐き、深呼吸をして体育館内に残る少女ら

の残り香でドキドキしない自分に胸を撫で下ろす横島。
しかし、確認の為とはいえ　やってる事は殆どヘンタイである。

まぁ、嬉々として吸ってないのだから情状酌量の余地はあるだろう。

夕べ受けたダメージが中々抜けなかった横島であるが、仕事をしている内に何とか鎮痛効果が出てきたようで、どうにかパラメーターを回復しつつあった。

そこまで焦らずとも良いだろう？　という説も無きにしも非ずなのだが、楓や古などの年代は横島の実年齢から言えば一回り下である。

そんな歳下の少女に萌えるのは大問題だ。

だからジャスティス（ロリ否定）が力強くがんばって彼の屋台骨を支えてくれているのだが……

どーもここんトコ、ナニかが心の奥から語りかけてくるのである。

『少年よ、何を気にしているのかね？
その心理抵抗の理屈はおかしいぞ。大体、ル…シ…の年齢は憶えているだろう？
彼女は……ザザ…ピー』

ナニか気を使われているよーな気がしないでもないが、よけーなお世話だ。

全力で意識を逸らし、何も聞えていない事にして気を取り直す。

「あーモップ掛けってタノシイナー」

等とヤケッパチになりながら見事体育館の隅から隅まで磨き上げ、専用のバケツで洗ってから絞り、言われた通りに水を捨ててバケツを洗って掃除用具入れに戻してゆく。

この几帳面さは丁稚時代に培ったもので、割と褒められる事なのだが彼はやっぱり気付いていない。

ちゃんと全ての窓の鍵を掛かっているか指差し確認してからドアに鍵を掛けて体育館を後にする。

魔族のペットとされていた頃から目立っていた掃除夫としてのプライドもあるかもしれない。自慢は出来ないが。

横島の仕事時間は放課後までとなっており、学校のチャイムに合わせて仕事をすれば良いのだから楽だ。

だがこれは、一般学生らを何らかの事件から守る為…という理由が含まれており、横島は実質警備員を兼任しているのである。

一応の仕事は終わったのであるが、帰宅部という名の少女らが満載された電車に乗ればまた心の傷が痛みそうなので、念の為に詰め所で他の用務員らとお茶をして時間を潰す。

オバちゃんズとオッさんズと茶を飲むという潤いの欠片も無い状況であるが、リハビリだと思って我慢している。

まぁ、それなりに楽しい会話であったが。

彼らは横島の事を身寄りが無く、用務員をして自活している少年だと認識している為、かなり気を使ってくれており居心地はそう悪く無い。まぁ、気を使われすぎて申し訳無いという気がしないでもないが。

チョコ皮に白餡という変わった饅頭を食べつつ、渋めの茶を啜っていたら何だか十も老けそう（つまり実年齢になるのであるが）だった。

来週から女の子達は修学旅行だから掃除がし易いわねぇ。
エスカレーター式だから気楽だねぇ。うらやましいよ。
そーいえばうちの孫がさぁ…

等とわいわい語り合っている。
そんな話に混じっているとを煤けてゆくとゆーか、枯れていく気がしないでもないが、中学生にハッスルするよか何ぼかマシであろう。

ほー…成る程そーですかぁ……それは良い事じゃのう……等と横島の精神が高齢化の兆しを見せてしまった頃、不意に彼の携帯が音楽を奏でた。
因みにダース〇イダーのテーマだ。

「ん？　誰からだい？」

と、何気なく問い掛けるオバちゃんに横島は、やっと使いこなせる様になった携帯でメールを読み終え、

「学園長っス……」

ゲンナリしながら携帯を閉じた。

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊

ノックをして部屋に入ると、ちょっと驚いた顔で部屋の主である近衛が迎えてくれた。

「おお、意外に早かったの」

「いえ、帰ってなかったもんで」

仕事中だったかの？　と申し訳なさそうな顔をした近衛に横島は手を振って否定する。
まぁ、それでも女子中学生の満員電車に乗って萌えに目覚めたくない等というタワケた理由は口にはしないが。

「そ、それで、何か幼児…あ、いや、用事っスか？」

……何だかまだ傷が深そうである。
つーか、自分で傷を掘り下げているよーな気もする。

そんな彼の心情を知ってか知らずか、あえて詳しく問いただそうとせず近衛は直球を放った。

「実は…ちょっと頼みたい件があっての」

「えっと…“裏”っスか？」

「うむ」

横島がそう問うと、やや複雑そうな表情で近衛は頷いた。

裏の…横島からいうとオカルト的な仕事…となるとちょっと真面目にならざるを得まい。
未だ傷の痛みを訴えているジャスティスを蹴っ倒して無理矢理奮い立たせて表情を引き締めた。

外見は若くとも、その中身は二十七歳のプロのＧＳである。
記憶はサッパリ戻っていないのだが、精神的な積み重ねは完全には消えてはいない。

近衛は横島の仕事モードの顔を再確認し、内心感心しながら手元の書類を立ててその件を彼に告げる。

「来週から行われる京都奈良への修学旅行に同行してもらいたいんじゃ」
「謹んでお断りさせていただきます」

シリアス声で語られた近衛の依頼を、横島は間髪いれず断りの言葉を入れた。

「なっ　即答?!　横島君、ちょっとそれ、ムゴくない?!」

何だかちょっと頭の悪い女学生のような言い方をして驚く近衛。
その気色悪い態度も相俟って、横島はまたキレていた。

「そりゃ断るわ――っ！！　爺さんボケたのか？！
オレを堕落させよ―という魂胆か？！　ナニ考えとんじゃ――っ！！」

要は、見た目高校生の横島に修学旅行の女子中学生らに付き纏えといっているようなものである。

そりゃ確かに嫌だろうが、言うまでも無くそれが依頼を断った理由では無い。

五日間、楓と古から開放されて羽を伸ばせると思ったのに、よりにもよってあの二人と一緒となる上、女子中学生の集団と共に行動するのはジャスティスに止めを刺されるのと同じなのである。

だから断ったのだ。それも全力で。

何しろ横島の倫理が関わっているのだから当然である。

が、そんな彼の精神状況を近衛が知る由も無く、学園長は苦しい胸の内を横島に語って見せた。

「実はの、前に言うたかもしれんが、ワシは関東魔術協会の理事をしておるんじゃ」

「え？　あ、はぁ……えと、それが何か……」

イキナリ何を言い出すのか。と、横島は勢いを削がれてしまう。
ここで勢いが失われなければこれからの時系列はほぼ変わりが無かったかもしれないが、ここで運命は大きく分岐の兆しを見せる事となる。

無論、神ならぬ二人が知る由も無く、近衛は話を続け、横島は黙って聞いてしまう。

「でだ、実は向こうには関西呪術協会というのがあっての」

「関西…呪術協会…？」

「うむ」

近衛の話では、日本は大雑把に分けて関東と関西の魔法協会に分かれているのだという。
横島が知るところの魔法である関東魔法協会と、彼の知る知識では符術師や式神使いにあたる術師の集団が関西呪術協会らしい。

まるで系統違うやん…と横島は思ったのだが、呪術も魔法の同じ魔法というカテゴリーに入るとの事。
考えてみれば、横島のいた世界とて魔法使いが使おうが霊能力者が使おうが霊力は霊力だったのだから、同じ様な大雑把な別け方なのだろう。

さてその二つの魔法協会であるが、実はその二派は昔から仲が悪

く、しょーも無い諍いを続けているとの事。
いがみ合っているだけで平和が訪れるわけもないし、そのまま連携が取れないままであれば、最悪、有事等が起こった際に共倒れとなりかねない。

無論、全部が全部という訳ではないのだが、恨みという根は深く、中々手を取り合うにまでは至れないのが実状らしい。

「ああ、デタント派と反デタント派がいがみ合っているよーな感じっスか」

「うむ…というか、いい例えじゃの」

「いやぁ…そーゆーのとやりあった事があったモンで……」

「ほう…？」

一瞬、横島のデタント――近衛らの認識で言うところの緊張緩和政策――の件とやらが気になった彼であるが、その話より頼みたい仕事の方が先だと思い直す。

ともかく、近衛としてはもうこれ以上つまらぬケンカをやめて仲良くしたい。

幸いにして向こうの長は近衛の娘婿で、近衛と同じ考えを持っていてくれているらしく、こちらの申し出を快く受け入れてくれるようだ。

「この修学旅行で一人の魔法先生が親書を持たせておっての。
その親書を無事に向こうに届けるのを見届けて欲しいんじゃよ」

「ははぁ……？　でも、他の魔法先生がついて行ったらどーです？
例えば高畑さんとかスゴイ強いみたいだし」

一人で危険だというのなら数を集めれば良いだろう。
普通そう考えるであろうし、当然といえなくも無い。だが、

「タカミチ君は駄目じゃよ。彼には別口の仕事が入っておるし、
何より強過ぎるし有名過ぎるでの」

そんな有名人を連れて行けば睨みを利かせに行っているようなものである。
向こうの長と高畑は知り合いなのだというのだからそんな馬鹿な考えは持つまいが、向こうの全員がそうだと納得してくれるとは限らない。

それに実力のある魔法先生も別の修学旅行の目的地に向ってしまうし、その力ある教師らは高等部の教師だったり大学部の教授だったりする。
中等部の修学旅行に高等部の教師やら大学教授やらが付き回るのもおかしな話であるし、何より自分の仕事に穴を空けてまで付いて行くという事で向こうで悪い意味で目立ってしまう。

だから護衛ともなるとそれなり以上の実力を持ち、尚且つ無名で

ある事が必要なのだ。

それに、問題はそれだけでは無い。

「実はの…楓君と同じクラスなんじゃが…ワシの孫である木乃香がおるんじゃ」

近衛の孫娘という事は、関東魔法協会と関西呪術協会とのハイブリッド……つまり、“東の派と西の派との間に立つ者”という事である。

デタントの話ではないが、そんな両陣営の親善大使みたいな存在を快く思わない輩がいないとも限らないのだそうだ。

幼馴染の少女が影からコッソリと護衛をしているのだが、親の方針でなるべく魔法に関わらせないよう教育されているのでどうしても無理が生じてしまう可能性がある。

彼女らの担任である引率の魔法先生もそれなり以上に腕は立つのであるが、経験不足もあってかまだまだ固い……と言うか、突発的な事件に対する融通が利かないらしい。

その点、横島なら機転が利くし裏技やイカサマが得意であるから突飛な事態でも対応できるであろう。

――と、高畑が横島を推したらしい。

『あ、あのオッサンはぁ～～……』

機転が利くと言ってくれるのは良いとしても、裏技やイカサマが得意等と言われて嬉しい訳が無い。

事実なだけに。

そんな文句が湧かないでもないが、伝えられた内容が内容である。強く仕事を拒否できる隙がなくなってしまったのが物悲しい。

近衛にとって幸いしたのは、横島はデタントでの諍いを嫌という程知っている事である。だから彼は決して楽観視していないのだ。

「となると…オレの仕事はその木乃香ちゃんの護衛と、その親書を持った魔法先生のフォローっスか？」

「うむ。追加として横島君が関わっている事をバレない様にする事…かの？」

「……」

その言葉を受け、横島は腕を組んで熟考する。

一見、その任務は軽いようであるが、抵抗する集団が物騒な思考を持たないとは限らない。

この前の式神使いのような＜外道＞を使用する輩がいないとは言い切れないのだ。

眼を瞑って熟考する横島に、近衛は再度彼を見直し、頼もしさを

感じるのだった――

が、当然ながら彼はその程度の器では無い。

『物騒な輩は兎も角として、行き先は京都……京都といえば京美人。

京美人と言えば舞妓さ……ン？

ハッッ？！　英語で言うところのＭａｉｋｏＨａｎの生息地ではないか！！

ぬぅっ、迂闊っ！！　あの地には色白のしっとりとした京美人の事を失念するとは何たる迂闊っ？！

思えば学生時代の京都への修学旅行。青過ぎるチェリーなオレ達はイタイ玉砕をしたもんだ。

女子の入浴すら覗けず、全員拿捕されて一晩正座の刑を喰らった屈辱は未だ払拭し切れていない……

今こそあの時の屈辱を晴らす時ではないのくわぁっ？！』

「解かった……引き受けよう……」

唐突にカミソリブレードの様な目となり、某デューク・〇郷を彷彿とさせる口調で無意味にシリアスな返答を見せる横島。

その邪…というかアホ過ぎる謀を知る由も無い近衛は、その瞳に見当違いの決意の光を見、

「うむ。よろしく頼むぞ横島君」

と想いを彼に託すのだった。

「それと同行方法はワシに任せて欲しい。
そのまま付いて行けばストーカーとしてタイーホは必至じゃからの」

「……」

その事をすぽーんと忘却していた横島は絶句してしまったが、露ほども動揺を見せずに深く頷く。
この程度の事で動揺を見せては“あの職場”で生きていけない。
特に雇い主の攻撃によって。

こうして内外の別の顔は全く見せず、依頼を引き受けて学園長室を後にしようとした横島であったが、

ドアの向こうに消える直前、ひょいと言い伝えておかねばならない事を思い出して近衛に向き直り、

本来のシリアスな光を眼に灯し、

「もし、その木乃香ちゃんという娘をそんなクソくだらない理由で傷つけようとする輩が出た場合は……」

――叩き潰しますけどいいですよね？

感情を全く感じさせない程の憤りを後に残していった。

「ふむ…」

彼が去った学園長室。

春の只中というのに、たった一つの言葉の発露によって室内気温が五度は下がった気がする。

一人部屋に残った近衛は髭を撫でつつ横島の言葉を噛み締めていた。

「女に甘い……か……成る程のぉ……」

近衛は真名が横島を称した事を今思い知った気がする。

と同時に、真名の言葉が少し間違っているとも感じていた。

「女に弱いのには間違いは無いが……あの弱さはそのまま強さになっておるのぉ……

アレは……」

近衛は最後まで言わず口を噤み、ふと表情を崩してもう一人に連絡を入れた。

彼があの感情を押し殺した憤りを持つ限り、最悪の事態は避けられよう。

だが、その事態に近寄れば近寄るほど彼は傷付いてゆく…そして

それは確信に近かった。

「フォフォフォ……ワシじゃ。おぉ？　いや仕事では無いぞい。ちょっと教えたい事と渡したいものがあるでの、すまんがワシのトコに来てくれんかの？
いや、お前さんにとって悪い話ではないかも知れぬぞ？
ん…解かった。待っておるでの」

電話を切り、その人物を待つ。

ふぅ…と我知らず溜息をつき、瞼を閉じて横島の表情を思い浮かべる近衛。

会った事も無い少女を傷つけようとする者に対し、純然たる怒りだけを浮かべた横島の顔。

女に対して弱さを持つが故の優しさからくる強さ。

だが、単一金属で成された刃のような鋭さを持つが故に、それ相応の脆さをも持ちあわせてしまう。

近衛はそんな横島を思い、彼の支えとなるようその人物を呼んだのである。

――アレは……
失う事の辛さを知る者しか出せない表情じゃからの……

人気の薄い道をギターケースを肩に掛けてた少女が歩いていた。
その少女と並ぶように、同様に肩に自分の得物を引っ掛けて歩いている少女が一人。
尤も、その少女の得物は竹刀袋が被さっているので剣か何かだと思われる。

ギターケースをもった少女の方はクールというだけで無口ではないのだが、相方の少女は必要以上に余り喋らないので結果的に会話は少なくなる。
それに不満がある訳ではないが。

「龍宮…」

「ん…？　何だ？」

静かに、それでいて刃のように隙なくその少女が口を開いた。

仕事を行う場へと向う間にそう語り掛けて来るのはとても珍しい。

「……最近、警備班が増えたと聞くが…？」

「ん？　あぁ、そういう事か……」

この剣を使う少女は、ある一人の少女の護衛についている。

いや、その少女の為だけに剣を振っていると言って良いだろう。

だから非常に学園内の警備体制の動きに疎い。

寮で同じ部屋である自分が何時も教えてやっているくらいなのだから。

こんな話を出したのは高畑に聞いたか、或いは刀子から聞いたか…だろう。

「そう言えば教えていなかったな。悪い。

増員は二人。高畑先生が担当している。一人は楓だ」

「…楓が？」

「ああ」

その話を聞いて僅かに緊張を解く。

長瀬　楓……

彼女であれば人間的に信用が出来るし、その腕前も相当なものだ。

だからこの少女は胸を撫で下ろしていた。

何とも解かり易い娘である。余計な火の粉を“あの娘”が被ったりしないか気にしていたのだろう。

「それで、もう一人は…？」

「もう一人か……う～ん……」

ここで真名は悩んだ。

一番良いのは実際に戦うところに居合わせる事なのだが、そんな事がひょいひょい起こるのも勘弁だし、何より最後まで戦いを見つめていないと絶対に勘違いを起こす。

実際、楓や古、そして自分とて騙されたのだから。

少女の方は言い澱んでいる真名をいぶかしんでいる。

「何か問題でも？」

「あーいや…問題アリアリというか、全く無いというか…少なくとも私達の年齢では対象外だから安全牌というか……」

「は……？」

頭を掻いてそう言い難そうに述べている真名に、少女は眉を顰めるばかり。

お前、大丈夫なのかと妙な眼差しを向けてくる少女に気付き、真名はハッと我に返る。

よく考えてみれば、何でこんな事で悩まねばならんのだ？　問われて応えるのは本人か楓の役では無いのか？

自分はちゃんとフォローしてやったのに……そう考えてくると何だか馬鹿馬鹿しくなってきた。

「龍宮…？」

「……詳しい事は本人か、楓に聞いてくれ。
兎に角、その男の名は横島忠夫といい、氣の使い手だ。
関西出身らしく、ボケとツッコミが持ち味らしい」

それで楓と自分も騙されたのだから立派な技と言って良いだろう。

だが、聞かされた方は堪ったものではない。

『関西…出身……？』

じわり…と湧いた疑念は、刺客に神経を尖らせている少女にとって思考を穢す毒そのもの。

『ヨコシマ　タダオ……』

少女の眼が、針のように細められた。

関西出身で氣の使い手――

疑惑という毒の材料はこれだけで充分だったのである。

後編（後書き）

ハイ、ここで今回の修正版は終わりとします。

そして修学旅行編です。いや、作業が早く進んでいいなぁｗ

以前も書きましたが、この話で書いた木乃香の立つ位置は、原作を読んでＧＳ美神と照らし合わせて思ったことです。

横島とルシオラとの間に子供が生まれてたらこんな感じの位置にいたかもしれませんね。

まぁ、私が持った感想であり、意見ですので説得力も何もあったモンじゃないですがｗ

残念ながら話に今回も変化なし。

もう少しお待ちください。

という訳で、今回はここまで。

続きは見てのお帰りです。ではでは～

本文（前書き）

五時間目入ります。

楽に打ち直せて、楽に修正できるからいいなぁｗ

本文

――やぁ、少年。久しぶりだね。

……テメーか……少年は止せ。オレはガキちゃうぞ。

――ふむ…しかし、今の君は少年ではないかね？
心のあり方まで少年の様ではないか。
尤も、私からしてみればヒトの老若男女全ては少年少女なのだがね。

屁理屈ぬかすなっ！！

……で？　何しに来やがったんだ？

――ほぅ？　思ったよりも冷静だね。
もっと慌てるのかと思ってたのだがね…
キミもやっと成長したという事かな？

うっせーっ！！
おちょくる為に起きやがったのかテメーわ！？
だったらとっとと沈んで寝てやがれ！！

――ふふふ…相変わらずだね少年。
　どんな存在を前にしても相対する時の心は変わらない。
相手が神族だろうが魔族だろうが、怒る時は怒り、好意を持てば接してゆく……
　色んな意味で分け隔てが無いね。感動するよ。

テメーはオレを貶しに来やがったのか？
だったらとっとと出てけ！！！

――ははは…無論、それだけじゃないさ。ちゃんと用事があるのだよ。
　暇ではあるが湧き出てくるのは結構大変なんだからね。

だったらとっとと用事済ませて消えやがれ。

――ははは……つれないね。
　尤も君の心情から言えばしょうがない事なのだが……
……

怨んでいないのかね？

は？

――怒気はある。私に対して一直線のものがね。
だが殺気は無い。
無論、ゼロという訳では無く、ほとんど感じられない程度ではあるが、それでも無いと言い切って良い程だ。

だから私に対しての怨みはもうないのかと気になってね。

テメーに対しての……か？

――ああ……私はそれだけの事をした。
人間達から……特に君らから憎悪されるに値する……違うかね？

その怨みは残っていないのかと聞いているのだよ。

……怨んでない…なんて事ある訳ねぇだろ？

――……

怨んでねぇ訳ないだろ？　憎んでねぇ訳ないだろ？　憎くて憎くて堪らねぇよ！！

――……

……だけどな、それが単なる八つ当たりだって事も解かってんだ。

アンタは死んだ。確かに死んだ。
小竜姫様もそう言ってたしな。

そんなアンタを憎んだり怨んだりするのはお門違いだ。ああ、解かってんだよ。

アンタを憎んで怨んで、憎む対象として、怨む対象として存在し続けさせてるんだってな。
アンタがホンモノじゃないって解かってても、自分の中の憤りを

ぶち当てる相手をほしがってるだけだってな。

あぁ、そーだよ。知ってんだよ!!

アンタはオレの中に残る“記憶の欠片”でしかない、どうしても消せない仮想敵だってな!!

――……フッ

まぁ、キミの心情からして当然の行為であるし、仕方の無い事だね。

気にする事は無い。人として当然の行為だ。

ふん……

――不快な気持ちにさせて悪かった。すまなかったね。

ではそろそろ退散する事にしよう。

ああ、だけど一つだけ是非にも伝えねばならない事があるんだ。

それだけは聞いてもらえないか?

……ンだよ……

――君が何故、“この世界”に来たのか……そして、君が誰なの

か…その事についてだよ

んな……っ？！

――フフフ……時間は有限だし、これ以上私がいるとキミも不快だろうからさっさと語るとしよう。

君が行きたい…いや、“帰りたい”と思わない、“思えない”理由。

そして、何故に記憶と記録の一部が消失し、私という個がおぼろげとはいえ出現したか……

では――覚悟は良いかね？

■五時間目：タダキチ七は丁稚の番号

極一部…というか、担任の教諭が一番心待ちにしていたという京都・奈良への修学旅行。

その当日、集合場所である大宮駅は旅行に出る少女らの黄色い声で満たされていた。

ここから東京駅を経由して京都へ、１６時には清水寺を見学し、１７時には旅館に入る…というのが本日の日程である。

このルートでまわる生徒らは五クラス。

のべ１５０人以上の少女らが集っているのだからそれは五月蝿いだろう。

しかしそんな騒動には慣れているのか、落ち着いた態度で女性教諭が班ごとに点呼を取らせ、ホームから新幹線に乗り込ませてゆく。

何が楽しいのか乗り込む間もキャイキャイ騒ぎ、別の車両に入ろうとしてしまったり、子供教師が女生徒によってグリーン車に引きずり込まれそうになったり、生徒が肉饅を売ったり（？）と落ち着きが無い。

く…っ　これが若さか?!　とかほざきたくるのも仕方の無いことかもしれない。

特に、今の彼からしてみれば……

「ほほう…よくお似合いでござるな」

「ほんとアルね。何だか前からつけてたみたいアル」

「……」

新幹線の貸切車両の隣。

一般車両の端に備え付けられている自動販売機の前で、三つの影が会話を交わしていた。

実のところ、その中の二つ…長瀬　楓と古　菲は霊気でもって自分らを鍛えてくれている青年と暫く会えなくなるのか…とやや気を落としていた。

僅か5日で何を…という説もあるが、彼女ら自身も何で気を落としていたのかサッパリなのだから説明の仕様が無い。

が、その相手である横島忠夫が仕事で同行するという話を聞き、二人してアッサリ元気を取り戻していた。何とも単純な二人である。

言うまでもなく今の様に車内であればまだ良いのだが、女子中学生の修学旅行に高校生くらいに見える青年がついて回るのは大問題だ。

元々何かと目立つ男であるし、下手を打って学園長が言っていた様に、通報されてタイーホされたって仕方が無いのだから。

となると、彼に変装させる必要がでてくる。

無論、単純な変装ではバレないとも限らない。女子中学生の背後をうろつく不審者の影……ぶっちゃけ変装するからこそ目立ち過ぎてしまう。

それに本人がどんなポカかますか解かったものだ。どーもそういった点は今一つ信用が置けないのだから。

ではどうすべきか？

「うんうん。カッコイイアルよ」

「じゃかぁしっ！！」

「おろ？　拙者のプレゼントは気に入らないでござるか？」

演技とは解かっているのに、楓や古がショボンとするとダメージを受けてしまう哀れな男。

今も『う…っ』と胸を押さえている。

彼の（女の子に対しての）良心は剥き身のゆで卵のようにツルツルで脆いのだ。

「い、いや、そんな事ぁねーぞ？

元々オレはコレ着けてたんだしな。高校出てからは着けるの止めた…んだと思うけど。多分」

「そうでござるか」

語尾は自信なさげに切れ切れであったが、それでも頭にしっくりとしているのは事実のようだ。

彼がそう言ってプレゼントしてくれた事を感謝しているのを見せると、楓はコロリと笑顔になった。

やっぱり演技だったようだ。

『チクショウ…女め』

等恨みがましい目で見たりもするが、暖簾に腕押し　糠に釘である。

鼻歌を零してご機嫌だ。

その横島であるが……

彼は今、頭に赤いバンダナを巻いていた。

これは楓からのプレゼントであり、彼の為に手に入れたお守りなんだそうだ。

言うまでもなく女の子からモノを貰い慣れていない彼は喜んで受け取った。

やや古めかしい赤い布で、よく見ないと解からないが朱色の糸で細かな刺繍が施されている。

横島がその刺繍に触れて探って見ると、確かに霊気…いや魔力が伝わってくる。これは本当にお守りなのだろう。

額に巻き、きゅっと締めれば昔を思い出すほど気が引き締まって来る。

だから横島も素直に「ありがとう」の礼を言ってもおかしくないのだが……どうも感謝の念よりガッカリさが前に出てしまっていた。

いや、彼の言うようにプレゼント自体はうれしいし、モノにしてもそう文句は無い。

そちらではないのだ。肩を落としている理由は。

「あ～…でも、ホントよく似合うアルね」

そういいつつ横島の頭をかいぐりかいぐり撫で回す古。

ホント嬉しそうである。

「やめぇっつーに!!　古ちゃんも頭撫でんな――っ!!」

と彼にしては珍しくやや乱暴気味に手を払うも、相手は武の達人。ひょいと避けてケラケラ笑っていらっしゃる。

「ドちくしょう～…あのぬらりひょんめぇ～～～」

これ以上女の子に当たる訳にも行かず、恨みの矛先は学園長に向けられた。

その怒りのパワーは、ここで藁人形に釘を刺せば間違いなく学園長に届くだろう程。

実際、彼の呪いはホントに効くのだから性質が悪い。流石はプロの霊能者である。褒められた事ではないが。

「ほらほら。そんな顔してはいけないでござるよ？　笑顔が一番

でござる。すまいるすまいる」

等と、面白がっているのか楓もそうやってあやして来るもんだから、横島の沸点は更に下がった。

顔を赤くしてプンプン怒る彼。

赤いバンダナというポイントが増えはしたが、それ以外はジーンズとジージャン。そして靴はバッシュという余りといえば余りにありふれた姿。当然そこは変わっていない。

「オレを子ども扱いすんな――っ！！！」

「「いや、実際に子供でござるし（アルよ）」」

が、その外見はどー見ても六，七歳程度の男の子のそれだった。

大人や高校生が後を付いてゆけば確かに問題である。

だが、こんな小さな子供であるなら話は別だ。

担任の一人が子供であるから左程の違和感が無いのである。

少女らにしたって、唐突に現れた高校生くらいの男になら妙な誤解を持つかもしれないが、こんな子供になら変な隔たりは持つまい。

そう考えた近衛は横島にあるマジックアイテムの使用を許可した

のである。

その名を――

赤い飴玉・青い飴玉　年齢詐称薬という。

イキナリ犯罪チックな名称が飛び出したのであるが、名前もそうだし効果もナニだ。

赤い飴玉で大人になり、青いのを舐めれば子供になる……何ともどこかで聞いたような飴である。

因みにそのアイテムの説明を受けた時、横島は、

「なんつー無礼なっ!!　○塚センセーに謝れっ!!」

等と憤慨したとかしないとか……まぁそれはどうでもいい事であるが。

自分らの子供先生とは違い、外見を子供に落としただけで歳相応のやんちゃさが目立つ横島を古は妙に気に入ってさっきから弄り回しているのだ。

横島の心の傷にズリズリと本ワサビを擦り込む行為である事は言うまでも無い。

「それで横島殿はずっと隣の車両でござるか？」

プンスカ怒って古と不毛な口撃バトルをかまして敗北直前の横島に対し、笑みを隠そうともせず楓はこれからの事の確認をとる。

「ンあ？　あ、ああ、そうだけど……ま、まぁ、ちょくちょく様子を見に行くけどな」

「ふーむ……」

実は楓、横島の受けた話を近衛から聞いていたりする。

彼女はパートナーであるし、横島が請けた仕事なら自分も受けたのと同じだと認識しているからだ。

だから彼女は近衛から“ある物”を託されていたのである。

“それ”があるから楓の前では横島も不穏な行動は取れなくなるだろう。

まぁ、対横島用お仕置き行為も既に古と共にあみ出しているのでどーとでもなるし。

『……となると、やはりもっと拙者らの近くに居させるのが得策でござろうな』

そんな風に何やら考え込んでいる楓の元に、

「――楓」

「お？」

一人の少女がやって来た。

身長はそう高くはないが、竹刀が入っているにしてはちょいと長すぎる鞘袋を肩に掛け、長めの髪を片方に纏めている凛とした美少女。

「何用でござる？」

楓がにこやかにそう問い掛けると、その少女はチロリと古と横島に意味ありげな視線を送って「実はですね…」と言い澱む。

何やら内密な話があるのだと悟った楓は、古に横島を自分らの座席に連れて行かせて二人きりとなる事にした。

何か抵抗していた横島であったが、騒ぎを起こすのは拙いという事を“理解してしまっている”が為、けっこう簡単に楽しそうな古によってズルズルと引き摺っていかれてしまう。

みょーな所で大人を残した哀れな見本であろう。

そんな二人を生温かい目で見送った楓は、不思議そうに自分を見つめている少女の視線に気付き、コホンと咳をして彼女に向き直った。

「――して用件は何でござるかな？　刹那」

楓に声を掛けてきた少女は、退魔剣術として裏で名が知られている神鳴流の使い手。

武道四天王の最後の一人……出席番号１５番　剣道部の桜咲　刹那、その人であった。

＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊

荷物を押しながら車両の中を進む女性が一人。

弁当やお茶、菓子や果物、雑誌や新聞を乗せて荷車を押してゆく。

言うまでもなく車内の売り子さんであるが、その売り子である女性は結構印象的だった。

長い黒髪の眼鏡の美女で、優しげな笑顔で品物を勧めつつ歩いてゆく。

だが、それだけなら印象的などは言わない。

確かに美女の売り子というのは眼を引く対象であろう。

実際、ヨッパライでもいたらひょいと尻に手が伸びてくるだろう程なのだから。

だが、注目すべき点はそんなトコロでは無い――

くぃくぃっ

「ん？　あぁ、坊や何か要り用どすか？」

スカートの裾を軽く引っ張る男の子に笑顔で持って応える女性。

そんな女性に対し、どこかポーっとした表情でその男の子は、

「お姉さん、美人やなぁ……」

と真っ直ぐ眼を見て言ってきた。

「あらあら……おませさんやなぁ。
ほれでも嬉しいわぁ。ありがとなぁ」

ストレートな賛辞に満更でもないのか、その女性は薄く頬を染めて礼を言う。

それなり以上の容貌ではあるが、こうも真っ直ぐに言われた事は無いのかもしれない。

「ホンマやで？　お姉さんみたいに綺麗な売り子さんが勧めてくれたら何でも買いとうなってくるわ。
あ、せやけど、オレ、あんまお金ないねん……せやから一つしか買えへんわ。堪忍なぁ」

何やら俯き加減で頬を染めつつそうじもじと言ってくる男の子に、その女性はけっこう胸にズキュンと来た。

自分と同じ関西弁である事も気を緩ませた一因なのだろう。

まぁ、その子供のアクセントは大阪弁っぽいのであるが。

男の子はポケットから百円玉数枚を取り出し、恥ずかしそうに冷凍みかんを求めてくる。

そのもじもじさにもズギュンとキたらしいその売り子は、サービスだと言ってチョコレート一枚を付けるという大盤振る舞いをかま

していた。

「わぁ…ありがとう、お姉ちゃん！　オレ、めっちゃ嬉しい」

満面の笑顔で抱きつかんばかりに喜ぶ男の子にその女性の頬も緩む。

と……

ごちんっ！

「痛っ！！」

唐突にやって来た少女にゲンコツを喰らってその男の子は蹲った。

女性が呆然としている間に、少女は男の子を立たせて引き摺ってゆく。

「目をはなした隙に何やってるアル！！　つーか、子供扱い嫌がってたのに、何ノリノリに子供のフリしてるアルか？！」

「堪忍やぁ～！　ごっつええ女おったら口説くんは男の義務なんやぁ～っ！

エエ女口説く時は使えるモンは何だって使う主義なんや～～っ！！」

「そんな主義、捨ててしまうアル！！」

「オレに死ねと言うんか?！　あ、おねーさん、ありがとなぁ～また後でな～」

「老師！！」

「ひーん」

何が何やら解からないが……兎に角、品物は売れたようだから良しとしよう。うん。

綺麗だと賞賛された事実は変わらないのだし。

何だか事が上手く進んでいる事もあって機嫌も更によくなってゆくその売り子の女性は気を取り直してまた車を押し始める。

――いや、注目すべき点はそんなアホなやり取りでは無い。

真に注目すべき点は、まずその女性が京都に入った訳でも無いのに既に特徴のある関西の方言を使用しているところであり、尚且つ歩きながら品物を進めるフリをしつつ座席の“何か”を確認して行っている所である。

あちこちに仕掛けた＜呪式＞を確認しながら売り子のフリをし続けている女性。

“そこ”が注目すべき点だったのである。

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊

「実は楓に聞きたかった事があってな……」

「ふむ？　何でござろう？」

辺りに人の気配がなくなってから、刹那はやっと口を開いた。

楓も刹那が人の気配を探っていた事に気付いてはいたのであるが、それほど内密な話であるのかと悟って気付かないふりをしている。

そんな楓に対して刹那は、

「お前のパートナーという、横島忠夫について」

直球を放ってきた。

僅かに片眉をぴくんっと動かすだけに踏み止まった楓。
その辺は流石と言えようが、刹那にはそれで充分だった。

「いや、妙な心配はいらん。
私も“裏”に関わっている一人なんだ。学園長から話を聞いていないのか？」

「……初耳でござるよ」

横島は話を聞いてはいるが、初顔合わせは終わっていない。
刹那の方にしても、学園に多少の魔法教師や魔法生徒がいるとは知っているのだが、実はその数を全然把握していなかったりする。

どーもあの学園長はおちょくる事に熱中できるくせに、肝心な事を言い忘れたりしてどこか抜けているのだ。
今思えば、あの図書館島の地下での岩巨人の騒動は学園長が絡んでいた節があるし。

よくよく話を聞いてみると、自分らの事を聞いたのは真名からしい。

まぁ、確かに楓は学園長に呼び出されて横島も同行するという話

を聞いて浮れており、ウッカリ聞き忘れた感もない訳ではないのだが、魔法界にかかわる生徒の事くらいは言ってほしかった。

だって聞かなかったんじゃもの…とでも言うつもりであろうか？

いや、あの老人ことだ。『言い忘れてした。テヘ♪』とかかましてくれそうである。

組織のトップが肝心な事を言い忘れてどーするでござる?!　と、楓は内心憤慨していた。

まぁ、それは横に置いといて……今は自分のパートナーの事だ。

「ふぅ〜む……横島殿の話でござるか」

「ああ…」

さてどう話したものか…と楓は首を捻る。

言うまでもなく横島はどーしよーもないエロ男で、煩悩の化身で、不条理の塊で、理不尽の結晶のような存在だ。

それをそのまま口にすれば彼女からの信用は絶対に得られまい。

というか、その説明では不審者としか伝わるまい。

かと言って、これこれこんな良い男でござるよ…とは口にし辛い。

いや、言いたくない…の方が正しいだろう。

これは教室での騒動に端を発しているのであるが、下手に褒めたりすれば妙に尾ひれが付いて話が曲がってゆくのである。
マスコミ報道という曲解を先週初めて味わった楓ならではの判断だと言えよう。

それに……これ以上、横島に対して興味を持つ人間が増えてほしく無いという気持ちがどこかで燻っていた。

その気持ちが何を意味しているか…相変わらず自分を理解していない楓であるが、古も横島の話が広がる事を由としていないのであるから、その考えは正しいのかもしれない。

しかし刹那は言うなれば同僚、口を噤んだままというのも問題だろう。近衛みたいな言い忘れというポカはしたくないし。

「して、彼の何が聞きたいと言われるでござるか？」

「まず人となりを――」

「ふむ……」

刹那には是が非でも守りたい一人の少女がいる。

その少女は関西呪術協会の長の大切な一人娘で、刹那はその任を長から直接授かっていた。

だが、それより何よりその少女……近衛　木乃香は刹那の幼馴染

であり掛け替えの無い親友なのである。
任務など無くとも命を代えて守りたい存在なのだ。

無論、楓がそんな事を知る由も無いのであるが、そんな真剣な眼差しを受けた彼女の方としては困ってしまう。

刹那は自分らと同じく“裏”に関わっているとの事であるから言うなれば仲間である。
だから説明を渋る理由は無い。無い筈なのだが……

あの横島という青年は、自分は元より古ですら奇怪な期待を持ってしまう妙な魅力がある。

楓は刹那という少女の目を見るたびに、夢とか希望とかを犠牲にしていると感じていた。
恐らくは何かの為にそれらを捧げているのであろう。
それでもそれを問いただす権利は自分には無いし、立ち入って良いような雰囲気も持っていなかった。

その刹那が自分からこちらに歩みよって来ている。

つまり、それだけ彼の情報を得る事を必要としているのだろう。

そんな刹那が彼の事を“真の意味で”知られると……
……いや、悪い事は無いでござろうが、その、何と言うか、アレだ。
そう、アレでござる。アレ。ええ～～と……

楓としても真面目に考え、真面目に答えてやらねばならない。
ならないのだが……どーも上手く表現ができない。

話してやりたいのは山々なのだが、何かがブレーキを掛けている。
それが何なのかはサッパリ解からないのであるが……

楓はもう一度刹那の目を見た。

彼女は変わらず射抜くようにこちらの目を見つめ続けている。
彼の“人となり”とやらを知る事は、よっぽど彼女にとって重要な事なのであろう。

軽く溜息を吐いて何かを諦めた楓は、横で購買される事を待ち望んでいる自販機でペットボトルの茶を二本買い求め、その一つを彼女に手渡した。

「あ…どうも」

と素直に受け取った刹那に対し、楓は自分なりに正直に、今日まで彼に接して感じている印象をそのまま喋る事にした。

「そうでござるな……一言で括るならば……人でなしでござろうな」

「？！」

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊

「う…っ？！」

唐突に背筋がぞくりとし、横島は座ったまま身震いをした。

「どうしたアルか？」

「い、いや…何か殺気を…いやいや、言い様の無いゾクゾクしたモンがヒシヒシと……」

「それはいけないネ。もっと密着した方がよくないカ？」

「そうアルな」

「あ～～…やーめーて～～～っ！！」

「ははは…大人しくするアル」

「ふふふ…ジタバタしても遅いネ」

「ひ～んっ」

何だか内密そうな話をしようとしていたので、横島は大人しく古に連れた訳であるが、ウッカリ付いて行ったのは間違いだったと気付かされてしまった。

彼が連れて行かれた先は、甘酸っぱい少女らの香りに満載されている修学旅行の貸切車両だったのだ。

当然、彼は逃げようとした。が、その彼の手はとっくに古によって拘束されている。

身を捩ろうとも南派の拳士はバッチリと関節を極めていて身を捩る事もかなわない。

触れられる前ならば逃げ様もあったのだが、既に拘束されている今はどうしようもなかった。

必殺、『誰かーっ！　知らないお姉さんに攫われるーっ!!』を敢行し、逃亡を図ろうとした横島であったが、それを読んでいたのだろう、

「大声出だそうとしたら、老師の口をワタシの口で塞ぐアルよ？」

等と古に言われ、ここに至り横島は犬が腹を見せるが如く完全敗北をする他無かったのである。

無論、古とてそんな事でファーストキスを失うつもりは更々無かったのだが、女子中学生のノリの良さ（というか“悪さ”）を思い知っている横島はたったそれだけの脅してガクブルしていた。

そして気が付くと完全拘束されていたのである。

「どしたカ？　座り心地が悪いカ？」

「あ、あんなぁ…超ち…いや、超姉ちゃん」

「何かネ？」

顔に縦線を出している横島の表情に気付いているのかいないのか、自分の真横に座っている＜超包子＞のオーナーにして、麻帆良の頭脳と謳われている超天才、超　鈴音は笑顔を投げ続けていた。

無論、横島も安くて美味い＜超包子＞の顔馴染みとなっているのだから彼女の事も知っている。

が、今の彼は子供の姿。ウッカリと“超ちゃん”等と呼ぶ訳にはいかない。

だから知らない人のフリを続けているのだが……

「駄目アルよ。もっと深く座てないといけないアル」

“後から”そう注意も入るが、それに従う事はできない。否、してはいけない。

「ふ、深くと申されましても……」

「ホラ、背凭れに頭をこう……」

「いや～～っ！！　堪忍して～～～～っ！！」

座席が回されていて向かい合わせになった美少女の指定座席。

前にあるのはまだ戻っていない楓のと、＜超包子＞の料理人である四葉　五月の席。

“後”は古で、その右側は件の超の席だ。

そして横島はというと、古の膝の上に拘束されていたのである。

関節技宜しく、腕は古の腕、足は古の足を絡められて身動きが取れなくなっているのだ。

見様によっては、どんな王侯貴族だと言わんばかりの扱いであるが、横島にとっては甘酸っぱい緊縛地獄。

今、彼の心にいる倫理観（ジャスティス）は、不当逮捕されて地獄城に収監されているような物である。

言うまでも無く、背凭れとは古の胸だ。

青くてまだ固いのだが、ふっくらとやわらかさを増してゆく過程にあるそこに頭を預けるわけにはいかない。

ぶっちゃけ、早くも倫理観（ジャスティス）は瀕死である。

えっぐえっぐと涙を啜る横島であるが、余りに見た目が可愛いらしい彼を見る少女らの目もあたたかい。あたたか過ぎるからこそ嫌なのだが。

―おなか空いていますか？　餡饅ありますよ―

と、柔らかな笑顔でドコに持っていたのかホコホコと湯気の出る蒸篭から餡饅を取り出して差し出してくれる五月。

元からの優しさと世話焼きである彼女の癒しオーラ。夕食等を店で頂いている時には手を合わせたくなるほど嬉しいものであるが、今は逆に横島にはイタかった。

「ううん。ええねん……オレ、このまま朽ちてしまうんや……」

あらあら困りましたね～と眉を顰める五月。

横島は真剣なのだが伝わり切っていないようだ。

そんな彼の後の座席。
古の背後の席に座っていた少女が、その古の頭の上からひょいと顔を覗かせた。

「あらあら。大丈夫？　その子、疲れてないかしら」

「大丈夫アルよ。おねーさんに囲まれて緊張してるだけアル」

「あら、おませさんなのね」

くすくす笑って微笑ましげな眼差しを横島に向けてくる。

子供好き、尚且つ世話焼きで知られている那波　千鶴は何だか楽しげに弄られている横島を眺めていた。

彼女はボランティアでよく子供の世話を焼いているのだが、彼女の知る子供らよりも子供らしい反応を見せている男の子に興味が湧いたようだ。

まぁ、彼としては嬉しくもなんとも無いのであるが。

『くぅうう〜〜〜……楓ちゃんといい、真名ちゃんといい、そしてこの千鶴ちゃんといい、なんてぇハイスペックだ。
古ちゃんにしても、あんまボリュームが無いだけでプロポーションは良いし……これが異世界のパワーか？！』

何がハイスペックなのかは語るまでも無いだろう。

ビミョーに垣根が下がりつつあるよーなセリフが出ているのだが自覚は無いのだろうか？

「おお、なにやら楽しそうでござるな」

と、そこへ楓が戻って来た。

楓は五月の隣に腰を下し、途中で買ったのであろうコーラの缶を横島に差し出す。

「どこが楽しげやねん！　見て解からへんのか？！」

差し出されても手は動かせないし、倫理観念（ジャスティス）は鰯り殺し寸前である。

超倫理モラルダーには最早力しか残っていなかったが、ンなモンを行使した時点で超アウトだ。よって横島はもうイッパイイッパイでテンパッていた。

ガォーっ！！　と怒りの雄叫びを上げようと少女らには全く効き目は無い。今の彼の姿形なら『がぉ～』が精々で迫力もクソも無いのだ。

「いや、楽しそうと言ったのは古達の事でござるよ」

「えっ?!　オレの人権無視?!」

今日までの間にスッカリと横島をおちょくり慣れている楓は笑顔でもって彼を虐める。

本気で泣きが入りかかった彼に対し、楓は横島の為に買ってきた缶のプルを開けて古に手渡した。

「ささ、次は拙者の番でござる。古はそれを飲ませてやるでござるよ」

「アイアイ♪」

「ぬ　ぁ　ん　で　す　と　っ?!」

言うが早いか、横島が驚愕している隙に、楓は古から彼を受け取って、彼女同様に手足を自分の四肢で拘束する。

「ぬぐぁっ!!」

古の時とは違い、背後の背凭れは首を前に倒してしまうほど邪魔に突き出ている。

よってガッチリ拘束されれば頭が柔らかく沈んでしまうのだ。

カキーンカキーンと胸の奥で甲高いタイマーが鳴り出す。
その音は梅図式カラータイマー音。
如何に横島が危機的状況であるか解るというもの。

超倫理回路はショート寸前だわ、カラータイマーは鳴りっぱなしだわで、その命（理性とも言う）は風前の灯だ。

そんな時、一人の救世主が――

「何を騒いでいる！」

思わず手を合わせたくなった男の声。

目元厳しく女生徒らを睨みすえ、彼女らから恐れられている教師。

学園広域生活指導員、人呼んで“鬼の新田”その人であった。

「げっ？！」
「新田だ」

周囲からもその恐れの声が漏れる。

その事からもどれほど恐れられているか解かるというものだ。

だが、鬼の新田だろーが羅刹の成瀬川だろーが、今の横島にとって救い以外の何物でも無い。

確かに引っ張って行かれるのは困りものであるが、超倫理回路がお釈迦になれば彼の未来は無いのだから。

「む……その子供は……」

キラリと眼鏡を光らせ、新田は横島を見咎めるように歩み寄って来た。

『おぉ、神よ……』

周囲の少女らの顔色は別として、横島としては手を合わせたくなるような状況だ。

実際、ありがたやありがたやと心の中で感謝の念をパリパリ送り続けている。

今までの人生でこれだけ男に対して感謝の念を持った事があろうか？　いや無い。それだけ切迫していたのだろう。

横島は生まれて初めて神の慈悲を信じた気がしていた。

が――

スッカリ忘れていたのであるが、神は無情だったりする。

「ふむ……長瀬、この子がそうなのか？」

「そうでござるよ」

「え……？」

ズカズカと靴音高くやって来た新田は、意外にも冷静に楓に対して妙な確認を取っていた。

当然ながら横島は何がなにやら解からない。

そんな彼に対し、新田は何だかエラいあたたかな眼差しを送りつつ横島の肩に手を置きこう言った。

「……確かに辛い事もあるだろう。悲しい事もあるだろう。だが、君を支えてくれる人はいる。絶対にな……

だから明日を信じて進むんだ。解かったね？　タダキチくん」

「は？」

ナニが何やらサッパリだ。

名前だって何だかミョーだぞ？
それに唐突にそんな慰めを言われても横っち困っちゃう　等と彼の頭は真っ白だ。

そんな呆然としている男の子（？）の様子を目に入れ、何だか勝手に納得してウムウムと頷く新田。

彼は楓に眼差しを向けて意味深かげに頷き合い、何やら目尻をキラリと光らせつつ横島にくるりと背を向けて歩き去ってゆく。

ぽっか～～ん　とする横島であったが、そんな彼の様子を無視して古の方が先に口を開いた。

「楓、楓。
新田センセーにアノ事言たアルか？」

楓は『ん♪』と頷き、嬉しげに横島の頭の上に顎を置きつつ、

「うむ。予想通り受け入れてくれたでござるよ」

「へ？」

と、にこやかに横島の与り知らぬ事の顛末を告げた。

楓が新田に伝えていたのは同行する横島（子供Ｖｅｒ）のバック

ストーリーである。

学園長から話を聞いて直ぐ、楓は面白がって修学旅行に同行する男の子のカバーストーリーを考える事を提案した。

言うまでも無く近衛はこれに同調。おもいっきり悪ノリし、新田のツボを突くよーなお涙頂戴ストーリーを瞬く間に組み上げたのである。

楓はそのメモを受け取って古と検討し合い、（色んな意味で）涙を流しつつ矛盾が無いかチェックしていたそれを新田に伝えたのだ。

「んなっ？！　い、いつの間にそんなモノを…」

「はっはっはっ　横島殿と会えない日々を寂しく思いまして……」

「構想五分、修正一日という大作を昨日完成させたアル」

名付けて、

『＜京都の青い空＞

ーせめてお墓でもいいからお母さんに会いたいー

家族を失った幼子が一人立ち上がって自分の足で歩み始めるまでの感動のストーリー』

こんなストーリーを真面目に考えた近衛らに乾杯である。

「ぬがーっ!!　あのジジイはナニ考えてんだーっ!!
それに楓ちゃんや古ちゃんとは一昨日も組み手に付き合うたやんかーっ!!」

「アイヤ　老師と会えなかた一日と言う長い時間は寂しかたアルよ～」

「老師はヤめれーっ!!」

何やら思いっきりギュッと抱き締められている所為か、テンパり具合も半端でない。

今にも意識の糸がブツンと切れそうだった。

「ん…？　その子がどうかしたの？」

「ああ、実はこの子には聞くも涙語るも涙の話がアルね」

「へぇ…」

ぎゃーぎゃー騒ぐ横島であったが、肝心の話は聞いていなかった。

楓が彼をタダキチと呼んだ理由とか、楓とさっきの少女が何を話していたか……

楓が横島をタダキチと呼んだ訳は、この旅行中の彼のコードネームだからだ。

タダキチ七番。これが、彼に与えられた今の名前である。

それに、テンパるのは勝手だが人の話をよく聞かないのはどうだろう？

確かに、古からナゾ設定を聞いて涙を流した千鶴にギュッと抱き締められて遂に沈没してしまったのも仕方が無いと言えなくも無い。飽く迄も横島的には…だが。

それでも気付くべき事に気付けなかったのはちょっと痛い失態である。

既に式が仕掛けられている事にか？

否――

意識を失っているのに気付かず、胸に押し付けたまま何やら言い諭している千鶴。

“やーらかい肉”でもって窒息しているのは確実である。

そんな彼を慌てて引き剥がし、こーなったら人工呼吸でござる！とマウストゥーマウスを敢行しようとした楓の気配に気付き、最後の力を振り絞って跳ねて逃亡を図る横島。

だが何故か千鶴に拿捕されてまた胸の中にひきこまれてもがく。

騒ぎを聞きつけ、何故か自分らの貸し切り車両に六，七歳の男の子がいる事に気付いた少女らが面白がって群がり、揉みくちゃにされてゆく横島。

羨ましいと言えなくもないが、横島的に言えばアウトかデッドボールの年齢の少女の群れ。当たるとイタ過ぎにも程がある。

だから逃げたかった。切実に。是が非でも。

しかしその願い虚しく、新田の登場によって否が応でも目立った彼は、ノリが良過ぎる女子中学生によって半死半生にされてゆくのだった。

「ふふ…」

そんな彼を見、意味ありげな笑みを浮かべている少女が一人。

座席を回して後ろ向きになっているので窓枠に肘を掛けて頬杖をつく。

軽く足を組んでいるその様は妙に似合っていてとても女子中学生には見えなかった。

左右にシニョンに纏めているのは鳴滝妹と同じだが、彼女は中国籍…らしいのでとても良く似合っている。

そんな彼女…麻帆良が誇る天才頭脳にして＜超包子＞のオーナーは、弄繰り回されているタダキチとやらを目の端にいれつつ、妙に悪女然とした雰囲気を漂わせつつ笑みを浮かべていた。

『名乗っていないのに、ワタシの名前を口にするとはネ……

演技のツメが甘いヨ……横島サン……』

一通りの話を聞き、楓が去った後も刹那は一人、物思いに耽っていた。

ふと彼女が居るであろう車両の方に眼を向けるも、当然ながらA組の車両はずっと前の方なので視界には入らない。

だが、それでも楓の後姿を幻視してしまう気がしていた。

「横島…忠夫……」

ふぅ…と溜息を吐き、自販機に背を預ける。

後頭部を機械に当てれば冷蔵機のモーター音と新幹線の音がダブって意外にうるさく感じられた。

それでも、ぐるぐるまわる思考から逃れられるような気がするのだ。

「人でなし……か……」

薄く眼を閉じ、刹那は楓から聞いた話を思い返していた。

曰く、

『そう――言うなれば人でなし。

こちらがどれだけ心配しようとも他者を心配して走り回るロクデナシでござる。

はっきり言ってどれだけ心配しても追いつかない程でござるな。

まぁ、それだけ甘いのでござるが……

いや……甘いが故に強いのでござろうな。
欲に負けて失態を演じようとも状況には“克つ”。
拙者はまだ一度しか共同戦線を張れてないでござるが、それでもその強さは理解できたでござる。

言うなれば実戦で一番邪魔な筈の甘さでもって状況に打ち克つという矛盾の化身。

それを知ってか知らずか、今言った様に本人は人に心配ばかり掛けさせるくせに当の本人は人の心配ばかりしている。
それでいて人の好意を踏み躙るのだから全く持って性質が悪いでござる。

だから“人でなし”でござるよ』

刹那は再度溜息を吐き、頭を振って思考を現世に戻す。

楓の話は意図的に何かを省いているようで理路整然としていなかった。
だから支離滅裂な話となっていて今一つ要領を得られなかったのである。（楓：悪かったでござるな）

その話からすると件の横島　忠夫という人物は敵にはならないだろうと判断はできた。だが、味方であるという断定はできなかった。

頭が固いといわれればそれまでであるが、例えば“草”であれば

そのくらいの信用を得るのは難しくも無い。
それが頭に引っかかってしまったのである。

元々刹那は関西系の術式に知識が偏っているし、学園内の魔法教師らの事を詳しく知っている訳ではないので横島がどれだけの事情聴取を受けているか知る由も無いのだ。

だから“まだ”安心は出来ていない。

新幹線に乗る前までは厳重に封じていた白鞘の刀を開放し、単に袋に入っているだけの状態にしておく。
駅の中で銃刀法違反によって逮捕されるというお馬鹿な状況にならないようにした配慮だ。

これで何時でも剣が抜ける。

京都に入る前とはいえ気を抜く訳には行かないのだから……

完璧且つ徹底的にイレギュラーである青年、横島忠夫――いや、タダキチ少年。

彼が如何なる鬼札であるのか、刹那はまだ知る由も無かった。

本文

その子は一人、個室の中で蹲っていた――

己の不遇を嘆き、涙を流し、
心に受けた傷の痛みに一人耐えかね、
人の気配が無いのを良い事に、しゃくり上げながら声を出して泣いている……

何時の世もセクシャルハラスメントという罪は存在し、それを行使して悦にいる者と被害を受けて泣く者とに分かれている。
そしてその子は後者――被害者だ。

誰に訴えたところで苦笑されるか相手にされないか。世は何時も弱者に冷たかった。

何であんな酷い事をして笑っていられるんだろう？

何でこんな目に遭わされているのに誰も助けてくれないんだろう？

ぐるぐると自問自答が頭の中で回り続け、涙の量も増え続ける。

ぶつぶつと神の名が呟かれ、嘆きの言葉が交互に漏れ溢れてゆく。

それだけ傷が大きいのだろう。

それだけ傷が深いのだろう。

だからその子は――

子供の姿をした横島忠夫は、過去に行った自分の所業を心の棚に置いて勝手な事をほざいていた。

「おかん…東京は怖いトコじゃあ……」

等と意味不明な事を呟いて、洋式便器の上に腰掛けてシクシク泣いていた横島。

今はまだ修学旅行中の新幹線内である。

言うまでもなく車内トイレであるが、彼は隙を見て少女らから脱出し、そこに逃げ込んでガッチリ鍵を掛け、その上“珠”の力でも

って気配を完全に消した上で蹲って泣いていたのである。

……因みに、具体的にどんな目にあったかは彼のトラウマになりかねないので解説は控えさせてもらおう。

「ううう……もう、お婿さんにいけない」

随分と酷い目のようだ……

だが、実は彼がショックを受けているのはそれだけではなかったりする。

女の子らのやーらかい香りに包まれ、そーゆー目に遭いつつも何となく『いいかも…』とか思っちゃったりした事が強いショックとなって残っているのだ。

そりゃあもう、ガガーン!!とか、ガビーン!!とか、そういうレベルで。

だから彼も未だに復帰できていなかったのである。

「えぐえぐ……

せやけど何時までもここにおられへんしなぁ……いつ襲撃受けてもおかしないんやし……」

子供のフリをし続けた所為か、妙に関西弁の色合いが強くなってしまっているのだがそれは兎も角、

袖で涙を拭ってトイレットペーパーで鼻をかみ、便器の中に放り込んで水で流して手を洗ってから“珠”を解除し個室から出て行く。

その際、周囲の気配を窺う事も忘れない。

気配の無い事を確認しても、野生動物の如く慎重に一歩を踏み出し、キョロキョロと見回してから、ぶはぁ～～……とやたらでかい溜息を吐いて安堵する。

何もそこまで怯えんでも…という気がしないでも無いのだが、それほど事態は深刻なのだろう。主に超倫理回路（ジャスティス）が。

このままトイレの中で泣き続けるのもナニであるから、別車両の自分の席にトンズラぶっこくという手もある。

どう考えてもその方が無難であるし、何よりおもいっきり休めそうだ。

仕事の方は楓も聞いていてくれたらしいし、自分がいる事でこっちに眼が集り西側の動きが掴み難くなる可能性だってある。何より彼女らの方が圧倒的に席が近いのだし。

てな訳で、やや言い訳じみている気がしないでもないが、ちょっとだけ休ませてもらおうかな～？　等と横島は一般車両に移ろうとした。

その時。

「？！　悲鳴？！」

向こうの…自分を辱めていた少女らの車両が何だか五月蝿いではないか。

すわ襲撃か?!　と緊張が走ったのだが、聞こえてくる声はカエルがどーのとかいう悲鳴。

なんじゃらほい?　と首を傾げつつ前の車両の目を走らせると……

ビュ…ッ

「わっ?!」

その瞬間にドアが開き、小さな影が物凄い速度でこっちに迫ってきた。

それが何であるか、等と確認する暇などありはしない。

何か影の様なものが走った…と感じるのが精一杯。

ましてや小さな鳥が猛スピードで新幹線の中を飛んでる等と誰が予想できようか。

それでもここに居たのは横島忠夫である。

非常識が服着て歩いているようなヘンな生き物である。

脊椎反射…と言うほどでは無いが、チョロリと動く小動物を捕らえてしまう猫の様な反射的動作で、

「なんだこれ？」

おもいっきり無造作に“それ”を掴み取っていた。

「燕…？　手紙なんか咥えて……向こうの車両にはお人好しの王子様の像でもあるんか？」

それなら宝石だろう？　とツッコミを入れてくれる殊勝な人物はこの場にはいなかった。

自分から解かり難いボケをかましたくせに空振りは痛いらしく、横島はガックリと肩を落としてその手に僅かながら力を入れてしまう。

ジタバタともがいて脱出を試みていた燕であったが、きゅっと握られた時についに諦めたのだろうか、ぐったりとしてその動きを止めた。

と同時に、燕はその存在を失って鳥の形に切られた紙へと戻り、咥えていた手紙がはらりと舞い落ちた。

どうやらその燕は式神だったようだ。

ボケはかましても実はちゃっかりその事に気付いてたりする横島。

逃がしたか…と小さく舌打ちしつつその手紙を拾い上げる。

普通のサイズの手紙であるが、封の部分にはなにやら立派な印が

押されており、只ならぬ手紙である事が窺い知れ……

「って、これ親書やんっ！！　魔法先生ナニやってのっ？！」

燕に手紙を盗られるなんてどんなファンタジーなんじゃぁ？！
と頭が痛くなってきた。
流石は異世界。侮れねぇ～……

等と感心半分呆れ半分でいた彼の背を、

「ッ！？」

明らかに自分に対して意識を集中させているであろう視線が貫いていた。

焦らない。クールクール。
挙動不審をピクリとも表わさず、すぐさま心中でそう言い聞かせる横島。
流石…と感心しそうになる方も多かろうが差に非ず。単に元雇い主の部屋等をあさっていて発見された時の言い訳経験によって築き上げられた生存の知恵。お世辞にも誉められたものではないのだから。

それでもまぁ、このシチュにおいては大活躍。
一瞬で自分を取り繕い、普段の横島……あ、いや、タダキチ少年という何も知らないオコサマキャラのパーソナルデータを被って振り返る。

「え……？」

そこに居たのは自分を凝視している一人の少女。

左手には白鞘の刀…であろう得物が逆手に持たれており、見るとも無しに気付いてしまった事なのだが既に鯉口は切られていた。

色白で小柄な身体つきの少女であるが、その鞘の内にあるだろう剣のように気配が鋭い。

隠しているつもりかもしれないが、横島から言えばバリバリに感じられるほど少女は内に氣を練っている。

「あ、これ、お姉ちゃんの？」

キョトン…

正しくキョトンとした子供の表情で横島はその少女に手紙を差し出す。

演技の巧みさは“向こう”で修業済み。

この、“何も知りません係わり合いありません私は何も見なかった攻撃”は、彼を知る女性以外ならまず間違いなく騙せる技である。

覗きが見つかった時や、謂れの無い浮気（横島主観）がハッケソされた時等に非常に役に立つ技だ。誤魔化しの上級技というだけなのであまり自慢にはならないが。

それでも“雇い主”を騙せる確率は軽く１％を下回っていたりす

る。ホントに無関係だとしても疑わしきを罰する女性であったし。

それは兎も角として、その女性はそんな子供の雰囲気に腕をピクリと動かした。

『あかんっ！！　来るっ！？』

こーゆータイプは行動はイタイほど理解している。骨身に染みているからだ。無論、何度も経験しているから。

だからこそ彼はあえて腕を引っ込めない。

避ければもっとイタイという状況を受け続けていた横島だからこその一瞬の判断だ。

彼女のようなタイプは何より自分の勘を信じる事がある。

単なる思い込みであったとしても、その確証が得たいからだ。

それに、横島は少女の前で飛んでくる燕を無造作に手で掴み獲るといった荒業を披露してしまっているのだ。どんな剣豪だと問いたい。

彼からすれば某霊山の竜神管理人様よかずっと遅いし、何より自分の雇い主だった女性のパンチや、グレートなママンの拳よか遅くて軽い。尚且つ“向こう”での弟子であった人狼少女よか動きが読み易い。だから掴み獲る事など余裕のよっちゃんである。

何せこの横島忠夫、Ｍ９３Ｒのフルオート連射を叩き落していたバケモノなのである。音速より遅い燕の回避速度を上回る事等造作もなかったりする。

非常識さ１２０％であるが。

ま、目の前の彼女がそんな事を知る由も無い。

一見幼い彼の手の甲を、バシッ打ち据える音が高く響いた。

ポカンとする子供は音を鳴らせた自分の右手を見、親指辺りが赤くなっている事に気付いて自分の手が彼女に打ち据えられた事を初めて知った……という男の子に完全になり切っていた。

恰も１００％天然果汁であるかのように、だ。

呆然とする幼子の手から舞い落ちた手紙がふわりと床を滑る。

勢いがあったからか、それとも狙ったものか。その親書は床を滑って少女の靴にコンっと当たって停止した。

と同時に、子供の…横島の顔がくしゃりと歪み、目元に涙が膨らみ始めた。

「え…？」

これには少女の方が面食う。

剣でもって切られるとしたら流石に避けるだろう。しかしそれでも万が一の事を考えて剣で切りかかるフリをし、二本の指刀で手を打ちすえたわけであるが……こうもきれいに攻撃に対して無反応だとは思いもよらなかったのである。

フツーは『迫ってくるものが剣じゃ無いから当たってもいっかな

～～　美少女の攻撃だし』と、目で確認した等という非常識な事は考えまい。

「えぐ、えぐ……びぇえぇ～～～～～っ」

「え？　あ、ちょ、ちょっと、その……」

まるで的のように微動だにせず指刀を自分から受けた横島。

同情を引く為の泣き真似は行い慣れているのでめっさ上手い。

ランクＡの技術点で、本当に六，七歳の子供の様にペタリと座り込んで大泣きするという演技を披露して見せている。

流石に少女もこれには困った。

いや、只者では無いと確信しての行為だったのだが、性根はお人好しである彼女だから、こんな様を眼にすれば自信も揺るぐというもの。

何しろ（見た目）男の子のマジ泣き。

こう泣かれると自分が見た燕の掴み獲りが単なる偶然で、本当に無関係な単なる男の子ではないのか？　今の自分の行為は単なる悪事以外の何物でもないと思い知ってしまう。

この少女自身、戦闘能力を含めてまだまだ人生経験が足りず、修業不足なのだからそう“誤解”してしまうのも仕方の無い事なのかもしれない。

相手が悪いだけとも言うが。

「あ〜〜っ?!　ナニ泣かせてるアルか〜〜〜っ」

「え?　あ、古…」

少女がオロオロしている間に、いつの間に駆けて来たのだろうか、同級生であり自分と同じく武道四天王の一人である古が子供教師と二人連れでこっちに駆けつけて来ていた。

「あ、あれ?　刹那さん」

手紙を奪われるという大失態を披露し駆け付けたまでは良かったが、そこで見た光景は自分より年下っぽい男の子を泣かせた（であろう）教え子の姿。おまけのその手には奪われたはずの親書まで握られている。

そりゃあ固まりもするだろう。

「こんなコドモ、泣かせてはいけないアルよ?!
お〜ヨシヨシ。怖かたアルか〜〜?」

古は横島に駆け寄り、これ見よがしにギュッと抱き締め頭を撫でてあやした。

「ちょ、まっ！！　古ちゃん！！　アンタどさくさに紛れてナニを……うぷっ」

無論、彼の小声の訴えなど完全スルーの方向で。

少女…桜咲刹那からは陰になって見えていないようだが、古の口元はニヤリと歪められており、チャンスとばかりにこのボーイ忠夫にセクハラ気味の虐めを行っていた。

ひーんひーんと逃げようとしているのだが、先に演じたのが“叩かれた男の子”なので痛がっているようにしか見えず、逃走の助けにもなりゃしない。自業自得というよりタンモングが悪いだけなのだが。

そんな不幸な少年がズルズルと引っ立てられてゆく様を目の端に入れつつ、子供先生は刹那から眼を離さないでいた。

刹那としてはかなり気拙い状況であるが、今更あの子供に謝ろうにも叩いた理由は挙げられない。

下手の口を挟めばあの古が一緒なのだから騒ぎが大きくなってしまう可能性が高い。それでは護衛としては勤まらないではないか。

それに表立った行動は拙い。

自分の得物は何とか鞘袋に収められたのだが、それでも子供に対して何かやったという事実はどうしようもなかった。

はっきり言って、今まで護衛をしてきた中で一番の失態だ。

あの男の子に対してかなり心を痛めてはいたが胸の内だけで謝罪し、刹那は子供教師に落し物ですと手紙を手渡して、注意を促すに止めその場を後にした。

その甲斐あって、刹那の背を見送っている子供先生事ネギ＝スプリングフィールドは、

『あんな子供を泣かせて謝りもしないなんて……

やっぱりカモくんの言ってたように桜咲刹那さんが西のスパイなの……？』

と、誤解を深めてしまっていたのだが。

影に隠れて護衛するが為、魔法の飴を使って子供となった横島忠夫。

子供というメリットを最大限に生かせた所為でおもっきり周りに迷惑を振りまいている訳だが……

やはり天才的なトラブルメイカー。

ドコに世界にいようとも誤解を飛び火させてゆくのは相変わらず

のようである。

■六時間目：寺へ…・

初っ端から何だかトラブルが発生していた様であるが、それでも気を取り直すのが早い事で定評のある３－Ａの少女達。
京都に着き、清水寺に到着した辺りで既にテンションは回復していた。
予定では１４：００到着であったのだが十五分ほど遅れてしまっ

ている。まぁ、修正の範囲内であるが。

「京都ぉ――っ！！」

「これが噂の飛び降りるアレ」

「誰かっ！！　誰か飛び降りれっ」

騒がしい事この上も無い。
こんなクラスで委員長をしている少女の心労も凄そうだ。

清水寺――
正式には音羽山清水寺といい、造られたのは今から千二百年以上昔。西暦にして七百八十年くらいで、奈良時代の末あたりだとされている。

結構、古い歴史を持つ寺院ではあるが当時の木造建築の寺の常か、何度も火災にあって徳川家光に再建してもらってた。

少女らが騒いでいた本堂の“清水の舞台”……所謂『清水の舞台から飛び降りたつもりで…』のアレだが、あそこは観音様に能や踊りを披露する場で、現在は国宝に指定されているそれはそれは大切な場だったりする。当然、バンジージャンプの会場ではない。

因みに飛び降りる理由は自殺とかでは無く、観音様がいらっしゃられる補陀洛浄土へ旅立とうとしたのが大半だったとか。
仏教の思想から言えば自殺という重罪を犯した者は地獄行きという気がしないでもないのだが。

ここで、飛びおりれと…まぁ、口にしたのは鳴滝風香であるが…提案した清水の舞台から飛び降りる行為であるが、実のところ意外に生存率は高かったりする。

無論、生存確率が“高い”というだけで死なない訳ではないのだから危険行為である事は言うまでも無い。

如何に奇人変人集団として知られている３－Ａの生徒とはいえ飛び降りようとする少女は流石に少ないのだが、“飛び降りられる少女”はそこそこいたりする。

それでも何とかそーゆー行動をかます生徒が出なかったので“いいんちょ”事、雪広あやかもホッと胸を撫で下ろしていた。

何せ、その“飛び降りられる”生徒の筆頭である長瀬楓は、電車内で乗り物酔いでなってしまったのか顔色が悪くグッタリとしていたのだから。

「う〜……」

「大丈夫アルか？　楓」

「まだちょっと気分が悪いでござるよ……」

楓と古は同じ班の少女達…超　鈴音、四葉　五月、春日　美空、葉加瀬　聡美の四人からやや遅れてクラスの最後尾を歩いていた。

当たり前であるが横島は班行動には加わってはいない。

幾らなんでも子供を混ぜて一緒に歩くのは目立ちすぎるのだ。只

でさえ子供が教師をしていて目立つのだから。
だから彼は覗きで鍛えた穏行でもって二人について来てたりする。

『正直、スマンかった』

寺社の影から謝る声が聞えてきた。

相変わらず無茶苦茶なレベルの穏行で、楓ですら姿を見出せないのであるが不思議と彼が土下座している事だけは古にも解ってしまう。
穏行しつつ土下座する男。相変わらず規格外だ。

「あ～……いや、拙者らも悪乗りし過ぎてたでござるからお気になさらずとも結構でござるよ」

「そーアルな…ちょとやり過ぎたアル」

楓も古も珍しく反省の意を見せている。
本当に珍しいのであるが、新幹線から降りて冷静になってみるとやり過ぎの感は否めなかったのだ。

彼女らの反省とは、言うまでもなく車内でのドタバタ騒ぎの事である。

無自覚ではあったが、二人は横島と共に行動する事を知って浮れていたようだった。
だからこそあんな無茶な設定を披露しまくってたのだし、平気で自分の胸に掻き抱いたりできたのであろう。
現に今になってかなり恥ずかしい事をしたと思い知らされているし。

そしてそんな楓に横島が謝り倒している理由は、新幹線内で発生した謎の事件……“１０８匹カエルさん大発生事件”が関わっていた。

何だかよく解からないのだが、恐らくは西の刺客の妨害工作（悪戯？）。
横島が少女らから逃亡してお手洗いに身を隠している間に、彼女らの車両が１０８匹ものカエルで満たされてしまっていたのだ。

一応、全てのカエルは古達の活躍で捕らえられたのであるが、こんな珍事件が勝手に発生する訳も無い。当然、仕組んだ者がいる筈。
あの時、古が子供教師ネギと共に車内を駆けていたのは、早くこの件を横島に伝えようと古が急に駆け出したネギの後を追う様に捜しに出ていたからだ。

引き摺られている道中で横島はその全ての話を聞き終えていたのであるが、彼は西の行動が本気なのかおちょくっているだけなのか判断に苦しんでいた。

カエルの式で持って騒動を起こして親書を奪う…というのが狙いだとでもいうのだろうか？

横島とて学園長の語っていた“魔法の秘匿”という点をわりと守って生活を続けている。

そりゃあ確かにオコジョになんぞされたかないが、仕事として受けた以上は守秘義務はついてくる。その程度の事くらいは弁えているつもりだ。何だかんだいってプロのGSなのだから。

だからこそ、そんな“秘匿”という言葉から掛け離れたその珍騒動を起こした向こうの考えに頭を痛めているのである。

何つーか……やる気を削がれる一件やなぁ……

それが狙いだとしたら大した……モンでもないか…作戦のアホらしさがオレと同レベルやんか…

等と溜息を吐いている間に彼は古の手によって少女らが満載の車両に連れ帰られていた。

彼がやっと気付いて慌てても時既に遅し。

横島は又しても古の膝の上に拘束されてしまったのである。

オレのアホぉ～～……

そう唸っても後の祭りである。

そん時、楓がぐったりとしているのを見つけて、理由を聞いた横島は『実はカエルか苦手☆』という彼女の弱点を知ったのだ。

普段なら絶対にしない行為であるのだが、性犯罪の被害者宜しくトイレでべそをかいてしまう程にまで追い詰められていた横島は、『今、復讐の時！！』とばかりに自分の持てる全ての知識をもって

楓に対してカエル談義をおっ始めたのである。

その話は多岐にわたり、日本でのカエルの分布図やら生態、背中にオタマジャクシをペタリと貼り付けて移動するヤドクガエルの話やら、カエルに寄生して生きる生物、カエルの妖怪、はたまたエグい系の御伽噺まで含まれていた。

それらを臨場感たっぷりに楓に伝えまくる横島の無駄な技術には眼を見張るものがあり、超や五月も感心して耳を傾け、横でウッカリ耳にしていた美空ですらカエルの幻臭まで感じた程だ。

当然ながら楓が食らったダメージは計り知れない。

何せ彼女は、古の膝の上に拘束されている横島をマジ泣きの眼でやめてやめてと見つめていたくらいだ。

そこに至り、横島は我に返った。

何だかんだで人の良い彼は、楓に対してとんでもない事をしてしまったと自覚した瞬間、古の拘束から完全に脱し、空中で土下座してそのまま床に着地するという、伝説の技の一つ『空中土下座』を披露し、全身全霊の土下座でもって楓に謝り倒していたのだった。

楓も途中からやり過ぎたと自覚があったし、ここまで真剣に心から謝罪している横島に憤りを感じる事も無かったので直にその謝罪を受け入れている。

古にしてもイっちゃった目でカエルについて動物学者も真っ青に知識を語りまくっていた横島に引き気味だった事もあり、やりすぎを痛感していたのでそれで手打ち。今に至っているという訳だ。

こんなしょーもない事で“程々”という“加減”を理解した（思い知った？）三人だった。

さて――

横島の熱血カエル講座によってのダメージはまだ楓から抜け切っていないので、古と共に最後尾を歩いているのだが……そのお陰というか何と言うか、横島と作戦を練るチャンスが訪れている。

『まず、今回は楓ちゃんがあの子…ええ～と、近衛　木乃香ちゃんね？

彼女に着いて行って守ってほしいんだ』

「承知」

物陰とはいっても、完全に護衛ターゲットが目に入る場所。そこら辺は覗きで…じゃない、プロとして鍛えられている。

黒髪ロングの可愛らしい少女で、おだやかに京都弁を喋り優しげな雰囲気を漂わせてせた大和撫子。

プロポーションにややボリューム欠けるが、それがまた年齢相応で可愛らしさに拍車を掛けている。

四，五年もすると横島は声をかけずにはいられないであろう、将来性が非常に高い美少女だ。

はっきり言って、近衛の孫とはとても思えない。

鳶から鷹…は良く聞くが、福禄寿が弁天様…はあんまりだと横島は思う。それ以前に福禄寿は爺さんだから、もし産んでしまったら

絶望するが。

それにしても似てない爺孫だ。欠片も共通点がない。

よっぽど優性遺伝子がかんばったんだろうなぁ…と横島は元より、楓や古すらも感心しきりである。

その楓らの話を聞いても、かなりマイペースである事を除けば悪口に当たる点は思いつかないとの事。

横島にしてもあーぱー娘の護衛より、木乃香のような心身共に美少女な娘を守る方がやり甲斐があるというものだから、コッソリ張り切ってたりする。

極自然に、親書の件より美少女護衛の方へと優先順位が移っているのが実に彼らしい。

ともあれ、一応は横島も気をつけてはいるのだが、あまり近寄ると余計な騒動を生む気がビンビンにする。

特にあの鞄袋を持った少女はずっと護衛対象である木乃香に意識を向け続けているのだから。

いや、説明すれば事足りるのであるが、横島はまだその少女剣士である桜咲刹那と正式な顔合わせを行っていない。

それに、楓の話によれば彼女は横島に対して良い印象を持っていないとの事。

『オレ、何かしたか…？』

「いや…拙者にもサッパリ」

美少女に嫌われるという事に慣れてはいるが痛くない訳ではないのでやっぱり心が痛い。

まさかロリ否定の最終防壁超倫理回路（ジャスティス）すら気付かぬ内に夢遊病者が如くセクハラをかましていたとか……？

いや、まさか…しかし……

自分に自信が無く、絶対に中学生にセクハラなんぞやる気は起きないぞ！！　と言い切れ無い悲しさがそこにあった。

実際は楓の説明がやたら無意味に深読みさせているだけなのであるが、横島はもとより当の楓すらその事に気付いていない。

まぁ、旅行から帰れば誤解を解くチャンスもあらぁ…と深く溜息を吐いてその件を棚に置いた。

『で、古ちゃんはあの先生に着いてって欲しいんだけど……』

そこまで口にし、横島はふと欄干から京都の街を見渡し、

「わ――スゴイ
京の街が一望できますね――♪」

等と楽しそうにしているスーツ姿の子供に眼を向けていた。

少女らの胸くらいまでしかない小柄な体。

見事な赤い髪。

知的なんだか背伸びをしているだけなんだか判断の難しい印象の眼鏡。

背中に背負った背丈より長い杖……

いやそれより何よりも、

『なぁ、古ちゃん。あの子が先生なんか？　担任の？』

「そうアルよ？」

最初、車内で出会っていたりするし、名前も近衛から聞いてはいたのであるが……まさかあんな子供が教師だとは塵程も思っていなかった。

つーか、もっと先に近衛に写真なり提示してもらえという話もある。

しずな先生がいる時点で教師らの顔を見回す優先順位が変わってしまって無理だろうとは思うが。

因みに、もう一人魔法先生が着いて来ているのだがそっちは自然にスルーされている。

独身で美形は生涯の敵なのだから。

「何アル？」

そんな横島の葛藤（？）等知る由も無い古は、彼がいるであろう建物の陰に向って首をかしげる。

『あのさ…労働基準法って知ってる？　あの子ってどう見ても小学校低学年だよ？
それともオレみたくあの飴食って若作りしてんのか？』

いや、十歳（数えであるから実年齢は九歳）に若返って教師をする意味はあるのか？　という疑問はさておき、横島としてはそこんトコをツッコミをいれたくなる。

横島から見ても可愛らしい子供であるのが何だか腹立たしい。
将来は確実に自分の怨敵になるであろう容貌と、妙に美少女に纏わり付かれているモテモテマンなオーラが横島の勘にビンビン警鐘を鳴らしている。

親書の一件が無ければ見捨てたいよーな気さえしてくるのだ。

「何やら不穏なオーラを感じるよーな気がするアルが……ネギボウズは間違いなく子供アルよ？
老師みたいな下心見え見えのエセ子供心は感じられないアル」

『悪かったな――っ！！　穢れた大人でスマンの――っ！！』

そうこう話している間に、少女らの群れは移動を再開する。
当然、楓らも後を追い、横島は正しく影のように二人の後を追った。

少女らを追うより、楓と古に意識を向けて追った方が他者に発見され難いであろうとの判断である。

『それ以前に、これだけ見事な穏行を見破れる人間が果たして何人もいるものでござろうか……？』

楓としてはそこにツッコミたかった。
何せ自分でも声を掛けてくれないと気配の“け”もつかめないのだから。
尤も、そんな楓の疑問なぞ知った事ではなく、少女らの列は予定通りに見学コースに向かうのだが。

何が楽しいのかサッパリであるが、少女らの一団はキャイキャイ騒ぎつつ、それでも順路通りに境内を抜けて行く。

そしてその最後尾を何だか妙に落ち着いた雰囲気を漂わせつつコドモ先生が着いて行っているのが見えていた。

……なんつーか、妙にジジむさい。

じっと子供教師に眼を向けていると、先程の年齢詐称の疑念が高まって行く。

いや、学園を出るまでは小学校低学年のはしゃぎっぷりを披露していたというのに、現地に着いたら急にこれなのだ。無理もなからろう。

そんなコドモ先生を見つめていると、件の先生が肩に乗せている小動物に話しかけつつ歩いているのに気付く。

はて？　動物を相手に独り言？
実は寂しい子供だったのかと思ったのであるが、よく見ればその小動物……フェレット？　いや…イタチか？…はちゃんと受け答えをしているではないか。

『あれ？　ひょっとしてアレは使い魔なんか？
もう使い魔や持っとるんか？　あの歳で？』

横島の知っている範囲で使い魔を持っていたのは魔法料理店の店長くらいだ。
彼女とてこんな歳から使い魔を連れていた訳ではなかろう。
というか、魔法学校を卒業しているという話であるから、やっぱり年齢詐称の線が濃厚である。

女子中学生とウハウハする為にコドモの姿となったか。外道め…

あらぬ疑いは己のアイデンティティ（ロリじゃない）を守る為、全く謂れのない八つ当たりとして暗いエネルギーを高めていった。

と……？

「あンッ？！」
「きゃあ」

「え？」
「な…っ？！」

唐突に少女らの悲鳴が響いた。

楓らも驚いて駆けつけると、恋占いなどで有名な自主神社の境内でそれは起こっていた。

「は……？」

それを見た横島……と、楓らは唖然とした。

地主神社の御本殿の前には、１０メートルほど離れて置かれている膝の高さほどの２つの守護石があり、片方の石から反対側の石に目を閉じて歩き、無事たどりつくことができると恋の願いが叶うと知られている。

よく言われている話は、一度で辿り着ければ恋の成就も早く、二

度三度となると恋の成就も遅れ、また人にアドバイスを受けた時には人の助けを借りて恋が成就するというもの。

もちろん様々な諸説はあるだろうが、そう言った“謂れ”が地主神社を良縁祈願、縁結びの神社として広く知らしめているのだろう。

当然の様に３－Ａの少女らもノリ良くこれにチャレンジした様なのだが……

何とそのルートのど真ん中に落とし穴が掘られており、チャレンジした内の二人が見事その落とし穴に落下してしまったというのである。

ご丁寧にも中にはカエルが入れられており、こんな場でこんなタイミングでのこんな悪意ある悪戯は明らかに麻帆良の生徒を狙った妨害行動…つーか嫌がらせであろう（楓にとっては必殺レベルであるけど）。

だが、何より驚いたのは、その嫌がらせ具合…というかセコさレベルだ。

『……やっぱオレと同レベルか？　いやしかし……』

何ともくだらない理由であるが、それでも横島に何か近親感を感じさせてしまうほどセコいのだ。

近衛の話によれば、東西の魔法関係の確執が絡んでいるようであったし、京都と言えば千年続く呪術の魔都だ。

そんなところの組織なんだから、辻の鬼やら追儺やらを使ったおどろおどろしい呪術が行われかねない。

前世が陰陽術師だったから…という訳ではないだろうが、だからこそ横島も病的ともいえるほど周囲に気を使っていたのであるが…
…ここに来てまだこのセコイ嫌がらせ。
逆にどう対応すればよいやら悩んでしまう。

かといって、油断を誘う為の茶番か下準備の可能性もゼロではない。

呪術を相手にする時は策の探り合いだと身をもって知っているからの考え過ぎであるのだが……まぁ、今はまだ解るまい。

そうこう彼が真面目に取り掛かって良いやらテキトーに接して良いやらと悩み続けている間にも、あっさりと少女らは気を取り直して先に進んでゆく。
横島達も仕方なく悩むのを止め、慌てて後を追って行った。

次に一行が向ったのは三筋の水が滴り落ちる小さな滝を形作った音羽の滝だ。

わりと知られていないのであるが、清水寺の名はここから由来してたりする。
何百年も前、かの弁慶や義経も口にしたと言われている清水の音羽の滝であるが、その清水は古来「黄金水」「延命水」とよばれ、本来は“清め”の水として尊ばれており、滝行を伝統とした水垢離の行場であり、またお茶の水汲み場となってきていた。

その霊験あらたかな水は、口にすればその願いが叶うとされており、本殿を後ろに置いて向って右から健康・学業・縁結びを意味されているそうな。

尤も、それは観光用だというのが定説だったりするが、少女らにとっては縁結びが叶うという点に意味があるのだろう。

当然の様に少女らは左側に集中していた。

「むっ…」

「！」

「う、うまい？！　もう一杯！！」

青汁じゃあるまいし。

史伽なども、『いっぱい飲めば　いっぱい効くかも――』とぐびぐび飲んでいたりする。

因みに、この音羽の滝の水は三筋全て飲めば願いは叶わないし、一杯以上飲む毎にご利益の力は下がってゆくとの事。

そんな作法など知る訳も無く、少女らはその霊験あらたかな水をがぶがぶ飲み続けていた。

「おお、何やら楽しそうでござるな。拙者も気付けに頂くとするでござる」

『つーか、霊験あらたかな水を気付けにするってどーよ？』

「では、そのあらたかな霊験でもって横島殿は邪気を祓ったらどうでござるか？」

『この清廉潔白なオレに何を祓えと？』

「日本語に喧嘩売ってるでござるか？」

何だかんだで二人で行動している楓と横島は、わりと呑気にそんな話をしていた。

彼女もドタドタと騒ぐより、ぼんやりと風景を楽しみつつ、こんな冗談を言い合って歩く方が好きである。

それに……何だかとても楽しいかった。

確かに車内では横島によってエラい目に遭わされたのだが、自分も彼をエライ目に遭わせているのだし、自業自得として受け入れれば何の屈託も残らない。

それに今、こうやって話をしているだけで何だか心が軽くなってゆくのが感じられてしまう。

我ながらお安い女だとは思うのであるが。

――妙なものでござるなぁ……

等と思いつつも、浮かぶのは小さな笑み。

彼女がそれに気付いていないのは幸いなのやら残念なのやら。

と――

『……ん？　何か酒臭くないか？』

「？　はて……そう言われれば……」

横島の言葉を聞き、楓も鼻を利かせれば確かに酒の臭いがする。
それもかなり強い。つまりすぐ近くという事だ。

ハッとして二人が周囲を窺うと……

「……何か　みんな酔いつぶれてしまったようですが……」

「いいんちょっ　しっかりしなさいよ！！」

「ええ――――っ？！」

「『な……っ？！』」

水を飲んだ女生徒が何人も酔いつぶれ倒れ伏しており、ツインテールの少女がクラス委員を揺すって起こそうと努力を続けていたのである。

縁結びの清水を飲んだ女生徒だけ、という点を見、楓は慌てて跳躍して屋根に登った。

すると……

何と屋根の上には酒樽が置かれており、ご丁寧にもホースによって縁結びの筋に酒が流れ込むように仕掛けられていたのである。

『な、なんつったらいいか……大雑把なのやら周到なのやら……』

「その気持ち解からぬでもないでござるが……被害者の中に……」

『え？』

物影に潜んだまま移動し、被害者メンバーの顔を窺ってみると、

『く、古ちゃんまで……』

何と中華カンフー娘は見事に酔っ払ってうつ伏せにぶっ倒れていた。

横島は呆れ返るだけであったのだが、楓は妙な事が気になっている。

――むむぅ？

古が……縁結びを……？

チラリと彼が隠れ潜んでいるであろう柱の陰に眼を向け、ふぅん…と納得をしてからもう一度眼を回している古に眼を戻す。

以前から古と横島がじゃれているのを目に入れたときに感じていた言い様の無いムカツキがここに来て復帰してきたようで、楓は微

妙に表情を歪めていた。

「鈍……
楓よ……まさかまだ無自覚なのか？」

気配は全く感じられないのだが、褐色の肌の少女…真名の魔眼には横島の姿は捉えられていた。

その真名すら感嘆するほど隠業術を行使している横島と古に視線を送っている楓の様子に、真名は深い溜息を吐く。

彼女はプロであるから無駄な行為は行わない。
だから雇われてもいない関西呪術協会からの防護班には加わっていないのだ。

だが、クラスメイトとしては何だか助言というおせっかいを掛けたくてしょうがなかったりする。

「いい加減、自分を顧みろ。
異性に感けていれば仕事に支障が出るぞ」

直接は語っていないのだが、口には出していた。

直接言ってやりたいのは山々だが、『横島忠夫に想いを持ってい

る』と言霊で括ってしまう可能性がある。
こーゆーのは自覚が大事なのであるし。

やれやれ…と肩を竦め、級友を介抱している少女らの輪の中に混ざってゆく。

何だか先が思いやられると苦笑しながら……

確か相手も魔法関係者であるから、秘匿義務は知っているはずである。
その中にはちゃんと無関係な人間を巻き込まないという事は明記されている筈。

確かに行為自体はセコく、性質の悪い悪戯というレベルではあるが、完全に一般人を巻き込んでいるではないか。

『関西呪術協会……か……』

バスの中に女生徒達を放り込んでゆく子供先生らを見守りつつ、横島は手段を選ばない西の刺客に対し一人正義の怒りを燃やしていた。

「……の割りに、ちゃっかりと水筒に詰め込んでいるでござるな」

「せやかて、マジええ酒で美味いんやもんっ！！」

本文（後書き）

今回の更新はここまでです。
微妙に変わってますが、筋はまだまだ。
もうちょっとで変わって行く予定です。

板で管理するのって、修正込み楽ですねｗ

てな訳で、続き見てのお帰りです。
ではでは～

前編（前書き）

なんだか一番サブタイトルが受けた記憶が……

ｇｄｇｄを削り切れませんでした（泣）。

前編

異世界への移動……というのはファンタジーでもよく使われてきた手法だ。

その世界の神様やら魔法やらによって導かれ、選ばれし者がやって来る。そして難題を解決し――というのはパターン化していると言ってよい。

それは感動的な大作でも、悲劇でも大抵同じだった。

その世界で成し遂げられる者がいないからこそ、別の世界に救いを求める。

出来ない事があるから出来る者を呼ぶ。或いは出来る可能性が高い者を呼ぶというのは同じ方向なのだから。

しかし、神々やら世界の誕生から違う、全くの異世界なら話は別。

宇宙の誕生レベルから違うのであれば、当然ながら生まれた元素からして違う訳だから人間を構成する材料も違ってくる。

呼び名が違っているが同じ元素である可能性より、呼び名が同じで別の元素である確率の方が高いのだから。

そうなってくると、異世界……いや、異宇宙からやって来た者はどうなるだろう？

何せ原子や分子同士の相性だって不明である。最悪、反発反応を起して分解してしまいかねない。

となると、異世界から来てしまった者が無事でいる理由は？

分解してゆく精霊すら再生する力を持つ青年が、

物質の特性すら歪曲させる事が出来る男が、

人造人間のアシストがあったとはいえ、生身で大気圏突入中に霊能を発揮して大した怪我も負わなかったという生き汚いその男が何の手も打てずに墜落し、

落下ダメージ以上に負傷した挙句、十年にも及ぶ記憶が消失している。

更に全く違う宇宙のモノ。似て異なる元素物質を普通に摂取し、普通に消化できている。

つまり、それは――

■七時間目：猿の湧く所為

（前）

カラカラ…と音を立て、長細い青色の瓶を振り、掌にコロンと飴玉を一つ取り出す。

色は瓶と同じ青。

澄んだその色は宝石の様に美しいがこれでもれっきとした飴玉だ。

尤も、只の飴ではないのだが――

「ククク……」

その飴を電灯の灯に翳し、半ばうっとりとした眼差しを送っていた子供であったが、その子は唐突に含み笑いを漏らし始めた。

それも只笑っている訳ではない。
そのまま最後に大爆笑へと変じてゆく狂気の笑いだった。

心の弱い者が目に入れてしまえば即座の失禁と、今夜は悪夢でのオネショは必至であろう。

「ふはははははははは……」

まだ笑い続けているその様は、不審者どころか怪人である。

黒マントでも着けて、ついでに黒マスクでも着ければ１００％天然素材でできた怪人の完成であろう。

だが、幸い（？）にもその子供の姿はパッとしなかった。
ジージャンにTシャツ、ジーンズにバッシュという当たり障りの無さ過ぎる出で立ちだったのだから。

それでも顔を右掌で覆い隠し、海老反ったり前かがみになったり

忙しく体勢を変え、病的に笑い続けている様は精神に著しい障害をお持ちの不審者だ。

「くくく……」

その気色はまだ治まってはいないようであるが、それでも構わず子供は瓶から取り出していた一個の飴を口元へと近付けてゆく。

やがて針の様に細め、涙すら浮かべていた眼がくわっと大きく開かれる。

そしてその飴玉を、おもいっきり勢いをつけて大きく開けた口の中へ……

今こそ野望を叶える時!!

「いざ!!!」

ぐわっっとやや充血した目を見開き、ドンッッと大地（床ともいう）を踏みしめて彼は行く。

憧れのパラダイスであり、理想郷にして救済の世界へと……彼は、旅立つ!!

すぽかーん!!

「ぐおっ?!」

……事は叶わず、その後頭部に見舞われたナゾの一撃によって子供は飴を飛ばしてしまった。

だがその飴は暴挙に出た人物がすかさず繰り出した掌に収まり、何時の間にか子供から奪い取っていた瓶の中に戻されている。

子供の頭部は何かに張り飛ばされて実にイイ具合の音を立てはしたのであるが、実際には痛みも無いし苦しみも無い。

どちらかと言うとその子供は、来るのが解かっていたのに避けようと出来なかった自分の方にイタさを感じてたりする。

「な〜にやってるでござるか」

「くぉ……楓ちゃん、酷いやないか」

その子供――飴の力で子供の姿となっている横島忠夫の後で、この修学旅行に持って来ていたのだろうか、彼愛用のハリセンを肩に乗せた制服姿の少女、長瀬　楓は溜息を付きながら瓶をポケットに押し込んでいた。

何時もの横島であればひょひょいのひょいと回避できたであろうが、彼女の得物はドツキ漫才御用達のハリセンだ。

お笑いの血が騒ぐのか、横島はハリセンを避けられない……とい

うか、自分から当たりに行ってしまう性質だったりする。

そんな横島を感心して良いやら、やっと入れられた一撃がツッコミだった事に肩を落とせば良いやらで楓の心境は複雑だ。

「何やってるって……オレはただ……」

「この飴の力が土壇場で切れたりしないよう、念の為に飴を口にしようとしてた――でござるか？」

「そ、そーだぞ？　だ、だから不審な行動とちゃうやろ？」

な？　な？　等と弁解しながら畳の上を座ったままずりずりと後ずさる。

バリバリに挙動不審だ。

その構図はまるで愛人とアツイ夜を過ごして朝帰りをした亭主よう。

そして溜息を吐いて横島を見る楓は、あたかも懲りない夫を諫める妻の要でもある。

何せ彼女、彼が何を思いつき何を実行しようとしていたのか、おもいっきり理解できてたりするのだから。

「どーせ　しずな先生が入浴している時に露天風呂に乱入し、

子供だから全然セーフだとイロイロするつもりだったのでござろう？」

「な、何故その事を～～～っ？！」

イヤというほど理解されている横島であるが、そのセリフにこれだけ反応して自爆してたら情状酌量の余地は無い。

ああ、やっぱりか……と肩を落としてしまうのも当然だ。

何と読みやすい行動であろうか。

単純というか、底が浅いというか……兎も角、僅かの間しか接していない楓にも彼の行動はお見通しである。

それだけに安心できるとも言えなくもないが。

「そんな事を許す訳が無いでござろう？
それにしずな先生はとっくに入浴を終えているでござるよ」

「な、何ですと――っ？！　くそっ！　謀ったな市屋亜（しゃあ）！！」

「キミの御父上が悪いでござるよ。見田舞屋（みったまいや）……って、ナニ言わせるでござる」

かなり違う上、かなり横島に汚染されているようだ。

解かる人にしか全く解からない声優ネタをかます楓。
当の横島はというと、甲子園への出場キップを己のエラーで逃した高校球児のように膝を付いて悔しがっていた。

まったく……混浴が駄目になったくらいでそこまで落ち込まなくとも……と苦い顔をした楓であったが、後頭部にピンっと電球が輝き、そんな彼の襟首を掴んでどこかに引き摺って行きだした。

「え、えと……楓ちゃん？」

「何でござる？」

唐突な行動に驚愕していた横島であったが、何とか現世復帰して恐る恐るといった態で楓に問い掛けるも、彼女は軽く言葉を返すだけで歩みを止めたりしない。

意外に引き摺る力の強さに冷や汗を流しつつ、横島は勇気を持って質問を再開させた。

何せこの行動に彼の霊感が反応し、ちょっとだけ不安…いや、“不穏”を感じてしまったのだから。

「その、ええ～と……どこに行きなさるのかな～～っとか思っちゃったりしてさ……
そ、それでその……いずこへ？」

自分の身に迫る危険をヒシヒシと感じつつ、必死に自分を取り繕って勇気を持って問い掛けている横島。

そんな彼の覚悟や決断も知らず、楓は振り返りもせずに、

「今日はイロイロ走り回って汚れたでござろう？」

と変化球で返してきた。

「え？　いや、その……まぁ、確かに……」

「ここは一つ、英気を養うという意味合いもかねて、風呂に入る事をオススメするでござるよ。

ここの露天風呂はなかなか心地良いとの事でござったし」

「へぇ……それはいいかも……って、楓ちゃん？」

その答えに何やら危険な香りが混ざっている事を感じた。

慌てて横島は楓に問い返す。

「何でござる？」

「オレが風呂に入るのは良しとしよう。

こー見えてもオレってけっこー風呂好きだしな」

「おぉ、それは重畳。実は拙者もそうでござるよ」

「いや、気が合うねぇ～～……って、それは良いんだよ。良いんだけどさ……」

「何でござる？」

答えつつもずるずると引きずる速度は衰えない。

いや、心なしか加速しているよーな気が……

自分がバレたら拙い事を誤魔化す時と同じモノを感じ取りつつ、それでもまさかなぁ～と一粒の希望を持って横島は再度口を開いた。

「あのさ……何で楓ちゃんは何時の間に洗面用具持ってオレを引きずって行くかな～～？　って……」

確かに、横島を左手でもって引き摺っているのであるが、右手には横島の言う通りに何時の間にかタオルとか石鹸、そして着替えとかが持たれてたりする。

普通に考えると、入浴する為の用意であり、その道中で怪しく笑っている不審者の横島を発見して注意をした……と見るのが妥当であろう。

少なくとも横島を連れてゆく為のモノではない。つーか、そーだとマズい。

だから彼の問いは、違うとイイなー　いや、違っててほしいなーという期待を持っての事である。

「ああ……」

なるほど…と楓は直に彼がナニを慌ててそう問い掛けてきたのか理解し、優しく微笑んで横島を安心させた。

否――油断させた。

楓はそのまま笑みを深め、全く他意は無いでござるよ～～とばかりの表情をもって、

「無論、一緒に入浴する為でござるよ？」

と、事も無げに答えたのである。

「はい？」

その彼女の言葉に、一瞬でカチンと石化してお地蔵さんとなってしまう横島。

楓が想像した通りの笑かすリアクションだ。楽しくてたまらない。

少女は更に笑みを……いや、“本当の意味で”楽しげな微笑を浮かべ、歩調を速めて風呂場を目指す。

「ちょっと待て!!」

「何でござる?」

可愛らしくキョトンとして首を傾げる楓に、横島も萌え付き……否、燃え尽きようとしたのだが、愛と勇気とド根性でもってそれを鎮火させて彼女の手を振り解こうと、必死にもがいて足掻く。

「オレと混浴する気か?! 若い身空でそんなフシダラなコトする娘はセンセー許しませんよ?!
女の子はもっと自分を大切にしなさーいっ!!」

必死であるからこそ支離滅裂。

何を言わんかや。お前こそもっと普段の自分を顧みろと言いたい。

「ナニを言うかと思えば……大丈夫でござるよ？　ここの露天風呂は混浴でござる故」

「何ですと？！
って、論点が違うっ！！　そーゆーコト言ってんじゃなくて！！」

「おろ？　拙者のこの身体に情欲の高まりを感じるとでも？」

「アホな事言うなっ！！」

「では全然ＯＫでござるな」

「え？　あ、いや……そーゆーコトじゃなくて……」

「まーまーまー　幸い、古はまだ酔い潰れている事でござるし……」

「は？　幸い？」

「いやいや。はっはっはっ」

何だか何時もよかエラく強引な楓であった。

彼女の弁の通り、古はまだ飲酒によってぶっ倒れている。

元気爆発少女である古が疲労で倒れるなどという珍事態が起こり得るのかどーか別として、他の教師らにはそういう事として次第を

伝えていた。

何せ西の陰謀（？）とはいえ飲酒をしてしまったのは事実であるから下手をすると修学旅行は中止であるし停学処分だ。

だから飲酒によってぶっ倒れてしまったクラス委員長と同様に、はしゃぎ疲れて倒れた事にして部屋に放り込んでいるのだ。

お陰で楓にはチャンス……じゃなかった、機会が回って来て……じゃない……

えーと…まぁ　なんだ。

そう、

『これはたいへんでござる。
横島殿とふたりでイロイロそうだんせねばならないでござるよ』

てな事らしい。多分。

何だかセリフが平仮名っぽく、とってつけた理由のよーに平べったい言葉に聞えるのだが恐らく気の所為だろう。

それが重さを増した任務によるものなのだろうか、何だか解からない気合が篭った楓の腕力はいつも以上。

運命に抗おうと無駄な努力を続けている横島ですら逃れられず四苦八苦していたりする。

しかし、絶妙な体重移動によって横島は足を踏ん張らせる事から出来ずにそのままズルズルと欲情……いや、浴場に引き摺って行かれいた。

普段なら兎も角、子供の体型&体重になっている彼では腕を取って抗う事も儘ならないようである。

身長はおろか体重まで子供と変化しているのに幻術と言うのだから、この世界の幻術はどんなんだと言いたい。

まぁ、そんな関係ない事を考えている間に、横島は風呂場へと到着してしまってたりする。

「ぬぉっ?!　いつの間に……っ?!」

考え事をしている間に状況を進められるのは相変わらずという事なのだろう。

だが、今更言うまでもなく脱衣場は別なので逃亡する事は可能だ。

しかし、

「ああ、実は護衛の件で相談したい事があるのでござる。
内密の話でござるが、このホテルには監視カメラが至る所に設置されている故。

二人きりになれる場がここしかなかったでござるよ」

等と言われたら断り切れないではないか。

「無論、ちゃんと水着を着用するのでご安心を……
はっはっはっ　流石に嫁入り前の身である故、そうそう肌身を曝すつもりはないでござる」

何時もの忍者服はかなり露出度があったぞ？　という話もあったりなかったりするのだが、そこはさておき。
水着ならばまぁいいかと横島もしぶしぶ納得。

チェ…っ　という舌打ちが出そうになった気がしないでもないが多分気の所為だ。うん。

彼女がそうまで言うのだから真面目な話をするのだろう。

仕方なく横島も混浴するという事を受け入れてしまうのであった……

「へぇ……」

脱衣場から風呂場を覗き見ると、そこはなかなかに広い岩風呂だった。

銭湯ではないのだが脱衣場もそこそこ広く、やはり街中の入浴施設などより一味も二味も違う落ち着きが感じさせられる。

何だか入るのが楽しみになり、横島はパパっと手早く服を脱ぎ去って、その露天風呂へ突撃しようとしたのであるが、あの楓と共に入る事を思い出してタオルを腰に巻いてから浴場に入り直した。

エチケット云々ではなく、生まれたまんまの姿を美少女に見られて新しい境地を見出したくないだけ。

子供の時の自分をナチュラルに曝け出して悦ぶ趣味に目覚めたくないというだけだったりする。

その気が全然無いと言いきれないのが彼の悲しさだ。ナニかに覚醒しそーで怖いし。（例：彼の高校時代のドッペルゲンガー事件）

しかし、このホテル嵐山の露天風呂は、彼が思っていたよりかなり広い。

規模としては麻帆良女子寮の浴場ととんとんなのであるが、横島はそんな事は知らないから素直に感心している。

まさか自分のすぐ近くにりっぱな浴場があるとは露ほども思っていないだろう。まぁ、知っていたとしても部外者だから入れまいが。

入れたら入れたらで何か失いそーで嫌だし。

そんな気持ちよさげな岩風呂が目の前に広がっているのだが、意外にも横島はちゃんとかけ湯をしてから先に身体を洗い始めていた。

湯に入る前にキチンと汚れを落とす……なかなか作法が解かってる男である。

いや、普段なら風呂を覗く穴場を探す彼であるから作法もクソもあったのかと問われると返答に困るのであるが。

ちなみに今回は覗きポイントの下見を行っていない。

女子中学生の貸切に近いこのホテルの風呂場を下見するほど落ちぶれていないからだ。本気で覗きたいのなら飴も手元にあったのだし……

先程楓にも言っていた事であるが、高校時代　赤貧に喘いでいてもちゃんと風呂は入っていた事から解かるように横島はけっこう風呂好きだ。

だから鼻歌なんぞ歌いつつ身体を洗っていた。

麻帆良の自分の部屋にも風呂はあるが、やはり開放感というものが違う。

その嬉しげに身体を洗う所作からも彼が風呂好きである事が窺い知れた。

「お背中を流すでござるよ」

「ああ、あんがとな」

そう言ってもらったので快く承知し、横島は頭を洗う事にした。

横島は男であり、左程気をつけていないのでリンスＩＮのシャンプーだけでＯＫだ。

ホテルのオリジナルシャンプーなのだろうか？　泡立ちも良くなかなか気持ちが……

「……楓…ちゃん？」

「何でござる？」

横島はぴたりと手を止め、背中を強すぎず弱すぎない適度な強さでゴシゴシ洗ってくれている美少女に声をかけた。

楓も何やら鼻歌を歌っており楽しそうだったりする。

「え～と……いつの間に？」

「最初からでござるよ？」

横島の知覚能力の異様な高さは既に見知っている。
ならば素早く衣服を脱ぎ、最初から洗い場の近くに潜み、彼が近寄ってくるのを待って無防備になった時に近寄るのが上策であろう。
そう踏んでの事だった。

確かに忍らしい戦法と言えよう。

しかし横島にとっては性質の悪すぎる悪戯である。
何せ今、ジャスティス（ロリ否定）は重体なのだから。

あんなぁ……と眉を顰めつつウッカリ振り返ってしまう横島。

うかつ、ウカツ、迂闊。
正に迂闊。

横島は頭を泡まみれにしつつ迂闊にも後に振り返り、背後の楓のその姿をまともに目に入れてしまったのだ。

そして横島の顎は、外れたかのようにかっくーんと音を立てて落ちてしまう。

確かに彼女の言葉に嘘偽りは無かった。

感心にもきちんと水着を着用し、体の大事な部分を隠してくれてはいた。

いたのではあるが……

楓の水着とは黒いビキニだったのである。

それもかなり布地が少なく、それって勝負水着？　とかアホな感想を言ってしまいそうになるほど大事な部分のみしか隠せていない、黒いマイクロビキニだったのだ。

楓が横島と出会う前、ネギ先生が初めて少女吸血鬼と戦い、敗北した後に元気の無かった彼を風呂場にて皆で励ますというイベントが行われていた。

何だか女子中学生らが子供にセクハラしただけという気がしないでも無いが、楓の水着はその時のものなのである。

「おろ？　似合わないでござるか？」

ボーゼンとしている横島の表情に気付き、やや頬を染めつつポーズをとってみる。

だが手に持っているのは泡まみれのタオル。横島を洗っていたのであるから、当然ながら彼女の四肢や身体にも泡は付着していた。

楓のプロポーションは８９－６９－８６で、とっくに中学生という範疇から逸脱している。

大人の女顔負けだ。ナメンナ　ゴラァッ！！　と文句言いたくなるほど。

そんな彼女が風呂場の熱気だか何だか知らないが、うっすらと頬を朱に染めているのだから堪ったものではない。色気が更に増しているではないか。

その手に持った泡が年齢度外視の色気に拍車をかけ、ぶっちゃけそーゆーサービス業のお姉さんの様である。

カラータイマーが赤になった瞬間に停止し、
何処かの汎用人型決戦兵器が起動した瞬間に暴走する。

正しくそんな波動が彼から発せられているのだが楓は気付きもしない。否、できない。

流石に横島の半分程度しかない彼女の人生では男の……“牡”のそーゆー露骨なオーラを受けた事は無かったようだ。

ぱきーん

だから横島の心の奥で何かが割れた音が聞こえた気がした……のであるが、その意味合いはサッパリ理解できなかった。

「？　横島殿？　如何なされた？」

きょとんとする楓の表情はとても可愛らしい。
それすらもただでさえクソ短くなっている理性という導火線の火を煽りまくっている。

「……し」

「し？」

プルプルと肩を震わし、ぷちぷちと血管が切れてゆく。

ああ、もう終わりか？
終わりなのか？
終わってしまうのか？　横島。

カウントダウンもスタートする。

１０・９・８……

何の？　と聞いてはいけない。

強いて言うのであればナニかの……とだけ言っておこう。

静かではあるが灼熱の、何が何だかよく解からない波動が強まってゆく。

ド紫色のフォースつーか、オーラつーか、プラーナつーか……そ

れらがこう、ガシガシと。

7・6・5……

いや良く我慢した。
良く耐えたよ。

ここで話があるっつーのは誘いだな？　誘いだったんだな？　じゃあ仕方ないよな？

等と既に自己弁護もスタートしている。心の圧力釜も破裂寸前なのだからしょうがないか。
どーせ後で後悔するくせに……

まぁ、どちらにせよ時間は切れるのだけど。

3・2・1……

も、もう、ダメだぁ……

ゼ……

「む…っ？！」

「もう辛ぼ……うえっ？！」

辛抱たまらーんっ！！　と動きそうになった瞬間、横島は楓に抱えられてその場から飛び退って岩陰に身を伏せさせられた。

「うごっ！？」

その際、ウッカリと額を岩で打ち据えられてしまったりもする。ヒビが入ったのは岩の方だが。どんな石頭だと問いたい。
だが、お陰で彼は正気に返る事ができた。

「ハっ？！　オレは一体……？」

「（シ…ッ！！　誰か入って来たでござる）」

何故に楓がこんなに慌てていたのかというと、邪魔が入らない様に清掃中の看板を立てていたからである。
何の邪魔か……はさておき、その看板が出ていたというのに入ってきたのならば関係者の可能性がある。だとすればバレると拙かったのだ。勝手にそんな立て看板まで使ってるし。

ジャスティスが昏睡状態なのか全く利いてくれなかった事に悶えている横島を尻目に、楓は脱衣場から入ってくる姿を見据えていた。

と……？

「（む……ネギ坊主？）」

入って来たのは肩にオコジョを乗せた少年。
誰あろう、彼女の担任で魔法先生であるネギ＝スプリングフィールドその人であった。

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊

魔法教師、ネギ＝スプリングフィールドは悩んでいた。

彼には学園長から授かった『親書を関西呪術協会に届ける』という任務がある。
それは関東魔法協会と関西呪術協会とを仲直りさせる一歩である大事な任務なのだ。

だが、それと平行して彼自身には　一父親の手がかりを捜す一という目的があった。
だからこそネギはここ京都への修学旅行を心待ちにしていたのである。

しかし今はそんな事は言っていられない。
根が真面目な彼は、生徒に危害が及ぶ事を危惧していたのだから。

確かに父の足跡を追うのは大事であるし、何としても知りたい事だからといって、親書を届ける事を蔑ろにするつもりはないし、妨害工作に生徒を巻き込む事など論外だ。

今の彼は、大事な生徒らを守り、且つ無事に親書を届け、その後にできれば関西呪術協会の長に父の事を聞けたら良いな……と目的の順番を組み替えていた。

ちゃんと生徒の無事を優先順位の先頭に並べ替えているのは、この年齢から言えば感嘆に値できるだろう。

だが、それでも問題が消えるわけではない。

今一番の問題は西の刺客だ。

親書を奪い、講和を反故にさせる……何故そんな事をするのかネギにはサッパリ解からないのだが、ともかく西の刺客はそのつもりなのだろう。

だが、その想いはさておき、魔法を秘匿するという暗黙の了解す

ら無視し、尚且つ一般人を……自分の生徒達を妨害工作に巻き込むのは許せるものではなかった。

肩に乗せた親友のオコジョ――本人（？）曰く、由緒あるオコジョ妖精らしい――カモミール…通称カモ君によれば、京都出身でかみなるりゅう（注：神鳴流。カモには読めなかった）とかを使う、出席番号１４番　桜咲刹那がとにかく怪しいという。

最初は半信半疑であったが、京都への移動中、新幹線の中で件の少女は小さな男の子を叩いてニヤリとしていた（注：カモ視点）らしい。

実際、彼女は泣かした子供に謝っていない。それはネギ自身も見たのだから間違いない。

同僚の新田によれば、その子供はタダキチといい、大阪から東京へと引っ越して早々に両親を交通事故で失い、親戚をたらい回しにされて施設に預けられる直前で養い親となってくれる人間が現れ、その家の子になる前に母親の実家と墓がある京都に一人でやって来たのだという。

聞いていたネギはおろか、語っていた新田ですら涙を禁じ得ない設定……いや、物語である。

なんだか瀬流彦先生やしずな先生は微妙に苦笑していた気がしないでもないが。

兎も角、そんな子供を叩いて謝りもしていない刹那。この事からネギ彼女に対する疑いを強めてしまってたのである。

『やっぱ、あの女が怪しいっスね』

「うん……信じたくないけど、刹那さんが一番怪しいんだよね」

カモはネギに肘をかけ、頭に小さな手ぬぐいを乗せて小さなお猪口に手酌で酒（？）を注ぎ入れて呷っている。どこのオッサンだ。お前は？　と問いたい。

そのネギも表情はだらけきっていた。

彼は風呂嫌いで知られているのだが、それは洗髪が嫌いだからというだけで、湯に浸かる事自体は嫌いではないのだ。

だから観光地の露天風呂というものを味わい、脱力し切っていたのである。

無論、任務や用心の心を忘れたわけでは無い。

現に今も問題の西の刺客の事を考え続けているのだから。

「あいつ、いつも木刀みたいの持ってるし、
魔法使いの兄貴じゃ呪文唱える前に負けちまうよ」

おまけに新幹線の中で目にした通りならば式神も使えるっポイ（

↑誤解）。

「う〜〜〜ん
魔法使いに剣士は天敵だよ――」

何せこちらは呪文を詠唱せねばならないのだ。

その間に攻撃を受けたりすれば詠唱は中断してしまうし、その攻撃も受け放題なのである。

相手の腕にもよるが、未熟なネギでは剣士を前にすればそこらの案山子と変わらないのだ。

ワラ束の様に斬られるのは流石に勘弁して欲しい。

だが、以前のように……教え子のロボっ娘の時のような闇討ちもまたやる気は起きなかった。

あれは成功させなかったのだが、それでもかなり後味が悪かったのだ。

「どーしよ――」

はふぅ〜…と子供らしからぬ溜息を吐くネギ。

色々と考え過ぎてしまい、根本的な解決から遠退いてしまうのは彼の悪い癖である。

とはいえ……

「（はて……？　ネギ坊主は何を悩んでいるのでござろうか？）」

「（さ、さぁ……？）」

横島のように考えすぎないのも問題であるが

ギリギリでセーフだったとはいえ、ジャスティス不在（予想以上に怪我が酷く、入院した模様）で楓と密着しているのは拙い。

かと言ってここから出れば女子中学生と混浴しているエロ男というレッテルがペタリと貼り付くではないか。それは是が非でも回避せねばならなかった。

いや、性犯罪者のレッテルはどーでもいい。高校時代から“向こう”で散々言われていたのだから。

嫌なのは受け入れちゃいかけている事なのである。

それだけは何としても回避せねばならない事柄だったのである。

だが横島はそんなネギを見、自分の姿を顧みてハッとした。

「（……考えてみれば、オレって今は飴の力で子供の姿じゃねぇか……

ナニ焦ってたんだろ……）」

やっとその事に気付き、肩から力が抜けてゆく。

それならこのまま風呂に入り、子供先生をスルーして出てゆくだけで、やーらかい堕落させるモノから逃げ延びられるではないか。

正に（横島主観で言えば）一石二鳥！！

楓に気付かれない位置でよしっと勝利を確信して拳を握り、立ち上がって子供教師に声をかけ――

カラカラカラ……

「……ん？　誰か来たよ。男の先生方かな？」

「え……？　「（シ…ッ！　見つかるでござるよ？！）」ぶふぁっ？！）」

――ようとした所で、全裸の少女が浴室に入ってきたのである。

そしてまた岩に叩きつけられる横島の頭。その際、スイカ割りのような鈍い音がしたが気の所為だろう。

「（あ……あの娘は……）」

「（ふむ……
　刹那……桜咲刹那。拙者のクラスメイトでござる）」

実際、ダクダク血を流してはいるが平気っぽいし。

そんな彼らの視線の向こう。

今この露天風呂に入ってきた髪を片方に束ねた小柄な少女剣士がいた。

その少女は新幹線内であらぬ疑い（？）を掛けてきた退魔剣術である神鳴流の使い手であり、武道四天王の最後の一人。

今の今までネギが頭を痛めていた当の本人。桜咲刹那その人であった。

ななんで!?　入り口は男女別々なのに中はおんなじ――?!

と、混浴を知らなかった少年は慌てふためいている。

そんな少年とオコジョの更に後ろでは、横島が更にジタバタと苦しみもがいていた。

「（は、放してーっ！！）」

「（見つかるでござるよ?!　それは流石に拙いでござろう?!）」

「（解かった!!　解かったから……はーなーしーてーっ!!）」

羽交い絞めにされている楓の腕の中から必死に逃れようとじたばた足掻いている横島。

彼の人智を超えた能力を駆使すればそんな事は児戯にも等しいはず……なのであるが、何時もどーり女がらみでテンパりまくっていて、彼はその能力を発揮しきれないでいるのだ。

というのも、彼の状態が“羽交い絞め”だからである。

つまり、後から美少女にピタリと密着されているのだ。

やーらかいくせに、どこか青いかたさを秘めたモノ。

年齢度外視の美乳且つ爆乳のドスゲェ超兵器。

今より更に未来に対して期待が持ててしまうそのドスゲェ兵器が、横島の背中に挟まれてふにゃりと形を変えているのである。

横島の眼球が飛び出しそーになっているのも仕方の無い話であろう。

これで鼻血など出した日にゃあアンタ、もう彼は解脱しちゃうか

もしんない。幾らなんでもそりゃ拙かった。

だから横島はもがいてたのである。そう、己を賭けて――

しかし、そうだとしても楓は今手を離す訳にはいかなかった。

新幹線内で起こった刹那との事件は、横島と古から既に聞き及んでいる。

些細な事ではあるのだが、刹那はけっこう用心深い性格をしている為、タダキチ（横島）に対してまだ疑惑を持っているかもしれない。

そんな彼女の前に彼が飛び出してゆくとかなり問題が生じてしまうだろう。紹介すら行っていないのであるし

いや、落ち着いて話し掛けるのならまだマシだったのであろうが、ここは風呂場である。

裸の少女の前に裸の彼がひょっこり現れ、『やは、おぜうさん。話をきいてくれまいか？』等と話しかけられて冷静でいられるだろうか？

いやそれ以前に、これだけテンパった人間と相対させる訳にはいくまい。纏まる話も拗れに拗れるのは必至だろうし。

だから彼女は横島を押し留めているのである。

決して――

「背は小さいけど、キレイな子やなぁ……」

等と、横島が子供先生と同じ様な感想を口から漏らし、ボ～っとして見惚れていたからではない。

……ハズである。……多分。

そんな風に二人して無音で騒ぎまくるというド器用な事をしていると、

カシャンッ！！　と唐突に灯りが弾け、

「誰だっ？！」

刹那が白木の刀を構えるのが見えた。

前方のネギ少年も、慌てているのが解かる。

「逃げるかっ」

「（来る？！）」

「（拙っ？！）」

流石に楓も横島もそこらは普通では無い。

構えの間より空気よりも、氣の流れで技が出る事に咄嗟に気付いていた。

神鳴流奥義……

――斬岩剣！！

充分に氣を乗せた得物での一閃！

音も無く、豆腐か何かのようにネギが身を隠していた岩が切断されてしまう。

「（おぉっ！！）」

「（ひーっ！！）」

幸いにも自分らが見つかったわけではなかった様であったのだが、その余波は自分らに迫っていた。

言うまでも無く黙って当たってやるような二人ではなかったので、楓は刹那が放った退魔の剣術を感心しつつ避け、横島は声無き悲鳴を上げつつも紙一重で見事に避けている。

二人は結構余裕を持って避けたのであるが、刹那のそれは野太刀なので定寸より剣先までが長く、居合いの速度を殺さないようにし

ているのか“反り”も緩い。
乱戦や近接戦には不向きかもしれないが、＜薙ぐ＞という事ではかなり優秀であろう。

そう見てとれるのだから楓も相当だ。
何せこれが退魔剣術でござるか…等と呑気に感心していた程なのだから。

だが、ネギも只の子供ではない。
彼なりに今までの戦いで色々と学んでいるのだ。
刹那が入浴時にも油断をせず得物を持ち込んでいるのと同様に、彼も小さな魔法の杖を持ち込んでいた。

「ＦＬＡＮＳ　ＥＸＡＲＭＡＴＩＯ！！」

僅かの間に紡がれた武装解除の魔法は見事成功し、バシンッ！！と音を立ててその不可思議な力が少女の刀を弾き飛ばす。

先に相手の得物を奪うのはなかなか良い方法だ。

だが、流石にまだ子供なので詰めが甘い。

「フッ」

刹那は得物を飛ばされても慌てる事なく距離を詰め、ネギの喉と股間を掴んで完全に動きを封じてしまった。

「（ぐぉっ!?）」

楓にとっては今の刹那の行動は常套戦法なので取り立てて慌てたりしなかったのであるが、ネギと同じ男である横島にとっては、＜掴まれる＞のはイタイ攻撃である。

無駄に感受性が高い彼は、その衝撃をウッカリ自分に重ねてしまい、内股&前かがみになってしまう。

決して、背中でふにふにしている感触によって前かがみになったわけではない。ハズだ。

「何者だ。
答えねば捻りつぶすぞ?」

「（ひぃっ!!）」

刹那がそう脅し、尋問を掛けた。

ネギの三倍は人生経験が豊富な横島は、その痛みをとても良く知っているのでネギよか遥かに怯えてたりする。

お陰でふにふにの感触は紛れたのであるが。

まぁ、誤解であったし、間近で顔を確認すれば相手がネギである事は簡単に気が付く。

慌てて手を離して謝罪するもしどろもどろなのは彼女の性格なのだろう。

ネギの方は“掴まれた”事もあって、そう簡単には冷静さを取り戻せていないようだが。

少年一人が知らなかった事であるが、刹那も魔法関係者であり、木乃香の護衛だった。

その事を彼女が説明した事によって事態はやっと収束に向ってゆく。

横島もやっと落ち着き、やれやれと座り込んだ。

騒動が治まって安堵したのではなく、楓が解放してくれたからだったりするのが実に彼らしいが……

「（ん？）」

と、俯いていた横島が突然顔を上げた。

前方には未だ裸体を曝す刹那がいるにも拘らず……だ。

いや……？　その刹那の“向こう”を見つめているような……

「（如何なされたでござる？）」

おちゃらけ色が薄まった横島に、楓も僅かに緊張してみせる。

「（何か妙な霊気が……）」

「（何と？）」

横島の言葉にくの一少女が身構えるより先に、

「ひゃああ～～っ！！」

「「な…っ？！」」

どこか間が抜けた悲鳴が風呂場にまで響き渡った。

「この悲鳴は……」

「このかお嬢さま？！」

慌てて湯から飛び出し、脱衣所へと駆けて行く二人。

その後を追い、楓らも後を……

「サイキック……」

「横島殿？」

追おうとしたのだが、横島はいきなり左腕に力を収束させると、例の霊気の盾を出現させ、

「ソーサーッ！！」

ブン…っ！！　とおもいっきり塀の向こうの茂みに向って投げつけた。

――ひゃあっ？！

無論、彼も当てるつもりはなかっただろうが、流石に周囲の枝葉を切断しつつ、隠れていた自分をかすめてけば誰だって驚く。

現に悲鳴が…女か？…が聞こえていた。

「曲者？！」

楓も殆ど気付いていなかったようで、少々慌てていた。

いくら隠行の技が優れていようと、霊気を止める術を持っていなければ横島の感覚からは隠れ切る事はできないのだ。

まぁ、こちらの世界にはそんな技は無いようであるが。

「あっちは二人に任せて、あいつを追うぞ!!」

「承知!!」

横島の声を聞き、楓も気合を入れなおして遠ざかろうとしている曲者の影を追い始め……

――ようとして、その足を止めた。

「よ、横島殿?!　しっかり!!」

その横島が血の海に沈んでいたからである。

「これは……あっ？？！！」

楓は気が付いていなかった。
いや、忘れていたと言った方が良いだろう。

楓はビキニだった。

そしてあれだけの動きをし、尚且つ物陰にいたとはいえ、神鳴流剣術の余波も受けていたのだ。

当然の様に彼の眼前で立ち上がった楓の紐は単なる化学繊維の布なので、そんな衝撃や動きに耐えられようもない。
簡単に解(ほど)けてに湯にぷかりと浮いていた。

それも、“上”と“下”のセットで……

「み、見られたでござるか……？」

呟く様に倒れ伏している横島に問い掛けると、遺体もかくやといった按配の彼の右腕がゾンビの如くゆるゆると動き、

グ……っ！

と親指を力強く立てて見せた。

「……」

暫し呆然としていた楓であったが、寒暖計宜しく足元からゆっくりと赤の色を昇らせてゆき、

「～～～～～～～～～～～～～～～～～～っ！！！！！」

声ならぬドでかい悲鳴を上げて横島の足をむんずと掴み、浮いている水着も忘れず拾ってその場から姿を消した。

脱衣所でのサル騒動はその間に終結してはいたのであるが、ホテルの周囲にはひき逃げ事件でもあったかのように、人を引き摺り回した血の跡が延々と続いて関係者を騒然とさせたという。

甚だ関係ない話であるが、その不可思議な事件の被害者であろう人物は修学旅行が終わった後も見つかっていないし、血の跡も道路の真ん中でぷつりと途切れていた為、警察も首を捻っていたそうである。

中編

「このかさん、淋しそうでしたね」

「うん……
普段のこのかなら、絶対あんな顔しないもん」

浴衣を着て、廊下を歩きながらそんな事を言い合う影二つ。

一つは小柄な少年で、もう一つは長い髪を左右に分けた少女である。

似たような髪の色をしているため仲の良い姉弟のようにも見えるが、れっきとした教師とその教え子。

魔法先生ネギ＝スプリングフィールドと、まがりなりにも仮契約を行って従者……のよーな位置をもらった神楽坂　明日菜の二人である。

今、二人が話し合っているのは、明日菜のルームメイトであり、ネギの教え子である近衛　木乃香の事だ。

明日菜と木乃香の二人で連れ立って露天風呂に入りに行くと、脱衣所の中でサルの集団に襲われ、あわや木乃香が攫われそうになったところに颯爽と駆けつけ、そのサル……の式神を蹴散らして彼女

を救ったのは、ネギたちが西の刺客では？　と疑っていた桜咲　刹那であった。

その風呂場での騒動のおり刹那は自分は敵ではないと言っていたし、木乃香に不埒な事をやったサル（式神）に対して本気で怒っていた事実から、彼女の嫌疑はかなり薄まっている。

ただ、必死になって救ったはずの木乃香から逃げていった事、その事で木乃香がひどく落ち込んで泣いていた事、

そしてネギらが入っていた岩風呂に多量の血痕が残されていた事がネギを未だ悩ませる結果に繋がっていた。

あの時――

木乃香がサルに運ばれかかった時、凄まじい踏み込みで距離を詰め、木乃香を攫おうとしていた不埒な式神達をなぎ払った。

式神達が消え去った跡には奴等を操っていたであろう術者の気配は無く、代わりに凄まじい出血の跡が残されていた。

おそらく、刹那が刃を振るった折に式神ごと相手を斬ったのであろう。

そしてその怪我は出血量からして致命傷。良くても重体であろう事に間違い無い。

余りにも酷い惨状であったため流石に明日菜に見せるようなことはしていないが、それでも否応なく緊張はネギから伝わってゆく。

対峙して判った事であるが刹那は強い。間違いなく自分より。
彼女が木乃香を守ろうとしている気持ちは、あの時の怒りの波動からもひしひしと感じられている。

だからといって術者を殺していいという理由にはならない。少なくともネギはそう思っていた。

まぁ、刹那が命を奪いかね無いほどの攻撃を行わねばならない程の相手がいたという見方もあるが、まだまだ子供であるネギにはそこまでの洞察力は備わってない。

それだけが原因という訳ではなかろうが、まだまだ問題は山積みなのである。

なぜ木乃香が狙われたのか？
刹那が殺意を持って当たらねばならなかった術者とは？
そして、刹那はなぜ木乃香から逃げたのか？

そんな風に謎だけがどんどん積み重なってゆき、ネギは熱が出そうであった。

「あ、あれ？」

「？　アスナさん、どうかしましたか？」

ネギの困惑が伝わったのか、何となく重い空気を持ったまま歩いていた明日菜が、通路の向こうで起こっている怪異を眼に留め、奇妙な声を漏らして立ち止まっていた。

いぶかしんだネギが問い掛けると、アスナは“それ”に向って無言で右手の人差し指をのばし、その指した方向をネギの目線が追う。

と……？

がんがんがん……

硬い壁を打つ奇妙な音。

明日菜が示したその先には丁度その音の出所があり、それをよく見れば長身の人間が壁に頭を撃ちつけている音だと理解できた。

そして、その人間がネギと明日菜が良く知る人物であったのだから、流石に驚愕続きだったネギでもその驚きは大したものである。

ギョッとしてネギは駆け出し、その女性……いや、少女の奇行を浴衣の袂を引っ張って止めさせた。

「ちょ、ちょっと!!　長瀬さん!!　何やってるんですか?!」

ネギが叱るようにそう咎めると、我に返ったようにその少女……長瀬　楓は奇行を止め、ネギに向って何時もの思考が読み辛い笑顔を向けた。ちょっち額から出血していたが……

「おお、ネギ先生。お疲れさまでござる。
今夜は静かな夜でござるな」

「いえ、その……静かとは程遠い光景が見えたんですが……」

「はっはっはっ……気の所為でござろう？」

楓はピュ～～と額から出血しつつもそう言って笑った。

何だか木乃香に金槌で小突かれている学園長を彷彿とさせられ、ネギや明日菜、カモも顔に縦線、後頭部にでっかい汗を浮かべてしまう。

尤も、楓の言う通りに今現在は静かな夜である事に間違いない。

何せ騒がせどころが全員酔い潰れているのだから騒ぎようが無いのだ。まぁ、次の日からはその反動で大騒ぎしそうであるが。

それを知っていて尚、静かだというのだから、ひょっとしたら楓には何か酷いショックな事があったのかもしれない。いや恐らくあったのだろう。

明日菜にとって、それはシンパシーと言ってよいかもしれない。確証も証拠も無いのだが、彼女は何だかそんな気がしたのである。

彼女は隣に立つ子供教師が来てからそーゆーイタイ事柄が続いていた事もあって、ショックな事件には事欠かないでいる。だからそれを感じた明日菜には他人事とは思えなかったのだ。

まぁ、事件の内容も知らず慰める事等できようもないし、自分にとってのイタイ事件……憧れの先生に“見られた”というショックを癒したのは“時間”と“慣れ”だった。
なら触れない方が得策ではないのか？
自力で立ち直る方が人生の肥しとなるのだし。
明日菜はそういう答に行き着き、一人うんうん納得していた。

「と、ところで長瀬さん、一体なんで壁に頭を叩きつけてたりしてたんですか？」

がくんっ

そんな想い等露知らず、子供らしい好奇心のまま問い掛けてしまうネギに、明日菜は滑りコケてしまった。
せっかく彼女が大人としてそのままスルーしてあげようとしていたとゆーのに、物の見事にぶちこわしてくれたのだ。

「アンタねーっ？！」

「ひゃっ？！　な、なんですかーっ？！」

訳のわかっていないネギの襟首掴んでネックハンギングかましつ

つブンブン頭を振る。
子供教師は白目となって苦しんでいた。
そんな二人の前で、楓は今さっきの事件を思い出し、
「うう……み、見られたでござる……
し、しかも……み…見てしまったでござる……」
等と顔を赤くしてまた壁に頭を打ち始めていた。
くノ一とはいえ、武闘派である楓は“そういう手合いの術”の修業は成されていない。
それでも“見られた”という程度で自分を見失う事はありえないはずであった。
その上、“見た”という事ですら冷静さを失っているではないか。
彼女が“見られ、見た”という程度でどうして冷静さを失っているのか……無自覚な楓の心は出口の無い感情によってかき回されていた。
そしてその事が歯痒くてたまらない女も一人……
『いい加減にしろ!!

お前は特定の人間に見られた事を“照れている”んだっ！！
まさか“照れている”事にすら気付いていないのか？！　アホかお前は！！』

廊下の影で褐色の肌の少女が一人地団駄を踏んでいた。

仮にもライバルとして見ている少女が己の感情の変化に気付けないままでいるという事が彼女をイラつかせ、地団駄を踏ませているのだ。

それでも戦士としてのイラつきより、同級生を見守っている一人の少女としてのイラつきが大きいのは彼女にとっても良い事なのかもしれない。

■七時間目：猿の湧く所為（中）

「し、死ぬかと思った……」

何時の間にか口癖となっているお馴染みのセリフをほざいているのは言うまでもなくタダキチ七（セブン）こと、横島忠夫である。

尤も、今は飴の力が切れていつもの高校生くらいの外見へと戻っているが。

何というか……横島の習性と言うか性質と言おうか、楓のカラダが曝された瞬間、その見える範囲全てを心のハードディスクに焼き付けてしまったのである。

時間にして一秒も見ていなかったにも拘らず……だ。

それ故の鼻血。それ故の大量出血であった。

その際、意識を失った彼を火事場のクソ力で横島の部屋へと運んでくれた楓であったが、直後に飴の力が切れ、彼のブツをウッカリ目に入れてしまったのだ。

その所為で彼女は自分の近くにいないのだろう。そう考えると自己嫌悪も混ざって苦しみも一入である。

「うう……ひょっとして、楓ちゃんに“反応”してたとか……ぐぉおおお～……」

その真偽は兎も角、横島が完全に意識を取り戻したのは楓が去ってから十分ほど後の事。

ホテルの人が敷いてくれていたのだろう、布団の上に全裸で寝転がっていた。

流石に全裸で寝っ転がっているのにはビビったが、

『私に何をしたの?!』

等とボケかましている場合ではないのだ。

状況からして、楓が運んでくれたと思うのだが、そうなると彼女にイロイロと拝見されてしまった可能性が非常に高い。

しかしどんな状態でいたか……というのは彼女自身が口を割ってくれなければ闇の中だ。

かと言って、そんな恥ずい質問などしたくもないし。

暫く部屋で一人悶えていた横島であったが、ここでイモムシが如

くゴーロゴロと転がってても埒が明かないという事に何とか気付き、自販機で茶を買ってロビーで気を落ち着かせようと頑張っていた…
…というわけである。
そんな簡単に落ち着けるものなら世話無いのであるが。

「くっそぉ～～～……オノレよくも……西の奴らめぇ～～～……」

だから一番簡単な方法、

責任転嫁に走ったのである。

ギリギリと歯を食いしばって正義（？）の怒りを燃やし、今だ姿の見えない敵に対して無意味に気炎を上げてゆく横島。
相変わらずと言うべきか、進歩が無いと言うべきか。どちらにせよ褒められたものではないが。

それでも失態を怨敵の存在にすり替えた事でいくぶん気も楽になってくる。
紆余曲折はあったものの、西側の刺客に八つ当たりをする事で鬱憤を晴らす事を心に決めた横島は、何とか立ち上がる気力を取り戻す事ができた。

後は……

「楓ちゃんに謝るだけ……か」

ぷしゅるるる〜〜……

折角高めた気力がいきなり萎み、又もソファーに沈み込んでしまう。

いや――ナニに謝罪するのかと問われれば返答に困ってしまうのだが。

『イヤハヤ、お粗末なものをお見せしまして』

と謝罪するにしても、

『なかなかな物をお持ちで。イヤ眼福眼福』

と楓を褒める（？）にしても勘弁して欲しい行為である事に間違いないのだから。

どちらにせよ新たなる自分を自覚しそーでイヤ過ぎるのだ。

尤も、そうやって悶えてても何もならないし、仕事だってあるのだが……

ずりずりとソファーからずり落ちつつ、自分にとってかなり懐かしいアイテムであるバンダナを頭から外し、何となく握り締めて愚痴を吹きかける様に零す。

「……何やってんだろなぁ、オレ……」

確かに肉体年齢は十年ほど若返ってはいるが、中身は二十七である。はずだ。

幾ら十七からの記憶が飛び散って消滅したとはいえ、十七の時と同じ事の繰り返し。

わざわざ異世界……別の宇宙までやってきて同じ事の繰り返しでは幾らなんでも進歩がなさ過ぎる。

だから深い深い溜息が零れてしまう。

元の世界に帰りたいという気持ちが殆ど無い理由も解かった。

彼にとって――

この横島忠夫にとっての返りたい元の世界は無いのだ。

いや、“解からない”と言った方が良いだろう。

その上、“自覚できない経験”によって帰ろうという気も起きず、その気になったとしても方法が無く、またその方法が見つかったとしても帰る世界の座標をしらない。

これではどんな奇跡が起きても“向こう”に帰る……いや、“行く”事等できまい。

だからこそ、この大地に骨を埋める覚悟はできていたのである。

が、どこの世界へ行ってもそのまんま変化なし。
それでは余りに情け無いではないか。

「オレはオレらしく……かぁ……
それはそうなんだが……ちょっと違うよなぁ……」

今さっきとは別の重みの溜息が零れる。

それは“前の世界”で言ってもらったセリフ。
何かに囚われるより、横島は横島らしくいてほしい……そう願いがこめられた想いの言葉だ。

その事は心に刻まれているし、その言葉にしがみ付いている訳でもなく、極自然にその言葉を実践できるようにはなっている……と、思う。

だけど確かに横島自身が言うように、“これ”はちょっと違うだろう。

“あの”十代の頃より煩悩は抑えられている筈であるが、どういうわけか切羽詰ると“あの頃”に戻ってしまう様になっているのだから。

人一倍良心が脆いヘタレであるのに、一度美女美少女を目にすればエッチとかいうレベルを飛び越え性犯罪紛いの行為を反射的に行

う、凶悪なパブロフの犬。
幸いにも押し倒さんと襲い掛かる相手は確実に自分を撃墜できる者ばかり。後で自分の良心をズタズタに傷付けつつ土下座して謝り倒すまでには至っていない。

流石に二十歳を越した頃には余裕を見せた方が引っ掛けやすい事を身体で学んでいたので、そういった行為は（横島的には）かなり鳴りを潜めていたのであるが、こちらの世界にきて若返るとまた発動しているではないか。

何せ麻帆良には美女美少女が多い。

特に眼を引く者は、癒し系美女であるしずな先生。
バツイチである為であろう、隠しきれない色気と知性を振り撒いてくださっている刀子先生。
そして清く厳しいシスター・シャークティ等々、『ぜってー顔とか“ぼでぃー”で選んでんだろう？　このジジイ！』と学園長に拍手喝采……ではなく、一言言ってやりたい程に麻帆良は美女に事欠かない。
無論、まだお会いしていないであろう“じょしこーせー”の皆様や“じょしだいせー”の皆様もそうだろう。

まぁ……そんな彼女らに対して歯止めが利かなかったのはしょうがないだろう。
身体を治す為に無意識に多量の霊力を消費し過ぎていたので、その霊力を回復しようと本能が暴走したと言う理由があったのだし。

だが、そんな真相があろうが無かろうが、楓という“じょしちゅ

ーがくせい”に反応してしまった事には変わりはないのだ。鼻血吹いたし。

「オレってそんなに節操なしやったんか……なぁ？　ジャスティス（ロリ否定）よ」

横島の内宇宙の中で読書に耽っていたジャスティスは、いきなり話を振られて驚きはしたものの慌てて頭を振る事に成功した。無論、横にだ。

そっか……と幾分胸を撫で下ろす横島であったが、当のジャスティスはというと実は信用できない状態にいる。

幾度の戦場を越えて不敗…という事ではないが、数多くのロリの誘惑を“何とか（↑ここ重要）”振り切って十年を過ごしてきた。

外見ムチムチの人外娘らは中身はまだロリであったし、修業場にいた蝶の化身も外見は育ったが実際は十歳程度だった。

だからそれを自分に訴え続け、耐えに耐えた。耐えられた。

自分を賭けて毎日を送り、耐え切っていたのだから自分は勝者。ウィナーだ。

ここに来るのが後数日遅れていたらどーなってたかは知らないが。

だからこそ彼、ジャスティスは生まれたのだ。

倫理……つーか、チンケなプライドを守る為に。

しかし、横島が必死に頼っているジャスティスであるが、その彼とて横島の一部である。

訳の解からん努力をし、目的の為に手段を選ばず、その手段の為に目的を見失うスカタン男の一部なのだ。

案の定、ジャスティスはその方法を履き違えている。

敵を知り、己を知らば百戦しても危うからずと意気込み、ロリを知らぬが故に苦しむのだと曲解してしまい、手段を思いっきり間違えて『要はロリに耐性をつければ良いのだ』という大義名分の下に、そーゆー世界に浸り切っていたのだ。

今、横島の確認に力強くシリアス顔で頷いたジャスティス。

その彼の手には腹ペコ騎士王のフィギュアだとか、メロンパンをもった赤髪少女のポスター等で、

今読んでいた本にしても、ハンマーもった赤い服の魔法使いを主人公にした同人誌（それも１８禁）である。

そんな物を戦闘用資料だと大事そーに抱えている時点で、何もかも手遅れっポイ。

横島の未来ははたして――――？

―真の敵は自分の中にあり―

等という事を知る由もない横島は、ようやく気を取り直してソファーから立ち上がった。

このホテルに泊まっているのは大半が麻帆良の女生徒である。

何かえー匂いがする…という感想がポロリと零れそーで怖いから、外回りに出かけて頭を冷やすのが一番だろう。

ジャスティス（ロリ否定？）が何やら未練がましく振り返っている気がしないでもないが、たぶん気の所為。

浴衣のまま外を歩いて風邪を引くのもなんだから、一旦部屋に戻って服を着替えに戻ろう……

「あ」

「あ……」

――として、楓と鉢合わせてしまった。

「あ、あの、えと……」

「あ…う……」

何やら二人してもじもじし、次の言葉に移ってくれない。

謝るべきか、どう切り出すべきか判断がつかず、二人して間誤付いているのである。

ドンドンドンっ

どこかで地団駄踏んでいる音が聞えないでもないが気の所為だろう。

未だ楓の心に引っかかっている事。“肌を曝す”という行為は、ある意味戦術でもある。

その戦術はかなり基本的かつポピュラーなのだが異性に対してはかなりの効果を生む場合が多いので昔から使われている方法である（特に横島には効果的）。

それが理由と言うわけではないが、楓は異性に肌を見せる事に対する羞恥は薄い。

いや、普段ならば別に露出癖があるわけでは無いし、そこまで恥知らずでも無いのであるが、その年齢を度外視する戦闘力を持った

戦士でもある彼女は、戦っている間ならばそれに対する気遣いはかなり薄くなる。

――先程の楓はその状態にあった。

だが、その状態にあったにも拘らず楓は羞恥心を発動させていたのだ。

そして困った事に、羞恥心が溢れ出たというその意味を理解していない。

それが歯痒くて堪らず、物陰に隠れた誰かがハンカチを噛み締めていたりするがそれは兎も角。

ロビーの壁に掛けられている時計の針の音が妙に響いている気がする。

それが聞えてしまっているからこそ、その音に急かされているようで二人の焦りは強くなる。

それがお互いを異性として意識しているから……という事は、誰の目にも明らかだ。

……当人達以外の目には――

それに気付いたのだろうか、何者かが柱の影から飛び出し、彼らを針の音にて急かす壁の機械をむしりとってフロントの奥に蹴りこんだ。

あまりの暴挙に驚いて飛び出そうとしていたフロントの係員達もその人物に次々に当身を喰らってポポイのポイと部屋の奥。無茶苦茶である。

まぁ、おかげ様でロビーは完全に静けさを取り戻したのであるが。

だがこの二人は、そんな強引な気遣いすら気付いていないとキている。

ある意味、二人の世界と言っても良いが、様子を窺っている方からすれば堪ったものではない。

現にフロントの影から漏れているイラつきオーラもむくむくと膨らんでいってるし。

なぜか時計が消失しているので正確な時は不明であるが、体感時間にして三十分は見合ったまま。

眼が細いので良く解からないが、楓は横島から視線を逸らしたり戻したりと忙しい。ちなみに横島も同様だ。

何と言うか……同じタイミングでそれを行っていたりする。

時間にして長針が十回以上は動いているであろうのに、二人は見合ったまま。同じ行為をぶっ壊れた玩具の様に繰り返している。

何だかんだでその茶番に付き合っている少女も、流石に脳内血管がプツンと切れそうになり我慢の限界。ついに二人を怒鳴りつけようとした正にその時、

「「あの……」」

二人が同時に口を開いた。

おお……っ?!　と飛び出しかかった少女は風の様にフロントの陰へと戻り、その時が来た事を感じ取って拳をググっと強く握り締めた。

楓は気恥ずかしい思いをしている理由がよく解かっていないのであるが、横島は別だ。

実は今、彼女が……楓が異様に可愛く見えているのである。

『ど、どーしちまったんだオレ?!

確かに、確かに楓ちゃんは可愛い!!　間違いない!!　それは断言する!!!

それに今の楓ちゃんは……な、なんやその上目遣いっぽい眼差しは?!

なんやその薄ピンクに染まった頬は?!

それに何で……何でオレはこないにガキみたいにドキドキしと

んや――っ？！』

いっぱいいっぱいとはこの事だ。

『どうしたんだジャスティス！！　しっかりしろ――っ！！』

そのジャスティス（え…と…ロリ否定？）が煽っている所為でドキドキしているのは秘密である。

楓の方も二言目が出なくて喘いでいた。
横島に対して言葉を紡いだまでは良かったのだが、その続きがどーにも出てこない。

『せ、拙者は何を言おうとしてるでござるか？！』

と、外見以上に焦りまくっていた。

同時ではあったが、横島に声を掛けられた事も拍車を掛けている。

これではまるで、

拙者はまるで……

かちり――と、楓の心に何かがはまりかかっていた。

そして眼前の少女が何かに気付きかかっているのと同様に、横島も何かドツボ……もとい、何かの流れに囚われようとしていたりする。

“前の世界”において、横島は鈍感帝王の名をほしいままにしていた。

だからこそ周囲の女性らはかなり強引な手段を取り、自分の気持ちを知ってもらおうとしていたのである。

尤も、強引過ぎて理解されなかったというオチがついているのだが……

だが、今の状況は間違いなく“あの世界”と違っていた。

まずロリ否定する能力が、こちらの成長著しい外見の少女らによって磨耗している。

そして直情的という程では無いにしても非常に純真で真っ直ぐな感情を持ち、尚且つ自分と何故か波長が合う楓と古という“中学生の少女ら”と共にいた。

その事が彼の垣根を矢鱈と低くしていたのである。

だから拙かった。

実に拙かった。

ただでさえ異世界にいるという孤独感を感じている横島は、京都の夜のホテルで美少女と向かい合っているというシチュエーションによって、妙に高まっていたのである。

加えて今の楓は何だか色気があった。

湯上りの浴衣姿の美少女という地味ではあるが萌えチョイス。そしてもじもじして見え隠れさせられている羞恥。

これらが入り混じった破壊力は途轍もなく、横島の最終防壁すら危ぶまれる程。

頼みのジャスティスに至っては、最終防壁に入ったヒビ割れを直すフリしてコッソリと楔を打ち込んでるし。

横島と楓は又も同時に一歩踏み出し、

そしてまたまた同時に口を開き言葉を紡ごうとした。

二人して顔の赤さが増してゆくのは妙に盛り上がっている所為だろう。

異郷の地の夜というものはそういった魔力があるのかもしれない。

楓は何か言おうとして伸ばしかけた手を引っ込め、それでもその手を所在無げに口元へ持っていく。

その仕種がまた可愛らしく感じられ、『もータマランですタイっ!!』とジャスティス（…否定？）も鼻血を吹きつつ感激していた。

物陰から見守るおせっかい少女もその時を感じてグッ…と更に強く拳が握りこまれ、その指の隙間から汗を滲ませている。

シチュエーションも、タイミングもバッチリだ。

横島自身も何だかどっかの心の扉を開けかかっており、既に退路は無かった。

嗚呼、巨星…ついに歓楽――もとい、陥落か?!

と思われたそんな時、

「「「……ッッ?!!」」」

明らかに異質の気配を感じ、

二人（と、物陰に潜んでいた一人をコソーリ足して三人）同時に

顔を上げて外に眼を向けた。

たん…っ

その瞬間、裏庭辺りに大きな影が一瞬だけ着地し、そして飛び去ったのが目に入った。

外灯に映えたその姿。

茶色く、丸っこく、ずんぐりむっくりなその影は正しく……

「サ、サル……？」

「サルの……着ぐるみ？」

――またしても湧いて出たサルであった。

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊

人には“拘り”というものがある。

それは術者という裏に生きる者達にしてもまた然りだ。

いや、本人からすれば拘りを否定したとしても、第三者から見れば拘り以外の何ものでもないというものもある。

丸っこい着ぐるみの手で器用に眼鏡をくいっと押し上げている一人の女性。

その腕の中に意識を失った少女を抱え、正しくサルの様な身軽さで宙を舞い、地を蹴り、目的の場へと突き進んでいる。

違うと否定をしようと、誰もがツッコむだろう。

そんなマヌケなサルの格好で誘拐なんぞするのは絶対に“拘り”があるんだろう――と。

猿を＜式＞として多用している為、外見的に目立つという問題を持っている符術師。それが彼女、天ヶ崎　千草であった。

その彼女であるが、上手く事が運べていてかなり機嫌は良かったりする。

何せおマヌケなお子様達は未だ身代わりの札に騙されているようであるし、正面から向かった時に感じた護衛の神鳴流のひよっこ剣士の強さも搦め手では異様に脆かった。
だから思った以上に簡単に引っさらう事ができ、彼女の機嫌は良かったのだ。

体の動きも軽やかになると言うものである。

実はこの着ぐるみそのものが＜式＞である為、着用しているだけで身体が強化されていた。
だからこのような軽業も可能なのだ。

ズシャンッ

それでも質量は誤魔化せないのか、着地するとけっこう大きな音がした。

ホテルから足早に遠ざかり、渡月橋の脇に着地すると、

「わぁっ?!」

そこには見た事のある顔が。

「おサル?!」

「でかっ！？」

外の見回りに出ていたネギ＝スプリングフィールド……と、オコジョ妖精のアルベール・カモミールである。

「あら　さっきはおーきに。カワイイ魔法使いさん」

少女誘拐した挙句の逃亡の最中だというのに、丁寧に挨拶をするのは余裕なのか？
外見がナニなサルの着ぐるみにそんな事を言われたら異様に怖かったりするが。

「！！　こ、このかさん？！」

それでもおサルの腕の中に知っている少女…近衛　木乃香の姿を見れば冷静さを取り戻すのは早い。

千草がここに着地する直前までネギは携帯で明日菜と連絡を取っており、木乃香が誘拐された事を既に聞いている。
ナニが何だか解からないが、このおサルの人が彼女を誘拐した犯人であることに間違いは無い。

素早く携帯用の小さな杖を懐から取り出し、魔法を紡ぎ出すネギ。

「お待ちなさいおサルさん！！
Ｒａｓ　ｔｅｌ　ｍａ　ｓｃｉｒ　ｍａｇｉｓｔ…もがっ」

だが、相手は（これでも）戦闘経験のある術者だ。
無詠唱魔法ならともかく、普通の魔法など詠唱を止めれば何て事も無いのを知っているのである。

彼が唱え終える前に小ザルの＜式＞を放たれて口を封じられてしまった。

いくら雑魚の＜式＞とはいえ、この程度の事なら一々命令せずともさせる事が出来る。
実に基本的ながら効果的な妨害行為である。

そんな簡単な妨害に引っかかって行動が阻害されている子供教師に対し、他愛も無い……という嘲りに似た眼差しを送り、

「ほなさいなら」

千草はほくそ笑んで、少年を無視して立ち去ろうとした。

「本邦初公開……
サイキックソーサー猫だまし（強）！！」

パァアアンッ！！

「わ、わぁっ？！」

「きゃあっ？！」

突如として発生した閃光と衝撃。

まるで無防備だった千草……と、ネギ（ついでにカモミール）はマトモにそれを喰らって視界を完全に奪われてしまい、『眼が、眼がぁっ！！』とどこかの天空のモニョモニョに出てくる悪役っぽく混乱状態。

『な、なんだ？！　何が起こったってんだ？！』

眼を眩ませたままのカモも焦る。

そりゃ閃光弾みたいなものが突然目の前で弾けりゃ彼だって焦るだろう。

「ウキ?!」

「ウキャッ?!」

「キーっ!!」

そしてネギにしがみ付いていたサル達が突如として離れて行く。

無論、誰の目も見えないので何が起こっているのかサッパリだ。

少年の足元に舞い落ちてゆくのはデフォルメされたサルのシルエットの紙。

その紙、一枚一枚に串が刺さっている。

実は団子の串によって撃墜されているのだが、目は見えないし、見えたとしても果たして解かるかどうか……

「今のはかなり便利でござるな?」

「いや、実は空中でタイミング合わせるのが大変なんだよ。外れたら単なる攻撃だし、相手に当たったらまず死ぬし。

どっちかって言ったら、その串手裏剣の方が役に立ってるよーな……」

「お互い様でござるよ♪」

混乱する三人（？）を無視したかのような呑気な会話。
何だか聞いた事があるよーな気がしないでもない語尾のついた少女の声にネギは首をかしげる。

その間にもその気配は素早く近寄って来ていた。

ーサイキックソーサー猫だまし一　とは？

横島１０８の小技と言われているものの一つで、今の技は何とか思い出したその中の一つである。

要は左右の手にサイキックソーサーを出し、投げつけて空中でぶつけ合って距離を置いたサイキック猫だましを行うというものだ。
何せサイキックソーサーを投げつけてぶつけ合うのだから、普通のサイキック猫だましより出力が高く、衝撃も閃光も格段に大きい。
それでいて霊的なモノ以外には殺傷能力が無いのだから素晴らしい技だと言えよう。

尤も、青年が言っているように、ぶつけ合うのを失敗してしまうと単にソーサーを二つ投げつけただけとなってしまい、相手をまず間違いなく殺傷してしまうという欠点もあった。
他にコントロールする方法があったかもしれないが、記憶が中途半端にしか残っていないので、これ以上の事には使えない。
記憶が完全では無い弊害がこれである。

「く……だ、誰や？！」

それでも、

「くくく……誰でもエエやろ？」

それでも、かかる状況では最適だったと言えるかもしれない。
相手は無力化されているし、何よりもこの青年が……横島忠夫が人質にされている木乃香に当てる事だけは決して無いのだから。

「おぉ……何か悪モノっぽいでござるな」

横島の零したセリフに対しての少女の――楓の感想も納得だ。

いや――？

事実、横島は陵辱系エロゲの主人公のような笑みを浮かべて千草ににじり寄っていた。

確かにこの後に続く尋問を容易にする為の悪人の演技も確かに混ざってはいるのだが、横島も千草の被害者である。
コイツらの所為で彼は鼻血を吹いて三途の川のほとりである賽の河原で死んだじーさんとオクラホマミキサーを踊らされたり、脱衣

婆の孫娘（半裸の上、けっこー可愛かったらしい）と野球拳に勤しんだりする破目になったのだ。
尚且つ楓の全裸という超絶お宝映像を拝見して解脱しかかるというピンチに陥らされている。
ここは一丁、責任を取ってもらわねばならないだろう。
そりゃあもう、敵としてたっぷりと。幸いにも大人の女だし！！
ぬたり……
ものごっつ不穏なオーラが漏れ広がり、千草はおろかネギまでもが震え上がる。なんか横島の氣に慣れている楓は苦笑するだけであるが。
幸い……というか、不幸にもと言うか、千草は大人でありなかなかに美女である。
そう、着ぐるみのセンスは最悪であるが、見てくれはかなり良いのだ。
「くくく……アンタは新幹線で売り子をしていたねーちゃんだな？」
「な……？！」

―横島Ｅｙｅ―

これまた横島１０８の小技の一つである。

出会った人間（注：美女のみ）は霊的に見忘れない――を持ってすれば容易い判別である。

着ぐるみに包まれていようがその霊波までを隠す事は不可能なのだ。

……ある意味視姦であるからセクハラなのは言うまでもないが。

そんな高い能力を無意味な事に惜しげもなく使用している術者がいるなどと千草が知る由もなく、彼女は横島の眼力にただただ脅かされるのみ。

その怯えの表情がまた横島を昂らせる。

「さぁ、アンタは他に仲間はいるのか？　どんな美女美少女なんだ？

正直答えてくれたら……まぁ、只では済まさんぞ」

「な、なんやのそれ?!　そんなん選択肢とちゃいますえ!?

ほな、正直に答えへんかったらどうなさるおつもりなんどすか?!」

「決まっとるやろ？　小鳥の様に囀るよう、エロエロ……もとい、色々としちゃうのさ……

淫魔も跪いて泣いちゃうくらい１８禁……いやさ、２１禁は間違いないだろー事を!!

多分、読んでてくださっている皆様もノクターンはお待ちだろう。

ご要望にお答えするのが義務だと思わんか？」

「そんな義務いややーっっ！！」

女子中学生の魅力に転びかけた（手遅れ気味？）八つ当たりであることは言うまでも無い。

千草は知らないだろうが、これはつまり横島がこの世界に来て今まで溜まりに溜まった煩悩を喰らうという事なのだ。

そんな目に合わされたらサキュバスですら足腰立たなくなっちゃいかねない。人間なら言わずもがなである。

「ひぃいいい――――っ！！」

それでも自分に絡みつくような横島のオーラに、本気と書いてマジと読むほどの気合を肌で感じてしまい、その嫌悪感から千草は本気の本気で怯えて悲鳴を上げた。

「ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ！　泣け――っ！！　喚け――っ！！　本当は自白させたり心を読んだりする方法は持ってるが絶対に使ってやらん！！」

「変態――っ！！」

「ふはははは！！　言われ慣れとるわ――っ！！」

何せ眼が見えていないのだからその恐怖は一入である。

人質でも使えば良いものを千草は意識を失っている木乃香を抱えたまま怯えてオロオロするばかり。まぁ、解からんでもないが。

そんな完全にイっちゃってる横島を見ながら、楓は止めどころを計っていた。

今までならそれは間々ならなかったであろうが、現在の楓ならそれが出来る。

同じ女として本当にエロエロな事をされるのは勘弁してあげたいが、尋問する事には賛成だ。

確かに横島はロクデナシであるが、本質的には善人なので傷つける事はできないだろう。

だが、敵に対しまで甘さは持ち合わせていない。だから女の目線で見て止めてあげねばならない。

尤もそれは敵であろう千草の為なんかではなく、他ならぬ横島の為に――だが。

「く……なめんな――っ！！」

流石に切羽詰った所為か、京女とは思えないほど声を荒げ、丸っこい手で式符を取り出して横島の声のする方向に投げつけようとする。

だが、

「甘～～い」

符の力が発動する前に横島の右手が光に包まれ、手甲状になった霊力が素早く伸びて札を奪い取った。

くしゃ…と他愛無く握り潰され、込められていた力すら蒸発してしまう。

楓はその無造作に奪い去った手際と、闘う為に使われている霊力の収束力に『おぉ…！！』と感心している。

「な、何や?!　ウチの札が……」

風の様に素早く奪われた事は感覚で解かった。

だが、どのように間合いが詰められたかまでは全く感知できなかった千草はただただ驚愕するのみ。

視力は幾分回復してきてはいるのだが、ボンヤリとしか見えていない分、余計に恐怖を感じていた。

「ふふふ……その程度ではオレの“栄光の手”の閃きには勝てんぞ……
さぁ～～て……その邪魔っけな着ぐるみを脱ぎ脱ぎしましちゃいましょ～ね～～」
「ヒィ～～～っ！！！？？」

薄らぼんやりと見えている横島の右手。
鬼火のように淡く光っているそれをわきわき動かせているのが何とも恐ろしい。

その人攫いのオジサンを彷彿とさせる変質者的なセリフに、千草は童女の様なみっともない悲鳴を上げて後ずさる。
あ～あ……やり過ぎでござるよ……と、楓が止めさせようとした時に、千草の救いは思わぬところからやって来た。

「ネギ先生！！」
「ネギーっ！！」

千草の悲鳴を聞きつけたのだろうか、駆けつけて来たのは二人の少女。

その二人の少女の声によって横島の邪悪モードが拭われ、ノーマルモードへと表情が戻っている。流石に少女らに向ける淫猥さは（まだ）持ち合わせていないのだから。

「あれ？　あの娘は……」

うち一人は見た事があるサイドテールの少女。新幹線内で出会った剣士の女の子だ。

その横を駆けて来る少女も横で眼を眩ませたままの少年と一緒にいたツインテールの女の子。

という事は、このネギを心配してホテルから飛び出して来たのだろうか？

「隙あり！！」

ボンッ！！

エロ意の波動が薄まった横島の隙を突くのは千草でも容易い。

一瞬の隙を突いて符を地面に叩き付けると、唐突に符は破裂して真っ白い煙を放って全員の視界を奪う。

「しまった！！　やっぱりさっさと（不適当な言動の羅列故、百行ほど削除いたしました）すればよかった！！」

余りといえば余りのエロいセリフをうっかり耳にしてしまい、そ

の駆けつけて来た二人の少女……刹那や明日菜はおろか、楓までもが顔を真っ赤にしてしまう。

だが、木乃香が攫われているままなのでここで留まっている暇は無い。

「しゃーない……追うぞ！！」

「し、承知！！」

視界を奪われようと霊気を追える横島と、氣でもって追跡が出来る楓の二人が煙幕を物ともせず、白煙から飛び出して千草の背を追った。

刹那と明日菜は不運にも完全に煙にまかれている。今の状態では追う事はおろか自分の向いている方位すら確認できまい。

そして二人がネギに気が付いたのは、川風によって煙幕が晴れた後の事だった。

今は閃光で眼を眩ませていたネギを介抱している。

「ネギ先生？！　このちゃ……いえ、お嬢さまは？！
それにあの二人は一体……？！」

刹那から言えばそちらの方が重要だ。

そんな彼女の剣幕に、ケホケホと咳き込みはしているのだが怪我は全く負っていないのでネギも直に息を整え、今解かっている事だけを簡単に二人に伝えた。

「このかさんはあのおサルの人に捕まったままです。
そしてあの二人は何者なのか解かりません……
急にやって来てあのおサルの人に……そのぉ……エ、エッチな事をしようとしてましたし……」

「「はぁっ?!」」

確かにネギにとっては唐突に現れた“二人組の”痴漢の様なもの。眼が見えていなかったから尚更そう思ってしまっていた。

「それってまさか……あの二人って痴漢なの?!
で、でもあのサルの人に対してって……ひょっとしてホンモノの変態っ?!」

「そんな……では、お嬢さまが!!??」

「よく解からないんです。唐突過ぎて……でも、あまり味方とは思えません。何故なら……」

横島にとって慣れ親しんだ方法はネギなどにとってはインチキで卑怯で反則である。

己より強いモノとばっか闘い続けさせられていたのだから甘い事を言ってられず、正直言って不意討ち闇討ちが当たり前であった。
だからこそ、まだまだ子供であるネギがそれを受け入れられる訳が無い。

そして、その疑惑に拍車を掛けているのが横島のセンスだ。

怯えさせて尋問を滑らかにする為に悪者の演技をしたのであるが、ノリにノってしまい悪人に成りきってしまっていた。

そして、横島の霊能力であるハンズ・オブ・グローリーもその疑惑に更なる追い撃ちを掛けていた……

「あの男の人ですけど……呪術具を使ってました。あんな道具を使っている人がまともとは思えません」

“栄光を掴む手”という意味で名付けられたそれであるが、この世界の一般的な魔法知識によれば罪人の手を切り落とし、ロウ漬けにして作る呪術具なのだ。

当然ながら魔法学校を優秀な成績で卒業したネギはその事を知ってしまっていた。

「そんな…このか!!?」
「く……っ　お嬢さまっ!!」

ギリリと歯を食いしばって姿を消したであろう方向へと駆け出す三人。

何だかエラい勘違いされているよーな気がしないでもないが、それでも気合だけは入ったようである。まだまだ解決には程遠いようであるが……

そして――――

「お、おのれ関西呪術協会め……」

ここに一人、西側に対して強い怒りをもらしている少女が一人……

絨毯を引っ掻くように蹲り、身体をプルプル震わせている様子からも、その怒りの強さが窺い知れる。

「折角……

折角、事が進みそうだったのに……また振り出しじゃないか……」

フロントの物陰で肩を震わせていた真名は、ゆらりと立ち上がって怒りの矛先を西の刺客へと向けていた。

今一歩で現状が進展すると思われた矢先、西の刺客によって木乃香が誘拐され、事が事だけに楓と横島は冷静さを取り戻して元の呼吸と距離に戻ってしまったのである。

要は襲撃という事件が起こった事によって“頭が冷えた”というわけである。

「また私がイライラせねばならんのか……胃に穴を開けろとでも言うのか？
許さんぞ……西のやつらめ……」

ゴゴゴゴゴ……　と怒りのオーラを発しつつ外を睨みすえる真名。

そのオーラは京都らしく仏像……不動明王を思わせる、それはそれは怖いものであったそうな――

こうして千草が全く与り知らぬ所で、彼女は凶悪な敵を生み出していた。

だが、その事に気付くのは……もっと先の事である。

中編（後書き）

注意：

＜サイキックソーサー猫だまし＞及び＜横島Ｅｙｅ＞はオリジナルスキルです。

後編

人は恐怖に駆られると尋常では無い力が出せるという――

火事場のクソ力というのがそれに相当するのだが、今彼女が凄まじい速度で駆けていられるのは一重にその底力のお陰である。

「待て――っ！！」

背後から投げつけられた声にビクンっと過剰に反応し、慌てて振り返ったのだがその追跡者の姿が目に入り、何者であるかが理解できると途端にその怯えが薄まってゆく。

声の主はカワイイ魔法使いと彼女自身が称した子供とひよっこ剣士、それによく解からない少女という妙な三人組。

小脇に抱えた木乃香お嬢さまの関係者である。

そう、“アレ”ではないのだ。

追っ手の“普通さ”に彼女はホッと胸を撫で下ろしていた。

しかし――

「どこに行ったぁああ～～っ？　あっちかぁああ～～っ？」

その魔界の沼から響いてくる様なおどろとおどろしい声に腰から怖気が駆け上がってくる。主に性的な意味で。

マズイ!!
ナニがマズイって、捕まったら確実に貞操の危機だ。

いや、その程度で済めば良い方だろう。
何と言うか……ヒトとして無くしてはいけないナニかを永遠に失いそうなのだ。

失うのが乙女やらナニやらで済むとゆーのなら御の字だろう。
だが、その程度ではないはずだ。

もーなんと言うか……女の終わりというか、物体と化されてしまうというか……
兎に角、想像の限界を遥かに超えたとんでもない目に遭わされる

に違いないのだ。主にエロい意味で。

「ひぃいい～～～～っ！！！」

だから逃げる。必死に逃げる。
己の全てをかけて駆けに駆けて駆けまくっていた。

「そっちかぁあああ～～～～っ？」

地獄の底から響いてくるような声に、そのサルの＜式＞を身に纏った女性……千草は心の奥から怯えまくっていた。

それでも挫けかけた心を最後の力で奮い立たせ、『逃げなあかん逃げなあかん逃げなあかん逃げなあかん逃げなあかん……』とぶつぶつ呟きつつ必死に足を動かしている。

「……何やら酷く怯えていて手が付けられないようでござるな」

「う～む…脅しすぎたか？」

「まぁ、フツーなら誰だって嬲り尽くされると思うでござろうな。拙者とてそう思うでござるよ。

それにその姿は……」

「何か変か？」

そう問い返す横島。

直に飛び出したものだからあの時のままの浴衣姿で、握り締めていたバンダナをキッチリ額に巻きなおしており、それだけなら別にどうという事は無いだろう。

が、横島は人目について余計な混乱を生まないようにと余計な気を使って楓から頭巾を借りて顔をスッポリと覆い隠し、例のバンダナはその上から巻きなおしているのだ。

その上、何故だか知らないが懐中電灯を腰に一つぶら下げている。その青っぽい光がまた鬼火のように見えて恐ろしさに拍車を掛けていた。

はっきり言って、見紛う事無き怪人である。

「贔屓目に見ても変質者でござるよ？

おまけにその気配……普通の婦女子ならば捕らえられれば最後、陵辱は必至。そう捉えるでござろうなぁ……

あの逃げ足の底力はそれに対する恐怖から出ているのでござろう」

でなければ楓や横島の足から逃れられるわけが無い。

「失礼な!!　このオレがめったにそんな酷い事をするわけが無いだろう?!」

「……すると、時たまならするという事でござるか」

「揚げ足とるの禁止!!」

敵の襲来によって何時もの空気とノリを取り戻していた二人は、怒涛の勢いで障害物を飛び越え、地を蹴り空を駆けて千草の後を追っていた。

二人してノリツッコミを当たり前の様に行える距離に心地良さを感じ、それを味わいつつ――

状況は最悪であるというのに、楓は不思議と感謝してもいいような気がしていた。

『まぁ……それでも木乃香殿を攫った事を許すつもりはないでござるが……』

楓は近衛と横島から凡その話を聞いている。

同級生であり、大切な友人である木乃香をくだらぬ諍いに巻き込

もうとする動きがある……と。

確かに楓とて忍の端くれであるから、そのややこしい裏の考えも解からぬ訳ではない。

――訳ではないのであるが、飽く迄もそれは西の一部の言い分であり、そんな勝手な言い草に耳を傾ける義理は彼女には無い。

背を向けて必死に逃亡しているのは単に自分の友人を害する犯罪者にすぎないのだ。

楓のその眼が針のように光り、瞬間的にその右手の指の間に団子の串が四本現れる。

ひゅ…っと風を切る音も軽く投擲された串であったが、充分に氣が乗った串のその勢いは凄まじく、サルの着ぐるみの肩や太股の部分を見事に抉り取っていった。

「ひゃあああ――――っ!!??」

その抉られた部分から力が抜けたのか、足を滑らせて千草は転がってしまう。

それでも完全に運から見放された訳ではないらしく、一応の目的地である嵐山駅には到着していた。

「く、くぅうう……っ」

千草は力を振り絞って木乃香を抱えて改札口を飛び越えて構内と逃げ込んでゆく。

そして後を追って二つの影が駅へと飛び込み、ネギ達もそれに遅れて改札を飛び越えて行った。

その逃走劇まだ終わりを見せないようである。

■七時間目：猿の湧く所為（後）

「く……っ　どこに隠れやがった？」

不思議な事に、駅の中に入った途端、横島はサルの着ぐるみ……千草を完全に見失っていた。

何と横島Ｅｙｅという裏技をもってしても霊波が何かに惑わされて追尾できないのである。

「これは……気配が察知し難くされているようでござるな。しかしそうなると何かのカラクリが……」

その事に気付いた楓が辺りに眼を配ると、駅の構内のあちこちに妙な符が貼り付けられているのが目に入った。

いや、駅名のプレートの上にもペタリと人払いの符が貼られているのであるが、それ以外にもベタベタと惑わしの符の様なものが多量に貼られているのだ。

だがそれらをよく見ると、人払いの符は丁寧に真っ直ぐ貼られているのであるが惑わし符の方はかなり歪な角度で貼り付けられているのが解かる。

それらから如何に彼女が慌しく作業を行ったかが見て取れた。

よほど変質者（横島）が怖かったのだろう。

「おのれチョコザイな……」

だが逆に横島はこーゆー抵抗にあうと燃えるのだ。正しく変態。

それにこの程度で慌てふためく人間ではない。

何せこの横島忠夫。存在自体が反則であり、『卑怯でけっこーメリケン粉』を地でいく男なのだ。

こんな事もあろうかと……と呟きつつ、横島は懐から歪な人型に切られた符を取り出した。

その符には穴が穿かれており、楓はそれを見てその符が式符で、先程自分がしとめたものである事を理解する。

はたして彼はその符でナニをしようというのか？

横島はニヤリと底意地の悪そうな笑みを浮かべると、その符を掴んだまま右手を袂に隠してなにやら氣を収束し始めた。

興味深げに見守っていた楓であったが、直にその収束してゆく波動に眼を見張る事となる。

ギョッとするとはこの事だ。

確かに今まで楓は横島の氣の収束を何度も目の当たりにしているし、本気になった“栄光の手”もさっき改めて目にする事ができた。

だが、今行われているこれは氣の収束度が桁違いなのである。

一体何をしているのかさっぱり解からなかったのだが、そんな無言の時も僅か数秒。

懐から右手を出した時、楓は更に驚かされてしまう破目となった。

「ウキ？」

何と横島のその右手にはサルが握られていたのだ。

「な…っ？！　それは……」

そう――先程、楓自身が仕留めたはずのサルの式が元の姿で横島の手の中にいた。

ご丁寧にも楓が串で開けたであろう腹の穴の位置にはバンソーコーが×の字に貼られてたりする。

「さぁ、あの眼鏡ちゃんの式神よ。このオレをあのねーちゃんのいるところに導くのだ！！」

何だか偉そうにそう言って横島はサルを放す。
状況がサッパリ解かっていないサルであったが、独り（一匹）だけ取り残されている事に気付くと慌てて駆け出してゆく。首に何時の間にやら猿回し宜しく縄が括られているが。
それでも頑張って主を目指しているのか、列車の方に向って駆けていた。

「そっちか」

ニヤリとして後を追う横島。

式返し……＜返りの風＞というものは、その式でもってそのまま返す事も出来る。
横島は反則の技で持って先程の式を『治』『療』し、それを行ったのだ。

＜式＞というペーパーゴーレムであるからして、『修』『復』でもよい気がしないでもないが、横島的に言えば式も“生きている”のだから『治』『療』なのだろう（だからバンソーコーが腹にあった）。
“珠”の使用にはイメージが大事なのだから、目的はアレであるが、彼は本気で＜式＞を『治』『療』しようと念じたのだろう。
その辺りに横島の人の良さが滲み出ている。

尤も、楓がそんな事を知る由もなく、一瞬で他人の式を組みなおして式返しを行った……と思われる横島の技量に只々驚くのみ。

そんな二人が駆けて行く先で、一本の車両が動き出そうとしていた。

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊

「ぜー…ぜー…ぜー…」

満身創痍とはこの事であろう。

着ぐるみのあちこちには楓によって穿かれた穴があり、下に着込まれているのだろう衣服や地肌がその穴から露出している。

何せいくら＜式＞とはいえ着ぐるみは着ぐるみ。まだ花冷えもあろうこの季節でも、全力疾走なんぞすれば流石に汗だくだ。

穴によって肌が冷やされてはいるが、そのお陰で中途半端に汗が冷えて気色が悪い事この上も無い。

呼吸を荒げたまま、ふと脇に寝かせてある木乃香に眼を落とす。

いや、苦労は散々したのであるが作戦自体は成功している。

護衛どもを出し抜き、ターゲットである木乃香お嬢さまを奪取できたのだから、やったでーと胸を張っても良いだろう。

にも拘らず素直に喜べないのはなぜだろう？

何というか……余計な苦労まで背負い込まされた気になってくるのは……？

タ、タン……っ

どびくぅっ！！

線路を走る音に混じって何かに後方の車両に飛び降りられた音が聞えたような気がして、目にも哀れなほど千草はうろたえた。

カタンカタンと音を立てて走り続ける列車の音に混ざり、確かに別の音が聞えたのだ。

そしてその恐怖を煽るかのように何かが駆けてくる音。

「ひ…ま、まさか……」

ペタリと座り込んで思わず後ずさる千草。

タタタと駆け寄って来る確かな足音に生理的な恐怖が蘇って身体が小刻みにカタカタと震えてしまう。

その事を情け無いと思う前に、本能が恐怖を訴えているのだ。

『立たな……立って逃げな……』

と座席の角に手を掛けて立とうとするも、器用だったはずの丸っこい着ぐるみの手がズルリズルリと滑って上手く立てない。

半泣きで焦って立とうとする様は、B級ホラーで殺人鬼に追い詰められた一般ピーポォーのそれを彷彿とさせられる。

「ひぃ…」

と、小さくなって怯えた千草の視線の向こうで、

この車両のドアが遂に開いた。

ガラ……ッ！！

「待て――っ！！」
「このか――っ！！」
「お嬢様――っ！！」

しかしてそこから現れたのは、大切な親友である木乃香を奪回すべくここまで追ってきた明日菜とネギ、そして幼馴染である刹那達の三人であった。

「……なんや……あなた達どすか……」

千草は心底胸を撫で下ろしたという。

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊

「甘ぁあい……」

ニタリと笑った横島は、そのまま列車の屋根の上を駆けていた。

唐突に何を言うでござるか？　と首を傾げる楓を他所に、彼は器用にパンタグラフを避けつつ、風の抵抗を物ともせずに只ひたすら女を求め……もとい、木乃香を救出すべく屋根を駆けている。

言うまでも無く彼の脳裏に浮かんでいるのは捕らえた女術者を尋問するビジョン。

ここでの詳細はマズ過ぎるので控えるが、そりゃあもう蜘蛛の糸ならぬ荒縄で雁字搦めにされた千草は、あーんな事やそーんな事をされていたりする。

その結果は、小鳥のように囀る牝一匹……てな具合だ。

ぶっちゃけ単なる妄想であるが、相手が不埒な敵であるのだからある程度以上の行為をしたってバチは当たるまい……という自分勝手な欲望が魂を焦がし欲望を滾らせているのだ。

まぁ、本気の本気で相手をそういう目に遭わせるというのなら横島の力をもってすれば逆に簡単な事だったりする。
だが実際にはヘタレである事もあってそこまで非人道的な行為はできまい。そこら辺は実に彼らしいと言えるが。

楓はというと、そんな彼の事をある程度以上理解できてはいても、横島の煩悩の深さにまで何となく気付いているので今一つ信じ切れていなかったりする。
だから彼が無理矢理コトに及べば止める気満々である。尋問自体には賛成であるが。

ただ、楓は横島が行うかもしれない非人道的行為を止めようとしているのは、誘拐犯である千草に女として同情しているからではなく、その行為を行った後で自己嫌悪に陥るであろう横島を心配しての事。

彼女とて裏の世界を知る者。
大切な友人を“利用”しようとする輩にまで配る気遣いは持ち合わせていないのである。

そんなズレた思惑と思いやりを抱えたまま、二人は車両から車両へと屋根の上を駆けていた。

当然の様にここには障害らしい障害は無く、急に高さが変わる送電線にさえ気をつけていれば左程難しくなく駆ける事ができている。

「んん……？　あのボウズも乗って来てるぞ」

「ほぅ？　思ったより早いでござるな」

前方の車両。
直前の車両に寄り集まっている五つの気配。

その中の三つはネギと明日菜、そして刹那である。
となると残りは千草と木乃香であろう。

当然の様に横島の笑みは深くなった。主に歪みで。

「ふはははは……追い詰めたぞ、眼鏡ちゃん」

「……見紛う事無き悪者でござるな……」

何だかまたテンションが上がった横島には、ある程度以上慣れたはずの楓でも流石に縦線を顔に浮かべてしまう。

しかしそんな楓の眼差しなど何のその。
眼の前に置かれた肉塊に飛び掛る飢えた獣宜しく、横島は無意味に跳躍してその車両の窓へと飛び込……

ゴビュ――ッ

「ぶはぁっ？！」

「横島殿?!」

……もうとした矢先、唐突に窓の隙間から水が噴出し、正面から衝突した彼は吹っ飛ばされてしまう。

ごんっ

「ぶっ?!」

独楽の様にキリキリ宙を舞い、後の車両の角で頭を打つ横島。その一発で意識は簡単に刈り取られていた。

コメディ映画のようなアクションに一瞬呆気にとられた楓であったが、そこはそれ忍の端くれである彼女。直に気を取り直して後方に飛び、最後尾から線路に落下しかかっていた横島の足に縄を巻きつけて思いっきり繰り寄せる。

ごすっ

「おごっ!!」

「あ……」

だがそこは転んでも只では起きない男、横島忠夫だ。

足を引っ張ってもらった勢いによって最後尾の車両の窓で顔面を打つというお約束も忘れていない。

更には顔面を強打するという事で意識を取り戻すというリアクションまでやってのけたではないか。正にお笑い心を見失わない“漢”である。

「うごごご……」

「ああ……も、申し訳ござらぬ。横島殿っ」

「あ、ああ……いや、な、何のこれしき……」

ズリズリと縄を引っ張って屋根の上に上げてもらい、己の失態を謝罪する楓に対し、無理に笑顔を作って親指を立てる横島。

だくだくと零れる鼻血が痛々しいが、ギャグ体質故か左程のダメージでは無い。

痛い事は痛いのだが、この程度なら職場でしょっちゅう喰らっていたのだし。主に自業自得で。

それに彼女は自分を助けようとしてくれただけで、顔面強打は単なる事故である。だから楓が気に病む必要は無いのだ。

それに今現在は八つ当たりの対象がいてくださるのだし。

「オノレ…西の眼鏡ちゃんめ……一回や二回で済むとは思うなよ

……」

何の回数？　等と問い掛けてはいけない。

楓はというと、何だか気遣ってもらった事を自覚してしまったのかそのエロい呪詛の声は聞えていないようだ。なんとも運が良い（悪い？）少女である。

そんなラブコメちっく（？）な匂いをわずかに漂わせた時、何故か水で満たされている前の車両にも動きがあった。

―斬空閃！！―

「何だ？」

「……む？」

電車の揺れとは違った衝撃が屋根にも伝わり、車両全体がぶるると身震いを起こす。

と同時に、前の方の車両内部で泡の様なものが弾け、最前部まで水が雪崩れ込んでいるのが見えた。

「あのボウズが何かやったのか？」

鼻血をキレイに拭った横島が首を傾げつつ立ち上がる。
それに合わせるかのように列車は減速を始め、金属を擦り合わせる音を立てて車両はゆるりと駅に停車してゆく。

体感での移動時間は大した事は無かったのだが、もう京都駅だ。

「わ――っ」

「キャー」

ドアが開いた瞬間、中に充満していた水が流れ出し、ネギ達もその水と共に流れ出る。

ゲホゲホと水を吐いているのは千草。
着ぐるみである分、水に沈み易かったのだろう。

全員、全身濡れ鼠であるが、刹那は既に体勢を整え、剣に手をかけ直にでも斬り掛かれるよう身構えている。

「み、見たかそこのデカザル女。
いやがらせはあきらめて大人しくお嬢さまを返すがいい」

投降の勧告であるが、そんな物を受け入れるつもりが僅かでもあるのならこんな暴挙には出まい。

「ハァハァ……なかなかやりますなぁ。
しかし、このかお嬢さまは返しまへんえ」

その敵である女性の口から語られた『このかお嬢さま』という言葉に訳の解かっていなネギと明日菜が戸惑いを見せた隙に、千草は濡れたホームを蹴って三人から遠ざかる。

「あ、待てっ！！」

刹那は左手の愛刀一夕凪一を握る手に力を込め、素早く立ち上がって千草を追い、その背をネギと明日菜が追いかけた。

濡れて着ぐるみも重くなったであろうが、スタート時間とコンパスが違う所為もあってかなかなか追いつけない。
それでも三人は必死になって駆ける。

刹那はネギらに関西呪術協会の中にあった不穏な動きや、木乃香を利用しようとしている裏の動きを語って聞かせた。

説明を聞いて憤慨する明日菜らの声を耳に通しつつ、刹那は自分の迂闊さに唇を噛む。

彼女も、そして木乃香の祖父たる近衛も状況判断が甘かったと言わざるをえない。

裏でかなりキナ臭い動きを見せていたとはいえ、魔法の秘匿という認識があった所為でまさか修学旅行中に誘拐に及ぶとは思っても見なかったのである。

確かに関西呪術協会は元々裏の仕事などを請け負っていた組織で、目的の為に手段を選ばない強行策に出る可能性もあった。

刹那が習い憶えている剣術……神鳴流は、関西呪術協会の護衛として付く事もある。だからそういった事を知っていたはずなのに……

慙愧の念をも噛み締めつつ、地を蹴る足の動きを更に強めて行った。

まぁ、実際にはその可能性を見逃していなかった近衛はちゃんと横島という鬼札と楓という補佐を用意してあるのだが、刹那にはそれは語られていないのだ。

理由は色々あるが、木乃香の件で異様に気負っている刹那に急に信じて一緒に行動しろというのは無理があるし、性根がどれだけ良かろうと普段の行動が行動なので確実に足並みが整わない事は目に見えていた。

だからもうちょっと間を置いて……という気遣いが裏目に出ていた。それが平和ボケといえばそれまでなのだが。

あまり無茶な逃亡をし過ぎた所為か、着ぐるみはもう限界に来ていた。

仕方なく千草は式を符に戻し、階段の上で子供らを待ち構える。

お陰で何とか追いつく事に成功した三人は、千草が新幹線内にいた売り子である事に驚きつつも、木乃香を奪回すべく無謀にもそのまま突っ込んで行く。

当然、こんな暴挙に出ている千草に対応手段が無い訳があるまいに。

「お札さん　お札さん
ウチを逃しておくれやす」

ボウンッ!!

駅前の長い階段のど真ん中に、突如として“劫火”が出現した。

その形、真上から見れば『大』の文字。

飛びかかった刹那はその大の文字の股の間に突き進む形で炎に巻き込まれようとしていた。

「うあっ！！」

「桜咲さん！！」

だが間一髪で明日菜が引き摺り戻し、事無きを得る。

高さといい、火力といい、二人のか弱い少女ではどう足掻いても超えられるとは思えない。

千草はやっと余裕を取り戻し、笑みを浮かべられるようになった。

「ホホホ……

並の術者ではその炎は越えられまへんえ」

ほなさいならと言い残し、その場を去ろうとする千草。

少女らの背後でそうはさせじと子供教師が風の魔法でその炎を吹き飛ばさんと詠唱を始めたの瞬間。

「ほほぅ？　だったら火を『消』したらええんやな？」

「は？」

突如として投げかけられた声に千草の足が止まる。

驚いて振り返った千草が見たものは、呪符でもって出現させた炎の壁が消え去る瞬間。

電灯のスイッチをパチリと切ったかのように、符術【京都大文字焼き】が消滅したのである。

ほんの一瞬の間で、並の術者ではどうする事も出来ないはずだった炎の壁が消え去リ、何事も無かったかのような階段の風景がそこに広がっていた。

「な……っ　なぁっ？！」

ハッとして子供らに眼を向けるが、その子供らも呆気にとられているようで動いた様子は無い。

いやそれ以前に何の力の波動も感じられなかった。

となると第三者がここに来たという事に……

「ふっふっふっ……追い詰めたぞ眼鏡ちゃん」

人気が無い所為か異様に響くその声にギクリと硬直する千草。

見とうない。見とうない……と思いつつも首が勝手に動いてしまう。

ギリギリとゼンマイ仕掛けのように首が回り、カラクリ人形の目のように何となく不自然に眼が“それ”に向いてしまい、

「あ……ヒィイイ～～～～っ！！！」

何だかよく解からない駅前のモニュメントの上、

風に浴衣をはためかせた所為でトランクスまでバッチリ見せている、覆面で顔を隠して懐中電灯を腰からぶら下げている謎の男……

つい今さっき、自分を穢そうとした恐るべき存在を、

さっきとは違い、バッチリ視力が回復している千草は、３６０度どの方位から見ても完璧かつ徹底的な変態怪人を、

ハッキリクッキリと目に焼き付けてしまった。

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊

「へ、変態……っ」

流石の明日菜もその姿に引いてしまう。

いや術を使うとか、魔法を使うとかいう輩に対しても多少の怯えというものは持ち合わせていた。

それを持ち前の根性で無視し、或いは振り切って、足を踏ん張っていたのだ。

だが、上に立っているそれは明らかに“別物”だ。

生理的な怖気をそこに感じてしまうのも無理も無い。

「誰が変態じゃ！！
　オレは単にあの眼鏡のおねいちゃんに口で表現するのも身悶えするくらい恥ずかしい行為をしたいだけの好青年だ！！」

「ドコが好青年よ！！　アンタみたいのを世間一般で変態っていうのよ！！」

「しゃらっぷ！！」

その何だか泣き声に近い怪人の声によってネギも再起動を果たし、刹那と明日菜の前に出で庇うように立ちはだかる。

「む……？」

その子供の男前な行為には何だか微笑ましいものを感じないでもないが、何だかとってもコンチクショーなモノも感じてもいる怪人……あ、いや横島。

何せネギは確実に将来を約束されたイメケン顔である。横島的に言えば無理もなかろう。

「へ、変な事はさせませんよ！！
あなた方が誰であろうと、アスナさんや刹那さん、このかさんは僕の大切な生徒で……大事な友達です！！」

だから守ってみせると魔力を高め、ギンっと横島と千草を健気にも睨みつけていた。

その眼差しを真正面から受け、横島は内心、

『うお～～……言ってる事はごっつ好ましいのに、ものごっつ腹立つんは何故？！』

と地団駄踏んでいたのであるが、そこは大人。
外見的には全く不動心を見せ付けつつ意味も無く胸を張り、勢いだけで強気なセリフを口走った。

「ふふふ……このオレが“じょしちゅーがくせー”なんぞほしがるとでも思ったか?!
舐めるな小僧!!!」

ビシィ!!　とネギを指差してポーズを極める。
姿が姿なので全然様にならない事は言うまでも無い。

「?!　このかお嬢さまの魔力を狙った輩ではないというのか?!」

刹那はどうせ変態を装っているだけと思っていたので驚きを見せていた。

だが、ここにズレがある。

確かに千草やネギ等の常識から言えば木乃香は凄まじい魔力を秘めた逸材である。

が、この変た……もとい、横島の“非常識な常識”から言えば木乃香の魔力量など左程珍しいものではなかったのだ。

よって、

「ハッ！！　この程度の魔力を持つ女などオレの周囲には掃いて捨てるほどおつたわ！！
大体“魔力”なんぞオレが求めると思うてか？！」

と彼は声高らかにそう言い放った。

ただ、その対象は大体は神族だったり魔族だったりするし、殆ど決戦兵鬼と言っても過言ではなかった蜂や蝶や蛍の化身らもその範疇である。何せ彼女らのペットですらＡ級ＧＳの百倍近い霊力をもっていたのであるから比べる方がどうかしているのだ。
まぁ、彼もその彼女らのペットだった時期があるのだから自分の位置と等しく思うのも無理は無いという説もあるが。

それに――横島は魔力が欲しくて女を求めるような腐った人間ではない。絶対に。

女を求めたら力が付いて来た……というのがパターンだったのだから。

「「な……っ？！」」

そんな裏事情を知る訳も無い人間……特に千草と刹那は彼の言葉

に驚いていた。

木乃香の力の大きさは以前から関西の本拠地でも噂だけとはいえ相当上っていたのであるが、そんな物はどうでもいいと言い切られた上、身の回りに沢山いると言われたのだから。

「じ、じゃあアナタは何が目的なんですか!?」

皆の思いを代弁するかのようにネギが叫んだ。

その言葉を待っていたかのように、横島は（無意味に）胸を張って千草を指し示す。

「決まっているだろう？　あのねーちゃんだ!!
例えどんな力を秘めていようと“じょしちゅーがくせー”なんぞに興味は無いっっ!!」

ええ、ございませんともさ!!!　と千草を指差して言い切るその姿の力強さは凄まじかった。

それが単に自己弁護だという事に気付く者が出ないほどに……

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊

後頭部にでっかい汗を垂らしつつ、楓は物陰から様子を窺っていた。

隠れる必要は無いと思われるかもしれないが、ここまで手の込んだ誘拐をする輩なのだから、二手三手と用意を整えている可能性がある。

だから楓ちゃんはヤバイ手が使われないよう見張っててくれ。そう横島に言われれば納得して従う他無かったのだ。

とはいえ、こんなセリフの応酬を見てしまうとセクハラを妨害されるのを防ぐ為に遠ざけられたとしか思えない。

それでも彼が自分を説得してきた時の言葉も納得できてしまうし……

『うう～～む……卑怯と見るか慧眼と見るか、未だ判断が難しいでござるな……』

と悩む事しかできないのが現状である。

そんな彼女の目の先では横島が高笑いを上げながら千草に飛び掛からんとしているシーンが見えていた。

瞬間、楓の額にビキリッと音を立てて血管が浮かびあがる。

後でオシオキでござる……等と呟いた楓の右手。

何時の間にか握り締めていたクナイが軋んでいた。

そこまで怒る必要があるのか？　と問われれば返答に困るのだが、幸いにもそんな質問を投げかけてくる者はそこにはいない。

物陰ツッコミの達人になりかかっている友人はまだホテルの中であるし。

それでも楓は横島に言われた通り、周囲に気を配り続けていた。

敵の援軍が出て来なければ覚えておくでござるよ……等と本末転倒な事を考えながら……

当たり前と言えば当たり前であるが、横島の怪奇な行動によって意識の全てが彼に向けられている為、千草はネギ達の動きに気を配りきれなかった。

よってその隙にネギは仮契約カードの力を使って明日菜の底上げを余裕で行えている。

「契約執行　１８０秒間！！
ネギの従者　『神楽坂　明日菜』　！！」

カードによって繋がれているネギから注ぎ込まれた魔力が明日菜の身体に行き渡り、その身体が魔力によって淡く光った。
元々の身体能力が一般人からかけ離れている明日菜だ。魔力によって底上げされた能力は計り知れない。

「さ、桜咲さん　行くよ！！」

「え……あ、はいっ！」

その明日菜の勢いによって気を取り直し、刹那も木乃香を奪回せんと階段を駆け上がってゆく。

「木乃香は攫われるし、変態は出てくるし……さっきの火だって下手したら火傷しちゃうじゃない！！
なんで私の周りでこんなフジョーリな事ばっか起きんのよ！！」

と憤慨頻りである。

千草から言えば『あんなんと一緒にせんといて！！』であろうが、友人を着ぐるみに攫われた明日菜から言えば五十歩百歩であろう。

「そこのバカ猿女――ッ！！
このかを返しなさ――い！！」

自分の符術をアッサリと退けて襲い掛かってくる第三者の恐怖によって千草は反応が遅れていたのであるが、明日菜の怒りの波動によって何とか再起動を果たし、既に用意してあった符を発動させる。

それと同時にネギもカモに促され、懐からカードを取り出すと、

「アスナさん!!　パートナーだけが使える専用アイテムを出します!!
アスナさんのはＥｎｓｉｓ（ハマノ）Ｅｘｏｒｃｉｚａｎｓ（ツルギ）!!
武器だと思います!!　受け取ってください!!」

「ぶ、武器!?　そんなのがあるの?
よ、よーし、頂戴、ネギ!!」

明日菜にそう断りを入れてからそのカードの力を発動させた。

「Ｅｘｅｒｃｅａｓ　ｐｏｔｅｎｔｉａｍ　神楽坂明日菜!!」

カードに宿っている力がネギに紡がれたワードによって発動し、明日菜の手の中へとその力が収束し、具現してゆく。

その力の波動は、流石の明日菜も期待を持ってしまうほど。

横島も何やら強そうな力を感じ、戦闘（?）中だというのに思わ

ず少女のその手の中に現れた得物に目を奪われた。

Ｅｎｓｉｓ（ハマノ）Ｅｘｏｒｃｉｚａｎｓ（ツルギ）とは、
ＭＩＮＩＳＴＲＡ　ＭＡＧＩ　ＡＳＵＮＡと銘打たれたアーティファクトの逸品。

……その形状は正に……

―ハリセン―

であった。

「な、何コレー?!
ただのハリセンじゃないのー!!」

「あ、あれー?
おかしいなー……」

当然のように文句を言う明日菜に、ネギもただ慌てるばかり。

そんな明日菜の持つアーティファクトに何やら強いシンパシーを感じている横島であった。

「神楽坂さん！」

だからと言って状況が止まるわけもなく、明日菜より先んじていた刹那の声に促され、彼女はそのままヤケで突っ込んでゆく。

『ええ――いっ　行っちまえ姐さん！！』

「も――っ！！　しょ――がないわねっ！！」

と彼女の肩に乗っているカモが煽り、その後押しを受けて明日菜は大きく振りかぶって千草に踊りかかった。

何せ物がハリセンだ。おもいっきり張り飛ばした所で死にはすまい。

彼女が自分のド外れた腕力を計算に入れていないことは言うまでもないが。

だが、そんな余計な心配は無用である。

ズシンッ

唐突に質量のあるモノが出現し、迫り来る刹那の刃と明日菜のハリセンを受け止めたのである。

「クマーッ」

「ウキッ」

いきなり出現したモノ……それは刹那の剣を爪先で受けたクマと、明日菜のハリセンを白刃取り……しようとして失敗して頭で受けたサルの巨大な式であった。

「うわった…!?　何コレ？　動いた!?　着ぐるみじゃなかったの!?」

「さっき言った呪符使いの善鬼護鬼です!!」

「え？　ソレが？」

突如として使用された式符に驚く明日菜にそう説明する刹那であったが、横島的には彼女のセリフに首を傾げざるを得ない。

いや、彼とてGSという特殊職の端くれ。

いい加減にしてほしいくらい超一級の式神使いとは仕事を一緒に……というか押し付けられた事だってある。

しかし悲しいかな、式神使いとの出会いからして既にトップクラスで、式神といえばその超一級で名門中の名門の式神使いの大家が

伝え続けている専用の式神、＜十二神将＞がディフォルトなのだ。
尚且つ、それに次いで目にしているのは夜叉丸というこれまたトップクラスの式神。

当然、横島は善鬼護鬼とかいうのだから、ヴァ○ユラ・オーンとかしそーな外見だと予想していた。

だから目の前にいる善鬼護鬼を名乗る式神が出現したのだからなど、そりゃ力が抜けようというもの。
独学で式神を生み出した根暗学生の方が（外見的には）スゴかったという気さえしてしまう程。思い出すと何だか尻に痛みが走るが。

「がおーっ」

「んでもってオレにはコレかい」

横島の方にも当然の様に式神が襲い掛かってくる。

その形状は何だかユーモラスなライオンの巨大ぬいぐるみで、たてがみの部分が何だかモコモコしていてドーナツっぽい。
しかしそんな見た目とは裏腹に、その力は本物のライオンより強かったりする。

それでもゲート前での戦いの時の襲撃者が使っていた式神の方がずっと強そうだった。

――いや、それでも油断は禁物だ。その事で雇い主にも散々怒ら

れていた事。

外見はアレであるが、ひょっとしたら名前の通り、善鬼護鬼の名に恥じないパワーを……

ズシャッ！！

「あれ？」

――持っていなかった。

何せ“栄光の手”による爪の一薙ぎで還してしまったし。

「弱っ？！

なんだこりゃ。式の練り具合が最低じゃねぇか。ひょっとして姉ちゃんは素人か？」

余りの呆気なさに思わずそうもらしてしまい、ふと少女らに眼を向ける。

ボッ！！

明日菜と対峙していたサルもハリセンの一撃で還されているではないか。

「あんな素人のハリセンで還るっつー事は……
な～んだ弱いと思ったらやっぱり素人か」

というか、横島の栄光の手の能力と少女の能力がド外れているだけである。

「んなっ？！　ウチの獅鬼と猿鬼がこんなあっさりと……」

横島は……いや、ここにいる者全員が気付いていない事であるが、明日菜はマジックキャンセラーという稀少能力を有している。
だから一撃で式符という“術”が還されてしまったのである。
彼の霊能力は言わずもがなだ。

そんな事を知る訳も無い横島は、勝手に（十二神将や夜叉丸と比べて）霊力の収束度が低い式神を見て千草を素人だと判断していた。
千草にしてみれば世界トップレベルの式神使いと一緒にされたら堪らないだろう。

で、当の彼女はというと、目の前で起こされた理不尽さに呆然とするのみ。

「さてと……眼鏡ちゃん？」

ドびくぅっ！！

頭巾によって隠されているが、間違いなくその布の下で横島はニタリと笑っているだろう。

「火傷する前に大人しくする事をオススメしちゃうぞ？　で、なきゃあ……」

カッシャカッシャと剣呑そうな音をわざと出させ、霊波の爪を蠢かせて脅す。

「ちょっち痛いよぉ～……？　慣れたらキモチいいかもしんねーけど……」

「ひぃっ！？」

ぶっちゃければ降伏勧告である。であるのだが……そーゆー事を言われて降伏する事等できようか？

降伏すればどのようなエロゲ的な陵辱行為が待っているか解かったものではないのである。

とは言うものの、千草は逃げ様も無いほど追い詰められていた。

何せ今、明日菜に倒された＜猿鬼＞にしても、横島に倒された＜獅鬼＞にしても弱い部類の式神では無いのである。
見た目はナニだが、呪符使いを守る為に生み出したボディーガードなので、善鬼護鬼の名を持つそれらが弱い訳が無いのだ。
にも拘らず怪人……はともかく、少女の一撃によって還されている。

それで心が折れそうになっているのも、まぁ、当然と言えよう。

慌てふためいている千草は兎も角、明日菜は素早く刹那と相手を代え、自分はクマのぬいぐるみを模した式を相手にしだす。

そして刹那は素早く千草の元へと駆け出した。

何せ例の怪しげな怪人がそこにいるのだ。敵意は無いと言われてハイそーですかと信じるわけにもいかないのである。

「このかお嬢さまを返せ――っ！！」

使命感より何より、自分の想いを持って地を蹴った。

相手は既に座り込んでおり、怪人ににじり寄られて隙だらけなのだ。虚を突く以前にそのまま打ち倒せそうである。

しかし――

「え〜〜い」

ものごっつ気が抜ける掛け声と共に、刹那に刃が迫った。

一瞬、躊躇したもののそこは剣士。下から掬い上げるように剣を振って刃を打ち止める事に成功する。

金属が打ち合う、ガキンっという重い音を立て、双方は衝撃によってふっ飛ばされた。

衝撃は同等であったろうに、おもいきりゴロゴロ転がってゆく襲撃者。

「きゃあああああ」

という悲鳴も気が抜ける。

刹那はその剣筋から襲撃者が神鳴流の使い手である事を理解し、冷たい汗が出るのを感じていた。

が……

「どうも～～～
神鳴流です～～～
おはつに～～～」

気の抜ける言葉使いそのままに、襲撃者はフリフリのロリータファッションに身を包んだ少女だった。

「え……？　お……お前が神鳴流剣士？」

流石に面食らったのだろう、刹那は言葉を失っている。

「はい～～～♪
月詠いいます～～

見たとこ、あなたは神鳴流の先輩さんみたいですけど、護衛に雇われたからには本気でいかせてもらいますわ～～」

刹那の混乱などどこ吹く風。
月詠と名乗った少女剣士は、ちゃっかりと可愛い帽子を被ったままそう言ってチョコンと頭を下げた。

時間さえ深夜でなければ似合っていたかもしれないが、今は夜であり、尚且つ彼女の両の手には長刀と小太刀が握られている。剣呑な事この上も無い。

こんなのが神鳴流か……とぼやきも入るが気を抜くわけにもいかない。何せ自分の一撃を止められた上、手に伝わった衝撃は本物だったのだから。

しかし、

「つ、月詠はん！！　ほんな小娘や相手にせんと、こっちの変態をたのみます！！」

「え～～～？」

「え～～？　やあらしまへんっ！！
こっちの方が難物なんどす！！」

「誰が乾物じゃ！！」

干しワカメの様に聞こえたアホは置いといて、千草にとっては刹那より何より目の前の横島の方が脅威。というかバケモンである。

だからせっかく応援に駆けつけた月詠に対して怪人迎撃を命じてしまうのも仕方の無い話だろう。

しかし月詠としてはそんな胡散臭い怪人の相手なんかより、目の前にいる神鳴流剣士という使い手と死合いたい。

何せこれほどの獲物とはそう滅多に出会えたりしないのだから。

「っ…シッ！！」

だが、それを好機と見た刹那が月詠に斬りかかった。

のた～～っとした月詠であるが、刹那が思っていたより反応が早く、意外にも今一歩の踏み込みが浅くされてしまう。

だがその距離はそれほど不利ではない。

何せ刹那は神鳴流の伝統通りに野太刀を使用しているので、踏み込みすぎると月詠の間合いに入ってしまうのである。

「はう～～～　これやったら行けませ～～ん♪」

それでもよほど楽しいのだろう。

月詠は千草の援護に行けないと嬉々として言い放ち、刹那との死の舞踏に酔い痴れてゆく。純粋に刹那と戦い……死合いたいのだろう。

そんな少女剣士に対して眼をナルト状態にグルグル回して混乱しつつ叱咤を続ける千草。

斯かる状況でそんな隙はいただけない。

「…Ｒａｓ　ｔｅｌ　ｍａ　ｓｃｉｒ　ｍａｇｉｓｔｅｒ…」

ボソリと聞こえた声に慌てて振り返るも一歩遅い。

「風の精霊１１人！！　縛鎖となりて敵を捕らえろ！！」

そう、ここには魔法攻撃ができる少年がいたのである。

「ああ、しもた！！　ガキを忘れとった－！！」

「もう遅いです！！
ＳＡＧＩＴＴＡ－ＭＡＧＩＣＡ．　ＡＥＲ　ＣＡＰＴＵＲＡＥ
！！」

その矢の数、呼び出した精霊の数と同じく１１本。
それらが弧を描きつつ景気良く千草を捕らえんと襲い掛かっていった。

慌てた千草は手近にあったものを盾にして我が身を守る。

「あひぃっ！！　お助けー！！」

ＡＥＲ　ＣＡＰＴＵＲＡＥ――『戒めの風矢』なのだから殺傷能力は無い。しかし千草がそんな事を知る由もなく襲い掛かる魔法の矢に対して恐怖感から咄嗟にとった行動だった。

「え？」

「……あ」

手近にいた者……即ち、

「うっわ～～～っ！！！

し、縛るんはええけど、縛られるんはイヤ～～～～っ！！！」

横島だった。

ギュルギュルギュル……ときつめに身体にまとわり付いてくる魔法の力。

その力によって横島はぐるぐる巻きに縛り付けられてしまったのである。

「はぁ、はぁはぁ……た、助かったんどすか……？

あは、あはははは、あはははははははは！！　助かったんや！！　ウチは助かったんや！！」

ありがとーっ　ボウヤーっ！！　てなノリでネギに対して涙すら流して無上の感謝と愛の念を送る千草。

尤も、横島を魔法で縛り付けた当のお手柄少年としてはどう反応して良いやら解からないが。

「あ、え、え～～と……」

「うふふ……ほんま、ボウヤには感謝しますえ？　でも、それはそれ、これはこれどす。
お嬢さまは頂いていきますわ」

余裕を取り戻した千草は恩人（ネギ）に対して実に恩知らずな事をほざき、木乃香を抱え直す。
ネギがはっとして周りを見ると、明日菜はクマとの戦いで苦戦しており、刹那も月詠に手間取っている。
足止めをしてくれそうなものはいない（変態さんはネギが動きを奪ってしまってるし）。

こうなったら僕が魔法で……と呪文を紡ごうとすると、

「おっと、下手な事したらお嬢さまに当たりますえ？」

木乃香を盾にするではないか。

どうやら横島を盾にして助かった事で人質を利用する事を思いついたらしい。

「な…っ？！　木乃香さんをはなしてください！！
卑怯ですよ！！」

当然ながら抗議を入れるもそれは追い詰められた遠吠えだ。
敗残者の言い訳に過ぎない。

「ふふん？　甘ちゃんやな。人質が多少怪我するくらい気にせず打ち抜けばえーもんを」

そう言ってせせら笑う千草。

だが、いくら気を抜けたとしても油断し過ぎるのはいただけない。

「そうか？　ンなことしやがったらオレがヌっころすぞ？」

「う…く……っ　そういうたらまだ兄さんがおりましたな」

ごく身近にその声を聞き、恐る恐る振り返る。

やっぱり拘束されたままなので内心ものすごい安堵の溜息を吐く千草。

「そ、そんな姿で何を言わはるんどす？　今のアンタに何ができる言うつもりどすか？」

それでもなけなしの勇気を振り絞ってそう虚勢を張るが、内心はドキドキだ。

何せどーやっても不安が拭い去れないのだから。

「ふ……この程度の戒めが何だっちゅーんだ？
この程度の戒め、このオレが初めて喰らったとでも思うたか？
自慢じゃねーが鎖で縛られた挙句に海に蹴落とされた経験のあるオレからすれば……」

人はそれを自業自得と言う。

それは兎も角、そんな事をほざきつつ霊力を高めてゆく横島。
何せ彼のお得意は反則である。“ある技”を使用すれば直に『脱』け出せるのだし。

ただ、“珠”の生成法が“以前と違う”だけである。

「な、何を……？」

急に巻き起こる不可思議な力に、気を張っただけの気持ちが萎えかけてしまう。

いや、仮にも千草は呪符使いなので“霊気”は知っていた。
そして横島から発せられるのは間違いなくその霊気を伴った代物である。

だが決定的に違う事がある。

それは“質”だ。

霊気とは生きているものや意識を持ったもの、そして生きていたモノがもつ波動の様なもの。

しかし横島から発せられているものは似て異なるものなのだ。

魂が持っているモノから酌み出される力。霊力。

横島ら霊能力者はその霊力を駆使して魔法と同等の奇跡を起こしているのである。

そして“この世界”しか知らない千草は、流石に気と魔力の中間のようなエネルギーにはお目にかかった事が無い。

その戸惑いは決定的な隙を生んでしまった。

「退けぇっっ！！！」

千草の意識が逸れた事を見止めると、乾坤一擲と言っても良い程の気合でもって刹那は太刀を振るう。

当然ながら斬り結んでいた月詠には、腕はともかく“氣”合では圧勝している。

その一撃で月詠の二刀でのガードごと彼女を吹き飛ばし、背後を振り返りもせず千草に迫る。

「このか――っ！！」

その勢いを受けたか、明日菜もハマノツルギでもってクマ式の頭を吹き飛ばし、やはり突拍子も無い脚力でもって千草に迫った。

「ＦＬＡＮＳ！！　」

そしてネギも、

「ＥＸＡＲＭＡＴＩＯ！！」

隙を逃したりしない。

「なぁ～～～ッ！？」

武装解除の呪文が発動し、正しく風花のように千草……と木乃香の衣服が弾け飛ぶ。

それでも千草は何とか体勢を立て直し、術を使おうとするも、

スパーンッ！！

「あた――っ！？」

明日菜のハリセ……いや、ハマノツルギによって＜守りの護符＞をぶち抜かれて失敗。

頭部を強打されたことと、護符が効かなかった事で意味を失ってしまう。

こうなったら必殺の呪符でもって……と奥の手を出そうとしたその瞬間、

秘剣――

百花繚乱！！

怒りに燃える刹那の剣が、その符と共に千草を弾き飛ばしてしまった。

「あぷろぺら――っ　へぶっ！！」

奇声を上げてすっ飛び、壁まで叩きつけられてしまう。

捉えて千草の背後を洗おうとの判断の為であろう、刹那の剣には殺傷能力はなかった。それと護符の残りがあったお陰であろう、千草には怪我そのものはなかった。だが、ダメージが全くない訳ではない。

呪符も切れたし、何より足元はふらついていてとてもじゃないが戦いなど続けられようも無い。

それに……

「……ち…し……も」

「はぁはぁ……な、なに……？」

異様な気配を感じ、息を荒げ、胸を隠したまま辺りを見回す千草。

そして、見た――

「ひ……っ？！」

「チチ尻ふとももも……」

頭巾の奥で眼をギュピーンギュピーンと輝かせるバケモ……いや、横島という怪人を。

「尻乳太股ぉおお――っ！！」

「あひぃ――っ！！！」

ばぎんっ！！

ガラスを叩き壊すような鈍い音が響き、ついに横島の自由を奪っていたネギの魔法が木っ端微塵に弾け飛んだ。

「なっ？！」

眼を見張って驚くネギ。

ついこの前、彼は真祖の吸血鬼と死闘を演じた折、彼女の従者が装備していた結界解除プログラムによって戒めを解かれた事がある。だが、今の現象は全くの別物だ。

怪人は、何と力ずくで戒めを内から破壊したのである。

それは煩悩の集中によってなせる業。
つーか、霊能力に目覚めた当初の力でも彼は試合用の結界をアッサリぶち抜いた経験があるのだ。
この程度の戒めなど、彼の言うように大した事は無いのかもしれない。

まぁ、力ずくで魔法をぶち壊されたシーンなど至近距離で見たら堪ったものではないが。

現に千草はまたしてもペタンと座り込んで幼女のように震えてたりする。

だが横島のボルテージが上がったのも無理はなかろう。
何せ“向こう”でも絶対に起こってはならない事が発生したのだ。

―色っぽいねーちゃんの全裸になるシーンが目の前で発生した―

二十七歳という落ち着きを持った歳であろうと、ちぐはぐな理性を“抱えてしまっている”今の横島の煩悩パワーなら『大人の思慮』などというフタなんぞカップ麺のフタほどの力も無い。

そして手負いの飢えたヒグマにも勝る怖いヤツが今、獲物を見つけちゃったのだ。

「フー……フー……」

「あ、ひゃ……ひぃ……」

正に野獣とエサ。

逃げようにも腰が抜け切っていて、立つより前に粗相が先といった按配。

その構図、毛刈りされた　かよわい子羊が血に飢えた手負いの赤カブトと出遭ったようなもの。ぶっちゃけどうしようもない。

大魔神　横っちの前では彼女程度なんぞ単なる小娘という事か。

危うし千草。

心身共の貞操は風前の灯だ。

「やれやれ……結局こうなってしまうでござるか……」

しかし、その救いは意外なところからやって来た。

「Ａｃｔａ（あくた）　ｅｓｔ（えすと）　ｆａｂｕｌａ（ふぁ～ぶら）．！！」

慣れない言葉使いで実にたどたどしくはあったが、その＜呪＞が紡がれた瞬間、横島のバンダナに縫い込まれている刺繍が赤く輝き、

「へ？
あ、あ〝あ〝～～～～っ　へぶっ！！」

横島の気力が全て奪われ、すっ転んで顔面から地面にぶっ倒れてしまう。

ボゥン！！

「わぁっ！？」

「きゃっ？！　な、何なの？！」

「く…っ？！」

唐突な横島の転倒に全員が呆気にとられた瞬間、ネギたちの近くに煙玉が炸裂し、皆の視界が奪われる。
その隙に飛び出して来た影が倒れた横島をかっ攫うとその場を離れて飛び去っていった。

視界を完全に遮った煙幕が晴れた時、後に残ったのは――

ネギと明日菜、剣を握り締めたまま様子を窺っている刹那。
何者かに当身を食らって眼を回す千草と、眼鏡を捜しまわっている月詠。

そして、刹那の腕の中で無事を確認する事ができた木乃香……の六名のみ。

「え、え～～と……これって……」

「ま、まぁ、何にせよ、このかは助かったわけ……なのかな？」

「……そ、そうだ！　お嬢さま！！　このちゃんっ！！！」

慌てて刹那の腕の中で意識を失い続けている木乃香にネギと明日菜は急いで駆け寄っていった。

――木乃香誘拐事件“第一夜”は、こうして未遂に終わったのである。

後編（後書き）

修正版　七時間目、終了です。お疲れさまでした。

千草の貞操は無事に済みましたが、ホントはもうちょっとピンチにするルートでした。止めましたが。

以前にも書いたんですが、この夜の話、削ってはいけないシーンと何とか削ってもいいシーンがあるので仕分けで散々悩んだ話でした。

何せ話の元サイズは其々が１００ｋｂを軽～く超えてましたしね。

横っち大活躍でしたらネギが弱体化しますから、是か非でも戦わせなきゃいけませんでしたし、かと言って闘わせすぎると旅行が中止になりかねませんし、ネギが頑張りを見せないと刹那が彼を信用してくれません。

文を直して直して……こーゆー話になってしまいました。

次はほんのちょっと。

僅かだけ変わります。

だから今回の更新はここまで。キーが遅くてすみません。

そういう訳で、続きは見てのお帰りです。

ではでは～

本文

逃した獲物は大きかった――とはよく言うが、眼鏡ねーちゃんという獲物を狩れなかったのはかなり痛かった。

横島忠夫という男は頭に血が上り易い代わりに下がるのも早い。よい意味での熱しやすく冷め易いという見本のような男である。

が、事が煩悩に関わってくると話は別。

横島家の血が呪われているのかどーかは不明であるが、女っけが無いと死んでしまうかもしれないアホタレな特性を持っている上、ようやく発散（？）できる対象を見つけたというのにナニも出来ず引っ張リ戻されている。

その際にナゾの魔法道具によって鎮静化させられ、少年少女の前でノクターン的ワールドに入らずに済んだのは……確かに感謝しても仕切れない程だと言えよう。

実際、楓に対して感謝の土下座衛門と化していたし。

しかし煩悩というか、ぶっちゃけ性欲は燻り続けている上、周囲は美少女ばかり。

それも上級レベルの女の子ばっかが周囲にいるのだから居た堪れない。

――これだけ隙ばっか見せてる方が悪いに決まってんだろ？
犯られたって文句言わねーよ。

と、本音が囁き、

（まてや！！　せめて和姦に持ち込なアカンやろが！！）

と悪魔が助言。

【お待ちなさい。未成年の少女に罪の意識を持たせてどうするのです。
ここは一つ、無理矢理襲って自分が罪を被ってやるのも情けでは？】

と天使が提案し、

『せ、せめて優しくしてあげましょうよ～』

と仏心が――

「……って、待たんかーっっ！！
なんやおどれら　そろいもそろってオレを陥れようとしくさってからに！！
幾らその葛藤がテンプレいうたかて限度かあるだろーが！！」

――いやだってよぉ……

『む、無茶ですよぉ』

【アナタ（ワタシ）が性衝動を止められる訳が無いじゃないですか】

（賭けてもいいですよ？　あなたでしたら一年以内に手を出すと）

「じゃかぁしっっ！！

オレはそこまで外道とちゃうわーっっ！！」

横島（本人）がそう絶叫すると、悪魔やら仏心達は顔を見合わせてアメリカンなジェスチャーで肩を竦め、ふー…ヤレヤレというリアクションを見せた。

【自覚なき者は救い様がありませんね。

あ、ワタシも手を出す方に賭けます。

最初のお相手は楓サンに……そうですね。負けたらミカミさんに罵詈雑言を浴びせてもいいですよ？】

（むむ？　だったら私も賭けを変えて古ちゃん……ではなく、意表をついてまだ見ぬ少女にしましょう。

その娘とスるのに賭けます。負けたら隊長さんを年増と罵ってさしあげましょう）

「な……っ！？」

――んじゃあ、オレは最初は３Ｐに賭けるぜ。負けたら『百合子母さんに罵詈雑言浴びせる』な。

「…っ！！？？？」

『じ、じゃあボクは、ハーレム作って酒池肉林に……えっとぉ……“小竜姫様に向って貧乳と罵る”を賭けますぅ』

「ちょっ、おま……っっ！？」

本人が動揺しているのを他所に、大穴だなぁとか、大きく出たな等と和気藹々としている。

ちゅーか全員手を出すと確信しているご様子で、それは横島のアイデンティティの全否定をも意味していた。

それは流石に黙っていられない。

「いい加減にせーっっ！！
オレはそこまで堕ちてへんぞーっっっ！！！
それやったらオレは手を出さんに全賭けじゃあっっ！！
ンな不確定未来なんぞオレの全てを賭けて否定する！！！」

――『（【あ、それ無理】）』

間髪いれず否定する本心たち。

流石にロリ否定という金字塔を全否定されればブチキレるというもの。高級メロンを思い出させるほど筋を浮かべて突っ掛かっていこうとした。

そんな彼の顔の前に掌が突き出され、

だって、それ見たらお前の言葉なんぞ信じられんぞ――と告げた。

え？　と示された指に従って恐る恐る振り返ると……

「ん～……横島どのぉ……」

「ろうしぃ～　えへへへ……」

横島が寝ている布団の左右に、

旅館の浴衣を肌蹴させ、

明らかに行為に及んだ後の二人の――

「ぬ　わ　ぁ　あ　あ　あ　っ　っ　っ　っ！！！？？？」

思わず叫び声を上げて飛び起きた横島。

追い詰められた兵士宜しく、周囲をせわしなく窺って旅館の布団で寝ていた事に気付き、ようやくホッと胸を撫で下ろしていた。

「よ、良かった……夢オチやったんか……

チクショウめパターン化されたネタにかましやがって……」

等とブツクサ文句を零してはいるが、えがったーえがったーと涙すら流して安堵しているのだから、どれだけショックが大きかったか解るというもの。

チンケなプライドに縋る事無くヨロシクやってればこんなに苦しまずに済んだものを。

「じゃかぁしわっっ！！」

……等と地の文にツッコミすら入れてるのだから相当　追い詰められていたのだろう。

傍から見れば往生際の悪い無駄な足掻きであるし、笑える事なのだが……

「大丈夫でござるか？　かなり魘されていたでござるよ」

「な、なんとかな……」

その焦燥具合を心配したか、横で寝ていた少女も身を起こして彼の背を撫でて介抱する。

その気遣いに礼を言いつつ、彼女が水差しから注いでくれた水を受け取ってそれで咽喉を潤し――

ぴゅ～～～と鼻と耳からその水を噴いた。

「えと……カエデ……ちゃん？」

「何でござる？」

建付けの悪いドアの様にギギギと軋んだ音を立てて少女に顔を向ける……と、やっぱり見慣れた楓の姿。

ついでに言うと浴衣の胸元はかなり乱れておりその豊満な胸も露出しているし、虫に食われたような赤い痕もポツポツ見えている。

自分らが寝ていた布団の周囲にはクシャクシャになったティッシュが転がっているし、

何より寝ていた布団の中央辺りに――

チョコレート色の染みが……

「ぬがぁあああああああああああああああああああああっっっっ！！！！！」

――こうして横島は、二段夢オチというものを体験したのだった。

■八時間目：ヒツジ達の沈黙

「――それでは麻帆良中の皆さん。『いただきます』」

いただきま――す

笑顔でネギが挨拶の掛け声をあげると共に、少女らが一斉に手を合わせてから箸を伸ばす。

まぁ、それを待たずに調味料に手を伸ばしている少女もいたが、それでも行儀は良い方だろう。

何時もは真面目不真面目を問わず元気が良い３－Ａの中で、特ににぎやかな連中が精彩を欠いていた事も一因として挙げられる。

昨日、音羽の滝の酒混じりの水を飲んでしまった生徒らは二日酔いの所為か、はたまた飲み慣れない物を飲んでしまった所為か定かでは無いが余り騒いでいないのだ。

「せっかく修学旅行一日目の夜だったのに。悔し――っ！！」

……いや、騒げなかった為に燻っているのかも……

「今日どこ行くんだっけー？」

「限定ストラップのカワイイのあるかな？」

「鹿人間はちょっとねー」

「そー言えば、朝方ヘンな叫び声しなかったー？」

等と　きゃいきゃいとはしゃぐ黄色い声に苦笑を浮かべつつ、ネギも味噌汁に手を伸ばしていた。

物思いに耽っている顔はその実年齢より大人びて見えなくもないが、まだ箸に慣れていないのかスプーンで食べているのが何だか微笑ましい。

「ネギくん。ちょっと眠そーやな――♪」

「あ　このかさん。おはようございます」

木乃香の奪回に走り回り、尚且つ闘いが終わった後、壊したものを魔法で片付けたりしてけっこう忙しかったのであるが、自分の仕事をきちんと弁えている彼はそれを顔に出していない。

それでも気付く木乃香は感心すれば良いのだろうか。

「ゆうべはありがとな♪
何やよーわからんけど、せっちゃんやアスナと一緒にウチをたすけてくれて」

「い…いえ……
僕はほとんど刹那さんについてっただけで……」

訳が解からずとも感謝してお礼を言うのは木乃香の長所だろう。

彼女は裏の事情を全く伝えずに育てられている事もあって大した説明は出来ていないのだが、それでも気にしていないのは人間が大きいのか天然なのか。

ネギの肩でカモも『細かいこと気にしない人で助かるぜ……』と安堵していた。やや呆れもしているが。

「……あ。せっちゃん」

木乃香がふと顔を上げると、目立たぬよう朝食をとっている刹那の姿が入った。

当然というか、刹那はギクリとしてお盆ごと自分の食事を持ってそそくさと席を立つ。

「あんっ　何で!?
恥ずかしがらんと一緒に食べよー」

そして木乃香はそんな刹那を追う。

「せっちゃん　何で逃げるん――?!」

「刹那さ――ん」

別に恥ずかしがっているわけではないのだが、そんな事を知る由も無い木乃香はお盆を持ったまま刹那を追い、
昨夜、刹那に離れられた時の木乃香の表情を憶えているネギも刹那を追いかける。

「わ、私は別に――……」

一緒にいられない説明をする事ができない刹那は、ただ逃げる事しかできないでいた。

だが、当人らにとってはシリアス気味で様々な想いを秘めているそれであるが、傍から見れば奇妙で楽しげな追いかけっこに過ぎない。

普段はクールな刹那の慌てふためいている流石の３－Ａのメンバーでも見た事が無いらしく、自分らが酔い潰れている間に何か面白そーな事が起こったのだと確信をしたクラスの問題児らは今晩こそ騒ぎまくることを決意するのだった。

「へ？　逃げられたでござるか？」

そんな騒動が起こっているテーブルよりちょいと離れた席。
楓は思わずマヌケな声を出してしまった事に気付き、箸を持ったままの手で自分の口を押さえた。

幸いにも誰にも聞き取られていない……というより、刹那らの追いかけっこに集中していたので誰も気にすらとめていないようだ。

ホッとして口から手を離し、楓は話を聞いていた相手にもう一度顔を向けた。

その少女は楓の困惑等どこ吹く風で、落ち着いて味噌汁を啜り、『ちょっとダシの旨みが出切っていないネ』と辛口の評価を下してたりする。
だが楓の視線に気付くとニッと微笑み、味噌汁の椀をコトリと盆に戻してから口を開いた。

「そう……カエデが当身を食らわせ、横島サンをかっ攫って逃げた後、ネギ先生らもアノ女を捕らえようとしたヨ。
けど――」

楓の左側で落ち着いてほうじ茶の入った茶碗に手を伸ばしつつ話す少女……超　鈴音によれば、楓が立ち去った直後に木乃香を誘拐しようとした曲者……千草の足元に水が湧き出し、気を失った彼女と落とした眼鏡を捜し続けていた剣客……月詠を吸い込んでいったのだという。

「考えられるのは一水を触媒とした転移魔法一くらいネ」

と超は自分の見立てを述べた。

「ダシが淡い上にお茶が熱過ぎるヨ！」――と舌を火傷しつつ……

そんな超から視線を外し、チラリと刹那を追って走り回っている木乃香の姿を目に入れた。

彼女は逃げられるという事には辛そうであるが、別に自分を嫌っている訳では無いという事に気付けたお陰だろうか、どこか機嫌が良さそうにも見える。

昔のように仲良く一緒にいられたら……という想いから幼馴染を追い回しているに過ぎない、どこにでもいるごく普通の少女の姿だ。

しかし横島の話によると、彼女は人間としては中々な魔力が秘められているのだという。

穏健派と急進派の派閥争いが関わっている。というのなら、ネギ達が言うようにその魔力を利用しようと企む輩の仕業となるのだが……

最近、鍛え上げられてきている彼女の勘が違和感を伝えてきている。

何と言うか…その足並みの揃わなさからしっくりしないのだ。

超によれば、水を触媒とした転移はけっこう高等な魔法らしい。

とすると、関西呪術協会が、そんな西洋魔法使いを雇っているという事となる訳で、

そうなると関東の魔法協会といがみ合っている理由も噛み合わなくなるし、閉鎖的…と言うほどではないにせよ、伝統を重んじる者達がそんな輩を雇うというのも……

「う～む……」

段々煮詰まってきたので、楓は頭を振って一度情報を組み直す事にした。

まず、最初の西の妨害工作はヘッポコの一言に尽きる。

しかし、ネギの実力は兎も角として、横島と明日菜の不条理さによって誤魔化されているが、式神の力は決して弱くは無く油断何ぞしてよい相手ではない。

大体、月詠と名乗った剣客の腕も“本物”で、刹那同様に神鳴流の技を使っていたのだが、あの戦い方は刹那のような人対魔ではなく、人対人に特化しているように思われる。

昨夜あのようなヘッポコな負け方をした以上、次からはもっと慎重に事に及んでくると思われる。ならばに刹那にとってかなり性質の悪い相手という事になるだろう。

そして今、超から聞いた話によると、横島が懸念していたようにかなり“やる”であろう実力者の魔法使い（？）も伏兵として潜んでいた。

何が厄介かというとその引き際の良さだ。

あの場に居た中で実は一番厄介な相手である横島は、楓が握っている“暴走対抗手段”によって無力化し、尚且つ彼女がかっ攫って行ったのであの場に残っていたのはネギと刹那、そして明日菜だけ。

つまり、どれだけ才能があろうと素人二人もいる状況なのだから如何様にも出来た筈なのだ。

だが、そいつは撤退を選んだ。

チャンスだったにも拘らず“逃げた”のである。

一見して好機なのだが、それでも逃げたのは横島に次いで自分のようなイレギュラーが出現した為に他の傍観者を警戒したのだろう。

一端退いて他の手を使う（或いは考える）ような冷静さと慎重さを持っているとなると……間違いなくプロだ。

それにもし、あの場に初めから潜んでいたとすると、横島も自分もそんな第三者の存在を知覚できなかった相手となる。

その上で完全に引き際を見極めて撤退を選んだのだから只者とは思えない。

『もしや…あの眼鏡女（千草）の目立ちまくるヘンな行動は何かの陽動だったでござるか……？

それとも彼女そのものが囮とか……或いは威力偵察……う～む……』

等と、その思惑を探る楓であったが、実のところ相手のちぐはぐな行動が作用しているだけだったりする。
その上彼女は、何だかんだ言っても経験が足りないので裏を読み切れないのだ。

単に横島にかき回されただけという説もない訳ではないが……簡単に思考が行き詰ってしまうのも仕方のない事だと言えよう。

ぽんっ

「おろ？」

――と、そんな風に首を捻ってウンウン唸っている楓の肩に誰かが手を置いた。

楓が思考を中断し、その手の主の方へと顔を向ける。

「カ～エ～デ～～……」

「あ……」

眼を三角にして自分を睨んでいる中華娘、古がそこにいた。

「や、やは、古。何の用でごじゃるか？」

考えてみれば同じ班。尚且つ古が班長なのだ。
同じ席で食事を取るのは当然であり、更にここでこんな話をしているのだから彼女の耳に入るのも当たり前の事なのだ。

それに良く考えてみれば楓は昨夜の事を古に伝えていない。
楓らしくない大ポカであるが、今更言ってもしょうがないだろう。
その所為で何だか焦ったりしている楓であるが、それを必死に隠して笑顔に努めて問い掛けていた。

……まぁ、誤魔化しきれるとは思っていないのだが。

「私が頭痛でウンウンいてた時に、ナニか老師と楽しそうにしてたみたいアルね～～……」

「え、いや、その、べ、別に楽しいコトしてたわけでは無いでござ……」

「ほぉ～……全然、楽しくなかたと……」

「あ、いや、全然というわけでは……」

言ってしまってから『墓穴っ！！』と自分を叱咤するももう遅い。

様子を見守っていた超がおもむろに箸を持ち、かなり行儀が悪いが空になった茶碗を、

カ～～～ン

と叩いた。

「カエデェ～～っ！！」

「わぁ～っ！　で、殿中……もといっ、朝食中でござる！！」

茶碗をゴングとして突如として始まった異種格闘技戦。

忍者対拳法家という珍しい好カードに生徒らは色めきたって食券を賭けたトトカルチョまでおっ始めるありさま。

その戦いは激怒した鬼の新田教諭の雷が落ちるまで続いたという。

―でも、漬物はおいしいですねー

「そうですね～　塩分濃度が絶妙です」

「どこの店のモノか調べて直接契約を結ぼうかネ」

飽く迄も超一味だけは平和だったが。

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊

「あ痛ぁ……

あのボウズ、眼鏡ねーちゃん逃がしちまってたのか？」

「そーみたいアルよ」

そんな事を言いつつ石畳の広がる境内を何だか仲良さげに歩いている二人……横島と古。

古は制服であるが、その横を歩いている横島は又しても飴の力を借りて子供の姿をとっており、子供用のジーンズとTシャツにジージャン。そしてトレードマークのバンダナ姿に何故か水筒を持っている。

ぱっと見には何だか仲の良い姉弟が歩いているようにも見えてしまう。

女生徒に混じって歩く男の子というものはけっこう目立つが、お子様必須アイテムである水筒を肩から斜めに引っ掛けているので遠足に来た子供かな？　等と勝手に周囲の人間は納得していたりする。

麻帆良の女生徒らは良くも悪くもあまり深く気にしない性格をしているし、他の人間は通り過ぎるだけなので結局は然程目立ったりしていない。

ちゃんと手を繋いで歩いている事も一因であろう。中等部の少女と……であるが。

横島もこのくらいは……と我慢して手を繋いでいるし。

いや、古と手を繋ぐのがイヤなのではなく、何だかしらないがみょ～な不安に駆られるというか、何かしらの前兆を迎えそーというか……何だか説明の仕様が無い予感がしていたのだ。

何か酷い夢見た気もするし……

それに人前で女の子と手を繋ぐのはちょっとこっ恥ずかしい。まぁ、それは妥協できたのだけど。

幸いにも拳法の修業で鍛えられている少女の手は思っていた以上にゴツゴツしているので然程ドキドキしないですんでいるが、ここ

に“然程”という表現が混ざってしまっている時点で何だかファール気味で危うい。
横島の心に住まうジャスティス（ロリ……否定？）も、＜仲良き事は美しきかな＞と色紙に一筆書いてナスと共に飾ってるし。

二段夢オチに続いて、見た悪夢を忘れるというパターンまで踏み、それでいて懲りずにじょしちゅーがくせーと仲良くお手て繋いで歩く事に慣れつつある横島。

――順調に彼の中でナニかが変わりつつあった。

そんな少女らの周囲を謎の生物が徘徊している。

その生物……つぶらな瞳の奥で『何やコイツ。シメんぞゴラァ』とメンチ切っており、
放っておけば節くれだった物騒な角が生える物騒な野獣で、
マキビシ宜しくその辺に糞をしまくり、人の通行を邪魔しまくりながら
『ワれ。エエもん持っとるやないけ。ちょ、ワシに食わしてみいや』という眼差しで持って煎餅を強請る（関係ないが、“ねだる”も“ゆする”も同じ字だなぁ……）獣たち。

そいつらが放し飼い状態で人間に怯える事無く、我が物顔でこの場所をうろつき回っていた。

……いや、ぶっちゃけ鹿であるのだが。

ここは奈良公園――

太政官布達により明治１３年開園し、正式には『奈良県立都市公園　奈良公園』という。

見た目にもだだっ広いその敷地総面積は５０２ｈａもあり、一般的に奈良公園と呼ばれているのはこの周辺社寺を含めたエリアの事で、それら（興福寺や東大寺、春日大社や奈良国立博物館等）を含めると総面積は大体６６０ｈａに及ぶ。

その公園内には多くの国宝指定・世界遺産登録物件等があり、年間を通じて日本国内のみならず外国からも多くの観光客が訪れ、日本を代表する観光地の一つとなっている。

特に奈良の大仏や鹿は国際的にも有名で、奈良観光のメインとなっており、当然の様に修学旅行生である彼女らのコースにもここは含まれていた。

修学旅行二日目の日程は、この一日、奈良を班別行動で見学する事になっているのだ。

幸いネギは木乃香のいる五班と行動を共にしているので後を付いてゆくだけでよい。

だから横島らは親書と木乃香を守護すべく刹那らの後を歩いており、その道々で彼は古から事の次第を聞いていたのだ。

「しかし……鈴ちゃんて何モンなんだ？
魔法使いじゃないらしいけど、“裏”の事も知ってるなんて」

「さぁ？　超は何でも知てるから不思議じゃないアルよ」

「いや、知ってる事自体が不思議なんだけど……」

超が何故横島ら“裏”の事を知っているかは定かでは無いが、彼女が昨夜の事を知っていた理由は簡単である。
“機械”を使って覗いていたのだ。

二つの無音ローターで飛行し、熱光学迷彩と魔法ステルスまで備えた1リットルのペットボトルサイズのカーキ色のイカス奴。
自律型の小型飛行偵察機、『見える君』。
言わば科学で作った式神である。

木乃香が攫われた際、異変に気付いた葉加瀬が偵察用に飛ばしたらしい。

超一味はそれを使って様子を窺っていたそうである。

「て、偵察ロボなんぞ持っとるんかい……」

「まぁ、超だし。
ナニ作てもおかしくないアルよ？」

「そ、そーゆーもんなんか？」

まぁ、別に魔法の件を吹聴する様子も無いらしいのでその事は良いとしたのであるが、

「……ん？　て事は……」

そんな偵察機械で様子を窺っていたという事は、当然ながら自分の狂態も見られていたという事で――

「んひぃ～～～～っ！！　お願い忘れて私～～～～っ！！」

「うわっ？！　ど、どうしたアルか？！」

「い～～～や～～～～～～～っ！！！」

流石に頭が完全に冷えてしまえば自分の行為が如何に変態的であったか理解できてしまう。
テンションが上がり過ぎた事もあり、ハイになっていたと言えば

それまでであるが、ああいう事をやっておいて旅の恥はかき捨てとばかりに記憶が消えてくれるはずもない訳で……

当然、そんな奇行……つーか狂態を女子中学生に見られ続けられたとい事実は横島のシャイでヘタレな部分を責め苛んでいた。

カズイ～～カズイ～～～っ　オレの記憶を消してくれ～～～～っ!!　などとイタイ事を言い出して悶える横島に古はヤレヤレとアメリカンなジェスチャーで肩を竦め、

「吼っ！」

ドずむっ

「ぐぼっ？！」

脇腹に当身という言葉から程遠い当身を入れ、
何事も無かったかの様に、白目をむいて失神する彼を引き摺って歩き出したのだった。

近くにいた何も知らない一般生徒らがドン引きだった事は言うまでも無い。

実は横島、昨夜の奇行の所為で楓にかなり怒られている。

セクハラを止められない理由はあまりに説明し辛いので横島はひたすら頭を下げ続ける事しかできなかった。
だから横島は奥義“天空土下座”から“飛び込み前転トリプル土下座”まで技を繋げ、そのまま這い蹲ってただひたすら謝り倒す事しかできなかったのである。

所謂、＜正直、スマンかった＞パート2だ。

何とか朝方には謝罪を受け入れてくれたものの、その楓は今日は横島の横にいない。

横島は『まだ怒っとるんかなぁ……トホホ』とか思っているようであるが、別にまだ怒りが続いているというわけでは無い。
単に役割分担を行った為である。

楓が本気で駆けると流石の横島でも付いて行けなくなる。まぁ、楓の後姿に萌えたりしていれば話は別であろうが。
そして横島は護衛……それも対象が女の子となると人智を超えた底力を発揮する。

だから今日の彼女はネギの護衛を受け持ち、木乃香の護衛の“支援（刹那がいるから）”に横島……と古とに役割を割り振ったのである。

幸いにも超達（同じ班の美空は知らんが）は横島の受けた任務まで知っていたので、『ワタシ達の事は気にせず、横島サンを手伝えばいいヨ』と言ってくれている。

だから気兼ねなく古は横島と手を繋いで一緒に歩いていたのだ。

――というのは表向きの事情である。

真の事情は、

「昨日は楓が一晩老師と過ごしたから、今日は私の番アル！！」

という事らしい。

何だが人前で言われるとエラい誤解を受けそうなセリフである。
別のテーブルであり、尚且つネギらの騒動の側にいて聞こえる筈も無いのに、早乙女ハルナの眼がギュピビーンと光っていた気もするし。

しかし楓からしてみればそれは単に言い掛かりだ。

別に横島とそんな艶っぽい事はして……無かったはず。

いや？　アレは……
いやいやいや、あれは……違うでござる。
そう、違うでござるよ？

アレはただ……ええ～～と……その、何でござろう。そう、アレ。いや、そーじゃなくて……」

「アレって何アルか～～っ？！」

「ぬぅっ？！　ウッカリ声に出してたござるか？！」

等と楓はパートナーと同じ様なポカをかまし、言い訳が難しくなるような事態になり、

「だたら今日の自由行動の時は、楓がネギ先生の護衛について、古が横島サンを手伝えばいいネ」

と、超が執り成したのである。

しかし、古としては文句は無いのであるが、楓としては納得しかねていた。

何せ超本人が語ったような厄介な相手が向こうにいるのだ。そこで戦力を分けるといのは正気を疑う策なのである。

「でも、相手がプロなら戦力の立て直しを先にする思うネ。
式神使いと剣術使いのペアが役に立たなかたなら、少なくともう一手……或いは二手目を用意する必要があるしネ。
あの場で引いた手並みから、ブリーフィングも無しに襲撃を掛

けるとは思えないヨ。

それに……」

そこで一旦言葉を切り、くいっと顎である方向を示す。

するとそこでは女の子に纏わり付かれて混乱の極みにあるネギに、

「あ……あのネギ先生！！

よ、よろしければ今日の自由行動……

私達と一緒に回りませんか――！？」

一人の内気な少女がなけなしの勇気を振り絞っていた。

そして、ネギは五班と行動を共にする事となり、めでたく（？）楓はネギ、古は横島と共に刹那の支援を行う事と相成ったのである。

何か燻っている楓同様、横島も何だか納得しかねる状況であった。

とはいっても戦力の分断云々の真面目な話では無く、もっと色っぽい事で……まぁ、ぶっちゃければせっかく麻帆良から出たというのに、女子中学生とずっといっしょだという事に――である。

いや、別に古や楓が嫌いなわけではない。

妙にタダキチ（横島）の境遇に同情してくれている新田教諭と一緒にいるのは勘弁であるし、せっかく京の都にいるというのに野郎と一緒なのは鬱陶しい。

状況が状況である為、舞妓“さま”に会いに行く事も叶わぬのなら、せめて美少女と一緒にいるしかないではないか。

しかし、横島本人はあまり気付いていないのだが、彼は、

『楓ちゃんや古ちゃんといると何だかウレシイよーな気がする』

のである。

それが納得しかねている原因の大元だったりするのだ。

目の前にはっきりと理由が鎮座しているというのに、それを見てみぬフリが出来る彼にはもはや賞賛を贈る他あるまい。

ともあれ、“仲良し姉弟が如く”という大義名分でもって無理矢理自分を納得させ、おてて繋いで仲良く歩く事を妥協する横島であった。

決して――

決して、もし楓といたら、胸元を肌蹴て艶っぽく微笑む彼女を幻視してしまうから、相手が古なのでホッとしてる事なんぞ……無い。

無いのだ。

多分……

「……」

「ど、どうしたの？　古ちゃ……くー姉ちゃん」

「……何故か今、老師とカエデに殺意を覚えたアル」

「何故に！？」

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊

「わ――っ　ホントに鹿が道にいる――ッ」

「へ――
結構大きいわね」

そんな横島と古……そして物陰からネギを見守っている楓らの前で、当の本人らは楽しそうに園内を歩いている。
ネギのその表情は神社仏閣を堪能していた昨日とは違い年齢相応のもの。

年齢詐称を疑っていた横島としては首を捻るほどに。

「スゴイスゴイ　見てくださいアスナさん……わあ―」

こんなごく自然に多くの鹿が歩いているのを見てはしゃいでいたネギが、餌をねだる鹿に齧られたり、それを見ていた明日菜に『ガキね――』と呆れられたりして中々に微笑ましい。

無論、横島もネギを笑いつつマネをしてあえて齧られるというベタな芸人魂を古に見せたりしている。

血を滲ませてまで笑いをとるという芸人根性を感心すればよいのか、呆れ果てれば良いのか微妙なところであるが、それ相応の笑いは取れた事を横島はけっこう満足していたりする。

そんな無意味な芸人魂を見せている彼と古がいるのはまぁ良いとしても、別の班である筈なのに自分達に着いて来ている事が気になったのか、何時もはそんな事を気にしないハズのハルナが、

「それにしても……その子もそうだけど、なんで古までこっちに来てんの？　超一味は別ンとこ回ってるみたいだし……」

等と質問を投げかけてきた。

「へ？　あ、あの、この子はワタシが面倒見る事になたアルよ。だから一緒に連れて来てるネ」

「そーなの？
ん？　でも、古ちゃん、二班の班長でしょ？　班行動別にしたらマズいじゃん。
何でここにいんの？」

「う……」

細かい事を気にしない麻帆良の生徒であるが、こーゆートコにはやたらと気が回るのだろう。
それに元々、古は嘘が上手くないので誤魔化しが下手だった。

答えに窮した古であったが、この場には言い訳を罪悪と考えない男がちゃっかりいる。

「あんな。流石にオレ一人でおったらアカンねんて。
せやからセンセーの誰かが付いとらなアカンのやと」

「ふ～ん……
あ、だったら源先生……え～と、ホラ、眼鏡かけててオッパイ大きい女の人知ってるでしょ？
あの先生と一緒は駄目なの？」

一瞬、それもええかな～とか思った横島であったが、繋いでいた古の手に万力のような力がやどり、危うく握り潰されかかってそういう想いが消し飛んでしまう。
何か頬を膨らませていた古に何とか許してもらい、解放された手を涙目になってフーフーと息を吹きかけている。

そんな横島を不思議そうな目で見守っているハルナの視線に気付き、不自然さが感じられない動きでその手を後ろに隠しつつ、

「あの乳……もとい、女の先生な、保健の先生みたいな事もせなアカンから、あんまオレにかまえんのやて。

あの眼鏡のオジさん先生は……なんか怖いし……」

と説明を続けた。

完全なアドリブであるというのに、何とも上手い言い訳である。

「じゃあ、瀬流彦先生は？　ホラ、あの背の高いけっこーカッコイイ先生」

「……男前は好かん……」

アドリブも何も無い、ぶっちゃけた横島の本音。

その答えに、ぷ…っと彼女は吹き出し、同じ班の綾瀬　夕映は呆れて溜息を吐いた。

いっちょまえに男の子してるじゃんとハルナは笑って納得する。

確かにその消去法から言うとネギと共にいるのが良かろう。

それにネギとは歳も近い為、あまり気にせず付いて回れるだろうし。

「なるほどね～～　だから古はお目付け役を授かったって訳か」

「そ、そうアルよ～　だから班長は超に代わてもらたアル」

古は内心、ふう～……と安堵の息を吐いて冷汗を拭っている。

よくもまぁ、ここまで言い訳が出来るものだと横島に感心もしているが。

ハルナと夕映はというと、そんな事より友達の事が重要なので、二人は勇気を持ってネギを誘った宮崎のどかに手痛い……いや、手厚い祝福を送っていた。

その後姿を確認し、刹那らからの視線も自分らから外れたのを見てから、チラリと横島の様子を窺えば、

「ん……？　姉ちゃんも食べるか？」

と、本当の七歳児の様に持っていた菓子……どこで買ったのかチョコバーを勧めてくるではないか。

更に『姉ちゃん』とキた。

よくもまぁ、ここまで子供になり切れるモノである。

「いや、ちょっとな……こーゆー不条理な目に遭うの慣れてるんだ……」

そんな古の表情に気付いてそう説明してやる横島であったが、ちらりと煤けた目で視線を逸らす。

思い出すのがナニであるのか、説明するのがナニであるのかは定かではない。

ふと前に眼を戻すと皆が前進を再開したので古も『おーい雲よ～

…』とか言い出しそうな横島の手を引いて歩き出した。
何だか気分は介護人か保母さんだ。

そんな複雑な想いを持った少女に手を引かれつつ、横島もまた複雑な想いを廻らせていた。

昨夜も楓に怒られていたのであるが、どうも精神が肉体年齢に引っ張られ過ぎている。

何だかんだ言っても実年齢は二十七歳。
十代の頃の押さえが利かない煩悩は“それなりに”鳴りを潜めていたし、場の空気を読む事も弁えられる様になっていた……ハズだ。

だが、昨夜のアレはどうだ?

以前の自分の行動そのままに、目的の為に手段を見失い、その手段の為に目的を忘れていたでは無いか。

そんな彼の暴走を止めてくれたものが、もらったバンダナ……

楓が近衛から対横島用に託されていたマジックアイテム。

それは聖具としても知られているかの有名な『マグダラの聖骸布』!!……の、粗悪なレプリカである。

びっしりと魔法呪式が施されている赤い布は、対になっている布

にキーワードを唱える事によって発動し、頭に巻かれている者から気力を奪い去って行くのだ。

横島の頭に巻いてある赤い布と同じ材質の、ハンカチサイズのそれは楓の左手首に巻かれており、あの夜暴走した横島の気力を奪って甚大な性犯罪を防止したというわけである。

因みに、発動のキーワードである“Ａｃｔａ（アクタ）　ｅｓｔ（エスト）　ｆａｂｕｌａ（ブラ）．”は、『活劇（見せ場）は終わりぬ』といった意味で、アウグストゥスの臨終のセリフだと言われている。

元々は収監された魔法犯罪者用の暴動鎮圧用に開発されたものであるが、暴動の意思を奪おうにもテンションを下げる事しか出来ず、尚且つ頭から外せば終わりなので意味なしとされてお蔵入りとなっていたものらしい。

近衛はどこからか手に入れていたそれを対横島暴走用にと楓に託したのである。

昨夜の場合、後一歩でも使用が遅ければル○ンダイブの奥義、天空ルパ○ダイブが千草に決行されていたかもしれない。

そうなるともはや１８禁～２１禁指定で早急にノクターン行きを強要された事であろう。

そんな昨夜の事を思い出せば思い出すほどゲンナリとしてしまう横島。

顔面を強打して痛かった事はどうでも良いし、ギリギリで止めてくれた楓にも感謝している。

いや…横島的にはその行動は間違いではないのだが、飽く迄もそれは十代の頃の話。

大人となった自分はそうがっつかなくともそれなり以上のオイシイ想いをしていた……ハズである。多分。

『やっぱ……まだ“穴”が塞がりきってないのかも……』

自分の――特に煩悩関係が情緒不安定である理由を既に理解している横島は、古に余計な心配をかけないよう内心で溜息を吐きつつ、彼女と共に茶店に突撃をする木乃香の後を追った。

『な～に悩んでるアルか……？』

だが、得てして思春期の少女というものは感受性が高い。

そんな横島の感情の波に古はとっくに気付いていた。

それに彼女は他ならぬ横島によって霊感を高められているのである。

身体に流し慣れてしまっている彼の霊気であるし、元々才能があった古だ。“揺らぎ”くらいは理解できるようになっていても不思

議ではあるまい。

だが悩みがあると理解は出来ても、その内容を聞けるかとなると話は別なのである。

確かに以前は感じられなかったが、横島と共に霊気のコントロールの修行を始めてから、そういう感触が何となく解かるようになってきてはいる。きてはいるが、早々簡単に聞く事が出来ないのだ。

いや、以前の彼女であればもっと安易に問いかけられたであろう。何時もの気軽さで、

「ナニ悩んでるアルか？　ワタシに言ってみるヨロシ」

とか言って。

修学旅行に出るちょっと前、例の周天法を使った修行の合間に、古は気軽に質問した事があった。

「そう言えば老師に付き合った女性はいたアルか？」

と――

彼女からしてみれば何気ない質問であるし、横島についてもっと知りたいという欲求の表れである。
楓も何気に耳をダンボにしていたし。

その時、彼は一瞬硬直したものの直に何時もの泣き言をぶちまけてその場を収めたわけであるが……脇で見ていた楓は兎も角、周天法によって霊気と直結していた古は、確かな揺らぎを横島の魂から感じ取っていたのだ。
それも深くて重い――僅かながら悲しみの波をも含んだ……

フラれた……とかではない事は何故だか理解できた。
それに毎日会っていて解かるが、彼の本質を理解した女であれば離れようとすまい。

別れた……でもなかろう。前述の理由もあるが、それにしては深すぎるし重すぎるのだ。

となると……

古は、珍しく浅はかな質問をした自分を責めた。

考えられるのは不幸な別れ――

自分の何気ない質問によって横島はその事を思い出してしまい、彼の傷痕を引っ掻いてしまったのかもしれない。
その事がトラウマのようになって質問し辛くなっているのである。

左側に眼を落とすと子供となった件の青年。横島。

大人しく自分を手を繋ぎ、その手を離す事なく自販機で買ったコーラを器用に左手だけで開けて飲んでいる。

物珍しげに鹿達を眺めているような外見相応の子供の自然な仕種をしつつも、護衛対象である木乃香とその護衛役の刹那に気を配り続けていた。

この年齢（今の外見の、では無く。本来の年齢）にしてこのプロの演技力。

そして自分が一発の拳も入れられない人外の回避力と、意思そのものを実体化させられる強力な氣の使い手。

十代にしてこの技量とは……一体彼はどういった人生を歩んでいたのだろうか？

そしてどれほどの悩みを抱えてきたのだろうか？

自分は強者との格闘経験はあっても、強者との死闘はまだ行っていない。

だから彼の想いを酌めないのではないだろうか？

だから自分に……ではなく、楓にだけはそういった事を語っているのではないだろうか？

ふう……と我知らず肩を落としかかったその時、古はハッとしてその事に気がついた。

『何で私は、自分とカエデを比べてるアルか……？』

ここにも悩める少女が一人　――――

チラリとタダキチに視線を送ってから、楓はネギに眼を戻す。

陰から影へ、影から陰へと移動し、ネギやカモはおろか、刹那にすら気付かれないよう楓は後を追い続けている。

それも極自然にだ。

気配を消している訳では無く、気配を周囲に紛らわせているだけなので、仮に見つかったとしてもそう疑われたりはすまい。

それほどの技量を持っているのだ。今の楓は。

『さてもさても……まさか横島殿との修業がこういった形で実を結ぶとは……』

楓は横島との周天法の“業”によって、自然の木々が放つオーラを認知できるようになっていた。

元々霊能力というのは“感じる”事や“観る”事から始まる。

楓は既に気配を察知したり消す事ができたりしていたので、その上から自然の気の流れを読み取り、それに合わせられるようになったのだ。

完全に気配を消すと、その場が切り取ったように感知できなくなるので逆に上級者相手では感知されてしまう事だってある。

今までの楓は、気配をぼかして不自然さを無くすという業を行使していたのであるが、今の彼女は風景の一部の様に周囲と融け込んでいた。

こうなると目に入れたとしても彼女だと認識できず、“居た”という事を認知できまい。

まさか唐突に隠行の技が一段上がるとは思いもよらなかった。

『これも横島殿のお陰……でござるな』

と、もう一度彼に視線を送ると、

ぎぢ……

突如として楓の氣が増した。

彼女の存在を知覚できず、その周囲にいた鹿が笛の音のような悲鳴を上げて逃げて行き、刹那が思わず反応して鯉口を切りそうになったほどに。

それに気付いた楓は慌てて気を落ち着かせて術を組みなおす。

フー……フー……フ――……

程なくして調われる呼吸。

周囲の気を乱す事無く、木々の気配とも同化できるリズムが戻ってくる。

何とか術を安定させると、楓はネギに視線を固定する事にした。

ネギから眼を離すと――

……いや、

今の横島を見ると何だかイラつきが止まらなくなる。

古と仲良く手を繋ぎ、彼女に微笑みかけている横島を見ると――

「あれ？　龍宮さん、どうかしたの？」

「いや……何だか急にバカを思い出して怒りが沸々と……」

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊

「せっちゃん……」

さらりとした長い黒髪の少女が淋しげに揺れている。

ぽつんと一人公園内に佇み、手に持った団子の紙皿の上に頬から伝わらせた水滴を垂らしつつ……

自分の事を嫌っていない……というのは何となく理解できた。

そしてその事はルームメイトであり、大切な友達である明日菜や、担任の子供教師であるネギも『絶対にそんな事はないっ！』と太鼓判を押してくれている。

だが、それとこれとは別なのである。

自分と話をしてくれていない。

目も合わせてくれない。

昔みたいに側にいさせても、いてもくれない。

そして理由も語ってくれない……

昨夜の事は訳が解からぬままに終わった事件であるが、確かに刹那は自分を助けてくれた。

そして心から無事である事を安堵してくれていた。

だというのに、一緒に食事をする事もないし、隣に立つ事すら許してくれない……

「ウチ……何かしたんかなぁ……」

知らない内に傷つけてしまっているのか？
或いは何か迷惑をかけてしまっているのか？

せめてそれだけでも教えてほしかった。

でも彼女は近寄る事すら許してくれなかったのである。

刹那には木乃香を危ない事に巻き込みたくないという想いと、自分の“裏”を知られたくない……つまりは知られて嫌われたくないという理由があった。

その想いが強すぎるのか、お互いの想いが同じである故か、それは綺麗にすれ違い、お互いを傷付け続けている。

刹那にしても裏に関わってそれなりの年月を送ってはいるのだが、その心は飽く迄も思春期の少女に過ぎない。
だから優しい少女の機微に疎いとしてもそれは罪ではないだろう。

幾ら心配してくれたとしても、幾ら気遣ってくれていたとしても、そこに隔たりがあれば拒絶と同じな事に気付けていないのはしょうがない事なのかもしれない。

木乃香はただ、目から流れる滴を紙皿に零す事しかできないでいた。

尤も――

「ねーちゃん」

「へ？　あ……」

いきなり声をかけられ、慌てて目元を拭ってその方向に眼を向けると、そこには一人の男の子。

母親の墓を詣でに東京から出てきたという男の子が、ニカッと笑って自分を見上げていた

女の子の涙に人一倍弱い男。

タダキチ事、横島　忠夫がここにいるのだから、木乃香が一人で泣いていられる訳が無いのである。

「そっかぁ……友達、逃げてまうんかぁ……」

「……うん」

ちょっとだけしょっぱくなった団子を分けてもらい、横島は古と共に木乃香と歩いていた。

何だかよく解からないが、木乃香が団子を買って刹那を追い回してネギから離れてしまったので慌てて後を追ったのであるが、何時の間にか彼女は一人になっていた。

別に木乃香がそれほど運痴という訳ではないだろうが、相手は剣術家である刹那である。普通に逃げればそれだけで彼女が追いつく事は叶うまい。

やれやれと安堵して木乃香に近寄って行こうとすると……

ス…と横島が古より先んじて前に出、子供そのままの笑顔で何気なく呼びかけたのである。

え……？　と古が首を傾げるより前に、木乃香が目元を拭ったのが目に入った。

『泣いてたアルか……？』

ただ呆然と立っていただけにしか見えていなかった古であったが、横島はその後姿から木乃香の悲しさを完全に察知していた。

自分より確実に付き合いが短いはずの横島は先にその事に気付き、泣いていたからこそ彼はあえて自然に話しかけたのである。

『やっぱり、老師は老師アルなぁ……』

と、こんな状況だというにも変わらず、古は不思議な嬉しさが込み上げていた。

「ウチのこと、嫌いになってへん……それはアスナも、ネギくんも言うてくれたんよ」

「ふーん」

「あっ、アスナゆーんは寮でウチと同じ部屋の娘で、ネギくんゆ

ーんは、ウチの先生なんよ」

「うん、さっき古姉ちゃんから聞いたで」

「そーなんか…」

「せやねん」

木乃香と優先的に話しているのがちょっと面白くないが、それでも完全に木乃香のペースで話をしているのはスゴイ。

おっとりとした木乃香の喋り方は嫌いではないが、会話を続けるのはちょっとだけ苦手でもあった。

それに合わせられるのは同じ関西系故なのだろうか？

その空気に感化されたか、人馴れした鹿が何頭かやって来てぴすぴす鼻を鳴らしている。

何が幸いするか解ったもんじゃないが、そんな鹿の頭を撫でたりしている内に木乃香の顔にも笑顔が戻りつつあった。

それを見て心持ち安堵した古は、分けてもらった団子をゆっくりと咀嚼する。

「でもなぁ……

せっちゃん、ウチとお話してくれへんのよ……

一緒にご飯も食べてくれへんの……」

しかし、その言葉を口にすると辛さを噛み締めてしまったのか木乃香はまた俯いてしまう。

その沈痛な横顔に古も口を開きかけるのだが、どのような言葉をかけてもガラクタに過ぎないので言葉を飲み込むしかない。

大体の予想はつく――

楓経由で聞いてはいるが、刹那は木乃香を護る為にわざと距離を置いているらしい。

裏に関わっている以上、絶対に怪我を負ってくるだろうし、木乃香の事だからその事を絶対に気にして余計に距離を詰めてくるだろう。

そうなると本末転倒だ。彼女の方から危険に近寄ってゆく事となりかねない。

他に理由があるかもしれないが、古にはそのくらいしか思いつかなかった。

武は鍛えはしているのだが、大局を見る目が乏しいのを今更ながら思い知っている彼女だが、それが解ったとて今の救いにはならない。

木乃香にとって必要なのは助言であり納得。

それを差し出す材料も術も無いし慰めの言葉も思い付かないからこそ、古は口に出せるモノが何も浮かんでこないのである。

自分だってそういった理由で……例えば超に距離を置かれたら悲しいし辛い。

近しい者、親しい者であればあるほど壁を作られると辛いのだ。

だからこそ古は木乃香の気持ちも理解でき、逆に刹那の想いも何となく理解できてしまう。

――故に、無力だった。

「……うーん……そっかぁ……
そりゃオレでも解からんなぁ……」

「せやなぁ……」

そんな二人の間にいる横島の返答はごく簡単なものだった。

しばし無言で無言で鹿を撫でる。

狙ったものではなく、無意識的なものなのだから本能的に気を休めたかったのだろう。

しかし人馴れした小鹿は嬉しいかもしれないが、何の解決にもな

っていない。

古はその事に軽い落胆を覚えたのであるが、

「オレはその“せっちゃん”いう子とちゃうし、ハッキリ言えへんのやけどな……」

ポリポリと団子の串を持った手で頬を掻き、木乃香の顔を覗きこむ横島。

笑顔でもなく、憤りも無い。

物事を教える老教師のようなあまり感情を表に見せていない顔だ。

「さっきねーちゃんが追いかけとった子やろ？　その“せっちゃん”って……」

コク…と木乃香は無言で頷いた。

「あの子、やたら辛そうに逃げとったで？」

「……え？」

うん――と眉を顰め、遠い眼をする少年。

背伸びをしている子供……というより、木乃香には何だか子供のふりをしている大人に思えた。

口では解らないと言いつつ、自分の気持ちを全て理解してくれている。

そして刹那の想いすら解ってくれている。そんな大人に……

「オレ、当事者とちゃうさかいエラソーに言えへんのやけど……ホンマに嫌いな子避ける時ってな、あんまり走ったりせぇへんねん。

その子、一緒にいとうないんやなくて、一緒におったらアカンと思とんとちゃう？」

「え……な、何で？　何でやの？！」

相手が子供という事も忘れて詰め寄る木乃香。

空になっている皿や串が落ち、避ける間も無く掴まれた横島はガックンガックン揺さぶられる。

普段は大人しい木乃香のその勢いに一瞬呆気にとられた古であったが、『それじゃ喋られないアルよ』とやんわりと彼女を諭した。

「う〜〜……クラクラする……」

「あう～…ゴメンなぁ」

何かイイ具合にヨッパライ風の千鳥足になった横島に木乃香は手を合わせて謝罪する。

言うまでもなく横島はそーゆー目に遭い慣れているので全く気にしていない。と言うよりこの程度の事で気を使われる方が居心地悪い。

その木乃香の剣幕に鹿も逃げてしまうが、一頭の小鹿だけが残っていて横島を心配そうに見つめている。

まだ視界はぐるんぐるん回っているが、それでもそんな小鹿の頭をたどたどしく撫でて平気さをアピール。

泳ぐ視線をムリヤリ彼女の目に合わせ続きを語った。

「せ、せやから知らんゆーたやん。
木乃香ねーちゃんの方が詳しい筈やろ？」

「う、ウン……でも……」

焦るのも道理で、木乃香には理由らしい事は何一つ思い浮かばないのだ。

だからこそ悩み、だからこそ無意識に動物に癒しを求め、こんな子供にすら救いを求めていたのだから。

「せやから、オレがどうこう言うたかてしゃあないやん。

木乃香ねーちゃんが知らん事はオレも知らんのやし」

「そか……そやなぁ……」

「それに……逃げられただけで諦めるんか？」

「え……？」

その言葉に木乃香の動きが止まる。

「友達に避けられる理由が解からん。
解からんいうて遠くで見よるだけやったらな～んも進展せぇへんで？」

「で、でも……せっちゃんに迷惑……」

「ホンマもんの友達やったら、そんなん迷惑に思うかい！！
それとも、木乃香ねーちゃんは友達を諦めるいうんか？！
何もせんと、遠くに行ってしまうかもしれんのを諦めるっちゅーんか？！」

横島の目が一瞬、遠くを見たと古は感じた。
ここではない何処かにほんの僅かの間、意識を持って行かれたと。

その勢いに驚いて目を丸くした木乃香に気付き、横島は咳払いをして自分の気を静める。

どうも感情の制御が下手なままになっているようだ。

言い過ぎたかもしれんなぁ……などと苦笑しきりである。

だけどこれだけは言ってやりたかった。

刹那のくだらない思い込みという気がするし、

何よりも、

「その　せっちゃんが木乃香ねーちゃんから逃げる理由は知らへんけど、
あんな辛らそうに逃げるんやったら知られとうない理由ある思うんよ」

「そんな……」

「せやから木乃香ねーちゃんが本気で仲直りしたい思うんやったら、何言われても平気にならなあかん。
どんな理由聞いたかて、そんなん気にするかっっちゅー強さがいる思うんや」

「強…さ……」

「……あんな、木乃香ねーちゃん」

自分のような――

「ホンマに大事なモンはな、無くなってから気が付くんやで？

無くしてから後悔するんは……イヤやろ？」

あんな想いをする女の子は――

こんな優しい女の子があんな苦しみを受けてはいけないのだ――

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊

そのまんまボ～っとしているのも何であるから、結局三人で時間いっぱいまで回る事にした。

先程　思わず激昂してしまった横島であったが、流石に冷静になると恥ずかしいらしく頭を掻いて黙っている。

そんな彼を見て苦笑している木乃香であるが、彼の言う事に一理も二理もあると感じたのだろうこれまた無言。

それでも先程よりかなりマシな空気を纏っているのだが。

といっても横島の気恥ずかしさが払拭される訳もなく、やっぱり付いて来ている小鹿の頭を撫でて照れくささを誤魔化しているのだが、そんな彼を見てドラマの一シーンのようだと木乃香も笑みを戻してゆく。

横島の方はそんなあたたかい眼差しがイタイらしく、余計に小鹿をかいぐりかいぐり撫でる訳だが、そんな所作が余計に木乃香には良い方向に循環が働いているので皮肉なものだ。

しかし、そう言った微笑ましさは木乃香と横島の二人だけ。

その少し後ろを歩いている古はというと、横島の背中を見つめたまま沈黙を貫いていた。

思い出は思い出。
忘れたわけでも無いし忘れられるものでもないが、“今は”何の感慨も無いのだから。

吹っ切れた……等という事もありえない。
だからこそ“今の”彼があるのだろうから。

少し前を歩いている横島の後頭部を見つめながら古は先程の言葉を思い返している。

『……老師は……その“痛み”を知っているアルか……』

無くしてから気付く大事な物――

木乃香は当然、例の嘘八百のバックストーリーを聞いているから、それはタダキチの家族だと思っただろう。
横島がマジックアイテムの力で子供の姿をとっている事を知るはずもない木乃香なのだから当然だ。

だけど古はその事を知っている。
だから横島の話が“偽り”の家族等ではなく、恋人やそれに相当する人間の事であると何となくではあるが想像できていた。

最初に思い浮かべた仮説がさっきの言葉によって真実味を増し、胸の奥でもやもやとしたものを古に感じさせ続けている。

彼にとって恋人のような存在を無くしたのは、彼が守り切れなかったからなのか？

となると、彼の心の傷は回復してようが傷痕は消える事はあるまい。

その傷痕を抱えたまま、横島は今生きているのだろう。

忘れられない、忘れ様も無い人として……

ふぅ……と古は溜息を吐いた。

未熟である事は常々自覚しているのだが、こういった年月と経験の差を目の当たりにすると殊更思い知らされてしまう。

横島は刹那じゃないから解からない……と言ってはいたのであるが、その実、大体の見当は付いているようだった。

それは横島のもどかしそうな様子から判った事であるが、もし彼がその事を木乃香に伝えたとしてもそれは真の意味での解決には向わないだろう。

何せ刹那と木乃香の問題であり、刹那自身が自分で気付かねば納得し切れずいつかまた同様の事を行うであろうとも考えられる。

だからこそ、横島は木乃香が自分から刹那に接する事が出来るよう背中を押したのだろう。

そんな彼女への助言も、横島に似たような経験があったからこそであろうし。

「う～～……」

頭がゴチャゴチャして、うっかり唸り声を出してしまう。

溜息を吐いたり憤ったりと忙しい事であるが、古は元々、直情と言って良い程考えるより先に動いていたのだから悩み慣れていないのである。

おまけに自分の中でうねっている感情の根元がハッキリしないのだ。

だからこそ混乱が続いている。

「？　ねーちゃん、どーかしたんか？」

ふと気が付くと、横島が足を止めて自分を見上げているでは無いか。

木乃香も不思議そうな顔をして自分を見つめている。

古は我知らず頬を赤く染め、手を振って『何でもないアル』と誤魔化して見せた。

「そーなんか？　腹でも減ったんとちゃうんか？」

「違うアルよ！失礼アル！」

「あそこに鹿煎餅売っとるえ？」

「私、鹿じゃないアルよ！　このかもヒドいアル！！」

「まぁまぁ……鹿煎餅や食うたかて腹や起きいひんで？　味も薄いし」

「食べたアルか？！」

「男として、その味に興味を覚えたらチャレンジせなアカンやろ？」

「性別関係ないし、意味無い誇りアル！！」

「何をー？！
ゲテモンへのチャレンジ王は、スカート捲りの学年制覇記録に並ぶ栄誉やないか！！」

「そんな栄誉、捨ててしまうアル！！」

何だかエキサイトして言い合いをしてしまったが、直後に彼の意識が木乃香に向いたことを古は見逃さなかった。

彼に釣られて木乃香を見れば、彼女は先程の顔とは違って二人の言い合いによってクスクス笑っているではないか。

横島は、その空気を払拭する為にボケをかましたのだろうか？

思わずそれを問いかけようとすると、彼は既にそこには居ない。

「はよ行こ。遅ぅなってまうでー」

既に十メートルは距離を離し、二人がやって来るのを待っていた。

『ああ、やっぱりそうだったアルか……』

と気付きはしたが、古も確認するほど馬鹿では無い。

ふ…と彼女は表情を緩め、横にいる木乃香に手を差し伸べた。

「ほら、このか急ぐネ。皆が待ってるアルよ」

「せやな」

今のやり取りのお陰だろうか、木乃香も少しだけ元気を取り戻して、小さく微笑んで古と共にタダキチに並んだ。

先程と同じ様に、
それでいて前よりかは幾分空気を軽くして園内を歩いてゆく三人。
間に挟まれた形で歩いていた横島は、近寄ってきた鹿に木乃香が気をとられた時、

『もし、刹那って娘が正直にならなんだら、オレがどーにかする』

と、小さな声で古に言葉を呟いた。

ハッとする古であったが、彼は既に小走りで木乃香と共に近くの売店で鹿煎餅を買いに行っており、鹿にやってはまた手を齧られていた。

当然、木乃香は笑顔を見せている。

横島は古が元気を見せていないのは、木乃香を思い遣っての事だろうと誤解したようだ。

だからこそ横島は二人の、そして刹那の為に自分から動こうとしていた。
無論、そうでなくともおせっかいな彼は出しゃばったりするだろうが。

だが、古はそう言われて笑顔を見せられたかというと実はそうではない。

その言葉によってさらに表情を苦いものにしていたのである。

流石にその事にまで横島は気付けず、木乃香と他愛無い事を話しながら集合場へと足を向けている。

今度は古が少しだけ遅れて二人の背中を見つめつつ、トボトボと歩いていた。

――老師は、大切な人を心に刻み込んでいる。

だからこそ他人の心の痛みに敏感であり、どうがんばっても女に手を上げられないのだ。

不意にその事に理解してしまい、
それが奇妙な焦りを自分に与えているという事など理解できる筈も無い古であった……

「にしても――
さっきから老師と木乃香は何やってるアル？
まるで見えない何かを撫でてるみたいアルな……」

本文（後書き）

どうも改訂版のご閲覧、ありがとうございます。
元々全文を三回も打ち直していたものを初期のそれに戻しました。

ポイント（？）は古のメンタル面が表現。
刹那と木乃香は然程でもないのですが、古は難しいっ！！
更に本屋ちゃんが超☆空気。

女心は一度乱れないと大した成長は無いのです。ホントに。
ですから一度は燻って、そこからはっちゃけさせるのが目的でした。
こういう娘は　はっちゃけると怖いものですし。
――という訳で“あの夜”に入るですよ。

続きは見てのお帰りです。
ではでは～

前編

何だか知らないが、色んなモンを背負い込んだ苦労人の顔で少年――あ、いや……少年の姿をした青年は廊下を歩いていた。

只でさえ小学生（ガキ）の姿をさせられるというイタイ事しているとゆーのに、ムチムチ誘惑（自覚なし）に心を甚振られているわ、この日は柄にも無くエラソーなコトほざいて説教なんぞかましてしまうという新たなイタイ行動をしてしまって心がボロボロになっていた。

何というか……当事者である筈の子供先生や、護衛対象である少女の守り手の少女剣士よか心労が溜まっているのは如何なものか？

無論、彼とて好きで疲労しているわけではない。

何せこの学校の面々。特に３－Ａの面々は統率が取れているのやら取れていないのやら解からない集団で、蜘蛛の子を散らすように散開したと思ったら、唐突に群体化したりするのだ。

何だかんだ言っても底抜けに女子供に優しい彼は、そんな少女らを事件に巻き込まないよう気を配り続けていたのである。

ぱっと見はちゃらんぽらんしているようで、中身はしっかり大人。昔の彼からは思いもつかない真面目な性根である。

しかしそれでも最後にかましたポカは頂けない。

報告したら学園長にも飽きられてしまったし、一応同僚のよーな魔法関係者の青年にも顎を落とされた。

いや、気付けなかった自分も悪いっちゃあ悪いのだが、偶然が実を結ぶとはいえ結び過ぎだ。葡萄が如く鈴なり生ってるメロンのようなモンである。有難味なんかじぇんじぇん無い。

ともあれ、そんなこんなでボロボロになっていた彼は、廊下の窓からチラリと裏庭に目を向け、自分が見つめた事を喜んでいる…と解ってしまう…それに手を振り、ちょっと待っててと伝えてみた。

案の定、コクリと小さく頷いて『待ってる』とつぶらな瞳で返してきたではないか。

可愛いけどネ。可愛いけど……

と、癒されつつも複雑な心境で廊下に眼を戻して目的地に向かってゆく。

何しろ――

「こんなんだから癒しが無けりゃやってられねー……」

なのだから。

何を言わんかや。半分は自業自得ではないか。という突っ込みは無しの方向で。

つーかそんな人がいないし。

お陰でボケたらボケっぱなし。歪んだら歪みっぱなしの放ったらかし。

調子こいてふっふっふっ…とアヤシサ大爆発の笑みを浮かべつつ、少年はホテルの浴衣を持ってそこへと向ってゆくのだ。

こんなに落ち込んでいても私は元気です。

それがあったらドンブリ飯があるだけ食える。という桃源郷への期待に胸を膨らませて進む彼。

少年が向っているそこは素敵な幻想郷。所謂一つのパラダイスである。

そう、進む先にあるものは、彼にとって全知全能の癒し空間。心ときめく露天風呂だった。

何と大げさな…と呆れる事無かれ。

何せ彼の外見は幻術で幼くしているだけ。

実際の“今”の生理年齢は十代後半。青い衝動真っ盛りなのであ

る。

本来の年齢も二十代後半の男盛りで、その相乗効果（？）によってヤる気に満ち満ち（中略）満ち溢れていてもおかしくはない。

にも拘らず周囲はキャイキャイ騒ぐ女子中学生ばかり。その衝動の持って行き場が無かったりする。

だから、その煩悩袋はショート寸前。

そろそろオイシイ目にあっても良いのではなかろうか？　いや、イイのだ！！

そしてこのホテルの露天風呂は混浴であり、尚且つ――

「ふ……今の時間、女生徒は入浴を終えているであろう事は“旅のしおり”で確認済み！！

そして新田のヲッサンやセルピ…もとい、瀬流彦も見回っていた！！　そして……」

脱衣所の篭の中には女物であろう着替えが入っていた。流石に漁るほどのヘンタイにまだクロックアップしている訳ではない。何とかヘンタイというなの紳士レベルなのでチラ見による妄想で満足している。余計に性質が悪いという気がしないでもないが。

しかしその行李から鑑みるに、ここに入っているのは……オンナだ！！

ふ…っ

少年は無駄に男臭い笑みを浮かべ、脱衣所でパパっと服を脱いで欲情……もとい、浴場へと飛び込んでいった。

「いざ、ザナドゥへ！！」

少年は色々あってテンパッていた――

昔の事を思い出したり、少女らに気を使ったり、ホテルの周囲に怪しいものがないか霊波でもって調べてみたりｅｔｃｅｔｃ．．．

だから普段以上に力を使いまくっていた。

だからエネルギーチャージの必要があった。

彼の力の源は生命の根源から来るモノ。－霊力－

その霊力を効果的に酌み出すのは集中力なのであるが、十代の後半というかなり後発的に目覚めたものであるから、その集中力を高める方法はかなり歪であった。

彼は、煩悩でもって集中力を高める煩悩力者なのである。

だから彼はエネルギー切れのこーゆー状況では暴走気味となってしまう。

よって――

篭の中にあった下着に、“サラシ”が入っている事に気付けなかった――――

「え？」

「あ……」

硬直する二人。

片や子供状態とはいえ、列記とした大人の男性。

そしてもう片方は、子供とは思えない立派なプロポーションをした少女。

子供から大人へと差し掛かっている、青く瑞々しい肢体が少年の脳を焼き、行うべき行動を完全に封じてしまっている。

少女は少女で、何だかやたら熱い視線でもって身体を貫かれている事を肌で感じ、今頃になって育ち始めている感情……“羞恥”が行動を遮っていた。

「……か、楓……ちゃ……」

「よ、よこし……」

ぎちぎちと音が聞えてきそうな緊張の中、何とか音らしきものを唇は紡ぐ。それでも身体はコチコチのまま。未だ凍りついた思考が自由を奪っているのだろう。

だが、悪戯なのか慈悲なのか、春風がふわりと舞い、ほんの一瞬だけ二人の視界を遮った。

「……っ！！」

彼の視線が遮られたその僅かな瞬間、

少女は先に再起動を果たし、

彼女自身が予想も付かなかったリアクションを起こした――――

「き、きゃぁあっ！！」

「え……うごぉっ！？」

何と彼女は右手で己が胸を隠し、左手で桶を掴んで投擲したのである。

少年は初めて聞いた意外に可愛い少女の悲鳴に硬直してしまい、高速回転しつつ迫り来る桶を避けられなかった。

こ――――んっ！！　と甲高い音を立て、少年の顔に追突して直角九十度上空に跳ね上がった桶。

流石にその回転モーメントでも衝撃は逃がしきれなかったか、軽くて硬い檜の桶は空中分解して少年の周囲に降り注いだ。

その様子からも凄まじい勢いであった事が見て取れる。

「はぁはぁはぁ……え？　あ、ああっ？！　横島殿？！」

元は桶だった残骸を身体に浴び、そのままそっくり返ってごぎんっ☆と中々イイ音を立てて後頭部を強打する少年。

その見事すぎる昏倒を目の当たりにした少女はやっと正気に返る事に成功した。

裸体のまま慌てて彼に駆け寄りその身を起こさせると、やはり意識を完全に失ってはいるが生きていた。後頭部と額のたんこぶは凄かったが。

「う〜ん……」

ピヨピヨと頭の上をナゾの鳥が旋回するという、懐かしい現象が起きているので間違いなく脳も無事だろう。

それが確認できた少女は、彼を抱えたまま胸を撫で下ろしていた。
が、ホッとしたのも束の間。彼女は足先から見る見るうちに真っ赤に染まってゆく。

「ま、また見られ、見てしまったでござる……」

昨日に続き、今日も肌身を見られ、見せた事に動揺している少女。
今まで自分が起こした事の無いリアクションを反射的に行ってしまったという戸惑いも重なって、目をぐるぐるナルトにて気を失ったままの少年を抱え、彼女の困惑はしばらく続いてしまうのだった
――

「ん～？　どうしたの？　龍宮さん」

「……いや、何だか何処かの鈍い馬鹿が勝手にラブコメしてる

ような気がして腹が立って……」

■九時間目：ＰＲＯＪＥＣＴ

えー　（前）

「正直、スマンかった！！」

「も、もう良いでござるよ。痛み分けでござる」

まはや横島の得意技となってしまっている、土下座ＭＡＸハート＜正直スマンかった＞パート３が炸裂していた。

何とも締まらない得意技であるが、横島的にいえば土下座は謝罪として当然の行為なのだからこれでいいのだ。

幸いにも楓はすぐに許してくれたのであるが、横島は早々簡単には頭を上げ難い。

ウッカリと二度も目にしてしまった楓の身体。

健康的で瑞々しい彼女の裸体が脳内ＨＤにキッチリ焼きついてて消えてくれない横島としては頭を上げ辛かったりするのだ。思い出すと鼻血が噴出しそうになるし……

――順調に堕天は進行しているようである。

奈良公園の散策を終え、ホテル嵐山に戻った一行。

何だか知らないが子供先生が３８℃もの知恵熱をだしてぶっ倒れるというハプニングはあったものの、別段事件らしい事件も起きず

に事無きを得ている。

まぁ、件の子供教師がロビーで一人身悶えしつつ転がったり、

「ココココックさんがコクのあるコックリさんのスープを……」

等と要領を得ない事をほざきまくり何処かへ走り去ってゆく始末。

傍から見ていた横島でも冷や汗を禁じ得ないほど。

それでも何とか理由を楓に問うが、

「乙女が勇気を振り絞った故、秘密でござる」

と返されてしまう。

まぁ、女の子らが無事だったら良いかと横島もあえて聞きだそうとはしなかった。

――尤も、ネギが少女に告白された等と聞いたら、しっとマスクが御降臨なされたかもしれないが……

「そ、それで、古はどうしたでござる？　なにやら思い悩んでいた様子……」

「ん？　あ、ああ……」

ムリヤリ話を逸らせる楓。

何だか以前よりヘタっぽいが気にしてはいけない。けっこう焦りが残っているのだから。

あまりに不自然に話を逸らされた感もあるが、確かに横島は古の事を気にしていたのですんなりと楓の話に乗ってしまう。

「いや、オレも良く解かんねーんだけど……
どーも木乃香ちゃんと刹那ちゃんとの仲がギクシャクしてて……」

「ほう……？」

案外素直に話を逸らせてくれたれ事に感謝しつつ、楓は深刻そうな内容に気持ちを整えた。

あの二人の間柄は良く知らない彼女であったが、それでも陰に日向に刹那が木乃香の様子を窺い続けている事は知っている。

人には様々な事情や理由があり、言いたくとも言えない事が多い。その事を理解していた為、あえて聞かずにいたのであるが……

その理由の所為で周り――“仲間”である古までも――が悩みだすというのなら話は別だ。

本人達だけでなく、周囲にも問題が飛び火しだしているのだから。

ふむ……と周囲を見、ロビーの端に人気がない事を確認してから横島を誘った。

どうも込み入った事情がありそうで、落ち着いて話を聞く必要を感じていたのだから。

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊

「ええ～～っ！？

魔法がバレた～～～～！？

しかも、あああの、朝倉に～～！？」

はい……と涙混じりに俯いて返事をするのは子供教師こと、ネギ＝スプリングフィールドだ。

一応、彼の仮契約者である神楽坂明日菜の方が焦っているのは如何なものかという説もあるが、今回の件での協力者である桜咲刹那

も呆れて傍聴するに留まっていた。

何やら今日の奈良公園の見学からずっと様子が変であったが、それは本屋ちゃん事、宮崎のどかに告白されたからだと明日菜も刹那も思っていたのであるが……夕方頃からもっと行動が珍妙になってきていた。

流石にこれはおかしいと気付いた二人がロビーの端の人気の無い場に連れて行き、ネギに問い詰めたのであるが……

何というか……

いや、ある意味優しいネギらしいと言えば良いのだろうか。

自分の教え子（でも年上）に告白され、その悩みを引き摺ったまま外に出た折、トラックに撥ねられかかった猫を発見。

魔法でもって猫を救ったのである。

ちょうどその場に居合わせたのが麻帆良学園報道部突撃班の朝倉和美で、その事象を目の当たりにした事によって彼女は魔法の存在を知ってしまったのだという。

ジャーナリスト魂というか、パパラッチ根性に火がついてしまった朝倉は調査を開始。

ネギに突撃インタビューをかけ、彼のその焦りから確信を深め、そしてネギが入浴中にしずなに変装して乱入し、確証を取ったという事らしい。

朝倉という少女の事を良く見知っている明日菜らから言えばポカ中の大ポカ。

二人の認識からすれば、彼女にバレるという事は世界中にバレるという事を意味するのだから。

「もーダメだ。
アンタ世界中に正体バレてオコジョにされて強制送還だわ」

「そんな～～～っ！　一緒に弁護してくださいよアスナさん、刹那さん～～～っ！！」

別に虐めるつもりは無いが、もう少しネギにも自覚してほしいものだという意味合いが篭っている。
刹那も最初の頃はもっと当てにしていなかったのであるが、昨夜の一件で少しは見直しているので苦い顔をしていた。

と、ちょうどそこへ――

「おーい、ネギ先生――」

当の本人、朝倉　和美がやって来た。

『ここにいたか兄貴――♪』

何故か肩にオコジョ妖精カモを乗せて……

「よ、よかった……
問題が一つ減ったです――」

「よしよしネギよかったね」

涙すら流して安堵しているネギに、明日菜もしょーがないわね～～と頭を撫でて安心させていた。

カモと朝倉の話によれば、彼女はカモの熱い説得に応じ、ネギの秘密を守るエージェントとして協力してゆく事を約束したと言うのだ。

無論、明日菜も刹那もその説得力の無さに疑いの目を向けていたりするのだが、当のネギが今まで集めた証拠写真まで渡してもらって大喜びなものだからあんまり水を差したくなかった。

それに、ネギをサポートしているカモが彼女についているのだから嘘だと決め付ける事もできない。

ハッキリ言って結婚詐欺師の愛の囁きを聞いているよーな気がしてくるのだが、一応は信じてやるかと言うのが正直なトコロであろう。

……まぁ、写真は渡したがデジカメのデータとかはそのままであ

るし、カモが何かニヤリとしていたりするのだが……流石に明日菜ではそこまで気付くまい。

ともあれ、広域指導員である新田に部屋に戻れと言われた事もあって、安心したお陰で気が緩みまくっているネギを伴い彼の部屋へと向う二人。

結界も昨夜より強めなものを張ったし、後は万が一の為に式を放ち、教師らに戻ったと見せかけて見回りをするだけである。

「や。ネギボウズ」

「え？　あ、楓さん」

丁度そこに、浴衣姿の楓がロビーの反対側から歩いてきた。

彼女から話し掛けてきた事を不思議に思っているのだろう明日菜に苦笑しつつ、楓は刹那にチラリと視線を送ってから、

「何やら忙しそうでござるな。
手が足りぬようであれば、拙者も手を貸すでござるよ」

とネギにそう言った。

「へ？　な、なんで長瀬さんが……？」

無論、明日菜は裏事情を知らないので、ただ驚くばかりだ。

木乃香の周囲や家族関係、そして麻帆良や世界の“裏”の姿をついこの間まで知らなかった彼女なのだから当然の反応であろう。

「いえ、楓さんは……その、私と同じく“裏”に関わった一人で……」

「へ？　そうなの？」

ややこしい説明にならぬよう、刹那が先にそう切り出した。

彼女が言い澱んだのは、楓がついこの間まで“裏の裏”たる魔法界には関わっていなかった事を一瞬忘れていたからである。

「あい♪　一応、拙者は麻帆良学園の警備班所属となっているでござるよ」

ニンニン♪　と何やら細い眼うっすらと開けてそう言った。

ネギが学園に来るまで居た“常識”から完全に逸脱してしまった明日菜であるが、逃避するというか逃げるという気は更々無い。

アバウト…というのは言い過ぎかもしれないが、彼女は如何に非

常識であろうと受け止めるだけの器があるのである。

だから楓の話もすんなりと心に染み込ませ、

「そっか……じゃあ、頼りにしてるわ。楓さん」

と、笑顔で右手を差し出した。

「了解でござるよ。明日菜殿」

楓はその手を握り、優しげな微笑みを見せた。

彼女は口先で否定しているが、楓はニンジャである事はネギはその眼で見て知っている。だから彼女が手を貸してくれるというので、ネギも笑顔を取り戻していた。

そんな彼は元より、刹那にしてもこれはかなり心強い。

昨夜の誘拐事件の犯人を取り逃がしてしまったのは、相手に魔法使いが混ざっていた事である。

カモによればアレは水を触媒とした移動魔法らしかったのだが、あれは関西の呪術というよりは西洋魔術の色が濃かった。

それにそんな転移魔法を使えるという事はかなりの能力を持っている術者となる。

状況から鑑みて、西洋魔法を嫌う筈の関西呪術協会が魔法使いを雇ったという奇妙な可能性があり、自分や学園長が考えていたより、

背後にややこしい動きがあると見て良いだろう。
となると、式や呪符等とは別の注意を払う必要が出てきていたのだ。

しかしそうなるとどうしても手が足りない。
その事で彼女は唇を噛んでいたのであるが……

楓の力量は以前から真名より聞き及んでいる。

何せ楓は、魔法界にかかわっていないにもかかわらず、“あの”真名ですら本気にならねば対等に闘える気がしないと言っている少女なのだ。
詳しくは聞いていないのだが、甲賀中忍という肩書きに相応する腕を持つというのだから、それはかなりのものだろう。忍の世界が実力式の縦社会ならば、であるが。

だから正直、楓の参入はありがたかったのである。

安心したからであろう、三人から無用な肩の力が抜けた。

確かに緊張は必要なものであるが、硬くなり過ぎると瞬発力に掛けてしまうのも事実。

かと言って、彼女は横島という相棒が来ている事を口に出しづらかった。
というのも――

「正直助かります。

西の強硬派に加え、怪しげな魔道を使う変質者まで関わってくる可能性がありましたから」

刹那は昨夜の怪人を思い出しのか、得物を持つ腕を掴んで表情を硬くする。

「そ、そうね……アレはかなりヤバかったわ……」

“あの姿”が頭に浮かんだか、珍しく明日菜が生理的嫌悪を露わにした。

「ハイ……
死罪になった罪人の手を切り取り、それから作り上げる燭台を“栄光の手”というのですが……
あの人は自分の腕にそれを宿しているのかもしれません」

等と、イヤンな緊張が場を満たしてゆく最中、ネギが顔を青くしてそんな事をもらしてしまう。

当然ながら魔具知識が無い明日菜は驚き、西洋魔法に疎い刹那も驚愕していた。

「た、確かにアイツから感じた気配は人間のそれじゃなかったわね……」

「ええ……私もあの輝く爪から見た事も無い気配の様なものを感じていました。
確かにアレは氣に似て異なる別物でした……
なるほど……魔具を宿していたというのなら納得できるかもしれませんね……」

タラリ……

三人の会話にでっかい汗を後頭部に垂らしてしまう楓。

流石の彼女もこの場にて横島の事を話せば混乱は必至なので説明するのは躊躇われた。

「そ、そうでござるか……
ならば、その……その“へんしつしゃ”とやらは拙者が相手をするでござるよ」

と言うのが精一杯だ。

楓にしては一番良いフォローだと思うのだが、目いっぱい横島を誤解している三人は驚愕と心底その身を案じている想いが入り混じった眼差しを楓に集中させた。

「か、楓、正気か？」

「そ、そうです！！　最悪、僕たち全員で当たらないと拙いかもしれないんです！！」

刹那とネギが本気（マジ）な顔で楓にそう言って詰め寄ってくる。
まぁ、確かに全員で掛からねば一発も当たるまいが。

「そ、そうよ！？
ヘタをすると長瀬さんが、そ、その……エ…エッチな事されちゃうわよ！？」

「！？」

明日菜の言葉に、先程の露天風呂のシーンが思い出させられてしまった。
あの時は自分が暴走して横島を気絶させたのであるが、もし彼が先に暴走したなら……

そして、飴の力が切れていたなら……

ボッッ！！

一瞬で顔が茹蛸となり、蹲ってしまう。

そんな彼女を見、流石に女の子に一人に相手をさせるのはと相談

を始める三人。

楓の心境など知る由もなく、『下手をすると魔族かも』とか、『じゃあ淫魔の力を身に付けた…』とか、『淫らな欲望の為だけに自分に魔具を埋め込んだなんて……』とか、中々に事態収拾が難しい方向へ突撃してゆくではないか。

こういった場合にフォローせねばならない彼の相棒の楓はというと、

何故か横島に押し倒されるシーンが頭の中でリプレイを続けており、中々現世復帰ができないでいたりする。

栄光を掴み取れるであろう事を期待して、その力に目覚めた時のノリで名付けられたＨａｎｄｓ　ｏｆ　Ｇｌｏｒｙ……“栄光の手”であるが、まさか彼のネーミングセンスの所為でここまで言われるとは思いもよらなかった事であろう。

因みに、Ｈａｎｄｓ　ｏｆ　Ｇｌｏｒｙを略してもＨｏＧ（食肉豚。或いは『豚の様に意地汚い』とか、豚のエサ）なので、結局はネギに良い印象を与えないだろうが。

それでも頭の中から自分に淫行しようする横島の画像を消去する事に成功した楓は、何とか再起動を果たして立ち上がる。

昨夜の奇行が酷すぎた所為か、自分の相棒たる横島の印象は劣悪の極みなので彼の身を明かす事は次の機会へとまわしておき、

今や十八歳未満お断りな話に成りかかっている三人の話を逸らす為……もとい、本当に聞きたかった事に強引に話を戻すのだった。

「あ……と、そ、その……ひ、一つ聞きたい事があるでござるが……」

「え？　あ……な、何？」

楓に話しかけられ、やっと自分らがワイ談を仕掛けている事に気付いた三人は、顔を赤くして気不味そうにする。

ここで詳しく書く訳にはいかないが、彼女らの話の中での横島の事を本人が耳にしていれば、

『ヘイトか?!　ヘイトなんだな?!　ドチクショ――――っ!!』

と号泣すること請け合いである。

まぁ、何はともあれ無事に話を逸らせたのだから……と内心安堵しつつ、楓はやっと本題に入った。

「その……く、古がどこにいるかご存知なさらぬか？」

＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊

その変態――

もとい、横島はコソーリとホテルの裏庭に潜んでいた。

そう聞くと大半の方は『ああ、やっぱり彼は彼なんだ』とウンウン頷いて納得されるだろうが然にあらず。

「ホントどーするんだい？　横島クン」

「そ、そー言われても～」

呆れた顔で溜息を吐き、しゃがんでいる横島と共にそれを見ているのは、引率教師の一人である瀬流彦である。

ああ、成る程。二人で覗きの算段か……といわれてもしょうがないメンツだ。そう思うのもまた仕方が無いだろう。

「……何かボクまでえらいコト言われてるような……」

――兎も角。

そんな二人が頭を悩ませているのは、意外にも軽犯罪に関する事ではない。

「ぴぃ？」

「いや、そーつぶらな目で見られても……」

二人の前でぺたんと地面に伏せてサクランボを食べている小鹿である。

昼間、横島と木乃香が撫でていた鹿。
他の鹿たちよりずっと白い小鹿であった。

奈良から連れて来たのか？　と思われるだろうがそれも外れである。

何とこの小鹿が勝手に付いて来たのだ。
それも、皆が移動するバスの上に飛び乗り、ぺたんと身を伏せて。
ホテルに着いた時、屋根に伏せている小鹿に気付いた彼の驚きたるや……まぁ、その件は控えておこう。今は関係ない事であるし。

兎も角、ここまで聞くとお解りだろう。この小鹿、ただの鹿ではない。

つーか本当は鹿ですらなかったのだ。

「ホントどーするの？　イキナリ使い魔なんか作って」

「せやかてこんなハッキリ見える精霊なんか聞いたコトもなかったんやもん！！」

そう、小鹿の正体はなんと精霊だったのである。

正確に言うと山岳信仰において山神の使いとされている鹿の形をとっていた精霊。

普通の鹿に紛れてふらついていたそれが、木乃香の魔力の波動と横島の霊力の波動に惹かれて寄って来たらしいのだ。

しかし彼が泣いて自分の非を否定（つーか誤魔化し）しているように、運が悪いというか何と言うか、本当に間が悪く偶然が重なっただけだったりする。

何せ木乃香はどういう訳か軽く魔力が目覚めかかっていたし、人界最高レベルの高出力の霊力持ちである横島が二人して並んでいたのだ。

精霊どころか妖怪変化だって下手をすると何事かと寄って来るかもしれない。いや、精霊だけしか寄って来なかったのは幸いだと言えるかもしれないが。

そんな小鹿精霊を二人が撫で、その魔力と霊力を直接伝え、力をもらった事で馴れてしまったのだ。

そのタイミングで――

「あはは……
この子、なんややたら人馴れしとんなぁ。
なぁなぁ　キミ、名前なんていうんえ？」

等と小鹿が可愛かったものだから木乃香が子供に言うように問い掛けた際、明るくなってきた彼女に調子を合わせた横島が、鹿の子供だからという安直な理由で――

「“かのこ”や」

「ふぇ？」

「こいつ女の子やしな」

と、名付けてしまったのだ。

木乃香は『ウチの名前の逆さま読みやん』と喜んでいたのであるが、ここでとんでもない事が発覚してしまう。

「！？　老し……じゃなかた……タダキチ！！」

「わ、わぁっ！？　古ち…ねーちゃん、どないしたんや！？」

「その鹿、どこから出てきたアルか！？」

「「は？」」

そう、古にはずっとその小鹿が見えていなかったのである。

それだけなら鹿の幽霊という可能性もあったのだが、その小鹿の頭に問題のタネが見えていた。

――この小鹿、雌なのに角の根があるのだ。

腐っても横島はＧＳ。オカルト知識は持ち合わせていた。

神の使いとしての鹿は当然ながら雄が多いのであるが、神秘性のある精霊は雌鹿もけっこういる。

何しろギリシャ神話にだって角のある雌鹿が出てくる。ヘラクレスの三つ目の難事、ケリュネイアの鹿がそれだ。

神秘性を含む聖獣や精霊は両方の特性を含むので、そういった事もあるらしい。

兎も角、慌て驚く古を黙らせ、木乃香がいる事から色々と誤魔化しつつそんな説明をしたまでは良かったのだが……

無意識に鹿の頭を撫でていたのは失敗だった。

彼はそれよりも前にウケ狙いで普通の鹿に齧られている。

そしてその手は当然ながら僅かではあるが血が滲んでいた。

かのこ　と名付けられた小鹿は、別に言われた訳でも無いのだが、その手を――

彼の血をぺろりと舐めていたのだ。

血を与え、そして名まで付けて確立化させて使役する。契約の基本であるが一番強力なものだ。

こうして横島は、全く意識せずに精霊契約を結んでしまったという訳である。

「ガクエンチョも呆れとったけど……契約解除の方法や知らへんし」

「かと言って、こんな子をどうこうするのは……」

二人して溜息を吐きつつ、お皿のサクランボを食べ終えた　かのこに目を向ける。

「ぴぃ？」

「「う……っっ」」

すこーん忘れていたが、横島は妖(あやかし)と相性が良い。

そしてどうも月の魔力に左右されるものとの相性が特に良いらしいのだ。

現に一番弟子の人狼少女は横島の波動が一番心地良いらしく一番懐いていたし。

月と鹿には言霊的な繋がりがある上、横島は神秘の塊。そんな彼が名付けて血まで与えりゃあそれはおもっきり馴れるだろうし格だって上がろうというもの。

今や　かのこは立派な使い魔である。

……可愛いという能力しかにない気もするが気にしてはいけない。

「ま、まぁ、学園長も認めてくれたんだろ？
だったらがんばって面倒みなよ」

「ひ、人事や思て……」

こんなに澄んだ目で見られたらどうこう反論する事もできくなるのは俗世で穢れている証拠だろうか？

それでもまぁ、無聊を慰めてくれる存在に違いは無い。

まさか使い魔を手に入れる日が来るとは思わなかったなぁ……と、何もかも諦め、何もかも受け入れた横島は、黙って　かのこの頭を撫でるのだった。

あぁ、月が綺麗だな。コンチクショーと……

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊

天に月。
池に朧月。

水面に映るそれは、風で揺れるので実像をはっきりと結ばない。

天の月は真円ではないのに、歪んだ像もあってか池に映っている月はやや歪ではあるが円に見えていた。

「はぁ……」

と溜息一つ。

真実を移していないからこそ、おぼろげな事実しか見えてこない。
何時もの違ってそんな哲学的な事を考えてしまう自分に呆れてしまう。
だからといって、何時までも池の月を見つめているという理由にはならないのであるが。

「はぁ……」

と、もう一つ。

溜息の数だけ幸せが逃げるというが、それでは自分は不幸なのではないかと思ってしまう。

実際、胸のもやもやは取れない。
何か燻っているのに正体が解からない。
理由があるだろうのに片鱗すら結べない。

バカレンジャーだ、バカイエローだと言われている自分だからこその思考の行き止まりなのかと思うと、今更ながら腹が立ってしまう。

誰もいない場所――

あえて誰かと話をする余裕が無かったと言った方がよいだろうか？

風呂に入っても完全に落ち着いたといえず、彼女は一人になれる場を求めて彷徨い、ここ……宿泊しているホテルの屋根の上に辿り着いたのである。

無論、風呂上りなので湯冷めする可能性はかなり高い。
幾らバカだバカだといわれても、風邪をひく時にはひくのだし。

そんな彼女の様子に気付いていた友は、黙って“それ”を彼女に与えていた。

彼女らの年齢から言えばそれは渡されざる代物であり、本来ならば口にしてはいけないものである。

だが、その友は“これ”を渡した。
『気晴らしは必要なのでネ』と……

ちゃぽん…と水音を立てる水筒を手に持ち、コップになっているフタに中身を注ぎ入れて静かに呷る。
昨日は感じた旨みは何故か苦く、そして喉の奥で辛く感じた。

「何やってるでござる?」

「……あ、カエデ……」

後から声をかけられ、やっと気配が近寄っていた事を知った少女。
古　菲。

別に気配を消していたわけでも無いのに、楓の接近に気付けなかったのは何時もの彼女らしからぬ事である。

『アイヤ……私、そこまで悩んでしまてたアルか……』

古も迂闊さを悔やむより苦笑が浮かんでしまった。

明日菜らに居場所を聞いてもやはり知らないとの事。
無論、三人に話しかける材料でもあった為、然程の期待もしていなかった楓であるが、気が付けば古を捜す方がメインになっていた。

ならばと同じ班の超一味に聞きに行けば、意外にあっさりと、

「ん～？　古はこのホテルの屋根の上にいるネ」

「へ？　屋根の上でござるか？」

「ウム。間違いないネ」

ぴこーんぴこーんと妙な音を立てるコンパクトに似た形の小型レーダーっポイ物を見ながら超は教えてくれたのである。

その言葉に従って屋根の上に来てみれば、何だか小さな身体を更に小さくして古が座り込んでいたではないか。
横島の言っていたように……いや？　横島が言っていた以上に古

は何かを思い悩んでいる様子だった。

「はぁ……ちょっと月見酒してたアルよ」

「そうでござ……って、酒でござるか？！」

「そーアル」

ちゃぽん…と揺らせたステンレスの水筒には、見事な飾り書体の筆文字で＜超＞と書かれており、中身は例の音羽の滝の水――

本気なのか冗談なのかサッパリ掴めない西側の妨害に使われた、縁結びの水に混ぜられていた酒が中に入れられているのである。

自分すら気付かぬ内にあの酒をパクっておいた超に感心すべきか、そんなモノを同級生に勧める彼女の非常識さを責めるべきか。楓は微妙な表情で銀色のフタに酒を注ぐ古を見つめていた。

「ん……」

「え？　あ、いや、拙者は結構でござるよ」

前に差し出された液体の入った器を丁重に断り、楓は飲んべのヲッサン宜しく酒を呷る古の横にちょこんと座る。

くぴっくぴっくぴっ……ぶはぁ～～

正しくヲッサン飲み。
楓の後頭部にでっかい汗の球が出現した。
なるほど……確かに様子が変だ。

しかし、彼が言っていた様な木乃香と刹那の関係を悩んでいる事が原因だとは思えない。
どー見てもヤケ酒なのだし。

「え、え～～と……古。
あの……「……カエデ」」

兎も角、話を聞こうとした楓のセリフは、やや舌が回っていない古によって遮られる。
ぷつりと会話を切られはしたが、別に腹が立つことも無いし、向こうから話してくれるのならそれに越したことはない。

だから楓はそのまま唇を閉じて次の言葉を待った。

「……ろーしの恋人……どんなヒトだたアルか？」

「は？」

が、話は楓の想像から百八十度くらいズレていた。

「しらないアルか～？」

「し、知らないでござるよ～？」

そうアルか……

とブツブツ呟きつつ、古はまたフタに液体を注いだ。

流石にこれはいかぬ。

級友の護衛もさる事ながら、このまま飲ませると絶対に身体を壊すだろう。

楓はスッ…と腕を滑らせ、古から水筒と杯代わりのフタを奪った。

「ああ～～……ナニするアル～～」

「身体に悪いでござるよ。

それに、自分の任務をお忘れでござるか？　自分から手を貸すと言ったでござるに」

楓がそうやんわりと嗜めると、古も納得したのか俯いてそうアルなと呟いた。

肩を落としているのが丸解かりの古の様子に、流石の楓も眉を顰める。

「……かえで～」

「……なんでござる？」

古のセリフは相変わらず舌が回りきっていなかった。

「かえではぁ……大切なヒトと言たらぁ……どんな相手思うアルか～～？」

「はぁ？」

「ふぅ……ホテルの周りには異常なし……か」

「はい。妙な気配もありませんでしたし、一応は結界も強化して

ますから今回は……」

昨夜ほど酷い事にはなりはすまい。

と、安堵しかけた刹那であったが、そうそう気を抜けないと自分を叱咤する。

誘拐犯の中に高位術者がいるのは明白なのだから、念には念を入れないといけない。

それでも楓が――実は古も関わっているのだが、その事を刹那は知らない――力を貸してくれるというはありがたかった。

何よりも木乃香に掛かる魔の手が少しでも軽減されるのだろうから。

まぁ、いざとなったら真名を雇うという手もあるし、楽観はできないが希望は湧いている。

明日菜にしてもイマイチどころかイマニの腕前であるが、彼女の使うアーティファクトの能力は凄まじいものがある。特に式に対してはかなり期待が持てるようだ。

人気の無い場所を選びつつ、ホテルの廊下を足音を潜めて移動する刹那と明日菜。

新田ら教師の見回りの後を付ける形で、外敵から友人を護る為という“真の意味”での見回りを行っていたのである。

ホテルの周囲を気配を伺い、

内外の出入りによる結界の“緩み”が起きないよう確認し、その万一、その結界符が解かれる事があれば式が伝えるように設定を行う。

彼女らの出来る範囲での防衛策は全て講じていた。

それでも――

ぎちり……と、昨夜の誘拐犯の不埒な行いを思い出し、愛刀“夕凪”を握る刹那の手に力が篭った。

木乃香に何も起きない――それこそが刹那の願いである。

今度こそ木乃香を守り抜いてみせる――それが刹那の誓いである。

だからこそ一人物陰から彼女を見守り続け、学園に掛かるモノ達から守り続けていたのだ。

しかしここに来て、

この京都に入ってから、刹那の心境に変化が訪れていた。

頑なだった彼女が、別の人間を頼りにしだしたのである。

麻帆良において一緒に仕事をしている真名も、その力を“当て”にはしていたが“頼り”にはしていなかった。

彼女は過去において“同族”や心無い者達から白眼視されてきている。それが彼女を頑なにしていたのだろう。

だが、子供らしく真っ直ぐなネギや、これまた真っ直ぐな明日菜という理解者――友達を得て、彼女の心に明らかな変化が訪れていた。

だからこそ、明日菜やネギと会話している中で笑顔が見えるようになってきているのだろう。

明日菜はその事に気付いてはいたが、あえて口にするような愚行は犯さなかった。

“意地っ張りの友人”が一人いるお陰で、明日菜は刹那のその変化を促す為に口にしていないのである。

前を行く刹那の背を見ながら、彼女のその変化によって木乃香との仲を取り戻せるよう願わずにはいられない明日菜であった。

「……それにしてもカモ君は何を書いてたんでしょうか？」

「知らないわよ。あんなエロオコジョ」

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊

『ククク……細工は流々……仕上げを御覧じろってな……』

夜の闇に紛れ……られるはずもない、白い物体がごそごそと蠢いていた。

その口元はいやらしく歪み、
その目は欲望に輝いている。

有体な言葉で綴るならば悪党。
様子から鑑みても悪事を行っている者である。

その白い物体はナマモノで、自称“妖精”なのだろそうだ。

とても信じられない話であるが、契約を司っているオコジョ妖精が彼の正体……なのだろう。多分。

彼の名はアルベール＝カモミール。
ネギを兄貴と慕うオコジョである。

彼は今、ホテルの周囲に怪しげ且つ素早い動作で奇妙な魔法陣を描きまくっていた。

その数四つ。

嵐山ホテルを中心にして大きな結界陣を描き、それを基点として四方に小型の――とは言っても、かなりのサイズがある――魔法陣で抑えている。

ナニをどーみても碌なモンじゃないようだが、これでも一応はネギを思えばこその行為。

これが成功すれば、ネギの戦力が増し、少女らの安全度が上がる。

そう得心しての事だ。

だから決して私心は無い――

『カード一枚につき五万オコジョ$……

全員なら……百万長者だぜ！！　ウィ～ハハハァ！！』

と思う……

眼を$に変え、涎すら垂らしつつ方陣を書きまくってるカモ。

眼前に広がるのは夢のパラダイス。

女の子の下着が好きであり、エロオコジョという栄冠持ちでもある彼は、正しく競馬等のギャンブルで獲らぬタヌキの皮算用をする

オッサンそのものだった。

最後の紋様が書き終わり、よしっとガッツポーズ（？）を極めるカモ。

そんなカモの首根っこを、

ひょい……

『……あ？』

何者か摘んで持ち上げた。

『や、やいやいやいっ！！　ナニしやがんでぃ！！
オレっちは猫じゃねーぞ！？』

猫の正式な持ち方は首根っこではない。

――なんて事はどうでも良いが、カモがそうベランメェ口調で啖呵を切り、摘み上げた者のツラを拝もうと身を捩ると、

「あ〜〜？　イタチが喋てるアルよ〜〜？」

「はっはっは〜〜　くぅよ〜〜　この御仁はオコジョでござるよ〜〜？」

二匹のヨッパライがそこにいた。

古の様子を見、とりあえずはと話を聞いていた楓であったが、その内容を知るに連れて段々と雰囲気がおかしくなっていった。

ハッキリ言って横島の語っていた内容とかなり違う。というか、完全に見当違いなのだ。

確かに最初は木乃香に対して上手い慰めが思い浮かばなかった事で悩んではいたのであるが、それは横島が自分を経験を踏まえた話を彼女にしてやるまでの事。

そんな話をしただけで解決するほど簡単な事ではなかろうが、それはそれで木乃香の為にはなった筈だ。

しかし問題は、その横島が例え話に使った彼の過去の事である。

――本当に大切なモノは無くしてから気付いてしまう――

その彼が語ったと言う言葉は楓の胸にズシリと圧し掛かっていた。

彼女は既に両親が健在である事は聞いている。

というか、あの二人が老衰以外で死ぬとは思えない――そう彼は語っていた。

すると、彼の友人か近しい者という事になるのだが……

古はその相手が恋人だったのだろうと予測していた。

単に彼女の勘であり、当てずっぽうなのであるが、どういう訳だか楓もそうなのだろうと確信している。

古同様に女の勘がそう言っているのだ。

そして古から言われた事と、自分が前から抱えている疑問から彼の性質である“女に対して攻撃ができない”理由がおぼろげではあるが解かった気がしたのである。

奇しくも古と楓は同じ事を考えていた。

彼の胸の中にはまだその相手が生きており、いなくなった後もずっと引き摺っているのではないか……と。

悲しみに似た奇妙な落ち込みを憶えつつ、しばらく二人して池に映る月を無言で眺めていたのであるが、

「ん……」

「忝い……」

楓からステンレスの水筒を返してもらい、彼女が手に持ったままのフタに液体を注ぎ入れる古。そして礼を言って呷る楓。

元々甘党で、飲酒の経験が無い所為だろうか、その液体は妙に辛くそして苦く感じた。

それでも楓は二杯、三杯と立続けに呷り、古にも返杯して飲み続ける。

やがて水筒が空になる頃には、

「あ〝〜〜……月がふたちゅあるでごじゃるよ〜〜」

「ナニ言てるアルか〜〜？　前からアルね〜〜〜」

リッパなヨッパライが出来上がっていた。

『ひぃ〜〜っ！！　姐さん達、勘弁してくだせぇっ！！』

そんな二人に絡まれたらカモも堪ったもんじゃない。

何せ酔って頭のネジが四，五本飛んではいても武道四天王の二人である。
初来日時に明日菜の風呂桶攻撃を受けつつも彼女の胸ボタンを外したカモとはいえ、その手を掻い潜って逃げるのは不可能に近かった。つーか、ぶっちゃけ無理だ。
何せ首根っこ捕まれていので身を捩る事しかできないのだから。

『く……こ、こうなったら……』

後が怖いのでしたくはなかったが、首の皮を限界まで伸ばして身体を捻り、自分を掴み上げている古の手に噛み付いて脱出を試みようとする。

が……

がぎっ

『ふぎゃっ!?　な、なんでこんなに硬ぇんだ?!』

「あはは～～　甘いアルよ～～～」

何と古、ちゃっかり硬氣功で防護してたりする。

「う～～む……古～～……こーゆー小動物はどんな料理がいいで

ごじゃるか～～？」

「ん～～？　そ～～アルね～～～……サンドイッチ～～？」

『姐さんはドコの巨人ハーフっスか?!　お助け～～～～っ!!!』

二人の少女の肌は酒の所為か薄赤く染まっており、頬もピンクになっている。

胸元が大きく開き、かなりギリギリでまずい楓もそうであるが、浴衣もだらしなく着崩し、バストサイズは兎も角、プロポーションのバランスがいい古も普段以上に色っぽさを見せていた。

普段のカモならばムハ～とか、ウホ～とかいって喜びそうなものであるが、今の状況はそれどころではない。

酒のツマミ宜しく、美味しく食べられてしまいそうなのだから生存本能の方が何より勝っていた。

「あはは～～　冗談はこれくらいにしとくでござる」

『じ、冗談だったっスか!?　な、何か眼がマジだったっスけど……』

「ホントに調理するアルよ～～？」

『ひぃっっ!!　ご勘弁!!』

二人とも体力バカであり、特に楓は忍の修行もあってか毒物に対する抵抗力が異様に高い。
だから意識的に酔おうとしない限りそうそう酔いが長続きしないのである。

まぁ、それでも脳に酒が回っているのだから頭のネジが飛んでいる事には変わりは無いのだが。

「それで、カモ殿は何をしてたでござるか～？」

『あ、いや、その……って、あっしが何モンか知ってんですかい？！』

「ははは……ネギボウズの使い魔みたいなモノでござろう？」

『ま、まぁ……使い魔とは違うんスけど……』

彼からすれば相棒であり、マネージャーのつもりである。
腐っても妖精のつもりであるから、使い魔と言われるのはちょっと抵抗があるのだ。
一応、麻帆良には使い魔として登録してはいるが（その方が身元がハッキリするから）。

「で……？　この法陣は何でござるか？」

『え？　あ、ああ……これは仮契約の魔法陣でして』

意外にあっさりと吐いてしまうカモ。

まぁ、正直に言わないと血抜きして唐揚げにするアルよ～？　というオーラを放たれては口もすべらかになるというものだろう。

だから今回の裏の計画も、言わんでもいいのにウッカリと二人にぶっちゃけてしまっていた。

「ほほぅ……つまり、修学旅行のゲームイベントとして皆にネギボウズにキスをさせ……」

「このヘンなカードを大量に作るつもりだたアルか～？」

『ヘンなカードじゃねぇって！！
ちゃんとしたマジックアイテムなんですぜ？！』

カモが取り出した三枚のカード。

一枚は明日菜が大きな剣を持った綺麗なカードなのだが、後の二枚は目つきのデフォルメされた悪い明日菜が『ギタギタよ』と言ってたり、やたら間がヌケた顔の木乃香が『ほわ～』と言ってたりしているデザインで、まるで落書きのよう。

だが、このカードこそがネギとの仮契約の証であり、彼との繋がりを意味するパクティオーカードなのである。

因みに二枚の落書きのようなカードはスカカードといい、ちゃん

と仮契約を行えなかったカードという事らしい。

「ふーむ……つまり、このカードは術者と従者とを繋げているのでござるか……」

『そう！！
つまりこのカードを使えば兄貴から魔力を借りてパワーアップができ、専用のマジックアイテムを呼び出す事も出来るんスよ！！
因みに兄貴の呼びかけに応じて呼び出す事も可能な優れものなんでさ！！
という訳で、どーっスか？　姐さんらもここは一つ……』

「いや、パワーアップとかはぶっちゃけどうでもいいでござるが」

「そーアルなー」

ガガーンっとショックを受けるカモ。

楓も古も武闘派であり、己を高めてゆく事に喜びを見出すタイプである。
だから、他の力に縋るようなパワーアップには余り興味が無いのだ。

しかし、そんな事よりかなり興味深い事がそこにはあった。

「ふむ……という事はこれは術者と従者……

言うなればパートナー同士との結び付きを強める事ができるでござるな？」

『……へ？　あ、いや、まぁ、それはそーなんだが……』

幾分酔いが覚めたのか、古も楓が何を聞こうとしているのか解かっていた。

その眼差しを受け、楓も無表情のままではあるがコクリと頷く。

「……時にカモ殿。実は拙者らに提案があるのでござるが……」

『……何スか？
あっ、もしかして兄貴と仮契約を「くだらん事言たら、蒸篭で蒸し焼きにするアルよ？」……ナンデゴザイマショウカ？』

ひょっとしたらネギと仮契約をしてくれるのではと期待したのであるが、背後から立ち昇る殺気（いや“食”気？）によって口が塞がれる。

恐怖によって彼はカクカクとしたロボと化してしまうが、二人とも全く意に返さなかった。

それより何より、何だか気配がヘンだ。

意気込みというか何とゆーか……背後にミョ～な炎が見える気がしないでも無い。

『え、ええ～～と……』

カモは何だかとんでもなく嫌な予感をヒシヒシと感じている。
ああ、兄貴があの真祖の吸血鬼と闘う時もこんな不安を……いや、もっと何かメンドーな事が起こるような……

等と思い悩んでも後の祭り。
二人に捕まった時点で選択肢は異様に狭いのだから。

曰く――

一食べられるか（DEAD）言うこと聞く（or LIVE）一

なのだ。

「いや何……簡単な事でござるよ……」

カモの背後にいる古に目配せをし、二人して何やら頷き合っていた。

月明りを逆光にし、ニヤリと口元だけを歪ませて見せていた楓は、

まるで吸血鬼のようだったと後にカモは語ったという。

そして……

「修学旅行特別企画！！

『くちびる争奪！！

修学旅行でネギ先生とラブラブキッス大作戦』～～～～～～

！！」

――その夜、ナニかが起ころうとしていた。

前編（後書き）

注意　＜お酒は二十歳になってから＞　超☆今更ですが。

かのこ　は最初出すつもりだった使い魔で、断念した理由は…忘れましたw

馬鹿だから馬か鹿。

流石に逆さ読みでカバを使い魔にする訳には……と悩んだ事だけ覚えてします。

因みにサクランボを食べているのは、ケルト神話から。

主食…という訳ではありませんが、かのこは果物が大好きです。

サイズは、ちっちゃい子が乗れる態度の大きさです。

彼の使い魔になった事で、不条理なパワーアップをする事間違いなし。

あ、だから削ったのかな？

兎も角、中編に続きます。

中編

『くちびる争奪！！
修学旅行でネギ先生とラブラブキッス大作戦』――とは？！

各班から二名ずつを選手に選び、新田先生方の監視を掻い潜り、旅館内のどこかにいるネギ＝スプリングフィールドの唇をＧＥＴするという、何というか名前の通りそのまんまのゲームの事である。

妨害は可能！　ただし武器は両手の枕投げのみ！！

上位入賞者には豪華商品プレゼント☆

ただし、新田先生に見つかった者は他言無用。朝まで正座！！
死して屍拾うものなし、死して屍拾うものなし！！

……何だかペナルティの方が大きい気がしないでもないが、それでもイベントに飢えた女子中学生らにはかなり受け入れられていた。
とゆーか、クラス委員長が率先していた気がしないでもない。

だが、脳天気な女子中学生らの知らない裏では恐ろしい陰謀が蠢いていたりする。

既に少女らが宿泊をしているホテル嵐山の周囲には魔法陣が描かれており、これにより当旅館内でネギとキスをすれば即仮契約が成立してしまうのである。

つまりこれは、ゲームイベントの名を借りた仮契約者大量ＧＥＴ作戦だったのだ！！

おまけに班＆個人の連勝複式トトカルチョまで実施するので、どう転んでも企画をぶったてた朝倉　和美＆アルベール＝カモミールはウハウハなのである。

しかし――

「アンタ、どうかしたの？　何か凄く疲れてるような気がするんだけど……」

彼女の言葉は自分の胸元に投げかけられていた。

その朝倉の胸元から顔を出しているのは今回の相方であるオコジョ妖精カモなのだが……なんというか、白い体毛を灰色にしてぐったりとうな垂れていたのだ。何だか白いウナギの様でもある。

『いや……なんつーか……理不尽な仕事をさせられてよ……』

「は？」

『何でもねぇ……
いや、上手くいけば丸儲けになるわけだし、結果的には良い方向にいくかも……』

「ふぅん……？」

何だか要領を得ない朝倉であったが、聞いてはいけないよーな気がしたからスルーしてやった。このオコジョが何だかボロボロに疲労している事もあって、流石に追い討ちは気が引けたのかもしれない。

しかし、それでも美少女の胸の間にいる所為か何とか気力が回復してきてヨロヨロと身体を起こし始めるカモ。
疲労困憊とはこの事だろう。

何せ脅しに脅され、魔方陣の契約対象者の式の中にもう一名の名前を追加させられたのだから精神的にもかなりキていた。

そんな事をムリヤリ書き込んだのだから折角の仮契約式が崩れたりしない様に調整するのは大変だったのだ。

『それにしても……あの名前のヤツって一体何モンなんだ？』

事情を知らないカモは只首を捻る事しかできなかった。

少女らの裏で蠢いていた朝倉とカモ。

しかしそれに便乗する者が現れている。

仮契約&トトカルチョというその思惑の中、更にその中で別の思惑が割り込みを掛けていた。

それは……

「修学旅行特別企画!!

『くちびる争奪!!

修学旅行でネギ先生とラブラブキッス大作戦』～～～～～～!!」

各部屋のテレビに映し出されたのは各班代表の少女らの姿。

画面は六分割され、五つの代表の様子をそのまま見る事できていた。

「キャ――っ!

始まった――っ!」

「なかなか本格的じゃん――」

イベント開始の合図に、観戦側の少女らから小声の歓声が上がる。

旅館内の防犯カメラまでクラックしてこんなイベントをかましている訳であるが……勝手にこんな改造をして良いのか？　という話も無いわけではない。

無いのだが……無駄に技術と能力のある者だらけで何時も訳のわからない騒動を起こしている麻帆良の生徒らは余り気にせず画面に見入っていた。

無論、麻帆良の頭脳とまで言われている超　鈴音ならもっと別なやり方をしていたかもしれないが、自分からそこまでちょっかいを掛ける事は余り無いし、今回は完全に傍観者である。

何せ賭けても無駄だと理解しているから、トトカルチョにも関われないのだ。

彼女らは本当に楽しげに、少年の唇ねらうハンターとなった少女らに声援を送っている。

手堅いのであれば2班－4班の一点買いだとか、3班は本命だとか騒ぎつつ。

何というかプチギャンブラーを楽しんでいるようだ。

その班の代表者達であるが……

『うぐぐ……

なんで私がこんな事を……』

『つべこべ言わず援護してくださいな！
ネギ先生の唇は私が死守します！！』

3班代表選手
雪広　あやか
長谷川　千雨

死守っつーか、自分の唇で塞いで守るつもりなんだろ？　とかツッコミを入れたい気がしないでもないが、そうなると妄想に浸ってウザいので黙っている千雨。
ヤる気の塊あやかと、全くもってナッシングの千雨のペアである。
ただ、あやかのショタコンパワーに皆の期待が掛かっていた。

『よ――し、絶対勝つよぉ――っ！！』

『エヘヘ……♪　ネギ君とキスかぁ……んふふ……』

4班代表選手
明石　祐奈
佐々木　まき絵

安定感のある運動部二人組。
バスケ部の祐奈と新体操部のまき絵だ。

何だかネギを可愛いと思っているまき絵は兎も角、祐奈の方はゲームで勝つという気力だけが前に突き出ていたりする。
そのバランスと勢いに期待がかかっていた。

『あぶぶぶ……
お姉ちゃ～～ん……正座はいやです～～』

『大丈夫だって！
僕らはかえで姉から教わっている秘密の術があるだろ』

『そのかえで姉と当たったらどうするんですか――っ』

1班代表選手
鳴滝　風香
鳴滝　史伽

小学生然とした外見の双子が廊下を駆ける。直後ろからついてくる妹は半泣きだ。
前を行く左右に髪をまとめているのが姉の風香で、泣きながらもついてくる髪をシニョンにしているのが妹の史伽である。
技術は未知数。だが、ひたすら学園内を歩き回っている“さんぽ部”なので体力“だけ”は折り紙付きだ。

「ゆ、ゆ、ゆえ～～……」

「全くウチのクラスはアホばかりなんですから……
せっかくのどかが告白した時にこんなアホなイベントを……」

5班代表選手
綾瀬　夕映
宮崎　のどか

押しの弱いのどかの頭が自分より身長の低い夕映とほぼ同じ位置にある。つまりはそれだけ腰が引けているという事だ。

その夕映とて何時もならこんなオバカなイベントに関わる事はあまりない。

目を前髪で隠しているほど内気であるのどかが勇気を振り絞って告白した矢先に、その相手の唇を皆が奪おうというのだから参戦せずにはいられ無かったのである。

「ゆえゆえ　いいよ～～～
これはゲームなんだし……」

「いいえダメです」

何時ものように一歩下がって遠慮しようとするのどかの意見を、夕映は目を光らせて却下した。

確かにネギは今一つ頼りないし、ぶっちゃけお子様であるが、同年齢の少年よりかはメンタル面が遥かに大人であるし、何より粗は目立つものの既にイギリス紳士としての気遣いを見せる事ができている。

のどかは知らない事であるが、夕映は麻帆良の図書館島の地下で彼に守られた事があるのだ。

無論、全然頼りにならなかったのだが、それでも彼は彼なりに必死に自分らの事を考えて行動してくれていた。

数日とはいえ一緒にいたからこそ、夕映はネギの事を大人の中でも最もマトモな部類にはいる男だと判断し、あれから彼の事をそこらの凡庸な教師らよりずっと頼りにしていたのである。見た目は変わりないが。

言うなればネギは先物少年。

正に今がお買い得なのだ。

彼ならばのどかを泣かせたりはすまい。

『絶対勝ってのどかにキスさせてあげます！
行くですよ！！』

『う、うん――』

嗚呼、なんと美しきかな友情……

か弱い友人が勇気を振り絞って告白をした初恋の相手、ネギ。
そのネギとの仲を取り持とうという夕映の友情には涙を禁じえない。

――そんな様々な想いが交錯する中、別の思惑を持って行動している者達がいた……

その二名、
普段よりずっとテンションが高まっており、その雰囲気からもオッズが上げられていて中々な人気馬となっている。

確かに気合の入り具合だけでみれぱ確かに対抗……いや、本命とみなして良いかもしれない。
彼女等の地の戦闘能力，持久力は班代表どころか学園でもトップクラスなのだから。

嗚呼しかし……
だがしかし、例え彼女らが最初にネギに接触しようとも、絶対に勝者となる事は有り得まい。

いや――“克つ”事はあるだろう。

何せ二人はこのゲームのルールに全然乗っていないし、乗るつもりもないのだから。

よって彼女らに賭けたとしても何の利も発生しないのである。

『ふ、ふふふ……ふふふふふ……』

体の小さい方の少女が妙な声を出して笑っている。

『ふっふっふっ……』

そして相方の身長が高い方の少女もだ。

笑い声もナニ過ぎて不気味極まりないが、その身体から噴出している気配は何だかただ事ではない気合が入っている。

それも頭の中のネジはぶっ吹っ飛ばしたまま。

だからこそ前述の通り、そんな二人の頭の状態を知らぬ少女らは掛け率を上げていたりする。

しかし二人に賭けるのは単に胴元を喜ばせるだけ。

何せ“克つ”つもりはあっても、勝負に“勝つ”つもりは無いのだから――

『拙者らは酔っているでござる！』

『ウム！　酔てるアル』

『だから判断力が鈍っているでござるよ！！』

『ウム！！　もー大変アルね！！』

『つまり……』

ウッカリと他の誰かを件の子供先生（ネギ）と間違えてもしょうがないのである。

『うむ、仕方ない事でござるな。この暗さ故に見間違ってしまいそーでござるし』

……ヲイ、忍者。

『そうアル。仮に間違てしまても不幸な事故アルね。事故』

主に相手にとって…かもしれないが。

ともあれ、何だかよく解らない思惑が交差する狂乱の夜はこうして始まりの鐘を鳴らすのだった――

（中）

■九時間目：ＰＲＯＪＥＣＴ　えー

「ううっ……？」

ぞくぞくと言い様の無い怖気が走り、思わず身体を縮込ませてしまうネギ。

従者仮契約を結んだ明日菜と、木乃香を守る為にも力を貸してくれる刹那が見回りを終え、やっと深夜になって遅れた入浴に向っていた。

そして一人部屋に残ったネギは、魔法使いの勘に引っかかったものがあるのだろうか、嫌な予感に見舞われていたのである。

「何だろ？　この寒気は……」

やっぱり不安は拭い去れない。

また西の刺客が向ってきた時にとっさに動けないと拙いので、スーツを着たままであった彼は、丁度いいとばかりに気晴らしも兼ねて外回りに出掛ける事にした。

思い出したのは刹那から借りた式符。

“奴さん”を思い出す、人型に切られたそれ。

関西呪術協会などでポピュラーに使用されている『身代わりの紙型』といわれているもので、西洋風に言えば簡易ペーパーゴーレムを生み出すマジックアイテムである。

その紙に名前（本名）を書けば、札はその名前の人物そっくりの人型をとるのだそうだ。

「ええ～と……」

ネギ＝スプリングフィールド……と口で言うのは簡単なのでであるが、ネギは元々イギリス人。

日本語会話と“読み”に関しては兎も角、“書く”方はまだ完璧ではなかった。

―ぬぎ―

「あ、間違えた」

―みぎ―

「あ……カタカナの方がいーかな？」

―ホギ＝ヌプリングフィールド―

「あれ……？　何かちがうぞ」

何枚か失敗し、それでも何とか自分の名前であるネギ＝スプリングフィールドと書き終えた彼は、その符を起こすべく教えてもらった言霊を唱えた。

「お札さん　お札さん　僕の代わりになってください」

符に込められた式が発動し、光が溢れ出す。
書かれた真の名を触媒にしてその力は人の形を取り、一瞬後にはネギのそっくりさんが彼の前に立っていた。

「こんにちはネギです」

「わ――スゴイや！！
僕そっくり。西洋魔法にはこーゆーのは無いなー……」

何だか目の焦点合ってないよーな気がしないでもないが、それでも見たこともない魔法（正確には術であるが）にネギは喜んだ。

これを上手く使えば敵の目を眩ませる事も可能であるだろうし、これから行おうとする見回りの身代わりも務めてくれる。これさえあればとりあえずの誤魔化しなるだろうし。

何せネギの代わりに布団の中で寝てくれていたら良い“だけ”なのだから。

「ここで僕の代わりに寝ててね」

「ネギです」

……何だか返事がかなり心もとない。

だが、それでもネギは気にしていないのか気付いていないのか、はたまた身代わりができた事に安心したのか、杖を片手に元気に窓から見回りに飛び出して行ってしまった。

これで本体である自分が人目に付きさえしなければ怒られたりする事はあるまい。

いや、彼“が”見つからずとも、彼“みたいなモノ”が見つかっても同じなのであるが……

「こんにちは　ぬぎです」
「みぎです」
「ホギ＝ヌプリングフィールドです」
「やぎです～～～」

丸めてごみ箱にポイ捨てしただけで、見届ける事もなく部屋を出て行ってしまったのは大失敗だ。

式符というものは、下地の形を無くさねば……つまりは破いたり燃やしたりしなければ発動する事もあるのだが……

陰陽術に詳しくない彼が知る由もなかった――

「むぅ……っ？！
何だ、このざらっとした感覚は？！」

一方その頃――
子供先生が訳の解らない寒気を覚えた挙句にポカぶちかましていた正に同時刻、
ネギ達と同様に襲撃を警戒していた横島は、かのこを連れてちょこちょこと旅館周囲を見回っていた。

そんな時、何故かはしらないがどこかのＮＴ宜しく異様なプレッシャーをピキュイーンと感じたのである。

多数の少女らから狙われているネギほどではないのだが、横島の方が霊感が高い為に僅か二人からとはいえ、受けるプレッシャーは同じだったりする。

「風邪か？　いや……何か知らんがオレの霊感にビンビン感じるものが……
何だろう……このままだったらナニかが終わってしまうような……」

「ぴぃ？」

「い、いや大丈夫だ。

やらせはせん。やらせはせんよ――
具体的に何を？　と聞かれたら困るが」

何せ横島は腐っても霊能力者である。

それも周囲が優秀すぎた故に本人の自覚は無いのだが、世界でも指折りのランクなのだ。

だから彼の勘というものは馬鹿にできない。

彼の頭に浮かぶ予感というものは“予知”と言っても良いレベルで、本当に何かの予兆だったりする。

それを理解しているのかしていないのか、横島はその怖気を気の所為とすべく、とりあえず風呂に入って汗を流そうとしていた。

人それを単なる現実逃避という。

因みに本日二度目の入浴……ではなく、これが最初だ。

……さっきは入ろうとしてエラい目に遭って機会を逸していたのである。やはり人汗流したいという想いは残っているのだろう。血溜りには浸かれたが……

「ふ……まさか女子中学生の裸体に見とれてしまうとは……
実際、楓ちゃんの歳ってばオレの半分やいうのに……
しかしエエ身体しとったなぁ……」

思い出すのは湯で火照ったのであろう、薄赤く色づいたなめらかな肌。

すっと伸びている四肢。
大きな胸。
くびれたウエスト。
腰からヒップに続くライン……そして……

「――はっ!?

い、いや……いやいやいやいやいや、違うぞ!!　オレは想像なんてしてへんぞ!!
ドッキンドッキンやしてへんぞ!?
中学生にときめいてないぞ!!!」

――いやいや……考えても見ろ。
“向こう”にいた時だって、幽霊とはいえ初対面の“あの娘”にお前は飛び掛っただろう?
あの時の彼女は数えで十五……つまり十四歳だったんだぞ?

身体を取り戻して高校に通ってはいたが、肉体年齢は変化していない筈。
だというのにナニを今更　躊躇っている?

等と真実を告げる声が心の奥から聞こえてきたりするのだが、あえて無視。ガン無視である。

「聞こえないったら聞こえないっ!!」

こうまで必死にならないと女子中学生に萌えてしまうというのか？
世界はオレに何をさせようというのか？

ドちくしょう！！　みんな敵じゃあっ！！
オレの純潔を返せぇっ！！

――ナニが純潔なのやら。

中学生に開眼しかかっただけで、世界レベルでの陰謀を疑っている横島。
何だか情けなさ過ぎて泣けてしまう話である。

いや、本当にしくしく泣いてるし……

かのこも心配して蹲って泣く彼の顔をペロペロと舐めている。
そういう無垢な慰めがいっちゃん堪えるのだが言ってはいけない。

そう追い詰められている横島であるが、彼の性質（含むセクハラ）は兎も角、その生活の環境には同情できるだろう。

何せ女子校。
男っ気が殆ど無い閉鎖空間なので少女らの普段の警戒心は相当薄い。
お陰で手を出しても良い訳ではないのに、皆ものごっつ隙を見せまくってくる。

尚且つ、年齢以外は完全におもっいっきり好みのど真ん中なのだ。

絶対にかじれない位置に人参をぶら下げられて走り続ける馬……
今の横島はそんな心境だった。

しかし、それにそれだけ耐えられないというのなら外に遊びに行けばよいのであるし、飴の力が切れてからナンパしたってよい筈だ。
成功するかしないかは別として。

だが、言うまでもなく木乃香という将来にドでかい期待がもてる美少女を横島が放って置く事等できる訳がないし、何より学園長である近衛に先に手を打たれているのも痛い。

横島とて好きで子供の姿のままでいたい訳ではないのだ。

……実は彼、子供用の衣服以外を用意されていないのである。

そうなると旅館で売っている下着以外は浴衣を着る以外手はないし、流石に浴衣姿ではナンパはできない。

手持ちのお金も大した事がないし、観光地で売っているTシャツ等はデザインが微妙だ。そんな物を手に入れたとしても当地の女性らを口説くには余りに役者不足である。

更には楓にあんなマジックアイテムを手渡されているので暴走すら任意に止められてしまう始末……

つまり、（そう言った意味合いでは）完全に手詰まりなのだ。

横島の事を心配し、信用してはいても釘もちゃんと刺してあるところは流石に関東魔法協会理事。

珍妙な頭をしてはいてもやってくれるものである。

ただ彼の煩悩パワーを人類の範疇に入れるという甘い考えをしているので、発散の時間や場を与えるという時間を取らせておらず、その所為で横島は溜まりに溜まったストレスで死にそうになっていた。

かのこという癒しがなければ本当にイロイロと拙かった事だろう。

心配してくれる小鹿の頭を涙目で撫でてやりつつ、ふと窓から外に目向ける横島。

廊下の窓からも庭の様子が解るのは月光で明るいからか。

目に入る光を辿って空を見上げると、其処には己を白い輝きで見せている月が浮かんでいた。

――おかしいな月の周りに虹が……月虹まで見えてるぞ？

ふふふ　涙で滲んでいる所為かな？

等と横島はそのやるせなさから溜め息を漏らしてしまう。

「あ……」

「え……？」

そんな彼の耳に、少女の呟きが入ってきた。

相手が美少女であれば如何な年齢であろうと聞こえてしまう自分の耳が恨めしい。

横島Ｅａｒは地獄耳なのだ。

目が反射的にその声の主がいるであろう方向を向いてしまうのが物悲しい。

相手が美少女であるのなら、眼福である事に間違いはないのだから。

はたしてそんな横島の目の先――

廊下の灯りの下にいたのは、見回りを終え、結界を強化し終えた刹那と明日菜の二人であった。

「アンタこんな時間に何してんの？」

イキナリ“アンタ”はないだろう？　という気がしないでもないが、明日菜がそう疑問を感じて問い掛けてくるのも当然で、時計の針は既に１１時を回っている。

横島は現在タダキチモードなので、こんな夜中に子供がフラフラ

と歩いていると否が応でも目立ってしまうのだ。

一瞬、返答に困り焦った横島であったが、何故だか話し掛けてきた方の明日菜が急に押し黙っていた。

はて？　と首をかしげた横島の前で、彼女は何か拙い事でも呟いたかのようにバツが悪そうな顔をして視線を下に落としてしまう。

そんな明日菜は元より、何だか相性が悪そーな気がする刹那ですらも横島の目元で何かを見出してから居心地悪そうな顔をしていた。

はてはて？　と横島が更に首を傾げる前に、明日菜がゴメンと小さい声を漏らしたではないか。

全く持って彼には余計に訳が解らない。

「な、何や？　オレがどないかしたんか？」

「う、うん……別に……」

取り合えずはそういって場を取り繕おうとした横島であったが、明日菜は曖昧な返事で返されてしまう。

刹那は刹那で何か言おうとして言葉を飲み込んでいるし。

何というか……目の前の二人よか居心地の悪さを覚えてしまうほど。

『ハ……っ！？
　まさかオレが眼鏡ちゃん（千草）にやったセクハラのショックで男性不信に？！』

確かに、二人の様子はスケベィぶっこいた後の横島に対する女達の様子に似ている。
引きが入ってる……というヤツだ。

何せアレは、後になって横島自身が身悶えしてしまったほどの変態行為だったのだから。

確かにそれを見せられた方は堪ったものではないだろう。下手をすると『男なんて――っ！』とか言って百合に走りかねないではないか。
そう思うとなおさら居たたまれなくなってゆく。

何よりかにより、ウジムシを見る眼で見られている（ような気がする）し。

だから彼は、

「え、え～～と……ま、まぁ、その……
ほな……オレ、部屋に帰って寝るわ。オヤスミ」

「え？　お、おやすみ……」

「……おやすみなさい……」

入浴を諦め、言葉を濁してその場を逃げるようにその場を後にしたのである。

というか、完全に逃げていた。

自分の変質者的行為に対する負い目もあるし、何より責任という言葉からの逃避という事もあった。

ならするなよっ！　という説もないわけではないが、命に関わってもリビドーを止められない“今”の横島は、本能の制御が異様に難しいのである。

それに彼女らから逃げたのにはもう一つ理由がある。

彼女の持ち物からして入浴であろう事は解った。

実は彼、『美少女との混浴♪』というシチュに萌えが沸き上がって理性が負けそうになっていたのである。

あーゆー行動をとった事によってヒンシュクを買った挙句、その少女らに興奮でもしたら最悪ではないか。

だからトンズラぶっこいたのだ。

明日菜の方は知らないが、刹那の肌の白さや肌目の細かさはとっくに横島実装ＨＤにハッキリバッチリ焼きつけられている。

ロリ否定を掲げている横島ですら“記録”してしまうほど美少女である刹那。
ドコをどー見ても中学生とは思えない楓や真名。何気にプロポーションが良くてしなやかな肢体の古。
麻帆良という地は、彼が知っている範囲だけでも美女美少女だらけという、とんでもない環境なのだ。

その中でも上級である刹那や明日菜といった美少女には、“押さえ”がそう利くとは思えなかったのであるし……

「って、“押さえ”ってナニ?!
オレは別にロリちゃうはずやんっ!!
ジャスティス!! しっかりしろ〜〜〜〜っ!!」

「ぴ、ぴぃ?!」

「おがーんっ!!」

涙の軌跡を後ろに残しつつ、横島はただ駆けた。
小鹿が追従しているので見た目のおマヌケさは如何ともし難かったが、駆けるしかなかった。

何しろアイデンティティが船の中でするジェンガより揺らいでいたのだから。

因みに――
横島の心の中で悟りを得たジャスティスは、高い崖の上で直立不

動で腕を組み、世紀末覇王も裸足で逃げ出す鋭い眼光を放ち、

『可愛ければそれでＯＫ！！』

とサムズアップかましていた。

「……泣いてた……みたいね……」

「ええ……」

見回りの所為もあってかなり遅い時間となってはいるが、流石にそこは女の子。入浴は欠かせないらしい。

着替えを持って歩く二人であったが、タダキチと分かれてからは何だか足取りが重かった。

というのも……

「そうよね……家族を一度に無くしたんなら、笑ってばっかじゃいられないわよね……」

「ですね……」

何というか……タダキチ（横島）は無くした家族を思い出し、一人静かに泣いていた……と見られていたらしい。

“向こう”でも良くも悪くも誤解されまくっていた彼であるが、異界の地に来てまで同じように誤解を受けているのだから大したものである。

刹那ですら、列車内で疑った事を後悔しているくらいであるし、普段からガキは嫌いだといっている明日菜ですら後ろを振り返って見えなくなった彼の背を見つめていた程だ。誤解もここまで深まれば大したものである。

いや、やはり世界を越えてまで発動する横島クオリティに感心すべきか？

「そう言えばさ……」

「……はい？」

「このか……あの子に何か言われたみたいね」

「みたいですね……」

明日菜に言われて思い出すのは木乃香の笑顔。

諦めたら終わり。

だからウチから離れて行く理由が解るまで……ううん、理由が解ったらそれをどないかする！！　そう言って突撃してくる木乃香。

奈良公園で強引に逃げた事でやや落ち込んでいた刹那であったが、そう言いながら何かを吹っ切ったように突撃してくる木乃香のそんな笑顔に救われた気がした。

それもあの少年が助言してくれたからしい。

余計な事を……という気がしないでもないが、喜んでいる自分も確かにいる。

「本当に大事なものは、無くしてから気付く……か」

「……？　それは？」

「ん？　このかが言ってたの。
あの子がそう　このかに発破かけたんだってさ」

「そう……ですか……」

刹那にはその言葉の意味が解る気がした。

“同族”からは疎まれ、“こちら側”からも白眼視されていた彼女から言えば、木乃香という存在は唯一の心の拠り所だった。

幾ら彼女を守る為とはいえ、その彼女から距離を取っているのは木乃香に会う以前よりも孤独感が増す。

そしてこの学園の皆が家族代わりである明日菜もそんな木乃香の気持ちが解る気がした。

「家族……かぁ……
私には良く解んないけど……仲の良かった友達が急に居なくなったって辛いんだから　そりゃ辛いわよね」

「う……」

改めて言われ、今ごろになって思い直す。
自分からこんな風に自分で作った壁に対して孤独を感じていたのだ。優しい木乃香なら尚更だろう。

今更ながら、こんな方法しか思いつかなかった不器用な自分に溜め息が出た。

家族を“知らない”という明日菜は、その代わりに麻帆良での友人知人がそれに相当する。
だからこそ大切な絆である友達を大切にし、おせっかいをかけるのだから。

と、そこまで明日菜の事を考えている刹那は、不意に彼女のセリフに引っ掛かりを覚えた。

彼女は『家族の事はよく解らない』と言っていたのだ。

「……？　よく解らないって……神楽坂さん……」

「あれ？　言ってなかったっけ？　私、麻帆良に来る前の記憶無いのよ」

「え……？」

実にあっさりととんでもない事を口にされ、刹那は二の句が出なくってしまった。

しかし明日菜にとっては本当に何でもない事なのだろうか、直に思考は木乃香や彼女を狙っている西の輩に向いてウンウン悩んでいるではないか。

刹那はただ、そんな彼女の後姿を呆然と見詰める事しかできなかった。

明日菜はやはり、意外な話をしたという風もなく平然と歩いている。

昔からであるが、一人でも別に寂しさは感じていなかったのだ。

何せ小等部まではまだ親代わりだった高畑がそばにいてくれていたし、その後も高畑は元より木乃香やあやかとかが側にいてくれたし、彼女の感情の成長と共に友人知人が増えてきたのだから寂しさを感じる事がなかったのである。

いや、だからこそそんな風に知り合いが離れて行く事による淋し

さを感じられるのだろう。

自分から距離を取っていた刹那には解り辛かった事で、明日菜から話を聞いて初めてそれに気付いたと言える。

今更ながら木乃香の想いを知った気がし、刹那はまた落ち込んでいた。

はたしてそれで本当の意味で木乃香を守っていたといえるのだろうか？

距離を置いたのは自分を無理に納得させただけだったのではないだろうか？

情けない……

所詮、私は守れた気になっていただけなのか……

そんな想いが何時の間にか彼女の足取りを重くしていた。

だが、何時までも悩んでいる暇は無い。

ここにいるのは彼女一人ではないのだ。

彼女が付いて来ていない事にやっと気付いた明日菜は後ろを振り返り、

「あれ？　どうかしたの？」

何気ない口調で問いかけて来るのだから。

「い、いえ……」

頭を振り、何か口にしようとした言葉を飲み込み、足早に彼女の横に駆け寄って行く。

下手に言葉にすれば、彼女や木乃香に対して何か失礼な事を言ってしまいそうだったのだ。

刹那はそんな自分を叱咤しつつ明日菜の横に立ち、肩を並べて夜の廊下を歩き始めた。

魔法の知識が無いからか、やや見当違いな木乃香を守る術のアイデアをあーだこーだと口にして行く明日菜の隣で、刹那は大切な人を守ろうとするからこそ距離を置こうとした事が、

――自分に対する言い訳である事を、やっと受け入れ始めていた……

「……それにしても、何でココに小鹿がいるのかしら？
何かアイツに懐いてたみたいだけど……」

「さ、さぁ……？
（何だかあの小鹿、やたら霊格が高かったような気が……）」

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊

何だか自分の窺い知らぬところで（何時ものように）やたら影響を与えている横島であるが、そのトンズラぶっこいた彼が今どこに居るのかというと……

「ナニ真面目に仕事してんだろ……オレのキャラとちゃうんやけどなぁ……」

その姿は旅館の屋根の上で見つける事が出来る。

……いや、確かにイロイロな理由で敗走し、泣きながら部屋に戻ったのであったが、部屋に戻った瞬間にとてつもない怖気に見舞われ、

シマフ――

――ナニカガヲワッテ

という、天啓を授かってしまったのである。

慌てふためき　かのこを抱き上げて部屋を飛び出した彼を誰が責められようか？

……まぁ、『大げさ過ぎっ！！』という説も無きにしも非ずであるが、横島的にはヲワリだとゆーのだからしょうがなかろう。

煩悩そのものを霊力集中のスターターにし、萌える事によって出力を増していた非常識な男であるのだから、そう言った女性のストライクゾーンに煩くなってもおかしくない……のだろう。多分。

それでも大人になってマシになった筈なのであるが……

「……まだ“安定”してないんだなぁ……ヤレヤレ……」

誰にも語っていないが、横島の心には“綻び”がある。

それが通常人では考えられない速度で修復されていっているのだが、それでも限度はあるのだ。

だから十七歳時の煩悩の暴走と同レベル“程度”で終わっているのはかなりマシなのである。

何だか空から自分を見下ろす月にまで同情されているようで余計に物悲しくなってきた。

横島はその月に軽く溜め息を吹き付け、気を取り直して霊波を探って異常がないか調べ始める。

刹那達が見回っているだろうし、楓も気を付けてくれている“ハズ”だ。

それでも念の為…と再確認するのは護衛対象が女の子だからだろう。

これがオッサンを護るとかの任務であったら既に寝ていたかもしれない。

――異常は……ないようだ。

刹那も何やら結界を強化しているようであるし、彼も及ばすながら…とコッソリと霊気を送り込んで、符の強度ギリギリまで防護の力を上げているのだから、無理に旅館内に侵入しようとすると横島にも伝わってくるだろう。

「でもまぁ……昨日は結界符を使ったってのに入られたからなぁ……油断できなん」

流石に結界から出ると同時に千草に入られた……等という自分と同レベルのオポンチをネギがかましているとは思いもよらない横島であった。

それでも油断をしていないのは成長した証なのだろう。

「しっかし……何で屋根の上で酒の臭いなんかがするかなぁ……やっぱ誰か侵入してんのか？」

紛いなりにも　かのこも使い魔なのだから頑張ろうと鼻をぴすぴすさせて調べようとするのだか、やはり酒気に中ったかフラっとしていた。

そんな小鹿を抱き上げて代わって調べる彼であったが、ツマミや肴の跡も匂いも無い事から酒だけ飲んでいた事が感じられる。

それ以外の痕跡らしい痕跡は残っていない。

仕方ないなと思いつつも、痕跡を探るがやはり何もなし。これで本当に侵入者があったならそれは容易ならざる相手となる。流石の彼もそれは勘弁して欲しかった。

意外と真面目に仕事をしている横島であるが……やはりここで宿泊しているのが女の子。それも未来の美女である現美少女の安全が掛かっているのだから当然の事と言えるだろう。

きちんと隅から隅まで目視で調査し、霊気を発して調べて違和感の無さまで調査を続けている事からも、その重要度が解るというものだ。

そして彼は横島忠夫である。

その超特殊な鼻は酒の種類を臭いで嗅ぎ当てられずとも、女の匂いはバッチリ嗅ぎわける事ができるワケで……

「あ、あれ？　何か楓ちゃんと古ちゃんの残り香があるような……」

実にアッサリと誰が居たか理解してしまっていた。

彼に問えばその香りの見分け方を熱く語ってくれるだろうが、そんな事を詳しく文字で表したら検閲に掛かるか、R禁指定を喰らって削除されたりする事請け合いだ。

兎も角、彼の超感覚によると件の二人はついさっきまでここに居て酒を飲んでいた事となる。

言うまでも無く正解であるし事実だ。

ミイラ取りがミイラに……って感じがしないでもないが、ともかく古を探していた楓はここで彼女を見つけ、イロイロあって一緒に飲みまくるというオバカさんかましたりしているのだから。

「……まさか……な……
オレじゃあるまいし……」

しかしそこは無駄に自己評価を低くして自分を知る男。

自分の様なバカをあの二人に限ってする訳がないという、よく解らない信頼を見せていた。

未成年時から何時もノリで自棄酒を呷ってしまっていた彼だからこその自負（？）と言えよう。

だから横島はこう考えた。

結界が張られているにもかかわらず、古と楓はここに飲酒の跡…
…あるいは飲酒している人物を発見し、それを追っている……と。

なるほど確かに多少の納得はできる。

自分に何の連絡も入れていないのは妙だと思わないでもないが、そーゆー事もあるだろう。

何せ楓はニンジャであるからして、異変の事実を確認してから報告に来るかもしれない。

「まぁ、一応は再確認してみっか……」

と、このかを抱いたまま屋根から飛び降りると、旅館の鬼門の方位から結界への見回りを再開させる事にした横島であったが……

嗚呼……ここで異変を察知していれば。

嗚呼……ここでもっと用心していればこの後の喜劇…もとい、悲劇は防げたかもしれないのに……

尤も、

―　そう……それでいいのだ　―

等と深く頷いているジャスティス（裏切りモン）が居る限りは……かなり無理っポかった。

『――っ！
いいんちょ！？』

『まき絵さん、勝負ですわっ！！』

その頃、廊下の曲がり角にて3班と4班が遭遇。

唐突な敵対存在との遭遇によって一瞬、まき絵が硬直してしまった。

無論、ネギの貞操……もとい、唇を狙うあやかがそんな隙を見逃す訳も無い。

振りかぶった右手の枕をまき絵の顔面めがけて突き出した。

ボッ！！

『ふ　。っ！？』
『も　ぅっ！？』

だが、何と攻撃は同時だった。

頭は弱くとも、まき絵は体力運動力は定評のあるバカレンジャーの一人なのだ。

その無駄に素晴らしい反射速度によって、あやかとのタイムラグをカバーし切っていた。

『もへっ……！？』

それでも攻撃力はあやかも負けてはいない。
年下への偏愛パワーもあって、たかが枕の一撃を受けただけでまき絵はピヨっている。
無論、あやかもであるが。

『でかしたまき絵！
トドメだよ、いんちょ！！』

その間隙をくぐり、同４班の相棒である祐奈が枕を振りかぶってあやかに迫った。

あやかの相棒である千雨はというと、元からやる気はゼロである。
ガキのゲームに関わる気もないし、ショタの気もないのでとっとと終わらせて戻りたい気満々だ。

だから……という訳でもないが、マジに戦おうとしている祐奈には呆れが出、

『ガキの遊びにむきになんなよ……』

と、溜め息混じりに足をかけて進行を妨害した。

『あたたっ？！』

見事に踏ん張りどころを見間違えて空振り。
あやかは九死に一生を（？）得た。

『……っと、私とした事がナニ付き合ってんだ？
とっととズラかってＨＰの更新を……』

思わずあやかを援護してしまった千雨であるが、こういったバトルには関わりを持ちたくないのが本音である。

だから、あやかと祐奈が身を起こし、向かい合ってバトルを再開させたのを確認すると、その隙を見てこの場を離れようとしていた。

と……

ばずんっ！！

「あだっ！？」

その後頭部に物凄い一撃が入った。

何というか……明らかに枕の一撃とは思えない重さが後頭部に入り、前方にもんどりうって吹っ飛んでしまう。

幸い壁で頭部を強打する事はなかったし、痛みも然程ではないが衝撃だけはハンパではなかった。

ずり下がった眼鏡を押し上げつつ、何とか体勢を整えて立ち上がる。

『うぐぐぐぐ……』

余りの暴挙に肩を振るわせつつ後ろを振り返ると、そこにはふらつくまき絵の姿。

千雨の視線に気が付くと、『へ？　な、何？』と驚きを見せているのだが、

『や……やりやがったなっ！？』

何だかんだで気が短い千雨は突如として激昂、枕を振りかざしてまき絵に襲い掛かった。

『え？　あ、ひゃあああ～～～っ？！』

そんな千雨を見、まき絵も慌てて“廊下に転がっている自分の枕”を拾って防戦に入る。

モニターに映る少女らの戦いはついに乱戦へと発展を遂げ、しっちゃかめっちゃかに枕を振り回して暴れまわっていた。

その激しさには、流石に騒動に慣れていた３－Ａの少女らも眼を大きくしている。

何せ普段は我関せずを貫いている千雨がおもっきりバトルに参加しているから……という理由からだけではない。

「ね、ねぇ……今、千雨さんに後ろから攻撃したのって……」

「う、うん……」

千雨が攻撃を受ける直前、まだ目を回していたまき絵は攻撃どころか立ててもいなかった。

そんなまき絵と千雨に間に、風のように一人の少女が天井近くから舞い降り、千雨の後頭部を枕でひっぱたいて彼女が振り返る前にまた姿を消したのである。

そして防犯カメラはその時の様子をちゃんと映写し撮っていた。

「長瀬さんだったよね……」

「だよね……」

倒すまでも無く、自滅狙い。
どつき合わせて数を減らすつもりなのだろうか？

運動能力，戦闘能力の高さは誰もが知っているのだが、その能力とは裏腹に楓自身が動く事はめったに無い。
そんな彼女が何時に無くアグレッシブに行動する事に観戦者たちも後頭部に汗を垂らしていた。

「新田せんせーが移動したアル」

「了解でござる」

騒ぎを聞きつけ、鬼の新田が動き出すのを古は物陰から窺っていた。

その背後を突き、彼が移動した方向の真反対に足音を立てず走って行く二人。

何と、楓はあろう事か騒動を誘発させ、新田を誘き出して安全路を確保したのだ。
普段の彼女からは考えれないほど手段を選んでいない。

正に外道！

「ふ……勝負の世界は情け無用でござるよ」

酒は大分抜けようだが、頭のネジも抜けたままのようだ。

いや、酒によってテンションが高められてしまい、中々治まりがつかないでいるだけかもしれない。

何せネギ＝スプリングフィールド（仮）という獲物を追い求めるハンターの眼差しのままなのだから。

「む……？」

「どうしたアル？」

「夕映殿の気配が近くでするでござる」

正に楓が察知した通り、楓らが駆けている廊下の外、屋根の縁の上を二つの影が匍匐前進で進んでいた。

前を先導するのは綾瀬　夕映、後ろに続くは本屋ちゃん事、宮崎のどかだ。

この二人、実は図書館部という同じ部に所属しており、こう言った行動には慣れていたりする。

恐らく世界で唯一サバイバル能力がないといられないクラブ、麻

帆良学園図書部の二人。
朝倉が大穴と称しているのだが、何気に当たっていたりする。

「……成る程……新田先生の目の無い外から安全路を進んでいるという訳でござるな」

「ほほう……考えたアルね」

そのまま進めば後は非常口からネギの部屋に一直線だ。
抜け目のないバカブラックの事、どうせ非常口のドアは開けている事だろう。

しかし――

「でも、私らには関係ない事アル」

「で、ござるな……横し……もとい、ネギボウズは恐らくあっちの方向でござるに」

と、楓が指すのは夕映らが進む方向とは真逆だ。

横島とのトレーニングによって、彼がわざわざ気配を隠していない限り、彼の霊気とやらを感知しやすくなっている楓はあっさりと彼のいるであろう方向を察知していた。

「うむ。
老師……じゃない、ネギボウズが待てるアル」
「急ぐでござるよ」
「アイアイ」

そして二人はまた駆け出してゆく。

飲んでから直身体を動かせば酔いが回りやすかったりするが、それは兎も角。
ネギがいる（事になっている）ホテルの端に向って二人は何だか足をやや縺れさせつつも速度を上げて行くのだった。

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊

「ひゃあああぁあ〜〜っ」

普段から声が小さく、目立たないようにしていた少女の悲鳴が聞こえた。

無事に目的地である３０４号室にたどり着いた5班の二人であったが、部屋の戸に手が触れる直前に1班代表選手である双子姉妹とぶち当たってしまう。

その二人を食い止めてネギの元へのどかを送り込んだに夕映であっが、流石に多勢に無勢。

某ＲＰＧ宜しく、両手に持った本で奮闘を続けてはいるが押されている感は拭えない。

が、流石は纏まりはなくとも仲の良さでは定評のある３－Ａの人間。

『のどか！！』

『本屋ちゃんっ！！』

のどかの悲鳴には同時に休戦してネギの部屋へと駆け込んで行った。

三人の目に入ったのは、敷かれている布団が一組。

そしてその上で目を回しているのどかの姿。

『あっ！？』

『のどか――っ！？』

見れば窓が開いており、夜風でカーテンが棚引いている。

のどか以外の人影はなく、ネギはこの部屋のどこにもいないようだ。

『窓から逃げた！？』

『史伽、追うよ！！』

慌てて窓から飛び出す二人であるが、夕映はネギを狙っていた訳ではないし、友人を見捨てる事などできる訳もない。

「のどか！　しっかりするです。のどか！」

「う～～ん……

ネギ先生が五人……」

「何言ってるですか！」

とりあえずはのどかの浴衣の衣体を整えてやり、ネギの床であろう中に寝かせる夕映。

目を回している理由は解らないが、少なくともネギがここにいないのは間違いないだろう。

いや、少なくとも、ネギがここにいたのならのどかをこのような目に合わさないだろうし、そうであったとしてものどかを放っておいて逃げたりはしないはずだ。

何だかんだで今日までの事件でネギの人柄を感じ取っている夕映は、彼の責任感や真面目さをきちんと認識していたのだ。

「となると……
ネギ先生の代わりに誰かがここにいたという事に……」

ぞくりと肩を震わせ、思わず部屋を見回した夕映であったが、周囲に妙な気配は無いし隠れている様子もない。

はぁ…と深く息を吐いて緊張を解き、ひっくり返っているのどかを目に入れる。

そんな彼女が昼に勇気を振り絞った事を思い出すと、キ…ッと自分も気を奮い立たせ、

「ネギ先生は私がきっと連れてきますから……
ここで休んでいるんですよ。のどか」

未だ目を回している彼女の手を握ってそう呟い廊下へと飛び出して行こうとし――

「!?　ネ……ネギ先生!?」

「あ、どうも夕映さん」

“それ”に出会った。

旅館の中心からみて丑寅（東北）の方位……まぁ、所謂“鬼門”であるが陰陽道においては悪鬼が出入りするところとして忌み嫌われていたりする。

だが、そもそも西を知る刹那がここの守りを疎かにする訳もなく、旅館の人間がやっているのであろうお清めの塩盛りと平行して強めの印が凡字で刻まれていた。

彼がその事を思い出したのはここに到着してからだった。

「あらら……そうだった……

まぁ、再確認できたからいっか……」

植木鉢で隠されていた印を元のように鉢で隠し、手についた土を叩いて払う。

テンパっていた所為で忘れてたとすれば、なんと間抜けな話であろうか。

そんな自分に苦笑し、横島はそのまま旅館内に戻っていった。

と……

「あ、タダキチ…君？」

「え？　あ、あれ？　ネギ…兄ちゃん？」

建物の中に入ったと同時にネギから声を掛けられ、思わず演技を忘れて呼び捨てしかけてしまう。

ギリギリで“兄ちゃん”と言う単語を貼り付ける事に成功はしたのだが、何故か気配を察知できなかったのだから驚きも大きい。

「どうしたの？　こんな時間にこんなところで」

「ええと……寝苦しかったさかい、ちょっと散歩に……」

かなり苦しい言い訳である。

何だかお兄さんぶったネギの言葉遣いに苦笑も浮かぶが、何とか表情に出さずにいられた。

そう言うネギも子供なのであるが、念の為にと見回りに出ていたのであろう。

内心、横島はそんな真面目なネギの事を感心していたのであるが……

「ああ、そうだ丁度良かった」

と、ネギは突如両手をパチンと合わせ、ミョーに嬉しげな笑みを浮かべつつ、ゆるりと横島に歩み寄って来たではないか。

「ん？　な、何や？」

「うん。あのね――」

そんなネギの顔を見て、横島は戦慄が走った。

何とネギは、白い頬を薄桃色に染めていたのだ。

「……いいんちょさん」

「！」

「……まき絵さん」

「！」

「……史伽ちゃん」

「あ！　ネギ先生」

『ね……姉さん。
朝倉の姉さん！』

「何よ」

『いや……俺っちの目の錯覚かなぁ……
ネギの兄貴が“四人”いるように見えるんだけど……』

「な……！？」

――かくして悲（喜）劇の幕は、

「タダキチ君……」

「な、何や……ネギ……兄ちゃん。そのイヤンな表情は……
オレはロリでもなければショタでも……」

「キス……してもいいかな？」

「は？」

上がった――

後編

――はっきり言って、おもっきり年下の女の子に迫られた事は初めてではない。

“向こう”にいた時、それはもー何度もあった。

そう聞けばモテテえええのぉ～とか言ってくれるかもしれないが、然にあらず。

相手があまりに身近に居過ぎた為に妹という観念をもっており、またその想いが強過ぎてそんな嬉しいものではなかったりするのだ。

それに男というものは女の子の押しが強過ぎれば逆に引きが入ってしまうものなのである。

例えば自称弟子である人狼族の少女。

ある一件から外見年齢に＋１０歳の補正が掛かり、女子中学生の外見でずっとじゃれ付かれていた。

確かにそれから何年も経ち外見もボンッキュッボンッにはなりはしたが、何だかんだで中身はおもっきり子供のままだったので気を抜いていたのが失敗だった。

ある春の日、ついに精神が生理年齢に追いつき、ものごっつアプローチに力が入ってきたのだ。

何せムリヤリ引っ張り出された散歩途中に唐突に茂みの中に押し倒されたり、ラブホテルに引きずり込まれかかったりしたのだ。
泣いて助けを呼んでお巡りさんに救ってもらった時は、何時も逃げていた相手であるにもかかわらず心から感謝したほどである。

そして職場の居候、九尾の狐の転生体。

前述の人狼娘と同じイヌ属であるが、性格は猫寄りなのでイマイチ行動が読み難かったのが災いし、いつも素っ気のない態度だったので警戒をしていなかったのだ。
それがツンデレの“ツン”であったと気付いた時にはそいつはしっかりデレっていやがった。
何せコイツに至っては幻術で外見を変えてくるものだから始末が悪い。
力いっぱいストライクゾーンの別人を装ってアプローチ掛けてきやがるのである。
いざホテルでコトを終えてから正体を現す算段だったから最悪だ。
幸いにもギリギリのところで例の人狼娘が乱入してきて事無きを得ていたのであるが……
コトもあろうにコイツはコトが終わってから幼女の姿をとって責任取らせる気でいやがったのである。

後は蝶の化身である妹分。

ぶっちゃけ、コイツには手の打ち様がない。何せ基礎能力からし

て負けまくっているのだから。
単純霊力だけで言っても１００倍はある。どーやったって勝てやしない。
外見はけっこー育ったのだけど、実年齢は十歳。その実年齢の勢いと、魔族パワーでガンガン攻めて来る。勘弁してくれってヤツだ。
だからごっつ危なかった……もうちょっとで大人に“させられて”しまうところだったくらい。

竜神族の管理人様が乱入してくれなければ、お婿さん決定だっただろう（その後で何故か自分がメインに怒られたのには納得いかなかったらしいが……）。

言うまでも無いが彼女らが人間じゃないからイヤという訳ではない。決して。
つーかそんな些細な事はどーだっていい。心から惚れた女だって魔族だったんだし。

ハッキリ言って、可愛ければ種族の壁なんてあって無きが如し……いや、“無い”のだ。

だからそんなモンに拘るほど人間を無くしてはいない。

だが……

「タダキチ君……」

赤い頬。

こちらの身長が下がっている所為で真っ直ぐ迫り来る眼差し。

そして近寄ってくる唇。

自分の前にいるのはとっても可愛い女の子……ではなく、とっても可愛い男の子だった。

「キス……してもいいよね？」

「……けんな」

「……うん？」

「っざけんなゴラぁあっ！！！」

涙が噴出す。

軸足が自然と捻られ、
縮地を髣髴とさせられる人生最高の踏み込みを見せ、
拳が霞み、掬い上げる様に少年の顎に突き刺さり、
全身のバネを使って真っ直ぐに伸び上がった。

もしその場に人がいたならこう述べたであろう。

――真っ直ぐ立ち上がる虹を見た――と。

少年は心底ホモが嫌いだった。

つーか、種族の壁なんぞどーだって良いが、性別の壁だけは越えたくないのである。

ホモなんかより、ロリの方まだずっとマシじゃいっ！！

そう思ってしまうほどに――

……どーやら解脱は一気に進んだ様である。

――少女は困惑の極みであった。

今自分を押し倒し、唇を寄せているのは彼女の担任教師。

尚且つ自分の親友が告白し、返答を待っている男性である。

「ネ、ネギ先生、見損ないましたよ!!
のどかに告白されておいてすぐ私に迫るだなんて…それはないでしょう!?」

当然、少女は抗う。

自分が押し倒されかかっている布団の中には、彼に告白した当の本人が横になっているのだから。

友情を重んずる彼女から言って当然の抵抗だ。

しかし彼は躊躇をしない。

いやより一層迫ってきている様にも見受けられる。

―接吻（くちづけ）―

……知識では知っているものの、実体験は無い。

その相手がまさかこんな子供とは――

担任教師とは思いもよらなかった……

『って、受け入れてどうするですか！？』

そう自分を叱咤する少女。

自分のアイデンティティの為にも――もとい、大切な友人であるのどかの為にもここで受け入れるわけには行かない。

残る微々たる力を振り絞って身を起こそうとするも、そうすると彼との距離がより一層縮まってしまう。

慌てて身をそらせたのはよいが、腕を掴まれた挙句、圧し掛かられた格好となり、非力な彼女はついに抵抗する術を完全に失ってしまった。

友人を思い、振りほどこうとは思うのだが力が入らない。

ぐるぐると思考が別方向に回りだしてしまい、逃げようとする思いを見失う。

やがて彼の右手がぐいっと彼女の顔を引き寄せ、その距離を更に縮めてきた。

「う……」

吐息すら伝わる至近距離。

電車内とかで出会う中年などの男臭さも無く、清潔そうな布団の匂いしか感じられない。

男性……と言うにはやや若すぎる感もあるが、それでも熱い眼差しは男のそれ。

こういった場合には子供でもこんな目をするのかと妙な感心をしてみたり……

『いえ、ではなくて……
や……あの……ちが……』

本当に抵抗したいのか、そうではないのかもはや自分では解らない。

現に、既に手は自由になっていというのに縮こまらせているだけで押しのけようともしていない。

そしてその距離は更に縮まり、吐息すら絡み合う距離と――

だ……

だめです――――……ッ

どごーんっ！！

「！？」

突如として伝わってきた衝撃に、はっとして目を開ける少女、綾瀬　夕映。

というか、瞼を閉じてキスを待つ体勢に入っていた自分に驚愕していたり。

とりあえずは何の衝撃だったのか首をめぐらせて見れば……

「な……っ！？」

点きっぱなしになっている部屋のテレビモニターには、

数人のネギが少女らに迫っているのが映し出されていた。

■九時間目：ＰＲＯＪＥＣＴ

えー（後）

ドシャァアアッッ！！

足元から虹をおっ立てるアッパーをかまされ、その少年は鈍い音を立てて顔面から床に墜落した。

木目までバッチリ読めるほど天井は高くは無いのであるが、どういう訳だか天高く吹っ飛んで見えたよーな気がしないでもない。

そんなフィニッシュブローをぶっ放った方はというと、殴られた筈の少年より痛々しい顔色をしており、涙目&怯えで土気色だ。

拳を放った後の体勢のままゼェゼェと息を荒げているのも哀れさに拍車をかけている。

その恐るべき迫力に恐怖したのだろう　かのこも逃げだしており、自販機の陰に隠れてしまったほど。

尤も、その原因は同性愛に対する恐怖なのか、ロリを肯定してしまった自分に対するショックだったのかは定かではないが……

と――

ボウンッ!!

殴り飛ばされ床に転がっていた少年の身体が突如爆発し、その後にはヒラリと紙切れが舞った。

その爆発にビクンっとはしたが、足元に舞い降りた紙切れを見て直様“それ”が何であるかを理解する。

――ミギ――

その人型に切られている紙には、そう書かれていた。

ゆっくりと前かがみになりその紙切れを手にとる。

念の為、霊波を探ってみるとやはり式“紙”。

彼の“向こう”での知識の中に、式神ケント紙というお手軽アイテムの存在があった。

何か書いてある名前が違うような気がしないでもないが、アレによく似た使い方をするのだろう。

くくく……

グシャリ。

その紙を握りつぶし、少年…偽ネギを殴り飛ばしたその子供は異様に肩を震わせ、異様に黒いワライ声を漏らしていた。

ぐわっと顔を上げたその目は鬼のように釣りあがっている。

「かのこ……」

「ぴ、ぴぃ！？」

何時もは素っ頓狂ではあるが優しい彼であるが、コトがコトだけに堪忍袋の緒はぶっちぶちに切れていた。

かのこの方に振り向かず声を掛けていてもプレッシャーが伝わって来るほどに。

「イイコだから部屋に戻って大人しく寝てなさい。
オレの布団使っていいから」

「ぴ、ぴぃっ！！」

付き合いは浅いが何だか逆らい難い声音に直立不動で応えた　このかは、恰もカートゥーンのようなコミカルな動作で、瞬動もかくやと言った速度でもって彼の部屋にすっ飛んでいった。
やや涙目だったのは、そーとー怖かったのだろう。

それでも嫌っていないようなのは流石というか何というか。

しかしそんな彼であったが　かのこが認識外から離れた瞬間、放っていたプレッシャーを瘴気の如く澱ませている。

恰も怨念と怒りをごっちゃ混ぜにして煮詰めたかのように……

「そーかそーか……

やはりアイツは年齢詐称の中年エロ親父で、
自分にとって邪魔者であるオレをホモの道に誘う変態魔法使いだったって訳か……」

開き直ってロリの道に進むとしてもそれは仕方がない（？）と諦められるのだが、ＢＬやホモ道は何が何でも言語道断一心不乱に一生涯御免である。

横島的に言えばそんな道に引きずり込もうとするヤツは悪魔か外道。存在すら認められぬ悪鬼羅刹なのだ。

ぶっちゃけ超絶誤解であるが、今さっきまでギリギリのラインまで追い詰められていた心理状況と今までの（横島的見解による）状況証拠からいえばそう取られてもしょうがないのかもしれない。

それに頬を染めた少年にキスを迫られ、自我を守る為にウッカリとロリ肯定してしまった八つ当たりもあったりなかったりする。
そうなると追い詰められていた分、キれるのは早い。

ボゥワッと彼の手の中で式符が燃え落ちる。
静かな怒りが霊波に混じり、符の発火点に達したのだろう。

そんな横島の内宇宙に住まう”ジャスティス”。

何気に温厚気味な彼であるが、流石にモーホーワールドに対しては狭量だった。

顔だけは優しげ。

その顔に浮かんでいる仮面のような微笑にも何気にフォーカスが掛かって見えるほど。

なれどそれは無慈悲な死刑宣告。

彼とて横島の一部。

そーゆー罠をかけるモノを生かしておくつもりは更々無い。

ジャスティスは作り物めいた微笑を浮かべたまま、右手の親指をググっと立て、

『Ｇｏ――……

ＧＯ―……

ＧＯ―…

ＧＯ…』

声にエコーをかけ、その親指をキュッと下に向けた。

「ぬっ殺ーすっ！！」

――かくして、煩悩魔人様はお怒りになられたそうじゃ……

＊＊＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊

「あっ、先生。どちらへ！？」

頬をうっすら染めたあやかが走るネギを追う。

「ああっ、ネギ君どこいくのー！？」

何だか照れたまき絵が駆け出したネギを追う。

「あっネギ先生逃げた――っ！」
「まて――っ！　ネギ先生ーっ！」

風香と史伽が逃げ出したネギを追う。

眼前のネギが偽者である事に気付き、持ち歩いている本で撲殺…
…もとい、撃退し、何とか意識を取り戻したのどかと共に部屋を出た夕映。
その二人が騒ぎを聞きつけ、ロビーに向ってみると……

『ええ～～～っ！？
ネギ先生がいっぱい～～～！？』

三つの班と三人のネギが一同に会していた。

センセがイッパイ……

……なんだか腐女子的発言が聞こえてきたよーな気がしないでも

ないがそれは兎も角、
さっき偽ネギを撃退した際に、名前が書かれた人型の紙切れを見ていた夕映は、

『気をつけて！
おそらく朝倉さんが用意したニセモノです！！』

と皆に注意を促した。

モノがゲームなのだから言わずとも良いのであるが、そこは人の良い夕映の事。
結局はそんな助言を与えてしまう。

「こ、これは大変だ――っ！？
複数のネギ先生が一気に集結！！　各班一体どーするのか！？」

その疑いを掛けられた朝倉はというと、何だかんだいってもちゃんとアドリブをかましており、あたかもイベントだったかのように装って少女らの混乱を小さくしてゆく。
見事といえば見事であるが、

『大騒ぎだなこりゃ……』

カモの言う通り、混乱が小さくなるだけで騒動そのものは大きくなってゆく。

「コラーっ！！　一体何の騒ぎだっ！？」

その騒動に気付いたか、三階を見回っていた筈の新田が何時の間にかロビーに迫っていた。

『まずい！！　みんな、新田だよっ！！』

と既に当の新田に捕獲され、逃げ遅れた千雨と共にロビーの電話機の前で正座させられていた祐奈が小声で注意を促すがもう遅い。角を曲がれば全員が視界に入るところまで新田は迫っていた。

しかし、鬼の生活指導員の足先が廊下の角から突き出た瞬間、

ボゥン…っ！！

突如として彼の視界を煙幕が覆い隠した。

「なっ！？」

驚いたのは彼だけではない。少女らもそうだ。

何せ鬼の新田の怒声が聞こえたと思った瞬間、その姿が煙に覆われたのだから。

しかし、そういった感情が“無い”モノもここにはいた。

「「「チュ――っ！！」」」

「ぬごっ！？」

ゴ…ッ　と実にイイ音がして偽ネギらの膝が新田の顔に入った。

簡易式神なので驚愕といった感情の動きが無い。だから少女らが硬直して隙を見せた瞬間に動きを見せたのだ。

「あわあわわ……
に、新田先生が――……」

「こうなってはもはや後戻りはできませんね」

とりあえず夕映は手に持っていた枕の一つを新田の頭の下に敷いておく。

理屈やカラクリは解らないのだが、偽モノである事は夕映ものど

かも理解はしている。
だが気絶した新田はネギが蹴ったとしか認識していないだろう。

「ネギ君、逃げたよ――っ！！」

「ええいっ　ヤケですわっ！　追いますわよっ！！」

もはや小声は諦めたらしい。

指導員を気絶させた時点でオシオキは必至。
ならば開き直って、せめてキスだけでも成功させねば割に合わないのだ。

「待って――
ネギくーんっ！！」

スタートダッシュの差か、コンパスで勝っている筈のまき絵よりずっと前をネギは駆けていた。

人気が無いとはいえ深夜の廊下を、浴衣を乱しつつ走り回るのは如何なものかと思われるが、本人らはそれなりに必死だ。

今や中継カメラと化した防犯カメラがその二人の姿をライブで追

い続けている。

まき絵は懐から、何故か待ち歩いている新体操で使う愛用のリボンを取り出し、ネギに投げ付けようとした。

使い慣れたそれを彼女は、あたかも鞭が如く使う事ができるのである。

しかし、逃げるネギも然る者。

投げかけられる瞬間も角を曲がって回避した。

と――？

ドズムッ！！

鈍い音がして逃げた筈のネギが吹っ飛んで帰って来る。

「あ…♪　よーし！！」

何だかよく解らないが、そこは細かい事は考えないバカレンジャーが一角。

そんな隙を逃さず、まき絵はリボンでネギを絡めとり、

「エヘヘ……ネギくぅん♪」

と、唇を寄せた。

ボゥンっ！！

視界の外――

それでも認識界内である曲がり角の向こうで爆発が起こった。

「チ……っ

ニセモノか……霊波が少ねぇと思えばやはりな……」

しゅうう……と拳から湯気を出しているのは、タダキチ事、横島である。

怒れる彼は怒り心頭に達した“向こう”の雇い主のように、拳に霊力を一点集中させてぶん殴ったのだ。

無論、そんなフィニッシュブローにも似た折檻パンチを喰らって生きていられるのは同じ霊波によって殴られ続けた彼であるからこその話。そこらの人間が喰らえば頭部は木っ端微塵である。

相変わらず自分がそこらの霊能力者を遥かに凌駕する霊的防御力を持っている自覚は無いようだ。

そんな自分の霊力の高さなど知る由も無い彼は、殺り損なった事を悔やんでいた。

殺ったらアカンやーんっ！！　という説もあるが、今の彼は正気ではなかったりする。

「監視カメラまで仕掛けおってからに……
そーかそーかそんなにオレが邪魔だと申すか……
ふっふっふっ……ＳＡＹ－ＢＡＹ　してくれる」

気分はもうエセ時代劇（何気に悪役気味）。
“成敗”ではなく、“ＳＡＹ－ＢＡＹ”なのがポイントだ。

覗きで鍛え上げたその能力を持ってすれば死角内を駆け抜ける事など朝飯前の晩飯前。
カメラには影すら残るまい。

というか、防犯カメラ（現中継カメラ）を監視カメラだと勘違いしている時点でイロイロと手遅れっポイ。

それより何より、彼の認識外にあるはずのカメラの死角に無意識に身を隠せてしまうのは如何なものか？
流石は“向こう”で雇い主が仕掛けた物理＆霊的トラップを掻い潜って何度も覗きを成功させただけはある。

無論、誉められたモノではないが……

「次は……
向こうか……」

蜘蛛の巣が如く意識の糸を伸ばし、それに掛かったネギらしき霊波に向って駆け出す横島。

幾ら絨毯の上とは言え、羽毛ほども音を立てずに駆け抜けてゆく技量はアサシンすら感銘するだろう。

如何なる者も単なるセクハラスキルの一端だとは思うまい――

『ぬぅ……また気配が遠退いたでござるな……』

『流石は老師アル』

ロビーの柱の陰から姿を現した二人は、足元にひっくり返っている新田に一瞥もせず、横島の気配が消えた方向に意識を向け続けていた。

それでも正座させられている千雨と祐奈の死角にいたりするのは流石と言えよう。

――あの場……

新田が騒ぎを聞きつけてロビーに現れた時、あの場にいた全員が彼に認識されるとゲームが終わってしまう可能性が大きかった。

だから楓はニンジャの嗜みで所持していた煙球を用い、新田が煙に巻かれた隙に皆を逃がそうとしたのであるが……

まさか偽ネギによって彼が気絶されられるとは思いもよらなかった。

『ネギボウズのニセモノが出回っているとは思わなかったでござるが……これも魔法の力とやらでござろうな』

『ナルホド……

流石は魔法。何でもありネ』

無論、刹那がアイテムを渡した事など二人が知る由も無い。

というか、ニセモノが走り回っている理由を考える余裕が無かったりする。

『兎も角、これでは余計にネギボウズと“誰か”を間違えてしまいそうでござるな』

『……？

おおっ！　確かにそうアルね！！　アイヤ、大変アルよ～～♪』

一瞬、何を言っているのか解らなかった古であるが、流石に勉強以外の事なので要領が良い。

すぐに手を打って相槌を打つと、

『じゃあ、そろそろ老師…ではなくネギ坊主を追うアルね』

『あいあい♪』

楓と共にその場を後にした。

「ん？　誰かそこにいなかった？」

「知らねーよ！
クソっ……も、もう足が痺れて……」

「捕まえた」

「ネギ先生――」

二人の美少女に挟まれ、左右の頬に唇が寄せられた。
ちゅ…と可愛らしい音を立てて送られた柔らかいキス。
外見だけなら三人は同じ年齢のように見えるので実に微笑ましいのであるが……

バフ――ンッ！！

やはり任務が終了したので式であったネギは爆発し、風香と史伽は吹っ飛んで意識を失ってしまった。
目をぐるぐる回して意識を手放してしまう二人。
ポテっと絨毯の上に倒れこんでしまう。

「！？　この二人は……
お、おい、風香ちゃん！　史伽ちゃん！」

直後、その破裂音に気付いたのだろう、横島がその場に現れた。
慌てて駆け寄り、二人を抱き起こすもやはり目はナルト。
見事に気を失っている。
知っている女の子が倒れているのだから当然の如くカメラ等無視

する彼であるが、幸いにも二人はたった今脱落したので中継は終了しておりカメラの眼は向けられていない。

怪我らしい怪我は無いようで、横島もホッと胸を撫で下ろしたのであるが……

ハラリ……

「ん？」

そんな横島の足元に、一枚の紙切れが舞い落ちた。

―やぎ―

「……」

横島は無言でその紙を拾い上げグシャリと握りつぶし、二人を廊下の脇に置いてある来客用のソファーに寝かせてやる。

幸いにも旅館内はゆるく空調が利いているので風邪は引くまい。

それでも一応は別のソファーからカバーを剥いで二人にかけておいてやった。

男ならば当然そこまではすまいが、一度たりとも夕飯を奢った（奢らされた）相手であるし、女の子という事もあるからけっこう気

も使えてたりする。

「ふ……ふふ、ふっふっふっふっふっ……

真面目に地獄へ行かせてやる」

無論、大勘違いが続いている事は言うまでもない。

「わぁ……っ!?

ヘイト!?　ヘイトなの!?」

イキナリ旅館と道路を繋ぐ橋の袂で自分を抱きしめて蹲ってしまう少年。

楓が想像していた横島のセリフと似たようなもんである事がけっこう笑える。

兎も角、そんな頭の異常を疑われるようなセリフをぶちましたネギであったが、直に正気に返って立ち上がった。

突然感じた恐怖の正体は不明であるが、周囲の様子を窺うも別にこれといって異常は感じられない。

「あ、あれ？　僕、何言ってたんだろう……？」

どうやら無意識に言葉を紡いでしまったのだろう。
彼自身が何故そんな事を口走ってしまったのか覚えていないようだ。

何と言うか……謂れの無い怒気と怨念を浴びせ掛けられたよーなそんな気がして魂が悲鳴をあげたというか……
兎も角、そんな感じがしたのである。

「ううう……何だか嫌な予感がする……」

とゆーかヒドイ予感？
このままではエライ目に遭って（遭わされて？）しまうようなそんな気が……

「も、もう還ろ……もとい、帰ろう」

何だか表現し難い怯えにより、踵を返して旅館に駆けて行くネギ。

まさかその旅館に、牙を剥き爪を磨いでいる怒りの魔人様がいらっしゃられるとは思いもよらなかったという事じゃ……

ボンッ！！

「ぷっ！？」

大きな音を立てて人型は破裂し、ポテ…っと少女はその場に倒れてしまう。

「しまった！！　遅かったか！？」

慌てて駆け寄るがその少女……雪広あやかの意識は吹っ飛んでいる。

中学生とは思えないようなバランスの取れたプロポーション。

動き易いよう、ポニーにまとめられている為にうなじも見えて何とも色っぽいのであるが、そこは何だかんだでフェミニストである横島。そんな有られもない格好に気を取られるより前に、今の破裂で負傷していないかどうかの方が気になっている。

しかしそんな心配は要らなかったようで、やはり彼女も目をナルトにしてグルグル回しているだけ。

横島ほどではないにしても麻帆良の生徒らは丈夫なようだ。

「く……また被害者が……オノレ淫行中年め……」

まだ勘違いしっぱなしの横島は、落ちていた式符……ホギ＝ヌプリングフィールドと書いてあった……を拾って握り潰す。

「大体なんだこの式符は？
ヌプリングフィールドだぁ？　オノレ……何とオゲレツな響きの名前を……」

そう連想する彼の方に問題があるのではなかろうか？

兎も角、やはりあやかを抱き上げてソファーに寝かせ、そばにあった新聞を掛けておく。無いよりかはマシだ。

新たなる勘違いを胸に……もとい、正しき怒りを胸に、霊力を高める為に目をつぶり、再度ターゲットの位置を探る横島。

彼が出会ってしまった状況からすれば、ネギという男は女子中学生を自分の分身にキスさせて喜んでいる変態である。
無論、いくらノリがよい麻帆良の生徒とはいえ、女子中学生がネギとキスをするゲームがおっ始まっている等とは予想もできないだろう。つーか予想できていたとすれば余計にネギを許せまいが。

少なくとも普通に考えれば、古らから聞いているネギの年齢の技量でここまで本人に似せた式は作れまいし、十歳程度で女子中学生に分身にキスさせて喜ぶ趣味はあるまい。
というか、その発想は余りにオッサン的過ぎる。

それに年齢詐称薬がある以上、ネギの実年齢はオッサンで、うら若き乙女の唇を狙う変態魔法使いでもおかしくないのでは？
無論、そんな無茶苦茶な発想にたどり着いてしまうのは横島ならではであるが……

「む……！？
この霊波は……　ミ　ツ　ケ　タ　ゾ　……」

霊波を探り続けていた横島の目が細められ、ギィイ……ン！！
とロボ的な輝きを見せた。
その言葉遣いは何だか怨霊っポイが気にしたら負けだ。

ちらりと眼差しをあやかに送り、もう一度無事である事を確認してから、

「斬る（Kill）……」

と横島は一言呟いて煙のように姿を消した。

危うし、ネギ！！

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊

「ネギ先生がこんなアホな騒ぎに参加するとは思えません！
だからホンモノは別の場所にいるはずです！！」

「う、うん！」

先にニセモノを見出していたお陰か、或いは図書館島の地下でネギという少年の人柄に接していた所為かは解らないが、真面目な彼がこういった事に関わるとは思っていない夕映は、他の班の代表がネギを追って駆け出した時に、のどかの手を取って別方向へと駆け出していた。

それが項を制したのだろう、彼女ら二人は偽ネギの爆発に巻き込まれずに済んでおり全くの無傷である。

それにしても私としたことがあのように巻き込まれてしまうとは……

１０歳の子供……
しかもニセモノに……！

のどかにああ言っておきながらなんとアホな……
いえ愚かな！

しかし……あのタイミングであの音が聞こえなければ……
い、いえ、モニターが点いてなかったら私は……
私はネギ先生と……

「どうしたの？　ゆえ」

「いっ、いえ！　何でもないですよ！？　ホントに！！」

「う、うん……？」

等と他の追跡者から離れ、そんな事を言いつつ窓際を走っている二人。
二人して同じ方向に顔を向けたのが良かったのだろう、

「あっ！！」

「いた――っ！！」

周囲の見回りから戻ってくるネギの姿が目に入った。

イタ……――

気分はもう、狂戦士。

カタカナで喋っているところがそれっポイ。

ダンッ、ダンッ、ダンッと木々の間を蹴り抜けて、夜の闇に紛れて怪鳥の様に影が飛ぶ。

視認はほぼ不可能。

余りの速さと勢いの鋭さは常人の眼では捉えられまい。

その人を超えた動きはドコのサーヴァントだ？　と問い詰めたくなってしまうほど。

クライ眼の輝きは敵に対する憤怒のものか、獲物を見つけた悦びか。

感情だけを前に向け、“それ”に向って突き進む。

夜の闇を縫ってやや歪な直線を描きつつ突き進むその影は、歪んだ怒りの気配も相俟って恐ろし過ぎる。

オカルト的な恐怖より、ホラー的な恐怖を強く感じられる波動をぶち撒いてゆく影であるが、周囲にはその波動を欠片も感じさせていない。

恐らくその感情波はターゲットだけに収束して向けられているのだろう。

びぐぅッ！！

「な、何？！」

迫り来る怖気を感じたのだろうか、少年は怯えるように身を竦ませた。

こんな物騒な輩が迫ってきている時に、身を縮ませるのは単なる自殺行為。

ハンカチを投げられただけで仮死状態になってしまうスナネズミが如く、肉食獣を前にして『食べて☆』と懇願するようなもの。

『魂とったらぁっ！！』

旅館に女の子がいる手前、怯えさせないように心中で雄叫びを上げる気遣いは流石と言える。あらゆる意味で間違っているが。

霊能力者が言うセリフであるから説得力もあるが、説得力があるが故にその行われようとしている行為は物凄く拙い。

“栄光の手”に八つ当たりと憤り……もとい、愛と正義のパワーが篭り、少女を汚す悪漢（ネギ）めがけて必殺の一撃が襲い掛かろうとしている。

精神コマンド＜必中＞＜魂＞＜直撃＞を発動したかのようなスーパーダメージがネギに襲い掛かるだろう。

と、思われていた――

「ぐぇっ!?」

直前、横島の首に紅色の縄状のもの……浴衣の帯紐が巻き付き、ネギは九死に一生を得た。

同じ様に充分に氣が乗った帯紐が迫り、横島の身体に蛇のように絡み付くとその身は素早く茂みの中に引きずり込まれてしまう。

スパーン!!　というハリセンで引っ叩いたよーな音がし、そのまま“三つの気配”が遠ざかると辺りは完全に静けさを取り戻していた。

「あ、あれ……？」

怖気やら恐怖やらが去り、恐る恐る頭を上げるネギ。

別に怪しいところは無いし、妙な気配も感じられなくなっている。

出る前と同じ様に静かな旅館の玄関だ。

「……な、なんだったんだろう？」

まだ心臓がバクバクしていたが、流れ出る汗を拭いつつネギは旅館に戻っていった。

「あ……宮崎さん……」

「せ……ネギ先生……」

親友の後押しを受け、勇気を出して一歩を踏み出した少女の元に……

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊

「堪忍や――っ！！」

ひたすら額を擦り付けて謝る少年。

その土下座――某演歌の大御所の弟子が深く感銘を受けるであろうほど、一分の隙も無い見事なものであった。

言うまでも無く、これほど高レベル土下座が行える少年は二人といまい。

今だタダキチ形態の横島忠夫である。

ここは騒動から離れた旅館の裏庭。

楓と古が屋根から見下ろしていた池のほとりだ。

子供の姿で女子中学生に不埒な行為を行っていたネギ男（仮名）に対し、正義の死者たる横島が鉄槌を下さんとした瞬間、何とか間に合った少女らに拉致られてここに引き摺って来られたのである。

その道中、アレは見張りをする為に放たれたネギのデコイが暴走しただけだと怒られるわ、子供相手にやりすぎだと説教喰らうわで全然良いトコ無しである。

というか、そんなテキトーな説明を受けて納得してしまうところが横島らしいといえるかもしれない。

それに横島自身も冷静になればやり過ぎだと自覚できていたのが大きい。

何時もの事……と言えばそれまでであるが。

なんてこったい。

二十歳越えたってのに、十代のバカのまんまかよ……と落ち込みそうである。

「まぁ、被害ゼロだからいいでござるよ」

「ウム。私らに黙て女の子介抱したりするから、そーゆーコトになるネ。

老師はもっと気をつけるアルよ」

「すんませんすんませんすんませんすんません……」

楓らの言っている事は何だかオカシイのであるが、横島は謝るのに必死で全然気付いていない。

一体、何度目の『正直スマンかった』であろう。パート４ぐらいか？

とはいえ、別に楓らも横島に謝罪して欲しいが為に捜し続けていた訳ではい。

本当なら『ウッカリ間違えてしまたアルよ。てへ☆』な流れに持っていきたかっただけである。

まぁ、流石に“あんな事”に発展しようとは思いもよらなかったが。

だから、という訳でもないがえっぐえっぐと泣いている彼に別に良いでござるから……と直に気を取り直して手を貸して立たせてやる。

「うう……楓ちゃんは優しいなぁ……」

「うぐぅ……べ、べちゅにいいでござるよ」

直に許しただけでモノホンの礼を言う横島に、流石の酔った楓ですら面食らって赤くなる。

いやまぁ、赤くなったのはそれだけではなかろうが。

横島がストレートに礼を言うのも無理は無かろう。

何せ“向こう”で横島の周囲にいた女性らはそう簡単に許してくれたりはしなかったのだ。

バチバチと怒りの霊気で放電して見える神通棍でプチ殺されかかったり、何でか金色がかった狐火でローストにされたり

人狼の全力出力の霊波刀でナマスにされかかったり、元幽霊の巫

女に友達の浮遊霊集団を呼ばれてフクロにされたり
机の中の無人校舎に閉じ込められて人格崩壊しかかったり、魔力っポイもんが混ざった鱗粉で半死半生にされたり……

記憶を消失させているというのにそんな事だけ憶えているのが物悲しいが。

それでも思い出すだけでその身がガタガタと震えだしてしまう。
まったく、よく自分は生きているもんだ。

そんな風にトラウマを刺激されている横島の後で、楓は古にジト目で睨まれて冷や汗を掻いてたりする。当然のように彼は気付けなかったのだが何時もの事である。

「よ、横島殿」

「んぁ！？　な、何……？」

古の視線を誤魔化す為か、急に楓は横島に話し掛けてきた。

余りに突然だったが為、彼の返事はどこか間抜けだ。

「横島殿……その……」

「？」

何時ものように……いや、何時も以上にもじもじとして、話し掛けてきたくせに中々本題に触れない。

そんな楓に萌えを感じないでもないが、『ン、ウンッ！！』とヘタクソな咳払いをする古に二人とも気を取り直す。

「そ、その……横島殿……
拙者は……その……横島殿のパートナーでござるな？」

「んあ？　ん、うん……まぁ……」

何を今更……というのが彼の本音だ。

こっちの世界に来てから毎日のようにツルんでいる少女、楓。

なすびジジイ（近衛）に『それじゃあ、長瀬君と組んでもらおうかの』といわれた時には、美少女だし気が置けなくなっているからラッキーだと両手を上げたものである。

……ちょっとナニな隙が多すぎて後でイロイロ困る事になったが……

「私もいちおう協力者だから、同じようなものアルね？」

「え？　あ、う、うん……」

これも何故に今更？　である。
確かに最初は“巻き込まれに来た”というけっこう困った出会いであり、ずっと彼女に困らされ続けている気がしないでもないが、側に来られて迷惑だと思った事は無い。

つーか、この二人は横島的対象年齢がストライクゾーンから外れていただけで、彼が知る女の子の中で飛び抜けたレベルの美少女二人が“慕うかのように”付いて来てくれているのだから文句など出ようはずも無い。

だからこそ、ややどもりながらも即答した。
それに彼女らの眼差しが（やや焦点が定まっていないような気がするが）真剣みに溢れているのだ。こんな目で言われた言葉を否定する事は横島にとって超難問なのだ。

それに何だか知らないが、横島がそう言っただけで二人はウンウンと嬉しげに頷いている。
さっぱり意図が読めないし、酔ってるよーに見えなくもないが、喜んでもらったのだから我に悔い無しではなかろうか？

無論――

「なら、その……拙者と仮契約して欲しいでござるよ」

そんな彼の考えは浅はか以外の何物でもないのだが――

「実は私も仮契約結びたいアルよ～」

「は？　仮契約？」

実は横島、仮契約（パクティオー）というものを知らなかった。

何せ彼は霊能力者ではあるが魔法使いではない。

その能力は確かに氣に近いものなのだから近衛も退魔師として接しているので従者仮契約であるパクティオーの事をまだ説明していないのである。

既に楓は真名から仮契約の事を聞いていたし、古も楓から聞いている。

そしてその方法はカモを脅……もとい、彼から教えてもらっていた。

ぶっちゃけ、今の“裏”の関係者の中で横島だけ（実は現時点では刹那も大して…であるが）がその事を知らなかったりするのである。

それでも当然のように疑問も湧く。

仮とは言え『契約を結んで』と言われてハイそーですかと言わないところはスーパービジネスマンを両親に持ち、ずる賢さでは魔族にすら一目置かれている雇い主がいてくれたお陰か。

そういう類の話には勝手にブレーキがかかるのである。

「拙者は……拙者らは心配なんでござるよ……
横島殿は心に何か抱えたまま、本心を隠したまま拙者らに接してるでござる……」

だが、彼が疑問を口にする前に楓は“本音”を漏らした。

「老師はこのかに言てたネ？　大切なモノは無くしてから気付く……と」

そして古も“本音”を語りだす。

「私……私“達”はホントに心配してるアルよ。
老師は確かにイロイロ気遣てくれるし、教えてもくれる……でも、本音は言てくれないネ……」

何だかんだ言っても、氣……“霊気”の使い方を教えてくれる横島。

ゲートの騒動に古が関わった時、もしあんな事に再度関わって彼女が怪我をしたりしないようにと教える気になったのである。

最初は気付けなかった古であるが、ゲートでの戦いを例にして気の高め方や固め方、流し方を散々言われれば流石のバカイエローとて彼の思いに気が付いてくる。

当然、楓とてそうだろう。

彼は、不器用ながら必死こいて支えてくれている――

無償の……という訳ではないだろうし、見返り（お姉ちゃんを紹介してくれる等）を期待しない訳ではなかろうが、そこらの男以上に女の子に対してそれに近いもので支えようとしてくれるのである。

彼自身は気付いていないだろうが、横島は必要以上に女の子を傷つかないように行動し続けている。

そして、無意識に女の子を守ろうとしている。

まるで失ったモノを捜し求めているかのように……

古は兎も角、楓はその事を薄々気付いている。

彼女が知る誰より優しい彼は、この世界で新たに組まれ様としている絆を誰よりも大切に思っている――と言う事を。

だからこそ不安なのだ。

絆を求めて彼が自分から何かの流れに吹き飛ばされるのではないかと……

だからこそ――

「拙者らが、絆になるでござるよ」

「え……？」

だからこそ彼には“錨”が必要だと思った。

“枷”となり、彼を繋ぎとめる存在が必要だと。

だからこそ仮契約というものは渡りに船だったのである。

「私らが仮契約者として老師と繋がりを持つアル。
そうしたら老師は一人じゃないネ」

古は知らない。

横島が異邦人である事を。

だが、麻帆良の皆を大切に思っていてくれている事だけはきちんと解っている。

だからこそ彼の笑顔を増やしてやりたいと思った。

木乃香と刹那という“他人事”であんな辛そうな表情を見せる優しい彼に……

「楓ちゃん……古ちゃん……」

横島は声が詰まってしまった。

学園長以上に自分の事を語っている楓にだって全てを話してはいないし、古に至っては異世界人である事すら明かしていない。

にもかかわらず、彼女らは解って欲しい部分を自力で気付いてくれていたのだ。

『こういったトコは何時まで経っても女の子には勝てないなぁ……』

確かに事故でこの世界に“存在”してしまっている彼は孤独だ。

二十数年にも及ぶ全ての繋がりを完全に無くしているのだから。

行くこと……自分が居た“であろう”世界への道は完全に閉ざされているし、その座標は全くの不明。よってこの世界で生涯を閉じる事となる。

その事は理解しているし、自覚も出来ている。

できてはいるが……やはり完全には孤独感を払拭できてはいないのだ。

そんな横島に対し、二人は自分より心遣いを見せてくれている。

自分でも気付いていなかった、“淋しさ”に二人は気付いてくれていた。

楓も大人っぽいしが可愛らしいところを持っているし、古もその腕っ節とは裏腹に可愛いらしい。だがそんな外見的な物だけでは無く、ちゃんと良い女の予備軍として下地もちゃんと持っているではないか。

こんな女の子たちを仲間としてここに存在できている自分は何と運の良い男なのだろう。

横島は改めて二人に深く感謝の念を募らせていた。

「うん……ありがとな。

何だかよく解らないけど、女の子にそうまで言ってもらって断る訳にもいかないよな。

だから……その、オレなんかで良ければ喜んで仮契約とやらを結ばせてもらうよ」

だから、横島は笑顔でそう答えた。

二人の思いやりがあたたかくて、

二人の言葉がありがたくて……

そして……

「横島殿……」

「老師……」

「うん……」

「「言質は（とたアルよ）とったでござるよ」」

――蜘蛛の巣に掛かった。

「は？」

がしっ
がしっっ

攻撃ではない為、如何に人外の回避能力を持っている横島とて回避不可能。

左右から両の腕をガッチリ掴まれ、身動きが取れなくなってしまう。

「え？　ええっ？！　な、何だ！？　一体何を……」

焦りまくる横島。

おかしい。
何だかおかしい。

さっきガンガン音を立てていた警鐘が、頭部を左右に振りたくるほど打ち鳴らされている。

つーか、あの感動的な流れからこーなるってどゆコト?!

「ちょ、まっ、ナニこの流れ!?
ひょっとサギ!?　これが噂のフィッシィングサギ!?」

違うと思うぞ。

「つーか放して〜〜っ!!　ひぃ〜〜〜っ!!」

「ダメでござるよ」

ぐにゅ

「そうアルよ。観念するアル」

ぎゅっ

「か、かかか観念って……
ぬわぁっ!!　チチがぁっ!!　フトモモがぁっ!!」

立たせてもらったのに、二人に腕に抱きつかれてまたしてもヘタり込んでしまう横島。

左腕は楓の胸の間に挟まれ、右腕は同様に古の腕の中。古の場合は流石に楓ほどのボリュームはないが、その代わりに太腿の間に挟み込まれているのでまったく腕を動かせない。下手するとヘンなトコ触っちゃいそうだし。

ジャスティスはジャスティスで、さっきとは違う意味で『Ｇｏ！Ｇｏ！　ＧｏＧｏ！』と吠えている。ロリ否定というタテマエはドコへ行ったのか？

「騙したな！？　ポックンを騙したな！？
親父と母さんと美神さんとエミさんと冥子ちゃんとおキヌちゃんとシロとタマモとパピリオと小竜姫様とヒャクメと神父と雪之丞とタイガーとピートとその他もろもろと同じで、ポックンを騙したんだな！？」

エライ騙され様である。

「その御仁らがどなたかは存ぜぬが、騙してはいないでござるよ？」

「そーアルよ。コレが仮契約の手段ネ」

普通ならその横島のテンパり具合に引きも入るだろうが、流石に二人は一週間も側にいたのですっかり慣れていた。
つーか勢いもあってそんな嘆きが効いてなかったりする。

まぁ、羅列された中に女の名前があった所為で、
そしてそのニュアンスに何かを感じ、二人の額に血管が浮かんでいたりする。
げに恐ろしきは女の勘と言う事か。

「こ、このパラダイス……もといっ！　この楽園……じゃなくて！　こんなキモチエエ……違う！
ええと……
とと、と、とにかく、こーゆー痛し嬉しなコトすんのが仮契約つーんか!?
泣くぞ!?　ええか!?　泣いちゃうぞ!?」

彼からすれば堕落の宴であろうが、言っている事はとっくにぶっ壊れている。つーかついに認めた？
しかし残念ながらそこには気付けていないのか、テンションが上がっている二人はそのまま顔を寄せてきた。

「う、うわっ?!　酒臭っ!!
二人とも酔っとるなぁ～っ?!」

「いやいや酔ってなんかいないでごじゃるよ～～?」

「私ら未成年アル。おしゃけにゃんかにょまにゃいアルよ～～」

「ウソこけ～っ!!
ヨッパライの『酔ってない』は結婚詐欺師のプロポーズ並に信用できんわ～～っ!!」

何だか期待しつつ涙目で逃げようとする横島。
しかし何だか手遅れっポイ。

そんな風に涙を振りまきつつイヤイヤする横島の顔の直横で古は、

「……そんなに私たち……いやアルか……？」

「え……？」

顔を俯かせ、聞いた事もないような悲しげな声を漏らした。

流石の横島も驚き、慌てて真横にある古に顔を向ける。

普段も小柄な古であるが、気落ちしているのか何時もより小さく見えていた。

「イヤならイヤとハキリ言てほしいヨ……」

「え？　いやその……」

「やぱり……イヤ……？」

「あ、そのイヤじゃなくて……」

「どちアルか……？
イヤなら私、老師を諦めるアル……」

淋しげであり、真剣。
短い付き合いであるが、横島は楓らと同様に古の性格を大体つかめている。

だからこそ、彼女がギリギリまで返答に迫られている事を気付く事ができていた。

何故にここまで思いつめているのかはサッパリであるが、真剣な問いかけには真剣に答える。
先ほど引っ掛けられたと言うのに、それでも懲りないのが長所である横島は、

「……そんな事ねぇよ。
急にそんなこと言われたから慌てただけさ」

「本当……アルか……？」

「ああ」

今度は断言。
軽く、そして力強く頷く。

ここで躊躇するほど失礼な事はないのだから。

「じゃあ……仮契約結んでくれるアルか？」

「あ、ああ……何だか知んねーけど、オレで良ければ……」

「じゃあ、拙者から結ぶでござるよ」

唐突に左側から声が掛かり、ハッとして振り返った。

当然ながら左側には楓がいる。

そしてその声はすぐ後ろの位置だった。

「ン……」

「楓ちゃ……ンン！！！？？？」

――初めは何だか解らなかった。

視界は髪の毛に塞がれていて何がまん前にあるのか見えもしない。

いや視界がふさがれているからこそ、他の感覚が強化されてしまうのだが。

自分の顔の前には何だか甘い香りのするがあり、唇には軟らかくてあたたかいものが触れている。

いや、現実逃避しても仕方がない。

実のところ彼とてよく解っている。

経験と言うものを全て失ってはいるが、実年齢は青年であるので子供のように慌てたりはしない。

「ン……ンン……」

「ん…あ……ふ……」

――ハズだ。多分。

いや別の意味で落ち着いているか？　我を失っているだけという気もするが。

実際の時間はわからないが、数十秒から数分なのだろう。

ツ……と離れた横島と唇と唇の間には銀の橋が掛かっていた。

普通、ここまでになるには深いキス……つまり舌の交し合いレベルの事を行わなければならない筈である。

しかしながら楓にはそんなスキルはない。という事は……

「……」

「あ、あの……楓チャン？」

顔を離した楓は唇に軽く指で撫で、何時も以上に眼を細めて横島の唇を見つめ、

「わっ！？」

一瞬で顔を赤熱化させたと同時に、弾かれたように横島から身を離して夜の闇に飛び込んで姿を消した。

照れているのか、何なのか、兎も角遠くの方でドンガラガッシャ～ンと何かがひっくり返る音が聞えた気もするので慌てていた事だけは間違いないだろう。

「オ……オレってヤツは……」

呆然とその消えた方向に眼差しを送り続ける横島。

いや、これまた本当は解っている。

キスをしていると理解してしまった瞬間、体が勝手に動いたのだ

――と。

とっても“大人向け”のそれをしてしまったのだ――と。

「オレは……オレってヤツぁ……」

遂に堕ちてしまったという事なのか。

遂にロリ道という冥府魔道への門を開いてしまったと言う事なのか。

くぅうう～……と泣けてくるのも仕方がないと言える。

「まぁまぁ、気にしなくていいアルよ。私は老師を信じてるアル」

「ううう……古ちゃん……」

そんなタイミングで古がそう言って慰めてくれたら流石も縋り付いてしまう。

まだ自分の腕にしがみ付き、太腿に挟んだままだと言うのに……だ。

もとより気弱になっている横島だ。

自由になった左手で古の身体にしがみ付くよう腕を伸ばし、その小柄な身体に自分をあずけるという愚行を犯してしまった。

無論、迂闊である。

「老師……」

「え……？」

「――隙ありっ」

「？！　ンんん……っ！！？？」

実際、古は楓以上に酔ってたりする。
飲酒量は楓より多いし、尚且つ楓の様な薬物抵抗を持っていない。

だからこそ暴走は静かに続いていたのである。

古から言えば初めて横島から取れた一本と言えなくもない。
だが、横島からすれば崖っぷちに追い詰めて助けるフリをして突き落とされるようなものだ。

横島の頭の中は真っ白になり、古と抱き合う形のまま硬直し切ってしまった。

「ンんん……？　ん、ンンっっ？！」

流石に古も驚いた。
何せ余りの事に横島は心身共に凍りついて動けなくなっているのだ。
つまり、古は唇を重ねたままピクリとも出来なくなっている。

「んっ、んん、んんんん……んん～～～～……っ！？」

勢いでしてしまった古であるが、全てが初めての行為。
ファーストキスなのだから、鼻で息をする…等という事など思いつく訳もない。ややパニクりつつも口で息をしようと躍起になって大きめに開いてしまう。
開いてしまうからこそ、無意識に出された横島の舌を呼気と共に吸い込んでしまった。

結果、古は初めてと言うには余りにハードなキスを行うハメとなってしまったのだ。

調子に乗ったバツか、横島を慰めるフリをしてひっかけたバツか、はたまた未成年のくせに飲酒をしたバツなのかは不明であるが、半泣きでもがく古に対し追い討ちが如く奇跡が起こった。

ぽんっ

「んん…っ？」

今まで抱き合うレベルの感触だったのに、唐突に懐に収められるかのようにすっぽりと抱きしめられる感触に変わった。

慌てて手探りで横島の身体を探ると……

「っ！！？？」

年齢詐称薬が切れて十代半ば過ぎの肉体に戻り、大きくなった所為で着ているものが破け、ほぼ裸で自分を抱きしめている横島の身体が……

「……」

流石に横島同様、古も頭が真っ白になった。

初めて触れ合った異性の肌。

ムリヤリ付き合わせた鍛練において気にはなっていたが、思ったよりしなやかで鍛え上げられた筋肉をしているではないか。

無駄な筋肉を感じない、野生動物のよう……等と冷静に感想を述べている場合ではない。

と言っても何かしらの反応が出来るほど冷静さはなく、ただ長々と唇を合わせているだけ。

それでもそんな時が無限に続く事は無い。

どれくらいの時間が過ぎたかは解らないが、重ね合っていた唇の間から何かが滴り、外気で冷えたそれが剥き出しの自分の太腿にポタリと落ちると、

「!?
～～～～～～～～～～～～～～～～～っっ!!!??」

流石の古もやっと我に返ることに成功した。

身体に残る全ての力を振り絞って身を引き剥がし、恥ずかしさ全開故であろうか、見事な体重移動と円運動を込めた手加減無しの一撃を、

ドズムッ!!

「うぼっ!!??」

横島の水月に叩き込み、空高くぶっ飛ばすと先ほどの楓同様にその場を飛び退り、脇目もふらず風のようにその場から逃げて行った。

後に残ったのは――

ひゅるるるるる……どごんっ!!

「ぷべらっ!!」

やっとこさ墜落し、頭から屋根に突き刺さって意識を失った裸のまま放置される事が決定した横島　忠夫――と、

「ぴぃ？
ぴぃ――っっ！？」

帰りが遅い彼を心配して探しに来た小鹿だけであった……

『な……なんだこりゃあ……？』

機材一式を持ち込み、簡易放送室と化している旅館のトイレの中。

仮契約カード大量ＧＥＴ大作戦の主犯格であるオコジョ妖精、カモは撤収直前に目の前に出現した三枚のカードを見て呆然としていた。

何だか思いの他苦労しただけで終わりそうであったのだが、それでも最後には親友のてこ入れのお陰で宮崎のどかのカードが得られ、そしてあんまり期待はしていなかったが、カメラの範囲外で少女忍者とカンフー娘がどーにかこーにか契約を結んだようである。

想像していたより遥かに少ない利益であり、大掛かりだったわりに情けない結果で終わったがゼロよりマシだ。

仮契約カードも合計四枚入ったから由としよう。

そう席（？）を立とうとしたカモであったが……

『か、仮契約カードじゃない？？！！』

後から出現したカードの異様さに気付いて声を上げた。

『い、いやそれにしちゃあ力を感じるし……

だけど方位も徳性も何も無ぇってどういうこった？？！！』

何しろシンボリズムである“色調”や、天体的属性である星辰性すら描かれていない。

尚且つ、

『サイズも半分くれぇしか……』

――ないのだ。

自分の描いた魔法陣の不手際という可能性もゼロではないが、のどかのは成功しているし、そのほかのスカカードも一応、自分が知る失敗作のパターン。

しかし、後に出現したこの三枚は一般の仮契約カードとの共通点が殆ど無い。

『そ、それにこのデザイン……

仮契約カードというよりは……』

ヲッサン臭い彼が良く知るカードとデザインが良く似ているのだ。

それは――

「ちょっと、カモッち何やってんの!?

急いでズラかるよ!!」

『お、おうっ!!』

何時の間にか食券やら機材やら荷物をまとめ、朝倉は泥棒宜しく背負い袋をしょいこんでドアノブに手を掛けていた。

慌ててカモもその妙なカードをしまって彼女の肩に乗り、この場を後に……

「……なるほど。
朝倉……お前が主犯か……」

「へ……？
ぴぎぃいいっ！？」

……しようとしたのであるが、怒れる新田先生によって遂に確保されてしまうのだった。

関わった連中ごと連帯責任。
というわけで楓と古を除いた十人＋一匹は朝まで正座させられたという。

その二人はというと、正座の罰を喰らったものが部屋に戻る事を許された頃に無言で部屋に帰ってきていた。
既に同じ班の者は眠りについていたから二人とも一言も語らずそのまま布団の中に潜り込み、

「「～～～～～～～～っ！！！」」

声なき声で朝方まで悶え続けていた。

「ヤレヤレ……
若いネ……二人とも」

「これであのバカも少しは自覚が持てればいいのだがな……」

これが二日目の夜の顛末であった――

後編（後書き）

こうして楓と古は道を踏み外してしまいましたw
何だか途中から古がヒロインっぽく……うーむ。

この話で苦労したのは、幾らなんでもこの二人は簡単にキスなんてしないだろうという事。
ネギのような子供が相手なら、軽い気持ちで出来るでしょうが横っちは青年。それは軽々とはできないでしょう。
かと言ってこの状況だけで仮契約する事を決意するというのも何だか理由としては弱い。楓も古もそういった事にはけっこう“お堅い”娘みたいですしね。
でからドタバタを混ぜ込んでこの流れになりました。

何せ私はあの二人だったら修業的要因以外でのパワーアップは望まないと思ってますので。

二人（＋1）の契約（仮契約とは言い難い）カードのデザインはわりとすんなり決まってます。
詳細は次回。つまり、例の映画村のアレとかですね。

というわけで、続きは見てのお帰りです。
ではでは～

前編（前書き）

加筆修正しました。

前編

「まったくもー……
ちょっと、どーすんのよネギ！
こ――んなにいっぱいカード作っちゃって一体どう責任取るつもりなのよ！？」

「えうっ！？
僕ですか！？」

狂乱の夜が明けた修学旅行三日目の朝。

昨夜のゲームの事を楽しげに話している３－Ａの面々を向こうに置き、
全然全く知らない内にその中心に置かれていた子供先生ネギは、何だか不条理な事に明日菜に責められていた。

見回りを行っている隙に勝手に仮契約の陣を仕掛けられて勝手に女の子と契約を結ぶ策を講じられたのだから、ホントのとこそんなに罪はなかろう。
まぁ、主犯格のカモの扱いはネギの使い魔のようなものなので監督不行き届きと言えなくも無いが。

『まぁまぁ、姐さん』
「そーだよアスナ。もーかったってことでいいじゃん」

「朝倉とエロガモは黙ってて！！」

あまりに軽薄な事を言う友人に、明日菜は目をくわっと剥いて怒る。まぁ、当然であるが。

初めから裏にいた刹那は当然として、やっと裏の事を理解し始めている明日菜ですら裏の危険な事に気付いているのだ。

情報というものの怖さを知っているはずの朝倉が気付かないのは意外だが、とっくに裏を知っている筈のカモまでがチョーシこいてあんな事をぶちかましたのだから、明日菜の怒りも当然であろう。

だからカモはエロガモと称され、けっこーショックを受けていたのだが誰も気にしていない。

で、

そんな風に少女らが騒いでいるのを尻目に、どよ～～～んと暗雲を引っ張って歩く少年の姿があった。

足取りの重さは敗残兵のそれ。日本的に言えば落ち武者である。漫画のように数本の折れた矢とかが刺さっていたら完璧であろう。

少年は隈が浮いて濁っている眼をちらりとネギらに向け、直に前に戻して深く溜め息をついた。

「はぁあああぁあ～～～……」

その吐息だけで木々枯れて落ち葉が舞いそうだ。

少年はそれほど黄昏ていた。

「ん？　横し……いや、タダキチ君。どうかしたのかい？」

これだけの落ち込み様なら普通なら耳に入らないであろう何気ない言葉。

だがしかし、それが女の――それも美少女っポイ声（何でそれが判るのかはナゾであるが）ならば話は別なのだ。

問い掛けられた方向に反射的に顔を向け、声の主を確認してみれば、そこには麻帆良中等部の制服に身を包んだ妙に大人っぽい少女の姿。

黒いストレートロングの髪を後に流し、中等部の制服を着てはいても年齢度外視の色気と雰囲気を漂わせている少女……龍宮　真名である。

大人に相対する時の雰囲気や、モーションを掛けてくる男どもをあしらう様から女子中学生だと言っても誰も信じはすまい。

何せその何気ない仕種の中にも隙が全く無いのだから。

それも当然で、彼女はこれでも“裏”でプロとして働いているのだ。

つまり＜タダキチ七（セブン）＞事、横島の裏の顔を知っている数少ない一人である。

「真名ちゃんか……」

「ん…？」

やや馴れ馴れしく名前を言われても真名は微笑むだけ。妙に余裕がある。

それにしても実年齢では勝っている“筈”の横島より大人びているのは如何なものか？

そんな真名の身体のごく一部……まぁ、言ってしまえば胸であるが……を一瞥すると、横島はまた溜め息を吐いた。

こーゆーケシカランオパーイを持っている美少女がいるから自分は苦しむのだ……と。

何とも自分勝手な意見である。無けりゃあ無いで文句言うくせに。

真名は凡その見当がついていたが、ただ苦笑するのみ。やはり大人である。

「流石に子供がそんなことで溜め息ばかり吐いてたら目立つんじゃないか？」

「ほっといて」

何だか不貞腐れたかのような横島の様子に、真名はくくくと笑いを忍ばせた。

昨夜の事は真名もよく覚えている。

というのも、普段とは違う友人（ライバル）の様子に気付いた彼女は、物陰から2班の後を追い様子を見守っていたのだ。

自分のような“眼”を持っているわけでもないのに横島の“跡”を追い続け、

ゲーム終了を阻止せんと新田に煙幕を投げ付けたり、ナニに暴走したかは知らないが、ネギを粛清せんと襲い掛かる横島を古との見事な連携で確保したり……

そして――

「夕べはお楽しみだったようだね。
両手に花だったみたいじゃないか」

「あ〝あ〝〜〜〜っ！！
言わんといてぇえ〜〜〜〜っ！！！」

有名ＲＰＧの宿屋のオヤジみたいなセリフを真名に言われ、イキナリ身悶えしつつ転がって泣き出す横島。

そのリアクション、昨夜の自分の担任の悩み方に似てなくも無いがハッキリ言って規模が違う。

ごろんごろんと団栗のように可愛く転がるのがネギなら、ゴロロロロロロッ！！　とベアリングもびっくりな大回転して悶えるのが彼だ。

壁にぶち当たるとそのまま壁を転がって天井に辿り着かんとする勢いである。

今時のアクション映画の特撮でもここまでの動きにはお目にかかれまい。

何もかも間違っている気がしないでもないが、素晴らしいと言えなくも無いだろう。多分。

そんな横島のうおーんうおーんという獣じみた泣き声は中々笑いを誘ってくれるが、このままでは目立ち過ぎてしまう。

真名は襟首をむんずと掴んでそのまま角まで引き摺って行き、泣き崩れている彼を立たせてやった。

「やれやれ、世話が焼けるな」

「ううう……スマンのぉ……」

幼児然とした外見も相俟って、情けなさに拍車が掛かる。

まだネギの方が大人っぽく見えるのだから不思議だ。

何だかしっかり女房（楓）に養ってもらう宿六のようだと真名は思った。

「それで今日はどうするんだい？　ネギ先生は確か……」

「えっぐえっぐ……

あ、う、うん……アイツは今日、西の本山に行くはずだけど……」

普通に考えれば、横島もネギに付いてゆく事になるだろう。

何せ彼が請け負った仕事はネギの持つ親書を守る事なのだから。

だが、1日目の襲撃から鑑みれば、“奴ら”の目的は――

「アイツの親書“だけ”じゃねーだろうなぁー……」

「多分ね」

無論、親書到達の足止めくらいはされるかもしれないが、真名も横島もそれだけで終わるとはコレっポッチも思っていない。

いや……下手をすると親書を狙っているのは物のついで、或いは囮なのかもしれないのだ。

あの眼鏡姉ちゃん（千草）や刹那の話からして、本命は西の長の娘である木乃香だと、横島は踏んでいる。

木乃香の魔力は確かに“ちょっと大きめ”というレベルであるが、『うわっ！？　スッゲェ～～っ！！』と眼を見張るほどではない。

まぁ、属性や性質によっては何かの鍵になったりする事は間々ある事だ。だからそれを狙っているとも考えられる。

現に横島の同僚の女性は然程強力な霊力を持っていた訳でも無いのに３００年間も人柱にされていた訳であるし。

まぁ、西の長の娘なので、その立場を利用しようとしているのかもしれない。

その割に妙に騒ぎを大きくしようとしているのは本末転倒な気もするが……

「やっぱ何かの＜拠り代＞とかに選ばれたんかなぁ……

確かに人間の女の子にしてはちょっと大きいし……でもなぁ……う～ん……？」

「……一度魔力について話し合わないといけないセリフだね」

「でも事実じゃん」

「……ま、いいけどね……」

言うまでも無く、横島の“大きい力”の基準は神族や魔族とかである。

人間が逆立ちしたって届かない位置にいることは言うまでも無い。

とはいえ、大きい力の持ち主で知っている人間はと言うと、かなりド外れた存在が出てきてしまう。

真っ先に思い浮かぶのは自分の“元”雇い主とか、その母親とかだ。

その元雇い主の母親という人物は、原子力空母の全発電エネルギーを吸収して自分の霊力に変換ができる　怪　獣　である。

横島本人は見た事はないが、同僚らの話によれば推定霊力数値は通常の百倍近くは出ていたらしい。

当然ながらポテンシャルはその母親を超えている元雇い主だってできるだろう。

そんなのを知っているからこそ彼の判断基準はかなり狂っているのであるが、それは兎も角。

「じゃあ、やっぱり今日も人員を割くのかい？」

「ああ……しゃあないしな……」

確かに任務のメインは親書を持つネギの手助けであるが、木乃香を守る事も仕事の一つである。というか、横島的に言えば女の子を守る方がずっと重要だ。

かと言って親書が届かなくとも良いと言うわけではない。

親書を届けるという話が向こうに広く伝わっているのなら、その手紙が届かねば『友好を結ぶ気がない』という口実を与えてしまう事になりかねない。それはそれで大変困った事となるであろう。

世話になっているとはいえ、学園長（ジジィ）らがどれだけ困ろうと大して気にしない横島であるが、美少女の未来に幸多かれと部分的聖人君子な想いを持っている彼からすれば、木乃香に害が及ぶのは何としても避けたいところ。

つーか及ぼす奴らは私刑ケテーイである。
しかし、そうなると木乃香とネギとを別々に見守る必要が出てくるのだ。

「木乃香ちゃんの護衛をメインにするのは当然として、あのボウズの方も……」

――無視する訳には行かない。

はっきり言って、こう言った現状になったのは近衛も西の長も読みが甘すぎた為と言えよう。

親書が必要なのは当然であろうが、木乃香と共に京都に来たのは失敗だった。
何せ西にとっては“姫君”にあたる木乃香をチラつかせているのだ。ロコツに引かせればどんな難題を吹っかけられるか解かったもんじゃない。

確かに本山の一部にあんなおポンチな輩がいるとは予想外だっただろうが、把握し切れていないのなら長も長だと言える。長が知りえていないのだから関東の方も知らないのはしょうがないかもしれないのだけど……

「あのじーさん。
この本山の不手際を餌にして長に責任追及するなんて事しないよな？」

「意外とよく回る頭だね。
そこらでありそうな話だけど、今はその臭いは無いよ」

「ふうん……
プロの鼻がそう言ってるんだったら信用するか」

「おや何の事だい？
私はしがない一中学生だよ？」

「はいはい」

まぁ、裏があるにせよ無いにせよ今さら悔やんでも遅きに遅しで、双方共が下手に人員を動かす事ができないのが現状だろう。

それに近衛も言っていたが、木乃香は魔法に関わらせない様に育てられている。

西と東の本山の血を引いているくせに何を……という気がしないでもないが、そういった裏のことを知っているからこそ、魔法関係に近寄らせたくないのだろう。

そんな意味でも安全かもしれないという程度の信頼しか置けない本山にネギ達と向わせる訳にも行かないのだ。

となると、当然として木乃香の護衛と、ネギの護衛に分かれねばならないのであるが……

チラリと真名に目を向ければ、

「うん？　依頼かい？」

と、笑顔で返してくる。目は笑っていないが。

「いんや……まだいいよ」

「そうかい？」

ふ…と肩を竦ませて了解の意を示す。

“まだ”と言ったのは、状況が変われば依頼する事を示している。
そして真名もそれを解ってくれたのだ。

友人関係の話であるというのに遠まわしに金銭を要求してくる真名。

だが横島も文句を言うつもりは無い。

彼女はプロだと聞いているのだ。プロが一々情で動いては話にならないし、“外部”も信用すまい。
自分の“元”上司もそうだったのだし。

まぁ、件の上司と同様に、彼女もギリギリでは情で動いてしまうだろうとは予想しているが。

それよりも、今はネギの事であるが……

「拙者が行くでござるよ」

「え　ぇ！？」

思考に沈んでいる隙に接近を許してしまったのだろう。
何時の間にか横島の後に楓の姿。

朝食直後なので真名と同じく制服姿だ。
似合っている様で、微妙にコスプレっポイのが何だか犯罪チックである。

「何だい？」

「い、いや別に……」

そんな感想を真名に読まれたか、横島は眼を逸らして誤魔化す。

それでもすぐ楓に向き直し、その顔を見た。

彼自身はそのつもりはなかったのに、何故か凝視してしまう。
だかそんな横島に対し楓は、

「何でござる？」

「いやその……」

と、横島は未だに昨日のキス騒動をずるずる引き摺っていると言うのに、彼女はサッパリと言葉を返してきたではないか。

本当ならこーゆーのを気にする歳ではないのであるが、精神が肉体に引っ張られているのか、元々の純情さも相俟ってちょっと情けないくらい気にしてたりする。

『やっぱ女の方が強いんやなぁ～～……』

今時の少女はキス程度では気にならないのだろうか。

ジェネレーションギャップというか、性差というか……いや大人のくせに気にし過ぎている横島が悪いのかもしれない。

「解ってないね……」

「へ？　何か言った？」

「いや別に」

そんな意味深な事を呟いた真名が気にならない訳でもないが、このまま楓と相対して突っ立っていても話は進まない。

彼女も退屈しているのか顔が白みがかってきたし――
何だかまだギクシャクしているのが物悲しいが、

「じ、じゃあ、頼めるかな？　あのお子様先生のお守り」

「承知したでござる」

ニ…っと笑って了承する楓。
昨日の事があった所為なのだろう、その笑顔がめっさ透き通って見える。

自然とその口元に眼が向いてしまい、ああ……あの唇にオレは……と妙に上気してきた。

アホぉな妄想に沈みかかったコトを自覚し、慌てて頭を振ってそれを吹っ飛ばそうとする。

「おやおや？　楓の何が気になってるんだい？」

「べ、別に気になってへん！！　楓ちゃんの艶やかな唇や見てへんぞ！！！」

真名に指摘され、更に必死になって頭を振って誤魔化そうとする横島。

誤魔化すと言っても、何を？　と問われると困るだろうが、それでも涙をぶち撒きつつブンブカ首を左右に振って否定する。

だが、『そうかい？』と真名にミョーに生暖かい視線を浴びせられては、ズキズキ痛むハートも耐えられなくなってしまう。

例によって例の如く、「違うんや――っ！！」と絶叫してどこかへ駆けて行ってしまった。

「あ……っと……
うーん……ちょっと虐め過ぎたかな？」

その背を見送ってから溜め息を吐いて反省し、やれやれといった表情のまま楓に顔を向ける。

視線を向けられた楓と言うと、何だか笑顔のままで横島の消えた方向を見つめ続けているではないか。

何時もの楓。
何時もの読み難い笑顔。

横島が見た通り、なんだか生っ白い顔のままニコニコとしたまま、今はもう見えなくなっている彼の背を追い続けいてた。

が、真名からすれば一目瞭然なのだろう。

「楓。もう横島さんは行ったぞ」

と、彼女の耳の側で聞こえるようにそう言ってやった。

その瞬間――

ボッシュウウウウ……っ！！！

実にイイ音を立てて楓の顔が燃えるような赤に染まって蒸気を噴き、そっくり返るように真後ろに倒れて行く。

「おっと」

真名はそれが解っていたか、するりと楓の背後に回り、倒れ掛かる彼女の体を支えてやった。

「やっぱり無理をしてたか……」

「ううう……」

どうやら横島の前で冷静さを取り繕っていただけの様で、遂に限界を突破して急激に血が上った所為でひっくり返ったようだ。

「それにしても器用だな……顔色を変えないのだから」

突然広がった血管を虐める訳にはいかないので、冷たいペットボトルなどで冷やすわけにはいかない。
パタパタと旅行のしおりで扇いで熱を下げてやるだけだ。

「……氣で筋肉を操って頚動脈を引き締めてたでござるよ……」

「死ぬぞ？　お前」

そりゃあ確かに顔色は変わるまい。
間違いなく無理し過ぎであるが。

「……なれど……」

「うん？」

やや俯き加減でそう呟く楓に、真名はどうかしたのかと顔を覗き込もうとする。
相変わらず眼を細めたままであるが、プルプルを肩を震わせていて何時に無く混乱している様子だ。

『あー……やっぱまだショックを引きずってるのか……』

と、真名が納得した瞬間、

楓は爆発した。

「ど、どどどうすれば良いでござるか!?
酒の勢いがあったとはいえ、あんな事をしてしまうとは～～～～～～～っっっ

せ、拙者は、
拙者わぁあああ～～～～～～～～～～～～～～～っっっっっ!!!!」

ゴロゴロゴロゴロゴロ……ッと頭を抱えて転がり回る楓。

「わぁっ!?　楓姉!?」

「ど、どーしたの!?」

何と言うか……実に横島と同じ様な悶え方をしてしまっている。

照れていないとか、気にしていないどころの騒ぎではない。実は楓、素面に戻るとおもっきり気にしまくっていた。

以前の楓であれば見知らぬ男に肌身を見られたとて然程気にする事も無かったであろうが、何せ相手は無自覚であるが好意を高めていっている男なのだ。そりゃ恥ずかしくもあろう。

ぶっちゃけキスだけでそこまでぶっ壊れてどーするという気もするのだが、一部接触した挙句にそれを思い出して悶える程、“女”が成長しただけマシか……と真名は妥協してムリヤリ納得するのだった。

■十時間目：独立愚連隊ニシヘ

（前）

少女らの京都・奈良での修学旅行三日目は完全自由行動である。

得てして女の子と言うものは、そういった遊びが関わる時のみ綿密な計画を立てて行動するもので、修学旅行に出る前には何時にドコへ行き、何を買うなどまで計画は煮詰められていた。

真面目な教師などは問題が起こさないか、或いは問題に巻き込まれないかとハラハラしてたりするが、事前に計画表の提出が義務付けられているのでそんな無茶な行動に出る事は余り無い。少女らもわりと正直に行き先を記入するし。

で、魔法先生の端くれであるネギ＝スプリングフィールドはというと……

朝食を食べ終え、昨夜のカードの話をしたあと直に少女らと同様に私服に着替え、何だか弾むように旅館の外へ駆け出していた。

何だかそれだけはどうしようもなく目立つ魔法の杖を背中に背負い、大切な親書を鞄に携え、パートナーである明日菜と待ち合わせている大堰川を目指す。

子供とは言えイギリス紳士の端くれ。
女性を待たせてはいけないし、早すぎて気を使わせる訳にもいかないので時間よりやや早い程度で待ち合わせの場所に着いた。

木乃香は刹那に任せてあるし、彼の任務は親書を届けるだけ。
根が真っ直ぐ過ぎる上、ついこの間まで悪い魔法使いの存在にさえ気付けずにいたネギであるからこその思考の流れだ。
魔法に関わるという事は危険に近くなると言う事。その所為で故郷の一つを失っているというのに……

だが、幸いにもその部分のフォローは整っている――

「ネ――ギ先生♪」

「え？」

何だか親しげな声で背後から呼びかけられ、ネギが振り返ってみると、

何だか悪戯が成功した事を喜んでいるかのような表情で笑っているハルナ。

やや照れた表情を見せつつ、何時ものようにアヤシゲな飲み物を手にしている夕映。

やはり照れた表情で、皆より一歩後にいるのどか。

幼馴染の側にいられてうれしいのだろう、笑顔を見せている木乃香。

申し訳なさそうにコッソリと謝罪の意を見せている明日菜。

そして何時ものように努めて表情を隠そう……として、幼馴染の側にいる事からか隠し切れていない刹那。

それと――

チャイナ系の私服しか見た事無いのだが、明日菜達とさほど差の見られないミススカートとトレーナー姿という珍しい格好の古。

赤いバンダナを頭に巻き、Tシャツにジーンズ、バッシュ姿のタダキチがそこに並んでいるではないか。

「わ～～っ　皆さん可愛いお洋服ですねー」

そう女性達のお洒落を反射的に誉めるのはイギリス人の性であろうか？

等と一瞬ボケてしまったネギであるが、

『……じゃなくて！！

ななな、なんでアスナさん以外の人がいるんですか～～っ！！』

直に我に返って小声で明日菜にツッコミを入れていた。

『ゴメン。パルに見つかっちゃったのよー』

さっきから謝っていたのはその事なのだろう。

何せ人の恋愛感情の気配をラブ臭と称して感じているハルナだ。

ひょっとしたら魔法使い並の勘を持っているのかもしれない。

「ネギ先生。そんな地図もってどっか行くんでしょー？　私達も連れてってよー」

まぁ、当ねハルナはお気楽極楽であるが。

そして昨日同様、夕映らと共に着いて来ていた横島はというと、

『ムム……見事な一人ノリツッコミ……まだまだ浅いが光るモノがあるな……』

と、ネギに対して訳の解らない感想を述べていた。

「え～～と……5班の自由行動の予定が無いのは聞きましたけど、その……クーフェイさんの方は……」

基本的に夕映ら図書館組は、のどかとネギの仲を取り持つ事に集中しているので取り立てた予定は入れていない。

いや、元々古都に詳しい夕映に京都を案内してもらおうとは思ってたのであるが、のどかが勇気を振り絞って告白に成功なんかしたもんだから予定を全てキャンセルしてネギの行動に合わせているのだ。

そして古の方はと言うと……

「忘れたアルか？　ネギ坊主は老……タダキチの担当者アルよ？　そして私は付き添いネ。ちゃんと許可はとてアルよ」

「う……」

何だかよく解らないが、ネギがタダキチの面倒を見るよう新田に進言されているのだ。

もちろん新田にそのように進言するように話を持っていったのは、瀬流彦としずなの二人である。

新田にしてもネギの負担を増やす気は更々無いのだが、家族の全てを一気に失った（と言う設定である）タダキチに触れるのは歳が近いネギの方が良かろうと許可を出しているのだ。

無論、何かあった場合の責任は自分で取る覚悟もつけている。そ

こら辺は立派な教師なのだし。

ただ、ネギにしてみれば大変だ。

何せ何が起こるか解らない状況であるのに、足枷をつけられているようなもの。無視する訳にも行かず、トホホと頭を痛めていたりする。

しかし――

『話はかえでから聞いてるヨ。
　このかの事は私らに任せて、ネギ坊主はネギ坊主のやるべき事をするアル』

古にそう耳元で囁かれ、ハッとした。

慌てて刹那に顔を向けると、彼女もコクリと小さく頷いている。

つまり、古も“こちら側”という事なのか。

安心し切れた訳ではないが、それでも幾分は気が楽になった。

兎も角、何も知らない木乃香らを上手くまく為にも皆と回る方が良いだろう。

そう判断したネギは、明日菜にもコソコソとその事を伝えてとりあえず皆で嵐山の名所を歩く事にしたのだった。

『でも……何だか今日のクーフェイさん。何だか表情が硬い気が

するなぁ……
それだけ警戒してるのかな……？』

『うう……古ちゃんもガン無視かい……』

と、こっちはこっちで悩んでいる横島。

ネギと明日菜が皆をまいて本山へと向かい、その後を楓がつけてゆく……そう話は整っていた。

チラリと目を脇に向ければ茂みの中につぶらな瞳。まぁ、かのこなのだが。

流石にそこらを連れて歩く訳にはいかないので、スマンけど隠れてついて来てくれない？　とお願いしているのだ。

使い魔にお願いかよ…という疑問が湧かなくもないが、横島なのだから然もありなんと納得できてしまうのだから不思議である。

そして次に後方の土産物屋の店の陰に意識を向ければ……その陰の中にあった気配がたわみ霧散して行く。

何者か――というか楓がそこに潜んでいるのだろう。

楓が側にいて急に消えるとハルナ達が不審がるだろうし、流石に刺客らも気付く筈だ。

だから最初から陰に忍んでネギらの後を追う。それが刹那と楓が

話し合った策であるらしい。

らしいのであるが……

『オレに直接言うてくれへん……』

という事が横島を落ち込ませていたりする。

この話とて真名から携帯メールで教えられた情報なのだ。

……実は単に顔を合わせれば慌てまくってドジっ娘くノ一と化してしまうので、それを防ぐ為“だけ”の措置だったりする。

ラノベ等のラブコメに登場するウッカリ忍者となってしまう日が来ようとは、楓自身想像すらしていなかったのであるが、実際になってしまうと想いの他こっ恥ずかしい。

だからさっきの顔合わせが限界で、今は横島に視線を向けるどころか顔すら見せられない有様なのである。

彼女をライバルとしている真名が涙を禁じ得ないほどに。

そして古。

一見、彼女は極自然に振舞い、何だか凄く冷静に行動しているように見える。いや、“見えてしまう”。

ネギや明日菜、それどころか刹那とてそう見ていることだろう。

だがしかし、よく見れば解る事だ。

古はやたら汗をかいている。

首筋にもそれが見えているほどに。

だが、顔どころか額にも汗など一筋も滲みを見せていないのである。

いや――？

顎の奥。

顔と首の付け根の部分。

そこに目を向ければハッキリと見て取れるだろう。

よく見るとその部分に継ぎ目のような線が入っており、そこから汗がにじみ出ていると言う事に。

―＜超＞謹製、スペシャルマスク　Ｖｅｒ．古　菲―

こんな事もあろうかと、超が用意してあった普段の古の表情がそのまま表現されている＜そっくりマスク＞である。

材質はゴム等ではなく、特殊合成樹脂でつくられたもので、

「ふ……

茶々ま…もとい、ロボ研（ロボット工学研究会）のロボ用に生み出した人工皮膚を元に古専用ブレンドで作り上げたものネ。

無論、空気は通すようにしてあるから蒸れる事もないヨ」

との事だ。

尤も、流石の超の発明品であろうとも世には予想外というものがある。

彼女の発明品のそれは飽く迄も普段の古を基にして作られているので、異常である古にはちと足りていないのだ。

まぁ、人生最大の焦りをかましている古がここまで大汗をかくとは思ってもいなかっただろう。何しろマスクの継ぎ目から汗がドバァドバァと溢れ出てたりするくらいなのだから。

『こ…これは計算外ネ……』

つまり、見た目は無表情の古であるが、そのマスクの下では……

『あぅうう〜〜……っ！！
老師の顔がマトモに見れないアル〜〜〜〜っっ！！』

と、前述の通りに大汗を書いた挙句、頬どころか顔そのものを真っ赤っ赤に染め上げていたりするのだ。

ファーストキスというだけでも酒の力を借りなければ踏ん切りがつかなかったほど恥ずかしかったというのに、余りと言えばあまりに濃厚なキスをぶちかました（された）古である。

何だかんだ言っても根は純情な彼女の事、そうそう冷静でいられる訳が無いのだ。

物陰では蹲ったくノ一が、

『あ〝ぁ〝〜〜……横島殿の唇の感触がぁ〜〜っ！！
いや、イヤという訳ではないでござるが、いや嬉しいという訳では……いい、いやいや嬉しくないという訳ではなくて、
あ、いや、嬉しいという訳ではない事もない事も無きにしも非ずでない訳でござって……あ〝あ〝〜〜〜っっっ！！』

横島の横では一見無表情なカンフー娘が、

『う〝う〝……老師の舌が、舌が、舌がぁ〜〜〜〜〜……っ！！
イヤ、嫌という事違う、じゃなく、違うと違うから、い、いや、嬉しくない訳でもない訳でもなくて、その……うう……
何か、その……甘かたような、違うような、違わなくないような気持ちよかたような……あ〝あ〝〜〜〜っっっ！！』

そして当事者である横島はというと……

『ぐぉおおお……ナニ気にしてんだオレっ！？
キスしちゃったコトは置いといて……いや、置いといたらいけねーんだけど、置いといて、
それを気にしてない二人見て慌ててるってどーよ！！？？
コッチ向いてくれへんの気にしてるってナニ！！？？

やっぱりオレは堕天しちまったってぇのかぁああ～～～～っ！！？？』

段々と二人の感触を思い出していき、ロリ否定していた気持ちすら見失い、またも慌てふためいていた。

三人が三人して大混乱である。

一人（一匹）だけ置いてけぼりの　かのこが首を傾げるほどに。

「む……！？　すんごいラヴの香りがプンプンと……っ！？
極近い場所でのどか以外の何者が……！！？？
あ〝あ〝っ！！　反応が大きいのに位置が特定できないっ！！！
馬鹿なっ　質量感じるラヴ臭だとだと！？」

「……何アホな事言ってるですか」

オコジョ妖精には特殊能力があり、それは人の好意を測るというイヤなものである。
それに似たものをハルナは感知できるのだろう、楓と古と横島の

間で漂っているものを敏感に嗅ぎ取っていた。
だが、楓と古が好意を向けているのは横島であるがタダキチではない。それが対象をぼかしているのかもしれない。だとすると逆にとんでもない能力であるが。

そんな首を傾げまくって悶えているハルナを尻目に、ネギの肩の上でカモはその騒動に関わらず物思いに耽っていた。

『あの嬢ちゃん達のカード、けっこう強そうだったんだが……』

何というか、夕映の足技によって結ばれたのどかとの仮契約（PACTIO）であるが、彼女のカードは直接戦闘向けではないものの、何か強い力を秘めていそうだった。

ただ、のどかが戦闘に向くかどうかというと、彼女の性格上、不向きと言わざるをえない。

だからゲームの報酬ということでカードの複製は渡したものの助力を申し出たりはしていないし、魔法に関する事は何一つ伝えていない。
となると他のカードに期待をせねばならない訳であるが……

『手元にあるのは姐さんのカードと、スカカード五枚……後はあの……』

楓は潜んだままなのでチラリと古に眼を向けるカモ。

彼女は無表情なまま横島の横で佇んでいる（ように見える）。

そんな彼女が目に入った時、カモの頭に今朝の一件が思い浮かんだ。

＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊

明日菜達にカードの説明をした後、兎も角皆が外出着に着替えるというので一時解散となった。

ネギも明日菜と共に旅館を出ると騒動になると理解したのか、外で待ち合わせる事にし、自分の部屋へと戻って行く。

その際、

『兄貴、ちょっとオレっちは手洗いに行ってくるぜ』

「あ、うん」

と、カモはネギから離れ、さっき話をしていた自販機の側……ではなく、裏庭の池の隅に向って駆けて行った。

それでも何というか気が進まない。

いや、別に悪い事をしているわけではないし、バレると拙い事をした訳ではない。

パクティオー大量ＧＥＴ大作戦は悪い事じゃなかったのか？　と問われると返答に困るのだが、その件では新田に正座させられているし、さっき明日菜に叱られ、挙句エロガモというありがたくない称号までもらっている。

だからもうチャラである。と、カモの中では解決済みだ。

それでなんで気が重いのかというと……

『あんな事初めてだし、聞いた事もねぇ……だけど、できちまったんだから契約は結ばれたって事だよな？

それでもやっぱり入金はされてねぇ……じゃあ、姉さん達は何とどういう契約を結んだんだ？』

カモが悩んでいる事はその事なのである。

しかし、幾らけっこう大きい旅館とは言え、ロビーから裏庭まで

の距離がそんなに時間が掛かる訳も無い。
カモが答えをはじき出す前には到着してしまっていた。
はぁ……と溜め息をつきつつ、腹をくくって待ち合わせの場へと足を向わせて行くと……

『……は?』

奇妙な光景が目に飛び込んできた。

「う〝う〝う〝……私、何て事してしまたか……
顔が合わせ辛いアル〜〜〜〜……っ!!
舌が、舌が、舌が、舌がぁああ……う〝う〝……
初めてだたアルのに気持ちよかたなんて……あ〝う〝〜〜……」

顔を真っ赤にして湯気を立てつつ、蹲って悶えている古。

「拙者は、拙者は、拙者は……
あ〝あ〝、こうなっては責任をとってもら……イヤイヤイヤイヤイヤ、流石にそれは失れ……
いや、嫌という訳ではない事もない事もない事もない事も……あ〝あ〝あ〝……」

これまた顔を赤くしつつ旅館の壁にヘッドバットしている楓。

何というか、ステキにカオスな光景がそこに広がっていた。

流石のカモもリアクションに苦しんでいる。

後頭部に汗を垂らしつつ、数秒の間熟考し、

『兄貴も待ってるし、帰るか……』

と、アッサリと見なかった事にして踵を返した。

がしっ

「ドコに行くでござる？」

「逃げる気アルか？」

『ひぃいいい～～っ！！』

言うまでも無く、逃げられるわけは無かったのであるが。

「で？　件の式は成功したでござるか？」

『へ、へぇ、姉さん。一応、成功しやしたでゲスよ』

昨夜に引き続き正座させられているカモであったが、何だか異様に腰が低い。まぁ、無理も無い。

殺されはしていないし、怪我も負っていない。しかし、八つ当たり気味に死ぬ思いはさせられたのだから。

具体的に説明は省く事になるが、トラウマ物であった事とだけは言っておこう。

『忍の拷問術は伊達ではないでござる』とか、『数千年の拷問の歴史を舐めてはいけないアルよ』とか言ったセリフはスルーの方向で……

「で？　首尾はどうだたアル？」

『へ、へぇ……それなんスが……』

古の催促であったが、カモは何だか語尾をボソボソと窄めていっ

て要領を得ない。

だが、そういった返答の遅さにちょっと不安定な少女らの眼がすぅ…と細くなり、その手指がピクリと動いた瞬間、カモはガチンっと身体を固くして直立不動で立ち上がった。

『ヘイ!!　これでヤンス!!　これが姉さんたちのカードでゲス!!』

とドコからか三枚のカードを取り出し、二人に差し出したカモ。

『ドコに持っていたのか?』等と聞いてはいけない。

ものごっつセリフが変であったが二人は気にもせずそのカードを見、自分の絵が入っているそれを風のように奪い取った。

殺気（特に古のは食気混じりで恐怖に拍車をかけていた）が遠退いた事に安堵し、ズルズルと座り込むカモ。

「む?　何でござる?　この一枚は」

自分らは二人。なのに出された札は三枚なので当然気になるというもの。

楓がそうつぶやいたので古も何だと覗き込んでみた。

「ほえ?

あ、かのこアル」

そう。

そこに札絵は横島の使い魔である　かのこの絵だった。

実は楓は、奈良から戻ってから会話らしい会話を殆どしていなかったので、聞きそびれていたのである。

問題が問題なので横島も瀬流彦と学園長にしか詳しく話をしていないし。

何故に古が知ってるでござる？　と、しょーもない事で空気が緊張したのだが、横島がウッカリ精霊契約を知らぬ間に結んでしまった事まで話すとその空気も軽くなった。

いや、どちらかというとそういった事で契約してしまった小鹿を連れて帰ってまで面倒をみる事にした彼を思い何だか嬉しそうですらある。

しかし、流石にこの小鹿が自分らと同様、仮契約を行なっていた事にはちょっと驚いていた。

昨晩の騒動直後、何が何だか解らない内に無理矢理仮契約とやらを結ばされた挙句、照れた古に吹っ飛ばされた横島であるが……その所為でいつものよーに彼は意識を失っていた。

向こうでもそうであったが、そーゆーコトがあった後は大抵は自力回復するまで放ったらかしになっている。

しかしこちらには一番弟子に勝るとも劣らないレベルで慕っている使い魔かのこがいた。

如何に精霊とはいえ、姿形は小鹿である　かのこはまだヒーリングといった事は得意ではない。というか出来ない。

それでも自然界から生まれ出でたモノであるし、やはり動物の外見をしている以上、嘗めて癒そうとするのは当然の行動だった。

一番弟子の人狼少女だって顔ばっか嘗めていたのだ。かのこがやらない訳がない。

それが偶々キスとして判断されたのだろう、見事かのこと横島の間に仮契約が成されてカードが出現していたという訳である。

無論、カモにっとて精霊だろーがなんだろーが契約を結んでくれりゃあオコジョなる単位のナゾ金が手に入る訳であるから文句をいう義理も何もないはずであるのだが、コトがコトだけに話は別だという事らしい。

精霊が使い魔としてくっ付いていたというのも初耳であったが、何より『あっし以外に精霊が!?』という自分の立場に関わる存在に戦慄とショックを受けているようなのだ。

つーかオメーは妖精なのだから別モンだろう？　という説もあるのだが関係ないらしい。

だからだろうか、『契約後に別口契約!?　ふざけんな!!』と、奇怪なイチャモンをつけていた。

尤も楓らからすればカモの文句なんぞ『ウルサイ』の一言で終わらされてしまうレベルだ。

あの横島に強い絆ができ、尚且つ仲よくしているようなのだ。だったら何も問題ないではないか。

絆をなくして寂しそうな彼を目にする事に比べれば、カモの訴えなんぞアンパンに乗っかっているケシツブより小さい。

「大体、かのこは可愛いアルよ？　その時点で大敗してるネ。つか比べる事もおこがましいアル」

『あっしだって可愛いじゃありやせんかーっ！！』

「日本語に対する侮辱でござるよ。国語学者の金田一センセーに死んでお詫びするレベルでござる」

『そこまで！？』

まぁ、彼女らからしても　かのことカモでは和三盆の生菓子と１００円ショップの輸入麦チョコくらい差があるので本気でどうでもいい話。比べる事自体がナンセンスなのであるし。

るる～と涙にくれるカモを他所に、横島と行動する事になっている古が　かのこのカードを預かる事にきまり、改めて世界に一枚しかない自分らのカードを調べ始めた。

作りもきれいなもので、絵の色遣いもやや日本画っポイが自分達そっくり。ちょっと恥ずかしいが満足の出来栄えだ。

縁まできっちりと補強されているし、こういうのを生み出すのも

魔法なのかと感心してしまった。

ただ、一つだけ疑問が湧いている。

その疑問は当然ながら二人とも感じていたもので、預かっているかのこの札も出したりして自分らのと見比べていた。

あ、あれ？　何か問題でも？　とビクつくカモの前で、手にとったそれを再度ジ～っと穴が空くほど見つめてから、

「……ところでカモ殿」

『な、なんでゲしょう？』

「どうして私達のカードは……」

二人同時にカモに見せ付けるかのようにその図柄の面をカモに突き出し、

「「こんなにアスナ（殿）達のと違う（アルか）でござる？」」

と、押し付けるようにカモに迫った。

『知らないっスよ～～～～っ！！！
こっちが聞きたいくらいっスよ～～～～っ！！！』

彼女らのカードは、明らかに仮契約カードのそれではなかった。

まずサイズからして、タロットカードのような仮契約カードと違って、その辺のゲームで使用するカードと同じ寸法である。

正確に言えばブリッジサイズ（日本での一般的なトランプサイズ）の形状だ。

そしてデザインもまるっきり違う。

仮契約カードにはその従者のパーソナルデータが刻まれており、まずカードには従者の綴りがラテナイズ（ラテン語表記）された従者の氏名、そしてその能力や性格を表す称号が記されており、プラトンの『国家』によって論ぜられた四元徳にコリントの信徒への手紙に記述する三つの得を加えた「ヨーロッパ七元徳」が記載されている。

そして東・西・南・北・中央の五つの方位（ｄｉｒｅｃｔｉｏ）、素性や運命等を反映した色調（ｔｏｎｕｓ）、従者の持つ素性に応じた天体的性質である星辰性（ａｓｔｒａｌｉｔａｓ）等が表されているのだが……

二人のカードにはどの一文も記載されていないのである。

カードそのものの色合いにしても、明日菜やのどかの持つカードと違って小豆色の縁取りがあり、裏側も同色で塗られている。
尚且つその厚みも三倍あった。

そしてその図柄……

それに関しては他の仮契約カード同じで、誰が書いたのか不明であるが綺麗な絵が描かれている。
何というか、見ようによっては契約者である魔法使いが死んだ場合のカードに似てなくも無いが、そのカードからは確かな力が感じられるのだ。

おまけにその絵は――

「拙者のこれは……」

「……えと……何アルか？　この衣装」

赤や黄色、藍色の大きな紅葉が舞う中、彼女の忍服の様に大きくスリットの入った修験者のような服……鈴懸（すずかけ）を着、
銀色の葉団扇を持った楓の姿。
足元は一本歯の高下駄、そして赤い袈裟を引っ掛けており、ご丁寧にも額には頭巾（この場合は“ときん”と読む。よく修験者がつけている八角形のアレ）を着けている。

何というか、天狗のような格好をした楓の絵がそこにはあった。

「で、私のは……」

「これは……杯でござるか？」

「否、これは……」

古の方は、大きな黒い杯を持った古の姿。その内側には“可”の一文字が描かれている事から、可盃（べくはい）だと思われる。

可盃とは、底に穴が空いてたり尖ってたりする、とにかく注がれた酒を飲み干さないと零したりして置けないようされている酒杯の事。

しかし形はどう見ても大きな杯であるが……

それを持った古の姿は演舞用だと思われるチャイナ服を着込んでおり、その衣装には赤い空に浮かぶ月、そして満開の桜の柄が描かれている。

そして背景には大きく黄色い花……菊が描かれていた。

そしてこのカード……

ややベースの絵と違いはあるものの、似たような物を二人は知っている。

首を捻りつつ顔を見合わせ、もう一度絵に目を戻して再確認。

二人にはこれがやっぱり“あの”札としか思えない。

「えと……」

「コレは……」

「「花札（アルか）でござるか？」」

そう、大きさは兎も角、形状とか色使いとかが花札そのものなのである。

特にハッキリとそれだと解るのは　かのこのカードで、二人のちょうど中間ともいえる、“月の原で跳ねている角の生えている雌鹿”だ。

本人（本鹿？）よりちょっと大きく育っており、首には白いペンダントが掛っているが、そのつぶらな瞳は間違いなく　かのこだと古は確信しているし、本物とやや違うとはいえその図柄は明らかに花札を連想させるものだ。

そんな二人の感想を聞き、カモは『やっぱりか！？　やっぱりかぁ～～～っ！？』と頭を抱えていた。

それもそのはず、カモからしてみれば例えネギとの仮契約でなく

とも、仮契約は結ばれたのであり、どれだけ形が違おうともカード（札）が出現したわけであるから仮契約が結ばれ１５万オコジョ＄は＋された筈だったのだ。

だが、これはドコをどー見てもＣｈａｒｔａ　Ｍｉｎｉｓｔｒａｌｉｓ……仮契約カードではなく、入金もなされていないのだ。

『くっそぉおお～～～……

やっぱり兄貴用の契約方陣にムリヤリ他人の名前を書き込んだのがダメだったのか?!

それとも宿星が解んなかったから、テキトーに書き込んだのが悪かったのか!?

ううう１５万オコジョ～～～……』

たかが１５万されど１５万。

オコジョ＄とやらが一般では如何なる金額になるかは不明であるが、彼の悲しみ具合からそこそこの金になると思われる。

だが、彼の悲しさ理解できるのであるが、そんな事を二人の前でポロリと口にするのは戴けない。

「ほほう……？　興味深い話でござるな……」

「詳しく話を聞きたくなたアルね……」

そう――

少女二人は恥ずかしい思いをしてまで期待していたわけで……
だからそんな二人を前にし、そう言う事を口に出してはいけないのである。
『あ、あれ……？』

※※※
※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※
※※※※※
※※※※※※※※※しばらくお待ちください※※※※
※※※
※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

「つまり、生年月日から割り出した星の位置……宿星に問題があった可能性があるでござるか？」

『ハ、ハイ……残ル可能性ハソンナモノカト……』

カード……というか、花札の図柄を見ながら楓が足元に転がっているモザイクに問い掛けると、何だかヤヴァイ形になった物体がボソボソとそう返してくる。

“それ”が言うには、契約者である魔法使いのパーソナルデータに異常があるか、誤解があったにもかかわらず、偶然リンクが繋がってしまったが為、エラーが走った可能性があるとの事。

無論、詳しく調査せねばそれが原因かどうかははっきりしないのであるが……

しかし、口には出していないのであるが、楓は凡その事が解ったような気がしていた。

横島自身が言っていたように、彼はこの世界……宇宙の人間ではない。

だから１９７６年６月２４日という生年月日が解っていても、“こちら”の宇宙の宿命星と位置が違う可能性があるのだ。

だが、それだけではないという事も漠然とではあるが解っている。
魔法知識が皆無といってよいのでそれが何かは解らないのであるが……

「それで？　コレは使えるアルか？」

何気なく問い掛けられた古の言葉に、楓はハッとして頭を上げた。
いや、ネギが持っているパクティオーカードのような魔力注入によるパワーアップを期待しているわけではない。
ただカードの能力として術者との“繋がり”がある。
それを求めたからこそ、（あんなコトをしてまで）強引に仮契約に出たのだ。

古が問い掛けたのはそう言った意味合いでの『使えるか？』なのだ。

奇怪なカードとはいえ、如何なる歪みがあろうと成立しているからこそ、横島との魔法的（霊的？）な繋がりができているからこそ札が出現しているのだ。
それが使えない事はありえない。“ハズ”である。

『え、えと……カードを通じて魔力を注いでもらうのは……』

何とか肉体を修復しつつ、下半分をモザイクに隠したままそう問い掛けるが。

「今は……無理アルな」

「でござるな……」

二人は、顔を赤くしてプイと他所に顔を向けてしまう。

ナニやら乙女的なナイショがあるようだ。

何というか……可愛い事は可愛いのであるが、赤いモノが付着している拳とか、それが滴っているクナイとか握っているので台無し気味。

それに試してみようにも肝心の彼がここにいない。

試す云々以前に二人ともまだはっきりと顔を合わせられないので説明できないのだ。

『ううう……じ、じゃあ、アーティファクトの召還を……』

パクティオーが結ばれれば、カードを通じて専用の道具が与えられる。

術者が召還し、従者に渡す事もできるが、従者がカードを使用して呼び出す事もできるのだ。

『呼び出すコマンドはＡｄｅａｔ（アデアット）っスよ』

「ふぅん……」

何というか眉唾っポイが、古はその札を掲げ、今教えられたワードを口にしてみる。

「あ…あであっと！！」

ややアクセントが微妙であるが、更に微妙な明日菜等が呼び出せるのだから大丈夫であろう。

組み込まれた呪式が、登録者自身が唱えたワードに反応し、専用のアイテムを取り出して存在形態がカードと入れ替わる。

明日菜はカードの図柄にあった大剣とは違ってハリセンが出現したのであるが、この札の場合は……

し～～～ん……

「使えないアルよ～～～～っ！！！」

『あ〝あ〝～～～～やっぱりぃいいいいっ！！！』

――それ以前に出現しなかった。

やっぱりカードからして通常とは違うのだから、思うように行かないのは当然なのだろう。

「このインチキオコジョ～～っ！！　丸焼きにして食てやるネ～～～っ！！」

『ひぃいい～～～っ！！　あっしの所為じゃないっス～～～っ！！お助けぇえええ～～～～～～～～～っっ！！！！』

懐から自前の暗器、鴛鴦鉞（えんおうえつ）を取り出し、カモに襲い掛かる古。

どーやってそんなものを懐に忍ばせていたかは甚だ疑問であるが、月牙を二つ組み合ったような形状の武器を獲物（カモ）に突きつけ、期待を裏切られた憤りを叩きつけようとする。

ぶっちゃけ理不尽極まりない話で、当然のようにカモはギヤーギャー悲鳴を上げつつ逃げまわる。

だが悲しいかな、カモの方が回避率は高いものの、怒りと憤りが煮詰まっている古はそれに簡単に追いついてしまう。
大体、彼女が師と仰いでいる横島の回避能力に比べたら、カモなどサンドバックに等しいのだし。

「覚悟ーっ！！」
『ぎゃひぃいいーっ！！』

危うしカモ！！
昼食はオコジョ料理決定か！？

何だか二日通してネギと共に命の危機になっているのだが、

「古」

「ん？　何アルか？」

三日月型の刃の部分がカモの顎を捉えかかった瞬間、楓の声によって古の凶刃はピタリと停止し、真昼間の惨劇は回避された。

安堵の為か、腰が抜けたのか、カモはプリンのようにベチャリとへたり込んでしまう。

そんなカモを無視する形で、先ほどから二人のやり取りを無視して札を見つめ続けていた楓は、古に対して札の図柄を突きつけるように見せる。

「？　コレがどうかしたアルか？」

「古……この札は何に見えるでござるか？」

「何と言われても……」

そう言われ、改めて札を見直す古。

楓のは紅葉の札で、自分のは杯（盃）の札……さっき二人が納得したように、普通に見れば、

「……花札ネ」

「で、ござるなぁ……」

ふむ…と頷き、自分の札にもう一度目を落す。

ネギらの使用するパクティオーカードとやらがラテン語で来たれ（Adeat）と唱えて道具を呼び出す。

そのカードの形状から見れば、タロットに酷似しているので何となく納得できる。

そして手元の“それ”は花札に酷似している。

となると……

古も同じ答えに行き着いたのだろう。楓と顔を見合わせ、もう一度自分のカードに目を落とし、ものは試しとばかりに同じ様な言葉を紡いでみた。

すなわち――

「――こいこい――」

「――来々――」

パァッッ!!

『うっそぉ～～～～～～～んっ？？!!』

カモの悲鳴も当然であろう。

通常の手順と違った方法で見た事も聞いた事も無い札が出現しただけはなく、その札が自分らの良く知る仮契約カードと同様の機能

を見せたのだから。

一瞬の閃光の後に現れたのは、まさに図柄通りの姿をした二人の姿。

横島忠夫の従者として契約を結んだ楓と古がそこに立っていたのである。

そしてそれは、カモの知る魔法の常識の崩壊をも意味していた――

「どうかしたの？　カモくん」

『へ？　い、いや、何でもないっスよ。兄貴』

何時の間にか考え込んでしまっていたようだ。

行く当ても決めずに歩いていた少女らは、何時の間にかゲームセンターに入り、プリクラを撮ろうとしていたのである。

『ううう……訳わかんねぇ……』

のどかとネギを写す時、ちゃっかりポーズを決めつつも未だに“札”の事を悩み続けているカモ。

いや、あのカード……札が使えるかどーかというのなら、“かなり使える”と言って良いだろう。

少なくとも楓の方は、ものごっつランダムで、博打要素が高い能力ではあったが、シャレにならない能力を秘めている。

その代わり、古の方はサッパリ解らないのであるが……

その古にチラリと眼を向けてみると、彼女は相変わらず固すぎる表情のまま、ハルナに引き摺られてタダキチ少年とプリクラを撮らされていた（そして何だか首筋から蒸気を漏らしている）。

昨夜はカメラの視界外であった為、契約を結んだ横島忠夫という人物を目にする事はできなかったし、アーティファクト…（？）も正体不明過ぎて当てにできないときている。

上手くすれば、いざ西の刺客と戦闘が始まったとしても自分らの戦いに組み込めるやも……と思っていたのであるが、博打要素が大き過ぎて出たとこ勝負になりかねない。

『……世の中上手くいかねぇモンだ……』

等と、一人（一匹？）黄昏れるカモであった。

そして――

「アイツらか？」

「せや……でも、アイツらはそないに気にせんでもよろしおすえ？」

「“アレ”の気配もありませんね～～」

「おったら逃げるわっ！！！」

「姉さんらの言う、ヘンタイの事か？　そないに強いんか？」

「……あの力は侮れない……
あれは魔法じゃない。そして氣でもない。もっと別の……何か違う力だった……」

「ハっ！　どっちでもええわ。
来たら来たでぶちのめすだけや！！」

――戦いの時が迫りつつあった。

「頼りにしてますえ？　主に全面的に」

「アレのお相手はお任せします～～」

「……なぁ、新入り。
あの二人があないに嫌がる敵って、どんなヤツなんや？」

「……普通じゃない……とだけ言っておくよ」

「……ワケわからん……」

前編（後書き）

横っちの生年月日はアニメ版の公式設定です。
ですから楓（１９８８年１１月１２日生まれ）より十二歳年上となりますので、実年齢差はほぼ合ってます。全く狙ってなかったんですが……偶然ってスゴいっスねｗ

因みに、楓も古も横島の誕生日（楓に至っては生まれた西暦も）を彼から聞いて覚えています。
何故かと言うと……ってのは野暮ですねｗ

中編　一壱一

――はぁ……どうしたものでござろうか……

青々とした竹が林立する竹林。
その陰を縫い、少女が腕を組んで一人悩みつづけていた。

登るだけでも難しい竹と竹の間に入り、其々の枝の間に足をかけ、見事なバランスで竹を揺らす事無く静止し続けている。

その技も術も、その年齢からすれば度外れた技量であるが、そこまでしてやっている事は悩む事だけ。
なんとも気の抜ける話である。

だが、少女からすれば真剣であり、大切な事なのだ。

頭に浮かぶのは一人の男性。

思い出されるのはその唇の感触。

それも昨夜の事なのであるから記憶も鮮明だ。

尚且つ、時間が経てば経つほどにその感触がリアルに思い出されてしまい、まともに顔を合わせる事も難しい。
だというのに、合わせないと妙に淋しさも浮かんでくるアンビバレンツ。

「はぅ……」

妙に熱い吐息が零れ、顔を赤くして思わずしゃがみ込んでしまう少女。

言うまでもなく竹の枝葉の上なのであるが、無意識に取っているバランスは驚嘆するのみ。
内容とのギャップが酷すぎるが。

頬の火照りは然程続かないものの、胸の奥を締め付けてくる感触は理解し難い。というより、全く解らない。

それに、自分の口の中に差し入れられた舌を思い出すと下がった筈の体温が上がってくる。

……いや、“無理矢理された”というのならもっと冷静でいられたかもしれない。

初めからそれを狙っており、自分から彼の唇を求め、無意識にで

あろうがその彼から過剰サービスで返された。

そこが問題……

いや？　あの時の嫌がっていた訳ではなく、どこか悦んでいたような気も……

キスをした…というのではなく、唇を奪い、逆襲されたというシチュエーションは兎も角、そうまでされた事に嫌悪の“け”の字も浮かばず、奇妙な感激すら湧いてきていた。

そこにも照れが現れてくるのである。

「……って、何で拙者は照れてるでござるか！？」

はぁ…とまた溜め息一つ。

十四年というまだまだ浅い人生であるが、それなりの経験は積んで来たつもりであった。

だが、流石にこういった手合い――はっきり言えば“色恋沙汰”という難問にぶち当たった事が無い少女は、心底戸惑っているのである。

何とか立ち直ったのか、また腕を組んで溜め息一つ。

「結局……拙者は何がしたかったのでござろう……」

思い浮かぶのは困ったように笑う彼の顔。

学生達に逆恨みされて泣いている彼の顔。

表情が豊かなので、百面相が如く変化する彼の顔だ。

しかし、気の所為かもしれないが彼が本当の意味で笑顔を見せてくれた事がないような気もしてくる。

そんな彼の心からの笑顔が見てみたくて、

そんな彼に心からの笑顔を浮かべさせてあげたくて事に及んだ…

…筈なのであるが――

「拙者は……」

結局、少女の唇は次の言葉を紡げなかった……

……等と乙女っポイことを悩んでいる少女の下方では――

「そーゆうデカイ口叩くんやったら、まずはこの俺と戦ってもらおうか」

という、けっこうマジな戦いが始まろうとしていた。

■十時間目：独立愚連隊ニシヘ　（中）　―壱―

「しっかし……ホント、タダキチ君って強いね～　お姉さん感心しちゃったよ。
　つーか、ホントに初めてなの？」

「ふ……何を隠そう、オレは遊びの達人なんや」

嵯峨野のゲームセンター。

何ではるばる京都に来てまでゲーセンなのかという気がしないでもないが、そこには何だかご機嫌の眼鏡少女と、その彼女に肩を叩かれて胸を張っている少年。
　そんな二人を呆れた眼で見つめながら紙パックのジュースを啜る少女、

そして、

「せっちゃん！！」

「わぁああっ！？　お、お嬢様！？」

何だか目を瞑って考え事（？）をしていた少女に纏わり着くストレートロングの黒髪を湛えた少女と……

「ま、待たせたアルね……」

何だかやたら手洗いを往復している中華娘がいた。

何故にここに皆が寄り集まっていたのかというと、実は眼鏡魔人ハルナに引っ張って来られたからだ。

彼女が言うには、ここにあるカードゲームの筐体でゲームを行い、上手くいけば関西限定版レアカードが手に入る……かもしれないとの事。

まぁ、実際にはレアというだけあって早々簡単に入手はできなかったりするのであるが、チャレンジしなければ確率は何時まで経ってもゼロだ。

だからハルナ達は件のカードゲームのゲーセンバージョンを遊びに来たと言う訳である。

そのゲームは巷でけっこう流行っており、プレイヤーは魔法使い

となって、さまざまなカードを使用して戦術戦略を駆使して戦うというシステムである。

新幹線内でハルナらが行っていたのをネギも見て興味を引かれていたし、何より魔法で戦うという内容にも何やらやってみたい気が湧いてきていた。

だから夕映らの勧めもあってネギも最初はやっていたのであるが、途中でハルナに勧められて横島が乱入。

そこから伝説が始まった。

元々、横島という男はどういう訳か遊び関係にめっぽう強い。遊びに関してだけ……といのは言い過ぎかもしれないが、実際に無茶苦茶強いのだ。

流石に某修行場の猿には格ゲーでは及ばなかったものの、一般人相手なら無意味なほど強かったりする。

ハルナらがやっているのを後から見てルールを覚え、スタートセットのカードの特性をじっくり読んで頭に叩き込み、“戦い方”というものをあっという間に理解してしまったのである。

いや、これがもっと単純なルールのものであればもっと梃子摺ったであろう。

だがしかし、このゲームはそれぞれのカードに特性がくっついて

いてややこしい分、逆に勝利への抜け道が多量にあるのだ。

元より『卑怯でケッコー、メリケン粉♪』な戦いを普通としている職場で培われた生き汚さは伊達ではない。

筐体相手の戦いは元より、途中で対戦を挑んで来た自信ありげな少年らをも速攻でフルボッコにしてしまうほどだった。

無論、中身が大人びていよーが成長していよーが、その本質はやはり横島忠夫である。

正々堂々とした戦い方では無く、ちまちまとした挑発攻撃込みのトラップメインな、おもっきり卑怯戦法であった事は言うまでも無い。

余りに渋すぎる戦い方であるが、ぶっちゃけ彼からすれば勝ちゃあ良いのである。

大攻撃より地味攻撃。辛勝でも大勝利！

元上司に叩き込まれている『如何なる方法をもってしても勝てば美酒を呷り、負ければ辛酸を舐めるのよ！　オーホッホッホ……』の教えは健在のようだ。

当然ながらかな～り盛り上がりに欠ける為、地元の子供達にはブーイング喰らっていたが、逆に麻帆良の少女らには感心されてたりする。

何せ刹那でさえ、横島の挑発を込めた駆け引き攻撃の妙には見入っていたくらいなのだから。

さて――

そのボコられた子供らの中には夕映を参謀につけたネギと、何だか妙な気配を持ったニット帽の少年もいたのであるが、言うまでも

無く結果は……

「でも、ちょっとやり過ぎたんじゃない？　あそこまでボコらなくても…」

「って、言われてもなぁ……正直、アイツら弱すぎたで？　ごっつ攻撃パターン読み易かったもん」

「ま、まぁ……あれだけ真っ直ぐな戦い方してたらキミみたいなトリックスターには勝てないでしょうけど……」

そう、見事な敗北を見せてくださっていた。

横島のエグイところは、相手のオーラを無意識に探ってしまうところである。

相手の気勢が解かるのだから後は簡単だ。

向こうがトラップを意識すると正々堂々と戦い、逆に向こうが正面戦闘だと踏んでくればトラップを発動するだけである。

だとしても彼は店内ではスタートセットしか買えておらず、ネギにしても夕映に借りたスタートセットだったのでカード内容はほぼ五分だった。

つまり、駆け引きでネギらは負けた訳である。

「ううう……こんな子供に読み負けてしまうとは……」

と、夕映も負けを認め、膝をついていたし。

しかし、実のところ彼女が横島より劣っていると言うわけではない。

彼女は優秀な戦略家で戦術家でもあった。

単に横島が汚過ぎるだけなのである。

「あれ？　そう言えばネギ先生は？」

「……あ、のどかもいませんね」

「アスナもおれへんよ～？」

勝ちまくりはしたがレアは入らず、肩を落としつつ休憩を取っているハルナらであったが、今頃になってメンバーが足りなくなっている事に気が付いた。

どうやら彼女らはゲームに熱中していた余り、三人が消えていた事に気が付かなかったようだ。

無論、刹那は明日菜とネギがいなくなっている事はとっくに気付いている。

というより、あの二人が彼女と古に目配せをして出て行ったのであるから知っていて当然だ。

言うまでも無く本山に親書を届ける為にこっそりと出て行ったのであるが、のどかまでがいなくなっているのはよく解らない。

刹那も一瞬、戸惑いを見せたものの、一緒にいる古が顔色一つ変えていないし、ちょくちょく手洗いに行っている。

あれはどこか…楓辺りに連絡を取りに行っているのだろうと（勝手に）納得して黙っていた。

ハルナらがまたぞろ騒ぎ始めたので落ち着いて場所を変えようと言葉を掛けようとしたその時、

「！？」

首筋にジクリとした殺気を感じ、慌てて身を捩った。

その瞬間、風を切る音がして目の前を黒い何かが通り過ぎ、ＵＦＯキャッチャーの筐体の縁に突き刺さった。

『棒手裏剣！？』

周囲の人間に気付かれない内にそれを引き抜き、店の入り口に目を向ける。

ニコ…

そこには、一昨日の晩と同様に、お嬢様然とした衣装に身を包んだ剣鬼が微笑を浮かべて立っていた。

その手に剣呑な得物を携えて――

一方、その頃……

開かれた竹林の中に赤い鳥居が立ち並んでおり、その下を全力疾走で三つの影……と、一つの小さい影が駆けていた。

先頭を駆ける影はまだ幼い少年。

それを追い、攻撃を仕掛けているのもまた同じくらいの年頃の少

年。

そしてその二人の間に何とか割り込もうと努力を続けているのは少しばかり年上であろう少女の影だ。

小さな影は、そんな三人を追っている手のひらサイズの人形のような少女の影。

何というか、かなり非現実的な光景がそこに広がっていた。

ここは？毘古神社――の入り口。

外観が伏見稲荷に良く似ているが、古くから西日本の呪術の総本山として知られている関西呪術協会の本山なのである。

それなりに力がある者であれば見ただけで相当強力な結界が張られている事が理解できるであろうほどで、恐らく入り口である鳥居を潜らねば何かしらの罠に捕われてしまう事であろう。

そして現にその少女を含む三人（＋1体と1匹）はそこに囚われてしまっているのだ。

とは言っても、別に彼女らは竹林の方から突撃した訳ではない。ちゃんと正式な入り口である鳥居の方から入っていたにもかかわらず、彼女らは囚われてしまったのである。

『半径約２５０ｍほどの円形の結界でござるか……それも繋がっ

ているだけ……
　これは完全に時間稼ぎの結界でござるな……』

流石に戦いが始まれば竹の上から様子を窺っていた少女――楓も再起動を果たせていた。
何時までもハズい思考に沈んでいる彼女ではない。戦いが始まれば直にスイッチが切り替わり、妄想を振り払えている。

……まぁ、悩み事を棚の上に置いて後回しにしただけという説もあるが。

ともあれ、相変わらず竹を撓らせる事も無くその枝の間に足をかけて立っている彼女は、下方の諍いを見守りながら、ふーむ……と首を傾げていた。

いや、彼女が結界を破る……というのであれば、実は然程苦労はしない。

こう言った結界――無間方処の呪法――の場合、中心に“核”となるモノが置かれているか、出入り口が括られているか…なのだから。
手段としては“核”を探して破壊するか、出入り口を括っている“門”を壊せば良いだけだ。

だが、彼女は“まだ”動けなかった。

彼女が学園長から与えられた任務は子供教師……先頭を走り、追撃を防御しつつも何とか隙を見出そうと努力を続けている少年……の補助と木乃香の護衛である。しかし、この中に“命の危機が迫らない限り手を出してはならない”という“おまけ”がついていた。

当然であるが今現在は魔法に接点の無い木乃香に危機が迫った場合は話は別であるが、ネギの方は試練を受け続けなければならない。だから戦いの覚悟は元より、様々な状況でも対応できる精神を養わねばならないのである。

数え十歳相手に何させやがる!?　と教育委員会に正面から喧嘩売ってるような連中であるが、魔法界という“裏”に関わる以上危険は常に付いて回るのだ。

それに……

――既にあの学園長は、ネギと真祖の吸血鬼を戦わせている。

当然、そこには女子供を殺さないという信条を掲げている吸血鬼を信頼して戦わせたのであろうが、普通ならどう考えてもやり過ぎだ。

未だ様子を見続けている楓も、学園長から話を聞いた時には呆れてものが言えなくなったくらいである。

甚だ余談となるが――

真祖の吸血鬼とやらの実力を知らなかった楓は、その事を横島に質問したのであるが、彼は自分の知識から件の存在を……

『昔話に出てくるヤツと同じで、蝙蝠になったり霧になったり、人間の血ぃ吸って下僕にしたりできるけど、

その本質は物騒でアホで時代遅れな田舎モンだ』

と答えている。

まぁ、彼が知っている範囲で真祖の吸血鬼を語るとそうなってしまうだろう。

彼の知るそれは、確かにその昔ヨーロッパに死と破滅をぶちまいた恐るべき存在であるが本質はバカタレであった。

とてつもない魔力を持っていたにもかかわらず、その力の片鱗を見せぬまま息子と噛みつき合戦をして敗北し、封印されてしまったほど。

その息子にしてもバンパイアハーフだからか、水の流れや陽光にもビクともしないくせに、ガーリックパウダーで半死半生になるし、音楽センスねーわ何かナルシー気味だわでどこかヌケまくっている。

それで七百歳だというのだから、学園に封印されている６００歳程度で、尚且つ“たかが６００万$程度”の賞金首でしかない吸血鬼をどう恐れればよいと言うのだろうか？

そんなこんなで、間違った認識をもっている横島から教えてもらっている楓だから、件の吸血鬼……エヴァンジェリンに対する認識はかな～り生あたたかいものへと変貌していたりする。

―閑話休題（それはさておき）―

まぁ、本来ならここまでややこしい状況になっていなかったかもしれないが、彼女のライバルが言っていた通り『学園長と長の見通しが甘かった』と言えなくもない。

しかし、少女はここに第三者の介入を感じなくも無かった。

ここ最近鍛え上げられて行く“霊的”な力のお陰で妙に感覚が冴えてきている彼女だからこその“勘”かもしれないが。

「オラオラオラオラーっ！！」

「あうーっ！！」

そんな少女の視線の先では、氣が篭った拳のラッシュを喰らってネギの物理障壁もかなりキツくなってきていた。

何せこの西の刺客であろう少年の動きが速すぎる為、明日菜とネ

ギの二対一で戦っているというのに掠りもしない。

さっきから少年はネギを追い詰め、明日菜がそれを防ごうとするのだが少年に攻撃が当たらないのだ。

ネギも防ごうと必死なのだが、何せ彼は術者なので体術の方は大した事が無い。魔力で強化しているだけ一般人よりマシというだけである。

だからその防戦は単に障壁を削られるだけの一方的な消耗戦となっていた。

更にはこの並び――

ネギが逃げ、少年が追い、その少年を明日菜が追う。

これでは圧倒的にネギらの方が不利である。

「ちょこまか逃げんな！　このチビ助！！」

「！」

全身のバネをもって、掬い上げるような掌底。

ネギの張った不可視の壁をぶち抜かれ、ある程度衝撃を失ったものの打たれ慣れしていないネギにとって十分にダメージとなる一撃を顔にもらってしまった。

「ネギ！！」

慌てて駆け寄る明日菜であるが、走らねば届かないほど距離がある。

つまり、ダッシュ時に二人に負けているのだ。それでは少年の攻撃に追いつかないのも当然であろう。

「う……」

打ち倒されたネギであるが、それでも何とか身を起こす。

口の中を切ったのか、やや血を吐いたもののダメージは深くないようだ。

そんなネギを見、既に勝った気でいる少年は、

「どや、見たか！！？？

俺は弱ぁないで？！　強いんや！！　同情される謂れは無いわ！！！！」

と血管を浮かべてネギに吠えた。

横島にフルボッコされた彼を、ウッカリ慰めてしまったネギに対し、プライドを傷つけられた少年は逆上して襲い掛かっていた。

……としか思えないセリフである。

まるで関係ないところで何気なく敵を逆上させてしまうところは、やはり横島であった。

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊

タッタッタッタ……

けっこう息が乱れてはいるが、それなりの速度で商店街を突っ切って行く。

それを追うように左斜め後方辺りから足跡が響いてくる。

尤も、道路を踏みしめる音ではなく、瓦を踏む音。つまり、屋根瓦の上を駆けているのだ。

「せ、せっちゃん、どこ行くん？

足速いよぉ――」

「ああっ、す、すいません！　このかお嬢様！」

木乃香、そして……

「な、なぜ……いきなり……マラソン大会に…？」

「ちょ、ちょっと桜咲さん……何かあったのー？！」

と、遅れて駆けてくるハルナと夕映。

先頭を走る刹那以外は、丁度何だかんだで体力のある図書館探検部のメンバーなので何とかなっている。実はこの部は非常に体力を必要としているのだ。

そしてその後を、

「うーむ……棒手裏剣かよ。
街のど真ん中で物騒なやっちゃ」

ものごっつ体力のあるオコサマと、その相方である古がてってけてってけ余裕で駆けて来ている。

どこが余裕なのかというと、木乃香を狙って投げ付けてくる棒手裏剣を片っ端から掴み取っているのだ。

尚且つ根が貧乏性である彼はそれをどんどん懐に収めてゆく。これを余裕といわず何と言おう？

しかし、確かに勿体無いとは思うが、刺さったりしないのだろうか？

そしてそんな彼らの後を追う二つの影。

一つは……

「ぴぃ～♪」

自分のご主人様が駆け出したものだから、鬼ごっこか何かと勘違いをしているのか、何だか楽しそうに後を追っている　かのこ。

普通の鹿ではなく、精霊である為か息切れもせずについて来ているのだが、その分やたら目立っていたりする。

そしてもう一つの影。

「む～～……」

襲撃を仕掛けた側の者。

その追跡者…少女であるが…は今の状況が不満そうだった。

彼女の狙いは先頭の刹那であり、決してこんなミョーなオコサマではない。

追従している小鹿も可愛いくて良いのだが、狩りたいという欲求を持たせるは程遠い。目には麗しいのだけど。

彼女にしてみれば焦れた刹那が自分に向って迎撃行動に入って欲しいところなのだが、その肝心の攻撃がターゲットに殆ど届いていないのである。

いや実際には届いてはいるのだけど、当たるよりも前に掴み取られているので意味が無いのだ。

何しろそのオコサマ、手癖の悪さは天下一品。

その掴み取りが余りに素早い為、彼女には掴み取っているように見えていないのである。

外見は深窓の令嬢のような少女であるが、その中身は剣客。

おまけに“死合”が好きというかなり物騒な性格をしている。

だから……という訳でもないが、死闘以外に余り興味がない為、仕事以外では自分で決めたターゲットの他には興味が湧かなかった。

よってそのオコサマは完全に眼中に入れていない。それ故の大失敗なのである。

気配は一般人。

行動も単なるオコサマ。

しかしてその中身は二十歳越えの立派（？）な青年男子であり、業界屈指の霊能力者、横島忠夫である。

あまたの存在に舐めた眼で見られ、そのほぼ全てを裏切って痛い目に遭わせ続けている彼だ。

弾丸を掴み取るほどの実力がなれば生きていられない職場にいた横島だからからこそできる芸当である。

この刺客……月詠程度の眼力では見極められまい。

……まぁ、雇い主のシャワーシーンを覗いているのを察知され、その場から逃げる際に培われた技術だったりするが。

「ええ～いっ」

なんとも気が抜ける声であるが、月詠からすれば気合が篭っているのだろう。

兎に角、袖口から引き抜いた四本の棒手裏剣をまたしても……そして今まで以上の氣を込めて投擲する。

普通の手裏剣と棒手裏剣の違いは速度と音で、十字手裏剣や八方手裏剣などは幾ら高速回転し殺傷能力が高くなろうと音によって避けられる事がある。これは手裏剣術を修めている者が投げても同様だ。

無論、対象がそれなり以上の技量を備えていなければどうしようもないだろうが。

しかし棒手裏剣の場合は軌道は直線のみなので解りやすいものの、

音も少なく速度も速い為、“間”と呼吸が読めていないとどうにもらない。

ハズである――

「ちょいさっ！！」

空中に投げ上げられた壁に弾かれ、勢いを失ったそれは又しても奪い取られてしまった。

今までは余りと言えば余りにその奪い取られる技が速かった為、やはり月詠の眼ですら捉えきれていなかったのであるが、そんな現象が起きれば流石に彼女でも理解が出来るというもの。

「あれ～？　刹那さん以外にも誰か付いとるんやろか～？」

それでも振り返って月詠の様子を窺おうともしていない横島にはまだ気付けていなかったりする。

「う～～ん……いけずやわぁ……刹那さんの技量が解らしまへん」

何とも勝手な言い草であるが、そんな妨害を受けたというのに彼女はその意識を再びターゲットに向けた。

言うまでもなく、それは自分の技量に確たる自信があっての事。
普通の攻撃ならば今行われたとしてもどうにでもなるし、刹那同様会得している神鳴流には飛び道具が役に立たない。
いや、正確に言うと、飛び道具に対する防御手段を叩き込まれているのであるが……

「ほいっ」

相手が非常に悪かった。

「え？　あ～～～～～～……」

月詠は踏み出した足が瓦を踏む前に何かを踏み潰し、足を滑らせてしまった。

実は横島、確かに背後の月詠に目を向けてはいなかったのだが、ずっと彼女の視線を手繰り続けていたのである。
だから彼女の気配が刹那に動いた瞬間、横島は速度を緩めて月詠の真横に移動し、懐から生卵を取り出して横合いに投げつけたのだ。

見事その卵は月詠が踏む場所に命中し、うっかり踏み潰してしまった彼女はそのヌメりで足を滑らせ屋根から落下してしまったので

ある。

「ふ…ちょっち勿体無かったけどな……」

生卵一個の事で物惜しげに溜め息を吐く横島。貧乏性は抜けていないようだ。

『今思えば朝食の生卵をガメていたのは正解だった……』と彼は思っている。

よく割らずに今まで持ち歩けたものであるが。

それに何だかんだでプロである月詠の足の置かれるであろう所に生卵を命中させられた横島。

彼女に投げたものではなく、横合いから足が行く場に投げ付けた為に回避行動が取れなかったのだ。そんな彼の技量には感心するより呆れが出てしまう。

大体、自分より圧倒的に強い存在の隙を突き続けていた彼だ。とっくの昔におちょくりつつ逃げる能力は人間を超えていたりする。

物音に気付き、刹那が後ろを振り返った時には既に横島は古が駆けている位置にまで戻っている。

流石は神域の逃げ足所持者だ。

だから後ろを振り返った刹那が見たものは道路に落ちる月詠くらい。

二人とも何が起こったか、誰に何をされたか気付けまい。

恐るべしは横島の誤魔化し能力の高さであろう。

何だかよく解らないが、刹那はあの追跡者が屋根から落下してへたり込んだのを見た。

どうせあの程度で仕留められはすまいが、それでも時間稼ぎにはなってくれるだろう。

自分は何もしていないので、おそらく後を駆けている筈の古が何かやってくれたのだろうか。

感謝の気持ちを持って、古の方へと目を向けると……

「ぶっ！？」

その顔を見て噴いてしまった。

「なっ！？　く、古ぅ！？」

「ふぇっ？　な、ナニあるか？！」

驚いてそう問い掛けるが、言われた古の方が気付いていない。

横島もその刹那の様子に首を傾げ、右斜め後の第二パートナーを見……

「ぶーっ！！？？」

彼もまた噴出してしまった。

「ナ！？　ナニがどうしたアル！！？？」

未だ恥ずかしさ抜けきらず、横島に顔を向けられなかった古であったが、流石に彼のその様子に驚いて駆け寄る。

「な、なんじゃそりゃ――っ！？
古ちゃん、どーしたんやそれっ！？」

「は？　ナ、ナニが……？」

指差して慌てる横島であるが、当の古はさっぱり解らない。

その騒ぎに気付いたハルナや夕映らも古を見て噴く。
変化が無いのは木乃香ぐらいだ。

流石に異常に気付き、古は皆の視線を追って自分の顔に続いている事を見て取った。
内心、首を傾げつつ顔に触れてみると……

「なっ、何アルかコレ！？」

「それはこっちのセリフじゃ――っ！！」

今の古の顔は、ひょうたんの様な形にびろーんと水風船が如く膨らんで垂れ下がっていたのである。

訳が解らず混乱する古であるが、そのたぷんとした手触りで何が起こっていたのか理解した。

実は古、横島の近くにいると照れて顔色が変わりまくってしまう為、親友である超の提案に乗ってマスクを被っていたのであるが……古は慣れない異性への照れからか、超謹製マスクの発汗対応限界を超えてしまっているのである。

先程からトイレを往復しているのはマスクの中から汗を掻き出し、無くなった分の水分を摂取しているからだ。

そして今はその暇が無かった為、マスクの下に汗がたぷーんと溜りまくっていたのである。

「あわ、あわわわ……」

慌てて電信柱の陰に隠れ、バシャーと汗を捨て、タオルで拭きま

くって更にデオドラントして顔をスッキリさせてから戻ってくる古。
急に顔が細くなった為、皆目を丸くしていたりするが。

「あ、あの……古。一体何が……」

「何でもないアルよ？　全然サッパリ何でもないアルよ？」

「そ、そーなん？」

刹那や木乃香もかなりいぶかしげな目で古を見る。
無論、マスクだから作り物の表情しか出ていないので顔色一つ変わるわけが無い。

だから見た目が平気そうなので本人が何でもないというのだから納得するしかなかった。
まぁ、表情が変化していないのでかなり不自然ではあるのだけど……

「ふぅふぅ……そ、それにしても、何故いきなり走り出したですか？」

「そ、そーだよ……ひぃひぃ……」

立ち止まった事により、一気に疲労を実感してしまったか、ハルナと夕映がへたり込んでしまう。

木乃香も口にはしていないが、同じ疑問をもっていた。

「え、ええと……」

口篭もる刹那であるが、ここで説明している暇は無い。

月詠は墜落はしたが倒したわけではないのだ。直に立ち上がって追撃して来るだろう。

しかしこのまま駆けて行っても何にもなら無いし、宿から既に離れすぎている。

となると、どこかでやり過ごすしか手が無いわけで……

「あれ？　あそこってシネマ村やん。
おねーちゃん、シネマ村に来たかったん？」

「え？」

タダキチの声に指し示されるかのように振り返る刹那。

と、そこには京都の観光名所の一つ、太奏シネマ村の入り口がその佇まいを見せているではないか。

『シネマ村…
よし、ここならば！！』

時代劇等を撮影する様に江戸時代の町並みが整えられているシネマ村。
当然ながら観光名所なので人目も多く、ここなら目立った行動や攻撃はできない筈だ。

「すいません！
わ、私、このか…さんと……ふ、二人きりになりたいんです！！
ここで別れましょう！！」

「え！？」

いきなりナニ言い出すですか！？　と夕映らが問う間もなく、

「お嬢様　失礼！」
「ふぇ？」

刹那は木乃香を抱き上げると、そのまま塀を跳び越えてシネマ村へと入って行ってしまった。

「……ふぇ～……セツナさん、やるアルね」

「ま、あれくらいはやるだろーさ。それより問題は……」

感心している古は由として、
何だか疲れたような顔をしつつ横島はハルナらに目を向けてみると……

「……女の子同士……二人きり……まさか……」

「そう言うコトなんでしょうか……？」

案の定、何だか二人は妙な誤解をしているではないか。

人がせっかく誤魔化すネタを振ってやったというのに、あんなクソハデな逃走行為をかましてシネマ村に逃げ込むもんだから、余計な誤解を生んでいるではないか。

他人の事は言えないが、もっと言い方に気をつけた方が良いぞと横島はコッソリとツッコミを入れていた。

「老師！！」

「え……？　んなっ！？」

やれやれ…と、ハルナらの見ていた横島であったが、突然の古の呼びかけに慌てて首を廻らせる。

すると、何時の間に立ち直っていたのか、さっき撃墜した刺客が

たんっと軽い音を立てて地を蹴り、塀を飛び越えて行くのが目に入った。

「白か！？」

……ついでに別のものも目に入っていた。

だが、ウッカリ月詠の様な年齢の少女の“それ”を見つめていた自分にハッと気付き、『オレという奴ぁーっ！！』とコンクリートの壁にヘッドバットして諌める。

しかしそんな大馬鹿野郎な事をしている暇は無かった。

「老師！　ユエ達が……！！」

「へ？」

何と横島と古が月詠に気を取られた挙句、奇行をぶちかましている間に異変に気付かなかった二人は、持ち前の好奇心からか木乃香らを追ってシネマ村に入って行っているではないか。

これでは横島が何気なくシネマ村がある事を刹那に教えた意味が無い。

「あ、夕映ねーちゃん、ハルナねーちゃん、ちょっと待って！！」

もうこうなったら止める方法は一つしかない。

『人の恋路を邪魔したら馬に蹴られて地獄へ落ちるで？』とボケかまして踏み留まらせるのだ。

何だか刹那のコレからが大変になるよーな気がしないでもないが、気にしてはいけない。

それより“一般人”である彼女らが怪我するかしないかの方が大事なのだから。

古と共に慌てて駆け出し、戯言だろーがなんだろーが戯言ぶちかましてでも二人を止める……そう決心してゲートを飛び越え……

「おおーっと、ダメだよ。
お嬢ちゃん、ボク。ちゃんとお金を払っていくんだよ」

ようとして、同心の衣装を身に纏った守衛さんにガッチリ止められてしまった。

「あ、あの、オレ……」

「ははは……慌てなくてもシネマ村は逃げないよ。
でも、ちゃんとお金払わないと、火盗改方の怖いお役人様にお縄にされて、逆さ張り付けでロウソク垂らされちゃうぞ？」

「イヤ――っ！！
そんな新境地は勘弁してぇ――っ！！」

そんなやり取りが行われている間にハルナ達二人は刹那を追って奥へと入って行ってしまうのだった。

これが、後の大騒ぎへと発展するのである。

「む……」

ネギが殴られた瞬間、ス…とクナイを取り出して身構えた楓であったが、投擲する直前に思いとどまった。

というのも、ネギの目を見たからだ。

よく解らないが、あの少年が何か挑発的な事を言い、それを聞いたネギの表情が一変したのである。

ネギの心のどんな琴線に触れたかは不明であるが、あの目は諦めや助けを待つ目ではない。

眼前の敵と戦おうとする者の目だ。

圧倒的に経験が少ない為か、まだまだ“ゆるい”がそれでも意志に火が入った事だけは楓にも解った。

となると……

「後は策を思い付かせるだけの“間”の確保でござるが……」

ではクナイでは役が違う。

別のものを取り出そうと、懐に手を入れた時、

「オン・アクヴィラウンキャシャラクマン」

「お？」

「ヴァン！！」

バフン…ッ！！

投げ込まれたペットボトルが弾け、ネギらの周囲が霧のような水煙に包まれた。

「ほぅ？」

その霧に紛れて明日菜がネギを抱え上げ、全速力で撤退する。

少年の方が忍の体術を会得しているというのに、忍のような術で逃げられてしまうとは何とも皮肉な話である。

『歳のわりには中々やるでござるが……少々冷静さが足りぬようでござるな。

あの程度で逃げられるとは……』

等と同じように忍の技を使うからか、ネギ達の手際に感心しつつもウッカリ敵を評価してしまう楓。

直にそのことに気付き、苦笑して意識を己の担任に戻した。

まがりなりにも楓は忍である。

だから魔法そのものには疎くとも、和系の呪文だけならば多少なりとも覚えがあった。

よって今耳にした呪文が“八字の咒”と呼ばれているものである事に気が付いている。

となると、そんなものを駆使してネギを逃がしたのであるから、あの場にはネギ側の陰陽術を使える者がいるという事となる。
いや、エラく可愛らしい声であったが、何だか刹那の声に似ていたよーな気も……

「ふぅむ……？」

ひょっとすると、あの彼らの後をふわふわ浮いて付いて行っていた“ちんまい”のが刹那の＜分け身＞か陽身なのかもしれない。

多少気にはなったが、敵ではなさそうだから後回し。
今はあの敵の少年を観察する方が大事だとも意識を向けなおす楓。
まぁ、ネギ達を殺す気はないだろうという事は確認できたのだが。

年の頃はネギとほぼ同じくらい。しかし実戦慣れしているようだから、あの歳で結構深く裏に関わっているのだろう。
ただ、ちょっと気が短めのようで、状況判断が甘く、短慮からやり過ぎてしまいかねない。
それには注意が必要だろう。

今もカッカして二人（四人？）を見失っているし。
この辺は今後の成長に期待するところか？

「とと…またあの少年の肩を持ってしまったでござるな。反省反省」

コツン…と頭を叩き、苦笑して視線を下に戻と、未だ少年はネギの気配を探して竹やぶの中を駆け回っている。

『ヤレヤレ……気配を感じないという事は、気配を紛らわせるものの近くにいるという事でござるに……』

刺客のくせに何だか間が抜けているでござるなぁ……と苦笑が出たが、このまま指を咥えて見ているだけという訳にも行かないし、刹那らにも手を貸すと言ってしまっている。

さて、ネギらの戦いにどう手を貸せばよいかと首を捻っていると……

「おろ？」

妙な本を持って石畳を駆けている同級生の姿が目に入った。

考えてみれば、シネマ村という場ほど異様な場所は無いのかもしれない。

というのも、ここは様々な時代劇を撮れるセットが建ち並んでいる。

京都という土地には、他にも時代劇を撮る為に場を借りている寺もあるが、町並みは大体ここだ。

江戸の町並や京の町並、そして江戸時代初期から幕末を同じ場を使って撮影するのだから、通りを曲がった瞬間に時代が変わったりする。

現実と切り離された隔離時代を体感し、タイムスリップしている気すらしてきて中々面白い。

尤も、通りの陰で胸を撫で下ろしていた少女にとって、そんな事はどうでも良かった。

『これだけ人がいれば襲っては来れまい……
ここで時間を稼ぎ、ネギ先生達の帰りを待つのがいいだろう』

つまりはそう言うことだ。

魔法関係者というものは、正邪の違いはあっても魔法の存在が公になる事を嫌う。

だからこれだけ人目の多い場所にいれば目立った事を仕掛けては

こないだろうという踏んだのである。

成る程確かに人が多い。

観光客や、刹那らのように修学旅行の学生、そして……

「せっちゃん
せっちゃん～～♪」

「はい？」

攻撃を受けた為に式神との繋がりが切れ、ネギとの連絡が取れなくなっている。
そしてそのネギもかなり消耗していると見た。

その事に気を取られ、呼ばれた声に何気なく振り返ってみれば。

「じゃーん♪」

「わぁ！？」

木乃香がお姫様然とした紬を着て、和傘を持って立っていた。

「お、お嬢様、その格好は?!」

「知らんの?
そこの更衣所で着物貸してくれるんえ」

着飾れた事か、刹那の側にいられる事が嬉しいのか木乃香の笑顔も軟らかい。

何となくホケ~としてしまっていた刹那にニコニコと笑みのレベルを上げ、

「えへへ　どうどう?　せっちゃん」

似合う?　と身体を回してその姿を披露する。

「ハッ…?!
いや、そのっ
もう、お、お……おキレイです……」

「キャ――っ
やった――♪」

何というか…異様なほどその衣装が合っていた。

しかし考えてみれば木乃香は西の長の一粒種。お姫様に違いは無

かろう。

彼女から距離を取っていた数年の短い間でよくぞここまで綺麗になったものだ。

同性である刹那が何となく頬を赤らめてしまうのも木乃香の魅力であろう。

「ホレホレ　せっちゃんも着替えよ♪
ウチが選んだげる――」

「えっ！？　いえ、お嬢様っ！？
私、こーゆーのはあまり……ああっ」

そんな彼女に引き摺っていかれる刹那。

前日の横島の助言が生きているのか、彼女も中々積極的なようだ。

以前よりアグレッシヴに攻めて来る木乃香に、流石の刹那もタジタジである。

――が、そんな二人を町並の陰から見守っている奇妙な視線があった。

木乃香はおろか、刹那すら気付けないその無機質な目……

二人が移動するのに合わせ、気配の動きの片鱗すら感じさせないゆらりとした移動を行い、ずっと追い続けている影。

その影の主は、銀髪の少年の姿をしていた――

「あう～～……」

「ったく……ンな事するからだろ？」

所変わって、ここは更衣所。

とは言っても、木乃香らの向った所とは違った場所で、彼女らが行ったトコよりややイロモノっポイ衣装が並んでいた。

何せ時代劇にしろ、歴史モノにせよ、脚本によっては時代考証もクソもなくなってくる。

マザコン将軍として知られている某有名将軍が日本を旅して悪人を成敗していったり、幕末の土佐の大有名人が関西弁喋ってたりとイロイロだ。飛騨の国から来た仮面の忍者だって、カテゴリーで言えば時代劇といえなくも無いし。

だから貸衣装も場所によってはとんでもない物があったりする。

よりにもよってそんなトコに来なくとも良いのであるが……そこはそれ、横島忠夫である。

心より何より、ウケを求めて霊感が示す場に真っ直ぐ突き進んでしまったのだ。

当然の如く、古も付いて来ていたのであるが……

「ホラ、ちょっと見せてみ」

「ううう……」

「恥ずかしいのは解るけどさ。今は我慢してくれ」

「う〜〜〜……」

「いや、睨まれても……」

流石にここまでくれば横島にも気付かれてしまった。

そう、古が今までマスクをつけて火照りを見せないよう誤魔化し続けていた事を……

いやまぁ、それは良いのだ。

超とて顔色を誤魔化す以上の期待をしてなかったりするシロモノだったのだから。

だが、確かに通気性を考えて作られている良い仕事がなされたマスクであるが、問題は古の発汗量にあった。

幾ら通気性が良かろうと、内部でドバぁドバぁと汗をかけば蒸れてくるし、通気性の限界値も下がってしまう。

現に、溜まった汗を捨てては毎回水分を補給せねばならないほど古は汗をかいていた。

となると、必然的に起こり得る事態にもなるわけで……

「ん……かなりマシになってきてんな。
もう、あんなことすんなよ？」

「あう～～……」

そう――

古は顔に汗疹ができてしまっていたのである。

「……申し訳ないアル」

「いいって。それよか女の子なんだから、もっと気ぃつけろよ？
せっかくの可愛い顔が台無しになるぞ。そんな世界の損失はオレが許さん」

「う〝……」

更衣所の中、横島の見た目が子供だった事もあって、ちゃっかり二人一緒に入れられている時に気付けたのは幸いだった。
下手にメイク等されて、気付くのが遅れたら目も当てられまい。

幾ら若い肌とはいえ、それなり以上のダメージを与えると後々まで残ってしまうものだ。

かのこですら古の顔をじ～と見ていて心配しているくらいなのだから。

未来の美女の肌が荒れるのは世界遺産の崩壊より甚大な損失である。天界やユネスコが許そうとも横島は許さない。

だから横島は珍しく説教しつつ古を更衣所にあった椅子に座らせて治療に当たったのだ。

「いくら古ちゃんの肌がピチピチや言うても、無理はアカンだろ？」

「あう～～……」

見た目はただ触れているだけであったが……

手のひらで顔を包み込むように撫でるだけで痒みや痛みがゆっくりと去って行った。

しかし横島は、“向こう”にいた時からヒーリングはできなかった。

消滅している十年の記憶の中にはちょっとは技術があったかもしれないが、今使えないのなら何の意味も無いし記憶も経験も失せているのなら苦手のままなのだ。

もちろん、全く手が無いという訳ではない。

その一つとして、古に霊力を注ぎ込み、彼女の新陳代謝を活性化させて回復するというどこぞのエスパーのような手もあったが、古は人狼族ではないので超回復なんぞ持っているはずも無く、治らない事も無いがそれだけ細胞を酷使するという事なので横島的にはNGだ。

人狼族等のヒーリングができれば一番良いのであるが、あれは“舐める”という行為が付加されている。

つまり、古の顔を舐めまわす事になるので、できたとしても遠慮したい。いいかも…とか思いかけてるし。

かのこが出来れば一番良いのであるが、心の癒しにしかならないようなので殆ど意味が無い。いや横島的には大助かりなのであるが。

ではどうするのか？

手っ取り早い方法としては、横島の霊能力の真骨頂である“珠”を使うという手がある。

しかし、ここに一つ問題があった。

実は今の横島は“珠”の生成法が変わっており、“珠”に込められている霊力が以前の三倍ほどになっている。尚且つ生成時間も数十秒にまでもなっていた。

その代わり、“珠”が物質として存在し続けられる時間が激減しており、十数分が限界となっていて、使用せずにそのまま放置すれば、生成ミスの時と同様に爆発してしまうのだ。

言うまでも無く生成にも霊力を使用する為、ホイホイ作ってストックしておく…という、以前から使用していた手段がとれなくなってしまっているのだ。

それに戦いが発生する可能性がある以上、無駄に霊力を使用する事はできない。

しかし、それでも彼は使った。

だが、そこまで現状を理解しているというのに彼はどうやって“珠”の力を古に使ったというのだろうか？

生物は存在している限り、身体からオーラが放出されている。

実は横島、その普段から自然と駄々漏れになっている霊気でもって“珠”を作りながら、形が整う前に意味を込めてその力を解放し続け、“なんちゃってヒーリング”を行ったのである。

は？　それって逆にメンドーでね？　と思われるだろうが、霊力を“珠”に生成する霊力消費も馬鹿にできないのだ。

だからその無駄な分を少しでも押さえる為、『治』『療』の念を込めた半出来の“珠”でもって古の肌を治療したのである。

何だかエラい手間が掛かるしもったいないにも程があるヒーリングであるが、横島的に言えば『あり』なのであろう。

……尤も、実際問題、その治療は形を変えてはいるが“珠”を使ったエステである。“向こう”の世界の価値に直せば一億を越える事は間違いない。

かの恐れ多い元雇い主に発覚すれば全殺しでも足りない目に合わされることは言うまでもないだろう。

「……うしっ　もー大丈夫だ。古ちゃんのお肌は完全に治ってるぞ」

「も、もう治たアルか？」

汗疹でミカン状態になっていた肌があっという間に元通り。

あまりスキンケアに気を使っていなかったとは言え、やはり年頃の女の子。

肌が荒れたことは気になっていた。

それが彼が触れていただけでスッカリ治ったと言うのだから驚きも大きい。

しかし実際に古本人が触れてみても確かに肌は元通りになっている。

横島も些か得意げに『な？』と微笑んでいるし。

「……凄いアルな……」

「凄かねーよ。
実際、ホントに凄いのは古ちゃんや、楓ちゃん。木乃香ちゃんを守ってる刹那ちゃんさ」

「ふぇ！？」

横島の言葉に奇妙な声を出してしまう古。
自分の顔を両手で挟み込んだままだからかなり間抜けだ。

「当たり前だろ？
オレは古ちゃん達みたいに自分から修行しようとした事なんか殆ど無かったぞ。
自慢じゃねーけど、古ちゃんくらいの歳ン時には遊び倒してたしな。

修行してたら良かった……なんて思った時には……」

うっすらと表情に影を落とし、そこまで呟くように零した横島であったが、すぐ口を噤んで言葉を切った。

古に目を戻した時にはもう影は見えない。
苦笑しているような泣いているような不思議な笑みを浮かべているだけ。

外見は子供であるからこそ、余計にその不思議な感情の波が伝わってくる。

だから古も問い掛けられなかった。

今さっきまで顔を合わせることすらままならなかった彼女であるのに、今は逆に目を反らせられない。

横島から何だか奇妙な儚さすら感じられたからだ。

何となく表情が曇っていたのだろう、横島は古の眼差しに気付き、あえて明るく、

「んじゃ、とっとと着替えよう。
向こうの女子更衣所から刹那ちゃんが出てっちまうし、あのミョーな娘が来ないとも限らん」

「……アイ」

顔は合わせられるようにはなったのであるが、何だか以前の気不味さを取り戻してしまった。

安堵してよいやら悪いやら。

しかしとりあえず、側にいられるようになったからまだマシだろうと気持ちを切り替え、横島に背を向けて着替え用の個室に向って行った。

適当に選んだ衣装を抱きしめ、個室に入った古は一人深い溜め息を吐いた。

「しっかし……どうしたもんかなぁ……」

横島は横島で、側にくっついている　かのこを撫でながら一人溜め息を吐いている。

古や楓にドキドキするのも、

その頬に触れ、柔らかな手触りに萌えを起こしてしまったとしても……まぁしょうがないだろう。自分デモアキラメテルッポイシ……

「それに……」

古が消えた個室のドアの方にちらりと視線を送ってからまた溜め息を一つ。

横島も木石ではない。

少なくとも十代の時のような超絶的朴念仁ではないのだ。

だから何となく、楓らが自分に対する好意を大きくしていっているのも……

『何だかなぁ……』

と思いつつも理解しているのだ。

だが、飲む打つ買うの遊び人レベルでは父親に程遠い上、特に“買う”に関しては父に惨敗なのだ。

優しすぎて相手の気持ちを振り切る事ができないし、一回一回が常に本気となってしまうからである。

だから今の自分の気持ちが膨らんでいる事は解るのだが、どうすれば良いのか…という点で躓いてしまうのだ。

「ったく……せめてミスった経験を覚えてりゃあなぁ……」

記憶が消滅しているのはそういう部分にもわたっている。

失敗を覚えていないのは幸いと言えなくも無いが、それは教訓がないという事だ。

エロい事や自分が出来る事はおぼろげながらも覚えているのに、教訓が無ければどうしようもないではないか。

それに――

「何か……オレも楓ちゃんや古ちゃんに……」

惹かれている気がする――のである。

以前から比べ、何とも正直なったものだ。

ジャスティスの暗躍……もとい、苦労の賜物であろう。

「……でもまぁ、今差し迫った問題は……」

はぁ……と溜め息をつき、足元に視線を落す。

そこに散らばっているのは破れた布地。

引き裂かれた色とりどりの布切れである。

木乃香に迫る危機。

同じ施設内に潜んだ刺客。

巻き込みかねない、“裏”の世界に関係の無いハルナのような一般人達。

問題は山積である。

尚且つ――

「はぁ……」

効果時間が安定していない為、切れるタイミングか掴み切れない飴……

よからぬ事に使用されないよう、予備は楓が持って行ってしまい手元には無い。

つまり……

「どーすっかなぁ……」

年齢詐称薬が切れ、昨夜同様に子供服を破いてしまった彼は、
ほぼ裸で小鹿と戯れるというワケの解らないシチュを演じながら
悩み続けていた。

「……何か、真名のキモチが解る気がするネ」

「どーかしたんですか？」

「いじらしいだけなら微笑ましいガ、二人してあそこまで焦れてると流石にムカつくネ……」

「はぁ……」

中編　一弐一

――場、と称するには余りに大雑把な空間がそこにあった。

“無”と言うにはモノが在り過ぎている、しかし“在”と言うには無さ過ぎる。

静寂であり騒然。

存在感が無いのに海が在るような気がする――という、ただ矛盾に満ちた場。

それでいて整然としているわけではなく、どちらとも表現できてしまう大雑把な空間が広がっていた。

と……

その不可思議なる場に、
静寂との区別がつかない騒然とした矛盾の場に、唐突に何かの存在が露となった。

今の今まで『只何かが広がっている』としか表現できなかった場の中に、突如として確固たる個が出現したのである。

いや、それでだけではない。

その空間そのものに雰囲気も現れたのだ。

圧倒的に“無”に近く、限界まで“在”を訴え続けていただけの場に、雰囲気というモノまでが具現した。

それは恰もチャンネルを切り替えたかのように……

「ん？　ああ、君か。どうかしたのかね？」

突如として具現したというのに、“それ”は極自然に“もう一つ”に向けて問い掛けた。

しかしその“もう一つ”は無言という返答を見せるのみ。

“それ”にしてもまた、沈黙で返されたと言うのに微かな微笑でもって受け止めている。

問い掛けられる事も解っていたし、また返す言葉も解っているのだから。

「そんなに気になるのかね？

“私”を浮かび上げてしまうほどに……」

それでも返答は無い。

やれやれ……彼と違ってリアクションの薄い事だ。もう少し楽しませてくれても良いのに……とも思うが、眼前の彼にそんなものを求めてもしょうがない。

“こっちの彼”はそうなのだから。

「あいつは……」

「うん？」

ふいに――

ふいに彼はそう口を開いた。

「あいつは大丈夫だと思うか……？」

――ああ、やはりね。

と、“それ”は納得しつつ彼に向って頷く。

“少女”が襲撃を受け、少女の持つ力を利用しようとしている輩が現れた時から彼はずっと気にし続けているのだ。

少女の事はもちろんの事だが、それより何より“あいつ”の事を。

「少しは彼を信じてみたらどうかね？

確かに君はそんな事件が続いた所為で壊れたかもしれない。

守れば守るほど失い、庇えば庇うほど傷つけ、掬い上げようとすればするほど失って行く……

抱え切れないほどのものを手にし、そしてその殆どをこぼしてしまった――

それがどれほどの痛みを伴うか……少なくとも私は他の誰よりもその苦痛を理解しているつもりだよ？

そして彼は……我々と対極にいる――」

その言葉に男も軽く…ではあるが頷いた。

しかしその所作の中にはどこか誇らしげなものが混じっている。

『自分らと違って上手くいっている』そう揶揄されるように言われたにもかかわらず、寧ろその事を祝福しているかのよう。

「彼は様々な場で失わせずに来た。

我が娘を失った時から全てを良い方向へと傾けるよう、見苦し

く足掻き、見苦しく駆け、見苦しく泥を泳ぎ続けて来た。

真の道化師であり、愚者であり……勇敢なる者だよ。頭が下がるね。

クラウンの名にふさわしいよ」

“それ”の語るセリフの言葉尻にも笑顔が見え隠れする。

釣られるように目の前の男も唇端を歪めていた。

“彼”のその見苦しさが、見苦しい足掻きであるが故に、失われた希望が僅かながら浮いてきているのかもしれない。

「そしてその愚行は実を結び、彼は何も失わせず、誰も悲しませずに生きてきている……

馬鹿だ何だと罵られつつ、それを甘んじて受け入れてね。

だからこそ輝いている。

大半がその輝きの意味も知らぬ真の愚者だろうのに」

それも解る。

それを受け入れていればもっとマシだったであろうかという悔恨も無い訳ではない。

しかし今更だ。

そういった悔恨や怨鎖は自分にこそふさわしい。
対極の“彼”には不必要なのものである。
“あの一度”だけで十分だ。

「正直言って実に羨ましい……

失わせずに済み、無くさずに済み、零さずに済ませられたのだからね。

我々にはできなかった事だからしょうがない話だ……

しかし――」

その想いと比例し、実に喜ばしい事だと感じてもいる――

いや、皮肉でも何でもない。
正直な気持ちで彼を祝福している。

“それ”にしても、そして……その対極存在である“この彼”にしても……だ。

だからこそ、心配しているのだ。

“上書き”という事故の所為だろうか、彼は記憶の大半を消失している為、教訓が無い。

だから危機的状況での対応力、失敗した時の難事、そして対応できる能力すらも忘れ切ってしまっている。

自分は……
いや、自分なんかどうだっていい。

自分は既に全てを無くしている。
取り戻したいと思っている絆はここには無く、また元の場に戻れたとしても“彼女ら”は既に存在していない。

全てを無くしたからこその虚無。
希望に対する希望を諦め切っており、黒い闇の穴だけが心の中に口をあけている。

それが“この彼”なのである。

だからこそ“彼”に望みをかけている。

“自分”にならないよう。
“自分”の歩んだ道を進まないように……

対極であるが故に、“自分”の上に上書きされたのであるから……

「まぁ、時間の許す限り見物を続けようじゃないか。

私は兎も角、君の方はもうそんなに時が無いのだろう？」

「ああ……」

存在が消える。

“無”になる。

それは渇望していた事であり、待ち望んでいた事。

理由も無く死ぬのは御免であったが、十年と言う自分の時が無くなっている以上、消える事に異論は無いし未練など端から持っていない。

いや――？

「せめて乗り切れるかどうか……その確認だけはしてみたかった……かもな」

「ふむ……？」

珍しく零された言葉に感心すら覚え、“それ”は顎に手をやって眼を細めた。

だが直に笑顔を見せる。

「大丈夫ではないかね？
彼の周囲にはあの少女らや可愛らしい使い魔がいるのだよ？
尤も……彼も相当鈍感だが、彼女らも鈍感だがね。
自分達がしっかりと彼を支えられている事に気付いていないのだから」

「……解ってる。
だがそれでも――」

心配は心配なのだ。

そんな風に支えてくれているからこそ、彼女らが傷ついた時に何が起こるか……と。

“彼”はあのくノ一の喋り癖を聞き、遠い過去において自分と共に道を歩む事を決めてくれた人狼族の少女の顔が思い浮かぶ。
久しぶりに唇がその名を紡ぎかけるが、慌てて首を振って想いを飛ばした。

少女を通して見る等という行為は、あのくノ一の少女にとっても“弟子”にとっても失礼極まりない事なのだから。

「結局、オレという男は何時まで経っても女々しいんだな……』

そう自虐めいた笑みを浮かべ、意識をゆっくりと無意識の中に散

らばらせていった。

「……それだけでもないのだがね……

そうやって悔恨だけではない想いを持ち続けられるのも、彼女らをすんなりと受け入れられるのも“君達”の美徳。

だからこそ彼女らも“君達”に惹かれて行くのだよ？

そしてそれこそが“君達”の力の源なんだよ」

誰に聞かせるとも無くそう呟き、“それ”もまた意識を霧散させて行く。

次に浮かぶのが何時かは知らないが、できれば……

「彼の……いや“君達”の本当の微笑が見たいものだね……

私がその一角を奪ってしまったのだから……」

■十時間目：独立愚連隊ニシヘ　（中）　－弐－

むか～し、昔……

とは言っても体感時間で十年くらい前。

まだ彼が駆け出しの霊能力者だった頃、自分の霊能力の源は煩悩だと思われていた。

端から見ただけなら、それは確かに間違っていないだろう。

何せ霊能力を目覚めさせてもらって直にGS試験を受けさせられ、第一関門であり普通なら滑ってもおかしくない霊力を測る一次試験を単なる煩悩の高まりでもって合格したのであるから。

だがよくよく考えてみると、彼の戦闘スタイルから言えば妙な話になってくる。

彼が“栄光の手”と名付けた霊力を束ねて武器と化した剣は、悪霊や妖怪、強化ゾンビですら容易く斬り裂き、最悪（？）の場合は浄化すら行えてしまう。

煩悩は欲望に付随するものであり、そんなもので力を束ねたとすれば生まれる武器は魔剣か妖剣だ。浄化や退治になどむく訳がない。

それに天邪鬼とミニ四駆戦を挑んだ時、煩悩ゼロ状態であったにもかかわらず物凄い霊力が溢れ出ていた。

これらの事から、彼は煩悩を源にしているわけではなく、煩悩の力で集中力を高めて霊気を練り上げているようなのだ。

だがそれは霊力覚醒の出発地点での事故と言えなくもない。

何せ最初の相棒である心眼は煩悩の集中によって目覚めているの

だし、
その心眼は彼を戦いに勝たせる為に、手っ取り早く高まった煩悩をスターターに使ってチャージした力を霊力に転化していたのである。

言い方は変かもしれないが、ぷっちゃければ彼の霊力の高め方は『染みついてしまった霊力癖』なのだ。

そして前々からいっている事であるが、彼の十七歳以降からの記憶と経験の大半は失われているのだが、逆に十七歳“まで”記憶は常人よりもはるかにハッキリと思い出せるようになってしまっている。

“それ”の両方ともが“ここ”に来てしまった理由の副次的なものであるが、問題は霊的な記憶や経験までも消失させているが為、霊力の回復方法はハッキリと覚えている方法を勝手に取ってしまう事なのだ。

つまり……

「……か、身体が勝手に……」

ほぼ裸……それも幼児が穿くようなジーンズを（下着ごと）無理矢理穿いて女子更衣室にジリジリと近寄っている超絶不審者。

顔は脂汗ダラダラだと言うのに、胸はドキドキ♪　とそのドアの向こうにあるであろうパラダイスにときめいていた。

「うおぉ……身体が言うことを聞かんっ！！
し、静まれ！　静まるんや！！　オレの右腕ぇっ！！」

声には出せているのだが何と無意識に小声。
問題は深刻のよーだ。

それに今の姿は変態以外の何モノでもない。ハッケソされればタイーホは必至である。

それだけでも拙いとゆーのに、このドアの向こうには――

『ぐぉおお……む、向こうにおるんは古ちゃんやと解っとるとゆーのに……
何で古ちゃんを覗こうとしとるんや！？　オレはっ！！』

そう、ドアの向こうで着替えているのは古なのだ。

つい今さっき何にやらエラソーにものを言ったというのに、その直後では格好がつかないではないか。

否！　問題はそこではない。

ここでの問題は、スタイルはグッドなのだが成長率は平均的な女子中学生である古の着替えを覗こうとしている事である。

『あ〝っあ〝っ　や〜〜め〜〜ろ〜〜〜〜っ！！
確かに古ちゃんは可愛いし、何か猫っぽくて微笑ましいし、ちょっとバカっポイのがツボやけど……

あ〜いや、その……それでも、それでも踏み越えたらアカン壁っちゅーもんがあるやろ！？』

それでも言う事を聞かない横島の身体。

キスまでぶちかましている所為だろうか、あれだけブレーキを掛けていてくれた本能が今は歯止めを失っていた。

つまり、横島は霊能力を使用し、何らかの理由で霊力が下がってくると以前のような……十代後半の煩悩力者に戻ってしまうのである。

だから最初、この世界に来て霊力がキれかけていた時には刀子やしずなに飛び掛っていたというのに、回復した普段ではそんな暴走を起こしていない。

新幹線内でも、売り子の女性に対して十代の頃からは考えられないほどスムーズなナンパ（？）を行っているし。

物凄いちぐはぐな行動の裏にはそんな訳があったのである。

尤も、今はそんな理由はどーだって良い。

今正にドアの隙間から古の瑞々しい肢体を堪能しようとしている犯罪をどーにかせねばならないのだから。

『あ〝あ〝あ〝あ〝〜〜〜……

ちゃうっ!!　ちゃうんやぁっ!!　オレは、オレはぁ〜〜〜……っ!!!!』

つーかロリ否定はどーなった？

無論、ジャスティスとてただ黙って見ていた訳ではない。

ちゃんと気合の入った服をに着替え、『応援団!!』な格好で彼を応援していた。

――主に進め!進め!　と。

ハードモードでランクSは確実な激しい応援によって止めようにも止まらない横島のパトス。

あわれ古の柔肌はその視線に汚されてしまうのか？

ばごんっ

「べぼっ!?」

「うぇっ!?　何アルか!?」

後数センチと言うところで思いっきり強く開けられたドア。

蝶番が錆びていたのか中々開かなかったので、古は掌底で思いっきり突き開けたのが幸い（？）した。

完全且つ徹底的に隙だらけだった横島は、ドアに殴打されて真横にすっ飛んでしまう。

「ぐぐぐ……

く、古ちゃん、ベリ～ナぁイス……」

「え……？　ろ、老師!?」

何が何だか解らないが、様々な珍衣装の中に埋まりつつ、横島は右手の親指をグ…っと立ててギリギリのラインでアイデンティティを救ってくれた古に感謝していた。

チ……

心の中で何かが舌打ちしたのは気の所為だと信じつつ……

「ハハハ
護衛のパートナーが行動不能なら西洋魔術師なんてカスみたいなもんや」

狗神使いを名乗った少年は、影から呼び出した狗達に命じ、明日菜と刹那…の分け身である“ちびつせな”、そしてカモを押さえつけてネギをいいように殴りつづけていた。

何だかんだで障壁を張り続けているネギであるが、少年の拳は氣がたっぷりと込められている為にあっさりと貫いてくる。

多少、威力を削られてはいてもネギ本人の耐久力はやはり外見年齢の通りなので喰らうダメージは大きい。

「遠距離攻撃をしのぎ、呪文を唱える間をやらんかったら怖くもなんともない！」

調子に乗っているのか、わざわざ教えてやりながら殴り飛ばし、蹴り飛ばす。

身体の軽さからか、ネギは面白いように吹っ飛び、岩に叩きつけられて動けなくなる。

「どうやチビ助!!」

そんな少年の挑発にも、意識を混濁化させてしまったのか、ぼんやりと瞼を開けている“ように見えた”。

「勝ったで!!　とどめ!!!」

死に体となっているネギは動けまい。

と、踏んでの事。

「ネ、ネギ――ッ!!」

下手をすると死ぬとまでカモに言われた少年の攻撃。

それを無防備に受けようとしているネギに何かの情景が頭を掠め、明日菜が悲鳴を上げた。

しかしそんな声など耳に入れず、少年は練り上げた氣を右腕に込め、眼前に見えているネギの顔を捉え――

「Ｓｉｍ　ｉｐｓｅ　ｐａｒｓ　ｐｅｒ　ｓｅｃｕｎｄａｍ．ネギ＝スプリングフィールド」

――ようとする隙をネギに突かれた。

「な……」

完全な死に体だったネギが懐に飛び込んで来ている。

それも、彼の顔を捉え、吹き飛ばす筈だった右腕を外払いにかわされて。

戦闘中だというのに、状況の変化に戸惑い、コンマ数秒という“長時間”我を失ってしまうのはいただけない。

ゴッ！！

鈍く、そして重い音が響いた。

それが、拳を入れられ自分の頬が奏でたものである事すら少年は理解できていない。

身体を浮き上げられ、今度は自分が死に体となってしまう。

と、その刹那の時をネギは待ってはいなかった。

「Ｕｎｕｓ　ｆｕｌｇｏｒ　ｃｏｎｃｉｄｅｎｓ　ｎｏｃｉｄｅｎｓ　ｎｏｃｔｅｎ．
Ｉｎ　ｍｅａ　ｍａｎｕ　ｅｎｓ　ｉｎｉｍｉｃｕｍ　ｅｄａｔ．」

紡ぐ呪文は風属性の雷系。

強く、それでいて命を奪うほどではない。それでも閃光の様な雷撃を魔力で紡ぎ出して行く。

「白き雷！！」

ガカァ…ッ！！

少年の背中の中央部。

掌に集中させた魔力がそこに発現し、身体の末端めがけて突き進む。

閃光――！

そして衝撃！！

体内に発現された雷撃が四方に駆け、全身の筋肉が痙攣を起こしつつ吹っ飛び、石畳を転がってうめいていた。
それでも這いつくばりつつも立とうとできるのは脅威だ。

――ほぉ……

思わず感嘆の溜め息が零れた。

素早い敵を捉える為には隙を狙うしかない。
決定的な反撃のチャンスを待つためにギリギリまでダメージを受けて隙を誘う……

少なくとも、十歳の少年の気力と才気ではない。

胸を撫で下ろし、指に挟んだクナイを下ろした。

たっぷりと氣を乗せている為、少年に当たりでもすればただでは済むまい。

ネギの痛めつけられようを目にして我を失っていたのかもしれない。反省だ。

『それにしても……
あれからかなりがんばっていたようでござるなぁ……』

楓ですら引っかかった程だ。あの少年とて完全に騙されていた事は間違いない。
だからこそ完全に隙を突かれた際のダメージは凄まじいだろう。

以前、戦いから逃げて自分と遭遇した時よりかなり自分を鍛えていたのだろうと彼女は見て取った。

体力云々ではなく、心の方を――

刹那も　ちびせつなを通してそれを見、楓同様驚いていたのであるが、ネギのその気力と才気はその年齢からは考えられない。

以前の対エヴァ戦の折りに逃げ出した事もあるが、それは明日菜とカモが大混乱して騒ぎ立てた所為で、年齢相応の精神構造がパニックを起こしたのが原因であろう。
実際、あの戦いから然程も経っていないのにネギは落ち着いてこんな策をとっているのだし。

『三日会わずば刮目して見よ……とは言うでござるが……ナルホドナルホド……』

顎に手を置いて一人頷く。

相手は自分の担任ではあるが、何だか弟が成長したみたいで嬉しくもあるのだ。

『しかし……』

と、その眼差しを転がっていった少年に戻す。

魔法の力云々の事は未だよく解ってはいないのだが、あれだけの雷撃を喰らえば普通は筋肉が痙攣を起こして直に動く事はできない。

障壁等で防いだという事も考えられようが、戦いの初めの方でネギを魔法の矢を防いで防御の札は無くなっているようだった。

それは今の―ＦＵＬＧＵＲＡＴＩＯ　ＡＬＢＩＣＡＮＳ―……白き雷とやらをまともに受けた事で解る。

だがそれでも意識があり、更には立ち上がろうと動いている――

――となると、やはり横島殿が言っていたように……

「ム……！？」

少年の氣が高まり、ゴキゴキと異音を立てて筋肉や骨格が変貌して行く。

体格、髪の色、筋肉の使用形状までが変貌する。

『なぁ、楓ちゃん。聞いてる……だろ？
念の為だけどさ、今さっきの子供に注意してて。
あの子、ちょっと人間以外の血が混じってるみたいなんだ』

楓が潜んでいる場で呟かれた彼の言葉が、はっきりと脳裏に蘇った。

『成る程……獣人でござるか……』

獣化を遂げた少年が今まで以上の氣の波動を放ち、ネギの前にして立ち上がった。

「こっからが本番や、ネギ！！」

どうやらまだ終わりとは行かないようでござるな……

まだ本調子まで戻ってはおるまいに、意地だけで立ち上がったであろう少年に、感心しつつも呆れが出る。

自分より年下である二人のこの気合。

それが男の子というものだからだろうか、それとも……

『……とと、また関係ない事を考えてしまっていたでござるな。失敗失敗』

コンっと軽く自分の頭を小突き、後を振り返って遂に追いついた少女に視線を送る。

ふむ……と軽く頷いて道を譲ると、その少女は“まるで楓が見えていないかのように”その前を少しも躊躇せず通り過ぎてゆく。

チラリと少女がその手に持ち、開いている本を覗き込めば……案の定、獣人らしき少年がネギに殴りかかろうとしているシーンが落書きのようなヘタな絵で描かれていた。

「み、右です！！　先生！！」

それを見、少女が叫んだ。

ネギは反射的にその声に従い、少年の攻撃を回避する。

―な……！？　今の声は……っ―

次の瞬間にはページに新たなる字が浮かび上がり、ネギへの攻撃行動の全てがリアルタイムで表記されてゆく。

そして少女はそれを『右ですっ』とか『上っ！！』等とネギに伝えてゆき、ネギはネギで訳が解からぬままその指示に従って攻撃をかわしては反撃を入れてゆくではないか。

『や、やはりこれは……』

楓はその能力を目の当たりにし、冷や汗を掻いていた。

その少女――宮崎のどかの本型のアーティファクト、ＤＩＡＲＩＵＭ　ＥＪＵＳ（ディアーリウム・エーユス）……“いどのえにっき”は人の心の表層を読み取り、文章として描き出す能力がある。

楓がそれに気付いたのは話しかける直前で、のどかが手に持った本を読みながら走るという奇行を行っていてくれたお陰だった。

そこに書かれていたのはヘタクソな文字で書かれた少年の思考。

―思ったより威力あんな―とか、―もろたで！！―等といった本

当に表層のものではあるが、間違いなく他人の心理が読み取られている。おまけに距離はあまり関係ないようであるし。

これでは話しかけても誤魔化しようが無いし、下手をすると色々と読み取られて要らぬ知識を与えてしまいかねない。

慌てた楓は自分の“札”を取り出し、その魔具を使用し、のどかに危険が及ばないよう、そしてネギらの戦いを見守ろうと先行したのである。

『それにしても……運よく『透』が出てよかったでござる……』

手に持ったメタリックな葉団扇を見ながらそう安堵の溜息を吐き、少年……のどかが言うにはコタローというらしい……に脱出方法を頭に思い浮かばせ、それをネギたちに伝えるという策をとっている彼女の声をどこか遠くの事のように聞き流していた。

“いどのえにっき”にはご丁寧にも式が仕掛けられている鳥居の位置と突破方法まで示されている。

何と言う厄介なアイテムなのであろうか。

のどかを抱き上げて杖に跨り鳥居の下を駆け抜けてゆくネギ。

そして後を追う明日菜……とちびせつな。おまけにカモ。

『おっと……』

ボ～っとしてたらコタローと一緒に閉じ込められてしまう。

確かにそのまま彼の様子見をながらこの中で時を待ち、様子を窺いに来るであろうコタローの仲間の後を追うという手も考えたのであるが、それではネギの護衛は勤まらないし、何よりこの魔具は十分しか持たない。

仕方なくネギを追って結界を突破する事にした。

確かに時間もまだ五分ほど残っているのだが、全てが運良く進むと楽観視はできないので、外でネギ達を見守る方が得策だと見たのである。

それに隠れたままなのにも一応の理由があった。

何せのどかはアーティファクトを持ってはいるが、戦闘能力皆無の一般人なのである。

流石に楓が突然現れたらのどかに説明をせねばならないだろうし、何だかんだで聡いのどかの事だ、そんな事になればより一層引き込みかねない。

それに下手をするとあのアーティファクトを使われてしまうかもしれないではないか。

いや、別に後ろ暗い事やのどかに対して恐怖を感じているわけではないので使われても別に……いや、ちょっと困る……かな？

ぶっちゃければ――

『……よ、横島殿の事を知られてしまったら……い、いやキスの事は、兎も角……その……

せ、拙者がどのように彼の事を思っているか……』

自覚させられては堪らない――

「って、違うでござるよっ！？」

何だか真っ赤になって悶えている楓であるが、幸いにしてその余りにおマヌケ過ぎる声は、空間の裂け目を明日菜が叩き割る音によってネギたちには聞えなかったようである。

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊

城下町にお忍びで出てきたお姫様と、美少年剣士。

お姫様を抱き、片手に刀を構えた姿はかなり様になっており、他の観光客であろうどこかの女学生らもきゃあきゃあと黄色い声を上げていた。

まぁ、お姫様は兎も角として、美少年剣士の方は新撰組宜しくだんだらの羽織を纏っており、時代考証にちょっと難がある。

その辺がコスプレっぽくて惜しいっと指を鳴らしたくなるのだ。

どちらしても――

「えへへ……
せっちゃん男の子みたいやし、ウチらカップルみたく見えるかもな――♪」

「なっ……何を言い出すんですか、お嬢様っ！！」

両方少女なのだから余り意味は無いのであるが。

刹那の新撰組スタイルという男装は木乃香の見立てである。

腰に二本の刀を差すのは、まぁ武士であれば当然であるが、刹那のその大小の刀はかなり不釣合いだった。

何せ片方は白鞘の野太刀であり、もう片方は黒鞘の模造刀だ。大

体、腰に差す野太刀など似合わないにも程がある。

しかし、刹那の愛刀であるし、木乃香の護衛もあって手放せない。

それでもかなりノリよく写真にとってもらっているのは、彼女自身が舞い上がっているのかもしれない。

『ふふ……でも、何だか楽しいな……

思えば私はお嬢様とこんな風に遊びたかった気がする……』

大切な友達だからこそ、

大切な幼馴染だからこそ、刹那はあえて木乃香との間に距離を置いていた。

だが、“自分の秘密”がバレ、その木乃香に嫌われる事の方を恐れていたのが本音なのかもしれない。

その事を自覚しつつも今一つ踏み出せていない刹那であるが、木乃香は彼女の葛藤を理解しているかのように踏み込んでくる。

守護の心と愛しさで反論できないのを良い事に、木乃香は刹那を引っ張ってはしゃぎまわっていた。

刹那にしても、そんな木乃香と一緒にいられる事が嬉しくてたまらないらしい。

そしてそれを自覚し、今写真を撮っていた他校の女学生からデジカメのデータを木乃香と共にコピーしてもらうのだった。

「ただの仲の良い二人にしか見えませんね……
あの位なら、私とのどかでもするですよ？」

「んふふ……いや、これは間違いないね」

そんな二人を覗き見していたハルナと夕映は、微妙な視線を刹那に送っていた。
何せ二人して刹那と木乃香との仲を誤解しているのだから。

何せ、ぱっと見でも久しぶりに一緒にいる幼馴染同士だとは思えないほど仲の良い二人だ。スットンキョーな思い違いをしてしまったとしてもしょうがないかもしれない。

「確かにアヤしいね～～
あの二人♪」

そんな夕映らの後ろから、やたら耳慣れた声が聞こえてきた。
ぎょっとして振り返ると……

「わぁっ　朝倉にいいんちょ達!?」

黒い着流しの朝倉に、ばっちり町娘（看板娘風）になっている村上　夏美と、花魁姿のあやか、何故かイギリス婦人風の那波　千鶴がハルナ達同様に様子を窺っていた。

どうやら彼女らの班もシネマ村に訪れていたようで、ガッチリ変装までして楽しんでいる。

呆れるような感心するような目でハルナも、ここに来たらやんないとーと素浪人の格好を楽しんでする朝倉に苦笑していた。

ハルナにしてもコスプレっぽいのでやってみたいかなー等と思ってはいたのであるが。

「ん？」

ふと何だか妙な嘶きが聞こえてきたような気がして夏美が首を回した。

すると、通りの向こうから黒子が御者を務める馬車が駆けて来るではないか。

「え？」

何とその馬車には、自分らと同世代くらいの少女が貴婦人の姿で乗っており、口元を羽扇子を隠してホホホと微笑んでいるでいた。

人の事は言えないが、貴婦人を乗せた馬車とは時代考証が無茶苦

茶である。

そのまま人通りを突っ切り、刹那らがいる場へと割り込みを掛ける馬車。

「ひゃあっ」

驚く木乃香を後に庇い、反射的に愛刀の柄に手を伸ばし、相手を確認してみれば……

「お……お前は！？」

木乃香に続いて刹那も驚く。

何せ相手が余りに大胆な行動で出てきたからだ。

「どうも――
神鳴流です～～～」

馬車に乗っていたのは、先程から木乃香らを追い続けていた剣客の月詠だったのである。

「……じゃなかったです。
そこの東の洋館のお金持ちの貴婦人でございます～～
そこな剣士はん。
今日こそ借金のカタにお姫様をもらい受けに来ましたえ～～～」

何のつもりだ？　と首を傾げる刹那であったが、木乃香や夕映らはこれをお芝居イベントだと解釈した。

シネマ村では突発イベントとして、来場した客を巻き込んだ寸劇が始まったりする。

無論、ノリが良くない相手を巻き込んだりはしないが、ノリノリで新撰組隊士の衣装を身に纏っている刹那はノリの良い客だと判断したのだろう。

……と、二人はそう受け取っていた。

『なる程……
劇に見せかけて衆人環視の中、堂々とお嬢様を連れ去ろうという訳か……』

流石に刹那は月詠らの意図に気付いている。

どこかに追い込んで攫うにせよ、討ち取って奪うにせよ、普通はこれだけの人目があるのだからそう大胆な行動はできない。

だが、この方法なら人目を多さを逆手に取れるのだ。

例え逃げてもイベントとして見られている為、客の大半が目で教えてくれるであろうし面白がって付いて来るだろう。

そうなると刹那も動きを鈍くされてしまうし、派手な動きをしては逃げられなくなる。

咄嗟に…とは言え、よく考えられた策だ。

しかし――

「そうはさせんぞ!!
このかお嬢様は私が守る!!」

このちゃんを守る。

“あの時”のように。

余りに無力だったあの時のような間違いは決して犯さない。

その誓いはその想いは決して折れないのだから。

「キャ――っ!!
せっちゃんカッコえーっ♪」

……とは言っても、肝心の木乃香が空気を読めていない。

「わっ、い、いけませんお嬢様……っ！！」

木乃香にギュッと抱きつかれた刹那はただ慌てるのみ。

周りで見ていた他の観客もヒューヒューとはやし立ててその展開を面白がっている。

「……むむ？
やはり二人はそーゆー関係……？」

物陰から見守っている同級生らは誤解をより一層深めてたりもするし。

「えっ　何ですの？
ちょっと皆さん、どーゆーコトですの！？」

まぁ、一人イインチョさんは空気を読めていないのか混乱気味であるが。

ショタ系なら兎も角、百合系にはやたらと疎い少女だった。

そんな騒動も月詠にとっては予想通り。

ノリが良ければ良いほど流れに乗せやすいと言うものだ。

「そーおすかー
ほな仕方ありまへんなー」

と、内心のウキウキを隠す事も無く、ゆっくりと手袋を脱いでゆく。

何故か……と言うと、決闘を申し込む為だ。

何とも古めかしい行為であるが、刹那としても木乃香に掛かる外敵と早く決着をつけたいだろうし、剣士として勝負を申し込めばそうそう反対できまい。

そして何より、今の刹那自身の行動で周りで彼女らに注目され過ぎてしまい、観客の眼が増えすぎた為にこの中で逃げ回る事は不可能となっている。

刹那は罠と解かってはいても、彼女の手っ取り早く月詠を倒す事しか道が残されていなかったのだ。

――普通なら。

「そこまでアル！！」

「え？」

「は？」

今正に手袋を投げつけようとした月詠と、刹那の二人は、突然の声に驚いた。

「東の洋館の貴婦人とは仮の姿！！
その実態はゴーヤの密輸で私腹を肥やす悪徳商人　Ｈ・ゴーヤ！！

皆の眼は騙せても、この私の眼は誤魔化せないアルよ！？」

「はぁっ！？」

又しても投げかけられたトンでも設定。
同人作業などで慣れているハルナですら驚いた。

「え、えーと……今の声って何だか……」

「ですね……聞いた事ありまくりですし……」

朝倉と夕映は冷や汗を流しているが。

「だ、誰どすかー？」

何だか知らないが、持って行こうとした流れが止められかかっている月詠は、彼女なりに必死になって周囲を窺う。

寸劇が何時ものこの施設のノリであるが故、ここまで思い切り変えられてしまうと修正が難し過ぎるのである。

混乱…とまでは行かないものの、策がぶっ壊されてしまって“それなりに”は焦っているのだ。

無論、彼女とて剣士の端くれ。
直に刹那と同時に声の主の居場所を見つけ出していた。

のだが……

「え、え～～と……」

「凄いなぁ～　ウチ、先が読めへんわ」

何というか――
パターン通り……いや“お約束”か？

“そこ”は彼女らの直近く。通りの脇の火の見やぐらの上。
見得を切る者のパターンをおもいっきり踏み、高いトコに腕を組んで直立不動で立っていたのだ。おまけにこっちに背中を向けて。
当然ながら一般客は昇降禁止だ。

その誰か……
つーか、ぶっちゃけよく見知っているよーな少女だった。

「あ、貴女はー？」

当然ながら月詠は何者か知らない。

そんな問い掛けに応じるよう、その少女は腕を組んだままゆっくりと振り返り、おそらく三人を見下ろしている。

おそらく……というのは、ドコに売っていたのか某ヒカリの巨人なお面をつけていてサッパリ表情が解らないからだ。

そんな皆の目が集まっていた少女は、自分が発見された事を確認してから軽く頷き、こう言った。

「私、ナゾの中国人！」

自分で謎と名乗る人間も珍しい。

「古…じゃないアル、ええ～と……李　燕雲！！」

そのあまりのテキトー具合にあからさまな偽名だと知れるが、謎と言っておきながら直に名前を言う人間は更に珍しい。

何だか知っているよーな気がする中華な少女の声。

そんな少女が、貸衣装なのだろうかゆったりとし過ぎている緑色の袍（パオ：よく劇に出てくる丈の長い中国服）を着て火の見やぐらの上で見得を切るものだから他の少女らも呆気にとられてしまった。

知ってるよーな…とやや自信なさげなのはやはりそのお面の力だろう。多分。

それより何より、何で時代劇の施設でこんな特撮ヒーローのお面があるのか大いに謎である。

つーかどんな超展開だと言いたい。

「トゥ！！」

急にそんな掛け声が上がり、皆がギョッとする。

何とその少女が火の見やぐらから飛び降りたのだ。

「と、飛んだ――っ！！？？」

「飛び降り自殺――っ！？」

ハルナ達も大慌てであるが、飛び降りた方は慌てていない。

慌てず騒がず袖に隠していた花札を取り出し、

「―来々―」

と小さく呟いた。

パァッ！！

瞬間、少女の身は光に包まれ、皆の目が眩む。

元々彼女は何かの力を借りたりせず、純粋な体術だけで着地できるのであるが、こうすれば芝居の特撮だと皆に思わせられるからだ。

何気にパートナーのお陰でこすっからくなっている。

スタン…とブーツで地面を踏みしめて降り立ったその少女の姿は先程とは一変。

古――もとい、自称ナゾの中国人の姿は、赤い空に浮かぶ月、そして満開の桜の柄が描かれているチャイナ服に変わっていた。

裾はやや短めであり、健康的な足に続く腰がちらりと覗いていて何とも色っぽい。

ブーツがやや野暮ったいが、それでもしっかり似合っている。

そしてその両の手には奇妙な得物が握られていた。

一言で言えばでっかい黒扇子。

それも骨が太く、黒い鉄扇のようである。

しかし長さが一メートル近くある上、その軸の部分が横に突き出ていた。

彼女はその突き出た軸の部分を握り締めているのである。

トンファーのような……いや、大きい鉄扇に似たトンファーと言った方が良いだろう。

それが彼女専用のアイテム、一宴の可盃一なのである。

「え、えと……ク……」

「ワタシ、古　菲等という美少女ではないアル！！
マダム＝揚ネ！！」

さっきと違うだろ！？　ヲイッ！！　と内心ツッコミを入れつつ、木乃香を連れて古に近寄ってくる刹那。
木乃香はやっぱりよく解っていないのか、ホケ～っとしている。

「老師が後で来てくれるから時間稼ぎネ。
アイツらの手に乗てはいけないアルよ？」

「え？　あ、すまない……というか、老師？」

「そうアルよ。
もう直来てくれるから、刹那はコノカ連れてここから離れるアル」

刹那の疑問も尤もであるが、今のそんな事を聞いている場合ではなかった。

何せ真正面にはお嬢様然とした格好の少女がいるのであるが、彼女は正真正銘の刺客なのだから。

刹那は“謎の中国人”と嘯く少女のお面の隙間から覗く頬が何となく赤く染まったよーな気がちょっとばっかり気になってはいたが、コクリと小さく頷いて木乃香の手を取った。

「ウチとセンパイとの勝負の邪魔をしはるんですかー？」

何だか自分の思惑と違った方向に進められ、尚且つ仲良さげに話しているからか、月詠の気配がどろりと濁った。

全くもって見当違いの想いであるが、生死を賭けた勝負は月詠にとって大切なものなのだろう。

その気配の変化に感受性の強い木乃香はビクリと怯えた。

無論、謎の中国人こと古　菲は殺気闘気に敏感だ。刹那と同時にその気配の変化に気付く。

古は仮面の下で片眉を跳ね、木乃香を庇う刹那の更に前に出て、

「悪の言い分など聞かないアルね。
この姫様が欲しければ、ワタシと勝負ネ！！」

ビシィ！！　と鉄扇トンファーを握った右手の指を差し、見得を切った。

月詠の剣呑な気配のお陰で大人モードへの照れがすっ飛んだ……もとい、武闘心に火がついた事であるし、ここでコトを始めれば相手の鋭そうな動きの方を封じられるであろう。

そんな彼女に対し、かな～り予定と違う方向に持って行かれた事にやや不機嫌になっていたが、月詠はそれ以上慌てる事無く馬車から小刀を取り出して鯉口を切った。

「……悪い子には……おしおきが必要ですわなぁ～～」

鞘を後に吹き飛ばし、放たれた矢の如く双剣の使い手は古に斬りかかって来た。

「……ちょっと遅すぎまへんか？」

「確かにね……」

やや眉を顰めつつ、窓から下を見下ろしてみてもそこは平穏な『日本橋』。シネマ村の正門近く掛かっている木造の橋だ。

本当であれば、ターゲットをこの建物内に追い込んでもらい、そのまま掻っ攫う手はずだった。

にもかかわらず、追い込むどころか下の橋の袂で人目を惹きつける決闘すらも始まっていない。

となると……

「月詠はん……失敗しはったか？」

「……」

眼鏡を指先で押し上げ、内心の焦りを誤魔化して現状を考えていた。

放っている式神からは本山に動きはない事は解っている。

月詠からの報告通り、ここに来ている西洋魔法使い関係者は木乃香お嬢様とひよっこ剣士くらい。あとはせいぜいお嬢様の同級生の小娘らくらいなものだろう。

だったらそれで梃子摺る筈無い。

いや、梃子摺るにしても、向こうだってお嬢様を逃がすくらいの事はするだろう。だったら何かしらのアクションが起こっていても……

「……どうやら、計画が狂ってしまったようだよ」

唐突に、外の様子をぼんやりと眺めていた少年がそう呟いた。

「え？」と、その側に寄って行き、彼が眺めている方向に目を向けてみると――

「んなっ！？」

予定とかなり違い、日本橋よりずっと向こうの大通りで土煙を舞い上げる激しい活劇がおっ始まっていた。

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊

「う～～……」

何度となく打ち合いをしている間に刹那は木乃香を連れて既に逃亡を果たしている。

当然、月読はこれを追おうとしていたのであるが、この厄介な“謎の中国人”とやらに行く手を阻まれていた。

更には刹那の同級生達までもが邪魔をしようとしてきたのである。

まぁ、そっちの方は自分の持つ無害な式神を放って相手をさせているから別にどうという事は無い。

問題は、この“謎の中国人”とやらの方だった。

「え～いっ」

「…シッ！！」

左横薙ぎから巻き込み、上から落とす垂直斬り。

しかしそれすらも横に弾かれ、パランスを崩しかけた所に足払いを掛けられてしまう。

何とか体制を崩し切らずにすませられたが、もう少しで軸足を痛めるところだった。

それでいて致命傷を避けてきているので、殺合メインの彼女からすればじれったくてしょうがない。

斬撃を繰り返し、何合も打ち合って解った事であるが、この“謎

の中国人”とやらはとてつもなく強い素人だった。

何せ、打ち返しや斬り返しの間にわざと作る隙に対して単純に反応してしまうのだ。

それでもフェイントにかかった彼女を迎撃しようとすると、これがまた見事な体術でもってかわされたりカウンターを入れられたりする。

月詠ほどの剣の使い手から言えば隙だらけにも程がある戦い方であるが、肉体能力が存外に高く、おまけに氣をかなり鍛え上げているようで決定的な一撃は与えられないのだ。

それに――

「う～……それ、反則やわー」

「真剣使てる上、氣の剣技使てくるオマエに言われたくないアルよ！」

うすらぼんやりとした口調ではあるが、斬撃は本物であり、その速度も風のよう。

二刀連撃斬鉄閃（にとうれんげきざんてつせーん）　等とのんびりとかましてくるが、竜巻のような巻き込みの刃を喰らえばただではすまないだろう。正に“斬鉄”なのだから。

しかし、こちらも只者……いや、只“物”ではないのだ。

がぎぎん……っと鉄塊がぶつかり合うような重い音を立ててその斬撃の全てが受け止められてしまう。

普通であればその剣技の“閃”は余波が出る。つまり、剣を剣で止めたとしても刃の衝撃はそのまま突き抜けてくるのだ。だから対応する剣者は氣でもって受けねばならない。

しかし、何と相手はその全てを鉄扇トンファーで受け止めてしまうのだ。

いや、相手が受け止めるのではなく、その鉄扇トンファーが……である。

月詠から何度となく放たれる斬撃も、その全てが彼女の持つ“宴の可盃”に完全に受け止められてしまうのだ。

実体である刃は兎も角、飛んでくる氣の刃は普通防ぐ事はできない。しかし、その魔具の能力の一つ＜ハナミデイッパイ＞はそれを防御し切ってしまうのである。

実はその鉄扇は見かけより大きく広がる事ができ、扇状というよりは丸扇子ふうの形となって、盾として使う事ができるのだ。

その時、チャイナ服の桜の花の柄が消え、開かれたその鉄扇にその模様が現れている。それが＜ハナミデイッパイ＞のモードであった。

鉄扇なのに“盃”の名がついているかと思えば、可盃の名の通りに幾らでも相手の攻撃を受け止められてしまう恐るべき強度を持っ

ているからであろうか。

『う～～……普通でしたら盾の死角から攻め込めるんですけどー……』

攻めあぐねている月詠の悩みも当然で、幾ら謎の中国人とやらの視界を覆い隠す方向から刃を向けてもその全てが見切られてしまう。

更にこの相手、体術だけは一級なのでトンファーでのカウンターが返って来るのだ。

氣の練りは月詠や刹那等から見ればまだまだ一般人の域を出ていないのに、その鉄扇トンファーの一撃は十二分に練られた氣が乗っている。

これでは訳が分からなくて攻め方が見つからないのも当然だろう。

しかし、実のところ古の方は余裕は無かった。

何せ相手はプロである。

見た目の年齢は自分と同じくらいであろうが、裏の仕事を請け負い、続けていた“本物”なのだ。

本気の一撃を放とうにも、相手の間合いは思ったより深くて広い。

迂闊に踏み込めばただではすまないだろう。

いや、肉を切らせて骨を断つ……程度であれば古はやれる。骨を折ったり折らせたりするのなら、武術家である彼女から言えば然程の事でもないのだ。

だが相手は裏の世界に生きる者であり、尚且つどこか壊れた人間だ。

あの妙に間延びした口調からしても彼女の余裕からであり、死合をするという力みは微塵も無い。

殺し合いを楽しむ余裕……いや、それだけを行っていると言っても過言ではないだろう。

そしてこちらはそういったものとは無縁だった。

試合や力試しであれば数え切れないほどこなしてきてはいるのだが、殺し合いは流石に無い。

今まで月詠の攻撃に耐えられているのも、一重にこの魔具のお陰である。

とは言っても、自分の経験の無さと力の差を嘆く暇は無いし、必要も無い。

単に時間さえ稼げばよいのだから、自分のパートナーのように相

手をおちょくってただひたすら防げばよいだけ。

確かに勝ちたいという気持ちはある。悔しくもある。

が、それに拘れば自分の友人である木乃香を守る事ができないのだ。

『勝ち負けなんか拘る必要はねーぞ？

木乃香ちゃんを守りてぇんだろ？　だったら時間稼いであの娘逃がすだけでいいじゃん。

勝負に勝っても木乃香ちゃん怪我させたら馬鹿だろ？』

そう言われていたし。古自身もそれに納得している。

ぶっちゃけ、木乃香さえ安全に逃げられさえすれば……

『ワタシの“克ち”アル』

なのだから。

「せっちゃん、どこ行くん？」

「すみません。今は……」

変わってこちらは刹那と木乃香。

お忍びの姫君然とした姿の木乃香を、文字通りお姫様抱っこして家々の隙間を駆けている。

本当なら屋根の上を飛んで行きたいのであるが、それだと丸見えになってしまう。

よって刹那は面倒なのだが路地裏を走り回っていた。

しかし、それでも欠点はある。

「あ、あの美剣士と姫様だ」

「ん～？　こっちに流れてくるのかな？」

「面白そう♪」

『く……っ　これでは逃げ切れない……』

先程のやり取りが思った以上に目立ってしまっていたのか、あちこちで姿を見られては姿を消すことの繰り返し。

群衆が騒げば人目が集り、引いては位置を敵に知らせてしまう。だったら施設から出れば良いのであるが、着替えをしなければ外は中以上に目立ってしまう。しかし恐らくは更衣所に“眼”が仕掛けられている事だろう。そんな所にノコノコ入っていけば一網打尽だ。

しかし、先程謎の中国人……いや、古が老師とやらがやって来ると言っていた。

それが何者かは知らないが、間違いなくこちら側の援軍だろう。古や楓が知るものならばそれなり以上に闘える筈だ。

あまり期待してはいけないかもしれないが、藁にも縋りたい今となっては如何なる者でも来てほしいのが正直なところだった。

「このち……お嬢様、今しばらくご辛抱を……」

「う～……またお嬢様って言う～……」

抱きかかえられたままぷくっと頬を膨らませる木乃香。

そんな顔もまた、記憶に懐かしい以前のままだった。

思わず刹那の口元に笑みが浮かびかかる。

友達として側に居られたあの時の、自分に向けてくれている親しげなあの顔を今も持っていてくれている――

『いけないいけないっ！』

ぶんっと頭を振り、雑念を飛ばす。

彼女の友達として側にいられずとも、木乃香を守る事はできる。

自分にとってそっちの方が大事な筈だ。

だから……

唇を噛み、無理矢理自分を納得させて眼を伏せて速度を速めてゆく。

そんな彼女の表情の変化に、木乃香の眼が寂しげな色を浮かべた事に気付けぬまま……

遂に無言となった二人。

それでも人目は完全に誤魔化せたのか、自分らに向けられる気配は完全に消えた。

その事に安堵し、僅かながら気を緩めてしまったその瞬間。

「……見つけたよ」

駆け抜けた先。

通りの角を抜けたと同時に、背後からそんな言葉を掛けられて刹那は怖気が立った。

木乃香を右手に抱えたまま身を捻り、左裏拳を背後に立ってたであろう声の主に打ち込む。

が、その声の主は拳の影が届くより先に刹那の後に回りこんでいた。

ハッとして身構えたが一瞬遅い。
反射的に木乃香を突き飛ばすように身から剥がすと――

ドズッ！！

木乃香がその手の先から引き剥られ、脇腹に何かが爆発した……という気がした。

一体何が起こったのか、二人して直には気付けなかった。

積まれてあった防水桶を弾き飛ばし、一般客の隙間を縫って弾き飛ばされてゆく物体。

それが自分である事を、
そして自分の友達が飛ばされたという事、鈍い音を立てて刹那が商家の蔵の壁に叩きつけられた時にやっと二人は理解できた。

「が…っ!?」

「せっちゃん!!!」

漆喰の塀にめり込み、一瞬呼吸が停止する。
その刹那の呻いた声によって木乃香もやっと思考が戻っていた。

そして、自分が巨大な何かに抱え上げられているという事も……

「なっ!?　放して、放してぇっ!!
せっちゃん!　せっちゃぁあんっ!!」

慌てて叫ぶ木乃香。

しかし彼女は助けを呼んでいるのではない。

確実にアバラの数本はやられたであろう、刹那の身を按じて声を発しているのだ。

そんな木乃香を視界の端に留めているのは……自分と同じくらいか歳下であろう少年。

銀髪で表情が硬い、どこか作りもののめいた不思議な雰囲気の少年だった。

「ぐ…あ……」

木乃香を庇う為にまともに受けてしまった打撃。

氣を使った防御だけは出来ていた筈であったが意味を成していなかった。

痛みより呼吸が乱れた事で視界が歪んでいる。

しかしそれでも敵であろう少年の姿と、少年の式神であろうか木乃香を抱えている悪魔に似た巨体は目に入っている。

周囲の一般客は、余りの非現実的な光景故に芝居の一環としか見えていないようだ。

尤も、気付かれていたとしても何の助けにもならないのであるが。

「……それじゃあお姫様はもらってゆくよ」

壁にめり込んだ刹那には欠片も気にならないのか、そう呟いてそのまま立ち去ろうとする。

「ま、待て……っっっっ！！！」

しかし、こんな痛みで、この程度の痛みで木乃香を危機を見逃す刹那ではない。

歯を噛み砕くほど力を込め、壁から身を剥がして得物の鯉口を切る。

「……止めた方がいい。無駄だよ」

「だ、黙れ！！」

今の一撃で解かった。

この少年は、自分よりはるかに強い――と。

だからと言って諦める刹那では無いし、諦められる話ではない。

目の前で大切な人が奪われそうになっているというのに、この程度の痛みで踏み止まる事等できるはずもない。

身体に残る気力をそのまま剣に収束し、その一撃でもって屠る。

ありったけの氣を込めれば倒せずとも撤退はさせられるはずだ。

そう踏んでの事だった。

少年は無表情ながら厄介な状況に舌を打っていた。

というのも、刹那は魔法の秘匿等の事柄が頭から抜けているようなのだ。

いくら周囲にアトラクションの一部だと思われていようが、彼女が本気で打ち込んでくれれば、自分への被害はなかろうが物理的被害は只では済まない。

となると、色々と“厄介な眼”を引き寄せかねない。

“今は”まだそれは拙かった。

だから――

「な……っ！？」

「せ、せっちゃん……」

余りの事に呆然とする刹那。
そして、その恐怖に声が震えだす木乃香。

「……打ち込んでみるかい？」

少年は、木乃香を式神から受け取り、その細い首を掴んで片手でぶら下げ、盾にしているのである。

「バ、馬鹿な……キサマの目的はお嬢様なのだろう！？
盾になぞ……」

する訳が無い――

「それはそっちがそう勝手に思っている事だろう？
少なくとも、僕はどっちでもいいんだ」

だが少年は本当にどうでもいいのか、顔色一つ変えずそう嘯いて更に木乃香をぶら下げた右腕を前に伸ばす。

斬ってみろと言わんばかりに。

「く……っっっ」

刹那は動けない。

カタカタと鍔元を鳴らす事が限界だった。

確かに自分の腕に自信は持っているし、彼女の剣の流派には弐の太刀筋という、対象のみを切り裂く技がある。

だが、刹那には解かってしまっていた。

それすらも利用され、木乃香を傷付けさせられてしまうであろう事を――

「……せっちゃん」

苦しげな木乃香の声を耳にし、刹那の唇の端から赤い糸の様に血が伝い落ちる。

歯を食いしばりすぎたせいであろう。

それほど悔しかったのだ。

少年はその様子を見て、ふむ…と一人納得をする。

この場は式神に任せて自分は転移術を使用、お姫様を連れてさっさと雇い主……千草の元へ向おうと考え行動を起こそうとすると、

さくっ

「え……？」

その式神の胸から光る刃が突き出たのを――見た。

バジュッ！！

「何っ！？」

式神の突然の破裂。

これには少年だけでは無く、刹那も驚いた。

だが、隙あらば木乃香を奪回せんと氣を高め続けていた刹那の方が再起動は早かった。

地を蹴り、アバラの痛みも忘れ、ほぼ捨て身で少年の懐に飛び込んでゆく。

「……早い。でも……」

その動きに合わせ、木乃香を掴んでいた手を離して刹那の顔面に拳を入れ……

「女の子に手ぇ上げんなよ……クソ野郎がっ！！！」

ドズムッ！！！

「がっ！！？？」

――ようとして、その右の頬に途轍もない一撃を入れられてしまった。

刹那はそれに目もくれず、木乃香を抱き締めて距離をとる。

「せっちゃん！！」

「お嬢様……っ！！　良かった…ご無事で……」

お互いの無事を確認し合い、やっと頬から緊張が抜けた。

思わず涙すら浮かぶほど……

しかし、一撃を喰らった少年の方は只では済んでいなかった。

灯篭に激突して砕き破り、

橋の硬い欄干を巻き込んでぶち壊し、

堀の横に植えてある柳の木もへし折って更に吹っ飛んでゆく。

そして更にその向こうにあった石垣に、

ズゴォオオンッ！！

という、ものすごい地響きを立てて叩きつけられてしまっていた。

「く……な、何が……」

砕け、そして崩れた石垣からゆらりと出てきた少年であったが、

そのダメージは尋常ではない。

というのも。

『こ、これは……っ！？』

全ての障壁が未だ存在しているというのにその打撃はそれらをすり抜けてダメージを与え、足元がふらつくほどの激痛を仮初めといえるその身体に与えられているのだ。

流石にその脅威には驚きを隠せず、少年は自分が巻き起こしてしまった土煙の中を睨むように眼を向けた。

――それに合わせたかのように風が舞い、土煙を薙いでゆく。

その土煙の中、一人の人物の姿が露わになってゆく。

一人の青年がいたとしよう。

その青年は珍事によって衣服をなくし、パートナーの少女を先行させて慌ててテキトーに服を掴んで着たとしよう。

ぶっちゃけ、ちぐはぐにも程があるし、統一感もじぇんじぇん無いが、急を要するのだからしょうがないと割り切ってそれを着た青年だった。

だが、仮装したのならなり切るのは作法。

ムリヤリにでもキャラを作ってなり切るのは（悲しいかな）得意だった。

あんぐりとしてその青年を見つめる刹那。

何だか感心している木乃香。

そんな二人の視線に痛みを感じつつ、それでも美少女の視線だからいいんだもーんとヤケクソでクールさ（本人主観）を貫いていた。

「キミは一体……？」

少年のいぶかしむ声に反応するように、その男はでっかい頭を上げ、少年の顔を睨み据える。

彼が着ているのは赤い服。着物では無く、赤い“服”だ。

それに黒い手甲と黒い脚絆。

白いマントと黒い胴。その胴には炎の様な紋様が描かれている。

しかし、そこまでならまだ良かった――

背中から引き抜いた得物はしゃもじ。

それもでっかい金色のしゃもじ。

そしてマスクが大変だ。

先日襲撃をしてきた眼鏡女（千草）はここでバイトでもしていたのだろうか、みょーにディフォルメされているライオンのマスクがつけられていた。

何せ鬣がドーナツみたいにぷにぷにしていて欠片ほどの迫力も無いのだ。

額に三日月傷、そのぷにっとした口に竹輪が咥えられているのは何のつもりだろうか？

それだけでも相当ナニであるというのに、何と手綱を咥えている乗り物が頂けない。

そりゃあ確かに大きいだろうし、人が乗れるサイズだというのも解る。

だが、その頭に突き出ている大きな角。そしてその体躯の大きさに反比例するつぶらな瞳が何ともミスマッチ。

――そう鹿だ。

それもナダレとか呼んでしまいそうなほどの大きな白い鹿なのだ。

にしても手綱を噛ませて鞍をつけた鹿というのは何なのだと問いたい。

兎も角、その珍妙な姿をした男は、

ヤケクソだがノリノリで、引き抜いた金しゃもじを右手に構えてゆったりと前に突き出しつつこう言った。

「ポン・〇・ラ〇オン丸……見・参！！」

冷たい風が対峙する二人の間を吹きぬけた後、周囲は様々な反応を見せる。

観客は珍妙なヒーロー（？）の登場に沸き、少年はあまりの超展開に凍りつき、

刹那は呆気にとられ、

木乃香は……

「……今の……『母』『拳』って何やろ……？」

少年が殴られる直前、

その間近にいた木乃香は確かにそんな文字が輝いていたのを目にし、その意味を考えあぐねていた。

中編　ー弐ー（後書き）

ポ〇・デ・ラ〇オンも大好きです♪
時計も、ぬいぐるみも持ってます。

『く……っ』

表面上は全くそうだとは見えていないのだが、内心の焦りは相当なものだった。

自身の体術レベルの高さは自覚しているし、相手の技量もその体捌きから凡その事が理解できる。

相手は素人の域を出ていない――というより、ズブの素人と言っていい。

それが彼が出した答だった。

何せ身体の動かし方一つ一つに無駄が多い……いや、“無駄な動きが無駄に多過ぎる”とでも称すれば良いだろうか？

兎に角、体重移動の一つをとって見てもど素人。学生運動部のそれより低いと言い切れる。

単に勢いや体力に任せて飛んだり跳ねたりして回避するだけ。ただそれだけなのだ。

だというのに……

「何故、当たらない？」

ただの一発も攻撃が当たらない。掠りもしないのである。

最小最速の動きで拳を出し、身体の中央部を貫く勢いで繰り出すのだが、

「ひょえっ！！」

という間抜けな声を上げて身を捩ってかわされる。

縮地でもって背後に回り、バックブロー気味な裏拳で追撃するが、

「うっひょうっ！？」

と、又も奇声を上げつつ身を屈めて回避する。

相手は被りものをしており、その懐の隙は無自覚なほどに大きくなっている筈。

よって完全回避は不可能な筈なのだが、どういうわけかそのでっかい頭が本当に己の頭部であるかのように手で抱えてしゃがみ、見事に掠らせもしない。

無言無表情ではあるが感情の流れがゼロと言うわけではないのか、ピキリと血管を浮かべてそのしゃがんだ怪人物に対し全力の蹴りを放つ。

――そう、全力だ。

当たれば身体が上下真っ二つに分かれてもおかしくないほど。

が、

「ぎょへーっ!?」

結果は同じ。

地面を両の手で叩き、その勢いで思い切り横に飛んでかわしていた。

四肢を伸ばした這いつくばった格好で横っ飛びする様はまるで蜘蛛の様。怪人さに拍車が掛かる。

その怪人物に対して放たれた蹴りの余波は凄まじく、彼が寸前までいた辺りの地面が裂け、その脚風はカマイタチのように飛び続けて更に前方の木を切断して尚も飛ぶ。

にもかかわらず、件の怪人物はその余波すら避け切っているではないか。

腕が霞むほどの速度で拳を食らわせても、のらりくらりとかわしにかわされ空しか掴めず、何故か見切られ続ける。

それは恰も蜃気楼と闘っているかのように。

「……屈辱だよ。

何だか僕の常識と能力を全否定されているみたいだ……」

何やら本気で殺意を覚えてしまいそうになった彼であるが、それでも人目を気にして体術のみで怪人物を追い詰める事に集中していた。

――すっかり場の空気を自分のペースに巻き込んでいる男。

赤い服と黒い防具、首から上はドーナツのような鬣の何か愛嬌があり過ぎるライオンのその怪人物が竹輪を咥えて少年と戦い続けている。

更にお約束を守っての事なのだろうか、そのユーモラスなライオンのかぶり物の目は涙目になっていた。

一体、どんな世界だと問いたい。

それでも（闘っている少年以外は）今一つ憎めないそのライオン剣士の雰囲気がウケているのか、何だかカワイイ目をした白鹿まで

が応援している（と思われる）ので、周囲から飛んでくる歓声も大きい。

ひょっとすると新たなるマスコットキャラと思われているのかもしれない。

角の生えた童子という謎キャラだっているし、髷をつけた猫や、兜被った猫だっているのだ。ドーナツ鬣のライオン剣士がいてもそうおかしくないだろう。多分。

その姿、称するなら“懐傑　〇ン・デ・ラ〇オン丸”。（注：“快”傑ではない）

それがシリアスな空気をぶっ壊してくださった珍入者の名前であった。

謎のライオン剣士こと、横島忠夫とてその闘い方は以前のままではない。

活躍の覚えは全然無いのだが、それでも“していた”という記憶は残っているのだ。

元々ＧＳの仕事についた理由は人様に自慢できるものではなかったし、無様だの見苦しいだのと“元”雇い主に罵られまくっていた彼であったが、それでも如何なる状況からも生還し続けている。

蝶のよーに舞い！　ゴキブリのよーに逃げ……ると見せ掛けて蜂のように刺し！　そしてゴキブリのよーに逃げる！！

これが十代の頃の彼の基本戦闘スタイルだった。

だがしかし、記憶はなくとも彼も十年間もＧＳ家業を続けてきたプロである。

成長していなければ嘘だろう。

すなわち――

「ハエのように舞い！」

少年が『捉えた』と確信して繰り出す拳も、ハエタタキの一閃からするりと逃げ出し、悔しがる主婦をあざ笑うハエの如くかわし、

「風のように撤退し！」

何とゆーか……何も逃げ足だけを妙に清々しくせずともよいものを、本当に風の如く様々な障害を駆け抜けてゆく。

「く……」

“哀れにも”そんなノリに引き摺られ、少年はウッカリと後を追

ってしまう。

横島のマントの端がギリギリ見え、商人通りの角を左に曲がったのを確認した少年はそのまま急加速してその角を曲がり、

「スズメバチのよーに刺ーすっ！！」

スパーン！！

何故か背後から金砂地……もとい、金しゃもじの一撃を喰らった。ちゃんと左に曲がったのを目にしたとゆーのに、一体どんなイリュージョンなのだろうか。

「そしてドブネズミのよーに逃げーるっ！！」

少年が頭を抱えた隙に又も遁走を開始。

商家の隙間隙間を正しくドブネズミのようにチョロチョロと走り抜けていった。

……ぶっちゃけ、害虫（獣）レベルが上がっているだけと言う説もあったりなかったり……

「……」

こちらの攻撃は掠りもしないのに、隙を狙う等の事をまったく考慮せず、何の前触れも無く出される向こうの攻撃はこちらの障壁を無視してダメージだけ突き抜けてくる。

理解不能な現象が続き、流石の彼もいやな汗が浮かんでいた。

『彼の存在は厄介過ぎる……

今後の為にも今の内に処理しておこう……』

取って付けたよーな理由に聞こえなくもないが、“現状の”彼なりに本気でかかる事に決めたようだ。

今までには余り感じられなかった剣呑な空気を漂わせ、

ドン……ッ！！

と地面を陥没させつつ地を蹴った。

隙間を塞ぐ障害物などを完全に無視して吹き飛ばしながら、その怪人横島の背を追う。

しかし逃げる者は横島忠夫。韋駄天の拠り代になった事もある人外の逃げ足を持つ男だ。

如何に少年が直線で加速しようと、何の前触れも無く方向転換しては加速を繰り返して中々追いつけない。

そして時折、チラリと振り返っては鼻先で笑うのだ（そう確信できる雰囲気を放っている）。

その証拠に、ある程度以上の距離が空けば、『おしーりフーリフーリ　もんがもんがー♪』とか、腰を振っておもっきり馬鹿にした踊りをぶちかましてくれるではないか。

少年の頭にバッテンが見え、握られた拳に力が篭る。

どーやら本気と書いてマジと読むくらい怒っていらっしゃられるご様子。

仕事の件はどうなった？　という話もあるが、どういう訳だかこの少年は横島をひっ捕えてそれなりのお仕置きをする事に集中しきっていた。

……まぁ、冷静な魔族すらペースを崩せるのが横島の真骨頂。

現に天界での有名指名手配犯も、冷静さを保てず敗退しているのだ。それに乗ってしまったとて彼を責められまい。

既に木乃香達から突拍子もない距離を空けられていたとしても――だ。

“相手が悪かった”のだから。

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊

先程とは逆に、刹那は息を乱して木乃香と共に駆けていた。
幾ら“珍”入者がいたとは言え、闘いをおっぽりだして遁走するというのは彼女の流派の教えに反する行為である。
だが、あの珍妙な怪（懐？）剣士が何者かは不明であったが、銀髪の少年と戦いを始める直前、

『刹那ちゃんは木乃香ちゃん連れて逃げるんだ。
その娘を守りたいんだろ？　ほら、早く！！』

と自分らに小さな声をかけてくれていた。
その言葉が彼女の背中を押したのである。
だから彼女は半ば弾かれるようにそれに従い、あの少年の相手を

任せて逃げていたのだ。

「な、なぁ……せっちゃん、大丈夫なん？」

「……平気です」

そう気遣ってくれる木乃香の思いやりが心に痛い。

気力が尽きていないのでもう闘えないという訳ではないが、流石に本調子とはいかない。

それよりもあのふざけたライオン剣士の介入が無ければ木乃香を攫われてしまったであろう事の方が辛い。

自分は又も無力だった。

あの時、敵の接近に気付けずに不覚を取り、かなり重い一撃を喰らってしまった。

いや、攻撃を喰らう事は別にどうだっていい。自分は剣士なのだからダメージを恐れては何もできはしないのだから。

そんな事よりも、木乃香に危害が及びかかった事、そしてその木乃香自身を人質に取られた事。その事がヒビが入っているであろうアバラより、心の方に強く鈍い痛みを与え続けているのだ。

ズキズキと、ジクジクと、心の奥の方から湧いて出る鈍く深い痛み――

ずっと鍛え続けていた筈なのに、

“もう二度と”あんな想いをしたくなかったのに、またも指先を届かせるための距離は一歩も二歩も足らなかった。

その事がずっと刹那をなじり続けている。

しかしその力不足をこれ以上恥じ入る暇もないのだ。

考えてみればここは敵陣地のど真ん中といえる京都。

そこにいて気を抜いて良い事などあろうものか。

あの面白ライオン剣士が何者かは知らないが、彼が現れねば自分は手を拱くだけで、木乃香をよりによって自分の目の前でまんまと連れ攫われてしまったかもしれないのである。

『くそ……私は……私は……っっ』

ギリリ…と唇を噛み締め、先程切った口内を再度傷つける。

舌の上に広がって行く鉄錆の味が余計に苦く感じられ、刹那は走りながら瞼を強く閉じ、涙が滲んでくるのを何とか誤魔化していた。

「せっちゃん……」

そんな彼女を心底心配する木乃香の想いも気付けぬまま――

『あ、兄貴。見つけたぜ』

「ホントだ。刹那さーん」

「え？」

そんな刹那は唐突に良く知っている人物の声をかけられ虚を突かれて驚き、慌てて声がした方に顔を向けた。

すると、そこには……

「大丈夫ですか？　刹那さん！！」

「え……ネギ先生！？　どうやってここに！？」

何とネギがカモを引き連れてここにやって来ていたのである。

――ただし、体長２０ｃｍ程で……

刹那がシネマ村内で必死に逃げ始めた頃、式神とのラインは切れてしまっていた。

その為、ちびせつなの存在を維持できなくなっており、戦いを終えたネギ達の目の前でちびせつなは紙へと戻ってしまったのだ。

当然のように刹那の無事を心配したネギは、ちびせつなに使用していた式符を再利用し、氣の跡を辿って来たと言う事らしい。

『は、初めての魔法体系なのにもうここまで使えるんですか……？』

この地に来て初めて触れる術であったのに、ネギは式返しに近い事を行って分け身を作って刹那の元に向わせているのだ。

その技量には感心する前に呆れが出てしまう。

「え～？　何々？　ネギ君来とるん？」

「え？　あ、いや、その……」

ここまできて魔法の秘匿もあったもんじゃない気もしないでもないが、それでも木乃香に対して培ってしまっている反応で、ついウッカリとカモとネギを懐にしまってしまう。

「わっ、ぷ……」

『おほっ♪』

何だかカモがイイ感じな声を出したのが気にはなったが、それは後で絞れば良いだけの話。オコジョ汁なんぞ飲む気はしないけど。

『ひぃ――っ！』

虫が知らせたのだろうカモの悲鳴は兎も角だ。

しかし、ここにきて裏を知る人員が増えた事だけは重畳だった。

確かに“このネギ”は彼が見様見真似で作った簡易式であるので自身の術は使えないだろう。

しかし、魔法は使えずとも逃げる事だけはできるはず。

それさえできればまだマシだ。

「あ、お嬢様。あんなところに“もすまん”が」

「え?!　どこどこ!?」

ものごっつ不自然に空を指差す刹那であったが、純粋な木乃香はアッサリそれを信じて空を見る。

その隙に懐にしまったちびネギを取り出し（カモは叩きつけて踏みつけた）、

「キャー・ヤ!」

印を切って呪を唱えた。

すると、

ボンッ!!

「わぁっ　大きくなった!!
……って、何で忍者の衣装を?!」

一瞬でお人形サイズだったちびネギは、等身大ネギへと変わり、ついでに白い忍者装束を身に纏っていた。

「ひゃあっ!?　ネギ君いつの間に来たん!?」

物音に気付いて空から振り返れば直側に変装したネギの姿。
そりゃあ木乃香でなくとも驚くだろう。

「え?　ええ～～と……その、ニンポーで……」

「そーなん!?　ふわぁ……ネギ君スゴイなぁー」

誤魔化し方も誤魔化し方だが、信じる方も信じる方だ。
素直と言って良いやら、単純と言えばよいやら……刹那は後頭部にでっかい汗をかいてしまう。

だが、何時までもここにボ～っと立っている訳にはいかない。
何せ今は二ヶ所で戦いが起こっているのだから。

「すみません、ネギ先生!
お嬢様を頼みます!!」

「え?」

唐突にお願いされてもネギは訳がわからない。

状況を聞きにきたというのに、イキナリ木乃香を任せられたらそりゃあ『え？　え？』等とわたわたするだけであろう。

仕方なく刹那はそのネギの耳元に顔を寄せ、

『敵の襲撃を受けました。
一人はこの間の女剣士で、今は古が足止めをしてくれています。
そしてもう一人は……恐らくあの晩、水術を使って二人を逃がした術者だと思われます』

「え……？」

と、小声で状況を簡単に伝えた。

流石にネギ（分け身）も面食らったが、自分だってあのコタローとかいう少年の襲撃を受けているのだからそう不思議ではない。
直に表情を戻して再確認をする。

『クーフェさんが闘ってるって……大丈夫なんですか？！
それにその術者は……』

『人目が多いのと、古自身が一般人ながら相当な使い手なので早々簡単にはやられたりはしないと思います。
アーティファクトと思われるものを持っていましたし……』

その言葉に又も驚くネギ。

流石に自分のクラスに、明日菜と茶々丸以外の従者がいるとは思いも付かなかったのだろう。まぁ、ホントはもうちょっといるのだが……

それでもその件については保留とし、もう一人の術者について問いただす。

『そ、それで、水系の魔法を使う術者は……』

『そちらの方は……恐らくではありますが、古の師に当たると思われる人物が対応してくれています』

『は……？　クーフェさんの……師匠ですか？』

はぁ……と自信なさげに頷いてみせる刹那。

余りに珍妙な格好で登場した為、今一つ信用しきれていないのだろう。

それに、何とゆーか……あの晩に現れた変態と同じ雰囲気を持っていたよーな気がしないでもなかったのだ。

しかし、

――まさかな……仮にも古の師匠に当たる人物があんな変態では……

それに木乃香と自分らを傷つけている少年に激怒して力を発したのだ。

“あんな変態”と一緒にしたら失礼だろう。

と、刹那はそう自分を諫めていた。

無論、彼女の“女の勘”は何一つ間違っていなかったりするのだが……

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊

「むぅ～……しつこい人は嫌われますえー？」

「ヒトの事言えないアルよ？」

強力な防具があるとは言え、攻撃の鋭さは向こうが上だった。

それは古の強がりからも理解できる。
表情には出していないが、結構彼女の身体が軋んでいるのだ。

実のところ古は見た目は兎も角、実際にはかなりいいのをもらっている。

彼女が着用しているチャイナ服が魔具の一部らしく見た目以上にとんでもなく丈夫で、そのお陰か、ぱっと見がそう大した被害が無いように見えているだけなのだ。

「え～いっ」

相変わらず緊張感の“き”の字もない声であるが、剣波の鋭さは本物。

「……シッ…！！」

左右の偏差を殆ど感じられない二刀の攻撃に合わせて得物を打ち当ててその刃の威力を逃がすのか、背後に飛んでかわすのが精一杯。

古自身も様々な武術を無節操に習ってその身を鍛え上げていて動きに無駄は全くない。
だが、相手は更に無駄が少ない上、振りの速度と伝わってくる衝撃が尋常ではないのだから嫌になる。

「とーっ」

矢よりも早い突きが来るのを鉄扇で外側に弾く。
そのまま踏み込んで肘を入れるところだが、弾かれた勢いを全く殺さず、そのまま身体を旋回させて小太刀が迫る。

無論、古とてそんなものを黙って喰らってやるつもりはなく、その動きに合わせて月詠の背後に回り、肩甲骨の上から浸透剄を叩き込もうとする。

が、月詠も然る者。そのまま前転し、その勢いでもって踵を跳ね上げて古の顎を狙ってきた。

一瞬の躊躇もなく古は身体を反らせつつ背後に飛んだが、その僅か一瞬後に空間を刃が薙いだ。
何と月詠、空中で身を捩って横薙ぎに古の脚を狙ってきたのである。

その攻撃の隙の無さに嫌な汗を感じた古であったが、当の月詠はというと、

「あう〜……」

ごろごろごろ……ごんっ！

その無理な体勢からの攻撃がたたったのか、思いっきり転がって壁に激突していた。

『あ痛たた……』と涙目で頭を抑える月詠のリアクションに周囲の見物人からも笑いが漏れたが、古にはそんな余裕は無い。

というのも、今の行動によって間合いを思い切り空けられてしまったからだ。

更にかなり物騒な剣劇であったにもかかわらず、今のコミカルな動きでそれすらも誤魔化されてしまっているではないか。

一連の行動が狙ったものかどうかは知らないが、無意識にできてしまっているのならそれは更に脅威である。

それは彼女が“そこまで”できてしまうほど、闘いの日々にいるという事なのだから。

それに――

『今までの攻撃の全ては命を刈り取りにきたモノでないアルね……』

筋や腱を狙ってきたもの。

つまり、無力化を狙ったものである。

ここまで時間を稼ぐ事以上の足掻きを出せないというのに、向こ

うには手加減をする余裕があるという事なのだ。

それもまた、アマチュアとプロの差を再認識させられる一つだった。

「あ～っ　やっと来てくれはりましたかぁー♪」

「え……あっ！？」

ややむくれたような顔をしていた月詠であったが、唐突に笑顔になって古の背後に意識を向ける。

迂闊にもそれに釣られて振り返ってしまった古であったが、幸い月詠のセリフは引っ掛け等ではなく本当に彼女の“獲物”がやって来ていたのだ。

「せ、刹那？！　コノカは……」

それでも隙無く地を蹴って後に飛び、駆けて来た刹那の横に着地する。

言うまでも無く月詠の追撃を警戒しての行動であったが、当の彼女は剣を握った手をだらりと下げ、二人のやり取りを見守るかのように動いていない。

その余裕に古もお面の下で眉を顰めていたが、それは刹那も同様だった。

自分が古を心配して戻ってくる事が解っていたようだったからだ。

そんな憤りを溜め息のように長く息を吐いて無理に鎮めさせ、それでも月詠から眼を離さず、今まで時間を稼いでくれた友人に簡単に次第を伝える。

「お嬢様は無事だ。
古が言っていた“老師”と思われる人物が助けてくれたからな……」

「老師が！？」

実力の差、世界の差を思い知らされてやや沈んでいた古であったが、彼の事を耳にするとそれだけで気が上向きになった。

「あ、ああ……かぶりものをしていたのでハッキリとは断言できないが……
何と言うか……強いのか弱いのか評価が凄まじく難しい人だった……」

「あはは……やぱりそー思うアルか」

散々な評価であるが、それを聞いた古は笑顔を深められている。

彼女が老師と呼んでいる青年は、言うなれば『素人を突き抜けた素人』だ。

素人が素人のまま強く成長し、人外と言っても良いほど突拍子も無いレベルにまで高められている。

彼の登場を聞き、彼女は“その事”を思い出して余裕を取り戻したのだ。

現金と言われればそれまでであるが、彼という存在は古にとって目標の方向の一つである。

何せ彼は自分や楓のように幼い頃から鍛練を積んで来た訳でもないのに、自分ら培った武術の全てを叩き込んでもスルリスルリとかわし続け、ハリセンの一撃で返礼してくれる別方向に発展している達人なのだ。

プロとは完全に別のベクトルでも、突き詰めれば達人となる。

彼と言う存在はそれの生きた見本なのだ。

――自分には自分の行くべき道、行ける道があると言う事を思い出せたのである。

「なら大丈夫アルね。
老師は私と楓が本気になて二人がかりで攻撃しても掠らせもできないヨ」

たったそれだけの事で完全に気を取り戻した古は、お面の下でニッコリと微笑んでそう言った。

逆に刹那の方が、そんなトンデモ話を聞いて動揺していたくらいである。

「へぇ～……そんな方がいらっしゃるんですかー……ちょっと会うてみたいですわー」

そんな会話だから反応したのだろう、月詠が興味深そうにそう呟いた。

戦闘狂には付き合いきれない…といった風な刹那は兎も角、何だか古の方がその言葉に敏感に反応していたりする。

「まぁ、会ても無駄アルよ。
お前なんか何が何だか解らない内にひくり返されてくすぐられて悶絶して果てるアル」

老師だたらそーするネ。と、ビミョーに理解してるんだか誤解し

てるんだか判定し辛い言葉を、確信と自信を持って答える古。
彼が聞いたら『何故解った!?』か『人聞きの悪いっ!!』のどちらかだろう。どちらを答えるか興味深いが。

しかし、何気なくそう答えた古であるが、お面の隙間から覗いている額には血管が浮かんでたりする。

「ははぁ……ますます会いとうなってきましたわぁ～……
ウチ、強いお人が好みなんどすえ――――♪」

強い者と会い、闘いたいという気は解らぬでも無いし、古や楓だってそうである。

が、この目の前の女は『闘い』というよりは、“死合”したいというタイプの壊れた人間だ。
こんな輩と彼を合わせてはいけない。それに何だか美少女だし。

いや、それより何より……恋する乙女のような顔をして強者への想いを高めている顔は……何だか気に喰わない。

つーか、どの口借りて好みだとヌカすかあのアマは。

「……刹那。
とっととアレを始ま…もとい、片付けて老師と合流するアルよ……」

「……え？　あ、ああ、そう……だな」

お面を被ったままなのでハッキリとは言えないが、古の眼が据わっているよーな気がしないでもない。

始末と言いかけたよーな気がしないでもないし、片付けるという表現も古にしては激し過ぎる。

確かにさっきまでのどこか悩みを含んでいた雰囲気は頂けなかった。

それが払拭されたのは喜ばしいが、みょーに黒くなってしまったのは如何なものか？

尤も、逆に月詠の方はその変貌が嬉しそうであったが。

少しづつ状況が打開されてゆくとゆーのに、何だか気疲れは増して行く。

アバラの痛みも相俟って、疲労がピークを迎えつつあった。

それでも、

「……ま、まぁいい。確かにお前をさっさと片付けるに越した事は無いからな」

確かにこの障害を突破すれば光明はある。

だから気持ちを切り替えて愛刀“夕凪”の剣先を月詠に向ける事ができた。

尤も、余裕が無いという事は本気でかかるという事で、その剣と瞳に真剣の意が篭るという事。

それは月詠から言えば願ったり叶ったりという事で……

「あはは……本気で殺り合えるんどすなー……楽しそうやわあ――」

だからこそ月詠は涼風のような笑顔を浮かべ、歪んだ悦びを満面に表していた。

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊

「……やっと追い詰めたよ」

シネマ村の西門。

見た目は武家屋敷の門前のようであるが、実際には西出入りゲートである。

ただ、その門は蟄居閉門を表すように十字に竹が組まれて封印されていた。

それは西の刺客らの仕業であるか、単に施設の管理上で封鎖しているだけかは知らないが、確かにポ○・デ・ライ○ン丸は追い詰められた形となっている。

後頭部をしばき、

金ダライを落し、

水溶きマスタードを浴びせ、

いつの間に掘られたのか落とし穴（油入り）に落とし、

適度に中身を抜いた一斗缶をぶつけ、

大八車の轢殺アタックで跳ね飛ばし、

考えられる限りのセコ過ぎ&イタイ方法でおちょくりまわって走り回っていた彼であったが、遂にこの場に追い詰められたのだった。

少年も感慨深かった事であろう。内容が余りにナニであるが。

「……君が何者か知らないけど、そろそろこのくだらない鬼ごっこを終わらせてもらうよ」

この場所のつくりは、城の入り口を模しているので左右には壁があって、逃げ場が無い。

障害物を駆使して遮蔽防御を続けてきた彼もここではその力を振るい切れまい。

更にこの場には人目が少ないのだ。

だから少年もかなり思い切った方法を取る事ができる。

左手を口元に添えて呪を紡ぎつつ、右手を広げてゆっくりと進んで行く。

それは呪を唱えつつも如何なる行動をとろうと迎撃をできるようにしているのだろう。

流石の面白仮面も手の打ち様が無い。

何かに安堵したような目をして（いる気がする）、どこかを見つめていた。

「……ん？」

しかし少年はハタと気付く。

自分が迫りつつあるというのに、その態度。

いや、例え自分が倒されても何かしらの手段が用意されている余裕すら感じられるではないか。

そしてその視線が向いているであろう方角は――

「……表門？」

正面入場口がある方向だった。

「うん。時間稼ぎも飽きたし、そろそろ終わりにするかな」

「く……っ！？」

くるりとこちらを向いたエセ〇イオン丸。肩を竦ませる仕種までして何だか物凄く余裕を見せている。

という事はやはり、ターゲットらから自分を引き離し、彼女らを正面ゲートから逃走させた可能性が高い。

考えてみれば使い魔らしきあの大鹿が側にいないではないか。

これは使い魔は別の場所に先に移動している事を示しているのでは？

となると……

「君を侮り過ぎたようだね……」

万事か万事。あの人を小ばかにしたような衣装すら侮らせる策の一つ――

その底知れに恐ろしさに彼は怖気が立ったが、それでもこのままやられっぱなしでいるわけには行かない。

何より、

「だけど直に片付けて追えば十分まだ間に合う」

……のだから。

そう思い直し、今度こそはと無詠唱手前と言ってもよいだろう速度で呪文を唱え、事を終わらせようとする。

「そんな夢が叶うといいな」

しかし相手が悪い。

底知れない底の底が抜けている人間なのだ。

勝手に言葉に引っかかって深読みをした時点で向こうの負けなのだから。

それを確信してニヤリと笑った（気がする）エセライ○ン丸は、両手を左右に突き出した。

「！」

あっと思った瞬には、その手先から何かが放たれている。

無論、障壁はあるが先程から続く攻撃はその障壁をあっさりと突き抜けてきていた。

かといって回避すれば絶大な隙が生まれるし、その回避した間を縫ってこの場を突破されかねない。
今さっきまでそれらを行われていたのだ。向こうだってそれを期待しているに違いない。
となると、そのまま受けるのが得策だと考え、肉を切らせて…の策をとった。
“自分の身”を知るからこそとれる手段であるが……
この場合、その方法は間違いだ。
パァアンッ！！
「！？」
修学旅行中二度目の使用、サイキックソーサー猫だましである。
以前、彼が述べていたように、投げ付けた二つのサイキックソーサーを打ち合わせるという離れ技であるが、もともとの命中率が低いので失敗すれば単に相手に大怪我を負わせるだけになってしまうというリスクの高い大技だった。
しかし横島は相手がただの人間ではない事をとっくに感知しているので、失敗しても気にならないから大丈夫だ。それに相手は美形だし。

その技は単なる閃光手榴弾等とは違い、その閃光と衝撃は霊的な波動だ。

普段ならもっと油断無く行動できたであろう少年であったが、恐るべき事に彼は今までのくだらないトラップに“慣れさせられて”おり、そのしょーもない妨害の一環だと勘違いさせられてしまったのである。

だから彼は、突然の霊的攻撃をまともに受けてしまったのだ。

『視界が戻らない!?　魔法の閃光!?』

ほんの僅かな躊躇――隙。

闘いの場でのコンマ数秒は永遠に近い空白の時だ。

「ハズレ。ちょーのーりょくだ」

その少年の驚愕は如何なものか。

○ン・デ・ライ○ン丸からしてもみれば何でもないセリフ。

単にそー考えているだろうと思っての“何時もの戯言”であるが、毎度毎度その読みは無駄に良いトコを突く。

少年からしてみれば心を読まれたのかと動揺してしまうのに十分な程。

更に彼は“真後ろ”からそんな声をかけられたのだから、冷静な

分析等できよう筈も無い。

「く……っ！！」

振り返るより先に、勘でもって裏拳を背後に叩き込む。

しかし拳先に何も伝わらない。空を切った。

だが、避けられるのは想定済み。

放った勢いを殺す事無く、後回し蹴りを放ちながら振り返る。

当然背後に彼は――

「いない！？」

「らいおん、ひこー斬りっ！！」

何と彼の声が頭上から響いてくるではないか。

しかし少年も然る者。慌てず上空防御に備えつつ背後に飛――

「……と見せかけて、振り子打法ぉっ！！」

すぱかーんっ！！

「か　。…っ！！？？」

何とその背後からおもいっっきり“金しゃもじ”でひっ叩かれてしまった。

フルスイングで喰らった後頭部への一撃。

自分から的になりに飛び込んだようなものだったし、何よりもさっきから程よく喰らっている謎の一撃だったので痛いなんてもんじゃない。

余りにもクリーンヒットだった所為で、“この身”で久しく感じていない激痛を全身に走らせられ、流石の少年もそのまま頭を抱えて蹲ってしまった。

「ふはははは……

あ～ばよっ！！　銭形のとっつぁ～んっ！！」

逃げる場面なのでお約束のセリフを言い忘れないのは流石だ。

しかし、そんな少年を笑い飛ばして遁走する様は正に外道。
遠巻きにして見守っていた観客の目も何だか冷たい。

その眼差しに後押しをされたのだろうか、その脚は人知を超えた凄まじさだったという。

「……やってくれたね……ここまで虚仮にされたのは初めてだよ……」

暫く蹲ってはいたが、それでもゆらりと立ち上がった少年。
その表情は相変わらず仮面のようであったが、凄まじい憤りが湧き上がっているであろう事が遠くから見守っていた観客にすら怖気だ立つほど伝わってくる。

直様追撃をせねばなるまいが、あの怪人の人知を超えた逃げ足に追いつくのは不可能だろう。

だが焦る事は無い。行き先は解っているのだから。

それでも先回りをして真正面から叩き潰すくらいの事はしてやらねばなるまい。
借りは返すものであるし、礼くらいはさせてもらっても罰は当たらないだろう。

きゅ…っと我知らず唇を噛み締め、彼が向ったであろう正面ゲー

トに移動しようと……

「……っ！？　転移できない！？」

――して、呪文が使えなくなっている事を知った。

いや、それだけではない。魔力を使用しての身体強化すら行えなくなっているのだ。

これでは加速して追撃する事も儘なら無い。

「く……っ！！」

何が何だか解らないが、それでも移動しない訳には行かない。

しかし、まださっきの閃光によって視力が完全には戻っていないのである。

状況からして、少年は完全に戦力外となっていた。

「魔力の一切が使用不能……
一体何を……」

凡その方位は解っていても移動することすら叶わなくなった少年は、珍しく混乱しつつライオン剣士の事で悩まされ続けていた。

だから――という訳でもないだろうが、少年は気付けずにいる。

その背中に『封』の文字が光っている珠が張り付いている事に……

「うん。引っ掛かってくれたみたいだな」

かぶり物の下で、横島はほくそえんでいた。

闘っている最中に力を込めて行く。それはとても至難の業である。

言うまでも無く相手が手練であればある程その難易度は上がって行く。

ゲーム等とは違い、実際の戦闘では溜め時間そのものが必死の隙となるのだから。

だが、横島の奥の手である“珠”にはみょーな特性があった。

その“珠”はイメージが強ければ強いほどその能力を上げる事ができる。

元々が人外の回避能力を持っている彼は、本気になればあのくらいの攻撃速度なら“非常識にも”ちゃんと対応する事が出来るのだ。

その上で少年の攻撃を避けながら、そしてその凄まじい攻撃を与えられながら、『こんな攻撃をしている奴でもあのオカンなら…』とか、『あんなの喰らったら死ぬかも!?　……でもオカンのゲンコを喰らう事に比べたら……』等とイメージを固め続けられていたのである。

何せその女傑、霊的な物に対してド素人であるくせに自分の雇い主と気合“だけ”でわたり合え、その余波で空港が崩壊しかかったとゆーのに、本人はまだ余裕があったっポイというバケモンだ。

一生を通じて勝てるとは思えない存在の“一柱”なのである。

そんな生涯を通じて越えられない壁認定をしたオカン…もとい、母親の強過ぎるイメージ。“これよか痛い”だの、“これよかスゴイ”とかのイメージが込められた“珠”、

『母』『撃』

イメージさえ調っていれば『雨』をも降らせ、コンクリートすらスポンジの様に『柔』らかく変貌させる珠の力でもって放たれたそ

の不条理極まりない攻撃は、見事に横島の予想通り……いや、それ以上の効果を発揮していた。

尤も、その破天荒なイメージ攻撃故に、珠を二つを使っても数発しかかませなかったし、“それ”を行った横島の方も、あの少年が痛みで蹲ったのを目の当たりにし、やっぱりオカンは修羅かなんかの転生体だったんや……等と己の母親の強さ再確認させられ、トラウマを深めさせられて（何故かかぶり物ごと）顔に縦線を浮かべて青くしてたりなんかする。

それはさておき――

彼は相手が子供的な容姿をしてはいたが、許せぬ外見（美形）をしていた事もあって、おもっきりおちょくりまくり、イヤと言うほどからかいまくってはいたが、それだけに止めていた。

というのも、あのまま倒す事もできなくは無かったが、流石に人前でのスプラッタは勘弁してほしかったのだ。

いや、普段の横島ならそこまで物騒な事など考えたりはすまい。しかし、あの少年には何というか……人間のオーラを感じられなかったのだ。

かと言って魔族のそれとも違う気がするし……

元々勘と目が尋常ではない横島は、あの少年を倒し切るには相当な事をせねばなら無い事をかなり初めの方で気付いたのである。

流石にこの施設内でそれを行えばあまりに目立ちすぎるし、霊波

刀でズンバラリンは大騒ぎになるだろう。

だから木乃香らを逃がし、距離を取らせてから無力化したのである。

そして、その横島はどこに向っているのかというと、これがまた真っ直ぐに正面ゲートに向って――いる訳が無い。

というより、彼が正面ゲートに行く意味が全く無いのだ。

彼の口を借りて言うのなら、

「あれ？　本気にした？」

――であろう。

ぶっちゃけ、少年を前にして洩らした情報は嘘八百である。

珠を使って『封』をしたまでは良いが、あの珠は出力は上がっているのだが生成に集中しきれていない急造品。

そういう事もあってか、もって十五分くらいだろう。

だが、ああ言えば魔力を封じられた少年は回復しても真っ直ぐ正面ゲートに向う筈。

そうすればその間に木乃香らの気配を消すため『隠』れるなりし

て、コッソリ他の出口からオサラバすればいいのだ。

相変わらず、こすっからい事を仕掛ける能力にかけては目を見張れる男だった。

兎も角、後は木乃香らと合流するのみ。

自分の格好が格好だから説明が面倒ではあるが、差し迫った危機がある以上はそんな事を言ってられない。

ホテルに戻るなり、そこらで時間を潰すなりして子供教師が戻るのを待って……

と、次の手を考えながら何気なく首をめぐらせて“そこ”に目を向けた。

「え……？」

横島はそのまま立ち止まってしまう。

というのも、彼が見た方向にはシネマには奇妙な位置にひょっこりと建てられているお城があったのだ。

いや、城というだけなら硬直はすまい。

確かに町並みに混じって建てられているのは変としか言えないが、真面目な江戸の町並みではなくセットなので、橋の向こうの洋館と同じように奇妙な配置で撮影しやすいよう建設されているのだから。

そんな事ではない。

そんな平和的な意味合いではない。

問題は建物にあるのではなく、城にいる人物にあったのだ。

「……な、何やってんだアイツっ！！？？」

その城の天守閣。

屋根の上に、横島が良く知る二人が、

忍者姿のネギと、お姫様衣装の木乃香が、巨大な鬼の式神を従えた女性に追い詰められていたのである。

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊

「お嬢様っ！？」

「このか！？

と……ネギ坊主！？！？」

この場合、敵は兎も角として誰が悪いと言うわけでもない。

あの少年はライオン剣士が引き受けてくれたし、

木乃香に危険が及ばないよう、刹那がネギ（の分け身）に彼女を託して月詠と古が闘っているところに戻ってきたのも、古が心配だった事とここで月詠を倒せば後々の禍根が断てると判断したからだ。

そして、不運が重なってしまった。

月詠と少年が戻らなくなった事、そして鳥居の中に見張りを命じていたもう一人と連絡が取れなくなった千草は、状況を知ろうと式神を放って哨戒させていたのである。

すると目に付いたのは木乃香を連れ立って駆けているネギの姿。

護衛役である刹那の姿はなく、あの子供先生は鳥居の中に封じて

いる筈なのでおそらくは実体ではない。

何たるチャンスであろうか？

仲間の事は横において、こんなチャンスを見す見す逃すような彼女ではなかった。

何せネギは実体では無いの分け身なので闘う事はおろか、満足な対応すらできない役立たずである。

例え相手が弱っちい式であったも、通せんぼされただけで逃げる事しかできないのだ。

となれば、式に命じてゆっくりと自分のいる場に誘い込めば良いだけである。

そしてネギと木乃香は、まんまと城の中へと追い込まれてしまったのだ。

「くっっ！！　そこをどけっ！！」

慌てて駆けつけようとするがその前に月詠が立つ。

彼女の仕事は刹那の足止めであるし、ここでそれを行おうとすればするほど刹那は焦って必殺の一撃でもって仕留めようとする。そ

うなると願ったり叶ったりなのだ。

「いやどす～～♪
ここを通りたければウチを倒してくださ――い♪」

「おのれ……っっ！！」

軋むように痛む肋骨もそうであるが、この目の前の女の剣には得体の知れない鋭さがあり、刹那は思い通りに身体を動かし切れていない。

それだけでも厄介だというのに、刹那の剣は素直すぎるほど真っ直ぐで、尚且つ退魔の剣の道を突き進んでいた為に対人剣術はそんなに突き詰められていないのだ。

対して月詠の方は、対剣士用としか思えない程に剣の腕が突き出ていた。

これは月詠の剣が人間を相手に研ぎ澄まされている事を示している。

任務の為とはいえ、木乃香の護衛の為に人との接触を極端に減らしていた彼女は、当然の様に数えられるほどの人間にしか剣を師事してもらっていない。

無論、数人ではあるが達人と言い切れる程のレベルであるから、師匠としては必要充分条件を満たしている。

しかし、やはり実戦経験の勝るものは無いのだ。

「逃がしませんえー」

剣を十字に構え、影のように地に身を伏せて刹那と古の間を割る。

「な……っ！？」

「早っ！？」

身を起こしつつ、長刀の方で古を切り上げ、
左手で逆手に握っていた小刀でもって、身を捻るかのように刹那に対して掬い斬りが迫る。

「シ…ッ！！」

「ぬっ！！」

古は長刀を弾き、刹那は身を捩ってかわす。

だが月詠の動きは舞の様に止まらない。古に弾かれた勢いでもって長刀で刹那の方を薙ぎ、円を描いた小刀は古の脇を狙う。

「あっはー♪」

刹那は野太刀に身を沈めて薙いで来る刃を凌ぎ、古は背後に飛んでこれをかわした。
だがその直後に脚を開脚してでの脚払いが来る。

古は次の攻撃も予想していたので半歩下がって回避するが、刹那は半身を引いてかわす。

アバラにヒビが入っている分、踏ん張りが利かないので完全にかわし切れはすまい。そう見て取った刹那の防御であったが、初撃に喰らったのが意外に衝撃が大きく、ミシリミシリと骨が鈍く軋んでいる。

月詠には刹那へのその手応えと彼女の表情も嬉しいのかもしれない。妙に楽しげな声を漏らしていた。

「刹那！」

「た、大した事は無い……」

本調子とは行かないが、それを口実に戦いを避けてもらえる相手ではない。
となると、足が遅くなっている分、突破するしか手が残っていないのだ。

ふー……

刹那は深く静かに息を掃き、体息を無理に整えて剣を構える。

木乃香の危機に悠長な事をしていられない。

破れかぶれに近いが、心に余裕の無い今の彼女には氣を込めて最速の一撃で突破するしか手が思いつかないのだ。

例えこの腕の一，二本を失おうとも――

相打ち覚悟アルか……

古はそんな刹那の表情を見、彼女が捨て身で向おうとしている事を理解していた。

しかし、それでは何にもならない事もまた理解している。

ここで勝つ事は出来ても、結果的にそれは刹那は元より、木乃香の心にも深く思い影を落す事に他ならないからだ。

やはり彼女は本調子では無いらしいし、自分の腕はまだ一歩も二歩も眼前の敵に届いていない。

かとといって愚図愚図してたら木乃香も危ない。

となると自分にできる事は……

「刹那……」

「……何だ？」

案の定、刹那の声が痛々しい。

古は唇を噛んで句を告げた。

「私が先に行くアル。
絶対……アイツを突破するアルよ？」

「え……？」

刹那が問い返すより早く、古が地を蹴って距離を詰めていった。

だがやはり月詠はそれを読んでいたのだろう、二刀で持って左右斜め上から古めがけて刃を振り落とす。

「哈ぁッッ！！」

気合っ！

腹下から練り上げた氣を克ち上げ、覚えたての霊気を含ませて、左右に持った宴の可盃にぶち流して迫る刃を撥ね上げた。

しかし月詠はその程度の行為は読んでいる。

跳ね上げられはしても慌てる事無く身を沈め、がら空きとなった古の腹部を二刀で狙った。

「まだネっ！！！」

瞬間、

左右の鉄扇が音を立てて大きく開き、ほんの一瞬だけとはいえ月詠の視界を完全に奪う。

そしてその一瞬という“長時間”だけで充分だった。

得物はトンファーなのでグリップを捻れば旋回する。

その勢いでもって左右から迫る刃を内から外側に鉄扇の縁で弾き、今度で逆に月詠の前面をがら空きにした。

パアンッ！！

「あう…っ？！」

あっと思った瞬間、月詠の額が音を立てた。

刃を弾いたと同時に古が身を捻って腰のリボンを引き抜いて月詠の額をそのリボンで叩上げたのである。

『布槍術!?』

と、月詠が気付いた時には、

「てぇえええっっ!!」

「はう…っ」

風のように距離を詰めた刹那に充分以上の氣を乗せた一撃を腹部に喰らい、月詠の意識は刈り取られていた。

おお～～……っ

何も知らない一般客から歓声が飛んだ。

凄まじ過ぎる技の応酬が、真の戦いである事など知る訳も無いし、何より凄まじ過ぎるが故に現実性に欠けるのだから仕方が無い。

刹那は、荒く息を乱している古にやや硬い笑みを向けて健闘を称え、古もそれを受けてニッコリと微笑んだ。

間で言えば僅か一呼吸にも満たない攻防。

つい最近“裏”を知ったばかりの彼女が、ここまで裏の者と戦えたのだから。

慢心は頂けないが、今のには自信は持って良いだろう。

古も、一般人の枠内で一矢報いることができた事が何よりも嬉しかったようだ。

しかし――

「お嬢様!!」

「刹那!!　待つアル!!」

折れかけた肋骨の痛みも忘れて駆け出す刹那。

そしてそれを追って駆ける古。

そう――

木乃香に危機が迫っている以上、状況は改善されていないのだから……

中編　一肆一

「全くヒドイ目に遭いましたわ！」

「いんちょー潰されてたしねー」

自前の髪に花魁の衣装。そしてその着物も何だか着乱れており、ちょっとエッチい。

しかしエセ具合が炸裂しているとゆーのに、何だか不思議と似合っているあやかであるが、不機嫌さを隠そうともせずぽっくりでズカズカ歩いていた。

厚底の履物を常に履いている訳ではないというのに器用な事である。

そんな彼女の様子に苦笑しつつも、黒い着流しの浪人姿をしている和美は背中に冷や汗を掻いていた。

何だかよく解らないが、妙にいやな雰囲気をもっている少女が札をばら撒いたと同時に、小さなぬいぐるみのようなものが辺りに溢れ、彼女らに襲い掛かってきたのである。

襲い掛かってきた……とは言っても、暴力的な行為は殆ど……あやかは巨大な招き猫に潰されたが……起こしていない。

していた事といえばスカートめくりならぬ着物めくり等の痴漢的

行為だけだ（いや、それでもそーとー嫌だったろうが）。

気絶したあやかの仇うちだーっと、皆にしがみ付くそれを引き剥がし、引っ叩いて追い散らし、何とか撃退はできたのであるが、気が付くとあの妙な少女と刹那と木乃香はいなくなっていた。

裏の事情を知らないハルナ達は兎も角、ある程度の情報を得ていた和美はお陰で説明に苦労する事となってしまった。まぁ、借りにしたので返してはもらうが。

ネギや刹那、そしてカモから聞いた話によれば、この修学旅行中の事件は全て西の組織の刺客が起こしたものであるらしい。

魔法の世界…この日本での魔法の世界には、西と東の派閥があって、特に西の協会は東の協会の事を良く思っていないとの事。

何所の世界でも同じなんだねぇ……と和美は苦く笑ったものであるが、彼女はちょっかいのかけ方が妙に気になっていた。

ネギ先生を本山に行かせないようにしている。まぁ、それは良い。相手が子供なのだから脅かして逃げ帰らせようとしたと思えなくも無いし。

だが、木乃香の誘拐騒動まで起こったとなると話は変わってくる。

刹那は詳しく言ってくれていないが、カモは少しだけ情報を明かしてくれていた。

彼によれば、学園長（何と東の魔法協会の理事）の孫である木乃香には力があり、西側の不埒な輩がそれを何かしらに利用しようとしているとの事。

そこまでならまだ解らぬでも無いのだが、その事件を起こしているのは同一人物らしい。そうなってくると首を捻る事となる。

西の協会は当初、京都・奈良への修学旅行に魔法先生（ネギ）が来る事に難色を示していたらしい。

だからやって来たネギに対して嫌がらせをした……と思えなくも無いが、それではハッキリ言って子供の理屈だ。

確かに大人の世界は、特に組織というものは鬱積したものが重なると異様なほど子供っぽくなるもの。行動原理がオコサマでも大騒ぎするほど変な事ではないのかもしれない。

しかし、木乃香の力を利用しようとしているという話が本当なら話がおかし過ぎる。

京都奈良に修学旅行に来る事が絶対ではないのに計画を進めるものなのか？

それにもしそうならネギが来る事に難色を示せば、更に旅行に来る可能性が下がってしまうではないか。

話を聞いただけなので何とも言えないが、妨害行動等もかみ合ってないし気がするし粗が多い。

そこから考えて見ると、首謀者と思われる人物のそばに、別の思惑を持った者がおり、その人物が首謀者を誘導している……という見方もできるのである。

いや、それは単に状況証拠だけであるし、何より和美の勘の話だ。

あてずっぽうの情報は時に事実をひん曲げる。

情報戦の恐ろしさを知る彼女であるからこそ、その事に気付いていた。

しかしそのわりに普段はパパラッチなんて厄介なコトしてるじゃないかという説も……

「あれはシュミ」

さいですか……

兎も角、じっとしているのも何であるし、ちび妖怪達にパンチラ（つーかモロパン）かまさられまくった所為で目立っていた彼女らは、とっととシネマ村を後にしようと刹那と木乃香の二人を探していたのである。

「それにしても見つかりませんね……何所へ行ったのでしょうか？」

「さぁねぇ……案外どこかにシケ込んでしっぽりと……」

衣装変えを行っていなかったお陰か、着物をはだけさせられる恥辱から免れていた夕映がキョロキョロしながらそう零すと、同じく私服のままのハルナがそんな事を言ってヲッサン宜しくウヒヒといやな笑いを漏らす。

何を馬鹿な事言ってるですかと言いかけるが、何だか完全否定する材料も無いので合えて口を噤む夕映。何だか毒されかかっている気がしないでもない。

「それにしても、ホントどこ行ったのかなぁ？」

「そうねぇ……
これがネギ先生ならあやかが直に見つけ出してくれるのに」

町娘姿の夏美の言葉を、一人洋装である千鶴がそう返した。

オホホと穏やかに微笑んでいる千鶴であるが、チビ妖怪（式）をドコに隠し持っていたのかフライパンでもって撲殺気味に撃退していたのは皆の記憶に新しい。

そんな彼女の戯言であるが、言われたあやかの方は、

「当然でしょう！？

ネギ先生がいらっしゃられるのでしたら、不肖この私雪広あやか、愛の力にて直様その気配を察知して見せまわ！！」

かなりマジにそう言い放った。

流石に大通りでのそのセリフだ。

うわっちゃ～……とここにいるクラスメートは引いており、ずっと遅れて後ろをザジと共に歩いていた千雨は、あの女の仲間だと思われない位置にいてよかったと安堵していたりする。

と……？

「むむ……！？　感じますわっ！！　ネギ先生の気配がします！！」

「は？」

「へ？　なんで先生がココにいんの？」

流石に唐突にそんな事言い出せば皆も正気を疑うというものだ。

遂に頭が……いや、前からか……等とかなり失礼な事をコソコソ言い合ってたりする。

しかしそんな陰口も何のその。

愛が極まった（らしい）あやかは、どーみても宇宙からのテレパ

シー攻撃を受けているかわいそーな人間のように身悶えしつつ、愛おしい少年の気配を必死に探っていた。

「ハっ！？　心の眼に反応ありましたわっ！！　ネギ先生は……」

ぷるぷると身体を震わせ、背後に薔薇の花を散らせつつ、あやかは奇妙なポーズをとってその指先でもって、

「あそこですわっ！！」

ビシィ！！と、そこを示した。

彼女の示されたのはシネマ村の中にある大きな建物。

撮影にも良く使用しているお城だ。

そして指し示したその天守閣には、悪魔のような人型を引き連れた女に追い詰められている少年忍者なネギと、お姫様衣装の木乃香の姿があった。

「「「ホントにいたぁ――――っ！！？？」」」

「いんちょ、スッゲーっ！！」

■十時間目：独立愚連隊ニシヘ（中）　―肆―

『く……なんて馬鹿なんだ……

刹那さんは僕を信じてこのかさんを頼んだのに』

十歳の少年ではあるが、イギリス紳士の端くれ。

歳上の少女を庇ってその前に立ち、敵わないまでも敵を睨みすえていた。

ネギの眼前にいるのは術者の女性……一昨日の晩に襲撃を掛けてきたあの眼鏡の女性である。

そしてその式神であろう、あの着ぐるみのような大きな猿が二体と、悪魔にしか見えないのが一体。

尤も、悪魔のようなものの顔には札が貼られており、式神というよりは使い魔のようでもある。

兎も角、合計して四つの敵が立ち塞がっていた。

おまけにここは天守閣の上だ。逃げ道は全く無い。

「……ねぇ、ネギくん……こ、これもCG……？
と、ちゃうよね……？　やっぱ……」

「こ、このかさん……」

何せこの身は分け身であり、実体ではない。

何の技も使えないし、基本の魔法すらも全く使用できない役立たずだ。
下手をすると同年代の子供より弱っちい。

そんなネギたちに対し、悪魔のような姿の式が背中から引きずり出した弓を向け、凄そうな膂力でもって矢を引いて構えて見せた。

確かに手駒は出払い、せっかく組んだ策も半分近くが台無しになってはいたが、それでも流れをここまで持って来る事ができている。
何だか自分だけでやってた方がマシだった気がしないでもないが。

「聞ぃーとるか!?　お嬢様の護衛、桜咲刹那!!
この鬼の矢が二人をピタリと狙うとるのが解かるやろ?!」

城の外で戦っていたのは見えていたから、こう言って牽制する。

「お嬢様の身を案じるなら手は出さんとき!!」

と、こう脅迫していれば邪魔は出来まい。

何せこういった力馬鹿の式は簡単な命令しかこなせないのだから。

即ち、『動くと射ろ』だ。

下手に動いたり、助けようとしたりするだけで矢は放たれ、木乃香は射抜かれる事であろう。

何せこのネギは実体では無いので盾にすらならないのだ。

尤も、ターゲットである木乃香を殺すわけにはいかないのだから実は単にハッタリなのであるが……

しかし、側で聞いていた木乃香にはかなり効果的だった。

何せついさっきも同じ様な脅迫をされたのだ。

しかも、その時は本当に彼女の身はどうでも良いという態度だったのだから効果は抜群である。

『兄貴、ありゃあハッタリだぜ!!
嬢ちゃんの力が欲しいってぇのに、その相手を殺すわけにゃいかねーハズだぜ!!』

「う、うん。だけど……」

カモの言う事も解かる。

ネギもそうだと思っている。思っているのだが……ネギもカモも掛かる状況では余りに無力なのだ。

例えあの女術者（千草）の言う事がハッタリでも、今の二人には

逃げる手も防ぐ手も無いのである。

「え、ええ～～と……カモくん、喋っとるん？」

『……き、気の所為っスよ？』

「いや本人に言われても……」

焦りからか、カモも只のオコジョのフリを忘れて木乃香の前で喋っていた。

目の前の式神は余りにも現実離れしている為に特撮だと思えなくもないが、目の前でごく自然に会話しているオコジョは流石に誤魔化し切れない。

混乱し過ぎているが故の行動であるのか、木乃香は目の前の危機よりも言葉を話すオコジョの方が気になっていた。

木乃香の首には、先程少年に掴み上げられた痕がしっかりと残っている。

あの苦しさも、背後から受けるプレッシャーも鮮明に残っている。

そしてそんな自分を救おうとしていた必死の形相の刹那の事も……

細い木乃香の首は、易々と少年の指を届かせて吊り上げられていた。

ただ、どこをどういった調整がなされていたのか不明であるが、頚動脈は絞まっていなかったし、木乃香自身の体重によって頚骨が外れる事も無かった。

しかしそれでも木乃香の気は遠くなっていた。

――殺されるかもしれない……という恐怖からではない。

何も解らないまま、刹那を苦しめていたかもしれないという事に対する恐怖から気が遠くなったのである。

そして今もネギに庇われている……

元々が柔軟な思考を持つ木乃香だ。流石にここまで不条理な騒動が続けば不思議な世界の存在に気付いてもおかしくはないだろう。

だからこそ彼女は知りたがっている。

知らなかった“不思議”を。

大切な友達が“何”から自分を守ってくれていたかを――

「ゴチャゴチャ言うとらんと、さっさとこっち来いや！
痛い目に遭うんはいやですやろ！？」

業を煮やしたのか、ジリ…と一歩前に出る千草。

ネギは木乃香の前に立って庇ったまま身動きが取れない。

矢が狙っている以上、一歩も下がる事はできないし、動く事もできない。

となると……

「……って、あれ？
行くも何も、動いたら射られるんじゃ一歩も動けませんが……」

「あ……」

ひゅ～～……

二人の間に、生暖かい春の風が抜けていった。

「く……こーなったらウチが直接……」

流石にそんな欠点を指摘されて恥ずかしかったのか、千草がやや顔を赤くして前に進み出てくる。

ただ、ここは屋根の上なので足場はひたすら不安定だ。

ネギは忍草鞋であるし、木乃香は所謂“ぽっくり”を履いていたが逃げる際に脱げてたか脱いだかして足袋である。

しかし余裕を持って追う方だった千草はそのぽっくりを履いたまま。明らかに動き辛い。

それに気付いた彼女は、式神である猿の一体を呼んで自分を肩に乗らせた。どうやら脱ぐという選択は無いようである。

何とも間が抜けたやり取りであったが、僅かながらの時間稼ぎにしかならない。

あの猿の俊敏さは闘ったことのあるネギならわかる。

本当の猿……いや、本物の猿以上の運動能力を持っているのだ。

ネギに残る手段は、ある猿ごと突き飛ばして飛び降りるくらいしかない。

尤も、それが上手くいったとて対応できるのは一匹だけで、眼鏡術者か悪魔型の式神は残ってしまう。

となると術者の方をどうにかするしかないのであるが……

「……ほな、覚悟はよろしおますなぁ？」

「く……」

それを行える隙は向こうには無い。

しかし、奇跡は起こった。

何とその猿、『捕まえに行け』という千草の命を受けると、

たん…っと瓦を踏みしめて跳んだのだ。

「え？」

「あ……きゃあっ！？」

驚いたのは千草のもそうだが、木乃香も当然驚いた。

きゅっと身を縮めて悲鳴をあげてしまい、千草の後にいた式はそれを“動いた”と判断したのである。

「も〝ほ？」

ビシュ…ッ！！　と放たれた矢。

お嬢様に当たるやないか！？　と千草が怒るより前に彼女が乗った式神が間を割るように着地してしまい、体を貫かれて吹き飛んだ。

「ひゃあっ！？」

千草が余波を食らって飛んだが気にしている場合ではない。

しかし矢が放たれたと同時にネギが跳び出し、矢と木乃香の間に割って入って盾となっていた。

『兄貴！？』

余りの事にカモが驚いて叫んだ。

ネギはその身体で矢を受け止めて木乃香を守るつもりなのか。

ボッ！！

しかし失念していたのだろう、その身は実体ではない。

煙のように腕の像が散り、何の抵抗もしてくれなかった。

慌てて振り向くネギ。

そして動けない木乃香。

その細い身体がその矢でもって貫かれると思われたその瞬間、

「くっ！！」

「え……？」

その間に何者かが更に割り込みを掛けて来た。

―せっちゃん？―

少年剣士風のその姿。

木乃香が見間違えるはずもない、大切な友達である刹那だ。

刹那は刹那で、何も考えず間に入っていた。

無論、木乃香の無事だけを願っての事。それ以外は頭に浮かんで

いない。

後先考えずの行動であり、先に古が危惧した通りの展開である。

しかしこのままなら木乃香の命は守れても刹那が身代わりとなって何にもならない。

だからと言う訳でもないだろうが、身体を痛めている刹那より瞬発力に余裕のある少女がついて来ており、その彼女も刹那同様に距離を詰めて飛び出していた。

「く……っ！！」

刹那が盾になった瞬間よりやや遅れ、その少女が刹那の前に飛び出してトンファーをクロスさせて矢を迎えた。

遅れた事による焦り、そして無理に割り込んだ事による体勢のズレ。

刹那なら身体の一部がえぐられる程度で済んだかもしれないが、今の古の立ち位置なら命中すれば心臓に風穴が開くだろう。

『……老師……っっ！！！』

彼の事を想い、そして己の力を願う。

ただ友を守りたいという想いだけで直情的に飛び出した彼女であったが、それでも勝算がゼロというわけではない。

カツ……ンッ！！！

奇妙に硬そうな金属音が響いた。

刹那が飛び出し、それに次いで古が奇妙な扇を広げて割り込んで……それで矢を防いだ……としかネギには思えない。

そうとしか思えなかった。

だが、防いだはずの矢が消えて無くなっていたのである。

「お〝も〝……っ！！」

バシュ…ッ！！

突然、背後で破裂音がし、え……！？　と驚いてネギが振り返った。

すると粉々になって消えてゆく式神と、カラン…と音を当てて転がった矢が……

「一体何が……？」

呆然とするネギ。

しかし、一人――いや当の古と一匹だけはその訳を理解する事ができていた。

『……マ、マジか……アレってそんな力があったのかよ』

その一匹であるカモが呆れたようにそう呟く。

ネギはその言葉に反応して、『え？』と肩に乗せた彼の方に顔を向けた。

『多分、あの嬢ちゃんのアーティファクトの力っスよ……まだオレっちも半信半疑なんスが……』

「くーふぇさんの？」

そう言われている古は、上手くいった事と“反射”という現象への驚き、そして安堵によるものであろう、へたり込むように腰を落としてしまった。

ネギが一瞬で古だと解ったように、その顔には既にお面は無い。

途中で紐が切れて落としてしまったのだ。
つまりはそれだけ必死に走り続けていたという事であるが……

その手に持った鉄扇トンファーの開かれた絵の柄。
その柄は赤い空に浮かぶ白い月に変わっていた。

当然のように衣装の月の絵は消え、逆にさっきまで使用していた桜の花の絵は服に戻っている。

その月の絵の能力。それは――
飛来するあらゆる攻撃、“飛来する攻撃ならば”反射する事ができ、それが魔法だろうが物理攻撃だろうが、狙って放たれた攻撃ならば全てを使用者に反射する事ができる。
それが、＜宴の可盃＞のもう一つのモード、“ツキミデヘンパイ”であった。

彼女の持つ＜宴の可盃＞は、横島のサイキックソーサーで受け止められる程度の攻撃ならば対応ができる、完全な防御用の魔具なのだ。

「あ〝あ〝……冷や汗が出たアルよ～……」

今考えればかなり無茶であり、かなり危ない事であったが、考えるより先に身体が動いていた。

宴の可盃の能力は理解したつもりであったが、それでも怖いもの

は怖いのだから……

無論、射貫かれる事ではなく、失敗して刹那らごと串刺しになる事であるが。

心底ホッとしてぐんにゃりとしたまま後ろを振り返ると、刹那もやっと緊張がとけたのか彼女の顔にも微かな笑みが浮かんでいた。

「せっちゃん……」

「お嬢様、ご無事で……」

助けに来てくれた……

やっぱり約束を破らないでいてくれるんや……

嬉しさと安堵で涙がポロポロと零れる。

それでもフラフラと直前にいる刹那に手を伸ば――

ケフ……ゴボッ！！
ごぷ……

「――え？」

「あ……？」

木乃香も、

そして古も何が起こったか解からなかった。

「せ、刹那さんっ！？」

『刹那の姉さんっ！！？』

――唐突に、刹那が咳をして血を吐いたのだ。

あの少年にヒビを入れられたアバラが月詠との戦闘で遂に折れ、木乃香の元に駆けつける為に限界まで肉体を酷使した為、内臓に突き刺さったのである。

「あ……」

ふらりと崩れる刹那。

しかしここは屋根の上だ。彼女の軽い身体はそのまま空に出てしまう。

「せっちゃん！！」

慌てて手を伸ばす木乃香。

だが、そのては虚しく空を掴む。

「せっちゃんっ！！！」

しかしまだ諦めない。

木乃香はまるで彼女を庇うように自分から宙を飛び、空中で彼女をその腕に抱きとめる。

「危ないっ！！」

「む……っっ！！」

ネギが駆けた。

しかしやはり遠い！

しかし同時に古も駆けていた。

疲労した足に鞭打って、瓦を踏み割りつつ距離を詰めてその腕を伸ばす。

「このかぁっ！！　刹那ぁっ！！！」

だが、半歩足りない！

ならばと腰のリボンを引き抜き、その布槍術でもって体操部のまき絵宜しくリボンを伸ばし木乃香の腰を絡め取った。

『やったぜ！！』

「くーふぇさん、スゴイ！！」

ネギが感動し、カモが旗振って喜ぶ。

古も一瞬ホッとしたのであるが、

ぶぢ…っ！！

無情にもそのリボンは木乃香を手繰る事無く千切れ飛んだ。

月詠との戦闘で布地が切れていたのだろう。

「く……っ！！　こ、このぉ――っっ！！！」

それでも踏鞴を踏みつつ手を伸ばしそうとする古。

千切れたリボンを今度は破風端の飾りに絡め、それを命綱にして二人を掴もうと飛び掛る。

しかし届かない。

どうしても届かない。

僅か数センチの差で指先を掠めもできず空を切った。

その数センチが数十センチに、数十センチが数メートルにと加速度的に指先から木乃香と刹那への距離が開いてゆく。

「あぁぁっ！！」

落ちて行く。

「あああああっ！！！」

落ちて行く。落ちて行ってしまう。

木乃香と刹那の二人が。

友の身体が――

悲しさより、諦めより、悔しさより何より、説明の出来ない悲鳴が古の喉から吹き出した。

そして――

『老師ぃぃ――っ！！』

古はココロから、初めて助けを呼んだ。

たかたっ　たかたっ　たかたっ……

「え……？」

「何だあれ？」

城の下では、当然少女が落ちて来ている事に悲鳴が上がっていた。

が、それとは別なモノに気付き、唖然としてそれを見つめている者もいる。

たかたっ　たかたっ　たかたっ　たかたっ　たかたっ　たかたっっ

駆けて来る。駆けて来る。

何かが土煙を上げ、突拍子も無い勢いで、物凄い速度で駆けて来る。

だかたっ　だかたっ　だかたっ　だかたっ！！！

白馬に乗った――

いや？　白馬ではない？！

大きな白い鹿に跨って、何かがここに駆けて来る。

非常識にも鹿に鞍をつけて跨り、物凄い土煙を巻き上げて風のような速度でやって来る。

その“怪人”は服の色の所為だろう、見事な白と赤のコントラストを見せ付けながら突風となってやって来る！！

「いっっっけぇぇえええええええええええっっっっっ！！！」

その声に白鹿が鳥のような甲高い声で嘶いて応え、更に加速。

それは恰も地を這うロケットのよう。

超最短直線距離。

彼が城の上の二人を発見した所から、ここまでを真っ直ぐ一直線に商家や長屋などの障害物もクソもなく、問答無用に一直線に走って来たのだ。

姿を見られているだとか、魔法の秘匿とかは頭には無い。

ただ、女の子が危ないというだけで彼はやる。

女に甘いのが弱点だと真名に評されている彼であるが、その甘さ優しさそのものが力でもある。

女の為ならば絶対にどうしようもない状況をひっくり返し、絶対に勝てない敵を倒し、

常識を破壊し、道理すら踏み砕く。その不条理さと理不尽さが彼の持ち味なのだ。

「うわ……っ」

「な、何だあれ？　速っ！！？」

「ポ……〇ン・デ・〇イオン？」

「いや、ライ○ン丸だろ？」

外野の混乱など何のその。

バイクすら追いつけないスピード違反必至の速度で城の下までたどり着いた彼は、落ちてくる少女らの姿を見あげ一瞬で決断。

つーか、今使わずに何時使うというのか？

『飛』

ズドンっ！！

走りながら生成していた珠にその一文字を押し込み、白鹿――かのこ　に乗せた鞍を蹴って一瞬の躊躇もなく跳び……いや、飛翔した！

「と、飛んだーっ！？」

「な、なんだぁ！？」

「まさかっ　風雲！？　風雲なのか！？」

「た、確かに白ライオンじゃねぇ！！」

一般客が騒ぐ騒ぐ。

だが聞こえない。聞く必要も無い。

そんなことより大切な事があるのだから。

「どっせいっ！！」

逃げ足は世界一。

しかし、女の子に飛びつく速度も世界一の彼だ。

落下中の刹那と木乃香に飛びつく事等、昼飯前の朝飯前である。

「え……？」

「黙ってて。舌噛むぞ」

ぽかんとする木乃香を、そして意識を失っている刹那を、そしてリボンでぶら下がった古の三人を胸に抱き、そのまま弾丸（ロケット）の如く宙を飛び、更には屋根を蹴って駆け上がってゆく。

「マ、マジ……？」

「え？　ウソ。あの子ら助かった……の？」

静かなざわめきと僅かな沈黙。

例え出し物とはいえ、凄い緊迫感と切実な悲鳴が聞こえたのだから当然かもしれない。

が、常軌を逸したアクションによって奇跡が起こったという事実がじわりと脳に届いた瞬間、

うお…うぉおおおおおおおおおおおおおおおっっっっ！！！！

爆音の様な歓声が巻き起こった。

「マジか！？　すっげーっ！！」

「モノホンのロケット飛行キタ――――ッッ！！」

「うおーっっ　特撮ファンやってて良かったーっっ！！　も―死んでもいいーっっ！！」

実際に死闘がが行われていた事など知る由もない一般人達だが、その感動と衝撃は大きかったらしい。

そして謎の赤い怪剣士。ぬいぐるみヘッドのその男は、下界の歓声に背を押させるかのようにふわりと天守閣に立った。

その姿――
そう、謎のライオン剣士、ボン・〇・ラ〇オン丸。

「ふい～～～……間一髪やった……」

三人を下ろし、ホッとしてへたり込むドーナツ屋の回し者のようなライオン剣士（しゃもじが得物だが）。
だが一人、古には誰だか解る気がした。いや、解っていた。理解しつくしていた。

「ろ……老師？」

それでも恐る恐る問い掛ける彼女に対し、ゲンナリとしつつも頭を上げ、彼は被り物のままこう言った。

「老師はやめぇ言うに……」

それでも古に言われ慣れている事もあるし、何より二人を助けられたのが嬉しいのだろう、彼はそんなに嫌がっていない。
何時ものように溜め息を吐くように、顔を傾けつつも照れているような雰囲気を放つまま……

ポロ……と、古の目尻から涙の粒が零れた。

「ろ……ろうし――っ！！」

「わっ、わぁっ！！　抱きつくなっ！！　今は駄目、今はアカンゆーに……って、コラっ！！
や、やめ……ココじゃイヤ――っ！！！」

言うまでも無く、ポ○・デ・○イオン丸の正体は、彼。
感極まって泣きながら抱きついてくる古に対し、屋根の上という危ない場所で器用に転がりながら何時ものアホゼリフで身悶えする男、横島忠夫である。

それでも力いっぱい霊力を使いまくってしまった彼は、古にしがみ付かれたままでそんなに抵抗できなかったりする。
決して、抱きつかれた感触がごっつエエとか、『ああっ、チチがぁっ！！　まだ発展途上やけど青くて張りのあるチチがぁーっ！！』とかの理由ではない筈だ。

テンションが上がりまくった古は、そのマスクの上にキスの嵐。
幸いとゆーか、残念ながらとゆーか、横島は気付いていないようであるが。

「そ、それより刹那ちゃんは？」

「あ、ああっ、そうアル！！」

それでも大事な事は忘れていないのは流石。

押し倒されてしまった横島も何とか立ち直り慌てて跳ね起き、側に下ろした二人の元に駆け寄って行く。

するとネギが身体を調べており、その彼の顔色もかなり悪い。恐らく思った以上に刹那の容態が悪いのだろう。

吐く息と共に血を吹いているのだから、下手をすると肺に骨が刺さっているかもしれない。

「せっちゃんっ！！　せっちゃんっ！！　しっかりしてぇなっ！！」

「こ、このかさん、落ち着いて！！　早く病院に連絡しないと……っ！！」

顔色の悪さから間違いなく刹那には一刻の余裕も無い。

しかし、横島も力を使おうにも無茶をやり過ぎて霊力が足りなかった。配分を考えないのはいつもの事であるが、大人になってまでそれでは話にならない。

「ろ、老師……っ！！」

「解かってる！！　ちょっと待って……」

それでも諦めない。そんな必要は全く無い。

古が彼を頼るように眼差しを向けると、彼もとっくに霊気を手に集め始めている。

失うのは二度と御免だ。

“あんなの”は一度だけで充分だ。

黙って女の子を死なせる……死に掛けている女の子を目の前にして手を拱いてたまるものか。

自分の前で女を、女の子を死なせてたまるものかぁっ！！！！

霊力中枢に蹴りでもって気合を入れ、悲鳴を上げそうなそれを無理矢理フル回転させ、必死になって“珠”を生成してゆく。

頭の芯がズギンっと鈍く痛んだ気がするが問題ない。

後に血を吐く想いを残す事に比べたら“へ”でもない。

「せっちゃんっ！！　せっちゃん！！！」

そんな横島の前で、

「せっちゃんっ！！！！！！！！！」

カッ！！！

木乃香の身体から光が満ち溢れた。

「えっ！？」

「なっ！？」

一瞬。

ほんの一瞬で血の気を失っていた刹那の顔色が戻り、口から溢れ出ていた血も消えてゆく。

更には意識までもが回復し、ゆっくりとではあるが瞼を開け、泣き顔で自分を見つめている木乃香の表情に驚いていた。

「お、お嬢様……？」

いっぱしの剣士の口から出たにしてはちょっと間が抜けている。

まぁ、気が付けば木乃香やら古やら謎のかぶりもの男やらの心配げな顔があるのだから、その気持ちも解からなくは無い。

「せっちゃん……？
　せっちゃん！！　せっちゃぁあああんっ！！！」

嬉しさのあまり泣きながら刹那を抱き締める木乃香。

死んでしまうかもしれない。

二度と眼を開けてくれないかもしれないという恐怖から解放されたのだから、当然だろう。

意外なほど強く抱き締めているようで、刹那でもどうすることも出来ないようだ。

その刹那の方も、何故助かったか……と言うより、何があったのか良く憶えていないらしく混乱仕切りである。

だが、強く抱き締められるだけでアバラに痛みが走るのか、直に顔を顰めて木乃香を慌てさせたりしていた。

「これは……一体……」

『怪我が治った……つーより、血を吐く前に戻ったって感じだな』

ネギは驚きを隠せず、カモは妙に観察眼を光らせていた。

スカカードがあるように、木乃香は失敗してはいるがネギと仮契約を結んでいるのだ。

恐らくその事によって眠っている彼女の力の一部が目覚めたのだろう。

しかしそんな事はどうだって良い。

訳は解らないが、刹那の命が助かったのだから。

横島は古とボーゼンとしていたが、ふと顔を見合わせてわけも解からずコクンと頷き合う。

そして彼女が助かったという事をやっと二人の脳みそが理解すると、

ハァ～～……

二人同時に深い安堵の溜め息を吐き、肩を寄せ合ってそのまま座り込んでしまった。

見事なユニゾン。流石は師弟である。

木乃香は刹那が助かった事でわんわん泣き、刹那は訳が解かっていないのか顔を真っ赤にして慌てふためく。

ネギは刹那の術が途切れたのか小さな姿に戻っており、カモに掴まられてわたわたと慌てていた。

そんな様子を目に入れつつ、古は……

何とかなったという穏やかな情景に口元を緩め、もう一度と横島の腕に抱きつき、嬉しげに微笑んでいた。

助けを求めた瞬間、彼は来てくれたのだ。

単なる偶然かもしれないが、大切な友達の命が危なかった時、彼は駆け付けてくれた。

そして文字通り身体を張って彼女らを助けてくれたのだ。

それが嬉しくてたまらなかった。

そして、そんな彼に二人を助けてもらった事も……

あ〝あ〝〜〜っ!!　古ちゃん、ヤメテ〜〜〜っ!!　とか言う悲鳴も聞こえない。

聞えないったら聞こえない。

そうクスクス笑って古は横島の腕を抱く力を更に強くしていた。

――と。

「それがお嬢様のチカラか……大したモンやな……」

「!?」

その声が聞こえ、師弟の二人は一瞬で身構えた。

見ると、彼らのいる場所の真反対側の位置に、残った式猿の一体が佇んでおり、その肩に千草が乗っているではないか。

「く……貴様……」

「あ、せっちゃん！　アカン！」

立とうとする刹那を木乃香が意外に強い力で止める。自分の力が解っていない彼女だから大方が治っているとは思ってもいないのだろう。

「……ははぁ……まだ術の行使に慣れとらんようやなぁ……まぁ、今日のトコはこれくらいにしといたげます。
今回はお嬢様のお力が拝見できたさかいなぁ……」

ふふん…と鼻先で笑い、余裕すら見せている千草であったが、実のところそれは単なる負け惜しみである。

手駒である式はこの猿鬼しか残っておらず、新入りの少年と月詠は戻ってこない。狗族のコタローも結界内にいる筈だ。
となるとここに何時までいても何の得も無いのである。

とっとと逃げた方が得策だ。

コドモ先生は実体ではないし、あのひよっこ剣士とチャイナ服の少女もへたり込んでいるし、自分の式である獅子鬼によく似たかぶり物をしている男も無茶をやって力尽きいてる。

だから挨拶をする余裕くらいはあるだろうと踏んだのかもしれない。

無謀にも……

「何を……」

そのまま猿鬼の力で逃げ出すつもりなのだろう。

だが、刹那はもとより古もかなり頭に来ている。そのまま逃がすつもりは毛頭無い。

無いのだが……

「……ざけんなよ」

その二人の怒気をも踏みにじられるかのような重い声が辺りに響き渡った。

「ひ……っ！？」

その異質の声の力に千草の身体が硬直する。

そして横島の直脇にいてしまった古すらも……

何故か彼の背後にいる木乃香、いやそれどころか刹那にすら感じられていないようであるが、その男から……横島忠夫からとてつも

ない怒気が噴出していたのである。

しかし単なる怒気や殺気で千草や古の身体を止める事はできない。

それは彼女らの想像を遥かに超えたシロモノだった。

失った事を心に刻み込み、失わせた事を死ぬほど後悔した男の、

不条理なほど優しい男の怒りは尋常では無かった。

この女ナニ言いやがった？

このくらいにしとく？　“このくらい”だ？

良く解からない理由で女の子一人殺しかけといて、

女の子の友達を目の前で奪いかけといて……

言うに事欠いて、

このくらい？

コノクライダトヌカスノカ？

キサマハ……ッ？！

ぎじぃっと空気が軋んだ。

その軋む音にあわせて彼の心の中でナニカが動く。

恰も拳銃のシリンダーが回るように、横島の中でナニかがガチリと重い音を立てて精神の性質を切り替えてしまう。

彼はその怒りの念を使って、酌み出し掛けていた霊力を更に右手に収束し始める。

そして瞬く間に三つの“珠”が出現。

生成が終わったと同時にその珠には其々別の文字が浮かび上がった。

『収』『束』　そして『固』

強念から酌み出された霊力はまだ溢れ出る事は止めようとしない。
その異様に高まった霊力は勢いそのままに、『収』『束』して更に強力な珠として『固』まってゆく。

『な、何だぁ！？』

カモも驚き慌てる。

今まで感じた事も聞いた事も無い力の奔流なのだから当然だろう。

彼の、彼女らの驚愕など知る由も無く、横島は“珠”が出来上がると三つの珠を消し、それに対して思いっきり強くイメージを注ぎ込んむ。

このまま、全ての禍根を断ってやる……

あの女を消し去る事だけを考え、

もう二度と奪われたりしないよう念を込め、

魂までも砕け散り、転生さえ叶わぬ破滅の一文字を練り上げた珠に込めた横島は、恐怖の余り腰を抜かしている千草に向け――

「老師っ、駄目アル！！」

―ヤメロッ！！！―

その直前、

“二つ”の静止の声が心に響き、横島はハッと我に返った。

途端にガチリとまたナニカが切り替わり、普段の横島の性質が浮かび上がっていた。

何が何だか良く解かっていないのは彼自身も同じなのだろう、自分の手に持った珠に目を落して驚愕してしまう。

こんなモノを使用してたら眼鏡姉ちゃんどころか、この天守閣が消滅しかねないではないか。

せっかく赤っ恥かきつつも助けたとゆーのに消し飛ばしたら本末転倒だ。つーか、何があってもしてはいけないだろう。

しかし、このまま放っておけば自壊して結果は同じになってしまう。

慌てて彼は別の意味を込めて後に放り投げた。

怪我人と疲れた女の子がいるのだ。当然込める意味は『癒』。

カッ！！

「え？」

「わっ！？」

生成に使ったマイト数がハンパではない為、刹那はおろか木乃香や古までもその範囲に入り、傷や疲労が一瞬にして癒し尽くされた。

ここでは解らない事であるが、ネギの分け身すらその範疇なのだろうか、ラインで繋がっている彼の本体の傷や疲労も全て消失していたりする。相変わらずトンデモ能力だ。

「あ、危なかった……」

何が何だか解らないが、怒りに心を塗りつぶされて自制が利かなくなっていたらしい。

古にチラリと顔を向ければ、彼女も正気に返った横島を見て先程同様……いやさっきより深く安堵の溜め息を吐いているではないか。

となると余程ヒドイ状態だったのだろう。

「く……っ」

「あっ、逃げた！！」

しかしそんな隙を丸見えにしてはいけない。
それを好機ととった千草は、呪縛が解けたのか式に命じてその場から離れていた。

木乃香を捕えるのは失敗した事であるし、今の事で精神疲労も凄まじい。それに何より目立ち過ぎた。
これ以上ここにいて良い事は何一つ無いのである。

「ちっ……そのまま逃がすかっ！！」

正気に返った横島であったが、ただで逃がすほどお気楽ではない。
あれだけヒヤヒヤさせられたのだから、何は無くとも仕返しの一つもしないと腹の虫が治まらない。

残った霊気を右手に収束させ、輝く手甲……ハンズオブグローリーの基本形を具現させる。

しかしその技を使ったとしても、これだけ距離を離された今なら届くまい。

かと言って、アレの直後に古らの前でサイキックソーサーを投げ付けられるほど“非道”を行う事もできない。

ならば……

「ハンズ・オブ・グリードっ！！」

そう叫び、右の掌を突き出した。

集まった霊波の拳が彼の手を離れ、霊気弾が如くスっ飛んで行く。

伸ばした掌がそのまま突き進む様はロケットパンチかブーストナックル。

それを霊力でやっちゃったりするトコは、やはり何時もの横島だ。

「な、何やコレ！？」

慌てて身を沈めてかわす千草。

殺気によるショックから立ち直り切っていないのだろう、それが精一杯だった。

それでも回避できてホッとしたのであるが、何とその霊気の手は旋回して再度襲い掛かって来るではないか。

おまけに何だか指をワキワキさせつつ……

「な、何……っ！？　ひゃああ～っっ！！」

ついに千草は、むにゅるっ！　とその掌を喰らってしまった。

それは言うなれば意思を持った霊気の手。

式神に近く、果てし無く別物であるそれ――

本邦初公開。

成長した横島が生み出した、ターゲットロックした敵（女性限定）を自動追尾する霊気の手、自立型遠距離攻撃霊能力Ｈａｎｄｓ　ｏｆ　Ｇｒｅｅｄ“貧欲の手”。

それは、遠距離攻撃がサイキックソーサーしかなく、また外れやすい事に悩んでいた彼が開発した技……らしい。

言うまでもなく中途半端に記憶と経験が消失している為、詳細は不明であるが何とか使えるというレベルでもって無理矢理整えられた霊能力で、意識でもってターゲットを捕捉させておいてから、それを追わせる特性を栄光の手に持たせてから放つ驚愕の霊能力なのだ。

しかし、今まで語っているように中途半端に記憶がすっ飛んでいる為、便利な特性の付け方はおろかそんな物があったかも不明であ

り、兎に角使えりゃいいやとばかりに思い出せる範囲だけで整えたシロモノだ。
その名前の“グリード”からも解るよう、貧欲……ぶっちゃけ欲望を込める事しか“今の彼”には出来なかったりする。

要するに――

「ひ……っ！？　あ、あかんて、そんなトコ……ひゃんっ！？」

千草に纏わり付いたそれは、込められた欲望……底知れぬ横島の煩悩のままに、彼女の身体を弄り回っているのだ。

「あ…そこは……ひんっ　イヤやてっ！！　ダメや……あふっ」

「あわわわわ……」
「ひゃああ……」

何だか色っぽい悲鳴をあげてもぞもぞと身を捩っている千草の様子に、当然の如く真っ赤になる刹那達。
言うまでもなくカモは、うっひょーっ！！　とテンションを上げていたが。

横島は逆に『おのれ……オレの霊能力の分際でオレよかイイ想い

しやがって……代わりやがれっ！！』と大憤慨。
そんな本音をぶっちゃけた直後、古によって宴の可盃のフルスイングかまされた。

「ナニ言てるアルか！！　アレは敵アルよ！？」

「堪忍やーっ！！
せやけど霊力が下がってもたから、どーしてもそっちの方にしか頭が回らへんのやーっ！！」

そしてネギは、突如として現れ刹那たちを救ってくれたぬいぐるみライオン剣士の豹変に反応すれば良いのか、空中でエッチに悶える眼鏡姉さんを気にすれば良いかで悩んでたりする。

「やン…っ！！　や、やめ……ひゃうっ！？　そん…な……あひっ！！
ら、らめぇ……っ！！」

遠く離れて行きつつエッチな声も続いていた。

何せ横島の“飢え”がバッチリ染み込んでいる霊気だ。そりゃ普通にやったって防げる訳が無い。

残った霊力でもって生み出されたモノなので、実のところ数分しか持ちはしないが、それでも考えられる限りの“やーらしい事”はイロイロされてしまう事だろう。

何せ欲望“だけ”しか篭っておらず、歯止めが全く無いのだ。思わず彼女の今後に幸あれと祈ってやりたくなる。

古とかは『哀れアルなー』等と言ってはいるが、横島のように『まー刹那ちゃん達にあれだけの事したんだから、どーでもいいや』と、然程の同情もしていない。死にはしないだろーし。

けっこーええ姉ちゃんだったからちょっち勿体無いよーな気がしないでもないが、（何故か古が睨んでて怖いから）さっさと彼女を視界から剥がし、くるりと木乃香らの方に顔を向け、未だ座り込んだままの二人の前に移動して腰を落とした。

「えっと……刹那ちゃん、怪我はもう大丈夫か？」

「え？　ええ、はい……おかげ様で助かりました」

自分の事を知っているようなのでちょっと面食らいながらも、しっかりと礼を言う刹那。

そしてそんな彼女を支えつつ、木乃香も丁寧に横島に頭を下げた。

「ホンマ助かりました。ありがとうー」

「あー……いや、でも大体は木乃香ちゃんが治したんだぞ？
オレのは……まー“ついで”だったみたいだし」

「へ？　ウチ？」

木乃香の事も知っているようだったが、こちらは大して気になっていないようだ。全く持って適応力の高い娘である。

だが、口を滑らせた横島に刹那は眉を顰めた。

誤魔化しはもう効かないレベルに達してはいるのだが、それでも彼女には知られたくないのかもしれない。

そんな刹那に対して肩を竦ませると、横島は二人に手を貸して立たせてやる。

「兎に角ここを出よう。
ネギと合流した方が良いみたいだしな」

「あ、ハ、ハイ」

そう話を振られたネギも驚いて反応が遅れる。

何せ彼は自分の事も知っているようなのだ。会った事も無い人に知られていれば混乱もするというもの。

だから刹那は皆の意見を代表するかのように疑問を口にした。

「あの……」

「ん？　何だ？」

「貴方は一体……？」

そう言えば言ってなかったっけ？　と古に首を回らせると、彼女もちょっと考えてから小さく頷いた。

考えてみれば老師だとは言っていたのだが、名前は言っていない。向こうは名前すら知らないのに、こっちばかりが知っているのは確かに不公平だろう。

ふむ……と納得した横島は、ぬいぐるみの口を器用に動かし（その仕組みは不明）、自己紹介をしてやった。

「性戯の使者、風雲〇ン・デ・ライオ〇丸！！」

「「「いや、そーじゃなくて！！」」」

「ってか、字が違う気がするアル！！」

そのおバカなセリフに、皆は見事同時にツッコミを入れたという。

兎も角、着替えを済ませた木乃香と刹那は横島の予定通り、一般生徒らをここに残し、裏口からコッソリとシネマ村を後にするのだった。

「古ちゃん……はよ戻って来てくれよな？　頼むぜ？」

着替えが無い為、行くに行けない横島を残して……

だが、そのお陰だった。

「しかし……
あんな事しでかしちまうなんて……やっぱオレって……」

その呟きの最後が誰の耳にも届かずにいたのは――

中編　一肆一（後書き）

横っちの初シリアス暴走。
別名、鬱横島。

ネタばらしまでは遠い……（涙）

後編

その日、一人の少年が旅立って行った――

家族を事故で失い、知人の家に引き取られる前にと母親の墓を詣でる為だけに京都に来ていた少年。

彼は、挨拶もせずに新しい生活の場へと旅立って行ったのである。

みょーにリアクションが面白く、実に弄り甲斐が……もとい、中々親しみやすかった少年は、たった三日間という短い期間でそれなりの友達関係を構築できていた。

だからこそ少女らに『みずくさい…』『せめて挨拶だけでもしてほしかった』等とぼやかれているのも仕方の無い事である。

『あんま責めないでやってくれねぇーか？
別れが苦手だから、顔を見せたくねぇんだろうさ』

しかし、突然やってきた親戚を名乗る青年がそう言って少年を庇った。

母の里には少女らと共に行くとは聞いてはいたのだが、何んだかんだ言ってもタダキチはまだ幼い子供。

知らない仲でもなかった彼は心配は拭い切れず、物陰からコッソ

リ見守っていたのだそうだ。

そして墓参りが終わったのを見届けた後、連絡をつけていた預かり先の“叔母”に引き会わせ、別れの言葉が言い辛かった少年に代わって麻帆良の皆にその事を告げに来たというのである。

成る程。話を聞いてから彼を改めて見直してみれば、親戚と言うだけあって青年はあの子に良く似ているではないか。

おそろいと言っても良い頭に巻いている赤いバンダナもそうであるし、はにかむように苦笑する顔などそっくりだ。

その顔でそう言われれば少女らも納得せざるを得ない。

考えて見ればあの少年はしたくもなかった家族との別れを経験している。

だからもう二度と別れの場を体験したくないのだろう。

「うん……そーだね。ここは笑って見送ってあげるのがスジってもんだよね」

「元気でね」

「タダキチくん……がんばってね……」

「あたし達が応援してるよ」

「皆……」

少女らは目を潤ませつつ、沈み行く夕日に少年の姿を見て別れを告げていた。

青年もそんな心優しい少女らに胸を打たれたか、少しだけ目元をキラリとさせつつ、手近にいた少女（釘宮　円）の肩に手を置いて“何となく”遠くを指差し、少年の明るい未来を願うのだった——

「……つーか、老師本人の事アルな？」

「相変わらずノリの良い御仁でござる」

——

■十時間目：独立愚連隊ニシヘ　（後）

シネマ村での大騒動の後、横島らはホテルに戻って来ていた。

その時の彼はその余りと言えば余りにも目立つ姿をしていた事から着替えが届くまでの間、ずっとシネマ村の中をチョロチョロして敵を陽動し、その間に木乃香と刹那は古が送って行ったのだ。

尤も、彼からすれば“珠”を使って式符を強化し、二人の完璧なニセモノを作って誘き出して一網打尽……という策をとりたかったところである。

ああいった手合いは根を残す。だから一網打尽にして刈り取る必要があるのだから。

しかし、霊力が激減していた所為で“珠”の生成ができなかった

し、何より本山の使い手が出払っていて手が足りないという理由から泣く泣く諦め、そこそこに目立つ程度の陽動を行うだけに留めていたのだ。

それに落ち着いて考えてみれば、あれだけ目立つ行動をとった後であるから何かしらの事を起こせば逆に警戒して陰に沈んでゆく可能性だってあるではないか。

いや、普通ならそうされてしまうだろう。そうなった方が厄介だ。

だったらその危険度を知る者…この場合は刹那や木乃香が長に報告し、関西の組織の方で手を打ってもらうのが一番だろう。

東との確執が元というのなら、これ以上しゃしゃり出るのは立場的によろしくない。

――そう判断しての事だった。

そこら辺に思考が進むのは“向こう”での失敗の数々がちゃんと滋養になっているからだろう。その過去の経験は自慢にはならないが。

そこそこ目立つよう頑張ったのであるが残念ながら彼の陽動には乗ってくれなかったようだ。

尤も、古らの方にも敵は行ってなかったようなので全然ＯＫであるが。

着替えを持ってきてもらうまでの間、ずっとシネマ村のスタッフであるかのように来場客にサービスを続け、かのこと共にポーズをとって写真をとらせたりして来園客にウケていたのはご愛嬌か。

お陰でシネマ村に新たなショーが生まれる事となるのだか、偶然

が生んだ産物であるし、何よりこの一件は秘密行動である。よってコトが終われば麻帆良に戻るので何のマージンも入らないのが物悲しい。

兎も角、恐らく曲者どもは作戦（…と言うにはやたら大雑把だったが）が失敗したからそのまま撤退したのだろう。

そして念には念を入れる横島の働きにもあってか、二人は無事にネギと合流……まぁ、何故かハルナらまでがおまけで付いて行っているが……

ネギらが本山に入ったのを見届けた古は木乃香の勧めを丁重に辞退し、隠れ潜んでいた楓と共にシネマ村にとんぼ返りをしたのである。

というのも、横島が霊力を使い過ぎていた為、そのまま“セクハラ一直線”をぶちかましそうだったからだ。

そして彼は横島忠夫という“漢”。期待（？）を裏切るような男ではない。

陽動なのだからそれなりに目立たなければならないという大義名分の下、当然のように彼は二人が来るまでの間、さっきも述べたようにマスコットキャラ宜しくコミカルな動きを一部の客に披露してはおひねりをもらっていたのであるが、そんな事をしつつも女子更衣所へのピーピングをやりまくって霊力を回復していたのだ。

小銭も入るし、霊力も回復するしで一石二鳥という事だろう。

無論、着替えを手にして戻って来た二人はツヤツヤした横島を見て一発で行っていたであろう犯罪行為を見破り、力いっぱい折檻した事は言うまでもない。

で――

実のところネギが本山に入った時点で横島の任務の半分は終了している。

後はせいぜい、麻帆良に帰る際の護衛くらいだ。

古と楓から皆が本山に到着した事を聞くと横島は学園長に報告し、その後どうすればよいのか問うたのであるが、後は西の長……近衛の婿である詠春に任せておけとの事。

そんなんで大丈夫なんか？　と首を傾げ掛けた横島であったが、よくよく考えてみればそれは当然の事で、刺客とはいっても西の者であるから木乃香らが本山に入ってしまえば内部で騒ぎを起こすほどバカではないだろうし、何より木乃香らに顔を見せてしまっている。

長が相手の特徴を聞かぬわけがないし、そうなると余計に動きを抑えられている筈。

内紛と言っても間違いではない誘拐事件を未然に防いでもらっただけではなく、解決まで外部に任せたとあってはその内情だけではなく長の体面も拙くなってしまう。

ならば解決の方だけでも向こうの任せるのが筋というものだろう。

そう納得をし、既に調べはついているのだろうと思いつつも一応は刺客としてやって来たメンバーの情報を知っている限り近衛に伝え、任務完了の言を頂いたのだった。

ただ一つ――

あの術師の眼鏡姉ちゃん（千草）は兎も角、残る二人……正気度が低い二刀流の少女と、あの銀髪の少年――

特にあの明らかに実力があり過ぎる銀髪の少年の事が頭に引っ掛かり続けていたのであるが……

「しかし……お互い何とか乗り切れてよかったでござるなぁ」

「そうアルな」

楓は肩まで湯に浸かり、古は口元ギリギリまで湯にその身を沈めて寛ぎかえっていた。

一日中自由時間だったので、皆の夕食も入浴時間もバラバラだ。

日も暮れ、殆どの人間が戻って来てはいるが、それでも寝る前に風呂に入る事ぐらいはあるだろう。だから清掃中の立て札を置いて来てたりする。

お陰で貸しきり状態だ。

まぁ、そんな暴挙に出ているのにも理由があるのだが。

「しかし……
そうでござるか……横島殿、刹那を救う為に……」

「……」

既に彼の活躍はシネマ村への帰りに伝えてある。

しかし、お互いの共通の話となるとやっぱり今日あった事となるので、今も反芻するように同じ事を話していた。

覗きに現(うつつ)を抜かしていたから二人でフルボッコにしてはいるのだが、女の子の為に不条理且つ理不尽な活躍をし、ありったけの力を行使している彼に対して評価は下がってはいない。

そんな彼に対して『ここまでするっ?!』というほどボコっているのは如何なものか?

いや普段の二人……特に楓ならば自分が覗かれたとしてもあそこまでドエラい目に遭わせたりはすまい。ここンところは暴走気味ではあるが。

彼女本人すら上手く説明できない感情の動きなのであるが、覗いていた事実をハッケソした瞬間、二人してぶちキレてしまった……と言うのか正直なところだ。

『何故でござろうか？』と、首を傾げてしまうほどに不理解状態。

この場に真名がいればイラついて露天風呂の岩を殴り壊しているような話である。

そんな楓の称賛の意の篭った呟きを耳にし、古は頬を手で抑えて頭まで湯に沈めていた。

別に彼女が誉められたわけではないのであるが、ぽこぽこと鼻と口から空気の泡を零しつつ、彼女は心の中できゃーきゃーと悲鳴をあげてたりする。

言うまでも無く、話をするたびに横島のことを思い出しているからだ。

いや、確かに横島に以前から言い様のない好意を自覚してはいるし、昨晩にはごっつ濃厚なのをぶちかましてもいる。

その事がひっかかって朝方はギクシャクしてしまっていたものの、シネマ村の件ですっかり忘れ去っていたのであるが……

古は、かぶり物の上からとは言え、抱きついてキスしまくったのが今になって思い出されており、またしても感情が暴走してたりするのだ。

『う〜〜……恥ずかしいアル〜〜〜っっ』

幸いにも彼女のセリフは、ぶくぶくぶく～……という泡の音に変貌しているので楓には聞かれていない。聞かれていたら問い詰められそうだったから重畳だ。

その楓というと、話を聞いていない古に気付いていなかったか言葉を掛け続けていたのであるが、ふと肌身離さず持っている自分の札を手に出して誇らしげに見つめていた。

修験者モドキのコスプレをし、メタリックな葉団扇を手にしている彼女の姿。

これこそが、彼女が札の力を使った時の姿でもある。

やたら肌が見えている衣装ではあるが……

『露出度の高さは横島殿のシュミでござろうか？』

等と苦笑してみたり。

実際、自分の戦闘装束より露出度は高い。

見る者が見れば『これ、どこのエロゲ？』とか口にされそうなほど。いや、戦闘装束の方を着ていてもそう言われそうだが……

古の方は衣装の露出も（横島にしては）かなり押さえ気味。歌舞

伎者っぽい派手さがあるが、何か彼女に似合っているし。
そして道具は完全防護特化型である。その分かなり使い勝手は良さそうだが。

何せ使用する時の効果が明確であるし、古自身の実力もある。
相手からしてみれば遠距離攻撃を放てば反射されるし、接近戦に持ち込んでも衝撃すら防げる盾が展開されるのだから性質が悪過ぎる。

例え“あの”真名が相手であろうと、発見さえしていれば撃たれても怖くない。いや、それどころか攻撃をした真名が危ないくらいなのだからとんでもない能力である。

そして自分の道具――

古のに比べればバラつきが多過ぎる。
おまけに道具を具現させてから十分間しか使えないときている。

三回能力が使えるのだが、三つの制限時間はその十分以内に括られているし、ランダムなので三つの能力がかぶる事もある。
おまけに十分経てば切れてしまう。
更に何度か試してみたところ再使用には三十分近くかかるようで今一つ使い勝手が悪い気がしないでもない。

だが、使える力そのものはとんでもなかった。

実際、コタロー襲撃の際には透明化できていたし、風のように空も飛べた。
全体的にかなり無茶な底上げが起こる為、元々の楓の力が上乗せされるのであるから奥の手として使用すれば恐るべきものとなろう。

『全く……反則でござるなぁ……』

と苦笑しつつ、改めてその札をしげしげと見つめる。

朝見た通り、裏面と同色の小豆色の縁取りがありサイズは兎も角、厚みの方はのどからのカードの三倍くらい。
材質は不明で、和紙のようでもプラスチックのようでもあり、それでいて手触りは大理石のようにすべらかだ。尚且つその重さはまるで紙のように軽い。

だからと言って、安っぽさは感じられない丁寧な作りをしている札である。

『……というか、“作った”という感じがしないでござるな……“この形で生まれた”と言うか……ふぅむ……』

全くもって“魔法”というものは不思議極まりない。
この札とて契約が成立した瞬間、カモの元に出現したと言うのだから。

『しかし……』

札を見つめながら楓は湯の温度によるものではない火照りを頬に感じていた。

この札は横島との繋がりであり、彼との絆である。

女の為にはどんな無茶も実現できると豪語している彼は、正にそれを古の目の前で実行して見せたのだという。

楓はその事が、そしてその絆の証である札をその手に持てている事が何だかとても嬉しかったのだ。

横島と共に在る――と言う事が……

……まぁ、火照りの意味はあんまり気付けていないのだけど。

「うん……？」

と、嬉しげにこの世で唯一の存在である自分の札を眺めていた楓は何気なくそれを裏に返したのであるが、その裏側の中ごろに何か引っ付いている事に気が付いた。

ゴミかと思い、つまんで取ろうとするのにそれは動かない。
爪先で引っ掻いても……いや、引っ掛かりそのものがない。

「？」

動かぬのも当然で、よく見るとそれは書かれている文字のようだ。

「英語……でござるか？
え、え～と……あ、あるぺす……？　うーむ……なんと読むでござろう？」

その前後にも何か書かれている様であるが、かろうじて文字として判別できたのはその単語のみ。

まだ中学生。それもバカレンジャーが一人として知られている楓にしては読めた方かもしれないそれは、飾り文字で『Ａｌｐｅｓ』と書かれているようだ。

「ふーむ……？」

ふと気になった彼女は、未だ湯に潜っている古の脇を肘でつついて呼んでみた。

「古、古。ちょっと話を聞くでござる」

ぶくぶくぶく……と人間ジャグジーでも目指してかのように泡を吐いていた古は、脇を突付かれたお陰で人間の吐く息には限界があるという事を思い出したか、『ぶがぼっ!?』と水中……いや湯中か?……でおもっきり咽て飛び上がってきた。

「げぼっ!!
ぶぼっぶぼっぶへ……っ　な〝、な〝に〝す〝る〝ア〝ル〝〜〜」

鼻からも湯を戻しつつ涙垂らして文句を言う顔はとても乙女のそれとは言いがたい。

おまけに助けてやったようなものなので文句を言われる筋合いはないだが、そこは楓。

「ははは……すまんでござるな」

と、九割のおちょくりと一割未満の本気の謝罪を口から漏らす。

まぁ、古も自分がオポンチかまして勝手に咽た事に気付かないわけもないので直に『まぁいいアルが……』と気を落ち着かせた。

「それは兎も角、古は今札を持ってるでござるか？」

「何だかおもいきりスルーされた気がするアルが……持てるアルよ」

そう言って頭の上に乗せていたタオル……潜っていた時に湯に浮いていたが……の中からそれを引き抜いた。

紙とかなら持ち込んだりはしないのであるが、材質は不明。何か水をはじいたりしてたから古も札を持ち込んでいたのである。

それにその札は古にとって既に相棒だ。

これがあったお陰で木乃香を逃がす為の時間を稼げたのであるし、刹那達を敵の矢から守る事ができたのだ。

武器と言うより強力な防具であるこの魔具、そして老師と自分とを繋ぐ絆のように感じられているそれは、もう体の一部と言っても良いかもしれない。

札を見て老師が駆けつけてくれた時の事を思い出したのだろうか、彼女は何だか妙な顔をして更に頬を赤く染めていた。

「……」

何時もなら『おや？　湯中りでござるか？』といったボケを素でかます楓であるが、何だかよく解らないがジト目でそんな古を見つめていたりする。

女の勘と言うものは何とも恐ろしいものだ。

「……古。札の裏に何か書いてあるでござるか？」

「……ふぇ？　裏アルか？」

楓の声がみょ～に低くなっている気がしないでもないが、幸いにして古は気付いていない。

札に見入っていた彼女はそう言われて初めてそれを裏に返してじっと見つめてみた。

「……？　別に何も……あっ」

「あったでござるか？」

札の右下の辺り。

そこに微かにではあるが、確かに文字と思わしきものが書かれてあるではないか。

しかし３－Ａにおいて古と言えばバカイエローとして名を馳せて

いる。

よって、

「えと、ええと……よ、読めないアル～～」

不思議文字に古は半泣きとなっていた。

「どれどれ……」

顔を寄せて楓が覗きこんでみると、そこにはやはり札に埋まっているような感じにＣａｌｙｘ…　Ｓｅｃｕｒｉｔａｓ……という文字だけが辛うじて読み取る事ができた。

「く……くらりぃ……？　えと……せ、せ……せくりたす？　……なんでござる？　コレ」

「私が知るワケないアルよーっ！！」

しかし、当然ながらこの二人が読める訳がない。

楓がローマ字風に読んでいた言葉であるが、彼女の札にあったＡｌｐｅｓ（アルペス）はラテン語で山，或いは山の精を意味し、古の札にあったＣａｌｙｘ（ケイリクス）は花の鍔や盾を、Ｓｅｃｕｒｉｔａｓ（セクリタス）は安全等を意味す

る単語である。

札はおもいっきり花札であるというのに、微かに見える文字はラテン語。そしてそのラテン語の字体は楓が見たのどかの札のそれによく似ていた。

何となく……ではあるが、パクティオーカードに“なりかかっていた何か”が別のものに練り込まれてこの札になったという感じがないでもないのだ。

というのも、

「何だか……再生紙を思い出すアルな……」

「でござるな……」

そう、再生紙などのエコロジーペーパー等にはめったにない事ではあるが、古紙の字が残っている事がある。

それが二人には思い出されていたのだ。

そう考えてみると急に符が安っぽく感じられてくるから不思議である。

現代の宝貝（パオペイ）と言っても過言ではない代物に対しての表現としては散々ではあるが……

尤も、だからと言って不快に思う訳ではない。

古もその力のお陰でやるべき事を成し得たのであるし、楓の方にしても心強い力を示してくれたのだ。
それで文句など思い浮かべたら罰が当たるという物である。

それよりなにより、

「しかし……実に横島殿らしいと言えなくもないでござるな」

「そーアルね」

“これ”を使うと言う事は、彼と共に戦っているようなものなのだ。

彼に背を預け、足りないところを補ってもらっている――彼女らからしてみれば、正にそんな感じがするのである。

一度約束すると必死になってそれを守ろうとし続け、力を貸し続けてくれる。
見た目がどうも安っぽくてイマイチ信用できなさそうなトコまでよく似ているではないか。

だから古はその札を持てている事が嬉しいのだろう。

彼女は自分の札を撫でながら、柔らかく微笑んでいた。

「むう……」

そんな古の様子を見、楓はその事が何だが異様に気になっていた。

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊

「横島君、お疲れ様」

「うぃっス……」

新田に続き、少女らにずっとタダキチの事を説明し続け、やっと全員に対してのそれが終了した時、流石の横島も疲れ果てていた。

何せこの日は班ごとに出掛けているので、帰宅時間がまちまちなのだ。
新田教諭に説明するのも結構手間取ったが、それよりも帰って来た班ごとに説明をするのが大変だった。
無論、新田の方が楽だった……と言う訳ではない。
何せ横島はパッと見が未成年。そんな彼が平日の京都にいるだけで不審がられたのだ。
それでも一応、家庭の事情で高校に行けず、やむなく用務員として麻帆良で働いている青年がいるという話を新田も聞いており、彼がその本人である事を瀬流彦が証明してくれたので何とか話はついた。
ただ、その場に帰ってきた少女が出くわしたのが拙かった。
何せ五月蝿い事と、ワケの解らぬ騒動を起こす事で３－Ａに敵うクラスはない。
『どーしたの?!』『誰かが連れて行ったの!?』等から始まり、ドコをどー聞き間違ったのか『売ったのー!?』と大騒ぎだ。
仕方なく横島は、新田の逆鱗に触れる前に少女らに冒頭のような説明をしたわけであるが……タイミングか悪いとゆーか運が悪いとゆーか、説明がし終わる頃に別の班が、そしてまた説明が終わる頃にまた別の班が……と、狙ったように順次戻って来て、『ねぇねぇっ　何があったのー?』『その人誰ー?』と聞いてくる。

相手が男子生徒とかなら兎も角、将来が楽しみなナイスな美少女揃いということもあり、やらんでも良いのに冒頭のような話を横島は続けたのだ。そりゃあ疲れもするだろう。

そしてやっと今、解放されたのである。

「アレがじょしちゅーがくせーパワーか……おっそるべ～し……」

「ははは……」

ぐったり～として呟く横島に、様子を見守るだけであった瀬流彦も乾いた笑いを漏らすのみ。

何だか使い魔の　かのこもグロッキー気味で座り込んでいるので、その疲労たるや想像以上なのだろう。

西の過激派に襲われた事や、それらを撃退した事、そしてその間の活劇も報告時に聞いているので、もうご苦労様と言う他無い。

その上、ただでさえ元気な少女らの中でも別格の３－Ａの生徒らを相手にしていたのだ。

瀬流彦もその苦労は以前から高畑より見聞きしている。

幼稚園児の無邪気さに小学生の元気さを足して思春期のズルさを持ち合わせている少女らを相手に、担任や教師のような義務がない

とゆーのに懇切丁寧に説明をし続けた彼には苦笑いしか浮かべられまい。

その瀬流彦は仕事時間内なのでスーツ姿。

一息入れるにはまだ早いからだ。

対する横島は楓らが買って来てくれたジージャンにジーンズ姿という何時もの格好。

何だかサイズが異様にぴったりなのを入手してきた楓に戦慄を覚えないでもなかったが、女の子のスリーサイズを神レベルの眼力で掌握してしまう彼から言えば然程でも無いのかあっさりスルーしている。

ネギも刹那もまだ知らない事であるが、麻帆良にはかなりの数の魔法使い……魔法先生&魔法生徒がいる。

この瀬流彦も魔法先生の一人で、今は一般教師として生徒らを守っており、乱暴な言い方をするのなら魔法使いとしては勤務時間外という事になるだろう。

しかし横島はまだ仕事中……正確に言えば任務待ちの警戒中である。

だから瀬流彦よりも気を抜く事ができないでいたのだ。

そんな彼に自販機で買ったペットボトルのお茶を差し出すと、ロビーのテーブルに突っ伏したままくぴくぴと音を立てて飲む。

イロイロあってホントお疲れのご様子である。

それでもちょっと掌にお茶を出しては　かのこに与える事を忘れないのだから何とも微笑ましい。

霊力を消費しまくってそれを充填すると言う大義名分の元、更衣室を覗きまくっていた彼であったが、そのお陰で楓と古に半死半生の目に遭わされている。

無論、九割九分九厘殺し程度でも、どーかなるような横島ではないのだが疲労困憊にはなっているのだ。

それに――

自分の中に居る自分の事もはっきり自覚してしまったのだし……

「横島君……？」

小鹿と戯れつつも深刻そうな顔をしていた横島をいぶかしんだか、瀬流彦も表情を変えて問い掛けてしまう。

「あ……、いや、何でもないっスよ……」

その問い掛けを　かのこを撫でて誤魔化す。

されるがままの小鹿であるが、スキンシップは大好きなので瞼を閉じて堪能しているようだ。

無論、誤魔化しきれる筈もなく、瀬流彦も唐突な表情の変化とそのヘタクソな誤魔化しに眉を顰めていた。

「それより、あの刺客の眼鏡姉ちゃんの事なんスけど……」

「え？　あ、ああ……」

あからさまな話のずらし方であるが、瀬流彦はあえて乗ってやった。

何だかこれ以上問うてはいけないような気もした事もあるし。

彼はポケットからＰＤＡを取り出し、システムを起動してさっき学園から送ってもらったデータに目を落した。

「えっと……どっちだい？」

「どっちって……あぁ、剣客の子も眼鏡だったっけ？
いや、そっちじゃなくて、符術使いの方っス」

横島はあの夜しか会っていないのだが、彼女（月詠）の方も何だか別の思惑を感じないでもない。しかし今は誘拐事件の首謀者と思わしき女の方が気になっている。

「あぁ、こっちの女性ね……えっと……」

天ヶ崎千草――

今回の件の首謀者として扱われている女性術師。
“先の大戦”のしこりなのか、西洋魔術師に対して根深い恨みをもっているらしく、その復讐を果たすために近衛　木乃香の強大な魔力を利用しようと企んだと思われる。

「先の大戦？　二次大戦っスか？」

「いや……その、そっちじゃなくてね……」

横島から言えば大戦といえば世界大戦しか知らない。

瀬流彦が何だか口を濁しているようだが、こちらの世界の“裏”では魔法関係の大きな戦があったと思われる。それもそんなに昔ではなさそうだ。

どこの世界でもオカルトな戦はあるという事なのだろうか。

「ま、別にそれはいいっスよ……問題は何をしようとしてたかって事で……
　そっちは……？」

「うん。まだなんだ」

流石にそこまではまだ調査は進んでいないようだ。

いくら手が長かろうが伸ばす先が見えていなければどうしようもないと言う事か。

それでも少ない情報からでも考えられる事はいくつかある。

例えばその大きな魔力を使って大量の式兵を操り、クーデターを起こして本山を掌握するとかだ。

式を操る魔力の核となっているのが長の娘の木乃香なら向こうもそう簡単には手だしもできないだろうし。

まぁ、単なる仮説であるし穴だらけの話であるが。

「巨大な魔力……ねぇ……
木乃香ちゃんのそこまで大きいんかなぁ……まぁ、あの歳にしてはある方だと思うけど……」

「そ、そう？
僕も今回初めて知ったんだけど、ちゃんとした方陣使ったら数百の式を同時制御できるほどらしいんだよ？」

「同時に制御できたって、一体一体がヘボやったら意味無いやん。
戦争は数だよ兄貴……とかよく言うけど、オカルト関係の争いやったら数より質がモノ言うぞ？」

「う、う～ん……」

そう言われると瀬流彦も言葉が続かない。

例えば伝え聞く英雄、サウドンド・マスターらは正しく一騎当千の力を見せたと言う。

それに瀬流彦とてある程度の戦いは経験している。だから彼とていくら数を集めても大した抗魔力をもっていなければ魔法で一薙ぎにできるだろう事を知っているのだ。

尤も、横島の基準で言う強大な魔力というのは恋人だった魔族の娘や、その妹達。或いはやたら縁があったお尋ね者の邪龍みたいなのが該当する。

尚且つ、彼の弟子を名乗る少女に至っては太古に何処かへと去った月の女神をその身に降ろした事まであるのだ。

その魔族の娘にしても、少なく見積もっても一級ＧＳの百倍は霊力があった。今更木乃香程度の内包力では驚けという方が難しい。

そーゆーのと比べる方に問題があるという説もあるが、彼が関わらされていた相手の多くが高いレベルの妖怪、そして神族や魔族、事件にしてもその多くが世界最高レベルだったのでこんな間違った認識のままなのもしょうがないかもしれない。

「ま、今はどーこー言うてもしゃあないか……

本山とやらのメンツもあるだろーし、あんま首突っ込んでも何だしな。

セルピコ…じゃない、瀬流彦先生もクラスの女の子を守んなきゃなんねーから手ぇ離せへんやろ？」

「……うん、まぁ実際そうなんだけどね……それより、その呼び方をどーにかしてほしいんだけど」

瀬流彦の小さな呟きなど右から左に流し、テーブルに突っ伏したまま顔をごろんと転がして窓の外を見やった。
日は既に暮れ、夜の帳が下りている。

今日という日は間もなく終わり、明後日は麻帆良に帰る日だ。無論、彼女を寮に送り届けるまで気を抜くつもりは無いし、明日も楓か古と共に五班にくっ付いて護衛するつもりであるが……

この京都奈良への修学旅行は、学校行事という以前に“西”の縄張りに“東の者”が入るという事もあって魔法先生は殆ど来ていない。
関係改善が行われる前に関西呪術協会の縄張り内に東の魔法使いが数を整えて侵入して行くのはかなり刺激してしまう事となる。
だからネギと瀬流彦……そして魔法使いではない横島くらいしか来ていないのだ。

よって西の術師が僅かでも手勢を整えてちょっかいをかけてくれば忽ち手が足りなくなってしまうのである。

無論、向こうとて魔法の秘匿ぐらいは心得ている訳で……ひょっとしたら今この瞬間にも“裏”で刺客らと本山の戦いが人の目に入らぬ場所で起こっているかも知れない。
だったら後は余り目立った動きを見せず、一般人を装って女生徒らへの被害を押さえた方がマシである。

「……兎に角、後は明後日……学園に着く時まで女の子らの護衛に集中するという事で」

「そうだね……」

責任の丸投げという気がしないでもないが、向こうからの申し出もないのに勝手にでしゃばる方が問題だろう。

まぁ、コトが起これば誰かに言われるまでもなく横島も動いてしまうだろうが……

彼とて恨み辛みからの行動も理解できないわけではない。それは自分自身が強く認識している事なのだ。

だから千草の想いも解らぬでもない。

しかし、木乃香の様な女の子を巻き込むのは断じて許せない所業であるし筋違いである事もちゃんと理解している。

「……魔神憎けりゃ魔族まで憎い……ってか？　オレはそこまでいかなんだけどなぁ……」

「は？」

「……うんにゃ。なんでもないっス」

憎むべき対象はいたが、“彼女”はその娘だった。

今考えてみると、敵対対象がいる種族全てを憎む……といった愚行は犯さずにいられたのは、“彼女”がその対象の娘だったからかもしれない。

だったらあらゆる意味で“彼女”は恩人ではなかろうか？

……尤も、その代わりに人と人外を分ける柵をほぼ完全に見失っていたりするが……

――いや、やっぱ自分が馬鹿なだけか？

そう溜め息を零しながら横島はやっと腰を上げた。

かのこも彼を見てひょこひょこと立ち上がる。

「横島君？」

何だか言い表せない表情をした横島に、瀬流彦は思わず問うように声をかけてしまう。

そんな戸惑っているのが丸解りの瀬流彦の様子をみて横島は苦笑を漏らした。

「オレも風呂入って英気を養う事にします。ここって混浴だし……あ、でもどーせしずな先生は……」

「え？　あ、うん。彼女は既に終わってると思うけど……」

どーせそんな事だと思ったよ。チクショーめ……と肩を落としつつ瀬流彦に背中を見せ、かのこと共に歩き出す横島。

瀬流彦は急にしずなの話が出て気を取られ、何を聞こうとしたのか忘れてしまっていた。

それが横島の狙いであったどうかは……流石の彼も解り得なかった。

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊

横島忠夫。

肉体年齢十七歳。

蟹座のO型。美形だ――っ！！？？　……最後はちょっと（かなり）違うか……

兎も角、大人的な落ち着きはあるものの肉体年齢に精神が引っ張られ気味の彼は、実のところ運はあまり宜しくなかった。

以前兎も角、今の彼は霊力が満たされている間はちょっとスケベ程度の人間であるのだが、一度霊力が下がると反比例して煩悩が増し、増加した煩悩でもって霊力を回復して行く怪奇エロ霊能人間となってしまうのである。

しかし実のところそれは運の無さとかではなく、女性問題と言えなくもなかった。

運が無い――というのは覗けば大半は失敗し、成功したらしたで碌でもない結果に陥る点だ。

完全に自業自得なのであるが、覗こうと思えば発見されて失敗し、偶に混浴に成功すると入ってくるのは女子中学生。

それだけならまだしも、それで霊力が回復してたりなんかするからアイデンティティの危機である。

この日、激減した霊力を回復せんが為に想像を絶する隠れ身の術で更衣室を覗きに覗いて覗きまくった彼であったが、冷静になった今でこそ解るがその時に着替えていた女の子は、間違いなく“女の子”というカテゴリーの年齢だったのである。

麻帆良学園中等部の用務員をしている横島であるが、生徒との接点はあまりなく、顔も良く知らないでいた。

楓と古、食事に行くから親しくなっている超と五月、仕事上でつながりができている真名。例外として楓に騙されて知り合いとなってしまった風香と史伽。これくらいだ。

だから当然、あやかとか千鶴、和美等の少女らの面識は新幹線内だけと言っても良い。

子供好きとして色んな意味で知られているあやかとて、横島の側に余りいなかったのだし。

彼女曰く――

「何と言うか……俳優の声を吹き替えで聞いている気分ですの。ネギ先生と違って、底知れない濁りを感じると言うか……不思議な話ですわね？」

不思議なのはアンタや……と、横島以外の者も激しくツッコミを入れた。

魔法による年齢詐称程度では彼女のショタセンサーをぶち抜けなかったと言う事なのか？

兎も角、３－Ａ……いや、麻帆良には中学生と言うカテゴリーから外れかかっているプロポーションの少女らが多い。

だから横島も自分を失ってしまいそーになる彼女らに余り接点を持たずにいたわけであるが……

昼間のシネマ村の一件で激減させた霊力を回復させるべく、『うっひょーっ』とどこぞのオコジョ妖精のよーに歓喜の悲鳴をあげつつ更衣室を覗いていたのは周知の通り。

だがよりにも寄ってそんな霊力回復に協力してくださった女性たちは、何と楓らの同級生である　あやか達だったのだ。

それに気付かされたのは二人の鬼に折檻を喰らった後。

『何であやか達を覗いたでござる！？』『中学生に興味ないと言たのは誰アルか！？』と怒られてからだ。

彼女らのプロポーションに心を奪われて中学生と気付けず、あまつさえ霊力をほぼ回復してツヤツヤしていたもんだからそのショックも大きかった。

というより、ボコられた事より中学生に萌えた自分を自覚してしまった方のイタミが酷かったりする。

そういう状況に浸らされつつある事こそ運の無さといえるのであるが……まだ彼にはその自覚が無かった。

まぁ、それは兎も角――

がんばったのにボロボロにされた横島を流石に不憫に思ったのだ

ろうか、身体を引き摺るようにホテルに戻った彼に対し、楓は、

『今日は横島殿に付いて行ったりしないでござるから、湯に浸かってゆっくりするでござる』

と優しく言ってくれた。

『Ｏｈ．．．Ｍｙ　Ｇｏｄｅｓ．．．』

旅行に来てから今日までまともな入浴ができておらず、ゆっくりと湯に浸る事がで来ていなかった横島が感謝の涙を浮かべたのは当然の事だろう。

そして彼は自分が単純である事をまたも思い知らされるのだった……

「くはぁあああ～……」

「ぴゅい～～……」

横島はちゃんと作法通りに掛け湯をしてから軽く身体を洗い、同じように掛け湯をした　かのこを抱っこし、ゆっくりと身体を沈めて湯を沁みさせていた。

溜め息にも似た深くて長い声が思わず洩らし、小鹿が真似るように鳴いたのはご愛嬌か。

何せ今の今まで温かな血だまりの中ばかりに浸かってしまっていた彼なのだ。

貸し切り状態でゆっくりと浸かれた露天風呂にむせび泣いてたりするのも当然である。

因みに露天風呂はペット同伴不可であるが、かのこはペットではなく使い魔。だからこれでいいのだ。とへ理屈で連れ込んでいる。抱っこしてるだけで癒されるし。

大体、この子は抱っこしてないと沈むし。

まぁ、混浴だと言うのに女っ気がゼロというのも物悲しいが、覗きの所為でめっさ怒られた後なのでしょうがないかと諦めもつく。

じょしちゅーがくせーに頭が上がらないのもまた物悲しさに拍車が掛かるのだが……

「ふぃいいいい～～……」

「ぴゅい～」

それでも深〜い安堵の溜め息が出るのはリラックスできている証拠。

小鹿の溜息と同時というのもナニであるが、何か気持ちよさげなので彼も気にしない。

入浴する直前、一緒に連れてってくれないの？　と見つめられただけでコレなのだから、甘いとゆーかなんとゆーか。

流石に煩悩力者だから子煩悩とか使い魔煩悩とかもあるのかもしれない。

先程までは大きかった　かのこであるがそれはカードの力とやらで、実際には小鹿のまま。

何か間の成長をすっ飛ばされた気がして物悲しかったのだが、札の力を解けばこの通りだ。お陰で彼は心を癒されている。

しかし、それでも完全にはリラックスし切れないでいた。

『……アレも……オレなんだよな……』

思い出されるのは昼間のシネマ村の一件。

確かに刹那と木乃香の命が危なかった。

それは間違いなく西の刺客とやらの所為であり、反撃に躊躇する必要は無かったといえるだろう。

しかし――

「だからって、あんな事せんでも……」

“珠”に込められた一文字。

それは漢字と同様にして一つで意味を成す文字。

一つで様々な意味を含ませられるサンスクリット文字の一字。所謂“梵字”だった。

無論、横島は人間の枠内でいる存在なので神仏を表すその文字の完全具現など不可能だ。

しかし、意味を持っている文字には違いないので、紛い物なりに極々小規模だけならそのとてつもない力を再現できるのである。

あの天守閣周辺だけなら完全消滅させられるほどに――

ただ……

「……オレはあんな字知らへんのに……」

サンスクリットはサンスクリットでも、横島自身は、

この横島は全くもって見た事の無い、古代の文字使いだった。

それこそが、“あの自分”が在るという証でもある。

バシャッと大きめの音を立て、横島は乱暴に顔を洗った。

ゴシゴシと湯で何度も顔を洗い、沈みかかった気持ちごと澱みをこそげるように。

「……」

濡れたタオルを顔に押し当てたまま、瞼の下の闇を見つめる。

無論、眼を閉じているのだから何も見ないし見えてこない。

だけどそのずっと遠くにいる自分の姿を幻視してしまうような気さえしてくる。

いや既にしてしまっているのかもしれない。

手繰り寄せる事は“絶対にできない”記憶。

実年齢までの経験。

それこそが自分を納得される唯一のものなのに……

その欠片すら、生まれてから十代後半までの記憶と経験が異様なほど鮮明になっている“今”だからこそ、恰も他人事のように感じられて“記録”から浮かび上げさせる事ができないのだ。

「……ったく……だったら感情ぐらい制御させろっつーの……
まぁ、女の為に身体が動くのは変わってねぇみたいだけどさ……」

零れる言葉は溜め息混じり。

今更嘆くつもりは更々無いが、愚痴の一つも吐かなきゃやってられないというのが正直なところだ。

言うまでも無く刹那らを救えた事に関して欠片ほども文句は持っていないのだけど。

「いやいや……
確かに冷静さにかけるのは感心できぬでござるが、友を助けてもらえた拙者から言えば感謝感激でござるよ？」

「ま、そー言ってもらえただけで嬉しいけどさ……
あの眼鏡姉ちゃん……千草ちゃんだっけ？　彼女を勢いで殺しかけたんだぜ？
サイっテーだよ……」

「うむ……確かに先に始末する事を考えるのはいただけないでご

ざるな。
　一番手っ取り早い方法であるからこそ、一番簡単に堕ち易い道でも在る……
　なれど横島殿はそれを自覚……いや、理解しているのでござろう？」

「ああ……」

「ならそれで良いではござらぬか。
　起こしてしまった事を嘆き続けるより、それを教訓として戒める。
　その方がずっと建設的でござるよ。
　幸いにして怪我人は“無くなった”事でござるし」

「ありゃあ木乃香ちゃんの力だよ」

「完治させたのは横島殿の力だと聞いているでござるが」

「いや、それだって珠の力を……」

「ほう？」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……えっと……」

「？」

「楓…チャン……？」

「あい？」

「な、

何でココにおるんじゃぁあ――――っ？？！！」

慌てて立ち上がりかける横島であったが、タオルを頭の上に乗せていた事を辛うじて憶えていたのか、腰の位置までで踏み止まる事

に成功。

今回は“ご披露”する事無く、身を捻ってややアクロバチックに再び湯に身を沈められた。頭まで。

その際、かのこだけは湯面に出していたのは流石である。

楓の方は流石に三度目。

慌てる事無く首から上だけを横に逸らして直視を避けられていた。

「（ぶくぶくぶく……ごぼっ）なっ、なんでココにおんねん!?付いて来たりせんゆーたやん!!　ウソツキ――っ!!!」

先程までのシリアスはどこへやら。

半泣きで楓に抗議する様は何時もの横島だ。

そんな横島の様にホッとしている楓であるが、露ほども見た目に表さずしれっとしたまま、

「はて？　拙者は嘘などついてはおらんでござるよ？確かに付いて来てはいないでござるし、一人で露天風呂に入らせはしたでござる。

拙者らが入っている所に勝手に入って来たのは横島殿ではござらぬか」

「ぬぉっ!?　何たる詭弁っ!!　乙女の恥じらいはドコ行った!?」

「御安心あれ。拙者、同じ轍は踏まんでござるよ。
このようにちゃんと学校指定のスクール水着を着用してるでござる」

スク水!?　と目を見張る横島。

なるほど確かにスク水だ。

この旅行中にどーやって入手したか全く持って不明であるが、肌にぴっちりと張り付いた紺色のそれは、漢らにとっての魅惑のアイテム。心を惑わす色になんか深い意味でもあるんか!?　とか叫びたくなってしまうそれに間違いなかった。

ロリちゃうねん。ノーマルやねんとほざきまくりつつも、こーゆーアイテムに心を惑わされているのだからその説得力も無いに等しい。

つーか、ジャスティスに至っては左手をぐっぐっと何度も握り締め、右手はパッキンパッキンと指を鳴らしていたりする。どんな感情が蠢いているのやら興味は尽きない。

おまけに楓の胸元はびろ〜んとひろがっているではないか。
そのダイナマイツ具合には流石の横島も血圧アップしてヤリパンサーだ。

「ちゃうんじゃ――っ!!

ちゃう、ちゃうんやっ！！　そーやないんじゃ――っ！！！」

ナニがどー違うのかサッパリサッパリであるが、例によって例の如く横島は近くにあった岩にガンガンヘッドバッドかまして血圧を下げようと無駄に努力をしている。

無論、そう簡単に落ち着けるわけがない。

先日、刹那によって切断され、ネギによって修理中となっていた風呂場の岩がたちまち粉々となった。

「あはは……風呂で騒いではいけないでござるな。あんまり騒ぐと人が来るでござるよ？」

「誰がオレをこーさせとると思とんじゃ――っ！！」

アイデンティティの崩壊の危機に、横島もマジ泣きで抗議する。

尤も、『あんまり騒ぐと、この水着に石鹸の泡をぬりたくってそれで横島殿を洗うでござるよ？』と言われれば、湯の中でも土下座して謝る他無い。

そんな“さーびす”受けたら完全にアウトとなるのだから。

楓にしても、先日一対一で風呂場で相対した時にはあれだけ慌てていたというのに、今の彼女は修学旅行前のペースを取り戻しているようにも見える。

――というのも、

「ぜぇぜぇ……
ん？　そう言えば楓ちゃん、みょーな事言わんかったか？」

「はて？」

「いや、その……拙者“ら”とか……」

“ら”と言ったのだから、単数形ではない。
普通で考えれば複数形という事になる。
それはつまり……

「……ろ、老師……」

「え……」

当然ながら今現在での横島の関係者の一人、古もいるという事で
……

まぁ、二人一緒でなければこんな事等できはすまい。

「え、えと、あの……」

「う、うん……」

霊力が下がっているからか、二人の霊気を隠す能力が上がっているのか、はたまた心を許しているので気付けなかったかは定かではないが。

兎も角、古がいてくれているお陰（所為？）で、楓もこうやってまともに彼と話ができているという事なのである。

が、

「さきは、その……」

「う…うん」

「……」

楓は、な～んかイマイチ面白くない……

シネマ村での一件。その件に関わった二人であり、当事者である。

その事が古の心に何を齎せたのかは知らないが、確実に朝よりは変化を見せて……いや、見せ付けていた。

「むぅ……」

古はなんだかもじもじとし、水着を着用しているというのに、まるで肌身を曝しているかの如く恥ずかしがっている。

横島もそんな彼女の仕種に触発されたかのように、どこか落ち着きのなさを見せている。

それがやっぱイマイチ面白くない。

「横島殿」

「うわぉっ！？」

いきなり二人の間に割り込みを掛ける楓。

横島との顔の距離は僅か五ｃｍ。とんでもない近距離である。

彼の驚きも知れると言うもの。

「なっ、何や何や！？　イキナリっ！！」

「はっはっはっ　お気になさらず」

「気にするわっ！！」

自分に対し半泣きになって抗議する横島。

それは自分によって陥落されかかっているからであり、自分に意識が向けられているという事である。

それがまた嬉しいのか、楓の笑みが増した。

「むぅ……」

すると今度は古の方が何か面白くない。

楓と同じ様に唸り、何か頬が膨らんでいる。

「老師」

ごちんっ

「おぷっ！？」

瞬動。

一瞬で楓と横島のとの間に割り込みが掛かり、楓は鼻を古の後頭部で打って蹲った。

そして横島との顔の距離は楓より近くて四ｃｍ。

「うっひゃぁあっ！？」

当然の様に横島は奇声を上げて後に跳ねた。

「な、何やちゅーんじゃっ！？　オレに対する挑戦か！？」

「べ、別に新たなるスタンド使いとかではないアルよ」

割り込んだまでは良かったが、どうも勝手が上手くいかない。
湯中りしかかっているのか、心構えなく発動させた瞬動の所為か、
胸がドキドキしているし。

「あ、あの……っ」

「う、うんっ！？」

「その……どうも…ありがと……」

小さく、
本当に小さく礼を言う古。

武術家として礼儀を重んじている彼女であるから、こんな風に礼を小さい声で言うのはおかしくもある。
そして本人も何だか大きな声で言えなかった事に混乱しているようだ。

助太刀や助力、そして霊波を習った後など言うそれとは違い、何と言うか……横島の中にある想いを知った事に対しての礼なので言い難いのである。

それが何を意味しているのかもやはり気付いていないのであるが。

そして横島は、俯きかげんで礼を言う古に萌え……もとい、苦笑しつつ、

「礼を言うのはオレだよ。
ありがとな、古ちゃん」

とこれまた礼を言って来るではないか。

へ？　と訳の解らぬ古は伏せていた頭を上げ、横島の顔を見た。

「あ……」

苦笑したままなのだから何時もの彼の顔。

いやじゃーっ　いやじゃーっと鍛練から逃げまくり、それでも最後まで付き合ってくれた後の顔そのまま。

だけど違う。はっきりと違っている。

同じなのに何だか違う、そして妙に眩しい笑顔がそこにはあった。

自然と古は目を伏せて俯く。

その笑顔に眩しさを感じた事もあったが、それより何より礼を言われる程の事はできていなかったのだから……

「あ、あイヤ……その、私は別に……何も……」

できなかった。

いや、正確には“届かなかった”。

確かに月詠には刹那と共に一矢報いる事はできたのであるが、それはお返しができた程度。

その刹那の事にしても結局は木乃香と共に危うく失いかけていたのである。

ギリギリで救ってくれたのは、この横島だ。

魔法の秘匿という約束事すら無視し、町の中を一直線に貫いて危機に駆け付けてくれた老師なのである。

だから自分の友を救う為に全てを無視してくれた彼に礼を言ったのであるが……

まさか自分が言われるとは思いもよらなかった。

「あん時さ……」

「ふぇ……？」

「あん時、オレ止めてくれたろ」

「……あ」

そう――

横島の“性質”が切り替わり、全ての禍根を先に絶とうとしていた彼を止めたのは、古の制止の言葉だった。

確かに心の中にも別の言葉は湧いてはいたが、肉体的に響いたのは間違いなく古の言葉だったのだ。

「あれは……その……」

「うん……あのままだったら皆危なかった。
木乃香ちゃん達を犠牲にし掛けたのに、このくらいなんて言われてさ、ぶち切れちまったんだ」

「それは……」

と、古が横島にフォローを入れようとする。

彼女とてそんな場面に出会えば暴走もするだろう。
或いは頭が真っ白になり、もっととんでもない行動をとってしまうかもしれない。

「でもさ、今さっき楓ちゃんにも言ったけど殺そうとしたら駄目だろ？
それに皆を巻き込みかけるなんて最低最悪に本末転倒じゃねーか」

怒りに我を忘れた事など何度もある。

同僚の娘が関わった植物妖怪の事件や、かの“魔神”の事件の時等がそうだ。

だが、それらの被害は少なくとも自分がメイン。他者への被害は少なかったと思う。

しかし今回は最悪だ。

意識が殺意に完全に持っていかれ、相手を消す事のみに集中し切っていた。

自分がズタボロになるのはいい。慣れてるし。“向こう”では毎日の様にボロゾーキンにされていたし。

だが、自分の所為で女の子に一生モノの傷を作るのだけは絶対にしてはいけない事だ。

だからこそ横島は心から古に感謝している。

慕っていてくれて、自分を止めてくれて、結局は皆を救ってくれた古に……

まだ誰にも言っていないし、言えない傷がジクジクと胸の奥で痛んでいる。だからその傷が広がるのを防いでくれた古に……彼はずっと感謝の念を向けていた。

――そう、もう二度と誰も失いたくないのだから。

古は今まで、これほどまでにストレートな感謝の心を向けられた事はなかった。

教えを乞う為に訪れてくる。或いは勝負を挑んでくる男たちは、自分と戦った後に感謝の心を贈ってくる。

その中に僅かながらも下心があり、その下心が全くのゼロで感謝する者はいないと言って良い。

だから他人から向けられる感謝の心というものを真の意味では知らなかったと言えよう。

しかし、横島は良い意味であけすけだ。

感謝の気持ちも本心からのもので、全く裏表がない。

楓と共にここで横島を待っていたのは、飴が無くなって子供の姿になれなくなっている彼と、明日の日程を相談する為という理由があった。

何せ女子中学生の群れの中にいる（見た目）男子高校生など目立つなんてモンじゃないのだ。

それに横島は楓と“そーいう関係”という噂があるのだから輪をかけて目立つ。

風香や史伽に食事を奢った事が彼女らの口から出たのだから尚更だ。

だからそんな彼と秘密の相談をする場として風呂を選んだという訳である。多分。

しかし、もう一つ別の目的があった。

任務遂行の意志より何より、自分らの友の身を本気で按じてくれた彼に対して感謝の言葉を述べたかった。

守ってくれただけではなく、どういった能力かは不明であるが、怪我や疲労まで完全回復してくれ、木乃香らが本山につくまで陽動をかって出てくれた彼に、大きくお礼を言いたかった。

だけど彼はそんな自分に対し、更に感謝の弁を述べてくる。

伸ばした手が届かなかった時の痛み、苦しみは尋常ではなかった。

あのまま二人が落ちていったとしたら……その時の痛みは想像を絶するだろう。

彼は二人と、そして自分を救ってくれたのだ。

心から助けを求めたその時に駆け付け、救ってくれたのだ。

どれだけ感謝しても追いつかないほどなのだ。

なのに彼は更に自分に感謝の弁を述べてくる。

自分を、皆を救ってくれてありがとうと言ってくる。

つまりはそれだけ、

それだけ、以前失った“誰か”の事が、“しこり”が残っているのだろう。

横島の笑顔が優しげであればあるほど、古の胸の奥がチクリとした痛みをつたえてくるのだった――

ごっ

「ぽぺっ！？」

そんな古の眼前に黒い物体……楓の後頭部が出現し、今度は古が鼻を強打して抑えて蹲った。

空気が読めないわけではないし、狙ったわけでもないのだが、古の周囲にあったシリアスな空気は楓によって一気に払拭されてしまう。

復活を果たした楓が、赤くなった鼻を抑えつつも身を翻して瞬動。

今度は彼女が古と横島の間に割り込みを掛けのだ。

そして距離は三ｃｍ。

「ひゃうっ！？」

当然ながら飛びのくが、背後は既に岩。
ごいんっ♪と実にイイ音を後頭部が奏で、目を回して楓の胸に倒れこんでしまう。

「お、おろ？」

意趣返しのつもりなのか、割り込みをかけたまでは良かったのであるが、意外（？）な展開。
こうなると楓も扱いに困ってしまう。

何というか……こんな風に胸元に異性を抱きしめる機会等なかったので、混乱もするというもの。

ネギは子供過ぎたのでその範疇ではなかったのであるが、横島はれっきとした大人。見た目でも青年だ。
別ら後ろめたい事などありはしないのであるが、何だか不純な事をしているような気さえしてくる。

おまけに……

『く……い、意外に抱き心地が……』

良いのだ。

これが横島の弁なれば納得できよう。
しかし楓の感覚なのだから驚きだ。

まだちゃんとしたスキンシップをとった事がないのに、この程度で混乱していたら先が思いやられるというものである。

湯あたりしかけたのか、楓はポ～っとした顔で横島を抱きとめ続けてたのであるが、ふとそんな彼の背に目を落して表情を一変させた。

「む……」

いや――

彼の肌を見る機会は何度もあった。
全身をウッカリ見てしまった事も。

しかし、身体を赤く温めたのを見たのは初めてである。

赤く火照った横島の肌には、おびただしい傷痕が浮き上がっていたのだ。

『……出会った時の傷痕は殆ど見えないでござるが……』

そこらへんは……まぁ、横島だし。

『む……？！　首の頸動脈にも致命傷の痕が……』

何か鋭い刃物で斬り裂かれた筋が赤く浮かんで見えている。

楓だからこそ解るのだが、刃物のように鋭いもので斬られ、然る後に完治させた痕だ。

『そして背中のこれは……』

火傷の跡とは明らかに違う。

何せ赤く火照ってから浮き上がっているのだから。

しかし、高温で肌を焼かれたとしか思えないような痕がそこに現れている。

「……」

そしてそれは、彼が数多くの人外との戦いを経て来た証でもあった。

「……横島殿」

楓は、無意識にきゅ…とその頭を抱きしめていた。

何がそうさせたかは解りはしないし、彼女がはっきりと理解できるとも思えない。

しかしそうする事が必然であるかのように、楓は横島の頭を抱きしめてしまっていた。

闘いには痛みが伴う。

身体であったり、心であったりだ。

そして彼の身体には無数の痕がある。

下手をすると、その傷の分だけ心にも痛みを負ってしまっているのかもしれない。

そう考え付いてしまうと、こうする事以外にどう行動できようか。

少なくとも、楓はそれだけしか思いつかなかった。

その想いが愛しさだと気付けぬまま――

「カ～エ～～デ～～～……」

ぶんっ！！

「おぉっ！？」

楓の頭部があった空間を、鉈のような蹴り脚が薙いで行った。

直前に殺気を感じた彼女は横島を抱えたまま身を逸らして無事だったが、当たればただでは済まなかっただろう。

「うーむ、腕を上げたでござるなぁ……

湯面に波紋も立てず蹴りを放つとは……なかなか……ではなく、何をするでござるかっ！？」

実際、蹴りが来るまで風呂の湯が乱れもしていなかったのだ。

それでいて技が使えたのだから、全くもって大したものである。

楓も誉めてやりたくなってしまう程に。

無論、

訳の解らない攻撃をされなければ――の話であるが。

「何をするでござる……じゃないアルよ！！　ナニ老師を独占してるアルか！？」

「は？　いや、別に拙者は……」

「そんなコトしてて説得力ないアル！！」

『へ？』と改めて下に目を落すと、横島の頭は強く抱きしめられ……とゆーか、胸に思いっきり顔を沈めさせている。

なんかピクピクしてるし、チアノーゼを起こしてるっポイ顔色もしてるではないか。

「ぬ〝ぉっ！？　横島殿！？」

慌てて身から剥がし、ガクガク揺するが意識は戻らない。

そのかわり霊力はフルチャージされてたりするトコは実に彼らしいが。

「大体、何アルか！？
“私達”の話に割り込んできて……説明を求めるアル！！」

何だか怒り心頭に達している古は、何時もより気が短めでプンスカ怒っていた。

だが、楓の方の何かカチンとキている。

「“私達”？
拙者“ら”の話に先に割り込みをかけたのは誰でござったかな？」

「知らないアルね」

「ほほぅ……？」

何を張り合っているのかお互いが解かっていないのであるが、古の返答の直後、ぐにゃり……と二人の間の空気が歪みを見せた。

立ち上る湯だけではない、砂漠の陽炎のような高熱の揺らぎを感じさせている。

楓の目が針のように光り、古の口元が鮫のように横に伸びた。

「ふふふ……
カエデぇ～……一つ私がどれくらい強くなれたか見てほしいアルなぁ……」

「ふっふっふっ……

ここは一つ、古には拙者の符の力をはっきりと見せておく必要があるでござるな……」

ふふふふふふ……
ふっふっふっふっ……

温かな春の夜の露天風呂。

その中だというのに妙に底冷えのするワライが反響する。

ひとしきり耳障りなワライが響いたあと、耳が痛くなるような静寂の瞬間が訪れ――

「「勝負っ！！」」

斯くして、
本人らの以外には全く無意味なバトルがおっ始まるのだった。

その闘いは、目覚めた横島が二人の全裸キャットファイトを目の当たりにし、鼻血を噴いて生死の境をさまようまで続いたという。

無論、後で彼にみっちり怒られた事は言うまでもない……

その頃――

「……彼は一体……」

「ひっくひっく……ぐすぐす……
も、もうお嫁さんになれへん……」

「なぁなぁ、新入りと千草の姉ちゃん、どないしたんや？」

「さぁ～？　彼の方は何だかよく解らない目にあったそうやしー
千草さんの方は口にする事もできひんよーな目に遭わされたみたいですよ～？」

「ワケわからん……
ん？　そっちは何や顔がツヤツヤしとるみたいやけど、なんぞエエ事でもあったんか？」

「ええとっても……
　ちょっと荒かったんですけど、将来が楽しみな人と闘り合えたんどすわぁ～……」

「へぇ～……ええなぁ……ま、オレもちょっとオモロイ奴に会えたけどな。次は勝つけど」

「あはは～　お互い、ええ想いしたいう事やねー」

「せやな」

「「あははははは……」」

「うっさいわっ！！　人が落ち込んどる時に何楽しげに話ししよりますのんや！！
　くぅぅ～～～～……ワケ解らん変態の所為で悉く策は失敗。
　おまけにお嬢様には本山に入られてまうし……
　あん結界ん中に入られたら、こっちは手ぇ出せしまへんし……
　散々や！！」

「千草さんも大事なモン無くしてしまいましたし～」

「まだ無くしてへんっ！！」

「なんや？　大事なモンて……」

「ん～……コタローはんも何時か奪うモンやろなー」

「はぁ？」

「コ、コイツら……」

「……まだ手はある……」

「え？」

「……僕に任せてくれないか？

流石にここまでされたら後には退けない……」

空では月がワライ、

風は狂ったように咲く桜の花びらを舞わせる。

その花の香に酔うように全ての駒の位置が狂いを見せる。

そして駒では無い駒の出現が流れを狂わせ、

狂わせられた流れは激流へと周囲を誘う。

かくして狂乱の舞台は整い、

その幕は、これから上がる――

後編（後書き）

何とか手直し修正いたしまし、あの戦いの夜手前までこぎつけました。

何気に入った　かのこですが、実は後から響いてきます。
ネタバラになりますが、何気にシロのボジに近いものがあり、その所為で巻き込まれるものもいるという訳で……ええ、だからこそ前の時は出さなかったんです。

さて次はあの夜の戦いですんで　ちょっとシリアス気味。
まだ戦闘技術を確立してない横っちだから珠をそこそこ使ってしまいます。
珠に頼るのって、安易だからしたくないんですけど、記憶がないので勘弁してください。

という訳で続きは見てのお帰りです。
ではでは～

正座には結構慣れてはいたのであるが、流石に露天風呂の岩の上は痛かった。

しかし、ぶっちゃければ自業自得。

大人の男性に対し余りと言えば余りにも無防備過ぎる姿をぶち曝し、彼を堕天（解脱という気もしないでもないが……）させかけた罰としては破格とも言える。

が、怒られている暴走乙女らには反省は薄かった。

『石の上に正座なんて……乙女の柔肌に傷がついたらどーしてくれるアルか？』等とぶちぶち文句を零しつつも、『あ、でも責任とってもらえるかもー』とか思考が連結してしまうのは年頃故なのか？

いや、適齢期にはまだ遠いが。

見た目が超高校生クラスであるくノ一ちゃんも、『おお、それも良いでござるな』等とトンデモ発言かます始末だ。

『何考えとんじゃ――っ！！』等と普段セクハラかまして殴られまくっていた青年ですら滂沱の涙を流しつつ怒りのツッコミを入れてしまう程に。

これが若さか？　いや、ちょっと違うだろう。

「……ものごっつ疲れたから寝る」

流石にイロイロな出血も多かったし、昼間の一件で青年も疲労困憊。

マトモに話を聞いてくれなさそーな二人にそう言い残し、心配そうに見上げている　かのこを引き連れて貧血気味でフラフラと頼りない足取りで自分の……今朝までタダキチ少年が使用していた……部屋へと戻っていった。

風呂の中の懲りない二人も流石にやり過ぎたかな～と、少しだけ後悔していたのであるが、よく見ると彼の“氣（霊力）”はフルチャージされており、肉体とは反比例して元気爆発がんばるがー状態だ。

だから寝るだけでどーにか回復するだろうと確信し、けっこうアッサリとロビーに戻って来ていた。

昼間のあのキョドりはどこへやら。お前らの所為でもあるんだから心配くらいしろよと言いたい。

まぁ、ロビーに戻ったところで取り立てて用があると言うわけでもないのだが。

単に修学旅行の最後の夜なのだから勿体無い気がするだけ。

まだ宵の口にも達していない時間であるし、古はその日に起こった一件で静かな興奮状態が続いていて、そのまま寝るなんて事ができないのだ。

だからという理由だけでもないが、特にする事も無い二人は外で購入した菓子の残りのポテチを片手に、仲良くペットボトルの烏龍茶を買って話をしながら歩いていた。

何と言うか……とても謎の理由によって露天風呂の中でキャットファイトを行った間柄には見えない。

「それにしても、古は腕を上げたでござるな。氣の密度がまた上がってたでござるよ」

「いやぁ……まだまだネ。
楓の分身くらい密度を上げられないと実戦にはあまり向かないアル」

等と会話も穏やかだ。内容は物騒だが……

男が関わらなければやはり仲良しで名が知られている３－Ａの級友。
おまけに武道四天王の二人なのだから話も合う。そして今や同じ男の相棒をしている者同士なのだし。

……何とも微妙な立ち位置も含まれてたりするのであるが。

「……しかし古。

あの刺客の者ども……諦めると思うでござるか？」

「……多分、無理ネ。
隙を窺っているだけ思うアルよ」

楓もそう思っていたからだろう、古の言葉に『で、ござろうなぁ……』と溜め息を吐いていた。

露天風呂の中では間違った乙女心が暴走特急かましていた二人であったが、実のところ結構状況を真面目に考えている。

こういったところをもっと横島にも見せていれば好感度アップのフラグが立つ事は間違いないのだが、いかんせん彼の側にいるとミョ～にはしゃいでしまって上手くいかない。

尚且つ、それが好意を持つ異性の側にいるからだという自覚もイマイチ足りていないので空回りは続いている。
超や真名の心労は如何なものか？

閑話休題（まぁ、それはさておき）――

自分の責務をしっかり自覚している二人は、結局同じ話に戻ってきていた。

無論、その責任感を悪いとは言わないが、修学旅行中だというのにこんな話ばかりというのも考え物だろう。

普通の少女らなら襲撃の恐怖で堪ったものではないだろうし。

だが、二人とも中学生とは言っても既に達人クラスの武道家でもある。

その心はそれでもリラックス…とまではいかないが、然程プレッシャーを受けているように感じられない、落ち着いた雰囲気で二人は空いている席を見つけて歩いて行く。

めいめいに散っていた他のクラスメート達も大半が戻ってきているので私服でいる者は少ない。

目に入るクラスメートは全員が入浴後なため浴衣を着ているので、ばっちりチャイナを決めている二人はやたら目立っていた。

楓は胸のボリュームがかなりのものであるし、古にしてもボリュームと言う点では劣ってはいるがやたらプロポーションバランスが良い。

そんな二人が何の意味があるのか着飾ってたりなんかするものだから、ホテルの従業員の目すら引いてしまっている。ドコの接客商売の方なのか問い掛けたくなるほどに。

男らの眼差し等気付いた風もなく、如何なる連絡も付き易いようにフロントからちょっと離れたソファーに腰をおろす楓。

足を組んで座るものだから、スリットから零れる長い足が強調されて殊更色っぽい。おまけに無自覚。性質が悪いにも程がある。

しかし、そーいったエロっポイ……もとい、色っぽいチャイナを着ている理由はというと、無論動き易さを重視して……と言うだけではなく、何とゆーか……某青年の目がスリットに釘付けになるであろう事が面白くて着用しているよーな気がしないでもない。

ちゃっかり便乗しているのが古であるが、本家中国人がチャイナ

服の尻馬に乗るのは如何なものか？

「うーむ……どうせなら横島殿の部屋にこの格好で突撃をかけた方が面白そーだったでござるな」

「……安眠妨害アルね。
そんな事したら老師に嫌われるアルよ？」

「むぅ……」

「私だてガマンしてるアルから、楓もガマンするネ」

――しかし、“敵”の動きについての考察以外の会話はやっぱどこか子供っぽい。

二人して妙な色気漂わせてはいるが、男に関しての話はコレであるし、持っている物はポテチの袋。
何とも微妙な取り合わせであった。

と、妙な方向に和んだ話を続けていたそんな時、

楓の持っていた携帯電話が音楽を奏でた――

「お？　ゴッドファーザー、愛のテーマ曲アルか？」

「拙者の携帯でござるよ。

おろ？　リーダーからでござるな」

ちょっと前までは通常着信音だった音楽であるが、横島に（というより“裏”に）関わってからは夕映専用に変えてある。何せ学園長との仕事上の直通コール、横島や高畑との緊急用直通コールまであるのだから。

因みに古も同様の理由で着信を色々割り振っているらしいが、楓のチョイスに『何故に夕映の呼び出し音が？　でも何か似合ているよーな気もするアル……』等と呟いていた。

そんな彼女の呟きに苦笑しつつ、楓は携帯を取り出して……

着信ボタンを、押した――

「遅いですわっ！」

「ごめーん。イインチョ」

浴衣を着てすっかり寛いでいたあやかであったが、それでもクラス委員という責任感もきちんと持ち合わせている。

全ての班がきっちり戻って来ているかロビーでチェックしていたのだ。

そんなあやかに遅くなった事を然程悪びれてもいない祐奈は、片手で拝むだけというおざなりな謝罪を行った。

あやかはあやかで、とりあえず無事に戻って来てくれたので一安心してホッと胸を撫で下ろしていた。無論、顔には出していないが。

「やれやれ……」

そんな祐奈の班の最後尾を溜め息を吐きつつ真名が歩いていた。

アトラクション好きの祐奈らの希望でＵＳＪで１日過ごしていたのであるが、何だかみょーな虫の知らせが続き、イマイチ楽しみ切れていなかったのだ。

それは嫌な予感とかではなく『ムカつく』とかいった類のもの。
そのヤな虫の知らせを飛ばしてくれた者には見当がついていたりする。

『おのれ楓め……ドコだ？』

ワケ解らん理由で心労を溜めさせおってからに……こーなったら行き着くトコ行かせて引導渡してくれる。

『場合によっては二人に媚薬を盛って布団部屋にでも……』とかなり拙い思考に傾いていた。

ぶっちゃけ言い掛かりの上に八つ当たりであるが、戦場で鍛え上げられている彼女の勘はバッチリ当たっているのでどーしよーもない。真にくだらない事に活用されている勘ではあるが……

しかし捜索する必要も無く、真名はそのターゲットの少女を直に見つけ出す事となる。

「む？」

彼女がロビーに入ったのとほぼ同時に、当の楓がソファーから立ち上がったのだ。

「楓……？」

こちらに背中を向けているのでその表情を読み取る事はできないが、それでも言い様の無い緊張感がその背中から伝わってくる。

彼女を見上げる形となっている古もやはり緊張の面差しをしているではないか。

「……古。
すぐに横島殿をお呼びするでござる」

「わ、解たアル！」

古はその電話の内容を聞いてはいない。

しかし、楓より伝わってくる空気からただ事ではないのが解るのだろう、何か問う事無く横島の部屋へと駆けて行く。

「クーフェイさん、廊下を走ってはいけませんわ！」

「すまないアル！！」

途中、あやかに怒られるが口先だけの謝罪で走り抜けてゆく古。

あやかにしても何時もなら追いかけたりしてもっと説教臭いセリ

フを吐くであろうが、古の雰囲気から何かを感じ取ったか直に口を噤んでその背中を見守るのみ。

何だかんだ言われている彼女であるが、やはり聡明ではあるのだ。

そんな様子を見やってから、真名はゆっくりと楓に歩み寄って行く。

「真名……」

しかし楓は振り返る事無く携帯を閉じ、歩み寄って来ているであろう彼女にそう声を掛けた。

「何だ？」

気付かれていた事に驚く事も無く、真名は何時もの様に……

――いや、極自然に言葉を返しつつその雰囲気を切り替えていた。

イラつかせた級友に仕返しをしようとしていた女子中学生のそれから、

「……仕事か？」

プロのそれへと――

その言葉にやっと楓は振り返り、幾分緊張したその顔を真名に見せた。

「……のようでござる。
お主に依頼せねばならぬ程、厄介な事態が起こってしまった故……」

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――

■十一時間目：月ノ輝クヨルニ（

前）

凄まじい数の桜の木々から零れ落ちる花びら。

狂い咲き――という言葉があるが、正にそれを体現しているかのよう。

大きく欠けた月の下。

屋敷の内外を舞う花は雪花と見紛うばかりで、狂気と紙一重の美しさがあった。

しかし――

「こんな……」

手に握り締めている父の杖。

その手に篭る力は怒りか、自分に感じる無力さからか。

倒れ付す二人の少女――腹に一撃を喰らってうめいている刹那と、全裸で横たわっている明日菜とを庇うようにネギは己を奮い立たせつつ目の前に立つ“敵”――

「こんな酷い事をするなんて……僕は許さないぞ！！」

銀髪の少年の凶行を強く否定していた。

――美しい筈の花弁の舞いは、本山で行われた凶行を彩る材料にしかなっていない。

親書を何とか届ける事に成功したネギは、木乃香の実父であり関

西呪術協会の長である詠春に歓迎の宴を受け、何故か付いて来ていた和美らと共に楽しい一時を過ごしていた。

しかし、その夜――

自分の生徒らの悲鳴を耳にし、彼女らの部屋に駆けつけた彼が目にしたものは、動かなくなっている自分の生徒……石に変えられたのどか達の姿だった。

そして刹那と合流したネギの目の前で、長までもが魔法によって石に変えられてしまったのである。

狙いは木乃香。

何と敵はその木乃香を奪取する為であろうか、邪魔にならぬよう本山の人間全員に石化魔法を使用したというのである。

敵が如何なる手段を用いて守護結界内に侵入してきたかは不明であるが、それに気が付いた二人は慌てて明日菜と共にいるであろう彼女を探し始めた。

が、既に五体満足な者は本山に残っておらず、木乃香の守りは明日菜ただ一人。

幾ら強力なアーティファクトを所持していようと明日菜は戦いの素人。

敢え無く倒され、理由は不明であるが全裸で横たわっていた。

そして刹那すら不意を突かれて一撃で倒されてしまったのである。

この、目の前に立つ銀髪の少年ただ一人に――だ。

「許さない？」

ネギから発せられる気。

それはその年齢からは考えられないほど強く激しいものだ。

だが、その少年からしてみれば微風にも満たない。

よって感情に揺らぎという波紋を齎す事も無い。

「……それで、どうするんだい？
ネギ＝スプリングフィールド……」

ネギを真っ直ぐ見据える少年。

その眼差しには嘲りや侮りも無く、やはり感情は感じらない。

だが、ネギは気付いていないようであるが、その少年は緊張を全く解いていない。

まるで何かを警戒しているかのように。

「僕を倒すのかい？
……止めた方がいい。
今の君では無理だ」

少年は客観的な事実を淡々と述べる。

ネギだけではなく、刹那や長、この本山の関係者らもこの少年の話はちゃんと聞いていたし、念の為にと結界も強化されていた。

にもかかわらず侵入を許し、尚且つ本山で務めている術師を含む巫女達全員を石化されて、あまつさえ木乃香までもまんまと攫われるという大失態を犯している。

いや、“これ”は単純に油断だったという訳ではない。

この少年の桁が違っていただけなのだ。

しかし彼は何かを気にしていた。

何かを気にしているからこそ、“それ”の襲来を回避するように

術を使用しているのだ。

「あ…っ！？」

ネギから視線を外すと同時に足元から水が巻き上がり、少年の身を包んで行く。

慌てて止めようとするが一歩も二歩も遅く、少年は水に沈むようにその場から姿を消した。

またしても水を使った転移術。

ネギも、そして刹那らもその術には見覚えがある。

初日の夜に襲撃を掛けて来た千草達を逃がした“あの”水魔法だ。

ネギは、あの晩と同じ様に、敵に撤退を許してしまった。

「く……っ」

後に残ったのは水溜りのみ。

『兄貴、こりゃああん時と同じ、水を使った移動魔法だ。
ヤローかなりの高等魔法使いのよーだぜ！？』

「……」

それでも無念で涙が滲む。

自分がもっと気をつけていれば……

本山に着いた後ももっと気を張っていれば……

そんな想いの輪の中に陥りそうになってくる。

あの雪の日のように――

『兄貴、アニキっ！！』

「あ、わぁっ！？」

思考に沈みかかったネギを引っ張り上げたのはカモの声だ。

その声に蹴り上げられるように背を伸ばし、魔法でタオルを手繰り寄せて明日菜に掛けてやり、刹那に駆け寄って抱き起こす。

「刹那さん、大丈夫ですか！？」

「ネ、ネギ先生……ぐ…っ」

「見せてください。軽い傷なら僕にも治せます」

やや強引に服を捲り上げ、色が変わっている腹部を見てやや眉を顰めるネギ。

幸いにも打撲で済んでいるだけであるが、それでも女の子に暴力をふるっているのだから許す事はできないのだろう。

右手に魔力を集め、治療魔法を開始する。

木乃香が攫われた事もあって時間が無く、応急手当くらいしかできないがそれでもかなりマシな筈だ。

治療されている刹那にしても悔しくてたまらない。

まんまと木乃香を攫われてしまっただけでなく、同じ相手に二度も不覚を取っているのだから。

『二人とも落ち着けって！！
わざわざ石化を使ってきたって事は、堅気に危害を加えるつもり無いってこった！！』

「私、エラい目にあったんだけど……」

『それは兎も角っ！！』

くわっ！！　と目をかっ開いて明日菜の訴えをスルーするカモ。

処置が終わったのか、刹那もすっくと立ち上がり、得物を握り締めて後を追おうとしていた。

『見ての通り、あのガキは長の言ってたよーにタダ者じゃねぇ。
無防備に突っ込んでも石像が二つ三つ増えるだけだぜ？』

「で、ではどうしろと……？！」

焦る刹那を諭すようにカモは手（前足？）を前に出して静止を促す。

我ニ成算アリと言わんばかりに。

ただ……ニヤリとしたアヤシイ笑みも浮かべてはいるが。

『刹那の姉さん。兄貴の事……好きかい？』

「え　〝っ！？」

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊

ただ風が木々を撫でて行く音だけが響いている巨大な門前。

夜間である為か不可思議な光を灯らせているが、普段は温かみを感じさせてくれるそれすら沈黙という空気を照らし出すのみ。

かかる現状ではざわめきという静寂を彩る材料と化している。

不思議な事に、三日月の灯りすら煌々とした輝きに感じられてしまう。

それほど生者の息吹が感じられないのだ。

いや、感じられなくなっていた。

と――

キュバッ！！

突如としてその門の前の空間が弾けた。

「わぁっ！？」

「何と…」

「へぇ……」

現れ出でたのは三人の少女。

帰ってきてすぐの着の身着のままの真名に、チャイナドレスの楓と古。

そして――

「古ちゃん、こっちか！？」

「え？　あ、うん。そ、そうアルよ」

その少女らを引き連れて瞬間移動を……『転』『移』を行った横島忠夫と使い魔のかのこである。

長距離の瞬間移動という荒業に驚いている少女の心情すら気付かず、閉じられている山門に突撃を掛けていた。

しかしやはり彼は焦っているのだろう。

仮にも西の本山を守っている山門を、どんどんと叩いて手で開けようとしているではないか。

「横島殿……それは」

流石に楓が止めようとする。

その結界強度の程は知らないが、それでも守護結界というのだからかなりの強度を持っている事は何となく理解できるのだから。

だから手を伸ばして彼の肩を――

「開けっつってんだろっ！！！」

カッ

彼の手の中、

一瞬で意味が込められた“珠”が光を放ち、『開』という概念が門に叩きつけられる。

如何に防御力が高かろうと魔法結界が強かろうと、“概念”に抗する力を持たせる事はまずできない。

そして概念を変えられたらそれに従わざるを得ないのだ。

バンッ！！

まるで西部劇に出てくる酒場の戸のように勢いよく“内側”に開いてしまう門。

余りの事に少女らは呆気にとられるが、今の横島にはそんな彼女らに気を使っている余裕が無い。

既に開いた瞬間には、中々開かなかった事に舌打ちをしつつ駆け込んでいたのだ。

「ぴぃっ」

「あ、老師！」
「待つでござる！！」

先に追従したのは　かのこ。
次いで再起動をはたして二人が後を追う。流石に使い魔は戸惑わないようだ。

真名もそれに続くが、門を潜って直に“蝶番”部分を覗き込んでみた。
案の定、その部分は逆方向にひん曲がっている。

御山の守り。
関西呪術協会のの要とも言える表門が、内側に開いているのだ。

門というのは元来守りに入るよう出来ている。
よって攻められた場合になるべく持つよう外開きなのは常識だ。
間違っても“内側”に開く事などありえないのだ。

その奇怪な現象を頭の隅に残しつつ、真名は三人の後を追って駆けて行った。

関西呪術協会の本山は、横島らが宿泊しているホテルから結構離れており、移動には電車を利用せねばならない。

しかし切羽詰っているこんな状況で悠長に駅に駆けつけて電車を待ち、乗って移動するなどという手順を横島が取れるわけが無い。

当然、彼は最短時間で本山にたどり着く方法をとった。

木乃香を送って行った古も、ネギに付いて行った楓も本山の位置を覚えている。

だから彼は二人の記憶を明確に『伝』えてもらい、その記憶されている場所に『転』『移』したのだ。

屋敷の中ではなく山門の方に出てしまったのは、楓が中に入っていないからで、より記憶を鮮明にする為に二人の記憶を“同時”に『伝』えてもらったが故の弊害である。

それでも然程の時間を取った訳ではないが、こんな状況では一分一秒が惜しい。

「くっ……人の気配がしねぇっ！！」

「手分けして探してみるでござる！」

多少の混乱はあったものの、屋敷に入る事ができた三……いや、四人と一頭。

しかし本山にはやはり人の気配は全くしなかった。

連絡を入れてきた夕映はとっくに外に出ているから無事であろうが、そのお陰で中で何が起こっているのか解らないのだ。

「？」

そんな中、真名だけは外部に力の奔流を感じていた。

それほど離れた場所ではないが、さりとて近いと言うにはちょっと距離が離れている場所に、確かな魔力を察知したのである。

『召還……か？

しかしここに攻め入るにしては……遠過ぎるな』

警戒はしているが、今は調査も大事だ。

何だかんだで３－Ａの面々には愛着がある。

そう簡単に見捨てるつもりは更々無いのだから。

屋敷内はさながら化石の森だった。

会う人会う人……

いや、ある物ある物が石にされた人間なのだ。

抗おうとする者、戦おうとしている者、そして逃げる者。

様々な状態で、ここにいる老若男女の全てが石へと変じさせられていた。

「クソっ……」

普段ならば大喜びをするであろう巫女の群れ。

それらまでもが石に変えられている光景は、女子供に対して底抜けの優しさを持っている横島の導火線を更に短くして行く。

口から出る言葉に勢いは無いが、その代わり異様に重い。

彼の後を駆けている古の方が物理的に圧力を感じてしまうほどに。

「老師……落ち着くアル」

「解って……っっ！！
……うん。解ってる……ごめん」

思わず語尾を荒げかかるが、直前にジーンズの裾を　かのこが噛んで引っ張った。
引き止められた事と古の悲しげな視線に気付き、何とか気を静めて言い直す。

一瞬、びくんっと身を竦ませかかった古であるが、思っていたより横島に冷静さが残っているようでホッとしていた。
彼は嗚咽する時のように震えつつ息を吸い、大きく吐いて爆発寸前の感情を無理やり抑え込んでいる。
大丈夫、大丈夫だから、と　かのこの頭を撫でているのだが、それはまるで自分に言い聞かせているようであった。

古はそんな横島を見て身体が震える。
いや、彼の事が怖いのではない。
彼の何かが無くなってしまいそうで怖いのだ。

「！？　老師っ！！」

そんな古が突然立ち止まり、横島を呼び止めた。

その切羽詰った声に横島も反応して慌てて振り返って何事かと古を見る。

「どうかしたのか!?」

「あ、あれ……」

古はそこから眼を離さず、彼に教えるよう指を差した。

その指先に促されてそこに目を向けると……

「？　誰だ？」

大きな屋敷の部屋に面している廊下。

その廊下の中ほどにポツンと佇んでいる人影一つ。

言うまでも無く石化しているのだが、その石像は数少ない男性のものだ。

しかしその裾長浄衣姿は身分が高そうな気がしないでもない。

「あのヒト……このかのパパさんアル……」

「んなっ！？」

無念そうな表情を浮かべたまま石と化していたのは、この関西呪術協会の長であり木乃香の実父、

近衛　詠春その人であった。

「楓。そっちはどうだった？」

彼女の直側に姿を現した楓に対し、驚いた風もなくそう問いかける真名。

しかし楓の表情は硬く、黙って首を横に振るのみ。

解ってはいたが、現実の言葉として与えられると流石の真名も表情が苦くなる。

この本山の者達にしても、残念ながら真名の眼を持ってしても（この場合は不適切な表現であるが）生存者は見つからない。

尤も、確かに高レベルの魔法ではあるが永久石化のタイプではないだろう。

ならばそれなりの術者であれば……例えネギ先生クラスでも解呪は可能だろう。それだけが救いである。

しかし、だからといって安全だとは言い切れるものではない。

「……反旗を翻した……という訳ではないようでござるな」

「ああ……」

本山関係者を全員石にする……というのはクーデターとしてはおかしい。

いや、確かにクーデターだから全員抹殺せねばならないという訳ではないのだが、それにしたってやり方にかなり疑問が湧いてくる。

確かに関西呪術協会は西洋魔法に対してよい感情を持ってはいない。

楓は兎も角、真名や刹那は情報としてその事を知っている。

しかし、良い感情は無くとも本気で戦を起こしたいとは思ってもいない筈だ。

大体、内部の者ならここの長が関東魔法協会理事の娘婿だと知っている。

誘拐事件にしても何だか騒動が大き過ぎるし行動が支離滅裂。シネマ村で襲撃して誘拐しようとするなど、認識阻害が掛かっていない一般施設で起こす事件では無い。

魔法の秘匿という魔法関係者なら誰もが知っている約束事を破棄しかねない愚行なのだ。

それに、ハルナや和美等の一般人を巻き込んでいる。

ただでさえこんな強硬手段は上に対する反抗策であるのに、いくら関東魔法協会サイドの学校に通っているとはいえ、ハルナと和美は間違いなく一般人なのだ。

こうなると無差別テロであり、最悪の場合は両方を相手取った大掛かりな戦争となってしまいかねないではないか。

それでは相手が大き過ぎて勝機が薄過ぎる。

無論、本山に対して東が先制攻撃を仕掛けた……というでっち上げをかます手もあるだろうが、それも何かおかしい。

もしそんな策だったとしても話が大きくなり過ぎる事に変わりはなく、結局は魔法関係者をどんどん巻き込んでしまう可能性が高いではないか。

となると、別の思惑があるのか、或いは……

……いや、今はそんな事件の矛盾に意識を取られている場合ではない。

とりあえずは連絡を入れてくれた夕映の保護。
そして、本山に姿が無かった木乃香らの奪回だ。

そう無理矢理割り切って二人は横島のいるであろう場所へと駆けて行く。

カッ

「むっ！？」

すると、前方で何かの光が見えた。

慌てて速度を上げてその場に駆けつけると……

「……くっ
わ、私は……？」

「このかのパパさん、大丈夫アルか！？」

「……何っ！？」

真名と楓の目に、石化していた筈の人間が……詠春が一瞬で解呪されるという驚きのシーンが飛び込んできた。

それは恰も映画の巻き戻しが如く――

幾ら真名とは言え、解呪というものをはっきり見た事はそんなには無い。

しかしゼロという訳でもないから凡その事は解っているつもりだ。

いや、つもりだった。

真名には特殊な“眼”があり、その力を持って今まで生き抜いてきている。

その眼が反応していない以上、魔法的なものではないだろう。

だが、今の解呪は儀式も何も無く、単に何かしらの能力で持って行われた事に間違いはない。

それをやったようなのだ。

だれが？　そう、“彼”が――だ。

石化が解けたからか、或いは何かの弊害かは解らないが、解呪された直後の詠春の上体がぐらりと揺れた。
直に側にいた古が支えて事無きを得たが、何が起こったのかよく解っていないのだろう。キョロキョロと周囲を見回している。

「……よ、横島殿？」

彼の気無茶苦茶さは知っているつもりであったが、こんな不条理な事を連発されれば流石の楓も驚きを隠せない。

当の横島はそんな彼女の混乱に全く気付いた様子も無く、何とか状況を理解し始めている詠春に詰め寄った。

「おっさん！　一体ここで何が起こったんだ！？

木乃香ちゃん達はどうなった！？」

「おっさん……」

仮にも西のトップに何たる暴言。

状況が状況であるが、真名は後頭部にでっかい汗を掻いていた。

幸い、詠春はそんな彼の暴言も気にしていない。
多少はひきつった気がしないでもないが。

「……き、君は……？」

「オレの事はどーだっていいだろ！？　それよか木乃香ちゃんや刹那ちゃん達だ！！
あの娘らは無事なんか！？」

些か朦朧としていたようであるが、そこはかつての英雄の一人。
彼の言葉にあった娘の名を再度耳にすると忽ちの内に意識がはっきりとしてくる。

「そ、そうだ、娘は…このかは！？」

「そりゃ、こっちが聞きてぇよっ！！」

詠春が横島の後に来ていた二人に目を向けると、楓らは無言で首を横に振る。
見ていない…という事は明白だ。
となると……

「いけない……ネギ君がっ！？」

はっとして動こうとするが、魔法を全力でレジストした後遺症なのか、些か心もとない。

何せ支えている古を振り払えないのだから。

「おっさん！！　だから何があったか教えてくれっつってんだろ！？

こっちは変なガキが襲ってきたって事くれぇしか解んねぇんだ！！！」

そして横島が彼の肩を掴んで止めている。

意外に強いその力は、少なくとも今の詠春なら物理的には逃れられない。

自分も娘の事でかなり焦っていると気付いた詠春は、息を整わせて状況の説明を始めた。

「……その変な子供の……

銀髪の少年がここに襲撃を掛けてきたんです。

本山の者全員……警備の者も、そして私もその少年の魔法によって石にされて……」

『かつての英雄たる詠春がか？』と、真名は内心眼を見張った。

言うまでも無くネギの父親というサウザンドマスターは最強の魔法使いだ。

不意を突かれたとは言え、そのパーティメンバーだった彼を易々

と魔法の餌食にするなど普通の術者ではない。

しかし現実に強力な守護結界がある本山に易々と侵入を許し、あまつさえ長である彼までもが石にされ、愛娘である木乃香の救出をまだ幼いネギと刹那に頼らざるを得なくなった……という事らしい。

「そいつの目的ってなんだ!?

単に木乃香ちゃんを次期の長に祭り上げるにしても、手駒用の式兵隊を作るにしても、やり方が大雑把過ぎるじゃねぇか」

それは……と仮説を口にしようとし、詠春は言葉に詰まった。

実際、いくら反対派とはいえ、彼の言うようにその動きは大雑把過ぎる。

まだ本調子に戻っていないぼやけた頭で何とか答を導き出そうとするも、どうにも“ここ”には色々とありすぎて今一つ動向が思いつかない。

それでも何とか仮説を口にしようとしたその瞬間、

「……すまないが、私も一つ聞きたい事がある」

真名が割り込んできた。

こんな時に何を……と、横島がやや憤りを見せたが真名は無言でそれを制し、突然話に入ってきた彼女に驚いている詠春に尚問いかけた。

「え？」

「いや、向こうの方角に何かあるのか？」

「向こう……ですか？」

「ああ」

彼女の指し示す方向――

本山の結界と同等の結界が張られており、認識阻害まで掛けて何人の侵入をも拒んでいる泉がある場所。

いや、正確には要石がある泉。

『まさか？』という想いはあった。

確かに可能性としてはゼロではない。

かかる現状においてはそれが尤も可能性が高いと言えるだろう。

しかし、自分だけでなく、化け物じみた魔力を持つサウザンドマスターと二人がかりで封印した“あれ”をどうこうできるとは考え難い。

いや、“そんな事をする”とは考えたくなかった。

「この近くに突然、大量の式神が召還されている。
ここを襲うにしては距離がありすぎるし、どこかへ移動する事もしていない。
となると、あの方向に行く事を妨害しているとしか思えないでね」

しかし、真名の証言によって心のどこかが否定し続けていた可能性がはっきりと姿を現してしまう。

嬉しくも無いが、千草の目的がこれではっきりした。

「……まさか……本当に……」

「おい、どういう事だ！！」

そのただ事ではなさそうな雰囲気に横島はまた焦る。

そんな彼を諫める事も無く、詠春は今や真実味を深めさせられてしまっている仮説を口にした。

「―リョウメンスクナノカミ―
千六百年前、討ち倒された飛騨の大鬼神です。
おそらく千草らはこの封印を解き、このかの魔力で持って制御するつもりなのでしょう」

日本書紀に“宿儺”と呼ばれる鬼神の話がある。

その姿の説明だけを聞いても、

一壱つの體に両つの面有り　面、おのおの背けり
頂合いして項無し
おのおのに手足有り
其れ膝有りて膕踵無し　力多くして以て軽捷なり
左右に劒を佩き四つの手に並べて弓矢をつかふ

とあり、そこだけを聞いてもその姿が人間の其れとはかけ離れており、異形の鬼神と言われるだけのことはある。

言うまでも無くそんな姿をしている上、悪逆を尽くしていたりなんかしたものだから、最後には難波根子武振熊（ナニワネコタケフルクマ）という武将に、方法

は不明であるが討たれたとされていた。

無論、“こちら”と“向こう”の差があり、横島の知る“神族や魔族がそこらを歩いている世界での正史”と違う点も多い。

ひょっとしたら他の古の神……横島の知る範囲であればヒミコやアルテミス等……のように話を聞く耳を持っているかもしれないし。

しかし、詠春はどういうものか知っているのだろうか、焦りと緊張に満ちた顔をしている。

その様子からして穏やかな性格だとは考え難い。

だが、横島にしてみれば気になったのはそんなところではない。

確かにそんなものの封印を解くのは許されざる行為であるが、それより何より聞き捨てなら無い話があったのだ。

「こ、木乃香ちゃんの魔力を……何だって?」

「このかの魔力の内包力はネギ君や、彼の父親であるナギすら凌ぐものがあります。
おそらくその巨大な魔力をもって……」

「ンな事ぁどーだっていいっ!!
木乃香ちゃんをそんなモンを制御するのに連れてったのかって

事だっ！！！」

その勢いに詠春の言葉すらとめられてしまう。

近視感……

そう、詠春は確かなデジャヴュを感じていた。

彼は知っている。
こういった人間を。

全くの他人。
見ず知らずの少女が戦争に使われるというだけでその只中に突撃して行く大バカ者を。

“あのバカ”に比べると圧倒的に力は劣る。

自分の娘はおろか、幼いネギにも遥かに劣るだろう。

だがしかし、彼から発せられる爆発的な圧力は詠春の想像を遥かに越えていた。

その氣……正確に言えば霊圧なのだが……は、自分の友人にして盟友の、ネギの父親に匹敵しているのだ。

横島の脳裏には木乃香の泣き顔が浮かんでいた。

幼馴染に嫌われたのかと肩を落して泣いている木乃香。

刹那が死にかけ、必死になって泣きながら呼びかけている木乃香。

そしてその刹那が助かり、泣いて喜んでいた木乃香……

確かに家柄は凄いだろう。
代々続く呪術師の家系だ。

そして血も凄いだろう。
何せ西洋魔法協会の血と、関西呪術協会の血のハイブリットだ。

だが、彼女はただの女の子だ。

どのような力を内包していようと、普通の女子中学生だ。

今の今まで魔法に関わった事も無い、本当に普通の女の子である。

家柄や血なんか横島は知ったこっちゃない。

そんな普通の女の子を、
友達の為に泣けるような優しい女の子を、
利用しようと、『使おう』としている――

「……ざけやがって」

「ろ、老師……」

「横島殿……」

ミシミシと床板が軋む。

霊圧を受け、体重が増したかのように軋ませいてる。

カタカタと障子の桟が音を立てる。

横島から発せられる霊波が、物理的な干渉をしているのだろう。

そんな彼を目の当たりにし、詠春は確信した。

この少年は“彼”と同じなのだと。

ならば当然、娘を……木乃香の力を利用しようとする輩を、

絶対に許す事などできるはずが無い

横島の心の中、何かがシリンダーを回すが如く切り替わり、そして……

何かの撃鉄が――鳴った。

＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊

数が多い。

多過ぎる――

それが、第一に刹那が思った事だった。

木乃香の奪還を誓い、ネギ、そして何とか衣服を身に纏った明日

菜と銀髪の少年を追って山に入ったまでは良かった。

何とか木乃香を抱きかかえる式神猿を操る千草、そして悪魔のような姿の式を従えている例の銀髪少年に追いつけたのだから。

しかし、本山の防御結界を抜けている事で余裕を持っている千草は、ネギらの言葉に少しも慌てず、

「あんたらにもお嬢様の力の一端見せたるわ。

本山でガタガタ震えとれば良かったと後悔するで」

そう言い放ち、召還符を木乃香に貼り付け、彼女の力で持って手当たり次第に式神を呼び出したのである。

しかし、それだけではない。

「……念には念を入れた方が良い」

少年がそう呟き、懐から式符を取り出すと、

「ラーク」

悪魔型式神まで召還したのだ。

その数五体。

数は少ないが、密度と力量は桁違いだった。

「ここまでせなあかんか？」

と、流石の千草も眉を顰めたが少年の表情はやはり不変。

「……何時も何時も油断し過ぎていた。

ネギ＝スプリングフィールドだけに集中し、第三者の介入を予測していなかったのはこちらの不手際だよ。

だったら……」

「……念を入れとくに越した事は無い……ということどすか……」

「そうだよ」

まぁ、三人とも子供であるし、殺す事“だけ”禁じておけばいいだろう。

その結果がどうなろうと、首を突っ込んできた方が悪いのだから自業自得だ。

そう納得して千草らは目的の場へと向って行った。

後に残ったのは、凄まじい数の式神。

そしてネギ達の三人――

「こンのぉっ――っ！！」

得物はハリセン。

しかし、見た目より遥かに威力があり、尚且つこれで攻撃を受けると還されてしまう。

だから明日菜の一撃を防ぐのは技量だけしかない。

が、その彼女の身体能力は常人のそれを大きく引き離している。

二メートルはある鬼の一撃を掻い潜り、拳を振り上げた隙に脇腹に一撃を放つ。

余りの速さに気付けなかったのか、鬼は何が起こったのか理解できぬまま異界へと引き戻されてしまう。

そんな様子を目に入れる事も無く振り向いて背後から距離を詰めてきた二体の式……人間サイズで鬼の面と狐の面を着けている……

の懐に飛び込んでゆく。

『ぬっ？！』

『こ、こいつ！！』

手にしている剣をぴくりと動かした時には、振り下ろしと振り上げという僅かニ動作で一撃づつ肩に受けて送還させられている。

『や、やるのぉ……』

一つ目の巨人も、悔しさよりも感嘆の言葉を口にして消えて行く。

確かに彼女は戦いには素人だ。

動きも無駄だらけであり、隙も多い。

得物の握り方にしても剣のそれではなく、振りかぶって振り抜く事からバットのそれ近い。素人である事がここでもわかる。

しかし、杖に跨ったネギと追いかけっこ出来るほどの体力（ネギの杖は通常でも車程度の速度が出る）を持つ彼女だ。

如何に戦い方が素人でも、底抜けの体力でそれをカバーできていた。

『こ、このガキっ！！』

『いてもうたれ！！』

だが、体術があるというわけではなく単なる体力任せなので囲まれると忽ち拙い事になってしまう。

「く、来るな――っ！！」

棍棒やら剣やらを振り上げ、力押しで押し潰さんと掛かってくる三体の式。

戦いに素人である明日菜。

冷静さを持っておらず、半ば眼を回しながらもその場で身を沈めて、その内の一鬼の懐に飛び込んで攻撃を回避する。

『うぉっ！？』

式は焦るがもう遅い。

明日菜は身体を独楽のように回し、一閃！

周囲を薙いだハリセンが僅か一撃でその三体を送り還す。

『何とまぁ…』

『やられたー』

やられた方はというと、やはり緊張感が無い。

明日菜にしてやられた事がどこか楽しそうでもあった。

無論、そんなセリフを耳に入れる暇も彼女には無いのだが。

「はぁ、はぁ、はぁ……
こ、これで十匹……刹那さんは……？」

それでも相方の様子を窺うが余裕だけはできたのか、慌ててキョロキョロと少女剣士の姿を探す。

と――

「刹那さん！？」

彼女は、一対五の戦闘を強いられていた。

『こ、こついつら……意外に知恵が回る』

悪魔型の式……というものは、今回の件で初めて目にしたのであるが、見た目以上にパワーがあり、尚且つ動きが素早くて厄介だった。

彼女の知る人型の式とは違って得物を持ち合わせていないが、その無手の攻撃力が尋常ではない。

爪や腕から突き出ている刃にも似たモノの切れ味は自分の剣ほどもあり、刃を受け止めるだけで精一杯。

かと言ってこちらから踏み込めばふわりと退いてかわすのだ。

時間稼ぎという命令を忠実に守っている。

その上、実に巧妙に明日菜から距離をとらされ、尚且つ彼女の危機に踏み出そうとすると間合いに踏み込まれかかってそれすらも叶わない。

明らかに剣士と戦う方法を身につけているのだ。

「くそっ！！　退けっ！！」

――そしてこの場にネギはいない。

足止めを振り切らせ、木乃香の救出に向わせたのである。

何せ足が……移動速度が一番速いのは彼だ。

実のところは刹那自身も“ある方法”をとればそれなり以上の速度がだせるのだが、それを使うのには未だ躊躇いがある。

だから刹那は明日菜と共にここで有象無象の足止め軍団と戦っているのだ。

しかし、ここに一つの難点があった。

明日菜と合流して直、カモが提案してきたのはネギとの仮契約だった。

ちびせつなを通して見ていたが、仮契約によって強化されている明日菜の力は中々のものだ。

何せ、ただでさえ破壊力のある明日菜の蹴りが、岩塊をも蹴り壊せるほどまで高められており、尚且つ防御力まで跳ね上がっていたのだから。

そしてカモの説得。

『手段なんか選んであの嬢ちゃんを助けられるわきゃねーだろ？
あのガキをぶったおして嬢ちゃんを助けるにゃあ、できる手段は何でも使うべきだぜ！！

さぁ、刹那の姉さん！！　パワーアップだ！！　パクティオーだ！！　ゴーゴーゴーっっ！！』

そんな“戯言”をするりと受け入れてしまったのである。

さっさとネギにキスを……もとい、仮契約を行って氣の跡を辿ってここまで追いついたのであるが、まさかの木乃香の魔力を使った式神大量召還という危機。

その木乃香を何かに利用しようとしている以上、ここで何時までも足止めを喰らっている場合ではない。

そう判断をした刹那は、挟み撃ち状態にならないよう、一緒に残るといって戦い続けている明日菜と共にここでこうやって戦っているのであるが……

しかし、この仮契約の力には欠点が一つあった。

「神鳴流奥義……雷鳴剣！！」

雷を纏った剣が、光の刃のように式を襲う。

普段のと違った下から斜めに掬い上げるような剣の一閃。

その間合いは意外に広く、下がった式も完全には間合いを外し切れずに胸を大きく斬られてしまった。

だが、それだけだった。

「く……やはりか」

弾き飛ばせはしたのであるが、悪魔型の式は膝すら着いていない。

胸にできた傷もすぅ…と消えて行くではないか。

あの少年は、ご丁寧にも雷属性の式神を残しているのだ。

神鳴流はその文字を“かみなり”とも読める。

その名の通り、退魔の剣技だからかしらないがその剣技属性は雷が多いのだ。

だからこそ、雷獣のような雷属性の敵と相性が悪い。

その上ネギとのパクティオーが刹那の全力を阻んでいた。

このパクティオーの力には、自分の従者を魔力によって強化するものがある。

確かに自分の耐久力や持久力の底上げを実感できているし、敵に与える一撃一撃のパワーも上がっているのも解る。

しかし、今のド外れた明日菜の様に、この戦闘力はそのネギの魔力に依存している訳なのだが……自分に付与される魔力は、どういう訳か氣と相反して上手く力が出し切れなくなるのである。

いや、実質的には弱くなっている訳ではないのだから、“慣れていない”と言った方が良いかもしれない。

それでも実戦においてその“不慣れ”は致命的だ。

「……っ！？」

瞬き程度の時間にも満たないほんの一瞬の隙。

その隙に黒い何かが割り込みを掛けてきた。

無論、少女という年齢ではあるが刹那も実戦を知る者。それが敵の爪であると理解するよりも前に身体が動く。

がぎんっっ

鉄塊がぶつかり合うような鈍い音が響き、打ち負けた刹那が後に吹っ飛ばされてしまった。

「刹那さんっ！！」

結構離されてしまった明日菜の悲鳴が上がるが、刹那はそちらに顔を向けて力強く頷き無事である事をアピールする。

それに安心したか明日菜も得物を振るい、少しでも刹那に近寄って行こうと奮闘を再開した。

「く……っ」

しかし実のところ、刹那にはそれほどの余裕は無かった。

直に体勢を立て直せたが式は追撃を行わず、別の悪魔型式がその間に入って更に別の攻撃パターンで攻めて来る。

これにより、今もまた刹那は更に明日菜から距離をとらされているのだ。

『これは……間違いない』

雷属性を持ち、自分の得物である野立ちの間合いに踏み込んでくるだけの近接戦闘が行え、一切の飛び道具を使って来ない式。

敵は……

おそらくあの銀髪の少年は神鳴流に対する“拍子”を……神鳴流との戦い方を知っている。

刹那の背中を冷たい汗が走った。

『オヤビン……な～んかオモロなさそうっスね……』

『まぁな……なんつーか、けったくそ悪いんや』

式達……子分らが少女二人と子分らが戦っているのを見下ろしつつ、棍棒を携えた巨漢の鬼はそう吐き捨てた。

数で押す戦いは常套であるし、別に殺す必要もない。

戦いは趣味と言っても良いが、女子供の命を奪う趣味までは持ち合わせていないので、受けた命令としてはまぁマシな方と言えよう。

しかし……

『向こうさんの鬼……なんや人形じみとるし、気配がド気色悪いんや』

『そーっスねぇ……
連携せぇ言われても、何やあちらさんはノリ悪いさかい反応し難いっス』

何やら式同士にもそういったものはあるのだろう。

二人……いや、二体とも憮然とした顔でちらりと悪魔型の式に眼を送った。

相変わらず淡々と攻撃し、受け、避け、入れ替わってもう一人の少女から引き離し続けている。

歯車のような丁寧さで生き物らしさを感じられない戦い方をしているその様子に、彼ら（？）は余計に不快さを感じさせられてしまっていた。

『やっぱ気分悪いわ……
このままやったらあの嬢ちゃん達にも悪いし、とっとと楽にし

たれや』

『そうっスね……』

友達を助け出そうと孤軍奮闘している少女らに好感こそ持てても憎しみなぞ無い。

さりとて命に逆らえる存在ではない彼らは、気を失わせるなりして無力化させようと、溜め息を吐きつつ手だれを投入し――

『あ……？』

『何や？　どないした？』

――ようとして、変異によってその動きを止められていた。

首を傾げかけた親分格であったが、子分の視線を追ってその理由を理解させられてしまう。

その場に、突如として“壁”が飛んで来たのだ。

いや、壁と言う表現には語弊があるだろう。何せ“それ”はかなり小さなモノなのだから。

だがしかし、“それ”は壁としか称せない程の圧力を発していた。

その大きさ、直径約一メートル程度。

盾よりも小さく、お盆と形容するのが一番近いかもしれない物体。

それが木々の隙間から面を前にして飛来し、悪魔型の式に迫ってくる。

『お〝あ〟』

式はそれを攻撃と判断し、無造作にそれをはじこうと腕を振るった。

が――

ボッ！！

消えた。

式は跡形も無く消し飛んでしまった。

その現象に初めて驚きの動きを見せた他の悪魔式であったが、時既に遅し。

ボッ!!　ボシュッ!!

先に消えた式の後ろに“いてしまった”二体は、それに弾かれるように消し飛ばされてしまった。

「な……っ!?」

流石の刹那も驚きを隠せない。

しかし、それでもとっさに式らから距離をとって茂みの中と両方に注意を払う。

吹っ飛んできたお盆のような“丸いもの”は、実は円ではない。

六角形の“あるもの”が想像を絶する速度で回転し、プロペラのように飛んで来たのである。

スクリューに巻き込まれたものと同様に、それに触れてしまった

式は一瞬でその身を削り取られ、強制的に物質世界から叩き出されてしまったのだ。

サイズこそ小さいのであるが、その力は正に壁。

何物も触れる事を許さず、何物の通過も許さない拒絶の壁。

しかしてその壁は物体ではない。

刹那には、“氣”でできたモノ……とてつもなく凝縮された氣の塊のようなものだと感じられた。

しかし、そんなものを刹那は見た事が無い。

その時、その茂みから魔獣が飛び出してきた――

少なくとも、刹那にはそう見えた。

動きが機械じみていた悪魔型式も、乱入者にやっと反応できたのか、あわてて“それ”に対して攻撃を試みる。

「どけ」

しかし極無造作に光る刃を振るわれ、その悪魔型式は消し飛ばされてしまった。

その身を二つにして。

「っ！？」

来た……と見えた瞬間には、それは刹那を通り過ぎてあの散々梃子摺らされた式を消し飛ばしている。

動きが速い――という訳ではない。

何かしらの眼くらましをかけられた――という訳でもない。

動けなかったのだ。

灼熱の恐怖という異質の感情によって。

冷たい恐怖なら今まで幾らでも感じた事はある。

長に教えを請うていた時も何度か感じられたし、麻帆良での剣の師である刀子と相対している時にだって何度も感じた。

魔物と戦っている際にも感じた事が無いとは言わない。

木乃香の危機の際にも何度かそれを感じた事はある。

だが、流石に身が焦がされるような灼熱の恐怖など初めての事だった。

それでいてその怒りは一種異様なまでに冷たい。

溶岩を内包した永久凍土がそこにある――

そんな錯覚を憶えるほどに、伝わってくる感情は複雑怪奇。

流石に人生経験の短い刹那では形容する方法が無い、相反し矛盾する感情をそれは放っていた。

彼女の動揺など知る由もなく、“それ”は群がる式兵らに怯む事

もそして感情も見せず、極無造作に腕を振って行く手を阻むもの全てを斬り飛ばし、真っ直ぐ山へと突き進んで行く。

刹那や明日菜の攻撃によって還された者達のような感心の声も驚きの声も聞こえない。

悲鳴や叫びも無い。

淡々と。

淡々と草でも毟るかのように、効率的に式が狩られて道が作られてゆく。

突如として現れ、鈍く輝く氣の刃で持って式をなぎ倒して突き進んで行く“それ”……赤いバンダナを頭に巻いた青年は、

刹那には、周囲の式たちよりも鬼のように見えていた――

中編

強さを推し量る眼を持ち合わせるのは、武人としては当たり前の事である。

いやそれ以前に剣士である以上、その程度の事ができねば話にもならない。

とは言うものの、一定以上の技量を持つ者であれば、その身から放たれる気配が尋常ではない為、素人だって只者ではないと察知できるだろう。

しかし……例外もあった。

『キサマ……ッ！！』

まるで紙屑のように仲間達を打ち捨ててゆく“それ”に対して怒りを制御できなかったのか、烏に似た仮面をつけている式が得物を振り上げて襲いかかってゆく。

背には翼があり、どう考えても邪魔になりそうなものであるが、それを気にした風もなく水面を蹴るように間合いを詰める式。

その太刀筋の確かさも鋭さも剣士を名乗るだけの事はあった。

振り下ろしと掬い上げの二連撃。

一撃目を防げても二撃目は止めきれない。その自信が乗った斬撃だった。

風を切る音すら感じさせない鋭き刃。

“それ”は反応する事すらままならず二つに分かれる――筈だった。

ゴッッ！

岩塊がぶち当たるような重い音。

少なくとも、生物を斬った音ではない。

当然、刃を向けた式だってそれは理解できている。

しかし、信じたくはなかった。

『な……馬鹿な……』

そう呟くのが限界。

斜めに切断された身が、斬られたと理解してから宙を舞う。

衝撃が後から襲いかかって来たからだ。

その行為を行った者……式を斬った者は斬り飛ばした相手に気を向けた風もなく、淡々とそれでいて足早にその場を去ってゆく。

見た目は青年。
単なる青年。

どこにでもいる若い男だ。

彼のその体捌きを見ても、素人の域を出ていない事は容易に窺い知れる。

が、近寄れない。

触れる事もかなわない。

その行く手を阻むモノは塵芥が如く霧散してしまいかねない。

それほど焦っているのだろう。
それほど急いでいるのだろう。

後に式達の骸で道を穿ちつつ。

後に少女を残している事に気付く事もなく――

「く……やはり似ているか……」

そんな彼の後姿を、詠春は自分の親友の影と重ね合わせていた。

一人の少女の為に戦の直中に飛び込んで行く馬鹿。

何時の間にか全てを背負い込み、それでもまっすぐ進み続ける馬鹿。

生きているのか死んでいるのかも不明であるが、おそらくは生きているだろうあの馬鹿と――

無論、前を進む彼の力は全く友に届いていない。

何せ彼からは魔力をほとんど感じられないのだ。

将来的に見ても届くとは思えない。

それほどあの馬鹿は凄まじく大きな力を持っていたのだ。

だが、キれた時の爆発力は勝るとも劣らない。

というより、全くもって同じと言って良いだろう。

氣を使っているようで全く異質。

魔力で英雄に及ばずとも、魔法に似た性質の未知の能力で立ち塞がる全てを屠って突き進んで行く。

『おまけに一番性質の悪かった時と同じですか……』

その時の苦労を思い出し、堪ったもんじゃないと冷や汗まで出てしまう。

「横島殿！！
く……っ　拙者らの声が届いておらぬっ！！」

「おまけに追いつけないときてる。
足運びが速い訳じゃないのに、全然距離が縮まらない」

何て厄介な……と、珍しく真名は舌を打った。

以前から懸念していたように、あの青年は……横島は女子供に甘過ぎる。

甘過ぎる故に暴走し、愚直にもただ一直線に突き進んでいるのだ。

確かに総合戦闘能力という点では劣ってしまっただろう。
脇目も振らないという点では注意力が無くなっていると言っても過言ではないのだから。

真名ですら目を瞠った回避術や、相手の裏を掻く戦い方は影を潜め、ただひたすら突き進む事だけに意識を傾けている。

しかし、“敵を倒す”という点だけは異常特化していた。

敵に対して広げられる右の掌。

そこに収束するは全身を覆っていた“氣”。

全身の氣を一点集中し、それを盾として前に出現させたのだ。

無論、そんな事をすれば防御能力は皆無に等しくなる。はっきり言って通常人以下。かすり傷程度の攻撃でも大怪我になりかねない。

――が、瞬きをする間もなく全身が氣に覆い尽くされる。

“練られた”ものではない。

そんな間も無かったのだから。

かといって弱いわけではない。

圧力が違い過ぎるのだから。

真名は知らない事であるが、横島のこの基本霊能力であるサイキックソーサーは、最初の頃こそ全身の霊力を一点集中して生み出していた技であるが、“栄光の手”ができるようになったあたりからごく無造作に盾用の霊気を生み出せるようになっている。

しかし、今のソーサーは以前のように一点集中。つまり、今現在の高い霊力を更に収束して生み出した盾なのだ。

そして横島はそれを超高速で回転させていた。

何せ物が霊力の盾。物質ではない。だから空気の抵抗も何もなく、幾らでも回転力を上げる事ができる。

空気を斬る音を出す事もなく、摩擦熱も発生せず、ただひたすら回転力だけが上がり続けていた。

『くぉおおっっ！！！』

迸る怒気。

吐き出す呼気にも気合が乗った素晴らしい一撃が横島に襲いかかる。

だが彼は気を向ける事もなく、その式に対して無造作にそのソーサーを向けた。

襲いかかったのは烏族の剣士。
仲間の仇にせめて一矢報いようと最高の一振りを放ったのだ。

しかしこの剣士、相手が悪かった。

このソーサー、かなり手加減されたものとはいえ　かの斉天大聖の一撃に耐えられたという実績を誇っている。
かなり未熟な時代の“それ”でもだ。

そんな次元や格の違い過ぎる盾を、十把一絡げの式が貫ける訳がない。

尚且つとてつもない超高速で回転中だ。

そんなものに触れたとすると――

ギュンッ！！！

言葉を発する間も無く、式はその回転に持って行かれ捩じられて消えた。

受け止める事に特化した盾に“受け”て“止められた”為、身体

ごと巻き込まれてしまったのだ。

その怪異には流石に他の式達も何が起こったか分からず二の足が出なかった。

「な、何なの？　あれ……
鬼たちが……怯えてる？」

「わ、解りません。
多分、古の師に当たる方だと思うのですが……」

それは少女らも同様である。

突然現れ、散々苦労している式達を全く歯牙にもかけず、ラッセル車宜しく人垣ならぬ式垣をかきわけ、あるいは叩き斬って突き進んで行く――

それに驚くな、怯えるなと言う方がどうかしている。

今までの戦いで温まった体が冷えてゆくのを感じてしまう程に……

「かえで！　老師を追うアル！！」

「え？」

しかし、この二人は動く。
動かざるを得ない。

「そうだ行け！！
私達ではあの速度に追い付けない。
だが、お前なら……」

この三人の中で、一番機動力が飛びぬけているのだから。

「し、しかし、このままここを放っては……」

折角の古、そして真名の申し出であったがさすがにそれをすんなりと受け入れる訳にはいかない。

何せここには疲労困憊の明日菜、そして刹那がおり、尚且つ雑魚とはいえまだまだ式達も山ほどいるのだから。

無論、楓とて彼について行きたい。
そしてどうにかして止めてやりたい。

確かに木乃香を助けられはするだろう。

贔屓目も混ざってはいるが、それだけは何となく理解できている。

彼の全力は未だ不明であるが、襲いかかる敵をものともせず、一直線に突き進み、前に立つ式を打ち払っている様からまだまだ自分の認識が甘かったと思い知らされてしまう。

しかし、おそらく手段は選ばないだろう。

あまり考えたくはないが、木乃香を救う為に如何なる惨劇をも起こしかねないのだ。

助けるという想いを、木乃香を攫った相手に対する怒りが凌駕しているのだから。

そして後で傷付くのは彼なのだ。

とても優しい彼は、後で自分の行った事に後悔し、心に傷を負って痛めるだろう。

その事は楓も、そして古も解っていた。

だから止めてやりたいと思ってもいる。

しかし、だからといってここを、皆を放っておく事も……

「お行きなさい」

「え？

あ……木乃香の父上殿」

そしてその背を詠春が押す。

石化を無理やり解いたまだ本調子にはならず、手足の痺れもかなり残ってはいるが戦えない訳ではない。

“この程度”で戦えない等といった戯言は浮かびもしない。

速度そのものが出せないので横島に追い付けないだけだ。

だったらどうするか？

「ここは私が……私たちが足止めに徹しましょう。

無論、アスナ――いえ、“明日菜”君も守ります」

以前の自分の役。

暴走しまくる単細胞な盟友を抑えていた役を――

「貴女は貴方のやるべき事……
やりたい事、やらなくてはならない事をなさい」

あの馬鹿によく似た彼の側にいる者に。

次の世代であるこの少女に――託す。

「……拙者は……」

一度目を見張った楓であったが、自分をまっすぐ見つめ続けていた古がコクリと頷くのを目にすると、

「……了解でござる。
ここは任せたでござるよ」

その眼に光を浮かべ、詠春に頷いて見せた。

「ここは貸しにしとくアル。
早く！！」

「自分の男ぐらいちゃんと躾とけ。
後でちゃんと謝礼をいただくからな」

この場を三人……いや。

「な…っ　長っ！！？？
石化の魔法をどうやって！？」

「え〝っ！？　オジさまも石にされてたの！！？？」

――“五人”に任せ、

「刹那君、話は後です。
さぁ、早く！！」

「……承知！！」

そして楓は地を蹴った。

全幅の信頼を置ける二人……真名と古に背中を任せ、横島が開けた封印の場へと続く道に向かって。

彼を止め、そしてできれば“二人とも”救う為に――

「ええ～と……何が何だかわかんないんだけど～……」

「わ、私もですが……」

あまりの展開に呆然としている明日菜らであったが、

「ほら、刹那君。
ボ～っとしてないで」

同じように佇んでいた式神の剣士の腕をとり、そのままねじって引き倒しつつ得物を奪う詠春の言葉にハッとして我に返った。

腕を極められただけでなく、筋を延ばされ更に折られ、少女らの目に止まらぬうちに手刀を急所につき入れられていたその剣士はあっけなく還されてしまう。

その素晴らしい手並みに目を奪われる事もなく、古はこの場を去った友の背を、

横島が消えた方向に意識を向け続けていた――

――

■十一時間目：月ノ輝クヨルニ（中）

時たま攻撃をかけてくるモノが出てくるが、霊気の盾を翳せば衝撃すら伝わらない。

時たま進行を阻むモノが出てくるが、霊波刀の一振りで無くなるから問題ではない。

怒気によって心が煮える。

自分の不甲斐無さに対する憤りで感情が凍る。

煮え滾る氷。
凍てつく火炎。

矛盾する精神を内包したまま、彼は森の中をすさまじい速度で歩

み続けていた。

奪われた少女を奪回する。そのはずだ。

巫女という贄にされかかっている少女を救う――

それが絶対不変の不文律だったはずだ。

しかし、今の彼からはそれが抜けていた。

だからこそ、苦戦していた刹那らに気付けず、

素人なのに戦い続けていた明日菜に気付けず、

自分を呼び続けている少女の声に気が付かない。気付けない。

その迂闊さ、思慮の無さ、普段以上の短絡。

情緒の不安定さも尋常ではない。

知人――

そして女の子が攫われた事が、

女の子が何かしらの思惑の犠牲になろうとしている事が、こんなにも彼の心を掻き狂わせていた。

その意味を知る者はいない。

彼自身にも解らない。

彼の中にいる彼自身のあるはずもない体験が突き動かしているなどと解る筈もない。

しかしその体験は――

その過去は実際に遭った事なのだ。実際に起こった事なのだ。

だからこそその感情に同調してしまい、少女……木乃香を救い出すことより、彼女を攫った者達を滅する事に意識が集中しているのだ。

全てを、

全ての絆を失わされた記憶を……

存在しない実在する記憶を持ってしまっている所為で――

『横島殿――』

彼の無事を、
彼の心の無事を願いつつ楓は闇を駆けていた。

空に月は浮かんではいるが、大きく齧り取られているかのような三日月。然程の明かりも望めない。

とは言え、山の中なので他の明かりもない事もあってか結構明るく感じられているし、仮にも忍びである楓の眼には十分の明かりだった。

現に、大木の根方にいた夕映を見つけ出せていたのだから。

今現在、その夕映は楓の腕の中。

式の追手がかからないとも限らぬ為、ここに放って置く事も下がらせる事もできず、そのまま抱き上げて連れて行っているのだ。

安全な場所に連れて行く手もある。
というより、それがベストであると言えよう。

しかし、それができなかった。

その暇が、
一分一秒が惜しかった。

級友を、
知人を大切にしている楓らしからぬ行動であり、彼女自身も戸惑っていない事もない。
だが、それでも、楓は駆けていた。
何かを恐れるように、ただひたすら彼の背中を追って。

その楓の腕の中、
何時になく焦りを見せている楓の行動に疑問が湧かないでもないが、それを問う事を思いつかないほどの焦りを楓から感じられ、夕映はだまって抱かれるに任せていた。
何が起こったのか、
そして何が起こっているのか是が非でも聞きたい。
学者である祖父の影響からか、疑念を晴らさずにはいられない性分なのだ。
……のであるが、流石の夕映もその行動に及ぶ事はできなかった。

『……今は聞かない方が良いみたいです……
また何時か……いえ、“後で”聞いた方が良いでしょう』

楓のそんな余裕がないという事は聞かずとも理解できる。

何と言うか……こんなに必死な彼女を見るのは初めてなのだ。

だから夕映は、“後”という時が来る事を信じ、自分を納得させて前を見据えた。

人工のものではなく、また月明かりの反射でもない淡い輝きが前方で起こり始めたからだ。

自然、楓の服をつかんでいる手に力が籠る。

それが恐怖によるものか、木乃香を心配しての事かは不明であるが――

＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊

『兄貴！！
感じるかこの魔力！！
奴ら何かおっ始めやがったぜ！！　急げ！！』

湖を遮るように広がっている森の上空を、杖にまたがった少年魔法使いネギが飛行していた。

勝率なんか考えず、ただひたすら木乃香を無事を願って杖に魔力を込めて。

そんな彼らの前方で、唐突に光の柱が立ちあがった。

まだまだ淡く、強さも圧力もほとんどないが、それでも高まってくる魔力の感触はただ事ではない。

だからネギの肩でカモも焦りを見せていた。

「わかってる。加速！！」

空気が撓る――

ネギから伝わってくる魔力を糧に、杖は今現在出す事ができる最大速度を出して見せた。

飛行魔法の使用中は周囲にフィールドが張られて術者を守る。
そのフィールドが無ければカモなど即座にひき肉になっていたかもしれない。
それほどの加速度だった。

『見えた！！　あそこだ！！！』

空中に遮るものはない。
だから思っていた以上に移動力を上げられ、ついにネギ達は肉眼でそこを目にする事ができた。

巨大な湖。
中央にはしめ縄が巻かれた大きな岩。
その前には祭壇のようなものがあり、そして――

『むぅっ！？
こ、この強力な魔力は……！？
儀式召喚魔法だ！！
何か　でけぇモンを呼び出す気だぜ！！！』

普通、召喚は契約が終わっている対象を呼び出す事が多いので、よほどのモノでない限りそんなに時間が掛かったりしない。

だがネギ達が想像している巨大な魔力のタンクと、具現化を続けている気配の大きさ、そして呪式の大きさからとんでもないものを呼び出そうとしている事が理解できてしまう。

しかし、それより何よりネギの目に見えているものがあった。

その召喚の儀式に使われているのだろう祭殿。

そこに横たわらせられているのは……

「このかさん！！」

召喚の、そして呼び出そうとしている“何か”の制御用の核にされようとしている少女。

現在、日本最高クラスの魔力量を誇る近衛　木乃香、その人である。

――いける！！　まだ間に合う！！

彼女のすぐそばに人影があり、その中にあの少年が居るであろう

がネギには見えていない。

ネギの目には、視線の先で喘いでいる木乃香だけしか入っていない。

――このかさんを……助けるんだ！！

その高めた意志を杖に込め、更に加速してその場を目指す。

もう魔力は尽きかけようとしているのに、
昼間の一件で大量消費し、まだ回復し切れていないというのにネギの魔力はさらに溢れてくる。

大切な友達である木乃香、そして言うのはおこがましいが刹那や明日菜も守りたいと願っているのだから。

もう二度と“あの日”のように失いたくないのだから。

だからネギは枯れかけている筈の魔力を無理矢理引きずり出して突き進む事が出来るのだ。

ドンッ！！　ドドンッ！！

「！？」

そんなネギの背後。

後方の森の中に魔力を感じ、彼は慌てて顔を後ろに向けた。

迫り来るは四匹の獣。

ネギ達、西洋魔法使いが召喚する精霊に近い、実態を持たない黒い魔の獣。

――狗神!?

ネギが昼間戦った少年……コタローが攻撃に使っていた狗神が放たれたのである。

「ＤＥＦＬＥＸＩＯ……っ!!」

ドガッッ!!

「!!!!」

慌てて魔法の盾を唱えようとするが一瞬遅い。

幸い、ネギ本人の魔法抵抗力が存外に高い為、直撃しても然程のダメージはなかった。

それでも杖を弾き飛ばされ、小さな体は宙を舞う。

「わあぁっ！？」

流石に空高くからの自由落下には悲鳴をあげてしまうが、それでも多少なりとも戦闘経験のある少年だ。

直ぐに冷静さを取り戻し、

「く……っ
杖よ……
風よ！！」

杖を呼び、風を呼んで墜落を逃れる。

ギリギリではあるが体勢を整え、ちゃんと足から地面に着地。その衝撃もほとんどない。

体術的に言えばまだまだ稚拙であるが、それでも彼の年齢から言えばとんでもない反射神経だった。

「よぉ、ネギ」

そんな彼の能力に喜びを再燃させたのか、茂みの中から影が一つ姿を現す。

予想はできていた。

狗神を見た瞬間に解ってはいた。

だが、何もこんなタイミングで……

「へへっ　嬉しいぜ。
まさか……こんなに早く再戦の機会がめぐってくるたぁな……」

ネギと同じくらいの身長の黒髪の少年。

その眼差しからも戦いへの期待が湧いている事がうかがい知れる。

「コ……コタロー……君!!?」

目の前にいるのに。

助けたい相手が見えているというのに。

ネギの目の前には、昼間戦ったあの少年。
小太郎が立ち塞がっていた。

『こ、こいつは……マズイ!!!』

ここまで来てこの状況。
カモは、ただ慌てる事しかできないでいた。

ずん……と腹の底に響くような衝撃が伝わってくる。

「どうしたぁっ!!
本気で来いや、ネギ!!」

背後の魔力の高まりを感じている所為か、ややテンションが上がり気味で、自然と笑みが浮かんでくる。

「ど、どいてよコタロー君!!　僕、いま君と戦ってる暇なんてないんだ!!」

小太郎の拳を魔法の障壁で防ぐが衝撃を消しきれない。
彼を弾き飛ばす事だけは成功したものの、壁として立ちはだかったまま。

「いやや。
つれない事言うなや。ネギ」

ニヤリと不敵に笑う小太郎であるが、その攻撃した彼も防いだネギも息が荒い。

双方とも疲労が……氣や魔力が完全に回復していない状態での戦いなのだから無理もない。

ただ、足止め役であるい小太郎の方に若干の余裕がある。

しかし、その小太郎の言い様に腹を立てたかネギの魔力も増した。

『兄貴。これ以上自分への契約執行は使うんじゃねえ。
ただでさえ姐さんに魔力を供給し続けてるんだ。すぐに底をついちまうぜ』

カモもその事に気付いてはいる。

気付いてはいるのだが、伝えたところでどうしようもない。

自分に対して契約執行を行って、魔力で肉体能力を上げる……そんな肉体強化法は武闘派の魔法使いなら誰だってやっている事だ。

しかし、自力でそれに気付き、尚且つ初めてそれを行ったばかりなので無駄が多くて負担も大きい。

カモの言葉にいくらか冷静さを取り戻したか、自分に回す力をセーブするネギ。

それでも供給を完全には切れない。

完全に切ればそれは大きな隙となり、小太郎の攻撃を容易に受けてしまうだろう。

『あの光の柱を見ろ！　儀式はあと数分で終わっちまうぜ!?　急がねぇと……』

「わかってる。カモ君……」

解ってる。

そう、解ってはいるのだがかかる現状が許してくれない。

しかしそれでも純粋なネギには理解し難いところもある。

「コタロー君!!

なんであのお猿のお姉さんの味方をするの！？
あの人は僕の友達を攫ってひどいことをしようとしてるんだよ！？」

そしてそれに与する事が、

そんなひどい事をする人間に味方をするという事が幼い彼にはまだ解らないのである。

「ふんっ！
千草の姉ちゃんが何やろうと知らへんわ。
俺はただイケ好かん西洋魔術師達と戦いたくて手を貸しただけや。

けど……その甲斐あったわ！！」

そう嘯く小太郎は、本当に嬉しげな笑みを浮かべネギを指差す。

いや、嬉さも楽しさも混ざった歓喜のそれとも言えよう。

「お前に会えたんやからなネギ！！
嬉しいで！！　同じ年で俺と対等に渡り合えたんはお前が初めてや。
さぁ……戦おうや！！」

小太郎にしてみれば、自分の渇きを潤してくれる相手と初めて出会えた事が嬉しくてたまらないのだろう。

何せ実際の戦いを知っている筈の自分とほぼ同じレベルで戦ってくれる相手。

尚且つ年齢もほぼ同じなのだ。

小太郎は狗族のハーフであるが故に親を知らない。

だから無自覚ながら孤独を嫌がっている節があった。

ネギというこの魔法使いは、そんな彼が初めて出会えた“ライバル”という位置の存在と言えるのだ。

無論、今のネギからしてみれば傍迷惑以外の何物でもない。

「戦いなんてそんな……意味ないよ！！
試合だったらこれが終わったらいくらでも……」

木乃香の危機。友達の危機なのだから付き合っている暇はないのだ。

「ざけんなぁ！！」

しかしテンションが上がっている所為か小太郎は納得しない。し

てくれない。

「俺にはわかるで。
コトが終わったらお前は本気で戦うような奴やない。
俺は本気のお前と戦いたいんや。

今ここで！！

この場所で！！」

彼とてそういった事が好きではないのであるが、初めて出会えた好敵手という存在に感情が先走っているのだろう。

だから血が滾る。
滾り続けている。

戦いを期待してか、ずくんずくんと心音に合わせてその身が疼き、その手も細かく震えている。

――それだけ“同等”という相手に飢えていたのかもしれない。

「ここを通るには俺を倒すしかない！
俺は譲らへんで！！」

逃がす気を全く感じないその気迫にネギも思わず身構える。

『挑発に乗るな兄貴！！
何とかして出し抜く手を考えるんだ！！』

双方に余裕がない事をカモも理解しているから、ネギの肩で必死になって止めようとするが耳に入っているのか疑わしい。

それにこんな事している場合ではないというのに、子供らしい勝気な部分が首を擡げかかっているのも感じられる。

カモが焦って襟を噛んで引っ張ったりしているのだが、無自覚だろう……ネギは、動こうとしない。

そしてそんなネギに、

「全力で俺を倒せば間に合うかもしれんで！？
来いや　ネギ！！

男やろ！！！」

小太郎は止めを刺した。

ぐ…とネギの体を一瞬緊張が走り、ゆっくりと前に進みだす。

その足取りを見、小太郎はニっと唇の端を歪めて僅かに腰を落として身構えた。

『えっ!?　ち、ちょ、兄貴!?』

そう慌てふためくカモの首筋をネギは猫のように摘み、ひょいと地面におろして歩み続ける。

『ぅおいっ!!　兄貴!!』

「大丈夫だよカモ君……1分で終わらせる」

自信がある――とでも言いたいかの様な静かさでネギが口を開いた。無論、カモに一瞥も送っていない。

したしそれは、むきになっているなっていると言った方が正しいだろう。

『ぐぁ……ぁ
マ…マズいぜ。
兄貴の頑固と子供っぽさが悪い方向に出ちまった……！
ここで戦ったらどう転んでもこのか姉さんは……』

というより、ネギの頭に勝算など無い。

キレているのだから、単に思いっきり戦うだけなのだ。

あの銀髪の少年らから木乃香を救出する為には少しでも惜しい魔力を使って自分に対して契約を執行。

拳にも魔力を込めて大地を蹴った。

「いくぞ！！」

「来い！！」

カモは混乱の極致。

何よりも進まねばならない状況で、

何よりも木乃香を救わねばならないという状況で、

「わぁあああっ！！」

「おぉ！！」

当のネギが、木乃香の父親と二人の少女から託された任を忘れ戦おうとしている。

止める事もできず、そしてまともには通してもくれない状況なのだから仕方がないとも言えるだろう。

が――

ぞん……ッ！！

「え…っ？」

「何っ！？」

二人の間に、突如として赤い壁が出現した。

――いや。

小太郎にはとてつもなく集束された氣の塊としか思えない……強いて言えば盾のようなものが突き刺さり、

バギンッ！！

「わぁ…っ！！」

「がぁあああっ！！」

何の前触れもなく爆発した。

指向性があるのか知らないが、ネギは衝撃だけで大したダメージは受けていないが、小太郎の方は思いっきり弾き飛ばされ桜の木に叩き付けられている。

それでも氣で防御していたのか意識を失ってもいないし、戦えない訳でもない。

やや目を回しかけてはいるが、慌てて身を起し周囲を見回す余裕すらある。

「氣の爆発攻撃…やと！？

せ、せやけど何の気配も……何者や！？」

しかし問うまでもない。
探す必要もない。

何故なら――

「ここで……何をしている？」

その暴力的なまでに圧倒的な気配の主が……“そこ”にいたのだから。

＊＊＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊

『瓢箪から駒言うんはこの事やなぁ……』

「こちらから言えば『泣きっ面に蜂』だけどね」

わずか数分。

いや、実際の時間で言えばもっと短い間だろう。

能力は兎も角、数だけはいた式兵たちであったが、刹那らを押し止められたのは彼が来る直前までの話。

彼が一度剣を手にした瞬間から状況は一変。鬼より怖い剣鬼となって式達を完全に圧倒していた。

五体十体がまとめて襲いかかっても、いや下手をするとその全部が襲いかかったとしても一薙ぎで全て刈り取られかねない。それほどの剣人なのである。

この――近衛　詠春という男は。

『しゃっあっ！！』

『かぁっ！！』

腹の奥から噴き出すような息吹。
軸足を大地に突き刺して踏み込むような重い一撃を放ってみても、

「シ……っ！！」

やや腰を落とした自然体の構えから、相手にしている二体の間合いに踏み込んで風を切る音もなく横に薙ぐ。

ぴんっと式の体に線が走ったのが見えたと思った次の瞬間にはボンっと破裂音がして還されてしまうのだ。

いくら手だれの烏族の剣士が使っていようが、詠春からしてみれば鈍ら剣。
その剣を奪い取って戦っている詠春であるが……剣の格の低さを技術でもって完全に補っていた。

『ひゃあ……やるのぉ……』

式の親玉であろうか、ひときわ大きい奴が顎を撫でながら嬉しげにそう言う。

何せ与えられた任務は女子供の足止め。

女の子一人の力で鬼神を復活させるから、邪魔が入らないようにしろとの事。

戦いというよりは遊びに近いと思ってしまったほどの仕事だった。

娑婆に出られる事は良いのだが、なんだか数に任せた弱い者虐めのようで今一つ乗りに気はなれない。

おまけに共闘しろと言われた西洋の式（？）に至っては愛想が無いときている。

これで何をどう楽しめというのだろう。

が、蓋を開けてみればどうだろう。

一番“ちみっこ”だった子供は西洋魔法の使い手で、風の魔法を使われて姐御（千草）の後を追われ、

残った女の子らにしてもけっこうヤる。

更に、何だか訳の解らない奴が通り過ぎた後には、神鳴流にその人ありと言われた詠春が乱入して来てくれたではないか。

思いっきり戦えないと内心溜息を吐いていた式らであったが、まさかこんな超大物とやりあえるチャンスが巡ってくるとは思ってもいなかったので、その天の贈り物に感謝していたりする。

『あんさんと闘り合えるや思てなかったで……

ほんまやったらタイマンしたいトコやけど、こっちも仕事やさかい堪忍な？』

「律儀なのは結構ですが……少々痛い事になりますよ？」

『ははっ……何を今更。
闘いで痛がっとって式神なんぞやってられへんわ』

「確かに……」

相手は西の長。

闘う相手として申し分ない。

はっきり言って勝てる気は全くしないのであるが、時間稼ぎが仕事なので気にならない。

じり貧決定であるが、強者と闘えるのだから……

一斉に掛かれば間違いなく薙ぎ払われる。

舐めてはいけない。何だかんだで疲労困憊のようであるが、それでもその程度の技量は持ち合わせている。

だからこその数体での波状攻撃を行い続けているのだから。

それにこの闘い方の方が――

『長ぉ楽しめるっちゅーもんや』

――という事だ。

『ふ…っ！！』

キリリリ……と、トンファーに似た得物を旋回させ、狐の面をかぶった女性型の式が少女に襲いかかる。

形こそトンファーに似ているが、それは忍の暗器に酷似しており縁が刃となっていた。

鉈を振り回しているに近く、当たれば無論ただでは済まないだろう。

「吼ぉ……っ！！」

だが、その少女も只者ではない。

まっすぐ突いてくる剣先を内側に弾きつつ左肩から体当たりするように踏み込み、相手の伸びた腕を取りつつ鉄扇トンファーを相手の腹に入れる。

『ぐ……っ！？』

その動き、何とわずか一拍。

攻防を一拍子に行われたのでその式も対応し切れなかった。

しかし――

「浅いカっ？！」

『そうみたいや……ねっっ！！』

斜め下から閃光のような膝を察知し、少女は身を沈めてそれをかわす。

そして回避しつつも残った軸足に足払いをかけたのであるが、相手の狐面もそれを読んでいたのだろうあっさりと回避している。

お互いが一瞬で距離をとるが、地に足が付いた瞬間、既に双方が踏み込みを掛けており、鉈のようなトンファーと鉄扇トンファーとが鈍い音を響かせていた。

「……やるアルね」

『嬢ちゃんもな』

面の下、僅かに覗いている口元がニっと歪む。

何時もなら自分もやっているであろう、低いレベルの挑発でなのあるが、どういう訳かこの少女……古は不快さが増している事に気がついた。

はっきり言ってこの程度の挑発に乗ってしまう等、話にもならない。

それは古自身も解っている筈だ。

しかし、古は無自覚の内に機嫌を悪くしている。

それらが技のキレを欠けさせている事に気付いていない。

無論、それでも明日菜よりはずっと強いのであるが、真名と……

刹那は内心、舌を打っていた。

『何だ？　古の動きが妙に硬い……
さっきのあの人の事に気を取られているのか？』

刹那は横島とまともに対面した事がないので、先ほどの彼が何者なのであるのかよく解っていない。

古が老師と叫んでいたので恐らくは昼間助けてくれたあのかぶり物剣士とは思うのであるが……

『しかし、気配が全く違っていた……』

――のだ。

だから今一つ刹那は状況がよく解らないでいた。

尤も、その所為で剣の動きが鈍っている訳ではなく、自分に掛かってくる式達を神鳴流の奥義で一薙ぎにしている。

訳は解らずとも、長である詠春は助かり、古と真名と共に助っ人として戦ってくれているのだ。

古と違って余裕が生まれているのも当然である。

『まったく……自分の女くらいフォローしていけ』

そして真名は口の中で愚痴っていた。

とは言っても別に暇がある訳でもなく、ニーリング……所謂、膝射で銃を撃ち続けている。

あまり知られていないのであるが真名は裏でも名の知られた人間

で、一応はスナイパーとして知られてはいるのだが、距離を離そうが接近を許そうが苦手なレンジがない程の腕前を誇っている。

だから距離が離れている間はライフルで狙撃し、接敵されれば――

『ぬぅうう……小娘ぇっ！！』

頭部にイイのをもらってしまった烏族の剣士が得物を振り下ろす。

手加減という命を忘れたのか、当たれば完全に致命傷となる重い一撃であるのだが、見た目より痛むのだろう左手で顔を抑えながらの隙が多い一撃。

だが、生憎と真名はそんな隙だらけの攻撃で倒す事ができる相手ではない。

別段、焦った風もなく真名はライフルを手放し、一瞬の間にハンドガンを両の手に握り替えている。

その右のグリップで相手の得物の峰を叩き、右の脇をがら空きにしてそこに銃弾を叩きこむ。

エグい事に、人であれば腸をかすめて心肺を抉る様な角度でだ。

『く……おぉおおっっ！？』

一瞬、呆気にとられた他の式らもその様を見て我に返り、背を見せている真名に襲いかかる。

しかし先に踏み込んだ筈の式の顎は弾丸によって殴り上げられ意識を刈り取られた挙句、還る前に何時の間にか接敵していた彼女によってその体を盾にされ、左右から迫っていた式の胸がほぼゼロ距離で撃ち抜かれた。

『が、がぁああっ！！？？』

『うぉおおおっ！！？？』

人で言うなら肋骨の隙間。

筋肉以外で心肺を守り切れない隙間から、完殺の銃弾を叩きこんで行く。

接近戦に挑んでも真名は所謂“ガンカタ”が使えるのだ。

シャレにならない反射能力で避けられかわされ、得物を弾丸によって“撃ち”壊され、その上で体に弾丸を叩き込まれて還されてしまう。

用意が良い事に、真名は呪式が施された弾丸を使用しているので致命傷となる位置に叩き込まれれば堪ったものではない。

一瞬でカートリッジを落とし、予備カートリッジを突っ込む。

入れ終わる前に敵が掛かってくるが、片方の銃で相手をし、弾倉交換中の方はカートリッジを膝で叩き上げ、即座に反対側から迫る式に対応している。

彼女の視線が動くより先に銃口がそちらを向いているのだから、その技量も解るというもの。

無駄ったらしい銃撃の間隙を持っていない彼女の隙らしい隙を見出す事は難しい。

だから、という訳でもなかろうが、思考の端の方で小さく愚痴を湧かし続けているのだ。

女を……自分の同級生に二股をかけてフォローをかけていない男に対して――

できれば、横島本人に全力で否定してほしいと願いつつ……

「ここで何をしている？」

何も答えられない二人に対し、その乱入者――横島は再度そう問いかけた。

がくがくと膝が笑う。

カチカチと歯が鳴る。

ばくばくと心音が頭に響いてくる。

二人の少年は、その青年から発せられる波動によって身動きが取れなくなってしまっていた。

青年の体から噴き出しているものは恐らくは“氣”。

圧倒的な怒気。

それも凍てつくような冷たい怒気だ。

しかし、その口から吐かれた言葉は黒く焦げ散るような熱気を含

んでいる。

だからネギは……そして小太郎は、ぴくりとも体を動かす事が出来なくなっているのだ。

そしてその射抜くような眼は、じっとネギを見据えている。

「木乃香ちゃんの親父さんから聞いた……お前は木乃香ちゃんを助けに行ったとな……」

長から!?

と、カモはその言葉の中に石になっている筈の長の事が出て驚いていた。

尤も、喉から声は出なかったのであるが。

「その彼女を助けにいっている筈のお前が、

木乃香ちゃんを助ける筈のお前が……」

その視線が小太郎に向く。

我知らず小太郎は、身をすくませて半歩下がってしまった。

そしてそれを自覚し、驚愕している。

「何でこんな場所で、こんな奴と遊んでいる？」

『く……っ！！』

小太郎はその言葉に反抗したかった。
言い返してやりたかった。

しかし、それでもその身は動かない。
真っ暗な殺意に絡み取られたままなのだ。

そしてネギも答えられなかった。

自分が冷静さを欠き過ぎていた事にやっと気が付いたからだ。

カモがずっと自分に言い続けていた事が、今になってネギの心に突き刺さり、じくじくとした痛みを与えている。

だから言えない。

何も言い返せない。

子供っぽい反応であるが、その程度の反応しかできなかった。

「……」

横島はそんなネギに冷めた眼差しを送り、もう一度小太郎に視線を送ってから前を見据えた。

木乃香が捕まっているであろう方向に――

彼は、木乃香が泣いているような気がしたのだろう。二人に対して湧いた興味が忽ち萎んでゆく。

「……解った。オレが行く」

「……え？」

そうネギに告げ、横島が足を動かした。

「オレが木乃香ちゃんを助けにいく。
お前はここで遊んでろ」

「そ、そんな……僕は遊んでなんか……」

追い縋るように駆けだしたネギであるが、横島の反応は冷たい。

いや、拒絶している。

それは当然だろう。

横島にとって許す事の出来ない事を彼らはやっていたのだから。

「木乃香ちゃんが助けを待っている時に、あいつとやり合うのを優先した。

木乃香ちゃんの事より、あいつとの闘いなんかが大事なんだろ？

だったらそれを優先しろ。オレの知った事か。

オレはそんなクソくだらない事より木乃香ちゃんの方が大切だ。

あの娘を助ける方が何よりも大事だ」

小太郎に挑発なんぞされたとしても、横島には効かない。

精々、捨て台詞をほざいて遁走する程度だ。

女の子が危ないって時に相手をするような馬鹿ではない。

プライドなんかない。

そんなものどうだっていい。

以前、失ってしまったモノ。

“体験していない記憶”が泣き叫んでいるように、

助けるつもりだったのに、その手段を自ら破壊した時のように、

失ってしまったモノは二度と帰ってこない。

恋人にしても、“雇い主”にしても……だ。

だから横島にとって男の面子など意味がないし、知った事ではない。そんなものはゴミ屑以下だ。

そんなものより何より、女の子の命の方が遥かに大切なのだから。

「……っっっ！！！！」

今度こそ、ネギは胸を抉られた。

そうなのだ。
それはネギ自身が言っていた事。

木乃香は大事な友達だから守ると言ったはずだった。

だが自分は小太郎の言葉に乗り、彼と決着をつける1分という時間を選んでしまった。

その1分1秒が大切だった筈なのに……

「待ってください！」

「何だ？」

気が付けばネギは横島のシャツを掴んでいた。

それでも横島は歩くのを止めてはいない。

そのつもりはない。だからネギを引きずっている。

まるで重さを感じていないように突き進んで行く。

ざりざりとネギの足先が土や草を削ってゆくが、悲しいかな非力なネギの体では止める事は出来ない。

しかし……彼は顔をネギに向けていた。

「ぼ、僕に……いえ、僕が行きます！！」

まだこの青年の事は解らない。

声は聞いた事があるような気がするのだが、誰だか分らない。

まだ怖い。

この青年が怖くて堪らない。

だけど彼が言った言葉は間違いなく正論だ。

だから必死になってそのシャツを掴んだ。

思い出したからだ。

失えば、

何もできないままならずっと後悔し続けるという事を……

それが叶わねば一生後悔し続けてしまうという事を……

「お前が？」

冷めた目がネギの心を苛む。

だが、ネギは怯む事無くその冷たい目をまっすぐに見て返した。

口にしたその言葉に偽りはないのだから。

確かに自分には力が足りない。

何より経験が圧倒的に足りていない。

この目の前に青年……横島の力など軽く凌駕するほどのバカでかい力の器はあっても、その使い方を理解し切れていない。

未熟とか以前の問題だ。話にもならない。

それでも横島は彼の手を振り切らなかった。

ネギの気持ちが何となく理解できるからだ。

そしてその気持ちを自覚した瞬間、横島の怒気が僅かばかり小さくなっていた。

「……そうか……

行くんだな？　行きたいんだな？　木乃香ちゃんを助けに……」

「ハイッ！！」

横島の問い掛け。

彼の怒気が幾分軽くなったお陰か、普段より力強く言い切る事が出来た。

その大声に眉一つ動かなかった横島であったが、ついにその足が止まった。

ネギがいくら引っ張っても速度が緩まなかった足が、ぴたりと止まったのだ。

「だったら行け。早く」

「え？」

進む道を譲り、言葉でその背を押す。

「……何もできなくて、何もやれなくて後悔するのは嫌だろう？だったら行け。

無理だろうが何だろうが意地を出して行け。

歯をくいしばって突っ走れ」

横島の目に、光が戻った。

冷静になった……とまでは行かないものの、少なくとも今までよりはかなりマシにはなっていた。

ネギの眼に、
何だか自分と同じような光を見出したからなのかもしれない――

「あ……ハ、ハイっ！！」

弾かれたように駆けだすネギ。
その場から急いで走り出したネギであったが、一度横島の方に振り返り、頭を深く下げてから杖に跨って飛び去って行った。

『ありがとうございます！！』

何に対しての礼だか解らないが、ネギの唇は確かにそう紡いでいたと思う。

直後に加速。
高度を落とし、更に更に速度を上げてネギは木乃香を救いに突き進んでいった。

その勢いこそが想いなのだろう。

空になりかけている筈の魔力で出せているあの底力が、ネギの想いなのだろう。

それが解る……いや、伝わっているからこそ、横島の表情はやっと柔らかさを取り戻してゆく。

魔力の全てを出し切らんとするネギの背を見送りつつ、横島はやっと普段の顔を――

――取り戻したかに見えた。

瞬間的に霊気を右手にかき集め、盾状にして軽く腕を振ってそれを投擲する。

ドガンッ！！

風を切る音も立てずにそれは宙を飛び、地面に衝突するとそこで音を立てて爆ぜた。

「うおっ！？」

小太郎の行く手を、阻む為に。

「な、何すんねんっ！？」

文句を言い放ちはしたものの、小太郎は内心かなりの冷や汗をかいていた。

彼の本能が叫んでいる。

逃げろ。にげろ。ニゲロと。

相手にするなと、みっともなくてもいいから逃げ出せと訴え続けている。

だが、小太郎は横島の行為に言葉を紡いでしまった。

横島は挑発なんぞしてもいないのに、噛み付くように言い放ってしまった。

「何をする……はオレのセリフだ。
どこに行こうってんだ？」

低い声で横島が再度問いかける。

問いかけつつも、また頭が冷えてゆく。冷え切ってゆく。
それでいて感情は煮え滾る。

がりがりと理性の壁を削り、心の奥に住まう凶獣が再度牙を見せ始めていた。

狗族のハーフ故か、不幸な事に小太郎はその牙の鋭さを、圧倒的な何かを知覚してしまっている。

それが恐怖であるという事を、自覚できないまま。

「お前……
“あの女”がやっている事がどうでもいいとか、男がどうたら言ってたな……」

質量すら感じてしまうほどの凄まじい殺気の膨らみを察知し、その場を離れようとするが一瞬遅い。

ハっとして体を動かそうとするのだかピクリとも動かなくなって

いるのだ。

『なっ……なんやこれっ！？』

小太郎が感じている感触からすれば、鋭い刃を全身に押し当てられているそれに近い。

ただ押し当てられているだけ。

血も出ていないし切れもしていない。

だが、逆に言えば少しでも動けば自分の身が膾か挽肉のようになってしまうという事でもある。

何時の間にか横島の右腕が光り、その腕には具現化した霊力が紡がれていた。

その紡がれた霊力は更に細く細く縒りあげて、あらゆる繊維より細い霊糸を生み出し、その糸を小太郎に絡みつかせているのだ。

如何に細くなろうとも、肉眼では視認できぬほどの細さになろうとも、霊気を紡いで生み出した糸なのでその強度は普段の霊波刀以上。

尚且つ細く強靭に縒られている為に切断力まで上がっている。

だが、この糸は小太郎の動きを封じるだけに止まっているではないか。

横島の光る右手。

その右手の中にあるのは力を持つ“珠”。

そこに練り込まれている言葉は『束』の一文字。

小太郎は、霊糸という鋭い刃を通して“くくられて”動けなくなっていたのである。

「どうでもいいという事は、助けを待っている女の子がどうなってもいいという事か？

お前の言う『男』ってのは、女の子を助けにいく奴を止める事なのか？」

「あ…が……」

声が出ない。

喉が外部から絞られているかのように言葉が紡げない。

かと言って、横島が霊糸でもって締め付けている訳ではない。

単に雪崩れ来る怒気に息が続かないのだ。

「……ざけるなよ……」

そして更にその怒気が膨らんだ。

記憶に存在しない記憶。

体験していない、自分ではない自分の記憶。

凍りついた“記録”の一片に、かつての雇い主の画像があった。

口から血を流し、それでも無理に笑顔を見せ、自分に何か呟いている――

身が爆ぜるほど悲しい。

心がすり潰されるほど苦しい。

手当たり次第に殺し回りたくなるほど腹立たしい。

そして世界を滅ぼしたくなるほど憎い。

彼女が、

彼女“ら”の全てが失われた時、心を苛んだ虚無感が――

“この自分”が体験した事もない体験が怒りと憎しみが心を組み替えてゆく。

―お前もなのか？

お前も俺になってしまうのか？―

何かが悲しげにそう呟く。

だけど心に届いているのに、心が理解してくれない。

その言葉の意味を理解しているのに受け入れてくれない。

怒りと憎しみに心を持っていかれ、絶対にしてはならない事を、

横島なら絶対にしたくない事を行おうとしている。

そしてそれに何の感慨も浮かばなかった。

引くだけ。

後は引くだけ。

『束』の文字を消し、霊糸を引くだけで事は終わる。

女の子の救出を邪魔する障害をたったそれだけの事で取り除けるのだ。

だから横島はその“珠”を――

すぱ――んっ！！！

意外なほど、その音はよく響いた。

音の出どこは後頭部。

今まさに惨劇を行おうとしていた横島の後頭部だ。

そのお陰かどうかは不明であるが、集中が完全に途切れた所為だろう、霊糸が消滅し、珠も地面に落ちて消滅した。

糸が途切れた以上、イメージが実行されても意味を成さないからだ。

それでも心が元に戻った訳ではないのだろう。雰囲気は全く変化していない。

しかしその背に、

「何をしてるでござる？」

奇しくも横島自身が吐いたものと同じ言葉が投げかけられた。

その意味は全く違う問いかけであるが――

間違いなく彼にとっては救いとなる女神の声であった。

後編

『オレは横島忠夫っていうんだ』

――彼はそう名乗った。

最初の遭遇は怪奇現象。

空に穴を穿ち、隕石が如く墜落してくるというド外れた登場だ。

全身ボロボロであったにもかかわらずしっかり生きており、下着を覗き見てしまっただけで氣に満ち溢れるという無茶苦茶な回復を見せられた。

何もかもが破天荒で、彼と言う存在も別の宇宙の人間で、“こちら”に来た時の事故によって記憶の一部と体験年齢を失ってその見た目年齢は十代後半であるが、実年齢は二十代後半になってしまったとの事。

その上“霊力”という、学園長曰く『氣と魔力の中間のような性

質』の力の使い手であり、若いながらも達人クラス。相当の修羅場をくぐって来た人間だと感心したものだ。

かと思えば、霊力が下がると煩悩を制御しきれず刀子先生やしずな先生等にダイビングをぶちかましてしまうありさま。

元々の体質（？）もあって不死身っぽく、殴り飛ばされ沈められてもすぐ復活。それでも奇怪なモラルは守るらしく、女子中学生以下の少女や気の弱そうな女性には向かおうとしない事は理解できたものの、その危なっかしい性根には女性陣一同頭を痛めたものである。

一応、学園に雇われる形となったのであるが、実力を知りたいという学園長の申し出を全力拒否。

自分と……女の子とは戦えないと言い張り、がんとして受け入れない。

その時は侮辱されたと思ったのだが、後になって彼は底抜けに優しく、女子供に対して手を上げられない性格だったからと知った。もちろん、それ以外の理由もありそうだが。

ゲート前で初仕事をした時、

何故か彼と共にやって来た古も交えて群がる式達と戦い、逃げ回るふりをして主犯の位置を探り出し、そして――

『ああ…いいって。そう気にすんなって。
ほれほれ、母ちゃんが向こうで待ってるぞ』

襲撃者が持つ札に閉じ込められていた子供の霊を解放し、天に導いていった。

あの時の眼。

天に上ってゆく子供らの霊に送っていたあの眼差しは心に深く根差したまま今に至っている。

――ああ、この御人は本当に優しい人なんでござるなぁ……

という、しみじみとした想いも。

そんな彼が、

そんな彼が子供を“始末”しようとしている――

確かにその子供は“敵”に与する者で、式と共に襲いかかって来た。

面白そうな相手だから戦いたい。

そんな単純過ぎる理由から、結界に閉じ込められたネギ達を襲いはした。

好敵手と（勝手に）認めた相手ともう一度戦いたいという理由から、木乃香救出に向かうネギを襲いはした。

いくら子供のした事とはいえ、許されざる行為をとったと言える。

だが、それでも殺すのはやり過ぎであろう。

無論、プロという見地からすれば間違っていないかもしれない。

障害を除去するのに一番手っ取り早い手段であるし、後にどんな禍根を残すか解ったもんじゃない。

それは自分でも解っている。

解ってはいるのだけど……

彼には――

少なくとも横島忠夫という青年には、そんな事をして……そんな考えを持ってほしくなかった。

手に握っているのは手製のハリセン。

彼に使ってもらう為、自分が作り上げたもの。

言うまでもなく、殺傷能力はない。

そのハリセンに彼に習っている霊気を込め、大きく振りかぶって背後に迫る。

すぱ――んっ！！！

――当たった――

初めてとれた見事な一本。

だけどこんな事嬉しくない。

背後から迫る一撃にすら反応できない。

眼前の敵を排除する事にだけ集中するような彼に当てられても嬉しくもなんともない。

いや……どちらかと言うと、

「何をしてるでござる?」

目頭が痛む。

きん…と痛んでくる。

そう、自分は……

長瀬　楓は、こんな横島と相対する事が悲しくてたまらなかったのだ。

■十一時間目：月ノ輝クヨルニ　（後）

「む……っ！？　あれは……」

ぶっとい鉄棍で突いてくる二鬼の攻撃を軽く往なし、双方の腹部

を一刀でもって同時に断つ。

その式が還る前に、その身を陰にして別の集団の間に割り込み、相手が気付くよりも前に薙ぎ払う。

そんな離れ技を見せつけていた詠春であったが、流石に遠方で立ち上がる魔力に動きを止めていた。

「ネギ先生は間に合わなかったのか……？」

戦い真っ最中ではあるが、やはり木乃香の身を案じているのだろう、刹那は顔色を変える。

式の集団に取り囲まれた時でもこれほどの焦りを見せてはいなかった彼女が……だ。

それほど木乃香の事を大切に思っての事であろう。

しかしこう数が多くてはすぐに向かう事も出来ない。

「く……ネギ……っ！！」

明日菜も唇を噛んでいた。

彼女は刹那ほどではないがあの銀髪の少年に思いっきりしてやられており、その強さも大体解っている。

解っているからこそ、たった一人でそんな奴らと戦っているであろう彼の身を案じているのだ。

『他所見か……？　余裕だな』

「え？　あ、きゃあっ！！」

そしてそんな明日菜を、烏族の太刀が襲いかかる。

がきん……っという鈍い音を立て、ハリセンで防げたのは流石だが、体格の差は如何ともし難くそのまま吹っ飛ばされてしまう。

そんな明日菜の反射神経に内心舌を巻きつつその烏族の剣士は追撃を掛けるが、乾いた音が響くと同時にその額に穴が穿かれて還されてしまった。

「明日菜っ！！　ぼけっとするな！！」

「ケホッケホッ……あ、龍宮さん！」

ハマノツルギを杖にして立ちあがる明日菜を、真名が珍しく強い口調で叱咤する。

彼女は器用にも右手で自分の相手を倒しながら、左手に握っている一丁で明日菜に襲いかかる烏族の額を撃ち抜いていたのだ。

その隙にと式が背後から襲いかかるが、真名は慌てる事も無く地に体を付けるほど身を伏せて攻撃をかわし、そのまま足を旋回させて足払いをかけつつ腹部を撃ち抜いて倒していた。

大ぶりに見えて、その身の置き方は実にコンパクト。乱戦にも慣れているようだ。

そして、もう一人は――

『ホレ。どないしたん？』

「う…く……」

狐面の式とほぼ互角に戦っていた古であったが、そこに一つ目の式剣士が混ざってくると途端に息が乱れてしまった。

――いや、普段の古であれば絶対にこんな状況に陥ったりしない。

確かに、この式達は何時も何時も乱闘を繰り返している学生らとは格が違う。

学生らの方は武術とは言ってもスポーツ寄りだが、こっちは完全

に戦闘型なのだ。

そんな相手と戦っているのだから調子を崩してもおかしくはない……と、言えなくもない。

だが、彼女の調子が出切っていないのには別の理由があった。

『ひょっとして、さっきのおかっない兄ちゃんの所為かいな？』

『そうみたいやで？　何や心ここにあらずって感じなんよ』

『おぉおぉ、おぼこいこっちゃのぅ。姐さんも見習ったらどないや？』

『余計な御世話や』

そう式らに挑発されて歯を鳴らしてしまう。

くだらない会話に気を取られてしまう。

普段なら、絶対に集中できている筈の戦闘時に、別の事……それもこの場にいない男に意識を持って行かれるなど愚の骨頂だ。

だけど……

「く……」

手に握り締めている得物……彼と結ばれた絆の証である“宴の可盃”。

それを手にしているというのに、

確かな彼との繋がりを手にしているというのに、あんな光を見ただけで不安が募ってしまう。

そしてその不安は重い重い足枷となり、彼女本来の動きを封じ込めてしまっていた。

『でも、ちょっとオモロないなぁ～……
あの兄さんに気ぃとられてウチと戦えるんやから、何や格下扱いされとるみたいやん』

『せやな。ワシらも舐められたもんや』

ふ～……ヤレヤレと肩を竦ませる狐面。

と、その言葉に腕を組んでうんうんと頷く一つ目。

無論、二鬼とも口で言うほど気にしてはいない。

何だかんだで戦いを楽しんでいるので挑発して突っかかって来て

くれるのを期待しているのだ。

そして古はそれに乗ってしまう。

「うるさいアル！！」

グリップが軋むほど強く握り込み、思いっきり息を吐く。

吸った呼吸を腹に落とし、氣を練り上げて全身に行き渡らせてゆく。

それに合わせて足もとの水に波紋が立ち、見事な円を描いて広がってゆく。

『へぇ……』

『ほほぅ……？』

その氣の高まり具合を目にし、ニ鬼は嬉しげに眼を細めた。

式という立場より何より、武の者である己らの意義が心を高めてゆく。

『もうちょっと楽しめるかもしれんのぅ……』

『せやな』

彼らは完全な本気で戦ってはいないのだが、それでもこの目の前の少女の力量が予想以上だったので楽しくてたまらない。

確かに殺すなとは言われてはいるが、もうちょっとこの娘の“奥”を見たいという欲求に抗い難くなって来た。

ちょいと“殺る気”を見せたろかな。

ほんで嬢ちゃん。死んでもたら……堪忍な?

言葉にせずとも彼女にはそれが伝わった。

頭がその言葉を理解するより前に、二鬼が放つ氣につられ古は水面を蹴りその鉄扇トンファーを振るう。

三つの影は同時に交差し、重い音が辺りに響きわたる。

空に浮かぶ月は、そんな戦いをただワラって見守り続けるのみ――

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊

最初に夕映が感じた事は、楓の表情の意外さだ。

普段の彼女はかなりクールで、どんな騒ぎが起こったとしても、騒動に関わりはするが完全にではなく、どこか一歩後ろに下って見ている……そんな印象をずっと持っていた。

世話焼きではあるが千鶴ほどではなく、皆との間に距離を置きはするが千雨ほど壁を作ったりはしない。

傍観はするがエヴァンジェリンほどではなく、あまり表情を変えたりしないがザジほど無表情では無い。

級友のデータからすればこんな感じたろう。

確かに同じバカレンジャーの一人ではあるが、楓がアウトドア系という事もあってそんなに言うほど接点は無く、運動能力に優れた武道四天王の一人で年齢詐称の疑いが湧くほど大人っぽくて忍者っぽい（？）人。

知っているのはそれくらいだった。

そんな彼女が今、“泣きそう”な表情で一人の青年を見つめている。

知り合って三年目ではあるが、楓が“悲しげ”に“泣きそう”な表情を見せるのは初めての事で、夕映も戸惑いを隠せない。

眼前で呆然と佇んでいる青年に対する恐怖を忘れかけてしまうほどに……

「もう一度問うでござる。

何をしてるでござるか？」

彼を刺激しないよう……という思惑等はないが、それでも距離を置いて彼を睨むように見据えている楓。

しかしその声には、肩を掴み引きずり倒すような力が籠っていた。

だが彼女のその表情には言葉ほどの力は無い。

そんな彼女に顔を向ける事もなく、横島はただ茫然と立ったままだ。

聞いているのかいないのか解らないほど横島の気配が混濁化している事に楓の悲しさは更に増す。

湧いてくる悲しみを噛み潰しつつ楓は言葉を再度紡いだ。

「……やるべき事を、
今最もやらねばならぬ事をネギ坊主に伝えてくださった事には……それは……感謝するでござる。

なれどその事を指摘した、その事を理解している筈の貴殿がここで何をしてるでござるか？」

先ほどのネギ達とは違う理由で肩が震える。

花を舞い散らせている夜風はやや肌寒く感じるが、それよりも尚別の寒さが彼女を凍えさせていた。

恐怖は恐怖であるが、ネギ達が感じたそれではなく、好意を持つ人間がその人で無くなってしまう事、
その人がいなくなってしまう事への恐怖が、心を凍えさせて震わせているのだ。

だからこそ、一歩。

また一歩進み出て叱咤を続ける。

横島を、

横島の“心”に対して訴えかけるように。

「そこな少年……」

と、声だけを小太郎に向ける。目は横島から外さない。

隙を見せられない……という理由ではなく、目を外すと彼が消えてしまいそうで他所に目を向けられないのだ。

小太郎は霊糸が外れたお陰か、プレッシャーが緩んだ所為か体の自由を取り戻している。が、喉が解放されたので咳込みを続けていた。

「彼に対して憎しみがあるというのなら、恨みがあるという理由ならまだ解るでござる」

嘘だ――

例えそうだとしても、横島にはそんな事をしてほしくない。

「なれど、邪魔だという理由でころ……“排除”するなんておかしいでござる」

自分の口からも殺す等というそんな言葉を出したくない。

普段ならやすやすと紡げる言葉であるが、今の彼の前でそんな言葉は使いたくなかった。

無論、ある側面から言えば彼の行動は正しい事でもある。

かかる火の粉は払わねばならないし、先に述べたように禍根は断つに越した事はない。

楓にはまだできないかもしれないが、真名ならそうするかもしれない。

プロなら当然の事だ。

だがそれでも、

「先ほど、かなり冷静に行為に及ぼうとしていたでござるな……？」

それでも横島には……

「そんな事をやろうとし、少しも心が痛まないでござるか？」

後でどれだけ正しかったと思い知ろうとも、

少なくとも、彼には……そんな事をやってほしくなかった。

『シ……ッッ！！』

『ぬんっ！！』

二対一。

古に不利な戦いが続く。

狐面のトンファーが左右から打ち合わせるように襲いかかり、それに対応すると一つ目の鉄棍による足払いが来る。

そしてその足払いに気を取られると……

ガツッ！！

「く……っ！！」

トンファーが襲いかかってくるのだ。

ギリギリで防げたものの、衝撃まで殺しきれなかったか古はたたらを踏んでいた。

『ひゃあ～……それでも対応でけるんかいな。思うとった以上やな』

『せやなぁ』

口笛を吹いて受けられた事を喜ぶ二鬼。

何だか口調も子供の練習を見て喜ぶ父兄のよう。

だが、その内容は限りなく死闘であり、古もいっぱいいっぱいだ。

息が荒い。

整え切れない。

肩が重い。膝も重い。

実力を全く出し切れていない事が自分でもよく解っている。

だけど、その理由が今一つ理解し切れていなかった。

確かに木乃香も心配だ。

言うまでもなく、横島やネギ、夕映や楓も。

だが、ネギや夕映は兎も角として横島と楓の実力はよく知っているはずなのだ。

少なくとも、“こんな自分”よりずっと強い。

だというのに何を心配しているのか。

何で横島に気を取られてしまっているのか。

その事が全く解らない。

『ホレ、他ン事に気ぃとられとったらアカンやん?』

そしてそんな葛藤すら、戦いの間では巨大な敵となる。

何時の間にか同時に踏み込まれ、鉄棍棒とトンファーが完全に彼女の回避する場を塞いで左右から襲いかかってきていた。

「しま……っ！！」

内心の震えを押し隠し、楓はもう一歩前に進み出る。

何時もと違い、楓の気配は淀んでいる。

忍ぶ者であるがかなりまっすぐな性格をしている彼女は、自分から断っていない限りかなり読みやすい気配を持っていた。

だが、その乱れた心情からか何時もの空気を纏えないでいる。

それでも気遣いを完全に失ってはいないからであろう、自分の分け身を使用して夕映を木の影まで運んではいた。

「こ、これは……？」

夕映に術を見せているという事までには頭が回っていないようであるが。

「木乃香を救いに行った筈の人間が、ここで何をしている……確かに横島殿はそう言ったでござるな？
なれど、その横島殿も何をしているでござるか？
木乃香を救いに行くのでござろう？
助けを待っている女の子がいるというのに、それをほったらかして何をしてるでござる？」

シネマ村にて、刹那と木乃香の危機の際。地形や人目もすべて無視して真っ直ぐ駆けつけて救い出した話は古から聞いている。

何だか興奮していた古に語られたそれは、どこか支離滅裂で上手く要領を得られはしなかったのであるが、それでも横島が女の子を救う事だけに大活躍をした事だけは理解できていた。

普段の言動や、時たまかまされるおバカな行動によって隠されてはいるが、彼の性根はとても優しく、真っ直ぐだ。

その上懐が大きく、分け隔てのない性格をしており、場を和ませる能力は達人クラス。

こんなややこしい人間の本質をそう簡単に見抜く事は出来まいが、

一度それに気付くとやたら心を許してしまい、離れ難くなってしまう。

そんな彼が――

そんな優しさを持った彼が、

木乃香を救う事より、小太郎を仕置きする方を優先させている……

「違うでござろう……？」

そう、違う。

そんなの、彼女の知る横島忠夫ではない。

自分が“それ”という人となりに気付き、気が置けなくなってしまっている彼ではない。

いや――下手をするとその気持ちはそれ以上かもしれない。そんな横島忠夫ではないのだ。

「そんな……

そんな行動をとるのは……おかしいでござろう？」

それほど心を許している彼だからこそ、

そんな心を持っている彼だからこそ、

こんな事を……

安易に殺生に意識を向ける行動に向いた事が悲しくてたまらなかったのだ。

我知らず声が震えている。

その所為で声がなかなか紡げない。

今までこんな事になった事がない為、楓も中々言葉を取り戻せない。

だが、“それ”は確実に伝わっている。

琴線を刺激し続けている。

現に彼はずっと耳を傾けているのだから。

「横島殿……」

零れ落ちるような重い声が、やっと名前を紡ぎだし――

「こんなの……
こんなのは……横島殿、らしくないでござるよ……」

――ヨコシマはヨコシマらしく――

『なんて顔してんのよ……アンタは、アンタらしく……ね？』

ビキ……ッ　と音を立てて心が軋んだ。

存在しない過去の“記録”を凍らせていたものがガラスのように砕け散り、一瞬で解凍されてそのシーンを再生する。

そこにある映像は雇い主の最期。

彼の絆であった者達の“最後の一人”。

現世に彼を繋ぎ止めて置けた人との別れの記憶。

だがそれは体験していない過去であり、彼の記憶ではない彼の“記録”。

自分の中で最も許し難い記憶である彼女を失った時の記憶と、そ

の“ありえない記録”とが何時の間にか同調し、未だ心に残っている“別の自分”を追行動してしまっていたのである。

――バーカ……気付くの遅ぇんだよ……――

どこかで誰かの声がした。

明らかに馬鹿にした口調ではあるが、安堵の声音が混ざっている。

そしてそれは自分ではない自分の声。

自分の中にその“体験”を残した張本人。

乱暴な言い方をすれば、横島は自分似の主人公に自分を重ねていたようなもの。

その記憶の憤りに彼の優しさによる怒りが引っ張られ、暴走してしまっていたのだ。

そして、その事に……

その事に横島はやっと気が付いたのである。

有り体な言葉を用いるならば、“正気に返った”であろう。

ガチャリと心のシリンダーが切り替わって元の位置にはまり込んだ上、今度はしっかりとセーフティーが掛かる。

確かに木乃香を攫った相手には怒りを覚えるが、“まだ”憎悪でもって向かう相手ではない。

贄にしようとしているのは許し難いが、“まだ”虐殺せねばならぬ相手でもない。

怒りと憎しみに身を任せ、冷え過ぎた感情のままに怨敵と目した相手を討ち倒してゆく。

しかしそんな事をするのは――

――ヨコシマらしくないわよ？　馬鹿ね。ホントに……――

どこかで……苦笑する“彼女”の声が聞こえた気がした。

「……横島…殿？」

彼女の言葉を受けた横島の空気が、変わった。

冬山より冷気を感じていた彼の眼の光も何時の間にやら穏やかさを取り戻しており、体から発せられていた氣も静まりを見せている。

「横島殿？」

その様子に安堵し、やっと高ぶっていた感情を落ち着かせる事ができた楓は、彼に向って一歩踏み出した。

と――

「あれ～？　もう終りなんどすかー？」

唐突に後ろから声をかけられ、楓は驚いて振り返った。

ぼんやりと間延びした声音。

場違いと言っても良いほどこの空間に合っていない空気。

そして、どこかビスチェに似たデザインの白いワンピースを着たお嬢様然とした出で立ち。

しかしその両の手には長刀と小刀という剣呑なブツが携えられているではないか。

「お前は……確か月詠！？」

そう、“向こう”に付いている神鳴流を使う刺客、月詠である。

「あはー　私の事知っててくださってるんですね～？
お姉さんみたいな強そうな人に知っとってもらえて嬉しいです～」

そう言って剣を持ったまま頬に手を当てて赤くなる月詠。

気が抜ける行為であるが、楓は何一つ油断していない。

最初の晩に戦っている彼女を見ていた事もあってその力量も理解しているし古から話も聞いている。

そして何より、こんな馬鹿な会話をしているにもかかわらず月詠には隙がないのだ。

「ホントやったら刹那センパイの方に行くとこなんでけど～」

チラリと楓から視線を横島に向ける。

何故か楓は、そんな目で横島を見られたら彼が穢れてしまいそうでムっとした。

「何やそこのお兄さんが面白そうやったから追いかけてきたんで

すよ～」

つまりは横島の殺気に“魅かれて”来た……と言う事だろう。

「……っ！！」

ギリリと歯を噛みしめ、楓は珍しく怒りを滾らせた。

この重要な時――

木乃香の事もあるし、横島が自分を取り戻しかかっている大切な時にこんな敵が現れたりなんかすればまた彼が暴走しかねないではないか。

それに“あの横島”を見て面白そうなどとほざく。

タイミングの悪さ故であろう、楓は静かにクナイを引き抜き、珍しく本気で打ち倒す気になっていた。

「わぁー♪」

だが、当然のように月詠は悦びに震えた。

そしてそんな彼女の様子にまた楓は憤りを募らせる。

彼があんな風になったのは千草らの愚行（愚考）であり、彼女らが本山を襲撃して関係者のみならず居合わせた自分の級友すら石化するという暴挙に及んだからだ。

女子供に底抜けに優しい筈の彼が刹那らの窮地に気付かず、小太郎のような子供すら手に掛けようとしたのも、それらに対する怒りの為だ。

だから楓は、珍しく本気で怒っていた。

八当たりと言ってしまえばそこまでであるし、実際にそうなのであるが、楓自身にも今のその感情の昂りを抑えられなくなっている。

無論、殺す気はない。一応。

しかし、行動不能にはする。

身動きできないようにしてしまえば、然程彼の心の負担にもなるまい。

一瞬で攻の氣を練り上げ、一歩一歩月詠に近付いてゆく。

足下の草がその氣に押され、ざわざわと騒ぐ。

そんな彼女の様子に月詠は告白を待っていた少女のような笑みを見せて前に進み始めた。

歩みは走りに変わり、走りは疾駆となる。

双方とも氣の使い手であり、剣に氣を乗せる事には慣れている。

楓には“札”という奥の手があり、使用すれば勝つことは容易だろう。

だが彼女は使用する事を由としていなかった。

何と言うか……この女との戦いに使えば穢れるような気がしたからだ。

それに――

『この女の相手……クナイでたくさんでござる』

という勇みもあった。

そんな彼女の想いを知ってか知らずか、楓の殺気を受けた月詠は獲物にかぶりつく鮫のような目をし、両の剣で彼女を迎え撃とうとして……

「え？」

――体が全く動かなくなっている事に気が付いた。

「なっ？！」

驚いたのは楓もそうだ。

今まで後ろにいた筈の、

月詠の視線から庇うように後方に置いて来た筈の横島が月詠の背後にいたからだ。

「な、何やのー?!」

流石の月詠もこれには焦った。

何故なら身体に何かが巻きついて自由を奪っていたのだから。

氣を乗せた剣で切ろうとしても、それどころか氣でもってそれから逃れようとしてもビクともしないのだ。

そして楓もまた焦る。

先ほどの悲劇。

小太郎という少年に行われようとしていた惨劇をまた彼が行おうとしているのだから。

だが――

がぎんっ

重く鈍く硬い音が響いた。

しかしその場に何も起こっていない。

いや、起こるはずだった結果。すなわち、鉄棍とトンファーが少女の体にめり込み、行動力を完全に刈り取られるはずだった結果が発生しなかったのだ。

『なんとまぁ……』

『自動かいな……』

古が握りしめていた鉄扇子が自動展開し、打ち込まれようとしていた打撃を完全に受け止めていたのである。

仕切り直しと言わんばかりに二鬼は地を蹴って間合いを空けた。

少女からの追撃を用心しての事であったが、不思議とそれは行われず彼女は呆然と手もとの鉄扇子を見つめているではないか。

これには二鬼とも拍子抜けしていた。

だが驚いていたのは古も同じだった。

「ふぇ……？」

何と言うか……軽いのだ。

いや、元々“宴の可盃”はそんなに重い物ではない。確かに扇子にしては重過ぎるが、見た目よりかなり軽いものなのだ。

それを負担だと感じてしまうほどの重量を受けていた古であったが、今の自動展開直前に、ずっと感じていた負担が唐突に消え去ったのである。

「……老師？」

古は呆然とそんな言葉を呟き、彼らが向かったであろう山に顔を向けた。

「な、何やの？　これぇ～？？？」

月詠を縛り上げているは霊糸ではなかった。

何せ太さは2センチ近くもあり、どちらかと言えばロープだ。

霊縄とでも称すればよいだろうか？

楓どころか月詠本人すら気付けぬ一瞬の間にその身はぐるぐる巻きにされて蓑虫状態になっていたのである。

「よ、横島殿！？」

驚き戸惑う楓の声が聞こえているのかいないのかは定かではないが、件の人物はもがく月詠に対してニヤリと笑みを浮かべ、

「……秘儀……」

「へ？」

足払いをかけつつ、その霊縄を思いっきり引っぱった。

「悪代官、お女中コマ回しいいい～～っ!!」

「きゃあぁあああああああ～～～っっ!!」

武に優れる者は、普通体の線……所謂“正中線”が通っている。

正中線とは身体の中心となる重心線でもあり、力と技の基となるものだ。

剣の闘いとはその正中線の奪い合いであり、その線が決まっていないと攻防時に間髪置かぬ当意即妙の対応ができない。

そして正中線は、使い手であればあるほどどんな姿勢をとっても崩れたりしないものである。

当然ながら月詠も相当以上の腕前であるから正中線はピシャリと決まっていた。

が、それでであるが故に正中線を軸としてコマ回しをされると思いっきり回転してしまったりする。

昔の剣豪もそんな風に正中線を利用する者が出てくるとは思いも

よらなかったであろう。思っていたとしたらびっくりだが。

「わははは……良いではないか　良いではないかぁ！」

「あ～～～～～～れ～～～～～～～～～～～」

その場にいる全員の眼が点になっている事は言うまでもない。

重く沈んでいた場の空気をぶち壊し、素人目にも危険人物だと解る月詠がギャグ技で遊ばれているのだから。

夕映は元より、へたり込んでいた小太郎ですら呆然としていた程に。

だが、一人楓だけはその秘儀とやらの性質の悪さに気が付いていた。

横島は思いっきり引っ張ると同時に、その霊気の縄を引っ込めているのだ。その所為で更に回転力が増しているし、尚且つ月詠は左回りに高速回転させられている。

普通、人間は片方……特に右回り……に回転する耐性はつくが、反対側に対する回転への耐性は付き辛い。これは鍛え方云々ではなく、生物学的に体がそうなっているのだからどうしようもない。現にプロフュギィアスケーターだって反対側に回転させれば目を回してしまうのだし。

恐らくカンでやった事であろうが、横島は月詠を左側に思いっきり回転させて目を回させているのである。

驚くべき性質の悪さであるが……

そして

「よ、横島……どの？」

目を回して突っ伏している月詠に目もくれず、楓は横島へと声をかけた。

性質が悪い故に気がついた。

先程までの鉱物的な冷たい気配が消えうせ、コンニャクのような、スポンジのような柔軟さを見ている彼。

散々っぱら月詠の目を回させて弄んでいたというのに、何時ものどこか申し訳なさそうな表情になりつつ振り返ったその顔は……

「ごめんな楓ちゃん……遅くなった」

いつものあの柔らかい空気を持つ青年。

楓と古がよく知る眼差しの横島忠夫だった。

「ハイ～……ヤッ！！！」

左足を軸にし、踏み出された右足と同時に右の腕が伸びる。

体をひねらない為、初速はずっと早く真っ直ぐだ。

『お、おぉおっ??!!』

何時の間にか旋回させている鉄扇トンファーの軸が一つ目の式の腹を襲う。

ギリギリで外に弾くが、それを待っていたかのように踏み出した足を軸にし、今の弾かれた力を巻き込んだ蹴りがわき腹を撃つ。

唐突に攻撃の拍子が変わった事に戸惑っている隙に、古の反撃が力を増していった。

『こっちもおんねんでっ!?』

間合いを空けられた狐面が援護の為だろうか、古の背後から礫のように飛びかかる。

だが古もそれを読んでいたのだろう、開いたままになっているもう片方の鉄扇トンファーを狐面に向かって投げ付けた。

『んなっ!?』

当然、狐面は空中で相対してしまう。

鉄扇トンファーは物理法則を無視するかのように歪に回転しつつ狐面に襲いかかってゆく。

無論、彼女とて腕の覚えのある式だ。
そんなものを叩き落とす事など造作もない。

だが、その直前にぞくりとした悪寒が走り、慌てて両のトンファーでそれを防御する事にした。

そしてそれは幸いする。

ずどんっ

『きゃあっ!?』

何と防ぎ切れなかった。

破砕鉄球で殴り飛ばされたような衝撃が走り、狐面は吹っ飛ばされてしまう。

“それ”はベースが横島のサイキックソーサーに酷似している。
よって投擲も可能だ。

そして投げつけたソーサーは何かに当たれば爆発するのだ。

モノが違う所為か爆発こそしなかったが、たっぷりと古の氣を乗せていたそれは本家には及ばないものの強い衝撃を相手に与えていた。

彼女がもし、弾くよう行動していればただでは済まなかったであろう。

『せやけど得物はもう無いで！！』

と、一つ目は何とか体勢を整えて、背中を向けている古に襲いかかる。

斜め上からの振り下ろしの一撃。

大上段からの攻撃だ。硬気を巡らせて受けたとしても無事ではあるまい。

しかし、

「一来々一」

振り返りつつ慣れたワードを口にする古。

一瞬で手元に札が出現して今さっき投擲した筈の鉄扇トンファー

となっていた。

がぎんっ

『何やて！？』

それが戻って来た事だけでも驚きであるのに、自分の一撃が防がれた事にも驚いた。

大岩すら破砕する一撃が衝撃ごと完全に防がれたのだから当然であろう。

古や楓の持つ札は、パクティオーカード同様にワードを唱えるとアイテムを出現させる。

他の力は知らないが、パクティオーカードによく似た性質を持っているといってよいだろう。

だが、パクティオーカードとは徹底的に違うところがある。

一つはアイテムをその身から離せば1，2秒で札に戻ってしまうところだ。

つまり、手から落としてしまえばほとんど間をおかずに札に戻ってしまう為、古は兎も角、時間制限付きの楓は一度手を離すと再チ

ャージに時間がかかってしまう。

そしてもう一つの特性に、呼べば札がやってくるという点があった。

どれだけ距離を置こうと、間にどんな障害があろうと、呼べば札はどこにあろうと駆けつけてくれるのである。

デメリットも多いが、メリットの方は大反則。何とも契約相手に似た札であろうか。

そして古の“宴の可盃”は横島の手そのものと言って良い能力がある。

自分と楓が横島と結んだ絆……

その確かな証拠を手にしている事を、古は今更ながら得心できていた。

「そうだたアルな……
私、何してたアルか……」

古のその身体から、完全に無駄な力が抜けていた。

かと言って気が抜けたわけではない。

意志は固く、その身はあくまでしなやかに――

それを行っていない事をやっと思いだせたのである。

「さ～て……失礼な事してた分、思いきり行くアルヨ～？」

完全に自然体で構えたその姿。

笑顔も自然。何時もの猫口。

これでこそ古菲だ。

一つ目と、何とか身を起こした狐面は一瞬呆気に取られたものの、

直ぐに嬉しげに目を細めて自分らも身構えて見せた。

『願てもないわ』

『今度はがっかりさせんといてな？』

そう、正に失礼な振る舞い。

武人と相対しているというのに、別の事に気を取られていた。

だからこそ、自分を見せてやらねばならない。

本当の自分の戦いを披露してやらねばならない。

古は猫のような笑みを悪戯っぽい笑みを深め、地を這うように式の懐に飛び込んで行く。

彼女の闘いは、今やっと本戦を迎えたのだった。

「……お、遅いでござるよ横島殿……待ちくたびれてしまったでござる」

「ごめんって……ああっ、そんな責める眼で見んといてぇっ！！」

「知らないでござる。自業自得でござるよ」

「はうわぁっ」

青年の空気が唐突に変わった事は夕映も気が付いた。

ともすれば腰を抜かしてしまいそうだった気配が消え、何と言う

か……脱力しそうであり、妙に安心できてしまうような雰囲気が周囲に広がっているからだ。

木の陰に隠れていた夕映がそろりそろりと出てくると、直ぐに青年は気付いて謝るような視線を向けてくる。

まるで怯えさせた事を謝罪するかのように。

その気遣いの視線。

不思議な話であるが、見た事も無い青年であるというのに、ごく最近その眼差しを見たことがあるような気がしていた。

そして、楓の雰囲気も意外である。

『……？　照れてる？　いえ、拗ねてるですか？』

そのどちらともとれる子供っぽい表情を件の青年に向けているではないか。

それに何だか目尻が光っているような気さえする。

さっきまでの焦った表情も初めてであるが、こんな彼女の……言っては何だが“女の子っぽい”顔も初めてであった。

『彼は、楓さんにとってそれだけの人ですか……？』

夕映は首を傾げる事しかできなかった。

「う〝う〝う〝～～」

そんな彼女らに聞こえたのは少女のうめき声。

目をぐるぐるナルトにしながらもヨロヨロと立ちあがってくる。

左側に高速大回転させられ三半規管が甚振られたというのに回復が早いのは流石と言うべきであろうか。

「お？　もー立てんのか。回復早いなぁ……シロとは大違いだ」

「……シロ？」

どうもそのシロという相手にやった時はもっと長く目を回していたようだ。

何だか女の子の名前のような気がし、楓は何故かジト目で彼を見た。

どーして気付いたかは定かではないが、女の子と戦わせる事を由としない楓は、彼女の視線にビビリを見せている横島に代わって月

詠の相手をするべく進み出ようとした。

が、その彼女を横島が止めた。

「横島殿？　……なっ！！？？」

彼が戦うのだろうかと問いかけようとした楓は、彼の顔を見て驚愕してしまう。

何と、いきなり顔のタッチが原哲〇になっていたのだ。

そりゃびっくりもするだろう。

「闘う必要はない。その娘との決着は付いている」

そして声は当然のように神谷〇だ。

「な、何を……」

剣に自信を持っている月詠は当然納得しない。

あんなおバカな技で目を回させられた事は業腹だ。それにただ単

に目を回しただけで負けを認める事等あろうはずもない。

無論、実戦であれば目を回した時点で戦力低下。コンマ三秒で三回は殺されているであろう。

だから横島の戯言のようにとっくに勝負は付いていると言って良い。

だが認めていない。

認められない。

こんな馬鹿な事で負け等と……

が、あまりと言えばあまりにも相手が悪すぎた。

「快楽秘孔が一つ、『笑点』円楽を突いた。お前の頭はもう……」

「え……？」

「のっぴょぴょーん!!!」

「……」

「……」

「……」

空気が……めっさ重かった。

あまりと言えばあんまりなアクションだったのだから当然か。

つーか会話の繋がりがじぇんじぇんなく、唐突にもほどがある。

お陰で周囲の空気の白さと重さは半端ではなかった。

取り返しが付かな過ぎてどーしてくれると訴えたくなる空気の重さが、取繕えない場の雰囲気と相俟って周囲を押し潰して行く。

――と、そんな中で強く反応する者がいた。

「ぷっ……くくくく……

あはっ

あはははははははははははははははははははははははっっ！？」

月詠である。

「え？」

「はぁ？！」

驚愕する楓と夕映をよそに、横島は腰に手を当ててふんぞり返って残酷な言葉を投げかける。

「わはははははははっ！！
どーだ！！　つまんねー事で大笑いをさせられる屈辱は！？
関西弁の使い手ならこの上もない屈辱だろう！？」

「う…く……
あは、あは、あはははははははははははははははははははははははははははっ！？」

止めようにも止まらない。

可笑しくもないのに可笑しくてたまらない。

笑う理由が無いのに、ただ強力な笑いだけが噴き出してくる。

止めようにも、何か行動しようにも全身の筋肉が震えまくって力が全く入らない。

笑いながら戦いをする者がいない訳ではないが、大爆笑しながらは流石に無理だ。

月詠は転げ回って地面を叩いてひきつりながら大爆笑を続け、とてつもなくイヤンな理由で戦闘不能状態へと陥っていた。

「ホレホレ。まだまだいくぞ。
てけっれっつのパー！！　おにょにょのぷー！！　しおしおのぱーっ！！」

「きゃはははははははははははははははははははははははははははははははっっ！！」

「わはははははっ！！

そのまま笑い悶えて皆の前に粗相を披露し、新しい自分に目覚めてしまえー」

「ひぃ～～止めてくだ……

あはははははははははははははははははははははははははははははははははははっっ」

『『『む、ムゴイ……』』』

その場にいた全員……小太郎を含む……の意見は一致していた。

とは言っても、止める方法など思いつかないのでどうしようもないのだが。

言うまでもなく、快楽秘孔云々の話は大ウソである。

お女中コマ回しとかいうタワけた秘儀をぶっ放した僅かな隙に、横島は“珠”を月詠の襟足に仕込んだのである。

反対側に回された事により、意識の混濁化を防ごうと神経を集中させているのを良い事に、その隙を突いて『笑』の珠を仕込んだのだ。

言葉を弄んで、月詠を玩ぶ。

戯言を放って翻弄し、原因や理由を相手の誤解でもって明後日の方向へと持って行かせる。

流石は魔神をも“奥の手”で出し抜いた人間。何と恐ろしい男であろうか。

聞く人が聞けば煤けてしまうほどつまらないギャグネタを月詠の耳元でほざきながら、新しい自分に目覚めさせようと本当に一個『覚』の文字入りの“珠”を追加で仕込むという非道を行いつつ、ひとしきり悶えさせてスッキリ満足した横島だったが、儀式の光が強さを増すと流石に遊ぶ（酷っ）のを止めて腰を上げた。

その顔は何だかやり遂げたサワヤカな男それとなっており、さっきまでとは違う意味でヤヴァかった。

蛇足だが、月詠は新しい自分に目覚めずに済んでいる。

「ぴぃ」

――横島の落ち着きを見たのだろう、オシオキの終わりに合わせて茂みから白い小鹿が……かのこが現れた。

「ごめんな。お前にも心配かけたなぁ……」

そう言って撫でてやると、別にいいよと言わんばかりに目を細めて喜んでいる。

元々かのこは横島の放つ霊波に惹かれて人前に出来ていたのだ。
優しい彼に戻ってくれたのならそれで満足なのである。

そして彼は、そんな使い魔の可愛さに苦笑しつつ問う。

「じゃあ、悪いけど頼まれてくれるか？」

「ぴぃ！」

主語が抜けてはいるがそこは使い魔だからか、何を問われたのか理解しているようだ。

短く同意するように鳴き、「ぴぃぴぃ」と何かを呼ぶように空に向かって鳴いた。

――と。

かのこの顔の真正面に札が出現し、光ったと思った瞬間、その細い首に白いペンダントが掛った。

と同時にかのこの霊圧が急上昇。姿形を形成している霊格が一気に跳ね上がり、その存在の大きさを膨らませる。

「な……っ！？」

初めて目にする楓も驚いたが、木の陰から見ている夕映はもっと驚いた。

何せ白い小鹿のサイズが変化……というより、成獣に急成長したのだから。

同時に光り輝く角が頭に生え、白い毛皮が月光を反射する神々しい白鹿と変化を遂げた。

かのこ専用魔具＜月精石＞

横島の知る精霊石と同じようなカットが成された月の魔力を秘めたムーンストーン。

精霊で使い魔である　かのこのポテンシャルを一気に上げ、精獣の力を持たせられる力がある。

かのこはその魔具の力で横島の足となるのだ。

「ぴぃーっ」

そう再度鳴くと　かのこの口に純銀の馬銜（はみ）が出現し手綱もセットされる。そして背に鞍が出現し、騎乗の準備は整った。

「行くでござるか？」

「ああ」

ネギに対して偉そうな事をほざいてこの体たらく。

何だかんだで一人で行かせてしまっているし、流石にバツが悪い。

言うまでもなく将来が楽しみな癒し系美少女の木乃香の身も大心配だし。

それに……

「あのクソガキにお仕置きをしねぇとな……」

これだけ事をしでかし、木乃香を攫うのに邪魔が入らないよう本山の全員を石に変えた少年。

横島の勘では裏の主犯。

流石に一発ぶんなぐる事くらいはしないと気が治まらない。

楓は一瞬、またあのような状態になるのではと心配したのであるが、横島の笑みは暗いものがあるもののやたら悪戯っぽい。

暗い笑みの意味はおそらく美少年であることへの嫉妬であろう。

どうやら月詠に対して行った事と同等のお仕置きであろうと見た。

だったら別に問題はない。

彼女の知る横島なれば……

「では拙者も……」

「あ、楓ちゃんはダメ」

ついて行こうした楓を横島の手が止めさせる。

出鼻をくじかれた楓はムッとしたものの、

「あんなぁ……こんなトコに夕映ちゃんほっとくのか？」

と言われればひっこむ他ない。

ここで一人にしておく事はできないし、あんなに魔力が高まっている場に連れて行くのは論外だ。

そうなると彼女を守ってやらねばならないのは当然だろう。

行くのを止められはしたものの、横島の女の子への気遣いが復活している事は喜ばしい。

だから楓も「あい」と素直に笑顔でもってそれを了承した。

「よし、エエ娘や」

横島は自分より背の高い楓の頭を一撫でし、そのまま　かのこの背に飛び乗った。

「あ……」

夕映を守る事を引き受けはしたのだが、頭からその温かさが遠ざかった事に無意識に体が動き、横島の背に手を伸ばしてしまう。

そんな自分に驚き、伸ばした手を引っ込めてじっと掌を見つめてしまう。

駆け出してゆくかのこを引き止めるのも何であるのだが、ちょっとした寂しさは拭い去れない。

と……

「楓ちゃん」

彼女らから少し離れた場所で横島はかのこの足を止め、顔だけを向けて声をかけてきた。

「……え？」

その声の主を無意識に求めていた手から目を離し、本人に目を向けた。

薄明るい月は顔を覗かせ、闇夜に慣れている楓に横島の姿をはっきりと捉えさせている。

そんな薄明かりの中、彼は楓に顔を向け、呟くように一言――

「ありがとう」

そう心からの礼を言い、駆けて行った。

無論、精獣かのこの足。木々がその行く手を遮る事などありえない。

障害物の無い平地を駆ける遠ざかってゆく。

だが、彼のその背は先程のものとは比べ物にならないほど力強く、そして意志が漲っていた。

楓はただ、そんな彼の背を黙って見送る……

「楓…さん？」

横島が駆けて行った方向に顔を向けたまま硬直している楓をいぶかしんだ夕映は、とてとてと歩み寄って下から顔を覗き込んだ。

「あ……」

そして、彼女は又してもレアなもの見てしまい、目が点になった。

かぁあああああああああ……

何と、楓はこれ以上ないというほど顔を真っ赤に染め上げていたのである。

「く……はぁあああ……っっっ」

「か、楓さん！？」

唐突に風船から空気が噴き出すような勢いで楓の口から声が漏れ、そのまましゃがみこんでしまう。

がっくりと跪く楓に、夕映はただ慌てる事しかできない。

「く……ふ、不意打ちでござった」

「は？」

そう、完全な不意打ち。

敵による攻撃ではなく、味方による暴虐なる不意打ち。

今まで見たいと思っていたもの。

子供らの霊に向けられていた優しそうな顔。

見送り、見守る優しい眼差し。

そして笑顔。

今までまともに見られなかった彼の笑顔だ。

見たい見たいとは思っていたその顔だった。

頼んだって作り笑顔しかならないだろうし、直接言うのも恥ずかしい。だけど何時か自分にも向けられたら良いなとは思ってはいたのであるが。

思っていたのであるが……

まさかこんな唐突に食らうとは思っていなかったし、

「こ、こんなにも破壊力があるとは……」

思ってもいなかった。

本気で感謝している笑顔。

親しいものに対して向けられた彼の優しい顔が、まさかこんなにもキくものだったとは……

「せ、拙者……侮り過ぎていたでござる」

「はぁ……？」

楓の脳裏にエンドレスで繰り返される横島の笑顔。

おまけに思い出せば出すほどフォーカスがかかって何だかイヤン。

それが優しい彼の声と共に楓の心に何かをプスプスと突き刺してゆく。

「う〜〜〜〜〜う〜〜〜〜〜あ〜う〜〜〜〜〜〜」

むず痒いヤラ痛いやら、表現し難い感触に楓はただ悶えるのみ。

「あ、あの……」

かかる状況を忘れたかのように顔を赤くして悶え転がる楓に、置いてけぼりをくらっている夕映は掛ける声が思いつけなかった。

「う〝がぁ〜〜〜〜っっ！！！」

ドンドンドンドンッ！！！

「た、龍宮？！　どうかしたのか！？」

急にリズムを乱して、銃を乱射しまくる真名に流石の刹那も驚いて声をかけた。

まぁ、吠えながら撃ち始められたら誰だって慌てるだろう。

「い、いや……何だか楓のバカに急に腹が立って……」

「はぁ？」

「いやそんな事より……刹那っ、明日菜っ！！
ここは私達に任せてお前らはあの可愛らしい先生のところに行け！！」

「「え゛！？」」

右手の銃口を敵に向け牽制しつつ二人にそう言い放ち、左手の銃で隙を突こうとしていた式を撃ち抜く。

明日菜も刹那も驚いて動きを止めるが、そんな二人に式が襲いかかろうにも間を割った詠春がいて接近は許されない。

「そうです。ここには私もおりますから、君達は早くネギ君の元に！！」

「でも…っ！！」

話している間にも二本角の武者のような式が踏み込んでくるが、詠春は迫りくる刃を事も無くいなして左の拳で相手の胸を振り抜いて一撃で還す。

この地にいた折に剣の教えを受けていた刹那ですら感嘆するほど無駄がない。

そして彼女も――

「ふんぬぅっ！！」

『うわぁっ！？』

『な、なんや！？　また急に打撃力が増したで！？』

何だか異様に気合いが入った鉄扇の横薙ぎで二鬼をふっ飛ばし、声だけを二人に向けた。

「ここは私らにお任せアル！！
アスナは早く老…じゃなかた、ネギ坊主のトコに急ぐヨロシ！！」

「く、くーふぇ……」

何時もよかパワーファイター染みた戦い方をする古には呆気に取られるが、この分なら任せても大丈夫だろう。

刹那に顔を向ければ、彼女もそう得心がいっていたのかコクリと頷いて見せる。

ならば、と。

「ゴメン！！　それじゃあお願いっ！！」

二人はこの場を三人に任せて駆け出して行った。

「気にするな！！」

追撃しようとする式の頭を後ろから撃ち抜きつつ真名はそう言って口の端を歪めた。

無論、たっぷりと礼金は貰うつもりであるが、それより……

「どうやら何とかなったみたいだな……楓」

何の確証も無い。強いて言えば女の勘か？

しかし奇妙な確信をもった真名は、安堵の笑みを浮かべて引き金を引くのだった。

「それにしても古。
何だか異様に力入ってないか？」

「イヤ、何か急にヌケガケされた気がして……」

「ああ、成程……」

駆ける。

駆ける。

駆ける。

儀式は終わりを告げたのか、物凄い気配が立ち上がるのを感じる。

だが、まだ間に合う。

何の根拠もないのに大丈夫だと確信が持てる。

仮にダメでも間に合わせる。

無理だろうが何だろうが問答無用で間に合わせてみせる。

自分から闘いに行くというシチュに気は重いのだが、それでも何だか体は軽い。

あの子供教師が木乃香を救い出せていない事は解るのだが絶望はない。

走る。走る。走る。

そう、まだ生きている。

まだ木乃香は生きているのだ。

そして助けを持っている。

未来に幸大きい美少女が助けを待っているのだ。

だったらここで諦めてたまるものか。

――そうだ。それでいい。
諦めるな。嘆くな。そんな暇があったら突っ走れ――

「おうともっ！！」

心に響く声は自分の声。
しかし自分ではない自分の声。
横島が自分を取り戻した事を喜んでいる自分の声。

――お前は俺だが、こんな俺じゃない。
お前には憎悪は似合わん。非情さも冷酷さも……な――

「つーか、オレにそんなシリアスなんぞ似合わねぇってば」

――違いない――

独り言を言っているようで歴(れっき)とした会話。
だから“二人”して納得し、クククと笑う。

まだネギが足掻いているのが解る。

木乃香を救う為、何故か横島より先行している刹那、明日菜と共に微力ながら闘い続けている。

自分より年下の女子供ががんばって闘っている。

「だったら見物って訳にもいかんわなっ！！」

未だに邪魔を仕掛けてくる式神たちを軽くいなし、得物を強奪しつつおちょくりながら神速の逃げ足で駆けてゆく。

『こらーっ！！　返せーっ！！』

「はっはっはっ　聞こえんなぁ～？
ハイヨーシルば……じゃなかった、かのこ～～～っっ！！」

「ぴぃぃぃーっっ！！！」

三日月というライトの下、

悲劇の始まりとして開けられた幕……

そこに割り込んで来るの

は止めようも無い喜劇。

あらゆる悲劇を台無しにすべく。

馬鹿が舞台に

やって来る――

後編（後書き）

これが私風のニコポ！です。

色々変えてみましたが、やっぱりまだまだ表現力がナニですね。
文体が読み辛くてご迷惑をおかけしているようで申し訳ありません。

原因はおそらく朝夕の寒暖の差。気温差１０℃以上なんて勘弁してほしいっス。
皆様も気を付けてくださいね。

それとネタふりまくった横っちの精神の秘密は修学旅行後です。
すんません。もうちょっとお待ちください。

かのこの所為で５万が……！？
という訳で、続きは見てのお帰りです。
ではでは～

前編（前書き）

変換自体は夕べ終わってましたが、力尽きて寝てしまってましたw

前編

朧に青白く輝く巨大な体。

その巨大な顔の全面と背面には硬質な顔があり、その身体につりあった巨腕が三対生えている。

それこそが伝説の飛騨の鬼神ーリョウメンスクナー

十数年前にも一度封印が破られ、現関西呪術協会の長と、千の魔法を使いこなすと謳われた魔法界の英雄サウザンドマスターらの活躍で封じられはしたが、その危機が去った訳ではない。

現に、完全ではないものの今その封印は解かれたのだから。

グ　ォ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ……

ただ声が零れたに過ぎないのであるがその圧力は尋常ではなく、空を飛ぶ少女の下腹にも響いて一瞬動きが止まるほど。

完全に現界し切っていないのは幸いであるが、それでもそのプレッシャーには流石に少年少女らの足が竦む。

無論、それで後退するほど落ちぶれてはいないのであるが。

リョウメンスクナを復活させ、これで東の奴らに一泡吹かせてやれるとほくそ笑んでいた千草であったが、ネギがパクティオーカードの力を使って従者契約をしている二人、明日菜と刹那を召還した時からどうも風向きが変わりつつあった。

「……それで、どうするっていうの？」

銀髪の少年は然程も気にしてはいなかったが、千草の胸には暗雲が見え始めて焦りが見える。

これだけの力を得たというのに何を不安がっているのか？

そう自分を叱咤するのだが、術師としての勘だろうか、どうしても不安をぬぐいきれないでいた。

そしてその不安は的中する――

「木乃香お嬢様……良かった……」

「せっちゃん……」

何とリョウメンスクナの肩口に捉えられていた木乃香は刹那によって奪回されてしまったのである。

敗因は刹那が純粋な人間ではなく、烏族の血が混ざっていた事。

彼女は烏族のハーフで、翼を持っており、かなりの速度で空を飛べた事だ。

リョウメンスクナはその巨体故に宙を飛んで迫る少女に対応しきれず、やむを得ず使用した式らも掻い潜られ、あっさりと木乃香は刹那の腕に抱かれて連れ去られてしまったのである。

そしてその眼下でもまた、風向きが変わりつつあった。

こちらの敗因もまた少女の力。

神楽坂明日菜の持つ、レアな力である魔法無力化能力。それが大きかった。

水と石の属性魔法を使う少年の攻撃魔法はその力によって防がれ、或いは無効化されて効果を発揮し切れない。

少年の攻撃も、ある理由からネギ達を本気で殺そうとする事は出来ず、優勢ではあったが決め手に欠けてしまっていた。

そして、遂に隙を突かれてしまう。

明日菜の持つ力の方が厄介だと踏んだ少年は、先に彼女を行動不能にさせようと拳を振るった。

だがその拳が彼女を襲う直前、底力を発揮したネギによってその腕はつかみ取られ、明日菜の持つハリセン『ハマノツルギ』によって障壁を叩き壊されてしまう。

「ネギ！！」
「うぉおおおおおおっ！！」

打ち合わせをしていた訳でもないのに見事な連携。

明日菜が魔法障壁を破壊し、少年の動きが止まった僅かな瞬間、最後の魔力を腕に込めたネギが遂に一撃加える事に成功したのである。

「……身体に直接　拳を入れられたのは……君で二人目だよ……ネギ＝スプリングフィールド」

そして……初めて少年は感情を見せた。

表情を変えた訳ではないし、声を荒げた訳でもない。

だがそれでも、昼間の戦いでの失態を思い出してプライドに引っ掛かったのであろうか、少年の発する波動は間違いなく怒りのベクトルへと向いていた。

相手が子供であるという事から手加減していたのだろうか。

今までの速度とは段違いの一撃を、初めて本気を感じさせる攻撃をネギに加えようとした。

「ネギッ！！」

――千草らの敗因は、その手段である。

彼女は木乃香がのんきに京都に来るという事からこの策をとった訳であるが、

これがもし、時間をかけて自力で封印を解いていたなら、

尚且つ、強力な呪符等を用いてスクナをコントロールするといっ

た手段を用いていたならば、

間違っても長の娘……

いや、高い魔力があるからという理由で、一人の女の子を依代なんかにしなければ、もっとマシなラストを迎えられたかもしれない。

いや――それも儚いＩＦだろう。

女の子を攫った時点で、

女の子を使うという愚考をしてしまった時点で末路は決定しているのだから。

全ては叶わぬ夢として散る羽目になるのだから。

何せ、あの男が……

突拍子もないバカがこの世界に来てしまっているのだから……

グ　ォ　！？

グ　ォ　オ　オ　オ　ォ　ォ　ォ　オ　ォ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ

……ッツッ！！

唐突に頭上から降って来た苦しげな叫びに、ネギに反撃を掛けようとしていた少年の動きが止まった。

「ネギッ！！」

「あ、明日菜さん！？　うぷっ……」

そしてその隙に明日菜がネギをかっ攫って少年から距離をとった。

服は石化して砕けたので胸がむき出し。

ネギは胸に顔を押しつけられて窒息しかけていた。

彼は息が苦しくてジタバタもがいていたのであるが、明日菜は気にしていられない。

「な……何が……」

それほどの怪異が起こっていたからだ。

「これは……」

未だ空にいた刹那も呆然と見守るのみ。

木乃香がしがみ付いてくる力が強くなっても気が付かぬ程に。

千草も突然暴れだしたスクナにしがみつくのが精一杯だ。

ズシン……と、遂に膝を突いてしまうスクナ。

三つの巨腕で自分の身を抱きしめるように苦しんでいる。

いや――震えている？

輝きを見せていた巨体も弱々しく、まるで精気を磨滅させている

かのよう。

それは傍目にも力を失いつつあるようにも感じられた。

「な、何が起こったんや！？」

蹲りはしたものの、暴れる事はしなくなった為にどうにか体勢を整えられた千草は慌ててスクナの様子をうかがう。

とは言っても、流石にこんな鬼神を使った事など無いし、そんな文献も今の世では存在しない。

考えられるのはコントロールに使っていた木乃香を奪回された事くらい。

だったら彼女を取り戻せば……

そう判断してキョロキョロと見回して木乃香……と刹那の姿を追った。

と……

その眼は、全く別の姿を捉えてしまう。

「なん……や……？」

鬼神を封じていた要石の上。

今まで気にもならなかったその石の上に人影が一つ。

式のようでいて、式ではない怪しげな影が片膝をついていたのだ。

そしてその人影の顔。

月光とスクナの光によって淡く浮かんだその人影の顔に辺りに、
チラリと鬼にも似た赤い仮面のようなものが見えていた。

『ま……まさか？』

その赤い仮面が見えた瞬間、千草の頭にある伝説が浮かび上がる。

リョウメンスクナとは飛騨の鬼神。

そして飛騨の国にはとある忍の一族の伝説が残されていた。

世が乱れし時に現れ、時に悪の組織と戦い、

時に妖怪を滅し、

時に巨大怪獣をいなしていたという忍の一族……

その一族の党首は代々赤い仮面を着用し、妖怪や妖物等のあらゆる怪異らを空を飛んだりビームを発射したり、ミサイルやバズーカーもどきを発射したりと、トンでも忍法（？）で戦い続け、それら全てを屠って来たという。

『ひょっとして、あの伝説の仮面の忍者　赤……』

その名が思い浮かびかかった時、やっと目はその姿を完全にとらえていた。

まず、顔についているのは赤い仮面ではなく、赤いお面だ。

忍者刀も持っておらず、手にしているのは無骨で大雑把な刃だった。

左手にも何か持っているようだがよく見えない。

忍者装束も来ておらず、何やらマントに似たものをひっかけている。

……アレ？　なんか違う。

だがそれでもその身から立ち昇る力には身が竦む。

それ程莫大な力……

何と何と、信じ難い事にスクナに匹敵するほどの力がその影には満ち溢れていたのだ。

「な、何や！？
アンタ誰やっ！！」

ついにこらえ切れなくなったか、ウッカリと千草は名を問うてしまった。

その叫びに、その場にいた全員の眼がそこに集中する。

ユラリ……と、その影は視線に応えるかのように立ち上がった。

「！？」

そして皆の眼は驚愕の色に染まった。

赤い仮面ではなく、赤い鬼の面。

右手に持っていたのは無骨で大雑把な獲物はでっかい包丁。
そして左手は桶だ。

その身を包んでいたのはマント……ではなく、何と蓑。

そう、赤い影……○影ではなくその正体は……

「エ〝ロ〝い〝娘〝は〝い〝ね〝ぇ〝
え〝か〝ぁ〝あ〝あ〝っ〝！？」

“それ”は、（かなり）特殊な“なまはげ”だった。

「い、一字しか合うてないやん……」

赤〇ではなく、なまは“げ”。

語呂しか合っていないし、“げ”しか同音はない。

呆然と感想を漏らす千草のセリフに、その場にいるネギ以外の人間達はやるせなく同意していた。

――在り得たはずもなかった未来。

しかし、今や迫りつつある新たに生まれてしまった未来。

今よりもう少し先の世界において、ある一人の男の噂が飛び交っていた。

様々な場所にて様々な想いを持って活動する組織があり、様々な方法を用いて活動を続けている。

その思惑は多種多様であるが、魔法や氣の力を用いて大規模犯罪阻止活動の支援やら災害時の救済活動を行い、秘匿を常として表向きはＮＧＯ団体を名乗りつつもその活動を続けていた。

無論の事であるが、そのような力を持つのはそんな善行の組織だけという訳もなく、欲望や野望を持って働く組織も存在している。

そして当然の如くそう言った組織らは対立を続けていた。

しかしその中にごく少数で活動し、尚且つどの陣営にも属さない奇怪な男の存在があった。

どこかの組織が何かしらの活動を行い、尚且つその活動内容に一方的な犠牲を強いるものがあれば災害の如く唐突に出現し、しっちゃかめっちゃかにかき乱して組織のネットワークまでもズタズタにした揚句、全てを御破算にして去っていってしまう恐るべき男……

被害者を救出する。　無論の事。

加害者をやっつける。　当然の事。

それは今まで魔法界に知られている英雄達もやっていた事。珍しくもなんともない。

しかし、その男はかなり変わっていた。

やる事にそつが無いくせに無駄な動きが多く、何せどの陣営だろうとお構いなしという理解しがたい行動を含む事も多々。

その上、やたら女癖が悪いとキている。

ある時はその組織の女幹部を口説いて仲間にボコられ、

またある時は生贄にされかかっていた少女を救いだして口説いた挙句、やはり仲間に血の海に沈められ、

そしたまたある時は組織によって実験に使われそうになっていた女性を救出し、やっぱり口説いて仲間に血だるまにされる……

その珍妙な行動には誰彼となく呆気に取られてしまう。

だが、常の行動の理念は曲がる事無く、傷つけられ苦しめられていた者を癒し、傷つけていた者にトラウマもののお仕置きを“かます”。

被害者らの苦しみや悲しみを台無しにし、

加害者らを計画ごと完全に破壊し、破滅させ、絶望に導いてゆく……

悲しみを台無しへと導く者であり、咎人を絶望と破滅に導くエンターテイナー。

苦笑混じりの微笑みと、絶望の想いを背に受ける彼を人は――

Ｒｕｉｎ（ルイン）と呼んだ――

■十二時間目：Ｔｈｅ　くらうん

（前）

「な……何ですか、あれは……」

「何と……まぁ……」

流石にあんな巨体が出現すれば、夕映らの眼にも入る。

何だかよく解らない理由で悶えていた楓もそのお陰で復帰を果たしていた。

鬼神が出現した事は最悪なのであるが、彼が復帰できた事は喜ばしい。並べて称せる事態ではないが。

「あれが飛騨の鬼神、リョウメンスクナでござるか……」

詠春の話だけだったのでその全容など知る由も無い。

それでも凡その見当はつけていたのであるが……まさかあんなに巨大な鬼だとは思っていなかったようで、楓は恐れるよりも前に呆れ返っていた。

「飛騨？

廃藩置県前の東山道八ヶ国の一つで現在の岐阜県。

吉城・大野・美濃の三群、東は信濃、

南は美濃、西の加賀・越前・美濃、北は越中の諸国に囲まれていた山国の名前っ」

「う……ま、まぁ……」

「それに両面宿儺といえば、千六百年ほど昔に悪逆を尽くした挙句、難波根子武振熊（ナニワノネコタケフルクマ）に討たれたという鬼では！？

あそこに見える巨人がそうだというのですか！！？？」

「うぅ……」

知られ過ぎたでござるーっ！！　とか頭を抱えても後の祭り。

横島の事に気を取られ過ぎ、ウッカリ夕映にイロイロと見せまくってかな～り“裏”を見せてしまった。

頭を抱えても遅過ぎるし、尚且つ話が大事になっているので隠し切れまい。

どこからどこまで説明すれば良いやらサッパリで、流石の楓も『横島殿～……へるぷみ～……』等と思ってたりする。まぁ、仕方あるまいが。

そんな楓の混乱をよそに、テンパったら超絶的に説明口調になってしまう夕映は、遠目に見えるスクナを見つめつつ延々と伝奇を語り続けている。

どうも夕映は暴走すると口が回り過ぎる衒いがあるようだ。

無論、理路整然とし過ぎているので楓にはチンプンカンプン。

彼女でなくとも溜息が出よう。

と、そんな彼女であったが、

「……っ」

何に気付いたのか、やおら右手をしならせて何かを投擲した。

横投げで放たれたのは三本のクナイ。

其々を指の間に挟んでいた、投擲用の物だ。

トス、トス、トスッ！！　と狙い違わずそれらは等間隔の音を立て、まるで柵のように地面に突き立った。

「！？」

「どこに行くでござる？」

少年の行く手を阻む為に。

「すでに勝負はついてたでござろう？
横島殿に気押されていたし、何よりネギ坊主の行く手を阻んだ時点でおぬしの負けでござるよ」

「うっさいわっ！！」

傍目にも虚勢と解る顔色で、小太郎は楓に食って掛かった。

そんな彼の様子に楓はやれやれと肩を竦める。

彼女には……

いや、今の彼女だからこそ解る。

今まで積み上げてきた自分を、我を見失いかかっている事を認めたくなくて必死になっているのだろう……と。

「確かにお主の眼は確かでござる。

今はまだ拙者の方が強いとはいえネギ坊主の実力に気付いたのは中々でござるし」

「く……」

焦ってはいても小太郎とて実戦を知る者。

飄々と話す楓をすり抜けて“あの二人”を追う事など出来そうも無い事くらい解っている。

それに楓には、隙がまるで無かった。

「まぁ、自分とやりあえる者と出会えたのだからしょうがないと言えなくもないでござるな。
その気持ちは解るでござる」

井の中の蛙であると解ってはいても、大海を知らしめてくれる者と出会えない。

ある程度以上の強さを持つ者ならば、それは苛立ちとなって積もってゆく。

楓とて麻帆良という地にて真名や高畑、刹那や古といった強き者達と出会えねばもっと惰性的だったかもしれない。

――しかし、出会えている。

そして更に横島という完全にベクトルの違う強さを教えてくれる者と出会えていた。

そのお陰で裏の裏に関わる事が出来、自分の知る天井より更に上の世界を知る事が出来いた。

故に楓は、そして古は恵まれている。

上の上を知り、そして更に別の強さを知る事が出来ているのだから。

今の自分より更に更に上の世界が存在している事を肌で実感できているのだから。

そして尚且つ、その超者に学ばせてもらっているのだから。

目の前にいる小太郎は運のない自分の姿と言える。

ネギという好敵手に出会えた事により感情の高ぶりが抑えきれず、自分の趣旨と違う事が行われようとしているというのに二の次にしてしまう。

挙句、初めて出会った恐怖の対象に呑まれてしまった自分を誤魔化し、勝てそうにも無い事を自覚しているというのに後を追おうとしている。

自分が壁を持ったまま生きてきたならば“こう”なっていたかもしれないのだ。

「……お主、不完全燃焼でござろう？」

「何やと……？」

だったら、教えてやるのもまた同情であろう。

「戦いたい。戦って面白いと感じる相手に出会えて嬉しい。
そう感じたからこそ、ネギ坊主を襲ったでござろう？」

「……」

「お主にとって、東に一泡吹かすというのは二の次。
強き者と出会い、戦いたかった。色んな強さを知りたかった…
…というのが本音でござろう？」

「だったらどないやっちゅーねん……」

食いついてきた――

内心、楓は苦笑する。

今言った全てが満たされているからこそ出る苦笑。

「……言ったでござろう？　不完全燃焼であろうと……」

じわり……と、闘気を漏らし、小太郎に向けた。

そう、闘気。
殺気や怒気などではなく、純粋に闘う気の投射。

纏わり着いてくるじっとりとした闘気に小太郎の耳がぴんっと立つが、それと同時に唇の端も嬉しげに跳ね上がった。

「ハンっ！！　女と本気でやりあえっか！！」

と憎まれ口を叩く。

しかしその口調は安っぽい挑発。

楓の闘気は、飢えた少年にはよほど旨かったのだろう。

そんな無意識にであろう気炎を上げてゆく小太郎の様子に、楓はどこか優しげな眼差しで応えると、ス……と自分の札を取り出した。

「見せてやるでござるよ。

ド外れた戦いというものを――」

彼女が札を出すと同時に、夕映はまたも楓の分身によって後ろに下がらされた。

その札を見た時、夕映は『楓さんも持ってたですか？』と思いはしたが、記憶力には自信のある彼女はすぐにデザインが別物であると気が付いた。

小太郎の方は、一瞬また西洋の術か？　と気が落ちかかっていたのであるが……

彼女が札を使用した瞬間、その気持ちは吹っ飛んだ。

「一こいこい一」

パァッ！！

一瞬の光の間に札はメタリックな葉団扇へと変貌を遂げる。

楓が現れたそれをつかみ取ると、団扇の表面に相撲の軍配宜しく文字が現れ、その文字はスロットマシンが如く激しく文字が流れて入れ替わる。

刹那、楓の衣服はチャイナドレスから見慣れる衣装。

薄桜色の鈴懸、小豆色の袈裟に、材質不明の頭巾、そして一本歯の高下駄を履いた姿となった。

修験者が羽織っているそれを露出度を多めにしたようなものと言えば分かりやすいだろう。

それと同時に、入れ替わっていた文字から三つだけが選ばれ、本当に軍配に書かれた文字のような配置にそれが納まる。

その文字は、『翔』『剛』『念』の三つ。

その葉団扇の文字を確認し、楓は笑みすら浮かべ、

「甲賀中忍にして横島忠夫が従者、長瀬楓……参る――」

その身を十六に分け、背中から生えた白い翼を羽ばたかせ空を飛んだ。

術の体系に“仙道”というものがあるが、その中に狗法仙術というものがあった。

この場合の“狗”とは天の狗、即ち天狗の事で、狗法仙術とは天狗の力を修行によって身につける仙術の事である。

その術には、飛翔・剛力・念動・読心・陰行・透視・水歩・風刃・霊波・幻視などがあり、これらは全て身につけられる訳ではなく、能力の開眼には本人の資質や修行の内容によるという。

楓の持つ魔具の名は＜天狗舞＞。

僅か十分という時間であるが、その狗法を使いこなす事が出来る道具だった。

「うおっ！？」

その十六体の分身から同時に石礫が放たれる。

驚いて小太郎が地を蹴った次の瞬間、その立っていた場所にそれら石くれが一斉に突き刺さり、恰もショットガンを喰らったかのように吹き飛ばしてしまう。

「こ、殺す気かーっ！？」

「はっはっはっ　まさか。避けられると踏んでの事でござるよ。それともそこまで手加減されて嬉しいでござるか？」

思わず叫んだ小太郎の後ろから楓の声がする。

ぞわりとした闘気を感じ、そのまま勘で身を捻るが一瞬遅い。

ボッ！！

「うわっ！？」

何とか回避を成功させたものの、何故か何時も羽織っている学ランの裾が背後から襲いかかった物体に削られてしまう。

かなり体勢を崩した所為でかなりバランスを崩した着地であったが、それでも倒れるような無様さを披露させずに済んだ。

しかし、自分をふっ飛ばそうとした彼女の得物を見た時には流石に目が点になる。

「な、なんやそれはっ!?」

「は？　見て解らんでござるか？」

空に浮かんだままその得物を肩に乗せ、ハテ？　と首をかしげる楓。

しかし、空を飛んでいる事や、露出度の高さを除けたとしても誰の目にも異様に映っている事だろう。

何せその彼女の左手には、今この場で引っこ抜いた大きな木が握られていたのだから。

彼女がその葉団扇には奇妙な特性があり、アイテム召喚直後にスロットマシーンが如くランダムに文字が刻まれる。

文字は『翔』『剛』『念』『読』『陰』『透』『歩』『風』『霊』『視』の１０個の中から完全な任意で文字が選ばれ、その力は使用者の意志で自由に発動させられる。

これらは天狗の仙術である狗法で、使用者（楓）はカード使用時間中に３回までそれらを使う事が出来るようになるのだ。

今回の発現した力は『翔』『剛』『念』。

空を飛べる事と、剛力、そして天狗礫などを使える念力の三つだ。

楓はその剛力を用いて木を引っこ抜いて振り回したのである。

「さぁ、まだまだ行くでござるよ。
お主も全てを出し切るがよろしかろう」

ポイっと木をそこらに投げ捨て、１６人の楓が笑顔のまま一斉に襲いかかってゆく。

本物は一体、あとは分身だと小太郎も解っているが、氣の練り具合が半端ではなく実体を感じてしまうほどなので見分けるのは難しい。

尚且つ、その全てから石くれが放たれてくる。それも投げているモーション付きで。

これではどれが分身なのやら解らない。

本気ではない。

流石にまだ小太郎は楓よりずっと弱いのだから。

しかしそれでも手加減はない。

其々が襲いかかる。

クナイが飛んでくる。氣を纏った拳が来る。

蹴りが、礫が、氣が、次々に小太郎に襲いかかってくる。

「うぉおおおおおっ！？」

当然、捌き切れない。

結構いいのを何発も食らってしまう。

顔面を防げば腹に来、正面をガードすれば脇に来る。

何発かやり返しはしたのであるが、手ごたえがあったのは掠った感触のみ。

圧倒的に不利。

勝機の欠片すら見えてこない。

だが――

「や、やるやん。姉ちゃん」

「お主もな。
体術はまだまだでござるが……自己流でよくぞそこまで鍛えたものでござるなぁ」

「おうさっ！！」

狗神を呼び出し、数匹を足場として空を舞う楓に飛びかかり、残りを反撃として放つ。

しかし楓も慌てず、クナイと葉団扇で叩き伏せ、その間にも練り上げた氣を叩きつけてゆく。

これだけの実力者。

そんな楓と戦えている小太郎は、

圧倒的不利というこの状況に置いて、

嬉しげに口元を歪めていた。

『……ドコのマンガ世界ですか？』

そして夕映はほったらかしだ。

いや、安全圏には運んでもらっているのであるが、そのお陰というかその所為というか空中の戦いがバッチリ見える特等席のような場所。

二人の突拍子もない戦い（楓が圧倒的であるが）の一部始終がはっきりくっきり見てしまっている。

正しくのどかやハルナ達が読んでいるような週刊少年誌やジュニア小説のような戦い。

明らかに人間離れをした運動能力。

既存の物理法則を超越した現象。

それこそが楓がよく口にしていた“氣”であり、“魔力”……

昨日まで夕映の目を覆い隠していた秘密のベールは消え去り、あ

りえない筈の非現実的な世界が展開されていた。

そんな状況下で、夕映は意外にも冷静にそれを現実として受け入れていた。

『パルを石に変えた』のも、あの『光（スクナ）っている巨人』も、そして楓やコタローという少年が関わっている世界。

そして昨夜の騒動において偽ネギの正体だった符。

“氣”や“魔力”、今不思議な力を見せた“札”。

これらのキーワードから示しだされるものは……

ひょっとして……魔法……ですか？

元々勉強嫌いなだけで頭はかなり良く、頭の回転も速い彼女は答えがある方向に……世界の裏に到達しつつある。

そして、

という事は、ネギ先生は――

「う……く……」

「あ！？」

呻く声を耳にし、はっとした夕映が顔を向けると、そこには蹲った白いものがモゾモゾと動いていた。

前方のまぶしい程のトンデモ合戦に目を奪われていた夕映であったが、何とか闇に眼が慣れていたのでその物体の正体を見取る事に成功する。

「確か……ツクヨミさん……ですか？」

楓の言うところの月詠という少女が何とかふらつく足で立ち上がろうとしていたのである。

あまりと言えばあまりの大爆笑に腹筋がエラい事になっているであろう彼女であったが、くだらなさ過ぎるジョークが聞こえなくなったので復活を遂げたのであろう。

『こ、これはどうすれば良いですか……？』

楓は何か忙しそうであるし、さっきのヨコシマとかいう青年はもういない。

助けに来てくれるであろうが、今すぐという訳にもいかないだろう。

言うまでもなく、夕映の力など論外だ。

『このままでは行かれてしまうです……でも……』

そう、彼の後を追うのかこのまま逃走するのかは不明であるが、この場から取り逃がしてしまう事は間違いない。

状況から見て、彼女が割り込む方がややこしくなる訳で、悔しいが放っておく事が得策であろう。

しかし……

『……？　あ、そう言えば、どこかで見た事があると思ってたら、シネマ村で襲ってきたあの謎の婦人？』

ふいに思い出されたのはあのシネマ村で襲いかかって来た謎の美少女剣士。

さっきの異様な雰囲気、そして妙に間延びした声、ゴスロリな出で立ち。

あの時の少女に間違いなかろう。

『……という事は、この旅行中にやたら妙な騒動も彼女達である可能性が……』

やはり成績は悪いが、頭の回転は速い夕映。

一連の事件の関連性にすぐ気が付いた。

『つまりは、ハルナは兎も角　のどかまで石にしやがったあの少年とこの娘は関係があるという事で……』

何だか眼鏡魔人が蔑ろ気味であるが、それは兎も角として珍しく夕映は怒っていた。

しかし、部活によって体力はあっても戦闘能力がある訳ではない。

止めようとしたところでナマスにされるのがオチであろう。

――いや？

夕映は拳をギュッと握りしめ、ある決意をした。

確かに戦闘能力はない。手だれを相手にすればゼロどころかマイナスに過ぎないだろう。

しかし彼女は図書部だ。

栄光の麻帆良学園図書館探検部の一員であり、大学部の人間ですら立ち入れなかったであろう、島の最深部に到達した実績を持っているのだ。

『図書部には、図書部の戦い方があるです！』

何かが前に歩み寄って来た事を感じ、痛む腹を押して見上げる月詠。

その前に立っていた夕映は、月詠の真正面で正座しつつ、どこに持っていたのか懐から扇子を取り出すとピシャリと自分の額を叩いてこう言った。

「え～……毎度、馬鹿馬鹿しいお笑いを……」

夕映の古典落語攻撃が放たれた瞬間である。

笑い顔とは裏腹に、月詠はその顔色を真っ青に変えたのだった。

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊

轟……っ！！

風すら叩き潰す勢いで巨大な鉄棍棒が斜めから振り下ろされてくる。

棍術を使う者の中に頭の上で旋回させる者がいるが、実はそんな使い方をする者はあまり恐ろしくない。

長巻や長刀同様に、牽制以外では振り回さずコンパクトに扱う使い手の方がよほど恐ろしいのである。

この一つ目の式もかなり“使う”ようで、鉄棍を振り子のように左右に振って牽制し、相手の間合いを狂わせては踏み込みと同時に突きを繰り出してくる。

だが、その相手も大したもので、丁度その棍の間に割り込むように距離を詰めて来ていた。

それを止むを得しと見たのだろうか、一つ目は相手の少女と同時に踏み込み、同時に鉄棍を振り下ろしたのである。

無論、喰らう方は堪ったものではないだろう。

防ごうにも勢いがあり過ぎるし、身を伏せようにも到達速度の方が早い。

そして飛び上がってよければ待ってましたとばかりに的になるだろう。

できるのはバックステップで距離をとる事くらいだ。

「ふ…ッ！！！」

しかし、どの行動もとらなかった。

手にしていた鉄扇トンファーが開き、その鉄塊を受ける。

いや、受けるように見えたのだが、さに非ず。

棍をそのまま受け流し、その上を鉄扇トンファーを下敷きにして転がり、一つ目の式との距離を更に詰めたのだ。

『ぬぉっ！？』

悪戯が成功したのを喜ぶ少女のような笑みを見た瞬間、がら空きとなった一つ目の式の脇腹を衝撃が貫いた。

脇腹に押し当てられたのは突き込まれた少女の左手。

一つ目の半分以下の小柄な少女から放たれたのは浸透剄。

とんでもなく器用な回避を見せた後、転がった回転モーメントすら込められたその一撃は、たっぷりと氣が乗っていた事もあってか内部破壊はおろか貫通の勢いを持って反対側の腕の付け根まで衝撃を突き抜けさせていた。

『……まいった……嬢ちゃんの勝ちやわ……』

体の中を斜めに破壊された、その声も苦痛一色。だが、その苦しげな声には感嘆の吐息も混じっている。

だから彼は満足しきった笑顔で降参を告げた。

いやもう、何と言うかここまで力が出し切れたのだから本望だ。殺合ではなかったが納得のできる試合は堪能できた。

ものすごいコドモに負かされたし還されはするが、感謝したいくらいだ。

「アンタも強かたヨ。
老師にはまだ足りないアルガ」

『ちぇっ　言うてくれるやん……
でも、ま……』

“そいつ”とも闘り合いたいもんやな……と笑みを浮かべつつ、『またな』と言い残して一つ目は煙の中に消えていった。

最後まで背中を見せるような油断をせずにいてくれた少女――古に感謝しつつ。

『で？　続きはしてくれるんやろね？』

その彼女の後ろからお誘いがかかった。

「当然ネっ！」と、古も笑顔で振り返り、極自然体の構えで狐面と向かい合う。

――ええわ……ゾクゾクすんで……

殺気がないのはちょっと惜しいが、笑顔の古からは今だ強い闘気が噴き出している。

あれだけやり合ったというのに、闘気は萎えず高まりを続けている事に狐面は火照りに似た感触を覚えていた。

――惜しいわぁ……男の子やったら別のお相手したるのに……

どこか淫靡な思考へと傾きかかるも、地を這うように低く身を伏せて踏み込んでくる古に意識を戻す。

ゴギン〝ッ！！

鉄塊と鉄塊がぶつかり合うような音が響き、衝撃を仲良く双方で分け合った。

火花が散らなかった事を不思議に感じてしまう程のぶつかり合い。

式として戦ってきた今までも、これほどの鬩ぎ合いは何度あっただろうか？

打ち合った部分からの熱を感じつつ、狐面はこの一瞬が少しでも長く続けばええなぁ……という想いを浮かべていた。

「ふ……」

そんな古の様子を目の端に入れつつ、真名はゆっくりと弾装を交換している。

弾を込めている最中なのだから隙だらけであり、今踏み込めば倒せるかもしれない。

そう周りの式達も考えている。

が、先ほどから何度もそんな“作った隙”に騙され、距離を詰め過ぎて回避する事が出来なくなり風穴を空けられている。

殺気を操られ嘘の隙に騙され、もう何体が送り還されてしまったやら。

だからそれを警戒して彼らも動きを封じられていたのである。

「やれやれ男の事で調子を崩したと思えば、今度は男の事で調子が上がったか……」

ガチリとカートリッジを押し込みつつ苦笑を洩らす。

「これだから色恋沙汰は厄介なんだ」

とは思いつつも、安堵している自分も確かにいる。

“仕事中”は友人関係は蚊帳の外に置いてはいるのだが、妙に微笑ましく思ってしまう。

「関係ないと言いつつ私がこの有様。
全く……彼には呆れてしまうな」

何時の間にやら皆が引きずり込まれ、皆をその空気に巻き込んで行くあの男。

どうしようもないロクデナシであるようで、楓が驚くほどの身体能力を持つ男。

ド素人のように感情に押し流されるくせに、プロである自分ですらも驚く戦闘能力を見せたりもする。

「女子供に甘い馬鹿だ馬鹿だとは思ったが……」

突き抜けた馬鹿はあまで凄まじいものだったのか。

「さてと……そんな馬鹿に負けたら恥の上塗りだしな……」

真名は闇にも阻まれぬ眼を細めて感情を消した。

空間の気配が撓み、真名の姿が朧げとなる。

式らの眼ですら捉えられなくなり焦りが広がってゆくが、その輪よりも早くその体躯に穴が穿かれてゆく。

そして彼女は、闇を駆ける影となった。

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊

蹲る巨大な影。

その肩の上で千草が必死に何とかしようとしているのだが、力が弱まっている理由が解らないので手の打ちようがない。

そしてその鬼神の身体を灯りとして、眼下では――

「く……っ」

「うっひょ――っ！！」

全くもって表現のしようのない戦いが起こっていた。

僅かながら体を浮かせている所為か地を歩くという摩擦がなく、空を滑って怪人に襲いかかる。

鞭のように腕をしならせ拳を放つ。

音よりも速そうな攻撃であるが、何と怪人には掠りもしない。

それどころかその手をつかんで引っ張り、体勢を崩させた少年の背後に回り込んで膝カックンまでぶちかます。

「うひーっ　やっぱ倒れねぇ～っ！！」

「……当り前だろう？」

何せ浮いているのだから。

だがそれでも少年は呆れるより前に腹が立ってくる。

何せこの情けない声、異様な回避能力。

問うまでも無い。昼間戦った“アレ”だ。

只でさえコイツには屈辱を与えられている。

説明するのは難しいが、彼の常識と能力を全否定された気がしているからだ。

戦いを始める前までは殺す気はなかったものの、本気で攻撃を仕掛けているというのに掠りもしないし、反撃はやはり昼間同様にくだらないカウンター。

やる気は上げられないのに、どんどん腹だけ立ってくる。

おまけに相手の今の姿は“なまはげ”だ。

「真面目に戦う気はないのかい？」

と、口を出さずにいられない。
仮装大会じゃあるまいし。

しかしてその相手は、そんな少年のイラつきをしたり顔で受け止め、

「いや、本気だ」

等と言い放つ。

相変わらず無表情であるが、少年の額にはしっかり血管が浮いており実は腹を立てている事が見て取れる。

だが、少年がクールに腹を立てれば立てるほど“こいつ”のペースに落し込まれてゆく。

「す、凄い……お世辞にもカッコ良くないのに、あいつの攻撃が一発も当たってない」

「カッコ悪くて悪かったのーっ！！」

明日菜のつぶやきにもちゃんと振り返って反応する。

背後を見せた事により、隙と見た少年は一瞬で呪文を紡ぎ、

「石の槍（ドリュ・ペトラス）」

そのまま背後に向けて放った。

「ちょわっ！？」

しかしまた珍奇な叫びをあげて板バネの様に身をひねって死角からの攻撃をかわし、それどころか片手に力を込めて石の槍をその掌で打って蛙のように跳ねて距離をとる。

それでも隙を突けたのだろうか、槍先が僅かに掠り胸元からボタンのようなものが飛ぶ。

「ひゃぁ――っ！？」

途中、追撃のように石槍が追うが、それすら掌で弾いて空中で一回転して着地する“なまはげ”。

着地のポーズはガニ股でエラいカッコ悪いが回避能力は神がかっている。

「何てよけ方を……理不尽だ」

何せ相手が使用した攻撃魔法そのものに手を着いてよける等と考えられない事を仕出かす。

昼間の戦いもそうであったが、自分が積み重ねてきた常識と能力を全否定されている気すらしてくる。

無論、こんな事をされてもこれ以上の焦りは起こらないが、ただでさえ追い込まれている気がしているのだから気分が良いはずもない。

こうなってくると手加減する気も失せてゆくというもの。

「……まともに戦おうとしたのが間違いだったようだね」

初めて少年から感情の波動が溢れ出た。

負傷したのだろうか、ネギは片腕を抑えながらもその戦いから目が離せない。

いや明日菜もそうであるが、二人の眼にも解るほど、明らかに少年の攻撃速度は自分らの時より凄まじい。
目で追うのがやっとだ。

だが、あの“怪人”……京都駅での変質者と同じようで違うよーな……は、奇声こそ上げてはいるが余裕で回避しまくっている。

おまけに、今の少年の言葉にも『ナニを今更……』と肩を竦めたりしているのだ。

はっきりいって只者ではない。いや、ぱっと見でもタダモノではないのだが……

「……君の戦いには覚悟が見当たらない。理念も見えない……危険に飛び込んでくる意味も不明だし、戦い方からして死に向きあっている自覚を感じられない。

そんな奴が闘いの場に来て……ただで済むと思わないことだね……」

少年は目を細め、魔力を器に満たしてゆく。

確実に行動不能に追い込む攻撃を与える気になったようだ。

ネギは勿論、明日菜ですら解るほどの魔力の高まり。

スクナ召喚を千草に任せていた理由が解らぬ程に。

いくらなんでもあの人が危ない！！　そう見て取ったネギは、手助けするべく足を踏み出そうとした。

「ぴぃ」

「え？」

そんな彼を、角が…かのこが角で制止する。

立派過ぎる角とすごい体躯をしているのに、目だけがつぶらで鳴き声もカワイイというとんでもないミスマッチであるが、それでも力強さはサイズ通りのものがあった。

「ぴぃぴぃ」

「え、えっと？」

ただ、悲しいかなネギては何を言ってるかまでは解らない。

どうしようと首を傾げた　かのこだったが、ふと少年の腕が石になりつつある事に気がついた。

「ぴぴぃ」

「はい？　あ、これは……」

思わず隠そうとするネギであったが、ちょっと遅かった。

普段兎も角、今のかのこの体躯には簡単に力負けしてしまい、辛うじて石化が届いていない袖を口に咥えられて引っ張られ、はっきりと患部を見られてしまう。

「あ……」

明日菜もそれを見て唇を噛んだ。

先程あの少年の魔法を防ぎ切れず喰らっていた事を思い出したのだから。

何しろ石化を解ける術が今はなく、僅かでも出来そうな人間は今戦っている。

その間にもネギの石化は進行しつつあるのだ。

具体的にどうなるか等は解らずとも、少年の危機だけは理解できていたのである。

かのこはそんな二人の心境を他所にピスピスと鼻を鳴らしてその患部の臭いを嗅ぎ、何かを理解したかのように頷いた後、

「ぴぃいっっ！！」

と、大きく嘶いた。

ヴンッッ！！

「わぁっ！？」

直後、イキナリ角が光に包まれて大きくなった。

その輝きは霊的なものであるが、どういうわけか月の光のような神秘性を含んでいる。

そして　かのこはその角で、

バスッッ

「わ、わぁっ！！？？」

彼の石化した腕を突いた！！

『ア、兄貴！！』

「ちょ…っっ！！？」

余りの暴挙に慌てるカモと明日菜だったが、その次の瞬間、

パァンッと音がし、腕を覆うように石化が進んでいた部分が弾け、何と患部が元に戻っていた。

「う、うそっ！？」

ネギが驚くのも当然だ。

何せ少年から喰らったそれはまだ永久石化の魔法という訳ではなかったものの、その技術と魔力は未知のレベルであると理解していたのだから。

だから治療するにせよそれなり以上の治療魔法を使わねばならなかったし、最悪ならそれは儀式魔法レベルである事も解っていたのだ。

にも拘らず、この鹿は一瞬で解除した。それも無造作に。

おまけに突き刺さったというのに傷一つ無い。それは確かに驚くだろう。

「何！？」

そして当然、少年も驚愕していた。

治療術程度で解けるレベルにしてはいたが、一瞬で解かれるとは思ってもいなかったのだ。

それもあんな鹿の角で刺された程度で。

行動が停止するのもまた仕方の無い話かもしれない。

「なぁ……ひとつ聞いていいか？」

そんな少年を現実に引き戻したのは――

こんな状況下だというのに、落ち着きかえった“なまはげ”の声だった。

「今さっき、お前は覚悟がどーたら理念が何やら言ってたよな？だったらお前さんの言う覚悟と理念って何なんだ？」

驚いた事に、その怪人は少年の魔力のプレッシャーものともしていない。

まるで慣れているかのように。

「女一人調子に乗らせて、内乱を“起こさせる”ほどの事か？

それともくだらない作業の犠牲に女の子を巻き込むほどの事か？

その女の子にしても、魔法使いの家系に生まれたのだから、いずれ魔法に関わってくる。

だからこの程度はかまわんだろうって巻き込む事か？」

“なまはげ”は肩を竦ませ、へっ！　と鼻先で笑う。

「アホらしい……お前のやってる事こそ覚悟も理念もねーボケた行為たじゃねぇか。

気付けねぇのか？　オメデタイ頭してやがる」

笑う。

せせら笑う。

巻き込む事の覚悟云々の話ではないでは。

その事も解らんのかと馬鹿にする。

「オレも相当のバカだし、救いようがねぇといつも思ってる。
だけどな、自分から進んで犠牲を出しにはいかねぇよ。
犠牲が当たり前だから、しょうがないなんてぜってー思わねぇよ」

両の手を前に伸ばし、指を組む。

少年は、相手が昼間戦った奴である事は既に理解している。
だから怪人が掌から氣の盾のようなものを出していた事を覚えている。

しかし、あの時より厄介な気がしてならなかった。

いくら聞き流しても耳に入って来る。

自分の中にある動かない感情にも、怪人の言葉がまとわりついてくる。

厄介。

何て厄介な奴。

早急に始末せねばならない。

「オレにも理念はあるぞ」

組み合わされた掌に、霊気が籠った。

「女を傷付けない、泣かさない！！

地球が割れたって美少女を悲しませない！！

そんな奴ぁ生きたまま地獄で悶えさせてやるっ！！！」

昼間の一件で相手の“魔法攻撃”は障壁を貫通してくる事と、追尾してくるから逃げる事は無駄だと理解している。

だから少年は正面に障壁を集中させる。

その上で石の壁やら水の壁を重ね合わせれば防ぎきれるだろうと踏んだからだ。

しかし、その読みすらも相手の手の内だ。

「必殺！　スパイラルナックル……」

何せ相手は、

「……＜改＞！！」

横島忠夫なのだから。

組み合わせた両方の人差指だけをピンと立たせ、指先をぴったりと合わせる。

小学生の男の子とかがやる“あの”形だ。

それが何かと思う前に、

『奥』『手』

ぶずっっ！！！

さっき転がったボタンのようなもの。

“その内”の二つに『奥』と『手』の文字が浮かび上がり、くっついて横島と同じ手の形をして飛び上がったのだ。

少年の下から上に向かって……

「……」

「……」

「……」

ネギや明日菜、そして少年や空にいた二人の間を、

もうホント、どーしよーも無い空気がまとわりついていた……

何故かぴぃと鳴いた　かのこの声がごっつ耳に痛かったほど。

「ふはははははは……見たか聞いたか体験しました～?!
どーよ!!　オレの『奥の手』攻撃!!
魔神すら謀った技の変則よ!!」

少年の腰から下、太ももより上の中心位置辺りには……

人差指だけを伸ばして掌を組んだ形のそれが突き刺さっていた。

ちょうど、小学生の男子らがするイタズラの“アレ”をした形に。

あの時は一個で陰陽の珠が使えたし、咄嗟だった事もあり片手での『奥／手』だった。

今回は二個。しっかりイメージを練り込めたので、組んだ右手と左手が形成されている。

珠の大盤振る舞いであるが、攻撃が掠ったと見せかけてわざと転がした珠に意識を全く向けずにいた演技……というかブラフには閉口してしまう。

それでいてちゃんとその珠の前に少年をおびき出しているのだ。

そこが横島クオリティといったところだろうか？

無論、された方は堪ったもんじゃない。

人が真面目に耳を傾けかけたというのに、いきなりその隙を突かれれば当然だろう。

尚且つ、まともな攻撃ではなく、こんな人を馬鹿にし切った技での一撃。

腸が煮えくりかえる想いだろう。

「……どこまでふざければ……」

明確な殺気が、少年から横島に投射された。

「ふはははははは……どこまでも♪」

だが、彼は涼しい顔でそれを受ける。

余人なれば受けただけでショック死しかねないその殺気を、彼は平然と受けて流していた。

何しろこの男、過去の戦いにおいての最終局面で激怒する魔神の気を受けて笑えた男なのだ。何から何まで規格外なのだろう。

それに――

もう、少年に勝機は無い。

お面をつけたまま少年をおちょくり続けていた横島であったが、ふと笑いを止めてスクナに目を向けた。

流石に鬼神というだけあって、今だ健在。大したものである。

「やれやれ……これだけ『吸』ってもまだあんだけ力が残ってんのか……
やっぱ伝説の鬼神ってのは伊達じゃねぇんだなぁ……」

「な……に……？」

その呟きに、少年も、そして千草も、そして皆が反応した。

全員の視線が横島に集中する。

「いやな……流石に封じるには大き過ぎっからさ、アイツの力を『吸』って『収』めてたんだわ」

お前さんと闘い、追い詰められる事によって吸い集める力を底上げしてな――

横島のポケットの中には、ちゃっかりと『収』と書かれた珠が入っていたのだ。

流石に皆、絶句してしまう。

攻撃をかわして時間稼ぎをしていたのではなく、生存本能を刺激させてもらって吸う力を底上げしていた言われれば流石に驚くだろ

う。

「ま、もうそろそろいっかな……封じるられるくらいには弱体化させたしな」

先ほどから吸いまくった分はとっくに珠にして無意識下に沈めてある。

以前よりずっと早く生成できるし、その能力もケタ違い。

それでも流石に心もとないので、相手から力を吸って弱らせつつ、その吸った力を溜め込んでいたのだ。正に一石二鳥の策だった。

「……今までのふざけた行動も……全ては君の策……という訳かい？」

「いんにゃ。
言ったろ？　アレも本気だ」

頭痛が止まらない。

ふざけた力。

とんでもない身体能力。

何も考えてないようで、何時の間にか相手を策に引きずり込むその狡賢さ。

そして――
たかが少女一人の為にここまでとんでもない行動をかましてくる
その無謀さ……

『まるで……まるで彼は……』

“あの男”のよう――

「さーてと……そろそろ幕にしよっか？」

舞台役者の様に大げさに手をふり、パキンっと指を鳴らす。

瞬間、スクナに張り付けていた『吸』、そして手の中の『収』、
『奥』『手』の珠が消えた。

流石に“今の”限界を超えた同時制御だから負担はかなり大きかったのだ。

言うまでもなく横島なのだから、その面の下の表情は焦りとビビリでタイヘンな事になっていたりする。

お面を着けていて正解だった。

事ここに至り少年は自分の失策を痛感していた。

やはり手加減……いや、手を抜いたのは大失敗だったようだ。

この男は底が知れない。

魔力らしい魔力は感じないのに、驚くほど器用に氣を操り、人外の身体能力で攻撃全てをかわしてしまう。

掠った……と思ったのもブラフで、実際には余裕だったようだ。

見た目はただの変な男だというのに……

いや――？

そう思い込まされていた？

愚者のふりでもって相手のペースを乱し、攻撃の最中にも気の乱れも起こさない者が只者であろうはずがないではないか。

「小さき王、八つ足の蜥蜴、邪眼の主よ。

その光、我が手に宿し、災いなる眼差しで射よ！！」

「……っあの魔法っ！？」

「ひょっとして……っ！！？？」

呪文のワードを耳にした所為で、ネギは再起動を果たせたが同時に焦りを見せた。

同様に明日菜も復帰して先ほど受けた魔法である事に気が付いた。だが、あの少年から距離を開けている所為でどうする事も出来ない。

『おいっ兄さんっ！！　やべぇぞっ！！！』

思わず叫んだカモであるが、もう全てが遅い。

そう思った瞬間。

「く……っ！？」

少年の動きが止まった。

いや、発動する筈の魔法が停止してしまったのである。

「言っただろ？　もう幕にするってなっ！！！」

下から少年に突き刺したのは手指は珠が変化したもの。

そしてその珠は横島自身の力であり、彼ならば遠隔でも文字を込めたり変えたりする事が出来る。

とは言っても彼が制御できる数は少ない、追い詰めてもらった底上げで何とか四つどうにかなった程度なのだから。

しかし、使っていない珠なら話。

『奥』の『手』の中に、まだ無使用の珠が一個隠し持っていたのだ。

その今、無使用の珠にはキーワードが浮かび、少年の魔法を完全に封じている。

少年の腰の下あたりで、輝く『封』の一文字によって――

「何をした！！」

「言うかアホっ！！」

そんな少年を尻目に横島が取り出した珠は二つ。

そこに込められる言葉も二つ。

昼間のに似て圧倒的に違う。

横島とて……いや、不死身の父ですら死に誘われる恐るべきコマンドワード。

即ち――

『怒』　『母』

どがんッッッ！！！

使用した珠の力でもって殴りつけた瞬間、少年の姿が消えて音が後から聞こえた。

全く放物線を描かぬ見事な横一直線。

見事大地と平行にまっすぐすっ飛んで行き、板張り廊下を固定している柱をえぐり取って行く。

その先にあるのは蹲るスクナ。

ガキンっと音を立てて少年はその巨躯にぶち当たり、弾かれて湖面に突き進む。

まるで投げた石のように水面を跳ねつつ滑って行き、岸の一歩手前でぱしゃっと音を立てて沈んでいった。

「う……わぁ……」

ネギも明日菜も真っ青だった。

想像を絶する怪人の一撃。

あれだけ手古摺らされていた少年を苦もなく沈めたらそれは言葉も失おう。

まさか魔物か？　それとも改造人間！！　とか思ってしまうほどに。

「……やっぱり……

やっぱり　おかんは人間やない……」

尤も、その横島すらその威力に怯え切ってたりする。

余りに凄まじい一撃だったからか、圧縮された空気が広がって冷気すら舞っている。

拳からはしゅうううう……と蒸気の様なものが出ているのは、熱気ではなく圧縮空気が破裂した後の解放冷気という事か。

霊力でガードしていなければ自分の拳までヤヴァかっただろう。

横島は、今更ながら少年に与えられた衝撃を思い知って怖気がたった。

その超絶威力の理由の一つには、あの珠の並び方が挙げられる。

『母』が『怒』る……ではイメージ的にやや弱い。水爆か原爆かの違いであるが。

それでも言葉的に“まだ逃げられる”的なイメージがあるのだ。

しかし使用した並びは『怒』れる『母』――

何せ霊能力の“れ”の字もないくせに、最高の霊能者として崇めてすらいる雇主とガン付けやって手抜きの気合だけで渡り合い、その波動の余波によって空港を破壊しかけたバケモンなママンである。

魔神の娘に攻撃されて生きている彼が、本気で殴られれば即死す

ると恐れている母の拳。

珠の能力は込められたイメージが何より先行する。
そんな恐怖の対象であるママンの破壊力イメージが込められている拳だ。回避できなければ死ぬしか道がない。

しかし横島父子に神ですら殺せると信じさせている程の恐怖の鉄拳。それを喰らうと解っていて命を懸けて浮気やセクハラをする父子に乾杯だ。

「ま、まぁ、それは横に置いといて……」

ここにこうっ、と横に置くジェスチャーをしてからチラリとネギと明日菜、未だ空にいる刹那と木乃香の様子を見た。

空の二人と明日菜は単に疲労しているだけのようだが、ネギは明らかに疲労が目立つ。

いや怪我ではなさそうだし、かのこによって治癒もなされてはいるが魔力が尽き掛けているので疲れ切っているのである。

これは彼がやって来るまでかなり苦労させていたようだ。

「悪りぃ。口ばっかでお前に投げっぱなしだったな」

彼はそんなネギに対し謝罪した。

憎まれ口を叩く事は多々あるが、元より横島は子供好き。何だかんだでかなり良心が痛んでたりする。

ネギからすれば急に謝られたって焦る事しかできないのだが、それでもこの怪人の正体だけは思い当たった。

「あの、ひょっとしてさっきの……それに……」

あのシネマ村で木乃香らを救ってくれた人のような気もする。

「ま、話は後にしようや。今はアレを……」

グォオオオオオオオオオ……

……

彼が顔を向けると同時に響き渡る鬼の嘶き。

横島に『吸』われなくなった所為か、どうにかある程度力を取り戻したスクナが雄たけびを上げて立ち上がってきたのだ。

「きゃあっ！？」

「お嬢様！！」

硝子が砕ける程の空気の震動が響き、宙にいた二人もそれに巻き込まれてしまう。

慌てて刹那は皆のいる場所に飛び、ネギ達の後ろに舞い降りる。

「このか！！」

「木乃香さん！　よかった……」

当然、心配しきりだった二人は慌てて駆け寄って行く。

木乃香も詳しい説明は受けていないが、それでも皆が自分を救うために頑張ってくれていた事は理解できるので何とも言えない顔でお礼を口にしている。

こんな状況ではあるが、微笑ましい事には変わりはない。

『良かったな……』

そう聞かせる事も無いつぶやきを唇に紡がせ、横島は鬼神に対峙する。

彼のその視線の先、

やっと動き出した事に安堵していた千草の姿。

力を得た勢いからか、何かテンションが高い。

横島はこんな事をしでかした女とはいえ、そんな彼女の事を哀れに思っていた。

確かに強い力ではあるだろう。

彼女の知る範囲で一番強く、制御し切れる力を持ち合わせてはいるだろう。

だが、この鬼神は二度も封印を受けているのだ。

更に制御する為の木乃香は既に奪い返されているので力を出し切れないだろうし、制御の要がいないのだから暴走に向かう事だろう。

それに横島は知らぬ事であるが、この程度の鬼神。“大戦”当時なら掃いて捨てるほどいたのである。

「よしっ！　このままお嬢様を取り戻したらどないかなるっ！！
お嬢様を返さんかいっ！！」

哀れなほど往生際が悪かった。

いや、ギリギリで計画を踏みつけられたらそうなろうというものだ。

横島は、『『何時このか（お嬢様）がアンタ（貴様）のものになったっ！！』』と憤慨する少女らをかばう形でその前に立ち、ヤレヤレと肩を竦めていた。

「どーやら……マジにイッパツニハツで終わらせられんよーやな？
メガネ姉ちゃん……」

どびくぅっ！！！

静かだが、異様に重い声の横島の呟きを耳にした瞬間、千草は厳冬の沼に落とし込まれたような滑る怖気に身を包まれてしまった。

「ア、アンタまさか……」

圧倒的優位である筈なのに、勝機が全く見えなくなった。

凄まじい力を得た筈なのに、唐突にマッチ棒程度にしか思えなくなった。

東に対抗できるはずだったのに、部屋の隅でいじけていた方が建設的な気がし始めていた。

そんな怯えを千草に見出した横島は一気に萌え上がり（↑変態）、おしおきタイムは好きほーだい♪と霊力ゲージが跳ね上げる。

「なっ！？　ま、またあの人の力があがった？！」

「凄いけど……何か不穏な気配もするんだけど……」

『そぉっスか？　アッシにゃあ何故か他人じゃないような気が……』

そんな言葉を背に受け、横島はお面の下でヌタリとワラった（↑既に悪人面）。

「さて……体力の準備は万端か？　じゃないと……コワレるぜ？」

言葉はちょっとサイコさんでかなり怖い。

しかもその身から迸るオーラはドピンクに彩られている。

物質的な圧力すら感じさせられるパッションとゆーか、リビドーとゆーか……人の限界を超えたナニな終着点を見てしまった気になってしまうほどに。

何と言うか……千草にはそっちの方が怖かった。

同時刻。

別の場所で戦っている二人の少女の攻撃力が唐突に増したというが……甚だ余談である。

後編

「ジジイっ！！　何を愚図愚図しているっ！！！」

普段は結構静かな理事長室に、黄色い怒声が響き渡る。

見た目は長い金髪の美少女であり、歳は十歳程度。

何故かシックで艶っぽい黒の下着を着用しているが、意外にもその年齢にも関わらず似合っている。

そんな少女が何をイラついているのか、床をバンバン叩いて目の前の老人を急かしていた。

「待て待て待て。もうちょっとじゃ」

だが件の老人はそんな彼女に怒鳴られなれているのか然程気にした風も無く、何やらややこしい方陣を描き続けていた。

実のところ、こんな方陣を組むのは初めてなのであるがそこは海千山千の古参魔法使い。その手際は決して悪くは無い。

悪くは無いのであるが……方陣でもって誤魔化しをかけようとしている対象が老人の力量を圧倒しているのだからそれだけはどうしようもないのである。

少女もその事が解らぬでもないのであるが、気が急いているのか八つ当たりをかけているのだ。
だからイラつきを隠そうともせず怒鳴り続けているのである。

ぱっと見が幼女である分、何だか我儘を言って祖父を困らせている態になってしまうのは仕方の無い事であろう。

嗚呼だがしかし、誰が彼女をそれと理解できるであろう。

彼女こそ、真祖の吸血鬼。６００万ドルの賞金首。
“人形使い”、“闇の福音”、“不死の魔法使い”等と様々な二つ名を持つ恐怖の代名詞、エヴァンジェリン＝アタナシア＝キティ＝マクダウェルであると。

そんな魔法界でも超有名な彼女が今、焦りを見せている。

先程学園長に掛かってきた電話連絡。

関西呪術協会の本山が何者かに襲撃を受け、全員が石にされてしまったというのだ。

確か本山は強力な結界で守られている筈。
その守りを潜り抜け、尚且つ娘婿である詠春すら魔法で倒したという。
これは容易ならざる相手である事に間違いない。

しかし、別所にいる西の手勢に連絡を送ったとしても行動できる

のは明日になってしまうだろうし、かと言って今の学園には転移を行えて現場に直行できるほどの術者がいるわけでもない。
例え行えたとしても、それほどの術者と戦えるかどうか微妙なところだ。
おまけに頼みの綱の高畑も海外に飛んでいる。
どうしたものかと視線を前に落して見れば。

「ん？　何だジジイ。マヌケ面して」

現在、自分を打ち負かしている恐ろしい碁敵がいるではないか。
背に腹は替えられないから彼女に頼むのは良いとしても、今のエヴァは学園の封印によって満月でも完全には力が使えないし、“登校地獄”という呪いによって学園から出られない単なる女学生だ。
その呪いをどうにかしないと学園都市から一歩も外に出られないのである。

しかしその呪い、無意味に強力に掛けられたもので彼女が十数年掛けても一向に外れる気配が無いという代物だ。

が、修学旅行は学業の一環なのだから短時間であれば呪いを誤魔化せまいか？
そう考えた老人はさっきから色々と試しているのであるが……

「うーむ……ナギの奴、力任せに術をかけおってからに……」

彼女に呪いをかけた者は魔法界の英雄“サウザンドマスター”事、ナギ＝スプリングフィールド。
現在、窮地に陥っているネギの父親である。

父親の掛けた呪いによって助けが遅れているのだから皮肉なものである。

「言い訳なんぞどうでもいいからとっととやれっ！！
その粗末な頭をトマトのように叩き潰すぞっ！！」

「そ、そんなこと言われても、コノえもん困っちゃう」

テヘ☆と舌を出すて誤魔化す老人。

「何がテヘ☆だっ！！　引き裂いてジャーキーにするぞっ！！！」

流石にそのふざけた態度にエヴァもぶち切れ寸前である。

「一マスター……そんなに熱心になって……」

ここまで焦りまくるエヴァを見るのは実に珍しい。

茶々丸の眼からすれば、それは男の子の心配をする女の子のそれ

にしか見えなかった。

「一よほどネギ先生が心配なのですね……」

「誰・が・あのガキのこと心配してるって～～～？　私はただ外に出たいだけで……」

照れ隠しなのやら見当違い過ぎる茶々丸の指摘に腹を立てたのやら、はたまた図星なのやら不明であるが、エヴァは茶々丸の頭の後ネジを巻きまくる。

『あああ、いけません。そんなに巻いては……』というセリフにも耳を貸さずにお仕置きだと巻きまくる。

「ま、まぁ、そんなに焦るな。かなりイヤじゃが……手段はある」

「何？！」

どれほどのものかは不明であるが、老人は溜め息をついて机に向って歩き出した。

複雑怪奇な呪式を組まねばならないし、何よりとてつもない重労働なのだから気が進まないのだ。が、背に腹は替えられない。

「それにの、あそこには“彼”がおるでな。

最低でもこのかやアスナ君、刹那君くらいは何とかしてくれる

じゃろ」

あの……ネギ先生は？　という茶々丸の呟きは小さすぎて学園長も聞こえていない。

「彼？　誰だ？」

「新しく雇った青年じゃよ」

「……そんな話は初耳だぞ……使えるのか？」

その質問に老人は顎髭を撫でつつ、

「氣を使うのは達人クラスじゃが戦闘技術は低く、魔力はほぼゼロじゃな」

等ととんでもない説明をぶちかました。

「んなっ！？
それでは役に「じゃが、恐らく負ける事は無いな」……は？」

当然のように食ってかかろうとするエヴァであるが、近衛はドコからか大量の朱肉とインクを取り出しつつそう言葉を遮った。

何を言っている？　といぶかしむエヴァを尻目に、これまた大量の書類をドコからか運び出してくる。

「何というか……戦闘技術はド素人なのじゃが、戦闘能力は存外に高いんじゃよ。
こと、女子供が関わればワシも想像すらできん」

「ふん？」

随分買っているではないか……と言う目で老魔法使いを見る。

何だかんだで孫を心配しているであろう彼が、ここまで焦っていないのはその男を信用している為なのか？

今一つ要領を得ない説明であるが、そこまで言い切れるとなると、それなり以上の“何か”を持っているのだろう。

「で？　その男はなんと言う名だ？」

「うん？　彼かの？
おぬしらの学校の新人用務員、横　島　忠　夫　じゃよ」

素が道化師。

本質はクラウン。
見てても聞いてても飽きが来ない青年じゃて。

そう、関東魔法協会理事である近衛近右衛門は意味ありげな笑みを浮かべた。

■十二時間目：Ｔｈｅ　くらうん

（後）

一言で倒すと言うのは簡単であるが、実際にやるとなるとめっさ難しい。

グォオオオオオオオオオオオ……

低く唸りながらこちらを睨みつける巨大な鬼神。

向こうはやる気（殺る気？）満々のようだ。

何か威嚇してるし。

――さて、どうすべぇ……？

焦りはしていないものの、横島はその手段にあぐねていた。

ぱっと見は余裕綽綽。

内面は冷や汗ぽたぽたでその巨躯を見上げるお面の忍者“なまは

げ”事、横島。

後ろで見守っている少女らもはらはらとしてはいるが、何だか彼に策がありそうなので微かに期待もしてたりする。

視線でそれが解るもんだから彼も大変だ。

――横っちまいっちんぐ♪

何て言ってる場合じゃねぇ――っっ！！！

等と一人ボケツッコミも大活躍だ。

女子供の件が無ければ単にヘタレと言えなくもない彼の事。

アレに勝てば眼鏡姉ちゃんをゲットできると（勝手に）思っているからこそ今ここにいられるし、ヤる気……もとい、やる気も萎えないのだ。

ここに向かってくる最中、出現したスクナを見た時には流石の横島も、かっくーんと顎を落っことしかけた。

いや、サイズ的に言えば（“究極の魔体”に比べると）デカイ部類に入るだけであるし、かかってくるプレッシャーも“あの”狼王

を下回る。
つーか、月で戦った時の邪竜の方がよっぽど強かった。
だから普段のヘタレ具合さを披露して『帰ろかな……』等とは思わなかった。全くしなかった訳ではないにせよ。

いやそれ以前に、木乃香を、未来に幸多そうな美少女を放っておく事は断じて出来ない。
つーか、神や大家が許しても横島は絶対に許せないのだ。

だから横島は泣く泣く突撃を緩めなかったのである。

とは言え、式達から強奪したモノで戦おうにも対象が大き過ぎるし、半実体状態では物理ダメージは意味をなすまい。
式からぶんどった折角の得物やお面もこれでは変装にしか使えない。

不幸中の幸いは、暴走状態で暴れまわっていない事。
それをされてたら木乃香の救出はおろか近寄る事も叶わない。

とは言え、その巨体と潜在的なパワーは侮れまい。
何せ先人は倒す事をせずに封印をかけているだけだったのだから。

だから横島も何とかかんとか頭を捻り倒して策を練っていたのであるが大した策は浮かばなかった。

思いつくのはアレを操っている人間を止めるか、引きはがす事。

それか再封印だ。
焦っている所為かこの程度しか浮かばなかったのだ。

『あ〜〜〜っ　どないしょ〜〜〜っ！！』

等と顔にかぶったお面の下で絶叫しつつも足を止めていない。
それだけは感心できると言えよう。激しくみっともないが。

「ん？」

そんな横島の視線の先で、ある変化が訪れた。

「んん〜？」

何と、野太刀を手にしている少女……刹那が背中から白い翼を現し、その翼をはためかせて空を飛んでいたのである。

「うぉっ！？　ひょっとして天使！？
綺麗な娘やったし、何かフツーの人間とちゃう思とったけど…
…天界の娘だったのか！？」

正確に言えば烏族のハーフ。

これを木乃香に知られて拒絶されてしまう事を恐れて距離をとっていた刹那。

そんな事等知る訳もない横島は、単純に彼女を天界の美少女と見ていた。

言うまでも無いが刹那は心身ともに美少女である。

この時点で横島は全くもって全然ＯＫで、毛の先ほども気にならない。女の子よりとは言え、差別と言うものをもっていない点には感心できるし褒められるべき男だ。

「惜しいっ！！　ちゅーがくせいやなかったら……」

その代わり、年齢制限に対してはギリリと歯を食いしばって悔しがっている。

何という悔しがり方であろうか。まるで親の仇の話を聞いた復讐者の如しだ。

……これさえなければもっとマシだろうに。

兎も角、その天界剣士（横島主観）は木乃香を奪還すべくスクナに迫った。

「おぉっ！！」

何せスクナには刹那という的は小さすぎる。
仕方なく千草は式神を放つが、彼女は野太刀の一振りを以ってそれらを退け見事奪回。

結果スクナは主要コントロールを失った。

となると、あとはアレ本体をどうにかすれば良いだけである。

横島は敵に聞こえないように拍手を送りつつ、その案を練った。

そして千草の着物姿を見た瞬間、シナプスから発せられた電撃が脳内を駆け巡る。

「そうか、封印できないくらい力があるんだったら……」

その力を奪えば良い。

ニヤリ……と福本笑い（↑邪悪版）をしながら横島は珠を二つ出現させ、一方をスクナに『吸』の字を入れてから投げつけ、手の中に残った珠に『収』を入れた。

これで吸い上げた力は彼に収まる。
そして吸った力でもって更に強い珠を生み出すのだ。

ずっこくてスゴイ策だった。
いや、それ以前に着物姿を見て力を奪う策を思いつく裏は如何なる理由が隠されているのやら。
何と言うか実に横島らしい話である。

そして今、その策は半ばまでは大当たりをしていた。

あの一番厄介だと踏んでいた少年も吸い上げて珠を作った残りのエネルギーで粉砕したし、後はコレをどーにかするだけなのであるが……

『（それがムチャクチャ大変なんだけどな～……）』

又しても吐いてしまう内心の溜め息。

だが、そんなに時間は余っていない。

鬼神の肩にいる千草も、何か横島に対してトラウマを持ってしまっているからか今は硬直しているから良いが、もうそろそろキれて襲いかかってくるだろう。

彼には解る。

こーゆー噴火手前の状態になっている女性のテンパリ具合はよく解るからだ。

それにまぁ、味方のぷっつんで三途の川見るよかマシなんだ……

――何時も復活するまであそこの河原にいる子供らと遊んでたっけ……

石を蹴倒してたって鬼も何か保父さんっぽくていい奴らだったし。

子供たちとゲーム感覚で石倒しやってたなぁ……

極普通の流れでまた現実逃避なんかしちゃったりする。

実際のところ手が全く無い訳ではない。

滅びのイメージを強め、叩きつければそれで大抵なんとかなるのだ。

ぶっちゃければスクナから奪った力をぎゅうぎゅうに込めた珠が二つあるのだから、その珠を二つともぶつければ如何にスクナとはいえただでは済むまい。

普通の珠ですら竜神を滅する事ができたのであるし。

だがその場合、かなりの確率であの肩にいる姉ちゃんも巻き込まれてしまうのだ。

流石にそれはムゴイし、（色んな意味で）惜しい。

何せ対象がデカければデカいほど込めるイメージは強化せねばならないし、手を抜けばエラい目に合う。

下手に手加減したとすれば、最悪弾き返されかねない。その場合はこっちが『滅』んでしまうのだ。それは御免蒙る。

それに……迂闊にそんな事をすれば“この世界”で目立ち過ぎる。

十代のアンポちゃんの時ならヒーロー願望があるからやっちまったりするかもしれないが、流石に今の精神年齢ではその危険さは理解できてしまう。

即ち、一撃で鬼神を滅ぼせてしまう力を持つ者がいる――という事実が、世に出てしまうのだ。

“あの世界”なら兎も角、“こっちの世界”では拙過ぎる。

いっそ自分の霊波刀を『強』『化』して叩っ斬っちまうか？

等とテキトーな手に意識が傾きかかった時、

「あ、あのっ！！　無茶はしないでくださいね！！
僕の生徒も来てくれるそうですから！！」

ネギが横島を心配してそう声をかけてきた。

さっきまで石化が進行していたネギであるが、今は完全に癒えていて元気そうだ。

尤も、魔力が尽き掛けているので戦力外。

それでも苦しさより、人を心配する想いの方が強いようだ。

――は？　女の子が来て何になるんだ？

しかし横島はその女の子がどういう少女か解っていない。

この子供の生徒というのなら女生徒。女子中学生だ。そんな子が来て何になるというのか？

だからネギの言葉に首をかしげていると、

『ただの女じゃねぇぜ！？
その名もエヴァンジェリン＝アタナシア＝キティ＝マクダウェル！！
かの有名な悪の大魔法使いにして真祖の吸血鬼だぜ！！』

とカモがネギの言葉を補足した。

その言葉に、横島は眉間に皺を寄せてしまう。

横島にとって、吸血鬼とはヌケ作の代名詞でもある。

それに真祖の吸血鬼という存在で彼が知っているのは十三世紀で思考が停止しているアホ伯爵。

その息子にしても妙に蚤の心臓であるし、ナルシス入ったヘタレだ。

何をどう信用すればよいのやら……

――あぁ、でも信長のフリしてた吸血鬼がいたっけ？

ああ言う手合いかもしれない。

何せ悪の魔法使いとか言ってるし。

でも、アレもなぁ……

「信用……できるのか？」

流石にそーゆー手合いに任せるのは心配だ。

だから後ろにそう問いかけた。

「はい！！」

だが返って来たのは真にストレートな返事。

そこには一片の疑いの色も無い。

自分の知っているダンピール同級生と同じタイプなのか？　と、一応の納得をする横島。

それに、彼らがそこまで大丈夫だと言い切れるのだからそれなり以上の実力があるのに間違いはない。

考えて見れば自分はあのアホ伯爵を基準に置いているではないか。それは根本から間違っているのだろう。

オコジョだかノロイだか知らないが、あの小動物が言っていた名前からして何か強そうだ。

あのブラドーだかベラボーだかよく解らないアホ伯爵のような名ではなく、何だか人型決戦兵器のようではないか。名前からして暴走されそうな気がしないでもないが。

だったら――

ニタリ……

横島は、その名のように邪な笑みを浮かべた。

右手に一つ。

左手に一つ。

無意識下に沈めておいた特製の珠を取り出し、イメージを込める。

この珠を生成したのは目の前のスクナの魔力。

その莫大な魔力を押し固めて作られているそれは、通常の“それ”なんぞ比べ物にならない。

だから彼のあまりと言えばあまりに強力過ぎるイメージの全てを再現できるであろう。

いや、“再現し尽くせる”だろう。

瞼を閉じ、意識を集中。

目の前にいる鬼神は無視。

その姿形も無視。

その形状を微妙過ぎる形へ――

つーか人として明らかに道を間違った思考の果てのモノへと変換させて集中する。

「うわ……」

「な、何だ？　この波動は……？」

明日菜と刹那はそのリビド……もとい、謎の氣に押されていた。

反してカモは、

『ス、スゲェ……ただモンじゃねぇ……』

と、何かよく見知った波動に感心頻り。

そんな目で見守られていた横島の手がス……と動き、目を瞑ったまま“それ”を投げた。

千草はびくっと体を硬直させて身を竦ませるが、その投げられたモノは大きく鬼神を外れ、ポチャポチャンと軽い音を立ててその体躯の左右に落下してしまう。

「外れた――っ！？」

「ノーコンっ！？」

何をしようとしていたのかは知らないが、投擲された物が思いっきり外れた事にネギと明日菜が叫び声をあげた。

千草も未だ怯えを残してはいたが、外れたのが解ると安堵のため息と共にスクナの肩に手を付いてしまう。

そう、外したのではないと理解できる者はこの場にいなかった。

バシッ！！

「え？」

「なっ！？」

スクナの全身。そして千草の体に電気に似たものがまとわり付き、その行動の全てを奪う。

いくら力を込めようにも、幾ら足掻こうにも指先一つ動かない。

「く……ぁ……っ！？
ウチどころか、スクナまで……一体何が……」

どう抗おうにも抗えない。

レジストしようにも、そもそも術ではないのでレジストできない。

魔法とほぼ同じ特性をもつ＜技＞。

そんなものに抗う術など持ち合わせている訳がない。

「鬼……い……だ」

そして横島は呟く。

必死こいて呟き続ける。

「あれは鬼じゃない。鬼神じゃない」

完全に目を瞑り、妄想の眼で凝視しているのは偽りの鬼神。

幻想の彼方の虚像の相手。

鬼神本人（？）を前にして、彼はその対象を全く違う存在へと妄想可変させてゆく。

想像を絶する煩悩の集中力だ。

「オレの前にいるのは鬼娘。

腕が四本あるけど、ストレートロングの鬼娘！！

ぼっきゅっぼんっのエエ女ぁっ！！」

そしてそれは現実を侵食する。

更に技を強める為に行われている現実逃避と超強力な自己暗示により底力を引きずり出し、それによって彼の心の力を発動させる。

昔、月で邪竜と戦ったおり、彼とその雇い主は二手に分かれて珠を使用した。

これは珠を投げつけても回避されるであろう事を読んだ雇い主の策で、呪縛するという意味を『糸』と『専』の二つに分けて件の邪竜を間に挟み、足りない分の『、』に見立てて発動させたのである。

そしてこれはその応用。

イメージをずっと強化。

ガキの時と違い、今は縛り付けるという意味をよく知っている。

だから超強化された珠の力を持ってその『糸』『、』『専』は横島の超絶なるイメージを完全に再現させてゆく。

「ひゃ！？　ひゃあぁあああっ！？」

千草が悲鳴を上げて逃れようとするがどうする事も出来ない。

「う……わぁ……」

「……えと……」

呆然と見上げている明日菜とネギも言葉を失ってゆく。

「何やの～？　せっちゃん見えへん～」

「見てはいけません！！」

見ようとする木乃香の眼を手で塞ぎつつ、刹那も顔を赤くしてそれを見てしまっていた。

おぉ、何と言う事だろう。

左右から挟み込んだ珠は、完全のスクナと千草の身を霊気で封じ込めているではないか。

嗚呼、何と言う事だろう。

半物質化したそれは、明確なロープとなってその身にまとわりついている。

あっという間もなく、その手は合掌の形に背面で固定され、千草の左右の胸は三角に通されたロープによって強調されていて、足は胡坐を組む形で固定されてしまった。

背面合掌胡坐縛り。

かなり難易度が高く、尚且つ縛られる側の体が柔らかくなければ苦痛を伴う恐るべき縛りの技が発現されていたのである。

そしてスクナすら同じ様に謎の力で捕縛されていた。

ただし、こちらは一対の手だけが背面で、後は上方と胸の前。変

則合掌での胡坐縛り。
はっきり言って、しびれも憧れもできないが正しく匠の技である。

しかし、いくら匠の技とは言え、技の名前が解らなくとも未成年のボクちゃんたちや嬢ちゃんたちはネット調べたりしちゃだめだぞ？

ましてやお父さんやお母さんに聞くなどもっての他だ。
間違っても良い子の皆はそんな事をしたりしてはいけないぞ？
おねーさんとの約束だ！

……等とイロンナ防御壁を作っている横で、横島は感慨深く出来具合を確認していた。

思い出されるのはボーヤだったあの時代。
焦りとか、経験不足とかでイマイチ実力を出し切れなかった若い時代の記憶。

“あの時”はガキだった。

つーか、桜ん坊だった。

だから相手を呪縛するというヘタレなイメージしか込められなかったのだ。

しか――しっ！！　今は違う！！

数多の経験は彼を強く逞しく、激しくベクトルが明後日である気がしないでもないが、とりあえずは鍛え上げられている！！

要するに強くイメージできるもの、主に煩悩関係の方向にスライドすれば、そのイメージはミラクルなパワーで込められる事に彼は気付いていたのである。

しかし、当然ながら美女美少女以外にそんな妄想を持つ事は不可能！

だからスクナの外見をガン無視し、絶大膨張させた妄想の中のスクナギャル（仮称）をそーゆー目に遭わせ、その練りに練り上げたイメージを解放したのである。

心の目と妄想力によって巨大鬼が“見えない”横島は、千草の姿“だけ”を見て出来具合を再確認し、

「どーじゃっ！！　神技　Ｏｇｒｅ　Ｓｉｘ（鬼６）！！
　このオレの恐ろしさを思い知るがいい！！」

と、満足げに高笑いを上げた。

確かに恐ろしい男である。

イロンナ意味で――

『ス、スゲェぜ兄さん！！！　そこにしびれる！　憧れるぅっ！！』

いや、そんな彼を滂沱の涙で見つめている者が一人いた。

つーか、一匹。

言うまでも無い。カモである。

「ふ……この程度でそこまで感心されては……な」

右掌を上にしてその指先を額に当て、左手を腰に置いて身をひねり、ナゾのジョジョ立ちを意味もなく極めた横島は、フー……と溜息をついて余裕を見せる。

『この程度！？

アンタは神!?　神なのか!?』

呆気に取られる面々の様子をよそに、カモは拳（前足?）をぷるぷる震わせて驚きを深めてしまう。

しゃなり、スチャッ！　とポーズを極めた横島は、そんなカモに肩をすくめてヤレヤレというジェスチャーすら余裕で見せていた。

言うまでもなく、感涙しているカモにネギや少女らはついて行けない。

というか、時折上から聞こえてくる、

「く……ぁあぁぁぁっ　く、苦し……何や、こ、これ……」

という何だか熱い千草の吐息のような声が気になってしょうがないのだ。

ぶっちゃけ彼女は、ここでは表現が果てしなく難しい姿で悶えている。

煩悩に掛けては天界魔界でも一目置かれている横島の技だ。
その刺激を施す絶妙さは筆舌に尽くしがたい。

明日菜や刹那は勿論、幼馴染の目隠しから逃れた木乃香らオコチ

ャマ連中も顔を真っ赤にしていた。
だが、何だか目が離せないのはやはり思春期故の好奇心からか。

「ふはははははははは……
その鬼神から奪った霊力……もといっ、魔力でもって紡ぎあげた霊縄の味はどうだ?!

フツーの縄と違って痕も残らんし、死ぬほど苦しくもないハズ!!　つーか、気持ちよくね?」

そうイメージを込めたからな。と、そんな千草にとんでもない事実を告げて言葉責めを行い、更に霊力を上げる変態…いや、横島。

事実、彼は女子供をいたぶる趣味は持ち合わせていない。

いや確かに敵なれば攻撃もできようが、どこまでも甘い彼は拷問などは不可能な話なのである。

だから彼のこーゆー技は苦しい事は苦しかろうが、それ以上の事にはならないのである。決して。

「ちょ、ちょっと!!　何をするつもりなの!?」

しかし、流石に同性として見かねたのだろう、明日菜が前に出て問いかけた。

その声にあっさりと振り向き、何言ってんの？　とお面をつけたまま首をかしげる横島。

「え？　そりゃ尋問だけど？」

「尋問～？」

拷問じゃないの～？　という明日菜の疑いの眼差しを射抜かれつつ、その痛みによろけながらも踏ん張って耐える。

何と言うか、こんな美少女にそーゆー目で見られるのは痛過ぎるのだ。

尚且つ彼女には妙なシンパシーというかデジャヴュを感じるのだ。彼が絶対に逆らえない者の一人である元雇い主に似てるような似てないようなという……

「あ、あのな……あの姉ちゃん、やり方が強引過ぎるだろ？　いくらこんなモンを復活させて力を得た言うても、所詮は一体やぞ？

それに西の長の娘であり、東の理事の孫娘である木乃香ちゃんを誘拐した。

それもコントロール兼、人質にするやいう非道かましてまで。

フツーやったらそんな騒動起こしたら、裏の関係者がこぞって止めに来るやろ？

特に西の連中は責任とる為にモノごっつい奴らで止めに来るハズや。
そんな事くらいすぐ解る筈だろ？」
「え……？　そ、そーかな……？」
横島にそう諭されるが、今一魔法界に詳しくない明日菜は刹那の方を見て助けを請う。
流石に木乃香はさっぱり解っていないようだが、当然の如く刹那は理解しているのでコクリと小さく頷いて肯定を見せた。
何せ内輪もめで魔法の秘匿が蔑ろにしたというのなら、メンツ丸潰れなのだ。
そんな歩く恥の証明をほったらかしにする訳ゃないのである。
「こんな事件おっ始めたら実力ある奴らがわんさと動いて、とっとと止めに掛かるだろ？
流石にこんな秘匿もヘッタクレも無いバカかましたら京都中の情報規制せにゃならん。
そうなったら組織の危機やぞ？　協会がどーたらじゃ済まんハズだ。
いくら穏健派でもジジイだって騒動鎮圧に乗り出さにゃならん。
そしたら裏の超有名人らしい高畑さんも出張って来てエラい事になるぞ？」
「い〝っ？！　高畑先生って魔法関係者だったの！？」

知らんかったんかいっ！？　と思っても後の祭り。

その驚き具合から、木乃香は兎も角、明日菜も知らなかったようだ。

『ヤベっ　言っちまったよ……』

等と顔を青くしてたり。

「と、とにかく、
そーゆー訳だから、あの姉ちゃんだってそんくらいの事は解ってる筈なんだ」

だけど“やった”。

その程度の事は解っている筈なのに。

前回の戦争から然程経っておらず、その件で西洋魔法に対して恨みを持っている千草が理解できない筈がないというのに……

「あの姉ちゃんだってホントなら知ってる筈だ。
どんな力を持てたとしてもたった一人じゃなんもできん事は解

ってる筈。
でも、自信満々にやってた。
何かに唆されなきゃ、誰かに思考とかを誘導されなきゃこんな事する訳ゃねぇんだ」

「よ、よく解んないけど……騙されたって事？」

「大雑把に言やぁな」

明日菜のオバカさん具合に、人狼族のアホ弟子を思い出しつつ頷く。

その所為で気が緩んだのだろう、

「兎も角、オレがあの姉ちゃんの口を割らせて背後喋らせたら……そんで自白した事にすれば罪一等を減じられるかもしんねーし」

と思わず本音がポロリと出た。

その呟きに明日菜も刹那もギョッとする。

言うまでも無く、アレだけの事をしでかした千草に対して情けを掛けようとしていたからだ。

無論、二人とて彼女に対して怒りも持っているし、それなりの憤りもある。

だからと言って殺す気はないものの、それでも簡単に許す気はな

い。

だが、そんな彼女にあっさりと情けを掛けようとしているのは……

やはり、横島忠夫。

甘い男なのである。

兎も角、どことなく見直すような眼差しに気付いた彼は、居心地の悪さも手伝って千草に目を戻し、心の動揺を見せまいとしたのであるが・・・・・・

「『おぉうっ!?』」

その千草は……何と言うか色っぽさが増していた。

横島とカモは二人同時に拳をぐっと握りしめ手前に引く。

何とも見事なほどに思考が同じベクトルに傾いていた。

この時点でイメージはまた急降下である。

それもそのはずで、先程まで漂わせていた悪の首魁然とした空気はすぽーんと消え去り、横島が固めた妄想通りに痛みだけではないという“問題”もあって、彼女の顔は羞恥やらイロイロでうっすら

と桃色に染まって『ドコのエロゲキャラ?』的な空気の只中にいる。

そして着物は汗でしっとりと濡れ、
元から大きく開いている胸元は霊縄によってさらに大きく開き、
大人の女性の滑らかさを露にし、

無理やり胡坐をかかされた為、裾が肌蹴て太ももはむき出し。
スクナの肩が邪魔してギリギリで脚の付け根とかそーゆートコが
見えないが、逆にそれが妄想を駆り立てる。

二人（一人と一匹）からして……とゆーか、世のバカ男どもにと
ってベラボーにベラボーなナイス光景がそこにあったのだ。

「あ、く、ンん……ぉ、お助け……」

流石に彼女とてかかる状況での逆転劇は毛の先程も思いつかない。
だからという訳でもなかろうがそう弱音が漏れた。

しかし、それは完璧かつ徹底的に逆効果だ。

何せその声は吐息のような呟きは、どこか甘く熱かったのだから。

『へ、へへ……兄さん、あのアマあんな事言ってヤスぜ?』

鼻血をブーッと噴きつつ、カモが妙に似合ったチンピラ口調で横

島に言う。

「ふふふふふ……やっぱ甘ぇな姉ちゃん。アンタにゃあ、イロイロ歌ってもらわなきゃならんのでな……可哀想だが我慢してもらうぜ。な～に、心配しなくていい。直に自分から『してぇ』って口にするだろうしな」

くくく……と含み笑いで持って堪える横島は正に悪人（更に時代劇風味）。

千草は――

いや、明日菜や刹那ですら生理的な恐怖を感じてしまう程、その言葉には妙な恐怖が篭っていた。

実際にされる側であろう、千草の恐怖とは如何なるものやら。

「そ……んな、せ、せめて西洋の魔法とかで心読んだらええやん……」

何だか痛みとか苦しみとが紙一重を越えてしまいそーになりつつも、何とか自我を保てる手段を横島に伝える千草。

まぁ、確かに東西問わず読心術というものは存在するし、ネギですらある程度は使う事ができる。

横島の身の潔白を証明したのもその魔法であるが、

「もっと良い方法もあるが……使ってやらん！！」

彼にそんな気は更々無かった。

ぶっちゃけ“珠”を使えばアッサリと解る事なのだが……そんなアッサリ事実なんか知っても面白くないんだもんっ！！

「サ、サディスト～～っ！！」

泣きが入るが、霊力減退中の横島は単なる煩悩男。よって馬耳東風。

つーか、そんな泣き声をかませばテンションが上がるだけだ。

女を泣かせないとか言ってたポリシーはどうなったと問いたい。

「あれは直に悦びの声となるから良いのだ！」

――さいですか……

兎も角、何故か引き抜いたベルトを二つ折りにしてパシンパシンと鳴らしつつにじり寄る横島。

ノリに乗ったカモも、何だか怪奇なパピヨンマスクをつけてローソクを手にしている。

女性主観生理的嫌悪もハンパではなく、その怖気のあまりに千草の意識が飛びそうになるが、ギリギリと絞まってくる霊縄がそれすら許してくれない。

おまけに何だかちょっとイイかも……なんて気に呑まれかかってたりしているではないか。

オコサマ連中は顔を真っ赤にしていて当てにはならないし、頼みの綱である仲間の月詠や小太郎もいない。

あの新入りも一撃で吹っ飛ばされている。

『アレ？　ひょっとしてウチの貞操、絶体絶命？』

等と今更ながらその状況に気が付いた。いや、現実逃避をしてただけかもしれない。

グルルルルルルルルル……♪

何だか足元のスクナすらミョーな声で唸っているよーな気がするし……

「み、見えてへんっ！！　聞こえてへんっ！！」

そんなスクナの声やイヤ過ぎる顔を目に入れかけてしまい、横島は頭を振って現実から眼を背ける。

その上、よくもそんな気色く悪い声聞かせやがったなと千草に八つ当たりをかます。

「ひぃいい～～っ！！　言い掛かりやぁ～～っ！！」

あぁ、悪事に手を染めたとは言え女を捨てた憶えは無い千草。

このまま毒牙に掛かりまくって明日には横島を御主人様☆とか呼んでしまうのであろうか？

「性義……もといっ、正義の怒りを思い知れ――っ！！」

先程まで見せていた情けを完璧且つ徹底的に台無しにし、謎の声を張り上げて気色満々に飛びかかろうとした横島。

血圧アップでテンションアップ。

更に“邪”さもドドンとアップだ！

だがしかし、

ガシッ！！

年齢制限という趣旨にガン無視かまそうとした横島のチャレンジ行為は、

文字通り、意外に所から現れた意外な“救いの手”によって阻まれてしまった。

「あれ？」

何と彼の影から細い腕が伸び、彼の手を万力のような力で掴み止めたのである。

「ウチのぼーやが世話になったようだな？」

「え？」

ＴＨＥ　勘違い。

ドカンッ！！！

その衝撃。

『怒』『母』に劣るとはいえ凄まじかった。

瞬間、衝撃を纏ったその拳は横島の身体を小石のように弾き飛ばし、水面に身体をガンガン叩きつけられつつ水切りの石のように回転しながらふっ飛んで行く。

「うぼぉ――……っ！？　……あべしっ！！」

先程自分がやったように、銀髪の少年同様、スクナの身体に叩きつけられ、そのままボチャリと水面に落下。
何だかゴキブリを叩き潰したようなイヤンな音までしていた。

ずるり…と影から現れて暴挙を行った“もの”。

少女の姿をした“魔”。

それは――

「あ、貴女は……」

突如として彼の影から現れたのは、シックな黒のナイトドレスを着用した金髪の少女・・・・・誰あろう、今しがた話の出たエヴァンジェリンその人だった。

「ふん……」

妙に手ごたえが無かった所為だろうか？
つーか、相手が何だか殴られ慣れ過ぎていた為か、はたまた倒してしまって興味を失ったのか、彼女は鼻先で笑いつつ呆気にとられ

ているネギの方へと顔を向ける。

その魔力。
その波動。

未だ完全には封印は解けてはいないが、以前の悪の魔法使いの呼び名に相応しい王者のそれがある。

彼女は何とか呪いを誤魔化すウラワザが成功したので、影を使って転移してきたのだ。

何せ焦っていたので状況を完全には把握できなかったから、邪悪な気配を放っていた存在を見てとりあえずぶん殴ったのである。

「無事か？　ぼーや」

何だかんだで心配していたのだろうか、エヴァは真っ先にネギの様子に目を向けた。

その声にハッとして再起動を果たしたネギであったが、流石に今の行動にはどう声を返してよいやら解らない。
彼がそうなのだから、明日菜もそうである。

「え、えと、あの、エヴァちゃん……？」

「フ……これで貸し借りはナシだぞ？」

「い、いやそーじゃなくて……」

説明しようにもどう言えばよいのやら。

明日菜がそううろたえている間に、エヴァは空に舞い上がった。

「ーマスター。ターゲットは結界に包む前に何らかの力によって拘束されています」

「の、ようだな。しかし……何だこれは？」

空中では彼女の従者である茶々丸が対戦車ライフルに似た大型火器を携えて彼女を待っている。

その両足の脹脛から姿勢制御バーニアのようなものがあり、どうやら飛行能力すら標準装備しているようだ。

「ー……不明です。

キルリアン反応はありますが、氣や魔法の類の波長がありません」

「ほう……？」

その茶々丸のセンサーをもってしても正体の解らぬ力。
それによって鬼神は捕えられているのだ。術者ごと。

尚且つ、

「む？　背面合掌胡坐縛り……か。
一分の隙も無い見事なものだな。一体何者の仕業だ？」

流石にエヴァンジェリン。伊達に長生きをしていないようでこの縛りを知っている。
ただ、女子中学生という立場なのだから補導員に出頭する事をお勧めしたい。

とは言え、幾ら霊縄とはいえ素人目から見ても遊びの部分が無い、匠の縛りなのだから眼を見張ってしまうと言うもの。

しかしその縛りに対する感心は直に眉間に皺を寄せる事で霧散した。

「しかし……何だあの面は？　見るに耐えれん」

伝説の鬼神とやらは、その縛りを受けて何だかとろけたような顔をしているではないか。

自分がここに来る前までに何が遭ったか解らぬし、あの“怪人”が何をしようとしていたのかは不明である。

しかし、アレは吹っ飛ばしたのであるから、未だコレに拘束状態が続いているのは別の理由だと考えた方が良いだろう。

初見であるエヴァが、単に持続時間内だと知るはずもないし。

そんな彼女の頭に浮かんだのは、コレに封印を掛けた人物の事。

そう言えば自分に呪いを掛けた者と同じ英雄ナギだと聞いた気がする。

となると、やはり自分同様に訳の解らぬハズカシー封印が掛けられているのではなかろうか？　いやきっとそうに違いない。

あの男の事だ。中途半端に封印が解けたらＳＭチックに縛るくらいのトラップは仕掛けてあるに違いない。ふざけまくった奴だったし。

「……おのれナギめ」

人事とは思えない有り様に、何だかギリリと歯を鳴らして見たり。

勘違いによって更に恨まれている男。ナギ＝スプリングフィールド。横島同様に罪深い男である。

「せめてもの情けだ。
私の魔法で屠ってやろう」

伝説の鬼神が縛られて悦ぶなんぞ可哀想過ぎるではないか。

だから最期くらい華々しく散らせてやろう。

悪としての礼儀でもって。

「え？　あ、あのちょっと、ウチもおるねんけど……」

「Ｌｉｃ　ｌａｃ　ｌａ　ｌａｃ　ｌｉｌａｃ
契約に従い　我に従え　氷の女王」

「あぁ～～っ！　き、聞いとくれやす～～っ！！」

千草の声は本当に耳に入っておらず、エヴァはその強力な術を紡ぎ上げて行く。

「来たれ！　とこしえのやみ！　えいえんのひょうが！」

瞬間的にスクナの周囲が凍りつき、その氷によってスクナの巨体が押し潰されて行く。

押し潰しつつ温度が急激に下降。
氷すら凍り潰れる大零下がスクナを襲う。

ほぼ絶対零度。
１５０フィートの範囲を完全凍結する殲滅呪文。

エヴァンジェリンの黄金期、好んで使用していた古典ギリシャ語系魔法が一つだ。

如何な伝説の鬼神、リョウメンスクナとはいえ防ぐは敵うまい。
拘束されてるし。

「あ、ひぃいいいいっ!?」

当然ながら千草もそれに巻き込まれかかっていたりする。

――が、

ヒュッ　カツンッ!!

何かが投げ付けられた瞬間、彼女の周囲の温度だけが下降を停止。
何かに『護』られるかのように絶対零度の息吹は彼女に纏わりつかなくなった。

直後、

「ＫＯΣＭＩＫＨ、　ＫＡＴＡΣＰＯΦＨ'」
（おわる）　（せかい）

スクナそのものが瞬間氷結し、

「砕けろ」

芯まで凍り付いた鬼神は完全な氷塊と化し、ついには自重に負けたか大きく裂けて砕け散り、氷片となって湖面に散らばっていった。

『終わった……みたいやね』

「そう、みたいアルな」

古の頭上、数センチのところで鉄扇に止められている得物。
だが、鳩尾ギリギリにはもう片方のトンファーが止まっている。

狐面の方も、首筋ギリギリで鉄扇をかわしてはいるが、その踏み込みによって古の膝が入りかかっていた。

『もうちょっとやったに……残念やわぁ』

「ん～　でも、相打ちだたみたいアルね。
私の氣の練り具合の方が甘かたヨ」

「謙遜せんでええわ。ウチかて最期の方は本気やったしな。
ほれに鳩尾を囮にして誘うや、ふつー思わへんわ。
でもまぁ……」

つい…と二人して距離を取って得物を降ろした。

少しだけ残念ではあるが、こういったものは腹八分目も良いものである。

終了を告げた山に同時に目を向け、何だか唐突に沁みてきた妙な虚脱感に口元を緩めて、またお互いの顔に眼を戻した。

『決着は……また今度にしよか』

「そうアルな。
ちょと残念アルが……でも、感謝感激ヨ」

『こっちもや』

見れば巨体の鬼や烏族の剣士も真名や詠春に礼を言っている。

実際、千草の妙な召喚によって手足を縮めさせられるような戦いを強いられたのだ。
全力で戦わせてもらえたのだから感謝もしようというもの。

百体以上呼び出されたというのに、残り数体。

如何に戦いが激しかったか解ると言うものだ。

何が面白いのやら、その激戦の跡を眺めつつクスクス笑うと、狐面は古に背を向けて仲間に向かってゆく。

『ホンマ、面白かったわ。
“今度”はちゃんと殺合おな？』

「望むところネ」

振り返らずとも親指を立てているのが解る。

それが解るからこそ、狐面も手を軽く振るだけ。

『ありがとな。
あ、そん代わりに男の堕とし方教えたるわ。
もー速効でメロメロになんで？』

「それは……期待するアルよ」

あははと二人声に出して笑う。

敵同士だったのに、どういう訳か空気が合う。

恰も久方ぶりの懇談を終えた旧友であるかのように。

最初は普通に戦い合っていたと言うのに、後半からはギリギリの殴り合い。

肉を斬らせて肉を断つ、骨を砕かせ骨を砕く、パンクラチオンの態があった。

しかし困った事に“それ”が面白い。
困った事に楽しかったのだ。

実際、根っ子の方では似た者同士だったのかもしれない。

どちらがどちらに似ているかは知らないが。

『次までに女磨いときや？　まだまだお子ちゃま過ぎんで』

「余計なお世話アル！」

だからか別れの雰囲気は無く、殴りあった直後なのに棘も無く、

『ほな、またな』

「再見」

女二人は極自然に、背中合わせのまま再会を誓った。

「おや？

終わったようでござるな」

「みたいやな……」

流石に霊力によって氣の密度を高められている十五人の分身と本体による十六人攻撃を相手にしたのだ。

流石の小太郎も抵抗のての字も出せず地に伏していた。

おまけに楓は全力ではあるが本気では無かったのだ。負けを認める他はあるまい。

それでも、

「随分とスッキリした顔でござるな？」

「悪いか？」

「いや。先程の追い詰められた顔よりは何倍も可愛らしいでござるよ？」

うっさいわっ！！　男に可愛いや言うな！！　と文句を言いつつ、楓の差し出した手をとって立ち上がる。

背中に着いた草の葉を叩いて落としている小太郎の顔は、なるほど楓の言うとおりかなり落ち着いていた。

けっこういいのをもらって痛むであろうに、それに関しては文句も無い。

と言うより、相手をする事によって怒ってもらったのを喜んでいる節もある。

『ああ、何だかんだ言っても、この坊主も意に沿わなかったのでござろうな……』

確かに西洋魔法使いに一泡ふかせるという目的も大きかったかもしれないが、それに対して木乃香という女の子を“使う”。その事が引っ掛かり続けていたのだろう。

その箍を外したのが、自分とほぼ同じ力を持つネギとの戦い。

そして、

『横島殿の与えた恐怖だったのかもしれないでござるなぁ……

全くあの御仁は……』

そう口内で呟き、口元に楽しげな笑みを浮かべる。

「何や？　どうかしたんか？」

「いや、なんでもないでござるよ」

山から吹き降ろされてくる冷気にふと目を山に戻す。

何だかよく解らないが、季節感を無視した冬の山風のようだ。

「ふむ……？

拙者は横島殿のところ……もとい、このかの所に向うでござるが、おぬしはどうするでござる？」

「見逃す言うんか？　そんな情けはいらんわ。けじめはつけんとあかんしな。

大人しゅうお山に行くわい」

楓としてはこのまま見逃してよかったのであるが、本人がこう言っているのだからその意志を汲む事にした。

「ん……？　そー言えばリーダーは何処に？」

「は？　リーダー？」

きょとんとする小太郎を他所に、楓は周囲をキョロキョロと見回して夕映の姿を探す。

何というか……戦いに熱中し過ぎて彼女の事をすぽーんと忘れて

いたようである。

「えと……あっ」

幸い、直に見つける事ができた。

「リーダー」

「あ……楓さん」

夕映は一人木立の中、月を見上げてボ～っとしていたのである。

裸足で浴衣姿。

そんな姿でまだどこか肌寒い桜吹雪の中、美少女がもの憂げに佇んでいるのは中々良い構図だ。

楓も一瞬ほぅ・・・と目を見張ってしまうほどに。

「コイツがリーダー？　何でやねん」

オコサマである小太郎は兎も角としてだ。

「……あぁ、終わったですか？」

「うん、まぁ、そうでござるが……如何いたしたでござる？」

こちらを向いた夕映の眼は未だ夢心地。
流石の楓もちょっと焦る。

そんな彼女の想いを他所に、夕映はフ…と陰を落とした笑みを浮かべ、

「時うどん……」

「は？」

溜め息をつくような声でそう零した。

「柳家の伝統的なネタの一つです。
関西の方にも解り易く、尚且つオチまでが近くて掴みのポイントが多い演目として私なりに選んだです」

「はぁ…？」

時うどん。

上方落語での＜時そば＞の事だ。

確かにオチが解りやすいし、関西弁での使いまわしもかなり面白いが、何故にこんな場所で古典落語なのだろうか？

だが、ミョーにイイ汗をかいている夕映はそんな疑問に気付いた風も無く、ドサクサで逃亡を果たした月詠の消えた方向に眼を向けたまま、

「あれだけウケれば……満足です……」

ありがとうです小〇治師匠……等と感慨深げに訳が解らないコトで一人頭を下げていた。

――因みに、月詠は何か知らないモンに覚醒してしまったようである。

「ふふん……ぼーや、小娘。

見たか？　私のこの圧倒的な力。しかと目に焼き付けたか？」

学園内においては完全に力を封じられているエヴァであるが、その本質は悪の大魔法使い。

半封印状態でもこのくらいの事はできる。

元々の地力が半端でない上に、相手が全く以って魔法に対して抵抗を見せていない事もあって易々とその身を砕いてしまった。

「え、ええと……」

「何とゆーか……」

ネギにしても明日菜にしても、確かに今の魔法の凄まじさは理解できる。

二人よりは長く裏に関わっている刹那にしても、今の魔法の凄さは解るのだが、何とゆーか……その直前の“鬼神縛り”と、怪人ぶん殴り事件と衝撃が立て続けに起こっているので呆れる方が大きかったりする。

「いいか　ぼーや。

今回の事を私が暇な時にやってる日本のテレビゲームに例えるとだな、

最初の方のダンジョンとかで死にかけてたら何故かボスキャラが助けに来てくれたようなものだ。

次にこんな事が起こっても私の力は期待できんぞ。
そこんとこをよく肝に命じて置けよ」

次は無いぞ？　という意味合いの念押しをするエヴァ。

妙な例えではあるが、何となく納得できてしまうのは不思議である。

しかしその言い様からすれば口が悪いだけの世話焼きのよう。

結局、茶々丸が言っていたように単にネギが心配だっただけなのかもしれない。

『……つーか、あの兄さんはドコに？』

未だ冷たい空気の舞う湖面をぼんやりと見やりながらカモがそう呟いた。

「うん？　誰の事だ」

「いや、その……今さっきエヴァちゃんがぶっ飛ばしたヒトなんだけど……」

「あぁ、あの奇怪な術者か。
知らんぞ。死んだんじゃないのか？」

明日菜の返答も殊更どーでもよさげに答えるエヴァ。
だが、テキトーに言った死亡説に、ネギの顔色が更に悪くなった。

「あ、あの……」

「む？　何だぼーや。
流石にキツそーだな。大丈ぶ……」

「あの人、敵じゃないです……多分……」

ネギの言葉に、氷使いらしくコキン♪と、キレイに凍りつくエヴァ。

そのまま視線を他の少女らに送ると、明日菜と刹那も微妙ながらコクリと頷きを見せていた。

「うん。なんかあの人、ウチらを助けに来てくれたみたいやで？」

木乃香もそうアッサリと答える。

ひゅ～～～……

何とも言えない気まずく微妙な風が六人の間を吹き抜けてゆく。

「……そう言えばジジイがお前らの護衛に男を一人付けているとか付けてないとか言ってよーな気がするな……」

今さらであるが、近衛の言葉を思い出すエヴァ。

余計に取り返しがつかない空気になってきた。

あの時のエヴァは、何だかんだ言って茶々丸の言葉通りネギの事が心配だったようで、近衛のセリフをよく覚えていなかったりする。

それに霊力が減少している横島は、女にとって……特に美女美少女にとっては邪悪と言えない事もない。

悪の魔法使いであるエヴァから見てもサブイボが出るほどに。

悪認定されるのも自業自得であるのだし。

「う……」

そんなどーしよーもない空気に耐えかねたのか、或いは体力の限界からかネギが遂に膝を尽き、倒れ伏してしまう。

「ど、どどうした　ぼーやっ!?」

「ネギ先生!?」

「ネギっ　ちょちょちょっと!!」

流石に夜中に魔法の全力使用をぶっ続け、移動魔法も限界で使用しまくり、少年の魔法を全力でレジストしたりすりゃあ過労もするだろう。

エヴァも一応は焦った声を上げたのだか、どちらかというと自分がかましたウッカリの誤魔化しに近い。

「皆無事かっ!?」

「あ、お父様！」

おっつけ皆も駆けつけては来たのだが、何とか怪我も無く無事なようだ。

父親の元気な姿を見て、木乃香も涙ぐんで抱きついたりしている。

その光景に刹那も思わずもらい泣きして目元を拭っていた。

それを見て楓達はようやく、
ようやく長い夜が終わろうと――

「アレ？　そーいえば老師はどこ行たアル？」

「む？　言われてみれば姿が……」

そうキョロキョロと彼の姿を探す二人。

何となく目を逸らす明日菜や刹那がいたりするが気付いていないようだ。

それよりも先に――

「ぴぃ、ぴぃ、ぴぃいーっっ！」

と切なげに鳴く大きな白鹿　かのこの姿が目に入り、その視線を追ってゆくと……

その先にあったのは氷の山。

スクナ“だった”氷の塊がぷかりと泉に浮いている。

その中に――

その透明な氷塊の中に一つ、ゴミみたいな物が混ざっている塊が浮いているのに気がついた。

「あぁっ！？　老師ーっ！！？？」

「「「「「ええ――っっ！！！？？？」」」」」

そう横島は、なまはげスタイルで片腕を差し上げた不思議な格好のまま標本宜しくコチンコチンに凍り付いていたのである。

「横島殿ーっ！！　何故にあのような御姿にーっ？！」

「い、今助けに行くアル……って、冷たっっ　この水、ムチャク

チャ冷たいアル！？」

『あー……氷結呪文の余波で凍りついてるしなぁ……』

「って、やったのエヴァちゃんでしょー！？」

「私か！？　私だけが悪いのか！？」

「一大丈夫ですマスター。情状酌量の余地はあります」

「そんなの後回してでよいでござるから、早く横島殿をーっ！！」

「老師ぃーっっ！！」

……結局、見かねたエヴァ（つーか責任は彼女にあるのだし）が茶々丸に命じて氷柱封印状態の彼をサルベージしに行き、事無きを得たのであるが……

それでも魔法氷結であった事と、使用術者が音にも聞こえたエヴァンジェリンだった為、無駄に頑丈で硬い氷となって救出に大変な時間と労力を裂いたという。

ある意味自業自得であるが、おさぶい話であった。

「……やっと魔法が使えるようになった……か」

そんな騒動を遠目で見、木の陰に身を潜めながら少年はそう呟いた。

キュ…と握り締めた拳には瞬間的に魔力が篭る。

彼の言うように魔法が使えるようになっているのだろう。

理由は解らないが、彼はあの怪人の一撃によって魔法を完全封印されており、意趣返しすら行えない状態になっていた。

昼間の一件もそうであるが、少年とて並の術者ではない。

その障壁もそうであるが、魔法抵抗力はそこらの十把一絡げの魔法使いではどうする事もできないだろう。

だが、あの怪人は一瞬でそれを行った。

少年ほどの魔法使いの力を一瞬で封じたのである。

そこには僅かながらの魔力も、そして呪術も感じられなかった。

あったのは僅かばかりの氣。そして……

「得体の知れないオーラ……一体彼はなんだったのだろう……」

ネギの周囲には真祖の吸血鬼やら、何故助かったかよく解らないが詠春までいる。
仮にも西の長という肩書きを持つ詠春だ。自力で石化を解いたのだろう。
思っていた以上に色々と人材が整っていたのは予想外だった。

「あんな未熟者でも予想外の能力を見せられる……か。
あのままなら遠からず倒れる事になるだろうけど……」

少年は腰を上げて湖面に浮かぶ氷に目を向けた。
そこには先程の怪人が氷に閉じ込められて浮いている。

あの不死の魔法使いが使った魔法は、話に聞く広域殲滅呪文の『おわるせかい』。
つまり、その魔法に巻き込まれた彼は心身共に氷となっている事だろう。

「……君が何者だったかは知らないけど……助けに来て味方に殺されるなんてついてないね……」

うねっていた怒りも、その最期があんな形であれば失せるという

もの。

何故か解らないが、ほんの僅かだけ少年の表情に陰がさすが、彼は軽く溜め息を吐いて表情ごと気持ちを切り替え、未だ騒いでいる未熟（ネギ）な魔法使い達に背を向けて闇に向って去っていった。

恰も光に向って行く少年らと立場が違う事を示すかのように――

言うまでも無いが、

「し、死ぬかと思った……」

「「「「「い、生きてる～っ！！？？」」」」」

寒さで歯を鳴らしつつも、どっこい彼は生きている。

これから始まる伝説と共に――

後編（後書き）

何とか投稿した分のデータを発見し、変換しております。
並行して他のも撃ってますが、モノによっては月詠になったり壱岐になったりでｗｗ　そしてヒロインもコロコロとｗｗ

まぁ、何とか修学旅行編のエピローグまできました。
思ったより時間がかかってしまいました。スミマセン。

てな訳で、続きは見てのお帰りです。
ではでは～

本編

乳白色にぼやけているまどろみの中――
彼は波間に漂うような感触に浸りきっていた。

夢の中である事は解りきっている。
この地に来てからこっち、眠っている時にずっと感じていた感触なのだから。

初めの頃は“あの”肉ダルマを嫌悪し尽くしていたのであるが、最近はようやく（激しく嬉しくないが）慣れてきており、『やは、少年』等と唐突に現れても（然程）嫌悪したりしなくなっている。

――しかし、今夜はアイツではないようだ。

何せ目の前にいるのは……

『お久しぶり。元気だったみたいね』

「おかげさんでまぁ……なんとかな」

愛すべき蛍の化生だった――

自分の中にいる彼女と久しぶりにラインが繋がっているのが解る。
霊的な素子（そし）との直接会話と言って良いかもしれない。

無論、意味合いでは大きく違うだろうが、彼らにとっての感覚ではそんなものだ。

それに、今の彼が“在る”お陰で彼女の霊基データの量が激増している。

だから以前よりずっと鮮明な姿で二人して向かい合えていた。

『ん～……でも、何時もより生彩を欠いているみたいね。
ちょっと落ち込み気味ってとこかしら？
お前の事だから、子供相手に本気で手を上げかかったのが理由かな？』

だから隠し切れているはずである彼の機微も見つけられやすい。

尤も、彼女は元から目ざといのだが。

「いきなりバレてらっしゃる！？
そんな解り易いかな～～？」

ややおどけてそう返すが、『お前の事だからね』と小さく微笑ま

れて赤面してしまう。
全く……だから彼女には敵わない。

『でもまぁ、結局はおバカを通す事ができみたいだしね。お前らしくて安心したわ』

「お前までそんなコト言う！？
ヘイトか？！　やっぱヘイトなのか！？」

微笑ではあるがやはりどこか許し難いのだろう。何せ最後はアレだったのだから。
当然、彼女の額にはバッテンが浮かんでたりする。

そんな嫌味を織り交ぜた遠まわしの言葉虐めに彼は泣きながら悶えていた。

それでいて二人ともどこか嬉しそうのは、非道を行わずバカを通せた事、そして互いと再会できたからだろう。

彼は彼女との会話を素直に楽しみ、彼女は懐かしい身悶えを見て苦笑する。

そんな普通の接し方ができるのも彼女故。
どこまでも彼女の方が上なのは相変わらずのようだ。

『……安心したわ。やっぱりお前はそうでなくちゃね』

「ま。バカやってどつかれてる方が慣れてるしな」

嫌な慣れもあったもんだ。

ただ、ちょっとだけ彼は勘違いしてたりする。

「違うわよ。バカ」

そんなところも好きなのだが、いい加減もっと自分に自信を持ってもらいたいものだ。

自分は痛みに弱いヘタレのくせに、他人の痛みにはそれ以上に敏感で、何だかんだ言って放って置けない。

女の子を怯えさせたり、男の子一人に行かせたりした事をずっと気にしていたりする。

甘っちょろくて馬鹿馬鹿しくて呆れ返りたくもなるが、彼女はそれ以上にそんな彼がいとおしいのだ。

『……ま、素人ウケはしないでしょうけどね』

「???」

そんな彼女の微笑みの意味を知る由もなく、クエスチョンマーク

を量産している彼。
その様子が懐かしくて微笑ましい。だから『何でもな～い』と誤魔化した。

理由は当然、言ってあげない。
言うとすれば、肉親として再会してからだ。

悪戯っぽく微笑む彼女の真意が解らず、彼も首を傾げるばかり。
多少は女心を理解できるようになってはいるが、それでもやはり彼女はそんなに浅くはない。

やはり男にとっての女は永遠の謎なのだろう。彼も苦笑で返す事が精一杯。

『まぁ、いいわ。
お前にも会えたし、確認できたから良しとしましょう』

「何だか知らないが助かるよ」

そう言ってまた笑顔を交わす。

やはりこれが良い。

彼女と悲しみの涙を交わして別れるなんて一生一度で結構だ。

「会えた事は俺も嬉しいよ。
で？　何の確認だったんだ？　オレはやっぱバカだってことか

？」

『うん。それもあったんだけど』

「……」

否定はしてくれへんのか！？

言われ慣れている事であるし、自覚もしてはいるのだが、こう真正面から同意されるとやっぱりちょっと胸が痛いかも。

『だって気になってたんだもん。あの二人』

「二人？」

『そ。カエデちゃんとクーちゃん』

「ああ……」

幾ら感謝しても感謝しきれない。

ずっとずっと心から心配してくれて、必死に訴え続けてくれていた二人。

何とかギリギリで楓の声が心に届いたものの、彼女がいなければ自分は何をしてしまっただろう。

そう考えると気が重くなってしまうと共に、彼女に対しての感謝

の念もまた強くなる。

「うん……いい娘だぞ？　すごくいい娘だ。……ちょっと……ううん、かなり困ったちゃんでもあるんやけど……」

ポロリと漏れるのは本音だろうか？

何とゆーか、二人の色香に惑わされかかっているのだからしょーがない事かもしれない。

『うん。そーよね。ウンウン。いいコなのよね』

「ア、アノ……るしおらサン……？」

何を思い出したか知らないが、イキナリ彼女の額に十字架型をした血管が浮かび、そのおどろおどろしさに彼もビビリが入る。

だが、直にそれは消え、ミョーにマネキンっぽい笑顔を彼に向けてきた。

『でも安心したわ。あの二人だったら許してあげられるし』

「え、えと……何をでございましょうか？」

やっぱ笑顔はまだ怖いままなので彼は丁寧口調となってしまっている。

そんな彼に、彼女は作り物めいた満面の笑顔でこう言った。

『だって、あの二人のどっちかなんでしょ？　私を産んでくれる人って』

ぶふぅ――――っ！！！

盛大にナニかを噴出してしまう。

突っ伏して地面（？）を引っ掻き、生まれたての小鹿宜しく蹲ったままぷるぷる震えている。

その立ち直りの遅さ故に彼女の持つ疑念が信憑性を増し、何だか

怒りも更に高まって行く。

「ア……アホか――っ！！

言うに事欠いてなんて事言いやがんだ――っっ！！」

涙をダクダク流しながら本気で怒ってらっしゃる彼。

だが、そんな彼に対し、彼女は一歩引かない。

つーか、その程度では嫉妬は揺るがない。

『は？　今更誤魔化すわけ？

何時も引っ付かれてドキドキしてたのは何方様？　キスされて昇天してたのはだぁれ？』

私ですらあんなディープなのしてくれたコトないのにぃ～～っっと、お怒りである。

「え、冤罪じゃあぁっ！！　オレはロリちゃうど！！」

『ナニ言ってんのよ性犯罪者！！　スーパーウルトラセクシャルヒーローのくせに！！』

「何ゆえライジング斬？！　しかも犯罪ヒーロー気味！！

異議あり！！　弁護士を要求する！！」

彼とて必死だった。

自分はロリ否定というジャスティスを掲げているし、何より故人とはいえ彼女からロリコン扱いされればそれは痛すぎる。

しかし彼女のテンションは高く、彼の言い訳など届いてくれない。

『おまけにナニ？
ちゅーがくせーだというのに、あのサイズとスタイルの良さ。
私に対するあてつけなわけ？』

「いやマテ！！　お前、それ八つ当たりじゃ……」

ヘイト？！　私に対するヘイトなのね！？　とテンションが上がっている彼女の耳にはそんな彼の言葉は届いてくれない。

というか、流石に二人してよく似てらっしゃる。
ひょっとしたら彼に混ざっている弊害かもしれない。

『私を好きになってくれたのも、胸が無いお陰だとでも！？
このロリータコンプレックス！！』

「わぁ！？　正式名称での侮蔑は痛過ぎっ！！
だからそれはお前の誤か……」

『じゃあ、その娘らはナニ？』

「えっ？」

飛び起きる。と良く言うが正にその見本。
ぱちんっと板バネが爆ぜるようにナニかから逃れようとするかのように布団から飛び起きる。

焦りまくって周囲を見回し、いる筈も無い超敵（強敵を超えている）の姿を探すがやはりその影も無い。
水から上がって直の様にだらだらと大汗を掻いていた彼も、“奴”の気配が無い事をやっと理解したのだろう、やっと呼吸を再開して荒く酸素を求め出す。

「……あ？　え？　ゆ、夢……？」

なんつーか恐ろしい……？　というかナニかに追い詰められてたような気がしてまだ息が荒らんだまま。

おまけに夢に見た“奴”というのが誰なのか思い出せないとキている。

「な、何だ？　このプレッシャーは……」

訳の解らぬ汗で全身がぐっしょりと濡れていてちょっと気持ち悪かったりもするのだが、じっとしてると落ち着いてくるというもの。

障子を通してくる日差しは温かな春のそれ。

鳥のさえずりも聞こえるし、伝わってくる屋敷の雰囲気もどこか柔らかい。

暑い訳でもないのに汗だくというのもナニであるが、そんな屋敷の穏やかな空気に徐々にではあるが現実を取り戻してはきている。

それに何というか……夢見は恐怖っポかったのだが実のところ気分は清々しい。

「何だか、懐かしい誰かと会ってたよーな気もするんだが……」

全然思い出せない。

まぁ、気分が良いからどうでもいいのだけど。

「……て、あれ？　ここは……」

やっと脳ミソが覚醒したのか、再度部屋の中を見回す。

十畳ほどの広さのある畳敷きの和室。

客間なのか無駄なものは何一つなく、後の壁際に朱色の衣紋掛けが一つあるくらい。

そしてそれには男物の服がかけられている。

ふと目を落すと自分は浴衣を着ており、白い敷き布のかけられたふかふかの布団の上で眠っていたようだ。

見ただけでは旅館の一室で眠っていただけと思うだろう。

「ここ、ドコなんだ？」

何だか記憶喪失者みたいなセリフを吐き、再度部屋を見回した。

と言っても調度品らしいものが置かれていない部屋で、欄間が見事な浮かし彫りであるということ以上のものが見られない。

掛け布団も上質の羽根布団らしくふわふわで軽く、肌触りも良くて体を包んでくれている。
ちくしょう、金の在るトコには在るんやなぁ……等とひがんでみたり。

他は……特にない。
布団の中に女の子がいるだけで後は別に……

「は？」

一度天を仰ぎ、素数を数える。
11，13，17，19……次は深呼吸だ深呼吸。
スーハー、スーハーよしOK。

目を瞑り、邪念を追い出し、現実逃避をやめてもう一度眼を……

「ううぅ…ん……老師ぃ……」

「横島殿ぉ……」

降ろす前に現実に先制攻撃を受けた。

ざぐっ　ぶしゅうっ!!

精神に痛恨の一撃。
びしょうじょのねごとこうげき!!　こうかはばつぐんだ!!
おまけに地獄の連続攻撃である。
何と敵は二人いた。

「な……ナニがあった?!　夕べ何が起こったんや!!??」

しかし全然記憶は無い。
氷漬け状態から脱出を果たして以降の記憶が全く無いのだ。

「それとも何か!?　オレはついに自分を止められなかったというのか!?」

おおっ、神よっ！！　どーして私にこれほどの試練を与えやがりますか！！？？

等と罰当たり&何様のつもり？　なセリフをぶっこいてなく男。見苦しいというか、往生際が悪いというか。

まぁ、寝乱れた浴衣姿というステキ過ぎる格好の美少女二人に抱き付かれた目覚めという、どこの御大尽！？　な朝を迎えれば、彼でなくともテンパるだろう。

「と、とにかく、二人を起こして話聞かな……

ひょっとして……せ、責任とらされるんかな……？」

既にテンパりまくっているのだろう。手を出した事が前提のようだ。

ともあれ状況を打開すべく、人の気も知らんでミョーに安らかに眠り続けている二人に手を伸ばした。

とその時――

「二人とも起きて！！　大変だよ！！

実は旅館に飛ばした身代わりが……」

「あ……」

「あ……」

髪をアップにまとめた少女、和美が飛び込んで来てくださった。

「えと……」

流石の横島も状況の悪さに凍りつき、次の行動がとれない。

感覚的には永劫とも言える一瞬が二人の間に流れていたが、どこかから聞こえてくる人の声によって和美の方が先に再起動を果たした。

――そう。落ち着いて見てみれば別に不思議な光景でないのだ。

男がいて女がいる。

やや年齢的にどーとか、倫理的にどーよ？　という問題も無きにしも非ずであるが、双方に強い好意があるのなら一室に篭れば当然の成り行きだ。

ただ、３（ピー）というだけである。問題は無い。

ここは一つ、同級生として目を瞑ってやるのが人情というものだろう。ウン。

そう結論に達した彼女は、掴んだ障子の桟を元のように引き、

「ごゆっくり」

と、出会い茶屋の女中さんが如く何事も無かったかのようにピシャリと閉めた。

「え……ちょっ、ま、それ誤解ぃいいっっ!!」

余りに自然な動きであったが為、流石の横島も止められなかったが、流石にその痛すぎる誤解に現世復帰を果たして、真実を告げんと後を追おうとする。

しかし世は無情だ。

「ぴぃいいいっっ!!」

どかんっっ

「のわぁっ!!」

障子を開けた瞬間、白い塊……外で待っていたのだろう　かのこ

が突撃を仕掛けてきたのである。

その気持ちはありがたいだろうが、横島は寝起き。エラいバランスが悪くてそのままひっくり返ってしまう。

「ぴぃ、ぴぃぴぃぴぃ！」

「あ、ああ、悪かった。
ナニが何だかサッパリ解らんが心配掛けてすまなんだ」

うつ伏せに倒れた彼の背に乗っかってぴぃぴぃなく自分の使い魔に、ひたすら謝る主。

姿形がハッキリと見える精霊という上位存在を使い魔にしているというのに、何とも様にならない光景であろうか。

それでも、思いっきり懐いているのだけはハッキリと解る。横島の背に顔をすりすりして鳴いているのだから。

それを感じているからこそ、横島も苦笑するだけで怒れないのであるが……

むにゅ　ふに

この……掌に感じるやーらかくも芯のあるでざわりは何ザマス？

「ひゃっ!?　あ……老師?」

「ふわぁっ!?　よ、横島殿?」

見事にお約束。

前につんのめった拍子に手をつき、見事に二人の胸を鷲掴みにしちゃってたのである。

「ご……誤解やっ!!　ちゃうっ、ちゃうんじゃぁ――っ!!!」

何だか必死な叫びに、二人して問い詰める事も忘れてしまう。

だがその手はその場から離れはしない。

身体を起こそうにも　かのこが圧し掛かっている事と本能が邪魔していて動けやしない。

「ち、ちゃうんやっ!!

し、鎮まれ、鎮まれオレのお手て!!」

等と本能に逆らおうと奮闘するのだが、ジャスティスがお暇をもらってっちゃっているので口ばっかである。

その叫びに混じり、離れた場所からは、

「ダメですよ刹那さん！
僕だって　みんなに正体バラされたらオコジョにされちゃうんですから――っ」

という子供の声まで響いてくる。

普段は静かな本山は妙に騒がしい朝を迎えていた。

だが、昨晩のような石の静寂に比べれば何という事も無い。

ここで今騒げるという事は、皆が助かったという証であるのだから。

だから仮眠に入ろうとしていた詠春も苦笑するだけに止まり、巫女達も微笑ましく子供たちを見守っている。

事件は終わり、穏やかな朝が訪れたのだから。

「冤罪じゃあ――っ！！　オレに対する罠やぁ――っ！！」

ただ、泣いて自己弁護を続けていた横島の手が、二人の胸から離れない理由をド否定したままに――

バカ……

この二人、大事にしなさいよ？

ホント……いい娘なんだから……

それじゃ、またね……ヨコシマ……

After

■十三時間目：Ｔｈｅ　でい

「いや――

またまた大変だったねー」

『全くだぜ』

紆余曲折はあったものの、少女らは何とか宿泊先に駆け戻り、自分らの式が起こしていた騒動を静めていた。

とは言うものの、単にテキトーな理由を貼り付けただけ。

夕映がウッカリ水筒に酌んでしまった縁結びの水……例の酒がまだ残っていて、それを間違えて口にした少女らが悪酔いをしてしまったとか何とか言って誤魔化したのだ。

夕映も、

「まぁ、いいです。
どーせ説明できる話ではないですから」

と快く了承してくれていたし。

問題は……

『姐さん達の分身がストリップを始めてた時にはどうしようかと思ったけどな』

「そだね……」

彼女らの分身が起こしたストリップ事件である。

どういった流れでそーゆーコトをおっ始めたか全く持ってナゾなのであるが、詠春が手配してくれた分身のほぼ全員がロビーでストリップかましていたのである。

幸いにして級友らの計らいで新田らにはバレていなかったのであるが、それでも相当の被害が出てたりする。主に当事者の精神的な。

「ま、時が解決するでしょうね。後から思い出せば結構楽しい笑い話さ」

『そだな。御山と違って人的被害も出てねーし』

それに、いい絵も撮れたしね……

ククク……と、妙な笑みを浮かべる一人と一匹。

「朝倉さーん
班別の記念写真、しっかりお願いねーー」

そんなアヤシゲな一人と一匹の様子が気にならないのだろうか、和美が歩いている事に気付いたしずなが声をかけてきた。

何だか邪な思考に浸っていた和美も、そんな明るい声に導かれるように笑顔を見せ、

「はいよー
わかってるって　しずな先生」

と言葉を返す。

しずなはその返事を笑顔で受け止め、班の見回りに戻っていった。

『何の話だ？』

「私には私の仕事があるのさ♪」

新聞部ならぬ報道部ではあっても、写真を扱う事に変わりは無い。
だから彼女には記念撮影をするという仕事が任されているのだ。

何気に学生という領分を飛び越えたプロ技術の所持者が多い麻帆良の学生。
お陰でこーゆーところでは業者等を雇わずに済むのだからお手軽である。

『へぇ……じゃ、イロイロなのが撮れんな』

「そ、“イロイロ”ね……」

またもククと笑い合う。碌でも無い奴らだ。

それにまだ約束の時間まで間がある。
外出時間まで撮りまくったとしても、かなりの量がイケるだろう。

和美はカモを伴い、軽い足取りで廊下を歩いていった。

この日――
ネギは彼の父の家に案内される事になっている。

今回のネギの目的。
父の情報に触れるという願いが果たされるのだ――

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊

「身体はもう大丈夫みたいですね」

「おかげさんで」

屋敷の人々に見送られつつ、二人は山を降りて行く。

衛士に手を振る詠春はジャケットを羽織ったラフな洋装で、こういったものに弱い（というか好物）の明日菜であれば大喜びだろう。

その直横を歩く横島は相変わらずのジージャンにジーンズ。赤いバンダナという出で立ち。センス云々より、何だかこれが彼の制服のようにも見えてしまうから不思議だ。

ただ、一緒にいる小鹿…かのこの所為で二人とも周囲から浮くの何の。

しかし、そんな　かのこの頭を撫でつつ穏やかな顔をして歩いている詠春を見て、誰が関西呪術協会の長だと思うだろう。

それほど威圧の無い、極普通の大人の男性。普通の穏やかさを彼は持っていた。

対する横島は面白くなさそうで、どこかぶすったれている。

その事が手伝ってか、教師に連れられているアホ学生のように見えてしまうから笑えてしまう。

「何でやねん……」

「は？」

ぶすっとしたまま横島が口を開いた。

「何で巫女さんおれへんねん……」

そう。

学生らは騒動があったから急遽宿に戻らねばならなかったが、横島は本調子でなかった。

だから御山で暫く休むことと相成った訳であるが……どういう訳か昨晩はたっぷりといた巫女さん達が一人もおらず、朝食の世話から湯浴みの案内までしてくれたのは全員男。

平安然とした陰陽師の様な衣装を身に纏った男たちだったのである。

「ああ……成る程」

その横島の不機嫌な理由にやっと気が付いた詠春は、笑顔のまま納得する。

「あのお二人から言付かってたんでよ。

横島殿に巫女さんを近付けさせたらいけない。五メートル範囲に入ったら妊娠させられるぞと」

少女らの残した余りと言えば余りな助言に、がくんっと足を滑らせてしまう横島。

が、ついでに足を滑らせた場所も余りと言えば余りに悪かった。

「あ〝あ〝ぁ〝あ〝あ〝あ〝あ〝〜〜……ゴシャッ！！」

そのまま池田屋落ち……にしては長すぎるが、石段を転がり落ち、昨晩横島が開け壊した頑強な門のヘリでバウンドし、更に下へと転がり落ちて行く。

何とダイナミックな転がり方であろうか。正にこれぞ真の奈落落ちであるとでも言いたげに。

やっと止まったのは石段のずっと下方。ほぼ麓。

そこには糸の切れたマリオネットのような有様の無残な遺体が……いや、遺体のように気を失っている横島が転がっていた。

首や手足がどっか向いてるし。でも生きてるし。

慌てて駆け寄ってぴぃぴぃ鳴いている　かのこがまるで遺体に縋る家族のようであるが。

「あ〜……ええと……何と言いますか……」

ここまで豪快なズッコケを見せられれば流石の詠春も次の言葉が思いつかなかったのだが、

「……ホント、皆を思い出させる人ですね」

何だか考えなしの脳筋剣使いとかが思い出され、何時の間にか笑みを浮かべていた。

「スクナの再封印は終了しました。貴方にもお世話になりまして……」

「やっぱ現界しきってなかったから死んでねぇのか……つーか、倒したのはあのロリっ娘やん。俺は時間稼ぎしただけっスよ」

無傷とはいかないものの、やはり何事もなく立ち上がって詠春と共に歩き出した横島であるが、何とゆーか詠春は慣れているかのように気にしていなかった。

事実、岳父（がくふ）である近衛門も木乃香にボコスカ金槌で殴られているのだし、この程度でおたついたりしたら先に述べた脳筋剣使いの友人なんてやってられない。

ぶっちゃければ、ひじょ～に不本意ながら本当に慣れてたりする。

「その時間稼ぎがありがたかったんですよ。被害は最小限になりましたしね。

……方法は兎も角」

「あ〝あ〝～　言わんといて～～っ！！」

昨夜の顛末はというと……

時間稼ぎに成功したまでは良かったのだが、霊力を使用し過ぎて何時もの煩悩暴走が起こってしまい、千草にイランことぶちかまそうとしていた横島であった。

まぁ、尋問しようとした事までは本当なのであるが、問題はその手段。

口に出すのも憚られる……とゆーか、間違いなく１８禁～２１禁サイト投稿用の内容が横島の頭に中に出来上がっていた。

言うまでも無くそんな手段以外は頭になかったので、横島は邪の化身と化していたりする。

天の采配か、千草を哀れに思った神の情けか、或いは悪魔の悪戯か、そのヨコシマなる波動と残留魔力を感じたエヴァは彼を敵だと判断してしまい、彼に正義（笑）の鉄拳を加えたという訳だ。

しかし、そこは不死身の煩悩魔人横島。完全に意識を刈り取られ

るまでには至らなかった。

エヴァは彼の生死なんぞ気にかける訳ないし、あんまりにもあんまりなスクナの様子に憐れみと苛立ちを感じてあんな魔法を放った訳であるが……

その直前に横島は千草がまだ霊的に縛られている事に気が付いた。

流石に霊力を解いたとしても回避は叶わないだろうし、助けに行く暇もないし霊力も絶対的に足りなくなっていた。

だから即座に横島は奥の手である“珠”を投げつけて千草を『護』ったのだ。

問題は、千草を護るのに珠を使用し、手持ちの全てを無くしていたという事。

お陰で“地力”でのみで命を繋がねばならなかった。

「と言うか……貴方の力は知りませんが、あの極寒地獄の中をよく無事で……」

「いや、死ぬほど寒かったっスよ？」

「寒いとかいう次元を飛び越えてたと思うのですが……」

それでも生きているのはその地力が存外な為か？　単にしぶといだけという説もあるが。

ともあれ、茶々丸の助力もあって何とか氷から助け出された横島

であったが、彼にとっては寒さよりも氷漬けで息ができなかった方が大変だったそうだ。
絶対零度の中に置かれて“寒い”と言える超存在。何と規格外の存在であろうか。

「つか、絶対零度程度で死んでたら“前”の職場で三日と生きられないっスよ」

いや、それは言い過ぎだろう。
例え彼にしてみればそうだとしても。幾ら自業自得とは言え。

セクハラで死にかけるのも日常茶飯事なら、嫉妬によって全殺し（割増し付き）にされるのも日常茶飯事。イヤ過ぎる事この上もない生き方である。

しかし事実を知らないものから言えば死闘の連続を想像させられる事だろう。
詠春にして『……どんな凄惨な戦場だったんでしょう？』と勘違いしてしまうほどに。

「ま、それは兎も角として、あの眼鏡姉ちゃんは……」

「天ヶ埼……千草の事ですか？」

「うん。その千草さん」

自分の半死半生事件なんぞ喉元過ぎた何とやらで、既に塵ほども気になっていない。
今気になっているのは、

「それとあの人狼……いや、ハーフかな？　あのバトルモンガーなガキは……」

「犬上小太郎君の事ですね」

「うん」

千草と小太郎の事であった。

何せ横島の見立てでは千草は流され、小太郎は乗せられたとなっている。
現実もさほど変わりはないのであるが、そうなると大きくカテゴリーを別けると被害者とも言えなくもない。

無論、乗せられたとはいえ悪事に加担した事は許されざる事であるが、判断力を低下させる術だって存在するのだ。
それを絶対に使用されていないと断言はできまい。

何せスクナ“程度”の鬼神。それも僅か一体だけで関東魔法協会と戦おうとしたのだ。
一般社会に大きな混乱と騒動を生むだけで侵攻もままならないし、夜の内に連絡はあちこちに飛んでいるので朝になればいろんな方面から手勢が押し寄せてくるだろう。下手をすると京都から一歩も出られない内に沈黙させられてもおかしくないのだ。

更に全責任は関西呪術協会だけが被らされる事となる。
これでは一泡吹かせるどころか一方的に責められ、単に呪術協会の立場を悪くするだけで終わってしまうだろう。

千草は前の大戦時に西洋魔法に恨みを持ったとされている。だとすると被害者遺族であるし、仮にも術師なのだからそういった威力被害やその時の状況も調べているだろう。

ならば“この程度”でどうこう出来る訳がないと理解できているはずなのである。

いや、復讐心に目がくらんでそういった理性やらを無くしていたのでは？　という見方も出来なくはないのであるが、それでもかなり矛盾が残るのだ。

一番納得できるのは、そういった意識誘導が成されていた可能性である。

だから……というか、情状酌量の余地ありという事なのか、千草もそれなりの罰で済むようだし、小太郎も然程の罰は与えられないのとの事。

詠春のその言葉に横島もホッと胸を撫で下ろしていた。

「……でもそーなってくると、やっぱ……」

「ええ……あの少年が一番臭いですね……」

あの少年――

石化魔法を使って本山の皆を石に変えた謎の少年魔法使い。

下手をすると今回の事件の真犯人、フェイト＝アーウェルンクスの事である。

詠春らの調べによれば、公式にはイスタンブールからの留学生となっていたが、これは偽造であった。

大体、何で嫌っているはずの西洋魔法使いを受け入れたのかも不明であるし、

事前調査もそうであるが、その後の調査も遅々として進まないのだ。

手の長さで知られている魔法関係者の調査力を持ってしても、未だ正体不明であり行方不明。その上、詠春からいえば因縁深過ぎる苗字を名乗っているのだ。

探れば探るだけこんな妙な点が幾らでも出てくるのだ。怪しいなんてもんじゃない。

「つーか、あの姉ちゃんが裏も取らずに“雇ってしまった”って事は……」

「ええ……“当たり”かもしれませんね」

認識がズラされて、信じさせられて雇わされた可能性が濃くなってきた――と言う事である。

「木乃香ちゃんが目的だった……っていう感じじゃなかったし……
あの鬼神が欲しかった訳でもなさそう。
ホントに一体何が目的だったんだろ？」

「さぁ…それは調査中なんですが……」

詠春にしても頭が痛い話である。
何せあのフェイトと名乗る少年の力量は凄まじいの一言だったのだ。

本山の守護結界を潜り抜け、衛士や巫女達に逃げる間も与えず石に変え、詠春自身も石化されていた。
横島の謎の力によって解呪されはしたが、彼らがいてくれなければ無様にも全ての終焉まで石像にされたまま突っ立っていた事であろう。
その御山の石化も、彼の使い魔である　かのこが角の一刺しで治してもらっているし。

方法というか、その力は強力且つ不明なのであるが、当人（当鹿？）の説明はモノが鹿語なのでサッパリ解らなかったのでどうしようもない。まぁ、皆を治療してくれたのだから文句は無いのだけど。

それに件の鹿は元は山の精霊であるらしいし、使っている符も見た目花札調。
パクティオーカードのような西洋風のモノを感じなかった事も皆が受け入れた理由なのかもしれない、というのは考えが穿ち過ぎだろうか？

ともあれ、本山の騒動は一応の収束に向っていた。

無論、課題は山積であるが。

詠春からして、

――やっぱり平和ボケしてたんですかね……

と、不甲斐無さに溜息しか出せないのだから。

男二人連れであるし、かのこは可愛いが鹿なので些(いささ)か華やかさに欠けていたが、流石に人里まで降りてくれれば麻帆良の生徒達のような修学旅行者の姿もちらほらとしてくる。

残念ながら京都奈良への修学旅行は小～中学生が圧倒的に多いので、如何に美少女が目に入ろうともストライクゾーンを離れていて然程目の保養にならない。

本山で休んでいたお陰であろうか、横島の霊力はほぼ完全に回復しているので暴走の気配はなく、よってこの光景でも何となく微笑ましく見守る事が出来ている。

無論、美少女二人の添い寝のお陰という理由は無い。絶対にだ！！！！！！

そんな横島を見、詠春は苦笑を浮かべてしまう。

『異世界の人……ですか……
見ただけでは想像もできませんね……』

彼が異世界の人間である事は、既に近衛門から聞いている。
もちろん普通に聞けば単なる与太話。信じられる話ではないし、ついにボケが……と本気で心配してしまったほど。

だが、あの高畑までも証言し、尚且つ関東魔術協会理事という立場から間違いなく彼は異世界からの客人であると念を押されれば信用せざるを得ない。

それでも半信半疑ではあったが、今目にした山門のように防護結界すら無視した挙句“逆向き”に開け放ち、瞬時に自分に掛けられた術を解き、山の精霊の集合体を使い魔として確立させ、氣と微妙に違う力を武器にして戦うところを眼にすれば流石の彼も信用する他なかった。

信用すれば信用したで色々と心配も湧き上がって来るのだが、件の岳父が、

『何というか……今一つ信用し切れんところもあるが、信頼は置けるぞい。
多分、誰かを助けようとした時の行動力はナギに勝るとも劣らんだろうの。

特にそういった場合に手段を選ぶ気を起さんところとかな』

と、想像以上に彼の事を買っている。

詠春も昨夜の一件でその理由はよく解った。

ナギとの違いは、力の差以上に力の質。
奴のような力押しではなく、ベクトルを捻じ曲げる事に長けているようなのだ。

だが、行う事は全く同じ。
となれば信頼もできようというものだ。

「？　何スか？」

自分に対して、妙に懐かしげな眼差しを向けていた事に気付いたのか、横島が不思議そうな顔をして振り返った。

「いえ……」

上手く説明できない話なので、笑って返すのみ。
ますます首を傾げる横島に、笑みも深まる。

騒動が終わった後なので、空気も軽い。

やはり脱力感は拭えぬのだろう。待ち合わせの場所に来ると、横島は近くにある石段に腰を下ろした。

「それで、今日はどのように？」

そんな彼に詠春は煙草を咥えながら問い掛ける。

横島はパタパタとポケットを漁るが、考えてみれば“この時代の自分”は煙草を吸っていないのでライターの持ち合わせは無い。

火を点けてあげる事は叶わない。そのまま詠春が火を着けるのを見てるだけ。

手持ち無沙汰となった彼は、途中で買った菓子を　かのこに食べさせる。

美味そうに煙を肺に満たす詠春がちょっと羨ましいのか、小鹿をかいぐりかいぐりして無聊を慰めていたり。

「あ～……いや、今日は楓ちゃんと古ちゃんと京都巡りっスね。護衛任務につかせてたから、そのお詫びって事で……」

折角の修学旅行っスから。

そんな事を言う横島に対し、またも苦笑が浮かんでしまう。

そういったトコは彼よりマメなんですね……と。

「それでしたら土地に明るい誰かに案内させましょうか？」

「大丈夫っスよ。
三人で無目的に歩くもまた良し。門限までに旅館に帰れりゃいいんスから」

「成る程……」

確かにそういった歩き方もまた良いものだろう。
それに、余り無粋な事をしては馬に蹴られそうであるし。

「いや、それは誤解で……」

「まぁまぁ」

ちゃうんやーっ！！　と必死に自己弁護をする横島から眼を逸らしつつ、詠春は腕時計で時間を確認した。
そろそろお嬢さん達がやって来る時間である。

「でも、本当にご一緒しませんか？
食事くらいご馳走しますよ」

彼を誘っているのは、今日これからネギを連れて行くナギの家（

正確には京都の別宅）へ向う話である。
ネギはそこに行く事を強く願っていたのだ。
だから騒動の直後ではあるが、詠春は山を降りたのである。

――決して、騒動の事後処理が面倒だったから部下に丸投げしたなんて事は無いだろう。多分。

「オゴリっつーのは魅力的なんスけどね……折角ですけどご遠慮します。
流石に大勢過ぎる気がしますし、あいつのオヤジさんの家なんでしょ？
それに邪魔をする気はないっスよ」

「そう……ですか」

「それに何より」

野郎の家に行ってナニが面白い……

ものごっつ正直すぎるセリフに、場の空気が真っ白になった。

「ぷ、くくくく……」

「あっ　ナニがおかしいんスか?!　フツーそーでしょーに!!」

「いやいや……確かにそうですね。くくくく……ははははは……」

「あ〜〜っ　笑わんといてぇ〜〜〜っ!!!」

成る程……お義父さん。
解りますよ。解りました。

貴方がそこまで信用できたのは、ここまで彼に似てるからなんですね。

穏やかな風に花弁の舞う木々の下、
詠春は泣いて身を捩る横島を前に笑い続けていた。

本当に、嬉しげに――

「ま、またくヒドイ目にあたアル……」

「そ、そうでござるな」

制服を着た凸凹コンビ。

長身の楓と、やや低めの古はゲンナリとしながら京の道を歩いていた。

いや、朝方に起こった騒動の事ではない。

アレはホントに冤罪なのだから。

というのも、横島の布団の中で朝を迎えたのは単なる医療行為なのだ。

何とか氷の中から助け出された横島であったが、言うまでも無く生きてはいるが身体は完全に冷え切っている。

まぁ、横島ならばその程度、ほっときゃ治るだろうし悪くとも風邪を引く程度。

初見から不死身さを見せつけられている楓がいるのだから、もっと冷静に対応できた筈である。

が、何だかよく解らないが楓はスッカリ冷静さを失っており、ネギ達はおろか古までもと一緒になっておたつく事しかできなかった。

そこは年長者である詠春が収拾が付かなくなっている状況に呆れ

つつも、本山に置いてある治療符を使用するか、今も心配そうにしているこの精霊（かのこ）に治してもらう事を提案しようとしたその時、

「一この場合、一般的には人肌で温めるのが一番だと聞き及んでおります」

なんて事を茶々丸が言いだしたから話がヘンになってしまった。

『『成程っ！！』』と楓と古は何の疑念も湧かずあっさり納得し、詠春と木乃香に部屋を借りるでござるよーっと、事後承諾ぶちかましつつ屋敷にすっ飛んで行ったのである。

後に残ったのは急な展開について行けていないネギと明日菜、そして刹那とただ見守る事しかできない木乃香。

長である“ハズ”の詠春と、何が何だかサッパリ解っていないエヴァ、そしてその従者の茶々丸だけであった（あと、カモね）。

てな訳で三人同じ布団で朝を迎えたわけであるが、お約束とゆーか何とゆーか朝目覚めた時にはその事をすっかり失念しており、焦りまくって横島にごっつい一撃を加えたりなんかしたものである。

それに関して問わないのがエチケットであろう。ウン。

その事を思い出すと流石に二人とも顔が真っ赤に火照り上がってしまうのだし。

まぁ、起きたら横島に胸を掴まれていればそりゃ驚きもするだろう。

と言っても後悔はしていない。
あの時には本当に焦っていたのだし、横島の体もまさしく氷の様に冷え切っていたのだから。

しかし問題はその後だった――

そのまま顔を合わせるのもなんか気恥ずかしかった二人は、体力が完全に回復していない横島をお山に残し、旅館にすっ飛んで帰ったのであるが……

「楓……」

微笑んではいても目が笑っていない真名と、

「古……」

ごっつ笑顔なのに何だか怖い超による尋問が待っていた。

「「え、えと……？」」

ロビーの端に追い詰められた二人に逃げ場はなかった。

真名にしてみれば散々苦労を背負わされているのだからそれなり以上の進展はしておいて貰わないと割に合わないし、超にしてみても親友である古の進展は是が非でも望ましい事なのである。

つーか、とっとと進展してくれないと胃が持たん。

「昨夜は横島さんを追って行ったな？　綾瀬が言ってたが、何だか礼を言われて悶えてたと？」

「え？　あ、いやそれは……」

「古。横島サンとの距離は取り戻せたようネ。前以上の絆を得たみたいで友人として胸を撫でおろしてるヨ」

「あ、そ、それは、感謝してるアルよ……」

「「で？」」

真名と超の、声の重さが増した。

「「ハ、ハイ！？」」

余りの大迫力に、追い詰められている二人は更に気押される。

「「いい加減、気が付いたか（ネ）？」」

「「は？」」

目がキリキリと釣り上がってゆく二人の表情に楓と古は怯える事しかできないが、何を問われているのやらサッパリサッパリ。

二人してポカンとする事しかできない。

真名達からすれば殺意が湧くような返答であるが、バカレンジャー相手にこの問い方は間違いだナと理解を見せ、深呼吸してもう一度問う。

「昨晩、横島さんと共闘してたよな？」

「あ、ああ、そうでござるよ」

「その時、散々心配させられたとか……心からハラハラしたネ？」

「う？　え、あ……そ、そうアルが……」

まだ解っていなさそーであるが、流石に二人の心にも進展っポイものが感じられる為、真名も“多少”は落ち着けている。

だからといって、イラつきが解消されたわけではないのだが。

「「で、」」

「「ひ、ひゃい！！」」

「「そんな彼を見て二人はどう思った（カナ）？」」

「「は？」」

質問の意味が解らない。

というか、意図が解らない。

しかし考えてみれば真名は学校の裏に関わっていて、それなり以上の調査を行ってもいる女であるし、超は超で突拍子も無いくらい多方向に手を伸ばしまくって研究をしている麻帆良の頭脳とまで言われている大天才だ。何気に“裏”まで知ってるし。

だったら横島という存在がイロンナ意味で気になるのかもしれない。

確かに、昨夜の活躍……というか奇行は想像の斜め上だったし。

何だかその意図を右斜め上くらいに履き違えている気がしないでもないが、一応の納得がつくと二人は顔をを見合わせて小さく頷き、真名たちの目を見ながらこう言った。

「「気合の入ったドスケベだった（アル）でござる」」

直後、真名達の膨れ上がった殺気から逃走するのに札の力まで使わねばならなかったという――

「イヤハヤ……あの二人、ナニをあんなに怒ってたでござろう？」

「不明アル。アノ日だたアルか？」

「さて……二人の周期まで存ぜぬが……」

見知らぬ地ではあるが、楓が道を覚えているので迷ったりせずに道を進む事ができていた。

しかし二人してがっくりと肩を落とし、その足取りもぽてぽてとしていて疲労が見える。

まぁ、夕べから続いて朝までドタバタ。
何だか疲労が抜けきらないのもしょうがないだろう。

「横島殿を見てどう思った……で、ござるか……」

「ヘンな質問だたアルな」

「そうでござるなぁ……」

どこからか歯軋りでも聞こえてきそうである。

「確かに暴走はしたでござるが、それは彼奴らが木乃香を企みに使用せんと誘拐したが為。
非は向こうにあるでござるし……」

「エヴァが魔法使いという事は知らなかたアルが……
敵であたにも関わらずその魔法からあのメガネ女護ってたみたいアルな」

その言葉に、楓の口元に笑みが戻った。

「横島殿らしいでござるな」

「そうアルね」

そして古の口元にも。

笑顔と共に元気も少しは戻ってきた。

だから足取りも軽くなり、スピードもついてくる。

「流石は拙者の横島殿でござるな」

「ウン。私の老師らしいアル」

何というか……真名達の耳が無ければするりとこんな言葉すら出てきたりする。

おまけに二人して気付いていないようなので、かなり自然に出た言葉っポイ。

極普通にそんな事を思っているのだろう。

ただ、無自覚なだけで。

結局は変化無しかぁ――っ！！？？

なんて真名の幻聴が聞こえたり聞こえなかったり……

兎も角、足取りが軽くなった事で、鼻歌なんぞ歌いつつ約束の場所へと向う二人。

旅館を出るのはナゾの事件によって遅くなったが、ペースが速くなったので結局は時間ぴったり。結果オーライと言えよう。

「あ、老師」

「ふむ。長殿も御一緒してるでござるな」

目ざとく見つけた古の指の先。

二人の会話の中心にいた横島は相変わらずだ。
詠春に対して見事すぎる土下座をかましたり、泣きながら怒ったりしている。
その横で真似をしているのだろう、かのこがぺたんと伏せているのが何とも微笑ましい。

そんな様子に苦笑し、二人は手を振って駆け出した。

「老師ーっ！！」

「お待たせでござる」

その声に気付いた横島はこちらに顔を向け、手を振って二人に答えた。

こちらに向けてくれるその顔はやはり穏やかな笑顔。
何時もの彼でいてくれている証だ。

楓は昨夜のそれを思い出し、顔を熱くしてしまう事を防ぐ事ができなかった。

「二人とも元気やな～」

「はっはっはっ　これが若さでござるよ」

「そーゆー老師も元気そうアルな」

「巫女さんとお話できてりゃもっと元気だったんだがな……」

元気に駆けて来た二人に何時もの口調で話し掛ける横島。
直に出たのは恨めしげなセリフであったが、二人には目を逸らされ口笛なんて吹いて誤魔化される。

こーなるとどー言っても無駄なのは“向こう”で思い知っている。
チクショウ、コイツらがじょしこーせーだったらひぃひぃ言わしたるのに……と肩を震わせてみたり。

ちょっと涙声が混ざってる男もいるが、会話そのものは実に和やかで楽しそう。
そんな仲良さげな三人の話に割り込むのは無粋だと解ってはいるのだが、

「それじゃあ皆さん。京都の楽しんでいってください」

詠春は丁度良いキリだと別れを口にした。

「あ、ハイ。お世話になりました。
報告書、ちゃんとジジ……もとい、学園長に渡しておきます。
それと……」

「はい。その件もお引き受けいたします。ちゃんと伝えておきますから」

「感謝します」

何とも奇妙な光景であるが、意外なほど慇懃に頭を下げて礼を言っている横島。
彼が手にしている封筒が報告書だということは会話から解るものの、丁寧な礼の意味は解らない。

何アル？　と古が問い掛けるが、横島も個人的な頼み事だよとしか言ってくれない。

「まさか女の子を紹介してとかじゃないでござろうな……」

等とものごっつい目で楓が睨みつければ、古も忽ち眼つきが鋭くなる。
古は元々猫っポイ目をしてるので虎の様になってごっつ怖い。

「大丈夫です。横島君に頼まれたのはそういった手合いの話じゃありませんよ。多分」

「多分ってナニ！？　フォローはもっとキチンとして！！」

ほほぅ……と更に鋭くなって行く視線にビビリつつ、そう言って訂正を求めるが詠春は笑うだけで何もしてくれない。

楓と古は、直様横島の襟首掴かみ、尋問とゆーか拷問っぽい問答をおっ始めようとする。

チョークチョークと半泣きの横島であるが、それで止めてくれる二人ではないのだ。

「横島君」

「ぐ、ぐぇえええ……ふぁ…は、はいっ！！」

良いタイミングで詠春が割り込みを掛けてくれなければちょっとだけまた河原を覗いてしまっただろう。

話し掛けられた瞬間、楓と古が手を放したため難を逃れて一安心。

「これだけ君を思ってくれる二人を心配させた君は、その事を決して忘れてはいけません」

だが、意外なほど詠春は厳しい言葉を横島に向けていた。

穏やかだった表情も、緊迫とまでは行かないが引き締まって厳しいものとなっている。

それだけ横島の事を心配してくれているのかもしれない。

「お、長殿」

「え、えと……」

楓と古はそんな言葉に照れが現れ口に出す言葉が見つからない。

かのこも視線を詠春とご主人様の間を行ったり来たりさせている。

その表情は二人と一頭には見えていないが、彼は俯く事もなく真っ直ぐ詠春に顔を向けて言葉を受けていた。

「確かに君自身が仰るように、君は未熟です。

感情に流され、戦いに集中しきれていなかった。

それでは貴方だけでなく、君の周りの人たち……このお二人にも被害が出てもおかしくありませんでした」

「それは……」

と楓らが横島を庇おうとするが、彼は顔も向けずに手だけで彼女らを制する。

彼自身かなり後悔している事柄なのだ。

事実、刹那はおろかズブの素人である明日菜が戦っていた事すら気付けていなかった。

今も詠春に指摘されて初めて気が付き、散々後悔したものである。

だから忘れぬ為にも、心に刻む為にもこういった苦言は実にありがたい。

「……そんな自分の弱さを……

越えねばならない弱さを受け止めている貴方に免じ、先程の言葉通り貴方の希望をお受けいたします。

この私……近衛詠春の名において確と伝えておきましょう」

言葉の意味が解らぬ二人は首を傾げるのみ。

当の横島は、そんな彼の厳しくも優しい言葉に笑顔を向け、

「ありがとう……ございます」

真摯な声で礼を言い、頭を下げた。

「でもね……」

「はい？」

「一人の人間として、
近衛木乃香の父親として、
あの娘の為にあそこまで必死になり、あそこまで怒ってくださった貴方には心から感謝しています。
本当に、ありがとうございました――」

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊

詠春と別れ、三人と一頭で坂を降りて歩き出す。

これといって目的地は無いのだが、何せ二人を連れている横島は無駄知識だけは夕映に勝るとも劣らないし、無駄に体験が多いため話題には事欠かない。退屈する暇も無いくらい。

「うん二人の行きたいところは解った。
ふ……安心しろ。このオレの無駄知識をもってすれば今日にもバスガイドに転職可能だ」

「つか、男のバスガイドなんかウケないと思うアルよ？」

「何だとーっ！？　女装しろとでも言うのか！？」

「言てないアル！！　それともムリヤリさせてほしいアルか！？」

「勘弁してください」

「というか、無駄な知識だから無駄知識というのでござらぬか？」

「……生まれてきてスンマセン」

……どちらかというと横島を虐めて楽しんでいるだけという気もする。

詠春との会話で何だか妙にぎこちなくなったが、そこは横島忠夫。そういった機微には聡過ぎると言って良い彼である。身体を張った

バカをやり、あっという間に空気を元に戻していた。

だから当然、彼女らも本気で虐めているわけではないし、横島とてそんな事は理解している。

最悪の場合は、今日こんな笑い話をかましつつ歩く事等できなかったのだ。だからバカでもやってさっさと空気を軽くし旅行の残りを楽しまねば勿体無い。

「シネマ村は昨日も行ったけど、また今日も行くんか？」

「拙者は行ってないでござるから」

「私は着物着てみたいアルな。
かえではやぱり忍者姿アルか？」

「忍者装束で街を歩けと？　それは忍んでないでござるよ」

「「アンタが言うっ！？」」

何時しかさっきの様に横島の腕を取り、三人肩を並べて歩いている。

そしてその足に　かのこが跳ねるように纏わり付いていて、まるで仲の良い家族の態だ。

無意識に心を許し合っているかもしれない。

極自然にそう見えてしまうのだから。

実際、横島も照れもせずそれを極自然に受けていた。

まぁ、幾らロリちゃうんやーっ！！　等と戯言（戯言ちゃうわーっ！！！）ホザいていても、腕を組むくらいは何てことも無い。

“向こう”でもず～～っと自称弟子と腕を組んで（組まされて）いたし。

胸を押し付けられでもしない限り平気である。押し付けられたらどうなるか知らないが。

それでも嬉しいのだろう。古は腕を取ったまま横島を見上げ、

「それで、何をこのかのパパさんに頼んだアル？」

と笑顔で問い掛けた。

横島はう～ん軽く唸りつつ空を見上げ、

「いや……そろそろオレも修行しようかと思ってな。
今回の件でかな～り思い知ったし」

と、意外過ぎる言葉を口にした。

古は熱でも出たカ！？　と驚きを見せていたが、楓は何となく理解している。

力の使い方を間違えかかったのだ。
二度と間違えさせない為にも、二度とあんな顔をさせない為にも彼のその思いつきは賛成である。

まぁ、“自発的”というのが意外すぎるだけで……

「ひょっとして……その御仁は妙齢な美女とかではござらぬか……？」

ぎちっと万力のような力で腕を掴まれた上、貫くような殺気を浴びせられて一瞬心臓が止まる。

「ほほう……そうアルか？　老師……」

何故か古の手にも力が満ち満ち溢れ、スーパーな握力で腕がつかまれてしまう。
なんか腕がとっとと白くなってるし。

「んぎょぃぃぃ……っっ！！
ち、ちゃうから……ちゃうってば！！　離して～！！」

「本当でござるな偽りならば……」

「ホンマやて！！　嘘ちゃうわーっ！！！！！！」

何とか腕を離してもらうが時既に遅し。両の二の腕は二人に握り締められて紫＋真っ白になっていた。

流石にやり過ぎた事は理解できるだろう。二人して頭を下げている。

「す、すまないアル……」

「……申し訳ござらん」

「い、いや、ええって……何か知らんけど怒りを静めてくれたら……」

フーフーと息をかけるがそれで回復するわけも無く両腕はだらんと垂れて痺れたまま。

ぺろぺろと　かのこが舐めるがこの姿のままならヒーリングにはならないらしい。心の癒しにはなっているけど。

そんな腕を庇うように二人がまた腕を組んでくるが、流石に横島は緊張を隠せなくなっていて物悲しい。

それても二人の機嫌が直ってるのなら構わないようだが。

気を取り直して歩き出す三人と一頭。

まぁ、今日も自由行動なので然程時間を気にする事もなくブラつ

く事が出来るのは幸いだ。

「そういや、楓ちゃん。オレの財布返してくんない？」

「何に使うでござる？」

そう横島が言うと、意外なほどあっさり懐からサイフを取り出して横島の手に乗せた。

何故彼女が持っているのかというと、彼が不埒な行動を取らないよう財布を握っていたからだ。

自分の金であるのに何故このような言われ方をしなければならないのかサッパリであるが、財布の紐を握られ慣れているかのように気にもしていないのは流石と言おうか……

「ん。いや、どーせ今日はおごるつもりだから、幾らあんのか確認するだけ」

「は？　いや、流石に拙者らは自分の分くらい出すでござるよ」

「ウン。

そう言ってもらえるのは嬉しいアルが、裏に関わってからは多少バイト代みたいなものが入るようになたし」

だが、横島は笑顔で手を振って二人のありがたい言葉を塞いだ。

「いいって。
デートん時は男が払うもんだ。こーゆー時に遠慮すんなって」

とんでもない言葉と笑顔でもって。

「ぐ……っ」
「…っ」

瞬時に二人の顔が真っ赤に染まり、言葉が詰まる。

そんな二人に気が付かないのか、横島は返してもらった財布を確認し、『ああこれだったら結構ぶらぶら出来るし、飯もそこそこなのおごれるな』と安心していた。
何せ使わせてもらっていなかったのだから大半が残っている。帰りの足代と用務員仲間であるオバちゃんズへのお土産の分を差っ引いても結構残るではないか。

嗚呼、今の職場万歳……等と感動してみたり。
前の職場が賃金に問題あり過ぎただけだという説もあるが。

兎も角、懐の温かさに満足し、横島は二人を促した。

「さ、行こか。時間もったいないしな」

「え？　あ、う、うん、そう……アルな」

「し、承知したでござる」

目の前の問題は解決したものの、裏で蠢いていた問題は何も解決していないと思う。

だけど迷惑をかけてしまった二人に、頑張ってくれた二人にこれくらいのサービスをするのは男として当然の事。そう横島は思っている。

無論、助けてくれたお前にもだぞーと　かのこを撫でる。

また輸入モノだけどサクランボ買ってやるぞと言ってもらえ、ダブルの幸せで喜びに跳ねていた。

「ふ……平安の昔から検非違使から逃げまわり平安京を走りまくっていたオレだ。

訳の分らん街角の謂れから、漬物キャンディーといった色モノ土産までずずいっと堪能させてやろう」

トンデモ発言＋嬉しくない土産情報をもらいつつ、横島に引き摺られるように歩く二人。

足取りは決して重くないが、縺れるよ―な気がするのはなぜだろう。

不安はないのにも胸のもやもやが消えず。

苦しくないのに痺れてくる。

気持ちは半ば理解しているものの、想いそのものには気が付いていない二人。

それでも何とか調子を取り戻し、茶屋や土産店巡りを楽しむのだった。

本日何本目かの煙草をくわえつつ、詠春は娘らを待っていた。

岳父はかなり苦労しているだろうが、久しぶりの外の世界をエヴァが楽しんでいるのだから好しとしよう。何気に酷いが。

肺に溜めた白い煙を吐き出しつつ詠春は横島の言葉を思い浮かべる。

『あのガキ、何だか知らねぇけど戦闘中にオレに覚悟がどうとか、信念がどうとか言ってきてたんスよ。

フツーそんな言葉を吐くのは、押しつけがましい戦争観念持ってるやつか、

自分が悪の汚名かぶってでも闘ってれば結果的に良い方向に向かうとでも思ってるか、

あるいは正義の徒だとでも思ってるイカレたやつくらいっスよね？　神様とかは別として……

最悪、そのワケの解らない主義で何か起こすと思うんスよ。だから注意してほしいんですよ』

詠春には思い当たる存在があった。

自分がやっている事は非道であるが、結果的には平和に繋がる近道。

そう信じて暗躍し続けていた者達の事を……

もしそうだとすると性質の悪すぎるジョークだ。

しかしそうなると“あの名前”を使っていた事も納得できる。今頃行動を再開させたことに驚きを隠せないが。

火の付いているそれを再び口に咥え、吸う。

うまいと感じるようになってしまった煙でもって胸を満たして再び横島を思い浮かべる。

自己犠牲は自分勝手と変わらない。

自分が犠牲になれば……というのには、自分さえよければという事と違いはないのだ。

昔闘っていた者達は正にそれに値し、尚且つ更に性質が悪い。

「だが彼は……彼のそれは……」

犠牲のベクトルがまるで違う。

彼は馬鹿になる。持ち前のバカさ加減を曝しまくる。

でも誰も泣かしたくない。

自分を犠牲にする事で、自分の周りから大切な何かを奪う事を知っているかのよう――いや……実際に知っている。“思い知っている”のだろう。だから犠牲のベクトルをちゃんと選ぼうとしている。

そしてあえてバカをやって笑いを取る。

――どうせなら笑わせる。お腹を抱えて笑わせる。

心配してくれる女の子がいるのなら尚の事。

昨晩の事は幸いにも教訓にできた。

だから“次”は間違えないようにしたい。

真面目な顔をしてそんな事を言った彼の考え方は大いに気に入った。

そこらの馬鹿のような自己犠牲とはまるで方向が違う。

戦いの只中であたかも道化のような体を張り方をし、全てを御破算……台無しにするつもりなのだから。

だからサイアクな行動をとろうと“最悪”を選ばない。サイアク

と言われようが皆にとっての“最善”を手にするだろう。

「その手助けをしてみるのも……楽しそうですね……」

詠春の口元にまた笑みが戻った。

「あ、長さーん！！」

そんな彼の耳を少年の声がくすぐった。

可愛らしい少年魔法使い。大事な友人にして馬鹿野郎の子供。

その子供があの時の友人のように多くの少女らと共に歩いてくる。

そうか……もう戦いは次世代へと移っていたんですね……

そう再認識した彼は手を上げて笑みと共に少年を迎えた。

――明くる日。

少年少女らは麻帆良と言うホームに帰って行った。

行く時の騒がしさはなく、心地良い疲労の中でまどろみつつ。天井に小鹿を乗せて――

決意や和解……誤解やら絆などを齎し、普通の年代の少女らより思い出深い出来事を心に刻み、彼女らは居場所へと戻って行く。

小さな魔法使いはパートナーの少女と肩を寄せ合い戦いの後の安らぎを甘受し、

異界の霊能力者は、少女らに泣き顔が訪れなかった事を心から安堵しつつも、必要以上の出費に涙をチョチョぎらせつつ泣き寝入っている。

一時の安らぎに浸っている次代を担う者たちの大切な時。

何かを見、何かを知り、何かを得た忘れ難い旅は――このようにして終わりを告げるのだった。

――蛇足。

「超」

「何カ？」

「媚薬か催淫剤は手に入るか？」

「作る過程以外は同じものなのだがネ……ま、何とかなるヨ」

「あの馬鹿忍者に無理やりにでも飲ませて隔離したいと思う。用意できるか？」

「……考えておくヨ。こちらも同じ様な事考えてたしネ」

本編（後書き）

ちょっと時間かかってしまいました。ごめんなさい。三日づ…いえ、Ｃｒｏｉｓｓａｎｔですｗ

この流れは、元の分岐点の一つでした。
今は言えませんが、大きく話が割れます。今はまだナイショですがｗｗ
ネタとしては、オカルトとかファンタジーというより、ＳＦ…いえサイエンスファンタジーってトコでしょうか？　まぁ、エラい先なのですが。

兎も角、今回はここまで。
テスト勉強の合間に修正する私はドアホウなのでしょう。
ではまた……

前編（前書き）

注意：

今回、ネタばらしですのでややこしいです。

前編

――何時もの様に道を駆け、見慣れた街を進んでゆく。

やや薄汚れた空ではあるが、見慣れた東京の空の下。
私は時間に遅れないよう歩き慣れた歩道を駆けている。

何せあの雇い主の事、下手に遅刻すればそれを口実に減給されかねない。
ただでさえ超薄給なのに、これ以上給料を下げられたら餓死しかねないのだ。
尤も、早く彼女らの顔を見たいという欲も無い訳ではないのだが。

だがその欲故であろう。
生き死にに関わる折檻を受ける可能性が多々ある職場に足取り軽く通う事ができるのは。

だからだろう。
労働基準法といった労働者を護る法律を完全無視した職場で働き続けられるのは。

進んだ先にあるのは一見古びた洋館。
しかしてその実、雇主がある試練を受け、正式な持ち主となった世界でも数少ない自意識を持った霊的建造物。

それを象徴するかのように見ためは古めかしいが事務所としては破格の対霊措置が施されており、不審者どころかその辺の悪霊では近寄る事すら叶わない。

『――』

そのドアを開けると、何時もの様に“屋敷”が挨拶をしてくれる。考えてみれば職場に着いて真っ先にあいさつをするのはこいつなのだから、ある意味この職場で一番親しくしているのはこいつと言えるかもしれない。

そんな“同僚”に挨拶を返し、奥へ奥へと進んでゆく。

向こうから聞こえてくるのは女性達の声。

親しくしてくれる大切な女性達の声。

だから何だか頬が緩んでくるのも仕方のない事だろう。

何時ものように屋敷が到着を伝えたのだろう、自分の名を口に出す少女の声が聞こえた――

ふよふよと浮いたまま何時もの様に出迎えてくれる巫女幽霊の姿を思い、思わず唇が端から笑みに変わってゆくのが解る。

ドア前に立った私は、一度深呼吸をし、ノブに手をかけ、引き開けつつ挨拶を……

―……っっ！？　違う！！

持って行かれかかった意識を何とか引き摺り戻し、私は私を取り戻した。

私が離れた“奴”は、奴自身が想像していたように、ドアを開けた瞬間に巫女少女から笑顔の挨拶を受け、だらしなく頬を緩めている。

相手が幽霊であろうと妖怪であろうと可愛ければどうでも良いというのには驚かされもしたが……

雇い主が巻き起こすであろう騒動の中に嬉々として入って行く“奴”を見ながら、私は成る程と納得していた。

――ジジイが私にやらせるはずだ。

人間ならば……その辺の魔法使い程度では完全に奴の記憶に引きずり込まれ、再び意識を取り戻す事は叶うまい。

それほど“克明過ぎる”のだ。コイツの記憶は……

普通の人間ならば記憶というものはその人間が見知っている範囲でしか憶えていない。
当たり前であるし、それ以上を“観る”事は絶対不可能である。
確かに写真記憶という能力も存在するし、とてつもなく鮮明に記憶している人間もいないわけではない。

だが、コイツの“記憶”はそれどころの話じゃないのだ。

その辺の歩いている犬等にしても当たり前の様に食欲があって、食べているものを取り上げれば当然のように飢える。
石を拾って人にぶつければ怪我をし、ちゃんと人が出てきて騒動となる。

風に匂いがあり、日差しに熱があり、何かに触れれば感触がある。

記憶とかどうとかいうレベルではない。全てが恰も一つの世界のように存在しているのだ。

「記憶世界…とでも言えばよいか？　興味深いが……」

余り長時間いると、私ですら自意識を喰らわれかねない。
長居は禁物。
兎も角、目的の場へと急ぐとしよう。

それはコイツの二十七歳時の遭ったであろう出来事。
記憶を失う原因となった事柄の記憶だ。

本を読み飛ばすような感じに体験記憶をすっ飛ばして先へ先へと進んでゆく。
周囲では恰もビデオの早回しのように画像が進んで行き、相当興味を引くシーンも多々あったが構ってはいられない。下手に覗き込むと記憶に引っ張られるからだ。

それにしても……何度となく目にする画像には相当数の女の姿があり、そのどれもが途轍もなく克明で鮮明であるのだが、反対に男の画像はやたらいい加減なのはどういう事だろう？
おまけにその親しげな女の多くには人間らしいのが少ないときている。
まぁ、異様なほど像がはっきりとしているからこそ解った事ではあるのだが……

色々と確認したい事が多く、後ろ髪を引かれる感覚を何度も何度も振り切りつつも何とか意識を向かせないよう突き進んで行く。

やがて高校の終わりであろう頃に達したその時、

「な……っ！？」

私の身体は恐怖にも似た驚愕に硬直してしまった。

「な、何だこれは……！！？？」

――混沌。

正に混沌という表現しか思いつかない光景が広がっていたのだ。

モザイク状のタイルと言おうか、パッチワークと言おうか、記憶そのものが様々に組み変わり、様々な図柄をムリヤリ描き出している。

それでいて記憶はその先に続いており、多方向という事すら生ぬるいほどに飛び散っている。

多重人格……？　いや、多重混線記憶とでも言えばよいのか？

兎も角、どれが求める先に続いている記憶なのか全く解らない。

「何だコイツの記憶は……何だこれはっ！！？？」

他人の記憶を覗いたことは初めてではない。

くだらない記憶や、想像していたよりややこしい過去を持っていた人間も散々見てきた。

だがこれはそのどれでもない。

どれにも値しない。

誰がここまで鮮明且つ克明な記憶を持っていると言うのだ？

そして記憶が余りに鮮明であるが故に、記憶のパッチワークから観えてしまう全体像がおぞまし過ぎる。

尚且つ、記憶の先――恐らく少年期の終わりごろより先は粉々になっていて残骸しか残っていない。

辛うじて残っている道にしても“足場”に当たるところがレンガが抜けているかのようにボロボロになっていて、印象で称するならばイタリアのフォロ・ロマーノのようだ。

そしてそのレンガの穴の下には真っ黒く大きな“ナニカ”がゴソリと蠢いている。

――私はぞっとした。

この黒いものは恐らくイドだ。

しかし、ここまで表層に見えていると言うのに本能の化身となっていないのはＥｓ（エス）の伝達機能が抑制されているのか、或いはかなり意外だがコイツの超自我が存外に強いかだ。どちらにせよ理解不能なのであるが。

そして見てるだけで気がおかしくなってしまうような抽象画のような光景は記憶ではなく“記録”なのだろう。

こいつが自分を二十七歳だったと理解しているのは、この性質の悪過ぎる抽象画の様な“記録”の断片から記憶になるものを汲み出せているお陰なのだろう。

そうでなければおそらく精神的な感覚も十七歳のままだったに違いない。

しかし、私が怖気が立ったのはそんな事だけではない。

――恐るべきはコイツの精神。

何とコイツはこのモザイクタイルのような記録から、断片のままでそれらの事柄を取り出しているという事。

そしてそれらを繋ぎ合わせて鑑みる事ができているという事――

普通であればここまでイドが表層に出ているのならば理性の壁等ものの役に立つ訳はないし、矮小であるヒトの精神が持つわけが無い。いや、絶対に待たない。

コイツが発狂していない事が不思議……いや、発狂すらしていないという事が信じ難いのだ。

だというのに私の目の前には蠢きつつ調和し、調和しつつ混沌として完全に安定している。

人間として……いや、それどころか如何なる魔族であろうと魂までも弾け散るほどの怪異が私の前に広がっているのだ。

あの鮮明すぎる記憶にしてもそうであるが、少なくとも個人の力でできる事ではない。

個人の力だけで、個人の魂の地力だけでこんな状態のまま一個の存在として魂や心が維持し続けられる訳がないのだ。絶対に。

とすると、得体の知れない何かが重石となって押さえ込んでいるとしか……

一体……コイツは……

『おや？　客人かね』

ビクンッ！！　と私の身体が今度こそ恐怖に硬直した。

恐怖などという感触は長らく感じなかったものだ。

しかしその声から受けた感情は恐怖以外の何物でもなかった。

穏やかなのに圧力があり、

歓迎の意すら感じられるのに平伏しそうで……

自分という存在に絶対の自信を持っていた私ですら足が竦む想いがする。

大体何が声をかけてきたと言うのだ？

この混沌とした意識空間の中に何が“確立”し、存在していると

言うのだ？

動くなっ！！　と自分に命じても、怖いもの見たさからか体が勝手に振り返ろうとする。

見るなっ！！　と自分に念じても、やはり私の感覚はそれに意識を向けてゆく。

混沌としたモザイクタイルの記憶の上に立ち、柔らかい笑顔で自分を見つめているそれは――……

な――……

『絶対的

『還』

私……は――……

カッ！！

「か……っ

はぁ――――っっっっ！！！」

突然の閃光に彼女の意識は完全に戻って来た。

それでも心に受けたプレッシャーは尋常ではなかったらしく、切迫呼吸を行ったまま喘ぐに喘ぐ。

「エ、エヴァ殿！！」

「大丈夫アルか！？」

そんな彼女を心配したか、慌てて駆け寄る同級生二人。

彼女の片割れが彼女の意識をムリヤリ取り戻させたのである。

そんな少女らの手を乱暴に振り払い、彼女が意識を取り戻すと同時に眼を覚ました男に詰め寄ってゆく。

男がこの家に来た当初、彼に向けていた侮りの眼差しはもう無い。

「貴様……一体何者だ!?」

そこにあるのは自分に恐怖を感じさせた事に対する怒り、そして

――

「答えろ!!

横島忠夫っ!!」

――十数年ぶりに湧いた、果てしない好奇心。

「うーん……やっぱできねぇなぁ……」

今や来慣れてしまった学園の外れにある朽ちかけた教会。

最近の少年少女ではこんな場所を遊び場にする訳も無いし、ここの広域指導員は武術家かヤクザが何か勘違いして教師になったとしか思えないくらい強いので不良らしい不良もいないから“根城”にされる事も無い。

盛り付いたカッポーが逢瀬を交わすにしてもぞっとしない場所なので、普段ここに人気は全く無い。

が、そんな場所だからこそ使う人間もいる。

――この横島忠夫の様な人間がそうである。

「できないでござるか？」

「ああ……」

広げた右手を見つめ、溜め息を吐いている彼を興味深げに見つめていた楓は、椅子代わりに使っていた石壁の残骸から腰を上げ、横島の元に歩み寄って行く。

その横にペタンと座り込んでいた白小鹿…かのこも『もういいの？』と楓を見上げてからご主人様の元に駆け寄ってゆく。

危ないから離れているように言われていたのだろう。

そんな彼女らに顔を向けつつ、細く紙縒っていた霊気を戻して行くと、指先に輝く紐のようなものが見えてくる。

見ている間にそれは段々と太くなって行き、それに伴って指先から垂れ下がって行く。恰もロープのように。

「な？　このくらいの太さだったらロープみたいに使えるんだよ」

「目に見えてしまうほど霊気を収束してロープ状に……それだけでもド外れにも程があるでござるが……

それでもあの夜は蜘蛛の糸程までにして使っていたようでござ

るよ？」

「ああ。だけどさ……」

きゅうう……と霊波を絞り上げ、またも器用に紙縒らせてゆく。
見る見るうちに直径二ｃｍ程はあった霊力のロープは細くなって行くのだが、代わりにどんどん張度が増し、糸の細さを得る頃にはピンッと張り切った状態となってしまった。

「な？
細く紙縒れるって事は収束率を上げるって事なんだ。
だから紙縒る程、ピアノ線みたく張り詰めちゃって何かに巻きつけるなんてとてもとても……」

「……それでも拙者らからすれば呆れるほどド器用なのでござるが……しかし……」

ピンっと伸びた霊気の糸。

横島の指先から伸びているそれは、針金を立たせている様にも見えた。
が、針金のように撓んだりしない分、その異様さは目立つ。
指先から三メートル以上も伸びているのに張り詰めたままなのだから。

「重さがない分、動かしやすいけど……使い辛いなぁ……」

何せモノが霊気なのでどう動かしても風を切る音すらしない。そして彼の言うように重さも無いので、指先を動かすだけでとんでもないリーチを持って振り回す事もできるのだが……

顔を顰めつつちょいと指を動かしてみる。すると伸ばしていた糸の先が石垣に触れ、抵抗なくそれに滑り込んでしまう。そしてカミソリで豆腐を切るようにあっさりとバラバラにしてしまった。

それを目にし、楓は冷や汗を流してしまう。

何せ仕組みで言えば霊波刀を細く紙縒らせたシロモノだ。その切断力は尋常ではないのである。

「う、うーむ……

氣を細く紙縒る事はできるでござるが、それに集中し過ぎて“切る能力”を鈍化できない……と」

「うん……

おまけに細くする事に集中してるから今見せたみたいに弾力がねぇし、普通の霊波刀みたく手加減する事もできねぇんだ」

それに細くする事に集中しなければならない所為か使用している横島本人の眼にも糸がよく見えず、尚且つ収束しまくっているので切断力だけが激増しているのだ。これは致命的である。

確かにこのまま紙縒らせ続けて蜘蛛の糸程度まで細めれば、貫かれてもそれと感じられないくらい素晴らしい暗器となろう。指先をちょいと動かすだけで対象を真っ二つにできる程の。

だが、何と言うか……その技は暗殺やテロを行うには勝手が良いかもしれないが、切断力が特化しただけなので普通の“仕事”には向かないのだ。というか使い辛い。

「という事はやはり……」

「……今のオレじゃあ、あの時みたく霊糸で“からめ捕る”なんて事はできねぇってコト。

ヤレヤレ……」

仮に『巻』と“珠”に文字を込めて力を使えば巻き付ける事もできるだろうが、その代わり対象を釣り糸バラしのように刻んでしまうだろう。

それを防ぐ為には『止』等の文字を込めねばならないし、相手が動かないようにする為には“あの晩”のように『束』も必要だと思われる。

余りと言えば余りにも非効率だった。

「……やっぱ」

「？」

「やっぱ、元からやり直した方が良いな……」

溜め息と共に力の具現させた力を消し、よいしょっと立ち上がる。
横島が何を確認したかったのか楓にはよく解らないが、その表情には最初から諦めの色があった。

『諦める為の確認』

それだけは理解できてはいるのだが。

「はぁ……
ま、しゃあないか」

口から出た言葉は肩を落す男のそれであるのに、伝わってくる空気には悲壮感等はゼロ。
かのこの頭を撫でているその顔にも穏やかなままだ。

ここまで自分に不向きだと諦めも早いのだろうか？
確かに切断力だけなら面白いのだが、面白いだけで使い勝手が悪すぎるのだし。
何だかんだで平和愛好者なので武器は欲しがらないからというのもあるのだろう。

「あ。そういやぁもうすぐ約束の時間じゃねーか。
そろそろ行くか」

「言われてみれば」

そんな横島の言葉を聞き、腕時計で時間を確認すれば確かに彼が言っていた時刻が迫りつつある。

朝食を一緒に食べたという事もあるが、久しぶりに珍しく二人だけであったから時が進むのを早く感じるのだろう。

因みにもう一人の仲間である古は朝練があるそうだ。

修学旅行に出ていた間、他の武術部との合同演武等を行っていなかったのだから当然だとのこと。

帰ってきて早々の日曜に練習日を組んでいたというのも彼女らしい。

まぁ、楓が横島と二人きりになるのが知られていればもっと対応は変わっていたかもしれないが。

「フ……

それでも別にこれといった期待はしてなかったでござるよ……」

「は？　何が？」

「いやいや。こちらの話でござる」

と、手を振って誤魔化す楓。

実のところ楓と古の間には抜け駆け禁止と言う約束事があったり

無かったりする。

だが楓は『ひじょうじたい』という事で彼女が喜び勇んで……もとい、“仕方なく”横島の元に馳せ参じていた。

だから『裏切りではなく、必然だったでござるよ』等とのたまいつつ横島の横を歩いていたりするのだ。

流石はバカレンジャーが端くれバカブルー。屁理屈だらけである。

さて――

つい二日前くらいはギクシャクしていた二人の距離も、麻帆良に戻る頃には落ち着いた距離を取り戻していた。

最終日手前までは横島と肩を並べるとミョーに焦ったりしていた彼女であるが、あの夜の騒動後には今のように自然に横を歩けもするし普通に会話もできていて余り気にもならない。

だから……

「んじゃ、そろそろ行くか」

「あい♪」

横島がそう声をかけると、楓は柔らかく微笑んで彼の横に並んで歩き出した。

修学旅行から帰った直後の今日――

横島は必要にかられてその朝っぱらから“お出かけ”なのである。

この日、本当ならば横島は一日中だらけていた筈だった。

ヘトヘトになりつつも麻帆良に戻り、楓らと別れた横島は報告をすると共に詠春が纏めてくれた調査書を提出せんと近衛の待つ学園長室に直行したのであるが、何に疲労困憊しるのかサッパリ不明なのだが近衛は学園長室でうつ伏せに寝転がって唸っていた。

そして横島は珍しくお互いの疲労を鑑み、このままクドクドと報告するのもナニでると判断し、説明しきれていなかった　かのこと直に対面させ、報告書等の書類を手渡し早々に退室。

後日、口頭で報告する事にし、今は近衛をゆっくり休ませようという老人介護精神に溢れる行いをかましていたのである（その際、かのこが近衛を見て妖怪だと怯えたり、その無垢々々な眼差しを受けてガクエンチョが『ああっ、そんな目でワシを見ないで！！』と悶えていたのが興味深い）。

兎も角、数ヶ月も戻っていなかった気になってしまう自室に小鹿と共に戻り、ちゃっかりいただいた休暇をどう有効利用しようかな～♪等と、ウキウキしつつシャワーを　かのこと共に浴びて安らかな眠りに就こうとしていたのであるが……

正にその時、彼の携帯電話がイヤンな音楽を奏で出した。

所謂ダースベイダーのテーマ。近衛からの電話である。

これ以上のボランティア精神はないぞーとかホザきつつ、湯の雫を滴らせながら電話に出れば、

『言い忘れとったが、婿殿からの伝言での。

この日曜にＯＫが取れとるそうじゃよ。メールで住所を伝えるで行ってくれんかの』

との事だった。

昨日の今日でＯＫかよっ！！　早いわっ！！　とツッコミ入れる間もありゃしない。

オノレ　ジジイ！！　恩を仇で返しやがってと憤った事は言うまでも無いだろう。

はっきり言ってメンドーだし、褒美というか代休というか、学園長から休暇をもらえので、かのこと一緒に部屋でゴロゴロしてるか、ゆっくりと羽を伸ばそう（ナンパに出るとも言う）と思っていた矢先の事だったので、やはりこの世は無常であるようだ。

とは言え、おもっきり『イヤ！』と断りたい所ではあるのだが、そこまでの不義理は流石の彼にもではない話。

そして何より自分から申し出た事であるし、下手打って相手を怒らせでもすればチャンスを失いかねない。それはシャレにならないではないか。

そうなると、やはり日曜を潰して向わねばならないだろう。

『あ〝あ〝……街にはオレを待つ美女がおったかもしれんのに……』

唇を噛み締め、血涙を流し苦渋に満ちた顔で辛酸をベロンベロンと舐めまくりつつ、横島は自分を待ち望む美女との遭遇（※妄想）

を諦めて指定された所に向う意志を固めたのだった。

そして今、彼はその約束の場に向かっている。

無論、住所を教えてもらっただけで行けるほど横島はここの地理に明るくない。

だから幸いとゆーか何とゆーか、ナゼか朝駆けで部屋を訪れた楓に道案内を頼む事にしたのである。

因みに報酬は＜超包子＞でのモーニングだ。

楓は女子としてはそこそこ食べる方ではあるが、期待していた以上のボーナスをもらった後で横島の懐も暖かかったし、何より美少女に対するオゴリである。横島の胸も懐も痛む筈がない。

だから二人仲良く朝食を共にし（かのこにはフルーツをもらった）、まだ時間があるので何時もの場所で能力の確認をしていたという訳である。

時間が迫ってきてはいたが、楓の見立てではそんなに急がずとも大丈夫だとの事なので、然程慌てず二人連れ立って道を歩く。

横島のストライクゾーンから外れている年齢ではあるが、楓は間違いなく美少女。それも顔良しスタイル良しのとびっきりだ。

よって横島もわりと機嫌が良い。無論、楓が笑顔という事もプラス要素である。

ぽてりぽてりと二人と一頭で小道に入ってゆくのだが、楓も何だか機嫌が良くてその様子は誰の目から見てもデート以外の何物でも

ない。かのこというオプションも付いているが、それが傍目の仲の良さに拍車を掛けている。
場所が麻帆良の中央区なので男子の影はほとんど無いが、もしあったなら憎しみのオーラが立ち昇っていたであろうほどに。

「にしても……朝から来るとは思わなんだぞ」

「いやぁ～　少しでも早く横島殿の顔が見たかったでござるよ」

「ハイハイ。で？　何か理由あんだろ？」

等と会話での距離も近いのだ。そりゃ怨みもされるだろうというもの。

無論、横島の問いに返した楓の言葉は八割以上が本音だったりするが、そんな彼女の言葉はアッサリと流されてしまう。
イケズでござるな……等と拗ねて見せたりもするが、ゴメンゴメンと頭を撫でられて何も言い返せなくなる。

まるっきり子ども扱いなのであるが、どういう訳か腹も立たない。

「……まぁ、確かに早くに部屋を出た理由はあるでござるが……」

「だろな。なんか逃げて来たっつー感じだったし」

何気なくそう言った横島であったが、楓はその言葉に『あぁ、そ

こまで見て取られてたでござるか』と感心（よろこんでいる）する。
見た目では解らない様にドアの前に立った時、手鏡を見ながら身嗜みを整えていたというのに。

実際、楓は追われていた。
それも友人にだ。

朝っぱら……それも鳴滝姉妹がやっと起きて歯を磨いている時という早朝。

何時もは森に入って修行をしている楓であるが、今日はキチンと休みを取って部屋で眠っていた。
だが、それを見越したかのように真名が突然やって来たのである。

「……それで今日、横島殿が何処かへ出掛けられる事を聞かされたでござるよ」

「真名ちゃん、何で知ってんだよ……」

兎も角、それだけなら逃げる理由は無いのであるが、どーゆー訳か真名はやたら食い物や飲み物を勧めてくる。そのくせ鳴滝姉妹が手を伸ばそうとすると直に取り上げるのだ。

二人が『ケチーっ!!』と文句を言うと、

「これは“横島さんの所に行く楓”が食わんと意味が無いんだ」

と嗜めるではないか。

タラリと汗を流した楓は、何だか知らないがマズイでござる……と危機感を覚え全力で逃走して来たというのである。

それで横島の所に来たら本末転倒っポイ気がしないでもないが。

「……ええと……一体何が……」

「……拙者もサッパリサッパリでござるよ」

横島によって霊的なものに目覚めつつある楓は、以前より勘が鋭さを増していた。

真名が何かしらの行動をとるよりも前に反応が出来、襲い掛からんとするイヤンな予感を信じて必死に逃走し、何とか正常（？）の楓で今に至っているのだ。

何とゆーか……それを食せば女として、いや“女の子”として終わってしまうよーな気がバリバリにしたのだ。何が？　と問われても勘なので返答に困るのであるが。

大げさでなく背後に蠢く陰謀（淫謀？）を感じ、怖気が走る二人。

温かい日におサブイ話である。

「！？」

――その時、突然楓は横島の腕を掴み、茂みに引きずり込んだ。
何が何だか良く解っていない　かのこも後を追い、茂みに入る。

今の今まで真名の件を話していた楓である。当然のように危機感を握り締めたままなのだ。よって何かしらの気配に対して過敏になっているのだ。

状況が状況なのでこの男は『外じゃイヤ――っ！！』等とアホなセリフをほざきかけるのだが、そんな事は解りきっているのか楓によって口は塞がれている。因みに掌で。
それに、

『（シッ！　誰か来るでござる）』

そう彼女に言われれば横島も黙る。
楓と共に息を潜め、気配を消し、木々と一体化して木遁を行う。

と……？

「――……助かりました、アスナさん」

「ま、まぁ、あのくらいは……」

「でも、これでチャンスは得られましたから……
本当に感謝してます！」

「そ、そう？　で、でもさ、アンタ大丈夫なの？　エヴァちゃん強いんでしょ？」

「あ、ハイ。で、でもテストだってエヴァンジェリンさんも言ってましたから……」

『いや、アニキ。安心すんのは早いぜ？　やっぱ用心にこしたこたぁねぇよ』

「そうよ！　また怪我しちゃったらどうすんの？！」

「で、でも……」

等と会話を続けながら茂みの前を通り過ぎてゆく二人（と、一匹）。

少年の方は何やら強い決意を感じられるのだが、少女はその事すらも心配しているようだ。

そんな彼女の様子を少年の頭に乗ったオコジョがヲッサン臭くニヤついて眺めているのが印象深い。

ともかく、年の差はあれどその空気は危なっかしい彼氏を心配し

ている彼女という間柄にしか見えなかったりする。実際、何だか少女は少年を潤んだ目でいていたようであるし。

何ともほほえましい光景であったが、結構カンの良い少女や、野生の嗅覚を持っているハズ（多分？）のオコジョですら、茂みの中に潜むモノに気が付かなかった。

やがて二人と一匹の後姿が完全に見えなくなろうとした頃、

「……って、ヲイ。あのボウズじゃねーか」

「で、ござるな……アスナ殿とネギ坊主でござるよ」

ガサガサと茂みから楓と横島は姿を現しその背を見送った。

わからなかったの？　と無垢な瞳で見上げてくる　かのこの視線もちょっとイタい。何も悪い事してないのに、だ。

背が見えなくなるまで見送っていたのは、真名のアヤシゲな行動に不思議な恐怖を感じていたからだろうか。どちらにせよちょっと神経質過ぎたという気がしないでもない。

まぁ、彼女が追っ手というのなら臆病なほどの用心深さは必要であろうけど。

「とは申せ、あのまま二人の前に茂みから登場するというのは些か……」

「そーだな……」

只でさえあらぬ噂が立っている横島（特にあの二人はあの晩の横島の奇行を見知っている）であるし、例の報道部の号外によってミョーなウワサのある楓だ。
おそらくあの二人なら完全に二人の仲を誤解してしまうだろう。
楓的に言えばどーでも良いかもしれないが。

元からトラブル体質である横島のこと。『茂みの中でお楽しみでした』と誤解されたって不思議でも何でもないのだ。

それに楓は兎も角として、今の横島は別の意味で問題がある。
何せ頼みの綱だったジャスティスが、あの晩以降無反応になってたりするのだから。

そんな状況で在らぬ（？）ウワサが立ったらヤケに走りかねない。
何せ横島自身、自分のリビドーほど信用できないものはないと重々承知しているのだ。

現在既に崖っぷちであるし。

――お礼と言う名目でデートに誘ってるしな……

その事を思い出し、横島の顔にどよ～んと縦線が入った。

おまけに珍しく旨く逝って……もとい、上手くいってしまったのだ。
ひょっとすると自分の属性はロリなのかもしれへんなぁ……と疑

い始めてたりする。何か泣けてきそーだ。

この際、バンカラ妖精（フェアリー）でもいいから止めてほしいと願っちゃったりしてるのだから相当追い詰められているのだろう。

「……横島殿？」

「え？　あ、イヤ、何でもない」

ぐいっとTシャツの袖で涙を拭い、何でも無さを笑顔でアピール。

何か洗剤のCMっポイさわやかさだ。

あの晩から彼の笑顔に中てられっぱなしの楓としては、そんな事されちゃうと黙る他手が無い。

ほんわかとしてるのやら、オマヌケなのやら表現が難しいが、とにかくいい加減そんな空気を纏ったままなのもナニであるし、約束の時間に遅れては話にならない。

「そ、それじゃあ、そろそろ……」

「で、でござるな」

と気持ちを切り替えた。

楓も頭を振って気を落ち着かせる。

どーもあの晩から気持ちが先走りそーで困る。
いや、彼の思いやりとかに触れるのは全くかまわないのだが、触れれば触れるほど暴走しがちになってしまうのだ。

『（これが、先に良いところを見せられてたのなら話は別だったのでござるに……）』

それならばメッキが剥がれてゆく訳だからこんなにも焦りはすまい。幻滅だけしてりゃいいのだから。
何というか……先におバカな行動を見せられまくった分、後になって解ってくる良さが身に沁みてしまうのである。
いや、身に沁みてるからどうかしたのかと問われれば彼女も返答に困るのであるが……

――お、おのれぇ……

そんな彼女の耳に何だか真名の怨念の篭った幻聴が聞こえてみたり。

温かな日差しの中、楓は何故だか肩を震わせていた。

と、そんな彼女に対し、

「……へ？」

横島が差し出してきたものがある。

とは言っても別にプレゼントとかではない。

それは手。単に手を差し出してきただけ。

極自然――

極々自然に、楓の前に横島が自分の手を差し伸べてきたのである。

時間にして僅か０．５秒。しかし、武術家にとっては余裕で五回は死ねる長時間。

楓の思考は完全に凍り付いていた。

対して横島の方も凍りついている。

何せ女の子に手を差し出すのは当たり前の事であるし、元からフェミニストなのだから不思議でもなんでもないのだ。

だが、別に楓は何かに困っていた訳でも、蹲いたりしていたわけでもない。

そんな彼女に対し、極自然に手を差し出してしまったのである。

恰も、手を繋いでいこうと誘っているかのように――

年齢的に言えば楓は中学生。子供である。

如何に身体つきは大人っぽかろうが、顔を見ればハッキリと子供だと解ってしまう。何だかんだ言っても、彼女の面立ちはまだあどけないのだから。

しかし、彼が芯からそう見ているのならば、子供だと見る事ができているというのならば、別に何も焦る必要はない。

子供相手なのだから『お手て繋いでいこう』というノリを貫けば良いだけの話。通常の横島ならできたはずである。

が、横島は凍りついていた。

確かに女の子として見てはいたが、意識してみていた訳ではない。そして今、意識して見てしまっているからこそ彼は硬直していたのである。

その事に彼自身が気付いてしまったのだ。

コンマ数秒の内に突拍子もない速度で楓の心臓が動き、脳が手を出せ手を出せと促してくる。

ポンプアップもかくやといった心臓のパワーによって瞬時に顔を真っ赤に染め上げた楓は、その命令に躊躇していたわけであるが、身体の方が正直なようでゆっくりと手を差し上げて行く。

そのお相手の横島はと言うと、彼女の手を待ち望んでいるかのよ

うに手を動かさないでいる。単に硬直していただけであるが。

それでも彼の手に誘われるように楓はゆるゆると、そしてどことなくおどおどとしつつも手を伸ばして行った。

考えてみれば横島をからかう為に腕を組んだ事はそこそこあるのだが、彼からの誘いは初めてだ。

何故だろう？　遊び交じりではあるが既に腕を組んでいるというのに、手を繋ぐ方が恥ずかしく思うのは。

それでも意を決して自分の意思で手を伸ばして行く。

何というか……横島と手を繋ぎたいという想いが湧いて出てきたのだ。

浅く、そして長く息を吐き、何だか異様に気合を込め、つい楓は横島の手を――

「見つけたアル！！」

「「わぁっ！？」」

――取れなかった……

突如として上げられたその大声に心底慌て、バネが弾けるように距離を取ってしまう二人。

かのこを中心にして左右に分かれて飛んだのだから、ちょっと間抜けな構図である。

他所の世界に意識を飛ばしたままだった横島も、そのアルアル語の声で何とか現世復帰を果たしていた。

楓の方もかな～り複雑であったが、何だかホッとした気もしないでもないので表情に出さずに済んでいる。

それでも何時もよか慌てていた所為で中々声の主が特定できていなかったのだが……

「二人してドコ行く気だたアルかっ！？」

流石に二度も声を投げ付けられれば場所の特定ができると言うもの。

「あ……」

「あ、古ちゃん」

丁度ネギ達が去った方向。
その方向からこっちを睨みつけている少女が一人――

抜け駆け禁止の約束はどーなたアルか！？　と、朝練に出ていたハズの古が、何だかスゴイ目でこちらに駆けて来たのである。

「カ～エ～～デェ～～～……」

修学旅行中からこっち、すっかりお馴染みとなってしまっている古の怨鎖の声。
彼女が着用しているのは何時も鍛練の時に使っている黄色い練習着。普段なら可愛さとそこはかとなく色気を感じさせてくれるそれも、ちょびっと返り血みたいなモノがついててプレッシャーも三割増し。

ぶっちゃけあの晩の式神たちよか怖かったりする。古に馴れている　かのこですら横島の後ろに隠れたくらい。

「ま、まぁ、落ち着くでござるよ古」

「私、落ち着き返てるアル！！」

ヨッパライの酔ってな～い発言レベルで。

「そ、それより朝練はどうしたでござる？　終わるには些(いささ)か……」

楓は何とか話題を逸らそうと必死。

何時もの彼女とは思えないほど慌てふためいているのがありありと解る。

まぁ、気不味さも手伝っているのだから当然かもしれないが。

「ナニ話を逸らしてるカ！？

……練習のメニューを百人組み手にしたらスグに終わったアルよ」

……という事は、百人ぶちのめしてとっとと終わらせたでござるな……

聞くまでもない古の話の裏に、楓は後頭部にでっかい汗を垂らしていた。

以前の彼女でさえそのくらいの事はできるのだが、現在の古の腕は以前どころ騒ぎではない。

何せ横島から霊力の使い方を学んでいるし、楓から実戦での氣の使い方を学んでいる。おまけにその二人と摸擬戦じみた組み手すら行っているのだ。

そして修学旅行では強者との闘いを経験しているのだから、今の古には学園内の全格闘部関連の人間が束になっても敵うとは思えない。

元から気配を読めていたというのに、その上で霊感の働きが上がっているので感応範囲も広がっていて背後の動きまで丸見えなのだから。

それでもヒャッハーと向かってゆく男どもをアッパレと言うべきか？

……いや、更にキレの上がった古の技を皆が皆して嬉々として受けていたのだ。単にM気の強いアホばかりなのかもしれない。

「で？

カエデはどーして老師とこんな場所にキてるアルか？」

「う……」

別に然程の裏はないのであるが、楓は返答に詰まってしまった。

これが自分から彼を誘いだしたというのならば楓が言葉に詰まった理由も解る。平然と約束を破ぶり、完全に抜け駆けを承知で連れ出しているのだから。

が、確かに彼女は横島のところに向いはしたが、それは言ってしまえば避難であり、おまけに誘ったのではなく彼に誘われたのだ。

確かに、誘われた時点で断ると言う手段もない訳ではなかったが、話が『西の長に頼んでいた件』では誰かに任せる事も叶わないではないか。

詰まる所、楓が取った手段は最善だったりする。

だが、それでも楓は言いようのない気不味さに答えを窮していた。

楓には珍しい事である。

「ま、まぁ、古ちゃん。彼女に頼んだのはオレなんだし」

と、横島が執り成さねば何時までも詰まっていたかもしれない。

横島本人にそう言われれば僅かにでも矛を下げねばなら無い。

そうなるとプレッシャーも緩むので楓も経緯を語る事ができる。

やはり詰まりつつではあったが……

そして古も何とか『どーして真名が?』と形の良い眉を顰めつつも一応の納得を見せてくれたのだった。

「ま、そーゆー事なら仕方ないネ……」

「……申し訳ござらん」

やっと納得してくれた古に対し、素直に頭を下げる楓。
楓とて自分に黙って古が勝手に横島とデートしていれば怒ってしまうだろう。それもかなり。
それが解るからこその謝罪だった。

「別にいいアル。私も、何でこんなに怒てしまたか解らないしネ……」

……しかしこっちも無自覚のようだ。

『……』

何だかどこかで超が無言で歯を食いしばっているよーな気もしないでもない。

「それにしても、何で古ちゃんはオレらがこっちに来てるの解ったんだ？
何だか探してたみたいだったし」

そう納得を見せ矛を完全に収めた古に対し、胸を撫で下ろしている楓に代わって横島が先ほどから疑問思っていたことを問い掛けた。

何せ学園長から連絡が入り、出掛ける事になったのは昨夜であるし、楓を誘ったのはそれこそ出る直前だ。
古に情報が伝わるにしては早すぎるのだから。

「ああ、それなら……」

と、古も直に答えを口に出した。

「超から聞いたアルよ」

二人が思いもしなかった名前を……

「は？」

「超殿……から？」

意外な名前を耳にし、二人して目を丸くする。
何とも見事にユニゾンしていた事か。それがまた何だか古の感情を逆撫でするのだが、それでもコメカミにバッテン浮かべつつも疑問には答えてやる。

「……そーアルよ。

カエデに言たように、五日間不在になてたから、他の武術連と合同で朝の鍛練をする事になてたネ」

丁度始めようとした頃、超が『差し入れ兼、見学に来たヨ』と肉饅が入った袋を持って現れたのだ。

いや、そこまでなら然程不思議ではない。

古が北派の拳法使いであり、超は南派で知られている。文武両道を地でゆき向かうところ敵なしな超天才の超であるが、事が拳法となると古というライバルがいるのだ。

その所為かどうかは不明であるが、超と古は仲の良い友人……言ってしまえば親友関係を続けている。

だから、今までそんなことした事がない超が古の見学に来たとしても然程不思議ではない。無いのであるが……

『あ、そー言えば古は知ているかネ？

今日、横島サンは楓と二人でお出かけすると言う事を』

超はかなり横島の状況を知っているのだろう、他の武術部員の耳に入らないよう、古だけに聞こえるように肉饅を差し出しつつ耳元でそう囁いたのだ。

その後は語るまでも無いだろう。

桜ケ丘の林の中に入って行ったみたいネ……という超の付け足しを聞いた直後、ナゼか朝の鍛練は百人組み手……というか、古対全員という形に急遽変更。そして古は全員をとっととぶちのめして終

了させ、すっ飛んで来たのである。

その話を聞いた二人は、

『『何で行くコト知って（るでござるか）んだよ……』』

と、同時に肩を落していた。

目的の場所を聞いたのは近衛とのホットラインであるし、楓とて朝横島の元に到着してから聞いているに過ぎない。

しかし真名や超には何時の間にかバレているのだ。

まぁ、真名は学園に雇われている身分なのでそんなに不思議な話ではなかろうが。

理由は兎も角として、その超と真名はとある理由によって裏で繋がっている。

だから真名から失敗したという連絡を受け、今度は超が動いただけのだ。

超は、楓と横島が一緒にいたという情報を自分の店＜超包子＞の支店から受け、ある方法で横島が向かう先を知っていた彼女は、彼が楓に道案内を頼んだと推理した。

自分の店（支店ではあるが）に二人で来るのが解っていたらクスリを仕込めたのに……と残念がっていたという話は横に置いといて、そう言う事ならばその事を古に伝えれば彼女はロケットが如くすっ飛んで行くに違いない。

そう読んで彼女に接触したのである。

そんな超の考えは見事に的中。
何だか予想以上のスピードで部活を強制終了させ、古は風のように二人がいるであろう場所に走り去っていったのである。
ま、唯一の誤算はと言うと――

「……そう言えば古。ひょっとして超殿から何かミョーな食べ物を押し付けられはしなかったでござるか？」

「へ？　あ、ああ、新作とか言て肉饅を渡されたアル」

「……し、してそれは……？」

「……何だかモノスゴイ嫌な予感がしたから、武術部員の誰かに押し付けてきたアルよ」

「……そ、そうでござるか……」

楓同様に古の霊感も上がっており、鋭さを増した勘によって彼女の淫謀を察知されてしまったという事であろう。

蛇足であるが……
後日、武術部の誰かが不純同性交友で補導されたという話があったりなかったりするのだが真偽の程は定かではない――

＊＊＊＊＊＊＊　＊
＊＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊＊

何時までも小川の畔で佇んでいてもしょうがない。
幼稚園の遠足だってもうちょっとマシな事くらいやるだろう。

無論、小川を眺めながらお歌やお遊戯なんぞやる訳もなく、横島はそろそろ行こうかと声を掛けた。
暇だったのか、小川の水を飲んだりしていた　かのこも移動の気配に気付いて駆けて来たので、ようやく三人は移動を再開させた。

古にしても、折角部活を強制終了させてきたのだからもうちょっと気の利いたとこに行けたらいいのだし、横島の誘いはありがたい。
だから京都でのデートの時にようにきゅっと腕に掴まって笑顔で横島についてゆく。

対して楓はと言うと……

「……良いのでござるか？」

二人の後ろをゆっくりとついて歩き、妙に真面目な口調で横島に問いかけていた。
横島はその質問に対し、足も止めずに進み続ける。

「うん」

そして返答も簡素。
まるでコーヒーに砂糖を入れるかどうか答えるかのように。

だが、その質問の意味は言葉とは裏腹に重い。

「なれど……」

――古に知られてしまうでござるよ？

楓は口を閉じだが、横島にはそれで十分伝わっている。
その言葉を聞かずとも解るのだ。

確かに横島はいろいろな技を古の前で使っているし、教えてもいる。
他所から来た事や、人外と関わってきている事や、自称弟子といった絆も全て伝えてはいる。

が『異世界からやって来た』という戯言のような事実は、まだハ

ッキリとは伝えていないのだ。

彼は、ネギのように魔法使いといった別世界を生きてきた者達より更にかけ離れている存在。

やや乱暴な言い方となるが、異星人，宇宙人と称されても過言ではないのだ。

刹那があの晩戦った烏族と人間のハーフである事はすでに聞き及んでいるのだが、横島に至ってはその“括り”にすら入らないのである。

それを伝えて平気なのか？　そんな意味が楓の言葉には含まれていたのだ。

だが、彼やはり何気なく答えを返してくる。

「いいんだ。
それに、これ以上隠してる方がヒドイだろ？　オレなんか受け入れてくれてんだしな」

チキンでヘタレである横島が、そう言っているのだ。
そんな事言われたら言い返せないではないか。

彼の言葉の意にあるものは覚悟とは違うし、決意でもない。

ただ女の子に、絆を結んでくれると言ってくれた女の子に対して秘密をもったままでいる事が彼は許せないだけなのである。

「？　どうかしたアルか？」

「べーつに？」

普段と変わらない顔でそう返す。
それでいて開き直りのような笑みを古に送っている。

意味は解らないが、微笑んでくれている事に古は素直に喜んでいた。

「……ったく……」

敵わんでござるよ。横島殿……

そんな彼に対し、苦笑とも呆れともとれる溜息を吐いて、楓は横島の反対側の腕をとった。

「ホラ、そっちではござらん。
こちらでござるよ」

万が一、古が離れようとも手を離さぬ事を誓いつつ――

「一学園長からお話はお聞きしております。
ようこそいらっしゃいました。横島さん」

「ありゃ？　ちーちゃん？」

林を抜けた先にあったのは品の良いログハウス。
それもよくあるログハウスモドキなどではなく、ちゃんと木組から組まれている本物だ。

ヨーロッパ風建築のそれは築十年以上は経過しているであろう、周囲の風景と同化し、落ち着いた佇まいを見せてくれていた。

そのいい感じの建物に感心しつつドアに着いているベルの紐を引くと、横島が＜超包子＞でお世話になっている茶々丸がメイド服姿で出てきて挨拶してきたのである。

「ちーちゃん？」

「ん？　ああ、茶々丸ちゃんって言ったら何か早口言葉みたいだろ？
だから何時も店ではちーちゃんって呼んでるんだ」

首をかしげた古に、横島は個人的ニックネームで読んだ理由を説明してやった。

因みに超の方は、『超ちゃんなんて読んだら“ちょうちん”て言ってるみたいだ』と気付き、彼女の事は鈴音という名前から鈴(リン)ちゃんと呼ぶ事を決めたらしい。
本来の読み方とは違うが、ミョーなところに拘る男である。

兎も角、そのちーちゃんがドコに住んでいるか思いもつかなかった横島であるが、そこらに触れるのはやめといた方が良いと判断し、彼女が掃除をしつつ客席を用意してゆくのを　かのこの足を拭いてやりつつ見守っていた。

茶々丸の方も小鹿が気になるのか、ちらちらとこちらに視線を向けていて、目が合うと何だか動きが止まったりしている。
そんな彼女を不思議に思うのか、かのこは首を傾げたりするのだが、すると凝視する時間が増して作業が完全に止まったりしていた。

仕方なく横島達も片付けに参加。
客の方が自分らの席を用意すべく、箒を操ったり割れたカップ等を片づけてゆくという何だか良く解らない展開だ。

仕事上、掃除には目が肥えている横島から見ても超包子で働いている茶々丸の掃除術は丁寧で見事だったのであるが、その彼女は今、

かのこの両手（両前足）を持って遊んでいる。
かのこの方も何が何だかサッパリであろうが、遊んでくれているのが嬉しいのかされるがままになっていた。

癒されはするんだけど、何だかなー…な光景に三人は苦笑しつつ作業を進めてゆく。

兎も角、丁稚時代を思い出しつつ、用務員という仕事のお陰で異様に手際よくなった掃除の腕を楓と古に披露しつつ、ふと分別し終わったゴミに目を落とすと……そこには小さな皿やカップの欠片。
少なくとも数個のセット分の欠片があった。
個人がひっくり返したにしてはちと多い。

茶々丸はつい今しがたまでそれらを片していたようである。

「ちーちゃん、ちーちゃん」

「一……ハっ！？
は、はい？」

何だか　かのこと戯れる事に集中し切っていた彼女に声を掛けると、彼女はスリープ状態から復帰したマシンが如く意識を取り戻した。
どんだけ集中しとったんや、と思いつつも声には出さない横島は紳士である。

「これ、何かいっぱい壊してるけど何かあったのか？」

「―はい。え、えーと……その……

そしてこれは先ほどのお客様の……その……後片付けで……」

ごにょごにょと言葉を濁すので要領を得ないが、どうも客が来たから割れたという事らしい。何ともアグレッシブな客もあったものだ。

無論、もっと理由もありそうなのだが、茶々丸が言い難そうなので横島らもそれ以上問いかけるのはやめにした。

殆ど表情に動きは無いが、そういう女性をおもっきり知っている横島は感情の動きを見てとるのに慣れている。

あからさまにホッとしたのが解るのでやっぱ触れたらあかんコトなんやなーと納得していた。

「何だ？　誰か来たのか？」

その声が上から響いてきたのは、

丁度三人がようやく席に着けた時だった。

「え？」

横島は兎も角、楓と古はよく知っている。

そして古はこの家を知らなかったのだからけっこう驚いていた。

ギっ、ギっ、と木の階段を軋ませ、二階から降りてきたその人物は……

「ん？　バカレンジャーの二人と……それとキサマは……」

品定めをするように横島をジロジロと見つめているのは誰あろう、意外過ぎるメンツに眉をひそめ、花粉症でやや荒れた声が痛々しい、楓達の同級生。

数百年を生きる真祖の吸血鬼、エヴァンジェリン＝アタナシア＝キティ＝マクダウェルその人だった。

「あっ！！　あの晩の幼女！！」

「だ、誰が幼女だぁっ！！
そーゆーキサマはあの晩の緊縛術師?!」

……あまり良い印象はなかったりするが……

中編

薄暗いその部屋には、微かな気配が犇いていた。

とは言っても微かと称する事すら大げさに感じてしまうほど微弱なもの。果たしてそんな気配を蠢くと言ってよいのやら。

だがそれでもここには“何か”がいる。

それも部屋中に。

静寂という騒然の中、それらは只座しているのみであるが。

そんな部屋に、ハッキリとした気配が五つ割り込んできた。

上の階と同じ敷地面積だというのに、上の階より明らかに広いこの地下に、誰がが入ってきたのである。

それでも“それ”らが反応する事はなかったが。

「うわっ　人形がいっぱいアル！？」

「流石にこれだけあると、不気味を通り越して壮観でござるな」

この建物の主である金髪の少女に導かれ、階段を下りてきた二人は部屋に溢れかえっている夥しい量の人形たちに圧倒されていた。

ぬいぐるみやマリオネットはもちろんの事、ビスクドールや日本人形、果てはコ○助モドキ（？）といったパチモンくさい物等、多種多様の人形が所狭しと並べられているのだから当然であろう。

「な、なぁ、キティちゃん」

「キティちゃん言うなっ！！」

その二人の前を行く一人の青年が、皆を案内している（というか、とっとと先を歩いている）金髪の少女の背中にそう問い掛けた。

少女はその呼び名が気にいらないのか激昂して振り返ったのだが、

「な、何でこんなに生き人形があんだ？」

という質問の内容を聞くと表情を変え、ほぉ？　と感心したように眼を見開いた。

「解るのか？」

「解るわぁっ！！　どいつもこいつも霊気あるやんかっ！！」

その青年には嫌な思い出でもあるのか、半泣きでそう抗議する。

どうもさっきから必要以上に身を縮めて足早に少女のついて歩いて行くと思えば、どうやら周りにある人形達の中に動けないようになっているだけの生き人形が混ざっている事に気付いていたようだ。

後に続いていた二人の少女はその言葉を聞き驚きの表情で人形を見つめ直した。

「ぜ、全然、解らないアル……」

「いや、言われてみれば何かしら感じなくもないでござるが……本当でござるか？」

言われてみればそんな気もしないでもないと言う程度で、幾ら探ってもそれ以上の事は感じられない。

いや、時折かのこが立ち止まってじ～っと見ている人形があるから、どうもそれがそうなのだろう。

当の本人はやたらと生き人形とやらにビクついているのであるが、何だかんだで力は本物である。二人は改めて青年の能力に感嘆していた。

その青年。
無駄に人形に怯えているのだが、それはしょうがない話と言える。
何せ最初に関わった事件では、異空間を埋め尽くすモガちゃん（商品名）人形集団に襲われたし、悪魔が取り付いたマネキン人形にはマネキンにされた挙句、女性下着を着せられると言う屈辱を与えられている。
更には中国人形（石像）には熱烈な抱擁をされ掛けているし、呪いの日本人形にはツルッパゲにされているのだ。
ぶっちゃけ、生き人形との相性はサイアクなのである。

そんな彼の過去なんぞ知る由もなく、金髪少女は妙に怯えを見せている青年を鼻先で笑いつつ先へと進んでいく。

やがて四人と一頭は妙に明るい部屋にたどり着いた。
いや、正確に言うと部屋が明るいのではなく、部屋の中にあるものにスポットのような明かりが当てられていて、その反射が明るさを放っているのだ。

「何アルか？　コレ。
模型？　箱庭ならぬ瓶庭アルか？」

「……にしては異様に細かいでござるな」

見た目は大きいフラスコ。
ボトルシップの瓶宜しく横倒しになっており、やはり中には何やら模型が入っている。
ボトルシップとの違いは、中にあるのは船ではなく建物だと言う事だ。

一抱えもある大きなフラスコの中には塔のような建物があり、その天辺にはテラスのようなものまである。

少女の言う通り、その作りは模型にしては異様に細かく、建造物は元より塔の根元にある砂浜や草木に至るまでが本物を縮小したかのようでホログラフではないかと思わせるほど。

そしてその大きなフラスコの表面にはこう書かれていた。

「『ＥＶＡＮＧＥＬＩＮＥ' Ｓ　ＲＥＳＯＲＴ』？　直訳したら『エヴァンジェリンの保養地』……あ、“別荘”か。
ん？　ひょっとしてコレ、隔離結界か何かか？」

中の様子と、伝わってくる力。そして瓶に書かれた文字だけでそう判断を付ける青年。

先程もそうであったが、さも意外そうな顔で金髪の少女は青年の顔を見直していた。

「正解だ。驚いたな……

キサマの事を頼まれてたついでもあったしな。夕べの内に茶々丸に引っ張り出させてメンテナンスしておいたんだ。
しかしさっきもそうだがよく解ったな。ただのボンクラではないという事か……」

「ボンクラたぁーなんだっ！！」

何だかさっきから泣き続けである。

「ま、まぁ老師」

「ちょっと落ち着くでござるよ」

そんな彼を取りなそうと二人が一歩足を踏み出した。

――と？

カチ……

何かを踏んだのか作用したのか、小さな音がして青年と少女の姿が消えてしまった。

「え？　あ？　よ、横島殿？！」

「な、何アル！？」

いや、違った。
あの二人が消えたのではない。
自分らが移動したのだ。

「こ、ここは……」

呆然とあたりを見回す少女。
肌に感じる風は初夏に似て、鼻に感じるそれは潮の香りのよう。
耳に聞こえるのは風の音と波の音。
そして目に見えているここは――

「……ココ、どこアルか？」

先程までいた地下室ではない。
自分らが立っている円形の足場から向こうに見えるのは、細い一本橋で建物と繋がっている円形の塔の天辺。
天蓋付き野外ホールを思わせる白い建物だ。
そして周囲は広がる海。

瞬きをする間も無く、二人は気が付けばこんな見知らぬ場に佇んでいたのである。

もし二人がもっと落ち着いてこの全景を眺めていれば理解できたかもしれない。

現実離れし過ぎてはいるが、頭の柔らかい二人なら受け入れられただろう。

この場が、あのフラスコの中の別荘に酷似しているという事に――

それを知るのは二人が辺りを歩き回った２０分も後の事である。

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊

――ハッキリ言って、最初の印象からサイアクだった。

あのボウヤを救……もとい、不甲斐無いボウヤにまかせておけない私は、ジジイに恨みがましい呪いを任せて影を使って転移。

コトが起こっている場に茶々丸と共に駆けつけた訳であるが……

ターゲットロックをボウヤ以外の魔法使いに設定していた所為だろうか、ナゼか敵と間違えてぶん殴ってしまった。

無論、太古の鬼神だか何だか知らぬが、ナギや詠春などに封印されてしまうような手合いだ。全力とまでいかずとも負けるわけがない。サクっと広域殲滅魔法で瞬殺してやった。

……同じバケモノとしては見るに耐えれぬ顔をしていた訳であるし……

――と、そこまではいい。

私はやるべき事をなしたのだから、どうこう言われる筋合いはない筈だ。

しかし直後、呆然としたボウヤに殴り倒した怪人は敵ではないと言われてしまった。

いや、いやいや、どう考えてもアレは敵だろう？

外見も式まんまであったし、感じた波動も邪そのもの。
それにターゲットのキーは“ボウヤ以外の魔法使い”にしていたわけであるから間違え様がないのだ。

後で色ボケ忍者と馬鹿ンフー娘に彼は氣の達人ではあるが魔法使いではないとボコスカ文句を言われたが、私は魔法のプロだ。そんな初歩的なミスはしていない。

……いや、ひょっとして誰も気付いていないというのか？
桜咲刹那は兎も角、ボウヤや、詠春ですら？

間違いなくあの男から濃密な魔力が漏れていたという事に……

そして私の魔法、ほとんど絶対零度の氷結地獄の中にいて、氷漬け程度しかダメージが与えられず、あまつさえ生きていたという怪異。
これは単純に氣だけで防げる話ではない。
その程度で防げるのなら、私は今ここに存在していないと言える。

おまけにこの件の首謀者とされていたあの符術師……あの女も理解不能の力で護られていた。
バカ二人によると、確証はないがあの男のお陰だとか……

ますますもって魔法使いではないか。

絶対零度の氷結地獄を氣だけで防げると思っているのか？
それでも単に氣の使い手だと言い張るのか貴様らは？！

……しかし、言い張られた……

いや実際、氷を砕いて引きずり出した時には欠片ほどの魔力は感じられなかったが、そうだとすると先に感じた魔力は何だったのか疑問は残る。
まぁ、学園に戻れば何時でも会えそうだからその場は矛を引っ込めたのだが……（京都観光もあったし）

ボウヤ達とナギの家に訪問した帰り、詠春は私に頼みごとを伝えてきた。
めんどくさかったが、例の魔力の件も気になっていたし、報酬が報酬だったので引き受ける羽目になってしまった。

いや、ナギの情報が入れば真っ先に伝えると言われたから……つい……

と、兎に角、詠春はこう言って来た。

『物凄く不安定で、物凄く厄介な力を持つ“彼”を導いてやってくださいませんか？』

巨大な力とかではなく、“厄介な力”……か……

詠春め。相変わらず私の興味を引くような言い方をする。まぁ、その程度の腹芸ができなければ長なんぞやってられんか。

彼とは無論、あの怪人の事だ。

私が興味を引く言い方をした詠春にはちょっと腹が立ったが、興味がない訳ではない。

ジジイにも、

『ワシでは全てを見る事ができんが、お前さんならできるじゃろ？』

等と、記憶喪失の回復が可能か否か。またその原因を探ってくれとみょーに引っ掛かる言い方で頼みごとをされていた事もある。

『ただし、十二分に気をつけんとお前さんでも拙いかもしれんのでの』

という挑発まで織り交ぜて……

それに紛らわしかったのは事実だが、勘違いで殴り飛ばしたのもまた事実。

借りを作ったままというのも癪に障るので、二つ返事……とまではいかんが、まぁ、会ってやるだけなら会ってやってもいいと伝えてやった。

まさか帰って直ぐの日に予定を組まれるとは思ってもみなかったがな……

……どういう訳かその約束の日の朝にボウヤと神楽坂明日菜の来襲を受け、初っ端から出鼻を挫かれはしたが、まぁ、それは何とか追い返す事に成功する。

花粉症で頭がボ～ッとしていて、何だかミョーな頼みごとをされた気がしないでもないが……変な事は言わなかったはずだ。多分。

兎も角、入れ替わりのようなタイミングでやって来たヤツと相対した訳であるが……

「あっ！！　あの晩の幼女！！」

出会い頭がコレだ。

神楽坂明日菜とドツキ合いした後であるし、花粉症でイラついていたのだから当然の如く私の沸点は下がっている。

「だ、誰が幼女だぁっ！！
そーゆーキサマはあの晩の緊縛術師？！」

「だーれが緊縛術師だ人聞きの悪いっ！！
アレはオレの特技の一つだ！！」

「そなもん大声で自慢するな！！
あの符術師の女なんぞ、トラウマになって男性恐怖症になっとるわっ！！
まぁ、〇作に出会ったかのような怯え方されていた詠春には笑えたが……」

「何とあの姉ちゃんが！？
これは責任を取らねばなるまい。主にオレの身体で……」

「結局シモネタか！？　殺すぞ！！」

「―あの……長くなりそうですので留守をお願いできませんでしょうか？
マスターが壊してしまった分の食器や御茶菓子の買出しに行きたいのですが……」

「ああ、承知したでござるよ」

「何だとーっ！？　恩は五倍返しは当然やけど、恨みは十倍返しも必然やんか！！
それを身体で払うだけでＯＫいうんは破格の待遇やろが！！」

「言葉を弄ぶな性犯罪者！！　単にヤリたいだけだろーが！！」

「あ、いや、おかまいなく。
……でもできれば超関係の店以外なのがいいアル」

「一？　ハイ。解りました」

「あ、それなら厚かましいでござるが、かのこには果物がよいでござる。
実はこの子は精霊故、そういったものを好むそうでござるよ」

「一精霊……成る程。
この私、絡繰　茶々丸。その使命、しっかと承りました」

「ぴぃ？」

「そ、そこまで真剣に……」

「キミみたいな幼女がヤルなんて言っちゃダメー！！
当局にタイーホされちゃうぞ！！　つーか、ちっちゃい子が卑猥な事言うの禁止ーっ！！」

「だーれがちっちゃい子だ！！　私はこれでも６００歳だ！！」

「ナヌッ！？　６００歳！？」

「どーだ恐れ入ったか！！？？」

「若っ！！」

「何ぃっ!?」

「ーでは、行ってまいります」

「気をつけて行くでござるよ」

「寄り道しないで戻ってくるアルよ」

「ーハイ」

「ぴぃぴぃ」

「ーハイ。かのこさん　お任せください」

「……」

「……」

「オレの同級のバンパイアハーフは７００歳やったぞ?!
オレの周りにおった人間以外のヤツで６００歳以下のヤツ何か数えるほどしか知らんぞ!?」

「な、ななな……」

「星神とかやったらン億歳やしな。あ、一応タマモは転生したから十ン歳か……

ケイは……もう二十歳くらいやったかなぁ……」

「い、一体……

一体、何者なんだキサマはっっ!!??」

等という一騒動があったのだが、それはスルーだ。

思い出したくもない。

かな～り失礼で、私を幼女扱いしやがる無礼者であるが約束は約束。

三匹ほどおまけがくっついてはいたが、大人の余裕でもって地下に案内し、少し面白くないがジジイの言うように念を入れて昨夜のうちに茶々丸に用意させた“別荘”へと誘ってやった。

だが……

あの時、怒鳴るように言った私の言葉に対し、件の男は――

「いや、それを理解したいからココに来たんだけどね」

と、妙な苦笑で持って答えた事が何故だが異様に印象深く心に残っていた。

――そして私は、

怪異と直面する事となった――

ecall（中）

■十四時間目：Total R

海岸と水平線が見えるこの“別荘”中央のテラス。

デッキチェアーに腰をかけ、どこからか湧いて出た茶々丸によく似た侍女から飲み物を受け取り、喉を潤し終わる頃にはエヴァはやっと落ち着きを取り戻していた。

他人の記憶に意識を沈めるのは初めてではないが、何せ相手が相手。

想像を絶する鮮明さに引き摺られていた所為だろう、やや感覚的に混乱が見受けられる。

自分の持つ常識や知識的な混乱も相俟って、落ち着いてはいるが眩暈は止まっていない。

「……よりにもよって異世界だとぉ？」

「ハ、ハイ、スンマセンです。そのとーりです……」

何だかミョーにさっちょこばっているがそれもそのハズ。

この男、横島忠夫。元々の性質なのか、十年も働いていた職場による精神汚染なのかは不明であるが、どういう訳か女王様然とした相手に逆らえないのだ。

今の今まで首をしめられ、チアノーゼを起こした挙句、三途の河原で船乗りと値段交渉しながら脱衣婆の孫娘の見合い写真を勧められてた最中に復帰するという珍しいなイベントを経験した直後とい

う事もあるだろう。記憶は飛んでいるが。
意識が飛ぶ直前まで十歳くらいの女の子の写真を見せられていた気がしないでもないがそれ横に置いといて。

兎も角、キョトンとしている　かのこの横で生まれたての子鹿のようにプルプル震える男はほっといて、エヴァは再度額に手をやって頭痛を抑えた。

あの記憶から見て、文明水準はこちらの日本とほぼ同レベルなのだが、人外の混じり具合はこちらの本国のそれに近い。
術の使い方等を教える専門の学校らしきものもあるし、マジックアイテム屋らしきものもあったのだが、それが東京のど真ん中。都心部の点在しているのだ。

マジックアイテム等は容易に使えるものが多いが扱いが難しく、精神を操るもの等を所持するだけで罪に問われたりする。

しかしあの世界では法外な値が付けられてはいるが金さえあれば一般人でも買えるし、簡単な式くらいなら図書館で勉強しただけで誰でも作る事ができる。霊力さえあれば誰でも使える式神ケント紙なるアイテムもあったし。
どんな世界だと問いたい。

それに……

「魔族はいい。こちらにもいるのだからな……
しかし、幾らなんでも神族はないだろう？」

「と言われても、ダ女神からパシリの神まで色々おったんも事実でありまして……」

「黙れっ！」

「ひゃいっ！！」

それが一番エヴァの頭を悩ませているのだ。

確かに理屈から言えば魔族がいるのだから神族がいたっておかしくはない。おかしくはないのであるが……

「鬼“神”とかなら兎も角、６００年も生きているがそんなものが“居た”という形跡すら聞いた事がないぞ？」

「いや、だからオレのいたとこの話だし……流石に６００年程度じゃ会えなかったかも……」

「僅か十年程度で会いまくったキサマには言われとうないわっ！！」

「ひぃっ！！　仰るとーりでございます――っ！！」

そしてまた伝家の宝刀、正直スマンかった土下座が炸裂した。

許してくださるのなら水面の上だろう土下座して見せますと言う気骨すら感じられる見事な技だ。激しくみっともないが。

横でかのこが真似ている分、滑稽さに拍車が掛かる。

「ったく……」

その様子にエヴァはまた頭を抱えた。

余りに膨大なイメージに横島の中で見た事は殆ど憶えていないが、それでも僅かながらかっこ良く見える場面もあったような気もする。
このギャップには気疲れするというもの。

『何かとてつもないモノと出逢った気もするが……』

それが思い出せない。

そしてその事が余計に彼女ら苛立たせている。

そんな言いようのない焦りにも似た苛立ちを無理やり鎮め、エヴァはコメツキバッタ宜しくぺこぺこ頭を下げる横島（と、かのこ）から目を逸らした。

と……

「ったく……水臭過ぎるにも程があるネっ！！！」

「全く持って面目ないでござる……」

そっちはそっちで土下座が披露されているではないか。

流石は横島のパートナーを自負するだけはある。

背筋をぴしゃりと伸ばして額をこすりつけている様には感動すらできてしまいそうだ。

「老師がフツーの人間じゃないコトなんか、とくにお見通しアルよ?！

今更そこに宇宙人とかいう設定が付いてもナニが変わる言うネ！！」

「……いや、全く持って仰る通りで……面目ないでござる」

今になって思い出した事であるが、古はあんまり細かい事は気にしない性格である。

そしてそれは自分と然程変わりないほどの器で。

そんな古であるからして、今更横島が妖怪変化だと言われたとしてもそれほど気にもすまい。

現に自分に至っては横島出現の場に居合わせた上、彼自身の口から直接聞いているのだが全然気にしていないのであるし。

一体何であんな事を気にしていたと言うのだろうか?

『そうでござった……
拙者は古がその程度の人間ではないと知っていたはず……』

だというのに、自分は何故……と楓は額を石畳にこすりつけつつ内心首を傾げていた。

――実のところ、こんな疑心暗鬼は彼女だけの話ではない。楓は忘れているかもしれないが、その解りやすい実例が極身近に存在しているのだ。

あえて名を出すのなら刹那である。

今さっきまでの楓同様、彼女もつい最近まで大切な幼馴染である木乃香を信じ切れていなかった。

人に強い好意を持つと言う事は、ある意味臆病になる事でもある。楓が横島の心を気にして古に対する信頼が疎かになるのも、やはり女心から派生した感情。しょうがない事と言えよう。

結局、そういった感情は自身ではコントロールしきれないものなのかもしれない。

「聞いてるアルか！？」

「ひゃ、ひゃいでごじゃる！！」

その古であるが、元々の柔軟性とオカルト知識の無さから受け入れる体制は最初から整っていると言える。

更にこの横島という男、“向こうの女性ら”もそうであるが、その側は異様に居心地が良く離れ難い。

何せ一度この男の良い点に気付いてしまうとそこばかり目に入ってくるから始末が悪いのだ。

確かに二人とも横島には大ボケは散々かまされている。

普段兎も角、霊力が下がると途端にスーパーウルトラセクシャルハラスメントヒーローとなってしまうのだから、如何にこの二人でも殴り過ぎて拳を傷めかねない程。

だがその反面、女の子に異様に優しく、また細かく気をつけてくれる。

悲しそうな顔をすれば励まそうとするし、泣いていれば涙を拭き、挫けようとすれば支えてくれる。

甘いと言えばそこまでであるが、その甘さ優しさ故、土壇場でとてつもない事をかます。

特に助けようとする時の爆発力は計り知れない。

楓もそうであるが、古も彼のその気質に触れているのだ。

だから異世界人がどーの、異宇宙がどーの言われても今更である。というか、気にもならない。

やる事なす事が破天荒で無茶苦茶なのであるが、その本質は善人で優しくて正直者。

運が悪くておバカ一直線な面ばかりが目立ってしまうのだが、内面に気付いた今ではその行動に悩まされはしても嫌う事は不可能に近い。

彼の人となりを知った上で、その彼を異質だとして距離を置く事は……二人には考えもつかない話である。

女の子に被害が出る事を形振り構わず防ごうとしていた横島を、級友を巻き込む事に躊躇していなかったあいつ等に対して怒りを見せていた彼をどう嫌えば良いというのか？

古達からすれば、あいつ等の心の方がエヴァや横島なんかよりずっとバケモノなのだから――

そんな二人のじゃれ合い目の端で捉えつつ、エヴァは溜め息をもう一つ。

あの馬鹿二人の鈍感具合が羨ましくなる。

事はああ言ったお子様じみた恋愛感情の話だけでは済まされないのだ。

「……かと言って、バカレンジャーに説明して理解が得られるかどうかは……」

かなり微妙な話である。

ひょっとして、吸血鬼である自分の方が常識人なのだろうか？

何だか悩み事がズレてきた彼女であるが、その事に気付くのは古の憤りが収まるもう少し後となる。

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊

「……落ち着いたようだな」

「お互い様アルね」

横島の異世界から来ました発言で取り乱されていたエヴァも、散々楓に文句言いまくってスッキリした古とほぼ同時に落ち着きを取り戻していた。

後に残っているのはグッタリとしている横島と、真っ白に燃え尽きている楓。

その間を　かのこが行ったり来たりして気を使っているのが微笑ましい。

何だか仲の良さげなとこ見せ付けられているようで古の額に井桁が浮かんだりもするが、それはきりが無いのでスルーだ。自業自得だし。

「ふん」

鼻先で溜め息とも嘲りともつかない笑いを見せ、お行儀悪く片肘を突いて紅茶を啜るエヴァ。

彼女らの前には、茶々丸の姉に当たる侍女人形達が出してくれたテーブルがあり、その上には人数分の紅茶が用意されていた。

古はとっととその席につき、丸いテーブルの中央に詰まれたフルーツに手を伸ばし、紅茶を飲んでいる。

結構高そうなボーンチャイナのティーカップであるが、古は気に

もせず喉を潤す。そこら辺の物怖じしない性格はすごいと言えよう。

「それでエヴァにゃん」

「何だ、バカイエロー」

エヴァにゃんと言われるのもかなりイヤであるが、キティちゃんよりはマシだ。

つーか、この女が言って聞くような相手でない事は先刻承知である。

「さっきからナニ取り乱してたアルか？」

ずるっと椅子から滑ってしまうエヴァ。

ああ、そうだ。そうだったコイツはバカレンジャーだったな。

と、肩を落としつつそう諦めの溜め息を吐く。自分と同じアイデンティティの痛みを持ってくれる奴はおらんのか……と泣きたくなる。

そんなエヴァの様子を見ても訳が解らない古は、アホの子でーすと言わんばかりの脳天気な顔で首をかしげていた。

「あぁ、キティちゃんな、

オレが別の世界から来たってコトを理解しちゃったから精神ダ

メージ受けちまってんだ」

「ふぇ……？」

流石に女王様から怒られ慣れている横島だ。回復も早い。
脱力しているエヴァに代わって説明を次いでやっていた。

「それて、そんなにタイヘンなことアルか？」

「うん。まぁね」

横島よりそのオツムは柔軟な古はアッサリと異世界を受け入れている。
理屈どうとかではなく、目の前の常識として受け止めているのだ。

逆に吸血鬼という非常識な存在であるエヴァの方が理屈を求めているのが何とも不可思議な話である。

まぁ、古からしてみれば漫画の話と変わらないだろう。

昔からある話。
『魔法の世界から修行しにやって来た』……そんな話の漫画を大抵の人間は一度くらい読んだ事がある筈だ。それが事実であろうと、彼女ほど頭が柔らかければ受け入れるのは然程難しくは無いだろう。
ネギなんかそのまま“実例”なのだし。

だが、ある程度以上世界を理解している者なら、自分の持つ常識

を覆されたらそりゃあ頭も痛めるだろう。

そういう意味で言えばエヴァは常識人なんだと横島に言われて何とか古も納得できたようだ。

「聞いた話じゃ、“こっち”の魔法の国は門を通じてはいるけど地続きに近いみたいなんだ。

だけどオレのいたトコは完全に別。根本から違うから平行世界どころの騒ぎじゃない」

近衛やエヴァの話によれば魔法国とこちらの世界は百ヶ所ほどのゲートで繋がっているとの事。

自分がいた世界の冥界チャンネルのようなものだろう。門の数も似ているし。

だが、横島のいた世界とは更に更に大きい隔たりがある。

彼が言ったように、平行世界どころの騒ぎじゃないのだから。

「へーこーせかい？」

だが、古はその言葉の初耳である。

教育テレビに出てくるアホな子宜しく、古は首を傾げて見せた。

そこから説明がいるのか？　とエヴァも面倒くさそうな眉を顰めたのであるが、

「え～と、パラレルワールドって知ってるか？」

「あぁ、それはマンガで見たことアルね」

極自然に横島が説明を開始している。

妙に世話焼きなんだなとエヴァの口の端が緩んだ。

「そうだなぁ……」

じっと見つめて説明を待っている古に対し、横島はあたりを見回す。

するとテーブルの上に置かれていたフルーツが目にとまり、彼は手を伸ばしてバナナを一本毟り取った。

「これが歴史の流れとするだろ？」

「？　アイ」

す……とバナナをしたから撫で上げ、中ほどで止める。

「で、この辺りの時代……まぁ、あの橋で会った時だとしよう。

それが古ちゃんの選択の時だった」

「ふんふん」

「あの時はオレを介抱して楓ちゃんとのトコにつれてってくれたろ？」

と言いつつ、一ヶ所だけバナナの皮を剥く。

「と、これがそういう選択をした場合の歴史の道だとする。ここまではいいか？」

コクリと縦に首を動かして見せる古。

横島はウンと頷いて話を続けた。

「でも、他の可能性だってあるだろ？　見なかった事にして帰ったかもしれない。
　或いは病院に連れてってくれたかもしれない。
　いや、オレが倒れてた事に気付かなかったかもしれない」

そう例を口にしつつ皮を一つ一つ剥く。

その場合、横島を知っているが事件には係わらず霊力の修行なんかやっていない歴史。

或いは全く接点がなくあの戦いの夜を迎えている可能性もあるし、病院に連れて行った後、甲斐甲斐しく介抱してウッカリ恋人になるという突拍子もない歴史だって生まれていたかもしれない。

「そんな感じに可能性別に枝分かれし、交差せずに別の時系列で進んでいる世界を平行世界って言うんだ。解った？」

「へぇ～」

小学生に対して噛み砕いた説明をする教師のようだな……と、ちょっとだけエヴァは感心していた。

確かにそう言う説明なら如何な古とて多少の理解は得られるだろう。

何というか……無くした記憶の中には教師経験でもあったのかと思ってしまうほどに。

尤も、単にアホ娘である狼少女の躾役をやらされていた事による慣れだったりするのだが……この吸血鬼が知る由も無い。

「オレの世界じゃあ人類が生まれる前から神族や魔族は地上に来てたって言ってたんだ。

こっちじゃその痕跡すらない。

それに何て言うか……“成分”が違うんだよな。だからここはオレのいた宇宙とは別の宇宙って事になる」

「平行世界ならぬ、平行宇宙でござるか？」

その横島の言葉を、何時の間にか再起動を果たして近寄っていた楓が継いだ。

古はちょっと驚いていたが、当然のようにその気配に横島は気付いている。そして楓のその言葉に一瞬頷きかけるが、ちょっと首を傾げた。

「う、う～んそうとも言い切れないんだよなぁ……

オレは知ってるけど、根本から違う宇宙ってのはいっぱいあるんだ。

例えば魔族……悪魔とか言った方が解り易いかな？

そいつらと天使とかがいる天界との立場が逆転した宇宙も実験的に創られたらしいんだ。

そんな風に根本から違う宇宙も存在してるらしいし……」

「はぁっ？！　実験的に創られたぁっ？！」

流石にあまりのトンデモ発言に頭痛の忘れてエヴァは嘴を突っ込んでくる。

スケールが大きすぎるにも程があるのだから当然の事かもしれない。

「え゛うっ??!!
あ、いや、その……知り合いの神様がそんな事言ってたし、その……
妹分の一人もそう言ってくれたし、実験的に創られた宇宙の卵は見たことあるし……」

ドバドバ溢れ出してくるトンでも発言。

楓と古は、理解の範疇を超えているからではなく、スケールの大きさから頭から煙を出し、エヴァは……

「ふざけるなコラァアアッッ!!!」

何よりかにより、キれて吼えていた。

「ひぃいいいい〜〜〜〜っ!!!!　スンマセーンっ!!!!!!!」

彼にできる事は、神の領域に達した土下座くらいのものである。

しかしまさかエヴァもその土下座技術の一部が、竜神という超存在にセクハラしまくった挙句に仏罰を喰らい掛かって培われたものであるとは……想像もできないであろう。

彼女が落ち着きを取り戻すのには三十分近くかかってしまった。
横島の言うように、この『エヴァンジェリンの別荘』は時間からも隔離された結界の中である為、外の時間で言えば僅か1分程度となるのだがそれでも復帰までエラク時間が掛かっている。

自分の常識から飛び越えた事を言われたのだから当然かもしれないが。

「ま、まぁ、兎に角……
キサマが別のトコから来たという事は千歩譲って認めてやる。
感謝しろ」

「あ、ありがとさんで……」

本当はもっとちゃんとした説明をしてやりたいのであるが、今の時点でコレでは説明が難しい。
ヘタなコト言って逆ギレされたら何されるか解ったものではないからだ。

考えてみれば、昔話や神話級の神々や妖怪、悪魔等と面識があるという話はちょっとナニ過ぎるかもしれない。
そう考えての事でもある。

「それで……？」

「は？」

「それで。キサマはそんなドふざけた世界からどうやってこの世界に来たんだ？

それだけじゃない。あの記憶構造は何だ？

同じ時系列で全く違う記憶がパッチワークのように絡み合っていたぞ。

普通の人間……いや、人間と言い切る事もできん程にな……」

ジロリ……と横島は上目遣いで睨みつけられる。

ハッキリ言って流石は真祖の吸血鬼。とんでもないプレッシャーだ。

かのこは元より、チキンハートの横島はその波動の余波だけでガクブルである。

それでもチラリと目を向けた先にいる二人……楓と古が目に入ると不思議な事にプレッシャーが軽くなる気がした。

エヴァとは逆に、自分を労わり、心配してくれている眼差しだからかもしれない。

そんな眼差しの後押しを受け、横島は深呼吸をして落ち着こうとする。

その様子にややイラつきながらも、エヴァは話そうとする彼に免じてプレッシャーを抑えてやった。

だが、呼吸を整えてこちらに顔を向け直した横島の眼を見たとき、エヴァは珍しく息を飲んだ。

「……よ、横島殿……？」

「老師……？」

めったに見せない横島のシリアス顔。
それも実年齢が滲み出た大人の男の顔がそこにあった。

普段とのギャップか、あるいは本質を見せられるのか本人は知るまいが中々良い顔を披露している。

その証拠に、エヴァは兎も角として古と楓は頬を真っ赤に染め上げているではないか。

だが、タイミング良く（悪く？）そんな二人に気付かなかった横島は、何かを決心したのだろう重そうな口を開いた。

「今言った平行世界だけど、ほぼ間違いなくオレの世界には存在しない」

「は？」

いきなりナニを言い出すんだコイツは？　と吸血鬼は目を見張る。

「まぁ、今は先に聞いてくれ。ちゃんとした無いっていう確信があるんだ」

「あ、ああ……」

腰を上げかけたエヴァであったが、横島が手を前に出して制してそう言い彼女の質問を止める。

彼女にしては珍しく、その言葉に従ってデッキチェアーに座り直して耳を傾けるエヴァ。

「で、今さっきも言ったけど、実験的に創られた宇宙の卵。それはかなり上級の……まぁ、魔神とか言われるレベル以上の存在だったら作る事ができるらしい」

ココまではいいか？　という眼での問い掛けに、エヴァは不承不承ながら頷いてみせる。

「だから当然、ず～～～っと上の存在も創ってるらしいんだ。それも実験的なのじゃなく、ちゃんと確立した宇宙とやらを」

「……で？」

続きを促すエヴァを見、次に楓たちに目を向ける。

きょとんとしているかのこは別として、頭から少々煙が見えなくも無いが二人は何とかついてこようと耳を傾けていた。その努力が何だか涙ぐましい。

ふぅ……と溜め息一つ。

言いたくないというよりは、自分の口から認める言葉を発したくないようにも見える。

それでも言わねばならないのも事実であるが。

「オレのいた宇宙には確かに平行世界は無いけど、今言った理由で同じような時系列の流れがある宇宙は在ったらしい。

あえて言うなら平行宇宙ってコトになるんだけど……」

そこまで言って、横島は息を吸って言葉を切る。

三人には何かに踏ん切りをつけているようにも見えた。

「……丁度今のオレの歳、オレのいた世界ではでっかい歴史の分岐点が発生した」

「と言うと？」

もう一度言葉を切り、横島は呼吸を整えてエヴァの問いに答えた。

「ソロモン七十二柱が一柱にして四大実力者の一柱。地獄の大公、恐怖公とも呼ばれている魔族と言えば解るか？

その魔神が事件を起こしたんだ。

それもよりにもよって人間界。東京のど真ん中で」

「　ん　な　……っ？！」

言うまでも無くエヴァンジェリンは、今でこそ呪いによってその力の大半を封印されてはいるが、そこらの魔法使いなど足元にも及ばないほどの実力と知識を持っている。

属性が＜闇＞であるからか、当然ながら悪魔の事もそれらを使役する方法もだ。

だが、流石にソロモン七十二柱というのは話がでか過ぎる。突飛と言って良い。

それだけでも大事件であると言うのに、話に出た魔神の爵位は大公爵。数ある悪魔の中でもトップクラスの実力者。最上級神魔クラスの大悪魔だ。

はっきり言って無茶苦茶である。彼の記憶に触れていなければ正気を疑っただろう。

しかしエヴァはその起こった事件らしいモノを見てしまっているのだ。それがまた頭痛の種だった。

「何やらご大層な字(あざな)をもっているでござるが……その者はそんなに凄まじい存在なのでござるか？」

空気が読めないのか、無理にでも話に加わりたいのか、楓がそんな質問を述べる。

古も聞きたかった事なのだろう。うんうんと頷いて耳を傾けていた。

サッパリ理解範疇外の楓らが羨ましい。

「バ……っ！！　あ、いや……そうだな。お前らが知るハズも無いか……」

余りにもマヌケな質問をした楓に激昂しかけるが、直ぐに思い留められたのは流石である。

ある程度の余裕があるのかもしれない。

兎も角、今はその説明を後回しにさせてくれという横島の言葉を飲み、楓らは黙って続きを聞く事にした。

「今言った事件は結局“何とかなった”。これも詳しい説明をするとかなり時間掛かるからまた今度な」

何やら誤魔化された気もしないでもないが、楓もそうであるが古の方も頭がショートしてて限界っポイ。
自分だってかなり頭が痛いのだから。
仕方なくエヴァは了承して続きを促した。

「言うまでもないけど、そんな大事件が起これば かなり今まで不動を貫いていた世界の軸だって変わる。
だけど未来は既に決定されてたからどうやっても変化は無い。
小さな変化は兎も角として」

「未来が決定されていた……だと？」

「あ、うん。まぁ、その説明も後でするよ。
兎も角、そう言ったわけで歪みの軸は色々な可能性を生んだ。
当然ながら並行的に同じ時系列で進んでいた別の宇宙は……」

歪みによる改変はその時期を分岐として様々な道を生み出していた。

超上層の存在は兎も角として、それ以下の存在はその宇宙から出られない為、その宇宙の中の変化だけを受け入れる。

世界に溢れ出た怨霊の被害に遭い、それらを駆逐する組織を作る者が出た世界。

第二の事件発生を懸念し、徹底的に人外を駆逐するモノが出る世界。

事件解決の功労者の能力に魅せられ、それを我が物にせんと動き出すモノが出た世界。

冥界チャンネル襲撃の折、仲間や恋人を殺害されて魔族に憎悪を向けてデタント壊滅を目指す天使が現れた世界ｅｔｃｅｔｃ・・・

そしてその中で一番歪んでいた宇宙――

何の変化も発生しなかった宇宙。

あれだけの事件が起こったと言うのに日々変化無く、淡々と時が進んでいた世界。

事件後も人々は怨霊や妖怪を病的に恐れたりせず、
除霊学科も以前と変わらない教育を続け、
相変わらず日本のオカルトＧメンは人材不足のままで現状維持され続け、

万能と言える珠を生み出す能力者がいると言うのに、世間も魔族もほったらかしのまま……

そんな大き過ぎる歪みの世界にこの横島は居たのである。

「……壮大なんだか、妄想気味なんだか……
異世界と言うだけでも信じ難いというのに……病院へ行って頭を見てもらえと言いたくなる話だな」

「ま、そうだよな。“今のオレ”だってそう思う。
兎も角、オレのいた世界のオレも、他の宇宙のオレも色んな可能性の歴史を歩いていた。
ここまではＯＫか？」

「……要は、お前の今の年齢までの歴史の流れはほぼ同じだったが、十七歳時の大事件以降からはかなりズレがあると言う事だな？」

「そう。
だったらもう大体見当ついてんだろ？」

「……まぁ、な……納得できない点もあるが……」

「え〝え〝っ！？　今ので解ったアルか！？」

「拙者、頭の上でサッパリ妖精がダンスしてるでござるよ……」

二人の理解力を飛び越えているのも無理は無い。

エヴァとて非常識な思考まで論理飛躍しただけの事で、理屈も何もあったもんじゃないのだ。

先程のパッチワークな記録と、並行宇宙という話。
そんな材料を先に提示しているのだから、当然二つの話は結びついている筈だ。

そして何より彼女の勘がそれ以外考えられないと告げている。

「横島忠夫。

お前……何かの拍子に別の宇宙の自分とやらと融合したな？」

それが、彼女の勘が弾き出した答だった。

「当たり。

正確に言うと、宇宙の卵から落っこちたオレ“達”と合体しちまったらしい。

で、別の体験してるから違う記憶の部分が矛盾を起して弾けちまったらしいんだ」

理由は様々。

ちょっと前に夢の中であの魔神に言われたように多種多様。

除霊の失敗。

超古代魔道機暴走による事故。

魔族の罠。

神魔の封印を超えて逆行しようとしての失敗。

君を危険視した反デタント派による暴走等と例をあげたらきりが無い。

そしてその様々な理由によって宇宙の穴に落ち、或いは落とされた横島は宇宙の外と言う“何も無い場所”に行ってしまった。

何せ“何も無い”のだから距離だって存在しない。だから“時間の差”も無い。

落ちた横島達は同時に同じ場所に出現し、同一人物である所為だろう霊力が同じ波形だったが為に融合してしまったのである。

普通なら絶対にありえない話であるが、横島のいた世界……というよりは横島が使った能力の一つに同期合体という反則技がある。彼の霊体はそれを使った記憶がある為、かなり容易に同調融合してしまったらしい。

だが、同一人物であるが別宇宙の存在であるからして結局は他人。更に肉体を構成する成分が全く違う為に弾けてしまったというだ。

その際、記憶も融合されていた為、同じ歴史を歩んでいた十七歳までの記憶は欠損が無くなって異様に鮮明に克明になり、それ以降の記憶は全く違う道を辿っていた為に矛盾を起こし、形を保てず粉々になってしまったらしい。

幸いと言うか何と言うか、一時的とはいえ以前の同期合体以上の超出力が出せたお陰で元の世界に戻れたようであるが……彼だけはこの世界に落ちてきてしまったというのである。

それが十年分の記憶はなくなっているが、十七年分の記憶“だけ”鮮明になっている理由である。

しかし、それでも“この横島”だけがここに来た理由は解らない。

「え～と……キティちゃんは見てないだろうけど、楓ちゃんや古ちゃんは見ただろ？
あの晩に暴走したオレ」

「へ？　う、うん、見たアルよ」

「この眼で確と……」

急に話をふられて戸惑ってしまうものの、何とかそう答える二人。

既にチンプンカンプンの世界であるが、横島が後で詳しく教えてあげるからと言ってくれたので質問は控えている。

「？　あの変態行為がそうではないのか？」

「違ぇーよ」

横島は苦笑して否定した。

何時もなら『ちゃうわーっ！！』と涙声で言いそうなものであるが。

だがその事を楓らは気付けていない。

「何て言うか……

オレは元々目的の為に手段を選ばないんだけど、暴走した時のオレはその選ばない手段が……」

＜排除＞なんだよな……と肩を竦めた。

「あの時のオレが“この体”のベースなんだ」

「体のベース……だと？」

「ああ……」

溜め息を吐き、テラスから見える水平線に眼を向ける横島。
何だかその眼差しはカラッポで、古も楓も胸が痛む。

「他のオレは自分の世界に戻れた……と思う。
それはそれぞれにぶっとい絆が残ってたから可能だった事らしい。
特に雇主は前世が魔族で、オレの前世と魂の契約を結んでる。
だからその雇主との繋がりを辿る事もできた……らしい」

「今度は前世ときたか……何と言えばよいやら……」

“らしい”とか“思う”とか、説明は仮定ばかりで完全な確証は無いが、確信しての事。
それでも信憑性の低さは如何ともし難い。直に見ていなければ単なる妄想野郎として見ていただろう。

どちらにせよ前世の話まで出てくるのだから余計に信憑性が無くなる。こんな話はエヴァや現在絆を結んでいる楓ら以外には信じてもらえまい。

「……ん？　だとすると、お前は……」

「そ」

その流れだから解る。

そう言った理由で他の横島が帰られたというのなら、この横島が帰る事ができなかったのは……

「絆の全て。

親や友達、雇い主や同僚、そして弟子。師にあたる神様。

その全てを失くしてる」

「え…っ？！」

「な…っ！？」

失った……いや、或いは失わされたのかもしれない。

そう納得させられるシーンが微かに浮かぶのだから。

だからこそ知り合いを奪われそうになると暴走し、奪おうとする者には非情となる。

全てを無くして生きてきて、カラッポで虚無な人生。

求め欲してはいるが同じモノは存在せず、仮に他の世界のそれらに出会えたとしても完全なる別物であると理解し尽くしてしまっているほどのガランドウな心を持った横島。

それでも心の奥底では昔を強く求め欲していたのも事実。

だからこそ、真逆の位置にいたこの横島――

何もかも失わず絆を増やし続け、その全ての直中にいたまま時間を積み重ねていた世界の横島忠夫。

その記憶と記録を完全に受け入れてしまい、本人はゆっくりと“この横島”に全てを委ねている。

全ての絆を失った横島の肉体に、全てを絆を保てたままの横島の記憶が焼きついた状態。

つまり、言うなれば別の肉体に乗り移ったようなものなのである。

「同軸憑依……とでも言えばよいのか？　それが今のお前と言う事か……」

「ああ……」

“だから”この繋がりを無くしている霊体では主格の居た世界に戻れないし、仮に戻れたとしても自分の知るそれと違って住み良いとは言い難い世界だろう。

尤も、行こうにもその宇宙の位置……座標も軸も解らないのであるが。

では、主人格の横島の世界に戻るのはどうだ？　という話もある

が、他の横島は戻ったと今さっき口にしたばかりだ。

つまり……

「オレの居た世界にはとっくに“オレ”は戻ってる。
ここにいるのはオレの記憶を持ったオレってこと」

焼きついたのは記憶のみ。絆の多かった横島は当然のように戻る事が出来ているだろう。

更に、弾けた身体を治す際、当然の如く珠を使用したのであるが、その時身体を治すのに使ったのこちらの世界のマナ。
だから肉体成分が完全にこちらの成分となってしまっている。

だから“戻れない”。

いや、こちらの世界の成分となり、自分のいた世界の常識だった事を“歪んでいる”と認識している時点で、もう横島は向こうに行けない。

「それが、前に楓ちゃんに言った、『どうがんばっても行けない』って理由だよ」

絶句する三人を他所に、横島はかなり割り切った笑顔を見せていた。

後編

広がる光景は南国のそれであり、吹き抜けていく風は適度の潮の香りが混じっていて爽やかだ。

だが、エヴァの心はそんな風すら軽くしてはいない――

他人の事には結構クールであるエヴァにしても、珍しく二の句を告げられないでいた程なのだから。

『只者ではない事だけは解っていたが……流石にどうも……な』

自分とて“あの日”にいきなり吸血鬼にされてしまった身。好きで吸血鬼になった訳ではない。

確かに横島は生物学的に言えば成分こそ人間であるが、内容からすればその存在からして人間ではない。

この世界に迷い込んできた異物が、この世界の物質に成分を変えた存在なのだから。

無論、元いたオモシロ世界を歪んでいると認識してしまっている時点で完全にこの世界の成分存在となっているであろうが、異世界出身という認識があるからか彼自身は認め切れていないだろう。

しかしそれはエヴァだからこそ理解できる事。

吸血鬼だと知っても級友、教え子として接してもらってはいるが、人と自分との間に６００年間引き続けている線引きを止める事ができない彼女だからこそ……

「ん～……

なれど、横島殿は大半の記憶ごと若返っているでござるから、その十年は体験していないのと同じでは？」

「そーいえばそーアルな。

その人たちはココにいないのだから、絶対にそんなヒドイ事にならないわけで……」

「え、えと、まぁ、オレ自身も現実味無いからわりと平気でいられるんだけど……」

言ってしまえば、このバ楓や馬鹿ンフー娘のように平気で引いた線を飛び越えてくる奴らの方が常識的にはおかしいのだ。

おかしいのであるが……

「それに大切なモノ奪われたらおかしくなるのは当然アルよ？
それだけ私の級友を大切に思てくれた事には感謝してるアル。
暴走はナニだたアルが……」

「ま、確かに。
それを恥じ、悔いているからこそ長殿に頼んだわけでござろう？
では、そうならないよう進む所存でござるな。
ならば別に問題はないでござる」

自分らはただ付いて行くのみ――

声に出してはいないが、そういった念を送り続けている二人にエヴァは肩を竦めて苦笑する事しできない。

ぶっちゃけて言えば、二人の行動は単に問題の掏り替えである。

別に横島は楓らが言っているような事を口にしているのではないし、そんな事を気にしている訳でもない。

彼は遠まわしに自分が自分のスクラップのようなものと言っているだけ。

残り物である自分が、居場所を持たない自分が、自分の世界からはじき出された自分がここにいるという事実を口にしただけの事である。

それでも二人はそんな彼の心に疵を見たのだろう。無意識に問題

を掏り替えて何時もの調子へと導いて行こうとしている。

『まぁ、そういったグダクダはアイツらの問題だしな……』

と、エヴァは妙に生暖かい目で見守っていた。

――くだらない感傷と言えなくもない。

無論、自分だってそんな憶えはある。

昔、自分もそんな“疵”の中に心を沈めて自暴自棄になっていた気もするし。

支えてくれた、力になろうとしてくれた者もいたような気もするが、何せこっちは不死身のバケモノ。そういった存在は記憶ごと老いさらばえさせて塵となっている。

何だか昔の自分を見ているような気がして僅かながらでも苛立っているというのだろうか？

或いは我知らずヒトの異物となった時の事を思い出していたのか……

その想いの真偽はとかく、稚拙な言葉の使い方で問題を必死に掏り替え、横島を励まそうとしている二人を見ていると不思議と（横島もそのようだが）自分が纏っていた空気が軽くなっていくようだ。

こうなると皮肉の一つも言いたくなるが……

今は止めておく事にした。何だか無粋であるし。

『フン……この私がな……』

……まぁ、自分だって不死身の吸血鬼と言う不条理の極致。今更ナニを言わんかやだ。

現実逃避ともいえるが、これ以上頭痛のタネが増えたら堪らない。そーゆー奴なんだと流してしまえば済む程度の事である。

――と、言う事にしておこう。ウン……

それに、
何よりも気に掛かっている事もある――

「その辺で人前でいちゃつくのは止めにしないか？　まだキサマに聞いていない事もあるのだからな」

そろそろ好奇心を止めて置くのも限界だった。

僅かながら割り込むのには気が引けたが、やはり置いてけ堀なのも腹が立つ。
だからついに楓と古に挟まれてなにやら悶えている横島に対し、妙に偉そうに問い掛けてしまった。

やっと自分の調子を取り戻しつつあるのだろう。ズン…という擬

音でも聞こえてきそうな程に威圧感が増す。

「ナ、ナニかな？」

横島の本質はヘタレであるからして、そう言った美少女の威圧に弱い。

と言うより、何を言われていたのか知らないが、二人によって追い詰められていた彼の目はさっきのそれに戻っているのだ。

こうなると昔の横島まんま。女王様オーラに敵う訳が無い。

ちょっと惜しい気もするが、この眼差しの方が彼らしいという気もする。だから今のマヌケ面に苦笑しつつ、エヴァは聞きたい事を口にした。

「あの晩……スクナとやらを理解不能の技で封じたのはキサマだったらしいな？」

「え？　あ、そ、そうやけど……

あっ、言っとくけど、アイツを霊気で縛り上げたのはオレの力だけやなく、アイツ本人から吸った霊気も……」

「余計な事は言わなくていい。黙れ」

「あぅ……」

流石に女王様気質全開のエヴァを相手にしては、元に戻った横島では抵抗しきれまい。つーかできない。
やっぱり丁稚では女王様には勝てないのだろう。当たり前だが。
さっきまでそのエヴァすら黙らせていた気配が嘘のようだ。

「そして、さっきキサマの記憶に自我を持って行かれかかった私を引っ張り出したのは……」

「私に渡されてた球の事アルか？」

「そうだ。アレは何だ？」

念の為にと古に渡していた例の“珠”。
万が一、記憶の奔流に引きずり込まれた事態を想定して『還』って来られるよう古に使い方を教えて渡していたのだ。

タイミング等は二人に任せていたのだが、流石に霊感が上がっていたからだろう。中々に良いタイミングで使用してもらえている。

が、そのお陰と言うか、その所為でエヴァに知られた事は如何ともし難い。

「そー言えば、木乃香のパパさんを石から戻したのも、アレ使てたアルよ」

「何だと？」

いらんコト言っちゃダメーっ！！　と、横島は内心涙声で叫んでいたのであるが後の祭り。

まぁ、木乃香を救う為に大盤振る舞いしていたのだから、何れ話す事になるだろうとは覚悟してはいたが。嬉しくないのもまた確か。

古が知っている範囲とは言え、その力の奇怪さは異常そのもの。彼の霊能力と言うだけでは納得し切れまい。現にこちらを向くエヴァの視線は険を帯びていた。

解っている。解っているともさ。

こーゆー目線は良く知っている。話さないと拙い何てもんじゃない。

お仕置き直前の雇主やグレートママンと同じよーな眼差しなのだから。

それに――

「ま、もうそろそろ話してもいっか……」

とは思ってはいたのであるが。

横島は左掌を広げ、霊気を集めて六角形の小さな盾のようなものを出した。

「初めて力が発現した時はコレくらいだったんだ。
も、ホントにド素人の時。全身の霊気を一点集中して一部分だけを強化するっていう、捨て身に近い技」

昔、ゲームの世界に引きずり込まれた時、とっとボスキャラを倒そうと雇主は霊力で持ってチートにもレベルをマックスに克ち上げた事がある。
その横島のＭＡＸレベル時のＨＰは村人以下。ＭＰ……霊力に至ってはゼロだ。レベル９９でも何の役にも立たないという見本のよう。

だから、素質なんかゼロだと思っていた。

が、ある事件の調査の為、竜神の娘が僅かながらであるが竜気を授けてくれるというイベントが起こる。

その時からやっと埋もれていた霊力が発現し、成長をし始めたのであるが……どういう訳か普通は一番簡単なはずの霊力放出はドヘタクソだったのに、無我夢中ではあったが難度の高い収束だけはイキナリ成功していた。

考えてみれば素質が霊波の収束能力だったのであれば、後押し無しではその力が発現する事は無かったのかもしれない。

「で、ある事件で香港に行った時、強化ゾンビの群れに追い詰め

られたオレは、何故か力の格が上がったんだ」

段々と大きくして見せていたサイキックソーサーがほどけて左手に巻き付いた。

その霊力（楓らから言えば氣）は光る手甲のような形状で落ち着いており、二人の少女からは何度見てもすごいと言う感嘆が漏れる。

ボヒュッ！！

そしてガスバーナーに火がつくような音を立て、一瞬で剣のような形状へと変化。

霊気の手甲は美しいエメラルドグリーンの霊波刀となった。

「ほぉ……？」

流石のエヴァも感心していた。

いや、確かに記憶では“観”てはいたが、それは漫画の流し読みに近い状態での事。

横島の克明過ぎる記憶に引っ張り込まれないよう、あえてそうしたわけなのだが……その力を目の当たりにするとボンクラさが嘘のようだ。

確かに自分とて断罪の剣（エクスキューショナー）という剣の様に見える魔法を使う事がで

きる。
だがあれは今言ったように“剣の様に見える”が、物質の状態を相転移させる魔法であって、実際には接近戦魔法ではないし“能力”でもない。
しかしこの男は『断つ』という意思を霊力とやらで形成しているようなのだ。それも無造作にだ。
やはりこの男はかなり珍しい素質を持っているようである。
だが、この男の力はそれだけに留まらない――
「……でもある時、この程度じゃ戦力にならない。良く切れる武器を手にしても、使いこなせなきゃ話になら無い。だから民間人は帰れっ！！　て、ある女に言われたんだ」
「それは……そうアルな……」
「幾ら研ぎ澄まされた刃を持とうと、使い手が素人では話にならないでござるし……」
何となく横島の口から出た“ある女”という単語に反応を見せたものの、想いを馳せるほどの間柄ではないのを眼差しから受け取った二人の武道家はわりと冷静に肯定して見せた。
様々な武器を使える楓らだからからこそ解る事。どんな強大な剣も使えなければ置物と変わらない。その事を体感で理解しているの

だから。

しかし、今の彼はそこらの使い手なんか足元にも及ばないよう見えるのだが……？

「うん。後で考えたら当たり前の事なんだよな。そん時は全然わかんなかったけど……

でも何て言うか……悔しくてさ……

だからダチの一人が修行に行くって言った時、付いて行っちまったんだ」

「ほう？」

エヴァはこの時の事を……

アレを目の当たりにした時の事を後々まで忘れられないと言う――

「付いてったはいいけど、死ぬか覚醒するかってゆーデンジャラスな試練を受けさせられてさ……

実際一瞬死んだよーな気もするけど……」

どよ～んと顔に縦線を浮かべつつも、右手の人差し指と親指を出し、空で何かを摘むような形をとる。

何をするのかと見守る皆の目の前で、

「「「え？！」」」

“それ”は起こった――

このマナの濃い特殊な別荘の中という特殊空間だからこそ解る力の集中。

彼の言うところの霊気が収束し続け、渦を巻いて集まって行く。

エヴァは元より、彼の収束能力を知っていた筈の楓達ですら目を見張るほどの超収束。

物質を生み出す魔法は確かにある。

エヴァとてできないわけではない。

だがそれは段階を踏んで召喚したものを具現させるだけの話であ

り、間違っても無から有を生み出す技ではない。

しかしこれは……

目の前のこの現象は……

どんどん、どんどん集まってくる霊気。

横島は皆に理解できるよう、あえて収束をゆっくり丁寧に行っている。

そして集まってゆく濃度は　かのこのような精霊からしても驚異的なもので、この小鹿も足踏みをしながら興味深そうに見守っていた。

そんな風に、ゆっくり丁寧に行っているからこそ　その異様さが際立っているのだが彼はまだ気付いていない。

集まった霊気はランダムな螺旋を描き、その輝きを静めて行く。

輝きを静めると言う事は、動きを止めると言う事であり、霊気がそこに固着して行くと言う事。

やがてその静まって行く輝きは“それ”のツヤとなり、集まった力は完全に物体と化し掌の中にコロンと転がって落ち着いた。

三人が三人とも呆気に取られている。

目の前で起こった奇跡に、その奇跡によって生み出された珠に眼を奪われているからだ。

力の密度を上げて分身を作る術を知っている。

氣を高めて圧力を生み出す事も知っている。

魔力を高めれば、“物質のように”重量が増える事も知っている。

だが、これは……

これはそのどれとも圧倒的に違う。

完全に物質となってそこに存在しているのだ。

その上その珠の持つ力は、そんな彼女らの想像を遥かに越えている――

「これがオレの奥の手。

収束した霊気をキーワードで解放し、込められたイメージを発現させる力……」

驚きかえっている少女らを前に、どこか自嘲めいた顔で横島は言った。

使う者を弱者へと導く力…

…―文珠―

と――

■十四時間目：Ｔｏｔａｌ　Ｒｅｃａｌｌ（後）

「頭痛い……」

ズキズキと痛むのは偏頭痛。

花粉症にかかると風邪を引きやすくなり、体力が無い今の状態はかなりキツイだろう。
まぁ、この“別荘”にいる間は多少力が戻る為、そういった弱さから解放されるのだからマシであるが。

タカミチがもうちょっと若い頃、この場を貸して修行させていたがそれ以降は使っていなかった。
思えば花粉症にかかった時はとっとと篭って治せば良かったかもしれない。

その代わり一日がかなり伸びるから、年月を今以上に長く感じるので使う気にはならなかったのであるが……

しかし、彼女の頭を痛めているのはそんな事ではない。

「何という反則アイテムだ……」

横島忠夫という男が見せた力。

自分の意志を霊力とやらで収束し、その霊的な武器で持って戦うドハズレた退魔師。
だが、その収束特化した能力は武装だけに止まらず物体創造にまで及び、その信じ難い力は更に信じ難いモノをこの世に出現させてしまう。

現代の宝貝“文珠”。

彼は人類で唯一それを生み出す事ができる能力者だったのである。

漢字一文字からなるイメージを込め、解放する事によってその現象を発現させ、あらゆる状況に干渉させる事ができる正に反則のアイテム。

おまけに生み出すのは彼の能力なので、霊力とやらが尽きない限り幾らでも生成できる。

だがそれでも、彼の話によると使い勝手は下がっているとの事。

何でも、元々の文珠は確かに生成に時間は掛かるものの、その安定した力は分解する事無く固着しつづけ、一度生成すると使用するまで物質として存在し続けられるからストックしておく事が可能だったらしい。

今のそれは確かに出力こそ上がり、生み出す時間も僅か数秒という短時間になってはいるが、物質安定力はとてつもなく下がっていて最高でも十分で爆発崩壊。練り込んだ霊力が無駄に強力過ぎるて安定仕切ってくれないからとの事。

使わねば爆発するとは物騒極まりない話だ。大き過ぎる力はわが身を滅ぼす例えを現したかのよう。

しかし、確かにハイリスクではあるが、そのリターンは物凄く大きい。

文字を込めるのは霊力と言う魂から汲み出した力でなければならないようだが、込めるキーワードは何でも良いらしく、試しに魔力という意味で『魔』の文字を込め、その力を使用してみると……何とエヴァの魔力が大きく回復したのである。

後で知った事であるが、この珠に込めるのはイメージの方が重要らしく、あのスクナと戦った時の魔力全開モードのイメージが強く残っていた横島は、その時のイメージで『魔』を生み出したらしい。そりゃ回復力も大きかろう。

『柔』と込めて大理石の柱にぶつけるとスポンジのようになり、『硬』と込めてワインに入れれば鉄のように硬い液体という不思議極まる物体となった（おまけにワインの味はそのまま）。

『雨』と入れて空に投げれば雨が降り、『雪』と入れて投げたら雪が降る。

『脆』と入れて岩にぶつければ粉々に砕け、『重』と入れてハンカチに使うとグランドピアノより重くなって石畳にめり込んだ。

――こんなふざけた力、どう納得すれば良いというのだろうか？

確かに皆に黙っていた筈だ。
この力は厄介すぎる。

魔法というものは科学と別のレールを走ってはいるが、論理と定理とが存在しているので根っこは科学と同じものである。

だからこそ、本人の魔力量は兎も角、精霊の力を借りるコツさえ掴めれば誰だってできるのだ。

しかし、この力は完全にヒトのそれを超えている。

「物質としての維持に時間制限があるだけマシか……いや、それでもシャレにならんな……」

神々がいた世界で、魔族や悪魔、魔神と戦っていたという与太話。

しかし、こう言った能力者がいたというのなら何となく信じられるような気もする。

神が本当に“存在”しているという事実は、未だ受け入れ難いのであるが。

それでも――

「ま、頭痛がするのはしょうがないが、この力の存在を我々だけが知ったというのは、悪い話ではないしな」

額から手を離し、ニヤリと底意地の悪そうな笑みを浮かべると、エヴァは“そこ”に目を向けた。

「ぜぇぜぇ……は、反省したでござるか？」

「お、女のヒトに、そう、いた、コトしたらいけないアルよ！」

そこでは楓と古が拳を赤黒く染め、地面に転がっているモザイクの何かに説教していた。

―返事はない。ただの屍のようだ―

魔力が大幅に回復したエヴァは、どういう訳か使ってもいないのに幻術で大人の姿をとっていた。

只でさえエヴァはゴスロリか、妙に背伸び（年齢相応ではあるが）した露出が大目の衣装を身につける事が多い。

よって大人の姿となった時はボンテージ風のドレス（更にやや小さめ）をまとった金髪美女となって出現したわけである。

色んなコトで霊気が下がっている横島が行動しない訳が無い。

脊髄反射でいきなり飛び掛り、エヴァと二人に撃墜された挙句、口に出すのも憚られるほどズタボロにされてしまったのは今更言うまでもない話である。

ぴぃぴぃと鳴きながら少しでも癒そうと彼を舐めている　かのこが物悲しい。

「ふふん……いい格好だな」

「……ほっといて」

ぶっとい鎖つき首輪に後ろ手に掛けられた三連手錠。

皮ベルトの目隠しまでされてエヴァの前に正座させられている横島。

その首をから伸びるぶっとい鎖は、左右にいる乙女達……楓と古が握り締めている。

何とフェチッシュな光景であろうか。

それか国賊レベルの大犯罪者だ。あながち間違いでもないが。

心配げに小鹿が擦り寄っている所為で余計に落ちぶれ感が増しているし。

わざとらしく布が擦れる音を立てて足を組み替えるエヴァ。
見えていない分、想像力が増大している横島の脳裏にはブルーレイも真っ青なビューティホー画像が浮かんでいる事だろう。主にエロい方向で。

「ま、キサマがこの珠の話をしなかった理由も解った。
確かにこんな力があると知れたら勘違いした奴らがわんさと詰め掛けるだろうしな」

その勢力が正にしろ悪にしろ、彼を求めて様々な手段で攻め寄せてくる事は想像に難くない。

エヴァの言葉にそんなビジョンが浮かび、ヤな結末に行き着いたか冷や汗をダラダラ流してしまう横島。

「勘違いした奴らて何アルか？」

「自称正しい魔法使いとか、悪の魔法使いモドキどもとかの事だ。
正しい魔法使いとやらは、大抵『大き過ぎる力は個人が持つべきではなーい』とかぬかしながら攻めて来るだろうし、
悪の魔法使いモドキはその力を我が物にせんと攻めて来るだろう。
まぁ、極論なら、どの勢力にも渡すものかと始末しに来るだろうがな……」

“それ”が普通なのだ。

何せ魔法は秘匿するべきもの。その隠しとおせる範囲を飛び越え、概念を書き換えられるような力はあってはならないものなのだから。

だから横島を引き取った近衛の行動は、結果的にこの世界の安定を維持した事となる。

情けは人の為ならずとは良く言ったものである。

「しかし悪の魔法使いとやらは兎も角、正しい魔法使いとやらまで……」

理解はできるが納得はし難い。

楓は溜め息を吐きつつ肩を落していた。

「それが世界というものさ。

私なんか自分から進んで人を殺す気もないのに吸血鬼だからという理由で追いまわされたぞ？

魔女狩りの時代だったから尚更だがな」

「ああ、確かにそんな感じやったな。

ネットトラップに捕まった時は、そのまま火あぶりかと思ったし……」

「……何で魔女狩りの時代を知っているんだ？」

「いや、事故でタイムスリップして……」

「……」

「でも、千年前の京都の方がよっぽど人外魔境だったのはどういう事なんだろな？」

「……もういい」

兎も角、

その文珠の力は不安定になってはいるが、反面その出力が上がっているのが厄介だった。

何せ元々想像力さえあれば何だってできるアイテムだ。

その力の出力が上がっているという事は、効果範囲も広がっているという事。

おまけに、二つ以上の珠を連結させて意味を繋げればどんどん強力になってゆくという。

そのふざけた力と魔法と組み合わせれば大抵の願いも叶ってしまうだろう。

流石に時間すら移動できるというのには閉口したが。

「まぁ、一度に十数個連結させなきゃならないけどな。

その正確な方法も制御法も忘れちまってるから意味ねんだけど……」

「……いや、“できる”という時点で魔法世界の常識をも大きく無視しているぞ？」

それでもシャレにならないのだ。

極小規模範囲であっても瞬時に天候を操作できて物の概念すら書き直せる。そんなふざけた力を一個人が持っている事が異常なのである。

――だというのに、彼のいた世界ではそれほど重要視されていなかったという。

魔族にも『高が人間の力』という認識だけだったらしいし、兵器産業のデータにも珍しい珠を使う事ができるという程度の扱いだったらしい。こんなふざけた能力者であるにもかかわらずだ。

オカルトが世界的に知られている世界にいて、その力をＧＳという職業間という広い範囲に知られていて、それでいて直その力の悪用法に気付いていない。

なるほど、彼が言っていたように歪んだ世界だ。余りに“部分的だけ”が愚か過ぎる。

「どちらにしても、この力だけじゃやってられねぇ。

何せストックはできない事もないけど十分程度。咄嗟に使う事なんかできやしない。

戦闘中に一々生成して念を込めさせてくれる親切な奴が早々いるとも思えんしな……」

「ふむ……だからキサマは詠春に頼んだという訳か」

「ああ……」

様々な意味で“弱い”自分に、霊撃戦……いや、魔法使い相手に戦う方法を教えてくれる人を紹介してほしい。

これが、横島が詠春に頼んだ事である。

成る程。確かにこの文珠という代物は便利極まりない。

しかし、今言ったような弱体化も大きく、特に咄嗟の事態に使う事ができないのも痛い。

元々がこの珠に頼っていた記憶もある所為だろう、意識しなければ珠を使おうとしてしまう。しかし、その分とてつもなく隙が増えてしまうのだ。

何だってできる分、使っていれば頼り出す。

頼り出したら楽な方へ楽な方へと傾いて行く。

気付いた時には『頼っている』のではなく、『頼り切っている』状態となり、いざという時も文珠だけ使おうとするだろう。

“それ”が文珠を弱者に導くと評した理由である。

幸いにもあの京都の事件は一応の解決を迎え、彼の様々な問題も“教訓”とする事ができた。

犠牲を出さずに済んだお陰で、心の安定化と能力の底上げは重要だと悟る事ができた。

だから色んな意味で自分をの心を鍛え、珠を使わず魔法使い達と戦う為の方法を求めて詠春に頼み込んだのである。

まぁ、まさか元６００万ドルの賞金首吸血鬼を紹介されるとはこれっぽっちも思ってはいなかったが……

「ふむ……」

と、腕を組んで考える風を見せているエヴァ。

外見が大人になったままでいるので大きな胸が腕に押されてふにょんと形を変えている。

それを見ている古の目がみょーにキツイのだがそれは兎も角。

『さて、どうするかな……』

考え込んでいる見た目とは裏腹に、既にエヴァは鍛える気満々になっていた。

何せこの男。話を聞くと力に覚醒したのは十七で、魔人との戦いに最前線にいたのも同じ年齢だったらしい。

となると、戦闘能力がスカだった時から、最前線で戦えるようになるまで一年と掛かっていない。

単なる対人戦闘なら兎も角、魔族という強大な存在と戦うのに修行もせず、ただ経験と力だけで戦えたのならそれはとてつもない素質があったという事。

そしてその力に殆どの人間が気付いていなかったという事。

『コイツのいた世界はボンクラばかりだったのか？』

と首を傾げてしまう程に。

まぁ、魔族の軍人である戦乙女すら彼の素質を見誤っていたのだからしょうがないとも言えるが。

『しかし……どう鍛えてやるかな？　くくく……』

顔にも出ているが、エヴァは楽しくて堪らない。

何せ人間から言えば限りなく不死身に近い耐久力があり、その体力も獣人に匹敵する。おまけに退魔能力はプロだ。

更にこの小鹿、実は精霊だと言う。

精霊を契約だけで実体化させる程の力を秘めているのだから、それを見出して磨き上げるのも良いかもしれない。

そこに魔法戦闘を叩き込むのは難しいがそれ故に面白そうだ。

『ん？　魔力……？』

そう言えばこの男は何故か魔力を持っていた。
だがサーチして調べてみたのだが、この男“そのもの”は魔力をもっていない。

飽く迄も可能性であるが、記憶に混ざっている別の横島の記録に魔法を使える者がおり、スクナの魔力に共鳴反応を起こした……という仮説が建っている。

『無論、コイツの魂に別の“ナニか”が混ざっていて、それが吸収した魔力に共鳴した可能性だってあるが……』

そんな事を聞いたところでコイツが答えられるはずもないだろうし……と、エヴァは思いついた仮説を頭を振ってキャンセル。
珠の話を聞いた事によって浮かんだもう一つの仮説を思い浮かべてみた。

一番納得がゆくのはスクナの“それ”だったという説。

何だかこれも今一つ首を傾げたくなるのだが、ネギが横島から漏れている魔力に気付かなかったのは、スクナと同質だったとすれば確かに納得はできるのだ。

カモが感じていたように、木乃香を核にした召喚魔法はもちろん、スクナを形成していた力もまた魔力だった。
だが、魔力を吸っただけでは彼の言う力、“霊力”にはならない。
というより、横島の力はこの世界の定理に当てはめて言うと“氣”の範疇にはいる。
自分の中から汲み出すのだから魔法のそれではない。

魔力と氣はどちらも森羅万象　万物に宿るエネルギーの事である。
魔力は大気に満ちる自然のエネルギー精神の力と呪法によって人に従えたもので、氣は人に宿る精神エネルギー体内で燃焼させているものだ。
よって魔法使いは主に“マナ”を、氣の使い手は主に“オド”に頼っている形となる。

無論、例外もあるが大体はそんなものだ。

だが横島が使う“霊力”というものはその二つに似て異なる。
霊能力といものは、ぶっちゃければその二つの良いトコ取りで、精神エネルギーも自然のエネルギーも使う事ができるのだ。
元々が魂から出ている波動の様な力で、その魂から汲み出した力でもってそのどちらか、或いは両方を使う事できるらしい。

だからこの世界の常識に照らし合わせてみると横島は反則技の集合体。
元から彼はその隔たりすら突き抜けているというのに、珠の力を使ったにせよ横島自身すら理解し切れていない何かしらの方法によ

って『吸』った魔力を霊力にして『収』めていたと言うのだから。

つまりスクナから吸収し、霊力に変換した残りが周囲を漂っていたのを横島の魔力だと誤認してしまったという可能性だ。

無論、その仮説とて確証があるわけでもないのだが……

『……ん？　という事はナニか？
文珠とやらを使ったにせよ、コイツは吸収した魔力を自分の力に変換する事ができるという事なのか？』

ふと、そんな根本の事が気になった。

横島の中に僅かに感じた魔力の流れの方に意味があるとも知らず。最初に立てた仮説も正しいのであるが、そんな事にエヴァが気付く訳もなく……

しかしそんな事はもはや気にならぬ程、“ある可能性”を思い浮かべてしまったエヴァはその思考に完全に気を取られてしまっていた。

「ひょっとして……
オイ、横島忠夫」

「へ？　な、何？」

いきなり声を掛けられてちょっとビビる。

女王様波動には逆らえないのだろうか？

ちょっと気が緩んでいたのか、驚いて声が上ずっているし。

だがエヴァはそんな事を一切気にせず、指を鳴らして横島の腕を拘束していた縛めを魔法で解いてやった。目隠しはそのままだが。

「質問に答えろ。
お前は霊力とやらを使って肉体強化はできるのか？　或いはその技術は存在するのか？」

「へ？」

イキナリ何を聞いて来るんだ？　この美女（幻術）は。

固まっていた腕の筋をほぐしながら横島は首を傾げた。

「どうなんだ？」

「え？　あ、その……やった事はないけど、できない事もないと思うっス。
現に片腕だけとはいえ、霊波で覆って強化できるし。
そ、それと、身体強化とは違うけど、魔装術っていう霊波で全身を覆って肉体強化する術つーか技が……」

何だか目上に対する喋り方になっているが、目が見えない分、伝わってくる女王様な波動に反応してしまっているのだろう。

「ふむ……つまり、可能性としてキサマもできない事もないし、“できる人間を知っている”んだな？」

「あ、ああ……」

その答を聞いたエヴァは、何か思いついたのか急に顎に片手を当てて目を瞑って思考の海に心を沈めた。

三人をほったらかしにし、彫像のように立ち尽くして目まぐるしく知識をフル稼働させる。

、

「あの～……足、痛いんでそろそろ正座止めてもいいっスか？」

という横島の訴えも耳に入らない程に。仮に入っても素通りだ。

「シクシク……」

閉じられたエヴァの睫毛の長い瞼がヒクヒクと痙攣してる。

これはかなり思考を回転させているようだ。

この間の停電騒動時など根本から比べ物にならない。

その表情は魔法を研究していた頃のそれで、彼女は何十年ぶりかにものすごい速度で思考を廻らせていた。

楓らにはサッパリ解らない早口の言語で独り言が漏れ、そろそろ話し掛けなければなら無いかなぁ～？　と心配し始めた頃、

エヴァはニタリ……と唇を思いっきり不吉な三日月形に歪めつつ面を上げた。

「う、わぁ……」
「ぴ、ぴぃ……」

古達が怯えを見せてしまうほどに。

「……おい。バカブルー」

「な、何でござる？」

そんな古の横に立つ楓に、エヴァは突然声をかけた。

顔も向けず唐突に話が振られて楓は声が詰まっていたが、言うまでもなく気にするエヴァではない。

「ジジイから話は聞いているが、確かキサマは“あの”マグダラの聖骸布モドキを預かっているんだったな？」

「え？　ま、まぁ、確かにそう言った物は……」

ちらりと右手に目を落とすと、やはり彼女の右手には横島のバンダナとおそろいの色の布が巻かれている。

言うなればこれがスイッチで、これに意識を集中させて呪文を唱えると対になっている布が呼応して着用者のテンションを下げるのだ。

当然ながらエヴァは長く生きている魔法使いであるからその効果も知っており、更にはもう一つの能力も知っている。

この赤い布は元々が刑務所の暴動鎮圧用なので、ガスを抜くような感じに氣や魔力で強化した能力をもキャンセルさせる事もできるのだ。

ただ、お蔵入りになった理由が『布を外せば終わり』という事なので鎮圧用とは言い難いが、横島のように頭に巻いたままの相手なら話は別。その力を遺憾なく発揮できるだろう。

何せ楓にナンパ封じに使われていると言うのに、外す事を思いついていないのだから……

「ふん、丁度良いな……

タイミングはこちらで指示するから、私が言った時にそれを使

用しろ」

「は？　一体何を……」

「良いな？」

その念押しにイヤな予感が強まるのだが、彼女としては首を縦に動かす他ない。

確かに体術云々では引けは取るまいが、何せ今のエヴァは悪の魔法使いバージョンだ。どうこう言って逆らえる相手ではない。

それに事は横島に関係しているらしいのだ。だから彼女は只頷く事しかできなかった。

「ふむ……」

了承した楓を見て満足そうに頷くと、エヴァは二人を下がらせた。

成功するにせよ、失敗するにせよ、被害が及びかねないからだ。

我ながら甘くなったものだ……と苦笑しながらだが。

その実験（？）対象者である横島だが、彼は今何だかヤな予感が止まらないでいた。

つーか、不安も混じってどんどん高まって行くイヤ過ぎるスパイラル。

当然、背中も後頭部も汗でぐっしょりだ。

無駄に霊感が高い為、不安が高まると実質的な被害が想像できてタイヘンなのだ。

そんな横島の額に、ピトっと何かが触れた。

「わひっ！？」

「騒ぐな。指で触れているだけだ」

急に触られた事に奇声を上げた横島であったが、怒気はないが覇気の強い言葉の力でムリヤリ口を閉ざされる。

彼の額にはエヴァの右人差し指が押し当てられていたのである。

彼女は何かしらの単音の呪文を口にしていた。

「……解るか？　周囲にある気配を。
感じるか？　自分の身に纏わりついてくる力を……」

その言葉を耳にし、横島は額……丁度、第三の目といわれるチャクラの真上に当てられたエヴァの指から、何かの自分のものとは違

う感覚を得始めているのを感じる。

じわりとした熱さと、芯から痺れる不思議な感覚。

それが全身に広がり、何かが満たされたと感じた時、確かな動きを感覚が捉えた。

「……解る……解るぞ。

何だろう？　纏わり付くというより、歩み寄ってくるというか……

あれ？　でも何だか温泉の中にいるみたいな落ち着くっちゅーか、癒されるよーな感触も……」

「ふふふ……飲み込みが早いな……」

想像していた以上に素質がある。

それが確認できたからか彼女の笑みは更に深まった。

「……それが精霊の気配とマナの感触だ。

この別荘内はそれらを感じ易くなっているからな。

一時的に感覚を上げれば魔法のド素人でも感知できるようになる。

まぁ、キサマは霊感とやらがあるから尚更だろう」

「へぇ……」

別の感覚と言うか、第六感が磨がれると言うか、眼は見えないのに周囲が良く“観えている”というのは妙な感じである。
いや、霊波を辿れば観える事は観えるだろうが、それは“感じる”という感覚に近い。

今の場合の“観える”は、どこか別の場所から自分を含めた周囲を捉えているという感じがある。

自分がちっぽけなのも解るし、その一部を掌握しているという不思議な感覚も……

「……飲み込みが早すぎだ。“今は”そこまで知覚しなくていいぞ」

「え？　こんなもんじゃねぇの？」

「違うわっ！！
普通そんなに直ぐに上級感覚が持てるかドアホ！」

思った通り、この男は力の応用力がシャレにならない。

ネギ＝スプリングフィールドは確かに天才で知られているが、それは持っている魔力の容量と努力の賜物。
父親に劣るとはいえ、あの年齢からすればシャレにならない技量を持っている。

そしてこの男もまた天才だ。

あの子供魔法教師とはまた違って、魔力容量等がない代わりにこういった小技習得能力が異様に高いのである。

そしてその応用を思いつく速度も尋常ではないだろう。

これで“アレ”が成功すれば……

「……霊力とやらは魂から汲み上げる力だと言ったな？」

「え？　あ、うん」

「そしてキサマは汲み上げた力を収束する事に特化している……」

「つーか、それしかできないんだけど……」

“それ”が異常なのだ。

魔法使いに当てはめれば、魔法を放つ事はできないが、その魔力を収束する事はできるという事で、基本問題もできないのに、応用問題はできるという訳の解らない存在となる。

という事は、ちゃんと基本から教えれば“アレ”ができてしまうかもしれない。

それも自分すら完全に満足しきれていないアレの完成形に――

エヴァはその事を期待しているのだ。

「まぁいい……
さっきから周囲に感じているだろう？
お前を取り巻く力の源であるマナ……同じ要領でそれらを汲み上げて収束してみろ」

「え　？」

いきなり何言い出すの？　このエセ大人はと眉を顰める横島であったが、

「早くしろ。捻り千切るぞ　」

と言われればやらざるを得ない。

ナ、ナニを千切られちゃうの？！　と質問しかけたがウッカリ聞いてとんでもない答えが返ってきたら失禁しちゃいそうなので我慢した。

兎も角、言われた通りにやってみるのが得策だと判断して。

「その通りだ」

「心読まないでーっ！！」

実際にエヴァの指先とは魔法か何かで意識をつなげられているのだろう。指先を通じて感覚を強要しているようだ。

当然、思考もだだ漏れで、これで逆にエヴァの思考は読めないのだから流石である。

兎も角、横島は心の深いトコを読まれてヤヴァい事知られる前に終わらせちゃおうと、全感覚をマナの収束に集中する。

言うまでも無く横島は魔法を使う方法など知らず、当然ながら魔力を収束する方法も知らない。

だが、エヴァはあえてその技術を教えず横島の勝手にやらせていた。

その方が彼はコツを掴み易いと判断……いや、理解しているからだ。

そしてそれは間違いではなかった。

「え？」

「何と……」

楓ら二人にもその収束されて行くモノが見えている。

コツ……と言うか、やり方としては文珠を作り出す過程とあまり変わらない。
違うのは自分の中に感じていた力ではなく、周りを満たしている力というだけ。

思いつきで行った収束法であるが、珠を作り出すのと同じ感覚でやって余り間違いではないようだ。

横島が思っていたより上手くいき、どんどんマナが集まってくる。

何せ霊力をかき集めるのと違って、容量限界を気にしつつ自分の中から集める必要も無い。
要は集めまくった力を制御して収束する事が必要以上に難しいだけの事。

しかしこの男は収束に関しては『できてしまう性質』と言ってよいほど尋常ではない能力をもっている。

だからこうやってマナを固定するコツを掴む速さはバケモノじみており、あっという間にその右手には塊となったマナが出現しているのだ。

「くくくく……ここまでは予想通りだな……」

そのマナの塊を見てエヴァはほくそ笑む。

魔法にド素人の二人は解らないだろうが、横島の手の中に集まった力の大きさは中級の魔法に匹敵するものだ。

無論、魔法と言う方向を定めていないので、このまま叩きつけたとしても意味は無いが……

問題はこの後である。

「横島忠夫……」

「な、なんスか？」

まだビビリがあるようだ。

「修学旅行から帰って直、ジジイから話は聞いた。キサマ、摸擬戦でも敵ではない女に手を上げられないそうだな？」

「……」

「最初は甘っちょろい奴だと思っていたが……アレを見たら理解できたよ。

“あれ”では手は上げられまい」

「……」

エヴァの言葉に横島は終始無言。

口を開く代わりにマナの収束度が上がった。

楓と古はエヴァの言葉を聞き、顔を見合わせて驚きを見せる。

彼女が何を掴んだかは知らないが、間違いなく横島のトラウマにかかわる事を理解しているようなのだから。

「何を無くしたかは凡その見当はつくが……無理もない。
あれだけはっきりとした記憶を持ってしまっているのだからな……」

「……」

やはり無言の横島。

楓らは横島の心を案じたが、彼の表情には然程変化は無い。辛そうでも、悲しそうでも……

そして内心も小波は立っていようが、傷ついてはいない。

忘却は救いであると言う者がいる。

その言葉通り、心を傷つける記憶は掠れていけばいくほどその者への救いとなる。思い出す事があるからこそ傷つくのだから。

だが、克明過ぎる記憶は、忘れたい記憶すら薄れさせてくれない。

まるで目の前で今正に“それ”が起こっているかのように、はっ

きりと思い出させられてしまうのだから。

そしてそんな爆弾を抱えている横島を哀れに思いつつ――何故だかその歪みが好ましくもあった。

「だから私が力の手助けをしてやろう。
そんな事が二度と来ないよう、力を得る手助けをな……

……その代わり、報酬として“これ”を憶えてもらうぞ……

何、キサマにとって損にはなるまい？」

黒い。
笑顔が本当に黒い。

不死の魔法使い、人形使い、悪しき音信、闇の福音、禍音の使徒……様々な名で魔法界に広く知られている歩く災厄。
エヴァンジェリン＝アタナシア＝キティ＝マクダウェル。
悪の魔法使いの二つ名は伊達ではないようだ。

しかし、例外もあるのかもしれない――

表情に反して彼女の声は、慈母のように穏やかで優しい。

「確かにキサマのその克明な記憶は厄介だろう。事ある毎にキサマの足を引っ張るかもしれない。
キサマが想像しているように、状況によってはその暗い感情を暴走させるかもしれない」

「……」

あの夜を思い出し、ピクリと眉が動く。
後に下がった二人にしてもそうだ。

周囲に与えかかった被害。
そして後ろの二人を心底心配させた事が横島は今を持ってしても悔やまれる。

「だがな、その記憶は“記録”に過ぎん。
バカレンジャーが言っていたように、それはキサマではない。
確かに身体ごと貰っているかもしれんが、今の精神構造からすればキサマに酷似した別人に感情移入しているに過ぎん。

しかし、キサマ心の傷は深く、如何ともし難く、簡単に止まる程度の痛みなら苦労はすまい。

が……」

ふ……と、何故かエヴァの口元が緩む。

珍しく、優しげに。

そして嬉しげに。

「私がきっかけを作ってやろう。
これからもキサマを苦しめ続けるだろう“記録”でもってキサマを救う術を教えてやろう。

如何に苦しみの材料となろう記録だろうが、現実を歩んでいモノには敵わない。
その事を教えてやろう」

横島は、塞がれている眼を、マスクの下からエヴァに向けた。
何も見えない筈の眼に、闇の中で微笑みを浮かべている彼女が見えている気がする。

「……よく聞け横島忠夫。
キサマのその記録の中、今キサマが言った魔装術とやらを使っているヤツがいるな？
そいつに意識を向けろ」

その言葉に合わせて意識を傾けると一瞬の間もなく自称ライバルの姿が浮かぶ。
今目の前に存在しているかのような鮮明さで。

いやそれどころか真正面から相対しているそれの全てが理解でき

てしまう。

親友に近い相手とは言え、男の全てを理解するというのは言葉にするだけでイヤ過ぎる。

だが、余りに鮮明で克明な記憶は、“掌握”に近いレベルで“奴”のデータを横島に突きつけていた。

「……バカレンジャー二人。
気を抜くな。身構えてろ……」

「え？」

「何が起こるでござる？」

エヴァは横島から意識も目も離さない。
それだけ集中しているのだろう。

端的にそう言っただけで後は何も言ってくれない。

それでも彼女がそう言ったのだから、それなり以上の理由はあるのだろう。

すぐ言われた通り氣と霊氣を身体に廻らせて不測の事態に備えつつ、遠目で二人の様子を見守っていた。

二人が構えを取った事を感じるとエヴァは、横島に最後の指示を行う――

「では、そいつが力をコントロールしている所を思い浮かべ、手の中の集めたマナに力という概念を入れてみろ。
集めたのはマナだが、キサマから言えば自然が持つ霊気と言っても差支えない。
なら、“今のキサマ”ならできるはずだ」

「……」

横島は無言。

さっきのエヴァの言葉を噛み締めているカのようにその行為に集中しきっている。

しかし文珠に言葉を込める事に慣れきっている横島は、然程の苦労も無くその事に成功。

マナの塊には文珠のように字は浮かんでいないものの、魔法のように力の方向性を向ける事ができていた。

「いいか？　よく聞け横島忠夫」

それの成功を見、満足そうにエヴァは言葉を向けた。

「マナというものは万物に宿る力だ。

キサマにも私にも、後にいるバカ二人にも宿らせられる。

だがその力は不平等なまでに平等で、ボウヤのような『正しい魔法使い』にも私のような『悪の魔法使い』にも力を貸す」

そう自分を悪だとのたまうエヴァであるが、闇に身を置く者として闇の中での慈愛も持っている。

横島にとっての悪は“邪悪”。

あらゆる生者の尊厳も感じない存在だ。

そしてそういった勘の良さは相変わらずなのだろう。横島はエヴァの中にある闇の優しさに既に気付いており、そのこの場に込められた心を素直に受け取っていた。

だからこそ、成功率は格段に上がっているのだ。

「しかし世界はキサマに贔屓している。

キサマがキサマの言うように異物だろうが、世界はキサマをこの世界の一部として受け入れ、尚且つ異界の力も使えている。

これはキサマが世界に贔屓されている証拠だ。誇って良いぞ」

簡単な言葉。

世界に受け入れてもらえていると断言されるだけで何故こんなにも嬉しいのだろう。

アイマスクの下、横島の目の奥がきゅっと痛んだ。

エヴァは気付いるのか気付いていないのか、眼差しの柔らかさを深めて言葉を続けた。

横島の自信と、価値を高めてやりつつ……

「そんな世界に贔屓されているキサマだからこそ、

マナにすら懐かれているキサマだからこそできる――

引かず、恐れず、意識を外に委ね、

その手に集まった力……マナから得た力を文珠とやらを使うように内側に解放してみろ。

キサマが弱者を生むものと見ているその力が全ての基本を持っている。

それを使っていたからこそできるんだ。

“だからこそできる”のだ」

エヴァの瞳が、紅く輝きを見せる。

「やってみろ横島忠夫。

今のキサマが使える“魔法”を……」

見せてみろ横島忠夫。

キサマの力の一端を――」

彼の記憶の中にある魔装術の使い手の中、完全にコントロールし術を極めたものはただ一人。

使う者は後二人いたのだが、内一人は失敗して暴走。もう一人も魔族化してしまった。

しかしあの男……

自称横島のライバルだけは完全にその力をコントロールし切っていた。

そして横島は“ヤツ”が魔装術を極めた瞬間に立ち会った人間。

その瞬間の記録のチャンネルにはさっきから合わせたまま。

横島は“それ”と意識を重ねたまま……

右手に収束したマナを握り潰した――

ズ……ド　ム　ッッ！！！

「むっ！？」
「な、何アル！？」

魔装術は悪魔と契約を交わさねば使えない術であるが、霊力を全身に纏う事だけなら出来なくもない。
そして収束した力を自分のものにできる事は既に実証済みだ。
単にこれは収束に特化した力を利用し、収束した力を自分の中に向けて開放しているだけ。

たったそれだけの事なのに、横島の霊力は元の十倍以上になっていた。

竜巻のようにマナが混じった風が荒れ狂い、木々をへし折るかのような波動が押し寄せてくる。

身体……というより、横島という存在感が激増し、エヴァですら足を滑らせるように後ずさる。

「ス、スゴ過ぎるでござる……一体何が……」

「老師の気配が……あんなに大きく……」

二人も踏みとどまるのに必死だ。

身体か軽い　かのこがコロコロと転がって来たので何とか古が受け止めたのであるが、それ以上の事が出来ないでいた。

何せそれだけの力の奔流がそこに起こっていたのだから。

霊力による強化でも、文珠による強化でもなく、

魔法による強化に似、それでいて圧倒的な差異も感じられるそれ。

完全無属性な純然たる魔力だけを吸収し、その身が弾けんばかりの強化が成されている。

「フフフ……ハ、ハハハハハハハハハハハハ！！

“できた”か！？　やはりできたか横島忠夫！！」

吹きすさぶ力の嵐の中、エヴァはただ笑い続けていた。

想像していた通り、力を受け入れられた事に、
想像していた通り、“記録”が使えた事に
想像していた通り、“アレの基本が出来上がっていた”事に――

何れ(いず)“アレ”の完成形に立ち会えるという事に――

「くくくくく……そろそろいいか……

おいバカブルー。今だ、やれ！」

ひとしきり笑ったエヴァであったが、この程度で調子に乗る訳にはいかない。
幾ら嬉しかろうと、その歓喜に我を失うのはいただけない。

そう余裕を見せつつタイミングを計っていたかのように、楓に声をかけるのは流石である。

楓はそれを耳にしたが早いか、やや詰まりはしたものの前へと飛び出し、横島に向けて右手を掲げてキーワードを口にした。

「Ａｃｔａ（あくた）　ｅｓｔ（えすと）　ｆａｂｕｌａ（ふぁーぶら）．！！」

叫んだ瞬間、その布に縫い込まれている呪式が発動し、細かく刺繍が輝きを見せた。

それに合わせ、横島のバンダナも細かく輝きを見せ、横島のテンションをどんどん奪ってゆく。

「え？　あ、あぁ～～～～……」

五月病というか、鬱寸前までテンションが下がり、集まっていた力がプシュ～……っと漏れて膝から力が抜け、

次の瞬間――

ぼぱ――んっ！！！

「たわばっ！？」

見事、行き場を失った力によって自爆した。

「わぁっ!!　横島殿ぉ――っ!?」
「老師――っ!?」
「ぴ、ぴぃ――!?」

余りに事態に驚き慌てふためいて駆けつける二人と一匹。
横島は真黒になり、口や頭から煙を吹いて目を回していた。
というか、今の爆発で生きているのも凄い。
お約束どーり頭はアフロになっているが。

「え、衛生兵――っ!!」
「そんなのいないアル!!　落ち着くある!!　まずは霊柩車を呼ぶアルっ!!」

流石の事態に二人も慌てっぱなしだ。
別に怪我をした訳ではないだが、判断力が低下している古はとりあえず包帯代りに古は腰のリボンを巻き、楓はサラシをといてそれを巻いた。
しかしウッカリサラシを解いたとこを見せてしまったのが災いし、

ただでさえ半死半生の横島は鼻血を噴いて命の危機を迎えてたりする。

「横島殿!?　ナニ故――っ?!」

「先にソノ“凶器”をしまうアルっ!!!」

そんなこんなでしっちゃかめっちゃかだった。

「ククククク……」

しかし、そんな状況下、

「ククククク……フ、フハハハハ……」

当の惨事を引き押した当の張本人であるエヴァは尚も笑い続けていた。

「……面白い……面白すぎるぞ横島忠夫っ!!!」

言うまでもなく、彼のギャグ体質の事ではない。

それは、彼が思っていたよりアレに到達できそうだという確信から来たものだ。

横島が見せたそれは、エヴァ本人が編み出した禁呪の紛い物。

強さを求め、必死に生きようと足掻いていた時に得た力。

己が肉体に魔法を取り込み、その充填させた魔力で肉体を強化するというド外れた禁呪。その技のモドキである。

だが彼はいきなり使えた。

お世辞にも上手くいったとは言い難いが、それでも“できる”という確信を持たせるには十分なものだった。

「できるのか?!　できるというのか!?
基本も何も知らぬキサマが!!??　魔力なんぞ持たぬキサマが……!!!」

怒声のようであるが嬌声に近いそれ。

何をそんなに喜んでいるのか不明であるが、エヴァは横島を肴に大笑いを続けている。

「フハハハ……気に入った。気に入ったぞ横島忠夫！！！」

半死半生だが、やはり“慣れている（涙）”横島。ちゃっかり楓の生乳をガン見したお陰で霊力が回復していた。

とは言うものの出血多量で意識はないが。

そんな横島の元につかつかとエヴァは歩み寄り、ぐいっと襟首を掴んで引き寄せた。

横島は金髪美女（見た目のみ）に顔を引き寄せられ、又しても鼻血噴きそうであるが幸い（？）にして白目を剥いている。

「横島よ。

横島忠夫よ。感謝するがいい。

キサマを栄えあるこのエヴァンジェリンの下僕になる事を許可してやろう。

そしてこの私が直々に鍛え上げてやろう！！

我が配下に連なる化け物にふさわしい災厄の怪人としてな！！！」

実に偉そうであるが、その笑顔は無邪気そのもの。

何せこの男、扱いこなす事さえできれば一家に一台（？）欲しい逸材なのである。

ミョーに才能がある為、教え甲斐もありそうであるし、コイツがいれば魔力の補充は出来る。
尚且つあの超万能アイテム文珠を生み出す事が出来るのだ。

モノが強力すぎる為にまともに『解』『呪』なんぞ行えば吸血鬼の呪いすら解かれてしまうやもしれない。
どのような強力な魔法使いでもこの身を真祖とした呪いは解けなかったが、それは単純に力押しでする場合の事。
文珠は概念を書き換えてしまう為、可能性はゼロとは言えないのだ。

しかしその使い手である横島が魔法を理解し、その呪いの核を見つけだす事が出来ればおそらく『登校地獄』だけを解呪する事も可能だろう。
更には……

『コイツの能力の多様性を使えばナギの居所も……』

掴めるかもしれないのだ。

昔無くした希望や夢を一遍に取り戻した気分だ。楽しくて嬉しくて堪らない。

「どうだ!?　嬉しいか!!　光栄だろう」

目が石〇賢となっているところを見ると、嬉しさの余りイッちゃっているのだろう。
横島の襟首を掴んだまま、笑顔でぶんぶか振っていた。

カクン……

当然、横島に意識はない為、首は力なく垂れ下がるのだが、それを見たエヴァは余計に笑いが強まってゆく。

「そーか嬉しいか？　そーだろう、そうだろう……
アーッハハハハハハハハハハ……っ！！！！」

歓喜のあまりに大爆笑である。

「なっ！？　ち、ちょっと……っ！！」
「待つアル！！」

無論、黙っていられないのはこの二人だ。

いい加減どーにかしろよと言いたいほど横島に対して好意を高めているのだから、彼女に取られる訳にはいかない。

慌ててその間に割り込んで横島をかばう。

ゴインっ☆

その際、横島は後頭部を石畳に打ち付けてしまう事となったが、二人はそれどころではないようだ。

「横島殿は“拙者の”パートナーでござるよ!?　拙者に断りもなく下僕発言とは如何なる所存でござるか!?」
「老師は“私の”師匠アルよ!?　私に断りもなく下僕発言はどういうつもりアルか!?」

踏み込みは同時、
文句を言うのも同時なら、二人の言葉も同じだった。

「ぬっ!?」
「ムッ!?」

言い放ってからそれに気付いたか、二人は同じタイミングで顔を見合わせる。

仲が良いのか悪いのか解らないくらい同じタイミングでお互いの視線がぶつかり合い、火花が散った。

「前にも言ったはずでござろう？　横島殿は“拙者の”パートナーでござるが？」

「そちこそ忘れたアルか？　老師は“私の”師匠アルよ？」

火花と言うか、端的にスパークだが……霊的なものが仕上がりつつある所為か、二人の間には氣による“押し競”が発生している。

どこからか飛んできた木の葉が間に挟まれ、ズタズタに裂けて飛び散るほど二人の氣の圧は上がっていた。

修業は順調に進んでいるようだ。

教えている当の横島が二人の氣の圧によって死の淵に立ちそーであるが。

つい最近まで“裏”に関わっていなかった二人の成長具合に、横島の才能の片鱗を見たか、エヴァは実に満足そうな笑みを浮かべている。

楽しいおもちゃが向こうからやって来たのだから当然かもしれない。

ただ、あまりにオコサマな二人の具合に途中から苦笑に変わってしまうが。

「二人ともまぁ待て。

物のついでだ。横島忠夫同様、キサマらにも実戦を教えてやろうではないか。

私が満足がゆく成長を遂げた時、我が軍団の女幹部として迎えてやろう」

「何でそうなるアルか！？
どーして私達が「そうなると怪人という立場の横島はお前らのモノでもあるという事に……」よろしくお願いするヨロシ」

古の変わり身の早さに楓は呆れた。
とは言うものの。あまりに魅力的な誘いであるのも確かだ。

実戦経験がゼロとは言わないが、流石に魔法戦闘等は無いし、今までのように横島との修行を人気がない場所を選んで行う必要もないだろう。
魔法とやらの力を使えば人気を無くせるのだから。それに女幹部として横島を自分のものにできるし。

尚且つ彼のトラウマを理解しているであろうエヴァは彼に進むべき道を示してくれるやもしれない。
子供の発想しかできない自分らよりはずっと彼を癒してくれるであろう。おまけに横島とべったりいられそーだし。

そして更に、横島の全力が見られるかもしれない。
彼が状況に“克つ”人間である事は知っているが、何せ女子供相手には力が出せないときている。無論、その事は嫌いではないが、好意を持つ相手の強いところをみたいというのも確かだ。カッコイイとこをもっと見られるかもしれないし。

……何だかみょーな感情がチラチラ浮かぶが、それを差し引いてもデメリットが見られない。

何だ、答えは最初から決まってるではないか。

「言い忘れたが、この別荘は一度使用すると２４時間は外に出れんぞ。

尤も、竜宮城とは逆に外では１時間しか経たないようになっているがな。

急にお前らが来たから部屋は用意していないから、必然的に横島と同じ部屋で休んでもらう事に……」

「がってん承知でござるよ！」

休む場の“位置”をめぐって不毛なバトルをおっ始めた二人はほっとくとして、そのバトルの巻き添えをくらって宙を飛ぶ横島の骸（一歩手前）を目に入れながらエヴァはワラウ。

通り向けてきた過去を想い、ひょっとしたら見えるかもしれない向こう側を想い、彼女はワライ続ける。

魔力充填ならぬ、霊気充填による肉体強化――

私が十年かけて編み出した技であるが……コイツの特性と改良を加えたらどうなるか……

ククク……到達できなかった地平に辿り着ける……か？　別の世界から来たとはいえ、“ニンゲン”が……

フ……クククククク……

ハッ　アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

……

後編（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
もーね、自分なりにがんばったんですけど、まだ判りにくいですね。ゴメンナサイ。

要は、生きるのに疲れ果てた横島に、横っちが取り憑いたって感じですかねー。

もっと噛み砕いた文ができましたら差し替えますのでご容赦を。

次からはフラグと修業の始まりです。
ではまた……

1972

前編（前書き）

遅くなりましたがお試し版も＜修行編＞に入りました。

横っちの魅力を文珠だけにしたくなかったので、あえて半封印。

ネギま世界ではシャレにならない能力ですしね。

だから位置付けは『文珠使い』ではなく、『文珠“も”使える能力者』です。

私は彼の人柄が大好きですから、“珠だけ男”にしたくなかったもので……コレも賛否両論ですか？

前編

「ふん……思っていた以上に優秀だが、思っていた以上にめんどくさいヤツだな……」

等と責めるような言葉を口にしながらも、その唇は実にイイ感じに笑顔のそれを見せている。

言葉というものは前後が入れ替わるだけで誉め言葉になったり、貶し言葉になったりする。

当然ながらこのえらそーな金髪少女……エヴァンジェリンも国語的使用法は理解している。あえてそう語っているのだが。

だから実際の言葉の順番は逆で、『めんどくさいヤツだが、思っていた以上に優秀』というのが本音。

こーゆーヤツは誉めるより、ある程度貶し、その後でちょっと誉めて方が良い。

そういう事を理解しているからであろう。

流石は女王様。躾が厳しい。

「おい。聞いているのか？

親切な私がキサマの能力を解りやすく教えてやろう。

そうだな……キサマの能力をゲーム的に言えば……」

筋力　Ｃ　　魔力　Ｅ（＋α）
耐久　ＡＡ＋　幸運　Ｃ（＋α）
敏捷　ＡＡ＋　宝具　ＥＸ＋

●クラス別能力
セクハラ：ＡＡ　霊力が下がった時に自動発動。所構わずセクハラを行い、霊力を回復する。

●技能
煩　悩：ＡＡ＋　（説明する気ナッシング）
モラル：Ｂ－（時折Ｅ－）　女子高生未満の女性には萌えない。と思う。多分。きっと
回避力：ＡＡ＋　もはや神レベル
逃げ足：ＡＡ＋　上に同じ
霊能力：ＡＡ＋　少なくともこの世界では最高（というか、霊能力者と言える者がほとんどいない）

宝具　文珠　精霊かのこ

「……という感じか？
一見すると凄そうだが、マトモに戦闘に役立つであろうスキルは回避能力ぐらいしか無い。
見事なまでにヘタレだな。せめてマトモな戦闘スキルくらい持っておけ」

どこかで聞いたような表記法を口にし、それでもやはり嬉しそうな顔をしている。

ただ、彼のパートナーを自負している楓らによれば、ここ一番という場面での補正はシャレにならないらしい。

エヴァはまだその時を目にした事は無いが、それがまた大きなマスクデータで何とも楽しいのだ。

事実、彼女は当てる気で何度も魔法攻撃を仕掛けているが、まともに一発喰らった事がないのだから。

その魔法も……

『ワハハハハ……耐えてみろ！
Ｌｉｃ　ｌａｃ　ｌａ　ｌａｃ　ｌｉｌａｃ.
ｃｅｎｔｕｍ　ｓｐｒｉｔｕｔｕｓ　ｏｂｓｃｕｒｉ　ＳＡＧＩＴＡ，ＭＡＧＩＣＡ，ＯＢＳＣＵＲＩ！！』

闇属性の魔法の矢はｃｅｎｔｕｍ……数にして１００本だ。完全に本気だった事が窺える。

だが、それでも彼は受け切った。

『死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬっ！！　死んでしまうっ！！』

はっきり言って見苦しい泣き言がかなり目立っていたが、それでもその全てをサイキックソーサーとかで受けきったのだ。

話によると、光源氏計画を行っていた外道ロンゲ公務員が、その娘が彼になびいたので罠を張っておびき寄せ、暗殺せんとＭ９３Ｒをフルオートでぶっ放してきた事があったという。

その時に彼は、その外道ロンゲ公務員とやらが弾丸を発射してくるのを視認してから盾で受けていたらしい。

はっきり言って、絶対人間ではない。

その外道ロンゲ公務員とやらの話を話半分にしたしとても、現実に今彼の実力を目の当たりにさせられた訳であるから否定のし様が無いし、色ボケ忍者楓と馬鹿ンフー娘の古の様子から鑑みて、みょーに女を引き寄せるナニかがありそーなので、その計画にいた娘とやらがなびいていたと言う話もあながち間違っていないよーな気もする。

「ど、どうしたの西条君!?　兎に角、銃を捨てなさい!!」

「すみません先生……何故かあの馬鹿に天誅を加えねばならない気がするんです」

……なんか別次元で事件が起こりかかっているよーな気がしないでもないが、それは兎も角。

何を言っても反応しない“それ”を鼻先で笑い、ビスチェに似た黒いドレス姿ままエヴァは、すぐ側まで歩み寄って足元の“それ”をコンっと蹴ってみた。

――しかして“それ”はピクリとも動かない。

「ケケケ……
返事ガ無イ。タダノ屍ノヨウダ……ゼ？　ゴシュジン」

そう笑うのは、転がったままの“それ”の腹の上に立つ人形だ。

エヴァの従者である茶々丸をショートヘアーにしたような容貌のそれ。

ぱっと見は黒い服を着た人形で、小さくて可愛らしいという代物であるが、両の手に持った剣呑な得物……ククリナイフに似た大型ナイフで台無しだ。

“彼女”こそ、暗黒時代からエヴァに長らく仕えている人形の一体、その名もチャチャゼロである。

従者ではなく使い魔に近く、エヴァの魔力によって活動し、戦う。使い魔のようであり、彼女（？）自身がエヴァの武器のようなもの

だ。
尤も、今現在のエヴァは封印されているので、別荘内やエヴァの魔力が高まる満月の晩以外は喋る程度の事しかできないのであるが。
そんな彼女（？）は、サイズ的にでか過ぎるナイフを両手に持って転がっているそれを見下ろしている。
エヴァはその言い草と、無様に“それ”がころがり続けている事が気にいらないのだろうか、再度鼻先でふんと笑い、
「そうか、屍なら仕方ないな。
チャチャゼロ、刻んで海に捨てとけ」
「ＯＫ、ゴシュジン。
――極彩ト散レ！」
ざぎゅっ……！！
両手に持ったナイフが煌き、それが転がっていた場所に格子状の亀裂が入る。
いや、正確に言うと亀裂ではなく斬撃の跡。
ナイフを振りたくったチャチャゼロが、その可愛らしい見た目とは裏腹の驚くべき殺人技量で斬り裂いたのである。
当然ながら転がっていた“それ”も、その刃の葬礼を受け入れる筈であったが……

「ナゼ避ケル？」

「避けるわっ！！　ドアホっ！！！」

一瞬で“それ”としか形容できなかった肉塊から全体を修復し、器用にその身をひねって十七分割の恐怖から逃げ切っていた。

そのマンガ的な修復能力、驚異的な回避力から解る。“それ”と形容されていた物体は横島忠夫その人だった。

「キティちゃんも無茶すなやーっ！！
オレを殺す気かぁ――――っ！！？？」

完璧に涙顔でそうエヴァを怒鳴りつけるが、当の彼女は涼しい顔。それがどうしたといった塩梅だ。

「死んだふりしてサボっている方が悪い。
大体、キサマがあの程度避けられぬはずがなかろうが」

「当たったらどーすんねんっ！！！」

「防げばいいだけだろう？」

暖簾に腕押しとはこの事である。

とは言え、『できるのではないか？』という仮定で仕掛けた訳ではなく、ちゃんと技量を計っての事。
少しづつ攻撃速度や質、数を増やしていき、どこまで反応できるか確認していたからこそ言えるセリフである。

それに、えっぐえっぐと泣いている横島にしても、泣いた文句を言ったりと五月蝿くて適わないが、『やめる』とは一言も口にしないのだ。
だからエヴァの楽しげな口調も、その横島の心情が解っているからなのであろう。

「まぁ、防御と回避には文句はない。
何だかんだで周囲に気を配れ、尚且つ飛来する魔法全てに反応でき、チャチャゼロ“達”の攻撃も防げたのだからな」

「全部ニ反応シテクレルカラ追イカケンノハ面白ェケド、全然血ガ見エネーカラ　ツマンネーゾ」

「うっさいわっ！！　当たってたまるか！！」

ケケケと笑うキリングドールに、マジ泣きで文句を言う横島。
どうやら本当に生き人形と相性が悪いようである。ご愁傷様だ。

「だがな……」

そんな彼の様を眼に入れつつ、エヴァはフン、と鼻を鳴らす。

「全周囲攻撃には反応出来るが、全体攻撃には反応できんのは減点だ。

実際、足場に電撃を走らせると途端に感電したからな。

キサマの“普段の”魔法抵抗力はかなり低い。

もっと気合入れて防御しろ」

「無茶言うなっ！！」

実際、横島は魔法の矢とか、闇の精霊達による攻撃等は、見た目よりも効果範囲が広いサイキックソーサーで防ぎ切る事ができていた。

が、それは『盾で防ぐ』といった一方向のみの防御法。攻撃法が範囲氷結等の“場”に変れば当然盾で防ぎ切る事ができる訳もなく、良いように攻撃を受けてしまうのである。

ぶっちゃけ、毒ガスや石化の霧等を喰らう事になれば、珠の力を使用する他無いという事だ。

無論、そんな切羽詰った状態で珠を瞬時に生成できる訳がない。

そんな弱点を持つ彼に対し、

「魔力を纏うなりしてレジストすれば良いだろう？」

最強の悪の魔法使い様はそんな事を仰られた。

「オレは霊能力者やから、魔力なんぞ無いわーっ！！！」

余りに理不尽な言い様。横島の叫びも当然である。

しかし、当のエヴァは片眉を器用にピンっと上げ、不思議そうな顔をしてこう言った。

「何だ。やっぱり気付いていなかったのか……」

「ナニが？」

「横島忠夫。
キサマは恐らくマトモに魔法を使う事はできまいが、魔力“だけ”なら持つ事ができるぞ？」

「は？」

■十五時間目：ＴＲＡＩＮＩＮＧ　Ｄａｙ（前）

少女が一人、スタスタと道を歩いている。

いや、別段アヤシイ事もないし、彼女が一人でいたとしても『奇怪なっ！！』と身を縮こませる必要もない。

何よりパッと見はちょっと童顔気味の美少女であるし、その性格も可愛い。

バストサイズは標準レベルではあるがプロポーションが良く、そこはかとない不思議な色気を感じさせるしなやかでバランスの取れた身体をしていた。

登校途中という事もあって制服姿であるが、靴というか“沓”に近い扱いをしている履物を素足に履いて足元だけしっかりと固めていたりするが、その異様さより褐色の生足を惜しげもなくさらしている事もあってそちらの方に目が行ってしまう。

麻帆良学園中等部の生徒にして中国武術研究部部長、古　菲その人である。

相変わらず年齢度外視の技量持ちの部長様であるが、勉強は不得意ながら学校が嫌いではない筈の彼女は、何時もなら笑顔で登校している。

子猫を思わせる愛嬌のある笑顔を振りまきつつ、テスト前でも軽い足取りはその日に限って何だか鈍かった。

そしてその表情もどこかぶすったれてたりする。

「……つまんないアル」

眉を顰め、口からそう零すと、空に向って溜め息一つ。

何時になく元気を感じられない様子だ。

いや、別に体の調子が悪いとか、悩み事があるといった事情ではない。

単に放課後の特訓がないだけなのだ。

とは言っても普通の武術トレーニングは何時もやっている。
拳法の型を整えるだけでも相当の時間を取るし、それ自体も容易ではないので修行にならない訳でもない。
単に特別な特訓ができないから……なのであるが、

「一週間はちょと長いアルよ……」

その間隔が長い事が彼女を落ち込ませている要因なのである。

え？　僅か一週間？　という気がしないでもないが、一日分の筋肉衰えを回復させる為には三日は掛かるというように、武術の鍛練は一日でも疎かに出来ないのだ。

毎日の積み重ねこそが昇華への道であり、その道には近道などありえない。
だから“首領”の命令であろうと、件の特別な修行を一週間もの間休むという事は、それだけ数値になら無い怠惰という贅肉を付ける事であり、一流の武術家を目指す古にとっては苦痛で……――

「一週間も老師と会えないアルか……」

まぁ……建て前はその辺にするが……
要は古　菲、一週間も師である横島に会えないの事が、ものごっつつまらないのである。

大首領（エヴァ）曰く――

『この男には魔法知識やら“この世界”での魔法戦闘やらのスキルが無い。
折角の素材だからな。根本から鍛え尽くしたいのだよ。ククク……

まず横島につきっきりで基本を叩き込んでやる。
キサマらと修行するのはその後だ。

そうだな……これから一週間は横島忠夫に教えを請う事を禁ずる』

無論、術等の知識が“向こうの世界”準拠である横島からこの世界での正しい魔法戦闘法を教えてもらえる訳も無いし、彼の持つ知識も途切れ途切れなので今一つだ。それに中途半端な知識は無知より怖い。
だから基本を理解した横島と共に学べる方が確実性が硬いし、理に適っている。

それに古は、横島が例の“奥の手”以外のスキルを高めたいと願っている理由に納得していたのだ。

あの力はあまりにも便利過ぎて、下手をするとあの能力の“使い手”から、道具に“使わされる者”になりかねない。

何せ“術”というものに疎い古は元より、楓やエヴァですらあの力の利便性の高さに呆れ返ったほどなのだ。

攻撃を防ぐとか、攻撃に使うとかだけではなく、天候すら操り、如何なる状況も生み出す事ができる。

消滅しかかった精霊を一瞬で蘇生（修復？）させ、物質の構成概念すら書き直し、如何なるモノであろうとイメージを固めた概念を押し付ける事が出来る。

尚且つそれはあくまでも概念なので障壁等で防ぐ事は不可能に近い。仮に防げたとしても、如何なる障壁も紙屑同然に出来るし。

……成程。確かにこれは反則にも程があるだろう。

だからこそ彼はこれに頼り切りになりたくないのだ。

ただ便利な道具に頼り切る“だけ”の戦い方を続ければ、その汎用性とは裏腹に使う手は先細りしてしまう。

折角の手数を自ら削り落とし、いざという時に“便利すぎる道具”に縋って取り返しのつかないミスを犯してしまいかねない。

拘り過ぎて他の手を忘れ、戦いの真っ最中に珠を生成する事のみに集中しかねない。そんなバカになって逃げ惑うだけの邪魔者になりかねない。

時と場合によってはそんな時間すら惜しいというのに。

だからそんな致命的な失敗をもう犯したくない。

便利に縋って自分を退化させたくない。
そんな男になりたくない――と、自分の可能性を伸ばすという意志を横島は固めていた。

あれだけの力を持っているというのに、道具に使われ振り回される恐怖をちゃんと理解しているのにはエヴァはもちろんの事、古も楓も感心していた。

この世界において、こんな強力過ぎる力を持っている事に対する危機感もしっかりと持っているし、これがあくまでも便利な道具に過ぎず、確かにメリットは大きいがそれ故のデメリットの巨大さもちゃんと理解できているのだから。

だから彼の言う事も納得できるし、エヴァによる拷問一歩手前の超集中講座が行われる事も理解できる。

が、それとこれとは話は別なようで、そんな無茶（？）な提案を容易に受け入れるような古達ではなかったりする。

即ち、

自分らは横島忠夫のパートナーであり、弟子であるから、彼と共に修行を受ける権利がある！！

これが二人が放った屁理く……もとい、“理由”であった。

尤も、いきなり大首領を自認するようなエヴァだからそんな安っ

ぽい理由など聞く訳もないし、

『何だ嫉妬か？　勘違いするな。私は人の男に手を出す趣味はない』

と言われたら二の句が出せない。

いや、説得力があったとか、納得できるだけの理由だったとかではなく、『人の男』と言われて硬直してしまっただけなのであるが……

何で硬直してしまったのかは相変わらず自覚できていないスカスカな部分は兎も角、その上で、

『それに、その一週間の間にもっとちゃんとした“修行場”も用意できるのだぞ？
そうなると広大なスペースに二人～三人きりになる事も多いだろう。

誰の眼も気にならない場でな……』

等と言われ、う〝……っと、二人は息を飲んだ。

『一週間……その間にコイツはどれほど強くなれるのだろうな？
そしてその強くなったヤツの凄さをお前達が、お前達だけが味

わえるのだ……

良いとは思わんか？』

そんな事言われて反対できる訳がないではないか。

ナニやらそんなセリフをぶちかますエヴァの瞳がギュピピーンと怪しく輝いていた気がしないでもないが、ナニを想像したか顔を赤くしてボ～っとしてしまっている間に済し崩し的に話がまとめられ、二人して別荘から追い出されてしまったのだ。

後悔しても後の祭り。

再度別荘に入ろうにも鍵でも掛けられた（？）のか入られなくなっており、何時までもここにいてしょうがないので溜め息を吐いて楓と共にエヴァの家を後にしたのだった。

そして朝――

古はまだ溜め息というか、妙な苛立ちを胸に抱えたまま登校しているのである。

「……大体、エヴァにゃ……大首領はずるいアルよ。

考えてみたら一ヶ月以上、老師と二人でいるという事アル」

茶々丸とチャチャゼロもいるが、当然カウントされない。

どちらかと言うと、茶々丸はネギ坊主に気が向いている（↑ナゼか確定）し、チャチャゼロにはそもそもそう言った感情はない。ハズだ。多分。

しかし……

「く……老師だから油断できないアル……」

信用があるのか無いのか。

ある意味絶大な信頼であるが、古は何だか悔しげにそう呟き、足取りを尚も重くする。

横島からしてみれば言い掛かりも甚だしく、

『オレにお人形さんを愛でろと言うのか!?　何の罠やそれはっ!!』

等と怒涛の涙を振りまいて文句を言うだろう。

しかし楓も古もそう言った信用は出来ない。

何せ彼は“横島”なのだから。

『何やそれはーっ!!　泣くぞーっ!!??』

既に大泣きしいている横島の画像が雲間に見える気がする。

やはり古は重傷のようだ。いや、“重篤”か？

何に対して？　と問うと首を傾げるのだろうけど……

相変わらず自分では理解できない想いを溜め息で零しつつ、足を引き摺るように……とまでは行かないまでも、何だか登校するのもおっくうなローテンションのままやっとこさ校門が見えてくるところまでやって来た。

と――？

「――古部長」

「ん？」

自分を取り囲むのはむくつけき男ども。

十や二十ではすまない男たちの群れ。

皆が皆して古よりも体格はがっしりしており、最低でもその身体は彼女の倍はある輩ばかり。

おまけに全員、暑苦しいまでに『格闘家してまーすっ！！』なオーラが滲み出ていた。

ナゾのガクランやら袖を千切った変形胴着やらの格闘コスプレの集団に見えなくも無いが、その出で立ちが表すように彼らはれっきとした麻帆良学園の武術部部員達である。

ハッキリ言って、ビジュアル的にも近寄られるのはご遠慮願いたい集団であるが、もはや恒例となっているのでしょうがない。

――そして“恒例”であるのだから、もはや説明は不要だった。

「「「「「「今日こそ勝たせてもらうぜ！！　中武研部長　古菲っ！！！」」」」」」

全員一斉に闘気を燃やし、せめて一撃なりと…と拳を振り上げて襲い掛かってくる。

だが、その地響きにも古は全く動ぜず、手にしていた鞄を地に落とし、

「まぁ……ちょとは気が晴れるアルな」

と、唇を舐めた。

「よ、弱すぎるアル……」

男たちは数分を待たず地に伏していた。

言うまでも無く古は短い間ながらも楓と共に横島の元で霊力の鍛練を続けており、その後で彼と組み手を行っている。

地を駆け、打ち、蹴り、払い、自分が持っている全てをもって彼と闘り合っていた。

しかしその内容は惨憺たるモノで、全戦全敗。古の実力を知る者達ならば決して信用しないだろう程だ。

しかし現実は彼らの想像の斜め上４５。を更に飛び越えるほど厳しい。

何せ楓と組み、尚且つ彼女に分身の術を行ってもらっても一撃はおろか掠らせるのが精一杯。

楓は十数体に分けた分身ごと、そして自分は攻撃の間隙を狙われてハリセンを喰らっているのだから。

だが、そんな腕を持つ横島を相手にしているからこそ得られるものも多い。

そして修学旅行の間には異界の強き者達と命が懸かった真剣勝負

を行っている。

それらの事が彼女の強さの格を少しだけ引き上げていた。

何せ古も楓もホンモノの“使い手”達を肌で感じているし、神レベルの回避スキルを持つ横島とやり合っている。

アマチュア格闘家に毛が生えた程度の彼らでは話にもならない。

比喩的表現ではなく、本当に止まって見えるのだから。

「しまたアル……老師の動きに慣れている分、遅すぎて手加減が難しいアルよ」

今の古からしてみれば彼らは乱立するサンドバック。

まさか自分が僅かながらでも強くなれたお陰で、こんな事で困ってしまう日が来ようとは夢にも思わなかった古であった。

「くーふぇさーん！」

そんな困惑気味に佇む古の背後から声が掛かった。

「んあ？　あ、ネギ坊主……づぉ、早上好」

考え事に意識が入っていた古であったが、聞きなれた担任の声を耳にした事で我に返り、すぐに朝の挨拶を口にする。やや誤魔化し混じりであった為かやたら丁寧な中国語であったが。

そんな彼女が戦っているのを遠巻きに見守っていたのだろう、駆けて来るネギの背後には明日菜や木乃香、楓の姿もある。

何となく感心してしている眼差しがくすぐったい。特に楓のものは同じ相手と修行をしている事もあって尚更だ。

尤も、楓の場合は自分も混ざりたかったという色もあり、『あぁ、かえでも八つ当たりしたかたアルか……』と微妙な納得もさせられたのであるが。

妙な考え事をしている間に、彼女らを後に残して駆けて来ていたネギが古の元に到着した。

「ハイ、おはようございます。
……じゃなくて、何してたんですか!?」

ウム　まだツッコミが甘いアルな。と古は口の中で呟く。
生粋の関西人と同じと考えてはいけないが、すばやいツッコミを堪能（？）している古から言えば物足りないのだろう。

兎も角、そんな言葉を口にはせず、

「何て……挑戦者と戦てただけネ。

相手と納得付くのバトルをしてたアルよ」

極簡素にありのままを己が担任に語った。

小柄で体重も軽い女子中学生の古であるが、その中身は学園内最高レベルの拳法家だ。

そんな彼女の腕前を知った学園内の武道関連部の中でも腕の憶えのある連中が、腕試しに戦いを挑んでくるのである。

言うまでもなく、最初の頃はかなり侮られていたらしいが、流石にこれだけ見事に惨敗を喫すると心を入れ替えたらしく、それ以降は本気で立ち向かって来ている。

しかしリベンジにと再度挑戦して敗退。

そして彼女の腕を更に正しく理解し、本当の意味で戦いを挑んでまた敗北。

その腕を聞き、覚えのある者が集まって更に更に挑んでまた敗北。

高等部や大学部の者も加わってみるもまた敗退…と、その繰り返しによって男らは日課が如く彼女に勝負を挑んでは吹っ飛ばされる日々を送るようになっていた。

尤も、最初の頃は兎も角、今の男たちは負けたとしても悔いは全く無い。

それだけの高みを味合わせてもらっているのだ。それに追い付くべく必死に駆けて行くのもまた武の道であるのだし。

ただ、横たわっている男たちは、『う、うう……流石だぜ菲部長』『技のキレが素晴らしい……ハラショー……』とか呻き声ともつかない賛辞を漏らしつつ何か嬉しそうだ。

何だかんだ言って彼女の強さに惚れているミーハー部分もあるのだろう。殴られどつかれ蹴られ払われいなされて喜んで……いや、“悦んで”いる。

案外、Ｍっ気があるだけかもしれないが。

『まぁ、今日のトコロは八つ当たりに近かたわけアルが……』

そんな言葉を飲み込みつつ、足元に転がる男たちに対しちょっとだけ申し訳なく思う。飽く迄もちょっとだが。

大体、本当に悦んで殴られに来る輩も多いので、単に弱いだけで何の実にもならないし、その表情もヘンタイっぽくて辟易としてしまうのだから。

僅かとは言え以前より強くなってしまった分、不完全燃焼になってしまった古は溜め息を吐いた。

その僅かな隙に――

「まだじゃあっ！！　菲部長！！」

倒された男たちの一人――ガクランの隙間から覗くTシャツの文字からすれば高等部の空手愛好会――が、おそらく意識は殆ど無かろうのに立ち上がり、最後の力を振り絞って拳を振り上げてきた。

それも、

「うひゃあっ！！」

「ネギ君　あぶなーっ！？」

意識が半分飛んでいる所為か、ターゲットを完全に見誤ってネギに向って。

ネギの素っ頓狂な悲鳴と、木乃香の悲鳴が重なる。

無論、優秀な魔法使いであるネギは魔法で防げない筈もない。しかし彼は余りにいきなりの事で全く反応できていなかった。

少年の倍以上もある体格の空手家の渾身の一撃。頭部が粉砕してもおかしくないほどだろう。

しかし――

「ふシ……っっっ」

ズムッ！！

一瞬速く間合いを詰めた古が、ネギを庇いつつその空手研究会の男の腹部に掌底を叩き込んでいた。

以前の古ならば得意の崩拳等を叩き込むであろうが、今の古は楓と共に修行を行っているし、多少なりとも霊撃ができるようになっている。

とはいえ、氣と霊力の修行バランスはまだ完全ではなく、そんな彼女がきちんと手加減もせずに崩拳なんか放ったりすれば相手に深刻なダメージを与えかねない。だから咄嗟に掌底に切り替えていたのだ。

ネギを庇いつつ行った咄嗟の判断であるが、流石は武人。的確である。

まぁ……

「かはっ！！」

その手加減して放たれた掌底ですらパワーが上がっていて、十数メートルも吹っ飛ばされてしまった事はしょうがないだろう。

掌底から放たれた衝撃が、男の全身を波のように駆け巡り当然ながら大失神。完全かつ徹底的に落ちていた。

「ア、アイヤ……ちとやり過ぎたアルか……」

タラリと冷や汗を垂らす古であったが、飛ばされた当の本人は満足げ。

むしろエエ技もろたと言わんばかりだ。

格闘家は試合等で倒された時、最後に目にしたものが人であれば目に焼き付いて忘れられなくなるという。

何時も何時も古にぶっ倒されている彼らの眼には、当然の如く意識を失う直前に古の勇姿が焼き付いている訳で……

いや、殴り倒されて勇姿を目に焼き付けるのが快感に昇華されている可能性も……

誘蛾灯に群がる羽虫のように彼女に戦いを迫る彼らの真意や如何に？

「と、兎に角、ネギ坊主。大丈夫だたアルか？」

「え？　あ、ハイ」

自分が見せた惨事を見なかった事にし、被害に遭いかかったネギを労わる古。

そのネギであるが、謂れの無い拳を喰らいかかった驚きより、む

しろ体格差を全くものともせずに撃ち飛ばした古の技量に対する驚きの方が大きかった。

そしてそれらを行った直後であるのに息一つ乱していない。

これは古の動きに全く力みや無駄が無かった事を意味している。

とりあえず路上試合は終了したので自分の鞄を拾い、パンパンと土埃をはたき落す。

それを見届けた明日菜達も寄って来たので登校を再開した。

「くーふぇさん、強いんですねぇ」

「いや、真名や楓に比べればまだまだアルね」

木乃香や明日菜は古の事を全然心配していなかったし、楓は古同様にやや元気が無いから彼女をほっといたっポイ。無論、楓も古を信頼しているからこそそうしたのであろうが。

その三人の後ろをついてゆく形でネギは古と並んで歩いていた。

そんな古に対してネギが賛辞を送るも彼女は笑顔で否定している。

謙遜ではなく、歴然とした事実。

真名にも楓にもまだ勝てる気がしないのだ。

確かにアーティファクト（というか、魔具）は手に入れたが、それは別に彼女自身が強くなったわけではない。

彼女が修学旅行の間に少しでも前に進み出れたと理解できるのは実戦を経験したからであり、言うなれば経験値が入ってレベルが上がり、報酬として道具を得たようなもの。
決して道具のお陰で強くなったわけではない。

それに飛び道具を無力化できる魔具を手にしたとは言え、そんな道具を手にしただけで真名に勝てるとは到底思えないのだ。

尚且つ……

『道具に頼り切てしまうと本来の自分を見失てしまいそうアル』

“道具に使われたくない”という、横島の気持ちが心に残っていた。

古の得意とする拳法は形意拳と八卦掌。後は八極拳と心意六合拳を少しばかり齧っている。

因みに心意六合拳は河南省伝来の回族に起源があるといわれており、獣の形と意を真似た十種の単式拳と、数種の套路，槍術，大型のヌンチャクである長梢子棍等の武器術等から構成されており、八極拳同様に強力な発勁で知られる拳法であるらしい。
形意拳の原型であるとも言われているが、有名であるはずのに今一つ日本では名が知られていない。そんな『知る人ぞ知る』レベルの拳法ですらそれなり以上に使える彼女はその若さから言っても強過ぎるほど強いのだが、やはり強さを追い求める気持ちは本物のようだ。

そんな彼女だからこそ単純な格闘戦“だけ”なれば真名にも楓にも引けは取らない自信を持てているのだろう。

しかし、道具に頼り切った戦いに慣れてしまうと、そんな格闘戦ですら勝てなくなってしまいかねない。

それは自分は元より武術仲間で霊能仲間である楓も納得できない話なのである。

「？　くーふぇさん？」

「へ？　あ、いや、なんでもないアルよ」

いきなり笑顔を潜めて無言となった古に気が付いたネギが問い掛け、その声で彼女も現世復帰を果たした。

『やぱり、まだまだ駄目アルなぁ……』

と、腹にたまった横島や自分の事を溜め息で吐き出しつつ、古は何とか笑顔を汲み直して明日菜達と共に学び舎へと歩を進めていった。

まだ一日目だというのにこの体たらくだと別の意味での溜め息も吐いて……

そんな古を見つめるネギの眼差しに決意のようなものが浮かんでいる事に気付かぬまま――

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊

ギィ……ギィギィィイイイイ……

何かが軋むような音が人気の無い廊下に響き渡る。

放課後の学校。

クラブ活動に励む生徒らは兎も角、帰宅部の連中もとっとと帰り、教室の中には全く人の影が見当たらない。

普通の学校なら授業が終わってもダラダラと教室で話し続けているかもしれないが、ここ麻帆良学園の生徒らは中等部以上となると寮生活者が多く、必然的に友人らと過ごす時間は部屋に帰っても然程変わらない。
だから帰宅部もとっとと寮に帰ってしまうのである。
そんな人の絶えた校舎内を無気味な音が響いていた。

件の音と共に響くのは何かが滴り落ちる音――

ギリギリと締め上げる音がきつくなると共に、その水音もか細くなって行く。

ポタ、ポタッと滴が水溜りに落ちる音を最後のその二つの音は聞こえなくなる。

遠くで聞こえるのはスポーツに励む運動部の声。

傾いてきた陽によって朱さを増して行く教室。

そんな教室の廊下の窓に影を落としつつ、その音の主は前かがみで蠢いていた。

ギリ、ガジョン……

その作業に飽いたかのように、その音の主は絞り上げていた“それ”を噛ませるのを止め、ずるりずるりと滑るそれを引きずり出してゆく。

――そう、終わったのだ。

「ふ～……よし、今日も終了っ」

教室内のモップ掛けが。

一生懸命すすいだモップモ、脱水用のローラーから引きだしたがやはり白くなったとは言い難い。

流石に毎日元気すぎる少女らが走り回っている廊下だ。

如何にワックスで磨かれていようと乾拭きをすれば僅か一二回で水は“ド”がつくほど真っ黒になってしまうのだから。

これが少女らの腹黒さだったやヤダなぁ……等とミョーにトラウマった事を思い浮かべてたり。

現にその汚れた水には何故か白い小鹿は近寄って来ないし。

イヤイヤと頭を振って何とかそれを振り払い、今絞ったばかりのモップ肩にのっけてバケツを持って廊下を後にした。

「……っかし、体だっる～～……」

青いツナギを着用し、両手に軍手、頭には赤いバンダナを巻き、小鹿を伴って足を引き摺るように廊下を歩いているその用務員。

言うまでもないだろう。横島である。

エヴァに修行をつけてもらっているはずの彼が何で“表の仕事”をしているのかと言うと……いや、別に何の不思議も無い話で。

彼女とて病気にでもなっていない限り、定時に登校だけでもしておかねば例の登校地獄という呪いによってエラい目にあってしまう。だから結局、休日でもない限り、外の登校する時間までしか横島にかまっていられないのである。

横島の方も修行をつけてもらっているだけなので、表の仕事をキャンセルさせる訳にもいない。まぁ、横島だけ休ませるのが癪に触るだけなのかもしれないが。

だから修行時間は夜の見回りを言い付かっていない限り、仕事が終わってから朝まで別荘で缶詰状態とされてしまうという取り決めが行われてしまったのである。

彼の方から頼み込んだ事もあって反対するのは意味が無いし、何より敵なら兎も角、女王様オーラを持つものに横島が逆らえる筈もない。

よってこの地獄のようなトレーニング設定が組まれてしまったのである。

兎も角、そう言った拷問に近いハードスケジュールの第二日目はようやく終わりを……

「ジャネーゾ。コレカラオッ始メンノ忘レンジャネェヨ」

「うっさいわっ！　現実逃避ぐらいさせてくれい！！」

胸ポケットからの声でいきなり現実に引き戻される横島。

そんな彼の嘆きを耳で感じたか、そのポケットの中に間借りしているヤツがケケケと笑う。

「ドチクショオ……オレには心の安らぎも与えてくれんのか」

「カノコ　ガ　居ンダローガ」

そう言うと、件の小鹿が『ぴ？』と首を傾げつつ見上げてくる。

確かにその仕種も可愛いし、癒されてる事に違いは無い。

例えば横島は一人暮らしをしているのだが、夜中ふと目覚めた時などに直側のクッションで丸まって寝ている　かのこを見つけ、ふっと口元が緩ませている。

無聊を慰めるとか良く言うが、生活に彩ができた事を否定する材料は全く無いと断言できるだろう。

できるのだが……

「何か、こう……解んだろ？
下腹に堪るナニな活力をどーかしたいっつーか、ドドメ色の波(オー)紋疾走(バードライブ)を放ちたいとゆーか……」

「知ルカ　コノくそやろう。
ソンナオメーダカラ、ホットクト覗キヲ敢行シソーデ困んダヨ。
オメーガ捕マルトすけじゅーるガ狂ウッテ　ゴシュジンモ言ッテルシナ」

「ナニその言いたい放題!?
つーか犯罪行為前提!?　おまけにタイーホも前提!?」

「自分ノ胸ニ聞ケヤ。コノ性犯罪者」

「人聞きが悪いわっ！！」

彼の胸のポケットからピョコンと顔を出しているのは、見た目“だけ”なら何とも可愛らしい少女人形。

面立ちがエヴァンジェリンの従者である茶々丸に似ており、こちらはやや短く髪が着られている。そんな人形の口からあんな言葉が飛び出しているのだから違和感と驚きは相当なものであろう。

主であるエヴァがこの地に封じられて十数年。昔のように自在に動けなくなってはいるが口は立つようで、横島は事ある毎に憎まれ口をたたかれまくっているのだ。

その人形こそ、今の横島から言えばある意味先輩とも言えるエヴァ最古参の下僕、茶々丸の姉に当たるチャチャゼロであった。

何と言うか……いい歳こいた男が作業用ツナギの大きめな胸ポケにお人形さんを突っ込んでいる様はイタイ人そのものであるが、言うまでもなくこれには訳がある。

彼は普段、霊力が満タンの状態ならば意外なほど紳士的になるような体質になっていた。

どういった経緯でそうなるのかは記憶そのものが消し飛んでいるので不明であるが、とにかく溜まっていさえすれば妙なモラルと時と場合をキッチリみられる人間になれるのだ。

が、それは霊力が溜まっている状態のみで、こちらの世界に来てから修学旅行の間までで解った事であるが、彼は霊力が下がり始めると急速充電を行おうとするかのように、煩悩が激増してセクハラ……というか、犯罪行為を行い始めるのである。

見事に反比例グラフを描くそれは、霊力が無くなればなくなるほど激しくなるようで、カラの状態にまでなると古まで危なくなってしまいかねないほど。楓など完全に危ないだろうし。

流石にエヴァの普段のスタイルなら兎も角、茶々丸の姉達ですらその身が危ぶまれてしまう。

当然、一般の女子生徒……主に女子高生や女子大生等の危険度は如何なるものであろうか想像に難くない。

だからお目付け役としてチャチャゼロが押し付けられたのである。

かのこは方は解らんでもない。

実験的に麻帆良内で鹿を放し飼いにする事になったのだが適当な飼育員が都合が付かなくなり、小鹿の引取りに行った際に懐かれた横島が臨時に担当をする事となった――という設定を周囲が鵜呑みにしてくれたのだ。

言うまでもなく、認識疎外が働いてくれているお陰であろうが、それでも彼の本質を周囲に知られている事が大きい。

チャチャゼロにしても、前述の通り女の子人形をポッケにナイナイしている青年なんぞイタイだけであるが、『世話になっている先の女の子が、お目付け役に持ってけってうるさくて……』という説明をしただけで周囲は納得の色を見せている。

ナンパ云々の行動にサッパリ信用の無い彼であるが、仕事場のオバちゃんズやヲッさんズ達には深いところを見抜かれているだ。

ドスケベでしょーもない事ばかりするが、妙なトコで真面目であり無意味にモラルが高く、何だかんだ言って女子供に底抜けに優しい男である――と。

だから、女の子に押し付けられた人形をわざと家に忘れてくるといった事ができず、律儀に『肌身離さず持っていて』という約束を守ってしまう人間であると皆が理解しているのだ。

相変わらず妙なトコで信頼されている男であるが、横島から言え

ばそんなあたたかい眼差しも、生あたたかい眼差しと感じるのだろう。

『チクショウっ！！
お人形さんで遊ぶヘンタイだと見られとんやなっ！？　何だかとってもドチクショウっ！！』

とハンカチ噛んで勝手に恥辱に苦しんでいたりする。

女心に対する鈍感さはやや改善されてはいるが、自己評価の低さは相変わらずのようだ。

無論、そんな横島だからして最初はエヴァに抗議した。

そりゃあもう全力で。

「何でじゃーっ！？　そんなにオレは信用でけんと言うんかーっ！！？？」

猛獣注意の札が張られてもおかしくも無いレベルで咆えまくったのだが、

「ほう？　では如何なる美女があられもない格好で現れたとしても指一本動かさない自信があると？」

「……」

そう言われると、霊力の反比例グラフという物的証拠もあって言葉を返し様が無かったりする。実際、幻術で大人の姿となったエヴァにダイブしてるし。

例えばやはり魔法教師を勤めているシスター・シャークティ。どういう訳か彼女らのシスターの服、裏の仕事の為だろうか動き易さ重視でやたら裾が短くミニスカート風なのである。

当然ながら有事にはおみ足が覗けようが無視して活動しまくるので世の男性たちには目の保養だろう。

かなり最初の頃に横島がちょっかいを掛けていた葛葉刀子も同様で、いざ事が起こるとタイトミニだろうが何だろうが、刹那同様に修めている神鳴流剣術を使用する為に裾を絡げたり破いたりして戦うため、横島的に言えば誘われていると勘違いしてもおかしくない。

まさか中等部でひょこひょこ彼女らと出会う事も余りないだろうが、“裏”という仕事に関わっている以上、そんな女性らと会う可能性極めて高く、尚且つ修行によって霊力が下がっている横島が暴走しないとは考え難い。いや、信じ難い。

告げ口以上の事はできないだろうが、お目付け役を押し付けられるのも当然であろう。

縦(よ)しんばチャチャゼロの制止を振り切ってセクハラに成功したとしても、その後にはエヴァの地獄の折檻が待っている。

――そう、向こうの世界での上司やママンによって行われる行為に匹敵する地獄が……

「チクショウ……夕陽が目に沁みるぜ」

「マァ、気ニスンナッテ。今日モ　オレト楽シモウゼ」

「じゃかぁしっ！！　その誤解を産みそうな言い方ヤメレ！！」

それでも真面目に修行しに家へと向うのは立派である。

ガックリと肩を落としていた彼であったが、ふと自分が口にした言葉……夕陽に今更気付き、足を止めて廊下の窓から山に身を隠してゆくそれに目を向けた。

……以前のように夕陽を見て胸を締め付けられる事はない。

今の彼は前以上に辛い事を思い出してしまう。

目の前で“今起こっている”かのように克明に思い出せてしまう。

瞼を閉じ、意識をその記憶に向けるだけでその場に居合わせているかのように……

2016

それはかなりきついが、今の彼は前以上に彼女を感じる事ができるし、尚且つここはあの事件が“起こっていない”。それに感覚だけで言えば十年も前の話である。

だから悲しさが紛れている……という訳でもないが、それでもセンチメンタル程度で済むようになっているのは心の中にある“錘”の存在が大きい。

まぁ、ある意味大いに成長していると言っても良いかもしれない。

それに……

「……いつまでも一人の女引き摺ってんのもオレらしくないしな」

本心ではないが、偽りない本音でもある。

出会う確率は以前よりも上がっているし、再会した時は自分の子供。

ドタコン（ドーターコンプレックス）は回避不可だろうが、父性本能が勝って恋愛対象は成り立たないだろう。

その事だけはよく解っている。

そういう意味では諦めがついていると言って良い。

愛おしいという想いは不変。

だからこそ、彼は彼女を幸せにする為にも、自分も幸せにしたいと想う。

2017

“皆も”という括りも含めて……

「オレはオレらしく……てか？」

今はそう笑えるようになっているのだから。

「アン？　ドウイウ意味ダ？」

「何でもね……フラれ人生を思い返してるだけだ」

「……ソウカ？」

動かない身体であるが、チャチャゼロが首をかしげているのが解る。

その頭をポフンと軽く叩き、

彼と居る事が楽しいといった空気を放ってくれる小鹿を連れて、

横島は掃除用具を持って用務員達の詰め所へと向って行った。

「ガキ扱イスンナっ！！」

と言う文句を聞き流しながら。

2018

そしてまた、今日も横島は修行という名の拷問に悲鳴を上げる。

決して『辞める』とは口にしないまま――

2019

前編（後書き）

早上好（ヅォ　シャン　ハオ）……『良い朝ですね』とか丁寧な言い回しの“おはよう”です。

ニーツァオの字が文字化けしたのでこちらを使用した……何てことは……アウチ

2020

中編

よく顔を合わせてはいても、珍しいシチュエーションで出会えば対応は変わる事がある。

無論、そんなに意外極まる状況が訪れるはずもないが、今目の前にいる彼女は本当に珍しく――いや、“久しぶり”が正しいか――良いモノを手に入れたと言わんばかりに機嫌が良い。

よって道端でばったりと旧知の人間に出会っても、今までのように眉を潜めたりしない。

「お」

等と今更気が付いたかのような声を漏らし、片手をひょいと上げて「やぁ」というニュアンスで挨拶を送られても、

「ん」

と、珍しく反応は薄いものの彼女の方も（僅かなものであるとは言え）笑顔でそれを受けていた。

これで？　等と言う事無かれ。今までの彼女は本当に無関心だっ

のだから。

今の極々簡素な掛け合いにしてもそれはしょうがない事。

何せ元は同級生。嫌でも気心は知れているし、“それ以外”でも長い付き合いなのだ。

彼の人生の半分以上の年月を籠の鳥としてこの地に縛り付けられていた彼女である。

虚脱やら絶望やらするには十分な時間だ。

だから以前の彼女なら声をかけても無視するか空っぽの眼差しを送ってくるか、良くて鼻先で笑う程度だった。

――そう、“だった”。過去形なのである。

「一人かい？　珍しいね」

「あぁ、茶々丸はメンテだ。

最近の私はことさら体の調子が良いからな。一人で散策をしているのさ」

「ふぅん……？」

時間は逢魔が刻。

そろそろ“裏”に関する見廻りを始める時間ではある。

そんな時間を学園の結界に大半の力を封じられている筈の彼女が

これだけ自信たっぷりなのだ。良い触媒でも思いついたのかもしれない。

ただ、それでも面倒くさがりの彼女が侵入者が現れてもいないのに自分から動いているのは珍しい。

ちょっと前なら吸血行為をぶちかましているのでは？　と、ヒヤヒヤさせられていたのであるが幸いにもあれからは行っていない。

なら本当に何らかの理由で調子が良いのだろうか？

尤も、ちゃんと受け答えをしてくれる事に不満がある訳もなく、元同級生として嬉しい限りなのだが……

しかし彼女の目は警戒しているとは言い難い期待にも似た楽しげなもの。

見廻りが楽しいという訳ではなく、その後に思いを馳せているのだろう。

付き合いの長さからかそれが解ってしまい、苦笑してしまうのは仕方のない話だ。

「うん？　何だ？」

「いや、何でもないよ」

「フン……おかしなヤツだ」

そんな彼の笑みに気付いた彼女であるが、文句もこの程度で終わる。

余りに以前と違うので物足りないという気がしないでもないが、それだけ今を楽しめているのは重畳だ。

尤も、彼女を楽しませる羽目になった根本的な原因……死んでいると想っていた想い人の生存を知る事……は良いとしても、もう一つの機嫌が良い理由であろう、下僕にされた“あの青年”から言えば災難以外の何物でもないだろうが。

「あ、そう言えば……」

「あん？」

「楓君から聞いたよ。昨日は大変だったそうだね」

余りお行儀良いとは言えないが、あの青年の事で件の茶々丸という名の少女に起こったという一件を思い出し、くくくと笑ってしまう。

そんな様子を見た少女は、彼が何を思い出し笑いしているのか解る訳もないので、眉を顰めて僅かながら首を傾げていたのであるが、流石に長く生きている所為か勘働きは良いらしく直に何を笑っていたのか気付いてかぁっと頭に血が上った。

何時もの……いや、昔見せてくれていた彼女の怒っているそれの顔で。

「ええい笑うなっ！！」

「いや、ごめんごめん……
でも、考えてみれば確かにそうだったんだよね。
気付かなかった僕らも悪いんだけど……くくく」

「……くそっ」

ふんっと鼻を鳴らしてズカズカ大股で歩いて行く。

折角久しぶりに穏やかな会話ができたというのに元の木阿弥。からかい過ぎた事を恥じつつ、彼もまた速度を上げて後を追った。

ちょっとだけ嫉妬していたのかもしれないなぁ……等と苦笑しつつ。

二人が言っていた茶々丸の話と言うのは、彼女の元に一人の青年が少女二人を連れて訪れた時の事だ。

彼女がその青年に戦い方を教えてやる事を決めた後、小一時間（別荘の外の時間で言えば数分）ほどして戻って来た噂の少女茶々丸であったが、この学園都市に張り巡らされている認識阻害の魔法の所為だろうか、少女二人は彼女が人造人間であることに気付いていなかったのである。

確かに表情の方は読みにくいが全く動かない訳ではないし、所作や心使い等を見ると優しい少女にしか見えない。食事をしているところや入浴などを行っていない事がちょっと変かな？　と思う程度だった。

しかし、よくよく見直してみると関節はマリオネット然としていて接合部が目立つ。

足からジェット噴射で空を飛ぶし、耳の辺りにはセンサー（アンテナ？）がついている。

冬服なら兎も角、夏服ならば足元の球体関節まで目立つのでロボロボしまくっているというのに、青年が『見て解らんかったんかいっ！？』とツッコミを入れてしまうほど、誰も彼女がロボであることに気付いていなかったのである。

尤も、魔法によって神秘的なものに気付き難くされていたのだからしょうがないのであるが。

――問題はそんな事ではない。

その程度の事なら彼にとっては実に大した事ではないのだ。

何せその茶々丸という美少女ロボの主は真祖の吸血鬼であり、同じクラスに人外ハーフもいる。更に裏で名の知れたプロの狙撃手もいるし忍者だっている。担任の先生なんか若干十歳の魔法使いだ。

おまけに彼自身が宇宙人（正確には別宇宙の人間）である。

今更何をどう問題視しろというのだろうか？

尚且つその青年は相手が美女美少女であれば種族とかの問題は二の次三の次四の次以下。

話に出ている茶々丸という人造人間は行きつけの飲食店で働く可

愛い女の子で、自分の相棒二人の同級生。そういう認識で思惑等は終了し、『血の通わない人形』等といった判断は起こらない。
そう言った言葉で茶々丸を傷つけようとする者がいれば、『地獄に行くのとヘルに叩き落されるのとどっちが良い？　選べ。さもなくばＫＩＬＬ』と激怒るほどに。

初めての恋人が決戦用女性型造魔だった彼だ。
“人間ではない”等という“些細な話”は彼にとっては何の問題にもなりゃしないのである。

そう――そんな事ではない。そんな事ではないのだ。

その問題とは……

『ハイ。
私はエヴァンジェリン＝アタナシア＝キティ＝マクダウェル様をマスターとするガイノイドです』

と彼女が名乗った事である。

その言葉が出た瞬間、空気がカチンっと凍りついた。
主に青年の周囲のみが。

ギリギリと錆ついたブリキ人形の動きで首を回し、マスターとやらに視線を向け、またギリギリと音を立ててその少女人形に眼を戻し、

「マジ？」

と、聞くと、彼女も簡素に「ハイ」と返した。

側にいた二人の少女と小鹿が「？」と首を傾げ、とりあえず訳でも聞こうと声をかけようとしたその瞬間――

「見損なったぞっ！！　キティちゃんっっ！！！」

彼は感情を爆発させた。そりゃもう、ドカーンっ！！と。

何だ！？　一体何がどうしたというのだ！？

わーっ！！　老師ーっ！！　御気を確かに！！

落ち着くでござるっ！！　殿中……もとい、別荘でござるよ！！？？

ぴぴぃ！？

あ、えと、何がどうなって……

どこから取り出したか楓謹製『ツッコミ&模擬戦専用ハリセン』を振り上げて唐突にエヴァに襲い掛かる青年。

急にいきり立った青年に呆気に取られて中々動き出せなかった三人の少女らを他所に、真剣宜しくハリセンを振りたくってエヴァを追回す彼の奇行には、流石の真祖の吸血鬼も魔法を使って対応する

事すら思い付かなかったという。

少女らはその後何とか再起動を果たしたものの、ロケットアームまで駆使し、三人がかりで取り押さえるのにかなりの時間と手間を労して、機械の身体ながらその茶々丸も冷や汗を掻いていたらしい。

で、ナゼに彼はここまで暴走したのかというと……

茶々丸の語った紹介の中にあった単語、ガイノイド。
これは女性型の人造人間を指す言葉であるが……この女性型アンドロイドを意味する単語には隠語も含まれているのだ。

古典ＳＦ用語でもある女性型人造人間を指すガイノイドという単語であるが、わざわざ“女性型”と区切りを付ける理由に、『女性の“機能”を持つ』という意味合いがある。
要するに用語的な意味だと『夜のお相手用』という事になるのだ。

だから平たく言えば……

『私はエヴァンジェリン＝アタナシア＝キティ＝マクダウェル様をマスターとするセ○サロイドです』

と名乗ったようなものなのである。

無論、そんな戯言に聞こえたのは青年の耳だけ。
知識が無い人間なら、言葉の意味は良く解らないけどハイテクロボという事かな？　てな感じに捉えた事だろう。

つーか流石は超煩悩魔人、古典ＳＦ用語のそーゆー知識にも事欠かなかったらしい。

確かにそういう事なら、彼がそうまで暴走した理由も解るというもの。

しかしそれはエヴァが茶々丸をそういう理由で傍に置いていると言っているようなものなので、

『私を何だと思ってるんだっ！！！』

彼女自身による、ちょっちキツ目の教育的指導がぶちかまされて騒動は集結した事は言うまでもない。

そして更に、以後ガイノイドという自己紹介はしないようにという命令を茶々丸に下した事もまた語る話でもないだろう。

その話を付き添いをしていたくノ一少女から聞き及んでいた男は、内容が内容だけに未成年の少女の前で笑うような事はしなかったが、今になって思い出し笑いをしてしまっている。

これで話に出た青年がちょっとでも茶々丸に対してロボ扱いがあれば別の話になるのだろうが、やはり彼は人であろうがなかろうが女子供に優しい為、単なる笑い話にしかならないでいた。

どうせあの青年の事だ。この元同級生の少女にも“女の子”とし

て接する事だろう。

そんな事が極自然に行える彼にやっぱりちょっと妬ける気がしないでもないが嬉しかった。

ウッカリからかってしまったのはそんな嬉しさからか。

自分もしょうもないところで子供っぽいなぁと苦笑しつつ何とか謝罪に成功し、横に並ぶ事を許された。

「でも、今日は朝から機嫌が良かったじゃないか。
彼の事、そんなに気に入ったのかい？」

そしてこの地に封じられている彼女の事を気にかけていた分、こんなに楽しそうな笑顔をさせられている事を羨ましく思う。

自分には――いや、“あの人”以外の何者にも叶わない事だったのだから……

そんな彼の心情を知ってか知らずか、彼女――どう見ても小学生然とした少女であるが……――は、何時の間にか機嫌を直し、実にイイ笑顔で空を見上げている。

「くくく……まぁな……あまりのヘッポコさ故に面白くて仕方がない」

少し前なら忌々しく観えていた空の色。

赤ければ血の色に見え、青ければ切り捨てられている気がしていた。

如何に学校に通おうと何回も何回も中学生をやり直し続けさせられ、同級生は片っぱしから卒業して行き、自分を知られている一般生徒なら記憶まで修正される者までいる。

明るい世界の中を歩めるようにここに入れてくれた筈が、クソ明るい箱庭に閉じ込められているようなもの。

無茶をしようにも力は出ず、抗おうにも術がない。

高く飛べていた夜空すら遠く、昼の空も如何に色合いを変えようと井戸から見上げているような気にさせられていた。

しかしながら今の心境からすれば生活を飾る色彩に感じられる。

何せ自由になれる方法が僅か一個で数多（あまた）と手に入ったのだ。

余りに便利すぎる能力なので、かえってその手段を思いつくのが難しいほどに。

余裕が生まれれば期待も高まり、削れて消えかけた夢すら頭を擡（もた）げてゆく。

そうなると余裕も生まれ、ここを出た未来を考えるという事も考えられる余裕すら生まれてくる。

追い求めるモノが生きている事を知り、外に出る手立ても今は兎も角、近しい未来で実現できるだろう。

色々考えるのもまた楽しい物だ。

新しい配下や下僕も手に入り、そいつらを鍛え上げてゆくのもまた一興。

今の問題は“奴”の行く方のみ。

逆に言えば行き先が知れるまでここにいれば良いだけ。

仮に今外に出ても名を売ろうと襲い掛かる輩を相手にしなければならない可能性が高い。この間の西の一件で生存が知られた可能性も捨て切れないし、戦いそのものは嫌いではないが、蝿のようにたかって来る雑魚との戦いは煩わしいだけだ。

だから今はこの地に封じられた当初のように、ヒトとしての不自由さを満喫できている自分がいる。

そう意識が切り替えができるようになっている自分がいる。

そんな影響を与えてくれるほど興味深く面白いのだろう。あの男は。

「へぇ？　だけどエヴァは物覚えの悪いヤツは嫌いとか言ってなかったかい？」

その彼女の言葉がちょいと気になっただろう。彼はそんな事を口にする。

普段の彼女はここまで話し易くないのでそれも手伝っているのかもしれない。

彼女はふふんと鼻を鳴らしつつ、出会った頃よりずっと高い位置になってしまった男の顔を見上げる。

「何か勘違いしているようだな」

「え？」

「アイツはな、キサマ同様ほとんど魔法が使えん。
お前のように詠唱ができんのではなく、
使えるのに魔力を持てんのだよ」

それは仕方がない事。

何しろ彼の概念には、魔力持ち＝魔族という図式がカッチリ入り込んでいるのだから。

どれだけ頭で『それは違う』と解ってはいても、魂に焼き付けられた概念は取り除けない。

よって彼は魔力を集められても持つ事は出来ないのである。

尤も――

『その代わり……魔力の収束能力はナギすら超えているがな』

彼女は、そう小さく口の中で言葉を続けていた。

つまりはそんな矛盾している点も気に入っているのだろう。

無論、付き合いの長い彼はその含みを感じ取っていた。

普段の彼ならばここで深く問い掛けたりはしない。

答えてくれるような彼女ではないし、後ろ暗いものがあればはぐらかされるだけなのだから。

だが、珍しく彼は好奇心から理由を聞きたくなり、その意味を聞こうと口を開きかけた。

その刹那――

「っ？！」

「む……っ？」

二人してその気配に気付き、同時に顔がその方向に向く。

「数は？」

流石は裏の世界で名の知られている二人。

悪の名を持つ少女の方は兎も角、魔法世界で英雄視されている男の顔は幻視している敵に向けられ引き締まっていた。

「さて……二匹といったところか……
使っている奴と使われている奴……だな」

「式、か？」

「知らんな。使い魔っぽいが……」

その言葉を聞くか聞かぬかで男は地を蹴って姿を消した。

正確にはとてつもない足さばきで駆けて行った訳であるが、余人ではその“入り”も“抜き”も視認できまい。

それほどの力量を持ち合わせているのだ。

「お～早い早い。まだまだ現役と言ったところか」

くくく……と含み笑いでその背を見送り、彼女はゆっくりと後を追い始めた。

確かに結界を越えて侵入させてきた方法は気にはなるが、侵入してきたモノがどこに向っているかは“知覚”しているのだ。慌てる必要はない。

それに――

「よりにもよってあの馬鹿がいる場に向っている……か。運の無い奴め……」

口元に浮かぶ笑みは小さいが、その実は嘲笑に近い。

それらが向う場には新しく手に入れた下僕がいる。

霊体に対して絶大な力をふるうあの馬鹿が……

言うまでも無く、運の無い――と言葉を向けた相手は侵入してきた曲者に対して。

いや、ヘタレなくせに戦わねばならないのだから、そいつに対しての言葉も含まれているかもしれないが。

「ま、いい暇つぶしにはなるな……」

少女は長い髪を揺らしながらゆっくりと道を歩く。

戦いを丁度良いタイミングで見物できるよう。

“アレ”が負けるとは欠片ほども思わず。

何だかんだで“アレ”の強さを理解している彼女は、掛かる状況を楽しみながらそこへと向って行く。

壊滅的に物覚えが悪いくせに、どういう訳か要点だけはボロゾウキンのように素早く染み込ませてゆく。

基本的な魔法知識がない為、染み込んだ知識を自分勝手に解釈したあげく、端的な方法を思いついては使用し、間違いを犯し続ける。

しかし、その間違いの中にはとてつもない成功が含まれており、成功すればより効率的な方法を定理や論理等を無視して構築して行く。

確かにその力の容量はかのサウザンドマスターのような英雄に劣るだろう。

未来的な力のタンクの大きさも然程でもなく、ひよっこ魔法使い以下という程度。魔法使いとしては落第点しかやる事ができない。

だが、あらゆる不利な状況をひっくり返し、根本から破壊し尽くす能力は過去の英雄どもすら凌駕する。

何しろ自分より地力が上の者以外と戦った事がなく、それらをその時に倒さねば全てがお仕舞いとなってしまうというギリギリの戦いばかりを行ない、それらに勝って尚且つ無事に生きて帰っているのだ。

そして彼は裏の世界でもお目にかかれない卓越した霊能力者であり、魔力では圧敗していようがその力の“性質そのもの”は数多の

幻想を超えている。

今だ感じる男の気配をトレースし、少女は更に足を速めた。

悲鳴を上げまくり泣き喚くくせに必死に喰らいついてくる青年を思い、優しげな笑みを浮かべながら……

何故か急に“霧”が掛かってきた学び舎に足を向けつつ———

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――

■十五時間目：TRAINING Day（中）

どことも知れぬ場所を駆ける駆ける。

見慣れぬ廊下を走る走る。

知っているのに知らない場所という矛盾も気付けず、
記憶にも無い建物の中を疲労も湧かずただひたすら走り回る。

何故足を動かしているのか、何に飢えているのか全く理解できないのだが、そんな疑問すら浮かぶ事無く彼女はフォーカスがかってはっきりしない場所をただただ駆け回っていた。

何時も以上に身体が重く、足も考えられないほど重くて速度が全くでない。
何かが纏わり付いているかのように、意識の後から足が引っ張られる。

それでも必死になって捜し続けていた。

異様に長い廊下を抜け、

異様に高い階段を降り続け、
風景と区別がつき難い人垣を越え、
彼女はただ走り回っている。

やがて校舎の脇を抜け、人気のない建物の影を走り抜け、人目から完全に陰となっている場所……校舎裏へとやって来た。

と――――？

『あ、見つけ……っ！！？？』

やっと見つけた。

捜し求めていたヒトを。

今の今まで想いも浮かべられなかった飢えの理由……
それが求め訴えていたモノを今になってやっと気付いたのである。

しかし――“彼”は“独り”ではなかった。

『あ……』

思わず息を飲む。

彼の向こう側には誰かがいる。

顔は見えずとも誰かは解る。

あの髪型と雰囲気、そして彼よりやや背が高い少女であるし、良く見知った相手なのだから。

彼は、その少女と見詰め合うように向かい合わせで立っていた。

『え……？』

そんな彼女の困惑など知る訳もなく、青年と少女は穏やかに、そして楽しげに話を交わしている。

青年の顔は嬉しげで、少女の頬はやや薄桃色。

そんな二人を見ているだけで、胸に湧いたもやもやは痛みへと形を変え、彼女の胸に深く突き刺さってゆく。

この場を逃げ出したい焦燥と、地を足の指で握り締めているかのような悔しさが身を焦がす。

胸の鼓動が耳の奥まで響き、

冷水をぶっかけられたように体温が下がるのに頭は異様に熱を持

つ。

苦しいのに何が苦しいのか解らず、
痛いのに原因が解らない。

こんな気持ちを持った事がない彼女は、それが何を意味しているのか気付く事もなく、ただひたすら不快感に苛まれていた。

知っている二人が楽しげに会話を交わしている。ただそれだけの事なのに――……

『あっ！？』

そして二人の動きが変わった。

いや、正確には動きが止まった。

見詰め合ったまま二人が動かなくなったのである。

目が細く、目が開いているのかいないのか良く解らない少女であったし、何よりこちらに背を向けているというのに何故か瞼が閉じられている事がよく解る。
そしてその顔を見つめている青年もまた瞼を閉じた。

――顔を寄せながら。

流石の彼女も、何をしようとしているか理解できる。

『あ……ああ……』

そして解ってしまったのだから当然のように、

『――――く……っ！！！

ち、ちょ、駄目アルよっ！！　楓は駄目アル！！
勘違いはいけないアル！！」

大声で止めた。

「楓は（ピ――ッ！）アルよ！？
（ピ――ッ！）で（ピ――ッ！）で（ピ――ッ！）アル！！
おまけに（ピ――ッ！）で（ピピ――ッ！）だから（バキュ――ンッ！）アル！！
そんな楓に（ピ――ッ！）したら（ピ――ッ！）になてしまうアルよ！！
（ドキュ――ンッ！）（ピヨピヨピヨ！！）アル！！！」

水を打ったように静まり返る教室。

チョークを持ったまま、今一つ言っている事がよく解らず凍りついている子供教師。

真っ赤になってはわわと慌てる目隠しヘアな図書部の少女やら、ギュピーンと目と眼鏡を光らせている触覚アホ毛の同部の少女。
すわっスクープか！？　と一瞬でデジカメとレコーダーを取り出す報道部。

そして……

「だから（ピ――ッ！）で（ピ――ッ！）で……ふぎゃっ？！」

授業中、机につっぷして居眠りぶっこいていた少女、古は、

「古ぅ～～～～……」

何時もとは逆。

ものごっついおどろおどろした気配を放つくノ一少女に、万力のような力で頭を掴まれ、やっとこさ強制的に目覚めを迎えたのであった。

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊

「あ痛たた……まだちょと痛いアルな。ヒドイ目にあたアル……」

放課後。

学校帰りと言うにはちょいと遅い夕暮れの通学路を、古は頭のタンコブをさすりさすり一人歩いていた。

どんな夢を見ていたのか、すぽーんと忘れてしまっているからどうしようもないが、級友らによるとその夢の所為でドエラい寝言をぶちかましたらしい。

何せ楓が怒っている顔というレアなものを目にできたほどなのだから。

尤も、古は夢の内容を全部忘れてしまっている。その所為というのもナニであるが、何か理不尽な目に合わされてしまった気もしないでもない。

彼女とてあんな事言われたら激怒って殴りかかってであろうが、どんな暴言ぶっ放したかは誰もが黙して語らず。よって何を怒っていたのかサッパリサッパリなのだ。

けっこーとんでもなかったらしいが、元々が竹を割ったような正確の楓であるから然程は気にはしていないようであるし、今更弁明するのもナニな気もする。

ただ、のどかなど真っ赤になって口噤むのだからどんなスゲェ暴

言だったか気にはなってたりするが。

「はぁ……ヤレヤレ……」

昨日の今日で溜め息一つ。

ただ老師に会えな……もとい、霊気の鍛練ができないだけでこのだらけっぷりは頂けない。

幾ら届かなくとも手を伸ばしたい地平を感じられているとはいえ、その鍛練が行なえないだけでこうなってしまうのは修業不足以外の何物でもないだろう。

何しろ、彼女はそんな事を気にし続けられるほど暇ではなかったりするのだから。

この麻帆良学園はエスカレーター式なので、外の学校を受験したりしない限り最終学年でけっこう余裕があり、絶望的な成績を取らない限り三年生になっても部活に精を出す事が出来る。

そして彼女は中武研の“部長様”。

幾らなんでも部長自ら休みぶっこく訳にはいかない。

意識を別に取られて集中し切れないというだけで、部活動を蔑ろに出来るほど“ご立派な立場”ではないのだから。

しかし、集中し切れないという事は、ゆっくりと心労が溜まるという事でもある訳で。
無駄な思考を続けてしまった結果、普段以上の疲労を身体に齎せる結果となっていた。

授業中の居眠りといい、この部活態度といい、正に自業自得である。

そんなこんなで妙な気疲れで気だるくなった身体を引き摺るように部活を行い、やっとこさ帰宅しているという訳だ。

もー　部屋に帰ったら即行で寝てしまうアル。

寝たらどーにかなるとゆー訳もないアルが、疲れてるから仕方ないアル。

……等と、この学校の気風に浸り尽くしているからか、結構お気楽である。
幾ら私立でエスカレーター式でも今日の様な授業態度を続けていたり、成績が悪過ぎたりすれば早々上に上げてくれる訳が無いのであるが……

それは兎も角――
授業中にうっかり爆眠した挙句、とんでもない寝言ぶっこいてしまうという失態を演じてしまったのは、流石の古とて　けっこー恥ずかしかったりする。

ハッキリ言って自業自得であるし、彼女だって楓が寝言で『あぁ

……横島殿……そ、そこは駄目でござる……こんなところでぇ……』
とかほざけば全力でぶん殴るだろう。主に宴の可盃を手に握ったりして。

そう人の事言えないのも理解しているし、何かしらのもやもやがを胸に溜め込んでいるからこそ、あんなポカかましている事も解ってはいる。

解ってはいるのだが……

何に嫉妬して何がそんな気になるかは不明だったりする。

「オ、オノレぇ……」
「わぁっ!?　ち、超さん、どうかしたのですか!?」

某研究施設からそんな声も聞こえたりしていない。してないったらしていない。

「はぁ……」

何とかズキズキする痛みが引いてくれたタンコブを擦り擦り、古はもう一度溜め息を漏らす。

尤も、痛むから溜め息が零れたわけではなく、胸の奥から湧いてくる奇妙な感触が溜め息を吐かせているのだ。本人に自覚がないだろうが。

「ぐぎぎぎぎ……」
「ち、超さぁ～ん！！」

それは兎も角（笑）。

古はある理由によって放課後もそんなにヒマでなくなっている。いや、今述べたように部活も行っているのだが、それとは別の件でだ。

何時もなら部活が終わってから横島に霊力の鍛練（横島にとっての試練とも言えるが）をしてもらうのだが、それは他ならぬ“大首領様”の御命令によって叶わぬ願い。

楓もそれが堪えているのだろう。その憤りを誤魔化す為か、風香、史伽より部活に勤しんでいるし。

「か、楓姉ぇ～　ペース速すぎるよぉ……」

「お姉ちゃん……も、もうだめ……」

「史伽ぁ〜っ！？」

トライアスロン的な散歩に付き合わされる二人には災難だろうが。

兎も角、

帰って寝ようと決めていたと言うのに、何故か足が別の方向を向いていたり。

ほんの僅かの間であるのに、修業していた教会跡地に行きかかっていたのだからそれは古だって苦笑もするだろう。

そんなに修業がしたかたのか…と。

無論、“誰かさんと”という自覚は無い。

何だか帰宅すら気が乗らなくなってきたのだが、それでもトボトボと寮へと戻って行く古。

超からもらった“普通の”肉饅の残りをもそもそ食べながら歩くその姿からもやはり気力は感じられない。

五月病さながら、無気力になっているのである。

古は肩を落としつつ、何げなく校舎を見た。

夕陽に染まる校舎はノスタルジックで、見ているだけで余計に物悲しさを加速させる。

いや、別に彼女は悲しみになど浮んではいなかったのであるが、そんな気にさえなってしまうという事だ。

何でアルか……とぐちゃぐちゃの感情の意味も解らず、再度溜め息を漏らして道に目を戻……

「ん……？」

――そうとして、何かが気になった。

いや、何がどう、という訳ではないのであるが、何だか知らないが校舎が……正確に言えば校舎の裏が妙に気になったのである。

夢の事などこれっポっちも覚えてはいないのであるが、“見た”という事実に変わりはない。

その記憶がデジャヴュとして彼女を突付いているのだろうか、古は眉を顰めてそこを見つめ続けていた。

「何か知らないアルが……」

たんっと沓を踏み鳴らし、古はそこに向って行く。

「……」

自分でも解らない理由により、駆け出してしまう古。

まさか本当に何かと出会ってしまうなどと知る由もなく――

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊

――校舎裏。

パターンで言えば呼び出しのメッカであり、行われるのは制裁等の名を借りたリンチ。或いは決闘等。

一昔前の学園マンガではそればっかだったらしい。

近年になれば若い……或いは若過ぎるカップルの逢瀬の場とかになっており、どちらにせよ実に教育上よろしくない。

因みに、作者の学校はプール下の物置がそうだったりする。ウッカリと使用中のサインを見落として道具を取りに行ったらタイヘンな事態に出くわす事が多々あったりなかったり……

閑話休題（それは良いとして）――

その大きな校舎の陰の場所に彼はいた。

「……ん……く……」

「……」

いや、彼“ら”だ。

腰を降ろし、蹲るようにしてもそもそと手を動かす。

その際、妙にぬかるんだ音もするが、それも仕方のない事。

行っている事が事なのだから。

「く、う、ふぅっ、ん……っ」

「……」

何もこの時間にしなくとも良いものを、彼はがくんがくんと身体を揺すり、全身を使って攻め続ける。

尤も相手は頑強に抵抗……防戦一方ではあるが……を続けるのみ。いや、それ以外を行えない。

彼の手によってなすがまま。

とは言え、好き候にされるだけというのも癪なのか、抵抗だけ見せて無言を貫いている。

それがまた彼をイラ付かせ、行為そのものを乱暴にさせてしまうのであるが。

「くそ……」

流石に腹も立つが、乱暴にし過ぎると何にもならない。

後々の事を考えればもっと優しく行わねば話にならないのだ。

とは言え、そんなに時間をかけたくはないし、速くここを立ち去りたいのもまた事実。

彼はぎゅぎゅと力をいれて更に身体を揺すり上げた。

「く、お、おぉ……」

ぐぐ……と、身体の動きが止まり、腕がピンと伸びる。

歯を食い縛り、意識は一点に集中される。

そして――

「お、おおお……っ」

ずぼっっ！！

“それ”は抜けた。

「……や、やっと抜けたぜぇっ」

アレだけ抵抗を見せていた雑草の根はズッポリと抜け、青年は何とか根を切らずに引き抜くことに成功したのである。

根を切らずにすべて引っこ抜く事に成功したのだ。何という爽快感だろうか。

ズシャァアアア……ッッッ

それに合わせたかのように何かが青年の後ろを駆けぬ……いや、滑り抜けた。

ここまで見事なズッコケはあるまいと見せ付けるかのような滑り方で、笑いに五月蝿い青年に戦慄が走ったほど。

思わず『何奴っ！？』と奇怪なファイティングポーズで身構えてしまう。

「ま〝……」

「ま〝？」

滑り込んできた少女の声にジャイ○ントロボ？　と、青年は首を傾げかかった。

その瞬間――

「紛らわしいアルっっ！！！」

「のわ――っっ！？？」

ばね仕掛けのように跳ね起きた少女の剣幕に、今度は青年がひっくり返ってしまう。

ナニを聞き間違えたか、或いは地の文の騙されたか、何か涙目で飛び出してきた少女は実は単なる草抜きだったというショックにおもっきり滑りコケてしまったのだ。

しかしお互いが顔を合わせた為、少女が何者であったか直に解る。

「あ、あれ？　古ちゃん？」

ポカンとして少女を見上げる青年……横島忠夫は、何で彼女が自分を睨みつけているのかサッパリ解らず、抜いた草を握り締めたまま呆然と古のその涙目を見つめる事しかできないでいた。

「ぴぃ？」

抜かれた草に黙祷していた　かのこの声や、

「……ンア？
ドーカシタノカ？　草抜キ、終ワッタノカヨ？」

草刈なら兎も角、“抜く”というヒマな雑事に興味はなく、居眠りぶっこいていたチャチャゼロのＫＹな声が妙に痛く感じたアル―

―と後に古はそう語った。

彼、横島忠夫の表の顔は麻帆良学園専属用務員で、そのメインの仕事は清掃人である。

よって修繕やらワックス掛け、今さっきの様に草むしりもれっきとした仕事の一環だ。

元の世界での職場で丁稚扱い（後期は違うらしいが）だった彼は、当然のように雑事も掃除能力もかなり慣れて専門職のようだったという。

魔族サイドに囚われていた際、何だかんだで雑務に勤しんで洗濯物をキレイに干した時、野望に近付いたと満足していた事も見逃せない。

だから、という訳でもなかろうが、横島は本日の仕事場である校舎裏清掃を“みっちり”と丁寧に行っていたのである。

古がナニを誤解したかは知らないが……

ともあれ、どこをどう聞き間違えたのかは知らないが、激しい誤解を招いてしまったのもまた事実

目をナルト状のぐるぐる巻きにして暴走する古を必死にとりなし、何とか落ち着きをみせてはくれたものの、彼の話を聞き終えた直後、

「だ、騙されたアル――っ！！！」

彼女は大きな声で叫んでいた。

近くにいた横島の耳がキーンと音を立て、鼓膜がきしんでしまったほどに。

何の話しかと言うと、例の一週間横島と修行するのを禁止した取り決めの事だ。

『一体何の修行してたアルかーっ！！』と慌て怒鳴る古を落ち着かせる為、修行という名の拷問の説明を行った横島であったが……

古や楓らは一週間は一緒に修行できないと言われているので鵜呑みにしている訳であるが、それは修行だけの話で、会ってはいけないとまでは言ってなかったのだ。

その事をチャチャゼロにツッコミを入れられて思わず絶叫してし

まったという訳である。

無論、仮にエヴァに対して文句を言ったところで『修行時間以外で会ってはいかんと誰が言った？』と返されるのがオチだろうし、騙されたも何もその事を聞かなかった方が悪い訳で、横島ならば『修行の事は聞いてるが、それ以外の禁止は聞いてない』と平然と突撃をかけていたはずだ。

彼が口にすれば屁理屈屈全開にしか聞こえないが。

それに、無理してでも己を研磨し続ける者が結構好きなエヴァであるから、そんな屁理屈ほざいてでも修行を付けてもらいに行けば案外許してもらえるかもしれない。

「マァ、ゴ主人ハ　ケッコウ悪(ワル)ダカラナ。
ミョーナ言イ掛カリデ半殺シニサレルカモシレンガ」

そう“先輩”に言われても、知ってしまった以上は付いて行きたるなるのもまた人情（？）。例えチャチャゼロの言うとおりになっても横島なら少しは庇ってくれるだろうし。

まぁ、行く理由もちゃんと考えているし、何より今は少しでも強者の意見は聞きたかったのだ。主に老師から。

いきなり弟子をもってしまった事もあり、横島とその事について色々と…それ以外でも話をしたいし……

――何やら理由の後にオマケっぽく本音らしきものが漏れているが気にしない方向で。

「それは兎も角、老師は強くなたアルか？」

「老師言うな……って、もうええわい……

十日やそこらで強うなったら世話無いわ」

十日？　と首を傾げた古であったが、直にあの別荘の事を思い出した。

外の一時間が中の二十四時間というふざけた結界の中にあり、横島は昨日二人と別れてからず～～～～っと虐められ……もとい、鍛えられ続けていたらしい。

「そ、それは結構卑怯アルな」

しかし逆から考えてみると、漫画とかで『一週間後に決闘する』とかの妙な展開がよくあるが、あの別荘が使用できればフル活用で準備期間は五ヶ月程にもなる。完全休養を取る余裕すらあり、三日会わずばドコロの騒ぎではない成長が期待できるのだ。

その上、鬼教官がセットに付いてるのである。そりゃあ卑怯だと思いもするだろう。

と言っても、エヴァも付きっ切りという訳にも行かないし、横島にも仕事がある。

彼女の魔力は横島がどうにかできるとはいえ、横島の疲労を蓄積

させ過ぎるといざという時に意味が無い為、休息時間を入れて一日十二時間程度にスケジュールを組んでいるのだ。

それでも十日間もエヴァの指示によって徹底的にしごかれ続けている訳で、普通の人間……いや魔法使いでも、凡庸な輩ならば廃人は確実だろう。

何があったか詳しくは知らないし、語ってもくれないが、横島はカタカタと身を振るわせているから何となく想像は出来る。

古はふと足元にいる　かのこの眼差しに気付いて目を向けてみた。

小鹿はじっと主横島を見つめている。

悲しい目をしていた。

「マァ、何ダ……地力ハソウトウ上ガッタト思ウゾ？
アレダケ　ゴシュジンガ楽シソーナノ久シブリダシナ」

等と笑顔（と言っても、人形だから表情は変わらないのだが）で話すチャチャゼロには古も呆れる他無い。

「あれで強うなってなかったら訴えるわっ！！

ハッキリ言って自分でも防御能力は激増ししたくらいは解るぞ？
いや、もう……これでもかっ！！　て、くらい」

「サモアリナン……ダ。
ツーカ、“アレ”ハ卑怯ダ。マスマス　オ前ェヲ斬リ難クナッ

チマッタジャネーカ。責任トレ」

「アホか――っ！！　何でお前に気ぃつかって斬られにゃならん！！？？

斬りたいんやったら、ハムでも刻んでやがれっ！！」

「何ヲ言ウ。オレハオ前ヲ斬リタインダ。

乙女ノ告白ミテェナモンジャネーカ。アリガタク受ケヤガレ」

「御免こーむるっ！！

つーか、ムチムチ姉ちゃんでもないお前に言われても嬉しゅーないわっ！！！」

「ツレネーナ」

ケケケと笑うチャチャゼロを見ながら、古は複雑な想いを高めていた。

チャチャゼロがブラックなボケをかまし、横島が突っ込む。

その間が実に軽妙で、何だかんだ言ってこの二人（？）の息が実に合っている事が解るのだ。

考えてみれば隔離された時間の中を、これからもあの別荘で過ごす筈である。

エヴァにしても、チャチャゼロにしても、確かに対人反応はそう良い方ではない。

自分らは人外であるし、周囲の者達よりずっと長く生きているの

でどうしても“合わない”し、何より合わせるつもりがないのである。

が、その代わり“身内”に対しては妙に懐が大きくなってくる。

自分らと同じ時間を過ごすのなら、如何に生き人形であろうと彼の本質に気付いてしまう筈だ。

彼は、エヴァ達と以上に“自分らの側”にいるものに対しては、種族無関係に垣根を完全に取っ払うという事に……

とくん……

胸の奥で何かが響いた。

目の前で漫才を続けている二人を見ていられなくなってくる。

いや、不快な事をされている訳ではないのであるが、どういう訳か居心地が悪くなってきているのだ。

昨日弟子にした少年の事も話したいし、大した話ではないが今日一日あった事も言ってしまいたい。

別に何だって構わない。彼と話さえできれば。

そう思いはするのであるが、どういう訳か上手く言葉として紡ぎ出す事ができないのだ。

『……老師』

我知らず古は口の中でそう呟き、背中を校舎裏の壁に預けてぽすんと腰をおろしてしまう。

出会ってから、ずっとキープしていたする気もする右隣。
楓がいる時以外はずっとこっちだ。

でもすぐに隣にいるというのに、向こうは壁も作っていないのに、何故だか彼との間に距離を感じている自分がいる。

彼がそんなものを作る訳がないと解っているのに、自分で作ってしまったそれを彼の所為だと押し付けている自分がいる。

それが何なのか、
何でそれを作っているのか、

そういった経験は初めてである古では考えもつかない。

ちらりとまだ言い合いを続けている二人に眼を向ける。

「せやから霊力使い過ぎたら煩悩が上がると言うたろーがっ！？
マトモに回復がでけんさかい、力が足りひんのやーっ！！」

「ダッタラソコラデ女襲エヤ。散々弄ンデカラ例ノ珠デ記憶消シテぽい捨テシタライイジャネェカ」

「ドコの鬼畜犯罪者じゃ！！　誰がするかそんな事！！
つーか、オマエはそれをさせんよーにする見張りやろが！！
本末転倒やんけ！！
見張りが先導してどないすんねんっ！！」

「チ……ショーモナイトコデ御堅イコト言イヤガッテ……ツマンネー男ダナ。
マ、ショウガネーカ……ココハ一ツ、先輩ノオレガ人肌脱イデヤンヨ」

「は？」

「サ、オレハ抵抗デキネェゼ。好キニシナ……」

「あ……
アホかぁああ――っっ！！！」

……何だか不穏なセリフも聞こえたような気もするが、それはスルー。

古の額にピキリと血管も浮かんだが、チャチャゼロは言い放ってからケケケと笑っているので恐らく性質の悪い冗談だろう。

現に横島は血涙振りまいて喚いているし。

だがいくら冗談とはいえ、ベースが少女人形であるチャチャゼロがそういった言葉を口にしているのは思っている以上に横島に対して好意を持っている可能性がある。

彼女がいるのは横島のポケットの中。

胸元までスッポリとはまっていて居心地よさげである。

つまりはチャチャゼロは、とっくに横島の中で縁として結ばれているのだろう。

エヴァの家の地下であれだけ生き人形に怯えていた彼がポケットにいれて口喧嘩をしている事からもそれは見て取れる。

生きるか死ぬかレベルの鍛練を受け続けているのは古も今しがた横島本人から聞いているが、それでもチャチャゼロを毛嫌いしていないのは実に彼らしい。

その事が置いてけ堀を喰らった様で何だか心淋しかった。

あの言い合いにしてもスキンシップの一環だろう。

本気で嫌がっているのなら、投げ捨てるなりすればよいのだし。

「はぁ……」

仲良さげに続けられている口喧嘩に溜め息がまた一つ零れる。

ここに居たいのに、居た堪れない気持ちになってくる。

『もう、帰るアルか……』

気持ちにやり場を無くしたか、居心地の悪さに耐えかねたか、腰を上げて横島に別れを告げ――

「!?」

――ようとした古は、異様な気配に気付いて身構えた。

ふと気が付くと、かのこも何か身構えているし横島の何時の間にか立ち上がって極自然体で構えを取っている。

「気付いた?」

「アイ」

じわり……と気配が寄ってくる。

しかしてその気配は広い。

そう、『大きい』のではなく、『広い』のだ。

「これは……？」

その気配の異様さに冷や汗が出、思わず札を取り出して身構える。

普通の相手ならば彼女とて慌てたりしないだろう。

服が張り付いてしまうほど汗もかかないだろう。

巨大な気配の相手も知っているし、強者の気配も見知っている。

が、この周囲に纏わりついてくる気配にはそのどれもが含まれていない。

気配が大きい訳でもないし、強さも感じられない。

在るのはただ『広い』という感触だけ。

まるで一人の気配が“飛び散っている”かのような、正に異様な感覚があるのだ。

「ケケケ……懐カシイナ。コレハ」

「あ、やっぱ知ってるか」

「タリメェダロ？　オレハ欧州出ダゼ」

横島とチャチャゼロは“これ”が何か知っているみたいである。
間に入れないのは悔しいが、それより“これ”が何か聞きたい。
そう思って、周囲を警戒しつつ問い掛けようとした古の視界を、
「あ……何アル？　霧？」
唐突に霧が覆い始めていた。
「間違いねぇか……拙ったな、こりゃ……」
「こ、この霧、何アルか？」
二人と一体だけしかいない校舎裏。
後は校舎の壁、周囲を囲むのは気配を持った霧。
驚いている古の横、珍しく表情を歪めている横島は、

「多分、＜霧魔（むま）＞だ」

そう呟く様に答え、栄光の手を具現させた。

後編

「く……うう……」

足元から微かに聞こえるのは呻き声。

学校に続く通学路脇の小さな公園の中、象を模った遊具の側。砂場に顔を沈めて無様に突っ伏している男のもの。

そしてその男を僅か一撃で打ち倒した者はその直横に立っていた。

眼に見える被害は無く、あったとしても微々たる物。侵入者が倒れ伏している砂場にも誰かの力作であろう小山も無事。ご丁寧に避けて男を打ち倒したのだろう。

少なくとも明日の日にここで遊んでいる子供達を悲しませる事は無いようだ。

そう、彼はそれほどの力量を持っているのである。

「……向こうは残っている!?」

だが、その表情は硬い。

倒した相手は黒いコートに身を包んだスキンヘッドの男。

普通、こんな男がこんななりでいれば目立って仕方が無いだろう。
眼つきの悪さもあるし、頭部に何やら幾何学的な刺青までである。
昨今の犯罪からして通報間違いなしだ。

だが、この男は全く持って目立っていなかった。
そこに“いる”という認識すら殆どしていなかった。

それがこの男の隠術なのか、何かしらのアイテムの力なのかは知らないが、どちらにせよそのような手段をもって都市の結界を越えて来たのだから碌でもない輩である事に違いあるまい。

現に、この男は“ナニカ”を放っていたのだし――

「く……っ！！」

術者と思わしき男を打ち倒したのだから式であれば制御を失うだろう。
そう思っての行動であったが、何と放たれているものは式ではなかった。

都市を守っているものとは別の、学校を守っている結界の“内側”に放たれてしまったそれ。

立ち込めている霧からして、異界の存在である感触がありありだ。

考えられる事は一つ。

術者である“この男”が囮で、本命はあちらだ。

術者である自分を餌にして距離をとらせ、それを活動させる。

自爆テロが如く後先の考えを感じられない暴挙であるが、実際に引っ掛けられたのだから言い訳の仕様も無い。

慌てた彼は足元に転がる男を放置し、学校に向けて駆け出そうとした。

「まぁ、待て」

だが地を蹴った直後、彼のその身体は、弦を弾くような音と共に空中で静止……いや、ギシリとその身を軋ませ、空中に縫い止められてしまった。

“それ”が巻かれた事に気付けないほど焦っていたのには呆れるが、相手の技量を考えればさもありなんだ。

「な、何を……?!」

「だから待てと言っているだろう？　焦るな」

ゆっくりと歩いてくる声の主。

闇が迫りつつある時間だからこそ映えるその身体。

力を封じられて尚、その闇の輝きを失っていない者。

眼に見えぬほど細い糸を彼に巻きつけてその身体を止めた者。
見た目は年若い少女であるが、その実数百年を生きる闇の者。
そして彼の元同級生で、現教え子の少女だ。

「しかし！！」

「しかしも案山子も無い。落ち着けと言うに」

足元の男を単なる路傍の石であるかのように視界の隅にも入れずに蹴飛ばし、彼の側までやって来る。
しかし靴先がめり込んだのは男の腎臓の位置。狙ったものか偶然か判断が難しいところ。

そんな彼女であったが。その目線は彼に向けられていない。
その赤く色を変えた瞳の眼差しは、そのずっと先……校舎の方向に向けられたまま。

彼女はじっとそこで起こっている事に目を向け続けていた。

「確かに女生徒は巻き込まれているようだが……あいつは一般生徒ではないぞ？
一応は裏に関わっている奴だ」

「いや、だけど……」

「落ち着けと言っただろう？」

彼のその身を縛っていたのは細い糸。
特殊な加工が施されている特性の糸だ。

それでも彼はぶつりと自力で糸を切り地に降り立つ。

簡単に切られてしまうのは面白くないが、彼ならば気にもならない。
できて当然だし、できない方が腹が立つ。
多少とはいえ扱いた（虐めた？）事もあるのだから。

「それにな、丁度いいんだ」

「何がだい？」

やや落ち着いたのか、彼の言葉の端から険が薄らいでいる。
彼女の説得……というか、落ち着きを見て判断したのだろう。

「今、あそこにはいるのは“ウチの”馬鹿だ。
そして横にいるのは女だ。それがどういうことか解るか？」

「ウチの馬鹿……？」

その言葉からそこで誰が出くわしているのかやっと理解できた。

何だかんだで昔の自分のように、彼女に修行をつけてもらっている“彼”があそこにいるというのだ。

根っからのトラブルメーカーであり、トラブルに巻き込まれやすい困った体質（？）。

存在自体が破天荒で、異世界出身等というトンでもない人間。

やる事成す事無意味なところだけ全力で、息切れをしてはセクハラで回復。ロリではないと断言しつつも、女子中学生の色香に迷いかかって悶えている問題青年。

それでいて実力は相当なものであり、彼すらそれを認めているし、この少女も何だか信じている様子。

そして今、そんな彼の横には女がいるという。

場所が場所だけに少女である可能性が高い。

こんな時間、校舎裏で女の子と二人でいた理由は教師としてちょっと気になるが……

「あの馬鹿の実力と才能は本人が思っている以上に高い。自分では全く気付いていないようだがな」

「それは……」

彼も何となく知っている。

自信は持っていないようだが、腕試しの場で十六分身した少女の全攻撃を往なしている。
尤も、見た目には激しくみっともなかったのであるが、それでも双方無傷で終了させているのだから尋常ではない。

しかし彼は、自分のその実力を全然信用していないように見えた。
周囲が異常能力者ばかりだった事も手伝って、堆く積み上げられてしまったコンプレックスは如何ともし難いのだ。

「普段は見た目と珍奇な行動も手伝って御世辞にも使えるようには見えん。
見た目もナニな奴だしな。

だが、信じ難い事にアイツは自分の持っている甘っちょろさを力とする事ができる。
解るか？」

「え……？」

女に甘い。
それだけでマイナスだ。

特にこの少女はそういった甘さを大嫌いだった……筈。

だがどういう事であろう？　今この少女は喜びを見せている。
甘さを持つと言い放った青年の事を思い、嘲る事無く感心するかのように。

「アイツの真骨頂は足手まといを守る時に出る底力だ。
普段の逃げ腰は消え失せ、守り戦う事にだけ意識が向く……いや、それ以外の事が頭から消える。
そうなった時のアイツの力を……見てみたくはないか？」

それはキミの方だろ……？　そう口に仕掛けたが、彼はあえてその言葉を飲んだ。
そう言いたかったのだが、彼とて見たいと思っている事に違いはないのだから。
だから彼は、ここに来て見学側にまわる事にした。

それにこの少女は身の程知らずは好きではないが、力なき者や知人を見捨てるほど非道ではない。
そんな彼女がここまで余裕があると言う事は、その巻き込まれた少女とやらが危機に陥る事はないと確信があるのだろう。

或いは――

『そこまで彼を信じている』のだろう。

無論、聞いて答えてくれる彼女ではない。

諦めを含んだ色の溜め息を吐き、彼女に蹴転がされて苦悶する男を一応落して意識を奪い、ふん縛ってから彼女の後を追った。

「見せてもらうぞ？
その時のキサマを……
我が下僕、横島忠夫よ」

ククク……と忍び笑いを漏らす少女に眉をひそめ、とんでもない奴に目をかけられたもんだとちょっとだけ同情もしていたりもするが。

■十五時間目：ＴＲＡＩＮＩＮＧ　Ｄａｙ（後）

視界を霞ませながら覆い包まんと纏わりついてくる気配。

それ以外を感じる事ができない、異様な敵。

見えているのは霧そのもの。だが、霧だからこそ全体を見ることが難しいのだ。

敵の名は＜霧魔＞。

それなりに知名があると言うのに、わりと知られていない奇妙な存在である。

「オメーハ“ドッチ”ダト思ウ？」

「解ってて聞いてんだろ？　霊の方」

「ケケケ……当タリダ」

困ってはいるが、慌てて暴れたりせず、あえてゆっくりとした緩慢な動きで霊波刀を突き出し、纏わり付いてくる霧でてきた霊体を斬る。

どちらかと言うと押し潰すといった塩梅だ。

「古ちゃん。大きく扇(あお)ぐなよ？　空気を巻きこんで纏わりつかせちまうからな」

「わ、解たアル」

ついでに呼吸も浅くしろよ？　吸い込んだらシャレになんねーぞと注意を促し、壁に背を預けたままかき回すように霧を破壊して行く。

前に突き出した霊波刀が当たる度、バチバチと火花が出て何かが散るのは何かしらのダメージを与えているからなのだろうか。どちらにせよ厄介な相手である事に変わりはないが。

尤も、かのこは然程困ってはいない。

というのも、この小鹿を恐れて霧が近寄って来ないからだ。

かのこは森の霊気から生まれた精霊。

そんな見た目だけ小鹿な　かのこに対し、霧でどうこうできるほどの力は流石に無いようである。

何せこの小鹿がぴぃと鳴いて前に出るだけで恐れるように下がるのだから。

反して古の方はちょっと難しかった。

何せ彼女の持つ魔具、宴の可盃は魔法を含む射撃攻撃と直接攻撃にほぼ無敵の防御力を誇れるのであるが、こういった絡め手には打つ手がない。

せいぜいその形状を利用し、扇を広げて扇ぐぐらいの事しかできないのであるが……

「古ちゃん、気ぃつけろ!!　大きく振ったら自分の方に空気を呼び込んじまうぞ!!」

「ひゃっ!?　わ、解たアル!」

何かしらの神事でも行っているかのように、下から上へ、上から下へとゆっくりと動かし、接近を許さないように扇ぐ。

無論、その時に霊気を込めればもっと良い。それを理解した古は、横島を真似てそれを行い始める。

途中からとはいえ、自分でその事に気付いたのは見事であるが、それ以上の手立ては思いつかない。

直接攻撃専門である古には絡めての手合いは些か荷が重いようだ。

「ろ、老師。これは何アルか？」

だから敵の情報を得ようと、注意を怠らず隣にいる横島に問い掛けた。

彼は古に意識を向けてはいるが、顔は向けずに空に絵でも描くように霊波刀を扱いつつ、

「さっき言ったろ？　霧魔（むま）だよ」

と、素人が知る由もない名前を口にしていた。

日本語での音だけなら“夢魔”と変わらないが、霧の魔と書いて＜霧魔＞。

先ほど述べたように結構名が知られているにも関わらず、それがどうとは余り知られていない存在である。

と言うのも、日本での発見例が余りに少ない事と、霧と共に現れる為に局地的にしか知られていない事。

そして、霧魔という名の同名の存在が二つある事が挙げられる。

その一つは文字通り“魔”としての霧魔。
もう一つは悪霊としての霧魔だ。

魔としても霧魔は霧そのものが本体で、その中に入った人間に求めていた光景の幻を見せたり、トラウマを穿り返したりして心を惑わし、夢幻の中を彷徨わせて精気を吸い、心身共に取り込んでしまうというもの。

ものが霧だけに一般人では……いやそれなりに“できる者”でなければ見分けがつかず、気が付けば取り込まれた後と言う事も珍しくはない。

しかし、今目の前にいるのは魔の方ではなく悪霊の方。

それだけ聞くとこちらの方がまだマシに聞こえてしまうのであるがさに有らず。どちらかと言うと厄介なのは悪霊の方だったりする。

「ク……！？　気配が散らばててよく解らないアル！！」

「気配を追うな！　纏わりつく霧にだけ注意するんだ！」

これが“魔”の方ならば霧そのものが本体。
霧にダメージを与える方法は無い訳ではないのだから火の結界で包むなりできるし、エヴァであれば広範囲魔法の凍結魔法等を使用して動きを完全に封じる事だろう。

だが、今目の前にいる悪霊の方の霧魔は、その正体は霧の中で死んだ者。
霧に“混ざっている”だけで本体ではない為、普通に魔法を使用

したとて本体は退散するだけなのだ。

霧が多いイギリス等では、これに目をつけられた者は霧の多い日には家に閉じこもり、暑い日でも暖炉の火を欠かさないという。つまりはそれほど厄介な相手と言える。

「しっかし、何でこんなトコに霧魔が出やがんだ？」

「決マッテンダロ？　誰カガ連レテキタンダ」

「霧魔をか！？
つーか、霧を持ち運べたりできるのか？」

「方法ガネー訳ジャネェカラナ。
例エバ　ゴ主人ナラ霧ヲ凍ラセテ、カキ集メテ瓶トカニ詰メ込ムダロウシ」

「ああ、成る程……」

距離を置いて見物を決め込んでいるエヴァが敵を楽観視している理由がコレである。

何せ封印さえ解ければ氷系の広域殲滅魔法を使用できる彼女の事。魔であれば本体に、霊体であれば潜んでいる霧ごと凍らせるだけなのだから話は早い。真に相性の良い相手だと言える。

とはいえ、方法が解ったといって今ここでできる訳ではないし、横島はそんな便利な魔法を使えない。

まぁ、それ以前に、身体強化くらいは何とかできなくもないとこ

ろにきているが、魔力を解放する攻撃魔法等は今だにサッパリなのだが。

「しっかし、これじゃあジリ貧だ。どーすっかな……」

一番手っ取り早い方法は、珠に『浄』を入れて使用する事だろう。これなら一発で浄化できるはずだ。

ただ、ここ麻帆良は魔法学園都市。どんな“目”が見ているか解ったもんじゃない。だから横島は彼女にきつ～～く使用を厳禁されていた。その上、ポッケの中にお目付け役がいる。

何せ戦闘が始まって直、

『オイ、例ノ珠ハ使ウナヨ？　使ッタラオレト朝マデ“らんでぶー”シテモラウゼ』

と脅されているのだ。

これが高校生以上の美少女であり、“そーゆー意味”なら大歓迎なのだが、相手はこのチャチャゼロだ。ぜってー違う事は解り切ってる。

良くても朝まで命を賭けた追いかけっこだろうし、それにチャチャゼロは美少女かもしれないが、正確には美少女型マリオネットな

ので横島にメリットは全く無い。
はっきり言って霧魔と普通にやり合っている方が命の危機はないだろう。
何とも難儀な話である。

「ソーサーを投げ付けて爆散……は駄目か。飛び散るだけだしな。
かと言って霊波刀で撫で斬りにしても本体には然程ダメージいってねぇみてぇだし……」

彼自身が助かる術は幾らでもあるが、何せここは学校である。潜まれて女の子が襲われたらシャレならない。
イヤミたらしい美男子が襲われるのなら兎も角、未来ある少女たちに危害が及ぶのは絶対に許されざる事だ。
それだけは例え天津神や国連が許そうとも、横島は絶対に受け入れられない。

とは言っても手立てが思いつかないのが現状で、彼自身が零すようにジリ貧が続いている。

霧魔の動きもネチネチとしていて実にいやらしい。まるで遊んでいるかのようだ。

実際、悪霊なので知性がゼロではないのだろう。
霊波刀で痛い目に遭っている事を理解しているのか、霧のみでの牽制に切り替えているようだし。

幸い、古の方も横島が霊力の使い方を教えているので宴の可盃に霊気が流れていてダメージらしきものを入れる事ができている。
だから霧魔も古に対して牽制を行うのみだ。

確かに面倒は面倒なのだが、この相手が“魔”の方の霧魔だったら、二人は直に幻覚に飲み込まれていたかもしれない。
そういった意味ではラッキーだったと言えなくもないのだ。

「いや、襲われてる時点で全然ラッキーじゃないから」

御尤もである。

「ン～～……ドーモサッキカラ気ニナッテタンダガ……
オメーノ知ッテル霧魔ト、オレラノ知ッテル霧魔トハチョット違ウミテーダナ」

「は？　どういう事だ？」

「マ～……何テ言ッタラ良イカ……」

刹那、横島は反射的に身体を反らせた。

鍛えぬかれた勘か、霊感なのかは知らないが、彼が間一髪で避けた顔のあった位置を銀の光が通り過ぎて行く。

その勢いは激しく強く、周囲の霧までスッパリと斬り広げられて

しまうほど。

「な……何アルか！？」

殺気もなく、攻撃の気配もなく横島に斬りかかったもの。

的確に下から顔を削ぎ落とす一撃を加えたものは……

「お、おい……」

「イヤァ……悪リィ悪リィ……」

両の手にナイフを握った殺戮人形――

「イヤ、オメーノ居タ世界ト“ココ”ガ違ウッテ事忘レテタゼ。マ、普通ハ霧魔ノ能力ニ違イガアル可能性ナンカ思イツカネーンダカラ勘弁シテクレ」

「ひ、ひょっとして……」

「当タリ」

チャチャゼロは横島の胸ポケットを切り裂いて地に下り、ナイフを煌かせてケタケタと笑い、

「オレラノ知ッテルコイツラナ、人トカニトリ憑イテ操ル事ガデキンダヨ」

気イ抜イタラコウナンダ。と、やはり何時もと変わらない顔でそう言った。

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊

三人……正確には二人と一体……が戦っている場から少し離れた木の陰。

そこに潜む二つの影。

相手が悪霊の方の霧魔である事は既に解っているが、一方の影……エヴァがもう一方の影である高畑を制止していたので静観を続けているのだ。

「どうするつもりだい？」

「何がだ？」

高畑は木の幹の陰に立ったまま。

エヴァはしゃがんで足元をつついている。

正確には足元に転がっている男を……だが。

少し前までうめいていた男であるが、意識が無い内に彼女の術でムリヤリ情報を引きずり出され、とんでもない悪夢に苦しめられて今は悶絶している。

流石に高畑の頭も冷えたので、そのまま放置して人目についたりすると厄介だと気付いているからここまで引き摺って来ているのだ。

そんな二人の前方では、膠着状態だった戦いに変化が訪れていた。

霧に纏わり付かれる事だけを警戒していた二人の隙をつき、霧魔が横島のポケットにいたチャチャゼロに取り憑いたのである。

横島は戦った相手を無意味なほど細かく記憶する事ができるのだが、流石に“向こう”の知識と“こっち”の知識に隔たりがある事までは気付けていなかった。

油断していた訳ではないが、手痛いミスだ。

だが、本来の力は使えずともチャチャゼロはエヴァの下僕。

幾ら霧魔とて真祖の吸血鬼（ハイ・デイライトウォーカー）の下僕である彼女の意識を奪うには至っていない。

が、エヴァからの魔力が途切れている状態の彼女は霧魔からの力を素直に吸ってしまい、あっさりと身体の自由を奪われてしまった。

主の魔力ではない為全力は出せまいが、それでも長い時をエヴァと共に歩んできた人形。その地力はそこらの式神なんぞ凌駕している。

それが敵としてあの二人の前に立ち塞がっているのだから堪ったものではないだろう。高畑とて油断ができないほどなのだから。

「このままじゃ二人とも危ないよ？
いや仮にどうにかできたとしてもチャチャゼロ君は……」

「良いからほっとけ」

そう心配をしている高畑の言を、エヴァはバッサリと切り伏せる。

そしてその目も、“今は”あそこを見ていてもしょうがないとばかりに足元に転がしてある男に注がれていた。

この玩具をどうしてやろうかと思案しているのかもしれない。名前はおろか顔すらマトモに見られていない男が哀れ過ぎる。まぁ、どうでも良いが。

「しかし……」

「ほっとけと言っただろう？
まぁ、バカイエローはやばいかもしれんがアイツの側にいるの

なら大丈夫だ」

高畑とて優しい教師であるが、魔法は使えずとも紛いなりにも魔法先生だ。裏に関わる以上、それなりの覚悟を持っているものとして仲間に接する。

横島を然程心配していないのは、楓との手合わせでその実力を見知っているし、京都の詠春からの報告でもそれなり以上のものと解っているからこそ。

古を心配しているのは、楓のように元から裏を知っている人間ではなく、関わってからまだ日が浅いからだ。

だから静観しつつも何時でも飛び出せる状態で控えている。

そんな彼がいくらエヴァに問うても彼女は無視を決め込んでいた。まるで“その時”を待っているかのように。

未だに古を気遣っているのだろうか、心配げな眼差しを向けている高畑にエヴァは溜め息を吐いて立ち上がる。

「あのな……さっきから言っているだろう？　放っておけと。確かにバカイエローはヤバイかもしれん。

だが、裏の裏に関わってしまった以上、いつ何時あれくらいの敵と出くわさんとも限らんだろう？

丁度良い機会だし、良い経験となるだろうよ」

「だけど、チャチャゼロ君が操られてしまったぞ？」

「レジストできなかったあいつが悪い」

そう言い放ち、やっと現場に目を向けた。

そこでは横島がどえらい苦労をしているシーンが展開している。

両の手の刃をとんでもない膂力で振り回して襲い掛かるチャチャゼロをいなしつつ、纏わりついてくる霧魔を牽制し、更には古にも気を使い続けているのだ。

その苦労、推して知るべしである。

「もうすぐ……か」

そんな光景を見、エヴァの口元が三日月形に歪みを見せた。

「何がだい？」

「見てみろ。

チャチャゼロと霧魔を相手にしつつ、小鹿やバカイエローにも気を割いている。

流石の奴もいっぱいいっぱいだ。そろそろ限界かもしれんな」

「それが……」

高畑が問い掛けようとしたその前で、突然エヴァがまたククク…

…と笑う。
しかしその笑みは長い付き合いの中でも初めて目にするような珍しい笑い。

「さっきも言ったが、アイツの真骨頂は足手まといを守る時に出る底力。
そして追い込まれた時に開花するとんでも能力だ。
アイツは力の覚醒の時からずっと追い込まれる時にしか力に覚醒できていない。
この状況、アイツを怒らせ、尚且つ力を発現させるに良いシチュエーションだと思わないか？」

「怒らせる？」

楽しげに説明をするエヴァの言葉の中によく解らないものがあった。

追い込まれて行く事や、守ろうとする意志による覚醒は解らぬ事もない。
そうやった状況を打破してきた英雄を間近で見てきたのだから。

しかし今この状況で怒るというのは……

「……始まったか」

じわり……と、エヴァの周囲の空気が変わった。

氷使いである彼女の周囲の温度が急上昇しているのだ。

それは感情の高まりによる魔力の零れ。

愉悦の沸騰だ。

その感情波に導かれるように高畑はそこに目を戻し――

「な……っ！？」

驚愕の声を上げた。

チャチャゼロの利点は体の小ささだ。

何せ一メートルにも満たないサイズ。単純な力比べでもない限り体格の差は不利へ繋がりはしない。

古とてこの体格で自分の倍はある男達を毎朝のようにぶっ飛ばしているのだから。

そしてチャチャゼロは見た目より力があり、自分の体格の倍以上はある鉈を軽々と振り回す事ができる。

流石に今日は持ってきていないようだが、元々がキリングドールなのでナイフは持ち歩いて（或いは収納されて）いるようだ。

おまけに動きが異様に素早い。

人間との違いは筋肉で動いていない事。

人形としての素体に、真祖の吸血鬼の下僕として膨大な魔力を受け入れられるキャパシティを持ち、その魔力をもって加速し駆け回るのだ。

ナイフを繰り出す速度で飛び回られるのだから堪ったものではない。

普通の人間であればそれが何かと認識できるよりも前にバラバラにされている事だろう。

「のわっ！？

ちょっ、当たるってば！！　やめんかーっ！！」

「ムチャ言ウナ。

ツーカ、モット上手ク避ケネート死ヌゼ？」

しかしそれを回避し続けられる横島の能力は如何なものか？

いや、当たらないのに越した事ないのだからこれでよいのであるが。

「ぴ、ぴぃっ！？」

「オット　モット上手ク距離トンネート切ッチマウゼ？」

かのこは身軽であるし何より霧が寄って来れないので避けるのはそう難しくはない。

しかし、チャチャゼロを動かしているモノは積極的にこの小鹿を狙わせている。

潜在的な恐ろしさを理解しているのかもしれない。

確かに　かのこが魔具（アーティファクト）を使用すれば何か変わるかもしれないが、戦闘能力は無いので使っていないようだ。

結局、横島の負担を増やす事となるのだが。

「古ちゃん、手が止まってる！！」

「え？！　ア、アイっ！！」

それでいて彼女の指示できるのは大したものだ。

霧魔に操られているチャチャゼロから一定の距離を取り、身体を動かし続けて回避しつつ、その大げさな動きで霧を蹴散らしてかのこを守り、古に纏わり付く霧を防いでいるのだから。

こんなキリングドールから自分とかのこを守りつつ霧にも対応しているのだから緩慢な動きで回避はできない。

かと言って、焦って避けまくれば余計な風が舞って霧が纏わり付いて来る。

そうなると攻的霊気が強い横島や霊格の高いかのこなら兎も角、まだまだ霊力の弱い古では抗い切れない。

そう判断した横島は、あえて大げさに身体を動かして回避し、その強い風でもって霧を飛ばす策に出たのである。

無論、馬鹿げた体力が必要となるが、彼なら大丈夫だ。

しかし、流石にこうまでされると感心するより信じ難くて頭が痛い。

チャチャゼロは表情が変えられない為にかなり解り辛いが、内心かなり舌を巻いていた。

というのも、

『コ、コイツ、別荘ノ中ヨカ動キガ……』

――冴えている、のだ。

別荘の中で戦闘経験を積ませているのはチャチャゼロと、かなり手抜きに作られた下僕人形達だ。

というのも、横島は相手が女の子型をしていればどうやっても攻撃ができず、武器を向ける事すらできない。

よってエヴァに苦肉の策としてデッサン人形に似た木人を組み上げて戦わせているのである。

彼女にしては破格の大盤振る舞いであるが、それは横島が女に手を上げられない理由を知っているからこそ。その理由の重さが彼女に珍しい妥協をさせていた。

尤も、外見をテキトーにした分、パワーそのものは跳ね上げられているのはご愛嬌。横島の苦労は尽きない。

用意に二日ほどかかっているが、それもまた別荘の中での事。

のべ十二時間も別荘にいたので実質十日間も死と隣り合わせの猛特訓が続いていた。

何故かエヴァは横島の鍛練の間は茶々丸を遠ざけていたので、その間はずっとチャチャゼロと木人の“鈴木君（仮名）”達が横島と戦い続けている。

だからこそ、そのチャチャゼロは驚かされていた。

昨日（別荘内での休息時間を合計すれば二日前）よりも横島の動きが冴えている事に。

弾丸の様に得物を前に突撃して相手にわざと防がせ、防御させた間合いで斬撃を振るう。

竜巻のように身体を旋回させ、薙ぎ払い、そのまま身を捻って下から掬い上げ、避けられれてもまた薙ぐ。

また下から顎狙いの刃が襲い、その勢いを殺さず喉を狙って薙ぐ。

魔法障壁とは違う霊的な壁が辛くもそれを弾くが、その所為で僅かに空いた隙を突き脇の動脈を狙ってくる。

「ひょわっ!?」

だが流石は横島。身体を捻ってそれすらかわす。

何時もながらその反応速度には舌を巻いてしまう。

おまけに今回は両手を広げてわざと風を作り、霧に対抗しているのだ。

呆れと感心も一入だろう。

「オイオイ。今ノヲ避ケルカ？
フツーハ脇ノ下ヲ噴水ニ変エテルゾ」

「してたまるかっ!!　死んでまうわ!!」

「安心シロ。死ンデモ生キテイケル。タダ、あんでっどもんすたーニナッチマウダケデ……」

「安心できるかーっ！！
どっかで聞いたよーなセリフかますなーっ！！」

軽口を叩きながらも風車のように斬撃を送り続けるチャチャゼロであるが、横島はひょいひょいひょいひょいと避けまくる。

相変わらずみっともない回避であるが、超接近戦であるのにも関わらず掠りもしていないのには呆れるばかり。

何せ横島という男、元から戦った相手の攻撃パターンをキッチリ記憶する能力がある。

十日間もチャチャゼロとガチかましていた彼だ。

彼女がどういった間合いでどういった攻撃をしてくる事など気付かぬ筈もないし、操られている状態なのでチャチャゼロの実力ではないからそれはそれで地力でもって避けられてしまう。

チャチャゼロとしても、殺り合っている間掠りもしていない横島に対し、“今の”自分の攻撃が当たるのは不本意なのだからそれはそれで良いのだが。

「ソロソロ反撃シテクンネーカ？　コッチガ斬ルダケジャツマンネーゾ。
ホレ、どがっトカ、ぼぎっトカ　オレノ身体ニイワセテミロヤ」

「物騒なコト言うなーっ！！
つーか、SのくせにM的なセリフかますんじゃねーっ！！」

「ウム。ダガ否定ハシネーゾ。貴方色ニ染マリマスッテヤツダ」

等と何気にカミングアウトしながら、チャチャゼロは横島の攻撃を誘う。

確かに体の自由を奪われていはいるが、攻撃の際に斬るという気を強めればそれなりに力を増す事ができる。
言うまでもないが、霧魔に対してはできず、横島に対しての攻撃だけ。

相棒をマジ攻撃してどうすんねーんっ！？　という説も無きにしも非ずであるが、そすれば普段のチャチャゼロの攻撃より大振りが目立つのだ。
数百年もエヴァの下僕としてキリングドールを続けていた彼女であるから、こんなヘッポコな攻撃をさせられるのは結構屈辱的であるが、それでも横島に攻撃を“される”くらいの隙は作る事ができる。だというのにその隙を突いてくれないのは如何なものか？

「アノナァ……ソロソロ攻撃クライシロヨ」

「うっせっ！！」

全力で刃を振り下ろしつつ、溜め息を吐くチャチャゼロ。

言うまでもなく横島が当たるとは毛ほども思ってもいないが、そろそろ本気になってもらいたいもの。

無論、彼女とて自分の主より横島のことを多少なりとも聞いている。

女に決して手を上げられない理由も聞いているし、チャチャゼロ本人（？）ですら『ジャアショウガネーナ』と思ってもいる。

だが、そのチャチャゼロまでも『女の子』の範疇に入れるのはどうだろう？

「アンナァ……オレハ人形ダゼ？
ソレハオメー自身モ言ッテタダロ」

また溜め息一つ。

元々チャチャゼロはエヴァ同様、他人に対しての関心が薄い。
だが、それが身内の話となるとちょっと変わってくる。

横島とかのこ、そして古やここにはいないが楓も既にエヴァの陣営であり“後輩”である彼らはチャチャゼロは身内として認識している。だからちょっとは気を使う事もあるのだ。

だからこそ彼のその気使いを嬉しく思いつつ、もどかしさも湧き上がってくる。

「ソレニ、オレバッカ相手ニシテタラ大変ナ事ニナルゼ？
アノ嬢チャントカナ」

その言葉を聞き、横島は慌てて意識を古に向けた。

ドサ……

それと同時の事だった――

古がさっき横島が抜いた草の上に鉄扇トンファーを落とし、得物をカードに戻してしまったのは。

「ろ、ろう、し……」

「んなっ!?　古ちゃんっ!!」

修行の最初の方でエヴァが言っていた事であるが、横島のサイキックソーサーは一方向からの攻撃にはほぼ無敵の防御を誇れるのであるが、全周囲攻撃には対応し切れない。
当然、サイキックソーサーとほぼ同じ特性をもつ宴の可盃もまた

同様の弱点を持っている。

確かに三次元的な攻撃でも、一対一という状況ならまだ対応できるかもしれないが、幾ら横島が大げさに動き回って霧を蹴散らそうとも、その全てを押し返す事は不可能。

何せ数……霧という存在の為に絶対量が違う。

量で押し寄せ、纏わりついてくる霧が相手なのだ。

何の変哲もない霧が身体に触れた瞬間にその霧に混じって来られたら反応し切れないのである。

現に古は、地面を薄く這って来た霧には気付けず、足首から纏わり付かれていた。

こうなると動きが鈍くなってしまうのだから、当然のように上半身も霧に纏わり付かれてしまっている。

横島のように神がかった勘で避けまくれる人間がそうそういる訳が無いのだ。

意識を持って行かれてないのは横島との霊的な修行のお陰。

元々が攻的な氣を持つ彼女は、やはり霊波も攻的なものだったようで何とか抗う事ができていた。

ただ、流石にまだ霊的なレジストは素人の域なので弾き出す事はできるに至っていない。

どちらにせよ、気力が尽きれば意識を持って行かれるので拙い状況に変わりはないのだが。

「ナ？　ソロソロ覚悟決メロヤ」

彼女にしては珍しく、優しく諭すように促して行く。

何せこの男は下手に挑発すると意地になってやらなくなる。それでは被害が大きくなりかねない。

そんな風に多少の気を使うのも、折角の“後輩”だからなのだろう。

「……お前は……それでいいのか」

そんなチャチャゼロを前にし、横島の動きが――止まった。

「ハ？　何言ッテヤガンダ？　オレハゴ主人ノ下僕デ人形ダゼ？　ココ十何年ハ暇ダッタケドヨ、昔ハ　コンクライノ事何カショッチュウダッタゼ」

何せエヴァは元６００万ドルの賞金首。

日常茶飯事……とまではいかずとも、それに近い感覚での戦いは数多とある。

“壊されかかった”回数も少なくないのだ。

「がきガ……ナメンナヨ？

イチイチブチ壊サレル事気ニシテゴ主人ノ下僕ナンゾヤッテラレッカ」

だからチャチャゼロから言えば余計なお世話。

いや、気持ちそのものは嬉しくもあるが、それで自分までやられたら本末転倒ではないか。

“先輩”としてそれは許すわけには行かない。

チャキリとナイフを構えなおし、横島と距離を離す。

身体の自由は取り戻せていないのだが、本気で殺り合う気になったら急に動き易くなったのは霧魔の戯事だろう。ふざけた奴だ。

自分はぶっ壊されるかもしれないが、その後で横島は大激怒必至。

今は好(ィ)い気になっているだろう霧魔だが、そのときに大後悔するだろう。ザマァミロである。

「……」

しかし、対する横島は佇んだまま。

覚悟を決めているのかいないのか。

「マ、セイゼイ足掻イテクレヤ。

注文ツケンノナラ、『痛クシナイデ』ッテトコカナ？」

軽いジョークを飛ばし、何時もの様にケタケタ笑いつつナイフを強く握り締める。

サイズは７０?程度の人形であるが、その膂力はそこらの人間を超えているのでダメージを受けるとシャレにならない。

だが、言う事やる事無茶苦茶なチャチャゼロであるが、それでも気を使っている事が解る。

横島に戦い易いよう促しているのだから。

女の子ではなく、単なるキリングドールを相手にするだけだと訴えているのだから。

「……」

そんな彼女の言葉を噛み潰しつつ、横島は顔を上げた。

彼の意識はチャチャゼロと古に向け続けられてはいるが、何故か目は空の一点に向けられている。

「……」

呆けたような眼差しが向けられた霧の一角。

そこには周囲に散っていたモノが蠢いていた。

もぞり……と人の形をとったそれ――

その口元が、楽しげに歪められている事が……横島には見て取れた。

みぢっ

その瞬間、

絶対的なナニかが、

とてつもない音を立て、

――切れた。

「おい、ゼロ」

右手に出していた霊波刀。

その出力が唐突に上がる。

「略スナヤ。何ダ？」

そして、

「おめーは先輩で、オレは後輩だったな？」

「オオ」

「そっか……だったら……」

横島の霊気が、上がった。

「Ｌｅｔ'ｓ下克上ぉ――っ!!!」

「ナヌッ!?」

横島は唐突に咆え、チャチャゼロとの距離を詰める。

ようやく殺る気になったかと反射的に刃を振るうが斬ったものは空。

体格差からチャチャゼロは掬い上げて斬らねばならなかったのであるが、横島はなんと地面スレスレを影のように滑り込んで来ていた。

チャチャゼロがハッと気付いた時には、彼女の小さく細い左右の腕は彼の左手の指の間に挟まれていた。

「ナ、何!?」

それだけならまだしも、彼は転がるようにチャチャゼロを掻き抱いたではないか。

「コ、コラ離セ!!」

慌ててもぞもぞと脱出を試みるが、どういう訳か彼女の力をもってしてもその腕からは抜け出せない。

意外なほど力が強いというのではなく、何とチャチャゼロを捕まえている彼の左手は霊気で包まれていたのである。その霊気で固められているようなものなのだから早々上手くゆくはずもない。

「やかましいわっ!!　後輩が何時までも先輩の言う事に素直に従うと思うな!?

下克上は時の習いじゃいっ!!

わいはオマエの命令に反逆する！！」

「コノ馬鹿タレッ！！　ワケ解ンコトホザクンジャネーッ！！
ダイタイ、ンナ事ヤッタッテドーカナル訳ガ……」

そう、どうかなる訳は無い。

“普　通”なら。

「取り憑かれた相手を助ける方法は無い……ってか？」

「エ？　ア、アア……普通ハ……」

そこまで口にし、彼女もハッと気付いた。

その目を。

異様に何かを信じさせるその目――

そう、横島は決して“普通”ではないのだ。

「あんだよな、それがっ！！」

ゴ…ッと音が響くほどの霊波がチャチャゼロの身体に注ぎ込まれた。

流石の彼女も驚いたが、不思議な事に苦痛に相当するものは無く、不思議な温かさのみが身体を駆け抜けて行く。

いや、人形の身なのでエヴァからの魔力充填時のような達成感は兎も角、『心地良さ』というものは知らない。

それでも『心地良い』と感じてしまうのは何故だろう？

―ガァアッッ!!??―

その反対に、苦痛に満ちた叫びが周囲に響き、チャチャゼロの身体に憑いていた霧魔が弾き出せれた。

「オ、オォッ!?」

無論、チャチャゼロもまた驚いた。

先程も述べたが、この横島という男は存外な記憶力を持っている。

それは確かに勉学等には結びついていないのだが、戦った相手の攻撃パターンや霊気などはハッキリと記憶できるのだ。

彼の魔神との戦いの前、霊動実験室にてその能力は明かされてはいるのだが、当然ながら戦っていた相手が十倍設定だった事など彼は知る由も無かったので自覚は全く無かった。

その能力を持っている彼だからこそ、十日間も戦い通しだったチャチャゼロの霊気などとっくに記憶ができている。

後は自分の霊波をチャチャゼロの霊波に同調させ、異物を叩き出すだけなのだ。

それも昔、雇主がナイトメアを患者から叩き出した時の応用である。

言うまでもなく、そこらの退魔師はおろか“元の世界”のＧＳでもやすやすと出来る事ではない。

だが、鮮明且つ克明な十七年分の記憶があの時の霊波すら思い出せてくれるし、それより何より……

キレた横島に出来ない筈もなかった――

「古ちゃんっ！！」

「え？　きゃっ！？」

直後、霧魔を叩き出したチャチャゼロから片手だけ放し、そのままハンズ・オブ・グローリーを発現させて古を引き寄せる。
そして彼女の身体が動かないのを良い事（？）に、

「ごめんっ！！」

そのまま強く抱きしめ、思いっきり霊波をぶち込んだ。

「きゃんっ！？」

なんか可愛く鳴いてしまう古。
ちょっち萌えたのはナイショだ。

古はずっと横島に霊力の修行をつけてもらっている為、当然ながら彼女の霊波は理解し尽くしている。
だから彼女の霊的中枢（チャクラ）を傷つける事無く異物だけを引き千切る事など雑作もない。

ただ、霊体を直接抱かれたカタチになったのであるが……抱かれている古は兎も角、横島は気付いてなかったりする。

―グガァァァァァッ!!??―

当然ながら訳が解らない霧魔は痛みと苦しさで悶えるのみ。

しかし直感的なそれ。

今まで感じた事も無い圧倒的に大きい不安……

“コイツ”と戦う事はあまりといえばあまりにリスクが大きく、拙過ぎるという事だけは理解できた。

エヴァに遥かに劣るとはいえ、この霧魔もそれなり以上に長い時間存在し続けている。

その間にエクソシストやら、退魔の術を習得している者達と戦った事もない訳ではない。

しかし霧に混ざっているだけであり、霧の中がフィールドなので早々危機に陥る事もないし、霧と共に現れる事が出来る為、積極的に関わる事を恐れて追い払う事しかできなかった。

だが、目の前にいる男はどうだ。

確かに打つ手は無さそうだっが、間違いなくダメージを与えて来ている。

霧を通じて霊波を送り、本体にちくちくとダメージを与え続けていたのだ。

余りにウザいと感じた霧魔は、だからこそ人質兼手駒兼獲物として女に憑いたのであるが……まさかその所為で積極的且つ効果的な攻撃を始められるとは思いもよらなかった。

だから霧と共ここを去ろう。

ここには女の、それもうら若き乙女の気配に満ちている。

闇に潜み、霧が出た時に別の女をいただく事にしよう。

そう判断してその場を去ろうとした。

無論――

「逃がす……かぁっっっ！！！」

かなり手遅れなのだが。

修行が始まった最初の方で、横島はエヴァにこんな事を聞かれている。

『ハンズ・オブ・グリード……
ふん、“栄光の手”とやらに欲を練り込んでスタンドアローンの簡易式神としたか……面白いな。
ん？　という事は“別の意識”も込められるのか？』

最初はどういう意味か解らなかったが、落ち着いて考えてみると彼もどうなるんだと疑問が湧いた。

あの時はせめて一矢報いる為だけに放ったテキトーな技であったが、そう言われてみれば何ができるのだろうと。

尤も、鍛錬中だった事もあるし、木人やチャチャゼロを前にして余計な思考はできやしない。

だから“試し”すら行えなかったのであるが……

「ハンズ・オブ……」

今ならどう試したとて被害はない。

あんな相手に……

女達が苦しみを、覚悟を見せているのを見て嘲笑う奴なんかに気

遣う必要なぞ塵ほども無い。

「グリード！！」

左腕にチャチャゼロと古を抱きしめたまま、右腕を前に突き出して霊気と意識をぶち込む。

欲望やら煩悩に事欠かない横島だ。
マイナス想念を込める事に力不足になる事はありえない。

ゴ　ォ　オ　ッ　！！！

瞬間、風が逆巻いた。

右腕に収束された霊力に餓え狂った意識が充填され、膨れ上がって別の形をとったそれが凄まじい勢いで対象を吸いこみ、貪り始める。

―！？―

流石に霧魔も驚愕する。

慌てて意識を男に向けてみると、軟体生物の口を思い出せる形…
…巾着の様な形になった霊気の腕が空気ごと霧を吸いこんでいるで

はないか。
　ご丁寧にも霊体はフィルターで漉しとられる様にその中に引っ掛かり、空気は肘のあたりから放出している。

足掻く、

もがく、

悶える、

必死になって逃げようとする。

した事も無い生存への努力。やろうと思った事も無い無様な遁走。
死ぬとかどうとかではない。
消える、滅されるという恐怖が噴出し、破裂するような原初の感情が後押しして逃れようとする速度を更に更に速めてゆく。

だが遅い。遅過ぎた。余りと言えば余りに遅い。
それに逃げられない。その方法がないのだ。

強い欲望。狂おしい概念。

収束能力に特化した人間の化け物は、“捉え喰らう”という概念を込めて霊力を収束させている。

霧魔は、その体の全てをヴァリヴァリと貪り喰われるという恐怖を死してから初めて味あわされ、必死になって逃れようと更に足掻くが当然のようにそれは叶わない。

それに――

ハッと気が付き、そこに意識を向ける。

もがこうにも逃げようにも霊気の吸引によって逃れられず、その上真正面から押し込むように風が襲い掛かってきているのだから。

そこにいたのは白い小鹿。

――否。白い大鹿。

巨大な角を持った大きな雌鹿である。

山の気が集まって生まれた山の精であり、大自然の精霊なのだ。

普段の小鹿状態なら兎も角、符の力で持って格を上げた　かのこには自然が味方する。

つまり、かのこが敵と見做せば自然が敵と見做すのだ。

幾ら裏庭という作られた自然であろうと、木々や水、風が敵と見做せば怨霊などに打つ手等あろう筈が無い。

その上、横島を怒らせたのだ。逃れる事など不可能である。

紛れ、這い寄り、奪い、侵す。

如何にそれらに特化していようと、霧ごと全て喰われる等という馬鹿けだ手段に敵う訳がない。

霧を幾ばくかに分けて逃れようとしても、どこから飛んできたのか榊の葉やら月桂樹の葉等が突き刺さって霧散する。

シキミの葉も混じっており、霊にとっては途轍もない苦痛を伴っている事だろう。知った事ではないが。

如何な霧魔とはいえ逃れる術は既に無い。

出来る事といえばただ苦しみを受け入れる事だけ。

しかしそれでもまだ足掻く。

声はおろか、音にもなら無い絶叫をあげ、何とか逃れようと足掻き続ける。

しかし無駄な努力。

蜘蛛の巣に絡め取られた羽虫や、咽喉に喰らい付かれた獲物のように死ぬまでの時間を待つ事しか出来ない。

呆気に取られる古とチャチャゼロの前で、あれだけ脅威を誇っていた霧魔は、クラゲに呑まれる獲物のように“実体だけ”が霊気に捉えられてしまった。

だが、それでも足掻く。

直径二メートルにも及ぶ風船状に膨らんだ霊気に閉じ込められたまま、霧魔は……いや、霧の全てが奪い去られて単なる悪霊と化した“それ”は、それでも足掻き続けていた。

「往生際が悪りぃぞ……このクソ野郎！！」

そしてその霊気は更に変化する。

エヴァは更に問う――

『確かにキサマは驚異的な収束能力を持っているようだな。あの珠はまさしくそれの集大成であるし。

だが……栄光の手とかいう力や、サイキックソーサーとかいうあの力を……』

――それらの力のみを収束させる事はできんのか？

ギシィイッ！！

空気が軋んだ。

いや、空（くう）が軋んだ。

霊波刀……ハンズ・オブ・グローリーは強化ゾンビに追い込まれた横島が、土壇場で霊格を上げた時に生まれたもの。

だから、サイキックソーサー“そのもの”の収束度を意識的に上げた事はない。

ハンズ・オブ・グリードは、形を変えてはいるが元は横島のハンズ・オブ・グローリー。だからこそ形を変える事もできる。

そして当然、それからサイキックソーサーに戻す事も……

横島はその状態で霊体を握り包んだまま、それをサイキックソーサーへと変化させた。

悪霊の苦しみ悲鳴ごと霊体は押し潰され、更に圧縮して薄べったく平たく延ばされてしまう。

だが、怒りに満ちた横島の手の中。当然ながら握力ならぬ霊圧は激増している。

収束能力が特化している横島。
その力でもってサイキックソーサーは更に更に収束の芽を見せた。

「う、わぁ……」

驚愕する古。言葉を失っているチャチャゼロの前で、霊気の盾だったものは完全に存在するモノになっていた。

大きめの手鏡の鏡に似た六角形の物体。

厚みはあるようで無く、見た目の材質も不明。

異様に収束された霊力がガラスともプラスチックともつかない、光を反射しない淡い赤色の物体となり、その存在感を主張しつつ空に浮かんでいるではないか。

―△＊@□＊△★※―っ！！！―

悪霊を閉じ込めたまま――

「やれやれ……やりゃあできるってコトか……」

意味を込める事が珠、文珠。
“この世界”のマナは“元の世界”より豊富で、それを数秒で生み出せるようになっている横島なのだから、短時間でサイキックソーサーの霊圧を上げる事も可能なのかもしれない。
きっかけは霊能力に素人である筈のエヴァの言ではあるが、鵜呑みにするように行って“出来てしまう”のも考えものだ。

だがそれでも……

「オメーをとっ捕まえる役には立ったよなぁ……
ええ？　おい……」

空に浮かんだそれを手帳か何かかのように軽く手に取り、煽ぐように振ってそう言い放つ。

無論、彼の声音は冷たい怒りに満ちている。

逃げようにも、霊体は押し花状態でピクリとも動かせない。
プレパラートにされたバイキンも真っ青だ。

意識のある霊体で封じられた弊害か、死に匹敵する苦しさと痛みにのたうっているかのよう。

しかし、横島はそんな悪霊は完全に無視。
“そんな奴”の事何かより大切な事があるのだから。

ポイ捨てするかのように宙に放置し、腕に掻き抱いたままの二人に目を戻す。

「古ちゃん、ゼロ。無事か？」

「……へ？　あ、アイ……」

「マ、マァナ……」

「そっか……」

一応はホッとしかけたものの、念には念を入れて霊視してみる。
それで異状を感じられなかった事を確認し終えると、やっと胸を撫で下ろす事が出来た。

僅かに笑みらしいものも戻り、やっと古を腕から解放してチャチャゼロはポケットに入れる。

ポケットが多い作業着であるが、右の胸ポケットはチャチャゼロが操られた時に破いてしまったので左の胸ポケットに入れた。

心臓の音がダイレクトに伝わって来てチャチャゼロも何だか妙に落ち着いてしまい、黙り込んでしまう。

二人（？）が無事だった事が解って安心したのだろう、かのこも小鹿に戻っている。

すると札に戻ってしまいポトリと地面に落ちてしまったので、持ってゆく方法に困っていた。

どういう訳か呼べばどこからともなく飛んでくるので、呼ぶ際はどうとでもなるのだが、しまう時が大変だ。

仕方なく札を咥えて歩く事にしたようである。

「え、えと……老師……？　アレは……」

古は呆然と横島の作業着の袖を掴んだまま、宙に浮かんだままのサイキックソーサーを指した。

それは何かに吊られているかのようにフワリと浮いたまま。そして中では薄黒い染みにも似たナニカが未だ蠢いている。それこそ苦しみから逃れんと必死に。

「ま、アレが修行の成果ってトコか？　成功したのは今が初めて

だけど……」

「そーゆー質問では無かたアルが……
アレを……“氣”だけで作り上げたアルか？」

その言葉に、古の眼は驚愕と感心に彩られた。

尤も、正確に言えば氣だけではない。
エヴァから『イヤッ！』というほど叩き込まれているマナの収束やら、魔法を無詠唱で使用する時と同様の集中の仕方が混ざっている。

それでも存外。
たった十日間で覚えられる技ではないのだ。

「ま、一回できたんだから後は慣れだな。
……つーか即行でモノにせんとキティちゃんに殺られる……」

そういって顔に縦線をたっぷり浮かべたりガクブルしたりする横島であったが、そもそもモノにできる可能性がある時点で規格外。
その事に気付いていないのだから、相変わらず罪深い。

無自覚だろうが、修行者が血涙流して悔しがる程の才能もちなのだから。

無論、どれだけ才能があろうと土壇場でこんな事はできない。

となると、想像以上に彼はがんばっている事になる。

事実、横島は、費やした苦労を思い出してがっく～んと肩を落していたし。

何気に夕陽が傾いて影が伸びているのが余計に物悲しさを増す。

微妙に絵になっているのがまた遣る瀬無い。

校舎の角まで長く伸ばした影に、ふか～～～く溜め息を吐きかけていた横島であったが、直に頭を上げて古に眉を寄せた微妙な顔を向け、

「悪りぃ……霊的防御の上げ方教えてなかった。ゴメンな」

と、頭を下げた。

「へ？」

そう言われても古は困る。何がなんだか解っていないのだから。

――確かに古は硬氣等で防御を固める事ができる。

が、それは氣を発現させるという事なので、霊的なモノから言えばご馳走を見せびらかしているようなもの。古のように一般人最強クラスの氣の使い手なら尚更だ。

だからこそ精気を求めていた霧魔はこの場を離れなかったのだ。

尤も、そのお陰で被害が出なかったという感もあるので、どっちもどっちと言えなくもない。

だが今の横島の立場……紛いなりにも＜古の師匠＞をやっている彼から言えば、肝心の霊的な防御を伝えていないのはポカである。

いや、どんな理由があろうと、少なくとも彼はそう思っている。

元々が戦闘スキーでなく、自衛能力から手に入れた彼だからこそ、防御の重要性を理解していた。していたからこその謝罪だ。

「ア、アイヤ……そんな事ないアルよ。守りの氣を出し切れてなかた私の力不足が……」

「いや――」

それでも、と横島は非を口にする。

「古ちゃんの才能は知ってるし、努力も知ってる。

でも、どれだけ才能をもってても使い方を知らなきゃ使いこなせないじゃねーか。

オレは師匠として古ちゃんにみっちりとそれを教えなきゃならない筈。それができていないのはオレのミスだ。

だから、ゴメン……」

一度の失敗で何もかも無くす事もある。

たった一つを無くす事で、大きな疵を残す事もある。

その事を知っているからこその謝罪。

後悔を知っているからこそ、伝えきれていなかった事を詫びているのだ。

理由は解らずとも、彼の“しこり”が何となく伝わり、古は胸が一杯になった。

彼が自分をこれだけ想っていてくれた事に。

そして……

疵を残している相手がいた事に――

ずきん……

「……っ」

「え？　古ちゃん？」

何となく胸が痛み、右手を当てる。

それを見て怪我でもしたのかと気にはなったが、古は何でもないアルと手を振って誤魔化した。

――そう。物理的な痛みではないのだから……

“これ”が何なのかよく解らないが、古は笑顔を作って痛みを誤魔化した。

横島から見ても空元気だと解る表情だったが、彼はその理由が満足に戦えなかったのが原因だと勘違いしている。

自分だって今の年齢の時は足手まといだったからその気持ちは良く解る。

だから今はそっとしておこう。

そう勘違いしたまま横島は手を差し伸べて古を立たせてやった。

――そんな彼の気遣いが嬉しい。

霊気を浸透させて霧魔を叩き出してもらったのだから、古は横島の霊気と直接触れ合いっており、彼の優しさから来る怒りも理解できていた。

その時に伝わってきた自分やチャチャゼロの為に怒ってくれたその気持ちが、優しさが嬉しかった。

だからこそ、その怒りの根源に“居る”であろうモノ……恐らくは女性……に対し、奇妙なイラ立ちを覚えてしまう。

それがオンナに対しての嫉妬だと未だ気付けぬまま、古は横島の手を握ったまま修学旅行の時と同様に彼の手を引いてこの場を後にした。

後に気持ちを引き摺って行くように……

何か忘れられている――

そう、霊体を閉じ込めたサイキックソーサーが完全にほったらかしのようだ。

だが当然、彼はそんなポカをかましたりしない。

仲間内には大ボケが多く、人前で三枚目ばかり見せまくる彼であるが……

ジュ…ッ！！

――……ッッッ！！！！！！――

彼らの姿が校舎の角で見えなくなったと同時にまた霊撃エネルギーへと再変化し、その霊体構成を完璧に消滅させた。

人前で道化師を演じてしまい、重い空気を台無しにする。

そんな横島であるが、敵に対してまでそんなサービスをしてやる気は更々無い。

霧魔“だった”ものの断末魔を感じたか、理解していたのか、横島はそれに対して片眉をぴくんと動かし、かのこは一瞬だけ振り返った。

しかしそれだけ。

然程も気にせず古を寮の前まで送ってゆく。

春が終わろうとし始めている晩春の放課後。

夕陽に照らされている校舎裏の陰。

二人と一頭が立ち去った後に残るのは何の変哲も無いそんな日常の光景。

後には何も、残っていなかった――

＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊

手に持っていた煙草を何時の間にか落していた事に気付き、高畑は慌てて落ちていた煙草を踏み消した。

ふと横を見ると、エヴァが微妙な笑顔を浮かべて年の差カップルの態で歩く下僕二人＋2を見つめている。

だが、不快でない事だけは間違いないだろう。

ク ク……と悪戯っぽい笑みを零しているのだから。

「まぁ、三十点ってところだな。赤点だ」

それでも点数は辛口だ。

「ず、随分と厳しいね」

「フン……十二分に慈悲深い採点だぞ？

現に今の戦いでもヤツの収束は見事だったが、それだけだ。

思いつくのは遅いし、注意も散漫。

反応速度は相変わらずだが、チャチャゼロが取り憑かれた事でやや我を忘れている。

現に霧魔に挑発されてキレていたしな」

「まぁ……ね」

「それに……」

文珠の使用禁止の命令を実行したのではなく、最後の方は使うのを忘れていた――

いや、『使う事を忘れるほど怒っていた』が正しいか？

どちらにせよ大減点であるが。

「エヴァ？」

急に黙った彼女をいぶかしく思ったか、高畑はそう問い掛けてしまう。

無論、下手な事を口にする彼女ではなく、『何でもない』と手を振って誤魔化すのみ。

甘めに見た理由を口にするほど落魄れてはいないのだから。

「しかし……クククク……」

思わず笑ってしまう。

横島が自覚しているのかしていないのかは知らないが、我を忘れかかったという事は、彼は間違いなくチャチャゼロを操っていた事にも怒っていた。

つまり、彼の中では既にチャチャゼロという“人形”すら仲間内にいるのだ。

それが面白くてたまらない。

人間と人外の垣根が異様に低い事は知っていたが、ここまで低いとは思ってもいなかった。

「ククク……やはり実験も兼ねてアレを試してみるのも良いか……長年付き合ってくれているしな……」

「え、え～と……？」

赤点を告げた口でさも嬉しそうに笑うエヴァに、流石の高畑も退き気味。

ただ、苦労はさせられそうだが“悪いコト”をしようとしていない気はしていた。

暫く笑い続けていたエヴァであったが、そんな微妙な顔をして首を捻っている高畑に気付いて笑いを止め、彼のその足を軽く蹴る。

「ホレ、コイツを連れてとっとと行け。
言った通り、単なる『意趣返し』だとは思うが、念の為調べておくのだろう？」

「あ、ああ……」

今一つ納得しかねる気がしないでもないが、それでも高畑は元同級生の少女の言葉に従ってグッタリとしている男を肩に担いで茂みから出てゆく。

詰問部屋に連れて行く途中、ちらりと騒動があった校舎裏に目を向けるがやはり何の変哲もない校舎の裏。

いや、何だか昨日より陰の部分が減っているような気さえする。

「霊体を吸い込み、氣を凝縮して拘束……
そのまま氣を物質化して封印した挙句に悪霊を浄化……とんでもないな」

学校という場所は、若い思念が良く篭ってしまう場でもあるある。
校舎裏などの隅に陰が篭るのもそれが理由だ。

その陰が減っているのは、霊体を吸った時に巻き込まれたのかもしれない。

浄霊ができるのだから浄化もできるかもしれないが……それにしても……

「やれやれ……学園長にどう報告すればよいか……
問題ばかり増やしてくれるな。キミは……」

これから尋問するのだろう高畑と別れ、エヴァは家に戻っていった。

如何に力を抑えられようとエヴァは夜の眷属。日が暮れてきているので道が良く見えている。
だから足取りも軽い。

面白い事もあったのだし。

幸い横島は霧魔の報告にジジイ……学園長から呼び出せるだろうからもう別荘に来るまで少しかかる筈。
絶対に指定した時間に遅刻するだろうから今日もペナルティで虐める事ができる。

流石はエヴァンジェリン。何気にワルだった。

「まぁ、良い。後は方向付けだ。
しかし……思った通りの力の発現だったなぁ……横島忠夫。
概念の使い手よ……ククククク……」

エヴァは笑う。

そしてワラう。

満月でもないのに、意識の高揚に身を任せて。

今日もまた矛盾した刻の中で彼を鍛え上げ、研磨し、弄る。

その事だけを思い描き、足取りを更に軽くして草を踏み家路視を楽しむ。

いい加減、往復し飽きた道を辿って行くと、何時もの歩調より若干軽めだった為か、慣れた感覚より早くログハウスが見えてくる。

ふと気が付くとその窓から生活の明かりが漏れていた。

恐らくは茶々丸。メンテを終えて先に戻っていたのだろう。

彼女を下僕にしたからは別段珍しくも無い光景であったが、それでも何故かその事を嬉しく感じ、エヴァは明るい気持ちでノブに手をかけ、

「さて、今日の反省も踏まえてどう弄ってやろうか?」

口元を緩めながらドアを開けた。

後編（後書き）

お疲れ様でした。
強いっちゃあ、強いんですが、出力よりも手数を増やすのが彼らしいと思いまして、ウチの横っちはこーゆーＰｏｗｅｒ　Ｕｐにしてます。
やっぱ地味っスがｗ

ごっつ強すぎるのはナニですし、ウチの横っちは『魔族因子持ち』ってパターン使ってませんので。
いえ、元々才能がスゴい人ですし、能力を弄り倒すだけでスーパーなんですが。

さて、次ですがちょっと幕間とします。
そしてその次が“あの”試験の話。ですんでその前フリですかねー

原作主人公が目立たないのはナニですが、この話の主人公は横っちであり、ヒロインは楓らですからねー
無論、ネギきゅんも強くなりますヨ？　横っちを基準に置いた拷問みたいな修業になりますからｗ

兎も角、それがどういう流れになるかは次々回から。
てな訳で、続きは見てのお帰りです。
ではでは～

本編（前書き）

真に遅くなりました。ゴメンナサイ。

ggggは後に回して幕間を始めます。

本編

調書を眺めていた老人が溜め息をついて眼を離す。

いや、書類に不備があったという訳ではない。

その調書を纏めた者はそれなり以上に信頼の置ける男性教師。

表裏で活躍し、魔法世界でも名を知られている魔法教師だ。

彼が動けば事件は解決するとまで言われ、体質的に魔法を唱えられない人間であるが所謂“立派な魔法使い”と同等の扱いを受けている英雄でもある。

その彼も苦笑を浮かべながら老人の手元の書類を見つめていた。

「しかし……妙な因縁じゃのう……」

「ま、確かに……」

呆れると言うか何と言うか……やはり老人の表情は微妙である。

この調書――

これは、先日この学園都市に侵入し、霧魔を女子中等部の校舎に放った犯人についてのものだ。

事件は起こりはしたが、幸いにして被害は極めて軽微。

公園のブランコのポールが歪んだ程度。

やはりと言うか、何と言うか、襲撃者は小物ではあるがテロリストとして手配されていた男。

無論、小物とはいえテロリストとして認定されているのだから厄介な相手である事に間近いはない。

そんな男を事も無げに打ち倒し、被害も出さずに捕えられたのもこの男性教師の腕前あってこそだ。

で、その霧魔の方であるが……それは一人の用務員の手によって退治されていた。

こちらも被害は軽微。

非公式ではあるが“裏”の関係者となっている少女が憑かれかかり、少々精神疲労した程度。一日～二日程度休めば完治するだろう。

後は皆無。

あ――件の用務員のポケットが関連した事柄で裂けてしまっているが……まぁ、それは由としよう。

兎も角、侵入してきた男が所持していた瓶（魔封じの瓶らしい）に封じる事しかできなかった“筈”の霧魔は、怨霊の部分のみを用務員によって滅されるというユカイな最期を迎えていた。

「ヤレヤレ……あの氣の盾を更に凝縮して霊体を封じ、そのまま

エネルギー転化させて浄化したと？」

「ええ。見事なものでした」

ついでに言うなら、霊気の腕に意識を込めて周囲の霧ごと喰らって漉しとった訳であるのだが、どちらにしても……

「とんでもない能力じゃのぉ……」

――である。

「いや、全く……

僕も今までそれなりに術者を見てきましたけど、完全に物質化させたのは初めて見ました。

霧魔の格からして、それごと封じた強度も収束速度も半端ではありませんでしたしね。

アレだったら魔族すら封じられるかもしれませんよ？」

「う～む……頼もしいと言うか末恐ろしいと言うか……」

元々その話に出ている用務員の青年は、氣を収束して頑健な盾にしたり、剣状に武器化させたりしていた。

理屈から言えば、更に収束度を上げると物質化できてもおかしくはないと言えなくもない。

言えなくもないが……

「それは理屈“だけ”の話じゃし、机上の空論を実行されたらワシら魔法使いも立つ瀬が無いわい」

「御尤もですね……
まぁ、彼ですから理屈じゃなく、屁理屈を実行したという感もありますが……」

「言いえて妙じゃの」

「感心だけしててもしょうがないんですけどね」

まぁ、娘婿から聞き及んでいる京都で“しでかした”活躍もとんでもなかったので、ある意味想定内。
ヤツならヤっちまうんじゃね？　という気がしないでもない。

つーか、そう思わないとやってられないっポイ。

元からそこらを神様が歩いてた世界から来たという人間なのだし。

「まぁ、ええわい……気にしたら負けじゃしの」

「ですね。僕もそう思います」

何気に丸投げ気味ではあるが、それも致し方ない事。

そもそも自分らも魔法使いという非常識な存在だ。
その中に常識の斜め上を行く男が入って来てたとしても余り奇怪な話ではないだろう。多分……

それに、何だかんだ言って二人は結構彼の事を信頼してたりする。
確かに非常識な能力を持ってはいるが、一般市民に被害が出るような事はしないだろう。

少なくとも女生徒らは絶対に守り抜くだろうし、彼女らの笑顔が曇るような事だけはすまい。
それだけは断言できる。底抜けにお人好しでもあるし。

どちらかと言うと、彼が厄介事を抱え込むだろう事を危惧した方がまだマシだ。それはそれで頭の痛い話であるが。

何しろ、先の修学旅行で連れ帰ってきた使い魔というのが……

「精霊の集合体。
どちらかというと妖怪に近いのじゃがのう」

「普段は可愛い小鹿なんですけどねぇ」

山の精霊の集合体なのだ。

■休み時間　＜幕間＞：子鹿モノ語リ

普通なら受験に突入する筈の中学三年という微妙な時期に修学旅行を行なっているのは、ここ麻帆良学園がエスカレーター式だからであろう。

それが理由の全てとまでは言わないが、進学コースを突き進む気でもない限り、学力向上にそんなに力入れる必要も無いので呑気な者が多かったりする。

その分、部活に精を出す者も多いが、そう言った学生達も成績が悪いだけで授業を疎かにしている訳でもない。

そこらが他の学校と違う点かもしれない。何せ授業をサボるような輩が極端に少ないのだから。

成績が良い者が求めればもっと勉学に励めるようになっているし、成績が悪いなら悪いなりに学園生活を楽しむ。

丸投げでは無く、ちゃんと教師が締めるところは締め、生徒に任せるところは任せる。自立心を養わせつつも、それに付いて回る責任もちゃんと教えているのは教育カリキュラムがしっかりとしている証拠かもしれない。まぁ、その代りに自立し過ぎて暴走する生徒がいないでもないが。

よって暴力的な行動等で問題を起こそうとする輩が出れば武術関係のクラブ（時には何故か存在する武闘派の文化系クラブも）が出場って騒動を鎮圧（注：“鎮静”ではない）する様になっている。万一の場合でも有能過ぎるくらい有能な広域指導員が黙っていないし。

だから騒動は多いが深刻なものは無いと言って良い（その代り羽目を外した場合の騒動は半端ではないが）。

昨今の学校事情から鑑みても、かなり平和な学校である。

で、そんな学園に存在する数多過ぎるクラブの中、どう見ても真面目に考えてないだろう的なクラブがあった。

その名も“さんぽ部”。

部員はたった三人。クラブとして成り立っているのか判断に困るところである。

実は他にも部員がいるという説もあるが、誰も実際に目にした事が無い為、真偽の程は定かではない。

が、この文化系なのやら体育会系なのやら線引きが微妙なクラブ、無意味なほど体力がある事で知られていたりする。

一人飛びぬけた体力，体術持ちがいるがそれを別にしても、見た目が幼児の残る二人の体力も普通ではなく、麻帆良のど真ん中にどどーんと突っ立っている“世界樹”のかなり上の方まで息切れもせずするする登って行けたりする。

部活動にしても、小休止も確かにとりはするが、目的地を決めた後は寄り道をしつつもただひたすらウォーキングし続け、お腹が空くと『ご飯だからかーえろっ』とばかりに寮へと戻って行くというハードなもの。

暢気と言えばそれまでだが、その実は三時間ほど歩きまくる持久力迸る運動モドキだったりするのだ。

それでいて学園内の各施設、各クラブの事情にも詳しく、それらを紹介して歩く事も出来てしまう。

何だかんだで報道部並に学園内の事情に詳しく、それでいて人並み以上の体力がある。

だから区分が難しいクラブなのだ。

他にも、ロッククライマーのスキルを必要とする図書部という謎クラブもあるが、それは横に置いといて……

――で、そのさんぽ部であるが、珍しい事に今現在やたら激しい活動を行っていた。

「か、かえで姉ぇ……」

「……ド、ドコまで行くですかぁ～？！」

体力馬鹿が多い３－Ａの中では霞がちであるが、けっこう体力があったりする風香と史伽の二人。

その二人が今、ひぃひぃと息切れをしつつ走っている。

そしてその前をズンズン歩いている長身の少女。

「おろ？　どうかしたでござるか？」

悲鳴にも似た二人の訴えに初めて気付いたか、その長身の少女…

…楓がくるりと振り返った。

……その歩みを止めぬまま――

「ど、どうかしたじゃないよーっ！！」

「ひぃひぃ……ぺ、ペース、速すぎるよーっ！！」

現在、時間にして午後四時五十分。

今日は土曜だったので授業は半ドン。

授業を終わらせ、さっさと寮で着替えて昼食を取ってから～～～～っと、三人は歩き続けていたのである。

にも関わらず、ペースが速い事だけを咎めているのだから、この姉妹も大概フツーではない。

「おろ？」

言われて初めて気付いたのだろう、楓は頭を掻きつつやっと足を止めた。

彼女が足を止めてくれたので、やっと二人は彼女に追いつく事が出来た。と言っても、楓が平然としているのに対し、二人はへたり込んで道端で大の字。

ボロボロである。

「いや、面目ない。二人の事忘れかかっていたでござるよ」

「ひ、酷いよ～～……ゼェゼェ……」

「申し訳ないでござる」

流石に気不味いのだろう、楓の後頭部にでっかい汗が浮かぶ。

と言っても、今は何かしてやれる事は少ない。

この有様では手を貸して立たせてやるにはまだ早すぎるし、精々そこらの自販機でスポーツドリンクを買ってきてやるくらいだ。

「ありがとー！」

「喉、からからーっ！！」

それだけでコロリと機嫌が良くなってくれるのはありがたい。

楓も一安心だ。

……決して、“お手軽”だとか思ってはいない。

ごっごっごっと、かなり早いペースで５００ｍｌペットボトルを空にした風香が、安堵の表情を浮かべて楓に眼を向けた。

無論、飲み終えた後にぶはぁ～っと息を吐くのも忘れてはない。

「それでさ、何でかえで姉、ここんトコそんなに走り回ってるの？」

「は？」

急にそんな事を言い出されれば楓でなくとも疑問符を浮かべるだろう。

「だって、かえで姉。何時もだったらもっとのんびりしてたじゃない。

だけど今週はず～～っと走り回ってたよー」

史伽にもそう言われ、改めて楓は首を捻った。

確かに彼女のペースからすれば“歩行”であろうが、一般人からすれば“走行”以外の何物でもない。そしてその事に気付いていないのだから恐れ入るというか何というか。

そんな姉貴分の様子を見、双子は同時に思う。

『無自覚だった（ですか）んかい』

と――

事実、楓は本当に無自覚だった。

只でさえ尋常ではない体力、体術を持っている彼女だから、イッパソ人である二人が付いて行くのは大変である。

言うまでも無く、楓も本気や全力で歩いている訳ではない。それなら二人は影すら見えぬだろう。

だから何時もはもっとのんびり歩いていたし、二人の後を追うようにして歩いていた。

この三年間、そんな気遣いを行なっていた楓が、ここのところ周囲にペースを合わせていない。

何というか…悪い意味でマイペースとなっていて、登下校時の歩行も彼女のペースから言えば早足程度ではあるが、競歩の選手よかずっと早く歩いている。

まるで何かに急きたてられるかのように。

そして学校での様子もちょっとヘンだった。

普段であれば妹分として可愛がっている二人をちゃんと気遣っていたし、間違っても置いて行くような事はしない。

授業中も（何時もより）どこか上の空に見えていた（ような気も

する）し、時々窓から外を見、溜め息を吐いていた。

他愛の無い行為と言えばそこまでであるが、その仕種が妙に女っぽく、ゴシップ好きな年頃の少女らはざわめいていたりする。

特に眼鏡をかけたアホ毛少女は強く反応しており、授業中に『ラブ臭がぁああっ！？』と叫んで教師に怒られていたりするが……まぁ、どうでもいい話だ。

……とまぁ、今週はずっとこの調子だった。

そして、週末に近寄るにつれて、楓の所作に妙なものが目立ち始めている。

水曜あたりからそわそわし始め、木金とかけてそれが目立ちだし、そして土曜の今日、ハッキリとそれが目立っていた。

それが原因で楓はウッカリ二人を引き離してしまったのだろう。

だとすると、連続幅跳びに近い軽くなった彼女のステップは、ひょっとするとスキップなのかもしれない。

ナニを待ち望んでいたのか知らないが……

楓は姉妹に謝罪しつつ、やっと息が整った二人に手を差し出して立たせてやる。

迷惑をかけたのだからそのまま連れて帰ってやるくらいのサービ

スは必要だろう。

来年に高校生になるとはとても思えないほど小柄で軽い二人をひょいと左右の肩に乗せ、楓は寮に向けて駆け出した。

「ひゃっほーっ！」

「キ、キャ――っ！！」

こうやって運んでもらう事は初めてではないが、喜びはしゃぐ風香とは逆にやたら焦ってしまう史伽。

二人とも胆力がある方ではないが、姉の風香よりちょっと臆病なので当然かもしれない。

姉のようにはしゃぐ余裕は無く、落っこちないよう楓の頭に強くしがみ付く事しか出来なかった。

と……？

「ん？　あ、あれ？」

ほんの一瞬。

泡沫の幻覚と言う気もしてしまう刹那の時。

振り落とされそうになって慌てふためいていた史伽の視界の隅に、

見知った青年の姿が掠めたような気がした。

見間違いという感も強かったが、妙に引っ掛かりを覚えてしまう。

だが、それも一瞬の間――

「ひゃ、ひゃあああーっ！！！」

直に頭の中が自分の悲鳴と同一のものとなり、只ひたすら耐える事となる。

しかしどこか頭の隅で見間違いだと認めていた気もする。

何故なら……

『くーふぇが男の人と嬉しそうに歩いているなんて』

ありえないはずなのだから――

――が、

「今日もお疲れアルな」

「いや、仕事はいいんだよ？　仕事の方は。
その後の時間が……終業後が癒されねーってどーよ？」

「ケケケ　倦怠期ノだんなミテーダナ」

「疲労の原因がナニ言うか！！」

実はそんな事はあったりする。

＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊

あの霧魔との一件から、横島と古、そしてチャチャゼロは三人（？）でつるむようになっていた。

尤も、相変わらず古は老師老師と言い続けているが、大首領との約束どおり鍛練はなし。

何だかんだで彼女もキッチリ約束を守っている。

しかし、鍛練こそ行なってはいないが、ちゃっかり約束の穴をついて鍛練の時間までこうやてブラブラ話しながら歩いたり、じゃれ付いてくる　かのこと戯れたりして遊んでいるのだから全然問題はない。

顔の前で手を組んで、唇をニヤリと曲げつつ『問題ない』と呟いちゃうほどに。

――まぁ、ぶっちゃければ　デ　ー　ト　なのだし。

「オイ、じゃーきーヨコセヤ」

「ツマミばっか食うなっ　つーか、ポケットで飲むなや。酒臭ぅなったらどーしてくれる！？」

「オメーガ飲ンダコトニスリャイイダロガ」

「書類上は未成年やっちゅーに！！」

横島の横でニコニコと騎ってもらったアイスクリーム（チョコミント）を嘗めている古と、彼のポケットで酒のツマミばっか食べているチャチャゼロ。

そして時々フルーツをねだる可愛い小鹿に囲まれているというのに、何故か横島はちょっと不機嫌だ。

何様のつもりであろうか？　爆死しろと言われても文句が言えない立場だというのに。

「つーか、カワイイっちゃあカワイイけど、女子中学生に生き人形に小鹿やん！？
インモラルすら超越しとるわっっ！！」

リア充だというのに生意気な事である。

「うっがぁ――っっ！！」

閑話休題（まぁ、それはさておき）

ぴぃぴぃと鳥のような鳴き声を上げてすり寄ってくる　かのこの頭を撫でる古。

その背中には何時の間にかチャチャゼロが乗っており、乗馬ならぬ乗鹿を堪能している。

この間の事件で横島に霊波を注がれたのが原因なのか、アクティブ…というほどではないにせよ、そのマリオネットの身体をある程度までは動かせるようになっていて、器用に小鹿の背でバランスをとっていて楽しそうだ。

目に優しく、癒される光景であるが、このように寄って来てくれるのは　じょしちゅうがくせーか人外だけ。

何と物悲しい話であろうか。

「どうしたアル？」

「いや、なんでも……アイスの冷たさが目に染みているだけさ」

「からし風味わさびアイスなんか頼むからアル」

「どーりでマジ染みると思った！！」

「今更！？」

会話そのものはアホタレであるが、何だかんだで楽しそうだ。

横島はイタイ舌を癒すべく、かのこ用に持っていたサクランボを分けてもらい、舌の上でレロレロと転がして甘さで誤魔化す。

そのアイス、そんなに辛いアルか？　と興味を持った古が試しに一舐めして即行で投げ捨てたほど（しかも涙目）。推して知るべし。
何でこんなものを売っているのやら。
飲む気も失せる不思議ジュースすらその辺の自販機に置いてある麻帆良ならでは、という事だろうか。

どちらにせよ被害が出た事に変わりは無いのであるが。

古は『きゃ、きゃらいアリゅーっ』と涙目で自分のアイスをむさぼって舌を慰めていた。
無論、頭にキーンとキて　うぉうっっと悶えた事は言うまでも無い。二次被害だ。

「ま、まぁ、気を取り直してとっとと行こうか」

そんな微妙になった空気を払拭すべく、古に手を差し伸べて目的地に向う事にする横島。

とは言っても、向うのは希望に満ちたパラダイス等ではなく、死ぬかＤＥＡＤかの修業場だ。

そんな事実をウッカリ思い出してしまい、気を取り直したら気が滅入ったと落ち込みそーになったのは、まぁ、至極当然の流れか。

ふと下を見ると、どーしたの？　と自分を見上げる小鹿。

自然、手を伸ばしてその頭を撫でる彼であるが、アニマルセラピーのようなものなのか、それだけで結構癒されてゆく。

御手軽なヤツだと自分でも思っているのだろうか、横島の口元には苦笑が浮かんでいた。

かのこを引き取ってからこんなんばっかである。

まぁ、小鹿も撫でられて嬉しいのだから何にも悪い点は無いのであるが。

「……にしても、お前ホント撫で心地良いよな？
何かこー　いつまでも撫で続けたくなるとゆーか」

「ぴぃ♪」

何だか和(なご)やかなやり取り。

これが、一緒に生活し始めた彼と小鹿の日常であった。

「普通は子供でも鹿の毛はもうちょっと硬いもんなんだがのぅ」

「まぁ、筆先に使うぐらいですしね」

それなりに硬く、それでいて弾力もある鹿の毛の筆は、鹿の個体数のわりに結構高い。

しかし、皆が口をそろえて撫で心地が良いという　かのこの毛は、恰も兎のそれか羊のそれの様に柔らかい。

見た目は癖のない鹿の毛であるにも関わらず、だ。

流石は精霊だと言えば良いのだろうか？

「……ふむ？」

と、一頻り髭を撫でていた近衛の手がピタリと止まり、別の事に意識を取られる。

余りに唐突であったので、高畑は『まさか、ついに学園長もボケが…』と思ってしまったほど。

しかし残念ながら（？）そうではなく、伊達に長く生きてきた訳ではない老人の脳は集まってくる情報から一つの仮説を組み上げつ

つあったのである。

一瞬…とは行かないが、それでも僅かの間を置いて近衛は口を開いた。

「カテゴリーで言えば、あの子（かのこ）は妖怪の部類に入り、正体は山の精霊の集合体…じゃったな？」

「ええ……それが、何か？」

いや…と小さく首を振って、別にあの小鹿を危惧しているとかではない事を示す。

今さっき自分で言った事なのに……はっ！？　やはり学園長もついに…等と失礼極まるコトを考えつつもそう相槌を打つ高畑。

しかしその懸念は無意味だ。単に近衛はある事に気が付いただけなのだから。

「色こそ白いが外見は鹿に酷似。体毛は柔らかく、兎か羊……いや、あの手触りは梟の羽にも似ておったの」

「フクロウ…ですか？」

思わず高畑が漏らした問い掛けにうむと頷く。

知っての通り、梟は夜行性の猛禽類であり、どちらかと言うと羽が丈夫で硬そうなイメージがあるが、闇の中で音を立てずに羽ばたいて飛び、ほとんど無音で獲物に襲い掛かる為にその羽は意外なほど柔らかい。

水鳥の綿毛…とまでは行かずとも、そういったものとはややベクトルが違う、しなやか且つ柔らかい羽を持っていた。

近衛が言うには、それに似ているらしい。

「山の精霊の集合体であり、山野の動物の特徴を全て持っておる……

高畑君も見たんじゃろう？　風を味方につけて霧魔を退治する力を貸したところを」

「ええ、まぁ……」

「そして楓君の報告書にもあったが、京都で山野を駆ける際、草木が自分から避けたらしい」

「はぁ……それが？」

「解らぬかの？

そういったモノが伝承にあると」

「かのこ　も大分ココに馴染んできたなぁ」

「マ、麻帆良ハ自然モ多イシナ。
近クニ密林モアルシヨ」

「……それ、日本としてどーよ？」

向うは桜通りからチョット外れた小道。

幸いとゆーか何とゆーか、エヴァはクラブがあるのでちょっと遅い為、こんな風に駄弁(だべ)りつつのんびりと歩く事が出来ている。
単にイタイ修業を前に牛歩になっているだけかもしれないが。

「コイツは精霊だから自然が多い方が良いのかもなー」

「ぴぃ？」

そう言いつつ鹿の子の頭を　てろりと撫でる。

意味は解っていないようだが嬉しいらしく、つぶらな眼を細めていて何だか微笑ましい。
古もつられて微笑んでしまうほどに。

だけど続ける言葉が頂けない。

「コイツ可愛いから女の子たちにも受け良いからなー
寄って来てくれるの女子中学生以下ばっかだけど……」

ピキリと音を立てて、古の額に血管が浮く。

こーゆーコト言わなけりゃ、もっと機嫌良かったのに。
気の所為か、チャチャゼロまでムスっとしてるし。

「ほほー……かのこをナンパのエサにする気アルか？
家族で釣りをするなんて外道アルな」

「仕方ネーダロ？　コイツハ女無シジャ息モデキン変態ナンダシヨ。
コイツモ利用サレルダケ利用サレルンダローナ。可哀想ニヨ」

「ちょ…っ！！？？」

普通に怒鳴られるよりずっとキツイ攻撃である。

そんな事を言われると、きょとんとして見上げてくる　かのこの無垢無垢な眼差しが自分を責めているような気さえしてくるではないか。

「ぴぃ？」

「やめてっ！！　そんな目でワタシを見ないで！！」

いきなり身を捩って悶え苦しむ横島。

何だかんだ言って彼の良心はボロボロに脆い為、こういった地味な口撃の方が効く。ボディブローというより浸透剄に近いが。

そして泣きながら転がって謝罪する彼を見つつニヤニヤしている古とチャチャゼロ。何と恐ろしい光景であろうか。

当の　かのこは横島が泣き崩れる意味が解らずオロオロしているが、それは兎も角。

「でもまぁ、確かに　かのこ連れてたら成功率上がる気がするアルな。
　この子人懐こいし」

横島の顔をぺろぺろ舐めて慰めている件の小鹿を見ながら、古がそう零した。

そんなあざとい方法なんか使わずとも、彼の良さに気付く者は気

付く。非常に解り難いのだが、宝物と言って良いほど人間味に溢れているのだから。

逆に言えば、彼を相手にしない人間は上っ面しか見ていないという事なので気にする必要は全く無いのであるが……それは言ってあげない。

バレたらバレたらでイロイロ悔しい事になりそーだし。

そんな古の言葉を聞き、首を傾げる様な仕種をしつつチャチャゼロは彼女を見上げた。

「ハ？　ナニ言ッテンダオ前。
カノコ　ガ人懐コイダ？」

それも心底不思議そうな声付きで。

「ハレ？　違う言うアルか？」

それはありえないだろう？　という意味合いの言葉であるが、古からしてみればそっちの方がありえない。

出会った当日にしても、自分や木乃香、後で合流した楓に擦り寄っていたし、魔法教師である瀬流彦にもぴぃぴぃ鳴いて気を許していた。

エヴァに会った時も然程恐れていなかったし、茶々丸には一瞬で懐いていたのである。それらを見ていたというのに、どう人見知りをすると思えるのか。

「アー……マァ、気付カナクテモ　ショーガネェカ。解リ辛ェシナァ……」

チャチャゼロはコリコリと頭を掻き、一人納得を見せた。

実際、彼女が気付いたのも横島にくっ付いて行動しているからで、もし主の家で待っているだけの立場であればもっと気付くのが遅かっただろう。

それでもエヴァはとっくに気付いているようだったが。

「コイツ、コノばかガ気ヲ許シテル奴ニダケシカ心開イテネーゾ」

「ふぇ？」

忘れがちであるが、かのこは横島の使い魔である。

よって彼が警戒する相手が近寄れば無条件で警戒するし、彼が気を許している相手は害意は無いと判断しているらしい。

無論、自分の判断もあるだろうが、それでも主である横島が基準点に入っているのは当然であろう。

何しろベースが野生動物、その上　正体は精霊であるので負の感情波にも敏感だ。

――そう、例えば武術関係のクラブの人間。特に横島の近くにいる中華な武道少女に懸想して彼に嫉妬する輩等には間違っても近寄らないし、悪感情の大きさ如何によっては敵意すら持つ事もある。

しかしまぁ、逆から言えば　この小鹿（かのこ）がこれだけ懐いてくれているという事は、それだけ信用も信頼もしてくれているという事なので、小鹿の意外さよりそっちのこっ恥ずかしさが前に出ていたり。

「ナニ照レテヤガル」

と、呆れるチャチャゼロであるが、そう言う彼女（？）も背中に乗せてもらっているし、会話っぽいものも出来ているので思っているより近しく感じているという事なのだろう。

それが表現し難い感情を生み出しており、かのこの背中に顔を擦り付けて誤魔化してたりする。

しかし、そうなるとエヴァに警戒していない理由が解らない。

初対面で横島は彼女が放った魔法に巻き込まれているし、何より彼女自身が真祖の吸血鬼というとびきりの人外だ。

だというのにほとんど無警戒というレベルで、そんなエヴァに頭を撫でさせているのはどういう事なのか？

実のところ、それは横島の所為（おかげ）と言える。

「言霊、ですか？」

「そうじゃろうの。
強力な霊能力者である彼が名付けた。という事は名前でその存在を括（くく）ったと言えよう？」

「ははぁ……
名前を“鹿の子（かのこ）”としたから鹿の子で固定された、と」

「おそらく、の」

最初は鹿の群れに混ざっていた為に鹿の子の姿をしていたのだろうが、彼が血を舐めさせつつ名付けてしまったが為に姿や存在を固定され、文字通り鹿の子になってしまったのだろう。
近衛はそう見ていた。

無論、冗談みたいな話であるし信じ難い事この上も無いのであるが、間に横島という存在が入ってくると『まぁ、彼だしなぁ』と納得してしまうから不思議である。

「話を聞けばエヴァも可愛がってるそうじゃしの。その属性上、動物にはあまり好かれ易いとは言えぬ彼女が…じゃ」

「それは……」

勘ぐり過ぎでは？　と思わなくも無いが、彼女は自分の従者である茶々丸が世話している猫たちにすら近寄ろうとしない。

呪い等によって１０歳の身体能力しか出せないエヴァは、どういう訳かやたらとアレルギーを持っている。それが原因かと思っていたのであるが……

成る程。そう言われてみると確かに学園長の言うような理由もあったのかもしれないな、と高畑は思った。

「それで……
あの小鹿は本来なら何だと仰るんですか？」

「にしても、お前が人見知りしてるとは知らなかったなー」

「ぴぃ？」

どうにか立ち直った横島は、そんな事を呟きながら　かのこの頭を撫で撫でしている。

オドレガ気付カンデドースル！？　とチャチャゼロに呆れられたりもしたがそれは些細な事だ。

尤も当の小鹿自身はサッパリサッパリの態であるのでやや間が抜けているのはご愛嬌である。

「マ、残念ナ事ニ　オメーハ血ヲ好ムヨーナ奴ジャネーシ、好キ好ンデ山ヲ汚シタリシネーカラナ。

オメーヲ中心ニ信頼ヲ広ゲテイッテンダローヨ」

チャチャゼロにしては珍しくストレートに横島を褒めていたのであるが、横で聞いていた古は『ほえ？』と首傾げる。

確かに、ぶち切れた時の彼は兎も角、普段の彼はそんなに物騒な性格をしていない。

それは解るのだが、それが今話している事にどう関わっているのかさっぱり解らないのだ。

首を捻りまくっている古を見、かのこの背でチャチャゼロは小さく肩を竦めた。

然も有りなん。この件に関して、主は誰にも…それこそ横島にすらも漏らしていないのだから。

それでも『何れジジイには気付かれるだろうがな』と楽しそうに言っていたので、然程は心配していないだろうが。

しかしヒントは出している。

山を血で汚す事を嫌うモノであり、木々や風といった自然が味方する…或いは扱える存在であり、山の生物の特徴を全て持っているモノ。

そして――

「そう言えば、カエデがヘンなコト言てたアルな」

「ん？」

「何となくカエデも　かのこが言てるコトが解る気がすると……」

何故か楓と相性が良いのだ。

つまり　かのこは正体は――

「天狗ですか？」

「うむ。まぁ、恐らく――といった確信レベルじゃがの」

名前という言霊に括られてあの外見となってしまったようであるし、人が分け入った所為で山の神秘が薄れて弱体化したようであるが、外見以外の天狗の特徴は全て持っているのだ。

もちろん民間伝承におけるそれを信用するのなら『違う』と断言できるだろうが、“妖物（あやかし）”という区分で別ければその特長がよく出ている事が解る。

尤も、エヴァはあえて学園側に伝えてはいない事であるが、彼女は既に確信していた。

何しろあの小鹿、横島は固（もと）より楓ですら意思疎通が可能なのである。

“懐く”というのなら、横島を通じて様々な人間にそれを見せてはいるのだが、使いの契約を結んだ横島なら兎も角、同じ従者である古ができないと言うのに片方の楓もそれが可能なのはちょっとおかしい。いや忍法だと言われればそれまでかもしれないが。

エヴァの仮説はこうだ。

楓は横島と仮契約を結び、その不可思議極まる仮契約札を手に入れ、その際に天狗の力…というか属性を得ている。

それによって同じ属である　かのこと拙いとはいえ意思疎通が可能となっているのだろう。

「ま、あの様子なら悪さなんぞせんだろうしの。
大体、見ているだけで目に優しい」

「手触りの良さから癒されますしね。
木乃香くん達もえらく気に入っているようですし」

「……あの小鹿を通じて木乃香を励ましてくれたそうじゃしの……
これくらいなら目を瞑っても罰は当るまいて」

――……あ、そういう事か。

ここに来て、ようやく高畑も合点がいった。

要するにあの小鹿の正体を知り、理解しているのにも関わらずその神秘を学園が抱え込み、何か事を起こせば自分が責任を負うと明

言しているのである。

甘いというか器が大きいというか……真祖の吸血鬼と対等に付き合い、更には横島という神にすら接見している異世界の能力者を抱えて普通に生活をさせているのは伊達ではないという事か。

尤もそのお陰でこの学園の防御力は極端に上がっているのも事実だ。

何だかんだでエヴァは義理堅いし、横島は一般人…特に普通の女の子が巻き込まれる事を決して許さない。

お陰で何だか知らないが以前より防衛力が上がっている気さえしてくる。

普通に考えれば『混ぜるな危険』のこの二人を一緒にさせている時点で正気を疑うところなのだが、何だか上手くいっているのは読みが正しかったのか、偶然なのか。

「最近は横島君を相手に鬱憤を晴らしているらしくて殊更機嫌が良くての」

「僕は同情しか浮かびませんが……」

「なーに　彼の事じゃ。案外、美幼女に虐げられて悦んどるやもしれんぞい」

本人がいないと思ってエラい事言いまくるジジイ。

高畑は後頭部に冷たくてでっかい汗をタラリと流す。

色んな意味で野生動物である彼が果たして気付かないものなのだろうか？

「……何か知らんが、ジジイに復讐したくなってきた」

「いきなり何を言い出すアル」

流石は現時点でこの世界最高の霊能力者。勘の良さもハンパ無い。

ピキュイーンと脳裏に電気が走って悪口の気を感じ取っていた。

ホントに無駄なトコで高性能な男である。

「ホレ、トットト行クゼ。

早ク着イタラ休憩クライデキルダローヨ。三分クライハ」

「虐めじゃーっっ！！」

「デ、ばかいえろーハ　カノコ　ノ世話頼ムゼ？
妹ドモモイルガ、猫ッ可愛ガリシ過ギンダヨヨ」

「解てるアル。その代わり時々覗くのは……」

「無論、アリダ。
横島ト修業スルンジャナク、強サヲ見テ盗ルンダカラ罪ハネーヨ」

このやり取りが最近のポジションである。

流石に拷問と区別がつかない鍛練を　かのこ　にまざまざと見せる訳には行かないので、横島と距離を置かせているのだが、彼の悲鳴とか苦痛が伝わって飛び出して行きそうになる小鹿を止めるのが彼女と、チャチャゼロの妹ズの役目だ。

幾ら覚悟を決めようが心が助けを呼んでしまう。

どれだけ苦痛が伴おうと止める気が無いのは間違いないのだが、元が痛がりなのでやはりみっともなく悲鳴は出てしまうのだ。

だからエヴァは、古が着いて来たのを見てあえてこの修業の形をとるようになった。

回避力と防御力の大向上。手段や戦法の増加等々……色々とやっ

ているのだが、その中に感情制御を組み込んだのだ。

目下の課題は、彼の感情の波に敏感な　かのこを来ないようにする事である。

無茶にも程がある題材であるが、やはり彼は嫌がりつつも止めるとは一言も漏らさずそれをやり続けていた。

だからこそエヴァも余計に機嫌が良いのだ。

無様だろうが、泥を啜ろうが、岩に齧りついてでも力を得ようとする生き汚さは彼女が好むところである。

敵じゃない限り女に手を上げられないという余りにも愚か過ぎるデメリットを持ってはいるが、それを凌駕するメリットを使いこなせるようになる可能性を秘めているのだから。

「（マ、ゴ主人ノ機嫌ガ良イノハ　ソレダケジャネーンダガヨ……）」

学園側に伝えてない事に、横島の力の根源があるのだが、実はそれが　かのこという個に強力な影響を与えている。

いや、学園長が予想しているように、元々“これ”という形を持っていなかった天狗という概念に、＜鹿の子＞という枠を言霊でくっ付けた事に間違いは無いのであるが、それだけではないのだ。

学園側…というか学園長には余り詳しく伝えていない話であるが、横島が知る人外の中にとんでもないものがある。

それは、彼が霊刀による辻斬りに伴ったフェンリル復活の事件に巻き込まれた事だ。

北欧神話のフェンリルが日本で復活しかけた、というのも突拍子も無い戯言としか思えない大事件なので詳しく語っていないのであるが、それを止める一端を担ったのはその狼王の血を引く人狼であり、彼らが崇める月の女神アルテミスを降ろした少女と雇い主の活躍があった。

何で北欧神話の狼王の血族がギリシャの女神を崇めていたのかはサッパリ不明であるが、兎も角　実は獣っぽい女神だったアルテミスの力を借りて件のフェンリル（モドキ）をボコボコにし、女神に連れられてどこかへと旅立って行き、事件は一応の解決を見たらしいのであるが……

修学旅行での一件で彼自身が漏らしているのであるが、アルテミスの飼い鹿は角のある雌鹿である。

何が言いたいのかというと、彼も無意識でやってしまったのだろう、実はこの『角のある雌鹿＝月の女神の鹿』という概念が、かのこに混ざっているのだ。

だからこそ月下であれだけの力を見せ、神話にある雌鹿そのまま

のような途轍もない足の速さをもっているのである。

そしてそんな小鹿は、山神に属するモノなのでどちらかというと陰の気が強く、尚且つ紛い物とはいえ件の角のある雌鹿の概念も混ざっているので月の波動まで持っている。

よって　かのこは陰の氣の化身のようなエヴァに殊更（ことさら）強く作用するのだ。

何せ　かのこは限りなくエヴァと同属に近いのである。

それは彼女も機嫌が良くなるだろう。

近衛らが気付いていないのは、そんな存在は妖怪だとか精霊の集合体だとかのレベルでは無いという事実だ。

確かに普段は天狗モドキであり、角が生えそうな雌鹿で精霊としても妖怪としても中途半端な愛玩動物だ。

しかし仮契約によって得た札の力を使えば格が上がり、魔法こそ使えないが月が出ていれば無尽蔵ともいえる魔力を使いこなせ、自然を味方につけた超存在となる。

言わば　かのこは幻想種なのだ。

そんな超危険な存在を魔法使い達の拠点であるここに迎え入れて

しまっている。

確かに見た目も内面も無垢で可愛らしい精霊であろうが、その実竜種に匹敵し、時と場合によってはあらゆる幻想種より厄介である事に気付いていない。

気付けというのが無茶な話なのであるが、それにしてもそんなモノをアッサリと迎え入れてしまっているお人好しというかウツケというか、はっきりと言ってしまえば無様にも程がある話で、そんな学園の魔法使い達の腑抜(ふぬ)けた様がエヴァの機嫌を更に良くしているのである。

「ぴぃ？」

「ン？　イヤ、何デモネーヨ」

エヴァに言われた事を思い出し、改めて感心する様に小鹿の背を撫でていたチャチャゼロであるが、こんな　かのこの声を聞けば単なる妄想なんかじゃないかと思ってしまう。

しかし現にこの小鹿は自然を味方に付けられるし、木々と会話も出来るし、

後で知った事であるが、拙いレベルではあるものの植物の成長速度も上げる事ができるらしい。

自然に関する事だけとはいえ、何でもありなのである。

そのお陰で、エヴァにしろ、チャチャゼロにしろ、ここ最近は退屈とは縁遠くなっていた。

最強の魔法使いという座を得てからは退屈続きであったし、この地に封じられてからは不自由しかなかった彼女であるが、

横島　忠夫という鬼札のような下僕を得、その使い魔である精霊集合体のかのこ。彼の従者（モドキ）である楓と古まで自分の枠の内に入った。

一日一日が今までで一番輝いていると言って良いだろう。

何しろ彼女の力を封じている封印すら、やろうと思えばどうにできるようになったのだから。

「ダカラコソ、丁寧ニ教エテンダローナァ……」

ヘタクソな感謝もあったものだ。

教えられる側は迷惑以外の何物でも無いだろうし。

そういう事もあってか、チャチャゼロは彼を思ってちょっとばっかし同情の溜息を吐いた。

飽く迄もちょっとだけだが。

「ぴぃ？」

「ダカラ何デモネーッテ」

そして何だかんだでチャチャゼロも今を楽しんでいる。
こうやって周囲とやり取りが行なえているのがその証だ。
人生（いや人形生か？）、何がどう転ぶが解らないという見本のような話である。

何しろ数百年を通して生きてきたのだが、横島らのような“存在”は初めてなのだ。
どうしろこうしろと言われたからではなく、影響によって変えられていったのだから。

そして、

「ドーセ　オメーモ　アイツニ変エラレタンダローナ……」

「ぴぃ」

この小鹿に成ったモノも。

実際、かのこは精霊のクセに生まれた土地からこれだけ離れているというのに元気いっぱいなのだ。

毎日元気に跳ね、横島にじゃれ付き、ごはん（フルーツ）を美味しそうに食べて楽しそうに生きている。
その可愛らしさによって皆にすぐ気に入られ、頭を撫でられてはぴぃぴぃ鳴いて喜んでいる。

そしてその天真爛漫さに引き摺られるように、僅かではあるがごヴァ（エ）

主人が微笑を見せるようになっている。
　このバカ(横島)を鍛えている時は兎も角、それ以外の時間は別荘内の空気がかなり穏やかなものになってきている。
　以前は気にもならなかった事であるが、あの別荘内は静かではあるが穏やかさはなかったと思う。
　今頃になってこんな事に気付かされるとは思いもよらなかった。

「オメーノ“オ陰”カ“所為”カハ解ンネーケドナ。
マ、感謝ダケハシテンゼ？」

「ぴぃ？」

「ハハ　解ッテネーンナライイサ」

　不思議そうな言葉を返す　かのこにチャチャゼロは小さく笑い、その柔らかい毛に顎を埋める。
　人形のこの身でも、この毛の寝心地の良さは解るほど。
　と言うか、あの霧魔の一件から感じられるようになって来た。
　嬉しいと感謝すれば良いのやら、甘っちょろくされたと怨めばよいのやら。

「ぴぃー」

「冗談ダ。怨ンダリシテネーヨ」

「ぴぃ～」

そう教えてやるとあからさまにホッとする小鹿。

背中に乗っているからか、そんな心境が良く伝わってくるので思わず笑みが浮かんでしまう。

戦いの中くらいでしか笑わなかった彼女が、だ。

「ゴ主人モ何カ丸クナッテキテルシヨ……
変ワンノハ人間ダケジャネーッテカ？」

「ぴぃ？」

「オメーモナ」

鹿(かのこ)の子に馬乗りになったまま、そう言って頭を撫でるチャチャゼロ。

この子が振り返らなくとも解る。小鹿は眼を細めている事だろう。

それを思い、どこか嬉しげな顔で彼女も眼を細めている。

そんなチャチャゼロも丸くなってきているのだが自覚は無いだろう。

「何してるアル？」

「ン？　イヤ、コッチノ話ダ。
ヨシ、行クゼ。ハイヨー　カノコー」

「ぴぴ～ぃ」

「馬のモノマネ！？」

横島とこの小鹿によって齎されたモノが、この先エヴァ達にどういう変化をさせてゆくのか……

それはまだ、誰にも解らない事であった。

「それでも、ジジイに対して復讐する事は忘れないオレであった」

「言い掛かりにしか聞こえないアルが…兎に角、恐ろしい執念深さアルな」

本編（後書き）

改めまして……
お久しぶりです。
遅くなりまして申し訳ありません。
お手々も　もう一息です。
それにしても一度感覚が空くと、更新するのが何故か怖くなるもんなんですね。初めて知りました。

今回のは　かのこの正体について、のお話です。
民俗学のそれではなく、精霊とかの幻想でいえば正体不明の精霊集合体となるのでこうしたんです。やっぱｇｄｇｄしてますが……

後は古にももうちょっとスポット当ててみたかったのと、後の告白に関する苦悩の下準備ですかねーｗ　楓と古、そして円を可愛く表現する方法を模索して七転八倒してるくせにナニ言ってるのやら……

後、ホントは入れたかったイベントはもっとありますが、文章の流れからして無理があり過ぎますので今度にします。

日常が色々とストレス溜めさせてくれやがりますが、何とか続きを打ってゆくつもりです。
嗚呼、表現力をもっと向上させたいっっ

次はネギくんの試験です。
ではまた……

前編（前書き）

遅くなってしまいました。
何はともあれ続きを始めます。

ではどうぞ……

前編

『もうじき時間っスね』

「うん」

肩から聞こえる声に、やや緊張した面持ちで答える少年。

約束の時間よりやや早めに来てしまった彼であるが、その間ずっと手の指を握ってはひろげ、握ってはひろげさせて見つめ続けていた。

それはその緊張の表れなのだろう。

無理も無い。

彼はこれから試験を受けるのだ。

それも自国で受けたものより数段上且つ本格的な魔法を使いこなせる本物。伝説級の魔法使いに師匠になってもらう為の試しを行なうのだから。

これで緊張しなければウソだろう。

何せ彼は十歳。

技術や才能に恵まれてはいるが経験でも精神的にも成熟しているはずもないのだから。

それでも少年は目指さなければならない。

目標はずっとずっと向こうにあるのだから……

「ネギ、大丈夫？」

「あ、ハイ。大丈夫ですよ」

最初の出会いこそ最低であったが、持ち前の面倒見の良さも手伝い、すったもんだの末に少年と仮契約まで結んでしまった少女……神楽坂明日菜は、やはり心配なのだろうそう声をかけた。

ハイと返事を返したものの、少年……ネギ＝スプリングフィールドの緊張は和らいだりしていない。

そんな彼に対し、ありきたりの励ましか行えない少女らは黙って見守る事しか出来なかった。

深夜にも関わらず集まったギャラリーの少女らを、上から見下ろす時計の針がやがて十二の位置で重なろうとしている。

その時は、刻一刻と迫ってきている。

それでも緊張から来る震えはあっても、逃げるという気がしないのは流石と言えよう。

――事は、水曜の明け方に起こっていた。

ある一件から自分が受け持っている生徒の一人、古　菲が武術の実力者だと知った彼は彼女を師として功夫を習い始め、早朝練習を行い出していた。

そこまでなら真面目さに感心すればよいだけの話であるが、そんなネギと同じように早朝からランニングに出ていた新体操部のまき絵に見つけられ、彼が習っている功夫の型を見たいと彼女がせがんだ辺りからおかしくなってくる。

まぁ　それくらいなら…と披露したところをエヴァに見られてしまい、自分のトコに師事を請いに来たのに古に功夫を習っているとはどういう事だ？　と責められてしまったのだ。

そんな彼女に腹を立てたまき絵がネギを庇い、何も知らないのにめちゃくちゃに褒め称え、エヴァを面白がらせてしまった。

結果、そこまで言うのなら……と、無理難題な試験を受けさせられる羽目になってしまったのである。

曰く――

茶々丸に一撃でも入れられたなら合格。出来なければ不合格。

実戦仕様の素手格闘戦プログラムを実装されている茶々丸に対して攻撃を当てる……彼女の計算でも、達成率僅か３％の試練であっ

た。

おまけに期限までの時間は三日しかない。

どう考えてみても合格させる気ナッシングである。

それでも彼はがんばっていた。

元々の才能も冗談のように高く、加えて集中力も並ではない。

何せ教えている古が腹を立てるほどの飲み込みが早さで、様になるのに一ヶ月はかかる技でも数時間でマスターしてしまったほど。

それでも圧倒的に足りない時間は如何ともし難く、実戦経験の無さだけはどうしようもない。

“上手く出来る”というだけで相手に勝てるなら苦労は無いのだ。

「やれるだけの事はやたアル。
後は思い切てやるだけアルね」

それでも“あのまま”よりずっとマシだ。

だから古もそう言って励ました。

「ハイ！」

今日までずっと鍛えてくれた古“師匠”の言葉。

それで気合が入ったのか、ネギの体から緊張が取れた。

その際、きちんと拳を合わせて礼を言っているのだから律儀な少年である。

ネギが何とか落ち着いてきたので、明日菜も一安心だ。

が――

「ところで……」

明日菜はやや疲れた眼差しのまま、くるりと後ろを振り返る。

「ガンバ――っ！」

「ネギ先生、がんばって！」

「大丈夫？　ネギくん」

「ネギせんせーっ！！」

「……何でギャラリーがこんなにいるのよ？」

「そ、それは僕もサッパリ……」

この試験を受けさせる状況を発生させたまき絵や明日菜、ネギの師匠である古、明日菜に剣を教えている刹那は兎も角として、ドコで話を聞きつけたのか亜子に裕奈にアキラまで付いて来てたりする。

おまけに……

「まぁ、良いではござらぬか。拙者らもネギ坊主が心配なのでござるよ」

「それはそうかもしれないけど……」

楓までいた。

尤も彼女の場合は、

『……エヴァ殿が来るという事は、会えるかもしれないでござるし……』

という思惑も見え隠れしないわけでもないが。

因みに鳴滝姉妹は例によってお香によって強制就寝させてたりする。やり過ぎだ。何か手段選んでないし。

……どこかでガンスリンガー少女が深い深い溜め息を吐いている

気がする。

「ダイジョーブ、ダイジョーブ。
訳わかんないけど、私達もバッチリネギ先生を応援するよ」

「まーかせてっ！」

「アンタらねぇ……」

更には何が何だか解っていないチアリーディング部の三人までいた。

刹那や木乃香、そして古の様に理由を知っているのならまだいい。
この一件の口火を切ったまき絵も話半分しか解っていないが……
まぁ、良いとしよう。

だが、裕奈に亜子、アキラと楓、そしてチアリーディング部の美砂に円に桜子までいるのはどういう事だろう。

「え？　でも教室で噂になってたよ？
エヴァちゃんとネギ君が何かするって」

その疑問に、あっけらかんと円が答える。

別に秘密にしていた訳ではないし、実際に裕奈達もまき絵→亜子経由で話を聞いているのだから別段おかしな話ではないかもしれな

い。

かもしれないのであるが……

「……ん？　でも、それは変じゃないですか？」

「どしたん？」

だが、話を聞いていた刹那が首を傾げる。

「だって私達は同じクラスにいるのにそんな噂を耳にしていませんよ？

お嬢様はどうです？」

またお嬢様ってゆ～……と不満を漏らしつつ、木乃香もちょっと首を捻ってみるが、やはりそんな噂の事は聞いた覚えが無いと答えた。

ルームメイトの言葉を聞き、噂話にそんなに聡い方ではない明日菜も『そう言えば私も聞いたことない』と今になって思い出す。

だが、そのお陰でちょっと話がおかしい事に気がつく。

亜子や裕奈、そしてアキラはまき絵から話を聞いているからこそ知っている訳で、クラスで広がっている噂を聞いたから来た訳

ではない。

何だかんだで生徒に人気のあるネギだ。もし、噂になっていると言うのなら、この場にはもっと少女らがいるはずだ。

例えば、ストーカー一歩手前のあやか。そしてネギに告白までし、彼を想い続けているのどかもいない。

噂が広がっていると言うのであれば、この二名がこの場にいないのは幾らなんでもおかし過ぎる。

おまけに――

「へ？　ネギ君の試合って茶々丸さんとするのと違うの？」

「何でエヴァちゃんが出てくるん？」

裕奈らには茶々丸と試合をするとしか伝わっていない。

これはまき絵の伝え方に『エヴァの試験』という部分が抜けていたからであるが、そうなってくるとやはり噂の出所がおかしくなってくる。

何せクラスの女子の中で確実にやってきて邪魔をしそうな人間には伝わっておらず、更には広がっていると言う『エヴァの試験』の噂は茶々丸と戦うという試験に繋がりが無く、それでいて真実に近いモノなのだから。

となると……

「何者かが意図的に流した噂という事になるでござるな」

「だな……」

竜舌華という術がある。

竜の舌から零れ落ちる華は、毒を含み人心を惑わすという。

これは人遁の一種で、意図的な噂を流して民衆を操るものであるが、くノ一である楓が真っ先に思い浮かべたの当然の流れかもしれない。

というのも、噂を用いて特定の少女らをここに“連れて来た”感があるからだ。

しかし、そうなると理由（ワケ）が解らない。

普通であれば魔法封じの為だとかんがえられるが、相手は茶々丸。

ネギや古の話によるとかなりの使い手らしい。

試験内容はそんな茶々丸に一撃を加えるというものなので、素人に毛が生えた程度のネギに対しての牽制にしては大げさ過ぎるだろう。

それともネギの試合を見せる意味があるというのだろうか？

楓達が首を傾げている間にも時間は進み、その時刻が迫っている。

十中八九エヴァの策であろうが、意図が読めない少女らは奇妙な不安を抱え始めていた。

と――

「ゴるアァーっ!!
こんな時間に何やっとるかーっ!!」

「「「ぴゃあっっ!?」」」

唐突の怒声に、飛び上がらんばかりに驚かされてしまう。

気配も何も無かったのだから驚愕も一入だ。

何せ彼女らは、夜遊びと言われてもしょうがない事をやっている。門限を思いっきり破っているし、深夜徘徊だ。

そんな彼女らが見つかれば、そこらの学校の生徒指導員なんぞ目ではないくらい怖い麻帆良の広域指導員が黙っていない。

楓や古、刹那が頭を竦め、一般人にしては結構大胆不敵である裕奈ですら思わず頭を抱えて蹲っている事からも、その恐ろしさが理解できると言うものである。

が……

「……なんってな。驚かせ過ぎたか？」

「え？」

「あ、あれ？」

正に恐る恐るといった風に頭を上げてゆく少女たち……それとネギ。

緊張が緩んだ瞬間に怒声を浴びせられたのだから、そりゃあ驚いただろう。

「そ、その声は……」

考えてみれば古は元より、楓や刹那すら近寄ってくる気配に全く気付けていなかったのだ。

となると、それなり以上の実力者か、“裏”に精通するものという事となる。

そしてその声は古や楓は良く知っている男のものに良く似ていた。

「悪りぃ悪りぃ。ゴメンな。

でも、こんな時間に出歩いてたらロンゲのエロ道楽公務員に拉

致られちまうぞ？」

かなり微妙な上、解り難い例えを口にする何故か白い小鹿を連れている青年。

つーか、よく似ているも何も御本人ではないか。

「よ、横島殿……？」

虚を突かれたのが効き過ぎているのか、或いは何の気構えも無く出会ってしまったからか、楓は顔を真っ赤にしてそう名を呟いた。

深夜であるし、外灯の明かりしかなかったのは幸いであろう。

名を呼ばれて彼女がいる事に気付いたのか、青年は側らの小鹿を促して石の階段を登りつつゆっくりと楓らの元にやって来る。

白いTシャツにジーンズ。ジージャンを引っ掛けて足元は安くて丈夫さだけを取り得にしているような会社謹製のバッシュ。

そして、頭には楓が巻いてやった赤いバンダナ。

「よ、楓ちゃん。久しぶり」

楓から言えば一週間ぶりであるが、彼からしてみれば実に二ヶ月

ぶりの再会。

霊能力の師であり、彼女のパートナー。

久し振り（？）だからか、何だかちょっとだけ大人っぽく見えてしまう青年。

横島忠夫、その人であった――

■十六時間目：功夫・Ｈｕｓｔｌｅ（前）

「脅かさないでよーっ！！　腰抜けるトコだったじゃないかーっ！！」

「ヒドイよーっ！！」

京都奈良への修学旅行の後半で出会った青年、横島。

タダキチという少年の一件で出会っている少女らは、半泣きで彼に文句を言った。

あの程度で半泣き？　と言うなかれ。

女性らの身体の生理的な仕組みから言って、あんまり驚かされるとタイヘンな事態を招きかねないのだ。

具体的な説明は省くが、男性らよりトイレを我慢し辛いのは尿道の長さが余りに短いという理由が一つとして挙げられる。それから察して欲しい。

幸いにも“粗相”は起きなかったが、彼女らの剣幕からするとちょっとヤヴァかったっポイ。

だから自他共に認めるド助平な横島もそれを察したのだろう、かなり本気で謝っていた。

因みに、一番怒っていたのは裕奈だ。一番拙かったのかもしれない……

「正直スマンかった！！」

とりあえずは土下座。それが彼のクオリティ。

この世界に来て一番役に立っているような気がする見事な土下座スキルである。

何だかこのスキルの経験値ばかり溜まってゆく気がしないでもない。

その余りと言えば余りな達人クラスの土下座に、本気の謝罪というものは伝わってくるのだろう、少女らも『も、もういいよ』と謝罪を受け入れてくれていた。

いや、余りに見事な土下座っぷりに感心したのかもしれない。

……まぁ、そんな土下座を見慣れてしまった　かのこが横で真似しているのも一因だったりするのだけど。

兎も角、裕奈や亜子の許しを得、やっとヤレヤレと腰を上げる事ができた横島に、今度は別の者達が近寄って来た。

ん？　と流石に美少女の気配には敏感な男。すぐにその気配に気付いて首を巡らせる。

するとやはり見知った顔。

この前の一件で関わった子供教師ネギと、護衛対象だった木乃香らだ。

「あ、あの……こんばんわ！
この前はお世話になりました」

「あ、ええと……こんばんわ～」

「お？　ネギと木乃香ちゃんか。こんばんわ……って、お前らまでおんのか？！
あかんやんっ！！　ネギみたいな子がこんな夜更かししたらオネショするぞ！？」

「ええーっ！！？？」

おもっきりオコサマ扱いであるが、夜更かしをするとオネショしてしまうと聞かされ、ガビーン！！とショックを受けているネギ。
日本だけの諺ではないが、それでも初耳であり尚且つマトモに信じてしまうものだからショックは大きそうだ。

イギリス紳士を目指す彼としても流石に嫌なのだろう、内股になって怯えてたりする。

「ほれに木乃香ちゃんみたいな美少女がこんな時間出歩いとったら。
ヘンなヤツに見つかったらお持ち帰りされてまうぞ？」

なにやら親しげに挨拶をかけてきた彼女達に、これまた親しげに挨拶を返す横島。
が、直に我に返って似合わぬ説教。

彼なりに美少女らを心配しての事であるが、彼女らの歳が後一，二歳上だったら、当の犯人に彼がなりかねないのだが自覚は無いようだ。

幸いにも彼女は気付いていないので、本気で身を案じてくれている横島に対して好意的な目を向け、

「いややわぁ、もう～っ」

と、テレながら何時ものツッコミを入れてしまう。

ゴイーンっ！！

「うぼぉっ！？」

何時もの様に玄翁（げんのう）で。

ぶっ倒れてキレイな赤い噴水を上げてしまうが、そこは横島忠夫。

そのままむくりと起き上がって『そのツッコミは激しすぎるわ！！』と涙混じりに文句を言う。

余りに丈夫さに少女らにヒきが入るが、学園長に対する木乃香のツッコミをよく目にしているネギや明日菜らは余り気にしていないようだ。

当の横島も、“元の世界”で撲殺手前のツッコミをよく受けていたので然程は気にしていないが。それでも大した器である。

「あはは……ゴメンなぁ。
なんやツッコミ入れやすい頭やったんよー」

「どんな頭やっ！！」

赤くなって頭を掻きつつ、本気やらふざけているのやら解らない謝罪をする木乃香。

そこらの大人なら本気で怒り狂うだろうが、その木乃香の仕種に中にきちんとした感謝と照れ隠しが混ざっている事に気付いていた。だから横島もズビシッッとふつくしいツッコミを右手のスイングで披露しているが、そんなに声を荒げるような事はしないでいる。

本当に、女子供には心底優しいのだ。

「あ、それと……あん時、ウチを助けに来てくれたそやなぁ……ありがとなぁ」

流石にあんな事件が遭った後だ。何時までも木乃香に裏の事を教えずにいる訳にはいかない。

あの後、木乃香は父親である詠春から直接、事の次第（タダキチの件込み）を聞き及んでいた。

だから小声でその事にも礼を言ったのである。

一瞬、いきなり礼を言われて何の事だかよく解っていなかったが、そのセリフが小声であった事と、彼女らの眼差しからようやくそれだと思い出し得心が行った。

しかし横島からしてみれば礼を言われる程の事でもない。

彼の持論からして、

「ん？　あぁ、気にせんでええわ。
木乃香ちゃんみたいな美女予備軍が不幸になったらハルマゲドンが起こるし、泣かせたら天罰が落ちるわ」

――というものなのだから。

横島的に語るのであれば、美少女を救うのは天の意志。或いは大宇宙の決定事項。アカシックレコードに描かれた必然の事象である。

彼女のような心身共に美少女な娘は、ナニが何でも不幸になって

はいけないのだ。

だから彼は木乃香の京都弁に引き摺られたか、大阪弁になりつつも正直にそれを述べた。

京都弁を使う者は、大阪弁に不快なものを見せる者も少なくないが、言うまでもなく木乃香はそんな事をするような娘ではない。

それどころか、同じ関西系の方言を使う者として更に親しみを高めたようだ（因みに亜子も訳が解っていないが嬉しそうだ）。

頬を染め、笑顔を更に深めているし。

見た感じの変化はないがその花の綻びのような愛らしい微笑みを目にし、

『チクショーっ！！　この娘が高校生やったらぁああっ！！』

と、横島が心の中で血涙を噴霧しつつ絶叫している事は言うまでもない。

「私からもお礼を……
疑ったりして申し訳ありませんでした」

次にその木乃香の背後から前に出、律儀に頭を下げたのは刹那だ。

木乃香同様、長である詠春に話を聞いているので、タダキチを西の刺客だと疑ったりしていた事を恥じているようである。

思い出してみるとシネマ村で木乃香共々救われているし、あの時にも二人を傷つけた事を『このくらい』と称した千草に激怒していた。

本山襲撃時にはあの銀髪の少年が木乃香を使おうとした事にも本気で激怒し、彼女を救う為に奔走した事も聞いているし、実際に救われている。

いくら知らなかった事とは言え、完全に筋違いの非礼を行ってしまっているのだから、謝罪と礼を言うのは当然の事であろう。

が、タイミング悪いというか……戦いが終わった後はイロイロあって彼は意識を失ってしまっていたし、朝になると自分らの身代りが起こしたストリップ騒動で挨拶もできず、麻帆良に帰るは同じ新幹線だったにもかかわらず気の緩みが出たか爆睡してしまって会う事も叶わなかった。

無論、彼は横島忠夫だ。ンな程度の事を気にする男ではない。

つーかあの程度の誤解など大した事ない。

「あ～……

いや、あん時はイロイロ怪しい行動かましてたからな。疑うなって方に無理がある。

だからあのくらいの用心は当然の事だと思うぞ？」

だからこんなセリフも言えたりする。

何せこの男、喉元過ぎれば何とやらで、溺殺されかかっても相手が美女美少女で他に手が無かったり、悪気が無いのなら一時の憤りで許してしまうおバカさんだ。

“元の世界”ではもっともっとイタイ記憶があったりなかったりするし、刹那自身から受けた実害は無かったとはいえ大したものだ。

まぁ、呆れた甘さだと言えなくもないが、刹那の方としては器を見せ付けられたようなもので恐縮してしまっていたり。

おまけに小鹿にまで『ぴぃぴぃ』鳴かれて気を使われてたりする

エラく可愛い白鹿の子がつぶらな瞳で見上げつつ、慰めるつもりなのだろう擦り寄ってくるものだから、刹那としても対応に困り、嬉しいやら恐縮やらで絶賛混乱中だ。

そしてそんな　かのこの仕種に我慢できなくなった少女らが刹那に群がってきて余計に混乱していたりする。

木乃香からしてみれば、そんな自然な表情を見せてくれるようになった幼馴染に頬は弛みっぱなしだ。

しかしそう微笑ましく幼馴染の困惑を見守っている彼女自身も、表情が更に豊かになっている事に気付いていない。

裏を知らされた時は確かにショックであったし、自分の立場というものを改めて思い知らされたものであるが、それでも周囲がどれだけ気を使ってくれてきたか、

そんな立ち位置にいたと言うのに変わらない距離を置いてくれている友人達を見、そして以前のような距離に戻って来てくれた刹那…と得られたものは大きかった。

だからこそ、芯からの笑顔を深める事ができるようになっていたのであるがその事に気付いていたのは同室の明日菜……それと、

『どや？　諦めんといて良かったやろ？』

そう眼で問い掛ける横島だ。

何だかんだで妙な眼力がある彼は、木乃香が刹那が隣にいて喜びに満ちている事に気付いていた。

悲しい別れの経験から、辛いのを内に隠した『作り笑顔』を横島は死ぬほど嫌いになっている。

だからこそ、本当の笑顔を浮かべた木乃香を見る事ができて嬉しかったのだ。

辛いなら辛いと、悲しいなら悲しいと言って欲しい。だったら天地が裂けようがどうにかしてやる。

それが、今の彼の心に突き刺さって抜けない想いなのだから。

そんな横島が笑顔で自分に向けた眼差しに問い掛けを理解できたのだろう。木乃香も、

『うんっ！』

と輝くような笑顔で頷いて見せるのだった。

「ぐ……っ！！」

木乃香や刹那からちょっと距離を置いた背後。

何故かは不明であるが、前に立つ少女の陰に隠れて楓は胸を抑えていた。

「え、えと……楓…さん？」

「に、にゃんでもにゃいでおじゃるよ」

「いやその……にゃんでもにゃいってアンタ……」

バクンバクンと大暴れする心臓をでか過ぎる胸の上から押さえ込み、何とか息を整えようと奮起する。

しかし悲しいかな思い出されるのはあの晩の事。

怒りの余りに我を失った横島を止める事ができ、そしてその事で礼を言ってくれた彼の顔。

月明かりに照らされ、感謝と優しさに満ちたあの笑顔……――――

「うぐぅ……っ」

「ど、どうかしたの?!　タイヤキ欲しいの!?」

「にゃんのはにゃしでおじゃる」

「いやだって……」

そして今、木乃香と刹那が昔の距離を取り戻せていた事を彼は本気で喜んでいた。

その笑顔。

木乃香の背後にいた楓はまともに余波を受けてしまったのである。

日本語としては語弊があるかもしれないが、『余波が直撃した』という言葉が相当するだろう。

何せ最前線で攻撃を受けている木乃香や刹那よりも楓の方のダメージが大きいのだ。

横島に対して（けっこー強めの）好意を持っているのが原因である事は言うまでもない。

当然ながら楓とて横島のそばに行きたいし、もっと話もしたい。したいのではあるが……

僅か一週間会えなかった事と、ＰＴＳＤと言っても良いほどの微笑ましいも深く深刻な精神ダメージが相俟って、何だかよく解らない緊張をしてしまって最初の一歩が踏み出せないでいたのである。

もしこの場に、某ガンスリンガーな少女が居合わせたら苛立ちで悶え苦しんでいたであろう事は想像に難くない。

「ん？　まさか楓さん……
へぇ……？」

が、そこは神楽坂明日菜。楓の奇怪な行動の理由に気が付いてい

た。

つーか、自分がよくやってしまっているボケを目の前でかまされているのだから気が付かぬ筈が無い。

それでも普段の自分が元担任教師に対してもっと慌てふためいている事も身に沁みている為、何だか物悲しくなってホロリとしてしまう。

いいもんっ　何時か伝えるもんっ　と自力では不可能と思われる決意を（一応）固め、鼻を啜りつつくるりと振り返って楓の肩にポンと手を置く。

「ひ、ひゃいっ！　何でごじゃる?!」

ド素人の自分の行動すら気付けず、おもっきり声が裏返っている楓に対し冷や汗を垂らしつつ、

「ね、ねぇ、横島さん……だっけ?　あの人のトコ行かないの?」

と、ストレートな質問を投げ付けた。

「……っ!?」

『う、わぁあ……』

途端に楓は、顔を真っ赤にすると同時にびくんっと身体を震わせ、直後ぷしゅるるる～～と蒸気漏れして沈黙する。

何も聞かなくともどーゆー気持ちを持っているのかハッキリ解ってしまうほどに。

明日菜も思わず呆れて絶句してしまった。

つーか、木乃香にからかわれている時の自分が正に“これ”と言って良い。

それが解ってしまう分、又しても涙が滲みそーになってしまう。

「楓さん……そんなにまで横島さんの事想ってるのね……」

同情とゆーか、同病相憐れむとゆーか、そういった感が満ち満ち溢れ、思わず慰めモードに入っている明日菜。

考えてみれば、そう言った男女の悩み事を持っている友人はいない。

のどかは想いに気付いてから即行で告っているし、噂だけは耳にしている亜子のそれであるがそっちは玉砕しているらしい。

美砂には彼氏がいるようだが、相談するには何か信用し切れない。

和美にもそういった噂がチラホラあるが、相談すると薮蛇という諺を体現しかねない。

ぶっちゃけ、初めて同じ悩みを抱えた友達に会えたという事である。

こんな事で嬉しく感じてしまうのもナニであるが、相談できる相手ができた事はとても嬉しかったりする。ちょっち不謹慎とも言えるが。

そんなわけで、楓を見つめる眼差しはとてもあたたかかった（“生（ナマ）”はついていない）りする。

が、

「ふぇ？　横島殿のことを思ってるとは？」

本人がイマイチ理解し切れていなかった。

「は？」

これには反応が困る。

何せ楓の視線は自分を向いているのに、その意識は確実に自分の

後ろ……

「可愛いーっ　かわいーっっ!!
ナニこれ　ナニこれ!?」

「うっわーっっ　毛がふわふわーっ
鹿の子ってもっと硬い毛想像してたのに」

「どうしたの　この子!?
鹿って飼って良いんだっけ?」

「ちゃんと許可とってるよ。
つーか、野生動物が都会でどうやって生活圏を得るのかって調査目的があんだと。
で、オレが世話役申し付かったんだよ」

「いいなーっ　いいなーっ
ねね、私たちにちょうだい」

「だーほっ!!　うちの子はモノちゃうわっっ!!
おにーさんはそんなコト許しませんよ!?」

横島に向けられっぱなし。
コレでドコをどう見たらそれを感じないというのか。

「それで横島さんは、何故ここにいらしたんですか?」

「あ、あぁ、何か知んねーけど、休んでるトコ叩き起こされて世界樹前に行けーって蹴り出されたんだ」

「蹴り出されたて……ひょとして大首領アルか？」

「そ……」

「だいしゅりょー？　何の話え？」

彼のその一挙手一投足に耳が反応してピクピク動いているのだから実に解りやい。

もー何の説明も要らないくらいの行動だ。

『目で追う』という行為の上級版と言って良いだろう。

またしても溜め息が出そーになったが、大体の事は解った。

――気持ちに目覚めているのに、“それ”が何であるか解っていない――

それが楓の症状だったのである。

超とかがこの場にいれば『解離性の感情障害かもしれないネ』とか言うかもしれないほど、楓は自分の想いに気付いていない。

或いは意図的にズラしているかもしれないが、それを横に置いても酷すぎる。

真名とかが泣きながら頷いているビジョンが見えたよーな気もするが、それは兎も角。

『私も人の事言えないけど、これはやっぱりほっとけないわ……』

元々お人よしで世話焼きである明日菜。

こんな身体つき（＋けしからん胸）までして、子犬のように震えている様は如何なものか。

つーか他の事は兎も角、この件についてはまるでオコサマではないか。

それに前述の同類云々のよーな理由で、彼女は激しく楓の力添えをしたくなっていた。

明日菜が真名にとっての勇者となった瞬間である。

「楓さ…楓　ちゃん　っ！！」

ガシィッ！！　と硬い音が聞こえそーなほど、ドスゲェ力でもって楓のその肩を掴む明日菜。

しかも　ちゃん付け。同級生なのにその落ち着きから『さん付け』を行なっていたのであるが、今までのやり取りでそれは止めたらしい。

「ひ、ひゃいっ！？」

ゴ、ゴリラ？　と失礼な感想を浮かべてしまうほど万力のような強い力で肩を捕まれ、楓はマジびびった。

そんな楓の気持ちなど気付く訳もなく、明日菜はくわっ！！　と目をかっ開いて楓の糸目にその強過ぎる眼差しをぶっ刺した。

「いい？　ホントーならもっと手順を踏むんでしょーけど、めんどくさいから先に言うわ。
ううん。言わなきゃいけないと思う。楓ちゃんはおポンチでド鈍そうだし」

「は……？　何やらエラい事言われてるような気がするでござるが……」

気の所為よっ！！　と言い切り、明日菜は一度大きく息を吸って言葉を紡ぐ。

「楓さんはね、理解しなきゃいけないの。絶対に。
じゃないと一歩も前に進めないわ」

「は？　はぁ……」

「よく聞いてね？
楓さん、あなたねぇ、あなたはねぇ……横島さんの事が……」

「ぴぃぴぃ」

「あはは…　かのこ、どうかしたアルか？」

「昨日、桃あげただろ？　お礼言ってんだよ」

「そーアルか？　気にしなくていいアル。
でもそんなに気に入ってもらえたなら、また持て行てあげるアルよ」

「ぴぃー♪」

「ありがとな。
あ、そう言えば忘れてた。
古ちゃん、“昨日”このジャケット忘れてったろ？　ハイ、これ」

「え？　あ、やぱり老師のトコに忘れてたアルか。助かたアル。多謝ネ」

「どういう事でござる!?」

「うぉわぁっ!!　って、楓ちゃん!?」

背後ででかい声と驚きの声。

ハッと気がつくと襟首掴んでいたはずの楓の姿は無く、代わりに丸太が突っ立っていた。

見事な空蝉である。

「か、楓ちゃん!?」

慌てて振り返って声を掛けるも、

「後にするでござる！！　今はそれどころではござらんっ！！」

と、こっちを見ようともせず、横島の襟首掴んでいた。

木乃香は何だか面白そーな眼で見ているし、刹那は楓の瞬動に感心してて意味が無い。

亜子やまき絵は慌てているし、裕奈は凄く楽しそう。

チアリーディング三人組に至っては面白そーなので呷っている始末。

何度か手を伸ばすも向ける対象が受けてくれないので空を掴むだけ。

ここまで無視（というか、気付いていない？）されてるのだからどうこうやっても話を聞いてはくれまい。

遂に彼女は溜め息を吐き、今はしょーがないかと諦める事にした。

何が何だか解らずオロオロする横島を他所に、古はスゴイ剣幕で詰め寄ってくる楓に涼しい顔。

彼女の勢いに驚いて硬直する　かのこを抱き上げて余裕綽々（よゆうしゃくしゃく）だ。

「ハテ？　何をそんなに怒てるアルか？」

「怒ってなどおらんでござるっ！！」

『『『いや、どー見ても激怒ってるって』』』

怖くて口にはできないが、それならせめてとばかりに少女らは心の中でコソーリと右手でズビシッ！　とツッコミを入れた。

「大首領との確約は、一週間距離を置く事だった筈！！
にも関わらず古は横島殿と……くぅううう～～～～……抜け駆けでござるよ！！」

『『『『『『『抜　け　駆　け　っ！？』』』』』』』

その聞き捨てならないセリフに、少女ら全員が耳をびよんっと大きくした。

まるで関係ないが同時刻、女子寮の一室で一人の少女がペンを片手に立ち上がり、

「何かものすんごいラブ臭キタ――――っ！？」

等と大興奮してたりする。

尤も、それを感じは出来たものの、修羅場の真っ最中であった為に部屋を出るに出られず泣く泣く諦めたと言う。

それは兎も角――

勢いが止まらない楓に対し、古はというとはっはっはっと腹筋を震わせて笑っていた。

「な、何がおかしいでござる！？」

当然、楓が噛み付くが、古は依然として余裕を手放さない。

「フ……何を言うかと思えば……
かえで、大首領がナニを命じたか忘れてるみたいアルね」

「何を……」

何故か気圧される楓に対し、大首領ってナニ？　とツッコム少女

らの疑問は当然ながら無視である。
そしてそんな楓に対し、古は余裕の笑みを浮かべていた。
「私達が禁じられてたのは『老師と一緒に修行をする事』アル。つまり、単にお話をしたり、一緒にゴハンを食べたりする事までは禁止されてないアル！」
「な、何と――っっ！？」
因みに大首領にも確認済みネ♪　と菓子会社のマスコットキャラ少女のような憎たらしい笑顔を見せる古に、楓は更に打ちのめされる。
古の背後に見えた大波のビジョンに飲み込まれ、もがく暇もなくブクブクと沈んで行く。
初めて彼女から勝利をもぎ取れた事がよっぽど嬉しかったのか、跪く楓を見下ろしつつ古は勝ち誇るような高い笑いを上げた。
ギャラリーから言えばドン引きの光景であるし、抱っこしていた鹿の子が怯えまくって青年の腕の中に飛んで逃げていたりでシュールにも程があるし、ナニがナニやらの話であるが、あの二人からすればそれはそれは真剣な話だったらしい。
何せバカレンジャーで知られる成績劣悪五人衆の二人が引っ掛けで勝敗を競っていたくらいなのだから。

とは言っても、古は自分でその事に気付いた訳ではなく、授業中の夢見の悪さから出た不可思議な行動から仕出かした偶然によって横島と会う事ができ、更に運良くポッケにナイナイしているチャチャゼロから話を聞けたから解っただけの話。

ぶっちゃければ単に運が良かっただけである。

まぁ、運も実力の内と言うからあながち間違った訳ではないが、当事者の横島の方から見てもサッパリサッパリな戦いだ。

鈍くて解らないのではなく、彼女らが勝手にイロイロな私情を絡め過ぎているから訳がわからないと言う所が興味深い。

それに、楓の自爆も含まれていた。

ナニを考えていたのか知らないが、携帯を持ってたらウッカリ横島に電話を入れてしまいそうだったので、寮の机に放り込んでしまっていたのである。

おまけにその間にバッテリーが切れて使用不可となっており不通状態。

だから古と会うようになり、それなら楓ちゃんとも……と横島が電話を入れても繋がらなくなっていた。

無論、楓も横島と共に裏の仕事をするようになっているのでこの状態を彼も疑問に思ったのであるが、

『ああ、カエデはクラブ活動が忙しいみたいアルよ』

という古の言葉を鵜呑みにしてしまったのである。

ハッキリ言ってウソではない。

本当に楓は第三者には判りようもない理由によって忙しく走り回っていたのだから。

古も何となく理由に気付いてたりするが、あえて言わなかっただけ。横島や楓に聞かれれば答えただろうが。

兎も角、そんな訳で楓は自らのウッカリで横島との接点を消していたのである。

「くぉおおお……拙者という女はぁ……」

ものごっつ悔しそうな楓の声。

その真ん前で腰に手を当ててふんぞり返る古。

何とゆーか物凄い微妙な光景であった。

「え、えと……？　古師匠……？」

ネギ少年がリアクションに困ってしまうほどに。

楓と古が誰を狙っているのか見て取れた者達はヒューヒューと呷りまくり、
下界との接触が十日に一回状態だった横島は空気が読み切れずオロオロし、
何時の間にやら女幹部的な空気を身に纏っている古を中心とし、
そんなカオスな状況が広がりを見せていた。

そんな空気を払拭したのは――

「おお、早いな貴様ら」

「あ……」

無言ではあるが、頭に“姉”を乗せたまま丁寧にペコリと頭を下げる茶々丸を連れ、深夜という時間にしては余りに不釣合いな白いワンピースを纏った少女……

「エヴァンジェリンさん」

「ふ……時間に正確だな　ぼーや。
それは感心してやるぞ」

今回の茶番の発起人。
エヴァンジェリン＝アタナシア＝キティ＝マクダウェル。

彼女の訪れと同時に十二時の鐘が鳴った――

「試験内容は簡単だ。
前にも言ったが、茶々丸に一撃を入れる事それだけだ」

「ハイ！！」

試験が始まるであろう空気を感じ、少女らは邪魔にならないようススっと下がって行く。

楓も立ち直ってはいないが何とか立ち上がり、古より先に横島を促してその場を離れる。

「フ……」

「く……っ」

それでも古には今週ずっと横島と一緒だったという余裕があり、別段気にした風もない。

そんなライバルの笑みを見て楓は唇を噛んでいたりする。

何時も飄々としている忍者少女の様子を見、刹那は目を丸くし、木乃香は実に楽しそうだ。

「……何か今一つ空気が緊張にかけるが……
それは兎も角、そろそろ始めるが良いな？」

「ハイっ！！」

そのエヴァの言葉を聞き、流石に皆の視線がその場に集中した。
けしからん乳のくノ一は後で話を聞きゃ良い訳だし。

始めの号令を発する時を聞き逃さんとするかのように場が静まりかえり、ネギの周囲同様に緊張感が高まって行く。

しかし、エヴァは口元を綻ばせて意外な言葉を口にした。

「……ところで一つルールを改正したいのだが……良いかな？」

「は？」

意外も意外。
とてもじゃないが言いそうにない人物からの改正提案に皆も驚いた。

そんな表情を見回し、悪戯が成功したのを喜ぶような微笑を浮かべ、エヴァは言葉を続ける。

「いや何。大した事じゃない。
よく考えてみれば生徒と教師に殴り合いをさせる訳にはいかんしな。
それに茶々丸は　ぼーやに好意を持っている。そんな二人に殴り合いをさせるのは胸が痛いのだよ」

「―あ、あの、マスターっ！？」

イキナリとんでも発言をかまされ、大いに慌てる茶々丸。
そんな茶々丸を、皆は『ほほぉ～』と面白そう&なま温かい目で見つめていた。

当のネギも顔が赤いし。

『胸が痛いって……どの口が言ってんだろ？』

『さぁ？　私にはそんな口は見えないアルよ』

『俗に言う二枚舌でござろう』

『ぴぃ？』

エヴァを知る三人は、何時の間にやら仲良くコソコソ会話。

横島が緩和材になれば直に仲が修復できるのは、結局仲が悪くない証拠だ。

小声ではあったが、何か悪口を言っているのか察したのだろう、エヴァは射殺すような眼差しを向ける。

途端に三人は身を伏せて視線を回避。

回避のタイミングが見事に三人同時であり、三人に習って小鹿まで身を伏せているのが何とも微笑ましい。

「ま、まぁ、兎も角だ。
ぼーやも好きで茶々丸に手を上げたくはあるまい？」

「……ハイ」

ネギの脳裏に、春先の出来事が浮かぶ。
カモの口車に乗り、明日菜と共に茶々丸を襲撃してしまった時の事を……

あの事は今でも後悔している。

「そんな訳で代役ルールを入れる事にした」

「代役……ですか？」

「そうだ」

エヴァはコクンと頷いてネギの質問を肯定する。
怪し過ぎる異様に優しげな笑みを浮かべて……

「ぼーや　もこれぞと思うヤツを選んで私達にぶつけてくるが良い。
私達もそれを了承し、受けてやる。どうだ？　お互いメリットがあるだろう」

「それは……」

確かにそうだろう。

ネギの方も古や楓を、或いは刹那や明日菜を選んでも良い。

少なくともネギ本人が向うより、ずっと合格率は高くなるはずだ。

これが横島ならもっと別の手を考えたかもしれない。

許されるのなら、

「じゃあ、高畑さんに頼む」

等と平気で言う男であるし。

だが、悲しいかなネギは真面目過ぎる。

この場にいるのは女の子だけであるし、横島には修学旅行で陰から守ってもらったという迷惑をかけている。

そうなると選択肢は一つしかない。

「いえ、これは僕の試験ですから僕がやります」

はっきり言って想定した答え。

解りきった選択である。

当然だ、そうなるように仕向けたのだから。

「そうか…良いんだな？」

「ハイ！」

その問い掛けに、ネギは元気よく答えて身構えた。

エヴァはネギの反応を見て、満足そうに頷き、そして……ニタリとワラッタ。

『『『！！？？』』』

とてつもなくヤな予感がし、楓と古、そして横島に怖気が走る。

楓も古も勘は良い方であったし、霊能修業によって鍛えられて更に鋭くなっているのだから。

「……そうか、ではこちらは選ばせてもらおう」

「え？」

ダラダラと汗が流れるが、こういった悪い予感は当たると相場が決まっている。

嗚呼、なんで素直にココに来ちゃったんだらぅ……等とミョーな日本語の使い方をして悲観をするが遅きに遅し。

エヴァはホントーに楽しそうに横島の方を向き、

「よし、横島忠夫。キサマがぼーやとやり合え」

二人にとって、試練というには余りな試練を課した。

前編（後書き）

散々っぱら時間かかってしまい申し訳ありません。Ｃｒｏｉｓｓａｎｔです。
ちょっと部が色々と立て込んで疲れてたり……って、言い訳っスね。ゴメンナサイ。

さてｗ
前回と今回で明かしましたが、古はあの夕方の一件からずっと、エヴァの別荘まで一緒にいたりしまいす。このかと遊んだり、彼が休んでる間は自己鍛錬したりして時間潰してたりしました。無論、彼との鍛錬は不許可なので、ネギ関係の話はしてません。そーいった質問もある種の鍛錬ですからね。
まぁ、プチデートですなｗ

そのお陰でもっと一緒にいたいとゆー自覚が出来てます。
お陰で楓が出遅れてしまいました。メインの一角ですんで苦労してもらいますヨｗ

で、次回は試験本番です。

ネギ君は勝てるかどうか。
どーなるか……つーか、“前”をご存知の方ならお解りですよねーｗｗ

兎も角、話は続きます。
ではでは～

中編（前書き）

中編

――“あの”霧魔の襲撃事件以降、横島と古は楓の眼を盗んで毎日のよーに逢瀬を続けていた（違ｒｙ

ちゃっかりした事に、古はキチンと大首領（笑）であるエヴァに“あの件”について再確認している。

念の為というヤツだ。後でどんな問題が起きないとも限らないと気付いたからだ（寸借詐欺的に）。

流石は横島を師と仰ぐだけはある。こすっからく成長したものだ。

大首領（エヴァ）曰く――

「修行に関する事でなければ会ってどうこうするのはかまわん」

との事。

つまり、古は横島との修行を禁じられてはいるが、そうでないのなら密会をしようが体育用具室とかでムニャムニャしよーが知ったこっちゃないとゆー事らしい。

ココんトコ追い詰められ気味な彼の事、ゆっくりとアプローチすれば『オラ、ワクワクしてきたぞ』な展開になってもおかしくなかったのであるが、幸いと言うか残念ながらと言うか、小鹿の無垢無垢な眼差しもあってそう上手く（美味くw？）はいかなかったりする。

ねぇねぇ、ナニするの？　と好奇心イッパイのキラキラした目で見つめてくるもんだから、ウッフンなアクションがとれやしない。

元々が精霊なのでコトに及ぼうとしても気にはすまいが、それでもあの澄んだ目には勝てないのだ。

……尤も、男の方ではなく、少女の方がそんな空気に持っていこうとしていたのはチョット問題であるのだけど。おまけに無意識っポイし。

閑話休題（それはともかく）。

魔法に関する事や霊能力に関する事を見聞きする事も修行となるのだから、功夫の型とかを見せて意見を聞いたりするのもダメなら、ネギを鍛える件や試練についての横島と相談したり質問をするのは当然不可という事となる。

それはそれでガッカリなのであるが、会えるなら後の楽しみに取とくアルと、古はけっこー簡単に納得していた。

確かにメインは横島の悲痛な声に反応する　かのこを押さえておく事であるが、別荘に向う間、他愛無い学校の“お話”をしたり、時間までブラついたり軽く食事をしたりとかなり楽しんでいる。横島にしても拷問鍛練の生き抜き…もとい、息抜きになるからとけっ

こー楽しんでいたし。

古の方も自分と話をする事を楽しんでくれているのを見るのは嬉しいらしく、バイト先である＜超包子＞に連れて行って一緒に軽食を摘んだり、エヴァの家に向うコース上にあるカフェでお茶を飲んだり、まったりとした時間を交えてかなり充実した日々を送っていた。

……ま、ぶっちゃければやっぱり逢瀬と称しても言い過ぎではないくらいで……

と、兎も角、コソーリと覗いていた超が思わず安堵の涙を拭っちゃうくらい、（本人達に自覚があるかどーかは微妙であるが）マジモンのデート。

流石に一週間もそーゆー事を続けていたお陰であろう、何時の間にやらちゃっかりと自覚が進んでいたりなんかしちゃってるもんだから、以前よかベタベタしてたりする。

前にも述べたが、横島の霊力値と煩悩値は反比例しており、疲労が溜まっている現状ではその年齢の垣根はググっと下がっているので古とのデートも純粋に楽しんでいたりするのだ。

そりゃあもう、楓が目の当たりにすれば嫉妬の余りのたうって悶えてしまうほどの仲の良さだったらしい。

古の武闘派追っかけにハッケソされてなければよいのだが……

――またかな～り話が逸れてしまったが、つまりそーゆー理由で

横島は古から　な～んにも話を聞いていないと言う事である。

そんな彼であるから、エヴァの別荘で霊力回復中、世界樹前広場に行けと言われてイキナリ叩き出されただけで何が何だかサッパリ解っていないまま。

どーも周りの話から鑑みればネギが茶々丸と何やら行うという程度の事しか解らない。

そこでイキナリ代打に選ばれたとしても、

「あ〝ー　もぉっ！　何が何だかっ！！
説明ぐらいせーっ！！！」

と、混乱して怒鳴るのは当然の行為であろう。

一応、茶々丸の代わりとしてネギとナゾの理由でバトらねばならない事だけは理解できたものの、聞けば聞くほど自分が巻き込まれる事に納得が行かない。

何せネギは魔法使いとして天賦の才を持ち合わせてはいるが、実践云々で言えばまだド素人。

対して横島は悪霊や魔族と戦い続けて生きるか死ぬかの生活を送っていた男だ。

そんな横島に（イロんな意味で）純真無垢なネギをドツき回せと言う。

ぶっちゃけてしまえば児童虐待。

腐っても横島忠夫。それを『やれ』と言われて『ＯＫ！』と素直に受けるよーな男ではないのだ。

ものごっつい剣幕にネギや明日菜は元より茶々丸までがオロオロしているのを見、やっとこさ古も『そ、そー言えば説明してなかたアルな……』と気付き、代表のように彼の前に進み出て説明をする。

また出遅れたでござる！？　と打ちひしがれる楓を他所に、ジェスチャーを加えつつココに至った経緯を語る古であったが、その説明を受ければ受けるほど横島の額に皺が寄ってきた。

彼女の話をまとめれば、強くなりたかったからエヴァに師事を請い、何とか試験をしてくれる確約は取れたもののその内容を聞く前に古に白兵戦闘の師事を請い、エヴァを怒らせたという事となる。

彼の経験から鑑みれば、バイト先である除霊事務所の所長にナイショで近所の魔法料理店でバイトしているようなもの。

まぁ、実際に貧困の余り食うに困ってやっちまってた事もあったりするが、それがバレた時に怒れる所長によって三途の川でメドレーリレーを堪能した挙句、営業担当の死神ちゃん（横島用に女性だったらしい）の甘言に乗せられてウッカリあの世行きの書類に捺印してしまうところだったのは黒歴史だ。

あの上司なら人の弁明を聞く前に殺しにかかるだろうから遺書の用意でもしてた方がマシであろうが、エヴァはずっと温厚（！？）なのでとりあえずは言い訳くらいは聞いてくれる。だったらどうとでもできたはずである。

例えばエヴァに見付かった際、『ナイショで体を鍛え、試験当日にその結果を見せて驚かせるつもりでしたー』とか、『貴女に教えてもらう為に必死で鍛えました』とかかませば角は立たなかっただろう。

上手くいけばフラグの一つも立つか、好感度とかが上がったかもしんない。そこら辺を見据えられないのはまだまだオコチャマだなぁ……等と苦笑してみたり。

「いや、そーじゃなくっ！」

妄想を手で払って現世に意識を戻し、エヴァに顔を向ける横島。

この場で初めて説明を聞き、あたふたするトコが見たかったのだろうか？

事実、何かニタニタしてこっち見てるし。

オレはドコに行ってもそーゆーS女に縁を持ってしまうとゆーのか！？

ええい腹の立つ……このドS幼女め」

「……刻むぞ？　キサマ」

「ああっ！　何時の間にか声に？！」

“あの”元雇主に比べればやはりエヴァはかなり温厚（！？）のようであるから命は取られまいが、睨まれるとやっぱり怖い。

元から女王様系女子に弱い事もあるし、この二ヶ月間扱きに扱かれて、たっぷりと真祖の吸血鬼の恐ろしさは叩き込まれているのだからビビるのも当然だ。

無論、魂レベルで叩き込まれている元雇主への恐怖感よりはマシであるが。どんだけトラウマ植えつけられているだろうか。彼の女傑、恐るべし。

「そ、そんな事より、何でオレがネギと殴り合いせなあかんねんっ！！」

そんな恐怖を誤魔化す為か、迫り来るお仕置きを避けんが為か、何とか必死に話を逸らそうと……もとい、話を戻そうとしどろもどろ。

しかし意外にも彼女は言い訳めいた彼の言葉にすぐ従ってくれた。

尤も、

「ほぉ？

つまりお前は茶々丸にネギを殴らせ、あまつさえ茶々丸が殴られるかもしれない状況が見たいと？」

「う〝っ！」

余り嬉しくない言いくるめ方向に、であるが。

だが、そう言われると流石の横島も言い返せなくなる。

ちらりと目をエヴァが見ている方向に合わせてみると、そのやりとりをオロオロとしつつも見守っている件のロボ少女の姿。

その様子は何か同僚の巫女少女を思い出してしまう。

責められてもいないのに、『一横島さん……』と悲しい眼で見られて気になってくるのもチキンハート故の事だろう。

尚且つ、彼はその茶々丸にかなりお世話になっていた。

何故かは知らないが、エヴァはまるで横島の能力を茶々丸にだけ見せないように“あの修行”を行っており、その際には古と共にかのこの世話や家事を行なえと命じて距離を置かせているのである。

そして、傷の手当てや食事の時になってやっと彼女はその場に呼び出されるのだ。

だから横島は、かのこは世話になっているし甲斐甲斐しく手当てもしてくれるしで、茶々丸にけっこー気を使っていたりする。

確かにそんな事をされている理由は解らないが、元々エラい低かった人外と人との垣根は更に低くなっているので、当然のように魔法と科学の融合体である彼女を一人の少女として接しているし、茶々丸が美少女であるという事も手伝って、感謝の念は特売セールに出しても余るほど持っていた。

そんな彼女が叩かれる、傷を負うかもしれない状況になっても良いのか？　と問い掛けられれば、否　断じて否！　絶対にノゥ！と言わざるをえまい。

つーか他の選択は無い。

「せ、せやけどわざわざこんな事せんでも、別にオコチャマの一人や二人、教えたっても……」

ええんとちゃうか？　等とテンパっている所為だろうか、微妙に関西弁になりつつそう問い返すのだが、

「ほう？
私に師事を請いに来たその口で、即行でバ功夫娘に教えを請いに行く。
そんな口を直に信じろと？
そんな行動を踏まえた上で、教えるにせよ断るにせよ、
その想いの強さが如何程のものか見てやろうと言うのだ。
これ以上に慈悲を見せろと言うのか？」

「う〝……」

エヴァの方に筋が通っていた。

確かに、仮にも師匠になってもらおうとしていた相手に断りも無く古に教えを請うの筋が違う気がする。
人にもよるだろうが、中途半端な気持ちで当たっていると取られても仕方が無いのだから。

前述の通り、そういう理由の怒りを横島は身を以って知っていた。

しかしそうなってくると断る手立てがなくなってくる。

横島は茶々丸に食事の世話と手当てをしてもらっているだけなので彼女の戦闘力を知らない。

元いた世界で戦闘力特化の人造人間を知ってはいるが、見た目茶々丸の方が華奢であるし“色んな意味”でボリュームに劣る。

特に胸部装甲は薄そうだし。

「一……？　何でしょう？　急に横島さんに攻撃を仕掛けたい気持ちが……」

「……」

と、兎も角、

茶々丸の戦闘能力をまともに知らない横島は、見た目が華奢な美少女である彼女と魔力で肉体強化が出来るネギがガチで殴り合いをするのは賛同しかねる。

つーか、嫌だ。

となると……

「ふふふ……そう言う事だ」

こ、この娘、悪魔や……等と悔し涙を流しつつ、横島は了承するしかなかったのだった。

言うまでも無いがエヴァは甘い男はそんなに好きではない。口にする人間によっては虫唾が走る程に。

だが、内容を詳しく知っているわけではないが、横島の甘さの“理由”は余りに重過ぎる事は理解している。

それに横島の馬鹿は口だけではなく、突き抜けているので余り気にしていないのだ。

……まぁ、その甘さを利用する事くらいはするのだが。

「ぼーやも嫌いでもない茶々丸に手を上げたくあるまい？
どうだ？」

等と胡散臭い笑みでもってネギに持ちかけるエヴァ。

やはり彼女は悪である。

そんな言われ方をしてこの少年が断れる筈がないのだ。

「あ、えと……ハイ。解りました」

彼としてもその申し出はありがたい。
以前の卑怯な襲撃に対する引け目もあるので、彼女には殊更手を上げたくなくなっているのである。
攻撃が当たるか当たらないかは別問題であるけども。

――だが、彼は何かを忘れている。

双方の快い（片方は嫌々であるが）了承を見、エヴァは内面で闇夜の三日月を思わせる笑みを浮かべていた。
尤も、外面は優しげに口元を歪め（この辺りは流石）てはいるが。

しかし、当然ながら反対意見者がいなくなった訳ではない。

「「異議ありっ！！」」

言うまでもない。楓と古の二人だ。
どこぞの謎法廷宜しく、勢いよく手を上げ異議を申し立てた。

ココんとこいっしょにいる古は練習着なので見慣れているが、楓は珍しく私服であるし、おまけにノースリーブ。
制服より生地が薄い所為か、勢いよく手を上げた為に年齢不相応に『たゆん』と大きい果実が揺れ、それがハッキリと見えてしまった横島は、霊力が下がって煩悩ゲージが上がっている所為だろうコ

ソーリと鼻を抑えてたりする。
まぁ、それは兎も角（カンケィねーか）――

「幾らなんでも力量に差があり過ぎるでござる！！
草野球の代打に○ぶさん出すよーなものでござるよ！？」

「だ、大体、経験が違い過ぎるアル！！
いくら史上最強の弟子でも入門したてでは沈黙の料理人にも勝てないアル！！」

『なんつー解り難い喩えだ』等と思いつつ、それでも二人が反対してくるのは想定内。
エヴァは然程も慌てず馬鹿声から鼓膜を守るべく耳の穴を塞いでいた指を抜き、

「ああ、心配するな。ちゃんとハンデは考えてある」

と言って茶々丸に顎先で指示を出した。

彼女も“既に命令を受けていた”から驚きもせず、ポケットから取り出したチョークでもって横島を中心に半径１ｍの正確な円を描く。

皆もそれが何を示しているのかサッパリ解らなかったが、線を引き終えた時にエヴァが説明を始めてやった。

「確かに単にこの男とやり合えば　ぼーやは瞬殺だ。そこまでムチャは言わんよ。
だから横島から攻撃してはいけないというルールを考えた。まぁ、カウンターは仕方ないと思うがな。
そしてこの円から出しても　ぼーやの勝ち。
ぼーやは横島に一撃入れるか、この円から出せばいい。どうだ？」

「なれど……」

エヴァからしてかなり譲歩したルールであるが、二人はそれでも納得しかねている。
まぁ、多少なりとも横島と鍛練をしており、その実力を身をもって知っているのだから当然であろう。

しかし、

『それと、あいつの霊能力の使用も禁止とする。それならいいだろう？』

そんな裏のルールを念話で伝えてこられたのだからしょうがない。

成る程、確かにここまでハンデをつけた横島に一撃も与えられないようでは弟子に取る気にはなるまい。
二人とてそんな横島とならヤり合ってみたいと思うし。

ここまで足枷を付けてもらって却下とは流石に言えなくなってしまった。

「ふ……納得したようだな。
……では、始めるとするぞ」

ぬたりとした笑みを浮かべて下がって行くエヴァ。

その笑みにものごっつい不安を覚えるも、やはり二の句を継げず、しぶしぶといった態で楓らも下がって行く。

やや緊張した面持ちで軽く関節をほぐしているネギ。

顔からイヤそーな表情が消えない横島。

何とも落ち着きが対照的な二人であるが、イキナリ代打に立たされた彼もスッカリ諦めの境地に入ったか、茶々丸に　かのこを見てと預けてその円の中に立った。

ドンと胸を叩いて『一お任せください』と何故か自信満々に了承し、その胸にかのこを抱き上げて危ないですから下がっていましょうと小鹿に説明しつつ距離を置く。

クラスメイトらの羨ましそうな視線を全て弾き返しつつ、『一調子はいかがですか?』とか『一ご夕食はとられましたか?』等と語りかけ、『ぴぃぴぃ』と返事を返してもらっては実に幸せそうな顔をしていた。

これを成長と見ればよいのか、堕落したと思えばよいのか微妙なトコであるが…兎も角、周囲の邪魔者が下がったのを確認した後、右手を軽く上げつつエヴァは、

「あぁ、言い忘れていたが。横島よ。

間違っても一撃喰らって負けたりしたら“例の修業”を3セットな」

と、横島にとって死刑判決に近い罰をこの期に及んで口にした。

「な、なぁにぃいいいっ!!??」

エヴァの言葉にマジな恐怖の色を顔に浮かべる横島を見、楓達は首を傾げたが当然ながらその恐怖の意味は計り知れない。

その横島の怯えを見て、更にエヴァは満面の笑みを浮かべつつ上げた手を振り下ろす。

「では、始めっ!!」

そして、試験は始まった――

■十六時間目：功夫・Ｈｕｓｔｌｅ（中）

「う～ん……何というか妙な展開になってきたな」

刹那から聞いていた話を思い出し、見回りが終わったその足でここに来てみたのであるが……流石はエヴァンジェリンといったところか。

何とも周到な事に、周囲には点々と栓の開いたペットボトルが置かれおり、その中には水が入っていた。

恐らくこれらを繋いで侵入阻害の結界を張っているのだろう。

試験の邪魔をしないようにしているのだろうが、ここの学園長より強大な魔力を持っているというのに、それ封じられている彼女は水のような触媒無しには魔法は使えない。

その水とて水道水を入れるだけでは済まず、それなりの手間を掛けなければならない。

にも関わらず、彼女はその面倒な手順でもって作り上げた水をペットボトルに詰めて、場の周囲に配置して結界を張っている。

しかし、魔力を持たない人間を含む、特定の人物だけは入られるようになっているのだろう、魔法使いではない少女の姿もチラホラ。

隠蔽力も高く、自分でなければ結界があるとも思えなかっただろう。

「横島さんとネギ先生か……どう考えても先生に歩が悪過ぎるな」

“彼女”は既に彼の実力の一端を目にしているので容易に想像がつく。

いや、彼女でなくとも当のエヴァにしてもそれは容易に想像がついているだろう。

仮にネギをからかう為に横島と戦わせるにしても手間がかかり過ぎている。

という事は、

「……試験ではない……という事か？」

或いは戦わせる事こそが目的である――かだ。

「ふむ……」

少女は顎に手をやって僅かに悩みはしたものの、ネギと横島が向かい合い、周囲から少女らが離れて行くのを見て直にその思考を放棄した。

何だか面白そうな事が始まろうとしているというのに、つまらない事を考えつづけるのは無粋というものだ。

「ま、どうせ後で解るさ。それに……」

チラリと空に視線を向ければ、無音ローターを回して宙に浮いている物体が一つ。

メカメカしい外見と、こんなモノを組み上げられる人物に心当たりがある彼女は、フ…と苦笑して観戦者に徹する事にした。

今のネギの実力を見るのも由、手枷足枷状態の横島の戦いを堪能するも由。

見所は多そうだ。

「ま……個人的には横島さんにボコボコになってほしいんだがな……」

ぶっちゃけ八つ当たりなのだが、それはほぼ不可能であるから直に諦め、ストレスのネタを与え続けてくれるバカブルーを苦い眼で睨む。

エヴァに気付かれないよう、結界の外からスコープでもって観戦するスナイパーな彼女。

何かと気苦労の種には事欠かないようである。

＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊

少女らは一瞬、何が起こったか解らなかった。

いや正確には、見えてはいたのであるが、それでも理解できていないと言ったところだろうか。

少女らの口から零れ落ちるのは呆気に取られたような吐息のみ。

ネギと横島の実力を知っている筈の古や楓ですらその有り様だ。

「……ま、そうだろうな……」

ただ、エヴァだけはギャラリーの少女らとは別のベクトルで呆れてはいるが、驚いた風もない。

茶々丸の頭上で珍しく何も喋らず二人を見つめているチャチャゼロも……極めて表情を読む事は難しいが、恐らく驚いてはおるまい。

かのこを抱えて右往左往している妹とは対称的だ。

彼女らの視線の先。

試験の為、横島との試合を始めたネギは、

「う……く……」

「え、えーと……大丈夫か？」

開始の合図と共に自分に魔法による肉体強化を施して踏み込み、一撃を入れようとしたその瞬間、弧を描くようにひっくり返されてしまったのである。

「……え、え？　ええっ！？
い、今、何があったのっ！？」

最初に再起動を果たせたのは、勢いがいい明日菜。

そしてそれを皮切りに、皆も再起動を果たしてざわめき出す。

「え？　え？」

「いきなりネギ先生がひっくり返ったよ！？」

「な、投げた……？　ううん、違う。何なの！？」

まぁ、見えなければ混乱もするだろう。
眼が良かろうが知識がなければサッパリだし。
現に動体視力が尋常ではない明日菜も、見えてはいるが何が何やら解っていない。

「ち、ちょっ、刹那さんっ！？」

だから刹那にしがみ付くように問うが、問われる刹那も答えに窮している。

「わ、解りません。
先生が自身に魔力供給をして中国拳法の……崩拳…ですか？
それを入れようとしたとまでしか……」

実のところ刹那も見えてはいる。だが、見えてはいるだけだ。
正確に言えば『よく見えなかった』であるが、その『よく見えなかった』部分がネギを大の字に横たわらせている理由なのだから説明が難しい。

「……何と……」

呆然とした声に、刹那は振り返った。

声の主はその物言いからも解る少女、楓であるが、彼女には見えていたのだろう、皆とは違う眼でもって呆然としている。

更には、同じ様に古もまた呆然としていた。

流石に明日菜より眼が良い楓、そして事が武術であるから古にも解ったのかもしれない。

――今の瞬間、何が行われたのかを。

だからこそ、その驚愕は余りに大きく、再起動に時間が掛かってしまったのである。

現世復帰を果たした瞬間、二人は慌てるように皆より一段高い場にいるエヴァに視線を向けた。

彼女はただ、妖艶ともいえる奇妙な笑みを浮かべているだけ――

「く……っ」

と、してやられた事に唇を噛む古。

別にネギが負けたとてそんなに困る必要はないのだが、彼の努力

を知っている分、古としては気持ち半分はネギを応援していた。

無論、横島に負けてほしい訳でもないが、ネギの意気込みを見、その中に横島の強くなりたいという気持ちと似たものを感じていた。だからその分、エヴァに引っ掛けられた事が悔しかったのである。

もう一度、彼らに目を戻せばヨロヨロとネギが立ち上がってゆくのが見える。

やはりこの程度では諦めまい。ダメージらしいダメージも受けていないのだし。

あの瞬間――

横島はネギの拳をしゃがんで回避し、その踏み込んできた足を手で掬い上げたのだ。

しかしそれだけではなく、転がす際に、ネギが頭を強打しないよう自分の左足の甲を彼の後頭部に当て、その衝撃をやんわりと逃がしている。

その一連の動作を、横島は一拍で行っていたのだ。そりゃあ、楓も古も唖然とするだろう。

次いで驚いたのは楓から説明を受けた明日菜達。

横島の見た目が見た目のなのだから驚愕も大きい。

確かに暴走といういらぬ要因はあったものの、京都の一件で彼の実力の一端は目にしているし、銀髪の少年と戦った際には、向こうの攻撃を悉く避けてカウンターでおちょくるような余裕も記憶に残っている。

だが、いざ通常の状態での横島を前にすると、“あの晩”の事などすぽーんと忘れてしまうほど（ややアホっぽいが）普通の青年にしか見えなかった。

それほどギャップが大きいという事なのだが、見かけで油断させられていると言っても過言ではなかろう。

「ネギくぅん！　がんばってぇーっ！！」

「私達がついてるよーっ！！」

「横島さんなんかやっつけちゃえーっ！！」

慌てている明日菜らを他所に、単なるギャラリーである裕奈達がネギに声援を送る。

無論の事、チアリーディングを行っている三人も部活で鍛えた応援で彼を励ます。

ぶっちゃければこの場にいる少女らの大半……八割以上はネギの味方である。

「く……よ、横島さん……行きますよ」

その声援を受け、ネギの心に力が篭った。

こんな皆の為に強くなろうとしている事も理由の一つなのだから。

ぐ……と拳を握り締める。

まだ自分に対する契約執行の魔法は生きているし、心は折れていない。

エヴァの言った試験のルールに時間制限の話は出ていない。

屁理屈と言われればそれまでではあるが、だったら気力が尽きるまでやればいい。

いや、“やれる”。

自分の気力が尽きるか、横島の気力が尽きるか。

その我慢比べが今回の活路だとネギは思っている。

そしてまだ拙いとはいえ、この一週間で己が身体に叩き込んだ拳法の構えをとり、前で待っている横島を見据え……

「さぁ、来い。男の敵め……
天に代わって成敗してくれる」

一瞬で気力が尽き掛けた。

「……ま、拙いアル」

「どうかしたのか！？」

今さっきとは別の意味で冷や汗を掻いて呟く古に、刹那が思わず問い掛けた。

何とか勇気を振り絞って崩拳で踏み込むネギ。

横島はその腕に手の甲を当てていなし、勢いを自分の背後に逃がしつつ軸足を手で払ってひっくり返らせる。

更にネギが受け身を取ろうとした瞬間、更に彼の足を掬い上げて投げ飛ばす。

何かさっきよか手加減がない。

横島は自分から攻撃ができないというルールだから、ネギが突っ込んでこなければ話にならない。

かと言ってネギの誘いに乗るような彼ではなく、どんなに挑発してもピクリとも反応を見せず、イキナリ懐から本を取り出して読み出したりする。

無論、それは誘いで、のせられたネギが隙ありと突っ込んでまた投げられたりしていた。

その流れるような動作に明日菜らの驚きも大きい。

「あの噂が流れていた理由が解ったでござるよ」

「は？　い、いや、今はそんな事を聞きたかったのではなく……」

しかしその刹那の問い掛けに答えたのは古ではなく楓。

おまけにその答も何か見当違いっポイ。かくんと肩を落としつつ訂正しようとした刹那だったが……

「いや、“それ”が答でござる」

「は？」

横島を見つめたまま、楓は極真面目にそう返した。

「元々横島殿の自己評価は無意味に低いでござる。人よりどれだけ勝っていようとそれに気付けず、どれだけこっちが気にしようと感じ的には掴んでくれるくせに肝心の部分は気付いてくれない朴念仁。

……ったく人の気も知らないで……あの時だって……」

「か、楓？」

しかし彼女の言葉はどー考えても脱線しっぱなし。

刹那は、大丈夫かコイツと冷や汗を垂らしてしまう。

そんな少女らの前方で、ネギは横島にいいように遊ばれ続けていた。

古との特訓で鍛えた連打を横島に叩き込むが、何と言うか……横島は“のらりくらり”と身をかわす。

恰も風に靡く柳の如く。

どう考えても分が悪過ぎる。

体力的に見ても、魔法の強化無しではネギに勝ち目は無い。

何せ横島の方もカウンターは入れるのだが、打撃ではなくネギの力を利用した見事な捌き。

ネギの攻撃そのものを返しているに等しい。

これではネギしか疲労が溜まって行かないではないか。

横島がそういった武術の修行をしていないのは楓も古も知っている。

しかしあの動きはそんな鍛練を知らぬ者のそれではない。

何せ刹那から剣を習い始めて日の浅い明日菜ですら、横島が素人ではないと見て取れているほどなのだら。

「……な、何という体捌きでござろう……
それにアレは……もしや柔術でござるか？！」

ハッとして大首領たるエヴァに再度眼を向ける楓。

その視線の先、
高台の上から仁王立ちでその戦いを見つめている様は正に大首領という言葉通り。

楓の視線とその意味に気付いているのだろう、彼女はニヤリとして笑みでもってそれを返していた。

「く……っ　この状況、そして横島殿の底上げから鑑みて最悪でござる。
これではネギ坊主に勝ち目は無いでござるよ」

「ちょ、ちょっと楓さん！！　どういう事！？」

余りと言えば余りに悪い状況を嘆く楓の言葉に、明日菜が強く反応する。

ネギのがんばりを知っているし、ココ一番の無茶な踏ん張りも知っている明日菜であるから当然の流れであろう。

「さっき拙者が申した通り、横島殿の自己評価は無意味に低いで

ござる。
　よって、自分はモテないという“こんぷれっくす”を拭い切れず、やたらと色男に嫉妬してるでござるよ」
「だから、それが……」
「解らぬでござるか？　斯(か)かる状況に」
「へ？」
そう問われ、意味が解らぬまま振り返って場を見てみた。
彼女の視線の先で、ネギと横島の手合わせはまだ続いている。
殆ど一方的に遊ばれているネギであるが、その眼には未だ諦めの色は無い。
ネギは殆ど習っていない蹴りまで混ぜるが、横島はそっくり返るようにスウェーしてかわし、その足を掬い上げて少年の小さな身体を一回転させる。
当然のように石畳での頭部の強打だけは防いでくれているのだが、踵落し等の追い討ちはおもっきり出してたりする。
微妙なトコで手加減が無くて大人気ない。幸いにもネギは避けているのだが。
そんな虐めにしか見えない光景に、少女らの応援にも更に熱が入る。
「ネギくぅーんっ！！　しっかりーっ！！」

「横島さんなんてぶっとばしちゃえーっ！！」

「子供相手にサイテーっ！！」

「大人気なーいっ！！」

無論、横島に対しての野次が入るのは否めない。

だがそこは横島忠夫。

その野次によってイロイロとパワーが上がって行く。すげく涙目なのが印象的だ。

「くくく……ココまで嫌われたら失うモンはないなぁ……

とことん殺らせてもらうとするか」

「ひぃいいっ！？」

一瞬、ネギの腰が逃げてしまうほど……つーかチビっちゃいそーなほど怖くなった。

横島の眼もかなり病んでるし。

「ネギ坊主は今、綺麗ドコの声援を受けて戦っているでござる。

対して横島殿は罵声を受けるのみ」

「そ、そりゃまぁ、ネギと戦ってる訳だし……」

そう答えてから意識を戦いの場に戻せば、やはりネギは圧倒的不利のまま。

踏み込めば流され、体勢を崩され、掬われ、捌かれ、コロコロ転がるのみ。

しかしそうなると、ネギに対する声援より横島に対するブーイングが増してゆく。

ナニすんのよーっ!!　などと言うのは甘い方で、死んじゃえーっ!!　に近いモノまで飛び出して来る有り様。

横島の笑みは黒さを増し、何か福本っぽく歯並びのいいイヤ過ぎるワライに変わってきてたりする。

当然、少女らは　ざわ　ざわ　してるし。

流石の明日菜もこれにはヒキが入る。

「解ったでござるか？
つまり、ネギ坊主を応援すればするほど横島殿の“しっとパワー”が上がり、
ネギ坊主が危険度が高まって行くでござる」

言うまでもないが＜モテない＞というのは単なる被害妄想であるし、元の世界でも彼は然程モテない訳ではなかった。

実際、残念ながら記憶には殆ど残ってないが、二十歳を過ぎてからのナンパ率は鬼畜な実父に迫っていたし、雇主や同僚の少女ら（“女性”と称せねばならない年齢となっていたが）もずっと彼を気にかけていた。
おまけに人外からはむやみやたらと好かれている。それも本気の本気でだ。

が、小学生時分から堆く積み上げてきたコンプレックスは中々突き崩せないのである。

その“しっとパワー”は凄まじく、相手の髪の毛なんぞ用意せずとも藁人形一つで男に呪いをかける事ができてしまうほど。
呪術師も感嘆するほどの“しっと”の呪いパワーである。

「そ、そんな……
あっ!?　だったらあの噂は……」

楓の言葉を聞き、やっとさっき彼女が何を言いたかったか気付く明日菜。

そんな彼女に楓はコクンと頷いて肯定する。

「そのようでござるな……あまりにピンポイントだと思えば、そう言う事でござろう。
ほぼ確実に横島殿が嫉妬するような綺麗どころが応援側に選ばれてるでござるし」

プロポーション的なもので言えば千鶴やあやかが適任であろうが、彼女らは実力行使に出る可能性があるし、何よりあやかは余りに五月蝿過ぎる。

それにストライクゾーンのド真中よりややズレていた方が、ハートにくるモヤモヤは大きい。

かと言って　のどかも駄目だ。

彼女に涙目でじっと見つめたら横島は即死するだろーし。

だからこのチョイスとなったのだろう。

何とも見事な采配である。激しく使い方を間違っているような気がしないでもないが……

「それに老師が『休んでるトコを叩き出された』と言てたアル。老師は“力”が減てくるとボンノーを使た集中力で回復しようとするアルね。

ボンノーが暴走してる今は、嫉妬の化身になり易いアル」

古がそう説明を継いだ。

加えて言うのなら、ネギと古は対茶々丸用に対策を練っていたのだから、練り上げた策は茶々丸でなければ役に立たない。

にも関わらず、ネギや古達はエヴァの放つ雰囲気と状況によってうっかり彼女の提案に乗ってしまったのである。

確かに断り難い提案であったが、ネギの対戦相手が横島であると

いうショックが強すぎ、その事を失念してしまっていたのも大きい。
そして痛い。
これは余りに痛く酷い大失策だ。

「おまけに横島殿のあの動き……あれはどう見ても柔術のそれでござる。
拙者らに稽古をつけてもらっていた時はもっと素人臭さがあったのでござるが……

となると考えられる事は……」

確認のように古に顔を向ければ、流石に彼女もその事に気付いていたのだろう、苦く頷いて肯定した。

『……いやまぁ、そこまで深く考えてた訳ではないんだがな……』

幾ら封じられていようと流石は夜の眷属。
満月でなくとも夜の闇の中では幾分力が戻るらしく、彼女らの会話はしっかり耳に聞こえていた。

３－Ａの少女らからイイトコをチョイスして集めたのは、単にネギの応援兼、横島のトリガー役だけである。

ネギの底力は誰かを守ろうとする時に浮き上がってくる。よって声援も結構効くのだ。
アレを見る前にへこたれられたら敵わないのでその対策の為だ。

そして横島が戦おうとするよう、トリガーの役目も担ってもらう気でいた。

どーせあの男の事だ。相手がガキであれば絶対に嫌がって殴り合いなんぞすまい。

確かに魔法で自身を強化したのにはちょっと感心はしたが、地力は十歳程度なのだ。覚えたて程度の技では横島に勝てる訳がない。
その事を横島自身も解っているので、まともな交渉でやり合わせるのは不可能だと思われた。

だから布石として意図的な噂を流して……いや、“与えて”みたのだ。

そんな少女らに応援をされるネギを目にすれば、自己評価がおもっきり低くて見た目も然程は悪くないのに酷いコンプレックスを持っている横島の事、行動に移させるのは容易であろう。

せめてあと二，三年育っていれば～～っ！！　と横島が歯噛みするようなのをチョイスしたのもそれが理由だ。

因みに、ハルナであればもっと話を持って行かせ易かったかもし

れないが、異様に五月蝿過ぎる上、とんでもないくらい勘が鋭いから拙いと判断して削ってたりする。
まぁ、現在ハルナは“修羅場”であったから丁度良いのだが。

因みに、プロポーション的にはやはり　あやかや千鶴も挙げられるが、あやかはハルナと同じくらい五月蝿いしウザいので論外だし、千鶴は……何か上手くいかなくなりそーな気がするから却下だ。

兎も角、交渉材料の一つと言う意味合い（場合によっては、彼女らを使って戦わせようとも考えていた）だけで、気力アップの材料とまでは考えてなかったりする。

「一宜しいのですか？」

「……何がだ？」

そんなエヴァの呆れなど知る由もない茶々丸が唐突にそう問い掛けてきた。
その間も茶々丸は、戦いとは言えない一方的な遊びともいえるものから眼を離していない。まぁ、その分かのこが不安そうな視線を横島とエヴァの間を往復させてたりするが。
シリアスな顔で見守っている茶々丸と、うるうるとした眼差しを向けているかのことの対比が凄い。

尤も、ネギがすっ飛ばされる場面等では微かに言葉が詰まったりもしていたが、エヴァは気にもせず自分の従者の言葉を待った。

「一ネギ先生の勝率はゼロです」

端的に――茶々丸は事実を口にする。

「当たり前だ」

「一仮に私と戦ったとしても、今のように魔法で自身を強化なさっても、その勝率は3%未満でした」

「あぁ、そう言ってたな」

あの日――

見回りを終わらせて家に帰ろうとしていたエヴァは、拳法の型を練習し続けていたネギに出会った。

何故か彼と一緒にいたまき絵の訳の解らぬ庇い立てによって試験をする事になってしまったエヴァであったが、後になって考えたら何とも分の悪過ぎる試験ではないか。

確かにネギは天賦の才があろう。

能力全開でなかったし、けっこう手加減した戦いであったが、一度やり合った身なのでその事は自分がよく解っている。

――が、経験の無さはどうしようもない。

ハッキリ言ってしまえば人造人間である茶々丸は実際にはネギより年下である。

しかし、戦闘プログラムの更新やエヴァの従者としての戦闘経験の蓄積が戦士として彼女を鍛えているのだ。

よって今のネギと茶々丸の距離は圧倒的。

茶々丸にしてそうなのだから、存在自体が反則の塊である横島が本気になると最悪一秒と持たない。

尤も、その程度になれるくらいにあの男を投げに投げ、投げて投げて投げまくってやったのであるが……

「チ……ズイブン手加減シヤガッテ……
本気デヤリャア、スグニすくらっぷニデキルッテェノニ……」

そんな彼を見やりつつ、茶々丸の頭の上で面白くもなさそうにチャチャゼロが呟いた。

珍しい事だが、そこそこ不機嫌っぽい。

セリフそのものは何時ものそれのようであるが、毒を向けた相手は主であるエヴァに対してではなく、ネギをコロコロ転がしている横島に対してだ。

横島の鍛錬を直接目にした事のない茶々丸が彼の戦闘力を想定できるのもチャチャゼロが伝えているからであるが……実はちょっとばかり誇張も混ざったりしてその実力は曖昧にしか把握できなかった。そこら辺はエヴァがツッコミを入れて修正済みであるが。

この事からも解るように、何気にチャチャゼロは横島の肩を以ってたりする。

尤も、そんなこと言っちゃヤダー　という上目遣いをする小鹿がいるからか、そんなに悪態を吐いていなかったりするが。

「くくく……やはり奴の事をえらく買っているようだな。
そんなにあいつが本気にならないのが気に入らないのか？」

かのこに対する気遣い込みで、長く付き合いのある従者の変化が面白いのだろう、エヴァの顔は実に楽しげである。

チャチャゼロはエヴァの古参下僕で、一番彼女に近しい位置にいる存在だ。

しかし何せ元は人形。
その存在概念をひっくるめた能力の大半をエヴァの魔力に頼っている事もあり、魔力伝達が滞りがちである昨今は喜怒哀楽すら乏しくなっていた。

しかし、横島の霊波という尤も魔力に近いモノを浴び続けていた

所為か、幾分以前のような感情を見せるようになってきている。
……まぁ、それ“も”狙いの内ではあったが、こんな“おまけ”が付いてくるとは思いもよらなかった。

そんな感情の動きを面白そうに眺めている視線に気付き、チャチャゼロは一瞬言葉に詰まってしまう。

尤も人形の顔を持っているので表情が読み難い。それが幸いし、

「……ソ、ソウジャネーヨ。
単ニ、オレノ後輩ノ分際デツマラン手心ヲ加エテイルノガ情ケネェダケサ。
べ、別ニアイツヲ気ニシテル訳ジャネーカラナ？」

等と誤魔化しをかます事はできていた。

それが成功しているかは別として……だが。

『一ツンデレ乙…だと判断します』

等と妹にもそんな感想をもたれているし。

ま、それは兎も角――

「一マスターはネギ先生に魔法をお教えしたかったとお見受けいたしましたが……」

「ふ…　まーな……」

意外にも、エヴァは茶々丸の意見を肯定した。

僅かにチャチャゼロがピクンと頭を動かして反応をして見せたが、それが主人の意外な言葉に対してなのかは解らない。

「一これではその目的達成は不可能では?」

「さてな」

茶々丸の問いかけにもエヴァのは微笑むだけ。明確な答は返ってこない。

尤も、そんな事を期待できる相手でもないのだが……

確かに茶々丸の言う通り、勝率ゼロの相手に勝つ事はできまい。

ネギの鍛練のメインは茶々丸に対してのカウンターで、攻撃方法はまだ本格的なものを習っている訳ではないのだ。

対して横島の方は、エヴァ自らが一対一の魔法使い相手の戦いや、対軍勢戦の技（業）を徹底的に叩き込んでいる。

前に高畑に語ったように、横島は物覚えが悪い。

おまけに女に手を上げられない性質を持ってしまっている。

だから普通の方法で鍛える事は不可能だ。

よってエヴァは投げた。

対人戦闘。それも、殴り合いや撃ち合いをあまり得意としない彼に合う戦闘スタイル。

霊能という特殊過ぎる能力者に最も似合う戦闘スタイルである、合気柔術。

ある人物に技を習い、達人クラスとなっているエヴァ自ら彼に直接技を叩き込んでやった。

兎に角エヴァは投げるに専念していた。

一方的に投げ、投げに投げまくった。

本気で。かなり本気で叩き壊すつもりで。

未だ女相手に組み手すらまともに出来ない横島が技を会得するには、投げに投げてその技を身体に刻み込み、身を持って教える他手は無かった。

無論、ヘタレの彼の事。マジ泣きで嫌がるし、許しを請う。
土下座だってするし、負け犬宜しく腹だって見せる。

そのヘタレっぷりには教えているエヴァの方も泣けてきそうになったものだ。

――しかし、『止める』とは決して言わなかった。

許しを請うたとしても、それは手加減くらいで、止める等とは決して口にはしなかった。

泣き言を言いつつも立ち上がり、

ボロボロになりつつも眼の力を衰えさせようとせず、

震える足を叩いて踏ん張り、ボロ雑巾宜しく叩き込んだ術をじゅるじゅると小汚く吸収して行く。

実はエヴァは、彼のその小汚い貪欲さが気に入っているのである。

そんな横島をエヴァに次いで間近で見守っていて、彼の事を妙に気にしているチャチャゼロ。

そして何だか異様にネギの事を気にしている茶々丸。

姉妹して何とも対照的な似た者同士を気にしているものだと苦笑しつつ、エヴァはネギの試験を見守り続けていた。

何を見守っているかは定かではないが――

茶々丸は、そんな自分のマスターの心中を図りかねて困惑していた。

いや、何を悩んでいるのかと問われれば困ってしまうのであるが、彼女自身も解らない部分が葛藤しているのだ。

何だかんだ言ってエヴァはネギの事を気に掛けて来ている。

横島にいいように遊ばれてはいるが何度も懲りずに立ち上がってくる少年を目に入れ、満足そうにほくそ笑んでいるのだし。

茶々丸も口にしているのだが、ネギでは横島に勝てない。

そんな事は言われるまでもなくエヴァも確信していた。

実戦経験の少なさはどうしようもないし、それより何より横島の経験の大半は彼よりも圧倒的に強い存在との戦いである。

よって余程の事がない限り、如何なる相手でも油断が無いのだ。

それだけならまだしも、心構えの点でネギは圧敗している。

確かにネギは努力しただろう。

天才という誉通り、元々の才気が尋常ではない彼は古の教えをスポンジのように吸収し、数ヶ月は掛かる型でも二，三時間でモノにしたほどだ。
頭は悪くは無いが知識の遅れもあり、スタートの時点で横島はとっくに負けているといってよい。

だが、如何ともし難い差がネギと横島との間にあった。

ネギは一生懸命だったし、がんばりも続けていた。今現在も意地でふんばっている。

が、横島はエヴァの課す拷問と差の無い修行を一生懸命受けていた訳ではない。

彼は、必死に受けていたのである。

ネギとて一生懸命勉学に励んでいたのであろう。天才という誉もその努力から来ているのだろうし。
その年齢からは考えられない努力を続け、自分を磨きつづけてきたのだろう。でなければ主席で卒業等できるはずもない。

しかし、その努力の中で死ぬ確率は殆ど無かった。

何だかんだ言ってイギリスの有名な魔法学校での事。彼が隠れて禁止されている魔法すらも学んでいる事に気付いている事だろう（

でなければ節穴と言ってやる）し、魔法暴走などという場合の対応も整っている筈だ。

だからネギは戦いの場で“泣く事”ができたのだ。

本気ではないエヴァの実戦に対し、酷いというセリフを口に出せ、泣くという反応を行えたのだろう。

対して横島の必死は、一歩どころか半歩間違うと確実に死んでいる。

前述の投げまくった件もそうであるし、茶々丸自身はまだ実際に見たことはないのであるが、エヴァは横島に対して四方八方から魔法を叩き込んで対応法を身体に学ばせ、魔道人形軍団にボコらせ、その間隙をチャチャゼロに襲わせ、ほぼ本気で殺す気で横島を鍛え続けてきたのである。

確かに彼も戦いの場で泣くし、口ではとんでもないくらい情けない弁をかますが、その気持ちは決して折れず、死闘と変わりのない鍛練を決して止めようとしなかった。そして実戦の場でも諦めをしない。

“一生懸命”――力の限りを尽くしてがんばる事。

“必死”――死を覚悟して全力を尽くす事。

気構えがまるで違っているのだ。

「く…っ！！」

打撃や痛みによるダメージは無きに等しいが、仕掛けた攻撃を流され、返されているので蓄積して行く疲労は大きい。

それでも何度転がされてもネギは立ち上がり、懲りずに拳を叩き込んでゆく。

何かしらの強い想いがあるのだろう、幸いにも避けられない追い討ちは無いので何とか立ち上がる事ができるのだ。

無論、その隙すら体力や意志を削って行く罠なのであるが。

それでも諦める事無く拳は相手に向けられる――

その姿を見、

マスターの心中を図りかねている茶々丸は、ただ怯えるように己の手を握り締め、無言でネギを応援する事しか出来ないでいた。

何度転がされただろう。

何度攻撃をいなされたのだろう。

日本の諺に『ノレンに腕押し』というのがあり、使いどころは違っているかもしれないけど、感触としてはそれが一番近いと思った。

考えてみれば、古師匠と練った策は茶々丸さんの攻撃を誘ってカウンターで返すというもの。

相手が茶々丸さんでなく、尚且つ横島さんから攻撃をしないというルールにされている以上、こちらから攻撃を仕掛ける他無い。

でも、届かない。

全然手が届かない。

修学旅行の帰りにちょっとだけ聞いたけど、横島さんという人は古師匠と楓さんの師に当たる人で、二人がかりでも掠らせるのが限界だとの事。

確かにまともに戦っても勝つ事なんかできない。

まだまだ古師匠の足元にも及ばないのに、その師匠に当たる人に届かせようなんて自惚れは流石に持っていない。

だけど、このルールを言われた時には、多少の勝ち目があると思ってしまった……

――この僕の考えは甘かった。

古師匠にすら一撃も与えられないのに、その師匠に当たる訳が無いんだ。

事実、横島さんの動きは尋常ではなくて僕の目が全く付いて行かない。

動きが緩慢でも意外な方向に意外な避けられ方をされたら目も意識も付いて行けないんだ。

こうすればこう避ける。といったセオリーに全く当て嵌まらず、直感と気まぐれで避けられているような気にすらなってくる。

速さより何より、当たる直前に避けられるから、拳を振り切って見失ってしまう。

そして……

「よっと」

「わぁっ!?」

その攻撃のベクトルを自分に返される。

まるであの白い髪の少年を相手にしているよう……

それでもまだ……いや、あの少年を相手にしている時より、まだ手加減されている事だけは理解できていた。

だって横島さんが次に何をしようとしているのか解る。
手をかけてひっくり返そうとしているのも解る。

なのにその動きに反応が出来ない。

古師匠に比べてゆっくりとした動きなのに、僕の腕に添えられた手を払う事も避ける事も出来ない。

おまけに打撲とかは無いのだけど、蓄積している疲労が酷過ぎる。

思い切り出した攻撃が回避されると後が続かなくなると古師匠に言われたのは本当だった。

それでもカクカクと笑う膝に手をつき、何とか立ち上がる。

「うぉ!?　まだやんのか?　諦めて寝る事にしねぇ?」

「ま、まさか……まだまだいきますよ」

横島さんからの攻撃は無いルールだから、立ち上がって呼吸を整える事ができる。

魔力の執行は切れてるから、魔力を防御に集中する事ができるからまだマシ。

でなければとっくに気絶している。

「あー……やっぱな……お前、素直過ぎるわ」

「え？」

そんな僕を見て、肩を竦めつつ横島さんはそう言った。

何を言われているのかサッパリ解らない僕を見て横島さんは苦笑する。

それが僕の性格の事か何なのか理解できなくて戸惑っていると、横島さんは急に何だかすごい真面目そうな眼になって僕に問い掛けてきた。

「あのさ……お前、何の為に強くなりてぇんだ？」

中編（後書き）

遅くなりました。中編です。

実は今時間目の話、“試験”ではなかったりします。

ウチの横っち理論から言うとネギは天才ではあっても強者にはなれませんしね。

絶対に越せない壁は存在しますし、力を得たらもっと越せなくなる。それが解っていなければどーしても一歩前に出られません。

原作のご都合主義にも程あるあの強化法ですが、あれを使うと横っちには絶対に勝てなくなります。かのこにはボロ負けするでしょうしw

ウチのネギはどう強くなるのか？

横っちはどう強くなるのか？

向こうで描き切れなかったシーンも書けるように頑張りますね。

てな訳で後編へと続きます。

後編（前書き）

行間で場の空気を感じさせるのが難しーです。

後編

フ……とエヴァは口元に笑みを浮かべていた。

それは微かに苦笑を含んでいたのであるが、小鹿を抱えて右往左往している茶々丸には解らない。

何だか加速度的に人間っぽくなって来ている気がするけど。

そんな彼女の頭の上にいる所為だろう、ぶんぶん振りたくられてその姉は余り機嫌がよろしくない。

尤も、それは振り回されているという理由よりもそんな妹の体たらくに呆れているというのが正しいのかもしれないが。

――やはり…か……

そんな二人（二体？）に主の呟きは聞こえていない。

第一その呟きは自分の従者達……魔法と科学の結晶である妹や、霊波動を受けて妙に人間臭さを増してきている姉……に向けたものではなく、新たに得た下僕に向けたもの。

冷静さを取り戻し、ネギの事を気にし出した、あの“突き抜けたバカタレ”に向けられたものだ。

エヴァの課した試験は、実のところ然程難しいものではない。

何せ倒す必要は無いのだ。

要は勝てば良いだけなのだから、幾らでも手はあるのである。

一番簡単な方法の例を挙げるなら、ボケを言わせてツッ込むというのもある。

お笑い芸人気質を地で持っている横島だ。ツッコミを避ける能力はない。

現に、チャチャゼロが本気で戦っても掠らせもできないくせに、ツッコミだけは誰の放つものでもバシバシ受けているのだし。

その代わりと言っては何だが、耐久力もギャグ入っていて異様に頑丈になっているようだけど。

まぁネギは横島の事をそんなに詳しく知る訳がないので気付ける筈もないだろうし、真面目で知られるコドモ教師であるからそんな方法は思いもつくまい。無論、横島がそんなアホな負け方をすればエヴァも只では済ます気はないが……

どちらにせよ、やはりネギは今一つ状況判断が鈍い気がする。

「一ああ、ネギ先生……」

「ぴ〝ぴ〝ぃ〝〜……っ」

「ヲイ　ばかタレ！　ナニヤッテンダ！」

……その隣でまだ茶々丸が焦りまくっており、強く抱きしめられ

た　かのこが苦しそうだった。
　チャチャゼロが頭をばしばし叩いて気付かせないとエラい事になっていただろう。
　まぁ、それは横に置いといて――

　一週間前、エヴァはネギに師を請われた時は面倒だったしどーでもよかった。

　有耶無耶になっているし、そこそこ気に入ってはいるが、一応、ネギと彼女は敵同士。
　『正しい魔法使い』らにとって、エヴァという『悪の魔法使い』は永遠の敵なのだから。

　だからてきとーにお茶を濁そーかとまで考えていた。

　が、今は違う。

　あの男――横島忠夫という下僕を持ち、魔法使い相手の戦いを叩き込んでゆく中で彼女の中に芽生えたもの……

　教師欲……とでも言えば良いだろうか。
　卵の殻が取れていない未熟なひよっ子を自分好みに育て上げるという楽しみ……それにウッカリと目覚めてしまい、更にムクムクと膨らませてしまっているのだ。

　何せ横島という男は物覚えが悪い。

死の縁に叩き込み、何度も三途の川をメドレーリレーさせねば技の裾にすら手が届かないほどなのだから。

しかし、その代わり彼は異様に欲深かった。

一度掴むと決してその技術を手放そうとせず、必死に喰らいついて貪欲にそれを会得して行く。

実際、投げまくりはしたが投げを教えた訳ではないし、誰か…或いは何かを投げさせた憶えも無い。

女に手を上げられない男であるから、チャチャゼロやその妹達は元より、エヴァに対しても投げを行なう事（技術的に実現可能かどうかは別として）ができない。

だから直に叩き込んだ。

柔術の極め投げを身体で憶え、そして“流れ”をムリヤリ掴ませるべく、エヴァはかなり本気で投げ続けた。

普通は無茶であり、達人クラスのエヴァの投げであるから、覚える云々以前に一撃目で死亡してしまいかねない。

無論、最初は死なない程度の手加減を加えていたし、死ななければ腕を折ろうが足が砕けようが頸椎を痛めようがどうにでもなる。

彼の“珠”を使用してムリヤリ回復するのだから。

幸い“珠”は、十分程度は物質として存在するので、その間中痛めつける事ができる。

それを良い事に修行はどんどんエスカレート。

ネギが目にすれば失禁しかねないほど、どう贔屓目に見ても拷問かリンチにしか見えない鍛練を課す事が出来た。

だがその甲斐あってか、或いは素質があったのだろうか、横島は僅か二ヶ月で基本中の基本であり且つ最重要である“極め”と“投げ”をモノにしたのである。

面白い――

面白い！

エヴァは“業”の一端を掴まれた時、そう心の中で叫んでいた。

技術を叩き込む事がこんなに面白いとは思わなかった。

如何に無様であろうと、叩き込んだ技術を必死に会得してもらえる事がこんなに楽しいとは思わなかった。

――そして彼女は認めた。

久方ぶりに思い出させた“面白さ”“楽しさ”に酔っている…

…と。

だから求めている。

ぐっと求めている。

ネギと一戦やらかした時、あんな子供が自分に付いて来られる事が楽しいと感じていた。

ぼーやが泣き出すほど追い込みはしたが、抗われた時にはホッとしていた。

自分と同数の精霊を駆使して魔法を使われた時、我知らず笑い声を上げてしまった。

それは目を掛けている生徒に出した課題を解かれてゆく気分に似ているのではないだろうか。

認めよう――

今の私は一人前の魔法使いとなったぼーやを見てみたいのだと。

認めよう――

ぼーやを私自身の手で魔法使いとして鍛え上げてみたいのだと。

もし、あのぼーやが“そう”であるなら、

優れた才能を腐らせず己を研磨して行く者なら、
身に付けた技術を己の中で研ぎ澄まし、鋭く鋭角に仕上げて行けるのなら、

私は……――

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――

■十六時間目：功夫・Hustle（後）

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――

「お前さんの欠点は、余りと言えば余りにも真っ直ぐ過ぎて次にどこをどうするか気付かれる事だ。
まぁ、それに“誘い”を混ぜられたら勝ち目あんだけどな～」

踏み出した足と共に拳が襲い掛かるが、横島は手で弾いたりせず、腕に手を添えるようにして往なすだけ。

だがそれは、振り子のように腕の振りで反対側の拳を叩き込もうとしていたネギにとっては最悪の避けられ方で、勢いを逃がされたのだから腰を軸とした突きを出す事ができなくなっている。
無理に出そうとしても隙が大きくなるばかりだろう。

「ああ、今のも拙い。
左で出した崩拳が誘いで、本命は右拳だろ？
初めっから右手に意識が向いてんだからフェイント見え見えだぞ」

「く……」

ならばと逃がされた勢いのまま軸足で旋回し、彼のいる方向に身体を捻って拳底を振り込むネギ。

ぬぉっ！？　と僅かに驚く横島であったが、その腕を防御するふりをして誘い入れ、身体を捻ってネギを引っ張り投げた。

「わぁっ！？」

ころんっと転がりかけるネギ。

が、彼も然る者で、そのまま足から着地して勢いを殺さぬまま横島に再度踏み込む。

横島はちょっと感心した眼をしてそれを迎え、振り出された腕を外側に弾き、そのまま上から手で押して掬い落した。

『え……？』と、ネギが驚いた時にはもう遅い。バランスを崩されたまま、軸足を払われてもんどりうって倒れてしまう。

無論、頭を打ったり頸椎を傷めないよう細心の注意を払われてであるが。

「ネ、ネギ――っ！！」

慌てて声を上げる明日菜。

確かに頭部を庇ってもらえてはいるが、ひっくり返されている事に何の変わりも無い。

“裏”の事情を知らないギャラリーの少女らは押し殺したように悲鳴を零すのみ。

さっきまでとはかなり違う。

尤もそれは、皆が揃いも揃って口を押さえているからであり、好き好んで応援をしなくなったわけではない。

楓らから話を聞いて直、明日菜らは声を荒げて声援を送っていた祐奈達の下に駆け寄り、ネギを応援する事こそがネギを追い詰める事になると教えた。

フツーなら理解できそ―にない話であるし、『何でっ!?』という疑問の声が飛ぶが、皮肉にも横島のクラいワライが見えてた事が説得力を生んでいて、彼女らは訳が解らないが一応納得をし、口にチャックをしてくれている。

尤も、声を出さないだけで応援は続いている為、無言でポンポン振りたくったりして応援している様はちょっと異様であったりするが。それは兎も角――

問題は、相手に対する美少女の声援という火に注がれるナパーム弾は無くなった事により、その所為で横島の冷静さを取り戻す速度は上がっている事だろう。

彼女らは知らない事であるが、冷静になった横島は余計に始末が悪くなったりするのだ。

現にさっきよか隙が減り……いや、眼に見える隙の全てがフェイクであり誘いで、ウッカリ踏み込んでしまうネギはコロコロ転がされまくっている。

声援を送れば攻撃力が上がり、送らねば戦闘力が上がる。何と厄介な相手であろうか。

「はわ、はわわわ……ぜ、全然手も足も出ぇへん……」

「……た、多少はできるとは思ってはいましたが……」

木乃香らも唖然としてそれを見守る事しか出来ないでいた。
そして横島の強さを改めて思い知らされたのから刹那の驚きは大きい。

あの式神集団との戦闘の折、僅かの時間ではあったが戦闘機械のような状態になっていた彼を目の当たりにしている。

群がる式神をものともせず……いや、無視するかのようにラッセル車宜しく前方の障害だけを“除去”していた横島。その時の怖気は今も忘れられない。

が、再会してみればあの時の彼はどこへやら。人当たりが異様によく、人懐こそうな笑顔を見せるそこらの一般人そのものだった。
彼女の目をもってしても、そんな彼の様子が作り上げたもの……演技とはとても思えなかったし、素であるとしか感じられなかった。

そんな彼が今、刹那から見ても巧みだと言える技を出している。

余りにもころころと印象が変わってしまう為、判断がつきかねているのだ。

声無き応援している少女ら。それも戦いの素人である少女らからしてみればもっと手加減してくれてもいいでしょう！？　となるだろうが、横島は彼なりにではあるがかなり手加減をしていた。

その事は古と楓の二人はよく解っている。

何せ横島は何だかんだ言って女子供に底抜けに甘い。

だから確かに“しっとマスク”になりはしたものの、相手が本当に十歳だと解っている横島の怒りパワーの持続時間はとてつもなく短いのだ。

それはカウンターといっても、ダメージにならないよう気を使っている事からも見て取れる。

それに彼の真骨頂である縦横無尽の回避逃亡行為は封じられており、メインである霊能力も無し（自覚は無いだろうが、彼の霊能力は結構目立つ）。

言うまでもないが“珠”は論外。

下手をすると神秘が曝されるし、何より只でさえ薄いネギの勝ち目がマイナスになる。

だからこれ以上の手加減具合、公平さは無いだろう。

単に横島が別空間での二ヶ月という僅かな修行時間で強くなり過ぎているだけなのだ。

――しかしそんな事よりも、二人には気になっている事があった。

「や、やぁあっっ！！」

「おっと」

何処に気合が残っていたのか、まだ腹から声を出して横島に突っ込んで行くネギ。

対する横島は叩き付けてくるような気合に臆する素振りも無くそれを受け、あまつさえするりと横に流している。

そう言った気合は人外のレベルを体感し続けてきている横島だ。確かに年齢度外視の波動を持ってはいるが、まだまだ人間の範疇であるからか然程の動揺も無い。

「横島殿……」

だが、楓は――

楓達は、見事に避け切っている横島が、何だか痛々しく感じられて仕方が無い。

久しぶりに会った彼は、会わなくなった時より幾分すっきりとした表情をしていた。

彼に迷いの霧があったのかと問われれば返答に困るのであるが、あの修学旅行での戦い以降、微妙に思いつめていた気がしないでもないのだ。

“それ”がマシになっていた――のだ。さっきまでは。

「老師……？」

古も彼の表情が僅かに曇ってきた事に気付いたのだろう、怪訝そうな声を漏らしていた。

攻撃を受ければ受けるほど、
いや、捌けば捌くほど彼の心が傷ついて行くような……そんな感じがするのである。

「横島殿……」

「老師……」

ほぼ同時に、二人の口から思わずそんな声が漏れた。

何気ない声ではあったが、もどかしそうで、それでいてどこか腹立たしそうな、そんな声。

心配の色を多分に含んだ、女の子然としたそういう声。

木乃香と刹那は『え？』という眼で二人を見た。

迷いに沈んだような声が不思議だった事もあるが、その二人顔を見てまた『え？』と戸惑う。

何故かは本人すら理解できていないだろう。

いや、そんな顔をしているという自覚は無いだろう。

彼女らには、一度も攻撃らしい攻撃を受けていない横島が、何だか見えない拳で殴られ続けている……

その痛みに耐えかねて泣いている。

そう感じられて仕方が無いのである。

だから木乃香らが目にしたその二人の顔は、

今にも涙が滲み出てきそうな泣き顔になっていたのだ。

解らないという事は歯痒いという事でもある。

ものにもよるが、気付けない、気付く事ができないと、

相手の吐いた“優しい嘘”に気付けず、思いもよらない悲しみを背負い込んでしまう事がある。

身を以ってそれを知っている横島であるからこそ、チクリと感じた僅かな痛みを無視する事無く観察する癖を持ってしまっていた。

だからこそ“気付けてしまった”。
だからこそ“見えてしまった”。

向ってくるネギのその目に浮かぶのは、悲しいかな“知っている光”。
何かに躓いて傷を負っても気付けず進んでしまうかもしれない。
そんな我武者羅な想いの光。

輝きと見間違えそうに成る程強いのだけど、単なる反射発光のようなそれ。

目標ばかりに気が入っているようで、その実は何かから必死に目を逸らせている。

そんな事に気付けても嬉しくも何ともないが、解ってしまったものだから胸が痛む。

底が浅く愚直。
真っ直ぐと言えば聞こえは良いが、単なる直情行為であり、何も見えていない。
それが自分どころか周りすらも傷付ける事になると気付けない。

自分がそうであるからこそその事が解ってしまい、そして思い出す。

乗り越える事は不可能だと気付いたから、癒す事は不可能なのだから、嫌でも苦しくてもそれを受け入れ、前を見据える。
それが出来た時にやっと出発点に立てる。

それに気付けた時の事を……

自分に迫ってくる拳。

この拳にどれだけの想いが篭っているのだろう。
窮鼠猫を噛む……ではないが、何となく追い詰められた攻撃に見えなくも無い。

試験に受かる為に必死になっている――
成る程、そう聞いていればそう見えるかもしれない。
事実、そうであっただろうし、その気持ちに偽りは無いだろう。

だけど“それだけ”とは思えない。“それだけ”には見えない。
横島の眼に映るのは、“想いに駆り立てられている少年”のそれではなく、“想いに追い立てられている少年”の姿だった。

子供のはずなのに、まだ十歳程度の筈なのに、何でこんなに余裕が無いんだろう。

こんなに余裕を無くす程の事があったのだろうか？

何だろう？

奇妙な親近感を感じているのは。

何故だろう？

以前の自分に似たモノを感じているのは。

疑問と同情が入り混じったややこしい感情を治められない横島は、力を振り絞って殴ってくるネギの腕の動きに合わせ、ゆっくりと手を前に動かした。

パン……ッ！！

風船が爆ぜるような音が場に響き、少女らは我に返ったようにビクンと身を竦めた。

始めて横島が防御らしい動きを見せ、ネギの拳を掌で受け止めたのである。

何せ横島は攻撃というものに入らない。

ネギがいくら魔法でもって己を強化しようとも手を出したり邪魔をしたりしないのだ。

だから魔法による強化は未だ続いており、幾ら防御できているといっても、掌で拳を受けた横島にはそれなり以上のダメージが行っている筈。

それでもその表情には痛みを耐えていると言う色はなかった。

「……なぁ、ネギ……」

自分から受けに入ってくれた横島に驚いているネギに対し、横島はそう静かに問い掛けた。

「さっきも聞いたけど、お前、何でそんなに強くなりてぇんだ？」

「……え？」

質問しながら横島はネギの拳からゆっくりと手を離してゆく。

案の定というか、当たり前であるが魔法強化された拳を受け止めたのだからその掌は真っ赤だ。

それでも彼は痛みを訴えない。

――……いや？

受けるよりも前に何らかのダメージを負っていた……そんな気がしないでもない。

「キティちゃんトコに弟子入りするって事は、とんでもねー修行をするって事だよな？　お前、それ解ってんだろ？　だったらなんでそんな思いまでして強くなりてぇんだ？」

疑問符だらけの質問。

それだけの疑問を彼が感じている――というのではなく、何というか……何かを確認しようとしているような気がする。

少なくとも、楓らはそう感じていた。

「それは……」

彼が何を知ろうとしているのかは解らない。

どうして今そんな事を聞こうとしているのかも解りはしない。

だけどそう言って自分を見つめてくる眼には、何か抗い難いものがある。

不思議とその気持ちが解らないでもないような気すらしてくる。

乱し切った呼吸の所為か、困惑の所為かは知らないが、少し間を置いてネギは、

「……目標にしている人がいるんです」

そう答えた。

――心に焼き付いているのはあの雪の日の思い出

――

穏やかで優しく、何だかんだ言って皆が皆して見守り続けてくれていたあたたかい日々。

それだけの世界しか知らず、その枠内の世界しか知らず、

あぶなくなったら助けに来てくれる人を呑気に信じ、

魔法という世界にいるにも関わらず危険を知らずにいたあのシアワセな日々。

――そんな日々の終わり。

「昔から僕は本当に弱くて……

いえ……今も本当に弱くて、何時も肝心な時に力が及びません。

“あの日”だって、ただ震えて泣く事しか出来ませんでした」

“あの日”……

この間の修学旅行の事件ではなく、彼が心に秘めている事件の事だ。

ネギのいた村に襲撃を掛け、ネギの周りに合った優しいもの達を動かないモノに変え、紅い絶望の直中にいたネギの前に現れ、＜こわいもの＞全てを叩き伏せていった絶対的なヒト。

異形の集団をものともせず……いや、その集団にすら恐れられてしまうほど圧倒的な強さを持っていたそのヒト……

自分にもあの力があれば、あの強さがあれば守る事ができたかもしれない。

せめて一人でも助ける事ができたかもしれない。

“皆”を元に戻せたかもしれない。

思い上がりだと解ってはいても、そう今でも思う事があり、今でも悔やんでしまう事がある。

「けどその人は、僕とお姉ちゃんを助けてくれたあの人は……
僕なんかよりずっと強くて、ずっと高いところにいて、
……ずっと遠い所にいるんです」

自分は弱い。

本当に弱い。

魔法学校を主席で卒業する事は出来たけど、学校で教えてもらった魔法だけではエヴァンジェリンに追いついていけなかったし、魔法無しでは自分の生徒にも敵わない。

現にあの“白い髪の少年”手も足も出なかった。

明日菜や刹那、真名や古や楓の手を借りねば、何一つ出来ず、木乃香を救う事などとてもじゃないが叶わなかっただろう。

だから――

「僕はあの人に少しでも追い付きたい」

だから強くなりたい。

「“この間の事”でよく解りました。
結局僕は、僕だけの力じゃとても強くなれません。
強くなる道にすら及べないんです」

だからこそ、自分が知る者の中で一番強いヒト。

一番強い魔法使いであるエヴァンジェリンに学びたい。

学んで強さを覚えたい。

もっともっと強くなりたい。

あの人のように高く、強くなりたい。

それを欲して止められないのだから。

ネギは語りながら掌を握ったり広げたり。
言葉を見失わないようにしているのか落ち着きがない。

或いは弱い自分に対しての苛立ちかなのもしれない。

目指しているのは遥かな高み――

見えているのに遠い、背中がそこにあるのに高過ぎる壁であり目標。

少しでもそこに近付きたい。追い付いて行きたい。

その想いを抱えたまま、この六年を過ごしてきたのだから……

そんな想いを吐露している。

そんなに親しくも無い横島に吐露している。

その行為が横島に対する攻撃になっているのだと気付く事も無く――

言葉ではなく想いでそれを語る。

正直な言葉にせずに口にする。

自分にない全てのものを持ち、自分じゃ出来なかった事をやって助けてくれたヒトの事。

自分に杖を与えて別れを告げたあのヒトの事。

そしてそのヒトの背をずっと追い続けている事……

「……そっか……」

無論、魔法云々の話は混ざってはいない。

後に一般人のギャラリーがいるのだから口にしてはいない。

何かしらの事故があり、その事故の中で出会い、別れた。その程度の認識しか持つ事は出来ないだろう。

無論、それを願っての事なのだが。

しかし横島には何となく理解が出来ていた。

いや、理解できてしまっていた。

だからネギを見る彼の眼はどこか痛々しいものを見るようで、どこか同情じみていて、

どこか、懐かしそうで……――

尤もそれは、ネギの置かれた環境にではなく、ネギの持っている

……

否、持ってしまった心境。

横島はネギの想いを知り、疵を知り、はぁ……と溜め息をついた。

なんでこんなに……と小さく呟くがそれに気付いた者はいない。

そしてその後に、『まだ抜け出せていねぇんだな……』と呟いた事も。

だがその顔に、横島の顔に僅かの暗さが増した事に気付いた者は若干名いた。

「横島殿……」

「老師……」

「……」

この二人と、

一体の生人形。

使い魔の小鹿はそんな彼の心境が解っているのかいないのか、大人しく見守り続けている。

二人と一体、そして一匹が見守っている中、彼は気を取り直すかのように息を吸い込み、深い溜め息を零す。

『そーゆーコトか……』

という重い確信と共に……

これは全くの勘であり、思い込みと言って良いのかもしれない。

だが、霊能力者である横島の勘はかなりの確率で的中する。

だからこその溜め息であり、だからこその覚悟。

――この子供は、前の自分と同じ様な痛みを持っている。

そして、違う事に目を向けてその痛みから心を守っている――と。

だがそれを教える事は出来ない。

教えるのは簡単であるが、この痛みは自分で理解が出来なければ癒す手立てを見つけられない。

経験から横島は、その事を思い知っていた。

あんな想い――

この歳でこんな目をする子供に、あんな想いをさせたくない。

横島の腹は決まり、決心の眼差しを真っ直ぐネギに向けた。

「……構えろ。ネギ」

「え……？」

す……と腰を落す横島。

今までと纏う空気が変わり、彼に漂っていた軽さが消失している。

何時もの遊び人の気配が完全に見えなくなった。

「これから思いっきり手加減した本気を見せる」

「え……」

その瞬間、ネギは息を飲んだ。

横島の周囲の空気が歪んでいる事に気付いたのだから。

背中にじっとりと汗が湧く。

正体不明の重く鋭い気配が高まって行くからだろう。

「だから……

耐えてみろ」

彼の声と同時に、

――空気が、ピンと張った。

「！？」

武道四天王の三人、楓と古、そして刹那が思わず身体を硬くしてしまう。

言葉の使い方としては変であるが、横島を中心として静寂が広がり始めたとしか言えない現象がその場に発生したのだから当然だろう。

ゆっくりと身構えてゆく横島。

とは言え、腰を落したまま、右手を掌底に構えただけ。

――しかし、“それ”が何か拙い。

三人の少女ら、そして横島と対峙しているネギにはそう感じられた。

勘に従い、慌てて身構えるネギ。

腕をクロスさせ、尚且つ残ったなけなしの魔力を全て前面防御に回し、次に襲い掛かるであろう衝撃に備えた。

これが、ネギが今現在で出せる最高の防御力である。

横島はそれを視認してからゆっくりと掌を前に突き出してゆく。

ネギは当然避けはしない。
耐えろと言われたのだから耐えなきゃいけない。そう感じ取っているのだから。

見守っている少女らは、今までと違った緩慢な動きに安堵の色を見せていた。

が、楓達……
いや彼女らだけではない。エヴァですらそれには怖気が走っていた。

ネギに迫る気配が尋常ではないくらい大きかったからだ。

横島のスペックは異様に高い。
自覚は限りなくゼロであるが、ありとあらゆる状況を能力に覚醒しつつ打破し続けた“能力人外”なのだから。

その反面、基本は全くと言って良いほどできていない。

霊力収束という、人間では殆ど不可能な技を無造作に行えるくせに、基本中の基本である霊力放射等はヘタクソもいいトコなのだ。
多くの霊能力者が普通に行える霊弾発射などコレっぽっちもできなかった。

だがそれでも、霊力収束にかけては人界一なので“こんな事”も出来ている。

文珠を生み出す時の莫大な霊気。
それを本気で纏めようとせず、一般人には見る事すら叶わない緩い収束度で、“綻ばせたまま”ゆっくりと前に押し出してゆく。

彼がＧＳ試験に“臨まされた”時、名をスッカリ忘れているが疵だらけの男と戦った事がある。
その男、後の友人のように霊気の鎧を纏う事ができるのだが、才能が無いのか力が低いのか、霊気を収束し切れずその鎧は曖昧な形をとっていた。
その代わりに、収束しきれない霊気は目に見えない波動となって横島を傷つけたものである。

これはそれと似たようなものだ。

しかし、横島はド器用なので“あの時”の“それ”と違って、雪球のようにきれいに霊気を纏めているので触れたとしても傷ついたりしない（これだけでの件の疵男より才能が抜きん出ている事が解る）。

確かに一般人には何も見えないだろうし、魔法使いであるネギには“そこに何かがある”と認識できるだろう。

あると解っているのなら、それを受ける事も出来なくは無いだろう。

それにゆっくりと突き出しているのでタイミングも取り易い。

真にお優しい行為と言えなくも無いだろう。

だが、忘れてはならないのは武道家である少女らに怖気が走っていた事。

魔法に関係している人間が戦慄するほど、それには存在感があるという事。

つまり……

“それ”は、破砕鉄球が如くとてつもなく重かったのである――

ズ　ン　……　ッッッ！！

「ぐ……っ！？

あ　ぁ　あ　あ　あ　っっっ！！？」

「ネ、ネギくんっ！？」

「吹っ飛ばした！？」

「氣とか――っ！？」

テレビ等が見せる胡散臭い発勁のそれではない。そんな児戯以下のちゃちな代物ではない。

何せやや前かがみの姿勢のまま、ネギのその小さな身体は爪弾かれた小石が如くすっ飛んでいるのだから。

見様によっては通背拳のようにも見えなくもないが、当然それではないし勁でもない。

いや、ある意味“勁”に近いのだが、そんな緩いモノでは無いのだ。

ネギは大容量の霊気の衝突によってふっ飛ばされたのである。

「あ　ぁ　あ　あ　あ　っっっ！！！」

飛ぶ。

その最中足掻く。

足先を石畳に引っ掛けようとするが滑る。

手を着こうにも衝撃に負けてこれも滑る。

薄く積もった砂埃を巻き上げ、石造りの柵まですっ飛ばされてしまう。

「く、あぁあっっ！！！」

「ネギっ！！？？」
「ネギ先生っ！！？？」

背後に迫る石の柵。
叩き付けられれば只では済まない。
思わず茶々丸が動こうとするが、エヴァの腕がそれを遮った。

「く……っ！！」

魔法の防御力を横島の攻撃に使ってしまった為、このままぶつかればダメージはモロに入る。

それが解らぬエヴァではなかろうに、何故に止めるのか。

茶々丸は慌てて主に非難するような目を向けるが、彼女はネギを

見据えたまま。

「わ…ぁあああっ！！」

だんっ！！　と重い音が響く。

ギリギリ。

正にギリギリのタイミング。

ネギの腰は柵に当たったものの、触れた程度でダメージには至っていない。

防御に使った魔力の残り。

その残ったなけ無しの魔力を足に回し、踏み込みをかける時の要領で急ブレーキをかけたのである。

膝をガクガク震わせながらもネギは耐えた。

身を崩さず、倒れていない。

ギリギリではあったが、彼はそれに耐えられたのだ。

魔力の酷使と披露で意識は朦朧としてはいたが、それでも気持ちだけは前を……横島の方を向いている。

そんなネギに対し、

「おめでとさん。お前の勝ちだよ」

という横島の声が掛けられた。

ネギの全身、隅々まで行き渡っている疲労。

その疲労の為か、力が尽きかかっている為なのか、中々その言葉の意味を理解できなかったのであるが……

ようやくその言葉の意味が理解できると遂にネギは意識を手放した。

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊

「ふん……ま、予想通りだな」

「あ、やっぱバレてた？」

「当たり前だバカモノ」

ぶっちゃけて言うと、茶々丸の予想を大きく裏切ってあの試験で横島が勝てる可能性は殆ど無かった。

恐らくネギは終了時間がない事を利用するつもりであったろうが、エヴァはそんなに甘くはない。

とっくにそんな愚策に気付いており、逆にそれを利用する事にしていたのだから。

ネギは横島を倒すしかないが、女子供に底抜けに甘い横島はネギを倒せない。

以前持っていた年齢詐称疑惑が解消されている為、ネギを子供だと理解しているので本気で殴れないのだ。

その上、エヴァによって霊能の使用を禁じられているし、行動範囲も決められている。

となると、横島にネギを倒す方法は無い。

勝つ為にはネギの体力が切れるまで付き合う必要があるのだが、彼が底力で意地を張れば……

どんなにボロボロになろうと立ち上がってきたりすれば、横島の良心はズッキンズッキン痛んで必死に負けようとする事は眼に見えていた。

正に茶番である。

しかし、ならば何故エヴァンジェリンともあろう者がこんな茶番を組んだのかというと……彼女はネギの“ある事”が知りたかったのである。

前述の通り、ネギに魔法を教える事は吝かではない。

寧ろ『悪の魔法使い』の後継者に仕立てても面白かろうと思っているほど。

が、“それ”を知らねば教えられるものも教えられない。

無論、性質の悪い冗談が全く無かった訳ではないが、それでも彼女は彼女なりのマトモな理由でこんな茶番を組んだのである。

「キサマの事だから勝った場合に褒美とかを与えない限り本気は出せまい？」

「う〝っ」

「となると良心の呵責に耐えかね、てきとーに反則負けをする…違うか？」

「うう……お見通しか……」

「解り易過ぎだアホタレめ。呆れたぞ」

例えば、これに勝ったら女子大生を紹介するとか、美人女教師（例えば刀子とか）の生写真を与える。

そんな褒美の話を口にしていれば、恐らく開始五秒以内にネギは失神。二度と師事は望めまい。

とは言え、前述の通りエヴァはネギを鍛え上げてみたいと思っている為、負けたら負けたで『情けない。私が鍛え直してやるからありがたいと思え』とか言って鍛えてやる事も出来る訳であるが、今回の茶番の目的の為にはそんなにあっさりと負けてもらっては困るのだ。

ネギには、
底を見せてもらわねばならなかったのだから……

まぁ、それは兎も角、この状況で横島が勝つにはネギが疲労でぶっ倒れるまでやり続けるしかない。

しかし甘っちょろい横島はボロボロになってまで立ち向かってくるネギに耐えられる訳がない。

となると、自分から円を出るか、攻撃をして負けを曝すしかないのだ。

そんな事はエヴァの想定内の行動であった。

横島の方も、ただ負けるだけではいけないと途中で気付いていた。

何せアレだけの努力家だし、心身共に子供だ。単に自分の負けだと口にしても納得すまいし、ウッカリ続けようとか言いかねない。

どれだけ実力差あろうと、どれだけ経験が不足していようと、“勝ち”を受け入れさせるには（厄介な事に）それだけの材料が必要なのである。

それに、単に『オレの負けていいんじゃね？』と言ったところでブチブチと何かほざきそうだし、そんなコトをすると確実にエヴァがキれる。

そうなると弟子入りはパーになりかねない。それでは何にもなるまい。

だったら手を抜いてはいても横島の力の一端を見せつつ、ネギ自身も達成感が湧くようなコトをする必要がある。

面倒な手段ではあるが、それが一番丸く収まる方法なのだ。

そしてその行為は、エヴァが横島ｖｓネギというカードを組んだもう一つの理由にとっても都合がよかった。

『ふん……やはりガキにカウンターを仕掛ける時にも微かに反応するか……』

自分の器とゆーか、行動原理がバレバレだった為、スッカリいじけてしまった横島を何時もの様に鼻先で笑い飛ばす――フリをしつつ観察を続けているエヴァ。

案の定、横島は試合を始める前より些か気力が落ちていた。

底の浅さを露呈してしまった事も若干あろうが、それより何よりネギに攻撃してしまった事とは別の理由で落ち込んでいると彼女は見て取っていたのである。

『女だけではなく、ガキに攻撃するのも無理なのか？

――いや違うな……一応は仕掛ける事ができている。

となると、別の理由か……』

何だかんだ言って、エヴァは身内には甘い。

ひょっとしたら自覚は無いかもしれないが、結構…いや、かなり甘い。

横島が持っているトラウマを僅かにでも軽減する為には、その根本を探らねばならない。

この茶番は、その一環でもあったのである。

何と難解な好意であろうか。

そんな自分を無様だとでも思ったのか、僅かに照れた顔を段下の少女らに向けた。

ネギは疲労困憊で意識を失ってはいるが、流石は横島。残るようなダメージは入れていない。

ド器用な事だと内心苦笑する。

先ほど微かに意識を取り戻しはしたが、

「合格だよ、ぼーや」

と告げると満足そうにまた意識を失った。

妙に優しげな顔で膝枕をしている事で冷やかしを受けている明日菜。

真正面から横島に挑み、結局は意地を張り通せた事にひたすら感動しているまき絵。

少年のがんばりに改めて感心している刹那。

自分の力で治せへんかなぁ……と思いつつも、邪魔すんのも悪いしなぁ……とヘンな気遣いを掛けている木乃香。

表情こそ殆ど変化を見せていないが、ホッとしているのが解る茶々丸。

そしてそんなネギを労わりつつも結局は茶化すように騒いでいる

少女達。

そんな騒動に苦笑を浮かべ、ま、後は若いモンで勝手にやってろと、エヴァは一人、朝日が覗き出して明るくなり始めた場を後にした。

――しかし、何だかんだで高揚があったからだろう。真横にいた横島の様子に気が付いていない事もあった。

気付いていた者は僅かに三人と小鹿……いや、二人と一体と一匹。

皆が皆してネギを心配し、介抱している中、その者達のみが横島をずっと見つめ続けていたからだ。

行動がバレバレだった事を落ち込み、エヴァの横でガックリと跪いていた“様に見えている”横島の顔は、

エヴァの予想よりも深く、諦めとも後悔ともつかぬ悲しげな表情を浮かべていたのだから――

……そして。

『あの人……』

別の角度にいたからか、それが偶然　目に入り、

『何であんなに悲しそうな顔してるんだろう……？』

ネギを労わる少女らの中で　ただ一人。
ショートカットの少女もそれに気付いていた事も――

後編（後書き）

お疲れさまでした。Ｃｒｏｉｓｓａｎｔです。

ハイ。弟子入り試験（偽）を終わらせました。

ネギを“当時の”原作の流れからこういう性格にしてます。
駆け足で目的に向かい過ぎて遊びがない為に空回り。横っちと大きく違いますね。
表現したかったのはネギのひたむきさと、上手く隠してるけど見え隠れしてしまう横っちの悲しさ。
ベクトルが違うけど、どこか似てる進み方をしてるって風にしたかったんですよね。ネギも“最初は”そーでしたし。
神々という、“絶対に越せない壁”で叩きまくったらマシになるかと思いましてｗｗ

さて、エヴァのもとで修業を始める訳ですが、地位は最下位。
エヴァ＞チャチャゼロ＞かのこ＞別荘の茶々姉ズ＞茶々丸＞楓＆古＞横島＞ネギという位置で、最初は横島のパシリみたいなポジです（哀れ）。

この位置から這い上がる事は不可能ですが、頑張ってもらいましょう。
その苦しさが成長につながると信じて……っっｗｗ

兎も角　修業は開始。
原作よか若干名師匠（“特別な師匠”込み）が多いので強くなれる……かも？

というトコで、訳で続きは見てのお帰りです。
ではでは～

前編（前書き）

時間かかりましたスミマセン。

訳の解らないネギ＝スプリングフィールドの試験から明けて月曜日――

ネギに対し、何時でも稽古をつけてやると明言したエヴァであったが、流石に昨日の今日の学校で言われるとは思わなかった。

無論、まるっきり予想していなかった訳ではないが、流石に早過ぎる。

まぁ、約束したのだから直に行ってやるのが筋と言うものであるが、やっぱり早過ぎる気がしないでもない。

まるで待ち構えていたよーな感じもするし……

ともあれ、

ネギという新たなイケニ……もとい、魔法使いとしての弟子を得た事もあり、横島を鍛える為に使っていた別荘を再メンテさせる事にした。

機械的な仕事ではないので茶々丸ではなく、その“姉”達にメンテナンスを任せたのではあるが、そんな事をさせているので今日は入れない。

とは言っても、何だかウズウズしているエヴァは一日たりとも無

駄にしたくないようで、今後のカリキュラムを組む為には絶対に必要なのだと、何時も横島らが使っているという廃墟にネギを呼び出したのだった。

集まったのはネギを筆頭に彼のクラスの生徒兼、仮契約をした少女達――明日菜にのどかと刹那の三人に加え、ウッカリ事件に関わらされてしまった夕映である。

そしてそのネギらと共に横島らもまたそこに呼び集められていた。

面倒くさがりではあるが、みょーに律儀なエヴァが　ついでに顔合わせも一緒にやろうとしている事がありありと解る。

そしてそんな彼女によって呼び集められた廃墟であるが、荒廃しているわりに妙な“場”の歪みがなく、わりと霊的に澄んでいた為にここで霊力の修行をしていた横島らは見慣れた……と言うか、感じ慣れた場であるが、それなりにこの地に住んでいても来た事がない明日菜や刹那等はへぇ……と妙な関心を持っていたりする。

と言うのも、霊的な修行を行うに当たって、変な浮遊霊等が興味深げによって来ないよう、何時も横島は修行を始める前に場を清めてあるのだ。

よって、歴史ある神社ほどではないにせよ、それなり以上にこの場所は清められていたりする。

尤も――

「……どうでも良いが……なんでここは聖域のように清められてるんだ？」

「は？　いや、楓ちゃん達とよくココ使ってるから、何時も御祓いしてただけなんだけど……」

「……質問だが、その御祓いとやらはナニをしていた？」

「えと……この学園が結界内だから、そんなに丁寧にする必要はないと思ったから……」

「思ったから？」

「普通に軽く反閇（へんばい）で……」

「私らから言えば必要十分以上に丁寧だ！　キサマを基準にするなと何時も言ってるだろう？！　このバカモノが！！」

「ひ、ひぃっ！？　スンマセ――ンっ！！」

その清浄さは横島が基準であった。

当然というか、彼の事を良く知っている所為というか、やり過ぎだとエヴァにゲシゲシ蹴られてしまう横島。

イキナリ蹴られ出した彼を見て理不尽だと思ったのか慌てて止めようとする少女らもいるが、それでも彼の元上司の折檻に比べたらじゃれ合い程度なのだから涙を誘う。

「なぁなぁ、せっちゃん。ヘンバイってなんなん？」

「え？　あ、ああ、反閇ですか？　ええと、反閇というのは……」

反閇（へんばい）は道教の兎歩（うほ）を起源に持つと言われている歩行法で、主に陰陽道で用いられる呪術的歩行の事である。

足を三回運んで一歩とし、合計九回の足捌きでもって“九星”を踏んで行くとされており、その独特な力強い足捌きで足踏みをして、それで悪星を踏み破って吉意を呼び込むという、見ている側からすれば“じれったい歩き方”のお清め儀式歩行だ。

実のところ、兎歩は鬼（式を含む）を召喚する時等に行われる儀式歩行であるが、反閇は場の清めに使われる方が多い。

それそのものは物凄く基本的で大切な歩行法であるのだが、横島の元の世界の方では“地味”という理由で余り行われていなかったりする。

無論、キチンとした手順を踏み、ちゃんと呪を唱えるとかなりの効果が期待できるのだが、よっぽどお金に困ってたりしない限りお札を貼れば結界ができてしまうので余り重宝されていないのだ。

言うまでもなく横島は金が無い方。

何せ下手に呪札を使えば給料から天引きされてしまうというゼニゲバの元にいた彼である。

これ以上給料を減らされれば餓死しかねない横島は、仕方なくちょっと時間は掛かるが反閇を多用していたのだ。

その所為で体が覚えてしまっているのである。

だから足を引き摺るように歩くそれも　こちらの世界の普通の術者よりずっと洗練されているし、尚且つ彼はそれを行っているのは道教の神を見知っている。

韋駄天にとり憑かれて神気を身体に流した事もあり、某魔法使い料理人によって在ってはならない穢れゼロの場も見知らされているし、魔神の放つ魔気や、竜神の放つ竜気までその身で体感しているという『フザケンナ、ゴラァッ！！！』な人生を歩んできた横島忠夫なのである。

この世界で唯一、神々が実在している事を見知っており、その霊波まで体感している人間が悪星をキッチリと踏み潰して行くのだからそれはシャレにならないだろう。

そんな彼が言うところの“それなり”というレベルの清めであるのだから、神々を身近に感じた事のないネギ達にとってはその清らかさ具合は神殿のそれに等しかった。

だからエヴァは、高が反閇程度で彼の認識での“それなり”というレベルまで場を清めている事を呆れ返っているのである。

おまけに、これだけ清められているというのに真祖の吸血鬼であるエヴァに何の障害もないのだ。

腐っても元の世界でも上から数えられる霊能力者という事だろうか？

尤も、彼が本気で清浄結界何ぞ作ったらエラい事になるのは言うまでもないが。

そんな彼に対し、オズオズとしながらも質問を投げかけてしまう

のは好奇心からかもしれないが、仕方のない事であろう。

「あ、あの……あなたがこの結界を作ったんですか？」

「いや、その、結界ってほどじゃ……単に場を清めただけで……」

「そう、ですか……」

「あ、ああ……」

「あの、え、え～と……その、これからよろしくお願いします」

「あ、うん……ま、これからよろしく頼むわ」

別に初対面でもないのに、同じ場に呼び出されて何かギクシャクしているネギと横島。

自分が弱いと思っている部分を吐露した相手である横島に対して恥ずかしそうなネギと、

試験であったし、手加減しまくっていたから何にも悪い事をしていないのに妙な罪悪感を感じている横島。

同じ人物（吸血鬼物？）から学ぶのだから弟弟子という事になるのだろうか。

しかしこれから付き合いが始まるのだが、未だ緊張しているのは如何なものか。

まぁ、傍目にはその光景は妙に対照的であり何か微笑ましくもあるのだが、ちょっと離れて見物してみればベーコンレタス（Ｂａｃｏｎ　Ｌｅｔｔｕｃｅ）なお見合いのよう。

この場に某メガネ少女がいれば鼻息荒げて興奮必至だ。

「ハルナがここにいなくて良かったです……」

「はわ、はわわ……ネギ先生ぇ……」

無論、ギャラリーの少女らにもそう見えなくもなかったり。横島にとっては甚だ屈辱的な感想だろうが。

そんな二人を苦笑しながら見守っているのは楓と古。

……そして、横島の頭に乗っかっているチャチャゼロだ。

彼を想うその心の立ち位置は違うものの、この三人（二人＋一体）の思惑は同じのようで、今の様子を見て内心胸を撫で下ろしていた。

三人が三人とも、昨日の横島の様子に気付いてた為、何だかんだで気を揉んでいたのである。

これでネギが女の子だったらもっとダメージは残っていようが、幸いにしてネギは男の子。

おまけに妙にモテたりする男の敵予備軍だ。

それが幸い（？）してか、彼のダメージは思ったより早く回復し

ているのである。

とはいえ、三人とも楽観視はしていない。

ダメージを受けたという事実がある以上、またぞろ同じ様な傷を負う可能性が高いのだ。

その事が横島に向けられている眼差しに気遣いの色が深められているのである。

だがそれは、傍目にも解ってしまうほどの見つめ様で、

「はぁ～…ふ～ん…ほぉ～…
せやったんかぁ……」

そりゃあもう、木乃香がおもいっきりミョーな笑みを浮かべちゃうくらいに。

何気ないセリフであるのに、声を向けられた二人にはその声音に蛇の舌が纏わり付いて来るイメージを感じさせられている。

楓と古がぎくーんっと身を竦ませたが一歩遅い。

「スゴイなぁ、せっちゃん。
楓もくーちゃんもあの人にラっヴラヴやわぁ」

「ら、らっぶらっぶって……
いや、その……私はなんとも……」

にへらっとした笑いを見せながら、木乃香はやっと隣という距離を取り戻せた刹那に話し掛けた。

無論、大切な友達との仲を取り戻せた事は嬉しいのだが、イキナリ距離が戻った事による照れと、そーゆー話が得意ではない事もあってか刹那はまだちょっと硬い。
それでも離れないのは大進歩だろうけど。

「ら、らう〝らう〟って……せ、拙者は別に……」

否定っポイ事を言おうとした楓であるが、素っ頓狂に声が上擦っていたし、頬もやや薄桃に染まってたりする。
そんなモンだから、すればするほどドツボだった。

木乃香と楓のやりとりを見、逸早く勘に従って楓から距離をとって知らんぷり戦法をとった古の行動はおそらく正解。

口に出すより何より、逸早く逃亡している古ですら真っ赤なのだ。
ナニか言われたら即効で身体とかが反応し、自分までもボロを出しかねない。

動物的直観に従ったすんばらしい反応速度での撤退であった。

その他人事をかます様は見事な物で、助けを求めるかのように振り返った楓が『ああ、ズルイでござるっ！』と口の中で訴えたほど。
オロオロすればするほど肯定している事に気付けていないのは残念だ。

当然のように、木乃香は天使の顔で悪魔っぽくニタリとしているし。

「ふえ？　何なん？　楓は横島さんの事嫌いなん？」

「え゛？！　い、いや、拙者は横島殿の事を嫌ってなど……」

「ふ～ん……せやったら、側におったらどんな気持ちになるんえ？」

「あ゛っ！？　え、いや……」

「ドキドキするん？」

「あ゛～～～～う゛～～～～……」

やんわりと追い詰めて行く木乃香。

刹那としては、気の毒な楓の為に止めてやりたい気もしないでもないのであるが……何というか、下手に止めたら何処からか飛んできた弾丸にヘッドショットを極められそうな予感がして今一歩前に出られない。

何でそんな予感がするのか定かではないが、稽古用にエヴァが仕掛けている結界のギリギリ外からスコープで見つめられているよーな気がするのだ。
それに実のところ、自分だってちょっと興味があったりする……

「う～ん……せやったら別に答えんでええよー
無理に言わせても碌な事にならへんしー」

「か、忝い……」

しかし意外にもアッサリと木乃香は退いていた。
ちょっと驚いてしまい、刹那も思わず意識を楓らに戻してしまう。
目に入るのは追求を止めてもらえて安堵している彼女の顔。
実に真っ赤っ赤で、流石の艶っぽい話に疎い刹那でもそこに潜んでいる想いが解ってしまうほど。

つーか、この場にいる全員（男二名は除く）にバレバレだったりする。

周囲の生あたたかい視線に気付けていない“おめでたい”楓は、木乃香が追及の手を止めてくれた事に安堵し、ほっと“気を緩めてしまった”。

その瞬間――

「ほな、楓は横島さんの事、どないに想とるん？」

虚を突かれ、ぶふぅ――っ　と、盛大にナニかを噴いてしまう楓。

安堵の溜め息を吐いている途中だったので、肺から全ての空気が出し切ってしまい、切迫呼吸に陥ってしまう。

ガハゲへぶふォッ！！　と呼吸を乱しまくって悶えている様子は無様の一言であるが、如何なる場面でも自分のペースを全く崩さない飄々とした楓がここまでコワるレア過ぎるシーンは、呆れよりも前に感動に近いものがあった。

この場に和美がいれば狂喜してシャッターを切っていた事だろう。

「うおっ！？　楓ちゃん、どうかしたのか？！」

「楓さん？」

当然ながらそんなに咽ているのだから、場の空気から蚊帳の外状態になっていた横島らも気付いてこちらに駆けて来る。

どれだけ距離が有ろうと自分の異常に気付いて心配して駆けつけ

てくれるのはごっつ嬉しい。いや、ホントに。

こちらを見ていなくとも、ずっと気遣ってくれている。その事が自分の中で何かを疼かせてくる。

それがくすぐったくて、あたたかくて、そのこと自体は堪らないと言える。

――が、それも時と場合によるだろう。

よりにもよって、こんなに注目されてる時に来なくとも良いではござらんか。

楓は別の意味でちょっと涙ぐんでしまった。

「へへぇ～　横島さんって楓さんや古のこと、そないに気にしとんやねぇ……」

「？　女の子心配すんのは当たり前やろ？」

だ、大丈夫でござると言いつつもまだ咽ている楓の背を、おもっきり何気なく擦ってやりつつそんな事をのたまう横島。

それがまた楓を咽させる事になるのだが、木乃香と話をしているので気付けていなかったりする。

そしてその木乃香。

横島の即答に一瞬面食らっていたのであるが、自然にそう答えた彼に対しての好感度がまた上がったのか、笑みが深まっていた。
尤も、その笑みを見て楓や古は戦慄してたりするのだが……

今更言うまでもない事であるが、木乃香は単に二人をからかう為だけにそんな事を言っているのではない。

楓や古は自分を助ける為に力を貸してくれ、横島は更に刹那との仲がギクシャクしていた時に元気付けてくれた上に後押しもしてくれている。
その恩返しをしようとしているだけなのだ。

全くもってよけーなお世話という気がしないでもないが、彼女はけっこー真面目にその仲を応援していたりする。

ただ、このままでは楓・古×横島という二対一の『コレって倫理的にヤヴァくね？』なカップリングになってしまう事を全く気にしていないだけで。

このままでは横島はロリハーレムを築いてしまうかもしれない。
そして哀れ楓と古という二人の少女が、そこに引き入れられてしまうかもしれない。

危うし、美少女二人の未来（横島は今更である）！！

しかし神は、意外に所から助け舟を入れさせた。

「何時まで遊んでいる気だ？
そろそろ始めるぞ。横島、とっととこっちに来い。木乃香も早く」

今日から修行を始めてやろうとしているエヴァである。

「あ、ああ……」

木乃香の笑みに、何やら崖っぷちに追い詰められかかっていたよーな錯覚を起こしていた為であろうか、何だかホッとして楓の手を引いてエヴァの元に駆けて行く横島。

その、“手を繋いで歩く”という行為を余りにさり気無くやった事から、二人の仲をほほぅ…と確信（？）する木乃香と白オコジョがいたりするし、『出遅れたアル！！』と悔やむバカイエローがいたりするがそれは兎も角。

特に白オコジョは人の好意を推し量るイヤ過ぎる能力がある為、ニヤニヤし切り。どの程度の好感度かは口にしていないから不明であるが。

ひょっとしたら未だ修学旅行中に怯えさせられた恨みを持っていて、その意趣返しのチャンスを待っているのかもしれない。

無論、下手にそーゆー復讐をしようとすると必然的に横島が巻き

込まれてしまって、とんでもなくタイヘンな反撃を受けてエライ目に遭ってしまうであるが……

兎も角、ビミョーに気が抜けた空気の中、本格的な修行が始まろうとしていた。

「エヴァちゃんのイケズ～」

「ふん……くだらんな……

ああいった手合いはもっと時間をかけてからかうのが面白いと何故解らん？」

■十七時間目：漢のキモチ♂

（前）

「契約執行　１８０秒間！」

魔法発動体である何時もの杖とカードを持ち、魔力を高めてそのカードに注ぎ込んで行く。

ネギが手にしているパクティオーカードは、術者と契約者（仮ではあるが）とを繋ぐものだ。

だから当然、こんな事もできる。

「ネギの従者、宮崎のどか
神楽坂明日菜
桜咲刹那」

カードを通して契約を結んだ少女たちに力が送り込まれて行く。

契約執行とは、魔法契約を結んだ事により、術者の魔力を契約者に回して強化する事ができる機能の事である。

『機能』と言うのは国語的な言葉使いとしてはヘンだと思われるだろうが、本当にカードの持つ機能なのだからしょうがない。

兎も角、ネギは少女らに魔力を流し込みつつそれを維持し続けていた。

「……老師……ナニ顔赤くしてるアルか？」

「き、気のせいだよ……」

ただ、魔力を注がれている少女らは、魔力を注がれた瞬間、ぴくんぴくんと抱擁でもされているかのような艶っぽい声を漏らしている。

魔力が伝わっている間中そんなくすぐったいような感触が続くの

だろうか、その間中頬を染めてたり喘ぎにもにた小さな声を漏らしたりしているので、何と言うか……ちょっとエッチっぽい。

そんなピンクボイスを漏らすのがこの学園でも上位に位置する美少女達だ。そんな四人がそーゆー感じになっちゃっているので、何時の間にやらジャスティスが行方不明（笑）になっている横島の精神防御値はかなり低くて抵抗し辛かったりする。

お陰で古はジト目で睨んでいるし、楓は無表情だけど何か　ムーン…ムーン…　と怪奇な波動を放ってて怖過ぎる。

頭の上にいるチャチャゼロからも何か黒いオーラを漏れ出してるしで散々だ。

横島的に言えば『オレが何したっちゅーんやっ！！』というトコであろうか。いや、実のところ自業自得なのであるが。

「よし次。
対物・魔法障壁　全方位全力展開」

「ハイ！」

無論、エヴァはそんなアホらしい修羅場手前の光景など“今はまだ”シカトである。

ネギの様子を目に入れているのかいないのか、エヴァは自分の従者である茶々丸が用意した椅子に腰をかけ、白い木材を削りながら指示を出していた。

ただの木材だったその丸太を見事な刃物の扱いで曲線を持たせながら命令を下す彼女であるが、片手間に見えなくもないそんな所作でも見下されたという気にならないのが不思議である。

普通はそんな片手間のように言われれば腹の一つも立とうというもの。

しかし一度は勝てた相手であるが、実際には魔法使いとしての差は歴然。

腹が立たないのは、彼女の真の実力を理解しているからかもしれない。

それにエヴァは無視しているのではなく、自分のすべき事をしながらもきちんとネギの波動を感知しながら指示を出している。

彼女から言えば基本中の基本レベルなのだから凝視する必要もない。だからこのように“感知”だけで事が足りるのだ。

しかし、実のところネギがやらされているのは結構レベルが高い制御法で、普通ならこの歳でやらせる事ではない。

できる方もできる方だという説も無い訳ではないが、一方でかなり強力な魔力供給を行わせつつ、もう一方でも魔力を操るというのは、普通はこの年齢でそうそうできる事ではない。。

まぁ、魔法国のエリートクラスならできるかもしれないが。

「――次。

対魔・魔法障壁　全方位全力展開」

「ハイ！」

僅か十歳の子供相手に更に無茶な飛ばすエヴァであるが、それについて来るネギもネギである。

残っている魔力を更に掬い上げてそれに回す。基本中の基本とは言え、やはりこの年齢で易々とできる事ではない。
それでもまだ余力がありそうなのは流石と言えよう。

しかし無茶をしている事に変わりはない。

魔力供給が初めてではない明日菜にはそれを感じ取れているのだろうか、チラリと心配そうな眼差しをネギに送っていた。

「そのまま3分持ちこたえた後、北の空へ魔法の射手１９９本。結界は私が上掛けして張ってあるから遠慮せずやれ」

「　うぐ……ハ、ハイ！」

それでも魔力の容量には限界がある。

――いや、正確に言えば魔力の効率には慣れがいる……が、正しいだろう。

「光の精霊１９９柱
舞い降りて敵を射て！」

息を荒げつつも片方で供給を維持し、もう一方で魔法を紡ぐ。

キュバッ！！

精霊に力を借り、発動させた魔法の矢……数にして１９９本が少年の手から放たれ、ほぼ真っ直ぐに北の空へと飛んでゆく。

無論、予め結界が張られているので、その壁面に衝突して爆発するように霧散してしまう。

「おお――」

「スッゲぇなぁ……」

「ふーむ」

主の凄さを見知っているので余り驚きはないチャチャゼロは兎も角、横島や楓らは大いに感心していた。

横島はもっと凄い物を知ってはいるが、ネギのような子供がこのレベルの魔法を使うのはやはり驚きがあったのだろう。

「これが魔法…ですか」

『まーな』

夕映は改めて見た魔法に只ぼぅっとしてしまう。
その存在を頭で解っていたつもりでも、こうやって見ると感心や感動が再燃してくる。
やはり聞くだけの知識より、目で見て吸収する物の方が一入なのだろう。

そんな彼女の肩の上で、別にカモがやった事ではないのに彼が何か偉そうなのはご愛嬌だ。

「おー」

「キレー」

従者三人娘の方もただ見とれるのみ。
尤も、相変わらず非常識な力だと明日菜だけは呆れていたが。
引っ込み思案である　のどかの方がすんなり受け入れているのが意外である。

そんな少女らの前で魔法を放った姿のまま固まっていたネギであったが――

「あうう?」

「せんせーっ？！」

「ネギくーーんっ！！」

へろりと身体をふらつかせたかと思うと、バタンプーとぶっ倒れて気を失ってしまった。

そうーー

先ほど述べたようにネギはまだ使用効率に慣れていない。

よって按配が解っておらず、完全には魔法を使いこなせなかった為、魔力がスッカラカンになって気絶してしまったのだ。

ーーま、こんなものか……な。

予想通りの展開だったので呆れも驚きもないエヴァであったが、その表情に変化はない。

しかしその実、あわててネギを介抱する従者娘らを尻目に、魔力の基礎から徹底的に作り上げてやるかと内心ほくそ笑んでいた。

「この程度で気絶とは話にならんな。
いくら親譲りの強大な魔力があったとしても、使いこなせなければ宝の持ち腐れだ」

先ほどと同じく椅子に腰をかけて作業を続けたままそう酷評する女王様……もとい、エヴァ。

ただま木材だったその丸太に見事な曲線を持たせながら下す評価であるが、やはり見下されたという気にならないのが不思議である。

口から紡がれるのは歴然とした事実だけにどうしようもないし。

しかし、カモはご不満なのか、眉を顰めて口を開いた。

『よーよー
エヴァンジェリンさんよぉ、そりゃ言い過ぎだろ？
兄貴は１０歳だぜ？
三人同時契約３分＋魔法の矢１９９本なんて修学旅行の戦い以上の魔力消費じゃねーか。

気絶して当然だぜ。並の術者だったらコレでも十分……』

耳で聞くだけなら単なる過小評価。
ネギの弟分を自称するカモはそうやって弁護するのだが……

「囀（さえず）るな下等生物。
私は自分の弟子と話をしている」

『ひぃ……っ』

当然、一睨みで撃沈である。

「だいたい『並の術者』だぁ？
この私の弟子ともあろう者が並の術者程度で良いとでも思っているのか？
余りふざけた事をぬかすと引き裂いてワインビネガーに漬け込むぞ」

もはや呻き声すら出せない。
完全に腰を抜かし、声も出せずガクブル状態で明日菜にしがみ付いていた。

よしよし怖かったねと苦笑して撫でている明日菜は並の心臓ではない。

しかし、カモは過小評価だと受け取ったようであるが、さっきから述べているように別に彼女はネギを下に評価している訳ではない。

ネギが目指している彼方――

彼の父親。
魔法界の英雄“サウザンドマスター”ナギ＝スプリングフィール

ドはこの歳でこの程度の事ができていたのである。

実のところナギは使いこなせる魔法の数は数個しかない。

だというのに英雄として名を馳せていたのは、其々の出力やコントロールが他の追従を許さないからだ。

まぁ、ネギの場合は強力な魔法の使用を控えていた所為で、高い出力の魔力の放出に慣れていない事も理由の一つに挙げられるのだが……

それでもネギが目指す地平は余りに遠い――

だからこそエヴァは淡々と事実を述べ、正直にその距離を教えてやったに過ぎないのである。

それに、ネギはかなり運が良いのだ。

横島という虐め……もとい、鍛え甲斐のある怪人（下僕）を得た事で結構角が取れているエヴァであるからこの程度の小言で済んでいるのだし、何よりもその当人であるエヴァに弟子にしてもらえているのだ。

この世界でも数少ない大戦期を知る魔法の使い手。

『真祖の吸血鬼』『闇の福音』『人形使い』等と数多くの異名（悪名？）を持つ大魔法使いエヴァンジェリン＝アタナシア＝キティ＝マクダウェル。

その伝説の少女に魔法を習えるのだ。

そこらの“正しい魔法使い”とやらでは考えられない程の“待遇”である。高みを目指す魔法使いにとってこれ以上の幸運はなかろ

う。

まぁ、相当“苦労”はしそうであるが……

「解るな？　ぼーや。
キサマは私の弟子となった。だからこそこの程度でへこたれる事は許さん」

――しかし、そうでなければ鍛え甲斐がない。

「泣き言をほざく事は許そう。
いくらでも泣き喚くがいい。聞き入れるつもりは欠片ほどもないがな」

先輩である横島が散々泣き喚いているのを笑っているエヴァなのだ。

１２０％ほど生命の危機に陥った人間の泣き言は真に迫って面白いと言える。

だが、それでも彼は、
そんな目に遭わされていても彼は立ち上がってきていた。

「だが、足を止める事は許さん。踏み止まる事もな。
私の弟子となった以上は停滞は不可だ。
如何な回り道をしようが弛まず進み続けろ」

どれだけ詰られ様と踏まれ様と体力の限界が来ようと、足をふらつかせつつも立ち上がるその害虫の如きしぶとさ。

歩みは決して速いとはいえないのに、這いつくばってでも前に進んで行く訳の解らない底意地。

それを持つ者を知ってしまったが故の寛大さが今の彼女には有った。

「解ったな？　ぼーや……」

だからこそ、じっくりとこの弟子の未来を見据えられている。

この地に自分を縛りつけた憎き“奴”。

ずっとずっと心から追い求めている“奴”の位置まで自分の手で叩き上げられる日を――

「ハ、ハイ！　マスター！！」

問い掛けに答えるように身を起こし、片膝をついて師弟の礼をとり元気よく答えるネギ。

純真無垢で真っ直ぐなその眼差しは、長く陰に生きてきたエヴァ

には眩しく感じてしまう。

それでも少年のその答えに満足そうに頷き、手を休めていた作業を再開する。

“こちら”も急がなくてはならないのだから。

「そー言えばさ、エヴァちゃん。さっきからずっとナニ作ってんの？」

一応の区切りを感じたか、人心地付いた明日菜がさっきから聞きたかった事を口にした。

デスマに入ったハルナを知っているが、あそこまで焦った風でもない様なのだが、一分一秒も無駄にしたくないとでも言わんばかりに、ずっと集中しつつナイフで細かく木を削っている。

皆口には出さなかったものの、その事はずっと気になっていた。

「……あぁ、コレか？　気にするな」

だが、女王様はにべも無い。

「気にするなったって……」

「何れ解るさ。
一週間ほど待てば否が応でも目にする事になるだろうがな……」

何が面白いのかクククと笑いつつも手を止めず削り続けるエヴァ。

頑固とかではなく、面白がって言わない事を感じ取った明日菜はそれ以上問う事を諦めた。

しつこく聞けば怒り出すだろうし、何より意地になって話さなくなる可能性も高いのだ。

バカレッド等と謳われている彼女であるが、そう言った判断だけは良かったりする。

＊＊＊＊＊＊＊　　＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊

「う～ん……バカレッドがハリセン、本屋ちゃんが日記帳アルか……
アレ？　じゃあ刹那は何アル？」
「私か？　私は……」
別に続きを促す事もしていないし、一応はネギの今の実力を見知る事が出来たのでここまでなのだろう。
その空気を感じたのか、少女らは目前で目にした魔法に付いてきゃいきゃいと語り合っている。
そんな中、気になっていたのだろうか、古が刹那にそんな事を問い掛けていた。
刹那も、そう言えば他人に見せてはいなかったなと気が付いて、周囲の期待の眼差しにも押され、カードを取り出してワードを唱える。
「Ａｄｅａｔ」
カードが一瞬の輝きを見せた後、刹那のその手に現れたのは二本の剣。
刃渡り２０ｃｍ弱。鍔の無い短刀のような物だった。
「おー！！　匕首（ビーショウ）アルか！？」

「いや、あいくちだ。
匕首（シーカ）・十六串呂（シシクシロ）。これが私のアーティファクトの名だ」

発音が違うので別モノのようであるが、漢字は同じで読み方が違うだけである。

しかし、その使い方は匕首（あいくち）というより両刃の短刀、匕首（ビーショウ）が近いらしく、最大十六本同時に出現させて操り、投擲したり相手の動きを封じたりして使うらしい。
そして“いろは”順に名付けられたそれらを適数取り出して使う事もできるとの事。

長物を持ち込めない室内等では重宝するだろう。実に刹那向きのアーティファクトといえる。
蛇足だが、“あいくち”とは鍔（つば）の無い柄と鞘がぴたりと合わさって口が合うことから来ているので、正確には鞘の無いこのアーティファクトは“あいくち”ではないだろう。

「ふーむ……咄嗟の場合に直に取り出して近い間合いに対応できるアルな。
攻撃を防いだり、投げて牽制に使たりできるし……刹那にうてつけアル」

「ああ……
それに術を織り交ぜる事もできるようだし……正直言ってかなり助かる」

陰陽術を使うものは、護法刀を使って印を結んだり結界を張ったりする事があるらしい。

元々が関西呪術協会出の彼女だからそういった使い方もできるのだろう。

正に彼女にとってうってつけのアーティファクトと言えよう。

「Ｔ－Ｌｉｎｋ　〇ールドみたいな使い方アルな」

「何だそれは」

ちょっと違う。

「そう言えば、古も何か使っていたな。
何というか……扇子のようなトンファーのような……」

ふと思い出したのはあの晩使っていたあの武器。

圧倒的な質量をものともせず、式神の鉄棍棒を受け止めていた謎の武具。

確かに古の実力だけでも受けられはするだろうが、その質量差は如何ともし難い。

だからそういった打撃は受け流すのが常なのであるが……

『あの時は“受け止めて”いた』

――のである。

刹那の脳裏に浮かぶのは、大きく広げた扇子状の部分で月詠の使う神鳴流の剣や、式が使っていた鉄棍棒の打撃衝撃等を完全に殺していた古の姿。

あの時は状況が状況だった為、然程気にならなかったのであるが……よく考えてみれば、重量差をものともせず受け止められるのならとんでもない能力である。

「あれ～？　くーふぇも何かもっとるん？」

「アラ？　言てなかたアルか？　私は老師と契約結んでるアルよ。つ　い　で　に　楓　も」

え　ぇ？！　古と楓の二人と!?

そう古の言葉に全員の目が、ザッ！！　っと一斉に横島に向けられた。

当の本人は、何処から出してきたのか不明であるが、ハイキング等で使うカラフルなビニールシートを敷き、その上に座って古が持

って来てくれている＜超包子＞の中華まんを楓と共にパクつき、かのこはその横で桃の実をちょこちょこ齧っていていた見物モード。

こう言ったものの準備は今までの修行で慣れたものなのであるが、初めて見た者達からすればデート用の準備にしか見えない（あながち間違いでもないのだが……）。使っているのは古ではないという何点もあるが。

アンタ、ナニヤッテンダ的な視線にギョッと驚いて中華まんを喉に詰め、苦しんでいる横島に楓がいそいそとお茶を飲ませているのがまた誤解（理解？）を深めてたりする。

夕映以外の全員、結果的に仮契約を知ってしまっている為、契約時に何をするのか理解している。

よってジョシチューガクセーに“そーゆーコト”をかましている横島に対する眼差しは冷ややかだった。

「……何だと？」

だが、その言葉に対してかなり遅れて反応した者もいる。

「キサマら、横島と契約を結んでいたのか？」

「ま、まぁ一応……」

その話は初耳であったエヴァが楓にそう確認してみると、彼女は何だか頬を染めて肯定。

古もコクリと頷いて見せた。

横島だけが首をかしげているが、これは仕方の無い話だろう。

「何で張本人のキサマが自信なさげなんだ？」

「いや、そー言われても……オレ、契約なんかしとらんぞ。どーなってんだ？」

何せ儀式等を行った覚えがないのでやる。

だからそう何気なく否定して横島であったが……

「「「「な……っ！！　さ、　最　低　ぇ　ーっ！！」」」」

「ぬひょおっ！？」

周囲の反応はそんな呑気な彼の心境を完全にぶち壊した。

責めるというか、責任追求の色バリバリの怒声に思わず珍妙な声を上げてコケてしまう。

「アンタ！！　仮にも楓さんと古と契約結んだんでしょう！？だったらナニすっ惚けてんのよ！！」

「え〝え〝え〝っ!!??」

「アカンやん、ちゃんと責任とらな!!　オンナノコ傷モノにして放っとくや最低やで!?」

「う、え、き、キズモノ??!!」

ナニが何だか解っていない様子の横島であったが、それにも構わず明日菜と木乃香が詰め寄って行く。

当然、横島は大困惑であるが無視だ。

「確かに非常時でしたが、“無かった事”にするのは人としてどうでしょう?
仮にも共闘させたのでしょう?　それでも平気なんですか?」

「は?　いや、ちょっと、あの……」

「外野から口を挟むまいと思っておりましたが、貴方のそう言った態度には不快を感じるです。
年端もいかない少女二人を巻き込んで知らぬふりを決め込むのは人として間違ってるです」

「い、いや、ワイは……ワイはぁ……」

刹那ですら珍しく、契約方法を知らぬ夕映のでもが彼を責めていた。

いや、木乃香も怒っていたし、ムードメーカーの明日菜がいるから、二人ともそう言った場の空気にウッカリ乗せられてしまったのかもしれない。

横島は哀れなほどおたつき、救いを求めるように視線をあちこちに向けていた。

ふと目に入ったのは大人しいのどかの姿。

大人しい筈なのにミニスカートはどういう訳かは不明であるが、それは兎も角として、彼女ならばと救援を求める眼差しを向けるのだが……

「そ、そーゆーのは間違ってると思います」

彼女すら何か責めてくださっていた。

こういった少女の純粋な怒りの眼差し、責任を問い詰める視線は横島にとっては深手以外の何物でもない。

そしてそんな時、自分を見つめている視線にハッと気付く。

何やら背後から自分を見つめている二対の眼差しがあるではないか。

言うまでもなく自分の契約者だという件の二人。

あの二人の視線までも自分を責めているような気になってきている。

『横島殿……拙者との契約を忘れてしまったでござるか……？』

『ろ、老師……そんなの酷いアル……』

『ぴぃ～……』

幻聴まで聞こえてきた。

何故かかのこにサイテー…と呟かれているよーな気もしてくるし。

実際の二人は契約の時の騒動を思い出し、何か頬を染めて赤くなって俯いてるだけであるし、小鹿は小鹿でどーしたの？　と首を傾げているだけなのだが、プリンの様に脆いハートにダメージを受けている彼がそんな事に気付く由も無い。

「ぬぉおおおっ！？

ワイは、ワイは最低やったんか！？

美少女と契約を結んだ挙句、その事を記憶からすっ飛ばしてしまう外道やったんか！？

ひょっとしてワイではないワイがそうさせたんか！？　オノレ、ワイの中のオレめっ！！！」

何だかよく解っていないのだが、地面にヘッドバットしつつ自分を奇怪に責めていた。

頭を抱えて悶えて転がる横島を見る皆の眼は飽く迄も生あたたかい。

この期に及んでまだ自己弁護するのかと言わんばかりだ。

契約という行為の重さに気付いていないのか、どう言ってフォローすれば良いか思いもつかないネギはただオロオロするだけ。そしてそんな彼をどうフォローしてやろうか思い付けず茶々丸もオロオロ。

本来であれば場を執り成してくれる筈の楓や古は何か自分の世界に浸ってイヤンイヤンとくねくねしてるし……何というかこのカオスな状況は如何ともし難いと思われる。

しかし、彼を責めてはいけない。

横島が覚えていないのも当然なのだから。

「まぁ、待てお前ら」

そんな彼を救ったのは、非常に珍しい事であるが……エヴァだった。

「言いたい事も解らんでもないがな……

しかしお前らも知らぬ事とはいえ、コイツの事をそこまで見損

なわない方がいいぞ？」

言ってしまった手前、後悔するだろうしな……と後を続けるエヴァ。

何の事か解らない少女らの頭の上には、当然のようにサッパリ妖精が舞っている。

「へ……？」

代表するかのようにマヌケっぽい声を漏らす明日菜に苦笑しつつ、今だゴロゴロ転がっている横島に歩み寄って行くと、

ぷぎゅるっ

「ぐべっ！！？？」

徐にその頭に足を振り下ろした。

これだけゴロゴロ転がっているにも関わらずチャチャゼロを頭から落していない器用さに呆れつつ、横島の頭を踏みつけたままグリグリと踏み躙る。

「い〝痛〟痛〟痛〟痛〟痛〟痛〟痛〟痛〟ぁっっ！！」

言うまでも無いがチャチャゼロは踏んでいない。
それでも何故か、この長い付き合いの下僕が自分を責めるような眼で見てたりするがそれは苦笑で返す。

横島は踏みにじられた痛みで多少は落ち着けたらしい。

自分を踏み躙る人物をチラリと見上げ、思わず『黒……』と謎のセリフを口にしそうになるが、奇跡的に飲み込めた。命冥加な男である。

それでも涙目は相変わらずで、みっともない事この上もない。

「くぅうう～～……な、何やキティちゃん。この心汚いオレになんぞ用か？」

何とも卑屈になった物である。

「ええい、泣くな！　うっとうしいっ！！」

「せやかて、せやかて……えっぐえっぐ」

思いっきり不快そうな顔をするエヴァであるが、溜め息と共にそれを我慢して聞きたかった事を何とか口に出す。

「キサマ、仮契約の方法を知っているのか？」

「ぐすん……い、いや、知らへんけど……」

「「「は？」」」

ああ、やっぱりな……というエヴァであったが、彼女達にとってコレはけっこう意外だったらしい。

というのも、彼女らの認識では横島は裏の世界（魔法の世界）の人間である。

西洋魔法について直接的な知識を持たない刹那ですら『魔法使いには従者がいる』程度の知識はあったし、仮契約の方法もこの前“体感”して知った。

だから、まさかあれだけの戦いができる横島が魔法使いに対する知識がド素人であり、従者という存在と仮契約という名前は知っているが、その契約方法は全然知らない等とは思い付きもしなかったのである。

尚且つ明日菜らは素人であり、仮契約とは魔法使いと接吻（くちづけ）をして契約を結ぶものという認識以外はない。

よって横島の事を『女の子のオイシイとこだけ頂いてポイ捨てし

た最低人間』だと思ってしまったわけである。

落ち着いて話を聞けば、横島は楓らと契約を結ぶ約束はしたのであるが、それがどういったものか全く解らないとのこと。

それも当然で、二人は横島を騙し討ちで仮契約を結んでいたし、彼は古が宴の可盃を使っているのは目の端で見ただけでアーティファクトだと気付いていなかった。

いや、そもそも彼は＜従者契約＞どころかアーティファクトが何であるかすら理解できてなかったりする。

「「「……ゴメンナサイ」」」

「えっぐ、えっぐ……ふぇ？」

騒動は散々起こすが根っ子はとても良い子な３－Ａの少女ら。

自分が明後日の方向を向いた盛大な勘違いで彼を責めていた事に気付くと、彼女らは揃って弾かれたように頭を下げた。

イキナリ罵られるわ、イキナリ謝られるわで何が何だかサッパリサッパリであったが、少女らと共にカモや楓と古までもが説明に混ざって彼にその理由を語ると、やっとこさ横島も少女らの激昂の理由を知るに至った。

「はぁあああ～……って、コトはナニか？

楓ちゃんと古ちゃんにキスした挙句、美味しかったご馳走様～で終わらせた女の敵だと思われとったっちゅー事か……」

「あうう……ゴメンナサイ」

しおしおと小さくなる明日菜。最初に激昂して周りを勢い付かせたのだから当然かもしれない。

それに実のところ、彼女は横島の事を余り良く思っていなかったのだ。

妙なところで生真面目な彼女は、修学旅行の時に家族がいなくなった子供という嘘を吐いて自分らと行動を共にし、表立ってネギを手助けしてくれていなかったし、試験の晩にもネギを散々痛めつけ（注：明日菜視点）ていて謝っていない横島に対する印象がかなり悪いのである。

無論、その事がかなりネギ贔屓の心配である事も理解している。

理解してはいるのだが、何と言うか……理屈の外の感情がまだ治まっていなかったりするのだ。

しかし神楽坂明日菜という少女は、成績こそスーパーアンダークラスに悪いが聡くない訳ではない。

落ち着いて楓らから説明を受け、本当はかなりしゃしゃり出て助けようとしてくれていた事を知り、昨晩横島がどれだけ手を抜いてくれていたかを武道四天王の三人から説明を受けると直にクールダ

ウンする事ができ、素直に頭を下げて謝る事ができていた。
尤も、本人はかなり意地っ張りなところがあるので切っ掛けを待っていた節もあるが……

「あー……いや、細かく説明を受けてなかったら当然だと思うからもういいよ。
それに、オレだってその仮契約ってヤツを詳しく聞いてなかったんだから、こっちだって悪いし」

「あ、ウン。その……本当にごめんなさい！」

「ええって」

横島は苦笑して明日菜を止めた。

はっきり言って、明日菜のようなタイプの扱いには異様に慣れている。
怒らせるツボも踏めるが、沈めさせるコツも知っているのである。

「それだけネギが心配だったんだろうし、友達の事も心配してたんだろ？
それを計り損なってるオレが悪いさ。フォローがきちんと出来てなかったしな。

どっちかっちゅーたら美少女に頭下げられる方がキツイ。
ホンマに悪い思うんやったら、頭下げるんはもう止めて」

「あ、えと……ウン、解った」

「ん」

明日菜が頭を下げるのを止めると、横島はニカっと笑ってそれを喜んだ。

何だか悪戯っ子のような笑みであるが、それがまたどういう訳か彼に良く似合っている。

大人の男にしか興味が無い筈の明日菜ですら、ちょっと照れてしまう程に。

「ぬ……」

「ム……」

その代わり、何か楓と古が不機嫌ぽくなったが……

「ま、明日菜ちゃん達の方はこれで手打ちな。だから頭下げるんはもー勘弁。

オレを責めたんかて楓ちゃんと古ちゃんの事を本気で心配しての事だろーから不可抗力だと思うし」

そう言った美女美少女に対する気遣いだけは人に自慢できる横島

だ。

明日菜が謝罪した時点で直様彼女らの心境を読み取り、彼女らが何に腹を立てていたのか理解していた。

それに、自分の間違いを素直に認めている美少女にこれ以上謝罪させるのは胸が痛過ぎる。

確かに責められはしたし、ひ弱過ぎる良心は未だ痛みを訴えているのだが、それに比べたらとっとと許す方が一億倍はマシである。

とは言え、責められた痛みが収まった訳ではない。

ひ弱なハートは未だズキズキ痛むのだから。

つまりは……

「となると責任問題が湧いてくるのは……

テメェだよな、クソオコジョ……」

『ひぃいいいい――っ!?　アッシですかいっ!!??』

哀れな子羊（スケープゴート）が必要であった。

ものごっつ怖いオーラを浴びせつけられ、カモは腰を抜かして明日菜の肩からポトリと落下。

怒れる横島は鬼のようなオーラを放ちつつ、彼にじりじりと迫って行った。

「あったりまえだろが！！
テメェがあっさりネギの周りを巻き込んだのが悪いんやろーがっ！！」

『ひ、ひぃいいっ！？　で、でも、お陰で兄貴もこのか嬢ちゃんも助かったんだから……』

「だーほっ！！　それは単なる結果論じゃっ！！
明日菜ちゃんの言う事には、金目当てでのどかちゃんとかを巻き込んだって言うじゃねぇか！！」

『うぐぅっ！？　で、ですが、兄さん…っ』

「うぐぅ言うなっ！！　タイヤキに謝れっ！！
例えその事で木乃香ちゃんが助かったにせよ、巻き込んだ事実に変わりは無いわいっ！！」

バッと右手を振るうと一瞬で光る何かに掴み取れて仕舞うカモ。

それが横島の右手から伸びた何かだと気付いても、それが何なのか解らないのでどうしようもない。

『んなっ！？　何だこりゃあっ！！？？』

「うっさいわケダモノ！！　暫く反省してろ！！」

キン…ッ！！　と済んだ音がし、一瞬でその光る何か……横島の“栄光の手”がカモを掴んだまま収縮する。

あの霧魔との戦いの晩に気付いた霊能力の新たなる使用法。

集束度を更に更に上げたサイキックソーサーから生まれでた奇跡の技。

延べ二ヶ月も生きるか死ぬかの修行をさせられ、練度をかなり上げて使いこなせるようになったあの力。

「カ、カモくぅんっ！？」

「安心しな。暫く放っときゃ出られる」

超集束型サイキックソーサー、サイキックプレート（仮名）である。

泣いてオロオロするネギの前にふわふわと浮かんでいるのは、淡い赤色の六角形のプレートに閉じ込められて固まってしまっているカモの姿。

マヌケな格好&表情でプレパラートのように固まっている様は、何か出来の悪い標本のようで彼には悪いが何か笑えてしまう。

霊体を封じる事に使用された技であったが、カモは腐ってもオコジョ妖精。精霊は精霊だからなのか彼に対しても有効なのかもしれない。

それに悲しいかな本気で心配しているのはネギ一人。

後の人間は『あ～あ……』と呆れるか、自業自得ですと気にもしないかだ。

「ぴぃ？」

「あぁ、気にせんでええよー　ええ薬やろし」

かのこのペアもこれである。

何げに立場が悲しいカモであった。

「しっかし……まさかキスが契約とはなぁ……」

カモを八つ当たりをして落ち着いたのだろう、シートの上に座り直して呆れている。

ネギは相変わらずあうあう～と、プカプカ浮かんでいるサイキックプレートから何とかカモを出そうとしているのだが、魔法なんだか呪術なんだかサッパリ解らないので手の打ち様が無い。

それに、

「あ、下手に刺激するとプレートが爆散しちまうから止めといた方が良いぞ」

と横島に注意されているので、ただ唸る事しか出来ないでいた。

やたらめったらハッキリと、『兄貴ぃいい～っ!!』ちゅどーん!!なＢＡＤ　ＥＮＤシーンが想像出来てしまってるものだから尚更だろう。

で、残る乙女達はというと、横島の言葉に反応するかのように頬を染めたり俯いたりと、もじもじしまくっている。

照れ症であるのどかは言うに及ばないが、刹那も非常時だったし嫌いではなかった事もあって然程ではないが、それでもやはり女の子らしくテレテレ。

年上趣味である明日菜であるが、ネギの唇の感触はハッキリと覚えているし、羞恥は別物なのでやはり顔を赤くしていた。

契約をしてない夕映もかなり顔が赤い。自分がニセモノ相手とはいえ“契約しかかっていた”事を思い出したのだろう。
ネギが止めなければ、照れ隠しにカモが入ったプレートを力ずくで破壊していたかもしれない程。
茶々丸にしても何故かぼんやりとネギ……の口元を見つめているし。
この場で冷静そうに見えるのは、手持ちが忙しいエヴァとチャチャゼロくらいなものである。

「フン。デレデレシテンジャネーヨ」

「してねぇっつーの！！
二人が美少女なんは認めるけど、女子中学生に手ェ出して喜べるか！！」

その代わり、何か横島に絡んでたりするのだが。
彼の言いたい事も解るが、聞いてしまった二人はちょっとムっとしてしまう。

しかし、

「確かに嫌いやったら振り払えもするわいっ！！

嫌いやないからしゃあないやろ――っ？？！！」

なんてコトをほざかれれば、どうすれば良いと言うのだろうか？

忽ちズボンッ！　と景気のイイ音を立てて再度顔を赤くしてしまった。それもちょっと濃い目に。

「……ケッ……優柔不断ナ男ダナ……」

「ほっとけ」

チャチャゼロは何故か次の言葉を思いつく事ができず、そのまま口を噤んでしまう。

ペタリと横島の頭の上に大の字でうつ伏せになったまま。

何だか不貞寝でもしているかのように。

最近どうも変なのだ。

主の命令ではあるが、別荘で鍛練をする時だけは敵として攻撃するものの、普段は横島とずっとくっついて行動している。

十年以上、外に出られる機会がほとんどなかったチャチャゼロは、喩えこの妙な男の枷が目的ではあってもほぼ自由に外に出られる事を喜んでいた。

やっている彼女自身が餓鬼っポイと思ってはいるが、同僚の用務員らと話をしている時以外、二人っきりになるとずっと横島とじゃれあっている。

彼も性根がお笑いキャラでもある所為か、チャチャゼロのボケにはツッコミを入れ、自分のボケには彼女にツッコミをもらって中々良い関係を築いていた。

そしてチャチャゼロはそれを『楽しい』と感じ、戦いの中でしか見出せなかった『笑い』を自分の中に覚えていた。

思えばそれらの始まりは、あの霧魔との戦いの中だったのかもしれない。

生き人形である自分を“一体”としてではなく“一人”として扱い、ひょっとしたら本人は気付いていないのかもしれないが、彼は間違いなくチャチャゼロを“女の子”として接している。

無論、何時もの彼女ならば、煩わしい事この上もないだろう。

彼女相手に、下手にそんな態度を取れば殺気すら放たれてしまうだろう。

そしてあらゆる者は彼女の苛立ちをその身に受け、初めて自分の浅はかさを思い知るのだ。

だが、横島はそういった輩と同じ様でいて全く違う。

いくら脅してもすかしても徹頭徹尾そんな態度を取り続け、本人のスカなドジでもってそれを加速させ、こちらが根負けすると一気になれなれしく攻め滅ぼしてくる。

本当ならそんな嘗めた行動をとられれば殺したくなる。

思いっきり刃を突き立て、ふざけた口を持って産まれ出た事を絶叫という謝罪で持って答えさせていただろう。

だが、できない。

殺意を持つのも馬鹿馬鹿しい。

敵であるのなら兎も角、コイツは“同僚”なのだ。

自分の主の下にいるパシリなのだ。

そんな相手に怒りを持ち続けるには、この男を嫌い続けるには、横島は余りにアホ過ぎて、

余りに馬鹿すぎて、そして余りに真っ直ぐ過ぎて、どうにも嫌いになり切れないのである。

そんな想いが覆い包んでいる本音。

あの戦いの日に胸の奥に湧き、言い訳の下で成長を続けている“それ”を、チャチャゼロは未だ理解できずにいた。

『？　何だか凄い“しんぱしー”を感じるでござるが……？』

その感触に首をひねって見回すが、それがどこから感じるものなのか解らない。

シンパシーを感じたよ―な気はしたのだが、それがどこの誰なのか解らず、まぁいいかと座り直した。

それも、不貞腐れるようにビニールシートに腰を下ろしている横島の隣に。

ムムっと古の目が変わったが気にしない。

ついでにさっき横島に飲ませたペットボトルのお茶を再度手渡したりして何とも甲斐甲斐しい楓。

何気ない所作ではあるが、横島の呼吸の間を知っているから実に自然な動きだった。

そんな横島は、然程でもない筈のペットお茶を妙に苦々しく飲み干して行く。
まだ憮然としたものが残っているのだろう。

彼のそんな横顔をじっと見つめ、『よくもここまで拙者を変えやがったでござるな。忝い』等と感謝なのやら恨みごとなのやらサッパリ解らないボヤキを口の中で噛み潰す。
くぴっと自分もボトルに口をつけ、口から出してしまいそうになっていた言の葉をお茶でもって飲みこんだ。

何と言うか……このすぐ横、いや隣という位置がとてつもなく心地良いのである。

それでいて気分的には横島と距離を置いて座りたいのだから矛盾している。いや、本当に。

相反する心情がもどかしく、それでいて何とも落ち着いても来るのだから混乱もしようというものだ。

「ん？　楓ちゃん、どーかしたのか？」

「ナンデモナイデゴザルヨ？」

おまけにコレである。

この男、ちょっとでも油断すると直ぐにこちらの不調を感じて気遣ってくる。

そんな彼に対し、やや言語がおかしくなってしまったが、ちゃんと返事を返して何とか誤魔化せた……と思う。

何だか彼の側に居れば居る程、彼を近くに感じれば感じる程、そう言った腹芸が下手糞になって行くような気がする。

霊力まで習い始め、勘も前以上に研がれているというのに、忍としては弱くなっているような気がしないでもない。

『それもこれも横島殿の所為。
貴殿の所為で拙者は落ち着かないでござる……
なれど……』

その事を欠片ほども不快に思えない。

寧ろ、直ぐ側に気配を感じられなかったこの一週間の日々の方がよっぽど不快である。

何せその間も古は横島といたというのだ。これを怒れずにいられようか。
いや、度し難い。抜け駆けだド畜生。

感情の波動を我知らず漏らしてしまったのか、その所為で手に持ったペットボトルの茶が楓の氣と霊波を受けてボコボコと泡立っていた。

力の波動は液体の方がよく伝わる。
だから感情の高まりがこんな形で現れたのだろう。

真横にいる所為で驚かせされている横島は元より、怒りの波が直撃している古は身を固くし、ネギらは何故か怯えていた。

場の空気に楓はようやくハっと気付き、アハハと誤魔化しつつペットの茶を呷る。

しかし、普段は兎も角、何故に横島絡みになるとこうも感情が表れてしまうのか。

『ほな、楓は横島さんの事、どないに想とるん？』

木乃香から投げ付けられたこの質問。

あの時に横島が近寄って来なければ、間違いなく木乃香に畳み掛けられていた事だろう。

無論、横島の事を嫌いだと言う事はありえない。

はっきり言ってしまえば、好きだと言える。

だが楓は、その事を軽々しく口にする事が憚られてしまったのだ。

間違いなく好きである。

言っては何だが、少なくともかなり気に入っているネギよりも。

だが、その好きがどういうものなのか、

Ｌｉｋｅとは違う好きである事に今一つ踏み込み切れていないのである。

本当に、

『……拙者もどうかしてる』

――のだ。

技も術も、そして女としても成長し始めた楓。

その当たり前の感情に戸惑う一方であった。

「あれ？　楓ちゃん。
今飲んでるそれ、オレのお茶……」

「ぶふぅううう――っ！！？？」

「あはっ　やっぱりそーなんやなー」

「ぴぃ？」

「うんうん。仲良き事は美しきかなっちゅーこと」

「ぴぃ～？」

前編（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

ちょっと前の活動報告に書いたように、某ＴＴＲＰＧ会場で某人物に被害受けてますが、笑える事に前にこの話をＵＰした時も同一人物に精神被害受けてました。なんてこったい。

妙に時間かかりましたが、そろそろアレやんなきゃならないのでそれに時間奪われてるからです。ドコでナニするかは今は秘密ですが。

かなりジリジリと進ませました。いらいらされる方には申し訳ありませんが、三角関係にもなりませんし恋の邪魔者も出ません。ただ仲が進まないだけで……って、それがイラつくｗ？　御尤もでｗまぁ、真面目に本気に恋愛してたらこんなもんです。リアルにもっと酷いのいますし。私もツッコミ入れたくらいのレベル。

まー　学園祭編辺りから進みますんで我慢してください。

とゆー訳で、後編に続きますｗ　ではまた……

ＰＳ．．．気晴らしだった７ｔｈのキャラレベルはやっと３０越しました。そろそろ都庁ビル攻略しようかなー

私、初期にレベルをガンガン上げる方ですんでｗ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0521w/

Ｒｕｉｎ　－お試し版－

2011年12月3日21時29分発行